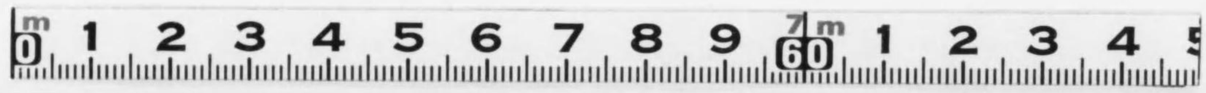


914.5
095
914.5-095ウ
1200501971045

914.5
095/1

松屋筆記

第二

国立国会図書館
26.3.1.
U 20554

松屋筆記第二目錄

卷之六十八

(一)おひげの塵を取……一
(二)先達……一
(三)白波綠林……三
(四)云云……七
(五)ウザウムザウ……七
(六)齋宮後醍醐天皇の朝ト定……七
(七)垂跡……八
(八)山だち……一〇
(九)鳥居……一一
(十)松の靈神……一九
(十一)法樂……二〇
(十二)子負母負繪母おこらこ物忌父……二一
(十三)鳥居再考……二四

卷之六十九

(一)垂髮……二五
(二)落書井飛書飲章刊章飛章匿名書……二六
(三)一筆一札その外天筆執筆又は飛札などいふ類の字面……二八
(四)あまさへ……二八
(五)名におふ名にしおふ……二八
(六)さすらふ……二九
(七)加和良具足……三〇
(八)船靈……三二
(九)持佛……三八
(十)遊女……三九
(十一)麻呂……四四

卷之七十

(一)達者達人……四五
(二)堪忍不堪……四六
(三)垂髮井髮髮……四六
(四)漏甘土圭……四六
(五)古書御搜索……四六
(六)善知鳥安方……五〇
(七)金平牛房金平振金平糖……五二
(八)かづき綿帽子……五八
(九)九月十三夜……五八
(十)吹飯の濱吹井の浦……六〇
(十一)白蛇白龍白鷺……六二
(二)氷上狐渡而後人應ㇾ渡……六八
(三)本居宣長が墓……六九
(四)獻書の例……六九
(五)いこのふ……七〇
(六)尺素雙魚……七〇
(七)日本人の詩……七一
(八)戒子詩……七一
(九)古詩の評井白樂天の詩……七一
(十)張飛が書井辨慶が書……七二
(十一)鐘馗詩……七二
(十二)花の十友十二客……七二
(十三)一杯元氣……七二
(十四)田湯靜馬……七二
(十五)神儒佛の三道……七四
(十六)たむしの妙藥……七四
(十七)やけどの妙藥……七四
(十八)目に傷を治方……七四
(十九)熱病の治方……七四
(廿)もだえ……七四
(廿一)もんちやくと云俗語……七六
(廿二)とごふとわたる……七六
(廿三)小兒の尿するをしうをすると云詞……七六
(廿四)男柱……七六

(廿五)雉を山のうつぼりと云……七六
(廿六)かな輪井五德……七六
(廿七)つぐら……七七
(廿八)たうざうと云醤井法論味噌……七七
(廿九)燕口……七七
(卅)戴レ手……七七
(卅一)おほぞれるあなつぐら……七七
(卅二)霜くづれ……七八
(卅三)青つゞらこ……七八
(卅四)鶏衣……七八
(卅五)ながめ柏……七九
(卅六)かゞし……八〇
(卅七)マクリの方シヤコサイ湯……八〇
(卅八)喉に魚骨を立たるを拔方……八〇
(卅九)湯火傷を治方……八〇
(四十)灸治の時激血を治方井灸治の時の豆煎……八〇
(四十一)跎夢……八一
(四十二)トゲヌキ井マムシノ嚙タル治方……八一
(四十三)歌道……八一
(四十四)和歌の道……八二
(四十五)敷しまの道……八三
(四十六)八雲の道……八四
(四十七)數奇の道……八四

卷之七十二

(一)慈恩傳抄錄……八五
(二)伊豆國手石の彌陀……九〇
(三)水虫をも殺さず井戒日王……九〇
(四)書を門に掛て求二論難一……九一
(五)猫竈に眠る……九一
(六)聖教序鳩集字……九一
(七)先達……九一
(八)廿八日の禮……九二
(九)小宣旨の紙……九二
(十)主ㇾ施行……九二
(十一)影々……九二
(十二)花を備る……九二
(十三)日かげの駒……九二
(十四)言語戒の歌……九二
(十五)墨譜井朱墨譜……九二
(十六)柴燈井左義長……九三
(十七)參秋出來秋……九四
(十八)なぞ〳〵……九五
(十九)萬歲ヲ呼ブ井山呼二萬歲一……九七
(廿)山陵闍陵井ミサヾキの訓……九九
(廿一)移鞍移馬……一〇〇
(廿二)姪婦與二男子一不二同處一井知二匱姪一方、及疱瘡の事……一〇二
(廿三)紙老鴟井いかのぼり及太古紙鳶……一〇二

卷之七十三

(一)天盃、天酌、大流、小流、御通、召出……一〇四
(二)燒香塗香……一〇七
(三)曲……一〇七
(四)搏風破風……一〇八
(五)璽……一〇八
(六)〆字點……一〇八
(七)伊字三點三形の寶珠……一〇九
(八)卍字……一一〇
(九)寶船……一一〇
(十)參の字義……一一一
(十一)渡船賃……一一一
(十二)魚袋、印籠、巾著、燧袋……一一一
(十三)裝潢手……一一四
(十四)留守……一一五
(十五)公驗度牒……一一五
(十六)親王代、近仗、行酒、弓場殿、王大夫、側記、連、任、請任例……一一六

(十七)行狀……一一七
(十八)口號……一一七

卷之七十四

(一)乾笑冷笑……一一七
(二)名紙……一一七
(三)忌服御免起復之禮……一一八
(四)梵唄井魚山……一一八
(五)えびすがけ井夷紙……一一八
(六)本主、家子、耶等……一一九
(七)長曾我部、香曾我部、燧石印……一一九
(八)痰の妙方……一一九
(九)からうた……一一九
(十)唐昇仙太子碑……一二〇
(十一)君の賞賜を辭する辭……一二〇
(十二)連阿法師が竹葉集……一二〇
(十三)挾箱……一二三
(十四)天下太平國土安穩……一二四
(十五)八百屋お七……一二四
(十六)梅酒の方、青梅漬の苦味を去方、……一二四
(十七)砂糖漬の方……一二四
(十八)醴の製方……一二五
(十九)刀の血を洗方……一二五
(廿)食傷治方……一二五
(廿一)水死人を救方杜鵑の黑燒……一二五
(廿二)油拔方井物の汚穢を洗方……一二五
(廿三)火傷の治方……一二五
(廿四)遊女高尾……一二五
(廿五)神風和記……一二六
(廿六)あれごがれや……一二六
(廿七)袖のこほうしごなど云稲名……一二六
(廿八)西山公御自筆十ヶ條壁書……一二七
(廿九)なばえ……一二八
(卅)甕毛、鵜の甕毛、鷹の甕毛……一二八
(卅一)さくり、つぐら、はし鷹、……一二九
(卅二)扇合の跋……一三〇
(卅三)新田みだりに不レ可レ開……一三二
(卅四)芍藥花井石川丈山覆醬集……一三二
(卅五)てまり櫻……一三三
(卅六)百萬塔……一三三
(卅七)いしみ、筬籠、ざる……一三三

卷之七十五

(一)天海僧正……一三五
(二)田畑山林町步取箇の事……一三五
(三)歐鞠文書……一三五
(四)犬牙相接……一三七
(五)地動の說……一三七
(六)國司上下行程日數……一三九
(七)むな手むな車……一三九
(八)わきをかく……一四一
(九)みどろし……一四一
(十)菊の花散……一四三
(十一)飯一もり湯一提……一四六
(十二)挑灯に釣鐘……一四六
(十三)兵學の祖……一四六
(十四)伊藤仁齋……一四六
(十五)甲陽軍鑑……一四六
(十六)さげすむ井さみすと云詞……一四六
(十七)さゝ栗……一四七
(十八)廬橋……一四九
(十九)倉庫……一五一
(廿)土倉……一五四
(廿一)穴倉……一五五
(廿二)直會……一五五
(廿三)𨋳輪、輪𨋳、巴の字、巴文、……一五六
(廿四)眉間尺、井一ツ頭、二ツ頭、三ツ頭の紋、……一六〇
(廿五)丙丁童子に與ふ井火巾と書……一六一
(廿六)うへ見ぬ鷲井鷲の山……一六一
(廿七)師子座……一六三

(廿八)大黒天神……一六三
(廿九)師子身中の虫……一六三
(卅)年米舂……一六四
(卅一)鐵輪五德……一六四

卷之七十六

(一)魚袋……一六五
(二)鸐の蓑毛鳥の鎧毛……一六五
(三)これりのれや……一六五
(四)かうちがくれ……一六六
(五)謎なき間の貂ぼこり、貂、貂裘、……一六六
(六)鞨打、三猿、庚申夜遊、白麻紙、籤……一六八
(七)五音の五義……一七二
(八)筭學琭盤……一七三
(九)火中に入丼丙丁童子に傳ふ……一七六
(十)みづはくむ、みつわぐむ、みづはさす、みつわさす……一七六

卷之七十七

(一)三十六詩仙三十六歌仙(卅六禽、卅六洞天、卅六寺、卅六僧、卅六峯、卅六水酒、卅六失、道家卅六部……一八二
(二)さいの河原……一八三
(三)師子舞……一八六
(四)住持……一八六
(五)福引……一八六
(六)帶引の輿……一八六
(七)花御堂……一八六
(八)恁麼、什麼、作麼……一八六
(九)烏帽子櫻……一八七
(十)女冠……一八八
(十一)神社……一八八
(十二)鳥のそられ……一八八
(十三)第宅……一八八
(十四)五位鷺……一八八
(十五)葉守の神……一八八
(十六)五の目の紋丼畫破……一九一
(十七)地錦……一九一
(十八)江戸……一九一
(十九)叢林……一九一
(廿)案山子……一九一
(廿一)心の駒……一九二
(廿二)以字不成八字不是……一九二
(廿三)大海不ㇾ容ㇾ塵……一九二
(廿四)燈籠……一九二
(廿五)寂蓮自筆の田植の賦……一九二
(廿六)行李骨柳……一九三
(廿七)てうちの渡井しろかれの舘……一九三
(廿八)手習は坂に車を押ごとし……一九四
(廿九)沐ㇾ雨櫛ㇾ風……一九四
(卅)一葉落知二天下秋一……一九四
(卅一)白駒過ㇾ隙……一九四
(卅二)水戯の具……一九四
(卅三)累代……一九四
(卅四)風前の燈……一九四
(卅五)衆口鑠ㇾ金丼三人之言人信ㇾ之……一九四
(卅六)羞……一九五
(卅七)猫目……一九五
(卅八)南鐐……一九五
(卅九)由緒……一九五
(四十)上人……一九五
(四十一)留守……一九五
(四十二)家業……一九五
(四十三)まがり……一九五
(四十四)酒百藥之長……一九五
(四十五)四百四病……一九五
(四十六)百万遍の念佛……一九六
(四十七)金像……一九六
(四十八)火浣布……一九六
(四十九)釜鳴……一九六

(五十)かツかう鳥、かつぽう鳥、クヮツコウ鳥……一九六
(五十一)七里ケツカイ……一九六
(五十二)桃栗三年……一九六
(五十三)先生……一九六
(五十四)洲濱……一九六
(五十五)閏六月祓……一九六
(五十六)指の名……一九六
(五十七)自由……一九六
(五十八)人面獸心……一九六
(五十九)木中の文字……一九六
(六十)竹醉日……一九六、
(六十一)古法不ㇾ可二妄變一……一九六
(六十二)鐘を盜て自耳を掩……一九七
(六十三)江南橘移二江北一爲ㇾ枳……一九七
(六十四)おさしだれ丼落胤腹……一九七
(六十五)墓相丼前身……一九七
(六十六)食物喰殘すべからす……一九七
(六十七)墓相……一九七
(六十八)墨色相丼離折相字……一九八
(六十九)領巾……一九九
(七十)木中の字……一九九
(七十一)作文不ㇾ憚二屢改一丼一字の師……一九九

卷之七十八

(一)八掬脛丼長髄明神……二〇〇
(二)鸐のみの毛……二〇〇
(三)はちす葉のにごりにしまぬ心もて……二〇〇
(四)二郎……二〇〇
(五)いりと云地名……二〇一
(六)きんだち……二〇一
(七)伊豆海邊の鐵丸所……二〇一
(八)拈華微笑の禪説は妄語……二〇一
(九)把を「ユヒ」と訓、一把を「ヒトユヒ」と訓……二〇一
(十)木を離れたる猿……二〇一
(十一)記夢……二〇二
(十二)孔子の婦、老子の父、商山四皓の冢、阿彌陀如來の父母と子……二〇二
(十三)龍燈……二〇二
(十四)むづけと云詞……二〇四
(十五)隱岐法皇御陵參詣記注釋……二〇四
(十六)浮四……二一一
(十七)みゝず書……二一一
(十八)墨本の始……二一一
(十九)右筆……二一一
(廿)地藏頭に飯を盛ル……二一三
(廿一)大樹不ㇾ可二妄伐一……二一三
(廿二)いは橋……二一三
(廿三)養二鷄千餘頭一……二一三
(廿四)名狗……二一三
(廿五)脇より生ル……二一三
(廿六)繭玉……二一四
(廿七)奚宣旨……二一四
(廿八)地名に富と稱する事……二一五
(廿九)藥研堀……二一五
(卅)江比須加介……二一五
(卅一)加判の列……二一五
(卅二)精進解斷酒解……二一五
(卅三)禁醉、盟杯、一杯上戸……二一六
(卅四)薦、食薦、葉薦、贄薦、菅薦、蒲薦、菰薦、藻薦、折薦、韓薦、編薦、生薦……二一六
(卅五)影向……二二三
(卅六)久米仙墜落同日の談……二二三
(卅七)住持……二二三
(卅八)地獄と云ふ地名……二二三
(卅九)四十二物あらそひの名出處……二二四
(四十)芥子た水さし水銀を水さす……二二四

(四十一)吹ノ毛求ノ疵……二二四
(四十二)佐比の河原にて小兒の幽靈石塔を積……二二五
(四十三)長屋王千袈裟を遣て唐土の名德に施す……二二五
(四十四)鳥海飛魚海……二二五
(四十五)蛇の付たるを治せる談……二二六
(四十六)蕎麥の葉大毒……二二六
(四十七)こじくと云詞……二二六
(四十八)蛇崩井じやくぐり川……二二七
(四十九)珠盤……二二七
(五十)ヤツ付ルと云詞……二二七
(五十一)紙隔扇……二二七
(五十二)禮語、禮をする……二二七
(五十三)ヤツコ豆腐井豆腐の調味……二二八
(五十四)飯の粢……二二九
(五十五)むこぎと云俗語……二二九
(五十六)神力業力に勝ず……二二九
(五十七)タテ〳〵シキと云詞……二二九
(五十八)タテチツクと云詞……二二九
(五十九)鬼こべめ……二二九
(六十)好事不ノ如ノ無……二三〇
(六十一)シテーイは詖を云……二三〇
(六十二)團子……二三〇
(六十三)櫟子……二三一
(六十四)馬鹿の糟食……二三一
(六十五)天邊……二三一
(六十六)接待茶……二三一
(六十七)七顚八倒……二三一
(六十八)テキメン井タンテキ……二三一
(六十九)盜不ノ過三五女之門一井賊
不ノ打二貧兒之家一のちざり木……二三二
(七十)喧嘩すきてのちざり木……二三二
(七十一)人を打をくらはせるといふ事……二三二
(七十二)あき目暗……二三二
(七十三)キテンがキクと云俗語……二三二
(七十四)カツカウヨキ……二三二
(七十五)シヤラクの人、オシヤラクモノ、……二三二
(七十六)年頭……二三二
(七十七)一人傳ノ虛萬人傳ノ實……二三三
(七十八)百日の說法屁一ツ……二三三
(七十九)遍歷井托鉢……二三三
(八十)千差萬別……二三三
(八十一)一ツ橋二ツ橋二本橋三枚橋井戸渡る……二三三
(八十二)一事は萬事……二三三
(八十三)めくら打……二三三
(八十四)蛇の道はヘビが知る……二三四
(八十五)水潴……二三四
(八十六)踏碓……二三四
(八十七)七顚八倒……二三四
(八十八)貝拘子粥拘子……二三四
(八十九)厚面皮、厚顏、薄面皮、……二三四
(九十)金玉聲……二三四
(九十一)月代なもむ……二三四
(九十二)自屋不ノ燒ノ臭、なか目八目、……二三四
(九十三)足なのばして臥す……二三五
(九十四)ムザウサと云俗語……二三五
(九十五)殺人刀活人劍殺人箭活人箭……二三五
(九十六)土花八裂井塘がひわれる……二三五
(九十七)吹毛劍……二三五
(九十八)篠田渡邊松浦の稱號……二三五

卷之七十九

(一)鬼瘡のさゝ湯……二四〇
(二)似給……二四〇
(三)辻々の籌屋……二四〇
(四)熊野山不二遊語……二四一
(五)酒の異名……二四一
(六)菜のよみ法……二四一

(七)德を以て怨に報ゆ……二四一
(八)器のよきは實にあらず……二四一
(九)くかすと云詞、こかすと云俗語……二四一
(十)欲に頂なし井欲の鉤欲の熊鷹……二四一
(十一)迎講の始……二四二
(十二)沐ノ雨櫛ノ風は周武王の故事……二四二
(十三)金剛誡……二四二
(十四)慈心降二一切魔一……二四二
(十五)武衛……二四二
(十六)業鏡、颯然、曇明寺殿の辭世……二四二
(十七)一場笑具、笑柄、笑端……二四二
(十八)行燈燈籠……二四二
(十九)禪者禪人……二四二
(廿)日用……二四二
(廿一)作字新字……二四二
(廿二)飛札飛筆……二四三
(廿三)歸命……二四三
(廿四)髮に油を塗……二四三
(廿五)白土山……二四三
(廿六)かゞみる、かうがへ、かんがふる……二四三
(廿七)月中の兎……二四三
(廿八)風前の燭……二四三
(廿九)虛名不ノ久……二四三
(三十)日本紀の註釋など法師沙汰すべからず……二四三
(卅一)言靈……二四四
(卅二)天守……二四四
(卅三)國分寺、天永寺、安國寺、大成寺、天下の國々に立、……二四四
(卅四)因果……二四五
(卅五)隨緣眞如の波……二四五
(卅六)天地の始雞子の如といふ說……二四五
(卅七)吉利支丹の事……二四五
(卅八)淨潔在平處、字岐士摩理蘇理多々斯、……二四六
(卅九)水牛……二四七
(四十)自鳴鐘……二四八
(四十一)土圭……二五〇
(四十二)望遠鏡井眼鏡……二五一
(四十三)天妃船靈……二五一
(四十四)下馬下乘の榜……二五三
(四十五)印明……二五六
(四十六)頗姪連、由蓼沒、喜利志祖……二五六
(四十七)堂童子……二五七
(四十八)窮寇勿ノ追……二五九
(四十九)日本紀の註釋など法師沙汰す
(五十)宗源……二五九
(五十一)すて捨てと云詞……二五九
(五十二)夫の遺映……二五九
(五十三)酒を法師に供養す……二五九
(五十四)魏曹操假譎可ノ惡……二五九
(五十五)神主……二六〇
(五十六)鼠社……二六〇
(五十七)一杯元氣……二六一
(五十八)龍宮の太鼓……二六一
(五十九)城の始……二六一
(六十)記主禪師眞忠傳……二六一
(六十一)谷……二六三
(六十二)地獄と云地名……二六三
(六十三)國にて物を定る事并編引の圖……二六三
(六十四)帶引の輿……二六三
(六十五)湯屋、湯錢、錢湯、……二六四
(六十六)白鍮「ニレ」……二六四
(六十七)燒石井濕石……二六四
(六十八)かづき井覆面……二六四
(六十九)まなとこ、俗、烏帽……二六四
(七十)水仙花……二六四
(七十一)虎千里の藪を越すといふ俗

語は誤……二六四
(廿七)さゆりばの花蓮ばの花……二六五
(廿八)松の名木……二六五
(廿九)橘の奇巧……二六五
(卅)古代よりなせる居宅……二六五
(卅一)富士の眺望……二六六
(卅二)あがたのぬど、田中のぬど、井戸、……二六六
(卅三)杯を乾す井呑ほす……二六七
(卅四)水土の性に依て物に善悪ある事……二六七
(卅五)油斷大敵井坂に車を押如し……二六八
(卅六)眞武湯……二六八
(卅七)瓜中の小蛇、橘及柑中の蛇……二六八
(卅八)女兒に教るに吝くして嫁するに財を厭はず……二六九
(卅九)同居義居……二六九
(四十)片茶、散茶、茶煎法、茶加三姜撮、閼茶、茗戦、瓜戦、タヲ柿……二六九
(四十一)鐵を燈とす、虫を殺す、瓜の兩帶は人を殺、樹上に人の髪あれば烏其果を食す、栗の燒ざる法、銅鐵を呑たる治方、稻芒を呑たる治方、木屑を呑たる治方、蛭を呑たる治方、藥毒の解法、砒霜石の毒解藥、鉛錫の解藥、蛇毒の解藥、麵麥の解藥、狗(クムニマカレタル)毒の解藥、菌の解藥、烟藏死の治法、虫入ノ耳の治方……二七〇
(四十二)屋上盜井飛賊、ニハウ(ハウ)……二七一
(四十三)藤井紋大夫が記臚井閻踊の人……二七一
(四十四)世界第一の大鐘……二七二
(四十五)戒定慧……二七二
(四十六)禪定……二七二
(四十七)釋氏の稱……二七二
(四十八)涅槃……二七二
(四十九)石城(イハキ)墓(オクツキ)……二七二
(五十)第一……二七二
(五十一)念佛十念……二七二
(五十二)柏餅……二七二
(五十三)法樂……二七二
(五十四)畫詞傳……二七二
(五十五)天竺の廣狹及國王……二七二
(五十六)雪山慈嶺阿耨達池……二七二
(五十七)贍部洲四王之贏物……二七二
(五十八)砂糖の始……二七二
(五十九)身は塵ノ捨卑惡の物……二七二
(六十)靈鷲山と雞足山とは別處……二七二

卷之八十一

(一)籠(カゴ)を加古と云事……二七三
(二)餅をかちんと云事……二七三
(三)四壁しぜき……二七三
(四)花火……二七四
(五)すあひ(ワウキウノイチヂゴニサンワウ)を取ル厄給仲人……二七六
(六)一兒二山王……二七六
(七)鮧答井赭丹……二七六
(八)雞足山(ヲラ)……二七六
(九)己が陽物で穴(ケツ)をする……二七六
(十)表裏の用語……二七七
(十一)偃面……二七七
(十二)念佛……二七七
(十三)一闡提含生の類有二佛性一……二七七
(十四)傳敎大師井比叡山建寺……二七七
(十五)陽物をしゞといふ……二七七
(十六)愎鳴(フトコロジマ)……二七八
(十七)水引にて圖紙を張る……二七八
(十八)鳥羽院男子の化粧—齒黑(ハクロメ)—強(コハ)裝束烏帽子額などを始給ふ……二七八
(十九)按摩導引……二七九

(廿)芝手水、歷手水、雫手水、擂手水……二七九
(廿一)會宗會學……二七九
(廿二)綉衞鳥……二七九
(廿三)口分田……二七九
(廿四)歯簿……二八〇
(廿五)鳳凰井金吾……二八〇
(廿六)日本國の車……二八一
(廿七)十二宗……二八一
(廿八)國主城主……二八一
(廿九)活套……二八一
(卅)釘拔念佛……二八一
(卅一)朱引の歌……二八一
(卅二)あひと云詞……二八二
(卅三)車軸の雨傾盆雨……二八二
(卅四)龍華……二八二
(卅五)ふぼし櫻……二八三
(卅六)念佛鳥念佛魚……二八三
(卅七)摩頂松……二八三
(卅八)經論還授……二八三
(卅九)欲鉤……二八三
(四十)鼠に弓絃を齧るゝ……二八三
(四十一)月の八日十四日十五日……二八三
(四十二)伽陁羅衛……二八四
(四十三)天狗の熱鐵を呑に似たる說二八四
(四十四)和上の和の字を省て書例……二八四
(四十五)御符、符水、護符……二八四
(四十六)祭に肉を禁ずる事……二八四
(四十七)一切……二八五
(四十八)新唐書五代史の誤……二八六
(四十九)內敎外敎……二八六
(五十)逢覩施財……二八六
(五十一)遊手……二八七
(五十二)木の俣より生るゝ……二八七
(五十三)開眼……二八七
(五十四)病に新藏して藥を服せざる事……二八七
(五十五)三餘……二八七
(五十六)雲翳巾幗(ウブキンクワイ)……二八七
(五十七)民の三害……二八八
(五十八)雄山雌山……二八八
(五十九)寒潮(シホハナ)……二八八
(六十)芥子を河水とし水銀を水とす……二八九
(六十一)鼠齧二斷弓絃一……二八九
(六十二)芥子に納二須彌一……二九〇
(六十三)儒者無二通識一……二九〇
(六十四)人間僅五十年……二九一
(六十五)善罵レ人者亦善被レ罵二於人一二九一
(六十六)托鉢分衛……二九一
(六十七)室町殿の代の學問在二僧家一二九一
(六十八)功德院……二九一
(六十九)驛券、御朱印、御證文……二九一
(七十)落成……二九一
(七十一)端出之繩、左繩、左撚芒繩……二九二
(七十二)四鳥の別……二九二
(七十三)インノコ〳〵と云詞……二九二
(七十四)吉田神主井神樂岡齋場所……二九二
(七十五)三餘……二九二
(七十六)雲翳巾幗(ウブキンクワイ)……二九二
(七十七)民の三害……二九二
(七十八)倭人の詩……二九三
(七十九)今樣……二九三

卷之八十二

(一)垢すりのさいで汗手拭……三〇四
(二)菅裁物忌……三〇四
(三)吉田より神の位階を授く……三〇五
(四)やぶ醫者の問藥……三〇六
(五)菖蒲の花流行……三〇六
(六)法師伊勢參宮……三〇六
(七)人相轉變……三〇六
(八)算盤……三〇六

(九)看病看慰……三〇六
(十)雜學承學……三〇七
(十一)北政所……三〇七
(十二)金輪……三〇七
(十三)時宜をする……三〇七
(十四)馬手指鎧通……三〇七
(十五)胴籌……三〇八
(十六)一眼の龜浮木にあふ……三〇九
(十七)大問大對……三〇九
(十八)だこ駄着駄餉……三〇九
(十九)振鉢えんぶ……三〇九
(廿)大極殿オアテ大安殿……三〇九
(廿一)封隱……三〇九
(廿二)風爐……三〇九
(廿三)香合の始幷闘園といへる香ノ書……三〇九
(廿四)香の十德……三一〇
(廿五)香の祖神……三一〇
(廿六)富士香爐……三一〇
(廿七)香道傳來幷十炷香組香……三一一
(廿八)甲子紀元……三一二
(廿九)私黨……三一二
(卅)おたふくの面……三一二
(卅一)手跡、擇日、毋面目、成人、女婿、墮弱、狐疑、若輩、吉日……三一二
(卅二)緯書……三一二
(卅三)文字の始……三一三
(卅四)部首、一蔀、一紀、一元……三一三
(卅五)提先……三一四
(卅六)丹書赤雀……三一四
(卅七)王者五行の德……三一四
(卅八)御所號……三一五
(卅九)掩レ耳偸レ鈴……三一六
(四十)人を打擲するを「くらはせる」といふ詞……三一六
(四十一)鐵笛……三一六
(四十二)藪を敲て蛇を出す……三一六
(四十三)枯木の花……三一六
(四十四)雲水僧接待……三一六
(四十五)ひぢなりひぢゞか……三一六

卷之八十三

(一)道の長手、繩手、高繩……三一七
(二)井堤、井戸、土手、せがゐ、南京手、硫球手、中手、奥手、行手、江戸、山戸、ゐでの中道、井堤の川屋……三一八
(三)河門、下津、登戸、渡津、河內……三二〇
(四)川瀬の道川副と云詞……三二一
(五)連歌の題に賦何といふ事……三二一
(六)柳腰……三二一
(七)掛竿ヤハズ……三二一
(八)風袋……三二二
(九)ヒズミ……三二二
(十)文鎮、しなり、卦算……三二二
(十一)書院……三二二
(十二)印籠……三二二
(十三)火鉢の時節幷火かき火のし……三二三
(十四)柱餝……三二三
(十五)いびつ形……三二三
(十六)うそぶく……三二三
(十七)うそなげき……三二七
(十八)うそむ……三二七
(十九)うそくれたり……三二七
(廿)うそをふく幷皮笛……三二七
(廿一)うそやぐ……三二九
(廿二)をそごと、平曾呂於保平曾杼里……三二九
(廿三)うそ……三三〇
(廿四)うそをつく、チクチイフ、こく……三三一
(廿五)うそ鳥……三三一
(廿六)をそくつのゑ、嗚呼繪……三三二

(廿七)細川澄元肖像……三三二
(廿八)五運の德……三三三
(廿九)點心……三三三
(卅)蝦夷の犬……三三三
(卅一)乞食……三三三
(卅二)アツチヤウ面……三三三
(卅三)張本……三三四
(卅四)寶の山に入て手を空して歸ル……三三四
(卅五)蛇の道はへびがしる……三三四
(卅六)政所……三三四
(卅七)禪語を書狀にも常の詞にも多く用るよし……三三四
(卅八)一對ヒトムカヘ……三三四
(卅九)坊主が憎けりや袈裟までにくい……三三四
(四十)城主……三三四
(四十一)琵琶湖……三三五
(四十二)茅輪菅貫……三三五
(四十三)禁中の御佛壇……三三五
(四十四)中雀門……三三五
(四十五)牛頭天王の紋胡瓜と云事……三三五
(四十六)伊勢比丘尼上人、慶光院……三三五
(四十七)唯一神道……三三六
(四十八)禹歩……三三六
(四十九)山開……三三六
(五十)棟梁之任……三三六
(五十一)街……三三七
(五十二)擊劔ケンチトバス……三三七
(五十三)射覆、アテモノチスル、入札……三三七
(五十四)ハウさ溜息をつく……三三七
(五十五)咄と笑ふ……三三七
(五十六)旗頭……三三八
(五十七)虎とのみ用られし……三三八
(五十八)水至清則無レ魚人至察則無レ徒……三三八
(五十九)唯々……三三八
(六十)祭祀禁レ肉幷放生……三三八
(六十一)歌人の名を恥づ……三三八
(六十二)非常の人非常の事……三三八
(六十三)讀書十遍不レ如二一寫一……三三八
(六十四)世短意多……三三九

卷之八十四

(一)同居義居……三三九
(二)文章は博恰による詩歌のごとく別才によるものにあらず……三三九
(三)糞錢、掃除代、肥代……三三九
(四)小兒の夫役錢……三四〇
(五)父母のもとにありては叱咤之聲を出さず……三四〇
(六)禍福の大星算……三四〇
(七)貧乏、かくし愚昧かくし……三四〇
(八)天子无二失德一則天下不レ亡、家主无二失德一則家不レ傾……三四〇
(九)驚レ法……三四〇
(十)災異は天にあらず人にあり……三四一
(十一)天道或は應じ或は應ぜず……三四一
(十二)虫拳……三四一
(十三)どぢぐぢ……三四一
(十四)チヤツカステモナイと云方言、チヨツカ、チヨツト、チラト、チヨツクリ、チヤクジニ、ハユカヌ、チヤツト……三四二
(十五)經王……三四二
(十六)生死無レ限幷智慧刀、煩惱網……三四二
(十七)法味法食……三四二
(十八)金光明經抄出……三四二
(十九)塵塵……三四二
(廿)勸請……三四二
(廿一)虎にあたへし身……三四三
(廿二)公案……三四六
(廿三)江湖の僧會……三四六

(廿四)改元の始……三四七
(廿五)引導……三四七
(廿六)千差万別……三四七
(廿七)心頭に掛る……三四七
(廿八)點心……三四七
(廿九)飯裏の砂泥中の刺……三四七
(廿)老て羞をしらず……三四七
(卅一)扇子……三四七
(卅二)雨傾レ盆……三四七
(卅三)不具の身ハ孤貧……三四七
(卅四)芥子許……三四七
(卅五)難解難入……三四七
(卅六)蝿飲レ酒……三四八
(卅七)法身法界……三四八
(卅八)涅槃……三四八
(卅九)眞如虚妄……三四八
(四十)盡未來際……三四八
(四十一)希有轉變……三四八
(四十二)圓光、應身、法身……三四八
(四十三)如々、如々智……三四八
(四十四)水鏡……三四八
(四十五)智慧劔……三四八
(四十六)金光明最勝王經抄出……三四八
(四十七)天保七年霖雨及飢饉……三四八
(四十八)とゞく、とづく……三四九
(四十九)木芽漬……三五〇
(五十)かくやの香物……三五〇
(五十一)混本歌……三五一
(五十二)白樫……三五三
(五十三)今眞ゴンリヤウ……三五三
(五十四)兄部……三五四
(五十五)健見チカラビト……三五五
(五十六)猿の劔術、陰流、新陰流の目録……三五八
(五十七)秋田家の歌……三五九
(五十八)馬部……三五九
(五十九)吉上……三六一
(六十)平寄……三六四
(六十一)大政官印及内印鑰改……三六四
(六十二)衞府の太刀を陽の太刀といふ事……三六四
(六十三)權守武家には無二勅許一……三六五
(六十四)將軍家……三六五
(六十五)本所領家門……三六五
(六十六)襖障子……三六五
(六十七)鎗長刀……三六五
(六十八)鐵砲……三六六
(六十九)鎧、具足、著背長物具、加和瓦……三六六
(七十)肌帶、フンドシ、越中フンドシ、肌袴……三六七
(七十一)指物、四半、シナヒ小旗、バレン……三六八
(七十二)笠印袖印……三六八
(七十三)竹束……三六八
(七十四)鎗持大小を指す……三六九
(七十五)生肌武者、すんぼう武者、雜人原、白歯者、青葉者……三六九

卷之八十五

(一)コラウチヘルといふ俗詞……三七〇
(二)狐鼬鼠が最後の一ツ屁……三七〇
(三)圍碁……三七一
(四)蝶入レ宅則嘉瑞……三七一
(五)鳥自呼レ名……三七一
(六)酔て泥のごとし……三七一
(七)道中双六井釣針を作ル……三七一
(八)龍尾道……三七二
(九)「ドサクサマギレ」「ドッサクサスル」……三七二
(十)土地有二盛衰一人心有二去就一……三七二
(十一)罰酒三杯……三七二

(十二)秀才茂才……三七二
(十三)封事……三七二
(十四)愛水愛河……三七二
(十五)鏡を墓に納ル……三七二
(十六)一樹の陰一河の流……三七三
(十七)喝食……三七三
(十八)名紙、刺、手札……三七六
(十九)起復之禮忌服御免……三七七
(廿)大番役……三七七
(廿一)湯餅……三八一
(廿二)トントと云詞ヅットと云詞……三八一
(廿三)丸……三八一
(廿四)小町が歌といへどたしかならぬ歌、小大君集の事、小野小町が事……三八二
(廿五)ありのすさびの歌二道かけし人はの歌……三八二
(廿六)なに事のおはしますかはの歌……三八三
(廿七)和歌三神并聖廟の稱……三八三
(廿八)樣……三八三
(廿九)とりーかしく……三八三
(卅)わどの、わぬし、わごせ、わごれよなどの香の字義……三八四
(卅一)夕がほだなの下涼み……三八四
(卅二)道のぬかりの馬ざくり……三八四
(卅三)ちよのながいたゞく楠……三八四
(卅四)歌合禁止の事……三八五
(卅五)白萩……三八五
(卅六)ヤタラと云詞メッタ又ベタと云詞……三八五
(卅七)當官の大臣の諱を呼ばず……三八五
(卅八)都ぞ春の錦……三八五
(卅九)朱の玉垣……三八五
(四十)又六が門……三八五
(四十一)名簾の書法……三八六
(四十二)字の反切古にあらず……三八六
(四十三)山市海市……三八六
(四十四)佛狼機……三八七
(四十五)天主教……三八七
(四十六)風流……三八九
(四十七)線香并孔雀羽立二机上一……三九〇
(四十八)申上……三九〇
(四十九)白輪……三九〇
(五十)日本人三眼并自鳴鐘遠鏡……三九〇
(五十一)暦法論……三九一
(五十二)物老則爲レ怪名二之五酉一……三九三
(五十三)五性并五祠……三九三
(五十四)上元中元下元……三九三
(五十五)傷寒を疾ざる法……三九三
(五十六)無病の法……三九三
(五十七)喜怒を著さず……三九三
(五十八)禍は欲より起ル……三九三
(五十九)願望成不成は德不德による……三九四
(六十)弓取筆取……三九四
(六十一)一人當千……三九四
(六十二)やりくわんぱう……三九四
(六十三)他人のよきまれより親のわろきまれ……三九四
(六十四)正直のかうべに神やどる……三九四
(六十五)じんじやうなる人……三九五
(六十六)人はその得手を知てつかふべし……三九五
(六十七)無能人の年寄……三九五
(六十八)結搆人物の用に立ず……三九五
(六十九)目たれを見井わゝく心……三九六
(七十)ふせてと云詞……三九六
(七十一)ぬけ足……三九六
(七十二)瓜ノ蔓に茄子はならず……三九六
(七十三)おくに歌舞妓……三九七
(七十四)えりさす并ふしづけ……三九七
(七十五)魚ノ毒の解藥河豚の毒の

解夢……三九七
(七十六)霧に酔るを治す方……三九七

卷之八十六

(一)廷寄……三九八
(二)曲馬弁燈火を數百人に持たしめて字形の觀をなす……三九八
(三)蝦夷錦……三九九
(四)落葉松アカ松……三九九
(五)喇嘛大和尚……三九九
(六)茶……四〇〇
(七)繩伎……四〇〇
(八)自鳴鐘時辰表……四〇〇
(九)千里鏡……四〇一
(十)欒團、色縿シバキ、狂言……四〇一
(十一)偸兒小李……四〇一
(十二)狐祟……四〇二
(十三)擬獻之會……四〇二
(十四)黑坊、黑鬼子、白鬼子、崑崙奴、紅毛……四〇三
(十五)揣骨聽聲の法……四〇三
(十六)小憩……四〇四
(十七)薪土すくも……四〇四
(十八)假山……四〇五
(十九)物各有レ主……四〇五
(廿)豆腐詩……四〇五
(廿一)木より火出る……四〇五
(廿二)瘧の治方……四〇六
(廿三)求子の方……四〇六
(廿四)眼病治方……四〇六
(廿五)焦爛治方……四〇六
(廿六)醴泉酒泉……四〇六
(廿七)カンがよいカンがわるい耳鑒……四〇七
(廿八)石油クサウヅ……四〇七
(廿九)櫻川石の硯……四〇七
(卅)世の中をわたりくらべて……四〇七
(卅一)野分……四〇七
(卅二)蚊柱……四〇八
(卅三)みの虫ちゝよ〳〵と鳴……四〇八
(卅四)一生を空しく過したる人……四〇八
(卅五)産養、碁手錢、攤打……四〇八
(卅六)うはなりはんにや……四〇八
(卅七)一休の狂歌はこ……四〇八
(卅八)黃村濃、紺村濃、紫裾濃……四〇九
(卅九)うけ振舞有卦無卦……四〇九
(四十)蓀祉號……四〇九
(四十一)竹矢來行馬……四一〇
(四十二)田廬……四一〇
(四十三)守舍いほり……四一一
(四十四)窟井洞……四一一
(四十五)窨、麴窨塗師の止古……四一一
(四十六)穴倉……四一二
(四十七)社……四一二
(四十八)管內管郡……四一二
(四十九)老中といふ職名……四一二
(五十)物具……四一二
(五十一)散華に金銀の葩を用し始……四一二
(五十二)除目の除の字義……四一三
(五十三)錢百の事省百……四一三
(五十四)大小腰物、刀、脇指……四一三
(五十五)出馬、入馬、在馬、納馬……四一三
(五十六)御北樣……四一三
(五十七)矢來、內の矢來、一の矢來、遠矢來……四一三
(五十八)足輕……四一三
(五十九)草をいろゝ……四一三
(六十)いのご……四一三
(六十一)供奉調進……四一三
(六十二)なくさ云詞……四一四
(六十三)まゐり、下向まゐり、まかで……四一四
(六十四)禁中例時作法の始……四一四
(六十五)淸涼殿懺法の始……四一四

(六十六)桑門、くはの門、幸の戸、桑の戸ざし、桑の樞……四一四
(六十七)表紙のふところ……四一五
(六十八)舞樂の終に千秋樂といふ……四一五
(六十九)宿德、平絹、宿德裝束……四一五
(七十)目路……四一六
(七十一)御禮を申す……四一六
(七十二)なじみ……四一六
(七十三)人別帳……四一六
(七十四)提封田、不可墾、可墾不可墾、定墾田、墾田……四一六
(七十五)課役……四一六
(七十六)糲の島……四一六
(七十七)俗別當……四一六
(七十八)錢龜……四一七
(七十九)鳥口ヤハズ……四一七
(八十)鳩を鷹の如く使ふ幷鵙を使ふ……四一七
(八十一)下手人……四一七
(八十二)孛星彗星……四一八
(八十三)押領使……四一八
(八十四)大佛錢……四一九
(八十五)水幘……四一九
(八十六)倉廩の積替……四一九
(八十七)國師任限幷改ニ國師ニ爲ニ講師ニ……四一九
(八十八)置レ貫……四一九
(八十九)非執政前參議非參議非執事……四一九
(九十)一院別當幷番頭史生……四二〇
(九十一)令義解の朱書……四二〇
(九十二)例文……四二〇
(九十三)鉤を懸事……四二〇
(九十四)迎歲迎時……四二〇
(九十五)士卒……四二〇
(九十六)孌給……四二〇
(九十七)龍舟鷁首……四二〇
(九十八)木を離れたる猿……四二〇
(九十九)粟降……四二一
(百)道は貴人に依て行はる……四二一
(百一)本陣幷候館……四二一
(百二)怨の府……四二一
(百三)棟梁之任……四二一
(百四)民は勞するを善とし逸するを淫とす……四二一
(百五)四民雜處せしむべからずよ……四二一
(百六)蛙の子は蛙に爲る……四二一
(百七)罷士、罷女、罷馬……四二二
(百八)出爪を剪を忌……四二二
(百九)尋常……四二二
(百十)陰德あれば陽報あり……四二二
(百十一)心如ニ直木ニ行如ニ柳條ニ……四二二
(百十二)繁文無益……四二二
(百十三)無用の器を貯へ有用の器を缺ク……四二二
(百十四)家中に先祖の靈を祭ル……四二三
(百十五)蔓相幷百皇一姓臣下連綿……四二三
(百十六)唐土四百州……四二三
(百十七)闕內候幷遙授……四二三
(百十八)功臣號惠美押勝……四二三
(百十九)宣底……四二三
(百廿)花米……四二三
(百廿一)楚𥸭……四二三
(百廿二)遙授……四二四

卷之八十七

(一)眠藏クツロ……四二五
(二)み山、みよし野、みくま野などいふみの字の義……四二五
(三)一生五分……四二五
(四)銘……四二六
(五)寵買レ怨……四二六
(六)族少して敵多きは天助なし……四二六
(七)姊妹の字義……四二六

(八)其父を滅して其女を奪ふ……四二六
(九)給料、内擧、外擧、自解、款狀……四二六
(十)蔭子蔭孫……四二七
(十一)虛假實假……四二七
(十二)款狀内擧狀……四二八
(十三)輔宣……四二八
(十四)貫首、黃丹、生練、雪ノ下、長絹四二八
(十五)布袴……四二八
(十六)本府の隨身……四二八
(十七)雜頭……四二八
(十八)前張……四二八
(十九)軍團の兵士衛士防人……四二八
(廿)穐狩衣……四二九
(廿一)大衣は波江とよむ……四二九
(廿二)褐衣畫繪……四二九
(廿三)狩袴……四二九
(廿四)十德掛素襖……四二九
(廿五)中啓……四二九
(廿六)小諸眉烏帽子……四二九
(廿七)色紙疊紙……四二九
(廿八)内侍宣……四二九
(廿九)上瓶、日下瓶、噦事……四三〇
(卅)砌下……四三〇
(卅一)角赤……四三〇
(卅二)紅裏の事……四三〇
(卅三)細長……四三〇
(卅四)鬼瓦……四三〇
(卅五)家作ニ吉シト云物……四三〇
(卅六)女官裝束……四三〇
(卅七)鈍色……四三〇
(卅八)引直衣……四三一
(卅九)亂聲 振舞……四三一
(四十)左方右方の事……四三一
(四十一)樂器に當時用不用の差別……四三一
(四十二)樂器の袋ノ事……四三一
(四十三)清少納言……四三一
(四十四)里の海士……四三四
(四十五)勵宣……四三五
(四十六)公方吉書初の案……四三五
(四十七)制札書法并甲乙人……四三六
(四十八)優名……四三七
(四十九)同行 一行……四三七
(五十)脊負板木鼓……四三七
(五十一)境遊地……四三八
(五十二)儒生は窶 人の子……四三八
(五十三)椒房……四三八
(五十四)君侯……四三八
(五十五)祖道……四三八
(五十六)毛擧……四三八
(五十七)臣は君によりて忠あり不忠あり……四三九
(五十八)訓杯、訓爵、酒家倡、藝子……四三九
(五十九)虎は死して皮をとゞめ人は死して名を殘す……四三九
(六十)あなぐり、大あなぐり、集大衆贄委たつれ……四三九
(六十一)普賢象といへる櫻……四三九
(六十二)水向……四四〇
(六十三)烏帽子……四四〇
(六十四)馬に將軍の號……四四一
(六十五)漢土の治術不レ及二北狄一……四四一
(六十六)總髮……四四一
(六十七)著レ名……四四一
(六十八)厚葬の繁并墓相……四四一
(六十九)昜レ土實レ棺……四四一
(七十)櫻魂……四四二
(七十一)釜鳴怪并金錢鳴……四四二
(七十二)五六鐙……四四二
(七十三)壺碑……四四四
(七十四)多賀城碑……四四五
(七十五)鐙の紋の板の上方に三階菱を付る事……四四五

卷之八十八

(一)不窮曲事……四五四
(二)同居義居……四五四
(三)人名に神佛の名をつく……四五五
(四)忌日菜食……四五五
(五)段物……四五五
(六)酒令……四五五
(七)鳥を射て婚を定む墓屋の處女墓……四五五
(八)木生類などに人の官位號など授く……四五六
(九)歌舞伎……四五六
(十)寒林、林葬、尸陀林、野葬、黃阬……四五六
(十一)山崩突出……四五七
(十二)晝分夜分……四五七
(十三)天變地妖本朝にては其應なし……四五七
(十四)渓土の州名を某軍といへる始……四五七
(十五)背を捌て悅……四五七
(十六)天永寺、國分寺、安國寺、大成寺四五八
(十七)書物を本といふ事……四五八
(十八)主上御疱瘡の時坂本山王の猿も疱瘡す……四五八
(十九)衝重三方四方……四五八
(廿)畫繪……四五八
(廿一)改元次第條事定……四五八
(廿二)居士……四五八
(廿三)名古屋三左衛門出雲み二國……四五八
(廿四)だて者關東小六……四五九
(廿五)日本三無……四五九
(廿六)前鬼後鬼……四五九
(廿七)津島午頭天王……四五九
(廿八)居士號を賜ふ……四五九
(廿九)茶の名所綱尾宇治などの始……四五九
(卅)戒名に院號をつく事……四五九
(卅一)饗膳に七五三五本立七本立などいふ事……四五九
(卅二)大黑といふかくし女……四五九
(卅三)茶闌……四五九
(卅四)淨土宗四國師一禪師……四五九
(卅五)菩薩號七人……四五九
(卅六)尊者號……四六〇
(卅七)旁若無人……四六〇
(卅八)大師粥……四六〇
(卅九)秋葉山光明山……四六〇
(四十)二階から落ての後はひまに成けり……四六〇
(四十一)善光寺大勸進の系圖……四六〇
(四十二)不忍池……四六〇
(四十三)瀨戸物……四六〇
(四十四)道路の廢挾井並水……四六一
(四十五)六地藏疱瘡神……四六一
(四十六)マチン……四六一
(四十七)褐の色かちん……四六一
(四十八)大酒……四六一
(四十九)城の多聞……四六一
(五十)紅毛船の來る由來……四六一
(五十一)押板机板床の間……四六一
(五十二)圓光大師の號……四六二
(五十三)大神宮に私幣を奉らず東照宮を私宅に祭らず井紙幣……四六二
(五十四)假名日本紀……四六二
(五十五)了然尼……四六二
(五十六)小野照崎明神……四六二
(五十七)位牌井居士號……四六二
(五十八)始祖先祖高祖曾祖大父などの稱……四六二
(五十九)道成寺鐘銘……四六二
(六十)建速胡盞……四六三
(六十一)大木……四六三

(六十二)舍利瓶井鎌倉極樂寺……四六三
(六十三)伊豆國大仁村の古文書井
甲乙人一錢切……四六四
(六十四)政子尼の經文の跋井血書の
經……四六五
(六十五)馬蹄螺彫蹄子……四六五
(六十六)願成就院……四六五
(六十七)六十六部回國聖……四六六
(六十八)豚魚……四六七
(六十九)大場景親が住所……四六七
(七十)青蜆子……四六七
(七十一)阿之我利能湯……四六八
(七十二)基氏同文井城主……四六八
(七十三)手石の彌陀……四六九
(七十四)都女と云物……四六九
(七十五)をふしまじりに生しげる……四六九
(七十六)霜なれ……四七〇
(七十七)草のかき葉……四七〇
(七十八)鹿の夏毛……四七〇
(七十九)おほ扇……四七〇
(八十)鹿のとこゐ……四七一
(八十一)さら〳〵に……四七二
(八十二)されき……四七二
(八十三)いつゝの宮……四七三
(八十四)ゆもとりあへす……四七三
(八十五)なすの湯湯坐……四七四
(八十六)大鷹狩小鷹狩……四七五
(八十七)里見菜に答ふ……四七五
(八十八)仕舞……四七六
(八十九)あざなへる繩……四七六
(九十)こめ〳〵……四七六

卷之八十九

(一)太刀契……四七三
(二)兩段再拜入開手……四七四
(三)ちよのうがいたゞく桶、如大尼、無著ノ無外尼、鎌倉底脫井、京都景愛寺……四七五
(四)ともとてなどいふべき詞なりとのみいひし例……四七五
(五)留守所……四七六
(六)和與……四七六
(七)稅所……四七七
(八)雫アマゴヒアマビキ……四七七
(九)杤木形几帳……四八一
(十)海部の文……四八一
(十一)三亡……四八二
(十二)匁、一錢、一文目……四八二
(十三)法隆寺中院護摩堂觀音像座緣銘……四八三
(十四)法隆寺眞金佛四十八躰中の釋迦像背銘……四八五
(十五)東大寺枚幡銘……四八六
(十六)東大寺銀壺銘……四八六
(十七)東大寺銅鉢銘……四八六
(十八)行義……四八六
(十九)事レ君之道……四八六
(廿)改革不レ可二妄行一……四八六
(廿一)封城……四八六
(廿二)乘二馬石一……四八六
(廿三)帛衣白無垢……四八六
(廿四)秩、任秩、秩限、秩滿……四八七
(廿五)風聲……四八七
(廿六)やまと歌……四八七
(廿七)祈といふ訓義……四八七
(廿八)魚符魚袋……四八七
(廿九)不當……四八七
(廿)白衣の鉢六月無禮……四八七
(廿一)おゝそれながら……四八八
(廿二)無レ故して利を得るは禍……四八八
(廿三)言者異則人心變す……四八八
(廿四)紹介……四八八

(廿五)甲乙人……五一一

卷之九十

(一)雞口牛後の喩……五一四
(二)陰德あれば陽報あり……五一四
(三)松皮疱瘡……五一五
(四)寺門金字の勅額……五一五
(五)雪泥の違……五一五
(六)君子の交淡して水の如く小人の交甘して醴の如し……五一五
(七)白屋の士……五一五
(八)禁裏御念佛……五一五
(九)公文所……五一五
(十)土一揆總政……五一六
(十一)上表下表裏顯表、かい
どりすがた……五一六
(十二)纏の龍首……五一七
(十三)天蓋竹格……五一七
(十四)六道錢……五一七
(十五)めのこ算……五一七
(十六)山臥筒……五一八
(十七)曾耳といふ訓……五一八
(十八)みこと……五一八
(十九)すべなし……五一八
(廿)宇眞夫禮、くつばれ、くたびれ……五一八
(廿一)安利加與、比安利多々志……五一八
(廿二)とこなつ……五一九
(廿三)神祇齋場所……五二二
(廿四)國甦節……五二二
(廿五)反故を嗅ふ……五二二
(廿六)白牌……五二二
(廿七)徒手空手、むなで、すで……五二三
(廿八)水實……五二三
(廿九)れなし言……五二三
(廿)濃山涙屋……五二三
(廿一)承明門……五二三
(廿二)門守犬……五二三
(廿三)影の形に從ふ……五二三
(廿四)蘆葉の雁……五二三
(廿五)媒口……五二三
(廿六)戸綠素飧……五二三
(廿七)仁をもて國を亡す……五二三
(廿八)不附の民、使べからず不敎の卒戰はしむべからず……五二四
(廿九)貴人不レ知して驕り驕者不レ知して亡ぶ……五二四
(四十)父無益の子を愛せず君不軌の臣を愛せず……五二四
(四十一)知レ命者天を怨す知レ己者人を怨す……五二五
(四十二)利器不レ可レ假レ人……五二四
(四十三)小田原評定……五二四
(四十四)重箱の掃除用ニ楊枝與ニ約子一論……五二四
(四十五)いぶせし、いぶかし……五二四
(四十六)猿樂、手猿樂、猿樂大夫……五二五
(四十七)菓子……五二六
(四十八)衣のおくみさき……五二六
(四十九)あぢを味ことは役味を云……五二七
(五十)猿樂相撲などの纏頭を後日に代料に引替る事……五二七
(五十一)夏毛の筆……五二七
(五十二)反閇五字の閇配……五二七
(五十三)ソツコント云詞、種根……五二七
(五十四)大臣重レ綠不レ諫小臣誅レ罪
不言……五二七
(五十五)白衣裳……五二七
(五十六)明顯部類……五二七
(五十七)入道の女ノ名を書べき子細……五二七
(五十八)曾侍……五二七
(五十九)紫衣香衣の事……五二八
(六十)一普……五二八

(六十一)俳の訓義……五二八
(六十二)雜事雜事錢……五二八
(六十三)厚顏、鐵面皮、つらの皮千枚
　撮……五二八
(六十四)定　使……五二八
(六十五)親代……五二八
(六十六)夥は身を助る……五二八
(六十七)一字を賜ふ、片名を賜ふ……五二八
(六十八)人の疵ないふまじき事……五二九
(六十九)文明三年四月十二日一疋
　御說筆記中陰の御佛、謚號、
　追號、諒闇の服……五二九
(七十)酒令、觴政、酒勢令、博　拳……五三〇
(七十一)瑠璃……五三〇
(七十二)修身の金言井柔能制レ剛……五三〇
(七十三)衆口回二人意一衆口鎖レ金……五三一
(七十四)怨生二於不報一禍生二於多福一……五三一
(七十五)氣にいらぬ……五三一
(七十六)同出……五三一
(七十七)無德にして人に用らるゝは罪也……五三一
(七十八)田樂侏儒……五三一
(七十九)使レ酒……五三一
(八十)幕官……五三一
(八十一)蜘のいにあれたる駒をつなぐ井二道かくる……五三一
(八十二)妻の貞不貞の優劣……五三二
(八十三)窓族、可レ憐……五三二
(八十四)百里に行ものは九十里を半とし、事を成すに十にして九を半とす……五三二
(八十五)力を出す、出すと云詞、いる
　と云詞……五三二
(八十六)繪折數井檢器……五三二
(八十七)賀茂の御陰山……五三二
(八十八)酒三遍……五三三
(八十九)蛙合戰……五三三
(九十)舞大夫松蠟……五三三
(九十一)いきみたま……五三三
(九十二)小四方、衙重、公卿小公卿……五三三
(九十三)上人號、國師號、禪師號、和尙
　號等の宣下……五三三
(九十四)煤拂新宅三年の間忌之……五三三
(九十五)懷紙は兼日短日は當座……五三三
(九十六)久世舞……五三三

卷之九十一

(一)やくかい、厄會、ヤツカヒ者……五三四
(二)智識大德の歎めでたし……五三四
(三)手ぐすれ引、天鼠矢……五三五
(四上)歌數おほくよみたる人……五三六
(四下)如法、如法者……五三六
(五)はづすと云假名……五三六
(六)數にかうのもの……五三六
(七)堅固の田舍人……五三七
(八)異名……五三七
(九)かきたて杖……五三八
(十)こびたる者……五三八
(十一)雜訴決斷所……五三八
(十二)檜守武家不任……五三八
(十三)簡衆……五三八
(十四)記錄所……五三九
(十五)若君姬君……五三九
(十六)內侍宣……五三九
(十七)庚申夜所レ妊之子爲レ螫……五四一
(十八)健兒は中間男の事、中間男……五四一
(十九)みそさゞい……五四一
(廿)鷸……五四一
(廿一)勘當……五四一
(廿二)不孝……五四一
(廿三)折檻……五四一
(廿四)連署……五四二

(廿五)放埒……五四二
(廿六)猩緋……五四二
(廿七)左衽……五四二
(廿八)相　伴……五四二
(廿九)饗參……五四二
(卅)不當……五四二
(卅一)周章……五四二
(卅二)白狀……五四二
(卅三)支度……五四二
(卅四)算奏之業……五四二
(卅五)下火……五四二
(卅六)屈　請……五四二
(卅七)士は己を知者の爲に死す……五四二
(卅八)智　成レ生……五四三
(卅九)納袈裟……五四三
(四十)練歩、ねり歩、運練、早運練、ア
　ラ練……五四三
(四十一)頭巾……五四三
(四十二)篠懸……五四三
(四十三)南鐐……五四三
(四十四)屏風……五四三
(四十五)鶴燈臺燭臺……五四三
(四十六)行器……五四三
(四十七)御器、引入、合子、饒器、饒州椀五四三
(四十八)鷹秤　竹尺……五四三
(四十九)泥鰌……五四四
(五十)引板鳴子……五四四
(五十一)蘆に鷹の畫……五四四
(五十二)宿紙漉墨の紙紙屋紙……五四四
(五十三)乳木、護摩木、白膠木……五四四
(五十四)竹筧……五四四
(五十五)物相……五四四
(五十六)疑冬、山吹の說、仙翁花……五四四
(五十七)鼈甲に黃の葉を覆へば爲
　鼈……五四四
(五十八)濃……五四四
(五十九)穴賢……五四四
(六十)勿躰なし……五四四
(六十一)如在ない……五四四
(六十二)倭若無人……五四四
(六十三)會下……五四四
(六十四)折角……五四四
(六十五)庭　掃……五四四
(六十六)分野……五四四
(六十七)雜遝……五四四
(六十八)反閇禹步……五四四
(六十九)緊議……五四四
(七十)公卿といへる塞器……五四四
(七十一)笏手板……五四四
(七十二)穀類を降らす……五四四
(七十三)秤の木……五四四
(七十四)馬酔木……五四四
(七十五)一夜松……五四四
(七十六)二王……五四四
(七十七)五山の寺院、京都五山、鎌倉
　五山、尼寺五山、唐土五山……五四五
(七十八)簾蟹……五四五
(七十九)大音の人……五四五
(八十)公界……五四五
(八十一)白板の天子……五四五
(八十二)扶持役料……五四五
(八十三)二千石　石高……五四五
(八十四)笏……五四五
(八十五)事力……五四五
(八十六)謏符……五四五
(八十七)勝て胄の緒をしめる……五四五
(八十八)仁山智水……五四五
(八十九)散官、品位、流內流外……五四五
(九十)ありかず、記數、算指……五四五
(九十一)拍子木、拆、時の大鼓……五四五
(九十二)京童……五四五
(九十三)屋形……五四六

(九十四)定木、粘板、銭板……五四六
(九十五)花瓶……五四六
(九十六)錢幕……五四六
(九十七)西洋人、利瑪竇……五四七
(九十八)鼠祠……五五二
(九十九)木石……五五四
(百)武藏鐙……五五四

卷之九十二

(一)押領使……五五五
(二)立板に水を流す……五五五
(三)鎭守……五五五
(四)厩別當……五五五
(五)蜘のいに荒たる駒はつなぐとも井二道かけたる人……五五五
(六)いくぢなし……五五六
(七)ふくら……五五六
(八)きら……五五七
(九)大物射追物射……五五七
(十)御事、鄭……五五七
(十一)似せ繪……五五七
(十二)番匠……五五七
(十三)手具足……五五七
(十四)小間物見世……五五七
(十五)牛は牛づれ……五五七
(十六)叡山の不實柿、下總相馬郡辛島原の花不咲桔梗……五五七
(十七)雉子燒豆腐……五五七
(十八)火桂……五五八
(十九)地獄と云地名……五五八
(廿)六十万人と云遊行の札……五五八
(廿一)初卯初子中子弟子……五五八
(廿二)今木といへる衣……五五八
(廿三)綿城綿機……五五九
(廿四)隱相を造て神前に懸く……五五九
(廿五)八草……五五九
(廿六)坂の人宿り、峠の人宿り……五五九
(廿七)名簿……五五九
(廿八)す通り……五五九
(廿九)大鎭、すクミ、耳袖……五五九
(卅)成功の人年給……五五九
(卅一)笛なエヴヤヤウと云事……五五九
(卅二)後藤太秀鄕……五五九
(卅三)すべし髮すべらかし髮……五六〇
(卅四)傾城……五六〇
(卅五)かぶる……五六〇
(卅六)荒ミサキ……五六〇
(卅七)杉形……五六〇
(卅八)影迹……五六〇
(卅九)遊藝の席にて實藝を施すと……五六一
(四十)ぬくめ鳥……五六一
(四十一)親には一日に三度笑て見せよ……五六一
(四十二)鳩に三枝の禮……五六二
(四十三)伸針絹張……五六二
(四十四)細男ほそなと……五六二
(四十五)丸木船……五六二
(四十六)春日 猿祭の醴 の土器……五六二
(四十七)奈良田樂井四座の猿樂……五六二
(四十八)北條が供人數……五六三
(四十九)京童鎌倉童部……五六三
(五十)喉もと過れば熱さ忘る……五六三
(五十一)犬と猿……五六三
(五十二)額 窓……五六三
(五十三)一むし……五六三
(五十四)てんとくじ紙衾……五六三
(五十五)六指、十六指指、我利、擲石……五六四
(五十六)上總雪の浦里九十九里……五六四
(五十七)板橋と云地名……五六四
(五十八)中坊 小者……五六四
(五十九)地獄の沙汰も錢次第……五六四
(六十)鯖の子鱠……五六五

(六十一)よしばみは俗に云見えばうに同じ……五六五
(六十二)平文……五六五
(六十三)師子身中の虫……五六五
(六十四)入麵……五六五
(六十五)手傀儡デクノバウ……五六五
(六十六)急々如律令……五六六
(六十七)小兒の前髮すゝしろ……五六六
(六十八)庚申日饑饉を省る事を忌……五六六
(六十九)師子舞……五六六
(七十)ほいたう……五六六
(七十一)針の耳……五六六
(七十二)車座……五六六
(七十三)懸命の地、一所懸命の地、一生懸命……五六六
(七十四)ぜんの綱かれの緒……五六七
(七十五)チシャウ、マイス、バウズ、ボンサマ……五六七
(七十六)もじといふを添る詞……五六七
(七十七)私と云詞……五六七
(七十八)和泉式部鯛をくひし歌……五六七
(七十九)木の葉猿……五六七
(八十)世にあるもの、世にあり顏、世になしもの、世さまもわびし
からず……五六八
(八十一)人の上に吹風わが身にあたる……五六九
(八十二)大願空しからず……五六九
(八十三)たくらだ……五六九
(八十四)紙一帖をヒトカサ子と云……五六九
(八十五)ちくらが沖……五六九
(八十六)そろり……五六九
(八十七)福酒……五六九
(八十八)かほに紅葉をちらす……五七〇
(八十九)藏と高家の差別……五七〇
(九十)大がしら……五七〇
(九十一)小しやくと云詞……五七〇
(九十二)ヒエテふえて……五七〇
(九十三)くつめきの病……五七〇
(九十四)直如レ矢……五七〇
(九十五)來經氣長く、長きけ、こよみ、日……五七一
(九十六)朔 望 晦……五七一
(九十七)三正……五七一
(九十八)制の調……五七一
(九十九)代、苗代、田代井町段歩の和訓……五七二
(百)段、一段許、二段許、三段許……五七五
(百一)ちぎら雲ちぎれ……五七五
(百二)ま弓……五七六
(百三)隱堂を松茸に比せし事……五七六
(百四)うなふといふ詞田畑をうなふ……五七六
(百五)手なしと云布著物井釉無……五七六
(百六)物のうもと云詞井水ぐむ……五七六
(百七)繩一房……五七六
(百八)鳥居の額……五七七
(百九)れぼけ……五七七
(百十)上分、上矢、早穗……五七七
(百十一)えびら刀くびかき刀……五七七
(百十二)わつそくにかけ……五七七
(百十三)力瘤、力筋、力毛……五七七
(百十四)辻酒盛……五七七
(百十五)三輻白の幕皆白の幕……五七八
(百十六)茶木を植……五七八
(百十七)正月十五日の望粥……五七八
(百十八)墟ノ山……五七八
(百十九)ひれと云詞……五七八
(百廿)骨を高野に納ル……五七九
(百廿一)似繪……五七九
(百廿二)手鞠歌の類に一ツとやニツとやなどかぞへて唄ふうた……五七九

(百廿三)守刀……五七九
(百廿四)畝の柱……五七九
(百廿五)愚人夏の虫……五七九
(百廿六)生酔本性たがはず……五七九
(百廿七)塩煎豆……五七九
(百廿八)鬼茸(ロクジョウ)六嫁(ゴマノヒシコゴ)……五七九
(百廿九)田つくり、吾万女、比之古、五味……五八〇
(百卅)煎餅……五八一
(百卅一)たくらた……五八一
(百卅二)おほへいと云詞……五八二
(百卅三)うは氣……五八二
(百卅四)だまると云詞……五八二
(百卅五)花の制札……五八二
(百卅六)醫師の僧形……五八二
(百卅七)四神相應……五八二
(百卅八)位記……五八二
(百卅九)帳内、資人、事力……五八二
(百四十)尋花に落花をよめる證歌……五八二
(百四十一)過所……五八三
(百四十二)力田……五八三
(百四十三)露索裸にして吹る……五八三
(百四十四)由緒書、本經、錦貿、郷貿、脚色狀……五八三
(百四十五)口米(クチマイ)耗米(ヘリマイ)……五八三
(百四十六)國學儒學漢學 唐學……五八三
(百四十七)鐵砲……五八四
(百四十八)石火矢……五八八

松屋筆記卷之六十八

東都 平與清文儒稿

(一)おひげの塵を取　世に諛媚(ヘツラヒコビ)て人の心を取者の躰を俗にオヒゲノ塵ヲ取ルといへり宋の丁謂參知政事たりし時同平章事寇準が鬚に糞(アフモノ)の汚(フキ)たるを拂へるを出處とすべし通鑑綱目續編宋眞宗天禧三年の條(三の卷八)十四に丁謂因二寇準稱譽一得レ致二通顯一雖二同列一而事レ之甚謹嘗會二食中書一糞汚二準鬚一謂徐起拂レ之準笑曰參政國之大臣乃爲二官長一拂レ鬚邪謂大慙恨遂成二讎隙一云々頭書南浦文集下四十四丁ウ文海披抄四ノ七丁ウ詔二事宜一官ノ條可二考合一漢語大和故事四ノ四段困學紀聞十八廿丁オ朱新仲詠二昭君一詩に顏色如レ花心嚢土東海道名所記三ノ十九丁オ諺草二ノ十六丁ウ

(二)先達　下學集態藝門に先達引導之人也云々後漢書卷卅三朱暉傳に初暉同縣張堪素有二名稱一嘗於大學一見レ暉甚重レ之接以二友道一乃把二暉臂一曰欲下以二妻子一託上朱生一暉以二堪先達一舉レ手未二敢對一自後不二復見一堪卒云々晉書潘岳傳論に前史僉(タグヘ)於賈誼一先達方之士衡一云々同何充傳に以二州有二先達一宿德一固讓不レ拜云々南史褚玠傳に早有二令譽一先達多以二才器一許レ之云々曹子建集(三の卷)洛神賦に願二誠素之先達一兮解二玉珮一以要レ之云々任彥升集(三の卷)の爲二蕭揚州一作薦レ士表に暉二映先達一領二袖後進一云々庾亮集讓二中書令一表に十餘年間位超二先達一云々顏氏家訓に爰及二農商工賈厮役奴隸釣魚屠肉飯牛牧羊一皆有二先達一爲二師表一博學求レ之無レ不レ利二于事一也云々按に先輩に先達といふよりうつりて山伏の先達は別に一つの名目になれる也侍中群要一の卷藏人初參の條に先達藏人開レ簡付レ簡了云々隨二先達氣色一食レ之了云々合二宿先達宿所一云々觸二氣色於得意先達一云々また日給の條に隨二先達一示二可レ注レ之云々また上二格子一條に先達藏人入レ自二鬼間一云々また下二格子一條に告二先達藏人一云々同四の卷觸陣障進退條に隨二先達一是一故實也云々婚記上卷二丁ウ久安四年七月七日の條に先達所レ傳及中古以來之例唯避二禁忌之方一云々俊賴口傳上八丁オ誹諧歌の條に公任あひとあひたりし先達どもにすゝぶんたづね侍りしに云々愚秘抄上四丁オに至極躰をば先達もさだめかねて侍る云々又十六丁オ俊賴のひがごとには先達よまぬ事なれどもわれと初て思ふさまによみ出して云云長明無名抄上四丁カにその座に先達あまた侍りしも

云々愚問賢注二丁ウに一道の先達なり云々水蛙眼目六丁ウに先達猶如レ此後學可二存知一者也云々正徹慰草十三丁オに先達も申侍れ云々徒然草慰草二卷廿六丁オにすこしの事にも先達はあらまほしき事也云々袖中抄十八の卷六丁オ鵠の行合の間の條に先達の事をうたがふは心得ぬ事なれど云々此等の類は先輩の事にのみいへる也盛衰記卅六十九丁オには先長達ノ申ベキコニ候とも有保元物語一の卷參考本十二丁ウ鳥羽院熊野御參詣の條に先達幷ニ供奉ノ人々ヲ召テ云々平家物語二の卷四十二丁オ康頼祝ノソト の條に康頼入道先達ニテ丹波少將相具シツヽ日ゴトニ熊野詣ノ眞似ヲシテ云々源平盛衰記四の卷七丁オ白山神輿登山の條に加賀馬場先達神人等云々又同丁ウ云ニ先達一云ニ神人一閑廻ニ隨分之思案一云々同九の卷十七丁ウ康頼熊野詣の條に先達ニ奉レ憑十五ノ參詣已ニ畢リ候ヌ云云同卅一の卷一丁オ木曾登山の條に大夫房學明ヲ先達ニテ云々同四の卷廿丁ウ維盛入道熊野詣の條に先達シテ參タルニコソ云々吾妻鏡十の卷四丁ウに於ニ御參道一殊可レ憚之由御先達申行間如レ此云々竹崎五郎畫詞に熊野先達をかの法眼けうしんのもとに打よりて御祈誓候べしと申さんと思ひしを云々砂石集一の下卷活板九丁ウに熊野へ詣ル女房アリケリ先達此檀那ノ女房ニ心ヲカケテタビ〳〵ソノ心ヲイヒケルサテ先達ノ心ヲタガヘヌ事ナレバスカシテアスノ夜〳〵トイヒケリ云々先達ハヤガテ金ニ成ヌ能野ニハ死ヲバ金ニナルトイヘリ云々同五の下卷活本廿八丁オに熊野ノ先達ナドスル名人ナレバ云々古今著聞集一の卷廿四丁オに助僧正覺讀は先達の山ぶし也那知千日行者大峰數度の先達也云々同二の卷廿九丁オに先達の命に隨て身をくるしめ木をこり水をくみ云々後醍醐天皇書寫山行幸記二丁ウに二十八日爲ニ御先達一行春修乘房法印也參堂云々又二丁ウ御先達同間内陣座云々五代帝王物語廿三丁オに御先達は三山撿校にて櫻井宮後鳥羽皇子覺仁法親王參り給ふ親王にて御先達是がはじめ成べし云々地藏靈驗記二の卷卅丁オに此ノ木杖ヲ先達トメ無明長夜ヲ出離シ玉ヘ云々同六の卷卅丁オに僧一人來リ玉ヒテ汝ガ先達シテ得サセン此方ヘ來レトノ玉ヒテ云々太平記參考本五ノ廿六丁ウ大塔宮熊野落の條に岩柿ノ衣ニ笈ヲ掛ケ頭巾眉半ニセメ其中ニ年長ゼルヲ先達ニ作リ立田舍山伏ノ熊野參詣スル躰ニゾ見セタリケル云々路次ニ行逢ケル道者モ勸修ヲ積ル先達モ見トガムルコト無リケリ云々先達コソ効驗第一

ノ人ニテ候へ云々吉野拾遺三の卷廿九丁ウ石清水御幸の條に紀氏のなにがしをめして當山の先達としかなた此方の神秘をきこしめさせ給ひける云々庭訓往來十月三日狀に山伏云々同諸鈔大成四の卷四丁オに先達山伏のかしら也先生先輩などいふとおなじ云々此等は山伏の先達をいへる也頭書吾妻鏡一ノ廿九丁オ以二北條殿一爲二先達一可レ被レ來二向黃瀨河一之旨云々

(三)白波綠林　古今雜下題不レ知よみ人しらず「風ふけはおきつしら浪たつ田山夜半にや君かひとりこゆらん」顯昭注に敎長卿云白波とは盜人をいふかゝるおそろしきものゝたつ山をひとり君がこゆらんとなげゝる也云々顯昭云白波は盜人をいふとは侍れど此歌にては必しもその事を思はずやありけんともおぼえ侍りぬ「ぬす人のたつたの山にいりにけり」とよめる歌は屏風の繪に立田山にて旅人の盜人にあへるかたを書たればよめる也云々定家卿密勘に昔も今も白浪稱二盜人一庭訓又如レ此云々○能因歌枕六十四丁オにみどりの林とはぬす人をいふなり云々○奥義抄上の末卷十三丁ウ物異名の條に盜人しらなみ云々○袖中抄一の卷おきつ白浪立田山の條にぬす人を白波とも綠林なども云は常の事也云々無名抄云白波といふは盜人を云也さるものゝたつた山をおそろしくやひとりこゆらんとおぼつかなさによめる歌也綺語抄云しら浪をぬす人といふ事をよめるなり奥義抄云盜人をしら浪と書る此歌より事おこる歟又盜人をしらなみといふは白波と云本文也此歌より事おこるといはん事いかゞ○和歌色葉集上の三卷四丁オに盜人しらなみ云々○色葉和難抄九の卷志部しら浪の注に祐云しらなみとは海賊をいふ也然るに風吹ばおきつ白浪立田山の歌山だちを白波とよめり古來の不審也山だちをば綠林といふ也いづれも同じ盜人なれば山といはんとておきつ白波とはいへるにや云々○八雲御抄三の下卷四十六丁ウ異名部に盜人みどりの林白なみ云々○藻鹽草十五の卷人倫部盜人の條にしらなみ一說云々みどりのはやしふるき物にある間注也かいかゞ○吳竹集九の卷志の部にしらなみとは盜人の事なり又綠林といふも盜人也綠林白波盜人莊子に出たり云云○大藏卿行宗集に保延三年侍從中納言云々うりやかみおこすとありしがみてざりしかばかく申に「魚のあみ龍の蹄のみえぬかな水にかくれて空にのぼるか」返し「いをのあみたつのひつめを献せるをしら浪のためかすめられつも」按に詞書に「うりやかみ」と

有は瓜八網にや又は「やか」は「一あ」の誤にてひとあみにや今の世も田舎人網に瓜を納て人の許におくるりのうちにめぐらしあたを千里の外にしりぞくる道と常也網に納ざらんには魚のあみと歌によめるとよまですべおこなはれしかば立田山のしら波こゑしづしなし又「みてざりし」は滿ざりしにや又は見えざりかにして夜の關の戸さす事をわすれ云々○光行海道しの誤寫にても有べし「龍のひづめ」は瓜の異名也和記七丁に若椙と云所を過て横田山をとほる此山は白名抄蔬類部に青瓜兼名苑云龍蹄一名青登青蛾瓜也和楡のかげにあらはれて綠林の人をしきる所ともきこ名阿乎宇利と見えたる龍蹄也○新古今釋教部寂然法ゆれば益なく覺えていそぎゆく「はや過よ人の心のよこ師が十戒の歌の中に不偸盜戒「うき草の一葉也ともいそかくれ思ひかけなそおきつしら浪」按に梵網經二山部に横田山近江とて此歌を出し鴨長明家集の歌に一針一草不レ得ニ故盜一とあるによりてよめる也○とすされど長明集には見えず白楡のかげにあらはれ新勅撰釋教法眼宗圓が十戒歌の中に不偸盜戒「こえて綠林の人をしきるとは水經注に諸次水東逕楡林塞したゝおなしかさしの名もつらし龍田の山の夜半の」世謂ニ之楡林山一とあるに綠林山の賊の事をよせて白波」○續後撰雜中に中原友景撿非違使に侍ける時白楡の蔭よりあらはれ出て盜賊が人を塞留る處といふ心にや又は白楡は並木の事をいへりともおぼゆ鄙過狀の政にまゐりて囚をとひて心中に思ひつゞける中記に裏國鄙路千里夾レ道種レ楡とあるは路傍の並木「よるゝはいかなる方に通ふそとゝへはこたふる に楡を植たる也さては並木の蔭よりあらはれ出て盜興津しら浪○筑波集卷十四雜連歌三に後醍醐院御時節賊が人を留るよしにても有べし「しきる」は未レ詳新會の日御劒うせたりける藏人清藤「御はかしをたれ勅撰物名に「しきり羽の矢」あれど同語ならず俗に物つかの間にとりつらん」紀宗基「身をはいつくにおきを隔るを「シキル」といふにかよひてきこゆこは塞限つしら浪」○新續古今序に左のおほいまうちきみ源にてせき留ル義なるべし○鴨長明方丈記十丁に所は河のあそんえびすをたひらぐるいくさのきみのつかさ

原近ければ水の難も深く白波のおそれもさわがし云云○古今著聞集卷十二卅丁に澄惠僧都いまだ童にて侍ける時かいしやくしける僧髮けづらんとて手箱をこひけるにその手箱失にけりいかに求れども見えずはや盜人のとりてける也其時この兒とりもあへずよみける「しら浪の立くるまゝに玉くしけふたみの浦の見えすなりぬる」○砂石集五の下卷三丁人之感有和歌事の條に家隆ノ子息ノ禪師隆寛坂東ヨ、カシコ修行シテ或地頭ノ家ノ前栽ノ櫻ノ華ヲ一枝ヲリテニゲヽルヲ主ミツケテアノ法師トラヘヨト事々シクノノシリケレバ冠者原オハヘテカラメテケリ禪師不祥ニアヒテセンカタナカリケレバ殿ニカク申給ヘトテ「白波ノ名ヲハ立トモ吉野川花ユヱ沈ム身ヲハウラミシ」使シカ〳〵トイヘバ繩ハナツケソ唯具シテコヨトテトリ留メテサマ〳〵ニモテナシカシヅキテ歌ナド學問シケルト聞エシ云々按に追とを「オハヘル」と云詞今俗にもいへり○宗久都の褻に苔の衣をさへ引てかへりししら浪のあらかりし名ごりにいとゞ旅の床もものうくこそ侍りしか云々○回國雜記にしもつふさの國兒の原といへる所ありいかなるゆゑにかゝる名の所は侍るぞと里人に尋ければこの在所白波青林横行の地たるによりてある少人の通りけるに衣裝など剝とるのみならず剩殺害し侍りきそれより此所をかやうに號し侍るよし語侍れば今更の心ちして塚のほとりに立よりて思ひつゝけて廻香し侍ける「佳人落命荒原上蘚庭古碑空剝名勿恨青林犯花影浮生有限辱兼榮」「白波に浮名を流すちこの原こひちにすつる身とも聞はや」○三國傳記一の卷五十丁第廿九章に女ハ誰トモ白浪寄スル諸侯ヲ盡ス宿モ定ヌ氣色ニテ屏風陰ニ立忍男ノ猶モヌグ咨重ヌル妻ヲ通サジト冠ニ目ヲカケ懸リケルガ云々同書六の卷七丁第六章に四海ノ白浪ヲ靜メ一家ノ名譽ヲ播セリ云々○正徹慰草十丁にやぐらあり鹿垣あり暫つはものゝいくさをふせぎしら浪のおそれあらせじと也云々○壒嚢抄一の卷卅一丁第卅五段に盜人ヲ白波ト云ハ何事ゾ後漢孝靈皇帝中平元年張角ト云者黃天ト名ヲ揚テ黃ナル巾ヲ蒙ル者卅六萬人ヲ相隨ヘテ謀叛ヲ巧ムニ皇甫崇ト云者是ヲ破リ又其餘黨共西河ノ白波谷ト云所ニ隱居テ諸國ヨリ上ル財寶ヲ掠メ取ケリ時人是ヲ白波賊ト云此ヨリ始テ盜人ヲ白波トハ云也仍和語ニ「シラ

ナミ」ト云也凡白波ヲバ海賊ニ用ヒ綠林ヲバ山賊ニ仕ト云共山立ヲシラナミト云侍ベリ云々按ニ塵添本には二の卷廿四丁オ第五十四段に載す○山槐記治承三年四月八日の條に過ニ奈良坂邊一之時白波著ニ他方一云々○明月記天福二年八月晦日の條に去夜白波己門邊音信之由下人等稱レ之餘命已迫歟又云凱沙門堂執當□□云法師立飼大津群盜伺ニ此近邊一云々○文保三年記に糺ニ彈玄像之所犯一召ニ誡白波之凶徒一云々○東鏡廿二の卷十四丁ウ建保四年二月十九日の條に去五日夜群盜入ニ東寺寶藏一佛舍利道具已下代々寶物等併盜ニ取之一仍同九日可レ尋ニ捜件盜人一之由被レ下ニ宣旨一於五畿七道一云々宣下狀云左辨官下ニ東海道諸國一應レ令レ尋ニ捜盜ニ取東寺舍利幷道具等一輩上事右今月五日夜有ニ白波一入ニ東寺一取ニ舍利一盜ニ道具一舍利者一代敎主之遺身道具者三國相承之靈寶也云々○漢書王莽傳下九丁オに是時南郡張霸江夏羊牧王匡等起ニ雲杜綠林一號曰ニ下江兵一衆皆萬餘人云々○後漢書劉玄傳に新市人王匡王鳳爲平ニ理諍訟一遂推爲ニ渠帥一衆數百人於レ是諸亡命馬武王常成丹等往從レ之共攻ニ雕鄉一聚ニ藏於綠林中一數月間至ニ七八千人一云々注に綠林山有ニ今荊州當陽縣北一也云々同書王常傳に與ニ王鳳王匡等一起ニ兵雲杜綠林中一聚レ衆數萬人云々同書靈帝紀に中平元年張角反皇甫崇討レ之角餘賊在ニ西河白波谷一爲ニ盜賊俗號ニ白波賊一云々また中平四年黃巾餘賊數大等起ニ於西河白波谷一寇ニ大原河東一云々同書獻帝紀に冬十月白波賊寇ニ河東一云々注に薛瑩書曰黃巾郭泰等起ニ於西河白波谷一時謂ニ之白波賊一云々同書趙典傳に典兄子謙轉爲ニ前將軍一遣レ擊ニ白波賊一有レ功封ニ鄃侯一云々同書董卓傳に初靈帝末黃巾餘黨郭太等復起ニ西河白波谷一轉寇ニ大原一遂破ニ河東一百姓流ニ轉三輔一號爲ニ白波賊一衆十餘萬云々同書南匈奴傳に單于將ニ數千騎一與ニ白波賊一合レ兵寇ニ河內諸郡一云々○『與清曰按に盜賊を白波とも綠林ともいへるは山賊海賊を分し名目にあらずおきつしら浪立田山の歌は伊勢物語古今集大和物語などに載せ後の歌にも此を本歌にして白浪を盜賊の事によみたれともと沖津白浪立田山といはん料の序にて盜賊の事をおもへるにあらずまさしく盜を白波とよめるは大藏卿行宗の歌を古しとし其說は綺語抄俊賴口傳などに起れり綠の林をよめるは光行が海道記其說は袖中抄を始とすさて白波は後漢書の白

波賊綠林漢書王莽傳漢書劉玄傳王常傳などの綠林山の賊を出處とす明一統志に出たれば閱て知るべし』

(四)云云　云云の字史記封禪書に見えたるは山の名也シカ〳〵又トイヘリなど訓べき云云は同書汲黯傳文句一の一卷十四丁止觀一の二卷十五丁慈恩の樞要の下卷廿九丁散善記三の卷四十丁などに出たり中略の處に用たる例續後紀を始としていとおほかり妙樂記一十九丁に云云者象ニ氣之分散一如ニ雲在レ天非ニ可ニ卒量一也意言下未レ說者尙多如レ雲云々輔行一の中廿二丁に云々者未レ盡之貌云者言也說文云像ニ雲氣在レ天廻轉之形一言之在レ口如ニ雲潤一物廣雅云云者有也已下文尙有ニ如レ雲之言一云々なども見ゆ拾言記中四十一を考合すべし漢書汲黯傳○懶鳴曉頭書說苑至公篇曰孔子爲ニ魯司寇一聽レ獄必師斷敦々然皆立然筆追加後君子進曰某子以爲ニ何若一某子以爲云々又曰某子以爲ニ何若一某子曰云々辯矣然後君子幾當レ從ニ某子云々一乎以ニ君子之知豈必待ニ某子之云々一然後知レ所レ以斷レ獄說君子之敬讓也文辭有レ可ニ與人共レ之者一君子不ニ獨有一也漢詁人大和故事四ノ十三丁ウ示兒編一ノ十一丁ウ字訓辨の條に云云諄々之意也韓愈詩云諧笑方云々文韶案漢文帝曰吾欲ニ云々一霍光曰何謂ニ云々一乃綜括之辭也文選四十一ノ六丁オ李少卿答ニ蘇武一書に而執事者云々

(五)ウザウムザウ　俗言に「ウザウ」「ムザウ」を引つれてなどいへりこは有作無作の字也糅論五の卷廿七丁に見ゆ慈恩の作にて十卷あり唯識論の說也聖財集下四十一丁オにも有念無念有相無相の事有有レ相無レ相の方しかるべし頭書止觀二ノ一ノ五十二丁

(六)齋宮後醍醐天皇の朝卜定　懽子內親王後醍醐天皇皇女母後京極院禧子大相國實兼入道三女元德二ノ十二ノ十九卜ニ定齋宮一元弘元自ニ野宮一退下號ニ宣政門院一增境村時雨の卷九の卷九丁オに后の宮の御腹に一品內親王御卜に合せたまひてこぞの冬ごろより御きよまいりありつるけふあす齋宮に居給ふ八月廿日まづ河原へ出させ給ひてやがて野の宮にいらせ給ふその事どもいみじうきよらなり云々按に后の宮は後京極院禧子也こぞの冬とは元德二年の冬也八月廿日は元弘元年也下文にかくいふは元弘元年八月廿四日なりと有にてしるべし○皇胤紹運錄中卷に第九十五後醍醐院の皇女宣政門院一品內親王懽子母後京極院云々○女院小傳に宣政門院懽子院ノ后後醍醐女母後京極院元應元年六ノ廿六爲ニ內親王一同年十ノ廿八叙ニ一品一元德二ノ十二ノ十九卜ニ定齋宮一同三ノ正ノ十二准三宮元弘元ノ月日退下自ニ野宮一退年月日密入ニ上皇宮一建武二ノ二ノ二院號曆應三ノ五ノ廿九潛出ニ上皇御所一御年廿六云々按に院ノ后とは光嚴院の后のよし也上皇も光嚴院の御事也○歷代皇記五の卷に宣政門院懽子內親王當今皇女母後京極院元弘三年月日入ニ上皇宮一建武二年二月院號元ノ前ノ齋宮准三宮云々

按に當今とは後醍醐上皇は光嚴院也
祥子内親王後醍醐天皇皇女母新待賢門院廉子元弘三齋宮後入二保安寺一爲レ尼皇胤紹運錄中後醍醐天皇皇女前齋宮祥子母同二前坊等一云々按に前坊は成良親王也母は新待賢門院藤廉子公廉女左大臣公賢公養女也○歷代皇記五ノ卷に齋宮祥子内親王當今皇女母同二東宮一元弘二年十二月廿八日卜定云々○新葉集神祇に野宮より退下の後雪を見て祥子内親王「わすれめや神のいかきの榊はにいふかけそへし雪のあけほの」又野宮に久しく侍りける比夢のつげありて大神宮へ百首歌よみて奉りける中に祥子内親王「いすゝ川たのむ心はにこらぬをなとわたる瀬のなほよとむらん」按に野宮より退下又はわたる瀬のよどむなど有にて齋宮止られたる事思ふべし○坂士佛大神宮參詣記に齋宮にまゐりぬいにしへの築地の跡とおぼえて草木の高き所々あり鳥居は倒れて朽殘りたる柱の道によこだはれるを人だにもかくともさらせずたゝふし木とのみぞ見てすぎなまし齋宮と申はたえて久しき跡也しをちがごろ再興有べしとてはなやかなる風情など有しかども芳野山の櫻常なき風にさそはれ嵯峨野の原の女郎花あだなる露にしほれしかば野宮の名のみ殘りて齋宮の御くだりにも及ばず神慮のうけおぼしめさぬ政なりけりとは此時思ひ合せ侍りしか是は近きほどの事也云々按に士佛參詣は康永元年南朝與國四年也の事也吉野山の櫻は後醍醐天皇さが野の女郎花は齋宮に比して申せし也與清曰簾中抄には倭姫命より惇子内親王仁安三年卜定まで四十代記し二中歷上卷には曦子内親王土御門女寛元二年まで記し齋宮記には斐子内親王達智門院後宇多皇女まで記したり其後後醍醐の朝懽子内親王祥子内親王御卜定野宮御潔齋等の事あれど退下し給ひて事止にき倭姫命より祥子内親王まで合て七十七代にて齋宮立の事永く絶はてにたり

(七)垂跡　維摩經後秦僧肇序に幽關難レ啓聖應不レ同非レ本無二以垂一レ跡非レ跡無二以顯一レ本本跡雖レ殊而不思議一也云々勝鬘經義疏卷一に何卽非レ本無二以垂一レ迹非レ迹無二以顯一レ本私抄云本迹之義出レ自二肇法師一彼云非レ本無二以垂一レ迹非レ迹無二以顯一レ本本迹雖レ殊不思議一云々法華經文句九ノ一に非レ本無レ垂レ迹無二以顯一レ本本迹雖レ異不思議一也云々頭書佛祖統紀一の卷明本迹の條に如來聖人之利二見於世一也則必有二降レ本垂レ迹開レ迹顯レ本之妙一存焉夫本者法身之謂也迹者八相之謂也云々○源氏明石四丁まとにあとをたれ給ふ神ならばたすけ給へ云々○更科日記

七丁ウにさきの世に此國にあとをたるべきすくせこそありけめ云々○榮花物語衣の珠四十丁オあとをたれひとみちびきにあらはれて云々○古今著聞集一の卷十六丁オ保延五年五月祈雨奉幣の宣命に大神日域留垂レ跡多末倍留遂窟雨師傳レ名多末倍留靈詞奈和云々同二の卷廿七丁オに春日大明神御託宣ありけるは我佛法を守護せんがために此國に跡をたれたり云々○發心集七の卷二丁ウ大通智勝佛のすゐしやくにておはしますべし國をたすけ佛法をまもらんためにあとをたれ給へば云々○源平盛衰記九の卷十五丁ウに神道ト垂跡シテ惡魔ヲ隨ヘ佛敎ヲ守云々同廿四四丁ウに北ニハ神明垂跡云々同廿五四丁ウに三笠山ノ本宮ニ垂跡シ給シ時ハ云々同廿七六丁ウに御垂跡興利以來鎭護國家野誓嚴重留志天云々同廿九十四丁ウに此砌ニ跡ヲ垂云々同四十十五丁ウに衣通姬此所ヲ目出クオボシケレバ垂レ跡給ヘリ云々同四十四十丁ウに本地垂跡ノ御誓誠ナラバ云々○神功皇后緣起十三丁オに石躰權現トアラハレ玉フ是垂跡ノハメジナリ云々○八幡愚童訓下卷四丁オ此砌跡垂テ異國降伏シ玉フベキトゾ賴シキ云々○長門本平家物語十八の卷八十二丁オに熱田の宮にもいたりぬ是も景行天皇の御代に此砌に跡を垂給ふ云々○平家物語一の卷廿六丁オに和光垂跡ノ御肩ニ立タル也云云○保元物語參考本一の八十九丁オに男山ニ跡ヲ垂テ京都ヲ守リ云々○參考太平記十七廿三丁オに當山開基ノ初ヨリ跡ヲ垂シコトナレバ云々○廣隆寺來由記四丁オに檀像藥師如來云々於レ是向日明神追隨衞護垂二蹟當寺一奇瑞儘顯云々又十四丁オ木枯明神者清和天皇御宇奉レ勅自二乙訓郡一迎二藥師如來一時向日明神垂二跡當寺槻木一槻木俄枯故名二木枯明神一厥後枯木再榮誠希有祥瑞也云々○天地靈氣記二の卷二丁ウに兩宮形文者大梵天其形日神月本妙藏摩尼珠也從レ本垂レ跡故一切衆生父母神无レ來无レ去形體也云々同六二丁オ已上人皇十二人者十二天垂跡也云々同十一丁ウに垂跡影向神下化神化生神實迷神實悟神實相神云々同十四一丁オに傳聞神明垂跡昔閻浮下化時受二神聖魔王一以還云々又二丁オ是本地垂跡无二平等心云々又四丁ウ是神明神通知光垂跡本道也云々○諸神記下卷二丁オ本地垂跡之事佛敎者佛爲二本地一神爲二垂跡一神道者本地卽垂跡垂跡卽本地也天照太神爲二本地一伊勢大神宮爲二垂跡一伊弉冊尊爲二本地一熊野權現爲二垂跡一雖レ然佛證曰時卽神道也云々○二十二社注式十丁オ石清水の條に將レ拜二見權現大神之垂跡本身一

云々同十三丁ウ宇佐八幡の條に跡垂二於神道一云々又八幡大神者三所之垂跡云々同廿八丁オ春日の條に三笠山御垂跡云々○元々集六一丁オに垂二迹於天下一留二神於眞經津鏡中一云々○山家要略記一の卷一丁オに日本七社降臨垂跡時代事云々大宮權現神武天皇御宇垂迹事云々按に此外垂跡の字此記中いとおほし山家要略記は傳敎派の神道の事を記したるものにて正和四年書寫せるよし跋あり傳敎を去事遠からぬ書也○神祇秘抄中卷の神佛本迹事二に問以レ神爲二本地一以二佛陀一爲二垂迹一云々其義如何答雖二宗々料簡不一レ同惣而不レ知二神之爲一レ神故暫以二法華意一可レ分二別之一彼經所レ說先以二迹門一爲二方便一以二本門一爲二已證一經云若有二聞レ法者一无一不二成佛一云々直指二己心一示二本地之妙理一故深惠人一○耳卽悟文云二之本門一略下○下學集天地門破馭盧嶋の注に男神妻神此地欲レ垂レ跡之時云々○後拾遺廿の卷神祇に藤原時房「おもふ事なる川上にあとたれてきふねは人をわたすなりけり」此外撰集に收たる歌は續後撰神祇三首續古今神祇一首續千載神祇一首續拾遺神祇二首新後撰神祇五首玉葉神祇一首新千載神祇二首新拾遺神祇二首新後拾遺神祇一首新續古今神祇四首新葉神祇一首などに見ゆ俊賴散木集六の卷にたる

みの明神のやしろを見てよめる「たかのほる人のたもとやこゝにしも跡をたるみのあけの玉垣」定賴集に「わかほとけあとたれ給へちはやふる神のかきりはいふせかりけり」吳竹集安部にあとたれては佛菩薩の神とあらはれ給ふ事也「跡たれていへよりこゝにありま山杉をしるしのみわの神垣」有馬の明神三輪明神同躰也云々○金槐集五十三拾玉集四の廿五丁オ小侍從集二丁隆信集七十一丁オ亞槐集下五十李百三丁ウ花集上廿五丁ウ寶治百首二百五十嘉元百首二百十六丁ウ龜山殿七百首百七十一丁ウ正治後度百首五丁ウ宗親千首上廿四丁オ下四十五丁オ夫木抄雜二百四丁オ雜五六丁オ雜十二九丁オ雜十六四丁ウ六丁ウ八丁オ十七丁オ廿二丁オ廿五丁オ雜十八五十九丁ウ六十二丁ウ東關紀行七丁オ廿三丁オ四十三丁オ海道記高倉院嚴島御行記廿丁ウ三塔順禮記二丁ウ坂士佛太神宮參詣記廿六丁オ神道集一の卷二丁ウなどその所見擧盡すべからず與清曰垂統の字面は僧肇か維摩經の序を出處とし物語は源氏明石の卷榮花物語衣の珠の卷歌は後拾遺神祇時房または定賴集俊賴の散木集六の卷などを引ていふべし

（八）山だち　宗久が都の雲十丁オに山たちなどいひて人をあやまつたぐひおほければ云々尊海僧正吾妻道

記三丁オにでんがくかくばといへる野をゆけば山だち出るよし申ていぶせくおどされて「あふれたる山立ともか出あひてくしさしやせんてんかくかくほ」古今著聞集卷十二十二丁ウに奈良坂にて山だちまちまうけて布施物みなうばひとりてけり云々山だちの主領とおぼしきもの事おきてゝ候有けるを法印まねきければ云々山だち共忽に惡心を改て云々又廿三丁ウ西國の方にて海賊をし東國にては山だちをし京都にては强盜をし邊土にては引剝をして過る云々徒然草八十六段にさて山立ありとのゝしりければ里人おこりて出あへばわれこそ山だちよといひてはしりかゝりつゝきりまはりけるを云々吉野拾遺二の十三丁ウ犬追丸山立に逢條に隆俊卿のもとにめしつかひ給ひし犬追丸といひし童山だちに行あひて矢にあたりなんとしけれどもやうやうにげのびてといきもつぎあへずかたりけるを殿きかせたまひて「梓弓引てしたつる山たちは犬追ものといふにやおらなん」とをかしがらせ給ひけるとぞ」云々參考保元物語二の卷十六丁オ半井本に山立海賊ノ訴訟ハ無實カ實犯カ云々參考平治物語三の卷八十三丁オに山ダチ强盜ヲイマシメ給フ事云々平家物語十一の

卷十丁オに伊勢國鈴鹿山ニテ山ダチシ妻子ヲモ育ミ（ハグク）云云源平盛衰記四十二の卷十一丁ウに伊勢國鈴鹿關ニテ朝夕山立シテ年貢正稅追落シ云々曾我物語一の卷四十七丁ウ河津うたれし條に山だちありや先陣はかへせ後陣はすゝめとよばゝりければ云々參考太平記九の卷六十三丁ウに鈴鹿河ノ邊ノ山立强盜溢者共云々又六十四丁オ金勝院本に山立强盜溢者二三千人馳集テ云々藻鹽草十五の卷盜人の條に山だち但是は太刀によせたる也云々與清按に山立の名目保元物語平治物語などをはじめとして後々の所見は擧るに遑なし歌によめるは尊海僧正隆俊卿なり頭書今昔ハ臆斷ナレバ本書ヲ考ベシ類字ノ抄出ベトモ未カヘサヾレバ搜索ノ便チ失ヘリアハレ心ナキ翁哉鍋田舍人ガ許ニツカハシタルニ半年餘ニ及

（九）鳥居　倭名抄門戶部に考聲切韻云楣毛報反今之門雞栖也辨色立成云雞栖鳥居也楊氏說同云々按に楣は楣の俗字也說文に楣門樞之橫梁也云々史蕭詩に夜風喧ニ馬櫪一秋露冷ニ雞栖一云々此は門の樞の橫梁は雞塒（コツグラ）に用ふるより名目になれる也雞棲の字詩經爾雅後漢書陳蕃傳等に見えたれどこゝにはよしなし雞栖纜博物志三丁オ准南子ヲ引白氏文集七ノ十四丁オ閑居の詩雞棲○馬內侍集廿二丁ウにくらまにまろりたるに鳥居のもとにさくらいとさかりなるを云々○

詞花集雜下に稻荷の鳥居に書つけて侍けるよみ人しらず云々○相摸家集十三丁ウに奈良の鳥居のまへなる木どもにかけたるものおほかり「なにならんならのやしろの榊にはゆふとは見えぬものそかゝれる」俊頼散木集六の巻に田上に侍けるころかみのさとゝいひける所に湯わかして人のむかへければまかりけるに鳥居の有けるまへに道しるべのものゝおろしければいかなる神のおはしますぞと尋ければもちひの宮と申神のおはしますと云を聞て云々○造殿儀式寶龜二年二月官符に應レ早定レ置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥居幷四至内地町數一事云々大社内外鳥居二基内一本高九尺口徑八寸外一本高一丈口徑九寸云々中社内外鳥居二基高八尺徑七寸云々少社鳥居一基高六尺徑六寸云々また造宮制度の條に麗氣曰内鳥居金剛時春天金剛時夏天外鳥居金剛時秋天金剛時冬天内者授レ秘密灑水一神表レ沐浴懺悔一也外者解捨祓神除レ穢惡不淨一也云々○類聚神祇本源七の卷二丁に天照太神鎭座麗氣曰内鳥居金剛時春天金剛時夏天外鳥居金剛時秋天金剛時冬天内者授レ秘密灑水一神表レ沐浴懺悔一也外者解捨祓神除レ穢惡不淨一也云々又五丁御門鳥居八洲中四方中以レ西方一爲レ智門一也故以レ西方一號レ鳥柱一也大智清淨心緣也謂陰陽之原乃遂レ於大明之上一出レ入於窈窱之門一而名臣上下令レ道遙一清淨之宮殿焉云々同十一の卷十九丁ウに大政官符神祇官幷五畿七道諸國司應レ早定レ置天下諸社大中少神殿雜舍瑞垣鳥居幷四至内地町數一事大社内外鳥居二基内一本高九尺口徑一丈口徑九寸云々中社内外鳥居二基高八尺徑七寸云々少社鳥居一基高六尺徑六寸云々○天地麗氣記三の卷五丁ウに四門守護金剛色天東門金剛聲天南門金剛香天西門金剛咮天東門二生天守レ内鳥居金剛時春天金剛時夏天外鳥居金剛時秋天金剛時冬天内者授レ秘密灑水一神表レ沐浴懺悔一也外者解捨祓神除レ穢惡不淨一也云々按に造殿儀式は後の僞書也寶龜官符はたうけがたし天地麗氣記は弘法の撰也といへど蓋其宗派の者後に依託せし作なるべし假名法もたがひ中に載たる神詠も三代集以前の風調にあらず豐受大神宮を天中主といへる說いと疑はし神皇實錄山家要略など似たる書にて蓋一條院以後の作なるべしされど弘法の神道は古くよりの事にて傳教と共に彼は天台此は眞言の宗學を附會し作り設たるにて書は後に書たるものゝみ傳はりたれど二師の神道興行は當時の事也二師の以前に行基ありて神道の端を開けり其は葛城寶山記とて類聚神祇本源元々氣などに引用たる書あり行基の自撰とい

へるはうけがたし末流の者の依託なるべし行基の神道は葛城寶山記弘法の神道は天地麗氣記傳敎の神道は山家要略を本書とすいづれも末流のものゝ依託の書也此三師佛道を弘通せんために神道を立て守屋などやうの情剛き者をなつけんとかまへし也兩部習合といふは神佛の二にもあらず神道に儒佛の二を習合せしよしにもあらず金剛界胎藏界の兩部を習合せしにて陰陽二神の道なるよし天地麗氣記などを見て知べし外宮を貴くして天御中主尊と號し大元神などいひ出しも此僧徒のしわざにや然るは内宮は古來の傳說ありてたえて僧徒の說を用ざれば外宮の肩をもち朝廷へも能とりなし奏して内外宮同じさまの貴き宮にはせしにやあらん外宮の徒の神道いづれも三法師の風によれるにても思ふべし神道五部書神皇實錄類聚神祇本源などをよみ考れば此事明也北畠准后の元元集はたこの說によられし也されば内外宮と並稱するは神名秘書西宮記などより後の事にて八百年前後を出ず古事記に外宮の名あれど内宮の中の外宮にて渡會の外宮の事にはあらずされば鳥居も儒佛の中より華表の說など見出て此土の神社のかどにさるもの

もなくさびしげに物足らぬ心ちせれば作り出たなるべし然るを無名雜が門の五百津楓に居り鷄が天石窟戸にて鳴たりけんとなどとりあはせ漢土の鷄栖の字さへ引付て鳥居といへる名はおほ〳〵たりけん延喜式和名抄より以前の正き書には鳥居の名たえて所見なしされども東寺天王寺東大寺などとの鳥居はやゝ古くより有けんとおぼゆれば行基弘法傳敎以來神社にも佛寺にも立たるとと見ゆ熊野大峰の鳥居は役行者のしわざといへどそは後に依託したらんもはかりがたしこれを本朝神代よりの物とせんとて倭學者神道者などがしひごといふはいと〳〵かたはらいたし古畫古像の辨才天女の頂上に鳥居あるも彼土より傳はれる圖ならんには一證とすべしされど圖像抄の像には鳥居を圖さずすべて行基傳敎弘法三師の作爲の神道を甄別する見識なくして本朝神代の風の殘れるものと思ひまどひしひて附會して神代めかし古物めかしなどする輩おほかるは笑にたえぬとぞかし（岩倉の成尋が參天台五臺山記三卷熙寧五ノ九ノ三の條に午後過二松江水一三江中一也立二鳥居一書二江銘一とあり頭書儀式ノ一ノ七丁ウ圖大層に延層官符ゆり若草子廿七丁ウに豐後の國府に御座ある御舍所の御なげきほ中々申ばかりもなし云々九本の鳥居を高く立極樂淨土をまなぶべし云々鹽尻十ノ中卷同一ノ卷華表事物紀原十ノ廿七丁ォ俗說辨四ノ廿三丁ォ同後編一ノ五丁ウ史記孝文本紀九丁ォ華表升菴外

集十ノ九丁ウ谷響集三ノ三丁オウ五燈會元十五卷福仙ノ充禪師章十字街頭華表柱云々景德傳灯錄抄錄三ノ廿六丁オ城門華表柱云々白氏文集十五丁ウ廿一丁ウ望江州詩に江廻望見雙華表知是潯陽四郭門云云元亨釋書十三ノ十九ウ江次第五ノ十七丁ウ扶桑略記廿四ノ十七丁オ神道集五ノ十七丁ウ十八丁ウ

○大三輪神三社鎭座次第一丁ウに當社古來無二寶倉一唯有二三箇鳥居一而已云々按に此書嘉祿丙戌の年の撰也○日吉社神道秘密記十一丁ウ十三丁ウ十四丁オ十五丁ウ十六丁オに鳥居を神門大鳥居を大神門と書たり又大神門中神門內神門の圖あり三の神門の條下に胎藏界大神門金剛界中神門內神門號二惣合神門一兩部合レ之故號二惣合神門一文有レ之最澄御作也と見ゆ尙委く閱して可レ知按に天正十年の撰也叡岳要記にも見ゆ笠木の說十四丁ウも見ゆ○圓光大師畫詞傳翼贊十六三丁ウに天王寺云々鳥居の額にも釋迦如來轉法輪所當極樂土東門中心とぞ書れて侍る云々翼贊に世俗相傳テ此額ハ小野朝臣道風ノ手跡ト云ハ誤也是太子ミヅカラ御筆ヲ染サセ給テ此寺ニ三體ノ筆道ヲ遺シ給ヘル其隨一也所謂三躰トハ一ハ疏神文書也一ハ碑龜井碑文一ハ額今ノ鳥居額也是也此中疏ト碑トハ何カ亡イケン今傳ハラズ龜井ノ水中ニ龜アルハ彼碑ヲ載タル臺盤ナリトゾ具ニハ續書類聚序傳敎大師爲二唐僧一記焉ニ見エタリサレバ善光寺緣起ナドニモ太子ノ御筆記トイヘリ年中法事記ニ紀貫之ノ鳥居ニ書付タル歌トテ「水クキノ跡ハハカナク殘ルトモワスレス忍フ人ヤナカラン」又定家卿ノ歌ニ「水クキノアトハハカナク成ニケリワスレス忍フ人ハアレトモ」按に元亨釋書十三の卷忍性傳に永仁二年奉レ勅管二天王之主務一捨二俸餘一營二悲敬二院一此寺大門之外有二衢門一俗曰二鳥居一鉅木宏材年久朽損性出二新意一以レ石新レ之高二丈五尺堅確瑩滑云々太平記六の卷楠出二張天王寺一に天王寺ノ東ヨリ敵ヲ弓手ニ請テカケ出一手ハ西門ノ石ノ鳥居ヨリ魚鱗懸ニカケ出云々又人見本間拔懸の條ニ先ツ天王寺住吉ニ陣ヲ張云々武藏國住人ニ人見四郎入道恩阿云々矢立取出シテ石ノ鳥居ニ何事トハ知ズ一筆書附テ云々大將則天王寺ヲ打立テ馳向ヒケルガ上宮太子ノ御前ニテ馬ヨリ下石ノ鳥居ヲ見玉ヘバ左ノ柱ニ花サカヌ老木ノ櫻云々ト一首ノ歌ヲ書テ其次ニ武藏國住人人見四郎入道恩阿生年七十三正慶二年二月二日赤坂城ヘ向テ武恩ヲ報ゼン爲ニ討死トゾ書タリケル又右ノ柱ヲ見レバマテシバシ子ヲ思フマトニ云々ト書テ相摸國住人本間九郎資貞嫡子源內兵衞資忠生年十八歲正慶二年仲春二日父ガ死骸ヲ枕ニシテ同戰場ニ命ヲ止

メ畢トゾ書タリケル云々など見えてもとより木鳥居ありしを忍性が石鳥居にはしたる也額字ハ聖德太子とも道風とも弘法ともいふよし攝陽群談十二の卷廿一丁ウに見えたれどたしかなることは知べからず慈鎭和尙の歌に「此國の難波の浦の大寺の額のめいこそまと也けれ」又「極樂と此つのくにとあはれ也あまねき門をあはせつゝ」共夫木雜十六とも詠れたれば當極樂土東門中心の額はやくの事なるべし貫之定家卿の歌は家集撰集には見えず後の妄作なるべし續書類聚序善光寺緣起などは信用しがたきもの也○下學集上卷神祇門に鳥居唐云二花表一云々按に和爾雅二卷廿四丁右居處門に鳥居神門也下學集以二華表一爲二鳥居一然歷考二中華之書一華表非二神門一且其制亦異云々白氏文集十九の卷に第三松樹非二華表一那得二邊東鶴下來一云々俗說辨四の卷廿三丁オに鳥居と華表とは別也鳥居は上古の門也華表は日本にはなし一說に事文類聚搜神記等に邊東城門外有二華表柱一忽有二一白鶴一集頭時有二一少年一彎レ弓欲レ射レ之鶴乃飛二去空中一而言曰有レ鳥々々丁令威とある說を引て鳥居の證とすれども中華古今注云堯設二誹謗之木一今之華表也以二橫木一交二柱頭一狀如レ華形如二桔槔一大路交衢悉施焉事物紀原云華表後人立二於塚墓之前一以記二其識一也應劭曰今宮外梁頭四柱木是也且列仙傳に華表の圖あり鳥居とは甚異也考見るべし云々眞俗佛事編四十七丁ウには列仙傳ノ圖ニハ華表タヾ一柱也又他ノ圖ニ二柱ノ華表アリテ吾國ノ鳥居ニ似タリともいへり○神道集一の卷鳥居事の條に抑鳥居者此條經文不レ說レ之僧錄此不レ記不レ知二因緣一只爲レ躰以二事心一案レ名云二鳥居一事西方官二妙觀察智一□菩提門一義居謂生義四種三昧常坐三昧當亦形門戶似門謂能通義故知鳥居中一度出入菩提決定妙觀察智門又鳥居二柱三本有レ之成二二柱一定惠不二悲智因果兩界功德亦胎金兩部所反二王二天義魔界退災難拂息災延命佛道進門戶三木者笠木貫木島木有二三本一是卽戒定惠三木云三身相卽三諦卽是法門三德秘藏法門一切佛法云此三數不レ離又二柱三木作其二種合五木此則五智五佛五分法身五ハラ蜜顯蜜二數世間出世万法皆以二五法一成レ之亦思合事聖德太子天王寺立事人王三十四代推古天王治天卅六年內第六年定居三年癸酉年極樂東門中心當レ額鳥居被レ打卽往生東門易往行道可レ能二通他力一門戶鳥居被レ立然太子救世觀音定所二思食一又役行者熊野發心

門鳥居被レ立又聞大峰云二等覺門妙覺門一有レ事若爾者發心門十住初妙覺門第四十二位斷惑修 理極 可レ門然役行者孔雀明王儀豈深義非卽知鳥居者煩惱斷者一解脫智惠門入惣斷惑修理門一々生死出門戸亦菩提入門戸凡佛法八万四千卽八万四千塵勞出門戸 故知出二離生死一觀二證菩提一暗冥出門戸亦三明入門戸此等求鳥居被レ立可レ得レ意又諸佛菩薩和光垂迹本意一切衆生引導出二離生死一證二大菩提一爲故也然間一切神明神道神壇尤立二鳥居一宜哉諸國七道山野塚林里々村々在一神一社在レ之所々見聞餘替有鳥居事於替無レ事此柱非二何誠忝御事一二柱定惠義兩部皆合智惠門三木亦三諦卽是法門五木和合鳥居五智五行成就最上甚深法門善哉出離鳥居云々按に聖德太子の天王寺の鳥居役行者の熊野大峰の鳥居みな佛家の說に据て立たるもの也二天門といふはた二王門也○同書五の卷佛前二王神明鳥居師子駒犬之事の條に抑佛陀御前二王諸神御前鳥居立タリ又社壇師子駒犬ヲ居ヱ圍垣頭ヲソトバニ造リ梵字ヘ書此等如 由來 何所レ表有二此事一耶云々答出家威儀佛親近故權現ト名在家威儀佛疎遠故神明ト名權現者出家義佛家近名明神者在家義故佛遠名但名

字无云共皆菩薩化身次佛陀權現ノ御前ニ二王ヲ立ル事或釋云金剛力士定惠二法故諸佛門立云々次鳥居者西域記十二云天竺都貨羅國人多三寶信小諸神ニ仕ル伽藍十餘所謂衆一百餘人有管鐵門有其南諸小國多鳥居立此如レ文天竺習大國寺前門立小國寺前鳥居立佛皆菩薩化身本地皆德度大國順垂迹功德小小國隨故鳥居立云々按に出家に同きを權現在家に同きを明神といひ權現には二天門を立明神には鳥居を立るよしなり然て西域記を引たるは文誤れり西域記十二 三丁 悉多國覩貨邏國故地といへる條に活國覩貨邏國故地也云々多信二三寶一少事二諸神一伽藍十餘所僧徒數百人大小二乘兼レ功綜レ習其王突厥也管鐵門已南諸小國邏二徒邊一鳥居不レ常二其邑一と見えて鳥居は其民居を定めざるを鳥の飛邏にたとへし也○鹿島問答上卷 四丁 に無名雉飛降り天雅彦宮前ノ湯津杜ニ居テ鳴クコト頻也神門ヲ鳥居ト名タル是緣也云々○多武峰略記上卷に於二西鳥居戸一令レ栲二問之一云々また各出二向鳥居戸一云々按に鳥居處の義也武藏橘樹郡杉山神社の舊蹟に居戸村あり○廣隆寺來由記 十二 に鎭守三十八所云々華表等有レ之云々又 廿五丁 木島明神云々華表瑞雞等有レ之云々按に緣起には鳥居と書たり華表の字鳥居

に當ざるよし俗說辨に事文類聚搜神記中華古今注事物紀原列仙傳等を引てのいへり祖庭事苑八の卷 十一丁ウ にも古今注の說搜神記の說を擧たり○東大寺要錄四の卷戒壇院金堂講堂軒廊廻廊僧房北築地鳥居脇戸等勝寶六年十月十六日別當良辨兼二法務一戒壇院供養咒願賞云々按に東大寺戒檀院の鳥居は鑑眞の時に建たるなれど其以前行基に事はじまりてそを良辨が學びて作れるにやあらん○寶基本紀奥書に鳥居者上古作レ境之門也於レ今郊外土民之屋前者有二此遺風一神輿四方立二鳥居一亦此意也神代卷曰天照大神入二于天磐屋一閉二磐戸一而幽居焉思兼神深謀遠慮遂聚二常世之長鳴鳥一使二互長鳴一云々是以レ鷄使レ居二門上一而長鳴ヨト爾來號二鳥居一也伊勢大神宮儀式帳曰大宮御門十一間 於葬御門 三間各長一丈五尺弘大高九尺於不葬御門八間各長一丈三尺高九尺 此謂二於不葬御門一卽鳥居也云々按に寶基本紀の奥書は寶永戊子孟夏日跡部良顯が作也於不葬御門といふは常の屋上なき門の事にて鳥居に近きものながら其制別にて扉もあれば一概にいひがたし 頭書 扶桑略記 世ノ卅五丁ウ ○源氏寶木 湖月本四丁オ 野宮の條に黑木の鳥居どもはさすがにかう〳〵しく見わたされて云々按に黑木の鳥居どもと書たるにて一方ならず四方ことゞく〳〵く黑木の鳥居ありけんとおもふべし○大神宮儀式帳 六丁ウ に大宮一院寶殿二宇云々御門十一間於葬御門三間各長一丈五尺弘一丈高九尺於不葬御門八間各長一丈三尺高九尺云々按にこは鳥居とは別にて平常の葬葬の門と屋上なき門との事也於とは屋上をいふ長曆官符に南草葬ノ御門とも見えたり門は紀記にも所見おほく金門など歌にもよみて扉ありけんものとおぼゆ杉立る門などよめるはたゞ杉の左右にあるよしにや「カナド」などいへるはとゞくしげに構へたるさま也葬法密に墓所鳥居向レ南也至二墓所一之時迎火有レ之前駈炬火消レ之前駈十一人若九人乃至三人也若レ松外指出平生人各內炬レ之迎火者同引返指二鳥居之許一消レ之前火入二一鳥居之內一立二葬所艮角一次出二鳥居前一放レ牛云々按に葬法密は弘法興行などの書傳にや余が所藏貞永元年の寫本あり眞言宗葬法の式を書たるもの也○日蓮書錄外十九の卷 廿五丁オ に泰山王ノ御前ニ六ノ鳥居アリ卽地獄餓鬼畜生修羅人間天上ノ六道ニ趣ク門也云々○葬送式造二貴所屋一事の條に略儀ニハ自餘ノ屋荒垣鳥居等所レ作自レ本有レ墩者不レ可レ作二荒垣一仍上西門院御茶吠所爲二法金剛院三昧堂一墩內故只造二葬場殿

許ニ是左大將堀河大納言民部卿親範計也无レ塚所ニハ白地ニ木枝ヲ殖廻テ爲荒垣代ニ是略儀也立二鳥居一无二定方一可レ隨二便宜一或又始注連繩ヲ引廻不レ可レ有レ難荒垣是爲レ不レ令レ見二外人一也荒垣門在方可レ隨ニ便宜一也云々按に葬送式は建保五年二月の寫本也頭書百合若草子廿八丁ウ ○夫木抄雜二十一丁源仲正歌「とりゐたつ相坂山の境なるたむけの神よわれないさめそ」風雅集冬従二位家隆「霜しろき神の鳥居の朝からすなく音もさむし冬の山本」新撰六帖二社光俊「道辻の鳥居にしるし杉かくれ此山中に社ありとは」按に家隆卿の歌は夫木抄雜九十八丁にも出たり鳥居をよみ入たるは慈鎭和尙の極樂と此つのくにとあはれ也云々夫木雜十六 右の三首と也○本朝事始上卷に鳥居雄略廿三年始立ニ鳥居一與ニ漢制華表一不レ同矣云々○按に本朝事始二卷近世の僞作妄誕見るに不レ堪書也平田篤胤此書を證に引て下總玉崎明神の海邊に毎年正月打よする海鐵炮といふ石の中は空にて横に穴あり吹ば音ある物を天石笛と號し秘藏して俗人の目を驚かしむるはかたはらいたきわざ也頭書和漢三才圖會八十一ノ廿六丁ウ家宅之用部考べし○與清曰鳥居は鷄栖とも衛門とも華表とも書たれどいづれも正當の字面にあらず鹿島問答日吉神道秘密記に神門と書るは道理ながらくだりての世のしわざなれば然書んとはた心よからずたゝ鳥居と書て有べき也そも〳〵古代の於葺門於不葺門金門杉の門は或は事たらぬ心ちし或はいかめしき心ちして寺や社に似つかはしからねば行基傳敎弘法など天竺漢土の說を取捨酌酌し自己の見をもくはへて東大寺天王寺比叡山の鳥居を建はじめけん熊野大峯などのは役行者粗建といへばそを古しといふべけれど後に其名に依託したらんもはかりがたし天地麗氣記葛城寶山記山家要略日吉神道秘密記東大寺要錄を讀味れば自行基弘法傳敎など佛徒の作爲なると明白也さて此鳥居のさまはしたなからずいかめしからす神々(カウ〴〵)しくつき〴〵しく見ゆれば野宮などにも用られ遂に神門の定式とはなれりと見ゆ鳥居の名園太暦に載たる延暦官符延喜內匠寮式和名抄源氏榊の卷馬內侍集詞花集相模集などを正しき物の所見として歌によみ入たるは仲正慈鎭家隆光俊の類その外にもありやすらん尋べし大鳥居中鳥居小鳥居一鳥居二鳥居三鳥居內鳥居外鳥居黑木鳥居白木鳥居朱塗鳥居石鳥居笠鳥居金鳥居銅鳥居の名目古書所見おほし太神宮諸雜

事記下十五丁ウ藻鹽草十四廿四丁ウ平家物語四廿二丁ウ廿三丁ウ長門本平家十九二丁オ四丁オ源平盛衰記廿四廿三丁ウ同廿六十九丁ウ同卅五三丁オ同卅七十丁ウ同四十十七丁ウ同四十五十五丁オ八幡社參記四丁ウ後鳥羽院熊野御幸記二丁オ婚記上廿六丁オ鎌倉年中行事上廿八丁オ古老口實傳九丁ウ十丁ウ永正記下三丁ウ江次第抄三四十一丁オ古今著聞集十二八丁ウなど思ひ出たるまゝに所見をおどろかせり頭書谷響集三ノ三丁オ空華談集二ノ廿丁ウ同廿一丁ウ笠鳥居金鳥居太平記廿六丁ウ銅鳥居華表ノ由來快元僧都記上天文四ノ四ノ廿八ノ條壓尻十六野宮諸詞

（十）松の靈神　武藏國橘樹郡宿河原村は稻毛領の內にて江戶よりは澁谷道玄坂三軒屋世田ヶ谷横根大藏宇奈根などいふ里を經て多摩川を經て多摩川を渡り西岸なる小村也北は登戶榎木戶に隣り南は長尾村也日本橋より行程四里半許ありその宿河原の西の岡は武藏野の向が岡にて北は高畑百草の邊より南は川崎の驛近き邊まで多摩川の西に連り立る岡山の中也その岡に古き松三本ありその一を綱下松といふ稻毛三郎重成が館の跡の升形山より近き所にて鎌倉の右大將家稻毛がもとにおはすとて多摩川を河のぼり此處に船を繫ぎ給ひしより然名いふよし傳へいへど例の土俗の妄說信用がたし此松の空に大なる白蛇すむとも年久しく小白蛇はあたりに絃らもこよへりといへり又天公の領給ふ松にて圓座松ともよべりとなん此松年へたるけにややう〳〵枯色つきて天保二年の十月ばかり空靜にはれ吹風もならさぬ日に枯枝折れて地に落たるを山ぬしの男家にもて來て薪にせしに俄に病をうけて熱患とおほかたならずしぞくいたくおどろきこは靈松の祟にこそといひあひつゝ燒さしたる小枝だに殘さずゆまはりつゝしみてもとの松が根にかへし置たるにやがて病おこたりぬさてひと夜の夢に松靈の告給ふやう汝が家たづきなくなりて先祖より傳はれる田園も悉く賣はてわづかに吾立る邊とばかりの山のみ殘れるはかなしむべきわざ也吾汝が山を住所にせしと年久しければその貧苦のさまを見るに忍びず今より信心歸敬せばむかしのごく富家ならしめんとのたまへりあるじの男夢おどろきていたくかしこまりよろこび一心頂禮せしに此事世にいひさたして松靈に參詣し所願を祈者必靈驗あらずといふことなしとぞ余かゝる諺詞の神はうけぬ性質にてきゝあざけりつるに山妻昨年の二月末より痰喘の病にふしさま〴〵の醫療手をつくしこちたきまで神佛をい

りもみ奉れど露ばかりもかひなくほと〳〵死ぬべかりけると三度に及べり今年五月五日六日の比より又飲食も喉にとほらずたいよわりによわりもてゆくさませんかたなきに醫師も草根樹皮の力に救べくもあらすと辭しぞくはこぞりて泣のゝしるより外のはかりごとなしさるをりしも宇奈根の里人荒井某とぶらひ來て松靈必靈驗あり日を限りて願を立給へいかで〳〵といひすゝむるに兄弟姉妹などこれに力を得て一七日がほどに本復の驗示し給へと願立つるにげにその日より心ち立なほりて七日に滿ずる日はおこたりはてぬばかりのありさまなりしかばしぞくゆすりてよろこびの涙とゃめがたくやがて賽報の使をまねらせたりき余つら〳〵思ふにかゝる靈驗の神世にためし少く實に身の毛もいよだつ心ちせり神躰は天公にもあれ白蛇にもあれ參詣し拜禮する正躰は松樹なれば松精神と稱べしそは日吉神道秘密記に唐崎の松精神あれば也又結緣の日は十八日と定むべし松は十八公を以て稱すれば也余松を愛して松屋と號し今松精神の靈驗を蒙ると豈奇遇といはざるべけんや

（十一）法樂　維摩經卷四　十八丁カ　菩薩品に維摩詰語ニ諸女一言云々汝等已發ニ道意一有ニ法樂一可ニ以自娛一不レ應ニ復樂ニ五欲樂一也天女即問何謂ニ法樂一答曰樂ニ常信ヲ佛樂レ欲レ聽レ法樂レ供ニ養衆一樂レ離ニ五欲一樂ヲ觀ニ五陰一如ヤ怨賊ト樂レ觀ニ四大如ニ毒蛇一樂レ觀ニ內入如ニ空聚一樂ニ隨護ニ道意一樂レ饒ニ益衆生一樂レ敬ニ養師一樂ニ廣行ヲ施樂ニ堅持ヲ戒樂ニ忍辱柔和一樂ニ勤集ニ善根一樂ニ禪定不ヲ亂樂ニ離垢明慧一樂レ廣ニ菩提心一樂レ降ニ伏衆魔一樂レ斷ニ諸煩惱一樂レ淨ニ佛國土一樂ヲ成ニ就相好一故修ヤ諸功德ト樂レ嚴ニ道場一樂ヲ聞ニ深法一不ヤ畏樂ヲ三脫門不ト樂ニ非時一樂レ近ニ同學一樂ヲ於ニ非同學中一心無ヤ恚關ト樂レ將レ護ニ惡知識一樂レ親ニ近善知識一樂ニ心喜ニ清淨一樂レ修ニ無量道品之法一是爲ニ菩薩法樂一云々天地魔氣記十の卷ニ丁に如レ是神守ニ三寶一依ニ法樂一顯ニ利生一則稱ニ讃歡喜之眉一離ニ三熱之苦一歸ニ自性本宮一給者也云云尺素往來正月狀に法樂式目可レ爲ニ如何樣一候哉天神講七座幷詩歌續歌一千首和漢聯句十百韻以ニ裏陰墨流等之短尺懷紙一七晝夜中可レ被ニ果遂一之條可レ然云々按に法樂とは詩歌連歌など興行して心を澄し神德を信仰する義也奉納法樂とたゝの法樂との別あり奉納せずして其神の祭儀のみに興行するをば法樂と

いひて奉納の字をば冠らせず

（十二）子良母良館母おこらご物忌父　大神宮儀式帳廿四丁ヲ職掌雜任の條に物忌十三人物忌父十三人云々按に大神宮の物忌九人管四宮の物忌四人にて十三人也物忌は童女なれば其父と同居して勤仕せり故に物忌父はた十三人ある也九人は大物忌宮守物忌地祭物忌酒作物忌清酒作物忌瀧祭物忌御鹽燒物忌土師器作物忌山向物忌これも儀式帳に見ゆ又廿四丁ヲ天照坐太神宮物忌十一烟所管四宮物忌四烟云々按に十一烟は九烟の誤也烟といふは其家を指ていへる詞にて物忌及物忌父をすべたる稱也所管四宮とは荒祭宮月讀宮瀧原宮伊雜宮也又廿四丁ヲ禰宜の條に諸ノ內人物忌等乎率ヲ明衣冠着ヲ木綿多須岐懸ヲ渡會郡司乃佃奉禮ル御田稻乎物忌乃子等仁令レ春炊奉ヲ云々按に物忌乃子等といへり又廿五丁ウ大物忌の條に今禰宜神主公成等先祖天見通命乃孫川姬命倭姬乃御代仁大物忌爲ヲ以ニ川姬命一大神乎令ニ傳奉一ヲ從ニ其時一始ヲ大神專手附奉ヲ傳奉今從ニ齋內親王一大物忌者於ニ大神一近傳奉盡夜不レ避迄ニ今ノ世一尤重仍大物忌元發由如レ件云云按に此外の物忌の職掌儀式帳にくはし○止由氣宮儀式帳十七丁ヲ職掌の條に物忌六人物忌父六人云々按に大物忌御炊物忌御鹽燒物忌菅裁物忌根倉物忌高宮物忌合て六人也これをすべて子良といへり兩宮儀式帳の說延喜大神宮式四十一丁四十二丁を考合すべし○江家次第十二の卷公卿勅使進發幷路次儀條廿六丁ウに一禰宜持レ鎰先御殿子等物忌以レ鎰指ニ入鑰一次一禰宜開レ之云々又廿七丁內物忌九人大物忌父三人御炊物忌父三人御鹽燒物忌父三人館母二人物忌子三人大物忌一人御炊物忌子一人御鹽燒物忌子一人齋宮物忌子一人云々又廿九丁內物忌父十一人館母一人云々又廿九丁荒祭宮物忌父一人子等三人大物忌子御炊物忌子御鹽燒物忌子荒祭宮物忌子云々按に物忌子とも子等ともいへり館母は子良館に同く勤仕するよしの名也後に母良といへるものこれ也○朝野群載六の卷伊勢大神宮勅使祿法に大神宮館母一人子等十人物忌父十二人已上各單物云々豐受大神宮物忌父九人大物忌三人御忌物忌三人御鹽燒物忌三人御炊物忌子一人御忌物忌子一人高宮物忌子一人云々館母二人云々按に物忌子四人大物忌子一人御炊物忌子一人御忌物忌子一人云々物忌子とも子等ともいへり大神宮儀式帳解十七の卷に物忌子は父逝去するか又始て月水を見る時退下る也輕服の時除服は權禰宜除服の法と同例也云々○大神宮儀式帳解十七の卷に年中行

事六月十六日方々御稻之中一御方者於二忌火屋殿一奉レ春大物忌子良荒木田氏女云々嘉暦勅使記同三年九月十日云云其後一禰宜相二共大子良一昇殿寛正造内宮記同三年十二月廿七日出御行事云々于時余大子良乎相具と見えたり子良はもと九人なればその九人をひとつにいひて子等といふにや物忌子に限るべし但大子良といへば大又等は借字にて子といふを野を野良中を中良夜を夜良などいふ助辭の良にや万葉二人麿長歌に奈用竹乃騰遠依子等者同六大伴坂上郎女歌廬將爲子等とあり此辭助辭にて意なし右二ッの中心の向所に從ふべし大物忌は荒木田神主氏の女を用來れり年中行事六月十六日大物忌子良荒木田氏女内宮子良館記明應六年丁巳十二月廿三日大子良下給云々中西龜大夫息女也雖レ爲二外宮神主一尙重養豆居レ之荒木田氏人ならでは大物忌父荒木田尙重養女と又永正四年丁卯八月子良の事見ゆこれも外宮神主の女也その事は注されど荒木田氏人の養女とせしなるべし世澆季になりゆくまゝに不信懈怠より禰宜權任物忌父等の女これを勤ざれば近比は本郡馬瀨村霜野村の邊に荒木田氏人の裔々の家々ありそれが女をこれに補任す云々按に右に引たる年中行事嘉暦勅使記内宮子良館記等は神宮の秘書なるべければ世人たやすく窺見るべくもあらず○正應六年公卿勅使次第に祿物一々計二渡之一此中於二子良母良三色物忌父等祿物一者任二惣員數一代々於二一殿一請取之處云々○永正記上卷廿丁に正安年中烏含二赤色之物一居二于子良館外宮東之松上一食レ之云々同下卷四丁に禰宜幷子良等退出程一殿邊留候也云々又十三丁子良中御氣殿板敷月水不淨之時則退也云々又十六丁子良館服中物忌等經二置石幷鳥居之脇一子等館西軒下迄參勤云々又廿八丁四月十一日御内擂除事御殿下者子良母良大床下者物忌白石者刀禰沙汰云々按に正安年烏含二赤色之物一云々の事文保記廿四丁にも出て正安三年二月一日烏含二赤色之物一居二于子良館以東之松上一食レ之其躰如二魚膓一之由子良申レ之雖二搜求一近邊無二指穢物一とあり○參宮記に大物忌子良殿大物忌子良此殿に候す儀式帳に物忌幷小内人の宿館を載たり其一宇成べし垣も有けるに今は絶てなし中右記には子良宿屋とあり今俗神樂殿といふ子良は荒木田姓の女子を撰取て勤めしむる也古は童女數多有し故に子等と稱せり子等を助くる人を父等母等といふ親子の謂ならず介抱の謂也今は子良一人母良一人父九人也云々又云子良殿の

前の石神歳中行事記に八王寺黃葉遊饗膳滿久の代より子良館の本に石神を積此散錢を以饗膳の沙汰をいたす趣見えたり此石神成べし今時此石神子良殿東ならず後世今の處に移せし也云々○古老口實傳一丁正月朝拜神事云々母良節等持來各節給レ之云々又二丁二月上亥子日毋良子良番物忌父等一禰宜宿館候也云云又六丁一禰宜勤役事云々子良館莊嚴出納所沙汰也垂布疊屏風手水桶杓等子良裳近年八員禰宜沙汰也每年九月以前下行也正安元年九月始レ之同帷布近年松山御厨別進也外宮禰宜常裏神主日入也云々○神宮雜例集一九丁に大治三年十二月廿四日云々三人物忌子良爲レ供二進夕御饌御水一參二向二宮朝夕御井社一奉レ開二御戸一拜見之處云々同二廿二丁に元日二宮御節供事云々館母獻レ鏡在レ酒餠節云々按に館母は古老口實傳に母良と書たり鏡は餠鏡也○廿二社泣式伊勢の條八丁に内宮子良十人童三人女七人此内一人荒祭外宮子等四人内一人高宮館母内宮一人外宮一人以上館母子良子昇殿供奉者也鳥名子地下駈役者也云々按に子良子と書たり館母子良共に昇殿供奉の者なると知べし鳥名子は其下の駈使の女也諸社根元記十九丁伊勢の條に見たるも同文也○類聚名物考神祇十一に子良館こらのたち伊勢大神宮の神饌を奉る所をいふそこに御子良子とて童女を置て神供を奉る事を勤る也祭典式といふものに其事委し俗には「おはらご」ともいふ也芭蕉發句集に子良館の後に梅有といへば「御子良子の一もとゆかし梅の花」○神道名目類聚抄五の卷廿七丁に子良子伊勢神宮ニッカフル女官也神樂又御饌調進ノ事ニアヅカル或云子良子ハ鈿女命ヨリ始ルト云々○坂士佛大神宮參詣記九丁長歌に子良毛御母良毛暇波日日之御膳絶藻瀨須豐宇賀能賣神爲之大神酒御贄忍穗井之以レ水炊朝夕仁奉饗氏人農三角柏之常盤仁百官之仕者天業仁不異云々按に此歌によりて母良を「オモラ」といふべくおぼゆ「ハヽラ」とも「ボラ」ともいふは共に誤也又十一丁云當宮には巫女なし子良とて幼稚のをとめのいまだ夫婦のわざもしらぬが御膳をそなふる器用にて召仕はるゝばかり也神慮にかなひぬれば二三十までも月事なし冥鑒にそむきぬれば十一二よりさはるさはれば則職を解す云々按に此文にて子良の勤仕のやうおもひやるべし○神社鎭座歳代考伊勢の條に内宮子等十人童三人女七人此内一人荒祭外宮子良四人四人内一人荒祭館母内宮一人外宮一人以上館母子良子昇殿供奉者也鳥名子地下駈使者也云々○伊勢參宮名所圖四の卷十一丁に

子良とは朝夕の御饌を奉る童女の名也世に是をおこら子といふ又父を物忌の父と云延喜式にはおこらごを物忌と書り其物忌の父も童女と共に神饌の事に預れり度會姓の人を撰て此役をつとめしむ俗にこれをおくらごといひ又齋宮の御代りなどいへるはひが事也毎日寅申兩刻兩宮及相殿へ御饌を供進す是は天子より奉らせ給ふ御饌也おこらごは八九歳より參りて月經通するを任限として其間宮を出す正員の禰宜は祝詞をよみ御子良子は陪仕し物忌父は御饌をそなへはこぶ也昔は内宮の神饌も外宮にて調へ宇治へはこびたるに道路けがれ有し後は一所に外宮の御饌殿にて奉ると也とぞ云々按に大神宮御饌は昔より外宮の御饌殿にて奉る事にて中比途中穢有し故持運ずといふはひがごとのよし神宮雜事を引て豐宮崎文庫境記にいへり○輿清曰子良は古は物忌子といへりそは父を物忌父といふに對たる名也内宮に九人同管社に三人外宮に六人合せて十八人いづれも未通女の月の障をしらぬを撰て子良館に召置き神宮朝夕の御膳掃除などの事に奉仕せさせし也月事來れバ職を辭す年へてもツキヤハリ月事なきは神の御心にかなへる也とて永く勤職せしむこは女兒なれば其父後見して同く神宮に奉仕すればその父を物忌父とはいへる也物忌子良を省て子良とも子良子とも稱て御子良子ともいへりおはらごといふは訛なるべし館母は母良ともいふよしは神宮雜例集古老口實傳に通はし書たるにて知らるこは物忌母ともいふべき稱なれどいとふるくはきこえず子良よりも年まさりの女子良とともに奉仕し月事のほどは退下りて身潔なりて復まうのぼれりと見ゆ子良が親母の義にはあらずこを「ボラ」とも「ハヽラ」とも書たるものあれど坂士佛が長歌に據れば「オモラ」といふべきにや 頭書 母良神田子良田鳥子神田神風抄十一丁ウ同廿二丁ウ同十八丁ウ同十九丁ウ

(十三)鳥居再考　延喜内匠式 廿七丁ウ 野宮裝束云々輿一具障子四枚料五六寸桁二枚壁代束柱鳥居等料歩板二枚平帖料檜榑二材槻十三枚扨料簀子二枚障子骨料椙榑二材云々又 廿八丁ウ 腰輿一具障子二枚桁料簀子二枚壁代梁料歩板一枚高欄鳥居等料檜榑牢材障子骨料椙榑一材云々按に此鳥居は輿の高欄上の横木を鳥居とはいへる也門形の物には あらず ○内宮長暦送官符 三丁ウ に高欄鳥居丸桁端金拾管 各徑三寸□分長各五寸穴各四口打ノ堺 云々按にこれはた高欄上の笠横木にて門形の物を鳥居といへる

にあらずたゝ鷹のトマリ木をホコ木といひて其形鐘木に似たる類也雞のトマリ木はた鷹のホコ木と同形なれば雞栖もその形に据たる和訓なるべし○類聚雜要抄四 十四丁オ に衣架一雙懸二裝束一料云々鳥居木長七尺云々其圖を載たるに今衣架の製にかはることなし上の笠木を鳥居といひたるは鳥のトマリ木に似たれば也 頭書 鐮尻一樓姫世記に御門鳥居四王神等二宮同前也云々按に後の儀式なれば證には引用がたし 江次第十二の卷伊勢公卿勅使の條廿五丁ウ以下豐受宮第一鳥居第二鳥居第三鳥居内宮第一鳥居第二鳥居見え治承元年公卿勅使記にも同じく五ケ所の鳥居の名目見ゆ此外兵範記長秋記伊勢勅使部類記など所見枚擧に遑なし又雞棲の字面淮南子本經訓に出たれば閲て知べし ○輿清曰鳥居の濫觴及古書の所見名目など既に上文第九則にろうじたれどいまだ名義を釋ざればこゝにいふべし鳥居とは上方の笠木の臥雞のトマリ木に似たるよりいへるにて高欄の鳥居衣架の鳥居木鳥居障子などいふも其上方の笠木の雞のトマリ木に似たれば也立柱は神門または衣架のごとく左右二本にもあれ鷹のホコ木又は鐘木のごとく一本にもあれもと上方の横木をさして名づけたンなれば無名雉常世長鳴鳥など附會せし說にまどふべからずこれ余が自負の確論なり 頭書 東大寺要錄四參天台記三十六丁ウ唐土ニテ鳥居ヲ見シコトアリ長門本平家十一卅七丁同四十丁ウ日蓮錄外十九ノ廿五丁オ

松屋筆記卷之六十九

東都　平與清文儒稿

(一)垂髪　垂髪 頭書 吾妻鏡三ノ廿九丁オ同五ノ十四丁オ は童男女の髪を垂たる貌によれる名なれど中比より兒喝食の事にいへり「ウナキ」「ハナリワラハ」「メザシ」「アゲマキ」などのゆゑよしは既に六十七の卷七十五則に辨別せりさて垂髪の字面は後漢書鄧禹傳五丁 に父老童稺垂髪戴白滿二其車下一莫レ不二感悅一注に垂髪童幼也戴白父老也云々同書呂強傳廿七丁オ に故太尉段熲武勇冠レ世習二於邊事一垂髪服レ戎功成皓首注に垂髪謂二童子一也云々晉書陳敏傳九丁カ に永長宿德惰所二素重一耆先垂髪分著二金石一云々などこれかれ見ゆ蘇軾詩には半白不羞垂レ領髪軟紅猶戀屬車塵とも作れり和名抄老幼部に後漢書注云髫髪謂二童子垂一髪也和名字奈賀俗用二垂髪二字一云々玉海吾妻鏡明月記などに垂髪と見えたる皆髪を垂たる童兒にいへり夫木抄雜十七に垂髪子の歌を擧たるにうなゐこが草刈笛云々うなゐこがふりわけ髪云々かくる草かづら云々うちたれ髪云々か

ぶろなるうなゐども云々ならず麥笛云々などの詞あり宗祇兒(チゴ)敎訓に世中のわるき若衆のふるまひを云々滑稽詩文に喝食若衆と見え若氣勸進帳に若氣(ニヤグ)小僧喝食若衆兒(チゴ)などあり垂髮衆ウナヰなどは同物異名にて總名也喝食は僧になるべき兒のいまだ剃髮せざるほどをいふ若氣(ニヤク)は今俗にもニヤケ者にニヤケタ男などいひて男色もはらの若衆にいへり頭書増鏡八ノ廿四丁すぢご兒若衆同物ながら若衆は總名兒は法師の近習の小者にいへり慈昭院殿家集足利義政公に垂髮「常盤山とはにはさかすいたつゝし春の日數をたつねてもとへ」此歌「すゐはつ」をかくせし也「ゐ」を「い」にせしは後の歌なればゆるすにおよばず卯花園漫錄四の卷に柱懸の垂撥(スイバツ)の歌とし其圖を出し東は黑塗にて裏に此歌を金粉の蒔繪にしたるものゝよしいへり今流布の家集には此歌なし異本に出たり可レ考山家集下廿八丁ウに行者かへりちごのとまりにつゞきたるすゞ也春の山伏は屏風たてと申所をたひらかにすぎんことをかたく思ひて行者ちごのとまりにてもわづらふ成べし「屏風にや心を立ておもひけん行者はかへり兒はとまりぬ」

(二)落書幷飛書飲章刋章飛章匿名書　落書は匿名書也本朝文粹十二の卷廿六丁ウに櫻島忠信が落書の詩あり五言長篇也平治物語下卷長田殺二義朝一條に左ノ獄門ノ樗木ニゾ梟タリケル如何ナル者カシタリケン左馬頭モトハ下野守タリシカバ一首ノ歌ヲ書ッケタリ「下野ハ木ノカミニコソ成ニケレヨシトモ見エヌ上(アグ)ヅカサ哉」或者此落書ヲ見テ申ケルハ云々愚管抄五の卷にも此歌を載て次に九條の大相國伊通公ぞかゝる歌よみておほく落書にかきなどしけるとぞ時の人思ひたりける云々平家物語四の卷南都牒狀の條に何者ノ所爲ニヤ有ケン落書ヲゾシタリケル「山法師織(オリ)述衣薄(ノベゴロモ)クシテ恥ヲバエコソ隱サヾリケレ」此外にも一首あり同五の卷富士川の條に軍ニハ見逃ヲダニ淺猿キ事ニスルニ平家ノ人々ハ聞逃シ玉ヘリトゾ笑ケルサル程ニ落書共多カリケリ云々歌四首あり同八の卷山門御幸の條に敎光若ヤト二首ノ歌ヲ讀テ落書ヲゾシタリケル云云歌二首あり小右記万壽五年長元元年七月十八日の條に去五日落書アリ關白出云々有二天下一事道俗事上達部以下惡事皆注載云々往古來今未レ有レ如此之落書云々明月記寛喜二年五月十四日の條に近日東一條院侍所有二落

書一九條邊凶黨家會相レ議可レ入二兩女院御所基定卿兼敎朝臣等家一之由上不便由云々十訓抄八の卷可レ專二思慮一條に嵯峨帝御時無惡善と書たる落書有けり野相公によませらるゝにさがなくはよしとよめり云々按に嵯峨帝御在世のほど御諡の陵號をもて落書にすべき樣なし後人のつくりごとなり此外源平盛衰記五の卷十三丁ウ十六の卷四丁ウ廿三の卷十八丁ウ廿四の卷八丁ウ長門本平家物語一の卷廿六丁ウ十七の卷廿丁オ參考本六ノ十丁ウ十四ノ六十九丁オ廿六ノ五十五難太平記九丁オ十應仁記上ノ十一丁ウ同十二丁オ同十八丁オ同廿八丁オ下ノ四丁オ同十一丁オ太平記丁オ廿ノ四十八丁オ廿五ノ十七丁オ廿八ノ八丁ウ應仁記同十五丁ウ十七丁オ應仁略記上十五丁ウ海人藻芥下ノ四丁オ廿四丁ウ四十一丁オ別記八丁オ同ウ

圓光大師畫詞傳裏讖本四十三長曾我部元親百箇條廿六丁ウ神明鏡上ノ五十總見院追悼記五十三などその所見擧るに遑なし吉野拾遺二ノ十九丁ウ應仁略記下ノ廿八丁オ四十四にらくがきらくしゆは云々などに落首とあるは書誤れるなるべし玉勝間八の卷四丁ウなどに落書とはいふ也又たはぶれのさゝび歌にらくしゆといふ一くさありこれもかのおとし文よりうつりてもとは落書(ラクショ)なりけんを訛てらくしゆとはいふなめり愚問賢注に童謠落書の歌とあるこれ也云々後漢書十の上の卷廿ウ竇皇后記に作二飛書一以陷レ竦注に飛書今匿名書也云々同十三の卷四丁オ五行志一に作二飛書一與二東海王一云々同書列傳廿四ノ六丁オ梁松傳に縣二飛書一誹謗下レ獄死國除注に飛書者無レ根而至飛來也即今匿名書也云々同書列傳六十八ノ廿六丁ウ宦者呂强傳に造二作飛條一注に飛條飛書也云々魏志趙儼傳南史孔奐傳などにも飛書の名見ゆ僧家に無住方といふもおなじ落書の詩は本朝文粹を出處とし歌の落書は平治物語下卷に將門は米がみよりぞきられけるの云々を古しとやせん無惡善は後のしわざにて當時のものにあらす落首といふは中比の誤樂書(ラクガキ)といふは近來の俗言也頭書文德四ノ五丁オ近得二飛語一云々五雜俎十三ノ廿五丁オ飛語鵲林玉露六ノ七丁オ百練抄五ノ廿九丁オ東鑑廿四ノ十一丁ウ臥雲日件錄廿一の卷に曾雲來茶話次及二天下政事一雲曰世有二三寃之說一俗所謂落書者也晝三人形立之路一頃蓋政出二於寃一也御今有馬烏丸也云々同四十八の卷に前刻季瓊話就二管領門一有二落書一蓋畫二鐵輪一去二二箇足一存一足置二子基盤上一其意武衛畠山細川此三家謂二之三職一猶二三足鐵輪一今武衛畠山皆亡此次細川御番也基盤其音相類故也云々飛章蔡邕傳に一入二牢獄一促以二飲章辭一情何緣復聞注飲猶レ醴也卽今匿名文書云々孔融傳に刋章下州郡唐書三の卷高宗本紀永徽五年に詔禁二吏酷法及爲二匿名書一

者ト云々通雅升菴外集十ノ十一丁オ 五代史卅一ノ二丁オ 周臣王朴傳に峴蜀可ニ飛書而召レ之トアルハ早手紙也東國通鑑五十一の卷卅丁オに初有レ投ニ匿名書于李仁任堺美黨家ニ云々名物六帖人事三宋高僧傳十五ノ十八オ毎レ飛レ章寫レ額トアルハ別也

(三)一筆 一札その外天筆執筆又は飛札などいふ類の字面 今の往來に一筆啓上と書く一筆は墨蹟に張芝作ニ一筆書ニ云々唐書鍾傳傳に十金易ニ一筆ニ百金償ニ一筆ニ云々などゟ見ゆ 天筆和合樂の天筆も辭存誠仙石靈臺賦に信ニ天筆之攸ヲ假實ニ神翰之所ヲ成と あり執筆は後漢書蔡邕傳晉書華譚傳北史徐紇傳李彪傳隋書周羅睺傳 唐書鄭朗傳などに出用筆は魏志劉劭傳注拙筆は南史王僧虔傳雜筆は北史邢遜傳隋書經籍志御筆は北史魏彭城王勰傳 代筆は元史選擧志拙筆は白孔六帖走筆は白氏文集呈ニ夢得ニ詩に見えたりまた劵文に一札如レ件と書く一札は梁昭明太子集詩に幷有ニ一札書ニ行止風雲起云々同禮司市以ニ質劑結信ニ而止レ訟注に質劑謂兩書一札而別レ之云々 後漢書費長房傳に付ニ其一札ニ以勅ニ葛陂君ニ云々同循吏傳に一札十行細書成レ文云々など見ゆ 書札は後漢書劉盆子傳南史陶弘景傳飛札は劉太眞が詩元稹が詩金札は雲笈七籤などに出たり 頭書 書札杜律五言 四ノ廿四丁ウ

落窪物語四ノ二丁に子三人聟とりたれど今に我にかゝりてこそはありつれあまさへうきはぢのかぎりこそ見せつれ云々方丈記六丁オにあくる年は立なほるべきかとおもふほどにあまさへえやみ打そひてまさるやうに跡かたなし云々落書露顯序にあまさへ爲尹卿は爲相卿の歌ざまに似給ためるを云々遊仙窟五四丁オに剩アマツサヘ云々平他字類安部他聲に剩アマサヘ云々新韻集安部他聲に剩アマツサヘ又アマル云々節用集安部に剩アマサヘ云々和玉篇上卷刀部に剩アマサヘ又ノリ又ソフ云々保元物語參考本一の卷四十九丁オに剩都ヘ御出アルベキ由云々同二の卷八十七丁オに剩與福寺櫂別當忠信法印ハ關白殿ノ御息也シヲ云々又百十七丁オ剩爲朝ガ鎭西ノ狼藉ニ依テ解官セラレ云々同三の卷六十一丁オに剩南都ニテ惡黨ヲ催給ケルトテ云々又九十二丁ウ剩オソロシゲナル鬼童相具シテ來タレバ云々平治物語參考本三の卷十四丁オに剩緣ニツキ平家ニ奉公仕ケルガ云々此外平家物語長門本平家物語源平盛衰記太平記曾我物語など所見稠夥すべからず餘り副の義にて事物の有が餘りに又物のそひたる義の詞也

(五)名におふ 名にしおふ 古事記雄略の段御歌に多古牟良爾阿牟加岐都岐曾能阿牟袁阿岐豆波夜具比加久能碁登那須波那須游波牟登蘇良美都夜麻登能久爾遠阿岐豆志麻登布云々万葉集一十八に名二負勢能山云々同四四十に名爾負瀧之瀨云々同九廿一に名二負有杜爾風祭爲奈云々同十一七丁に何名負神幣禦奉者云云又十一足引名負山菅押伏云々又十三早人名負夜音灼然云々同十七四十四に美雪落越登名爾於幣流云云同廿五十一に大伴乃宇治等名爾於幣流麻須良乎能等母云々又五十一安伎良氣伎名爾於布等毛能乎己許呂都乃米與云々又同上佐夜氣久於比豆伎爾之曾乃名曾云々これら皆名に負はん名におふ名におへる名をおふ負て來にし名などありて「し」の助辭を加たるはなし伊勢物語に「名にしおはゝいさとはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」右今鼈旅六帖又「名にしおはゝあたにそ有へきたはれしま浪のぬれ衣きるといふ也」後撰羈旅に出古今雜下文屋有季歌に「神な月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮のふるとそこれ」後撰秋中貫之歌に「名にしおへはしひてたのまん女郎花花の心の秋はうくとも」六帖六にも出 同秋下に「名にしおへは長月ことに君かためかきねの菊はにほへとそ思ふ」同戀三に三條右大臣「名にしおはゝ相坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな」此歌六帖六にも出たり小町集に「名にしおへは猶むつましみ女郎花折られにけりな我か名たてに」曾丹集序に「おやのつけてし名にしおはゝなをよしたゝと人も見るかに」云々與清曰名におふは名に得たる義也後の歌集物語書に見えたるは枚擧に遑あらず

(六)さすらふ 延喜祝詞式六月晦大祓に速佐須良比咩登云神持佐須良比失氏云々新撰字鏡彳部に徨烏角反徐征也人名佐須良戸阿留久云々按に人名といへるは唐韓偓などを思へる也類聚名義抄一の人部に伶俜サスラフ云々又俜サスラフ云々又伶仃サスラフ云々彳部に徨サスラヘアリク云々辵部に迸サスラフ云々立部に竝サスラフ云々同書五の水部に流浪サスラフ云々同書八の金部に龍鍾サスラフ云々崇神紀二丁に流離サスラヘヌ又ナスラヘヌ云々神功紀廿丁に爲ニ流沈一サスラヘヌ顯宗紀十二に伶俜羸弱サスラヘアッシクシテ云々天武紀下廿丁に待サゾラヘ云々按に「スと「サ」は通音也「サゾラヘ」と云調撰集抄などものにおほ

く見空穗物語俊蔭廿二丁ウにけだものにまじりさすらへて
ゆ
云々蜻蛉日記中卷十五丁ウにいかなる心ちしてさすらへ
んずらんと思ふに云々源氏物語須磨十二丁オに「身はか
くてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけはゝなれし」又廿一丁ウいかなるさまにさすらへたまは
んとうしろめたくかなしけれど云々明石七丁オに「海
にます神のたすけにかゝらすはしほのやほあひにさすらへなまし」橋姫廿七丁ウにおちあふれてさすらへん
こと云々總角にあるまじきさまにさすらふたぐひ
云々大和物語下十二丁オにとかう女さすらへて云々堤中
納言思はぬ方にとまりする少將廿九丁ウにさま〴〵にさすらふも云々狹衣一の上廿七丁オにくらき道の空にさへ
さすらふるよ云々同一の下十二丁ウにとかくさすらへたまはんもいとほしう侍べしとぞのたまふ云々同二
の下廿二丁オに深き山里などにもてさすらはんもあるか
ひなかるべし云々同四の下四十丁オにかばかりのほどを
引はなちてもてさすらはし給ひけん云々源平盛衰記
十二の卷二丁カに丹波國村雲ト云所ニゾ暫シサスラヒ
給ケル云々古今著聞集二の卷廿三丁ウに浮雲のごとくさ
すらひありき給ひて云々增鏡一五丁オにはるかなる西
の海にさすらへ給にし後云々同十一丁ウに今はたさら
にかくさすらへぬるも云々閑居友下十六丁オにさすらひ
ゆかんに云々保憲女集廿七丁ウにあるはゝかなくさすら
へて云々金葉戀下出羽辨「おくりてはかへれと思ひ
したましひのゆきさすらひて今朝はなきかな」新
古今雜下匡房「さすらふる身は定たるかたもなしう
きたる舟の浪にまかせて」同羈旅顯仲「さすらふる
我身にしあればきさかたや蜑のとまやにあまたゝひ
ねぬ」新後撰羈旅僧正行意「さすらふる心に身をも
まかせすは清見か關の月を見ましや」續後撰雜中經
宗「なにとなく明ぬくれぬとさすらへてさもいたつ
らに行月日かな」辨乳母集に「御祓して此とのはや
八鹽道のしほのやほあひにさすらはしてよ」宗良親
王李花集上廿二丁ウに「雁たにもしほれてそなく心まてさ
すらへし身を思ひやらなん」夫木抄冬二忠定「さすら
ふるわかよふけひの浦千鳥なく〳〵過ぬたれしのへ
とて」同雜九順德院「からさきやにほのうきすのいか
にしてさすらひわたるよを賴むらん」

(七)加和良鎧具足　崇神紀八丁オ十年に時人號ニ其脫
レ甲處一曰ニ伽和羅一云々○古事記應神の段に故到ニ訶

和羅之前一而沈入故以レ鉤探ニ其沈處一者繫ニ其衣一中
甲ニ而訶和羅鳴故號ニ其地一謂ニ訶和羅前一也云々按に
甲は上古訶和羅といひてそは物に觸る音の訶和羅と
鳴に據たる名也さるを東雅十の卷古事記傳廿三の卷六十六丁などに龜の甲を俗言に龜のカハラといへば甲の古言がカ
ワラにて訶和羅鳴たるは別義ならんといへるは深く
たゞらざりし也訶和羅は今俗にガラリト鳴ルといふ
におなじ瓦をカハラといふもハとワは走をハシル
ともワシルともいへるごとく常に通音なれば瓦のガ
ラ〳〵と音するによれるなるべし龜の甲はたさる心
にや訶和羅前の在處は山城國綴喜郡にて今河原村と
いふ崇神紀の訶和羅も同處にて故事の傳の異なる也
と古事記傳廿三の卷六十五丁にいへり和名抄に山城國綴喜郡甲
作の鄕あり作は羅の誤寫にて甲羅なるべし然て伊勢
奄藝郡加和良神社丹波氷上郡加和良神社筑後三井郡
高良玉垂命神社出雲風土記の意宇郡加和羅社などみ
な甲を祭れる社にて桙衝神社劒主神社劒神社高桙
神社楯縫神社胡祿神社由貴神社弓削神社兵主神社貫
前神社など武器によれる神社おほかればそれにおな
じ地名にも近江犬上郡甲良鄕あり雄略紀十丁武烈記

五丁に各羅嶋ありこれも同義にや○景行紀廿丁に卷
レ甲戰レ戈云々允恭紀六丁に甲服ニ襖中一云々又分
明瞻ニ衣中有レ鎧云々雄略紀一丁に被レ甲帶レ刀云々又
廿六丁其所レ發箭穿ニ二重甲一云々射穿大斧手楯二重
甲一云々欽明紀廿一丁に帶レ刀攝レ甲云々又廿九丁著ニ甲
鎧一者一騎云々敏達紀八丁に被レ甲乘レ馬云々皇極紀
十九丁に攝レ甲持レ兵云々齋明紀五丁に鎧二領云々天武
紀二丁に甲冑弓矢云々持統紀廿七丁に人甲一領云々
○古事記應神の段に衣中服レ鎧云々又其衣中甲云
云按に日本紀古事記の所見いづれも後の訓にて「ヨロヒ」といふべき据なし此外令續日本紀などにも出
たれどいづれも必ヨロヒと訓べくもあらねばカワ
ラと訓んかた然るべし○和名抄征戰具部に唐韻云鎧
苦蓋反甲也釋名云甲者似ニ物鱗甲一也和名與路比云々
說文云冑音宙首鎧也和名加布度云々○新撰字鏡日部
に冑治右反去也後也緒也胤也連也續也與呂比云々按
に與呂比といふ詞は物の具足せるにいへり万葉一
七丁に取與呂布天乃香具山云々此は山形の足備りて
缺たる所なきにいへり齋明紀五丁に弓矢二具云々此

は具したるにいへり皇德紀十七丁に無施珠襚玉押云々此押は具裝にて裝具したるにいふ字義は漢書董賢傳に見えたり物具をよろふといふ詞合戰書に見え厨子一よろひ某一よろひなど物語書におほかりされば甲冑を著具たる貌より躰誤にいひなせし也既に字鏡和名抄などに鎧の名あれば延喜式三代實錄などの甲鎧の字をばヨロヒと訓べくや具足小具足などいふは保元平治より後の詞なるべし○輿清曰甲古代は必加和羅といひそを神躰に祭れる社を加和良神社ともいへり今京より後ヨロヒといふ名出來て古名の加和羅は人しらぬやうになれりし也保元平治の比より後には具足小具足など字音にさへいることとはなりぬさて加和良は觸れば然鳴音よりいひヨロヒは具裝よりいひ具足はヨロヒを字音にいひたる也

(八)船靈　神代紀上六丁に遂爲二夫婦一生二蛭兒一便載二葦船一而流レ之云々又九丁次生二蛭兒一雖二已三歲一脚猶不レ立故載二之於天磐櫲樟船一而順レ風放棄云々○古事記上卷に次生神名鳥之石楠船神亦名謂二天鳥船一云々按に天磐楠船は伊弉册尊の御生子にて一名は鳥之石楠船神ともいへり天鳥船とも天は天神なれば稱す鳥は船の疾行を鳥の飛にたとへしにや鴨ちふ船などよめるは水に浮たる良よりいふめればさる心ともすべし神代記下四丁に以二熊野諸手船一亦名天鳩船載二使者稻背脛一遣レ之云々又十三丁に高橋浮橋天鳥船亦將二供造一云々など鳥にたとふること常也又天鳥船神を建御雷神に副て下し給ふとある天鳥船は船鳥を上下に誤れるにて天夷鳥命の事なるべしと古事記傳十四の卷にいへるはさるときこゆさて天石楠船神鳥石楠船神天鳥船神共に一躰にてこれ船靈神といふべし○神功紀五丁に既而神有レ誨曰和魂服二玉身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一導二師船一云々又五丁摂二荒魂一爲二軍先鋒一請二和魂一爲二王船鎭一云々○古事記仲哀の段に我之御魂座二船上一而眞木灰納レ瓠亦箸及比羅傳多作皆々散二浮大海一以可レ度云云按に日本紀の神は天照太神稚日女尊事代主神表筒男中筒男底筒男三神と合せて六神也古事記の神は天照太神底筒男中筒男上筒男合せて四神也其傳說おなじからずさて我荒魂和魂を祭れとのたまへるは

上筒男中筒男底筒男の三神にて住吉鎭座の大神也天照大神を舟靈と祭るよしは船長日記上卷に紙閣を以て大神宮の神勅を伺て事を計る也此紙閣といふは一丈枡を米八合程いれ紙を一寸四方に切て思ふ事を書付丸めて其上に置き扱大神宮を念じて一万度の御祓を其上にかざせば丸めたる紙の中一つ飛あがりて御祓へ付也それを見て知る事也此御告はいさゝか違事なしされば日本の船頭は大神宮の神託のみにて船を乘侍る也云々とあるも天照大神の船を守り玉ふあかし也○延喜祝詞式に遣二唐使一時奉幣云々皇御孫尊乃御命以氏往吉留稱辭竟奉留皇神等乃前留申賜久大唐留使遣止爲留依二船居一無一氏播磨國與利船乘爲氏使者遣止所念行間留皇神命以氏船居波吾作止敎悟給支敎悟給比那我良船居作給部禮悅己志喜美禮代乃幣帛平官位姓名留令捧賚氏進奉止申按に遣唐使の船の事を住吉神に禱給ふ也船居は船出する湊をいふ○延喜臨時祭式廿二に開二遣唐舶居一祭住吉幣料絹四丈五色薄絕各四尺絲綿四屯木綿八兩麻一斤四兩右神祇官差レ使向レ社祭レ之云云○万葉集十九の卷廿六丁天平五年贈二入唐使一歌に墨吉乃吾大御神舶乃倍爾宇之波伎坐舶騰毛爾御立坐而佐之與良牟磯乃崎々許蟄波氏牟泊々爾荒風浪爾安波世受平久率而可敏理麻世毛等能國家爾云々同廿の卷廿七丁海原乃可之古伎吉知乎之麻豆多比伊己藝和多利氏安里米具利和我久流麻泥爾多比良氣久於夜波伊麻佐禰都々美奈久都麻波麻多世等須美乃延能安我須賣可未爾奴佐麻都利伊能里麻宇之豆奈爾波都爾船乎宇氣須惠云々按に住吉大神の船を守り給ふ事古事記仲哀の條日本紀神功紀延喜臨時祭式祝詞式万葉集十九の卷廿の卷などを考て知べし住吉の神は延喜臨時祭式十丁に住吉神四座云々神名式上廿三丁に攝津國住吉郡住吉坐神社四座並名神大月次相嘗神嘗云云廿二社注式に日本書紀云伊弉諾尊所レ生其第一底筒男命第二中筒男命第三表筒男命是即住吉大明神此三神並第四神功皇后鎭座以上四所也社家說云住吉社四座第一天照大神第二宇佐明神第三底筒男中筒男表筒男一座第四神功皇后也住吉四所明神は表筒男中筒男底筒男の三柱は古今動こ

となし或は神功を加へ或は天照大神を加へなどして一所の說は確乎ならず○皇大神宮儀式帳に御船神社一處有爾郷土羽村に在り稱に大神之御蔭川神一形無倭姫內親王代定祀正殿一宇長七尺弘五尺高八尺玉垣一重四方各二丈坐地二町四至東南公田四百姓家北御刀代田○延喜太神宮式に太神宮所攝二十四座云々御船社云々○倭姫世記に廿五年云々倭姫命波皇大神乎奉レ戴天小船乘給ヒ御船ヲ雜神財並忌楯桙等乎留置天從小河幸行支云々從其處幸行河盡支其河之水寒有支則寒河止號其處御船留給ヒ即其處ヲ御船神社定給支云々又廿六年云々于時美船神朝熊水神等御船ヲ乘奉利五十鈴之河上ヲ遷幸云々○神名秘書に御船社太神乃御船神也在有爾郷止羽村云々按に御船神社の事類聚神祇本源元々集廿二社注式諸神記など物に見えたる擧盡しかたし此は太神宮の乘御の御船の神也○續日本紀廿四廿二天平寶字七年八月壬午の條に初遣高麗國船名曰能登歸朝之日風波暴急漂蕩海中祈曰幸賴船靈平安到レ國必請朝廷酬以錦冠至レ是緣於宿禱授從五位下其冠製錦表絁裏以紫組爲レ繧云々按にこは能登船の靈に祈りて利益を蒙り從五位下を授し也船に位を授ること續日本後紀六の卷承和四年五月丁酉授遣唐第一船其號太平良從五位下と有○延喜神名式に伊豆國田方郡輕野神社云々又近江國愛智郡輕野神社云々按に輕野は船の名にて古事記仁德の段に河內國兎寸河の西の大樹を伐て作れるよし記し日本紀には應神紀五年十月伊豆國に命て作れる船輕行如レ馳故輕野といふよし見ゆ同卅一年八月の條にも官船枯野者伊豆國所レ貢とあり田方郡輕野神社は此船靈を祭れる也近江國愛智郡の輕野神社もよしあるべし豐臣大閤の御座船阿竹丸も伊豆國宇佐美の里の八幡宮の神木にて其切取たる木口より枝を生じたるが十二本あり大なるは廻り六尺餘もあるべし小なるも三四尺に下らず伐口は疊十二疊敷べきひろさ也遠方より見れば一株の木小山の如し此阿竹丸の靈も神に祭りて今江戶本所に阿竹大明神あり船長日記上卷池田寬親か閱書也に船玉の去といふ事はすべて船玉とは船のぬし也帆柱を立る筒の下に納置事也紙雛一對其船主の妻の髮毛少し双六の簺二ノ目ノ置方アリ此三品を納置を船玉といふ也難船ある時は必此船玉去也難船したる船を見るに此船玉はなきもの也

とぞ難船すべき以前に何ぞに化して逃去事も有と見ゆかにかくに船靈なしといふべからず○諸神記中卷七種番神の條に東方八神云々第八箕宿神此曰浮船神云々按に神社鎭座歲代考にもかくいへり浮船神は船神なるべし元亨釋書には華嚴經の守夜神を船神とし叡山には新羅大明神傳敎大師の船を守給へるよしいへり廿二社注式の異本には豐玉姬を船神とし神社啓蒙六の卷廿九丁には船玉神ト部說曰猿田彦也と見ゆいづれも各私意をもていひ出たるものにてうけひくべくもあらざりけり○延喜神名式上に攝津國住吉郡船玉神社云々按に攝陽群談十一の卷十四丁に住吉攝社とす所祭船玉命也云々攝津志二の卷五丁に住吉郡船玉神社在北花田宮邑與船堂村共頒祭祀云々和漢三才圖會七十四の卷攝津國住吉郡住吉大明神攝社に船玉社在本社之前坤隅云々○類聚國史十の卷神祇部十常祀に桓武天皇延曆十八年五月丙辰前遣渤海使外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂等言歸鄕之日海中夜暗東西擊曳不レ識レ所レ著于レ時遠有火光尋逐其光忽到島濱訪之是隱岐國智夫郡其處無有人居或云比奈麻治比賣神常有靈驗商賈之輩漂宕海中必揚火光賴之得全者不可勝數神之祐助良可嘉報伏望奉預幣例許之云々按に百九十三の卷殊俗部渤海上にも此事を記せり神名帳に隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社云々續日本後紀七の卷十二丁に承和五年冬十月甲午奉授隱岐國无位比奈麻治比賣神從五位下云々三代實錄廿の卷六丁に貞觀十三年八日廿九日授隱岐國從五位上比奈麻治比賣神正五位下云々同書卅三の卷廿丁に元慶二年五月七日奉授隱岐國從五位下比奈麻治比賣命神正五位上云々倭漢三才圖會七十八の卷隱岐部に離火權現在海部郡島前祭神比奈麻治比賣神又名大日靈貴云々一日此乃天照皇太神之垂跡同一而於今海舶多免漂災者因神火光最不可疑云々諸國里人談三の卷に焚火隱岐國の海中に夜火海上に現ず是燒火權現の神靈也此神風波を謐給ふ也いづれの國にても難風にあひたる船夜中方角をわかたざるに此神に立願し神號を唱れば海上に神火現じて難を遁るゝこと疑なし云々○土佐日記に廿六日云々こぎくる道にたむけする所ありかぢとりして幣たいまつらするにぬさのひんがしへちれば梶取のまうしたいまつることばこのぬさのち

るかたにみふねすみやかにこがしめたまへと申て奉るこれをきゝてあるわらはのよめる「わたつみのちぶりの神にたむけするぬさの追風やますふかなん」貫之家集（八の別部の巻）にあひしれる人の物へゆくにぬさやるとてよめる「行けふもかへらん時も玉ほこのちふりの神をいのれとそ思ふ」袖中抄（十九の巻）に顯昭云ちぶりの神とは道ふりの神といふにや海路にもよめり云云隱岐國にこそ知夫利崎といふ所にわたすの宮ときいふ神はおはすなれ舟出すとていその神に奉幣してわたりを祈とそ申すそれを本躰にて海をもくがをも道を祈る神をばちぶりの神と名づけたるにや又その神を思ひてかの所にもつけたるにや是はあまりの事也云々按に幣（スサ）は陸路の手向の神に手向るのみにもあらず海路にても幣奉ること万葉によめる歌これかれ見ゆ隱岐ちぶりの神は神名帳に知夫郡由良比女神社（ユラビノ）元名和多須神續日本後紀七（十丁ウ）二に承和五年冬十月甲午授二従五位下一と見え和多須神といへるも河海を渡すよしなるべし神躰は一宮記に須勢利媛命とす○類聚名物考神祇部六に或書に正月元日船に松飾して其神を祭るを船魂祭といふ船神は本朝にては猿田彦命にて間船玉命と申とかや歌に幸玉とよみて手向の神といふも是也唐にては鴻耳神孟公孟洗などみな船神也又琉球にては天妃菩薩を船魂也といふ常陸國水戸の中湊と云所に此神を祭しづめ給へり天妃山大權現と申也云々按に天妃の事願炎武が郡國利病書四十の巻（十九の巻）運河全圖に清江浦天妃壇靈濟宮云々同書四十五論二儀眞東關一之條に昔歳文靖公送祠天妃二使者謂國家之東萑葦之澤濱海而南者廣袤相乘淤沮可レ稻レ之何啻千數百里云々同四十七江蘇揚州府水利條に姜家堰在二鹽城之西北一舊有二海口一自二岡門鎮一十八里至二登瀛橋天妃廟一下一新洋港一入二于海一云々西湖志十五の巻祠字の條（四十丁）順濟聖妃廟（在二三茅觀側一俗名二天妃廣一）鑛塘縣志即三仙閣址祀莆曰二林都撿女靈衛夫人一宋宣和中賜レ額曰二順濟一故仍二其名一曰二順濟聖妃廟一云々陔餘叢考卅五の巻に江漢間摻レ舟者率奉二天妃一而海上尤甚張燮東西洋考云天妃莆之湄洲嶼人五代時閩都巡撿林願之第六女生二晋天福八年一宋雍熙四年二月二十九日化去後嘗衣二朱衣一往二來海上一里人虔祀レ之宣和癸卯給事中路允廸使二高麗一中流遇レ風他舟皆溺神獨集二路舟一得レ免還奏特賜二廟號一曰二順濟一紹興乙卯海寇至神駕レ風一掃而遁

封二昭應崇福一乾道己丑加二封善利一淳熙間加二封靈惠一慶元開禧景定間累封二助順顯衛英烈協正集度等號一又夷堅志興化軍海口林夫人廟靈異甚著今進爲レ妃云則在二宋時一已封爲レ妃也元史祭祀志南海女神靈惠夫人至元中以レ護二海運一有二奇應一加二封天妃神號一積至二十字一廟曰二靈慈一祝文曰年月日皇帝遣二某官一致二祭于護國庇民廣濟福惠明著天妃一又續通考云至元十五年封二泉州神女護國明著靈惠協正善度顯濟天妃一二十五年加二封廣佑明著天妃一七修類藁亦謂至元中顯二靈于海一有二海運一萬戸馬合法忽魯循等奏レ立レ廟號二天妃順帝一又加二輔國護聖庇民廣濟福惠明著天妃一是天妃之名自有二元始一何喬遠閩書載二妃生卒與二張燮一同又謂生時即能乘レ席渡レ海人呼爲二龍女一昇化後名二其墩一曰二聖墩一立レ祠祀レ之洪武五年又以レ護二海運一有レ功封二孝順純正孚濟感應聖妃一則又有二聖妃之稱一七修類藁則云封二昭應德正靈應孚濟聖妃一通考永樂中建二天妃廟一賜二名宏仁普濟天妃宮一有二御製碑一正月十五三月廿三日遣二太常寺一致レ祭故今江湖間俱稱二天妃一天津之廟幷稱二天后宮一相傳大海中當二風浪危急時一號呼求レ救往々有二紅燈一或神鳥來輸得レ免皆妃之靈也縞意神之功效如レ此豈林氏一女子所レ能蓋水爲二陰類一其象維女地媼配レ天則曰レ后水陰次レ之則曰レ妃天妃之名即謂二水神之本號一可林氏女之說不二必泥一也張學禮使琉球記又云天妃姓蔡閩海中梅花所人爲レ父投レ海身死後封二天妃一則又與二張燮何喬遠所レ記不レ同矣」成化間給事中陳訒奉レ命往二日本一至二大洋一風雨作將レ覆レ舟有二二紅燈一自レ天而下遂得レ泊二于島一若有二人告一曰吾輩爲二天妃一所レ遣也又嘉靖中給事中陳侃奉レ使封二琉球一遇レ風將レ覆舉レ舡大呼二天妃一亦見二火光燭船一船即少寧明日有二粉蝶一飛二繞船一不レ去黃雀立二柁樓一食レ米頃刻風起舟行如レ飛曉至レ閩午入二浙之定海一（俱見二七修類藁一吾）鄉陸廣霖進士云臺灣往來神跡尤著土人呼レ神爲二媽祖一倘遇二風浪一危急呼二媽祖一則神披髮而來其效立應若呼二天妃一則神必冠レ帔而至恐稽二時刻一媽祖云者蓋閩人在二母家一之稱也云々瑯琊代醉編廿九の巻（廿二丁ウ）にも見え天后聖跡圖像に福建省誌天后本傳などを載畫像を著せり元詩選三の巻に貢師泰が奉二化湄州島祀一天妃一還詩また洪希文が題二聖墩妃宮湄州嶼一詩あり與清曰船靈は船中守護の神にて一には天石楠船神也鳥石楠船とも天鳥船ともいひて伊弉册尊の所レ生也（神代紀上）

古事記上 二には天照太神稚日女尊事代主命也 神功紀古事記神功の段三には住吉神にて神躰は表筒男中筒男底筒男三神に天照太神を加へ又は神功皇后をも加へて四所明神と申す 古事記日本紀神名帳万葉集延喜式二十二社注式諸神記諸社根源記 四には御船神御名は御陰川神といふ 太神宮儀式帳延喜太神宮式儀姫世記神名秘書類聚神祇本源元々集 五には知夫利神也由良姫神とも和多須神とも申す須勢利媛命也 土佐日記貫之集袖中抄神名帳纏日本後紀一宮記 六には浮船神亦名箕宿神也 諸神社錄座年代考神名帳類聚國史 七には船の精神也輕野神能登船霊の類をいふ 此外漢神天妃佛説の守夜神水天宮または豊玉媛命猿田彦大神金咒羅權現などに祈請して渡海安穩を得事也 水天宮のことは覺禪抄に見え 金咒羅權現の事は余別に記せり此等の神いづれも船魂といふべし

(九)持佛 持佛は奉持の佛にて身に添持佛の義也 持經などいへるはたおなじ 觀無量壽經三に佛告二阿難一汝好持二是語一 持二是語一者即是持二無量壽佛名一と見ゆ こは阿彌陀の名號を念持する事なれど持佛の字面の出處とすべし 持佛堂といふは持佛を安置したる堂のよし也 天武紀 十四年三月廿七日詔に諸國毎レ家作二佛舍一乃置二佛像及經一以禮拜供養とあるが家家持佛堂の始といふべし 源氏若紫 八丁 にたゝこの西おもてにしも持佛する忌奉りて行ふ尼也けり云々 同鈴虫 一丁 に入道の姫宮の御持佛どもあらはしいで給へる供養やさせ給ふ云々 同橋姫 五丁 に持佛の御かざりばかりをわざとせさせ給ふ云々 狹衣三の下卷 一丁 に入道の宮は御持佛だうのつまどおしあけさせ給て云云 榮花物語衣珠 廿五丁 に〔御ちぶつのありさまなどいふもをろかなり云々〕 康資王母集に住吉神主國基が持佛堂たて侍りしに妻戸をえさせ侍るとてかくいひつかはしける「まきの戸を西に明てやなかむらんさきたつ月にとつてをして」 明月記天福二年九月十九日の條に賢寂奉レ渡尺迦三尊暫徹レ光奉レ安二持佛堂一云々など見ゆ 此外吾妻鏡一 廿六丁 に持佛堂云々舊本今昔物語十一 十二語 同十五 廿七語 廿六語 廿九語 同廿 などに持佛堂云々 增鏡四 七丁 に持佛云々 五代帝王物語 一丁ウ 二丁ウ 廿 に持佛堂云々 愚記九 廿三 に持佛堂云々 地藏靈驗記五 廿丁 同六 廿一丁ウ 同十 十五丁ウ に持佛堂云々 日蓮注畫贊三丁 眞言傳二十丁ウ 同七 十五丁ウ 照光記 建仁二年三月の六日の條に持佛堂北廂稱二北面一 方々 昇云々 山槐記 治承三年十一月廿六日の條に小持佛堂云々 明月記寛喜元年十一月卅日

の條に故入道殿御忌日恒例事等送二嵯峨僧一許一雖レ奉レ迎二持佛一於二此事一者不レ可二約束一由所二云置一也云々 北野假名緣起中 三丁 神道集六 六丁ウ 古事談三 十五 同五 四丁 同六 十六丁ウ 古今著聞集七 五丁 同十六 卅五丁ウ 發心集六 十六丁ウ 砂石集二上 六丁 同四下 十二丁ウ 同八 六丁ウ 年中行事秘抄上 廿二丁ウ 庭訓往來諸抄大成一 廿六丁ウ 平治物語參考本上 廿六丁ウ 同下 十八丁ウ 九丁 源平盛衰記一 十二丁ウ 同二 六丁ウ 同十一 同四 十六丁ウ 太平記參考本二 卅丁ウ 同四 十六丁ウ 同 卅丁ウ 同十六 百廿四丁ウ 同十二 九丁ウ 又 卅三丁ウ 又 卅四丁ウ 同廿一 五丁ウ 曾我物語三 十三丁ウ 同十 廿丁ウ 同十一 十二丁ウ 同十二 十一丁ウ 鎌倉大草紙上 二丁ウ など所見いとおほかり眞俗佛事編五の卷 十三丁ウ に問吾邦本堂ノ外方丈或ハ寮ノ內に佛像ヲ安ジテ內持佛堂ト云本據アリヤ答曰義淨南海寄歸傳ニ出タリ 彼云僧房之內有レ安二尊像一或故作レ龕食坐之時像前以二布幔一遮障朝々洗沐每鳶ニ香華一午々虔恭隨レ餐奉獻乃至 南海諸洲法 亦同レ此斯乃私房尋常禮敬之軌其寺家尊像並悉別有二堂殿一云々 頭書 法華驗記下 十三丁ウ 持佛堂井蛙抄六ノ九丁ウ 集談部に 持佛堂にいりて障子ごしに云々 制度通七ノ七丁ウに 寢ニテコレヲ祭ルトイフハ注ニ適寢トアリテ正堂ノコトト也今ノ人ノ座敷ト云ノ類也云々此持佛壇ノ類也又十丁オ

(十)遊女 永承三年宇治殿高野詣記に此間江口遊女等擧レ首參近還御之次可レ參之由各賜レ戒返遣了云々 又江口神崎遊女等連レ筥爭レ棹各以率參高年衰邁之者強衒二容色一求レ入具參之烈壯齡歌舞之輩各整二衣裳一偏待二餘恩之及一過二山崎橋下一之間分二給桑絲二百匹納米二百斛 播磨 伊與 所二返遣一也 上下各同數 其次抽レ爲二上首一之者兩三 觀音右衛門 阿古木 諸大夫被レ物蓋依二御定一也其後亦參二御船之邊一有二纜頭之事一云々 頭書 類聚名物考稱號部十一 ○朝野群載三の卷大江匡房遊女記に自二山城國與渡津一浮二巨川一西行一日謂二之河陽一往二返於山陽南海三道一之者莫レ不レ導二此路一江河南北邑々處々分レ流向二河內國一謂二之江口一蓋典藥寮味原樹掃部寮大庭庄也到二攝津國一有二神崎蟹島等地一比レ門連レ戶人家無レ絕倡女成レ群棹二扁舟一着二旅舶一以爲二枕席一聲遏二溪雲一韻飄二水風一經廻之莫レ不レ忘レ家州盧浪花釣翁商客舳艫相連殆如レ無レ水蓋天下第一之樂地也江口則觀音爲レ祖中君 □ 小馬女主殿蟹島則宮城爲レ宗如意香爐孔雀三枚神崎則河孤姬爲二長者一孤蘇宮子力余小兒之屬皆是俱尸羅之再誕衣通姬之後身也上自二卿相一下及二黎庶一莫レ不レ接二牀第一施二慈愛一又爲二人妻妾一歿レ身被レ寵雖二賢人君子一不レ免二此行一南則住吉西則廣田以レ之爲レ祈二徵斐一之處一殊事百大夫道祖神之一名也 人別刻期之數

及二百千一能蕩二人心一亦古風而已長保年中東三條院參二詣住吉天王寺一此時禪定大相國被レ寵二小觀音一長元年中上東門院又有二御行一此時宇治大相國被レ賞二中君一延久年中後三條院同幸二此寺一赴一狛犬愷等之類並レ舟而來人謂二神仙一近代之勝事也相傳曰雲客風人爲レ賞二遊女一自二京洛一向二河陽一之時愛二江口人一刺史以下自二西國一入レ江之輩愛二神崎人一皆以二始見一爲レ事之故也所レ得之物謂二之團手一及二均分之時一慮恥之心去忿厲之與大小諍論不レ異二鬪亂一或切二鹿絹尺寸一或分レ米斗升蓋亦有二陳平分肉之法一其豪家之侍女宿二上下船一之者謂二之濫繕一亦稱二出遊一得二少分之贈一爲二一日之資一愛有髻俵繡絹之名舳取二登捐一皆出二九分之物一習俗之法也雖レ見二江翰林序一今亦記二其餘一而已○本朝文粹九の卷江以言見二遊女一詩の序に二年三月豫州源大守兼員外左典厩春行二南海一路次二河陽一河陽則介二山河一攝二三州之間一而天下之要津也自レ西自レ東自レ南自レ北往反之者莫レ不レ率二由此路一矣其俗天下衒二賣女色一之者老少提結邑里相望維二舟門前一遲二客河中一少者脂粉調唉以蕩二人心一老者擔レ簦擁レ棹以爲二己任一有二夫壻一者責以二其少二淫奔之行一有二父母一者只願以二其多一徵斐之幸一雖レ非二人情一是以二俗事一蓋以二遊行一爲二其名一所謂以レ信名レ之也於戲翠帳紅閨萬事之禮法雖レ異舟中浪上一生之歡會是同余每レ歷二叱路一見二此事一莫レ未二曾爲一レ之長大息一矣何其以二好色之心一不レ近二好レ賢之途一哉云爾○大和物語下六丁に亭子のみかど河後におはしましにけりうかれめにしろといふもの有けり喚につかはしたりければまゐりてさむらふかんたちめ殿上人み子たちあまたさむらひ給ければ下にとほしくさむらふかうはるかに侍らふよし歌つかうまつれとありければすなはちよみてたてまつりける「濱千とりとひゆくかきり有りけれは雲たつ山をあはとこそみれ」とよみたりければいとかしこくめでたまふてかづけ物たまふ「いのちたに心にかなふ物ならはなにかわかれのかなしかるまし」といふ歌は此しろがよみたるうた也けり又云七丁にていじのみかど鳥養の院に御坐にけりれいの如御あそびあり此わたりのうかれめどもあまたまゐりて侍らふ中に音おもしろくよしあるものが侍りやととはせ給ふに遊女ばらの申やう大江の玉淵がむすめといふものなんめづらしうまゐりて侍ると申ければ見させ

給ふにさまかたちも清げ也ければあはれがり給ふてうへにめしあげ給ふそも〳〵まことかなどとはせ給ふにとりかひと云題を人々によませ給ひにけりおほせたまふやう玉淵はいとらう有て歌などよくよみきこのとりかひといふ題をよくつかうまつりたらんにしたがひてまことのことはおもほさんとおほせ給けりうけ給りてすなはち「あさみとりかひある春にあひぬれはかすみならねと立のほりけり」とよむ時に帝のゝじりあはれがり給ふておほんしほたれ給ふ人々もよく酔たるほどにてゐひ泣いと似なくすみかど御うちぎ一かさね袴たまふありとあるかん達部みこたち四位五位これに物ぬぎてとらせざらんものは座よりたちねとのたまひければかたはしよりかみしもみなかづけたればかづきあまりて二間ばかり積てぞおきたりけるかくてかへりたまふとて南院の七郎ぎみといふ人有けりそれなん此うかれめの住あたりに家つくりてすむときこしめしてそれにぞなんのたまひ與けらるかれが申さん事院に奏せよ院よりたまはせん物もかの七郎きみがりつかはさんすべてかれにわびしきめな見せそと仰られければつねになんとむらひかへり見ける○中務内侍日記廿丁にくるれば遊女が舟どもうたうたひ物かずへなどするもをかし云々○榮花物語殿上の花見十九丁にあまの川といふ所にとゝまらせ給ひてあそびどもめしてものどもたまはす人々みな物ぬぎなどす云々同松のしづ枝廿丁に江口のあそび二ふねばかりまゐりあひたりろくなどぞたまはせけるものなどはぬがせたまはず云々○續世繼ゆみのね六の卷十五丁ウ太政大臣伊通のおとゞ云々こんの水干に紅のきぬとか着て馬にて川尻へかねとかいふあそびがりおはしける道に鳥羽の櫻をなんすぎ給ひける云々大鏡八の卷廿丁に亭子院の川尻におはしましゝにしろといふあそび者めして御覽じなどせさせ給ひて遙に遠きよし歌につかうまつれとおほせごとありければよみ奉りし「はまちとり飛行限りありけれは雲立山をあはとこそみれ」いといみじうめでさせ給ひてものかづけさせ給ひき「命たに心に叶ふものならはなにかわかれのかなしかるへき」此しろが歌也又とりかひの院におはしましたるれいのあそびどもあまたまゐりたる中におぼえの玉淵がむすめのこよなくかたちをかしげなればあはれがらせ給ひ

てうへにめしあげて玉淵はいとらうありて歌などよくよみきこのとりかひといふ題を人々のよむにおなじ心につかうまつりたらばまとの玉淵が子とはおぼしめさんとおほせ給ふ承りてすなはち「ふかみとりかひある春にあるときはかすみならねど立のほりけり」などめでたがりてみかごよりはじめ奉りて者かづけ給ふほどのど南院の七郎君にこゝろむべきとなどおほせられけるほどなどくはしくかたる云々又廿二丁にかのあそびどもの歌讀かんじ給へるはさぞ侍る云々○增鏡一の卷廿六丁ウ新島守に道すがらあそびどもまゐるとほたほみの國橋本のしゆくにつきたるにれいの遊女おほくえもいはずさうぞきてまゐれり頼朝打ほほゑみて「はしもとの君になにをかわたすへき」といへば梶原平三景時といふ武士とりあへず「たゝそま山のくれてあらはや」いとあいたちなしや馬鞍こんくゝり物などはこびいでゝ引ばよろこびさわぐとかぎりなし云々○江家次第十五廿四丁オ八十島祭の條に次歸京遊ニ江口一遊女參入纏頭例祿如レ恒云々明月記建仁二年二月十五日の條に今朝路頭遊君各賜ニ衣裳一云云如レ予貧人不レ入ニ此中一兼定一昨日被レ仰調儲以ニ如レ此事一已以出身云々申時如レ例遊女鄙曲等了早出不レ知ニ其後事一云々同廿一日の條に大臣以下會合如レ例懸ニ御簾一立ニ障子一定事也女房見物料也午時許出御云々遊女列坐亂舞如レ例云々同書建仁三年五月十二日の條に今日賜ニ遊女舞女衣一各被レ仰ニ付人々一儲レ之未時退下舞女雖ニ參集一不レ舞例事也云々十三日遊女着坐神崎の妙すべりて顚仆云々○竹崎五郎畫詞五丁に遊君神明鏡下四十一丁ウに遊君撰集抄六廿三丁オ同九十五丁オに遊女長門本平家物語十一廿四丁ウ十二五十二オ十七七十四オに遊女同三七丁五五十七五十七丁ウ十二廿八丁ウ十七七十四丁ウ十八八十二オに遊君平治物語中五十六丁ウ五十九丁オ七十五丁オ平家物語劔卷源平盛衰記曾我物語豫章記太平記承久物語新猿樂記庭訓往來義經記發心集六十八丁オに遊君古事談二二丁オ七丁オ八同三廿一オに遊女古今著聞集十廿三同十三十三オに遊女砂石集七十八丁ウ廿二丁オに遊女十訓抄三十九丁ウ十九丁オに遊女長者夫木抄雜十七遊女の條に難波女たはれめ同傀儡の條にうかれめ是は遊女をよめるにあらず「ウカレ」は心のうかるゝよしなるにあらず此外所見おほし已に筆記卅九の卷に擧たるを見合すべし○万葉集十八の卷六廿六丁ウ大伴宿禰家持敷ニ喩史生尾張少咋一歌に射水河流水沫能余留幣奈美左夫流其兒爾比毛能緒能移都我利安比豆爾保麿里能

布多理(フタリナラビ)雙坐那呉能宇美能於(ノウミノオキヲ)伎乎布可米天左度(カメテサド)波世流(ハセル)迷也伎美(キミガコ)我許己呂能須(ロノスベ)敝奈佐(ヘナサ)○言(サフル)ニ左布流一者遊行女婦之字也云々反歌三首云々左刀妣(サトビ)等能見流(トノミル)目波豆可之(カシ)左夫流兒(サブルコ)爾佐度波須伎美我美夜泥之(ニサトハスキミガミヤデシ)理夫利按(リブリ)に左夫流(サブル)は「そぼる」の通音也源氏若菜上百三丁に梨子かうじやうの物さま〴〵に箱のふたどもにとりまぜつつあるをわかき人々そぼれとり給ふ云々胡蝶十二丁に書ざまいまめかしうそぼれたり云々床夏廿四丁うちとけそぼれたるはさるかたにをかしうつみゆるされたり云々狹衣一の上十一丁に扇など打ならしつゝわらひそぼるゝけはひども云々此外物におほく見えてたはぶるゝにいへりされば佐夫流兒は戲兒の義にてたはれめどいふにおなじ然て遊行女婦の字も「サブルコ」とよむべし同十九の卷廿三丁オに遊行女婦蒲生ノ娘子歌一首云々又廿四丁ウ右二首傳誦遊行女婦蒲生是也云々與清曰遊女傀儡といへど歌題には遊女は水邊に住て船にて色を衒者の事とし「アソビ」又「タハレメ」など同物とす江口神崎室高砂の遊君これ也傀儡は匡房の傀儡子記に見え所定めず色を衒ありき或は宿驛にありて往來の人に一夜のやどをかす婬女にいへり青墓池田野口黄瀬川大磯橋本手越などの類その在所いとおほかりうかれめともいふ遊行女婦これ也夜發も辻君立君の類にて夜陰に色を衒者と見ゆされど和名抄には楊氏漢語抄云遊行女兒宇加禮女一云阿曾比今案又有ニ夜發之名一俗也保知本文未レ詳但或說白晝遊行謂ニ之夜發一也と見えて遊女は遊行女兒の略語「ウカレメ」「アソビ」も同物のよし也さて遊女傀儡の權輿は何時ばかりなりけん万葉に見えたる佐夫流兒より以前にはをさ〳〵きこえず白拍子は信西が作爲にて島千載和歌前を祖とし祇王祇女佛前靜千壽龜菊などその名高くきこゆ遊女の字面は周南漢廣章を出處にてから書に所見おほし遊女長者は自身も色を衒ひ從女をも遊女にせし成べし又花街を地獄といふと一休和尙狂雲集下四丁に洛下昔有ニ紅欄古洞兩處一曰ニ地獄一曰ニ加世一又安衆坊之口有ニ西洞院一諺所謂小路也歌酒之客過ニ此處一者皆爲ニ風流之淸事一也今街坊之間十家四五娼樓也淫風之盛幾ニ乎亡國一とあり遊君別當は里見冠者義成を補らせれし事吾妻鏡に出たり【頭書】地獄(疾名は土岐といふべし五雜俎八の卷廿丁オに見ゆ

（十一）麻呂　麻呂は卑下の詞といふは賀茂眞淵說に賢を「カドアリ」と云に對へて才なく圓なりと云意にて愚なる由の稱也と云々此說うけがたし又自稱無禮の詞といふは枕草子（春曙抄本二の卷十二丁ウ）に御前にて物をいふともきこしめさんにはなどてかは丸がなどいはん抄に帝の開召所にては殿上人公達の我事を丸がなどはいはぬ事ぞと也至尊に憚る故也是も詞無禮やうならぬ敬成べしと有によれる說也これはた正說ならずそもそも麻呂といふ詞は古事記應神紀吉野の國栖等が歌に「橫臼に釀し大御酒うまらに聞し以食せ麻呂が父」とあるを古き所見とす日本紀應神紀にも出たり麻呂は身等の通音にて呂は助辭也兒呂兒等なども兒といふに助辭を添たるにて呂とも等とも通はしいへり等は群にて牟眞を省て眞といふより借用たる字なれば兒等の等は字義に泥事なくたゞ眞の假名とすべし　呂と等を助辭に用たる例おほく麻と身の通ふは論なければ必身等の義なるべし我を阿禮和禮などいふ禮も等呂の通音にて助辭也己も自等也古今の序に「まくらことば」とあるを一說に「まろら」とし我等詞なりといへるは重言なるがうへに外に麻呂等といふ證なければうけがたし伊勢物語歌に「つゝゐつゝ井筒に及しまろか丈生長にけらしなあひ見さる間に」拾遺戀三に「夏草のしけみに生るまろこ菅まろかまろねよいく夜へぬらん」同戀四に「旅人のかやかりおほひつくるてふまろやは人を思ひわするゝ」蜻蛉日記に「打そはみ君ひとり見よまろ小菅まろは人すけなしといふ也」此等のまろは皆身等の義としてきこゆ（から書にも例有て蜀志張飛傳に飛據レ水斷レ橋瞋レ目橫レ矛曰身是張益德也と見えし身の字マロ」といふにあたれり　又他を指て「おのれ」已「おのれ」也などいふも己等己之等なり古事記上卷に須佐之男命遙望二呼大穴牟遲神一意禮己とも是奴とも詔しは親て意禮といひ御許に召仕たまひしゆゑ是奴といふはた親愛の詞也神武紀に虜爾所レ造屋爾自居レ之と（爾此云二ヤツコとあるは虜はいやしめ罵れる詞也爾は自身にて自身が造れる室には自身入居よと也　枕草子春曙抄の十の卷十一丁ウに郭公をいとなめくうたふこゑぞ心うきほとゝぎすよおきよやつよおきなきてわれは田にたつとあるは郭公が鳴てより田におり立を心うきわざと植女が罵るうたへる也）又それがしも其等がしくれがしも彼がしにて此等の禮も呂におなじ助辭也されば麻呂は身等の義なると疑なし吾身の事にいふより物を親愛ていふ詞とす奈良京の比の人名に某麻呂といへるは其父母などが親愛て吾身の如く思ふよしにて名づけし也古くも繼躰紀に麻呂古とあり後世は近習の僕從兒童の名とし轉りては小鳥丸（刀名）鬼切丸（同上）翁丸（犬名）綠丸（鷹名）阿竹丸（舟名）などの類刀劍器物生類にさへおほせしはその主君の親愛によれる名也又いやしむるやうなる心にも用ひ猿丸イナゴ丸などもいふめれどこれももと親愛の心なきにあらず然て高貴の兒息にも三法師丸など名づくる類は其君父よりおほせ給ふか又自稱には身等といはんは事もなければ然るべし下ざまより奉らんにはあるまじき稱也麻呂を合字に麿とも書き滿丸などの字を書るはもと假名の上なれば意義あるにあらず（頭書阿彌陀丸今昔十五ノ廿六語）

右麻呂考　　年　月　日

水戸相公公御嫡子御誕生之時御名可レ用二麻呂一之語邪否耶當二勘進一之由蒙レ命而所レ奉二考注一也

松屋筆記卷之七十

東都　平與清文儒稿

（一）達者達人　禪林類聚十四の卷（日月部五十五丁ガ）に松源岳云描不レ成兮畫不レ成臥龍長怖碧潭清擬レ心湊泊終難レ會達者應須二暗裏驚一云々保元物語（參考一の卷（五本）十八丁）に打物取テモ達者ニテ云々同二の卷（廿八丁ガ）に鎭西ソダチノ者ナレバ步行立ハ定テ達者ニゾ有ラン馬上ニテノ達者ハ武藏相摸の若者ドモニハ爭カ勝ルベキ云云同書三の卷（五十五丁カ）ニ師長ハ管絃ノ達者ナリ云々吾妻鏡一の卷（四十六丁カ）に爲二弓馬達者一之上云々同十一の卷（廿一丁カ）に鎭西八郎者吾朝無雙弓矢達者也云々古今著聞集五の卷（五十四丁ガ）に重代の達者定家卿につがひて云云遊庭秘抄（十五丁ガ）に達者の後の上まりの振舞とて云々又（十九丁カ）これ達者の振舞也云々又（廿五丁カ）何の道にも達者にわたらせましくければ云々庭訓往來に連歌之宗匠和歌之達者云々太平記（參考本）十四の卷（七十七丁カ）に水練サヘ達者ナリケレバ云々同廿一の卷（四十八丁ガ）に弓箭ノ道ノミナラズ歌道ニサヘ無雙の達者ナリケリ云々豫章

記廿八丁ウに二人ナガラ船達者ナレバ云々節用集太部言語門に達者タッシャ云々運歩色葉概多部に達者タッシャ云々など此外にも達者の字面おほかるべし今おもひもよれるを擧又達人も同義也徒然草百九十四段に達人の人を見る眼はすこしもあやまる所有べからず云々節用集太部人倫門に達人タッジン云々運歩色葉集多部に達人タッジシ云々左傳に其後必有二達人一云々列子に端木叔達人也云々漢書賈誼傳鵩鳥賦に通人大觀分物無レ不レ可云々通人一作レ達云々文選陸士衡弔二魏文帝一文に善乎達人之讜言矣云々 白氏文集六十九の卷 碑主銘序に非二達人一乎云々などこれかれ見えたり

頭書耕雲口傳廿一丁ウに京極入道中納言以來御子左の一門此道の人を執するより歌人は皆彼家には達者と歌寄とゐならぶるに達者よりは歌寄の鑑綱目禮編十七五十七丁ウに未達者の字面あり

（二）堪忍不堪　堪忍の字以呂波字類抄太部疊字に堪忍タンニン云々又加部疊字に堪能カンノウ堪忍カンニン云々節用集加部言語門に堪忍カンニン云々など見えたる堪の字タンの音に從へるは誤也カンニンといふべしまた不堪も不堪能の義なればフカンといふべしフタンとはいふべからず節用集不部言辭門に不堪フカンと有字書にも勝任などの義にては音戡カン也「タン」「タフル」などよむ是也「タン」堪輿などの義にてタ、フルと訓べし不堪の字は家語に子貢曰吳王爲レ人猛暴群臣不レ堪云々と見ゆ共に韻府など捜てもいふべけれどわづらはしさにさてやみぬ

（三）垂髪并童髪　垂髪の事已に六十九の卷にいへり又所見を追擧す江家次第十七十六丁ウ御讀書始の條に寛和著二御織物御直衣一御垂髪歟可レ尋レ之云々台記康治元二五の條に參二高陽院一垂二菖蒲髪一始置也云々同十一廿二の條に參二宇縣一小兒弟始垂レ髪二歳一明年閏月明後年四歳仍今年有レ之云々同二年十二三の條に今九菖蒲丸弟也予庶子來垂レ髪始垂也三歳申刻詣二石清水一云々同天養二年正四の條に菖蒲表衣指貫垂髪云々同久安三年六十一の條に爲レ垂二乙麿髪一也云々按に二三歳にて垂髪し四歳を忌閏月ある年を忌よし也

頭書玉海文治元年十月七日ノ條ノ所見垂髪本書五十九ノ廿五章に見ユまた童髪と云事山槐記治承三年十二月九日ノ條ノ所見四十ノ十九章に見ユ景德傳燈錄五の卷音釋に賢田聊切童子童髪也同十二ノ廿六丁ウ

（四）漏剋土圭　齊明紀六年五月十二丁ウの條に皇太子初造二漏剋一使二民知レ時云々

頭書漏刻六續大續分合五十一ニ漏刻ノ一見ユ

按に皇太子は天智天皇也漢土の制に習て作出給へる成べし

○天智紀十年十七丁ウに夏四月丁卯朔辛卯置二漏剋於新臺一始打二候時一動二鐘鼓一始用二漏剋一此漏剋者天皇爲二皇太子一時始親所レ製造一也云々按に打候時の打字或說に伺の誤にて伺ウカヾフ候時一と訓べくやといへりいづれにても有べし此は始て漏剋を用て時刻を測り鐘鼓を打鳴して都下に聞知らしめたる也万葉集十一の卷廿六丁に時守之打鳴鼓數見者辰爾波成不相毛惟トキモリノウチナスフミヨミレバトキニハナリヌアハナクモアヤシ古今六帖四ウ時もりの打ならすつゝみ數見れはたつつにはなりぬあはやしもと訓たり延喜陰陽式五丁に風撞二漏刻鐘一料松木一枝一本周三尺長一丈六尺隨レ損令二左右衛門府卒採送一其綱料熟麻三十斤隨レ損申レ省請二大藏省一云々又十一丁ウ諸時擊レ鼓子午各九下丑未八下寅申七下卯酉六下辰戌五下巳亥四下並平聲鐘依二刻數一云々大藏式六丁ウに凡懸二陰陽寮一漏刻臺料舊幔二條隨二破損一即充行云々などあるにて時の鼓時の鐘の事知べし陰陽寮鐘樓漏剋臺などは枕草子百練抄中右記山槐記文德實錄などを引て大内裏考證廿三の卷にいへり時の數を子午に九丑未に八ッ打などはもと大亥經に据れる說也○職員令陰陽寮の條に漏刻博士二人掌レ率二守辰丁一伺漏剋之節上守辰丁二十人掌レ伺二漏剋之節一以レ時擊二鐘鼓一按に博士は漏剋の事を推究て守辰丁に教る者也守辰丁は辰ヒを守る丁ヨホロの義也鐘を撞鼓を打もこれが役也漏剋に据て時刻を知りさて鐘鼓の音を發す也○延喜大藏省式六丁ウに凡懸二幔陰陽寮漏刻臺一料舊幔二條隨二破損一即充行云々按に陰陽寮に漏刻の臺を設て壺を挈置也壺より漏水を測て時を知る也さて漢土にては黄帝創二漏水一制レ器以分二晝夜一よし三才圖會に記し說文に漏以二銅壺一受レ水刻節二晝夜百刻一と見ゆ○朝野群載一の卷藤敦光十二時漏刻銘并序あり其銘に漏刻之器神造云彰起レ自二軒后一及二于夏商一衛宏著述陸機宣揚各乘二規矩一更載二繩繀一銅渾二天度一尋二其濫觴一沙門日覺舉二其顛綱一夢中案レ術意端思量新作二斯器一率二由舊章一春夏分至晝夜短長錙銖無レ爽圭撮是詳指南童子立二其中央一司辰神將現二其正陽一四維守レ位十干辨レ方時分二四點一暑移二三光一如レ運二斗柄一似レ轉二星芒一蘊レ奇孕レ恠昏間在レ傍永久四年五月十一日按にこれ漏水壺にあらず今の自鳴鐘の類といふべしされど水を用て機關を施せる物と見ゆればこれはた漏剋の名を免るべけんや漏刻の記は郡氏文集五の卷對策にも見ゆ○百練抄七の卷十後白河保元二年の條に十一月十三日酉刻被レ置二漏刻器一年來斷絶書也○雪玉集

三の卷六丁ウ秋部に七夕即事「宮のうちにもる玉水もおとすみてふくる夜をしき星合のかけ」○和漢三才圖會十五の卷墓財部に自鳴鐘俗云ニ時計一五雜俎曰西僧瑯瑪竇有ニ自鳴鐘一中設ニ機關一每レ遇ニ一時一輒鳴如レ是經レ歲無ニ頃刻差訛一也亦神矣今占候家時多不レ正至レ於選ニ擇吉時一作レ事臨レ期但以臆斷耳烈日中倘有ニ圭表一可レ測陰夜之時所レ憑者漏也而漏已不レ正矣況於ニ山邨中一無ニ漏可レ考哉故知興作乃推ニ祿命一者十九不レ得ニ其眞一也按土圭一名以ニ八尺板一爲レ表竪レ之以測レ晷知ニ時刻一定ニ夏至冬至之差一曆家者流必用之器也漏刻盛ニ水於桶一量ニ所レ漏水一知ニ時刻一其巧甚精矣天智帝十年始作ニ漏刻一撞ニ時辰之鐘一然近頃有ニ自鳴鐘一以來無ニ如レ之者一而俗名ニ時計一有ニ樓時計一有レ臺形如ニ鐘樓一上安ニ自鳴鐘一機自旋鳴有ニ懷中時計一形甚小可ニ入ニ懷中一有ニ掛ニ家柱一有ニ二錘一錘自昇ニ阿蘭陀人始將來一皆中機如ニ車輪一者刻齒多相接機轉運旋用レ鐵作レ之名ニ世牟末伊一是乃旋機之根也頭書永祿年間近江ノ安土城ヲ始諸國ニ切支丹宗ノ永祿寺ヲ立後ニ大成寺ト改ム此大成寺ニ自鳴鐘ヲ懸タルヿ耶蘇征伐記ニ見ユ破邪集王豐甫犯案云于ニ万曆二十九年三月內一前到ニ南京西營街一居住先十年前有ニ瑯瑪竇一名迪峨郭居靜運儒望等一已分ニ住南京等處一此瑪竇妄進レ京貢獻一寄ニ書潞中一到ニ王豐甫處一索ニ取方物一進獻於レ是自鳴鐘玻璃鏡等物前來此時身瑪竇先已進レ京隨ニ將方物一進等件一寄ニ進京一貢獻云々自鳴鐘ノヿ通雅十一ノ十七丁ウ○日本紀通證卅一の卷十丁オに荒井氏謂慶長中日記作ニ斗雞一此明人所レ譯ニ番語一也蓋此器有ヿ如ニ北斗象一者故曰レ斗自鳴而報レ時無レ差故曰レ雞按に斗雞の字說は鑿說なるべしこは日景を測る器を土圭といひてそれは晝の時を知り漏は夜の時を知る器なれば云及ぼして漏をも土圭と呼る也それより轉りて自鳴鐘をも土圭といひけんこと疑なし斗雞時計などの字共に推量の俗意也用べからず土圭は文選三の卷張平子が東京賦に昔先王之經レ邑也掩ニ觀九隩一靡ニ地不ヿ營土圭測レ景不レ縮不レ盈總ニ風雨之所ヿ交然後以建ニ王城一注に鄭玄曰土度也縮短也盈長也謂圭長一尺五寸夏至之日竪ニ八尺表一日中而度レ之圭影正等天當レ中也若影長ニ於圭一則太近レ北圭長ニ於影一則太近レ南近レ北多レ寒近レ南多レ暑近レ東多レ風近レ西多レ雨總猶レ括也云々水經注廿二の卷二丁オに潁水逕ニ其縣一故城南昔舜禪レ禹禹避ニ商均一伯益避レ啓竝於レ此也亦周公以ニ土圭一測ニ日景一處云々など見ゆ周禮に圭淮南子に影圭景柱廣雅に晷柱掛影易緯に八神など見え楊升菴外集に日圭ヒドケイ月表ツキケイあり三才圖會人事部十の卷四十三丁オを考べし頭書玄義十の卷四十三丁オにも土圭の事見ゆ○續日本紀卅三の卷十五丁オに寶龜五年十一月乙巳陸奥國言大宰陸奥同警ニ不虞一飛驛之奏當レ記ニ時尅一而

大宰既有ニ漏尅一此國獨無ニ其器一者遣レ使置レ之按に日本逸史にも阿牟公人是もと大安寺僧なりしに令レ造ニ漏刻一帝嘉ニ其功一還俗せしめ外從五位下を授られし事見ゆ御湯殿上記慶長三年十月十九日の條にも見ゆ佛祖統記廿七の卷釋惠遠が連花漏あり梁書僧傳にも出づ中山傳信錄に玻璃漏ありこは硝子にて作れる沙時計也船中里數を量る用とす頭書蓮花漏の圖三才圖會器用二燈漏沙漏ノヿ通雅十一ノ十七丁オ○與清曰今俗登計伊をもて時を量る器の惣名とすこはもと漢土に黃帝漏水器を製て時刻を知事を敎へしより漢晉以來其工巧を極む梁の惠遠法師が蓮花漏はまた一きは工夫をそへたる也燈漏あり沙漏あり通雅十一に燈漏の製傳はらず沙漏は瓶に沙を貯るよしへり本朝天智天皇まだみこにおはしましほど始て彼に學びて漏尅を作り出給へるは實に齊明天皇の六年五月也御即位の後十年四月これを新臺に置て時鼓時鐘のより所とすさて陰陽寮に樓臺を設て漏刻博士二人漏尅を司り守辰丁十二人をして時鼓時鐘を擊しめ都下に時刻をしらせ群臣朝參の便とせりその時を打數をから國におなじく子に九ッ未に八ッ申に七ッなど定られたるはもと大玄經の說に出たる也大宰鎭守

の二府にも此器を置て不虞に備へし事は續日本紀に見ゆ鳥羽院の永久四年沙門日覺が奇妙の漏尅を作り出たるは今の自鳴鐘にやゝ近きさまといふべし崇德院の大治二年陰陽寮の漏尅樓燒亡の時漏尅等ノ具は取出たるよし中右記百練抄に見えたれどその後いつばかりたえにけん保元二年十一月十三日年來斷絕の漏尅器を再置れしよし百練抄に記せりいとくだりて逍遙院實隆公の雪玉集に宮の內にもる玉水とよまれ御湯殿上記の慶長三年十月の條にも見えて廢もし興されもしけん詳なるとは知べからず自鳴鐘は采覽異言五の卷新伊斯把儞亞條に慶長十五年秋新伊斯把儞亞商船過レ洋遇レ風漂至ニ我東地一舶艫盡碎官命繕治乃給ニ資糧一而還十七年夏其國遣レ使來聘以謝其禮物有ニ自鳴鐘一口一我有ニ此制一實自レ是始と見ゆ今は櫓士圭懷中士圭根付士圭里數士圭などさま〴〵の躰裁あり大司徒之職掌建邦之土地之圖と云條を引べし本朝製に舶來にその奇巧目を驚せり士圭は周禮春官典瑞の條に士圭以致ニ四時日月一者度ニ其景至不至一以知ニ其行得失一也冬夏以致レ日春秋以致レ月土レ地猶レ度レ地也封ニ諸侯一以ニ土圭一度ニ日景一觀ニ分寸長短一以制ニ其域一所レ封

也鄭司農說以玉人職曰土圭尺有五寸以致ㇾ日以土ㇾ地以求ニ地中一故謂ニ之土圭一とありて同類の器なれば自鳴鐘にいひ及ばしたる俗語也易諱淮南子張平子が東京賦など土圭の所見擧に遑なく〳〵其名目もさま〴〵也意伊といふも登機を延たる辭にても有べし○名物六帖器財箋三醫卜算候の部に漏刻ロウコク文選六臣注浮漏ロウコク制作原始刻漏ロウコク潜確類書銅壺ロウコク玉海蓮花漏レンゲロウ唐三體增註蓮漏レンゲロウ三才圖會更漏ロウコク圓機活法沙漏スナドケイ博物志補漏箭ロウコクノヤ杜詩浮箭ロウコクノヤ三才圖會退水孔ミヅヌキノアナ三才圖會十二時輪子トケイ元文類自鳴鐘トケイ五雜俎時規トケイ鄉談輪子トケイ正音十二時日晷ヒドケイ會典云々按に五雜俎二の卷四十丁ウに西僧瑯瑪竇有ニ自鳴鐘一中設ニ機關一每レ遇ニ一時一輒鳴如レ是經レ年無ニ頃刻差訛一也亦神矣と見ゆ○文藻行潦一の卷止部器財門に候鐘トケイ寄所寄云云按に通鑑綱目續編廿七の卷十一丁ウ元の順帝至正十四年の條に宮漏始造の事見ゆその體日覺が夢得の物に似たり○雍州府志六の卷廿七丁ウ土產門上頭書和爾雅五の卷雜器部に自鳴見ニ于五雜俎一今鐘俗云ニ土圭一云々

（五）古書御搜索　下總香取郡鏑木村村長平山伊右衞

門平光風が家に書物御搜索の御書付の寫ありそこは原田源八郎が知行所也高八百石小日向服部坂上當主鈴之助といへり

覺

一目錄之書籍共御用に候間所持候ば可ㇾ被ニ差上一候自分所持無ㇾ之候ば家來又領知之寺社百姓町人等に至迄相尋右之書於ㇾ有ㇾ之者差上候樣ニ可ㇾ被ㇾ致候

一新國史より風土記迄ハ御藏ニ全部無ㇾ之候

但風土記は豐後出雲御藏ニ有ㇾ之候

一本朝月令より類聚國史迄書付之通卷數ハ御藏ニ有ㇾ之候得共端本にて候此關卷之分所持候者可ㇾ被ニ差上一候

一右書物之義に付而承合候事も候はゞ林大學頭父子江可ㇾ被ニ相談一候

以上

寅正月

目錄

新國史　本朝世記　寬平御記
延喜御記　律集解　令
令抄　弘仁式　貞觀式

法曹類林　爲政錄　風土記
本朝月令 一卷三卷ヨリ六卷マデ
律 二卷ヨリ六卷マデ八卷ヨリ十二卷マデ
令集解 二十五卷ヨリ二十七卷マデ三十七卷三十九卷
類聚三代格 二卷四卷六卷九卷ヨリ十一卷マデ
類聚國史 六卷ヨリ八卷マデ十卷十二卷ヨリ十五卷マデ十七卷ヨリ三十卷マデ三十三卷ヨリ三十五卷マデ四十一卷ヨリ四十六卷マデ四十八卷ヨリ五十三卷マデ五十五卷ヨリ七十卷マデ七十六卷ヨリ七十九卷マデ八十一卷ヨリ八十六卷マデ八十八卷ヨリ百卷マデ百四十八卷ヨリ百五十八卷マデ百六十卷ヨリ百六十四卷マデ百六十六卷ヨリ百七十卷マデ百七十二卷百七十四卷ヨリ百七十六卷マデ百七十八卷ヨリ百七十九卷マデ百八十一卷ヨリ百八十四卷マデ百八十六卷ヨリ二百卷マデ

以上

右之通御書付御尋ニ候所持之者於ㇾ有ㇾ之者可ニ申出一候以上

寅正月

源八郎

按に平山伊右衞門は今玆天保三年七十七歲にてそれが未ㇾ生以前の事也といへりこは伊右衞門が祖父忠兵衞が時に地頭原田源八郎が下せし書付也とぞ遺書購求は聖代の美事六經も漢武の求遺に出通鑑これを稱譽せるとあまたゝび也

（六）善知鳥安方（ウタフノヤスカタ）　善知鳥（ウタフノウタヒ）謠詞は結崎（ユフサキ）の世阿彌が作也世阿彌は康正元年に八十一歳也しといへば其時代おし量るべし其詞曰「陸奥のそとの濱なるよふこ鳥なくなるこゑはうたうやすかた」云々此身はおもき罪科の心はいつかやすかたの鳥獸をころしゝ衆罪如ニ霜露一恵日の日にてらしたまへ云々あはれやげにいにしへはさしも契りし妻や子も今はうたうの音に鳴てやすかたの鳥のやすからずやなにころしけんわが子のいとほしきごとくにこそ鳥獸もおもふらめと云云抑うたうやすかたのとり〳〵に品かはりたる殺生の中にむざんやな此鳥のおろかなるかな筑波根の木木の梢にも葉をしき浪のうき巣をもかけよかし平砂に子をうみて落鷹のはかなや親はかくすとすれどうたうと呼ばれて子はやすかたとこたへけりさてぞとられやすかたうたう親は空にて血の涙を〳〵降せばぬれじとすが蓑や笠をかたぶけこゝかしこのたよりをもとめてかくれ笠かくれみのにもあらざればなほふりかゝる血の涙に目もくれなゐに染わたるは紅葉の橋の鵲か娑婆にてはうたうやすかたと見えしも〳〵冥途にしては化鳥となり罪人を追立鐵の觜をならし羽をたゝき銅の爪をとぎ立ては眼を抓でしゝむらをさげはむとすれども猛火の烟にむせんで聲をあげえぬはをし鳥をころしゝ科やらん逃んとすれど立得ぬは羽ぬけ鳥のむくいかうたうは却て鷹となり我は雉とぞ成たりける云々○古抄（四丁ウ）にミチノクノソトノ濱ナルヨブコ鳥鳴ナル聲ハウタウヤスカタウタウハシレズヤスカタハ在名乎云々按に此謠曲に載たる陸奥の外の濱なるよぶこ鳥なくなるこゑはうたうやすかたといふ歌寛永十六年の鰹重常が春雨抄（六の上卷）に引て夫木の歌とすされど余契沖法師が校本村田春海翁家の古寫本屋代弘賢所藏の古寫本等を校合せるにいづれの本にも見えざればおぼつかなし万治三年刊行の宗惠松葉集（六の卷）寛文十二年の高野氏直が和歌名所追考（百十一の卷）延寶五年刊行の類葉集（五の卷）寶永二年刊本の陸奥名所寄（濱部）などにも夫木の歌とて載たるは春雨抄の誤をうけたる也此歌古歌なるを謠詞にとりつと見ゆれど未その出處を見ず○秘藏抄（下卷鳥部）に業平「ますらをのえんひな鳥をうらふれて涙をあかくおとすよな鳥」ますらをとは下衆（ゲスウト）男を云也よな鳥とはうたうと云鳥をいふ也えんひな鳥とはその鳥の子を云也

此うたうと云鳥は海の澳の洲などに穴をほりて子をうむ也その子を人の取に行ばわびうらぶれてはうらむる也されば子を思ふ鳥也云々按に秘藏抄は後人が躬恒に依託して作れる書也上中下三卷古語深秘抄に載すえんひな鳥は得ん雛鳥にて益荒男がその雛を得んとすれば親鳥がうらぶれなげきて紅の涙をおとすよし也又按にえんひな鳥はよぶひな鳥にてえんとよぶは通音也よな鳥は親鳥を云なるべしさて鴆と書てウタウとよむも澳洲に穴をほりて子をうむといふによれる作字と見ゆ○藻鹽草（十の卷鳥部）やすかたの條に「子をおもふ涙の雨の笠の上にかゝるもわびしやすかたの鳥」大神宮へ勅使下りてうとうやすかたといふ鳥を取て三角柏と云柏に備て神供に奉ると也此鳥とるものは蓑笠をきてとる也其故は砂の中に子をうみてかくしたるを母鳥のうたうがまねをしてうたうとよべばやすかたと云てはひ出るをとる也其時母空にかなたこなたへつきありきて鳴涙雨のごとくに血にてふる間其涙かゝりて身のそんずる故に蓑笠をきる也と云々○築島草子にかくするほどに人柱の吉日吉時にもはやなりぬ三十の籠をつくらせ三十人の人柱を牢よりも籠にいれさせ船一艘に一人づゝとぞさだまりける妻子したしきものどもが近國他國より來つてなうあれは我子か我父かあるひは兄弟なんどゝてりうていこがれかなしむを云々姫は涙のひまよりも御道理にておはしますゆるさせ給ひ候へやみづからともにしづみつゝ御手をひかへて三途の川死出の山ぢをこえすぎてゑんまの廳の御供を申すべきにて候ぞやみづからをも此かごにそへさせ給へ人々とてもだえこがれかなしめば父もかごのうちにして泣てはくどきうらみてなくうたうがながす血のなみだ今こそおもひしられたれ云々○新撰歌枕（四の卷陸奥國部）率都濱條に西行「みちのくのおくゆかしくそおもほゆるつほの石文そとのはまの風」右そとの濱と云所にうたうやすかたと云鳥の侍るが此濱のすなごの中にかくして子をうみおけるを母のうたうがまねをしてうたうとよべばやすかたとてはひ出るをとるぞと申其時母鳥きたりてあなたこなたへつきありき鳴なり其涙の血のこき紅なるが雨のごとくふる也ある歌に云「子を思ふ涙の雨の血にふれははかなきものはうたうやすかた」とよめりとか人此血をかゝりつ

ればそんじ侍る時に血をかゝらじとてみのかさをきる也といへり歌に「子をおもふ涙の雨の蓑のうへにかゝるもかなしやすかたの鳥」とよめり云々○後藤光生が物品目錄後編下卷羽屬部に善知鳥奥州卒土濱有之特津輕安潟浦邊多其狀類二嗑木菟一而大頭背翅黑色帶二紺色一胸胸淡黑有二里斑文一腹白翅端尾末交二白色一脊黄脊上有二肉疣一而淡緑色脚淡黑帶二赤色一有レ蹼云々○貝原好古が大和本草十五の卷六丁水鳥部に和品善知鳥若水曰奥州ノ津輕外ノ濱ノ邊ニ多シ其形パンニ似テ味脚モパンニ似タリ頭ハ鳧ノ如シ嘴ノ上ニ肉角アリ赤色也脚赤シ背ノ毛淡黑腹ノ毛白色是パンノ類ナルベシ和名未レ詳善知鳥ハ國俗ノ所レ稱也云々○奥羽觀迹聞老志三の卷土産上に安方鳥或潟宇或號二善知鳥一相傳是所レ產二于外濱一也近來春夏之交商賣レ之其大似二小鳧一而通形淡黑長首尖脊脊脚共黄色但自二頷下一至二下腹一純白商人曰二之善知鳥一食レ之則有レ脂甚美其好味不レ減二綠頭鴨一此鳥不レ審二眞僞一焉然以二歌謠所レ述之趣一而考レ之則其肉足二以供一鼎實一其味足二以養一脾胃一故業レ之者亦貪レ多務レ得而至二專害一生致レ殺如レ此之酷一與識者詳焉云々同書十二の卷津輕郡部に安潟村在二外濱青峰山畔一此地有レ鳥產二子于沙上一人捕二其子一則悲鳴殊甚土人曰二沙鳥一或稱二善知鳥一或號二鳥鶏一云々○吾妻鏡十の卷八丁に於二外濱與一糠部一間有多宇末井之梯一以二件山一爲二城郭一兼任引籠之由風聞云々按に要目集成に此ノ假名誤レリ於二外濱與一糠部一間一有二多宇末井之梯一ト讀ベシ津輕ノ鎭靑森ノ東六里許濱手ノ山際野内安佐虫ノ間道ノ絕タル所アリ其所ニ板ヲ渡シ運路トス夫ヲ今モタウマキノ梯ト云此邊ヲ惣テ外濱ト云其内廿町許ノ間一重身ニナリ石ノ尖ヲ渡ル道アリ春夏秋ハ山ノ上道ヲ通リ多ハ雪深キ故ニ北濱ノ難處ヲ往來スル也渡シタル橋波ニ引ルレバ又次ニ來ル波ニテ岩ノ鼻ヘ打上ルヲ待テ通ルト云其處ノ山上ニ兼任ガ籠リシ城ノ形モ今ニ殘ルト云と見えたれど此說いかゞあらん有多宇末井の梯を俗言に省て多宇末井といふらんも知べからず有多宇は地名に例あれば必有多宇末井之梯なるべくおぼゆ廻國雜記に武藏河越の烏頭坂あり或戲作者の書たる烹雜記上卷十八丁といふものに佐渡國雜太郡相川の鎭守を善知鳥大明神と號す神明春日の兩社同所に相並て立せ給ふこれを相川の三社と稱せり土俗の說に善知鳥の神

社は周の景王の御娘を祭るといへりこは妄誕なるべし云々善知鳥は出崎といふがごとし陸奥の方言に海濱の出崎をうとふといふ外濱なる水鳥に脊は太くて眼下肉つきの處高く出たるあり故に之をもうとふといふ彼鳥の脊にたとへて出崎をうとふといふか出崎に比べて彼鳥をうとふといふ歟何にまれさし出たる處をうとふと云は東國の方言也美濃の御嶽驛の東にうとふ村あり信濃にうとふ坂あり今は烏頭と書く之らみなさし出たる所なればうとふと云なるべし云々此出崎の地をうとふといへる說さもやおぼゆ類聚名義抄に嵓ウタフとよめるは口偏の字なれバ嵓義にや旁の崖に據れば涯岸の所とすべし又脊の貌によりてウタフといふよしいへるはなくなるこゑはうたうやすかたとよめるにも心付ざる僻說也すべて我古學者流ならではかゝる名義などの考はいとかたはらいたき事のみおほかり古物名をおほするは打見打聞のさまによれるにて生類は捕得て後其形を按檢して名づけ草木は伐取て後其色を分別して名付るなど物遠き事にはあらずカリ〳〵と鳴を聞て雁とよび丈高く生出たるを見て竹とよぶ類也○倭漢三才圖會四十一の卷水禽部に善知鳥正字未レ詳俗云二宇止布一按善知鳥鴫之屬形色似レ鴫而脊黄末勾脚淡赤色奥州卒土濱有レ之特津輕安潟浦邊多云々○古河辰が東遊雜記九の卷に八月廿三日靑森に止宿す云々此所に善知鳥の社と稱せる社頭御巡見所なり此事跡は歌にもよみ書にもあらはし或は謠又は淨瑠璃までに作りて世に知る舊跡なるに土人の云傳事もなく善知鳥いかなる物と古へより知人もなく社も漸方一間半の龕相の小社にて社家別當の家にも云傳へし事更になく善知鳥の□は藝州嚴嶋明神といふ社有是は昔此地へ勸請せしといふのみの事也傍に宗像明神の社有御領主津輕侯の御建立の社といふのみにて龕相の事にて名に聞しとは大違ひの所也百聞一見に不レ及と世にはかゝる事のあまたあるもの也善知鳥の說いろ〳〵といふ事ながら和歌者流好事の說にして埒もなき論也云々按に東遊雜記の圖を考れば安潟も善和鳥も地名社名也○新撰字鏡鳥部に鴇鷸二字豆支又云太宇云々按に異本鷸作レ鷁宇作レ守さては又云太守にや外の例を考に又云の云の字用例たがひたれば誤字なるべし宇の字相似たれば宇太宇にや又云宇も

ウとも訓るべし又類聚名義抄鳥部に鳩音嘲ツキカヤクキとあるに据ば字音もて太字とよべるにや本草啓蒙四十三の卷禽之一三丁ウ鶴の條に藿經を引て異名を

テカクシ置キテ母鳥餌ヲハコビ來テウタウトヨベバ子ヤスカタト答ヘテ出テ餌ヲハムトゾ獵人ガ母鳥ノ聲ヲマネテウタウトヨベバ兒ヤスカタト答テ出ルヲ捕ルトゾ兒ヲトラルレバ母鳥血ノ涙ヲ流ス其血人ノ身ニカヽレバワロシトテ蓑笠ヲキテ兒ヲトルト也云云按に此說前々太平記ニ据たる也此外善知鳥の說謠曲拾葉抄十八の卷善知鳥の注和歌名所追考百十一の卷などに出其圖は烹雜記上卷十八丁ウに見ゆ○屋代弘賢善知鳥考古今要覽水禽部に野中新三郎御徒目付曰予文化三年蝦夷に在し時漁人に託してうたうをとらせたりとてその皮を全剝にせしを秘藏せり又曰或人云冷泉家の說にうたう延曆の比までは伊勢國にすめりとぞ古歌にそとの濱にょみ合せたれば松前にいたりし時土人に問しに今はあらずといふ三燈稻荷の神職佐々木大和曰松前家の先祖いにしへ秋田城介にしたがひ秋田へしばしばゆかれしにその道津輕青森といふ所にて善知鳥を見しといふ事その時の紀行に見えたり其後二百年ばかり行方をしらざりしに明和の比松前の家臣新田源左衞門といふもの松前より三四里西の方なる人も通はぬ小嶋にいたりし時異形の鳥を見て鐵炮にて打

烏童蓿（ウトウクワン）と記したれど善知鳥（ウタウ）は鶴の類にあらず鴎（カモノ）に鄰き鳥なれば烏童の字音を名こせるにはあらで其鳴聲よりおはせし名なるべし○安齋隨筆洗革にウタフト云ヲ鳥奥州卒都ノ濱ニアリ母鳥砂ノ中ニ子ウミ沙ニ

とめたれば友鳥悲鳴して雨のごとく露を降らしたり奇異のこと也とて人にかたりしを折しも花山院家の雜掌滯留せしが是をきゝてさてはうたう也とて京にかへりて本主にも申しかば花山院家より所望ありて再かの嶋にて打捕たる時も悲鳴のありさま上件のごとくなりしとかや是によりておもふに三百年ばかりさきに津輕に居しものゝ明和の比七八十里北の方へ移りしに今はそこにもあらずといへば猶北方へ遠ざかりし成べしと推量して鉋を取漁人にかくのごとくの鳥あらば捕て來れといひ付しかば西蝦夷の内テウレといふ嶋ヤンケシリといふ嶋の邊にて捕得しとて六月の比おこせし也捕得たる時はいかにと問ひければ網にて捕候ひしが友鳥おほくむらがり悲鳴て露をおとせしと雨のごとしといひきいとふしぎなる事也此二の島は松前よりは百餘里北にあたれり鳴聲は鴎に類せしといふ云々按に烹雜記上卷十九丁ウにうたふを善知鳥と書よしは此鳥甚しく人をおそれ又よく其友を愛すもしその一隻を獵師に捕るゝ事あればもろ鳥そのほとりを翔めぐりて鳴と甚しく涙を落す事雨の如しとなん故に善知の二字を當たる歟又鴆とも書けり其義詳ならずといへり○又云（釋名の條）つなぎ（松前方言）うとッふ（蝦夷方言）云々又云（正誤の條）野中新三郎說によるに紅涙は涙にはあらざるがごとし口より津液をしたゝるにやと又くれなゐなるよしきこえざる也云々○諸曲拾葉抄十八の卷善知鳥の注に鴈とも書異名よな鳥と云其子をひな鳥といへり云々○與清曰善知鳥は鴎（カモノ）の種類也宇多字といふは母鳥の鳴聲やすかたは雛の鳴聲なるとはなくなるこゑはうたうやすかたとよめるにて知るべし異名よな鳥といふ善知鳥の字面は謠詞に始て見ゆ沙鳥は沙中に穴して子を生ゆゑなるべし鴆の字はた同義也松前の方言にッナギといふは一鳥捕らるれば衆鳥跡をつなぎて悲鳴するゆゑにや蝦夷人がうとッぶとよぶは皇國人がうとうといふをよこなまりたる也奥羽觀迹聞老志に烏鷸（ウタウクワン）の字を用たるは烏童蓿（ウトウクワン）などに据て作り出たなるべし假字は決（サダメ）がたけれどしばらく新撰字鏡吾妻鏡に從て宇多（ウタウ）宇と書べし又地名に善知（タウ）鳥とも安潟（ヤスカタ）ともいふは此鳥の名にとりあはせたる而已にて本別義なるべし山の出崎などをウタウといふを烏頭（ウトウ）と書は烏（カラス）の頭の貌よりおもひよれるなるべけれどこれはた善知鳥（ウタウ）と歟烏太宇（ウタウ）と歟書ざれば假

名たがへり類聚名義抄二の卷口部に嗟ウタフと有さて善知鳥を歌によめるは善知鳥謠詞の陸奥の外の濱なるよぶこ鳥云々はいと古歌なるべけれど未レ考ほどは謠詞を出所とすべし此謠詞は室町將軍三四代の比にや結崎世阿彌が作なれば也又藻鹽草に載たる子をおもふ涙の雨の笠の上に云々新撰歌枕の子を思ふ涙の雨の血にふれは云々などもよみ人しれざれど古歌と聞ゆ

(七)金平午房金平娘金平糖　門人澁谷保がいへらく越後國に金平といへる謠ありその曲節經などよむに似たりと云々その金平はいかなるゆゑぞと問に公時の子に金平とて頼義の四天王の一人の勇士の事をつくり設たる也されば強きものゝたとへにキンヒラといひて越後には金平午房は必蒔椒を加へて調味せしにいふそれも鹽味薄きをば金平ナラズといへりとなん金平の事は燕石雜志四の卷九丁巳下にいひたれば考べしさては江戸にて元氣娘をキンヒラといひ又金平糖といふも實はキンヒラ糖にて娘の氣の強きをキンヒラ砂糖の甘味強きをコンペイなどみなつよき事にいへる也けり保俗稱は久米之丞越後國蒲原郡高關村の里長也そこは新潟より七里許の所也とぞ妻はみわ子といふ夫婦共に余が門人也みわ子は山登撿挍に學びて琴をよくす

(八)かつぎ綿帽子　女服のカツギは古製にあらずいにしへのむしたれ衣の遺製にや婦女行路のほど人に顔見せじと著る物也又丸綿とて嫁入の時用るも夫もたぬ以前は人に顔見せじとて被るを婚姻の時の作法と而已おもへるは後のわざなるべし綿帽子の製作さま〴〵あれどもと女の面かくしの具也それを略して髪上に計用るも出來しなるべし衣かつぎの女房とて禁中物見などに召さるゝをり衣かつげるもとむしたれより思ひよりたるものにて又一變して被綿は用たりと見ゆ綿帽子の歌は富士御覽記にあり雍州府志七の卷廿五丁ウに被綿の事をいひたれば考合すべし又按に婦女乘物の內にては綿帽子を用ひ歩行には被衣を著る事と見ゆ被衣は單物にて袷はなし衣かつぎの女房は途中ならねど顔見せじの爲に用しなるべし頭書筆記八十ノ廿三長門平家物語七卷高倉宮御謀反露顯の條に御もとどりを亂しまゐらせて湯衣をうちかづかせまゐらせいちぬきをめさせまゐらせてまぎれ出でさせ給ひにける云々一本にいちぬきをちぬきに作れり

(九)九月十三夜　中御門右大臣藤宗忠公の中右記保

延元年九月十三日の條に今宵雲淨月明是寛平法皇今夜明月無雙之由被レ仰出一云々仍我朝以二九月十三夜一爲二明月之夜一云々翰林五鳳集十八の卷秋部僧三益が詩序に丁丑九月十三之夕辱應二〇〇尊君佳招一而詣二閣下一于レ時月色娟々興殊不レ淺予曰今夜亦有二明月之名一與二仲秋一同蓋有レ據乎君曰其事從二吾邦醍醐天皇一而始其博識可レ賞矣云々賦二五絕句一錄二呈之一云氷輪團々出二晴嶺一万里無レ雲夜色靜正當九月第十三天與二仲秋一無二雨影一云々躬恒集上卷に清涼殿の南のつまにみかは水めぐり出たりまづ延喜十九年九月十三夜その宴せさせ給へりその心のだいあり人々歌奉る「もしきの六宮なからやそしまを見る心ちする秋の夜の月」按に此歌古今六帖一秋の月歌にみつれとて出せり拾遺集雜秋には延喜十九年九月十三日御屏風に月にのりて飄二遊漫一と云詞書ありてよみ人しらずと載たり

あはれなる空をながめて十三日の月いと花やかにさし出ぬればをぐらの山もたどるまじうおはするに云云注に九月十三夜也云々榮華物語根合の卷小本四十に九月十三夜月の夜の常ならぬに御あそびあり二位中將ふえなどいとをかし夜ふくるまゝに月すみのぼりやり水のれいよりはいとひろくながれたるいとをかし云々うちのおほとの實師「冬ならてさやけき月にたきつせはおとはせねとも氷しにけり」中なごん俊家「すむ水にさやけきかけのうつれはや今宵の月の名になかるらん」中なごん能長「千代までにすむへき水のなかれには月ものとけくやとる也けり」「いは間より流るゝ水の月かけのうつれるさへそさやけかりける」れいの殘りはとゞめつ云々などよりして續世繼のかれの卷の卷宇治拾遺十一の卷古今著聞集四の卷十七丁ウ五の卷の類書にも廿一丁ウ廿七丁オ同五十九丁ウ歌にも所見いとおほくあげつくすべからずさて後の歌に秋の二夜とよみ眞俗交談記には九月十三夜名二纖華會一といへり詩には法性寺關白忠通御集十三夜翫レ月七律に閨窓寂々月相臨從レ屬二窮秋一望巨レ禁潘室昔蹤凌レ雪訪蔣家舊徑踏レ霜尋十三夜影膝二於右一數百

年光不レ若レ今獨憑ニ前軒一廻レ首見清明 此夕價千金といへるがいと名高し

(十)吹飯の濱吹井の浦　和泉の名所吹井の浦は天平勝寶元年十一月十三日の和泉國泉南郡久米多寺坪付帳に吹井里一坪三段云々とあり續日本紀に天平神護元年廿六の卷十日甲申到ニ和泉國日根郡深日行宮一云々平家物語八の卷室山合戰の段廿四丁ウに播磨國高砂ヨリ船ニ乘テ和泉國吹飯浦へ押渡リ其ヨリ河內國長野城ニ楯籠ル云々同九の卷六箇度合戰十八丁の條に能登殿アマスナ洩スナトテ散々ニ攻玉ヘバ安摩六郎叶ハジトヤ思ヒケン和泉國吹飯浦ニ楯籠ル又紀伊國住人園邊兵衞忠康是モ平家ニ不レ快ケルガ安摩六郎能登殿ニ手痛ウ攻ラレ奉テ和泉國吹井浦ニ有ト聞テ其勢百騎計デ和泉國へ打越エテ安摩六郎園邊兵衞一ツニ成テ城郭ヲ搆テ待處ニ云々源平盛衰記卅の卷能登守所々高名の段四丁に淡路ノ安摩六郎能登殿ニ被ニ追返一テ和泉國吹井谷川ト云所ニ著タリト聞テ云々長門本平家物語十六の卷能登守敎經所々合戰の條四十丁ウに紀伊國住人蘭兵衞重光といふものこれも源氏に心ざし有けるが淡路のあまの六郎こそ源氏に志有て京へ上るなるが紀伊國ふけひたがはといふ浦につきぬときゝて一ツに成てありけるを能登守殿紀伊路に押渡てこれをせめ兵三十人頸をきりて福原へ奉る云々萬葉十二の卷四十丁ウ時風吹飯乃濱爾出居乍贖命者イモガタメコソ社按に仙覺抄に越前といへるは誤也紀伊和泉兩處に同名あれど續日本紀に和泉日根郡深日行宮見え寬平菊合の歌詞書夫木抄十四にも和泉ふけひの濱の菊とあれば此萬葉の歌も和泉と定むべし和泉志五の卷日根郡村里部二丁に深日舊作ニ吹飯一云々同山川部三丁に深日溪源出ニ孝子畑東一流入レ海云々また吹飯浦深日村澳津以下俱名區云々同古蹟部八丁に深日行宮深日村云々また同丁深日村城云々同文苑部十一丁に吹飯浦云々石橋氏が泉州志六の卷廿七丁に余按吹飯紀伊丹後有ニ同名一夫名所之有ニ同名一也其歌難ニ辨別一者往往在矣今以ニ近來名所集一記レ之蓋清正宗干廬主之歌爲ニ和泉深日一非也三首共紀伊國也吹上吹飯同所二名也其證如レ記レ左矣後世深日浦詠ニ田鶴一者皆依ニ清正之本歌一也然則紀伊國吹飯歟云々藤原清正家集云紀の守になりて又殿上にもかへりせで「天津風ふけひの浦にゐるたつのなとか雲ゐにかへらさるへき」

大和物語云故右京のかみ宗干の君なり出べきほどに我身のえなり出ぬ事を思ひ給ひけるころほひ亭子のみかどにきのくにより石つきたる見るをなん奉りたりけるを題にて人々歌よみけるに右京のかみ「おきつ風ふけひの浦にたつ波のなこりにさへやわれはしつまん」庵主集增基法師云きのくに吹上のはまにとまれるよ月いとおもしろし此濱は天人常にくだりてあそぶといひつたへたる所也げに所もいとおもしろし今宵の空も心ぼそうあはれ也夜の更行まゝにかものうはげの霜打拂風も空淋うてたづはるかにて友をよぶ聲も更にいふべきかたもなうあはれ也これならぬさま〳〵の鳥どもあまた洲崎にむらがりてなくも心なき身にもあはれなる事かぎりなし「をとめこか天の羽衣ひきつれてむへもふけひの浦におるらん」○玉勝間九の卷十丁に新古今集雜に藤原清正「あまつ風ふけゐの浦にゐるたつのなとか雲ゐにかへらさるへき」此歌家集に詞書に紀の守になりてまた殿上もかへりせでと有又大和物語に故右京のかみ宗干の君云々亭子のみかどにきのくにより石つきたるみるをなん奉りけるを題にて云々「おきつ風ふけゐの浦に立浪のなこりにさへやわれはしつまん」又庵主熊野紀行に紀の國の吹上の濱にとまれるに月いとおもしろし此濱は天人つねに下りてあそぶといひつたへたる所也云々「をとめこかあまのは衣引つれてむへもふけゐの浦におるらん」月の海のおもにやどれるを浪のしきりにあらふを見て「月に浪かゝるをり又あらきやとふけゐのうらのあまにとはゝや」これらのふけゐの浦は紀の國にて右の庵主の歌によれば吹上の濱の一名也ふけゐといふ名は風の砂を吹あつむるよしにてゐは集の心也風の砂をふきあつむとは此吹上の濱は西南の風はげしき時は白砂を高く吹上て一夜のほどに吹あつめて山をなし又しばしがほどにふきちらしてもとの平地となり或は時のまにその所をかふることもありこれによりて吹上のはまとはいふ也公任卿集に吹上のはまにいたりぬ風の砂をふきあぐれば霞のたなびくやう也げに名にたがはぬ所なりけり古今歌注にも吹上の濱とは風のいたく吹て濱のまさごを吹上るがおもしろきと申す云々爲家卿吹上の濱のまさご山とよみ給へる歌名寄に見ゆ草根集にも「時の間に眞砂吹上の山谷をつくりかへたる

紀伊路のしほ風」などあり今府城の西に砂山どてちひさき岡のあるものもいにしへはそのあたりも吹上のうちにてかの砂山の殘れる也ふけゐとも吹上ともいふ名のよしかくのごとしはじめに出せる清正の歌のふけゐをむかしより和泉國と心得たるは誤也和泉なるはふけひにて假字も異也紀の國のはふけゐと書べし又紀の國に日高郡の海邊にもふけゐといふ地の名あれどもむかしの歌どもによめるはそれにはあらずと同じ書にいへり（岩橋秀榮があらはせる今按名蹟考を指て同じ書といへる也此說は三の卷に見ゆ）此中に名の意を風の砂を吹あつむるよしにてゐに集（ヰ）也としてふけゐと書べしといへるはうけられず物をあつむるとをゐといふとなしされば假名もゐとは定めがたししばらく和泉のにならひてふけひとぞ書べき云々按に此說は今按名蹟考三の卷に見ゆ勝地吐懷篇にも此浦の事有可ニ考合一さて假名は天平の古文書に吹井續紀に深日万葉に吹飯と書たれば比井相通はして書るなるべし走をワシルともハシルともいふ類也されど多證に從て吹飯と書をおほやけといふべし○夫木抄秋五菊の部に寬平御時菊合歌云々和泉ふけひのはまのきく「けふ〳〵」と霜おきまさる冬はたゝ花うつろふとうらみ行らん」

（十一）白蛇白龍白螭　日本紀略弘仁十年の條に秋七月丙申京中白龍見有ニ暴風雨一損ニ民屋一云々○大神宮御相傳袈裟記に弦有ニ大禪師別峰和尙一楊岐第十四世東福五代嫡孫南禪四傳之眞嗣我靈岳翁之嗣也云々今弦永德二年春閏正月十日師始詣ニ伊勢大神宮一而后寓ニ居御山蓮臺寺一數月矣云々師再謁ニ大神宮一時自ニ外宮中一三尺餘白蛇出來蟠ニ屈于師之袈裟下一長官使者以ニ笏排起一師之袈裟一屢見而后拜稽首矣云々和尙念誦了自ニ內殿一出去其時白蛇勢如レ加ニ愛惜一而與レ師入ニ大宮之中一也云々按に大神宮御相傳袈裟記は永德二年十二月廿八日僧大隨が所レ記也群書類聚四百廿七卷に收む此文與レ師の下別の字を脫せる歟可レ考○御鎭座本紀に御倉神稻靈豐宇賀能賣命宇賀能美多麻神保食神尊形一床坐以ニ白龍一爲ニ守護神一也凡王子八柱同坐給也○類聚神祇本源十一の卷外宮別宮篇に調御倉神云々二所大神宮御鎭座本紀曰稻靈宇賀能賣命宇賀能美多麻神保食神尊形一床坐以ニ白龍一爲ニ守護神一也凡王子八柱座給也云々按に世俗蟠蛇の白骨或は白蛇を指て宇賀神とよぶはこれに依れる也頭書

康富記嘉吉三六五條に後聞今日石清水八幡末社武內御社御殿內白蛇死有レ之奉ニ見付一也五月五日神事延引今日遂行之間開ニ御殿御戶一之處白蛇死有レ之久成歟之間臭氣以外也云々○古老口實傳十七丁ウに調御倉白蛇出現事一禰宜惟異也按にこは御鎭座本紀に所謂調御倉守護神白蛇也其形を顯して一禰宜に惟異を示せるにや太平廣記卷四百五十七馬嶺山の條に開元四年六月郴州馬嶺山側有ニ白蛇長六七尺黑蛇長丈餘一須臾二蛇鬪白者呑レ黑蛇到ニ龕（アト）處一口兩嗉皆裂血流滂沛黑蛇頭入嚙ニ白蛇肋上一作レ孔頭出二尺餘俄而兩蛇並死後十餘日大雨山水暴漲漂ニ破五百餘家一失ニ三百餘人一（出ニ朝野僉載一）云々○北史（卷四十八列傳第三十六）爾朱榮傳一丁ウに榮父新興太和中繼爲ニ酋長一酋行ニ馬群一見ニ一白蛇頭有ニ兩角一咒之求ニ畜牧蕃息一自レ是牛羊駝馬日覺ニ滋盛一云々○本草綱目四十三の卷卅丁ウの鱗之二に頌曰白者名ニ銀蛇一近皆少レ捕云々時珍曰按劉恂嶺表錄異云金蛇一名地鱉白者爲ニ錫蛇一出ニ點州一出ニ桂州一者次レ之大如ニ拇指一長尺許鱗甲上分ニ金銀解毒之功一云々頭書（秘笈）○格致鏡原九十九の卷九丁ウの蛇部に賢奕編申王有ニ肉疾一腹垂至レ骭每レ出則以ニ白練一束レ之至ニ暑月一嘗骭息不レ可レ過玄宗詔ニ南方一取ニ冷蛇一長數尺色白不レ螫レ人執レ之冷如レ握レ氷申王腹有ニ數約一夏月置ニ於約中一不ニ復覺一炬暑一云々

頭書（百家名書格知叢書）同書（同卷十四丁ウ）同部に北戶錄嘗至ニ雷州一對レ岸倚レ舟候ニ風勢一見ニ群小兒簇ニ二巨蛇一各長丈餘一如ニ孔雀一尾毛色金翠奪レ目一如ニ眞紅色一鮮明若レ血又有ニ十餘頭白蛇一前後相次若ニ導從一俱入ニ一榕藤竅內一竟不ニ復去一故知蛇有ニ草木水土四種一其類不レ可レ窮也云云按此事淵鑑類函百卅（廿二の卷）にも此說を擧○山海經二の卷十丁ウ西山經に泰冒之山云々多ニ白蛇一注に水蛇云云同三の卷廿丁ウ北山經に神囷之山其上有ニ文石一其下有ニ白蛇一有ニ飛蟲一云々同三の卷廿五丁ウ北山經に幽都之山浴水出焉是有ニ大蛇一赤首白身其音如レ牛見則其邑大旱云々○春秋運斗樞（古微書九の卷八丁ウ）に白金千載生ニ白龍一玄金千歲生ニ玄龍一云々孫穀が按に淮南子曰云々白金千歲生ニ白龍一白龍入藏生ニ白泉一白泉之埃上爲ニ白雲一云々○春秋保乾圖（古微書十二の卷七丁ウ）に孫穀按續博物志女媧之功烈上際ニ九天一下契ニ黃壚一名聲被ニ後世一光輝重ニ万物一乘ニ雷車一服ニ應龍一驂ニ靑虯一席ニ蘿圖一震ニ黃璐一援ニ絕瑞一前ニ白螭一後ニ奔蛇一云々按に此文李石が續博物志五の卷一丁ウに出たり白螭はた白龍の類也○說苑（九の卷八丁ウ）正諫篇に吳王欲ニ從レ民飮酒一伍子胥諫曰不可昔白龍下ニ淸冷之淵一化爲レ魚漁者豫且射中ニ其目一白龍上訴ニ天

帝ニ天帝曰當ニ是之時一若安置而形白龍對曰我下ニ清冷之淵一化爲レ魚天帝曰魚固人之所レ射也若レ是豫且何罪夫白龍天帝貴畜也豫且宋國賤臣也白龍不レ化豫且不レ射今棄ニ万乘之位一而從ニ布衣之士一飲酒臣恐其有ニ豫且之患一矣王乃止云々○宋書符瑞志中に吳孫休永安四年九月市山言白龍見云々晉武帝泰治元年十二月白龍二見ニ太原郡一云々同咸寧二年六月丙申白龍二見ニ於新興九原居民井中一云々同年十一月癸巳白龍二見ニ須度支部一云々同大康元年八月白龍三見云々同三年閏月己丑白龍二見ニ濟南歷城一云々同六年九月白龍見ニ京兆陰槃一云々○藝文類聚九十六の卷三丁鱗介部上に列仙傳曰陵陽子明好レ釣於レ溪得ニ白龍子一解レ鉤放レ之後得ニ白魚一腹中有レ書敎ニ子明服食一遂採ニ五石脂一服レ之三年白龍來迎止ニ龍陽山上一百餘年云々○文選十の卷十潘安仁西征賦に彼白龍之魚服桂ニ豫且之密網一云々○史記高祖本紀五丁に高祖醉曰壯士行何畏乃前扳レ劒斬レ蛇蛇遂分爲レ兩徑開行數里醉因臥後人來至ニ蛇所一有ニ一老嫗一夜哭人問何哭嫗曰人殺ニ吾子一故哭レ之人曰嫗子何爲見レ殺嫗曰吾子白帝子也化爲レ蛇當レ道今爲ニ赤帝子一斬之云々注に應劭曰秦襄公自以レ居ニ西戎一主ニ小昊之神一作ニ西畤一祠ニ白帝一至ニ獻公時一櫟陽雨レ金以爲レ瑞又作ニ畦畤一祠ニ白帝一小昊金德也赤帝堯後謂レ漢也殺レ之者明漢當滅レ秦也秦自謂レ水漢初自謂レ土皆失レ之至ニ光武一乃改定索隱曰按ニ大康地理志一云時在ニ櫟陽故城內一其時若レ畦故曰ニ畦時一畦音戶圭反應註云秦自謂レ水者按秦文公獲ニ黑龍一命レ河爲ニ德水一是也又按ニ春秋合誠圖一云水神哭ニ子褒敗一宋均以爲高祖斬ニ白蛇一而神毋哭則此母水精也此皆謬說又註云至ニ光武一乃改者謂改レ漢爲ニ火德一秦爲ニ金德一與ニ雨レ金及赤帝子之理一合者也云々按に漢書高帝紀上四丁の說亦同但注に宋均以爲高祖斬ニ白蛇一而神母哭の說を引すされど封禪書十五丁に高祖之徵時嘗殺ニ大蛇一有レ物曰蛇白帝子而殺者赤帝子とも見えて白帝の子の蛇なれば白蛇といへると理也又通鑑綱目正編二の下の卷九十五丁秦二世元年條の質實に漢高帝斬ニ白蛇於此一今名ニ斬蛇溝一云々晉崔豹古今注上卷七丁に與服篇に劒漢世傳高祖斬ニ白蛇一劒長七尺云々唯聞高祖以ニ所レ佩之劒一斬ニ白蛇一云々義楚六帖廿三の卷古微書三の卷刀劒部にも引レ之王命論古微書三の卷九丁ウ引レ之に高祖始受レ命則白蛇分西入レ關則五星聚云々白氏文集廿八の卷に漢高皇帝親斬ニ白蛇一賦云々などあるにても

證明也といふべし史記注に春秋合誠圖を引たるは古徵書には見えず因にいふべし白帝赤帝は春秋合誠圖明人孫瑴が古徵書八の卷に收む一據ニ宋均威精符津一則赤帝爲レ堯黃帝爲レ舜白帝爲レ禹黑帝爲レ湯蒼帝爲ニ文王一云々とあれど異說也五帝の事は史記封禪書漢書郊祀志水經注十八の卷二丁など所見おほく東蒼西白南赤北黑中黃にて漢高はウ楚人南方の生なれば赤帝の子といへるにや秦は西方の國にて少昊神を祠りこれを白帝の子と云とさもと聞ゆ頭書魏志二ノ十三丁ヲ高祖斬ニ白蛇一「可レ考普灯錄廿四ノ十六丁ウ九の卷十五丁ヲ○法苑珠林七十五丁ヲ祈雨篇に晉時佛圖澄博ニ術綜古一道藝超レ群晉建武年正月至ニ六月一天大旱石虎遣ニ太子一詣ニ臨漳西谷口一祈レ雨久而不レ降虎令ニ澄自乞一卽有ニ白龍二頭一降ニ於祠所一其日大雨方數千里其年大收云々按此事水經注に出頭書漢魏晉書(朱書以下倣書同)○義楚六帖廿三の卷廿六丁ウ蛇部に洞冥記云武帝徵ニ行於長安城一西夾見ニ一螭蛇遊ニ路董謁曰昔桀爲戲今イ餘金末イ媚ニ妹喜一置ニ于膝上以ニ金簪一貫ニ王螭腹一是也螭腹有ニ簪痕一在ニ安・非・耶也也イ无此白龍魚鱗細網者食レ之帝曰試レ我也云々按に此文寫誤ありて讀得がたし洞冥記を校合すべし今もて勞に異同をつく頭書武英殿聚珍版○後魏酈道元が水經注二の卷六丁ヲに

墨山國云々土地沙鹵少レ田仰ニ穀旁國一國出レ玉多ニ葭葦楛柳胡桐白草一國在ニ東垂一當ニ白龍堆一乏ニ水草一常主ニ發導負レ水擔レ糧迎ニ送漢使一故彼俗謂ニ是海一爲ニ牢蘭海一也云々按に白龍堆は地名なれど白龍あるにより名付しにや○同書十四の卷廿丁ヲに西燕慕容晃十二年黑龍白龍見ニ於龍山一云々同書十七の卷七丁ヲに秦武公十年伐ニ邽縣之舊天水郡一治ニ五城一相接北城中有ニ湖水一有ニ白龍一出ニ是湖一風雨隨レ之故漢武帝元鼎二年改爲ニ天水郡一云々同書八の卷廿丁ヲに戴延之西征記曰焦氏山北數山有下漢司隷校尉魯恭穿レ山得ニ白蛇白兎一不ニ葬更葬ニ山南一窓而得レ金故曰ニ金鄉山一云々○清人陳鼎が蛇譜昭代叢書乙集卷四十八に收レ之に脆蛇長尺有二寸圍如レ錢嘴尖尾禿背黑腹白暗鱗點々可レ玩也或白如レ銀云々介蛇長五六尺有ニ黑白兩種一尾縶レ殼如レ蚌倦則蟠ニ殼中一行則施レ殼如レ飛專食ニ草中蟲一不レ害レ人云々○田村元長が庶物類纂拔萃廿一の卷に白蛇俗名シロヘビ陸奥俗語シロナウサ○按に陸奥人が白なうさといへるはノサ〳〵と這貌よりいへるなるべしノサ〳〵はナウサ〳〵ともナムサナムサともナツサ〳〵とも訓たり隨分は分に隨ふ

にて己が分に隨て這出るをノサ〳〵這出るといへり○史記龜策傳四丁ウ褚先生續に求ニ之於白蛇蟠杅林中一者齋戒以待譟然注索隱曰按林名ニ白蛇蟠杅林一龜藏ニ其中一杅音烏謂白蛇嘗蟠ニ杅此林中一也譟音竦言求レ龜者齋戒以待恒譟然也云々按に求レ龜者齋戒し譟然として龜の告を待よし也○頭書單行本事文類聚後集卅三の卷鱗虫部に河伯化爲ニ白龍一遊ニ於水傍一羿見射レ之其友曰河伯上訴ニ天帝一曰爲レ我殺レ羿天帝曰爾何故得レ見レ射河伯曰我時化爲ニ白龍一出遊天帝曰使ニ汝深神靈一羿何從得レ犯汝今爲ニ虫獸一爲ニ人所レ射固其宜也羿何罪歟楚辭注○王子年拾遺記卷六三丁ウに漢章帝元鳳二年起ニ桂臺一云々帝常以ニ季秋之月一泛ニ蘅蘭雲鷁之舟一窮ニ晷係レ夜釣ニ於臺下一以ニ香金一爲レ鉤繡絲爲レ綸丹鯉爲レ餌釣ニ得白蛟長三丈一若ニ大蛇一無ニ鱗甲一帝曰非レ祥也命ニ太官一爲レ鮓肉紫骨青味甚香美班ニ賜群臣一帝思ニ其美一漁者不レ能ニ復得一知レ爲ニ神異之物一云々同書八の卷四丁ウに吳張承之母孫氏懷レ承之時乘ニ輕舟一遊ニ於江浦之際一忽有ニ白蛇長三尺一騰入ニ舟中一母祝曰若爲ニ吉祥一勿レ毒ニ噬我一縈而將還置ニ諸房内一一宿視レ之不ニ復視一蛇嗟而惜レ之鄰中相謂曰昨見ニ張家有ニ一白鶴一聳レ翮入レ雲以告ニ承母一母使レ箠レ之箠者曰此吉祥也蛇鶴延年之物從レ室入レ雲自レ下升レ高之象也云々同書十の卷二丁に崑崙山云々西有ニ蟾潭一多ニ龍蟾一皆白色千歳一脫ニ其五臟一云々○淵鑑類函四百卅七の卷十八丁オに唐薛用弱頭書說郛集異記曰元和中故都尉韋宥出牧ニ溫州一通經ニ江渚一見ニ新絲箏絃周ニ纏蘆心一宥即拔レ蘆伸レ絃其長倍レ尋則試縱レ之應レ手復結宥奇レ之付ニ箏妓一施ニ於器一以聽ニ其音一妓將レ安レ之更無ニ少異一惟短ニ二三寸耳方レ饌妓置レ之赴レ食及ニ食罷一就視則已蜿蜒舒展選蠕搖動妓乃驚告ニ衆來競觀而雙眸瞭然矣宥駭曰得レ非レ龍乎遽命ニ衣冠一焚レ香致レ敬盛ニ諸盂水之内一而投ニ於江一纔及ニ中流一風浪皆作ニ蒸雲走電一咫尺昏晦俄有ニ白龍一長百尺拏攫升レ天衆咸觀レ之良久乃滅同書同卷廿丁ウに頭書雅雨堂十種稗海北夢瑣言曰同光中滄州民子路逢ニ白蛇一以繩繫レ之擺ニ其頭一落須臾雷電撮ニ此子一上ニ空中一爲ニ雷火一燒死墜レ地而背有ニ朱書一曰此人殺ニ安天龍一爲ニ天符一被レ誅云々按に同光は後唐の莊宗の年號也○同書四百卅八の卷四丁ウに頭書單行夷堅志潼州白龍谷陶人梁氏世々以ニ陶冶一爲レ業其家極豐腴乃立ニ十窑一皆燒ニ瓦器一惟一窑所レ成最善餘九數毎ニ斷レ火取レ器牽窺邪不レ正及レ靄ニ于市一則人爭售レ之凡出盡然莫レ知ニ其所以一谷中故有レ祠曰ニ白龍廟一蓋因レ谷得レ名云々同書同卷十三に柳宗元謫龍說曰云々因取レ裘反レ之化爲ニ白龍一徊翔登レ天云々同書同卷廿一ウに頭書單行詩經類考金蛇一名金星地鱓白者曰ニ銀蛇一曰ニ錫蛇一云々○西陽雜俎十七の卷八丁オに冷蛇申王有ニ肉疾一腹垂至レ臍每レ出則以ニ百練一束レ之至ニ暑月一常臍息不レ可レ過玄宗詔ニ南方一取ニ冷蛇二條一賜レ之蛇長數尺色白不レ盤レ人執レ之冷如レ握レ氷申王腹有ニ數約一夏月寘ニ於約中一不ニ復覺一煩暑一云々○與清曰白龍日本紀略弘仁十年七月に見ゆ御鎭座本紀類聚神祇本源に出たるは古老口實傳を合考れば白蛇をいへるにやありけんから書には淮南子春秋運斗樞古微書九の卷收之說苑列仙傳藝文類聚九十王子年拾遺記八の卷四丁ウ楚辭注事文類聚後集六の卷所レ引二丁オ引之宋書文選洞冥記義楚六帖廿三の卷引レ之集異記淵鑑類函四百廿七の卷十八丁オ引レ之唐薛用弱頭書說郛集異記曰元和中故都尉韋宥出牧ニ溫州一通經ニ江渚一見ニ新絲箏絃周ニ纏蘆心一宥即拔レ蘆伸レ絃其長倍レ尋則試縱レ之應レ手復結宥奇レ之付ニ箏妓一施ニ於器一以聽ニ其音一妓將レ安レ之更無ニ少異一惟短ニ二三寸耳方レ饌妓置レ之赴レ食及ニ食罷一就視則已蜿蜒舒展選蠕搖動妓乃驚告ニ衆來競觀而雙眸瞭然矣宥駭曰得レ非レ龍乎遽命ニ衣冠一焚レ香致レ敬盛ニ諸盂水之内一而投ニ於江一纔及ニ中流一風浪皆作ニ蒸雲走電一咫尺昏晦俄有ニ白龍一長百尺拏攫升レ天衆咸觀レ之良久乃滅同書同卷廿丁ウに頭書雅雨堂十種稗海北夢瑣言曰同光中滄州民子路逢ニ白蛇一以繩繫レ之擺ニ其頭一落須臾雷電撮ニ此子一上ニ空中一爲ニ雷火一燒死墜レ地而背有ニ朱書一曰此人殺ニ安天龍一爲ニ天符一被レ誅云々按に同光は後唐の莊宗の年號也○同書四百卅八の卷四丁ウに頭書單行夷堅志潼州白龍谷陶人梁氏世々以ニ陶冶一爲レ業其家極豐腴乃立ニ十窑一皆燒ニ瓦器一惟一窑所レ成最善餘九數毎ニ斷

レ火取レ器牽窺邪不レ正及レ靄ニ于市一則人爭售レ之凡出盡然莫レ知ニ其所以一谷中故有レ祠曰ニ白龍廟一蓋因レ谷得レ名云々同書同卷十三に柳宗元謫龍說曰云々因取レ裘反レ之化爲ニ白龍一徊翔登レ天云々同書同卷廿一ウに頭書單行詩經類考金蛇一名金星地鱓白者曰ニ銀蛇一曰ニ錫蛇一云々○西陽雜俎十七の卷八丁オに冷蛇申王有ニ肉疾一腹垂至レ臍每レ出則以ニ百練一束レ之至ニ暑月一常臍息不レ可レ過玄宗詔ニ南方一取ニ冷蛇二條一賜レ之蛇長數尺色白不レ盤レ人執レ之冷如レ握レ氷申王腹有ニ數約一夏月寘ニ於約中一不ニ復覺一煩暑一云々○與清曰白龍日本紀略弘仁十年七月に見ゆ御鎭座本紀類聚神祇本源に出たるは古老口實傳を合考れば白蛇をいへるにやありけんから書には淮南子春秋運斗樞古微書九の卷收之說苑列仙傳藝文類聚九十王子年拾遺記八の卷四丁ウ楚辭注事文類聚後集六の卷所レ引二丁オ引之宋書文選洞冥記義楚六帖廿三の卷引レ之集異記淵鑑類函四百廿七の卷十八丁オ引レ之唐薛用弱頭書說郛集異記曰元和中故都尉韋宥出牧ニ溫州一通經ニ江渚一見ニ新絲箏絃周ニ纏蘆心一宥即拔レ蘆伸レ絃其長倍レ尋則試縱レ之應レ手復結宥奇レ之付ニ箏妓一施ニ於器一以聽ニ其音一妓將レ安レ之更無ニ少異一惟短ニ二三寸耳方レ饌妓置レ之赴レ食及ニ食罷一就視則已蜿蜒舒展選蠕搖動妓乃驚告ニ衆來競觀而雙眸瞭然矣宥駭曰得レ非レ龍乎遽命ニ衣冠一焚レ香致レ敬盛ニ諸盂水之内一而投ニ於江一纔及ニ中流一風浪皆作ニ蒸雲走電一咫尺昏晦俄有ニ白龍一長百尺拏攫升レ天衆咸觀レ之良久乃滅同書同卷廿丁ウに頭書雅雨堂十種稗海北夢瑣言曰同光中滄州民子路逢ニ白蛇一以繩繫レ之擺ニ其頭一落須臾雷電撮ニ此子一上ニ空中一爲ニ雷火一燒死墜レ地而背有ニ朱書一曰此人殺ニ安天龍一爲ニ天符一被レ誅云々按に同光は後唐の莊宗の年號也○同書四百卅八の卷四丁ウに頭書單行夷堅志潼州白龍谷陶人梁氏世々以ニ陶冶一爲レ業其家極豐腴乃立ニ十窑一皆燒ニ瓦器一惟一窑所レ成最善餘九數毎ニ斷は山海經史記北史水經注北戸錄格知鏡原九十九の卷引レ之北夢瑣言淵鑑類函四百卅七の卷引レ之太平廣記などに其字面あり史記漢書の高祖紀の大蛇も古今注義楚六帖通鑑綱目注王命論古微書三の卷六丁ウ孫詒按に引白氏文集卅八の卷に據れば白蛇なるとうつなし酉陽雜俎賢奕編格知鏡原九十九の卷引レ之の冷蛇詩經類考淵鑑類函四百卅八の卷所レ引本草綱目の銀蛇はた白蛇にて此二種共に愛翫すべし蛇譜の脆蛇も銀色なるは白蛇也介蛇は白色なれどその形とやう也さて白蛇の和名はシロヘビシロクチナハシロナウサなどよべるとゝ知べし○異苑宋劉敬叔撰三の卷に丹陽鍾忠以ニ元嘉冬月一晨行有ニ一蛇一長二尺許文色似ニ青琉璃一頭有ニ雙角一白如レ玉感而畜レ之於レ是貲業日登經レ年蛇自去忠及二子相繼殞斃此蛇來吉去凶其唯龍乎云々此は角の色白くして如レ玉也○白氏文集卅八八丁オ漢高皇帝親斬ニ白蛇一賦に不レ知レ我者謂我斬ニ白蛇一知レ我者謂我斬ニ白帝一云々○輟耕錄七の卷七丁オ黃巢地藏の條に趙生者宋宗室子也〔一日伐ニ木溪澗一忽見ニ一巨蛇一章質盡白〕云々○魏書七十四の卷一丁ウ爾朱榮傳に曾行ニ馬群一見下一白蛇頭有ニ兩角一遊中於馬前上云々○宋高僧傳十四廿一丁ウ唐杭州靈智寺德秀傳に恒有ニ白蛇一蟠屈守レ塔云々同廿五十三丁ウ梁

温州大雲寺鴻楚傳に其所レ臥之榻中先有二白蛇一其大若レ肱恒同二臥處一長誠二童侍一無二安寢一云々頭陽傳高僧傳五ノ十五丁ウ名物考雜十二槃遊餘錄三編上卷田方郡名古屋村國清寺の事をいへる條に蛇石のもとにいたる高さ二つゐ一丈六さが例の大師の筆とて梵字をゑりたり此石のなから二三分ばかりわれたるうちに白きくちなはいく年ともしらずこもりすみぬるよしいふのぞき見ればげにわれたる口よりもおほきなるがすき間のかたちに長くよこたはりてなれりうらへかなる日には石のうちないでへ慵にわだかまりをるなしもとなどもていろひぬれば四五丁ばかりあなたざまの谷にとびゆき又いつとしもなもとの穴にこもりなれりさいふ云々

松屋筆記卷之七十一

東都　平小山田與清文儒稿

(一)紫雲　宋書符瑞志上十九丁ウに吳亡後蔣山上常有二紫雲一數術者亦云江東猶有二帝王氣一云々同符瑞志下七丁ウに宋明帝太始二年三月丙午黃紫雲從二景陽樓一出隨レ風回久乃消云々王嘉拾遺記十の卷三丁ウ方丈山云云玉瑤爲レ林雲色皆紫云々佛祖統紀五の卷廿二丁ウ耶舍傳に見二一峰一紫雲如レ蓋云々同七の卷四丁ウ法華禪師傳に每レ登レ座有二紫雲一覆レ頂如二寶蓋一云々張書統紀卅五ノ廿三丁ウ同卅六ノ三丁ウ紫雲の事余が紫雲考一卷ありそれに補はんがためにこゝにあぐ水經注十五の卷十丁ウに長沙耆舊傳云祝良字石卿爲二洛陽令一歲時亢旱天子祈レ雨不レ得良乃曝二身階庭一告レ誡引レ罪自レ晨至レ午紫雲水起甘雨登降云々

(二)氷上狐渡而後人應レ渡　水經注一の卷三丁ウ河水の條に述征記曰盟津河津恒濁方レ江爲レ狹比二淮濟一爲レ闊寒則冰厚數丈冰始合車馬不二敢過一要レ須二狐行一云此物善聽二冰下無一レ水乃過人見二狐行一方渡余按風俗通云里語稱狐欲レ渡レ河無レ如レ尾何一且狐性多疑故俗有二狐疑之說一亦未二必一如一緣生之言一也遥征記郭緣生所レ撰云々摩訶止觀科解卷第四之二四十六丁ウに狐疑者狐是獸一名野干多疑善聽時人云二狐疑一蓋因レ之也此獸爲鬼所レ乘時人以レ之爲二精媚一有レ云黃河氷厚欲レ度レ河時委聽二氷聲一聲絕方度云々祖庭事苑一の卷十丁ウ雲門錄下聽氷の注に述征記云河冰人須二狐聽一而行云々和歌名所追考百一の卷信濃國諏訪の條に湖水冬は氷はりつめ其道狐渡り初諸人牛馬まで是を通ふ上ノ社より下ノ社まで此湖上の道は一里也春また狐渡り初初午に馬渡りて諸人も不レ通云々西遊行囊抄三之上卷諏方の條に每冬寒二入テ湖上ノ氷ノ上一下ノ宮ヨリ上ノ宮ノ方へ神ノ通リ給フ跡アリソレヨリ人馬共二氷ノ上ヲ渡ル又春二成テ上ノ社ヨリ下ノ社へ神歸リ給フ跡アリソレヨリ人馬渡スコトナシ神ノ渡リ玉フトキハ大蛇ノ跡アリト云云々藻鹽草五の卷湖部にすわのうみ信州氷のはしはちのやぶる神のわたりてとくる也けり彼海湖也此海悉氷りて人渡る事ありされども上下の二神通給ふ道ばかり一すぢこほらぬ也是神事の時の儀也氷の通路ともよめり云々新撰六帖一氷題に知家「すはの海の冬の氷りのかよひちや神のむすへるちかひ成らん」歌枕名寄廿五の卷信濃國部に諏方湊九條殿歌合隆信朝臣「月さゆるすはの湊のかちわたり氷のうへのこほりをそふむ」堀河百首凍の題に顯仲「すはの海の氷の橋はちはやふる神のわたりてとくる也けり」按に此歌二三の句流布本に氷のうへのかよひぢはとあれど藻鹽草歌枕名寄新撰歌枕などに氷の橋はちはやぶると有を正しとす新葉集神祇に諏方の大明神に法樂し侍りし千首の中に中務卿宗良親王「すはの海や氷をふせてわたる世も神し守らばあやふからめや」張書狐よく氷を聽さいふ事西陽雜俎に見ゆ

(三)本居宣長が墓　本居宣長が傳は三哲小傳に見えたれど委しからず宣長俗稱は舜菴とて伊勢松坂の醫生也後に「中衛」と改たりその菩提寺は松坂の樹敬寺といへる淨土宗也此寺の隱居所を妙樂寺といふ伊勢飯高郡山室村に有て松坂よりは二里餘の所也此妙樂寺の境内を離るゝ事一町ばかりに風景よろしき岡ありそこに葬て石塔を建法名を高岳院石上道啓居士とゑりたり

(四)献書の例　武家御家人献書の例はかぞへ盡すべ

からず近來大坂の町人中居積善といふもの奠陰逸史を献上して白銀廿枚を賜はりぬこは大坂町奉行の伺によりて也又牛込に住たる浪人田畑喜右衞門斷家譜廿卷を献上して白銀廿枚をたまはれり浪人の献書の例はいにしへもこれかれ聞え並河五一郎は五畿内志編集御用をさへ仰蒙りたりきそは書物御沙汰錄に見ゆ

(五)いこのふ　古事記神武の段に然而其弟宇迦斯之献大饗者悉賜二其御軍一此時歌曰云々疊々音志夜胡志夜此者伊碁能布曾此五字ア、音以レ音阿々音志夜胡志夜此者嘲咲者也云々傳十九の卷廿三丁に疊々は今俗に醜惡き事或は汗穢き事などを見聞て延々といふ是惡み疎む歎息の聲也此も其に同くて兄宇迦斯がおふけなく逆なる所爲を辱しめ惡みたる辭也志夜は平家物語にシヤ冠ヲ打落セ又シヤ頬をむず〳〵とぞ踏れける宇治拾遺物語に貫之が東人に令レ似てよめる歌とて「あな照や虫のシヤ尻に火の著て小人魂とも見え渡るかな」今昔物語にシヤ頬ハ猿に似て又シヤ足打折てん物を又シヤ衣のくび取て引立よなどある猶此外にシヤと同く物をいやしめ嘲る辭なり胡志夜は袁胡志夜の遠を省けるにて袁加志夜と云に同じ袁胡はをこがましなどの袁胡也伊碁能布曾は伊碁は伊賀を轉かしたる言にて伊賀は我也汝がと云に同く人をいやしめていふ詞也能布は賭の物を出すをツクノフと云類の能布にてマヒナフアタナフなどのナフもおなじ伊賀と人を賤しめ言を伊碁能布と云しにや咄嗟と云て駭く事を阿夜志とも阿夜志牟ともいふ類也曾は辭にて此ぞ彼ぞなどいふ曾也阿々は私記に咲聲也と注せり嘲咲はあざけりわらふ心也字鏡に嗤蚩同阿佐介留又曾志留又和良不とありと云々按に此注ことわりきこえたれど伊碁能布の說未盡せりといひがたし散木集三に秋の田をよめる「山里はいていこのへるたもとここに風そよめきて袖しほる也」といふ歌見ゆいこのへると詞あれば考合すべしされど古本には「山里は稻葉はこへるたもとにも風そよめきて袖しほる也」と有いでいこのへるたもとこは出息延る袂にもにて「ここに」は一本に從て心得べくや

(六)尺素雙魚　明人陳全之粹仲が蓬窓日錄八の卷詩談二十三丁に古樂府詩尺素如レ殘雪一結成二雙鯉魚一要レ知二心裏事一看二取腹中書一據二此詩一古人尺素結爲二鯉魚形一即緘也客從二遠方一來遺二我雙鯉魚一即此事也下文云烹レ魚得レ書譬況言レ之耳非二眞烹一也

(七)日本人の詩のさた　同書二の卷詩談二十七丁に倭人能レ詩多二佳句一有二絶句一云棄レ子拋レ妻到二大唐一將軍何事苦相妨通津橋上團圓月天地無レ私一樣光蓋倭人入貢則艤二舟定海之通津橋一而妨閑之法頗嚴故其詩云レ然

(八)戒子詩　同書同卷詩談二十九丁ウに張總戒レ子詩云銀燈剔盡自吝嗟富貴榮花有二幾家一紅日難レ消頭上雪黃金都是眼前花時來言語風行レ草運去田園水搏レ沙寄與兒曹須レ勉レ力各人尋箇活生涯

(九)古詩の評井白樂天の詩　同書同卷詩談二三丁ウに敎陶孫器之評詩曰魏武帝如二幽燕老將一氣韻沈雄曹子建如二三河少年一風流自賞飽明遠如二飢鷹獨出一奇矯無レ前謝康樂如二東海揚レ帆風日流麗陶彭澤如二絳雲在レ青舒卷自如王右丞如二秋水芙蓉倚レ風自笑一韋蘇州如二園客獨爾晤二合音徹一孟浩然如二洞庭始波木葉徹落一杜牧之如二銅丸走レ坂駿馬注レ波白樂天如レ山東父老課二農桑一事々言々皆著實一元徽之如二李龜年說一天寶遺事一貌悴而神不レ傷劉夢得如二鏤レ氷雕レ瓊流光自照李太白如レ劉安雞犬遺二響白雲覆一其歸存恍無レ定處一韓退之如二臺沙背水惟韓信獨能一李長吉如レ武帝食二露盤一無レ補多欲一孟東野如二埋レ泉斷レ劍臥レ壑寒松一張籍如レ優工行二鄉飲一醻献秩如時有レ詼氣一柳子厚如二高秋獨眺一霽晚孤吹一李義山如二百寶流蘇千絲鐵網綺密環妍要非二適用一宋朝蘇東坡如レ屈二注天潢一倒二連滄海一變眩百怪終歸二雄渾一歐公如二四瑚八璉正可レ施二之宗廟一荊公如レ鄧艾縋レ兵入レ蜀要以二險絕一爲レ功山谷如二陶弘景入レ官折レ理談レ玄而松風之夢故在一梅聖俞如二關河放レ溜瞬息無レ聲秦少游如二時女步レ春終傷二婉弱一后山如二九皐獨唳深林孤芳冲寂自妍不レ求二識賞一韓子蒼如二梨園按レ樂排比得レ倫呂居仁如二散聖安禪自能奇逸一其他作者未レ易二彈陳一獨唐杜工部如二周公制作後世莫二能擬議一云々與清按に此中白樂天が詩評に如レ山東父老課二農桑一事々言々皆著實一といへるは令二老嫗解一レ之と義おなじ樂天が詩評は孫氏談苑五の卷冷齋夜話徐氏筆精七の卷漁隱叢話詩人玉屑詩藪などに見ゆ江談抄六文集中他人詩作入事の條に文集ヲバ古人モ大乘經ノ次小乘經ノ上トゾ云ケル云々江吏

部匡衡集人倫部詩序に近日蒙ニ綸命一點ニ文集七十卷一夫江家之爲ニ江家一白樂天之恩也故何者延喜聖代千古維時共爲ニ文集之侍讀一天曆聖代維時齊光父子共爲ニ文集之侍讀一天祿御宇齊光定基父子共爲ニ文集之侍讀一爰當今盛興ニ延喜天曆之故事一匡衡獨爲ニ文集之侍讀一云々十訓抄古今著聞集詠歌大概などにも文集の沙汰あり可ニ考合一

（十）張飛が書井辨慶が書　蓬窓日錄八の卷詩談二廿六丁ウに涪陵有ニ張飛書刁斗一其銘文字甚工飛所レ書也張士環詩云天下英雄只豫州阿瞞不共戴天仇山河割據三分國宇宙威名丈八矛江上祠堂嚴ニ劒珮一人門刁斗見ニ銀鈎一空餘諸葛秦州表左祖何人復爲レ劉與清曰塵塚物語に武藏辨慶能書のよしあり武藏國多西郡菅村仙石山壽福寺に辨慶義經讀合の經の奥書あり辨慶張飛智勇和漢同日の談その能書なる亦一轍

（十一）鍾馗詩　同書同卷詩談二廿三丁ウに蘇人劉草窓先生爲ニ御醫一時作ニ鍾馗詩一而匏庵吳文定公在ニ南雍一時亦嘗賦レ之聲溢ニ兩都一今文定詩見ニ集中一而草窓詩無レ聞矣予故識レ之以示ニ知者一劉詩云長空糊雲夜風起不忿成群跳ニ狂鬼一倒提ニ三尺黃ニ河水一血洒ニ蓮花一舞ニ秋水一飛螢負火明月羞檠窠影黑啼ニ鴞鸛一綠袍烏帽逞行事礫レ腦劊レ腸天亦愁中有巨妖誅未レ得盡覩ニ鑒輪一驅ニ霹靂一如何袖手便忘レ機回首東方又生レ白云々鍾馗の事已にいへり可ニ考合一

（十二）花の十友十二客　同書同卷廿七丁ウに十友十二客宋曾端伯以ニ十花一爲ニ十友一各爲ニ之詞一茶蘼韻友茉莉雅友瑞香殊友荷花浮友巖桂仙友海棠名友菊花佳友芍藥艷友梅花清友梔子禪友張敏叔以ニ十二花一爲ニ十二客一各詩一章牡丹賞客梅清客菊壽客瑞香佳客丁香素客蘭幽客蓮靜客茶蘼雅客桂仙客薔薇野客茉莉遠客芍藥近客云々

（十三）一杯元氣　俗に一杯元氣とて酒を呑て徽纏の時大に元氣をましいふまじき事をもいひほこるまじき事をもほこり行まじき所にもゆきすまじき事をもすなるは全浙兵制下卷附錄陳レ禦レ寇之策に夫日本之兵全以レ酒爲レ膽臨レ陣之時一醉而陪レ氣忘レ生此法宜レ用レ之とあるこれ也又蓬窓日錄八の卷詩談二五十三丁オに佳節每從ニ愁裡一過壯心偶傍ニ醉中一來蘇老泉詩也云々壯心偶傍ニ醉中一來は一杯元氣也

（十四）田邊靜馬　甲斐國吉田の御師に田邊靜馬といふもの有り余が許に訪來て家相方位の書などのよみがたき所々の講釋を乞へることあまたたび也き今よりは廿年あまりにもや成ぬらん江戶に移り住めりときけどその後はたえて訪來ず日本橋木原店邊にて家相を講じ愚を欺き世に行はるゝよし長谷川平藏主渡邊孫左衛門主など物語られつれど余に逢はゞ其文盲のあらはれん事をやはぢ思ひけんたえて形を見することなかりき此比權門勢家などに出入し多の金を欺とりつゝて脇坂の大輔の殿これを捕へて獄にくだし考じ給へるに其罪に伏せるよし或人御沙汰の寫をもて來て示たりそは

申渡

新革屋町代地金治店陰陽師

田邊靜馬

其方義轉宅又ハ普請婚姻等の處ヲ時日吉凶判斷致候節土御門家職折々新法異流致間敷段認有レ之候ヲ相背諸人ヲ爲レ可レ欺更ニ讀ニ義出來不レ申書物を居宅ニ儲置日本往古名人之說は不レ及レ申唐土之事ニ而も家相方位の儀は博覽之由申觸實は師傳も無レ之一己之存意を以謝禮等多分ニ可ニ貰請一と縱令不レ宜方角へ相觸とも居所の土取替候節ハ子細無レ之右ニ而官位昇進は不レ及レ申福壽其心之儘ニ相成由者其分限等見計多分之失脚相掛リ候ヲも不レ厭深夜ニ鍬入爲レ致遠方ゟ土爲ニ持運一剩病人之膂脈も不レ致咄之趣を以藥を與へ又は疳氣ヲ鎭メル由ニ而方位ニ事寄猥ニ泥水ヲ爲レ呑右躰種々手段ヲ巧ミ年來諸人ヲ誑惑いたし金銀貪取候始末方不屆ニ付遠嶋申付ル

是は天保三年七月下旬の裁斷なり抑識緯術數鬼說妖術をもて往事未來を指示し人の吉凶を說諭すはおほかた無稽無學を恥す貪利のために天下の人民を僞誘せるわざなれば君子愼て狂惑せらるべからず又妻戀稻荷の神主村本權頭（元名主稅）近年狐付の祈禱又は虫封じなどいふ咒術大に流行し巨万の財を貪取り愚俗これが爲に尾を搖りて祈禱を乞へるはかたはらいたきわざなりしが是も禁を犯し七月下旬捕て獄に下されたりき此權頭も余相識なりしが近來は富豪にほこりて人を輕蔑し貪欲福富の者のみを親み友とするがにくさに二年以前絕交せり其妻は豐田九右衛門といへる富商の町人の女也驕奢に長じ自慢不敬の天罰遁がた

くこれも大輔の殿の明鑒によりて縛せられたりとなん此殿のかく好曲を糺明し給ふは君のため世のためありがたきわざといふべし古はしらず近來二百七十人講といへる無盡を企寺院の好曲法師良民を欺き金銀を謀取もにくむべし出家神職の類の遊民の隱惡此殿のためにあらはれ天下の良民其陰謀に陷られざらんはいみじき陰德なるべければ此殿の末必天幸を得て榮えさせ給ふべし神佛の不靈此殿をいかんともすることあたはず巫僧の無法此殿の誡を逃ることあたはず嗚呼快事哉

（十五）神儒佛の三道　神道佛敎共に治二天下一之具ならねど皇日本もと文學にならはず質朴の愚夫愚婦貪欲の黠男奸女これに幽冥因果の事をさとして菩提に入らしめこれに諸願滿足の事ををしへて敬神の心を起さしめ然て忠孝に道びくの外せんかたなし故に漢土にては無用の佛法なれど皇日本にては有用輔政の大道なり神道はたおなじければ永世廢がたき道といふべし佛法東漸の語空しくいへるものにあらずされど釋徒の奸謀破戒神職の懈惰放逸共に糺彈して良民を害せざるやうにし自身堅固ならしめざらんには中

中に亂の階也儒道は治家修身治國平天下之道實に尊崇すべけれど一文不通の民に說きかせんには迂遠無用のものといふべしかゝれば三道共に優劣ありて取捨せざれば用がたし

（十六）たむしの妙藥　赤蓼螺の腸を取てたむしに傳ればいかなる重症にても必平愈す

（十七）やけどの妙藥　湯火傷には木瓜の水を傳れば速に痛去りて平愈すそは赤くなりたる胡瓜をきざみて磁器に貯れば皮種などは底に沈て上は清き水になれるを用る也いく年ふとも氣味損ずることなし其功能妙也また海膽の醬を傳るもよし

（十八）目に傷を治方　目を突或は打などして傷けるには蠅の頭をおほくとりて突潰し乳汁に漬してその水を納事あまたゝびにて平愈す

（十九）熱病の治方　風氣疫邪すべて熱病の初發に蚯蚓をとりて泥を去りよく洗て煎湯にし多く服すれば必治す凡熱病を治するに蚯蚓湯に過たる妙藥なし余あまたゝび試て其神妙方なることを知れり

（廿）もだえ　俊賴散木集八の卷下に片戀の心を「はなはなとやさたつ妹はこひもせでつたなきせなそ泣

もたえける」按に此なきもだえけるを諸本「なきも絕ける」と書けり一本に「なきもゝへける」又一本に「なくもたへなる」などゝ書たれど泣悶事と聞ゆもだゆといふ詞は於比由などの語勢におなじくて於比由は喉音の於聲を出し於良夫さま也由は由流とも活て動搖さま也されば喉音の奥まりたる聲を發出さんとすれば體もゆりうごくより於比由とも於比由流とも於比江ともいへる也毛太由は聲を出さず默止して動震苦さまなれば毛太由流毛太江などいへり賴政集に遂レ夜增戀の心を「日をへつゝそふるつらさを重荷にてもたへはつへき心ちこそすれ」此歌のもだへは悶を持堪によせたりかくては假名も毛多閇と書べくおもはるれど後の歌なれば假名の證に用がたく又推を四位老を生など通音もてよみかくること常なればそれになづむべからずさて此詞の所見は空穗物語ただこそ廿四丁カにおとゝおごろきもだえ給ひておもはすことかぎりなし云々落窪物語二の卷下の九丁カにいかで是にむくいせんともだえ給へば云々撰集抄五の卷宇佐宮事の條に涙をこぼしてもだえしかば云々發心集四の卷七丁カにおどろきまどひおびたゝしく手をたゝきてまなこをいからしてもだえまどひてたえいりぬ云々砂石集四の上卷三丁ウに或入道餅ヲ好ム醫師ナル故ニ請ジテ主餅ヲセサスルニカノ音ヲ聞テ始ハ小音ニオオオト云ホドニ次第ニ高クオゝオゝト鞠ナド乞ヤウニオメキテハテハ疊ノヘリニ抓ミツキテ入道ガキカヌ處ニテコソシ候べケレカノツク音ヲ聞候へバタヘガタク候トテモダエコガレケリ此事ハカノ主ノ物語也云々地藏靈驗記六の卷廿一丁ウにイカゞセントモダエツゝ云々參考保元物語三の卷廿一丁ウに聲ヲ惜マズフシマロビ悶ケリ云々又廿三丁オ空シキ骸ヲ抱キ悶ケルガ云々參考平治物語二の卷廿八丁ウに起ヌ伏ヌ歎テモダエ焦レ給へバ云々また源平盛衰記四十五丁オ五廿四丁ウ九廿六丁オ十八廿一丁オ十九七丁オ卅一十二丁オ四十六廿五丁ウ四十七十二丁オ平家物語二十八丁ウ長門本平家物語三十三丁オ同ウ十五丁ウ五十四丁ウ十六百十丁オ十七五十九丁ウ十八廿一丁オ曾我物語一五十一丁オ十九丁オ參考太平記十六百廿五丁ウ廿一七十五丁ウなど此外いとおほかれどくだくだしければ引出ず假名拾要に「もだえ」うつぼ物語に見ゆ證詳ならねど「もだゆ」といひて「もだふ」といはざれば必「え」の假字也云々節用集毛部に悶焦モダエコガル云々

（廿一）もんちやくと云俗語　俗言にモミモンチヤクスルなどいふは捫擇の字也節用集毛部に捫擇モンチヤク云々また問著同云々

（廿二）とごゑとわたる　散木集三に田上にて鹿の聲のはるかに聞えければ俊頼「妻こふる鹿のとこゑにおとろけはかすかにも身のなりにけるかな」此とごゑはとほこゑの略語也とわたると云詞に門渡るも飛渡るも只發語に置たりとおぼしきもありと已にろうじたりき遠渡るの心なるも有べし可ニ考合一

（廿三）小兒の尿するをしうをなすと云詞　小兒に小便せさするにシイヲスルといひシユウトヘヨウグルなど云俗語あり俊頼散木集十の雑隠題の歌に拾遺抄「しとねにはしふゐせうとそおもひつるしたりかほにもつもる花かな」此歌は下根を通はしてしとねといひそれに尿音をよせしふゐせうに尿せんといふよしをよせしたり顔に尿をしたりがほとよせたる也尿をしふゐといへるはその尿するおとのシユウといへば也然てシイヲスルなどいふもこれ也シトといふも尿をしとゝ垂出す音よりいへる名也古くはシトといひさて轉りてはシフキともきゝシイともきくはその垂出す音によれる也花木の下根に立よりて尿をせんとおもひつるにはやくもしたり顔に花がちりつもりたるよしの歌也

（廿四）男柱　神代紀に櫛の雄柱をホトリバとよめりそは櫛の端なる歯は大なれば雄柱と書きその端にあれば邊歯とはよめる也雄柱の字は大柱の義をとりて借用たる也俊頼散木集十の雑連歌に雀のきざはしの男ばしらにゐてなくを見て肥後君「すゝめこそをとこはしらに鳴ゐたれ」つく〳〵「きさはしたなくいひやしつらん」

（廿五）雉をやまのうつばりといふ　論語の山梁之雉の語によりて雉を山梁といひ俊頼散木集十の雑連歌に中宮亮仲實が家に人々あまたまかりてあそびけるにたるきに鳥をさしたりけるを見て「たるきには山のうつはりさしてけり」慈雲房つく〳〵「軒はに海の月をやどして」海の月はクラゲ也雉と海月を對したる連歌也

（廿六）かな輪井五徳　散木抄九にまへのすびつにすることもなくてかなわといふ物のたてるを見て「いかにせんいつちゆけとも世の中のかなはぬさまそに

るものもなき」節用集加部に鐵輪カナワとありて今世の五徳といふもの也　類聚名義抄八の金部に鉿カナワとも見ゆ　頭書臥雲日件雑抜尤四十八冊長禄四間九十六の條に前刻季瓊話戦三管領門一有落書一蓋盡二鐵輪玄二箇一足存二一足一置二于基盤上一（其意武衛畠山細川此三家謂二之三職一猶二三足鐵輪一今武衛畠山皆亡此次細川御番也基盤其音相類故也）

（廿七）つぐら　散木集九恨レ躬恥レ運雑歌百首の中に「山かつのつくらにゐたる我なれや心せはさをなけくと思へは」つぐら一本にはつくしとあれどつぐらを正とすツグラは武藏相摸の方言に曲物の器をツグラといへりそれなるべし

（廿八）たうざうと云醤井法論味噌　同集十連歌に奈良にしりたる僧の論議しけるがいとしもせずと聞えければ承源法師「論議をはみそひしほにそしたりける」後に聞てつけゝる「たうざうなりと人はいへども」論議みそは法論味噌也庭訓往來桂川地藏記節用集など所見おほかりたうざうは唐醤也今もタウザウとて豆を烹て醤に造る也法論味噌は油もていりたるをいふ　頭書雍州府志六ノ十七丁オホロミソ下學集下十丁カ運歩色葉集保部に法論味噌ホロミソ云々

（廿九）燕口　俗にツバクロクチといへる袋あり節用集都部器財門に燕口ツバメクチと有これ也

（卅）戟レ手　通鑑綱目續編五代拾遺五十八丁ウ漢乾祐三年の條に秋八月故晋太后李氏卒二于遼一后病無二醫藥一惟與二晋主一仰レ天號泣戟レ手罵二杜威李守貞一曰吾死不レ置レ汝云々按戟手は手に力をいれて握拳を差出し打突まねなどするさまをいふ戟とは刀戟にたとへたる語也　頭書五代史四十二ノ五丁オ宋高僧傳五の卷五丁右唐中嶽嵩陽寺一行傳に遍戟レ手曼罵曰我居レ鄰周給迭互一綱維間抱二乳汝一長成何忘二此悪一耶云々同十九の卷十一丁オ唐ガ州烈鄉阿足師傳に其子忽於二流數十步外一望二身水面一戟レ手罵二其父母一曰與レ爾寃仇宿世緣業云々同廿の卷廿三丁ウ戟手呵曰云々蜀志六ノ十四丁ウ黄忠傳注に先主以二手戟一擿レ之曰子龍不二棄レ我走一也佛祖統紀四十七ノ十八丁ウ嘉定屠城記略七丁ウ閏六月十八日條に鄉兵支洪陸文等戟レ手罵曰云々

（卅一）おほどれる井あをつゝら　散木集九の卷恨レ躬恥レ運雑歌百首中に俊頼「柴の菴にはひおほどれる青つつらむつかしけなる世にもふるかな」群書類從本にはおほられるに作り夫木抄雑十にはおほゝれるに作れり共に誤にて寫本におほどれると有をよしとす類聚名義抄八の卷艸部に蓬オホドル又ミダル云々蓬頭オホドレカシラなど見えて亂れたるをおほどるといへり柴の菴にはひみだれたる青葛の物むづかしきさまなるをたとへにせし也あをつゝらは古今戀四に寵「山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし」契沖餘材抄に六帖題あをつゝら下句た

づねくれどもわふよしもなしと有て作者なし和名抄云防己本草云防己一名解離和名阿乎加豆良延喜典藥寮式には防己をあをつゞらと點せり又防葵とも書けるをおなじくよめり云々賀茂翁續万葉論(四)に防葵とかけるをおなじくあをつゞらとよめりされど是は一種別物也己葵眞淵按に同音にて同事歟云々與清按に防己を和名抄に阿乎加豆良と訓式にアヲツゞラとも點じたれば同物なるとは疑べくもあらねど防己に限らず青き黒葛の總名ともいふべし武相の地にてトヅラといふは青き黒葛にて舶來の止にも似たるほどの力強き物也黒葛多壜(サハマキ)など太刀にも用たるは是なるべしさてあをつゞらの歌は後拾戀二同雜戀同物名後拾遺戀二(首)金葉戀下續後撰夏續千載雜中夫木抄雜二十七(丁)同四(廿七丁)同十(廿一丁)又(廿二丁)雜十一(三丁ウ)雜十四(廿丁ウ)など所見おほし雜十(廿丁ウ)にはあをかづらともよめり夏三(廿一丁オ)には青つゞらこの瓜雜十三(六十四丁ウ)には青つゞらこにくみてなども見ゆ

(卅二)霜くづれ　覺性法親王の出觀集(一丁オ)春部に立春の心を「春たては峰のかけひの霜くづれ□なをす水もりくとて」新撰六帖二(巻)の衣笠内府冬の田「山里の門田のあせの霜くづれおち穗ひろひし道もたえつつ」藻鹽草一(巻)霜部に霜くづれ云々

(卅三)青つゞらこ　夫木抄雜十三(巻)籬部に惠慶法師「くりかへしまかきの内に花つめはいとまかりにもありとやは思ふ」左注に此歌は重之がもとにあをつゞらをこにくみてなつめくりなどをはなにませてやるとて云々與清曰此歌惠慶集新千載雜下(巻)物名に出て重之がかへしも有夫木抄雜十(一)木部にまがり木重之「わさとこそくりははつめれまかり木にはひまつはるゝあをつゞらをは」左注に此歌は惠慶法師のもとよりあをつゞらをこにくみてなつめくりなどを花にませておこしたる云々同抄夏三(巻)瓜部に六帖題知家「むすひおく青つゞらこのかほこりはさそなめならふたくひのみして」按に此は新撰六帖六(巻)のあをつゞらの條の九條入道歌也青つゞらこは青き黒葛して組たる籠にて今世の青籠の類なるべし青つゞらは防己也頭書(拾遺物名は春めきにけりあをつゞらこにやくまゝし若なつむへく」孫姫式に「長月のあをつゞらこにとり入て一日も君をやけぬ日はなし」

(卅四)鶉衣　八雲御抄三下(巻)衣食部に鶉衣うづらの衣是法文に有うすくやさしき衣也云々藻鹽草十八(巻)の衣部にうづらの衣八雲御抄云是法文にあり薄くやさしき衣也云々又異說云衣のすその破たるに鶉の毛の似たるをいふ也と云々吳竹集五(巻)の字部にうづら衣とは短き衣を云也ころものすそのやぶれてさがりたるは鶉の毛に似たるをいへり云々夫木抄雜十五(巻)衣部に擣衣歌うづらの衣從三位廣範卿「今もなほ野となる里にたれすみて秋はうつらの衣うつらん」按にうづら衣は荀子に子夏家貧衣若懸鶉云々杜詩に書成無過鴈(フルキ)衣故有懸鶉云々と見えて故衣を懸鶉にたとへいへり懸鶉は詩魏風伐檀(章)に不狩不獵胡瞻爾庭有懸鶉兮といへるを字面の出處とす弊衣の貌が鶉を懸に似たる義也驢驢嘶餘にウヅラ衣トハ重ヲノナキヲ云也とあるも弊衣の義をとれる成べし八雲御抄に法文有と仰られしは出處未考藻鹽草の異說は愚考に叶へり又夫木抄雜十五(巻)に三百六十首うすら衣好忠「せみの羽のうすら衣に成行になと打とけぬ山ほととぎす」此歌曾丹集五月中の歌には「蟬の羽のうすら衣に成しより妹とぬる夜の間とはなるかな」と有此うすら衣(ウヅラコロモ)鶉衣と通音なれば同義かとおぼめかれど拾遺集夏部に大中臣能宣が「なくこゑはまたきかなくに蟬の羽のうすき衣をたちそきてける」といふ歌蟬の羽のうすき衣となじつゞけざまなれば薄ら衣の心にて鶉衣とはもとより別なるべし

(卅五)ながめ柏　古今六帖六(巻)のながめがしは「人こふるなかめ柏は古郷のうきねにのみそしけく見えける」夫木抄雜十(一)には四の句かきねにのみぞと有和歌童蒙抄八(巻)の木部に人コフルナカメカシハヽフルサトノカキ子ニノミソシケリサキケル六帖第六ニアリナガメガシハトヨリ云々八雲御抄三下(巻)木部にながめ柏初學抄云々藻鹽草九(巻)の柏部にながめ柏云々詞林採要抄八(巻)の皃手柏付異名柏の條に異名柏ト者凡柏ト云ニ付テ樹ノ名ニアリ石ノ名ニアリ木ノ類ニハ玉柏ハホムル言也ナラ柏ナガメ柏アカラ柏ヒロ柏實柏石ノ名ニハ玉柏岩戸柏水ノ柏三角柏御綱柏アリ云々新撰六帖六(巻)のながめがしは衣笠内府「身にしめと吹ころほひの嵐かな秋の夕のなかめかしはに」爲家「もろくちる比そかなしき山本のなかめかしはのなかめ〳〵て」知家「雲はれぬなかめかしはの下露はをやみなくこそ袖ぬらしけり」信實「雨やまぬふるからをのゝ遠方になかめかしはも名にしおふらん」光俊「いたつらになかめかしはの名にたてゝたのむとゝは今日もくら

しつ」右の信實の歌は夫木抄雑十にも載たり現存六帖になが めがしは藤原隆祐「神無月しくれぬ日こそなかりけれなかめかしはの名にやおふらん」正三位知家「雲晴ぬなかめかしはの下露の」云々新六の歌におなじ下露はを下露のに作れるのみ異也按になが め柏は長芽柏の義にや古歌のさま叢生して冬は散ものと見ゆ今もさやうの槲あるにや可レ尋

(卅六)かゞし　呉竹集(三の巻か)部九丁ウに安山子とは田の鹿をおどろかす人形也鳴子ひたそうづいづれもおなじ類也「まもるともおもはすしらぬものなからいたつらならぬかゝしなりけり」春雨抄(三の下巻加部)七十一丁オにかゞし安山子東山千句に「人にそ迷ふ夕くれの道」「かゝしたつ尾上の畑やつくるらん」紹巴匠材集(一の巻四十八丁ウ加部)にかがし人形を田に立也云々案山子をカゞシとよむ事滑稽雑談(十六の巻)八月下の部に見ゆ溫故日錄八の巻(廿六丁オ)をも考べしカゞシといへる語は令レ臭(カゞ)にて燒くゆらして其にほひをかゞせ鳥獸を近よらしめざるすくも火より起ておどろかしにするそほづにもいへる也燒カゞセといふ事日蓮御書などに見えそほづの事は右事記傳の山田のそほづの注にくはし(頭書)柏永題筆小窓間語(下學集下十七丁ウ)ニ六條漢三才圖會農具部景德傳燈錄十七卷七丁オ道齊傳ニ師曰面前按山子也不レ會云々鈐錄三ノ巻還地條ニ異國ニハ山水環拱スルヲ靈地トス是ハ城ノ近邊ヲ云ニ非ズ遠ク見渡シタル景致ヲイヘリ山ノ形モ其處ヲ取巻テ内ノ方へ向ヒ川ノ流モツドヒ聚ルヲ云如レ此地ハ地氣盛ニシテ万物生長シ人氣モ盛ニシテ民繁昌シ才智アル人モカヤウノ地ニハ生ズル事ナルユエ靈地トスル也ソレニ付キ主山案山輔山ト云「アリ多ノ山ノ内ニ北ニ當リテ一番ニ高ク見事ナル山アルヲ主山ト定メテ主山ノ南ニ當リテ離レ山アリテ上平ニ机ノ形ノ如ナルヲ案山トシ左右ニツゞキテ主山ヲ輔タル形アル山ヲ輔山ト云ヒ重々環拱トテ遠近幾重モトリマハシタルヲヨシトスル」也云々普燈錄廿六ノ卅丁ウ天童應奄華禪師候に前是案山後是主山云々北條五代記五ノ十五丁オ東里新談上ノ十一丁ウ

(卅七)マクリの方シヤコサイ湯　マクリの方はシヤコサイ湯と同方也シヤコサイ黄蓮大黄紅花甘草以上五味也シヤコサイは薩摩の海に出るを上品とす唐にはなき薬也其効能胎毒を降し霍亂食傷を解す

(卅八)喉に魚骨を立たるを拔方　酢味噌をゆるく製し廣東縮砂の粉を少しいれて呑しむれば忽に脫て平愈す奇方也

(卅九)湯火傷を治ル方　湯火傷(ヤケド)には溫灰(ヌクバイ)をときて傅るを妙方とすウニノ醬を傅るもよし水油をぬり味噌をぬるなども又妙

(四十)灸治の時激血(チハシル)を治方并灸治の時の豆煎　灸治(ヤイト)する時灸より血出て迸事ありこれ人神のめぐりにあたれる也いかなる薬を用ても不レ治必死す但干飯と

黒豆を煎たるを嚙て傅れば忽愈實に奇方也古來より灸饗に豆米煎を用るは此用意なるべし

(四十一)記夢　天保三年十月十一の夜の夢に夜分の事なれどいとくらからず吾住所も田舎の岡上などの家にて谷をへだてゝ向の山に叢祉の杜あり杜の小木左右になびきて正中の神木松杉の類にやありけん遠目なればさだかならねどいと高く葉もしげりたる大樹の直に立たるを見たりこれ大樹を拜し奉る心ちしていとたふとくなんおぼえたりし又翌十二日の夜の夢に晝の未申などの比とおぼしきに一ッの池ありて池中に龍の或はあらはれ或は潜て游さまを見たり龍は貴瑞の物なるをまちかく見しはたぐひなき奇瑞ならずや

(四十二)トゲヌキ并マムシノ嚙タル藥　トゲを拔には蝮の頭を多くおしつぶし飯糊にてねり紙につけはるべし即効あり又マムシのくひたるにこれを附ればおほく膿水を吸出て頓に愈(頭書)無住雜談十六丁オ魚骨を喉に立たるを拔法あり

(四十三)歌道　續世繼(十の巻四丁オ)敷嶋の打聞に左衞門尉頼實といふ藏人歌の道すぐれても又このみにもこのみ侍けるに云々大鏡(三の巻十三丁ウ)慶義公の巻に只今按察大納言公任と申す小野宮の御まごなればにや歌の道すぐれ給へり云々增鏡(一の四十三丁オ)新嶋守に家隆の二位は新古今の撰者にもめしくはへられ大かた歌の道につけむつましくめしつかひ給ひし人なれば云々同(二の二丁ウ)藤衣に此宮は故攝政殿(後京極よしつね)の姫君にてものし給へばうたの道にもいとかしこうわたらせ給へば云々地藏靈驗記(十の十四丁オ)六段に歌道は能モシラヂドモ當座ノ題ヲ下シ玉ハレ仕ラント申ケレバ云々愚記(八の九丁オ)永正四十十一の條に雅數僧都相伴玄清(連歌堪能)來談歌道事云々吾妻鏡六の巻(五十三丁ウ)に佐藤兵衞殿憲清法師也今號二西行一云々此間就二歌道幷弓馬事一條々有レ被二尋仰一事上云々神皇正統記(下の五十六丁オ)後醍醐の條に白河院の御時修理のかみ顯季といひし人云々此人は歌道などもほまれありしかば云々吉野拾遺(四の十二丁ウ)楠正行始て吉野へ參りし時の事ノ條に歌の道にも心ざし有て云云今取かへばや(上巻十四丁オ)につくり出るふみのかたにも歌の道にもはかなく引わたす筆のあやつりまでよにたぐひなく云々家長日記(卅丁ウ)にこれはみな歌の道にたづさはれる人々なり云々三國傳記(一の四十九丁オ)廿七段に歌道ノ德ノ事云々同(六の卅八丁オ)廿一段西行法師値二人丸一條

に幼少ノ昔ヨリ歌道數寄ノ輩有テ云々拾玉集五ノ五十二丁ウ
左注におきのりかへすはうたの道にはかくやすく候
ものを云々北條早雲廿一ヶ條四丁に歌道なき人は無
手にいやしき事也云々武田信玄百ヶ條に歌道可レ嗜
事云々源平盛衰記二の五丁ウ清盛息女の條に歌ノ道ニ達
シテ並ナキ御事也云々又十六の十丁ウ菖蒲前の條に上下男
女歌ノ道ヲ嗜ン者尤カクコソ德ヲバ顯スベケレ云々
又十六の十三丁ウ位入道藝等の條に歌ノ道ニモ類アラジト
覺エタリ云々又廿七の廿三丁オ一谷落城の條に此守長ハ歌ノ
道ニハヤサシキ者ニテ云々曾我物語五の廿丁オ五郎がな
さけかけし女出家の條にもとより此女の心ざまじん
じやうにして歌の道にもやさし云々神道集四の諏方
大明神五月會の條に歌道ハ家に傳ヘテ昔モ今モ類ト少キ
人也云々定家卿和歌庭訓七丁ウに歌の中道は只みづか
らしるべきにて侍る也云々砂石集活板七の下無ニ嫉妬ニ
之心ノ人ノ事ノ條に常陸國或所ノ地頭京ノ名人歌道人
ニシラレタル女房ヲカタラヒテ云々又同十の卷十四丁ウ述懷ノ
事ノ條に文章ニモクラク歌道ニモウトク云々東野州
聞書廿丁ウに歌の道は大事のことにて侍る也云々下學集
下六丁ウ態藝門に宗匠先達義也日本俗或指ニ歌道之達者ニ
云ニ宗匠ニ也云々千載集序四丁オにこの歌の道をまなぶ
事をいふに云々玉勝間五の卷十丁ウにしき島の道又歌の道
といふこと後の世には常なれど古今集序を見るにか
の御世や歌の心をしろしめしたりけん云々こゝにい
にしへのことをも歌の心をもしれる人云々人まろな
くなりにたれど歌の事とゞまれるかななどあるは
後の世の文なりせば必歌の道とぞいはましをかく歌
の心歌のことなどいひて道とはいはず眞字序には斯
道とも吾道ともあるをかな序にはすべて歌の道といふ
へること見えず云々節用集加部言語門に歌道カダウ云々
太平記一の卷六丁オ儲王御事條に歌道數寄ノ御翫有シ
カバ云々又參考二の十三丁ウ爲明詠歌事條に二條中將爲明卿ハ
歌道達者ニテ云々

(四十四)和歌の道　古今著聞集五の十一丁オ和歌部に和歌
部に和歌の道すぐれさせ給ひ云々同部四十三に和歌
の道は顯密知法にもよらざりけり云々又四十九和歌
の道をこのみて云々砂石集活板五の上廿一丁ウ學生之方事論
議ニ心得タル事條に我朝ノ習古モ今モ翫ブ和歌ノ道
御心得ナキコソ無下ニオボエ候ヘ云々又同卷廿四丁ウ和歌
之道深理有ル事ノ條に和歌ノ一道ヲ思トグニ散亂麤動

ノ心ヲヤメ寂然閑靜ノ德アリ又言スクナクシテ心ヲ
含メリ惣持ノ義有ルベシ惣持トイフハ卽陁羅尼也云
云同書五の下卷七丁ウ人之感有ル和歌ノ事ノ條に兒タチニテ和
歌ノ道心得タリケル人云々吉野拾遺二の五傢好法師來
談事條に和歌の道に深くおぼしいらせ云々愚記五の卷廿
三丁オ文龜二年四月四日の條に去年又和歌道事多相承
云々增鏡一の九丁オおどろがしたに中にも敷島の道なんすぐれさせ給ひける云々同二の十丁ウ藤
衣に敷島の道にのみぞ御心をのべける云々同八の十二丁ウ
秋の深山に當代も又敷島の道もてなさせ給へば云々
吉野拾遺三の十四丁ウ伊與國左馬介が歌天覽事の條に寄道
祝「をさまるもとわりなれや君か代のめぐみつきせ
ぬ敷しまの道」同三の廿四丁ウ登俱法師の條に鴨の長明が道
心といはれしは糸竹敷しまの道を深く心がけて云々
神明鏡下卷後醍醐院の條に爲明「オモヒキヤ我シキ嶋
ノ道ナラテ浮世ノ事ヲトハルヘシトハ」伊勢大輔集
十三丁オに「あとくれて昔し戀しき敷島の道をとふ〳〵たて
つねつるかな」二條太皇太后宮大貳集廿三丁オに「へたて
おほうみそちはかりにもすきやせん我またしらぬ敷
島の道」千載集序三丁オに敷しまの道もさかりにおこり
て云々光經集十丁オ詞書に敷島の道は殊に御沙汰有事
にて云々新撰六帖一あ光俊「さはかりの朝まつりとし
けかれと世々にすてぬは敷しまの道」夫木雜一李花集
下廿二丁オにも出に宗良親王「敷しまの道しあらはと賴む世をは
かなきあとゝおもはさらなん」亞槐集十雜下に雅親卿
「なほさりにあふくへしやは今も世に神世をうつす

しき島の道」木戸孝範集一丁「敷しまの道の光もおくれと八千代の君にかきそつたふる」東常縁集廿三丁に「かたはかり殘さん事もかゝるうき身はなにと敷島の道」又廿四丁「今更に身のおこたりそしられけるとはすはいかにしき島の道」東野州聞書廿五丁定家卿詠「しきしまの道をきはめてうへそなきあふかさらめや定家の風」又四十二丁常光院法印「末とほく春をしめ野に敷島の道をもちきる草枕かな」古今著聞集五の十和歌部寂然法師「敷しまやたえぬる道もなく〳〵も君とのみこそ跡をしのはめ」詞林采要集三の三磯城大和の條にヤマトコトノハシキシマノ道アシ原ノ道ナド申ハ同コトナレバ云々爲尹千首八十「わきて猶あふきやせまし敷しまの道守るてふ住吉の神」又八十四「敷しまの道のとわさしけきにものとかなる代のほとは見えけり」下學集序一丁に或問二敷島之道往人一拾二倭歌之餘材一云々姉小路基綱卿春日社參記一丁に敷しまの道にひとりあゆむとかや云々寶篋院殿住吉詣記三丁に「神代よりつたへつたふる敷島の道に心もうとくも有かな」宗長手記下の四十四丁に「よとともに浪より松のとのはの敷しまの道をたつのもろ聲」正徹慰草廿丁に「敷しまの道をつたへて久しかれ千代の白菊松のよろつ代」堯孝伊勢紀行八丁に「敷しまの道廣き代の旅なれはとのは草や枕にもせん」藻鹽草十六の卷六十三丁歌部にしきしまの道しきしまやまとことのはともいへり云々近來風體抄十七丁爲明卿歌「おもひきやわか敷しまの道ならてうき世の事をとはるへしとは」太平記參考本二の十四丁ウ爲明詠歌事條に白狀ニハアラデ一首ノ歌ヲゾ書レケル「思ヒキヤ我敷嶋ノ道ナラデ」云々又四十の十三丁中殿御會ノ事ノ條ニ万邦磯城嶋ノ政道ニ歸シ四海難波津ノ古風ヲ仰テ人皆柿本ノ遺愛ヲ戀ルノミナラズ世擧テ柳營ノ數寄ヲ感嘆シ云々鎌倉大草紙下の卅に常緣「かたはかり殘さん事もいさかゝるうき身は何としきしまの道」

（四十六）八雲の道　夫木抄雜三卅六丁に家隆「たのみこし八雲の道もたえはてぬ君もいつものうらめしのよや」按に此歌同集雜一の廿三丁に寂蓮「君か代は八雲の空の始よりよむともつきしわかの浦波」と有によられしにや

（四十七）數寄の道　太平記參考本二の十五丁ウ爲明詠歌ノ事ノ條に六義數寄ノ道ニタヅサハラヌドモ云々頓書野客叢書二ノ十八丁ウ玉兒編十二四丁オ數寄の條に李盧數寄師古曰數所角反按宋景文公筆錄云得二江南美書本一乃所レ具反傳者誤以レ具爲レ角也云孫處亦襲以爲レ朝也蔡絛西清詩話亦云晉謂王摩詰詩癡膏不レ敗由二天幸一李廣無レ功緣二數奇一不レ敗由二天幸一乃霍去病非二癡肯一也至二予數奇一獨不レ以爲二癡對一蔡絛亦知二王維讀一渡字一從二去聲一之爲レ當也○酒茶論に本朝諺好レ茶者曰二數奇者一云々

松屋筆記卷之七十二

東都　平小由田與清稿

（一）慈恩傳抄錄　大唐大慈恩寺三藏法師玄奘傳は唐の沙門彦悰が作にて全十卷あり彦悰が自序あり○圓宗　序一丁に方等一乘圓宗十地謂二之大法一言二眞詮一也○大法　見二于上一○小學　又一丁化城垢服濟鹿馳羊謂二之小學一言二權旨一也○一揆　又一丁其歸一揆云々○釋門千里之駒　卷一七丁長安有二常辯一大德云々二德竝深嗟賞謂二法師一曰汝可レ謂二釋門千里之駒一云々○冥加　又八丁志願乞二衆生冥加一○首塗　又八丁貞觀三年秋八月將レ欲二首塗一○公出　又九丁自是不二敢公出一乃晝伏夜行○晝伏夜行　見二于上一○達磨　又十丁寺有二胡僧達磨一○觀音井之德　一十三丁ウ○般若心經之德　同○池水甘澄鏡徹　又十四丁ウ又到二一池水甘澄鏡徹一下而就飲○友于　又十九丁オ敦奬友于之念○懸レ釜而炊席レ冰而寢　二四丁ウ○熱海　二四丁オ清池亦云二熱海一見レ其對二凌山一不レ凍故得二此名一其水未レ必溫也○鬢髮　二四丁オ達官二百餘人皆錦袍鬢髮○蒲萄漿　二四丁オ命陳

レ酒設レ樂可汗共ニ諸臣一使人飲別索ニ蒲萄漿一奉ニ法師一云々又五丁別營淨食一進ニ法師一具有ニ餅飯酥石蜜刺蜜蒲萄等一食訖更行ニ蒲萄漿一云々○鐵門　二六丁山行三百餘里入ニ鐵門一峰壁狹峭而崖石多ニ鐵礦一依レ之爲ニ門扉一又鑄鐵爲レ鈴多懸ニ於上一故以爲レ名即突厥之關塞也○鐵鈴　見ニ于上一○達摩僧伽　二七丁有ニ沙門一名ニ達摩僧伽一遊ニ學印度一葱嶺已西推爲ニ法匠一○對談　二七丁無ニ敢對談者一頭書五燈會元十五卷康國曜禪師章に僧問文殊與ニ維摩一對談何事云々○縛喝羅僧　二七丁縛ニ喝羅僧數十人一○佛齒　二七丁有ニ佛齒一長一寸廣八九分色黃色每有ニ光瑞一佛掃箒　二八丁又有ニ佛掃箒一迦奢草作長三尺餘圍可ニ七寸一其箒柄飾以ニ雜寶一○髮塔　二八丁如來嘗授ニ髮爪一令レ造レ塔○爪塔　見ニ于上一○大雪山　二九丁自ニ縛喝一南行與ニ慧性法師一相隨入ニ揭職國一東南入ニ大雪山一○九折之坂　二九丁昔王遵登ニ九折之坂一自云我爲ニ漢室忠臣一法師今涉ニ雪嶺一求レ經亦可レ謂ニ如來眞子一矣○如來眞子　見ニ于上一○佛頂骨城　二十二丁又東南度ニ沙嶺一十餘里到ニ佛骨頂城一○鍚仗　二十二丁有ニ佛鍚仗一白鐵爲レ環栴檀爲レ莖○發心　二十三丁賊遂發ニ心隨ニ往禮拜一○金剛相輪　二十四丁○烏仗那國　二十五丁○佛脚跡　二十五丁○濯衣石　二十五丁

如來濯衣石○石窟堵波　二十六丁城東北三十餘里至ニ遏部多一此言奇特石窟堵波高三十尺在ニ昔佛於レ此爲ニ人天一說レ法佛去後自然湧ニ出此堵一○石門　二十七丁○鐵橋　二十七丁○石函封記　二十九丁○天地之大寶曰レ生　二廿丁○菴羅林　二廿丁○俱舍論　二廿三丁○世親菩薩　三一丁○無著法師　三一丁○宗匠　三一丁爲ニ印度宗匠一(朱書)普燈錄廿三廿四丁ウ大宗匠宋高僧傳八ノ十二ウ宗匠殺レ人祠ニ天神一　三二丁○電光朝露少時之身　三三丁○大施場　三三丁○齒木　三四丁有ニ一樹一高七十尺餘昔佛因ニ淨レ齒木棄一其餘枝遂植根繁茂至レ今邪見之徒數來殘伐隨生禁如レ本○迦毘羅衛國　三六丁東南行八百餘里至ニ刼比羅伐窣堵國一舊曰ニ迦毘羅衛國一國周四千餘里都城千餘里皆頹毀宮城周十五里疊搏而成極牢固內有ニ故基一淨飯王之正殿上建ニ精舍一中作ニ王像一次レ北有ニ故基一是摩耶夫人之寢殿上建ニ精舍一中作ニ夫人之像一其側有ニ精舍一是釋迦菩薩降ニ神母胎一處中作ニ菩薩降生之像一上座部云菩薩以ニ嗢怛羅頞婆荼月三十日夜降ニ神母胎一當ニ此五月十五日一諸部則以ニ此二十三日一當ニ此五月八日一東北有ニ窣堵波一阿私仙相ニ太子一處於ニ城左右一有下太子共ニ諸釋種一捔力處上又有下太子乘レ馬踰レ城處及出ニ於四門一見ニ老病死及沙門厭ニ離世間一廻駕處一○釋迦降誕之日　見ニ于上一○澡浴池　三八丁伽藍西有ニ如來澡浴池一又有ニ滌器池一又有ニ浣衣池一並神龍守護無ニ人穢觸一池側有ニ窣堵波一佛修ニ菩薩行一時爲ニ六牙白象一施ニ獵師牙一處又爲レ鳥與ニ獼猴白象一約ニ尼拘律樹一定ニ長幼一巡行化レ人處又作ニ鹿王一又度ニ憍陳如等五人一處云々○滌器池　見ニ于上一○浣衣池　同○六牙白象　同○鹿王　同○摩揭陀國　三九丁摩揭陀國舊曰ニ摩伽陀一訛也○香花宮城　三九丁河南有ニ故城一周七十餘里雖ニ復荒頹一猶有ニ雉堞一昔人壽無量歲時號ニ拘蘇摩補羅城一此言ニ香花宮城一王宮多レ花故致ニ此號一後至ニ人壽數千歲一時更名ニ波吒釐子城一舊曰ニ無憂華一訛也後約ニ波吒釐樹一爲レ名○鷄園　三十一丁故城東南有ニ尼屈吒阿濫摩一此言ニ鷄園一僧伽藍故基無憂王所レ造是召ニ千僧一四事佩養處○菩提樹　三十一丁菩提樹即卑鉢羅樹也○來迎　三十一丁至ニ第十日一那爛陀寺衆差ニ四大德一來迎即與同去行可ニ七踰繕那一至ニ寺莊一○膝行　三十二丁其敬依ニ彼儀式一膝行肘步鳴足頂禮○大人米　三十三丁供ニ大人米一升一其米大ニ於烏足一作レ飯香鮮餘米不レ及唯摩揭陀國有ニ此秔米一餘處更無獨供ニ國王及多聞大德一故號頭書禮高僧傳四ノ廿丁ウ体源抄十一末九十三丁ウ○虹梁　三十四丁ウ諸

院僧室皆有ニ四重閣一虹棟虹梁繡檻朱柱雕楹鏤檻玉礎文櫨甍接瑤暉榱連繩彩印度伽藍數乃千萬莊麗崇高此爲ニ其極一○耆婆　三十五丁次大坑東北山城之曲有ニ窣堵波一是時縛迦大醫傳曰ニ耆婆一訛也於レ是爲レ佛造ニ說法堂一其側現有ニ時縛迦故宅一宮城東北行十四五里至ニ姞栗陀羅矩吒山一此言ニ鷲峰一亦云ニ鷲臺一舊曰ニ耆闍崛山一訛也其山連岡北嶺隆崛特高形如ニ鷲鳥一又狀高臺故取爲レ稱泉石清奇林樹森鬱如來在世多居ニ此山一說ニ法華大般若等無量衆經一○鷲峰　見ニ于上一○舍利分別　三十六丁○寒林　三十七丁數遭ニ火災一乃立ニ嚴制一有下不ニ謹愼一先失レ火者上徒ニ之寒林一寒林即彼國棄レ屍惡處也頃之王宮忽復失火王曰我爲ニ人主一自犯不レ行無ニ以懲一下ニ命太子一留撫王徒居ニ寒林一時吠舍釐王聞ニ頻毘娑羅野一居於外一欲ニ簡レ兵襲一之候望者知而奏レ王乃築レ邑以レ王先舍ニ於此一故名ニ王舍城一即新城也後闍王嗣レ位因都レ之云々○失火　見ニ于上一○候望者　同○王舍城　同○銅立佛像高八十餘尺　三十八丁○鴈塔　三十八丁○梵書之始　三十九丁○合字　三廿丁○男聲女聲非男聲非女聲字ノ聲韻也　三廿一丁○彈指鳴足言ニ未曾有一也　三廿二丁○澡罐　三廿三丁大石上有ニ佛坐跡一入レ石寸餘長五尺二寸廣四尺一寸又有下佛置ニ裙稚迦一

卽澡罐也舊曰ニ跡ヒ深寸餘作ニ八出花文一○穴處　四一丁ウ切破一條一者ヒ我則斬レ首相謝○供奉　四十九丁ス○法體　四十九丁ウ○七耀　五二丁ス○微妙　五六丁ス○四日　五十七丁ウ是時初人皆穴處云々○石孔　四一丁ウ人隨レ牛入後爲レ石○石人見ニ于上一○青玉佛像　四三丁ス○林邑國　四三丁ウ摩訶瞻波東有ニ馬鳴一南有ニ提婆一西有ニ龍猛一北有ニ童壽一號爲ニ國此云林邑一○石窠堵波高數百尺　四五丁ス○凡夫僧　四五丁ウ四日ニ能照ニ有情之惑一○滅盡定　五十七丁ウ十八丁ス○如來○安居　同○白檀香樹　四七丁ウ有ニ秣剌耶山一崖谷崇五廿丁ス王曰稱ニ如來一者復何義也答曰如來者卽佛陀深中有ニ白檀香樹栴檀鬱婆樹一樹類ニ白楊一其質凉冷蛇之德號○利物　五廿一丁ス況諸佛利物之玄蹤三藏解纏之多附レ之至レ冬方蟄用以別レ檀也○羯布羅香樹　四七丁ウ妙說云々○中間　五廿一丁ウ中間所レ經五万餘里○千別○龍腦香　同上○師子王負レ女入ニ深山一生レ男其子殺ニ父五廿一風俗千別艱危万重○天威　同憑ニ天威一所レ至無レ鯁仍蒙ニ厚禮一身不ニ苦辛一心願獲レ從○厚禮　同○心師子王一欲レ得ニ國王之貴一話　四八丁ス○西域記　四九丁ウ願同○金簿　五廿二丁ウ○肉舍利　六一丁ウ○五色綺雲　六二丁ウ○堅牢　守衛堅牢　四九丁ウ○那羅稽羅洲人短小長於ニ五色綺雲云々此蓋謂ニ天之喜氣一○大悅　六三丁ウ○三尺一四十丁ス○兼習　大小乘兼習　四十一丁ス天祠亦有ニ天祠塗灰之道一四十一丁ス○風韻　四十一丁ウ五印度中唯西南帝大悅又五丁ス帝大悅曰○報國恩　六四丁ス願得ニ畢身行摩臘婆東北摩揭陀二國稱爲ニ好レ學尚レ賢善言談有ニ風道一以報ニ國恩一○貝葉　六六丁ス法師方操ニ具葉一開ニ演韻一○塗灰外道事ニ天之衆　四十一丁ウ○戒日王　四十一丁ウ○胡椒樹　四十二丁ス至ニ阿吒薩國一南印度土出ニ胡椒樹一樹梵文一創レ譯云々○實錄　六六八丁ウ○西域記　同○寶舟葉似ニ蜀椒一出ニ薰陸香樹一樹葉類ニ此棠梨一也○薰陸香六八丁ウ望班ニ之右筆一岸一榕ニ妙道一而關ニ法門一○右筆　六八丁ウ伏聞鑾輦至レ此御樹　見ニ于上一○地獄　四十二丁ウ有ニ窣堵波一是無憂王作ニ地飾以ニ左言一二ホ記七○御膳　六十一丁ス膳順宜凡預含靈就不ニ蹈舞一云々○蹈舞　六十丁ウ○白獄一處○駝駱　四十三丁ス參天台記五ノ七○白鹽黑鹽　四十三丁ウ十三丁ス○白狐　六十二丁ス○會通　四十六丁ウ○書懸ニ於門一　四十八丁ス有ニ順世外狐朱雘朱草五雜俎九ノ○異域　六十三丁ス道一來求ニ論難一乃書ニ四十條義一懸ニ於寺門一曰若有レ難ニ○建立　同十三丁ウ○三寶　同○奧義同精文奧義如ニ金口

之新開ニ云々○法門之領袖　六十五丁ス有ニ玄奘法師者一法門之領袖也○探願　六十五丁ウ探ニ願妙門一精ニ窮奧業一頴書四域記八ノ卅丁ウ魏志十六ノ廿五丁ウ○心田口海　六十五丁ウ一乘五律之道馳ニ驟於心田一八藏三篋之文波ニ濤於口海一○慈雲法雨　又引ニ慈雲於西極一注ニ法雨於東垂一○眞如之境六十六丁ス○無翼而長飛　七一丁ウ名無翼而長飛道無レ根而永固頴書碧巖二ノ四丁裏國策三下十九ウ○聖敎序集字　七三丁ウ○御極七四丁ウ大權御極○衲袈裟　七五丁ス又施ニ法師衲袈裟一領ニ價直百金觀ニ其作製一都不レ知ニ鍼線出入所一從○剃刀　七六丁ウ賜ニ法師剃刀一口○忍辱之服　同○智慧之刀　同○度僧功德之最　七七丁ス○寸陰　七十一丁ス專務ニ翻譯一無レ棄ニ寸陰一○停筆　日必兼レ夜以續レ之遇レ乙之後方乃停筆○處分　七十一丁ウ○無二　同十二丁ス○蠶絲之自纏井輪之不息　七十二丁ス讖藏ニ二空一業淪ニ三界一猶ニ蠶絲之自纏一如ニ井輪之不息一○利物　七十三丁ス福田同○徵施　同○石浮圖　同○相輪露盤　七十三丁ウ塔有ニ五級幷相輪露盤一凡高一百八十尺層々中心皆有ニ舍利一頴書高僧傳九ノ四丁ス○先達　七十四丁ス十二又十四丁ウ○專門同頴書野客叢書二ノ十八丁ウ○一生之域万死之地　七十四丁ス決レ志出ニ一生之域一投レ身入ニ万死之地一○梵本　七十四丁ウ○額石

同○洞達　八十五丁ス○白氎　八十五丁ウ○座前　同大唐國蕊菊玄奘謹修ニ書中印度摩揭陀國三藏智光法師座前一○尊顏　七十六丁ス○片物　同十七丁ス○光儀　同十七丁ウ○牢籠八二丁○塔影　八六丁ウ○濫觴　同○黃葉　八七丁ウ○濫吹　八七丁ウ但不レ敢以ニ黃葉一爲レ金山雞成ニ鳳南郭濫吹淄滬混流耳○日西傾　餘光東照　八九丁ウ○東照同○象戲　八十丁ウ一覽ニ太玄一應レ問便釋再尋ニ象戲一立レ試即成レ實○孟浪　八十二丁ス○龍象　八八丁ウ○白衣　同日知錄廿四北史四三丁ウ○冥助　八十八丁ス景福式資冥助奉レ願○筆海　九一丁ウ若乃天華穎發容藻波騰吞ニ筆海一而孕ニ龍宮一掩ニ詞林一而包ニ鶴樹一○冥祐　九四丁ス冥祐可レ祈○赤雀　九十一丁ス○雅意　九十一丁ウ其雅意未レ及ニ執捉一○心水　九廿一丁ス今願託ニ慮禪門一澄ニ心定水一○頴書一樹の陰一河の流の事法音抄一ノ四十七丁靜草千十六丁ス閑田次筆二ノ卅丁ウ心泉列于上ノ一樹之蔭　九廿一丁ウ○一樹之蔭　九廿一丁ウ栖ニ身片石之上一庇ニ影一樹三十一丁ウ○智皎ニ心燈一定疑ニ意水一非ニ情塵之所一翳豈識浪之能驚道德可レ居○不國　九廿三丁ウ○牢籠　九廿五丁ス我后牢籠伊咸並建○仁祠　十一丁ウ○花燈　十二丁ウ法師又目見手執ニ花燈一供ニ養諸佛一或昇ニ高座一爲レ衆說○高座同○冥加　十三丁ス並是諸佛菩薩所ニ冥加一耳○花六

出　十三丁ウ殿側有二双柰樹一忽於二非時一數々開レ花花皆六出鮮菜紅白非常可レ愛○數々　同　○大般若經　十四丁オ○冥加　十四丁オ並是諸佛冥加龍天擁祐○鎭國之典　同四丁オ鎭國之典人天大寶云々大般若經ヲ指○死人裹レ筵　同四丁ウ宜從二儉省一可下以二簟席一裹送上仍擇二山澗僻處一安置勿レ近二宮寺一不淨之身宜須二屏遠一○又十九丁ウ同十丁オ○夢浮圖崩倒　十五丁オ玄奘遷化之應○畫像　十五丁ウ○素像　同ウ○正念　十六丁オ○徹少　十七丁オ○板身　十七丁ウ○素志　十十丁オ○先唱　十十四丁ウ○遷化　十七丁ウ○門徒　十十丁オ○入室　十十二丁オ○宿搆　十十二丁オ頭書元史ノ耶律楚材傳ニ下レ筆爲レ文若二宿搆者一云々

（二）伊豆國手石の彌陀　伊豆國加茂郡手石村に彌陀窟あり豆州志五の卷洞嵎部に彌陀窟（ヲノ手石村）鄉俗云日本三命ノ一也ト窟海岸ニ在テ卯辰ニ向フ拜瞻スル者駕レ舟入ル十三四步ニシテ窟小シ左ニ折レ頂上漸ク低シテ舟更ニ前ムキヲ不レ得從レ此佛所ニ至ルコト八九步許乃遠ク拜スレバ石岸ノ前水ニ近ノ金色ノ彌陀像三軀儼然列立焉云々慈恩傳二の卷十三丁ウに又聞燈光城西南二十餘里有二碧波羅龍王所レ住之窟一如來昔日降二伏此龍一因留レ影在レ中法師欲二往禮拜一承二其道路荒阻一又多二盜賊一二三年已來人往多不レ得レ見以レ故去者稀疎法師欲二往禮拜一時迦畢試國所レ送使人貪二其速還一不レ願二淹留一勸不レ令レ去法師報曰如來眞身之影億劫難レ逢寧有二至レ此不一往禮拜一汝等且漸進奘暫到即來於レ是獨去二燈光城一入二一伽藍一問二訪途路一覓二人相引一無二一肯者一後見二一小兒一云寺莊近彼令レ送師到レ莊即與同去到二莊宿一得二一老人一知二其處所一相引而發行數里有二五賊人一拔レ刀至法師即去レ帽現二其法服一賊云師欲二何去一答欲レ禮二拜佛影一賊云師不レ聞此有レ賊耶答云賊者人也今爲二禮佛一雖二猛獸盈レ衢奘猶不レ懼況檀越之輩是人乎賊遂發心隨往禮拜既至二窟所一窟在二石澗東壁一門向レ西間窺レ之窈冥一無所レ覩老人云師直入觸二東壁一訖却行五十步許正東而觀影在二其處一法師入信レ足而前可二五十步一果觸二東壁一依レ言却立至誠而禮百餘拜一無所レ見自責二障累一悲號懊惱更至心禮二誦勝鬘等諸經諸佛偈頌一隨讀隨禮復百餘拜見二東壁一現二如レ鉢大光一焕而還滅悲喜更禮復有二槃許大光一現已還滅益增二感慕一自誓若不レ見二世尊影一終不レ移二此地一更二百餘拜遂一窟大明見二如來影一皎然在レ壁如レ開二雲務一忽暸二金山妙相熙融神姿晃昱一瞻仰慶躍不レ知

レ所レ譬佛身及袈裟並赤黃色自レ膝已上相好極明華座已下稍似二微昧一左右及背後菩薩聖僧等影亦皆具有レ見已遙命二門外六人一將レ火入燒香比二火至一歘然佛影還隱急令レ絕レ火更請方乃重現六人中五人得レ見一人竟無レ所レ覩如レ是可二半食一頃了了明見得レ申二禮讃一供散華香訖光滅爾乃辭出云々此近き說といふべし

（三）水蟲をも殺さず非戒日王　律僧水を吞に必水囊をもて漉て吞レ之水中の細蟲を殺さゞらんがため也慈恩傳四の卷十八丁オに五印度中唯西南摩臘婆東北摩揭陀二國稱爲二好レ學尚レ賢善言談有二風韻一此國伽藍百餘所僧徒二万餘人習二小乘正量部一敎亦有二塗灰外道事天之象一相傳云自二六十年前一有二王名戒日一高才博學仁慈惠和愛二育黎元一崇二敬三寶一始自レ爲レ王至二于崩逝一口絕二麤言一顏無二慍色一不レ傷二臣妾之意一無レ損二蚊蟻之形一每象馬飮レ水漉而後飮恐レ害二水居之命一也爰至二國人一亦令レ斷レ殺由レ是野獸附レ人材狠息レ毒境內夷靜祥瑞日興營二構精廬一窮二極輪奐一造二七佛之儀一設二無遮之會一如レ是勝業在位五十餘年無二時暫輟一黎庶思慕於レ今不レ止云々

（四）書を門に懸て求二論難一　呂氏春秋成て暴二之咸陽市門一懸二千金其上一有レ能增二損一字一者一與二千金一時人無二能增損者一云々慈恩傳四の卷十八丁オに後戒日王復有レ書來云前請二大德一未レ須二即發待後進止一時有二順世外道一來求二論難一乃書二四十條義一懸二於寺門一曰若有レ難二破一條一者一我則斬レ首相謝云々

（五）猫竈に眠　慈恩傳四十八丁ウに如二佣多外道諸離繫外道髏鬘外道殊徹伽外道四種形服不レ同數論外道（舊曰二僧佉一世師一也）二家立義有レ別佣多之輩以レ灰塗レ體勝論外道（舊曰二衛世師一也）同用爲二修道一遍身艾白猶二寢レ竈之猫狸一云々猫竈にいりて眠ると常也余が古くよめる歌に「のら猫もなつきねふりぬかまともるみつわのおうな膝をまかせて」猫の目の太き細きにて時を知と酉陽雜俎に見ゆ夫木抄枕草子源氏物語など猫の事歌にもよみ詞にもおほく見ゆ

（六）聖敎序鳩集字　聖敎序搨本舶來最多し慈恩傳七の卷三丁（カ）に時弘福寺寺主圓定及京城僧等請鐫二二序文於金石一藏二之寺宇一帝可レ之後寺僧懷仁乃鳩二集晉右軍將軍王羲之書一勒二於碑石一焉と見え此卷に其全文及後序も收たり

（七）先達　慈恩傳七の卷十四丁オに博問二先達一云々同十

の卷丁オ)に法師從レ是聲振二葱嶺一名流二八國一彼諸先達英傑聞レ之皆宿搆重レ關共來難詰云々又(十四丁ウ)立學愧二往賢一德非二先達一云々 以呂波字類抄十の卷世部疊字門に先達センダチ云々論語にも先達の字あり(頭書)文句一ノ三十四丁宋高僧傳四ノ九丁オ西域記)

(八)廿八日の禮　柳營廿八日の御禮は元文二年丁巳十月廿五日に朔望の外廿八日御禮登城すべきよし尤正月二月四月七月十二月の五ヶ月也三五六八九十十一の七ヶ月は廿八日の御禮なきよし命令あり三五六八九十十一の七ヶ月の中にも御禮まうすべき事候へば別に御命令あるべきよし也(頭書)昔々物語七丁オ)

(九)小宣旨の紙　拾菓集上卷五節末に露臺の亂舞終ぬれば白薄樣小禪師の紙卷揚の筆輒綸書たる筆の軸故々しくぞおぼゆる云々西宮記臨時一(廿一丁ウ)に小宣旨紙と書たり平家物語源平盛衰記などに見えたるも宣の字濁てよむべし(頭書)西宮記臨時三一分召時宣旨事條に大宣旨小宣旨の式アリ可レ考九條年中行事五十九丁オニ委實積七十七卷江家次第十二ノ廿四丁ウ宣旨小宣旨國宣旨ナドイフ內ノ小宣旨ヲ書ク料紙ヲ云也江次第十二ノ廿四丁ウ考ベシ)

(十)主者施行　符宣の結句に主者施行と書るは後漢書黃瓊傳に順帝使二中常侍一以二瓊奏書一屬二主者一施行とあるによれる也吳曾が能改齋漫錄一の卷に今朝廷行移下二州縣一必云二主者施行一者本二後漢黃瓊傳一也云云吏學指南(居家必要十五の卷)結句の條に主者施行東漢順帝時天旱尙書僕射黃瓊言二得失一帝以二其奏一屬二主者一施行云云など所見おほかり施行の字は史記漢書にも見えたりき佩文韻府に詩注疏を引たるは疎漏也

(十一)影々　橫尾自性上人の眞言四重禁戒秘事に「墨利无幾三世之佛之影々也心能水仁澄奴日曾无幾」といふ歌あり佛のかげ〳〵とよめるはめづらし

(十二)花をそなふる　同書歌に「朝夕奈備留花之數毎仁今日屋限之露曾置都追」供花をやがてソナフルハナとよめり又「ぞ」とかゝりて「つゝ」と結びたり

(十三)日かげの駒　又「何久邊加日影之駒之運頽无暫志毛留流時之間曾无幾」ひまゆく駒の事を日陰の駒とよめり隙駟の故事は莊子史記魏豹傳文選など所見おほし

(十四)戒二言語一歌　又「世仁觸留言之葉毎仁漏須奈奈露計奈留人之過乎毛」此歌戒とすべし家語に多言多敗といひ其外戒レ口語あげ盡すべからず

(十五)墨譜　井朱墨譜・節用集波部言語門に墨譜ハカセ聲明點畫云々運歩色葉集葉部に墨譜ハカセ聲明集云々塵添壒嚢抄倭訓栞十四の卷波部にはかせ云々墨譜を

いふも博士のする事なればいへる也或は拍子の音轉ほどひやうしの意也ともいへり云々按に墨譜の事樂家錄に見ゆ魚山蒭芥集聲名集など考べし催馬樂略譜にくはしく墨譜を附たるあり又朱博士といへるは朱墨にて譜(フシ)を附たるにて墨もて附たる譜に對へて朱墨譜(ヲ)とはいへりと見ゆよろづの御法(群書類從本)に懺法朱博士をもちひて眼耳鼻の三段獨行の曲をよむ云々魚山の御法に同上身意二段ぞ臨期所望によりて朱博士をなんよむかうやうのわざは心あらん都人のおほきにこそとあたらしうまできゝなす云々など所見あり

(十六)柴燈井左義長　藤經嗣相國寺塔供養記に今熊野を勸請し申さる法皇の御前生本山のさいとうとかやにてわたらせ王ひける故にかやうにありけりとも申傳たり云々砂石集二の下卷佛法結緣不レ空事條に高野ニ南證房ノ撿挍覺海トイフ人ハ近比ノ密宗ノ明匠ト聞キ先生ノ事ヲ知タク思テ大師ニ祈念スルニ七生ノ事ヲシメシ給初ハ天王寺ノ西ノ海ニ少キ蛤ニテ有シガ自然ニ波ニ打ヨセラレテ濱ニ在シヲ少キ者コレヲ取テ金堂ノ前ニモチテユク舍利讃嘆ノ聲ヲ聞シ故ニ死シテ後天王寺ノ犬ニ生ル常ニ經陀羅尼ノ聲ヲ聞シ故ニ牛ニ生ル大般若ノ料紙ヲ負セタリシ故ニ馬ニ生ル熊野詣ノ者騎テ參詣セシ故ニ柴燈タク者ト生レ常ニ火ノ光ヲ以テ人ヲテラス智慧ノ業ヤウヤク熏ジテ奥院ノ承仕ト生レ三密ノ行法ヲ常ニ耳ニフレ目ニ見ル重習ノ故ニ今撿挍ト生レタリト示シ給ヒケリ云々古今著聞集一の卷(廿二丁ウ)神祇部に熊野に盲目の者柴燈をたきて眼の明かならん事を祈る有けり此つとめ三年に成にけれ共しるしなかりければ權現を恨まねらせて打臥たる夢に汝が恨むる所そのいはれなきにあらねども先世のむくいを知べき也汝は日高川の魚にて有し也かの川の橋を道者渡とて南無大慈三所權現と上下諸人となへ奉るこゑを聞て其緣によりて魚鱗の身をあらためてたま〳〵うけがたき人身を得たり此柴燈の光にあたるを以て其來世に明眼を得て次第に昇進すべき也此事をわきまへずしてみだりに我を恨る愚也とはちしめ給ふと見てさめにけり其後ざんげして一期をかぎりて此役をつとめけるほどに眼もあきにけり云々類聚名物考佛教部七に今按に常の燈明は油火也されば國史などにも神佛に燈奉らるゝには必油料有さるに山深き所などにては油

は得がたければ有にまかせて柴を焚て燈明とし奉る也たてあかしなどいふも此等によりていふなるべし今は世の中のゆたかなれば近きわたりにはさるともきこえねどまさしく吉野金峰山より出る護摩の符には今も柴燈云々と書也その火焚人をすなはち柴灯（トウ）燒（タキ）などいふ也寶暦の中比人のその山の符札をおこせたるを見しに奉レ修大峰柴燈護摩息災攸かくのごとく書たり然れども是は當山派とて醍醐三寶院の流にて如レ此本山派とて聖護院殿流にて採燈と書るはいぶかしき事也云々與清按に武藏多西郡相摸國甲斐都留邊にて正月の門松注連飾物などを村里の巷街にあつめ十四日の夕これを燒て道祖神を祭るを柴灯といへり他國にもさる事ありとなんされどこれは左義長の遺風なるべし女房私記に正月十五日御吉書の事近代諸家中より左義長献上なし夜に入殿上の南庭に御沙汰あり先御簾の前に燭を左右に立て階下に左右に北面四人狩衣にて候ス殿上の落縁に藏人二人候ス內侍御簾を尺計まきあげて御吉書を御硯蓋にのせ出さる是を藏人上座のもの請取て北面にわたす左の北面二三階のぼりて請取左義長の中へ置てもとの座に居る次に下座の藏人立て御前の燭をとりて又北面にわたす請取て左義長をほこらす也事終て左義長の竹二三本切て右の御硯蓋にのせ上ル北面より藏人にわたす藏人より簾中內侍へわたす也云々頭書に此吉書の左義長は山科家より調進竹は山科村より收候也云々辨內侍日記（下卷十九丁オ）建長三年正月の條に十六日にさぎ丁やかれしにたれ〳〵もまゐりしかども云々爆竹の事は徒然慰草（六の卷廿三丁ウ）同文段抄（六の卷十二丁ウ）などに諸說を引注し世諺問答正月十五日の條にも見えたれば考合すべし 頭書 元德二年日吉山行幸記卅丁ウに乾元二年二月廿三日兩社の彼岸所ともに燒にけり云々トンド左義長ノ「藝苑日渉民間歲節條谷響集五ノ廿九丁ウ殿中申次記十一丁オウ爆竹は荊楚歲時記に見えて正月一日の庭燎也金壺字考戸隱卷之七に神異經を引ていへり藝苑日渉ニモ下學集下十四丁オ

（十七）麥の秋、出來麥　夫木抄夏部二俊頼「みそのふに麥の秋風そよめきて　山ほとゝきすしのひなく也」（散木集二の卷同）また正暦四年五月帶刀陣歌合蟬よみ人しらず「おくるてふせみのはつ聲聞よりていまはと麥の秋をしりぬる」覺性法親王の出觀集に「夕かほのかゝる垣ねにこかけとりふせれは涼し麥の秋風」倭漢朗詠夏部蟬の條に千峰鳥路含二梅雨一五月蟬聲送二麥秋一覺明私注に發二青滋店一至二長安一西渡レ江之作李嘉祐云々

また月令曰百穀各以二初生一爲レ春以二其熟一爲レ秋故麥以二孟夏一爲レ秋矣云々 頭書 宋人吳曾が能改齋漫錄一の卷に麥秋黃朝英緗素雜記云 宋子京有下帝幸二南園一觀レ刈レ麥詩上云農扈方迎レ夏官田首告レ秋注曰臣謹按物成熟者謂二之秋一取二斂斂之義一故謂二四月一爲二麥秋一予按北史蘇綽傳云布レ種既訖嘉苗須レ理麥秋在レ野蠶停二于室一則麥秋之說其來舊矣以上皆朝英說予考麥秋之始在二禮記月令一自有二成說一何必引二蘇綽說一耶釋二其義一則景文之說尤盡及レ觀二王荊公絕句一云荷葉初開筍漸抽東陂南蕩正堪レ遊無レ端隴上脩々麥橫起二寒風一占作レ秋此又何也然景文所レ注本出二蔡邕月令章句一曰百穀各以二其初生一爲レ春熟爲レ秋故麥以二孟夏一爲レ秋云々 俗に出來秋といふ出所也

（十八）なぞ〳〵　拾遺雜下曾根好忠歌詞書になぞなぞものがたりしけるに云々實方集に小一條殿の人人なぞ〳〵物語「かたすまけすの花の上の露」といひけるに「すまひ草あはする人のなければや」後頼散木集（七の卷上）詞書にある人のもとになぞ〳〵物語をあまたつくりてとかせにつかはしたりけるにとざまにときたりけるをまたつかはすとて云々又（十の卷雜冠折句歌の部）詞書になぞ〳〵ものがたりよくとくと聞えける人のもとへつくりてつかはしたりけるうた「小倉山峰より出て行月もあふ坂まではくまなかりけり」顯綱集にある宮ばらの女房よりなぞ〳〵とてかくいひたる「かひなしや社のみしていのるとなくてみそかに成にけるかな」返しかくぞ「みそかまていのる社のかひなくは神無月とやいふへかるらん」夫木抄雜十に天元四年四月小野宮歌合なぞ〳〵いねのおひたるかひつものよみ人しらず「秋またぬいねかと見しはなよ竹のしたはに根さすこにこそ有けれ」枕草子春曙抄本七の卷（廿四丁ウ）に人のなぞ〳〵あはせしける所にかたくなにはあらでさやうの事にらう〳〵しかりけるが左の一番はおのれいはんさ思ひ給へなどたのむるにさりともわろき事はいひ出じとえり定むるにその詞をきかんいかになどとふたゝまかせてものし給へさまうしていとくちをしうはあらじといふをげにとおしはかる日いと近ふ成ぬれば猶この事のたまへひざうにをかしき事もこそあれといふをいさしらずさらばなたのまれそなどむづかればおぼつかなしと思ひな

がら其日に成てみなかたうどの をとこ女ゐわけて殿上人などよき人々おほくゐなみてあはするに左の一ばんにいみじうよういしもてなしたるさまのいかなる事をかいひ出んと見えたればあなたの人もこなたの人も心もとなく打まもりてなぞ〳〵といふほど心もとなし 天にはり弓といひ出たり 右のかたの人はいときよようありと思ひたるにこなたの方の人は物もおぼえずあさましうなりていとにくゝあいぎやうなくてあなたによりてこそさらに負させんとしけるをなど片時のほどに思ふに右の人をこに思ひて打笑ひてやゝさらにしらずと口引たれてさるがふしかくるに籌させ〳〵とて指せつゐとあやしき事是しらぬものたれかあらんさらに籌指まじところんずれどしらずといひ出んはなどてかまくるにならざらんとてつぎ〳〵のも此人に論じかたせけるいみじう人の知たる事なれど覚ぬ事はさこそはあれなにしかはえしらずといひしと後に恨られて罪さりける事をかたり出させ給へばおまへなるかぎりはさは思ふべしくちをしく思ひけんこなたの人の心ちきこしめしたりけんいかににくかりけんなどわらふこれは忘れた

ることかはみな人しりたるとにや云々徒然草百三段に大覺寺殿にて近習の人どもなぞ〳〵をつくりてとかれける所へくすし忠守まゐりたりけるに侍従大納言公明卿我朝のものとも見えぬ忠守哉となぞ〳〵にせられけるを唐瓶子とときてわらひあはれければはらたちて退出にけり云々壽命院抄にカラ瓶子平氏忠盛の義也トキ様の心は吾朝ノ物ニアラズハ唐也忠盛は平氏也即カラ瓶子也云々 鐵槌になぞ〳〵 謎の字なり玉篇謎未開反隱言也云々長秋記保延元年六月六日の條に有連歌并なぞ〳〵ものがたり等云々宣胤卿記文明十三年二月二日の條に參內云々以敎長被仰下云なぞ〳〵當座各令新作可申入云々乍迷惑加思案則申入處有叡感又有製作尋下各解申余殊有御感小折三合被下之可謂面目祝著注左一殿上の下侍のうへにおくすゝり見失ひぬ當時番衆所下侍也余新作右上於御前各解兼ぬるを親王御方御ときありと云下侍よく置侍るとわりおもしろく思召よしとに有叡感

一のなかの雪　西川前宰相進之但右衞門督作之

ゆの木云々群書類從二百廿六の卷に小野右衞門家な

ぞ〳〵歌合二部收たり其體裁本則（テホン）とするにたれり史記滑稽傳に齊威王之時喜隱云々索隱曰喜好也喜隱謂好隱語云々呂覽十八重言篇の卷に荊莊王立三年不聽而好謾注に謾謬言也云々能改齋漫錄一の卷に度詞太平廣記引嘉話錄載權德輿言無不聞又善度詞嘗逢李二十六於馬上度詞問答聞者莫知其所說馬戒曰度詞何也曰隱語耳論語不曰人焉度哉人焉度哉此之謂也以上皆嘉話所載予按春秋傳曰范文子暮退于朝武子曰何暮也對曰有秦客度詞于朝大夫莫之能對也吾知三焉楚申叔時問還無社曰有麥麴手有山鞠藭手蓋二物可以禦溼欲使無社逃難于井中然則瘦一字雖本于論語然大意當以春秋傳爲證東坡和王定國詩云巧語隱曾遭慧苴度詞那復託焉藭云々國語晉語五に范文子莫（オソク）退於朝武子曰何莫對曰有秦客度辭於朝大夫莫之能對也吾知三焉注に度隱也謂以隱伏譎詭之言聞於朝也東方朔曰非敢詆之乃與爲隱耳是也云々五代史三十の卷漢臣傳李業傳に帝方與業及聶文進後贊郭允明等押昵多爲度語相誚戲放紙爲于宮中云々頭書

詩鏡卷十一末にナゾアヲニ曰母ニハ二度アフ 父ニハ一度モアハズクチビルトンク云々

（十九）萬歲呼井山呼萬歲 拾遺集賀部に天曆のみかど四十になりおはしましける時山階寺に金泥壽命經四十八卷をかき供養し奉りて御巻數鶴にくはせてすはまに立たりけりそのすはまの敷物にあまたの歌あしてに書る中に仲算法師「聲高くみかさの山そよはふなるあめの下こそたのしかるらし」奥義抄中卷十七丁ウ拾遺抄五の條に山喚萬歲といふことのあるなり世の政とゝのほれる時の事也史記に見えたり云々藻鹽草十六の卷百十一則賀部に山の萬歲をよばふ事漢にも云り云々吳竹集三の卷奥部によろづよの聲とはならの帝の御時三笠山萬歲とよばふこゑしけりそれより大內には萬歲を人のとなふるをばよばふと云也その時仲算法師のよめる歌萬代のみかさの山ぞよばふなると云々按に此吳竹集の說は誤也延喜治部式二丁ウに山稱萬歲慶山山車自注に自然之車山藏之精云々漢書武帝紀元封元年詔に朕用事華山至于中嶽獲駮麃見夏后啓母石翌日親登嵩高御史乘屬在廟旁吏卒咸聞呼萬歲者三ト注に荀悅曰萬歲山神稱之也應劭曰嵩高縣有上中下萬歲里云々史記孝武本紀褚少孫補に禮登中嶽太室從官在山下聞若有言萬歲云云上

不レ言問レ下下不レ言於レ是以二三百戸一封二太室一奉二祠命一曰二崇高邑一注に正義曰漢書注云有レ稱二萬歳一可二十萬人一聲云々景德傳燈錄抄五ノ廿三丁ォ匡衡集に「紫のちしほの山の色ならは萬代よはふ聲もなひかん」俊惠法師林葉集五の卷に「萬代と君をよはへは春日山やまさへそ聲あはすなる」慈鎭和尙拾玉集一に「うき身までたのしかるへき萬代とよはふ三笠の山のかひかは」同集七に「はる〳〵と君か千年をまつ風によろつ代よはふ男山かな」定家卿拾遺愚草下夫木抄雜十八「春日山峰の朝日をまつほとの空ものとけき万代の聲」風雅集賀部に俊成夫木抄雜二「吹風は枝もならさて万代をよはふこゑのみいや高の山」新撰二山の歌信實「万代をよはふ山へにこたへても君かためしの數そいたらん」宗良親王李花集下卷に中院准后吉野にてよみ侍歌とて見せ侍りし中に「万代と聲きこゆ也みよしのゝ山や齡をよはふなるらん」と有しそばに「万代とよはふる聲はみよしのゝ吉野の山の神の告かも」續千載神祇匡房夫木抄雜二「よはふなるおと高山の榊葉の聲もかはらぬ君か御代かな」夫木抄雜二顯輔「万代と大富山そよはふなる久しく君をさかゆへしとは」同雜十八

正治二年御百首第三の御こ「万代を山はよはひて谷川の水は千年の色そ見えける」按に右の歌どもいづれも漢武の故事によりてよめる也此外所見枚擧にいとまなし又稱二萬歳一のみによめるは新拾遺賀花園院「色かへぬ尾上の松に吹風は万代よはふこゑにそ有ける」夫木抄雜九隆信「をりにあへは鳩ふく秋の山人も万代とこそ聲たてつなれ」此二歌は山呼の事ともいはゞいふべし定家卿拾遺愚草員外夫木抄雜十七「ふかき夜に少女の姿風とちて雲路にみてる万代の聲」これは正しく上壽の萬歳稱也貞觀儀式五の卷天皇即位儀の條に群臣稱唯再拜舞踏再拜武官俱並振レ旗稱二萬歳一謌其聲云々西宮記正月部上卷朝拜條に更宣云群臣再拜舞踏武官立振二万歳旗一云々北山抄三の卷朝賀條に武官振レ旆稱二萬歳一云々同四の卷御元服儀群臣上壽の條に親王以下共舞踏三稱二萬歳一自注に八條式部卿親王三振レ袖稱二萬歳一云々而承平稱レ謌謌不レ如二字唱一之是拜舞內常稱見二朝拜式一云々同八の卷朝賀條に奏賀宣命畢群臣拜舞間振二萬歳幡一稱謂レ謌謂二之萬歳一也云々內裡式上卷元正受二群臣朝賀一式に王公百官共稱唯再拜舞踏再拜武官俱立振レ旆稱二萬歳一謌其聲不二拜舞一云々新儀式四の卷臨時上天皇加二

元服一事條に諸王百官共稱唯再拜舞踏再拜武官振レ旆稱二萬歳一皆如レ常云々また皇帝舉レ酒群臣上下皆舞踏三稱二萬歳一云々日本紀雄略紀五年二月の條に天皇乃與二皇后一上レ車歸呼二萬歳一曰樂哉人皆獵二禽獸一朕獵二得善言一而歸云々史記項羽本紀に楚軍皆呼二萬歳一云々同蘭相如傳に左右皆呼二萬歳一云々唐六典四の卷禮部の部に然後中書令又與二供奉官一獻レ壽時殿上皆呼二萬歳一云々能改齋漫錄一の卷に萬歳之呼高承事物紀原云萬歳之呼考レ古逮レ周未レ有二此禮一戰國時秦王見二藺相如奉レ璧田單僞約二降燕一馮煖嬙二孟嘗君債券一左右及民皆呼二萬歳一蓋七國時衆所レ喜二慶於君一者皆呼二萬歳一秦漢以來臣下對二見于君一拜レ恩慶レ賀率以爲レ常已上皆高說予按大雅云虎拜稽首天子萬壽人臣之奉レ上以二萬歳一疑發二于此一云々與清田神祇令に凡踐祚之日中臣奏二天神之壽詞一義解に謂以二神代之古事一爲二萬壽之寶詞一也とあるも詞は別なるも義はおなじといふべし日本紀通證十九の卷十二書紀集解十四の卷丁ウ十六丁ウ居家必用吏學指南の條など考合すべし

（廿）山陵圖陵幷ミサヾキの訓　能改齋漫錄一の卷人君葬地爲二山陵一條に漢以來人君所レ葬之地爲二山陵一長陵一是已然呂不韋說二秦昭王太子一曰王之春秋高一日山陵崩太子用レ事註云山陵喩二尊高一也崩死也然則以二葬地一爲二山陵一久矣出二戰國策一云々後魏酈道元が水經注十九の卷廿丁ウ渭水下の條に三秦記曰云々秦名二天子家一曰レ山漢曰レ陵故通曰二山陵一矣風俗通曰陵者天生自然者也今王公墳隴稱レ陵春秋左傳曰南陵夏后皐之墓也云々文選六臣注本十の卷四十一丁ウ西征賦注に善曰高祖葬二長陵一三秦記曰秦名二天子家一曰二長山一漢曰レ陵故通名二山陵一云々濟曰長山漢高陵也云々風俗通十の卷陵の條に謹按詩云如レ山如レ陵易曰伏二戎於莽一升二其高陵一又天險不レ可レ升地險山川丘陵春秋左氏傳曰殽有二二陵一其南陵夏后皐之墓也其北陵文王之所レ避二風雨一也云々陵有二天性自然者一今王公墳墓各稱レ陵云々國語六の卷四丁オ齊語に陵爲二之終一注以爲レ葬也云々新撰字鏡阝部に陵大阜曰レ陵乎加又豆不禮又彌左々木云々和名抄十四の卷葬送具部に日本紀私記云山陵美佐々岐云々同書五の卷官名部に諸陵寮美佐々岐乃豆加佐云々類聚名義抄五の卷水部に淩音陵ミサヾキ云々又同部山部に岬ミサヽキ又ミサキ云々同書六の卷阜部に陵音淩ミサヽキ云々又山陵ミサヽキ云々字鏡集二の卷阜部に陵ミサ

サキ又ヲカ云々以呂波字類抄九の巻見部地儀門に山陵ミサヽキ云々日本紀神代紀下六丁に山陵ミサヽキ云云又廿五丁ウ山陵ミサヽキ云々又廿七丁オ山陵ミサヽキ云々神武紀廿丁に陵ミサヽキ云々垂仁紀廿七丁オに天皇之陵云々崇峻紀十一丁ウに陵ミサヽキ云々皇極紀六丁ウに預造ニ雙墓今來一一曰ニ大陵一爲ニ大臣墓一一曰ニ小陵一爲ニ入鹿臣墓一云々孝徳紀八丁に園陵ミサヽキ云々天武紀上二丁に山陵ミサヽキ云々按にサヽキは丘陵の獨立せる貌をいふ神名帳に近江國蒲生郡篠笥郷見え曾丹集歌にさゝき津とよめるもこゝなるべし古事記安康日本紀孝元紀姓氏錄左京皇別の段などに狹々城山君あり狹々城は丘陵に據たる地名也山君は山を守るに依て姓とす續日本紀三代實錄にも此氏人所見あり後に宇多源氏の武士こゝに住て佐々木と稱號せりさて佐々木の郷は安土の城跡今八幡山といへるが孤立の丘山なれば其さまによりておほせたりけん佐々てふ詞意は未レ考木は城にて一圍の域をいへり美は御にて御陵とも書けり尊貴の墓なれば貴て御丘陵といへる也サヾキもと御墓をいへる詞ならねど其御墓の體孤立の丘陵に似たれば御サヾ城とよび漢書に據て山陵の字面をも宛たる也又孝徳紀元年八丁に園陵ミサヽキと書れたると通鑑綱目七の巻九十六丁オ漢哀帝元壽元年の條に丞相光行ニ園陵一云々集覽に行下孟反巡視也帝王所レ葬曰ニ山陵一又禮記葬ニ于園一張氏曰墓以レ栽ニ植草木一處ヒ謂ニ之園一とあるにて知べし孝徳紀通證には字典帝王陵寢曰レ園云々集解には唐書百官志公卿巡ニ行園陵一鄭樵禮略曰三代以前無ニ墓祭一至レ秦始出レ寢起ニ墓側一漢因レ秦上陵皆有ニ園寢一云云など注せり

（廿一）移鞍移馬　空穗物語藤原の君四十七丁ウにみむまやよりうつしむまどもひきたり云々同内侍の督六十四丁オにそのみまやの御むまの中になかたゞのひともとかなるべき御むまにうつしおかせてたまへ云々又同丁その御せんつかうまつらんむましやうぞきたまへや云々中將うつしを置てたまへ云々又六十六丁オ中將うつしにのりて車のながえ近うそひてたつ云々同藏開上八十丁オにかたきうつしにいれしめてさうぞきて出給ふまゝに宮をかみ奉り給ふ云々同樓の上下十丁オにうつしにのせ給ひてはしらせ給へれば云々源氏物語夕霧湖本廿三丁オにあしとき御馬にうつしを置てひと夜

U 20554

のたはふをぞ奉れ給ふ云々同東屋四十二丁ウにうつし馬ども引出して殿ゐにさふらふ人十よ人ばかりして參り給ふ云々大鏡八幡臨時祭の條八の巻十九丁ウに頭中將下重の尻はさみてうつしを置たる馬にのりておはするに云々續世繼薄花櫻四の巻廿八丁ウにみまやの御馬にうつしをおきていだし立てつかはしければ云々宇治拾遺五の巻二オに厩に黒馬の額少し白きを廿疋立たりけり移のくら廿具鞍かけにかけたりけり云々同書一十の巻一丁オに御烏帽子直垂ながら移の馬にのり給ひて云々古今著聞集一十の巻一丁ウに二條大路にてはなちがへしける馬をとりて移を置て競馬六番ありけり云々又五丁オに拜賀の夜くせもなき馬を移馬に引れたりけるに云々同書一十四の巻四丁オに黒き馬にうつしを置たるに奉りて云々同書一十五の巻一丁ウに祿をば移にぞかけられける云々又廿丁オ左大臣のうつし馬の居飼雜人をはらひけるほどに云々吾妻鏡十の巻五十九丁ウに府生將曹廳反移馬皆院御馬也云云同廿三の巻一十丁オに御隨身裝束移鞍等也云々餝抄下巻一丁ウ近衞次將甲小忌云々乘物具云々鞍唐鞍和鞍移唐笠云々又廿七丁ウ諒闇鞍事云々然而余今夜付ニ事安一用レ移云々右少將實國朝臣又駕レ移左將軍公敎諷諫云々又

テ緣ハ大滑ヲ廣クサシタリ緣外(ソヘ)レニ白布ヲ三ツ繰ニシテ綾移ニシテ小緣ノ外(ソヘ)レニサシ廻シタリ表敷ハナキ也腹帶トハイハデ由木搦ト云テ由木ニ結付テシメタル也證ハ壺也鞦ハ平鞦ニ總ヲ付タリ力革ハ赤革ニテ包タリ泥障ハサヽヌナリ行幸ノ時ハ公卿殿上人モ此鞍ニ乘ル手綱ハ蘇芳ノ手綱トテ絹ヲ染タリ云々朝光集に「常陸なるをのゝ御牧のつゆ草をうつしは駒のおくにそ有ける」

(廿二)妊婦與男子不同處 井知懷妊方及疱瘡の事

滇黔土司婚禮記(知不足齋叢書中收之)に內子有孕蘭與甄俱孕者室老即不令入値且有厲禁蓋苗中嬰兒最忌種痘痘必死百無一二生者其氣又易沾染卽壯夫染之無不痘痘無不死常因一兒痘而禍延一鄉竟絕噍類者求其不痘無如受孕卽不與男子同處則他日所產兒決不痘故大家有室老之設專護其事小戶姑卽嚴護之其孕也易識今夕受胎明晨婦眉間有縷紅絲隱々而現大家婦人每早必參見室老々々一見卽知曰若有孕矣母與男子同處立爲移置別室夜必扃鑰室老日夜隄防至七閱月胎成方解嚴蓋關係非一人一家故也云々滇黔は南蠻の地也婚禮記は江陰陳鼎定九が所著也

(廿三)紙老鴟并いかのぼり及太古紙鳶(タコトンビタコ) 倭名抄(四の卷雜藝具部に紙老鴟辨色立成云紙老鴟以紙爲鴟形乘風能飛一云紙鳶世間云師勞之云々類聚名義抄(僧中卷)鳥部に紙老鴟シラウシ雜藝類也云々以呂波字類抄志部入事門に紙老鴟シラウシ雜藝具也云々夏日物語二の卷(廿六丁カ)に蛸ノ糸ノ切タル如云々關秘錄三の卷に予供の春あげる凧のはじめは戰法より出たり奧州武衡亂の時武衡が家人置賜四郎と云もの義家の方へ間者に入りしに吟味つよく城中へ內通しがたく仍而兵書の中に鴟老紙といふもの是たゞ有り糸を付て風にまかせてやりて內通を則此紙に書付跡より火繩をやつて其糸を燒落すやうにこしらへたる物也四郎是を思ひ出してこしらへて風向よきとき城の方へ上げて落したる故その夜武衡武士に命じて秀武が陣へ夜討して大きに勝を得たり此法其後誰も傳ざるに木曾殿の御內に今井の四郎傳を得て行ひしよし是より今の凧出來るなり云々元和六年刊本無名草子に長谷佐兵衛尉藤廣御代官トシテ長崎ニ在テ云々童部共ノモテアソビ烏賊(イカノボリ)旗トヤラン云物ヲコシラヘ其上ニ燈燭ヲトボシ宵過ルホドニ糸ヲヒカヘ風ニ乘ジテイナサト云所ヨリ長崎ノ上へ揚シニ云々夏山雜談五の卷に紙鳶(イカノボリ)奉の物ニテ俳諧連歌ニモ二月ノ季ニ用ルナレドモ大坂ナドニテハ五六月西國邊ハ七八月兒童ノモテアソブ也云々葵作(四十三丁ウ)にイカノボリ京ノ詞也江戶ニテタコト云古代ハ「シラウシ」ト云和名雜藝具曰云々古ハ鳶ノ形ヲ作リタリ後代サマ〴〵ノ形ヲ作ル下ニ長キ足ヲ付タル體烏賊ニモ鯖魚ニモ似タレバ「イカノボリ」トモ「タコ」トモ云ナリ江戶ニテハ春弄ブ相撲ニテハ五月弄ル之所々ノ風ニヨルベシ云々事物紀原(八の卷廿八丁ウ)に紙鳶俗謂之風箏古今相傳云是韓信所作高祖之征陳豨也信謀從中起故作紙鳶放之以量未央宮遠近欲以穿地隧入宮中蓋昔傳如此理或然矣梁太清中侯景攻臺城內外斷絕羊侃教小兒作紙鳶詔於中間文帝出太極殿前因西北風放之翼得達援軍賊謂是厭勝又射下之見馬摠通曆云然其事初一見於此證知其審爲韓信造矣云々七修類稿廿二の卷に紙鳶本五代漢隱帝與李業所造爲宮中戲者(見李嬖傳)而紀原以韓信爲陳豨所造放以量未央宮之遠近又曰侯景攻梁臺城內外斷絕羊侃令小兒放紙鳶藏詔於中以達援軍二說俱不見史且無理焉線之高下豈可計地之遠近羊侃又何必令小兒放之放之而紙鳶之墜又可必在於援軍地耶其爲李業所始無疑俗曰鷂子昔鷂乃擊烏飛不太高擬今紙鳶之不起者一曰風箏者乃古殿閣之簷鈴爾借以名今之帶紋之紙鳶也各有意義風箏風琴丹鉛總論辨之明矣云々唐書(二百卷田悅傳に急以紙爲風鳶高百餘丈過悅營上悅使善射者射之不能及燧營譟迎之得書云々續博物志(十の卷七丁ス)に今之紙鳶引絲而上令兒張口望視以洩內熱云々此外楊升庵外集など所見おほかり五代史(卅卷九丁左)漢臣李業傳に帝方與業及晶文進後贊郭允明等狎昵多爲庾語相謂戲放紙鳶于宮中云々

頭書 名物六帖器財鳶三ノ五十三丁ス七修類稿廿二紙鳶倭漢三才圖會十七ノ十二丁ウ

松屋筆記卷之七十三

東都　平　小山田與清稿

(一)天盃天酌大流小流御通召出　源氏物語やどり木（潮月本八十六丁ウ）に四月ついたちごろ節分とかいふ事まだしきにわたし奉りぬ明日とての日藤壺に主上わたらせ給ひて藤花の宴せさせ給ふ云々白銀の様器瑠璃の御盃瓶子は紺瑠璃也兵衛督御まかなひつかうまつり給ふ御盃まゐり給ふにおとゞしきりてはびんなかるべし宮達の御中にはた然るべきもおはせねば大將にゆづりきこえ給ふをはゞかり申給へど御氣色もいかゞ有けん御盃捧げておしとのたまへるこわづかひもてなしさへれいのおほやけごとなれど人に似ず見ゆるもけふはいとゞ見なしさへそふにやあらんさし返したまはりておりて舞踏し給へるほどいとたぐひなし云云細流抄に天盃を毎度に上首賜はれり然を親王の中には珍らしげなしとて大將にゆづり給へり云々孟津抄に天盃の事也夕霧の毎度賜はり給ふ事を辭したる心也宮達は御子なればにや薫にゆづり給ふ也云々花鳥餘情に賜二天盃一例天暦七年十月廿八日菊合式部卿親王重明賜二天盃一寛弘四年四月廿七日密宴中務卿具平親王賜二天盃一（以上賜二親王一例）永延二年三月廿五日攝政六十賀攝政御堂（殿）賜二天盃一、永祚元年二月十六日朝覲行幸御堂殿給二天盃一寛弘三年十一月四日行幸御堂殿（于レ時左大臣）給二天盃一同五年十一月廿日後一條院御百日御堂殿給二御杯一（以上執政一字臣例也）今案此後万壽元年宇治殿嘉保三年京極殿賜二上皇御盃一寛喜三年光明峰寺攝政永德元年室町第行幸鹿苑院大相國等給レ之也云々又云天盃を給時は土器をめして御盃をうつし入てのむ也そのかはらけをさしかへしといふ呑了て後傍の階よりくだりて御前にむかひて舞踏して座にかへりつく是さだまれる作法也云々さかゆく花（上卷）行幸天盃の儀舞樂の段に主上御はいをきこしめしてさらに酒を入て右大將に給ふ右大將いそぎ笏をさして天はいを給はりて本座にかへりてをのこどもをめす頭中將かはらけにうつし入て右大將ひざまづきて杯なる酒をかはらけにうつし入て御酒盃をば頭中將に返し給ふ頭中將これをとりて退きいづ次に大將酒をのみてかはらけを座下におきて揖して南階をくだりてはしのまの西のほとりに立て舞踏せらる云々北山行幸記に先うちしきをもちてまゐりて御前にしきて次第にするおかる役送は參議藏人頭など也次に銀の御盃を宰相もちてまゐりたる陪膳とりて御まへにまゐらせらる宰相又御銚子をとりて陪膳につたふ大將うけとりて御酒をくうず主上御盃をとらせおはしまして若君に御けしきあれば若君座を立て御前にすゝみてかしこまりてさふらひ給へば御盃に更に御酒を入てたまはせ給ふ若君笏をさして御杯を給はりてほん座にかへりてをのこどもをめす頭中將かはらけをもちてまゐるわか君ひざまづきて御杯の御酒をかはらけにうつし入て御杯をば頭中將にかへし給ふ若君のませ給ひてかはらけを座におきて南のはしをくだり給ふ此ほど公卿みな座を立て庭に蹲居せらる關白もまづ座を立給ふ是は庭にくだり給はずさてはしのまの東のほとりに立て拜し給ふさまにぞみな人目をおどろかし侍るまして御ゐるじの御心のうちおしはかるべし舞踏はてゝ中門の切妻よりのぼりて本座にかへりつき給ふ關白おなじくかへりつかる次に藏人權辨家俊へいじを取てまゐる若君土器をとりて關白にさし給へば次第に巡流とかやあり此天盃の儀式は昔もまれなる事也しかれども永德の行幸にいまの御あるじのたまはりし御例とぞきこえし若君はとし十五にならせおはしますにや御としのほどよりもおとなびよろづ心もとなからずつきつきしくふるまひ給へばげにしかるべき御事にてこそとふしぎなるほどにぞ申あひ侍りし又わらはのしやくをもつとはなきよしうけ給はりしにこれははや五位のかうぶりをさづけ申されたるゆゑに御笏を持給ふにや大かたはれの儀にて天盃をたまはる事は御堂宇治殿京極大殿などこそ御幸行幸の時はかやうの事もありしやうに日記にも見及び侍りしかさては寛喜三年九月にて有しやらん光明峯寺の關白給はりたまひし後は永德のたびならでは其例もなきにやとさら御わらはすがたにては昔もかゝるためしはあらじとぞおぼえ侍る云々女房私記正月の條に朔日は御三ツ肴にて天盃被レ下云々樋口秘記（十四丁ウ）に年頭ニ云々御前ニテ献アリテ天盃アリ大臣拜賀云々殿上ニテ献アリ天盃アリ云々又（廿三丁オ）公方家ノ上使參内ニハ云々清涼殿ノ西面ノ間ノ北ノ間ニテ門跡衆ノ表向ノ所ニテノ御禮ナリ公方家ノ太刀ヲ職事衆ヒク御目通ニ置

テ歸ルト名ノ披露ハナク敷居際ヨリ二疊目ニテ拜ニ天顏ニ其儘ニ天盃アリ御前ノ酌ハ清華衆也職事請取テ上使ヘ酌ス酒ヲ成程少クツヾガ宜シ其儘退出鼻紙ニテ拭懷中シテ歸ル法也云々又丁(四十九)正五九月十六日内殿ニカケテ女中衆參リアラメ等ノ物ヲ供ズ女中ヘ天盃ヲ下サル淵醉アリ云々故實拾要(六卷)のに天盃是天子ノ御盃ヲ云也尤是土器也云々官位俗訓二の卷に御機嫌を天氣と申御かはらけを天盃をいたゞくと申云々弓法盃之書に大流は近代出來たる事也是は天盃天酌にはなき事也公方家にても無官の武家への事也官位あるには大流は無レ之と云々傳云天盃とは天子の御盃也天酌とは天子自御酌あるにあらず内侍代て酌をなす也云々別傳云天盃ハ天子ノ御盃也天盃頂戴ノ法ハ別ノ土器ニ取カヘテ滴ヲウツシ御盃ヲ懷中シテ退出スルソレヲサシカヘシト云天酌ハ天子臣下ヘ御酌ニテ酒ヲ賜フ一也天酌ハ後花園院ヨリ始レリ親王家ヨリ繼位マシマスニヨリ群臣ニナツケ玉ハントノ一也トゾ然ルユヱ將軍高位ノ方モ自身酌シテ家子殿原ヘ酒下サルヲ御通トイフ云々又云大流小流の事は公方家又は一國の主君たるべし其外は家に依て有

べし平人の所にて流れといふ事いかゞ也正月五節句などには盃を取かはす事主人の爲には祝儀也公方家などにて可レ然候小名にて流れなど云義いかゞ也云云傳云流れは日本にての事也異國の良將軍勢の勞たるを見て酒を水上より流して其志を諸卒に施したる事あれば如レ此心を以て流れと云名目あるべしと云云又云小流可レ被レ下事御前へ出る時は兩手何となく股に置腰をたをめて出酌より間三尺ほどへて左の膝を付左の手を膝よりおろし疊に付さて右の膝を付右の手をも疊に付て二膝前へよせ左の手を盃へ掛て右にて取左の手のひらにのせて御前へ向ひ候て左のひぢを付謹て戴き酒を少宛不レ殘入也云々又云大流呑事小流同前也乍レ去酒を請て戴くべし傳云大流の時主人被二召上一候御酒銚子へ御入あるを載く也其時は土器を不レ戴御酒を請て戴き呑候て土器を其儘置て起べし其土器にて段々飲也小流の時は土器を持起也小流は土器を戴き酒を受べし又云大流始に出るものは先盃をも戴き酒を受べしと云々又云召出し盃の事五節句月見或は移徙謠始ヶ樣の時人々を召出御酒被レ下候事有べし此呑樣も小流のごとくに盃の所へよ

り盃を取て酒をうけ御前へ向ひ左のひぢを付謹て戴き少レ脇へひらき居て呑べし傳云是は御前にて御酒被レ下時之事也御盃には非ず少脇へひらき居て呑べしとは酌の方へ少會釋して可レ呑主人の方へさしつけては不レ可レ呑又云召出呑候はゞ盃を置て立べしと云々同書附錄にも御流呑樣の事大ながれ呑樣之事御とほりの事召出しの事見ゆ御とほりの事當時年中行事後水尾院天盃天酌の事昔傳拾葉二の卷に出たり頭書(巻に天子御酌を賜るを天酌と云は後花園院の時よりの稱呼也古はその事なかりしとぞ云々 御通り年中定例記十八丁ノオ殿中申次記十六丁オ宗五大草子上廿九丁オ又世八丁ウ)

(二)燒香塗香　能改齋漫錄一の卷に焚香始二于漢一李相之賢己集謂二焚香之始一云本佛圖澄傳襄國城塹水源暴竭石勒問レ澄澄曰今當二敕レ龍取一水乃至二故泉源上一坐二繩床一燒二安息香一咒二數百言一水大至予按二江表傳一有二道士于吉一來二吳會一立二精舍一燒レ香讀二道書一製二作符水一以療レ病又按漢武帝故事亦云昆邪王殺二休屠王一以二其衆一來降得二其金人之神一置二之甘泉宮一金人者皆長丈餘其祭不レ用二牛羊一惟燒レ香禮拜然則焚香自レ漢已然矣云々該餘叢考卅三の卷にも見ゆ翻譯名義集三の卷衆香篇乾陁羅耶條に華嚴云善法天中有レ香名二淨莊嚴一若燒二一圓一而以熏レ之普使二諸天心念一於佛一云々また阿伽嚧の條に華嚴云阿那婆達多池邊出二沈水香一名二蓮華藏一其香一圓如二麻子大一若以燒レ之香氣普熏二閻浮提一云々延喜齋宮寮式二丁に別忌詞に堂稱二香燃一云々夫木抄(秋)七夕部に仲正「よもすから星合の空に奉る香のけふりや雲と成らん」同(雜一)煙部に寂蓮「消かたき香のけふりのいつまでか立めくるへき此世成らん」後京極攝政「たえすたく香のけふりやつもるらん雲の林に風かほる也」光俊「もえつゝく香のけふりの時うつり羊のあゆみけふもほとなし」塗香のゆゑよしは大智度論九十三の卷(七丁オ)釋淨佛國土品の論にくはし

(三)曲　能改齋漫錄一の卷に歌辭曰レ曲自レ晉歌辭或謂二之曲一未レ見二其始一琴書曰蔡邕嘉平初入二青溪一訪二鬼谷先生一所居一山有二五曲一一曲製二一弄一山之東曲常有二仙人遊一故作二遊春南曲一有レ澗冬夏常渌故作二水中曲一即鬼谷先生舊所レ居也深邃岑寂故作二幽居北曲一高巖猿鳥所レ集感レ物愁坐故作二愁西曲一灌木吟レ秋故作秋思(曲歌)二三年曲成出示二馬融一(融歌)甚異レ之然漢蘇武詩云幸有二絃歌曲一可二以喻一中懷一則音韻稱レ曲其來久矣又按

韓詩章句有二章曲一曰レ歌無二章曲一曰レ謠云々 文選六臣注本四十五の卷一丁ウ宋玉對楚王問に其曲彌高其和彌寡云々按に曲を振とよみて神代紀に夷曲と書れたるを古事記には夷振（ヒナフリ）と書る類おほし後には「フシ」といへり「フリ」は風韻にてヒゞキによりたる詞フシは節にて節應也

（四）搏風破風　能改齋漫錄一の卷に屋翼名二搏風一今之屋翼謂二之搏風一見二儀禮士冠禮篇一云直二于東榮一鄭氏注云榮屋翼也唐賈公彥疏曰榮屋翼也者即今之搏風又云榮在二屋棟兩頭一與レ屋爲レ翼若二鳥之有一レ翼故斯于詩美二宣王之室一云如二鳥斯革一如二翬斯飛一與レ屋爲二榮飾一故曰レ榮也云々和名抄十の卷居宅具部に搏風辨色立成云搏風板比宜（ヒギ）揚氏漢語抄說同云々 色葉字類抄一の卷波部垉門家屋に破風ハフ云々下學集門に破風ハフ云々節用集儀門坤門に破風ハフ 八風ハフ云々按に搏風ハ千木（チギ）とも比宜ともいひて音にも「ハフ」といへるを後に破風などの字を書たる也比宜千木の事ハ古事記傳十の卷十六ウ一丁にくはし可二考合一

（五）璽　能改齋漫錄一の卷に印名璽蔡邕獨斷云璽印也信也天子璽白玉螭虎紐古者尊卑共レ之春秋襄公二十九年左氏傳季武子取レ卞使二公冶一問二璽書一追而與レ之杜預曰璽印也月令曰周封レ璽季武子使二公冶問一レ璽書二此諸侯大夫印皆稱レ璽也漢衞宏云秦以前民皆以二金玉一爲レ印惟其所レ好自レ秦以來惟天子之印獨稱レ璽又以レ玉群臣莫二敢用一也按周禮掌節貨賄用二璽節一鄭康成曰今之印章也則周時印已名レ璽但上下通用以上並見二左氏傳疏一今宏以爲天子獨稱レ璽何哉又按春秋合誠圖曰堯坐二舟中一與二大尉舜一臨觀鳳皇負レ圖授レ堯圖以二赤玉一爲レ柙長三尺八寸黃玉檢白玉繩封二兩端一其章曰天赤帝符璽五字則堯時印已名レ璽矣本朝徽宗嘗賜二宰臣蔡元長塗金銀鍍公相印一紐一前古所レ無也云云字典璽字の注に諸說を擧事物紀原三の卷廿六丁ウにも印璽之起肇二於三代一よしいへりこは神璽に引注すべければ抄出せり神祇令義解に謂璽信也云二神明之徵信一此即以二鏡劒一稱レ璽と見ゆ

（六）〻字點（ジテン）　祖庭事苑一の卷五丁ウ雲門錄上部に以字不成其說有レ三一謂是嘔啊二字二謂是音字不レ譯三謂是梵書心字並指二經簽題上以字一也嘔啊者清涼疏主云經首立二如是一謂異二外道一故外道經首皆立二嘔啊一或云二阿優一以爲吉阿之言無優之言有萬法雖レ衆不レ出二有無一是則斷常之計今如即眞如是即妙有對二破邪宗一

以彰二中道一一代時敎不レ出二如是二字一高僧傳有二譯經新意六例一一譯レ字譯レ音例一內分レ四一譯レ字不レ譯レ音謂陀羅尼二譯レ音不レ譯レ字謂佛胸前卍字三音字俱譯謂經律論四音字俱不レ譯謂經題以字所レ謂嘔啊經首如是我聞即不レ在二經外簽題之上一所レ謂音字俱不レ譯未レ詳レ起レ自二於誰一考二其二說一似二乎無一レ稽或者妄指爲二梵書心字一梵本且無二此說一尤謬愚管過二與國之傳法院一竊取二西竺貝葉眞書一考レ之其未譯之書經題尙且未レ立何有二以字之文一蓋自レ古習謬妄爲二其說一先聖法門不レ在レ斯焉或問經首以形自レ何而得蓋當時備書者運レ筆以覆二經題一固無レ疑矣然宗匠假レ之以來學一豈智識擬議哉云々谷響集二の卷十八丁ウに今按前三說義皆不レ成之中謂二梵書心字一者甚似レ昧二于梵書一梵書安有二心字一哉云々與清按延寶四年の伊勢曆の卷首に〻字を記せり天和四年の伊勢曆の卷首なるは〳〵かゝる體にて上下其體を分たれどもと〻字點により伊字三點をおもひよせて作り出たるものと見ゆ延寶二年の曆はた同體也三嶋曆に八八かく略して題の上下に記したるは笑べし 頭書 景德傳燈錄十六の卷四丁ウ全經傳に師曰吾敎意如二伊字一三點第一向二東方一下二一點一點二開諸菩薩眼一第二向二西方一下二一點一點二諸菩薩命根一第三向二上方一下二一點一點二諸菩薩頂一是第一段義云々同卷廿三丁ウ元安傳に問四伊三點人皆重樂普家風事若何云々大光明藏三ノ六十三丁オ

（七）伊字三點三形の寶珠　南本大般涅槃經會疏解卷第二七十四丁オに何等名爲二秘密之藏一猶如二伊字一三點一若並則不レ成レ伊縱亦不レ成云々北本には猶二〻字一三點一に作れり翻譯名義集六の卷一丁ウに〻章安疏云言二伊字一者外國有二新舊兩伊一舊伊橫竪斷絕相離借レ此況レ彼橫如二烈火一竪如二點水一各不二相續一不レ橫不レ同二烈火一不竪不レ同二點水一應レ如二此方草下字相細畫相連一是新伊相ゝ舊伊可レ譬二昔敎三德一法身本有般若修成入二無餘一已方是解脫無二復身智一如二竪點水縱而相離一又約レ身約レ智分得二有餘解脫一橫一時有二三法各異一如二橫烈火各不二相關一新伊者譬二今敎三德一法身即照亦即自在名レ一爲レ三無二別體一故不二是橫非一レ前非レ後故是非レ縱一即三如二大點一三卽一如二細畫一而三而一而一而三不レ可一三說一不レ可二一三思一故名二不可思議一不可思議者即非二三非一一名二秘密藏一如二世伊字一谷響云西方字有二新舊一亦猶二此土之篆隸一也莫レ不二以レ篆爲レ舊以レ隸爲レ新云々走湯山緣起五の卷一丁ウに以二國名一號二伊豆一伊者ゝ三瓣寶珠豆者頭首也所レ謂此龍頭頸懸二三瓣寶珠一是故云二伊豆一云々簠簋內傳三鏡章に三鏡者日月星

三光天人地三才法報應三身阿鋡吽三字佛部蓮華部金剛部三部理智事三點大日彌陀釋迦三尊又藥師三尊吃枳尼卑天辨才天三天也春大圓鏡智故以二三瓣寶珠形一禮拜二鏡者三玉女是也云々假名曆略注に 三鏡の寶珠形也天星色星多願の三玉女を象る也又天鏡地鏡人鏡也向二其方一成二百事一吉也毎日方位左のごとし

正二三四五六
正二三四五六七八九十十一十二天星方乙甲乙丁甲甲
七八九十十一十二
坤壬辛坤壬庚色星方辛丙丙癸丙乙巽乾壬巽坤辛多願方乾庚丁乾庚丁艮巽癸艮艮癸云々與清曰三形の寶珠假名曆の 卷首に 記せり 京大經師曆 元和八年の本には

かゝるさまに 書き 同慶二年の本には

かくも書たり 寛文十二年本はたおなじ三島曆會津曆などに記せるは伊勢曆にたがふとなしこれもと佛經の伊字三點によりて作りまうけ三形寶珠などゝもの顏の名をばおほせたる也抱腹大笑頭書

日蓮錄外廿卷ノ廿八丁ウ天台四教儀卅二丁オに如二伊字三點一若天主三目二云々

(八)卍字 翻譯名義集六の卷一丁ス 唐梵字體篇に卍悉曇聞曰志誠纂要云梵云二室利靺瑳一此云二吉祥海雲一如來胸臆有二大人相一形如二巏字一名二吉祥海雲一華嚴音義云案二卍字一本非二是字一大周 長壽二年 主上權制二此文一

著二於天樞一音レ之爲レ萬謂吉祥萬德之所レ集也經中上下據二漢本一惣一十七字同呼爲レ萬依二梵文一有二二十八相一云々祖庭事苑一の卷十五丁オ雲門室中錄羅漢書字注に師改二十字一作二卍字一僧以二兩手一托二圓相一如下修羅掌一日月一勢上云是甚麼字師晝二一圓相一圍二却卍字一云々谷響集二の卷十八丁ウに按十地菩薩胸臆亦有二卍字一見二華嚴十地品一云々與清按に佛足跡にも卍字文あり題額聖蘭贊頭書法苑珠林廿四ノ十一丁涅槃經會疏纘錄廿九小窓雜記下秋齋閑語一ノ一丁小窓雜事一五燈會元十五卷溫門滿禪師章僧問如何是佛師曰胸臆二卍字一云々宋高僧傳三ノ十九丁オ佛祖統紀四十八ノ十七丁オ

(九)寶船 安齋隨筆武藏鐙十一丁ウ に正月寶船繪古代ノ書ニ寶舟繪ヲ正月枕ノ下ニ敷事所見ナシ京都將軍ノ比ハ既ニ此事アリキ澤巽阿將軍家ノ同朋也大覺書ニ云貞孝之御調 進節分 御船繪所は一兩年上京 小川扇屋にて被レ書レ之歟又其後狩野法眼弟子に峠右近と申仁御披官人御扶持人候其峠に書せられ候又其後に公方樣光源院殿御代に某福山新五郎時御船の繪の事公方樣朽木より御上洛二條妙覺寺に被レ成二御座一候其時貞孝樣は御宿妙蓮寺と申所に御座候公方樣の御臺樣は大引合御舟二ツ又御造子御所々々樣は小引合上臈中臈御未女までは杉原に書入次第およそ調進或時節分の

御伺公候て御入候へば御所々々樣の御舟不足にて俄に福山繪筆持て參れとの御使 被レ下二條春日御局樣御えんにて御舟を書申候彼節分御舟圖相阿彌むかし繪圖有それにて調申候事も候ひし云々右の文を見るに昔は節分の夜寶舟の繪を用ひし事と見ゆ貞孝は伊勢伊勢守貞孝也將軍家の政所職也貞孝より寶船の繪を獻せし也貞孝は予が先祖也御造子は御曹司也云々萩原隨筆三の卷三丁ウに禁裏 御寶船は後小松院御夢ニ御覽ジテ畫セ玉フ樣ノ一字則震翰也ト云カナヘドノノ黃金ノ釜ノ煤ヲ集メテ板ヲ摺ルト云ヘリ云々歌林拾葉五の卷九丁カに寶舟事原ニ於韓退之送窮之文一作歟云々按に簠簋內傳第一章牛頭天王の條に將來重曰有二我一室船一名曰二隼鷁一兩端高大學二龍頭鷁首一腦早行速刹那過二數万里程一云々晉書五十七の卷 陶璜傳に璜夜以二數百兵一襲二董元一獲二其寶物一船載而歸云々 大破二元等一以二前所レ得寶船上錦物 數千匹一遺二扶嚴賊帥 梁奇一云云など字面の出處とすべし頭書 橘窓自語に五嶽天神の神璽は金のたからの船なるよし天明の大火災の時動坐させ奉りし町家菊屋幸兵衛語れりしと中野鵬元物語ぜり此天神は少名彦の神也例平大晦日節分にたから船の畫を出せるを人々請受て守とする事なおもへば御神の御影の心にや有けん云々又云節分の夜に內裏宸筆のものに結ふ寶船の畫は花園實久朝臣獲字後陽成院宸翰にて繪文字とも宸刻也此帝の宸刻の神代卷賤原抄孝經などもあり寶船の板木は万治の火事にやけたりしなり京極殿にありしもて翻刻ぜられたりしが今傳たる板木也日本風土記五琴譜部二寶船歌アリ釋モアリ可考

(十)參の字義 參上參謁參拜朝參などみな下より上に參る義也能改齋漫錄一の卷に下見レ上爲レ參蓋始二于戰國時一也戰國策秦王欲レ見二頓弱一頓弱曰臣之義不二參拜一王能使二臣無一拜即可矣不則不レ見也秦王許レ之云々玉篇に相謁也云々廣韻に參承也覲也云々などみゆ

(十一)渡船賃 能改齋漫錄一の卷に本朝賣坊場河渡始二于熙寧間一荊公建議然古亦有レ之按 水經漢武徵行柏谷遇二辰賓門一又感二其妻深識一之饋賜以二河津一令二其濶一渡云々義經記七の卷十四丁ウ大津次郎の事の條にかいづの浦まで舟賃なせとせめければ法もなく物をいひつる間にくさにかなぐり取し物を見よとて太刀とはらゝきとをとり出しがはとおきければ云々 同卷卅二丁ウ如意の渡りの條にかちとりのせ奉りて申けるははや舟賃なしてこえ給へといへばいつのならひに羽黑山伏の舟賃なしけるぞといひければ云々

(十二)魚袋印籠巾著燧袋 能改齋漫錄 一の卷 襲二玉魚袋一條に宋敏求薨後因レ討二論典故一帝考 初製二玉魚

袋ニ欲レ賜荊楊二王疑レ非ニ故實ニ丞相王文恭公召ニ宋公次道ニ諮レ之宋曰按ニ唐六典ニ親王三品以上二王後服用レ紫飾以ニ玉帶及魚袋ニ皆飾也文恭公挾レ策以進議遂定云々事物紀原三の卷廿九丁オに實錄曰三代以レ韍爲レ之謂ニ之算袋ニ魏易レ之爲レ龜唐高祖給ニ隨身魚ニ三品以上其飾金五品以上其飾銀故名ニ魚袋ニ天后改爲レ龜後復云魚神龍初賜レ紫則給ニ金魚ニ賜レ緋則給ニ銀魚ニ不レ限レ品也唐會要曰永徽二年四月二十九日給ニ隨身魚袋ニ咸享三年五月三日始令ニ京官四品五品職事佩ニ銀魚ニ久視元年十月十三日職事三品以上用レ金飾四品銀五品銅景雲二年四月二十四日赦文魚袋著レ紫者金裝緋者銀裝宋朝神宗元豐末親王又賜ニ玉魚ニ以副金帶金魚以副ニ玉帶以ニ唐禮ニ也韓文公之詩云不レ知ニ官高卑ニ玉帶懸ニ金魚ニ是也云々隋唐嘉話に朝儀魚袋之飾唯金銀二等至ニ武后ニ乃改ニ五品ニ以レ銅中宗反レ正從レ舊云々孔氏談苑五の卷所起の條に三代以レ韍爲ニ算袋ニ盛ニ算子及小刀磨石等ニ魏易爲ニ龜袋ニ唐永徽中四品官並給ニ隨身魚ニ天后改レ魚爲レ龜唐初卿大夫沒追取ニ魚袋ニ永徽中勅生平在レ官用爲ニ褒飾ニ沒則收レ之情不レ忍五品以上薨魚更不ニ追取ニ云々唐書卷廿四車服志十三丁オに隨身魚符者以明ニ貴賤ニ應ニ召命ニ左二右一左者進レ內右者隨レ身皇太子以ニ玉契ニ勘合乃赴ニ親王以レ金廁官以レ銅皆題ニ其位姓名ニ官有レ武者加ニ左右ニ皆盛以ニ魚袋ニ三品以上飾以レ金五品以上飾以レ銀刻ニ姓名ニ者去レ官納レ之云々高宗給ニ五品以上隨身魚銀袋ニ以防ニ召命之詐ニ出レ內必合レ之三品以上金飾袋垂拱中都督刺史始賜レ魚天授二年改ニ佩魚ニ皆爲レ龜其後三品以上龜袋飾以レ金四品以レ銀五品以レ銅中宗初罷ニ龜袋ニ復給以レ魚邵王嗣王亦佩ニ金魚袋ニ景龍中令ニ持進佩ニ魚散官佩レ魚自レ此始也然員外試撿按官猶不レ佩レ魚景雲中詔衣レ紫者魚袋以レ金飾レ之衣レ緋者以レ銀飾レ之開元初騶馬都尉從五品者假ニ紫金魚袋ニ都督刺史品卑者假ニ緋魚袋ニ五品以上撿按試判官皆佩レ魚中書令張嘉貞奏致仕者佩魚終身自レ是百官賞ニ緋紫ニ必兼ニ魚袋ニ謂ニ之章服ニ當時服ニ朱紫ニ佩レ魚者衆矣云々又十八丁オ云百官朔望朝參外官衛日則佩ニ算袋ニ餘日則否云々文獻通考百十二の卷王禮考君臣冠冕服章の部に炙轂子魚袋古之算袋魏文帝易以ニ龜袋ニ取ニ其先知ニ歸順之義ニ唐改以ニ魚袋ニ取ニ其合魚符之義ニ自ニ一品ニ至ニ六品以下ニ皆佩云々釋氏要覽上卷四十法衣二丁オ部紫衣の條に僧史略云按ニ唐書ニ則天朝有ニ僧法朗等

九人ニ重譯ニ大雲經ニ畢並賜ニ紫袈裟銀龜袋ニ此賜レ衣之始也云々五雜俎の卷三代實錄二の卷廿五丁ウにも見ゆ貞觀元年四月廿三日の條に安倍朝臣安仁云々承和二年賜ニ牙笏金魚袋幷御衣一襲ニ云々又廿九丁オ同年五月七日の條に人康親王上表曰云々將使ニ金魚脫レ佩長纓ニ紫服之粧ニ云々延喜彈正式十一丁ウに凡魚袋者參議已上及著レ紫諸王五位已上金裝自餘四位五位銀裝云々西宮記正月部上二宮大饗の條同臨時四御禊日の條同天皇讓位云々の條同臨時八外衛佐節會日陪陣の條賀茂齋王前驅の條同臨時九野行幸の條北山抄三の卷子日の條同四の卷御元服儀の條年中行事秘抄小朝拜の條上卷引ニ貞信公記ニ同正月七日參叙列人裝束の條同四月中未日警固事の條政事要略廿七の卷豐明裝束の條同廿八の卷臨時祭裝束の條などにも見ゆ江家次第一の卷四十七丁ウ元日宴會の條に公卿有文玉帶餙劒金魚袋非參議巡方帶螺鈿劒銀魚袋云々衛府將佐闕腋螺鈿劒平緒銀魚袋云々又四十八丁オ內辨細記に魚袋付ニ右第二石一云々同書十一の卷十丁ウ被レ補ニ次侍從一條に近代著ニ魚袋一參ニ節會一殿上人皆是侍從也云々江次第抄一の卷に或書曰魚夜不レ寢取ニ事レ君夙夜匪懈之義一金銀以ニ其飾一分ニ尊卑一也云々和名抄十二の卷腰帶具部に魚袋蔣魴切韻云袋音代囊名又金銀魚袋唐令云諸百官魚袋並令ニ中尚預造進一也云々雅亮裝束抄二の卷魚袋の事條に節會には上達部殿上人帶ニ魚袋を付く上達部のは金也殿上人のは銀也帶の右の脇にはうせんといふ四方なるいしふたつがなかにつくといへども腰によるべし太からんは脊中になりなん細からんは脇にいりてかくれなん折によりては計ふべし云々後照念院殿裝束抄に魚袋事仰云元三中行幸付ニ魚袋一而後鳥羽院御時相ニ似大嘗會御禊行幸一トテ被レ懸レ之猪隈殿以下於ニ御所一俄被レ撤レ之仰云九條殿元日節會ニ魚袋加ニ修理一不ニ出來一間御遲參貞信公被ニ尋申一之間被レ申ニ此由一仍我令レ付給魚袋解レ之被レ進後日被ニ返進一之時被レ付ニ松枝一令レ向ニ貫之家一給被レ令レ詠ニ付之一被レ進「春風にこほりとけたる池の魚は千年をまつのかけに隱れん」仰云公卿以後金魚袋公卿以前銀魚袋云々官職浮說或問下卷に魚袋の事或問魚袋金魚袋銀魚袋のかはりあり又魚袋は夜の公事に用レ之是不レ眠ための咒に着ぬるといへりそれ魚は眠らざるものによりてなりと承りし此通候や答云大成妄說也異邦の制三代に以レ韋爲レ之謂ニ算袋一魏易レ之爲レ龜謂レ之

龜袋ニ唐高祖隨身給レ魚三品以上其飾金五品以上其飾銀故名ニ魚袋一書ニ官位姓名其魚上ニ左一右一割レ之以レ袋盛而禁門出入合レ之其左符進レ內右符隨レ身故謂ニ之隨身符一又名ニ隨身魚一也詳大學衍義補に見えたり本朝又上古隨身符あり公式令云凡親王及大納言以上並中務少輔五衛府以上並賜ニ隨身符一左一右一右符隨身右符進レ內其隨身者仍以レ袋盛云々（令條ニ割之者謂ニ宮衛令義解一曰契者符書也書ニ兩札一割ニ其側一以爲レ信者是也）元禁門出入の契符なれば晝夜にかぎるべからずいにしへ節會は晝行ひ給ひしかども猶これを用ひらる然れば夜の爲に用ふといふものはあやまりなる歟抑今の魚袋の濫觴は嵯峨帝御代より始るにや粗三代實錄に見へたり但契符に用ふべからず只美飾榮觀に借るものは是宋の魚袋によるならんか云云按に其圖裝束圖式下卷（十六丁ウ）禮儀類典繪圖下卷（十五丁ウ）倭漢三才圖會（廿六の卷）服玩部などに出故實拾要十四の卷に魚袋金魚袋三位以上付レ之緒參議以上ハ紫組打餘ハ紺組打也銀魚袋四位五位付レ之以下不レ付レ之是魚袋ハ節會大嘗會御禊或內宴臨時祭ノ使等著レ之又御禊ノ時ハ雖ニ四位五位一國司ヲ兼ル人幷外記史ハ不レ著レ之又魚袋ヲ付ルハ石ノ帶ノ右方第一ノ石ニ付レ之或第二ノ石ニ付レ之也但魚袋ノ形ハ凡長サ三寸計幅一寸厚五分計ノ木ニ白鮫ヲ以テ四方ヲ包也是ニ鮒ノ形シタル魚ヲ金ニテ彫タルヲ表方ニ二ッ宛向合テ以上六置レ之又裏ニハ一ッ置也此魚三位以上ハ金四位五位ハ銀也とも見ゆ今の世の印籠は魚袋によりてつくり出巾著は燧袋より思ひまうけしものにやあらん印籠は北山行幸記に應永十五年三月十四日云々崇賢門院へも行幸あり云々女院御たいめんのぎしきなども同じ事にてはべるにや御おくり物に御小そで一重いんろうかうぼんにするてまゑらせる云々寛正七年二月廿五日飯尾宅御成記に御印籠一堆紅（堆器財門）云々下學集（以部）などにも見えたれど今の製とひとしきにや未レ詳和漢三才圖會（廿六の卷）服玩部安齋舶艫訓（十五丁ウ）秋草下卷などに其說あり可レ考燧袋は安齋火打袋（一丁ウ）同麻久奈岐（七十七丁ウ）可成談三の卷（六丁ウ）小窓雜筆一の卷同追加夏山雜談二の卷安齋小車錦（四十三丁）古事記傳廿七の卷（五十五丁）火打袋圖などにくはし（頭書）火打袋御事始記九丁ウ同頭聚名物考調度部七同宗五大草子下十四丁ウ同貞丈雜記八ノ卅丁ウ同四十二丁ウ印籠貞丈雜記八ノ二丁ウ

（十三）裝潢手　能改齋漫錄一の卷裝潢手條に俗以レ羅ニ列于前一者ヲ謂ニ之裝潢子一自レ唐已有ニ此語一矣唐六典崇文館有ニ裝潢匠五人一熟紙匠三人一秘書省有ニ熟紙匠一裝潢匠各十人一云々齊民要術三の卷雜說に染レ潢及治レ書法凡打紙欲レ生則堅厚特宜レ入レ潢凡潢紙滅レ白便是不レ宜ニ大深一深則年久色闇也入浸レ蘗熟即棄レ澤直用レ統汁費而無レ益蘗熟後漉レ滓擣而煮レ之布囊壓訖復擣煮レ之三擣三煮添ニ和純汁一者省レ功倍又彌明淨寫レ書經レ夏熟後入レ黃縫不ニ綻解一其新寫者須レ以ニ熨斗一縫ヲ縫熨而潢レ之不レ爾入則零落豆黃大不レ宜レ裹則全不レ入レ潢矣云々韻會小補八の卷（卅二丁ウ）陽韻に潢漾韻胡曠切集韻釋名曰ニ染書一也云々延喜圖書式（廿七丁ウ）に凡寫年料仁王經十九部云々黃蘗大七斤（直書手七人日寫七張）裝潢手一人校生一人（日校二十張再校）云々また（卅丁ウ）凡年料裝潢用度絹五尺（藤欄）大豆五斗（糊料）大竹二十株（標紙）小刀四枚（切紙端料）砥一顆云々同陰陽式（三丁ウ）に裝潢手單四十五人寫ニ御曆一手單五十五人云々按に裝は書卷をヨソホフ（ソメヨソホフ）也潢は染る也書物を染裝者を裝潢手とはいへる也職員令義解（四十九丁ウ）圖書寮の條に校寫裝潢云々義解に謂截治曰レ裝染レ色曰レ潢即寫書以下諸手者皆得レ考人也云々とも見ゆ

（十四）留守　能改齋漫錄一の卷に留守二字按ニ漢外戚呂公傳一戚姬常從レ上之ニ關東一呂后年長常留守希レ見益疏高承事物紀原乃云留守始ニ于唐一非也云々後漢書（列傳卅四の卷）張禹傳に十五年南巡祠ニ園廟一禹以ニ太尉兼ニ衛尉一留守注に東觀記曰禹留ニ守北宮一太后朝夕送レ食賜ニ閤登具物一云々令義解宮衛令（六丁ウ）に凡車駕行幸即閇ニ諸門一隨レ便開ニ理門一其留守人者各自ニ理門一出入云々儀制令（二丁ウ）に凡車駕巡幸及還云々留守者不レ在ニ辭迎之限一義解に謂執掌之長官留守者假如監國之太子若執契之公卿之類云々公式令（七丁ウ）に其皇太子監國義解に謂天子巡行太子留守是爲ニ監國一也云々又（廿五丁ウ）凡車駕巡幸京師留守官給ニ鈴契一義解に謂留守官者皇太子若不レ在者餘官留守者亦是也云々續日本紀にも留守官見ゆ唐六典四の卷（十三丁ウ）を考合すべし節用集（留部）に留守ルス云々運步色葉集（留部）に留守ルス云々

（頭書）書言故事九の卷百官類に留守守ニ京師一者曰ニ留守一唐制車駕不在レ京則置ニ留守一唐李暐爲ニ西京留守一裴度留ニ守東都一宋朝紹興八年（紹興高宗年號）召ニ呂願浩一付以ニ建康一（建康今之南京是也又曰ニ金陵一知ニ建康一者曰ニ建康留守一云々唐六典四の卷禮部に凡車駕巡幸及還京百官辭迎皆於ニ城門外一留守官內者在ニ城門外一行從官每日起居兩京文武職事五品以上三日一奉レ表起居三百里內刺史朝見東都留司文武官每月於ニ尙書省一拜表及留守官幷遣ニ使起居一皆以ニ月朔日一使奉レ表以見中書舍人一人受レ表以進北都留守每季一起居云々

（十五）公驗度牒　能改齋漫錄一の卷給ニ公驗一條に唐宣宗時中書門下奏若ニ官度一僧尼一有レ闕則擇レ人補レ之

仍申二祠部一給レ牒其欲二遠遊尋レ師者須レ有二本州公驗一乃知本朝僧尼出遊給二公驗一自レ唐已然矣云々嚢抄十三の卷ノ十丁に凡出家得度受戒爲レ本先出家日度緣請公驗賜十師戒牒授ル也云々三代實錄四十七の卷五丁ウ仁和元二八の條に治部省言去元慶六年六月三日格爲權僧正法印大和尚位遍昭奏狀偽頃年受戒之輩事多二不法一只以二戒牒一專爲二公驗一自稱二眞僧一眩二人耳目一自今以後受戒之日省寮咸從共向二戒壇一子細勘二會官府度緣一即令二登壇受戒一便收二取受戒者一或牒具注二後紙一以二其本籍姓名一省寮相共押署捺以二省印一者謹案二公式令一云應レ會之事以二七月三十日以前一爲レ斷注云十二月上旬勘了被管諸司皆於二所管一勘校自餘諸司各本司勘審然後長官押署封送二太政官一者今尋二物情一非レ無二其違一凡押署者被管會帳之後所管長押而署也而今僧綱不レ署省寮何押古無二蹤迹一今有二疑殆一望請准二於度緣一三司共署捺以二省印一勅依レ請焉云々同書八の卷廿五丁ウ貞觀六三八の條に先レ是律師法橋上人位最敎等申二牒起請四事一其一事曰僧受戒以二四月十五日一始行二事曰未レ授二度緣之輩雖レ下二官符一不レ預二受戒一三事曰受戒畢後奏二聞受戒僧數一四事曰戒壇院設レ印捺二於戒牒一太政官處分依レ請但其印便可レ用二東大寺印一云々右等の文を按に公驗戒牒おなじからず公驗は公の驗證の文にてすなはち度緣也一名度牒といふ戒牒は受戒の日僧綱より賜はる證文也漢土にては公驗と度牒とは別也公驗は今世往來手形などいふものゝ類也度牒の事は別にいふべし事物紀原七の卷卅三丁ウ類書纂要(此間原書缺文)僧史略(此間原書缺文)嚢抄十三の卷自二八丁裏一至二延喜玄蕃式十五丁ウ卅丁ウ三十三丁オ百寮訓要別注三の卷十三丁裏一十七丁ウ傳宣草下卷廿四丁オ卅六丁オ速水見聞私記三の卷同九の卷名目抄詳解二の卷九丁ウなどに度牒の事見ゆ其體裁は延喜玄蕃式廿九丁オ閑田次筆二の卷卅一丁ウに載漢土の度牒の體は經國大典三の卷に載たり頭書類聚符宣抄一ノ卅七丁ウ公驗

(十六)親王代近仗行酒弓場殿王大夫側記連任請任例

桃華藻葉四十九丁ウ讀樣事の條あり親王代ミコダイとよめりシンワウダイとよむは誤也近仗キンヂャウとよめりコン仗とは訓べからず行酒カウシユとよめりギャウシユとは讀べからず弓場殿ユミバドノと讀りユバトノとはよむべからず王大夫オホキミと讀りワウタイフとは讀ず側記ホノギと讀り連新仕女也ツラと讀り任請マウシノマヽ任例アトノマヽと讀り名目

抄嚢嚢抄右記眞俗雜記などにも訓法あり可二考合一

(十七)行狀　能改齋漫錄一の卷行狀の條に自レ唐以來未レ爲二墓誌銘一必先有二行狀一蓋南朝以來已有レ之按梁江淹爲二宋建平王太妃周氏行狀一任昉沈約裴子野皆有二行狀一云々晉書八十二の卷列傳五十二王隱傳に父詮歷陽令少好レ學有二著述之志一每私錄二晉事及功臣行狀一未レ就而卒云々南史徐孝嗣傳唐書百官志宋史李之儀傳などにも行狀の字面出たれど墓誌銘以前に所レ作の行狀文をいふにあらず

(十八)口號　能改齋漫錄一の卷口號の條に郭思詩話以二口號之始一引二杜甫歡喜口號絕句十二首一云觀二其辭語一殆似二今通俗凱歌軍人所レ道之辭一余按梁簡文帝已有レ和二衞尉新渝侯巡城口號一不レ始二于杜甫一也詩云云帝京風雨中層闕煙霞浮玉署清餘熱金城含二暮秋一水光凌却敵槐影帶二重樓一然杜甫以前張說亦有二十五夜御前口號踏歌詞二首一其一云花萼樓前雨露新長安城裏太平人龍銜二火樹一千燈艷雞踏二蓮花一萬歲春其二曰帝宮三五戲二春臺一行雨流風莫二妬來一西域燈輪千影合東華金闕萬重開云々按に雄略紀四年口號クチツウタに引注すべし潛確類書に其體裁をいへり

松屋筆記卷之七十四

東都　平小山田與清稿

(一)乾笑冷笑　能改齋漫錄一の卷乾笑の條に世以二笑之不レ情者一爲二乾笑一按宋范蔚宗謀逆就二刑于市一妻來別罵レ范曰身死固不レ足レ寒レ罪奈何枉二殺子孫一范乾笑而已乾笑此爲レ始云々按に俗に苦笑といふこれ也北史崔贍傳に冷笑の字見ゆ李白詩に見二余大言一皆冷笑白樂天詩に飽食安民消二日月一閒談冷笑接二交親一東坡が詩に冷笑乘レ槎向二海灘一なども作れり冷笑は國恩錄二の卷第一答に御冷笑被レ成候とあり文藻行潦仁部人事門に冷笑ニガワラヒ原病式といへるはいかにぞや頭書酒飯論六丁ウ堀江かはやにおち入て手足はき物具足までとり所なくよごしつゝにがわらひたるけしきこそにくさに過てきたなけれ

(二)名紙　能改齋漫錄一の卷名紙の條に名紙之始高承事物紀原云釋名曰書名字于奏上曰レ剌後漢禰衡初遊二許下一懷二一剌一既無レ所レ之適至二于剌字漫滅一蓋今名紙之制也名紙起二于漢剌一也以上皆高說予以爲不レ然蓋禰衡傳只言レ剌不レ言二名紙一雖二名紙爲一剌之變一然高說無レ所レ據予按梁何思澄終日造謁每二宿昔一作二

名紙一束ニ曉來便命レ駕朝賢無レ不ニ悉狎一蓋名紙始見ニ于此一云々これ名簿の類也名簿は今の名帖也

(三)忌服御免起復之禮　今世忌服半減にて御免などいふは古の起復の禮也能改齋漫錄一の卷起復之禮の條に高承事物紀原云起復本禮記曾子問云子夏問曰三年之喪金革之事無レ避也者非與孔子曰吾聞ニ諸老聃一曰昔者魯公伯禽有レ爲爲レ之也注云魯徐戎作レ難有レ喪卒哭而征レ之急ニ王事一也故春秋亦紀ニ晉襄公墨縗之事一漢唐以來遂有ニ起復之禮一蓋自ニ伯禽一始也以上皆高說予按前漢翟方進在レ喪既葬二十六日除レ服起視レ事後漢桓焉爲ニ太子太傅一以ニ母憂一自乞聽以ニ大夫行一喪蹤レ年詔使者賜ニ牛酒一奪服夫謂ニ之起復一就レ喪起レ之復令レ視レ事耳高承無レ所レ據但泛ニ言漢唐一而已故予疏ニ二條一以見ニ其始一云々按に起復の事通鑑綱目に見ゆ

(四)梵唄幷魚山　能改齋漫錄一の卷梵音の條に梵音之始內典云陳思王子建游ニ于魚山一聞ニ空中有ニ梵音寥亮一乃敎ニ人效ニ之得レ傳ニ於今一西方梵云レ唄敢匿耶本梵音也云々按魚山の事毘尼母論を引て法苑珠林四十九の卷釋氏要覽上卷翻譯名義集十一の卷などにいへり大明一統志廿三の卷七丁ウ に魚山在ニ東河縣西八里一一名吾山漢武帝瓠子河詩功无已時兮吾山平註に吾山卽魚山也云々塵添壒嚢抄十五の卷二丁ウ にくはし又大原を魚山といふは異國になずらへて來迎院勝林院の二をいふ勝林院は皇慶の門徒寂源法師の開基也來迎院は慈覺の末流良忍上人の開基也良忍融通念佛を弘通し唄策を披き墨譜を點じて念佛聲明の場を開たり魚山蠆芥集に墨譜を記したれば閱て知べし梵唄の事は元亨釋書廿九の卷四丁ウ 聲明の條にくはしく本朝聲明の沿革を記せり梵唄圖說一卷あり翻譯名義集一の卷一釋氏要覽上卷六十七丁など考べし頭書佛祖統紀廿六ノ廿一丁ウ委

(五)えびすがけ幷夷紙　新千載集十八の卷 俳諧に六帖題にてよみ侍ける歌の中に前大納言爲家「我ことく奧の郡のえひすかけとにもかくにも引ちかへつゝ」與清曰こは新撰六帖二こほりの條に出たる歌にて上の句わがことはと有夫木抄雜十三郡の部はた同じ「わがごとく」と有ては聞えぬ歌也えびすがけはたすきなどにもあれ物結ふ紐にもあれやりちがへたる懸緒にて方式もなき貌よりいふ歟夷は法令もなき國なれば也又端のあまりたるをいふにや俗に紙の端の斷餘をえびす紙といへりこれも域外の夷にたとへて圍外の紙餘を夷紙といへば懸緒の餘端あるをも夷懸（エビスガケ）といふべし夷紙は本草綱目卅八の卷服器部二紙の條の釋名に藥品中有ニ閃刀紙一乃摺レ紙之際一角疊在ニ紙中一匠人不レ知漏裁者醫人取入レ藥用今方中未レ見レ用レ此何歟とある閃刀紙これ也已上かく考記して後に三條家裝束抄を見れば上袴莊年の人縮線綾と稱して白き浮織物地は小石疊（疊之誤ニ也）其中に有窠の文中年の人は堅織（グリ）物文藤丸遠居レ之裏紅の板引腰に有上指絲白き練線の絲ふとくよりて指之股立に有夷懸の絲（白練糸ふとき也）冬夏四季同物也老人も非ニ白裏一紅張裏也板引にせずとありさては余が考允當せるがごとし

(六)本主井家子郎等　大掾傳記（常陸大掾の傳記也）に忠節ノ人衆ニハ本領ヲ返シ給ハリ其上御恩賞ヲ給ハルニ依テ本主ト申ス也云々また本領ヲ持タル名代ノ人ノ奉公スルヲ家ノ子ト申ス也一家ノ端ナレドモ本領重代ノ名字懸處ナキ人ヲバ家ノ子トハ申サズ家人ト申ス也云云

(七)長曾我部香曾我部煉石印　土佐軍記に長曾我部を信濃本國の人のよし記せり按に和名抄に土佐國香美郡宗我曾加倍とあり今流布本には倍もじ脫たり古本に据て正すべし姓氏錄附錄不レ載ニ姓氏錄一姓の條宗我部あり朝野群載廿六の卷三丁右 に土左國曾我部宿禰あり按に長曾我部は長子の家流香曾我部は後の子の義を取て名づけけんに後もじを耻て香曾我部と稱せしにや後香音（コウカウ）やゝ近し好古小錄下卷十丁右 に玉印銅印木印竹根印牙印磁印火ニアヘバ皆形損ズ獨煉石印烈火ニアフトイヘドモ形存シテ用ベシ然レバ煉石印後世ノ物ナレドモ愛スベキ者也云々按に煉石の方物理小識に見ゆ今も下總邊にて石槨をほり出たるを見しに皆煉石也　頭書古文書集に讓與土左國香美郡香宗我部鄉地頭職事鄉內在村々本鄉苑田須留田造手手頭以下云々康永四年九月廿六日沙彌性海云々○先度元親歸洛之事可レ抽ニ忠功一由言上條悅喜通申遣候彌相談羽州馳走候樣可ニ申聞一猶昭光家孝可レ申也六月十七日義昭高宗我部安藝守どのへ○三好式部少輔事此方無ニ別心一候然而於ニ其面一被ニ相談一候旨先々相通候段無ニ異儀一候條珍重候猶以阿州面事別而馳走專一候猶三好山城守可レ申者也謹言六月十二日信長印香曾我部安藝守殿○此には高宗我部とも高曾我部とも通はし書たり○又云右材木なごやにおいて大船被ニ仰付一候爲ニ御用一被ニ召寄一候條急度名護屋相屆寺澤志摩守可ニ相渡一候也天正廿年十一月六日秀吉公朱印長曾我部左近大夫どのへ

(八)痰の妙方　松ヤニ蚕蠶各等分に糊丸にして毎朝十四五粒を用べし痰の妙藥也

(九)からうた　老後逃懷三首其一風流俗事共無レ損爲レ子辛苦三十年老悟本來空世界愁雲今斷見晴天其

二莫言宿報無良子堯舜生兒如有似百口飽飢依一身養成螟蛉還堪委其三醉飽惰情空欠伸交遊他處不從親愚兒生質無由敎夜鶴思鳴元迷因辛卯季夏初九松屋平輿清稿こはほうごの中にちりぼひたるを拾得て書付ぬまた自誡の詩あり未レ滿人生不惑年心如二猫目一遂レ時遷父慈君任非二良計一爲損二芳名一爲得レ嘱また久米老兄遊二於隨時園一有レ作余殊感二紙窗描得千花影之句一故稱レ之以二描得先生一廼賦二七絕一描得先生佳句成隨時園月影更明正留二眞蹟一櫻花下爲使下主人催二感情一五十翁平松屋戲作これも反古の中なるを書つく

（十）唐昇仙太子碑　石墨鐫華に武曌淫二横千古一而亦假二借柔翰一天之生二才于彼一何其不レ斬也此文未二必眞出一后手一當是北門學士語碑首昇仙太子之碑六大字飛白書作二鳥形一亦佳飛白書久不レ傳二于世一此其僅存者耳云々屋代輪池昇仙太子之碑六大飛白書を摸刻せるを余も秘藏せり

（十一）君の賞賜を辭する辭　通鑑綱目正編九之下卷六十五丁ウ　後漢光武建武十九年六月の條に帝欲二以レ輿爲一大司徒一輿固讓曰臣不二敢惜下身誠虧二損盛德一不二敢苟冒一云々また賜二輿爵關內侯一輿辭以レ無レ功云々按に輿は陰輿也陰識と共に後漢書本傳あり陰輿が辭のごとく功なくして君の恩賞をば受まじき事也

（十二）連阿法師が竹葉集　好古堂連阿法師が竹葉集七卷自詠の歌集也序二篇ありはじめの自序に此書あつめしは木にもあらず草にもあらずと聞えしことのはにより て花もなき竹の葉の名をかりし也世にのこさんためにもあらず六人のはらからうせはてゝかなしうするいもうとゝわれのみなりさるは伊勢國にありて文のたびごとにしのぶぐさのしるべあるすさびをとこひけるにげにも身は五十にあまれるうへ年月あつしさがちにて殘りの齡さへたのみがたければ秋のよのねざめ〳〵にともし火かゝげつゝみだりに書あらはせし也なからんきはゝおなじけぶりともなさまほしくこそ（全文）第二序に此竹葉集は好古堂連阿法師としごろよめりし和歌をいもうとのもとめによりて書あたへたる也歌のかず五百首ばかりにもやありけんかの法師こゝしつちのとの酉文月五日身まかりし後したしかりし人々の中に三四輩心をあはせかの菴に來つゝとひてとりちらされし歌のほぐの中より彼集にもれしをひろひ云々五千首にたらずやあらん猶ちりのこれることのはをひろひ侍るにしたがひかつかつ追加し侍るべしと也時に享保十四年臘月なかば功を終りぬ云々とあり

竹葉集卷第一春

藤澤山にて越年の春

こゝろかはす鶴か岡への松風やともに千年の春をつくらん

藤澤山の會始に春風先發苑中梅といふことをよみ侍し

さくや此花に吹よりのとけさを木々に待をるそのゝ春風

上野の花を見て

をる袖もたちやましらん守る人に忍ひの岡の花の木かくれ

名にしおふ山路おほえて花盛こゝも八重たつ雲かとそ見る

此上のあらはこそあらめ山櫻花の所はこゝと定めん

彌生の末病いさゝかおこたりける間に大井のはな盛を聞て光福寺にいたり此花を十とせばかりさきに見たりしことをおもひて

春をへておなし盛の花やおもふ有しにかはる老のやつれを

よそにても唉をいそきし花にきてけふのさかりをあたにやは見ん

竹葉集卷第二夏

東禪寺にあそびて

名殘ある袖吹おくれ涼しさにあかてもかへるやとの夕風

竹葉集卷第三秋

塔の澤にてよな〳〵鹿のなくを聞て

いかてさはつれなき妻そ聞人もねられぬ庭のさをしかの聲

藤澤山杉の宮奉納に

あかすとや神も見るらん白露の玉くしのはにやとる月かけ

淺草寺中顯松院會日くれて歸りける舟の中にて

よみて扇に書てあるじのかたへつかはしぬ

又たくひなみちの月に向ふさへあかてくれにし名殘とやせん

海晏寺の紅葉見にまかりけるにことやうなる法

師ども出て制しければ
來て見れは夜の錦の名やたゝん人ないとひそ庭の紅葉々

竹葉集卷第四多

清淨光寺會下に侍ける比雪のあした金井宗榮もとより
分行も老は心にまかせねはとふやと雪に友そ戀しきかへし
雪に今ふりはへとはん住人の深き心の松のとほそは

竹葉集卷第六雜

塔の澤といふ所にゆあみせしに近きわたりなる何がし精舍に閑居し給へる大とこをとぶらはまほしくせし折しもかしらさし出べくもあらぬ五月雨に身のあつしさゝへそひしかばかきくらす空こそたくひ五月雨にとはぬ恨のはれぬ日數は
いかはかり涼しかるらん山水に心をすます庵の明くれ
かへし　栢州
おほつかな契し人はさみたれの日數ふれともおとつれのせぬ
よそなから思はゝ淺し山水にひとり心をすますあはれを

日暮里淨光寺八景の中に後丘夜鹿といふとを

住庵のうしろの岡へ月ふけて傾く影にをしか鳴聲
前畦落雁
かりあくる外面の小田に鳴つれて今や落ほに落る雁かね
隅田秋月
わたし舟ありやなしやもわかさりし河霧晴てすめる月かけ

同卷離別

五月半都へのぼり侍けるに原包久しのぶの岡のほとりにて門出すとてわするなよ今かへりこんことのはをしのぶの岡の松にちぎりてと有しかへし
來んほとをわすれやせましことのはに人の心のまつとつけすは

同卷釋教

秋の比祐天寺千部讀經の場に詣て

野へに咲千種も文のかす〳〵にひもとくけふの折にあふらん

(十三)挾箱　安齋洗革(カハ)入丁(フクロカツギ)に負嚢者古事記に大穴牟遲神負レ俗爲ニ從者一ト云ヿ見エタリ又日本紀雄略天皇十四年甲午朔ノ紀ニ天皇命ニ有司一二ニ分子孫一一分爲ニ天草香部民一以封ニ皇后一一分賜ニ茅沼縣主一爲ニ嚢者一ト見エタリ上古ヨリ人ノ出行ニハ從者袋ヲ持セタリ其袋ニ衣服其外所用ノ物ヲ納メテ持スル也古キ畫ニ此體ヲ畫キタリ其袋ヲウハザシ袋ト云フ上ザシトハ袋ヲヌヒ作テ其袋ヲウラ表ヲカケテ絲ヲ以テ碁盤ノ目ノ如クニ刺シトヅル也是袋ノヤブレザランガタメ也今モ田舍ニテハ此袋ヲ用ル也慶長ノ比ヨリカ袋ヲ用ル事スタレテ竹ヲワリカケテ衣服ヲ插テ持セシトゾ是ヲハサミ竹ト云フ其後ハサミ竹ヲ止テ箱ニ衣服ヲ入テ持セシ也此箱ハハサミ竹ノ代ニ作リ出セシ物ナルユヱ挾箱ト名付シ也云々同赤鳥上(廿五丁ウ)に老人雜話云挾箱と云ふ物なし挾竹と云物用たる也挾箱ハ大坂の津田長門守初て作りしとぞ云々同赤鳥下(十二丁オ)に續武家閑談(木村鍋十郎高敦遠)云挾箱ハ漸ク寬永ノ末ニ江戸ニ於テ出來ス其前ハ挾竹ト云物ヲ用フ是サヘ慶長ノ比津田長門守始テ制シ出ス云々眞文云挾箱トハ丸竹ヲワリカケテワリメヘ衣服ヲ挾ミ先ヲ緒ニテ結ヒテ供ノ者ニ持セシトナリ雨露ニウタレ土ホコリナドカカリアシキユヱ後ニハサミ箱ヲ作リ出シタリハサミ竹ノカハリニシタルユヱハサミ箱ト云ハサミヲ用ザル以前ハ衣服ヲ袋ニ入テ持セシ也是ヲ上ザシ袋ト云今モ田舍ナドニハ袋ヲ用ル也上ザシトハ袋ノツヨミノタメニ少シフトキ糸ニテタテヨコ十文字ニ袋ヲ剌スゴバンノ目ノ如クサスユヱ上ザシ袋ト云永祿ノ比マデ「上ザシ袋」ヲ用フ其後「ハサミ竹」ヲ用フ其後「ハサミ箱」ヲ用ルコトナリタリ云々同秋草下卷道具部に挾箱の事古はなき物也古代は衣服を上ざし袋に入て供の者に持せし也古畫に此體見えたり上ざし袋といふは衣服を入る袋を大にも小にも好にまかせて掛へて口につがりをしてくゝりをも返してくゝる也其袋のやれぬために絲を少しよりて表裏を一ッにさす也堅横に碁盤の目の如くにさす是を上ざしといふ也袋の色上ざし尺寸にも法式なしむかしは常にありふれて珍からぬもの也上ざし袋の法式を作り陰陽をかたどり男ざし女ざしといふさし樣ありたちぬひに寸法ありといふこれ近年の妄說也田舍にては今も用ふる所あり　何の　比よ

りか上ざし袋を持する事すたれて慶長の比かとよ挾竹とて竹を割かけて衣服をはさみ持せしもいつしかやみて衣服を入る箱を作出してかの挾竹にかへたれば挾箱と名付しと聞ゆされば挾箱は近世に出來たる物也然るに挾箱の緒のむすびやうに秘傳ありなど云者あり如レ此妄說をはくと近年殊外はやり是を信仰する人又おほし可歎事歟（葛箱もおなじ比出來し物なるべし）云々卯花園漫錄三の卷に挾箱といふは古き名也うたゝ寢といふ書に書より用意しつるはさみ箱のふたなどの程なく手にさはるもいとうれしくてと見えたり云々甲陽軍鑑十九の卷（廿六丁ウ）に天正元年四月信玄公御他界ありその秋勝賴公廿八歲にて遠州御はたらきの時草履取廿內外の小者共十五人挾竹をもち惣手の跡にさがりたるを敵方の馬乘三騎出草履取を一人きる所に殘て十四人挾竹にて馬乘を一人打おとし搦取て日暮に及び金谷へ來り此生捕をさし上申候云々（十六の卷十八丁ウに鞭挾竹とあるは鞭を挾む竹にて同名異用の物也）

（十四）天下太平國土安穩　日蓮上人の伊豆韮山江川氏が家の棟札に天下太平國土安穩とありその外後のものに所見おほしこは華嚴經を出所とす

（十五）八百屋お七　卯花園漫錄四の卷に江戶谷中感應寺の祖師堂に鷲峯在靈鷲山法華最第一と云額八百屋娘お七の十一歲の手跡にて延寶四年辰春二月と書有レ之世に傳ふ湯島に掛し松竹梅といふは此額の事也天和二戌年三月御仕置に成生年十六歲也寺は小石川指谷町にて天台宗南緣山田淨寺と云法名秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石塔にあり云々與清曩に一實錄を見しに色淺黑く美女ならぬよし記したりき今はその書名を忘れたり

（十六）梅酒の方青梅漬の苦味を去方　青梅二升一夜灰にまぶし翌日水にてよく洗ひ白砂糖七斤古酒五升壺に入て封じ廿日を經て熟す多年を經れども其味損することなし又青梅の苦味を去方は鹽にて廿日許押漬にしその水をしぼり捨て又別に鹽にて押漬にすべし

（十七）砂糖漬の方　密柑九年母佛手柑など砂糖漬にする方は先砂糖を水にかきまぜ煎じて其中へ菓をいれふくるゝまで烹てとり出し板の上に並べ置て上よりやう〳〵に押をし菓の酢水を絞り出して薄く平みたる時風にてかわかし紙にてよく〳〵しめりをとりて壺中に一並置ては砂糖をちらし又一重置ては砂糖をちらして漬る也寒中製はことにたもちよし暑中にはとり出して壺をあらひ砂糖を改むべし

（十八）醴の製方　醴は糯米一升挽割て蒸すべし水一升五合に花麴一升五合いれ一夜浸しよく揉合せて目あらき笥にて絞る也其水に糯の白蒸を研て交合せて後に濕紙にて其器をおほひおく四日目に熟すそれを一遍烹かへしておけばいつまでもたもつなり

（十九）刀の血を洗ふ方　血刀を洗には唾を付て拭べし何にても刃物の血は唾を附て拭へば落る也

（廿）食傷治方　蕎麥に傷られたるには再蕎麥を用れば毒物ことゞく嘔吐して平愈す少分にても再び用べし酒にあたれるに迎酒を用るにおなじ

（廿一）水死人を救方杜鵑の黑燒　水死人廿四時の間は杜鵑の霜（カロヤキ）を口中へ吹込又は後門へも吹入るべし忽に蘇活す又杜鵑の黑燒は疱瘡に用てよし藍を直し味噌を直すに功あり

（廿二）油拔方并物の汚穢を洗方　衣服に油付たるは石膏を燒くだき粉にしてかけ一夜の間おしをして置べし又新き石灰滑石の粉などもよし墨の付たるは膠をこく練てぬりかはきたる時膠をヘガセばそれに附て墨除く也又白朮の煎汁半夏の煎汁にて洗もよし泥は生姜をすりてその汁をつけ水に洗べし酒醋醬油などは蓮根をすりて付れば除く澁の付たるは燈心の煎汁鰹節の煎汁よし垢付たる物は芋の煎汁にて洗へば鮮明也五月雨の比かびたるには枇杷の核を細末にして洗ふ

（廿三）火傷の治方　やけどには灰のかたまりたるを水にて解て付べし妙也

（廿四）遊女高尾　卯花園漫錄八の卷に新吉原京町壹丁目三浦屋四郎左衞門抱の遊女高尾といへるは無雙の名妓也此名七代相續せしも賤き人にはめづらしき事也

初代妙心高尾　わが生たる子を乳母に抱かせ道中せしゆゑ子持高尾ともいふ

二代仙臺高尾　仙臺侯うけ出す

三代西條高尾　御蒔師西條吉兵衞請出す

四代水谷高尾　水谷庄左衞門といふものうけ出す

五代淺野高尾　淺野因幡守うけ出す

六代だぞめ高尾　だぞめや九郎兵衞請出す紺屋也享

保十年の比

七代榊原高尾　榊原侯請出す延享寛保の比

按に大田南畝が高尾考ありまた森萬礎が高尾年譜あり仙臺侯考三侯の舟中にて手殺し給へりといふは無稽のねなしごと也

（廿五）神風和記　櫻雲記中卷に輿國元年北京曆應二年云々四月廿七日下總國駒城沒落於レ是一品宮尊良親王子號二宇津峯宮一又稱二奥州宮一遠州ヨリ奥州ニ下向ス慈編僧正神風和記三卷ヲ作テ獻ズ云々

（廿六）あねごがねや　曾禰好忠家集冬十首の中に「神まつる冬は半に成にけりあねこかねやに榊をりしき」夫木抄十六の卷冬部一に冬雜にも出て末の句「をりしく」と有新撰六帖第一帖に冬夜知家「冬來てはあねこかねやのたかすかきいくよすき間の風そさむけき」夫木抄冬一冬夜にも出て「たけすがき」「風のさむけき」に作れり按にあねごは巫祝をいふ催馬樂酒殿歌にあまの原ふりさけ見ればやへ雲の雲の中なる雲の中との中臣のあまの小菅を劃はらひ祈りし事は今日の日のためあなごや吾皇の神ろぎのよさことある「あなご」は「あねご」の通音也「よさこ」も良兒にて善を與左といふは天吉葛の類也「きね」が聞をかき拂ひ榊を折敷ていもねせるよしの歌也「あねご」の「あ」ハ吾にて吾君吾兒などのごとく親みの詞也「ねこ」は「ねぎ」の通音なるべし

（廿七）袖のこほうしごなどいふ稻名　後頼散木集三の卷の秋部に稻のたふれふしたるを見て「おほつかなたか袖のこに引かさねほうしこの稻かふしそめけん」按に末句かへしそめけんと有は誤也顯昭注本にかぶしに作れるをよしとす顯注云「そでのこ」「ほうしご」ともに稻名也「かぶす」とは稻の實の成て傾をいふ也云々かぶしは古事記卷上八千矛神の御歌に夜麻登能比登母登須々岐宇那加夫斯云々山本の一本薄神代紀下卷十二丁表に顛傾此云二歌矛志一云々天智紀三年に垂穎而熟云々徒然草百五段にかぶしがたちなどいとよしと見えて云々四季物語十一月の段にゐぼしうちかたぶきたるかぶしかたちをかしき者成べし云々なども見ゆ丹後守爲忠家初度百首に山田苗代を爲忠「うち山のすそのゝ小田の苗代にいくらかまきし袖の子の種」夫木抄三秋秋田部に御集花山院御製「秋の田を吹くる風のかうはしみこや袖のこるにほひなるらん」按に異本にかうばしさ袖のこのとあり印本は誤れり又家集如覺法師「さよ衣たちのゝひたに耳なれて袖のこなたにすかるなく也」按にさよ衣たち野はひだといはん料の序及袖の子といはん緣語におけりひだは衣のひだに引板をよせ袖のこなたは袖の此方に袖の子と水田を含めてよせたる也和名抄十二の卷衣服具部に襞積周禮注云祭服朝服襞積無レ數襞積二音辟積訓二比多米一見二文選一云々此外所見おほし引板は鳴子類にて萬葉より後よめる歌おほし和名抄一の卷田圃類部に漢語鈔云水田古奈太云々すがるは後の歌に鹿の事によめり其證は別に舉ぐ此外にも袖の子をよめる歌おほかるべけれど思ひよれるを引出つ散木集十の卷雜下に田上に侍りけるころこもりがいねといふ物をもちひにしてとり出て侍りけるをまたの日みそうづにして侍るを見てよめる「ほうしこのいねと見しまにもちひれはみそうつまてもなりにけるかな」一本にもちひればをもちぬればに作れるは誤也詞書のこもりは木守にや俊頼が山庄を預り守るものと見ゆそれが稻を餅にしてとり出又の日はみそうづにせしよし也みそうづは增水也節用集美術部撮壤集物類部などに曾水ミソウヅと訓じその外所見おほかれど別にいふべし曾水を御僧都によせ法師子のいねに否といふ詞をよせて法師子は否と見し間に用れば御僧都までもなりのぼれるよしによめりほうしごの稻は今俗に「ホウズイチ」と呼て芒なき種類也曲洧舊聞に洛下一作中稻田亦多土人以二稻之無レ芒者一爲二和尙稻一亦猶二浙中人呼二師婆粳一其實一也とあるは同日の談也曲洧舊聞一卷新安の朱辨字は少章が撰にて知不足齋叢書中に收たり顯昭が散木集注「山里はいてゐこのめるたもとここに風そよめきて袖しほる也」二の句「いでいこのへる」又「いなはにこへるたもとにも」など作れる本あり　といふ歌の條にたもとごは稻名也但常には「ちもとご」といふをたもとごともいふにやと云々今世にもヲギノ稻ナベワリ稻ヲカボ稻ミノ稻あらき稻八郎兵衛大黑稻こぼれ稻いせぼうず稻黑ぼうず稻烏稻福德稻日の出稻などさま〴〵名目あれば老圃にとひて知べし

（廿八）西山公御自筆十ヶ條壁書

一苦は樂の種樂は苦の種と知べし

一主人と親とは無理なるものとおもへ下人はたらぬものと知べし

一子ほど親を思ひ子なきものは身にくらべ近き手本と知べし

一おきてにおぢよ火におぢよ

一恩を忘るゝ事なかれ

一欲と色と酒とは敵と知べし

一朝寝すべからず咄の長座すべからざる事

一小なる事は分別せよ大なる事驚べからざる事

一九分にならず十分はこぼるゝ物と知べし

一分別は堪忍に有と知べし

右十ヶ條元祿十一子二月十四日 敬の字 御懸物に被ㇾ遊御廣間に掛おかれ候事 ○按に右御壁書は藤堂高虎の臣下渡邊勘兵衛が覺書の中に似たる詞あり此勘兵衛が覺書を御取捨し給へるなるべし

(廿九)なばえ 夫木抄春三柳歌に家集源仲正「とひのゐるゐくひの柳なはえしてめくみにけりな春をわすれす」又建長八年百首歌合法印實伊「春雨はいやふりにけり河邊なるゐくひの柳なはえするまて」按に「なばえ」を原本に「なばへ」と書たるは誤也「なばえ」と書べし類聚名義抄僧下雜部に鳥部類題集雜五に政爲「くるゝ江の雨にみの毛もしほれ蘆のかけゆく鷺の色そわかるる」光行海道記にそともの小川には川そひ柳に風たちて鷺のみの毛打なびき云々藻鹽草十の鷺部に鷺の蓑毛うはげともよめり云々また十七の蓑部に鷺のみの毛云々此外にも所見おほかるべし古くは鷄にも鷺にもよめれど鷺は水鳥にて雨中の緣あれば後世は鷺にのみ讀て鷄によめるはきこえず陸奥話記に官軍所ㇾ射之矢立ニ柵而樓頭一猶如ニ蓑毛一云々太平記十の長崎高重最後合戰の段に高重ガ鎧ニ立處ノ矢二十三筋蓑毛ノ如ク折カケテ葛西谷へ參リケレバ云々なども見えて蓑の垂毛をさして蓑毛といひ鳥の毛のそれに似たるをもさよべる也

(卅一)さくりつぐらはし鷹 大藏卿行宗集に田家秋雨「山里のさくりのうへに尻かけてをしねこく間に雨そ降ぬる」異本に「さくり」を「つぐら」に作れり「さくり」は「さくる」又「さくをきる」などいひて鍬もて畠を條々に決り分る事也祝詞に履さくみ万葉に伊去佐久々美また岩根佐久美而などあるも凸凹の道をふみ行をいひ馬ざくり駒ざくりなどもおなじ詞也文選十五馬沂督が誄に城中鑿穴而處とも見ゆ噭噎を佐久利とよめるも逆氣して決り揚るがごとき心地すれば也「さくりもよゝと泣」などはたおなじ定家卿鷹三百首中に「としやくりになげちかへしとせしほとにおそくも鷹をあはせつるかな」此「とちやくり」は鳥逆揚なり鳥の空さまに逆に飛揚るをいふ「シャ」と「サ」は延約の通音にて例おほし鳥逆揚の約語にやこは鳥逆揚に鷹を投合せたがへじと心する中に間際遲くなれるよし也又「はい鷹の飛なほりゆくもとより羽とざくりにこそわれといりぬれ」「もとより羽」は向鳥に合違ひて羽を直して追行をいふ小鷹の詞にて母鷹にはいはぬよし鷹書どもに見ゆ「はいたか」ははし鷹の通音にて後撰雜二にはし鷹のとかへる山云々同物名にはし鷹のをきゐにせんとかまへたる云々などより後の歌によめるは擧に遑なし和名抄に兼名苑云鷂一名鷻鷄也野王按に似ㇾ鷹而小者也漢語抄云波之太賀又兄鷄

古能里(コノリ)と見えて鷂(ハシタカ)は小鷹也類聚名義抄(九の巻)鳥部には鵰鷲ハイタカと音便の詞を出せり此歌の意は鳥の逆揚(サクリ)に入たる雲路の跡を鷂(ハイタカ)が飛直りて「もとより羽」を使て追行ゝし也又「犬ざくり」といふ詞も見ゆ都て「さくり」と云詞は逆揚(サカアガリ)の義にて土をさくりて逆にあげ道を蹈わけて塵土を左右へ逆揚(サクリ)ゆくなど皆同義也「つぐら」は土座(ツクラ)にて尻かくる具なるべし今も武藏相模の方言に曲物器(マゲモノ、ウツハ)を「ツグラ」といへり是も土座(ツクラ)の器の形に似たれば然いふにや散木集(九の巻)恨ノ躬雑歌百首中に「山かつのつくらにあたる我なれや心せはさをなけくと思へは」此歌の心に据ればいと狭小なる座具と見ゆ

(卅二)扇合の跋　源景雄が扇合の跋にあふぎ合はあがれる世の事にして刺竹の大宮の内の御戯なりかし貫之があふくあらしのと詠るはふりにたるためしにて天祿の御門もいときようせさせたまひ長寛承安の比は盛りに侍りしとか傳へ承りぬその後はまたかゝる事も聞え侍らぬは世のくだちたるゆゑにこそと思ひ給うれ(◎脱文)ことし秋の中ばになぬ雨降りいでゝ淋しき夜とて友どちあつまりて何くれとかたらふ中に此事をいひ出る人侍りていさやおなじ心ならんをすゝめて此事ものせよかしとしきりに申侍れどおのれしものきざみにまかりありてかゝる事はいかでかといへばよしそはふりにたるとにてものゝさだめもたど〳〵しければたゞ戯れにし侍らんにいかで人のそしりあらんなどしひてそゝのかしぬればされば とてしたしき人々すゝめ侍りて葉月十餘りよかといふにさだめてけり所せきすまひにて人おほくつどひ侍るにたよりあしければ石原といふ所にすめる要禪大徳の家はくつろぎたる住所にて前にはすみだ川流れて氣色をかしければこゝにてぞする家は西はれ也もやの北の方につくゑを立て繧繝の(◎脱文)瓶子二ッを左り右に置折びつに廣めを鳥の羽がさねにもりて中にするゑたり南向にづし一よろひを置て柳筥にいろ〳〵の薄樣を入たり又しろかねの壺にくさ〴〵の焚物をいれて淺香の折敷にするゑて心葉は色々の糸もて花を作りてさしたり又西向に柳葉(柳筥數納葉數)を置て其前を扇の判者の座とす少しへだてゝおなじさまにして歌の判者の座とせり其脇に文臺に硯紙を置て執筆の座となす南おもてのみすは巻て屏風一よろひを西ひんがしに立

めぐらして數々の扇をかけたり其扇のさまやんごとなき御方々のはいふもさらにて人々のとり〳〵にみやびをつくせるうるはしさはめもあや也其中にもしをにがさねにくれなゐの糸もてみなむすびにしてぬきたれたるもありあるは杉の板もて作れる地に所々うがちて不破の關屋の心ばへしたるもありあるは千草の花をすりあるは賀茂の社の几帳のかたびらもて作りあるは物語をおもひ出ふるき歌によせて心々に作り出たるなりいうにもやさしうもいと興ある事になん侍りひとつ〳〵まねびてんにことのはたるまじくていひけんもかゝる事になん侍るべしさて扇も歌もとり〳〵に合せてまさりおとりをしるしをはりぬれば夜もはるかにふけにけりかゝるをりは物のねなどもとり出て遊び侍らんをとほき所より來たる人も多く侍れば道のほどもたど〳〵しなどいひておのおのあかれぬかゝるはかなき戯事をしるし侍らんもをこに侍れどそはとまれかくまれおなじ心ならん友の見侍らばかたみにしのぶたよりともならんかしと聊かきつけ侍るにこそ」みなもとのかげを(上已)隅田川扇合とて一巻にして廿三番の扇合也山岡明阿彌陀佛の跋蚊田蒼生子の跋源万歳(マサタカ)麿の跋などもあれど景雄が跋を委しとす

一番

歌持左萩とすゝきの穂に出たるかたを墨畫にかけり　泰衡

置扇ひらける秋の千里まて隔ぬ月のかけを招きし

扇勝右こき色の紙に松のもとに鵆のおりゐるかた　見子

明日の夜は今一しほの光そとかけまつ空の月もさやけき

左の扇秋野のけしき萩と薄の穂に出たるかたをみづから書出給ひしは千里の外までもへだてぬ故人の心を友とし待つけし最中の月をまねかれけんその心深く籠りてなつかしくこそ　右の扇濃き紫のゆかりの色なつかしきに千年こもれる松の陰に立なれけん友鶴の所得たるさまいとめでたくこそ清少納言が記にも枕上のかたにほゝの木に紫の紙はりたる扇ひろごりながら有とも又は手馴ぬる主はしらねど紫の扇の風などもよみたれゝばむかしの香もいかばかりかと思ひ出らるゝものからあかずやさしくこそ左の歌千里までへだてぬ月などありて扇の心しらひもあひにあひたるべし右歌あすの

かげまてくもらぬほど見えてとり〳〵よきはじめのつかひ成べし

氏休　左屋　明阿　素履　野枝子（ヤエ）　千蔭　信子　有之　春龍　三仲　久樹　總幸　拙翁　忠順　蔭政　直子（ナホ）　宣榮　雅義　繁子　貞質　知邑　元著　諸鳥　象子（キサ）　秀子　嘉合　榮子　知春尼　鶴尼　嘉郷　陳衡　千賀子　伊之　重喜　良昌　昌始　蒼生子（タミ）　景員　其阿（ゴア）　宗朝　遊女花扇　景雄已上廿三番

（卅三）新田みだりに不レ可レ開　藪澤を開き山野を墾（ハリ）て新田を造ると天下の大利也されど其地理を察し其利害を解せざれば却て天地の怒にふれ亂の階を生ずべし河崎平右衛門が武藏野を墾り井澤彌三兵衛が見沼を開たるなどは實に天下の大利なれど野を開く者は鬼神のにくみをうけず河崎氏今に相續して家門をおとすとなし江湖を埋み山を墮は幽冥の氣に逆ふ井澤氏子孫おとろへぬ相摸野下野那須野下總小金が原の類畠にもかへすべく樹木をも生ずべし近比水戸人大久保今助といへるもの近江湖を新田にせんとを請許されてかしこにまかりぬといへり此はいにしへより運漕漁獵の利おほく靈神の守り給ふ名湖なるを新田にせば天地の氣にもとり國家のため害なしとはいひがたし周語下（國語三ノ七丁オ）に靈王二十二年穀洛鬪將レ毀二王宮一王欲レ壅レ之太子晉諫曰不可晉聞古之長レ民者不レ墮レ山不レ崇レ藪不レ防レ川不レ竇レ澤夫山土之聚也藪物之歸也川氣之導也澤水之鍾也云々王卒壅レ之と見ゆ君子おもふべし愼べし

（卅四）芍藥花幷石川丈山覆醬集　石川丈山覆醬集上卷に瓶中有二三種白芍藥一詩あり白花皆絕品中有二玉盤名一鮮潔裁二霜練一玲瓏彫二水晶一高堆雪岩競重疊夏雲生何以寫二眞色一形容畫不レ成また縷金囊所レ出二藝府一栽レ子之芍藥而最奇品也名曰二砂金花一の詩あり近來移蒔縷金囊姿貌雖レ癯不レ變レ粧無レ與二春花一爭レ艶色ヒ綠叢深處發二芬芳一云々芍藥は和名抄にも新抄本草を引て和名衣比須久須里又沼美久須里などいへり延喜式にも載たれど騷人風士の歌詠にはをさ〳〵聞ゆることなし石川丈山の比はもてはやせりと見ゆ翰林五鳳集にも詩ありその外五山僧の詩文集を考べし覆醬集上下二卷石川丈山が詩集也野間三竹講書堂昌三などが序あり寛文十一辛亥三月刊行す下卷に杏仙摘二余倭歌之末字一次レ韻余又次二其韻一二首あり蓬門

蒿室遠二城市一曾慣二伯陽一了二足止一槎柠若流二洛川一來被二梅柳知一也可レ耻また一臥東山耽二山水一紙被葛巻老行屐猿鶴從來雖レ愛レ吾聲聞過レ情君子耻云々此時の丈山の歌は「わたらしなせみの小川はあさくともおいの波よるかけもはつかし」

（卅五）てまり櫻　石川丈山覆醬集下卷に拍毬櫻（テマリサクラ）一種二有（其花點綴如レ鞠俗曰二拍毬櫻一）造化生尤物棠梨自可羞枝疎結子大樹老着花稠宿雨濡銀椀山風滅雪毬明年如有待不死繼茲遊また櫻花束素倚庭衢妖艶無雙只一株春色驚人能點綴高楢多少雪摸糊

（卅六）百万塔　東大寺要錄一の卷本願章に孝謙天皇諱阿陪二高野姫天皇一云々天平寶字八年緣二兵革事一及レ發二弘願一令レ造二三重小塔一百萬基一高各四寸五分徑三寸五分露盤之下各置二根本慈心相輪六度等陀羅尼一是功畢分二置十大寺一賜二供レ事官人已下仕丁已上百五十七人爵一各有レ差云々同四の卷諸院章に東西北塔院神護景雲元年丁未造二東西小塔堂一實忍和尚所レ建也天平寶字八年甲辰秋九月十一日孝謙天皇造二一百萬小塔一分二配十大寺一各籠二無垢淨光〇〇陀羅尼一（口傳云裏書美亂誤レ之問懺悔料）云々按に孝謙天皇百萬塔を造り給へると此要錄ばかりくはしく記せるはなし已に一の卷摺本の條にもいひたれば考合すべしまた陀羅尼の奥に甲の字を墨書せしは宸筆にて甲は某甲の省語也祖庭事苑二の卷（九丁右）雪竇拈古の條に某甲某如二甘在一木上一指二其實一也然猶レ未レ足二以定一其名一甲次第之言亦猶二某甲某乙一也云々拾言記中卷（廿一丁表）に某甲之事補注八（八九云）某甲詔二前人一之言曰レ某也慈恩引二尚書一云元孫某孔氏云某名也臣諱レ君故曰レ某也又禮記中凡不レ知レ名不レ言レ名皆曰レ某也甲即甲乙等甲乙即次第之義也甲二萬物一之甲未レ開レ乙萬物屈而未レ出也已上補注三十略示云云十大寺は拾芥抄に見ゆ百萬の小塔今は法隆寺夢殿に存れる而已にて他にはたえてなし

（卅七）いしみ笊籬（イカキ）ざる　俊賴散木集（一の卷春部）にむつきの七日中宮亮仲實がもとへなゝくさ菜つかはすとてよめる「をかみ川むつきにはゆるゐこのうれをつみしなへてもそこのみためそ」返し仲實朝臣「心さし深きみたにゝつみためていしみゆすりてあらふねせりそ」此二首の歌夫木抄春一若菜部にも載て始の歌のむつきをうきえに作れり一本にうきつに作れるは誤也又ゐこのうれをゐくうれと書たり散木集（八の卷戀部下に

「君をこそあさはの野らにおはきつむ賤のいしみのしみ深く思へ」此歌も夫木抄若菜部に載て四の句「しづのをふさの」に作り一本には「しづのしづしみ」に作れるはた寫誤也顯昭袖中抄（十六の卷）ゐぐの條に俊頼朝臣は若菜を仲實朝臣がもとへつかはすとてよめる「をかみ川うきつにはゆるゐこのうれをつみしなへてもそこのみためそ」かへし「心さし深きみたにゝつみためていしみゆすりてあらふねせりか」今云此歌は「ゐぐ」を「ゐご」とよめりかへしは芹とよめり「ゐぐ」と同物とおもへるか又「いしみ」は寶鑰（ハウヤク）には春（ホン）とかけり斷春（グンホン）と云詞也但佐留と可讀別字云々「かたみ」筌「したみ」籠也「あじか」簡（小）體の物也藻鹽草（八の卷）芹部に「ゐぐ」芹の異名也又云如荽と書て「ゐご」とよめり同事也花蘇芳にさく草の水邊にある也又云人のくふ草也といへり又俊頼仲實ともへ「をかみ川うきつにはゆる」云々返し「心さし深きみたにゝつみためていしみゆすりてあらふねせりか」又いしみは寶鑰には春と書斷春と云詞也ざるとよむべし別の字と云々かたみ筌したみ籠あじか簡體の物也と云々此兩首の樣も「ゐご」は芹同歟云々右の袖中抄藻鹽草に引たるにあらふねせりぞの「ぞ」もじを「か」もじに作れり又「ゐぐ」芹同物とせし說はいかゞあらん類聚名義抄（二の卷）田部に春音本小篋イシミ舂古奋古云々また（八の卷）艸部に苘イシミ又ヶ云々以呂波字類抄（一の卷）伊部雜物門に舂イシミ云々とありて「いしみ」は小篋也京畿內の人「イカキ」といひ坂東の人「ザル」といふはた此類也「ザル」は笊（サウリ）籬の音を訛れるなるべし下學集（下卷）器財門に笊籬イカキ「サウリ」味噌漉也云々節用集（伊部）器財門に笊籬イカキ云々又（左部）器財門に笊籬サウリ云々運歩色葉集伊部に笊籬イカキ云々同左部に笊籬サウリ云云などイカキともサウリともあれば也これも古代はムギスクヒ（ムギナハノニコ）といひて和名抄（十六の卷）竹器類部に辨色立成云笊籬麥索養籬也以レ竹編爲之唐韻笊音側敎反去聲之輕籬音離揚氏漢語抄云無岐須久比（ムギレスクヒ）云々類聚名義集（八の卷）竹部に笊籬ムギスクヒ云々など見ゆ

松屋筆記卷之七十五

東都　平小山田與清稿

（一）天海僧正　東叡山日記に東叡山開祖慈眼大師諱天海姓足利氏將軍義澄公末子母會津葦名盛高女也永正七年降誕大永二年薙髮乃至慶長十二未年移二比叡山南光坊一同十八癸丑年從二東照宮一賜二日光山一元和二丙辰七月轉二大僧正一寛永二乙丑年奉二台命一開二東叡山一創二寛永寺一同十五戊寅年依二台命一請二仙洞第二宮幸敎親王一爲二繼嗣一爲二日光山之門主一同二十癸未十月二日壽百三十四逝二東叡之本院一奉二台命一葬二日光山一時有二台命一建二影堂於日光東叡比叡三山一慶安元戊子年謚二慈眼大師一職務十九云々本朝高僧傳（五十六の卷）武州東叡山沙門天海傳に釋天海三浦氏奥州會津人其母無レ嗣禱二月天子一慶安元年夏四月賜二謚慈眼大師一云々按に兩說齟齬して取レ迷の端也されど東叡山日記に足利氏と記せしは系圖に見えざれば無稽に似たり尙可レ考

（二）田畑山林町歩取箇の事　東叡山日記田畑并山林町分取箇之次第の條に

一何と申所	上々上中下下々之内田畑何町何段何畝何十何歩			
	此高何百何拾何石何斗何升何合何勺			
	田方ならば　此取米何拾何石何斗　但高ニ何斗歟			
	又者反ニ何程取　畑方ならば　此取永何貫何百			
	文　但石ニ何十文取と申候歟反ニ何十文取とか			
一何と申所	山林等は何十町何百間四方と申候　此運上永何貫			
	何百文と申候			
	一畑山などは何町何反分と繩帳に記申候　此取永何貫何百文と取ヲ付申候反ニ何程取と記申候			
	一壹トハ　壹坪之事	但六尺四方		
	一壹畝トハ　三十坪之事	但壹トヲ三十合スル也		
	一壹反トハ　三百坪之事	但壹畝ヲ十合ル也		
	一壹町トハ　三千坪之事	但壹反ヲ十合ル也		

右之算法者田法三と申候間何千坪にても三をかけ候へば知申候　但山林之町間は道法の間にて六拾間を壹町と申候間竿は一丈貳尺分也　反畝之付候所は田畑之通り町歩勘定仕候　按に地方算法の事は地方一樣記田園類說などに見ゆ

（三）蹴鞠文書　古文書集に蹴鞠の事の古文書八通を載たり

其一　鞠道之事雖レ爲二勿論之議一於二田舍一茂松下弟子取事一圖有間舖儀候若背二此儀一者曲事可レ成候間可レ被レ申候仍狀如レ件

嘉慶二年二月六日　　御判

飛鳥井中將殿

其二　袖御判　鞠道雖レ爲二三家後白河院以來御代々御師範之儀別而規摸候然者從二先祖一代々門弟之事候間道次申候雖レ爲二一家之者一門弟取事不レ可レ有レ之儀候又加茂人松下露拂之時其外飛鳥井家縮出候時曲足蹴候事一切不レ可レ有レ之儀候於二田舍一者楚忽之輩沓葛袴免之由曲事候今度於二下向一者急度可二申付一候仍狀如レ件

寶德四年二月廿五日

右從二慈昭院殿一榮雅被レ下

其三　鞠道代々門弟候間申候賀茂人松下爲二露拂役人一弟子取事一切不レ可レ有レ之候飛鳥井家二勅書當家先祖代々證文數通有レ之上者縱松下少々書物雖レ有レ之可レ爲二反古一者也仍狀如レ件

十一月廿二日　　義澄御判

飛鳥井宰相殿

其四　舊領にても關所にても前注申可レ進レ之候門弟之條於二心中一諸事不レ可レ有二疎略一候也謹言

十一月四日　　義澄御判

飛鳥井宰相殿

其五　鞠道門弟候間申候雅綱弟子勢州中納言於二關東一弟子取付而沓葛袴被レ剝隣國被レ拂候由候又雅親西國下向之時松下弟子一人有レ之由二候而沓袴被レ剝成敗之由一候御代々綸旨院宣奉書井室町殿文書等被レ見レ之候今度尾州二松下弟子有レ之付而法度候由被レ理候條其者成敗申付候者也

八月五日　　信長

飛鳥井大納言殿

其六　賀茂松下鞠之弟子取事無レ例之由同於二家人前一曲足蹴候事無レ之旨勅書室町殿文書等一覽候絹上絹袴近レ之葛袴等無著事同以二無文紫革無文燻革一閇レ袴事一切無レ之由松下爲二弟子一沓袴令二著用一者於レ有レ之如二有來一被レ剝二取之一法度堅可レ被二申付一候也

五月十六日朱印

飛鳥井大納言殿

御朱印御案文

其七

賀茂松下鞠之弟子取事無レ例之由同於二家人前一曲足蹴事無レ之旨幷色葛袴以二無文有文燻革無文紫革一閇レ袴事同沓紅上紫上金砂上一切不レ著之旨勅書內書信長大閤朱印一覽候右之趣近年依二相背一爲レ可レ遂二糺明一駿府へ召下候處二無二證文一故懇望候間赦免候向後取二弟子一蹴二曲足一於レ背二法度一者急度可二成敗一者也

慶長十三年七月

其八　就鞠道之儀勅書幷代々證判已明鏡也然而賀茂松下作二恣之働一旨依レ之遂二糺明一之處以下無二證文一之故上懇望之間令二赦免一訖所詮如二先規一速可レ有二其沙汰一候狀如レ件

慶長十三年七月廿一日

飛鳥井宰相殿

按に蹴鞠の事は已に略考にいへり此文書どもはた考證の用あれば抄出せり

(四)犬牙相接　田令(義解本三の卷五丁右)に地入二他境一及二犬牙相接一者云々義解に犬牙者如二犬之牙一不二相當一而相銜入也云々集解に師古注二漢書一曰犬牙言下地形如二犬之牙一不二相當一而相銜入上也假定二郡壃一必如二紵矢一也若以二川山一爲レ限不二必正直一犬牙相含入故云レ爾耳又云案犬牙相接者因二國郡一改隸亦云耳地入二他境一者百姓不レ入耳若百姓入二他界一者地亦依レ舊受(曰二牙求一之穴一云地入二他境一犬牙相接並因二國郡一改隸耳但置及守爲稱二犬牙一生レ文耳跡云犬牙謂以レ川爲レ境而地形犬牙合別改レ境置向者也古記云犬牙謂伊呂比訓漢書文帝紀云師古云犬牙言下地形如二犬之牙一交相入上也云々漢書(四の卷文帝紀に地犬牙相制云々注に師古曰犬牙言下地形如二犬之牙一交相入上也云々博物志(一の卷一丁右)に諸國境界犬牙相入云々又(四丁右)地下有二四柱一四柱廣十万里地有二三千六百軸一犬牙相舉云々晉書(六十四の卷列傳第四十四)武十三王傳論に文昭武穆方二鴈于魯衞應韓一磐石犬牙連二衡于吳楚齊代一云々南史(五十八の卷列傳第四十八)裴之禮傳に大同初都下旱蝗四鄰門外桐栢凋盡唯遼墓犬牙不レ入當時異レ之云々隋書(七十三の卷循吏傳第卅八)辛公義傳に時山東霖雨自二陳汝一至二於滄海一皆苦二水災一境內犬牙獨無レ所レ損云々此等の外所見おほし犬牙の上下相交れるがごとく地堺の入組たるをいふ也

(五)地動の說　地動の說近來西洋學に起れるよし遠西觀象圖說(上卷六丁左　中卷三丁右)などにいひたれどこはやく漢土緯書の說にて尙書考靈曜(古微書一の卷收レ之)に春則星辰西

遊夏則星辰北遊秋則星辰東遊冬則星辰南遊地有二四遊冬至地上一行北一而西三万里夏至地下一行南一而東亦三万里春秋二分其中矣地恆動不レ止而人不レ知譬如下人在レ大舟中一閉レ牖而坐舟行而人不レ覺也云々鄭注云古微書一の卷所レ引也天宥行二四表之中一冬南夏北春西秋東云々自二冬至一後漸々而下云々晉張華博物志一の卷四丁右地の條に考靈耀曰地有二四遊一冬至地上レ北而西三万里夏至地下レ南而東三万里春秋二分其中矣地常動不レ止譬如二人在レ舟而坐舟行而人不下覺云々爾雅註疏本五の卷釋天疏に鄭註考靈耀云地蓋厚三万里春分之時云々是地及二星辰一四遊之義也星辰亦隨レ地升降云々など見えたりこを平田篤胤が玉の御柱鶴峰戊申(シゲノブ)が天の眞柱に神代の海(クラ)月如漂蕩(タヾヨヘル)といふ説に牽合傅會せるは愚蒙を欺んとて奇怪を示せし也然て地動天動いづれにもあれその理を究たりとも政敎の用とすべくもあらず好レ奇好レ理は事に害ありまた西洋の學日新を尙て舊說を換るを道とすこれ信而好古の聖敎に違ひ吾孫可王の神勅に戻れりしか新なるを尙ばんには吾皇王舊とて放逐し吾師父舊とて改易すべくやかゝる戎蠻禽獸の所爲貪欲不良の意志なれば神胤の君子聖浴の良民必學べからざるの道也彼が所長は火攻外療(テツハウクワイレウコヨーフクリサイク)曆學器工の四耳此も已に流傳して皇國其用を缺事なけれど蘭藥には國益の物あれば來舶を許し給へるはた御英斷也去文政□年紅夷醫シーイボルトといふ者長崎より江戸へまうでくる道のほど備前備中の間の海中なる牛クヒ島に泊れるをり相具せる長崎の內通辭菊谷米藏そこにて枯骨一枚見出て示せしにシーイボルト曰日本國は地動以前の世界にてはカムシカットより蝦夷松前アメリカ洲まで續たる地なれば當時大獸おほく栖象も栖たればその象骨也地動の時人畜共に沈沒して空土となりぬ扶桑木とて海邊より出るもそのをりの埋木也又山上より貝殼など出るも地動以前の物也所所にて龍骨とて掘出るはた象骨也地動といふは漢土にては夏禹洪水を治し時にあたれりといへりとなん米藏今は幡崎鼎と稱す備前小豆嶋にても象の顆骨をほり出たるが重三十斤あり今伊勢屋某所藏せりと米藏がものがたれるよし富岡利和いへりおもふに此說シーイボルト深意ありて巧出けんも知べからずいかにとなれば西洋の諸戎三綱五常の敎もなく貪慾强盛にして奇巧を施し至理を究めたゝ諸國を奪取ん事を

平常の心とせるは耶蘇の賊徒幻術布施の法術をもて愚夫愚婦を欺きなつけ他國をおもひかけたるにても知べし朝廷法令を布て永くこれを嚴禁し給へるは實に永圖の聖斷不窮の皇基也されば皇國にて事足らんにはかしこの學風このましからず彼學にたけ彼俗におしうつり民改レ舊好レ新君父を易んとおもひなりたらんにはいかゞはせん莊周曰六合之外聖人存而不レ論丘長春曰世間之事尙不レ能レ究況天外之事乎これらは實に異端家の正論なり

(六)國司上下行程日數　倭名類聚抄五の卷　國郡部に大和國國府在二高市郡一行程一日云々河內國國府在二志紀郡一行程一日云々和泉國國府在二和泉郡一行程上二日下一日云々伊賀國國府在二阿拜郡一行程上二日下一日云々伊勢國國府在二鈴鹿郡一行程上四日下二日云々志摩國國府在二英虞郡一行程上六日下三日云々尾張國國府在二中島郡一行程上七日下四日云々參河國國府在二寶飫郡一行程上十一日下六日云々遠江國國府在二豐田郡一行程上十五日下八日云々駿河國國府在二安部郡一行程上十八日下九日云々伊豆國國府在二田方郡一行程上二十三日下十一日云々甲斐國國府在二八代郡一行程上二十五日下十三日云々相摸國國府在二大住郡一行程上二十五日下十三日云々武藏國國府在二多磨郡一行程上二十九日下十五日云々安房國國府在二平群郡一行程上四十四日下十七日云々上總國國府在二市原郡一行程上三十日下十五日云々下總國國府在二葛飾郡一行程上三十日下十五日云々常陸國國府在二茨城郡一行程上三十日下三十日云々此外諸國行程ことゞく記したれど畧す此上幾日といふは國府より京へ上る驛馬の驛數也下幾日といふは京より國府へ下る驛馬の驛數なり驛は厩牧令に每二三十里一置二一驛一若地勢阻險及無二水草一處隨レ便安置不レ限二里數一唐六典五の卷亦同と見え京都より山崎驛へ卅六町道四里餘勢多驛へ四里半許兵部式諸國驛傳馬の條を考て知べし　にて六町道に直せば三十里の定に叶へり驛馬は急傳馬は緩にて驛馬速者一日に十驛以上緩者八驛還日緩者六驛以下四驛以上也傳馬には驛數の定なしさて國司下國の行程は急に上京の行程は緩なれば上京の行程の日數は下國よりも陪せる也驛傳馬の給數は驛鈴傳符の剋數によれるよし儀式內裏儀式公式令義解集解などに其式見えたれば考て知べし

(七)むな手むな車　西行山家集上卷十五丁左　に五月雨「水

たゝふ入江のまこも刈かねてむな手に過る五月雨の頃」藻鹽草（八の卷廿三丁左藤部）につかねもあへず刈てほすをかし云々枕草子（春曙抄本三の卷十三丁左）にげなきものゝ段に月のいとあかきにやかたなき車にあひたる云々異本に月のあかきにむなし車などいふものにのりありく云々「水たゝふ入江の云々同書（十六の卷十四丁右手部）にむなてむなしき手也水たゝふ入江の云々呉竹集（五の卷廿二丁右む部）にむなてとは空く歸る心也「水たゝふ入江の云々與清按に呉竹集に空く歸心といへるは誤也藻鹽草に空手といへる說よろしその證は神代紀下（廿一丁右）に俱不得利空手（ムナシヂニシテカヘル）來歸云々景行紀（九丁右）廿八年に徒行之（タムナヂニテイデマシヌ）云々天武上（三丁左）前紀に徒手入東（タムナヂニテタレ）云々などありて空手をムナシデ徒行徒手を共に太牟奈天（タムナデ）と訓たれば也太牟奈天の假名天武紀の左訓に見えたりそは手空手（タナデ）の義なるべし又むな車も同格の語也拾遺集（七の卷）の物名にむなくるま「鷹飼の又もこなくにつなき犬の離れていかむなくる待ほど」賴政家集（下卷五丁右）に返ニ迎車一戀「のせてやるわか心さへとゝろきてねたくもかへすむな車かな」空穗物語藤原の君（廿五丁左）にむなぐるまにいぐしをつみておんやうしさき馬にて出たり云々又（廿二丁左）むな車にいをしほ積てもて來たりあづかりどもよみ取て棚にするてうる云々蜻蛉日記（解環本中の四卷丁一左）にむな車引つゞけてあやしき木樵おろしていとをくらきを

中よりくるも心ち引かへたるやうにおぼえていとをかし云々枕草子（春曙抄本三の卷十三丁左）にげなきものゝ段に月のいとあかきにやかたなき車にあひたる云々異本に月のあかきにむなし車などいふものにのりありく云云（久保之取蛇尾上卷七丁左所レ引）又（十五丁左）月夜にむなくるまのありきたる云々舊本今昔物語十二の卷關寺駈牛化ニ迦葉佛一語に此聖人雜役ノ空車（ムナグルマ）ヲ持牛ノ无キヲ見テ正則此牛ヲ聖人ニ與ヘツ聖人此牛ヲ得テ喜テ車ニ懸テ寺ノ修造ノ料ノ材木ヲ令レ引ム云々字治拾遺物語十三の卷（廿一丁右）上緒二丁右主得レ金事の條にそのあたりにしりたる下人をむな車をかりにやりてつみて出んとするに云々古今著聞集（三の卷三丁右）政道忠臣の部に左府の御車をむな車にて法成寺へやらせられけり云々十訓抄（二の卷六丁左）にある便宜の所なる車どもを引出しけるを見ればみな人ものらぬ車也けりかねて見所をとりて人を煩はさじのためにむな車を五輛立おかれたる也けり云々言塵集（六の卷二十七の卷四十二丁右）車部にむな車人ののらぬ車也云々伊勢貞丈日蔭蔓（六十二丁右）にムナ車ト云モムナシキ車也俗語ニイハヾムダ車也ムナハ空ノ字俗語ニテハムダト訓ベシ

云々入江昌憙が久保之取蛇尾（上卷七丁右）にむな車といふ事先達の注に人の乘らぬ車なりといへり空車の義と聞ゆ賴政集に返ニ迎車一戀「のせてやる我心さへとゝろきてねたくもかへすむな車かな」云々力車に七車とよめるちから車も此類なるべし云々按に昌憙が說いはれたりといふべしさて空穗物語蜻蛉日記枕草子舊本今昔物語宇治拾遺に見えたるむな車は物を積料の車にて屋形なきをいへり拾遺集の物名によめるも時代古ければおなじかるべし賴政の歌古今著聞集十訓抄言塵集藻鹽草の所見はいづれも空き車のよし也又むなしだのみ（六帖三ノむなし烟戀一新撰六帖一ノ廿五丁左）むなし契（新撰六帖五空（ムナグニ）神代紀下五丁左同十七丁左仲哀紀四丁右）などおなじ語勢也

（八）わきをかく　丹後守爲忠家百首憑レ媒戀に爲忠「さりともとわきをかくこそうれしけれこしらへえたるけしきしるしも」新撰六帖五（廿丁左）に玉だすき信實「ねたけなる賤があさての玉たすき誰にむかひてわきをかくらん」此歌夫木抄雜十七賤人の部にも收たり舊本今昔物語（廿一の卷）大學衆試ニ相撲人成村一話に相撲ヲ指シテ其ノ中ニ勝レテ制シツル男ノシヤ尻ヲ血出許ニ蹴給ヘト成村云ヘバ彼ノ然カ被レ云ル相撲脇ヲ掻テ己ガ蹴テンニハ生カジ定テ辛クテコソ生カメ必ズ蹴侍ラントゾ云ケル云々字治拾遺二の卷（廿一丁右）になにぬしそのをとこが尻鼻血あゆばかりかならずけたまへといへばいはるゝ相撲わきをかきておのれが蹴てんにはいかにもいかじものをからきにてこそいかめといひけり云々同十一の卷（十七丁右）に年四十あまりばかりなる男のかつら鬢なるが無文の袴に紺のあらひざらしの青き山吹のきぬの衫よくさらされたるきたるが猪のさやつかの尻鞘したる太刀はきて猿の皮のたびに沓きりはきなして脇をかきおよびを指てとむきかうむき物いふ男たてり云々續古事談五の卷（六丁右）に善隆けいきかはりて脇を掻て申ける云々雅言集覽（四の卷七十二丁左）和部にわきをかく今うでをさするといふ類也云々與清曰ほこりかに物いふ時脇のあたりを掻事と見ゆしたり顏する時のさまなるべし

（九）みどろし　俊賴散木集（八の卷戀下）に海路戀「戀草をさし荷に積る舟なれはかちもみとろし心せよ波」此歌夫木抄（雜十五廿三丁左）船部に載て初句を「こひしさを」に作り「みどろし」を「みどろく」に作れるは共に誤也散木

集（九の巻雜上）に又探ニ得船字一「こきもとれかちもみとろしすはえしてすゝけにけらし與津嶋舟」此も夫木抄（雜五海部）に載て初句「こぎかへれ」末句「沖津嶋ざき」に作れり木工權頭爲忠家後度百首に葦間雪爲忠「わけのほるをふねみとろしあし原にこほるゝ雪やおほくつむらん」與清曰「みどろし」は今俗言に「マダルシ」と云詞也上方人は「まどろし」といへり又トロシといふも略語也訛て「ノロシ」といふはたおなじ「ト」と「タ」と通ひ「タ」と「ナ」と通ひ「ナ」と「ノ」と通へばかくも轉訛すべき事也舊本今昔物語四の卷（第廿一語）に今ハ昔天竺ニ國王御ケリ其國王ノ心子ブケクテ性本ヨリトロメキテゾ有ケル只寢ヲノミ眠ルヲ役トス爲リ然レバ世ノ人ニモ不レ在ズ カクトロメキテ寢ヲミ眠給フハ此必ズ御病在スナリ云々此ノ王ハ蛇ノ子ニテカク心トロメキテ寢ヲモ眠給フ也ケリト心得テ云々と見えたる「トロメク」も「マドロム」などの「トロム」に義同じく眠を催して目の蕩（トロ）けてゆるびしまりなき貌也泥（ドロ）澪、蕩、鎔（共ニトラカス節用集止部言辭門 鍛トラカス新諸書の訓也 婆トラカス韻集登平同書 冶トラカス已上共トラカス以呂波字類抄登部辭字門 薯蕷冷汁トロヽヒヤシ運歩色葉集登部）などいづれもゆるびしまりなく蕩（トロ）けたるにいひ又曇水（トロミ川内運歩色葉集登部一本にはトロミに作れり）も水流の速ならざる貌曇（トロリ天氣又曇水河内運歩色葉集登部）も天氣のはかゞ〳〵しく照らぬにいへり「ドロバウ」は水鳥記（上卷廿三丁左）歌に「ほの〳〵とあかしのかはのとろ坊にしんしゆのまるゝ錢をしそ思ふ」とも詠て放蕩者（ノロクモノ）のとりしまりなきよし坊は法師の尊稱に坊主といふより轉（ウツ）りて頭髮剃たるものにいひ及ぼし圓頭の小兒をさへ親て坊といへばさはいふ也けり「ドウラク」も放蕩（トロク）の訛語也「ドウロク神」はまた放蕩神（ドウラクジン）の義にや源平盛衰記十七の卷（五丁右）祇王祇女佛前の條にヨダレトロ〳〵ト垂シテ見入リ給ヘリとあるトロ〳〵は今俗に「タラ〳〵」といふにおなじく垂落るさま也催馬樂律歌陰名（クボノ）にくぼの名をばなにとかいふくぼの名をばなにとかいふつらたりけふくなうたもろひのなかのひづきめけふくなうたもろ此くぼハ女陰也日本靈異記（下の卷十八緣）に閇シナダリクボ云々同書高野本には閇口（クボ）保云々字鏡集（戸部）に屎朱音開也久保（ボ）云々類聚名義抄（七の卷門部）に開「クボ」「ツビ」云々新猿樂記に野干坂伊賀專之男祭叩ニ鮑苦（アハビクボ）本一舞云々和名抄（十九の卷貝部）に紫貝兼名苑云紫貝一名大貝和名宇萬乃久

保加比見（ボカヒ）ニ本草一云々塵添壒嚢抄二の卷（四十一丁右）陰事條に「クボ」ト云ハ女根ノ異名ナルベシ云々など久保（クボ）といふ詞所見おほく女陰にいへるはた少からず「つらたり」は陰門の下の處也小水淫汁の連垂（ツレタル）る所なればさいふ也けふくは陰額にて毛の生てふくらかなるよしの名なるべしなうたもろは未レ詳これはた陰中の小名と見ゆひのなかのひづきめは今いふ女陰のサヲを和名抄に吉舌ヒナサキなどあれば吉舌の一名をさもいひけんかしこは本朝文粹活板本十二（の卷）鐵槌傳に男根の名所を擧たる類と知べしさてシナダリクボのタヨリもトロ〳〵と同義也これも水のたぎり落るにはいはずノロ〳〵シク連落（ツレオツ）るよしにていひもてゆけば「トロヽ」「トロム」もおなじ詞也垂水（タルヽ）また棰（タル）などもも落（オツ）るゆゑの名也と知べし

（十）菊の花散　類聚國史七十五の卷曲宴部に桓武天皇延曆十六年十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰己乃己呂乃（コノゴロノ）志具禮（シグレ）乃阿米爾菊乃波奈（アメニキクノハナ）知利曾之（チリソシ）奴倍岐阿多羅蘇乃香乎（スベキアタラソノカヲ）賜ニ五位已上衣被一云々古今集秋下に人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌在原なり平の朝臣「うゑしうゑは秋なき時やさかさらん花こそちらめ根さへかれめや」榮雅抄に栽しうゑたらば秋なき時やさかずあらん花はちるとも根は枯まじきと云秋のあらんかぎりは咲べしといふより秋のなき時は咲まじきといふはやすらかにておもしろき也菊はちらぬものなれど此歌に散とよめればよむべきにこそ詩にも百菊散レ砌といへり一禪御說にうゝるとうゝるならば秋なき年の事はしらず根だにかれずば秋は必さくべきとよめり云々堯惠が古今抄（五の卷）にうゑしのしはやすめ字也うゑ〳〵ばとかさねていへる詞也重ていへる事は賞翫の心也此花仙境の物なれば四季を不レ分常住あるべきこそ本意なるに秋暮て花こそうつろふとも根さへかれては名物のかひもあらじと也是をうゑしと過去のしに云事有歟是も仙境の心を移して過去のしに用ると也當家には只重詞にして仙家の心をふくめる也尤是を可レ用云々延五記（五の卷）の說亦同切臨抄（五の卷）に榮雅堯惠の說を擧たり又云師云花こそちらめとは年中の一切の花をさす也その中に菊の上こもれり云々契冲餘材抄（五の卷）に花こそちらめといふにつけて菊はしぼみてちらぬ物なるを散とよめる大かたの花のちるになずらへてしぼむをちるとは

いふと釋するはあまりの事にや菊はおほやうしぼみつくものなれど又ちりもする常の事也離騷に朝飲ニ木蘭之墜露一夕餐ニ秋菊之落英一とあれば論ずべからず云々賀茂翁續萬葉論五の卷にちるといふ事菊にはあらぬを大かたの花のちるになぞらへていふといへども皆さだかなる注なしおほやうしぼみつく物なれども又ちるも有也菊は古は歌などにては音語なればせるなるべし日本白菊をめづれども御歌に色ふかくにほひたるけふとあれば紫にほふふぢばかまとおなじ色の紫菊なるべし師說に挿蘭花にて有べきを蘭と菊と誤りし成べしといへり眞淵今按に九月九日既に菊の事有りこれも又九月十四日なれば菊とこそ侍らんか又きくとは音なれば此時はよむまじふぢばかまのたぐひなりと見んぞゆかしく侍るに後々はきくといふ音語になれて即「きく」とよめり既寛平歌合によみて古今に出たり本草綱目十四の卷蘭草の釋名に孩兒菊といふ名も予がおもふにおなじより所也古は物名の今のごとくそれ〴〵に分れざる事多し通しておもふべし日本後紀卷三延暦十六年冬十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈智利曾

利太流祁布上和レ之曰袁理比度能己乃己呂乃麻丹眞布智波賀麻宇倍伊呂布賀久爾保比多理介利群臣俱稱萬歳一賜ニ五位已上衣被一按に菊は万葉に見えずしてこゝに出然れども詔詞に菊花豐樂といふ事見え又九日ならねども四位已上挿ニ菊花一とありて菊を稱せる事此時專ありと見えたりされども御歌にはふぢばかまと有は菊和名なし此時猶蘭菊を類として同じ名としていふ音語になれて即「きく」とよめり既寛平歌合によみて古今に出たり本草綱目十四の卷蘭草の釋名に孩兒菊といふ名も予がおもふにおなじより所也古は物名の今のごとくそれ〴〵に分れざる事多し通しておもふべし日本後紀卷三延暦十六年冬十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈智利曾

之奴倍岐阿多羅蘇乃香乎賜ニ五位已上衣被一菊利姫と神代卷にあれば文字は舍人親王の時有し也云々古今打聞五の卷秋下にうゑしうるゝば云々一度植と植てばもし秋なき年もあらば咲すあらめ秋は年ごとに來れば咲ぬとなしさて其花は咲出てこそちらめ根さへかれねば千歳もたえじかくよくして植たれば根も枯るとあらじと也云々貫之本にうゑしうるゝばと有に隨へり云々頭書に菊はちらぬものなるを大かたの花になずらへて云といへるはよし桓武の御歌にちりぞしぬべきとよませ給ひなでしこなどもちらぬ物なれど万葉にちらまくをしもとよみ後撰に色といへばこきも薄きもたのまれずやまとなでしこちるよなきやはともよめり云々和歌童蒙抄七の卷草部に菊廣志菊有ニ白菊一「ウヘシウヘハ秋ナキ時ヤサカサラン花コソチラメ根サヘカレメヤ」古今第五ニアリ菊ノ花散トヨメリ業平歌也「シツクモテヨハヒノフテフ花ナレハ千代ノ秋ニソカケハシケラン」後撰第七ニアリ友則歌也菊トヨマデ花トバカリヨメリ云々八雲御抄三の上卷卅八丁左草部菊の條に業平は花こそちらめといへり花こそ枯めといへる心也云云藻鹽草八の草部菊の條に花こそちらめといふはちるにはあらずしぼむとをちらめとよめる也さて花こそちるとも根かれじとよめる也經レ霜うつろひしぼめる物也云々宋人胡仔が漁隱叢話卅四の卷半山老人二に西清詩話云歐公嘉祐中見ニ王荊公詩黃昏風雨暝ニ園林一殘菊飄零滿地金ト笑曰百花盡落獨菊枝上枯耳因戲曰秋英不レ比ニ春花落一爲報ニ詩人一子細看荊公聞レ之曰是豈不レ知ニ楚詞夕餐ニ秋菊之落英一歐陽九不學之過也高齋詩話云荊公此詩子瞻跋云秋英云々不審也云々吳曾が能改齋漫錄三の卷辨誤に秋菊落英蔡絛西清詩話記荊公有ニ黃菊飄零滿地金之句一而文忠公非レ之荊公以文忠不レ讀ニ楚辭一之過也以レ予觀レ之夕餐ニ秋菊之落英一非ニ零落之落一落者始也故築レ室始成謂ニ之落成一爾雅曰俶落權輿始也至レ若ニ錢昭度詩云ニ蕎麥花殘小雪飛一乃爲ニ詩病一云々吳可有ニ藏海詩話一荊公詩云黃昏云々秋菊之落英案此事西清詩話作ニ歐陽修語一云々出依記云々魏慶之が詩人玉屑十七の卷廿丁右に秋菊落英歐陽嘉祐中過也西清詩話荊公此詩子瞻跋云秋英云々不審也高齋詩話余案楚詞夕餐秋菊之落英云々梅墅續評云々按に胡仔吳曾吳可有魏慶之共に宋人なるに或は西清詩話を引て王安石蘇子安石歐陽修が事とし或は高齋詩話を引て王安石歐陽修

瞻が事とす事文類聚後集廿九の卷菊花部史正志が後序に菊之開也既黃白云々吳門老圃叙云々廣群芳譜四十八の卷花譜廿七菊花一に西溪叢語楚辭云夕餐秋菊之云々云青松凝素體秋菊落芳英云々などゝも見ゆ警世通言三の卷王安石三難二蘇學士一段に東坡見二四壁書棚關閉有レ鎖文几上只有二筆硯一云々必然回レ嗔作レ喜云々席話抄下卷歐人乍レ居知二名所一事の條にも此小說を譯記せり といへるは演義の小說にて據用べくもなし○與清曰菊花落不落の說定かならねど楚辭に落英とあるは墜露に對したる語なれば零落の義疑なし王介甫が詩に飄零滿地金と作り史正志が菊譜後序に花有二落者一有二不レ落者一とも云たれば彼處にも落英菊ある事定かにて桓武の御歌のちりぞしぬべき在原中將の歌の花こそあらめなど倭漢對照の說とすべし今野菊蝦夷菊の類現に花の零をも思合せて疑を起すべからず

（十一）飯一もり湯一提　舊本今昔物語十二の卷卅五語に知タル人ノ許ニ飯一盛湯一提ヲ乞ニ遣リッ暫許有テ外居ニ飯一盛指入ノ坏具ノ提ニ湯ナド入レテ持來ヌ云々今の世には飯を一杯一椀などいへり頭書拾遺一卷卅一丁ウ同十五ノ十六丁ウ　舊本今昔十二ノ卅五語同廿六ノ十七語

（十二）挑灯に釣鐘　大野武左衛門が國恩錄一の卷第五答に然秀賴小兒故以二織田黃門岐阜秀信上杉黃門景勝備前黃門秀家安藝黃門毛利輝元四人一對レ公見テモマタ〳〵挑燈ニ釣鐘非レ可二相對一者ト云々頭書挑灯ノ事貞丈雜記八ノ廿一丁ウ又二十七丁オ

（十三）兵學の祖　同一の卷第八答に總敎ニ兵法一爲二武士師一者當二御治世一始以二小幡氏一景憲爲二權輿一其後不レ知ニ幾千人一云々按に小幡景憲名は勘兵衛甲州流の軍學を誘ひ甲陽軍鑑を高坂彈正が名に依託して作りたる者也其子孫今御旗本衆にて有

（十四）伊藤仁齋　同卷第八答に尤孔門三千徒內向二征伐一人聖人敎二兵法一有二克戰證說一孟子及古學先生伊藤源佐維楨號二仁齋一ナド云眞儒ハ此處ヲ識濟シテ居ルニ依リ於ニ戰國一人君殺伐ノ氣ヲ不レ發ガ道也ト謂テ口ヲ割テモ以レ不レ說二其說一爲二眞儒一云々

（十五）甲陽軍鑑　同卷第八答に記二甲陽軍鑑一春日總次郎說乎高坂彈正ト云者ハ學問ノ力ハナケレ共性質溫毅而武勇ハ信玄ニ許サレタル者也云々これには春日總次郎甲陽軍鑑を作れりと云安齋隨筆には小幡勘兵衛が說とせり頭書甲陽軍鑑ノ說ハ武隱叢話

（十六）さげすむ并さみすと云詞　國恩錄二の卷第一答に還

而公ノ御下墾ニ可レ遇必矣云々甲陽軍鑑九の上卷廿一丁右に父の御さげすみにあづかるとも無念なれば駿河より加勢の儀は中々思ひもよらぬ事にて候云々同十の上卷五十丁右におんたけの城へ取つむる是は山道なれども原隼人佐父の代よりか樣なる山道人數おさるべきさげすみなものにて云々同十の下卷十丁右に武田の家の諸人大小上下共に信玄公御さげすみ少もちがはず候と感奉云々又廿四丁右北條家の松田大導寺を始信玄公の氏政をさげすみ給ふと笑止々々存ずる也云々又廿七丁左扨信玄公廿三歲の御時山本勘介廿一年先に如レ此の儀をつもり候其時分は信州諏訪郡漸々御手に入かいらざるかの時分さげすみ申候云々按に「サゲスム」といふ詞古くはきこえずもと物を推量する事にいひて轉りては他を推量り陋むるよしにいへり探（サグ）の義にや「サゲ」と「サグ」は通音にて探（サグル）を「サグ」とのみいふは天探女（アマサグメ）の類語也「スミ」と「サミ」はた通音にて「サミ」は狹小の意也類聚名義法中卷衣部に褊「セバシ」「サシ」「サミス」云々字鏡集八の卷衣部に狹陝陋同「サシ」「サミス」「セバシ」云々倭玉篇上卷衣部に褊「サミス」「セバシ」云々太平記五の卷大塔宮熊野落の條に却テ武家ヲバサミシケリ云々同十三の卷龍馬進奏の條に政道ノ正シカラザルヲサミシテ云々また朝家ヲサミシ申事アラバ云々同十六の卷正成下二向兵庫一の條に合戰ノ方ニ於テハ誰カサミシ申候ベキ云々同卅二の卷山名父子背二尊氏一條に韓信ガ兵書ヲサミシテ云々應仁記一の卷若君誕生の條に今出川殿ヲサミシ被レ申底見エテ云々太平記音義上卷廿三丁左に褊サミス（ディガシロニス）蔑ル義云々などに見えて「サミス」は「セバ」の切「サ」「ミス」の切「ム」なれば「セバ」を約て「サ」といひ「ム」を延て「ミス」といふ則「セバム」と云詞也されば「サゲスム」は探てその褊小なるを知よしの語なるとうつなし褊字をサミスと訓よしは爾雅釋言に帡褊急也疏に廣雅云帡謹也褊狹陋也云々孟子梁惠王上に齊國雖二褊小一吾何愛二一牛一云々史記禮書に治淺褊狹云々また擅作二典制一褊陋之說一云々漢書汲黯傳に褊心不レ能レ無二少望一注に師古曰褊隘也望怨也云々說文に褊狹也云々などあるにて知べし

（十七）さゝ栗　爲忠家初度百首に林中櫻加賀守顯廣（俊成卿の元の名也）「さゝくりやくぬきましりのをはやしにあないふせけの花のありかや」山家集下卷寂然返歌に「山

風に蜂のさゝくりはら〳〵と庭に落しく大原の里」此歌夫木抄（雜十一栗部）にも出して四の句庭におちゝるとも有夫木抄雜十一栗部に家長朝臣「風におつる庭のさくり拾ひおきてとひくる人の家つとにせん」同雜十三村部に家集こもしの村祐擧「花なみの栗林もいかに成ぬらんこもしのむらに見ゆるさゝくり」和名抄（十七の卷菓類部）に杭子崔禹錫食經云杭子（上音元）一名齧栗（和名佐久利シブ）栗相似而細小者也云々本草和名（十七の卷菓部）に栗皮名レ扶杭子齧栗相似而細小已上二名出二兼名苑一云々類聚名義抄（佛下の本卷木部）に杭音元サゝグリ云々又杭子サゝグリ云々又栩音別サゝグリ云々字鏡集（五の卷植物上木部）に杭サゝグリ云々又栩柞同サゝグリ云々以呂波字類抄（八の卷左部植物門）に杭子ササグリ似レ栗而小云々運歩色葉集（佐部）に細栗サゝグリ云々言塵集（四の卷七丁左）にさゝ栗とは杭子とかけり云々藻鹽草（九の卷栗部廿八）にさゝ栗笹にはならで柴にこそなるといへり云々本草啓蒙（廿五の卷五果類部）栗の條にシバグリアリ一名サゝグリ和名抄ヌカグリモミヂグリ木高サ五六尺に過ズシテ叢生ス房彙モ小ナリ其中ニ一顆或ハ二三顆アリ形小ナレドモ味優レリ是茅栗ナリ一名櫪（通雅）圓椈栗（同上）鎭江府志）に云々大倭本草（十の卷廿丁右）に栭栗サゝトハ小ナルヲ云小栗ナリ又シバグリト云爾雅註江東呼二小栗一爲二栭栗一崔禹錫食經ニハ杭子ト云ヘリ春ノ初山ヲヤケバ栗木モ燒ル其春苗ヲ生ジ其秋實ノル地ニヨリテ山野ニ偏ク生ズ貧民ハ其實ヲ多クトリテ粮トス筑紫ニ多シ庭訓往來ニ宰府ノ栗ト云是也蘇恭ガ茅栗細如二橡子一ト云シモシバグリナルベシ云々庶物類纂拔萃（二の中卷果部）に茅栗一名栭（爾雅）一名栭同一名茅栗（夢溪筆談）一名糠栗（重修鎭江府志）江南有二小栗一謂二之茅栗一（茅音艸茅之茅）以レ予觀レ之此正所レ謂茅也則莊子所レ謂狙公賦レ茅者（茅音矛）此文相近之誤也夢溪筆談云々本草綱目（廿九の卷五果部）栗の集解に頌曰桂陽有二莘栗一叢生實大如二杏仁一皮子形色與レ栗無レ異但小耳又有二奥栗一皆與レ栗同子圓而細惟江南湖有レ之或云卽莘也莘音榛詩云樹之莘栗是矣恭曰板栗錐栗二樹皆大茅栗似二板栗一而細如二橡子一其樹雖レ小葉亦不レ殊也但春生夏花秋實冬枯爲レ異耳云々時珍曰稍小者爲二山栗一山栗之圓而末尖者爲二錐栗一圓小如二橡子一者爲二莘栗一小如二指頂一者爲二茅栗一卽爾雅所レ謂栭栗也一名栭栗可二炒食一之云々食物本草（八の卷果部）一栗の條に事類合璧云稍小者爲二山栗一山栗之圓而末尖者爲二錐栗一圓小如二橡子一者爲二莘栗一小如二指頂一者爲二茅栗一云々

通雅（四十三の卷植物木部）に栭栭小栗樹也一曰レ機爾雅栭栭郭注如二櫪樕一而庳小子如二細栗一今江東呼爲二栭栗一則今之茅栗也上林侯栗柯栗皆其類也古人稱標似レ栗棟實圓尖蓋非二一種一俗所レ云圓椈栗卽栭也沈存中以莊子狙公賦茅爲二茅栗一韻書機茅栗也趙魏間栗小者曰レ機云云爾雅（註疏本九の卷釋木第十四）に栭栭註樹似二櫪樕一而庳小如二細栗一可レ食今江東亦呼爲二栭栗一栭音列栭疏云葉如レ櫸也木理堅觳而赤可レ爲二車轅一郭云樹似二櫪樕一而庳小子如二細栗一可レ食今江東亦呼爲二栭栗一禮記內則云芝栭蔆根是也云々邵晉涵が爾雅正義（十五の卷釋木第十四）に孔疏引二賀氏說一以レ栭爲二軟棗一案今軟棗不レ聞レ名レ栭賀氏以レ意度レ之耳栭卽大雅之栭後世所レ謂栭栗矣詩疏引二陸機疏一云葉如レ櫸也木理堅觳而赤可レ爲二車轅一廣韻云楚呼爲二茅栗一或作二茅栗一傳寫之訛也圖經本草云茅栗細如二橡子一其樹雖レ小葉亦不レ殊但春生夏華秋實冬枯爲レ異耳註樹似二至栭栗一正義今栭栗有二二三實一作二一球一者是其子細也詩釋文引二舍人一云江淮之間呼二小栗一爲二栭栗一郭註與二舍人一同云々與清按にさゝぐりは小栗にて「さゝ」は「さゞれ石」「さゞ波」などの「さゝ」におなじく細小の義也後にしば栗といふは叢生して柴（シバノニダ）に實（ミノル）がゆるなれば柯栗の漢名よく當れりといふべし古く杭杭子（ゲングンシ）齧栗（エンリツ）の字面をサゝグリとよめるは崔禹錫食經兼名苑などに細小栗をさいふよし本草倭名倭名抄に引證したれば論なけれど崔禹兼名の二書泯て傳らず他書にては栭栭茅栗圓椈栗などの字サゝグリにあたれりされど茅栗冬枯の文あれば疑なきにしもあらずかにかくに古代より用來る杭子齧栗に從べくそれ快からずおもふ輩は小栗細栗の字を用て有べし類聚名義抄字鏡集に糊（ベツ）の字を書たるは栭の誤にて栭音列とありけんを寫しひがめしにや

（十八）盧橘　歌の題に盧橘とあるは「ハナタチバナ」と訓べし類聚名義抄（佛下本卷木部）に橘一名金衣柚橘タチバナ云々盧橘ハナタチバナ云々橘皮タチバナノカハ一云キカハ云々以呂波字類抄（一の卷以部殖物門）に盧橘（ハナタチバナ花橘）云々童蒙抄（七の卷木部夏）に花橘「タチバナハミサヘハナサヘソノハサヘエタニ霜オケトマストキハノキ」万葉第六ニアリハナタチバナモロコシニアリガタキニヤ吳錄曰建安庭有レ橘冬覆二其樹一春夏色變二青黑一味絕美ト所ヲサシテイヘリ花橘ヲ盧橘トハ似タレバ云也ト云

傳タリ相如傳盧橘夏熟注曰蜀中有ニ給客橙一似レ橘而非若レ柚而芬香久夏華實相繼或如ニ彈丸一或如レ拳通歳食レ之卽盧橘也ト云ルタシカニ見エタルニ御覽三百十一橘部曰李巫七類曰梁王書麗盧橘是生金衣素裏斑斑理内家サレバ又花橘ニアラズトイハンコトイカゞトオボユ橘ニハアラデ似タランモノヲ御覽橘部ニマサニイルベカラヌコトナリコレヲ見テ四條大納言朗詠集ニハ盧橘子底トイヘル詩ヲイレタルニヤ云々万葉仙覺抄十三の卷廿二丁右に裏書云私云類聚名義抄云須レ作レ橙丈盲反はなたちばなからたちばなあべたちばな云云詞林採要八の卷亦同和漢朗詠私注本二の卷三丁右花橘覺明注に花橘盧橘也而宋人周良史爲ニ枇杷一不覺也云々また盧橘子徭山雨重栟櫚葉戰水風凉西湖晚歸望ニ孤山寺一又云湖寺秋興詩白盧橘花橘也云々また枝繁ニ金鈴一春雨後花薫ニ紫麝一凱風程花橘詩後中書王其子丸而黃似ニ金鈴一其花芳故曰レ薫レ麝也云々類聚名義抄佛下本卷木部に橙丈盲反「ハナタチバナ」「カラタチバナ」「アヘタチバナ」云云字鏡集五の卷植物上木部に橙「カラタチ」「ハナタチバナ」「タチバナ」「アヘタチバナ」按に類聚名義抄字鏡集に橙を「ハナタチバナ」ともアベタチバナ」ともよみたるに倭名抄に「ハナタチバナ」の名を漏せるは「アヘタチバナ」一名花橘なれば成べし盧橘の字を花橘に用たるは綺語抄下卷植物部童蒙抄朗詠私注類聚名義抄字鏡集以呂波字類抄など也夫木抄夏一橘部には橘盧橘を混出し盧橘の題にたゞ「たちばな」とよめる歌をも載たりさてから書に盧橘と見えしは呂覽十四の卷本味篇に果之美者云云箕山之東青島之所有ニ甘櫨一焉江浦之橘雲夢之抽云々櫨盧相通じ又橘柚とならべ擧たるにても盧橘なると推量べし史記百十七司馬相如傳上林賦に盧橘夏熟注に郭璞曰今蜀中有ニ給客橙一似レ橘而非若レ柚而芬香久夏華實相繼或如ニ彈丸一或如レ拳通歳食レ之卽盧橘也索隱曰應劭云伊尹書曰果之美者箕山之東青島之所有ニ盧橘一夏熟晉灼曰此雖レ賦ニ上林一博引ニ異方珍奇一不レ係ニ於一一也案廣州記云盧橘皮厚大如レ柑酢多九月結レ實正赤明年二月更青黑夏熟吳錄云建安有レ橘冬月樹上覆裹明年夏變ニ青黑一其味甚甘美盧卽黑色是也云々漢書五十七上司馬相如傳上文選六臣注本八の卷などにも此賦を載たれど注は略せり藝文類聚八十の卷菓部橘條に吳錄曰朱光爲ニ建安太守一有レ橘多月樹上覆ニ雲之一至ニ明年春夏一色變ニ青黑一味尤酸正裂ニ人牙一絶美盧橘夏熟盖近レ是乎云々初學記廿八の卷橘部にも引て文異動あり初學記廿八の卷橘部に李尤七歎曰梁王青麗盧橘是生白華綠

葉扶踈冬榮云々などあれど本朝にいふ花橘必かしこの盧橘とも定がたしさて花橘をよめるは應神天皇の御製日本紀應神紀十三年の條をはじめとして万葉以下の歌集に見えたる擧盡すべからず因に云べし橘は筑後の橘之小門タヂバナノヲド古事記上神代紀上大和高市郡橘寺天武紀上万葉十六モト欽明紀二年古事記欽明の段本和の地名なるべし皇子の御名の橘喜神名式上民部式上和名抄國郡部筑紫朝倉橘廣庭宮齊明紀七年上總長柄郡橘神社神名式上及弟橘姫古事記景行の段景行紀廿八年熱田大神緣起下總海上郡橘川和名抄國郡部などはやくより地名に然る名聞えたるは橘の生立るによれりと見ゆ山橘なども古き名にて一種の實を結ぶ常葉木の稱にや名義は強てとくべくもなし垂仁の御代田道間守がもて來しは別種の香菓にて此國なるよりも勝れたる物なるべし姓氏錄下卷に橘守といふ姓あり万葉十五十二丁に橘乎守部乃五十戸之ともよみて橘苑を守れる者と見ゆ此田道間守が持來し香菓及橘守が守けん橘は今の世の密柑なるべくやそは古事記傳廿五の卷にいひたれば考べし新井白蛾が牛馬問四の卷にいへる盧橘の說は笑にたへず

（十九）倉庫　倭名類聚抄十の卷居宅部に倉廩殿字附唐韻云倉圓云レ囷去倫反又渠隕反兼名苑云囷一名レ廩力稔反万呂久夏一云與奈久夏一云伊奈久夏倉也釋名云倉七岡反久夏甲倉古不久夏校今案本文藏也藏ニ穀物一也漢語抄云倉樴久夏乃和並未詳今按孫愐切韻假緻撥樴四字並陟利反從レ人者會也從レ糸者密也從レ手者刺也從レ木者布散也可レ爲ニ倉具之義一所出未レ詳也○按に万呂久良は圓倉にて困廩などの字を訓べし與奈久良は米倉也伊奈久良は稻倉也久良は倉庫にて總名也甲倉は板甲を用て造れる倉なるべし校倉今も南都東大寺の勅封倉古代の儘に存し古畫卷などにも所見おほくその製角物を疊て圍にせし物也久良乃和は未レ考○又云窖四聲字苑云窖音教漢語抄云都知久良倉窖土中藏レ穀也按に都知久良は今の俗に「アナグラ」といへる之也此一段流布印本には脫漏たれば古本に據て補べし類聚名義抄七の卷穴部にも窖竅などの字を「ツチグラ」とよめり○又云庫棚閣附唐令云諸軍器在レ庫皆造ニ棚閣一安置別異レ庫音袴漢語抄云棚閣各二音和名多奈按に東雅六の卷倉の條に庫の字「ツハモノグラ」とのみ讀べき事とも見えすといひたれども軍防令義解に貯ニ糒鹽一者曰レ倉藏ニ兵器一者曰レ庫云々說文に庫兵車藏也云々など見ゆされど文庫内庫寶庫などの類おほかれば必

武庫にのみいふにあらず庫に棚を搆るよしは古事記上卷に其御頸珠名謂二御倉板擧之神一訓二板擧一云二多那一とあるは寶珠を納る庫に多奈有し也○職員令義解一の卷六丁右に謂穀藏曰レ倉米倉曰レ廩也云々軍防令義解五の卷廿一丁右に謂貯二糒鹽一者曰レ倉也藏二兵器一者曰レ庫也云々按に說文に倉穀藏也云々荀子富國篇に桓宗倉廩者財之末也註穀藏曰レ倉米藏曰レ廩云々禮記明堂位に米廩有虞氏之庠也注に庠序亦學也魯謂二之米廩一虞帝上孝令レ藏二粢盛之委一焉云々周語注に廩御廩一名神倉東南生長之處鍾聚也爲レ廩以藏レ所二藉田一以奉二粢盛一云々釋名に廩矜也實レ物可レ惜者投二之其中一也云々これらの說にては倉は穀藏廩は米藏のことなれど拾遺記に曹曾積レ石爲レ倉以藏レ書ともいひたれば一概に心得べからず戰國策の注には圓曰レ囷方曰レ倉とも見ゆ○万葉集九の卷十二丁左に吾妹兒之赤裳泥塗而殖之田乎苅將藏倉無之濱同十六の卷十八丁左に枳棘原苅除曾氣倉將立屎遠麻禮櫛造刀自按に始の歌は稻を納る藏に名所の倉無濱をいひかけたり次の歌は何を納ん料の藏とも知べからず○日本紀神武紀五丁左に彼處有レ人號曰二熊野高倉下一忽夜夢云々今當レ置二汝庫裏一宜二取而獻一之天孫二高倉下一曰唯々而寤之明旦依二夢中教一開レ庫視レ之果有二落劍一倒二立庫底板一卽取以進レ之云々按に古事記上卷神武の段にも此事あり高倉下といふ名も倉によりたる也○同垂仁紀二丁左に以給二赤絹一藏二于己國郡府一云々按に郡府をクラと訓たりこは任那國の郡府也○同神功紀六丁左に遂入二其國中一封二重寶府庫一收二圖籍文書一云々按に重寶府庫をタカラノクラと訓たりこは新羅國にての事也○同仁德紀八丁右に宮殿朽壞府庫已空云々按に府庫をミクラと訓り○同履中紀八丁右に六年正月辛卯始建二藏職一因定二藏部一云々按に此時始て藏司を立藏部とて奉仕する者を定られたる也○同清寧紀一丁左に星川皇子不レ聽二輒隨一母夫人之意一遂取二大藏官鐍一閇二門外門一式備二于難一權勢自由費二官物一云云按に履中紀の藏職をこゝには大藏官と書れたり○同欽明紀一丁左に天皇寵二愛秦大津父者一云々拜二大藏省一云々按に此家はじめて大藏省と見ゆ○同皇極紀十六丁右に蘇我入鹿家外作二城柵一門傍作二兵庫一云々按に兵庫をヤクラとよめり○同齊明紀六丁左に大起二倉庫一積二聚民財一云々按に倉庫をクラと訓財を積藏に倉庫と書たり○同天智紀十九丁左に十年十一月丁巳災二近江宮一從二

大藏省第三倉一出云々按に大藏省の藏數一ならぬ事知べし後には長殿の左右の御倉などいへり○同天武紀上十丁右に喚二穗積臣百足於小墾田兵庫一云々又十四丁左又悉焚二於稅倉一皆散亡云々按に稅倉をチカラクラとよめり兵庫の訓脫たれど皇極紀にはヤグラと訓たり○同持統紀廿一丁左に難波大藏鍬云々又廿五丁左內藏寮允大伴男人云々按に大藏に鍬やうの農具を納られ又內藏寮の名始めてこゝに見え內藏大藏並置れし事知べし○古事記上卷十七丁左に其御頸珠名謂二御倉板擧之神一訓二板擧一云二多那一云云按にこは伊邪那岐命その御頸珠を天照太神に賜ひし也古事記傳七の卷八丁右に御祖神の賜し重き御寶として天照大御神の御倉に藏めその棚の上に安置奉て崇祭たまひし故の御名なるべしといへりこれ倉の物に見えたる始也○同下卷履中の段に天皇於レ是以二阿知直一始任二藏官一云々按に此時の事日本紀には履中六年正月の事とす此外古事記の中に倉の所見おほく倉人女いへるも見ゆ倉首倉ノ連倉ノ臣などの類姓氏に稱るも古書の所見少からず○古語拾遺神武の條に宮內立レ藏號曰二齋藏一令二齋部氏永任一其職一云々又履中の條三韓貢獻奕世無レ絕齋藏之傍更建二內藏一分二收官物一仍令下阿知使主與二百濟博士王仁一記。其出納と始更定二藏部一云々自レ此而後諸國貢調年々盈溢更立二大藏一令二蘇我麻智宿禰檢一按三藏齋藏內藏大藏秦氏出二納其物一東西文氏勘二錄其簿一是以漢氏賜レ姓爲二內藏大藏一令二秦漢二氏爲一內藏大藏主鑰一藏部之緣也按に神武の朝宮內に齋藏を立齋部氏をして其職に任じ給ひ履中の朝別に內藏と大藏を立藏司藏部を定給ひて齋藏內藏大藏の三備はれり齋藏は神庫也內藏は禁中の藏也大藏は外藏也內藏寮大藏省の官人の事は職員令官職秘抄職原抄などの類にくはし○新撰姓氏錄百十九丁右右京諸蕃上に內藏宿禰坂上大宿禰同祖一本都賀直四世孫東人直之後也云々又百卅八丁右攝津國諸蕃に藏人石占忌寸同祖阿智王之後也云々また附錄不レ載二姓氏錄一姓等に大藏云々按に續日本紀續日本後紀文德實錄に內藏忌寸內藏宿禰大藏忌寸大藏宿禰などに見ゆ藏人も續日本紀廿九の卷卅二丁などに見え續紀神護景雲二年三代實錄十四の卷卅二丁二の卷二丁に正倉若干宇倉若干宇法倉若干宇甲倉若干宇板倉若干瓦倉若干宇土倉若干宇屋倉若干宇倉若干宇借倉若干宇借屋若干宇云々ま

た不動若干宇（穀倉若干粟倉若干橋倉若干穀屋若干勤用若干宇 穀倉若干橋倉若干粟倉若干倉若干宇 倉若干屋若干）云々また某郡第一板倉基云々按に此文中甲倉あり板倉あり瓦倉あり土倉あり屋倉あり甲倉は安甲などもて作れるなるべし土倉は今の土倉也屋倉は家のさまに作れるよしの名なるべし○與清曰久良は物を置居る處の名也天之磐坐高御坐四座置八座置千座置戸位鞍など皆同義也庫藏に久良といへるは御倉板擧之神を始とすさて神武の御代に高倉下が庫ありまた宮中に齋藏を立給ひて齋部氏これを掌る履中の御世内藏大藏を立そへ藏司藏部を定給ひて三藏並たりその官人の事は職員令に見ゆ又諸國郡に官倉屯倉あり其つくりざまに甲倉あり板倉あり瓦倉あり土倉あり屋倉あり圓倉あり校倉あり窖ありてさまゝ〳〵也土倉と窖とは同訓にて一ッ物かともおもはるれど土倉は主税式に若干宇と記したれば塗倉なると疑なし窖は和名抄に土中藏レ穀也都知久良とあれば今の穴倉なり大藏省には長殿の御藏といひけん長殿の左の御藏ひらきあけよなど歌によめりこは既に歌詞考にいひたりきさて倉の事は歴史令式歌集物語などの所見いと〳〵おほかればとみに引出べくもあらで筆をさしおきぬ土倉の事は別にいふべし

（二十）土倉　延喜主税式下十五丁に土倉若干宇云々按に和名抄に窖を都知久良と訓て同名なれど窖は土中藏レ穀也とあれば穴倉也茲の土倉は若干宇と有て宇は説文に屋邊也と注し易繫辭に上レ棟下レ宇以蔽二風雨一孔穎達が正義に干レ屋則簷遠爲レ宇于レ國四垂爲レ宇とありて簷の事也されば一宇は一軒といふにおなじく家屋を數る稱なれば穴倉の事にはあらじ西宮記臨時部二日本紀竟宴の條に得二土倉ノ阿弭古一前三河守菅野高松土倉能網尼駕々令流鷹狩野云々日本紀竟宴歌にも土倉阿弭古とあり仁德紀四十三年に屯倉阿弭古とあるは誤寫也此土倉氏も土倉に据たる名なるべし○明月記天福二年八月五日の條に一昨日火事云々燒亡土倉不レ知二員數一商賣充二滿海内一云々○古今著聞集一の卷廿五丁右に前大和守藤原重澄は賀茂につかうまつりて云々當社の土屋を造進したりけり云々按に此土屋も土倉なるべし○親長卿記文明十六年六月二日の條に及二秉燭一一條烏丸北ノ頬良角土藏盜入亂入町人自二諸方一出合已及二矢軍一土藏亭主出逢夫婦被レ殺云々○大和物語下卷廿二丁左に良峯の宗貞の少將物へゆく道に五條

わたりにて雨いたくふりければあれたる門に立かくれて見いるれば五間ばかりなる檜皮家のしもに土屋藏などあれどとに人など見えず云々按に主税式下に土倉屋倉あればその類なるべし○愚記文明十二年九月十五日の條に一條前黄門來談入レ夜上邊土一揆物忩無レ極一條高倉邊放二火酒屋土藏一懸二兵粮一伏見藤右府許等懸二取酒肴折一云々按に此文寫誤ありて不審なれば他日善本を得て校正すべし○皇年代略記後花園院條首書に嘉吉元九月 土民蜂起號二德政一破二却洛中土倉等一云々後土御門院條首書に文明十二九中旬土民蜂起破二京中土倉一奪二却質物一云々東寺古文書抄十の卷十二丁左延慶二年沽却私領地文に土倉壹宇土門云々○太平記十二の卷大塔宮配流の條に京中ノ土藏共ヲ打破テ財寶共ヲ運取ケル云々同廿四の卷山門嗷訴の條に山法師ノ土藏ヲ點シ造替サセン云々○建武式目に可レ被レ興二行無盡錢土倉一事云々同追加に洛中邊土散在土倉幷酒屋役條々云々また土倉已下流質事過二約月一者任レ法可レ爲二錢主計一也云々また洛中洛外酒屋土倉付地下人等召物事云々○永享二年九月 政所壁書に洛中洛外酒屋土倉付地下人等 條々云々酒屋土倉闕所事云々また諸土倉盜人事云々また洛中洛外諸土藏事云々○庭訓往來に 土藏 ○節用 集登部乾坤門に 土藏ドザウ 云々○運歩色葉集登部に土藏ドザウ云々○與清曰土倉の名仁德の御世の土倉阿弭古あれど正しく土を塗たる倉なるべくおぼゆるは延喜主税式を物に記せし始とす或は土屋といひ或は土屋倉といふ其つくりざまに聊のかはりめありけるにや

（廿一）穴倉　親長卿記文明十年十二月廿五日の條に今夜有二火事一五靈殿也逢二火事一近御殿藤大納言實世新大納言秀春俊量朝臣等也及二予近邊一具足等收二納穴藏一畢希代火事及二數十町一云々按に倭名抄に窖を都知久良とよみ類聚名義抄にも窖竅などの字をツチクラと訓てこれ穴藏なるよしは既に倉庫の條にいへるがごとし延喜式廿二の卷二丁右に窖神も見ゆ

（廿二）直會　續日本紀廿六の卷天平神護元年十一月庚辰詔に今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞行日仁在云々同卅の卷神護慶雲三年十一月壬辰詔に今日方新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之賀須日仁在云々貞觀儀式午日儀に今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食日爾在云々歷朝詔詞解五の卷十六丁右に猶良比猶は借字にて直會にて奈保理阿比の

切れる也直るとは齋をゆるべて平常に復る意也そもそも大嘗の齋神祇令に散齋一月致齋三日と有て義解に散齋謂仲冬之月自ㇾ朔至ㇾ晦致齋謂自ㇾ丑至ㇾ卯其辰日以後即爲二散齋一と見えて大嘗祭式にもかく見ゆ儀式にも致齋三日自ㇾ丑至ㇾ卯と見えたり卯日に大嘗宮に御て神にも祭給ひ天皇御みづからも聞食て大嘗の事畢るに依て辰日よりは豐樂院に御て致齋をゆるべうちとけて歌ひ集會心の名也解齋の舞又脫二齋服一復ㇾ常などいふことは午日の儀式畢てあることなれども卯日の儀式終るも致齋の解るなれば同じ心ばへ也江次第には辰日朝主水司供二解齋御粥一とも見えたりさて諸社の神事にいふ直會も神祭畢て後に行ふわざにて同じ心也云々倭訓栞十九の卷奈部廿七丁左になほらひ常に直會と書り續日本紀に猶良比の豐明といひ延喜式續日本後紀に直相とも書り建武年中行事にならあひと見ゆ日本紀竟二于殯宮一の竟字をなめらひたてまつると釋に訓する其義なるべし直會院は神宮に在て五丈殿四丈殿九丈殿の三間也儀式帳內宮四丈殿兵範記作二主神司殿一外宮五丈殿神事供奉記作二主神殿一云云按に奈保良比酒井榮大神宮儀式帳奈保良比御歌同上奈保良比料稻同上直會院同上直會殿大神宮儀式帳豐受宮儀式帳延喜式卅八北山抄一直會所兩宮儀式帳直會御門豐受宮儀式帳直會人大神宮儀式帳奈保良供給料同上などその外古書の所見枚擧に遑なし

（廿三）鞆繪繪鞆巴の字巴文　婦人養草五の卷十七段雜藝の事の條に雜藝と云物の辭に云云々四に「白薄やう小宣旨の紙まきあげの筆ともゑかいたる筆のちくやれことう〳〵云々拾菓集上卷五節末の段に露臺の亂舞はてぬれば白うすやう小禪師の紙卷揚の筆鞆繪書たる筆の軸ゆゑ〳〵しくぞおぼゆる云々源平盛衰記一の卷五節始の段に五節ト名付タレ彼舞ノ手ヲ摸シツヽ雲上人舞トカヤ其時ノ「拍子ニハ白薄樣厚染紫ノ紙卷上ノ糸鞆繪書タル筆ノ軸ヤトハヤス也云々舞ノ袖ヲ翻ス簪ヨリ上方ニ卷上タル貌絲ヲ以テ卷タルガ如ク鞆繪ヲ書タル筆ノ軸ヲ差上タル樣ナレバ昔ヨリ五節宴醉ノ肩脫ニハ」必カクハヤスヲ云々平家物語一の卷殿上闇打の段に五節ニハ白薄樣「修禪寺ノ紙卷上ノ筆巴書タル筆ノ軸ナンドイフ樣々カヤウニ面白キ事ヲノミコソ歌ヒ」舞ルヽニ云々長門本平家物語一の卷に殿上のかたぬぎの拍子には「白薄樣厚染紫紙卷上の糸巴かきたる筆のちくなんど」こそ

はやすに云々按に雜藝詞にともゑかきたる筆のちくとあるこの名目のものに見えたるはじめとやいふべき○江家次第十の卷新嘗祭裝束の條に其東西北面「懸二巨帽額一」不ㇾ懸二（鞆繪一木工寮作二）舞臺一（左右衞門進二梅）柳一」云々○寶物集五の卷廿五丁左に楚王眉間尺朋友云々其ノ三ノ頭ノ鼎ノ中ニシテメグレル樣ヲトモエニハ形ドレルトモ申シ侍ルメリ云々○太平記廿四の卷天龍寺供養の段に竹林院大納言「公重卿濃香ニ牡丹ヲ織タル白裏ノ狩衣ニ薄色ノ生ノ衣洲流ニ鞆繪ノ藤ノ丸青鈍ノ生ノ織物ノ指貫ニテ」御車寄ニマエラレタリ云々按に藤にて巴のさまにかきたる紋をいへるなるべし○同書卅六の卷大地震の段に「胴のマハリニ二十尋計ナル大皷ノ「銀ノビヤウヲ打テ面ニハ巴ヲカキ臺ニハ八龍ヲ拏ハセタルガ顯」出タリ云々○帥卿公秀記康永四年八月卅日の條に竹林院大納言舍人以二金銅三ッ鞆繪一毎二閉目一附ㇾ之云々○明月記寬喜元年十一月廿五日の條に半蔀車鞆繪小八葉之程五ヲ加テ如二五目一被ㇾ置ㇾ切物見車也云云○諸家紋帳に右巴の紋は曾我佐々木本赤松兵部少輔政則宇都宮山田道祖千代丸丸豐前七郎朝連芝山三河守持嗣金山左巴は小山山下左京亮太平近藤國平

末小早川新開次郎元實など或は一或は二或は三或は九つけたるあり○飛鳥井二樂蹴鞠百首に「おもたかも巴の丸も我家の紋としりては誰かつけまし」○船辨慶謠詞に長刀取直し巴波の紋云々謠曲拾葉十三の卷にくるり〳〵と長刀をふりまはすはうづまく水の形に似たると也朗詠集云如二巴字一矣云々百番謠抄日向延岡佐久間觀潮著二の卷に巴は薙刀の手也云々紋に付る物ゆゑ其緣をとれり云々○墻嚢抄一の卷六十五段に武士幕ノ文ノ中ニ文字難ㇾ知多シ云々巴トモエ角巴ツノトモエ云々○節用集登部食服門に鞆繪巴紋也云々巴同云々○運步色葉集登部に瓢トモエ巴同云々巴之文秘傳に巴ノ紋ハ宮社ニ棟木云々スベキ物也云々按に此說例の神道者流の牽合傅會取用にたらず○伏見院宸翰裝束抄或名三條裝束抄衣服事の條に他家異紋袍云々大炊御門龜甲洞院藤鞆繪自餘唯今不二覺悟一云々○名目抄衣服篇に異文諸家大臣巴後著ㇾ之家々之說不ㇾ同云々當流藤鞆繪云々○天野信景が鹽尻二の上卷に左巴巴如ㇾ此右巴は是なり云々又十六の卷布の帽額の條に簾の端及帽額に書く紋をもつかうといふは鞆にゑがく紋を鞆繪といふに同じ云々また十の下卷に葵の御紋源尾敬

公御相傳の御說にいはく源賴義の御嫡男義家を石清水の御氏子として八幡太郎と稱す當社の㊎神紋を摸して鞆繪を御旗の紋とし給ふ云々鞆繪は御家の秘紋として德川家へ傳へ給ひし親氏公三州加茂郡入御の後云々郡名により加茂の朝臣と稱し御家の鞆繪の御紋を葵に書なし給ひて御一統の御旗幕に付させ給ふ是今の葵鞆繪の御紋なりと云々九は大權現御末年の時より附させ給ふよし云々按葵御紋の事は吾友竹尾覺齋が葵御紋考にくはし○倭訓栞十八の卷登部にともゑ江次第に鞆繪と書り云々かきなかす巴の字の水はたえはてゝ空にのみ見るはるのかつき云々もと鞆繪は鞆のかたを畫がけるなるべし云々○好古小錄下卷五十五段に諸器物ノ紋ニ巴ヲ用ユル「者古昔ヨリ多シテ其形今ト異ナリ古昔畫ク巴ノ形ハ多ハ首尖リテマロカラズ古寫傾樂ノ畫太皷ノ巴紋神祇官瓦及醍醐寺 法勝寺 最勝寺ノ瓦ノ巴鹿苑寺ノ供鐘ノ巴紋」皆其首尖リタリ云々○伊勢兩宮神寶圖に內宮御鞆口長四寸五分圓徑四寸厚三寸墨塗巴文白緒云々外宮御鞆口長四寸五分丸徑四寸厚三分總黑漆巴文白緒云云○按に此鞆の製作 大神宮式 兵庫寮式などに以ニ鹿皮一縫レ之胡粉塗以レ墨畫レ之とあるに叶はずいと後の製なるべし○伊勢貞丈日蔭蘿に鞆繪輪鋒中字爲ニ神紋一鞆繪ヲ神ノ紋ト云ハ俗說也云々巴ノ字ノ訓俗ニ巴ノ字ヲトモエト訓ヲ付タリ……紛レテ思ヒ誤ルコトナカレ云々○出雲風土記ノ秋鹿郡惠曇鄕の條に須佐能乎命御子磐坂日子命國巡行坐時至ニ坐此處一而詔此處者 國稚美好有ニ國形如ニ畫鞆一哉吾之宮者是處造事者詔故云ニ惠伴一（神龜三年改ニ字惠曇一）云々內山眞龍が解に惠曇訓エドモ倭名抄に信濃國安曇を阿都三と訓たれど此記は惠伴また惠杼毛社と書たるに依て曇を杼毛と訓惠は畫か或云鞆に畫を書たるより名に負りといへり應神紀云上古俗號レ鞆謂ニ褒武多一また天皇の宍生ニ腕上一其形如レ鞆とも有てこの天皇の御名を品陀和氣命と申せば此時にしも名付たるか又もとより褒武多とも登毛ともいひしにやあらん古事記上卷に伊都之竹鞆とありさて弓射とき左手につけ射放ば弦當りて鳴つらんかし然は止毛は止牟と云名保武多も保武となる音より名付し成べし形をもて名付聲音を以て名付る例あれば也云々按に畫を惠といふは字の呉音也神代に然る詞あるべくもあらねば鞆の繪の事とせんは

いかにぞや○谷川士清が日本紀通證四の卷六丁左に今按古事記作ニ竹鞆一〔應神紀曰宍生ニ腕上一其形如レ鞆上古時俗號レ鞆謂ニ保武多一焉兵庫式曰 熊革鞆料 長九寸廣五寸牛革鞆手料長五寸廣二寸生絲縫レ鞆料鞆緒紫組長二尺五寸送官符曰御鞆口長四寸五分丸徑四寸厚二寸塗ニ黑漆一書ニ平文一附ニ村濃組一有ニ金銅金物一一書曰今所レ獻伊勢神財鞆 其形如レ瓢黑漆以ニ銀粉一書ニ巴紋一表裏各一也巴訓爲ニ登毛惠一江次第所謂鞆繪也出雲風土記〕如ニ書鞆一是也云々 按に出雲風土記の書鞆を引證せるは例のおぼつかなし○倭漢朗詠私註一の卷右八丁三月三日の條に春之暮月々之三朝〔天酔ニ于花一桃李盛也我后一日之澤萬機之餘曲水雖レ遙遺塵雖レ絕書ニ巳字一而知ニ地勢一思ニ魏文一以翫ニ風流一蓋志之所レ之謹上ニ〕少序〔花時似酔序曾丞相〕云々 注に巴字者巴郡江州有ニ三山峽〔三廻之水一也曲水是也付ニ峽水之形一取レ郡號曰レ巴也巴字〕故文巴字也云々また水成ニ巴字一初三日源起ニ周年一後幾霜紫流遠ニ羽鷰一菅篤茂一云々 按に菅家の序は本朝文粹十の卷に見えたり○本朝文粹八の卷江匡衡三月三日陪ニ左相府曲水宴一同賦ニ因レ流泛ニ酒序に酒德頌之文因ニ巴字一而添ニ風情一者也云々古今著聞集十三の卷十二丁左に慈鎭和尙往事を思し出給ひて寄レ水懷舊によみ給ける「思ひ出てねをのみそなく行水に書し巴の字の春のよの夢」○長明四季物語三月の條に今日なんめぐり水の今ばかりはじまるべきにこそもとより土器もたらぬ谷の戸ばしは此もじすかぬ身なれば巴のもじも書ながすべきにあらず云々○太平記卅五の卷尾張小河東池田事の條に大勢ノ眞中ニカケ入テ十文字巴ノ字ニカケ散シ云々○明德記中卷六丁右に巴ノ字ニ廻リ十文字ニ通リ敵味方入亂云々相州兵亂記三の卷義同討死の條に十文字ニワッテ通リ巴ノ字ニ追廻シ云々同卷府中軍の條に十文字ニ割テ通リ巴ノ字ニ追廻シ云々同四の卷河越夜軍の條に十文字ニカケ破リ巴ノ字ニ追廻シ云々○與清曰鞆繪は鞆に畫るゆゑの名にはあらず一巴のさま鞆の形に似たればいへる也或は二巴三巴九巴右巴左巴などみな鞆の形の物を二ッも三も九も書き右廻にも左廻にも書ゆゑの名目也出雲風土記に畫鞆と有もの今の巴ならんには古き所見といふべけれど地のさま鞆に似たらんにはたゞ鞆とのみいふべきを畫鞆といへる事おぼつかなしまたるゑがきたる鞆にて三巴などのさまならんには神代

に書の音をいふべくもあらねば理かなはずかにかくに書鞆は別義なるべし強ていはゞ繪は借字にて須惠の略鞆を居直たる貌をいへるにや然ては雜藝の詞に巴書たる筆の軸さうたひ江家次第に今世の釣隱やうの物をさして鞆繪といへるなど所見の始といふべし雨宮の神寶の鞆に巴を書れたるは後の闇推のしわざ也これを神の紋に用るは應神天皇の御腕上の宍が鞆に肖させ給へるを鞆は褒武多とも止毛ともいへば八幡大神の御紋にとり合せてその外の神にも移し用たゝなるべし大鼓に畫るも神事に用る樂器によれるにやあらん又物の廻るさまを巴の字といへるは字體よりいひ水のうづまくを巴文と云もこれ也新撰姓氏錄攝津國皇別 吉田連の條に任那の三巴汶の地といへるも蜀の三巴と同義にて水の曲折三廻巴の字に似たるゆゑの名なるべし（姓氏錄右京諸蕃下に巴汶氏あり百濟肖古王の子孫にて上巴汶中巴汶下巴汶の三巴汶によれる氏也こゝな巴紋と書る本は誤にて日本紀纒体紀七年に巳波の打出るさまをゑがけるも鞆の形におなじければ鞆繪に巴の字を借用し事かたゝ〳〵よしあり鞆の形ゟ波の文渦の形いづれも相鄰たるをおもふべし

（廿四）眉間尺并一頭二頭三頭の紋 巴の紋の異名に一巴を一頭二巴を二頭三巴を三頭などいへり蘆名記蘆名家養子の條に伊南には河原田治部少輔盛次者小山ノ末葉ナリ幕ノ紋二ツ頭右巴ナリと見ゆそを頭と云よしは寶物集五の卷廿四丁左に楚王干將ト云鍛冶ニ劍ヲ責給ヒテ干將ガ首ヲ云々巴ニハ形ドレルトモ申侍ルメリ云々とあるに出たるべけれど後の傳會の說にてうけ難し眉間尺が事は太平記十三の卷干將鏌鋣事の條に昔周ノ末ノ代ニ楚王ト云ケル王武ヲ以テ云々皆煮爛テ失ニケリ云々此條參考本には刪られたれど譯語中に當時の詞などありて考證に備べき事少からず總て參考本は本朝の事跡をのみ旨とし唐土天竺などの事を省かれたるはをしむべきわざなり三國傳記十一の卷第十七段眉間尺事 干將莫耶劍事の條に漢ニ言ッ昔周ノ末ニ楚王云々雌雄二龍ト成テ碧浪ノ底ニゾ沈ミケル云云祖庭事苑三の卷十四丁左飜人の條に楚王夫人嘗夏乘レ涼云々見ニ孝子傳一給音待欺也云々同書五の卷四丁右三皇塚上の條に說者指ニ「眉間尺事一欲ニ以成ニ襯前語一即三皇之說未レ見ニ所出一當レ云ニ楚王塚上草離離一」見ニ祖英飜人云々碧巖集一百則に祖庭事苑載孝子傳云云々三頭相噛尋亦俱爛云々などに見えたり

（廿五）丙丁童子に與ふ并火中と書く 正徹書記の慰草の末に丙丁童子に傳へ侍るべし云々天童宏智語錄一の卷右七丁に峰云丙丁童子來求レ火眼云好語祇恐儞不レ會則云丙丁屬レ火將レ火求レ火將ニ自己一覓ニ自己一云々眼云丙丁童子來求レ火則於ニ言下一大悟云々覺上座有レ頌丙丁童子來求レ火南海波斯鼻孔大云々拈評三百則中卷十二丁右に峯云丙丁童子來求レ火眼云四面無レ門何入云云碧巖集一の卷七則に林云丙丁童子來求レ火法眼云好語恐儞錯會可ニ更說一看則云丙丁屬レ火以レ火求レ火如ニ某甲一是佛更去覓レ佛云々法眼云丙丁童子來求レ火則於ニ言下一大悟云々閑吟集奥書に御一見之已後者可レ有ニ入火一候也比興々々云々（二の卷入丁オ十二則にも）五燈會元十の卷法眼宗報恩院玄則禪師傳に峯曰丙丁童子來求レ火後謁ニ法眼一眼問甚處來師曰青峯眼曰青峯有ニ何言句一師擧ニ前話一眼曰上座作麼生會師曰丙丁屬レ火而更求レ火如レ將ニ自己一求ゎ自己ぇ眼曰與レ麼會又爭得師曰某甲祇與レ麼未レ審和尙如何眼曰儞問レ我我與レ儞道師問如何是學人自己丙丁童子來求レ火師於ニ言下一頓悟云々頭書さゝき草子にあまの見るめもはづかしやいそぎ煙となし給へとてをくに歌有云々續古事談五（群本六下十三丁ウ）にコレナホ要ナキソヲザナリ早クケブリトナスベシ云々家中竹馬記奥書に欲レ授ニ丙丁童子一之劇堅有ニ抑留之族一依レ難ニ默止一付ニ與之一云々

敎訓抄一ノ三丁ウにナホソレマデモ心ヨセナラズバイソギ〳〵火ニヤキテ捨ラルベシ云々宗長手記上五十丁ウに此道いたり深くならせたまひて後自見ありて無用の物とも思ひ捨給はゞ八人童子にあたへらるべからんや云々三議一統上十七丁ウ火中

（廿六）うへ見ぬ鷺并鷺の山 新撰六帖二に鷺信實朝臣「又はよもはねをならふる鳥もあらしうへ見ぬわしの空のかよひち」此歌夫木抄雜九にも載たり佛國禪師詠草に題不レ知「この法のうへ見ぬわしの山さくら花を敎の外につたへて」同集異本には「此法をうつさぬわしの山櫻花を敎の外にたつねよ」と有十二類畫詞ゝ鷺の詞書にわれにまさりたるものゝあらばやうへ見ぬかげ武者ぞ十二類の人々云々ゆり若草子十二丁左に此君先度はつくし九國をたまはらせたまひうへ見ぬわしと御座ありしが云々和名抄羽族部に鵯鷺唐韻曰鵯音悲大鵯也鵯音潤和名於保鵯鳥別名也山海經注云鷺音就小鵯也云々古本には於保和之古和之の名なくて鵯音潤和之とのみあり新撰字鏡鳥部に鷺疾僦反去和志云々また鵯和志又加伊志云々類聚名義抄僧中卷鳥部に鵯鵯鷺鷺音就「コワシ」「ワシ」云々鵯音潤「ワシ」「オホワシ」「クマタカ」云々鵰鳩「ワシ」云々字鏡集三の卷鳥部に鵯ワシ云々鵯雕同「ワシ」「クマタカ」云々鷺雄同疾僦反「ワシ」「コワシ」云々など見

えうへ見ぬよしは埤雅八の卷釋鳥に鴟能食レ草似レ鷹而大黑色俗呼二皁鴟一一名鷲其飛上薄二雲漢一とあるをやより所とせんわしの山は靈鷲山也止觀科解一之一卷十四丁左に中鷲頭者說文云此鳥黑色多レ子山形似レ鳥故以名焉又其山側有二屍陁林一鷲食レ屍竟多居二此山一故以名レ之又多聖靈所レ居故名二靈鷲一亦名二鷲足一亦名二狼跡一增一ゝ三十一佛告二諸比丘一此山久遠同名二靈鷲一更有二餘名一汝等知不亦名二廣普山白堵山仙人山一恒有二神通諸得道羅漢一所レ居又有二五百支佛一居レ之云々仁王經良賁疏上之一卷廿二丁右に鷲峯山者梵云二姞栗陁羅矩吒一唐云二鷲峯一亦云二鷲臺一智論二義山頭似レ鷲故云二鷲頭一又云王舍城南屍陁林中多二諸死人一衆鷲來噉還止二山頭一時人便名二鷲頭山一也又別記說言二靈鷲一者此鳥有レ靈知二人死活一人將レ欲レ死群二翔彼家一待二其送一林飛下而食以二懸知一故號二靈鷲一又眞諦記引二婆沙一說釋迦菩薩化受二鷲身一廣如二彼文一繁而不レ錄云々仁王經疏門人灌頂記一の卷十五丁左に王舍城中有二六精舍一云々六者閣崛山精舍者閣崛山此翻二靈鷲一釋迦菩薩昔爲二鷲鳥一於二此山中一養二育父母一從レ此得レ名故名二靈鷲一又王舍城南有二屍陀林一鷲鳥居レ之多食二死人一人欲レ死者鷲翔二其家一悲鳴作レ聲人以預知レ人死一故稱二靈鷲一又山有二五峯一東方象頭南方馬頭西方羊頭北方師子頭中央鷲頭亦得レ名二鷲山一也問佛何故偏於二王城中一向二鷲山一說法耶答依二法花論一云如二王舍城一勝二於餘城一者閣崛山勝二於餘山一以二佛在一勝處一故顯二此法門勝一也云々西域記九の卷八丁右摩揭陀國下に宮城東北行十四五里至二姞栗陁羅矩吒山一唐言〔鷲峯亦謂二鷲〕舊曰二耆闍崛山一訛〕也接二北山之〔陽一孤標特起旣棲二鷲鳥一〕等如來之身云々翻譯名義集二の卷衆山篇に耆闍崛大論云耆闍名レ鷲崛名レ頭〔此山頂似レ鷲增一佛告二諸比丘一此山久遠同名二靈鷲一云々又名二普賢山白堵山一〕仙人山負重山一云々水經註一の卷十一丁右河水一に釋氏西域記曰耆闍崛聞見之宗也云々法顯傳廿二丁右に到二耆闍崛山一未レ至レ頭三里有二石窟一云々故曰二鵰鷲窟山一云々大智度論三の卷四丁右に耆闍名レ鷲〔崛名レ頭問曰何以名二鷲頭山一云々是山五山中最高大〕多二好林水一聖人住處云々此外法華經序品科註無量壽經科註上卷末二丁左その外物に見えたる擧るに遑なければ省く鷲頭鷲峯鷲臺耆闍崛山姞栗陁羅矩吒山廣普山白堵山仙人山鷄足山狼迹山普賢山負重山など梵漢の名おほかれど靈鷲山を普通の稱とす

中鷲頭は東象頭南馬頭西羊頭北師子頭の四山の中央にあれば也名を得たるよしは其山形鷲頭に似たるゆゑとも天魔波旬鴟鷲に化して窟前に住たるゆゑとも靈鷲多く住るゆゑともいへり歌にもわしの山わしのみ山わしのみねわしの高根などよめるいとおほかり

(廿七)師子座　仁王經疏智者大師說門人灌頂記二十七丁右師子座者大論云非二是實師子一亦非二木石師子一以如來是師子一所レ坐之處若床若座皆名二師子床座一也云々同良賁疏上二卷廿九丁右に爾時世尊從二三昧一起坐二師子座一云々解曰坐二師子座一者智度論云非二實師子一亦非二木石用爲一師子一以二佛即是人中師子一所座處床皆得二名爲一師子之座一云々

(廿八)大黑天神　仁王經良賁疏下一卷十丁右護國品に大王昔天羅國王有二一太子一名曰二班足一登二王位一時有二外道師一名爲二善施一與レ王灌頂乃命二班足一取二千王頭一以祀二塚間摩訶迦羅大黑天神一云々解曰言二塚間一所住處也言二摩訶一者此翻云レ大言二迦羅一此言二黑天一上句梵語也下句唐言大黑天神鬪戰神也若禮二彼神一增二其威德一擧レ事皆勝故嚮祀也何以知者三藏引二別梵夾一云孔雀王經說烏屍尼國ノ國城之東有レ林名二奢摩奢那一此云二尸林一其林縱廣滿二一由旬一有二大黑天神一是摩醯首羅變化之身與二諸鬼神一无量眷屬一常於二夜間一遊二行林中一有二大神力一多二諸珍寶一有二隱形藥一有二長年藥一遊行飛レ空諸幻術藥與レ人貿易唯取二生人血肉一先約二斤兩一而貿二藥等一若人欲レ往先以二陀羅尼一加二持其身一而往貿易若不二加持一彼諸鬼神乃自隱レ形盜二人血宍一令レ滅二斤兩一即取二彼人身上血宍一隨取隨盡不レ克二先約一乃至取二盡一人血宍一斤兩不レ充藥不レ可レ得若加持者貿二得寶具及諸藥等一隨意所爲皆得二成就一若嚮祀者唯人血宍彼有二大力一即加二護人一所作勇猛鬪戰等法皆得レ勝也故大黑天神即鬪戰神也如二賢愚經說一祀二羅刹一普明王經說下取二百王一以祀中山神上各隨レ文矣云々舊譯仁王經には應下取二千王頭一以祭中塚神上とありて大黑天神の名目なし頭書大黑槌袋梅花無盡藏四の十二丁ヵ同神祇拾遺

(廿九)師子身中の虫　仁王經良賁疏囑累品に大王我滅度後四部弟子一切國王王子百官乃是住持護二三寶一者而自破滅如二師子身中虫自食一師子宍一非二外道一也云々解曰如二師子身中虫一如二蓮花面經一佛告二阿難一譬

如ニ師子一若命終者若水若陸所有衆生不ニ敢噉食一唯師子身自生ニ諸虫一還自噉ニ食師子之宍一阿難我之佛法非ニ餘能壞一是我法中諸惡比丘自毀壞故云々法苑珠林にも身中虫の事見ゆ頭書白氏文集二ノ九丁ウ樹中蠹ノ事似タリ隨書列傳十五楊秀傳に高祖謂ニ群臣一曰壞ニ我法一者必在ニ子孫一乎譬如ニ猛獸一物不レ能レ害反爲ニ毛間蟲一所ニ殘食一耳云々

（卅）年米春　日本靈異記上卷狐爲レ妻令レ生レ子緣第二に於ニ二月三月之頃一年米春時其家室於ニ稻舂女等一將レ充ニ間食一入ニ於碓屋一云々此事水鏡にも見ゆ年春米は范石湖集村田樂府冬春行叙に臘日春レ米爲ニ一歲計一多聚ニ杵臼一盡臘中畢レ事藏ニ之土瓦倉中一經レ年不レ壞謂ニ之冬舂米一云々とあるにおなじ靈異記に二月三月と書たるは二日三日の誤なるべし

（卅一）鐵輪五德　鐵輪の事已に五の卷第十段にいへりこゝに又所見を擧臥雲日件錄抜尤第四十八冊長祿四年閏九月十六日の條に前刻季瓊話就ニ管領門一有ニ落書一蓋晝ニ鐵輪一去ニ二ヶ足一存ニ一足一置ニ于碁盤上一其意武衞畠山細川此三家謂ニ之三職一猶ニ三足鐵輪一皆武衞畠山皆亡此次細川御番也碁盤其音相類故也云々謠詞鐵輪に身には赤き衣を著貝（カホ）には丹をぬり頭には鐵輪をいだき三の足に火をともしいかる心をもつならば鬼神と御なりあらうする云々平家物語劔卷に嵯峨天皇御時或公卿ノ娘餘リニ物ヲ妬ミテ貴船大明神ニ詣テ七日籠テ祈ケルハ願クハ乍レ生鬼ト成シ給ヘ妬マシト思ハン女ヲ取害（コロ）サントゾ申ケル示現ニ云ク鬼ト成リ度ハ姿ヲ「改テ宇治ノ河瀨ニ行キテ三七日ヒタレト示現アリ」又宇治ノ橋姫トモ是ヲ云トゾ承ル云々運歩色葉集加部に鐵輪カナワ夏禹始造云々增補下學集（下の二卷）器財門に鐵輪カナワ云々五德ゴトク云々節用集大全（二の卷加集十四器財門）に鐵輪ナワ云々また（五の卷古集卅三器財門）五德ゴトク云々書言字考器財門（加部）に鐵束カナワ鐵輪同云々また（已部）五德ゴトク鐵束之屬云々名物六帖器財箋四（茶薦酒油の部）に鐵三腳子ゴトク本事方治ニ太一神精丹一下用ニ鐵三腳子一隨ニ釜之大小一高不レ過ニ一尺五寸一其下置レ火約ニ三斤以レ漸益レ之常及ニ五斤一云々など見えて五德といふは寬永の比より後の名なべし

小山田與清稿

（一）魚袋　魚袋の事既にいひたれど又所見を擧ぐ塵添壒嚢抄三の卷（廿九丁左）緌事の條に五月ハ夏中ナリ惡毒ノ獸虫溫氣ニ依テ時ヲ得テタヽリヲナス五月五日魚獸形ヲ造テ腰ニツケ茅葉以テ飯ヲツヽミテ龍形ニ卷ナシテ宴集ノ時キリソギテ食ス彼類定テ痛恐レン歟ト云テ其儘似スルニ座中ニ一人ノ老人來テ座ニ付クコレニ魚形ヲツケヌ又龍ノ形ヲ切リ破ルニカホノ色變ズ其時衆人是ヲトラヘテ殺シツト云事アリ是ニツクルモノハ今ノ世用フル魚形也龍形ト云ハ緌也云々魚袋ヲ博聞錄ニハ上代以レ革爲レ之謂ニ之算袋一ト云ヘリ云々頭書唐書四十八廿七丁ヵ升庵外集後漢三才圖會廿六

（二）鷺の蓑毛鳥の鎧毛　鷺の蓑毛の事既にいへり又所見を記す塵添壒嚢抄八の卷（廿三丁左）鵲事の條にカサヽギと云はミノ毛頭ニァル鷺歟云々續博物志六の卷（三丁右）に鷺有ニ長翰毛一江東人取以爲ニ睫擺一名レ之曰ニ白鷺纈一云々埤雅七の卷釋鳥鷺の條に頭上有レ絲毿々然長尺餘欲レ取レ魚則弭レ之云々本草綱目四十七の卷禽部一鷺の條集解に頂有ニ長毛一十數莖毿々然如レ絲欲レ取レ魚則弭レ之郭景純云其毛可レ爲ニ睫飾一云々此外類書本草書の所見おほかれどわづらはしければやみぬ日蓮錄外書（四の卷十七丁右）新池書に三十二相の皆出ハ十種好ノ鎧毛生ソロヒテとも有明惠傳記上（七丁ガ）鎧毛ニ生テ羽ナドモ生タル雀ノ子ヲ大蛇飲カケテ巢ニ纏付タリ云云

（三）とねりのねや　拾遺集（六左右雜下）に健守法師佛名のゝぶしにてまかりいでゝ侍けるとしいひつかはしける源經房朝臣「山ならぬすみかあまたにきく人は野ふしにとくもなりにけるかな」返し健守法師「山ふしものふしもかくてこゝろみついまはとねりのねやそゆかしき」續詞花集（戲笑）に惠慶法師播磨の講師になりてくだるに權僧正尋禪「打はへてとねりのねやにいる人ははりまかちにやあらんとすらん」仲文集にとねりのそのに男ありてとねりのうれへまさらんといふときゝて「いにしへはとねりのねやのものかたりかたりおやまつ人そあるらし」一本の詞書に法師のその男有とて法師のうれへまんといふを聞て云々歌

の初句いにしへの云々と有按に詞書は法師のこと男ありとてとねりのうれへまうさんといふときゝて云々に作り歌もいにしへのと有をよしとすべし空穗物語藏開下卷十了右にそなたの御階よりおりてみそかに出たまへば中納言みつけて南のはしよりはだしにておりおはして追つぎてなぞ君の內に入てとねりのねやのほうしのやうにてはにげ給ふぞとて引もてきて云々慧琳音義十五の卷入丁左大寶積經第一百七卷の條に車匿尼力反悉達太子家人名也云々義楚六帖十四の卷四十二丁左奴僕部に奴名ニ車匿一瑞應經云太子生時有レ奴名ニ車匿一與ニ太子一同日生也云々此車匿童子が閨を舍人の閨といふらんよし了阿法師いへりさもありけんかし可レ考

拾遺集物名にねり柿すけみ「いにしへはおこれりしかとわひぬれはとねりかきぬも今はきつへし」異本に二の句おこねりしかど云々五の句いまはきぬべし云々と有可レ考

(四)かうぢがくれ　俗にかうぢがくれといふ語ありあからさまに行かくるゝ事にて田舍人はかうぢんがくれと訛いへりこは家厨に祭れる三寶荒神棚の御前をしばしかくれて他處に居よしに心得ためり空穗國讓下卷七十七丁右に北方わざとにはあらで夕ぐれよるのまにぞこうぢがくれせらるなるや云々と有て町小路などに行隱るにいひたれば此を出處とすべし

(五)鼬なき間の貂ばこり貂貂裘　源平盛衰記卅三の卷廿七丁左依ニ行家謀叛一木曾上洛の條に木曾西國下向之時乳母子ノ樋口次郎兼光ヲバ京守護ニ候ヘトテ留置タリケルガ十一月二日早馬ヲ立テ十郎藏人殿コソ鼬ノナキ間ノ貂詩トカヤノ樣ニ院ノキリ人シテ院宣ヲ給ハリ木曾殿ヲ可レ奉レ誅其聞エ候ヘト申下シタリケレバ云々長門本平家物語十五の卷四十五丁左妹尾太郎兼康合戰の條に京の留守に置たりける樋口の次郎兼光早馬を立申けるは十郎藏人どのこそいたちのなきまにてんぼこる風情にて院のきり人して木曾殿を討奉らんとしたくせらるゝと告たりければ云々空穗國讓中卷廿四丁左にいたちのなき間のねずみばしつかまつれとてなん云々按に「てん」と「ねずみ」は同類の物なれば貂とも鼠ともいへりてんは和名抄十八の卷毛群部に貂四聲字苑云貂音凋似レ鼠黃色皮堪レ作レ裘和名天牟云々黑貂唐韻云貂有ニ黃貂黑貂一出ニ東北夷一黑貂和名布流木云々類聚名義抄佛下末卷豸部に貂音凋云々黃貂云黑貂フルキ云々以呂波字類抄七の卷天部動物門に貂テン鼠屬也有ニ黃貂一有ニ黑貂一云々又七の卷不部動物門黑貂フルキ出ニ東北夷一也云々和玉篇下豸部に貂「イヌノコトキ」又「テム」云々節用集天部氣形門に貂テン云々嚢囊抄五の卷卅八段貂蟬の條に貂ヲハ和名ニハ「テン」ト云リ云々和漢三才圖會卅九の卷鼠類部に貂鼬同和名天牟黑貂和名布流木云々按貂在ニ山中一狀類レ鼬而身長大如レ獺毛色亦似レ鼬而胸腹褐色頰短而醜其皮爲ニ鋒槍之鞘袋一時珍以爲ニ栗鼠一蓋本朝謂栗鼠與レ貂其類不レ遠而異也栗鼠乃鼠屬貂乃鼬屬云老鼬變成レ貂然乎否能治レ眯塵埃入ニ于目中一曰レ眯云々大倭本草十六の卷獸類部に貂又栗鼠トモ云栗ヲ好テ食フ「テン」トハ唐音ナルベシ鼬ニ似テ大ナリ其毛長ク黃色ナリ尾長大也人家ニ入テヒソカニ味醬ヲヌスミ食フ味醬ニツキテハ每夜來リヌスミヤマズ中夏ニハ味噌ナシ故ニ此事本草等ノ書ニハ見エズ中華ノ人此皮ヲ用テ裘トシ帽子トス貂ノ事本草集解ニ詳或曰貂ト栗鼠一類二物也鼬ハ大ニ栗鼠ハ小ナリ一物ニ非ズ本草ニ一物トスルハ誤ナリ云々などみえて栗鼠よりも大にしてそのさま鼬に隣し黑貂は倭產なし臥雲日件錄拔尤十二の卷に栗鼠乃貂鼠也と見え田村元長が庶物類纂拔萃廿二の下卷毛部に貂鼠を栗鼠の一名とし黃鼠俗名「テム」と注し小野蘭山が本草啓蒙四十七の卷獸之三に貂鼠フルキ和名トツピ朝鮮和產ナシ朝鮮ノ名物ニシテ唐山ニモナシといへるなどは共に盡さゞる說也「フルキ」は朝鮮產なれど「テン」は九州中國わたりには最多く關東にはをさ〳〵きこえず宇治拾遺一の卷四丁右鬼に瘤とらるゝ事の條に火をてんの目のごとくに燈してわがゐたるうつぼ木の前にゐまはりぬ云々古今著聞集九の卷三丁右武勇部に天井にいたちよりも大きにてんよりもちひさきものゝおとこそすれといひて云々など古書貂の所見おほかりさて本草綱目五十一の下三才圖會鳥獸三卷などに見えし貂はフルキの事ときこゆれど和名抄に貂黑貂と分て出されたるを委とすべし源氏河海抄末摘花には貂和名「フルキ」「てん」といふ獸也如レ鼠といへりと見ゆ黑貂裘の事は空穗物語藏開中卷二丁左源氏物語末摘花湖月抄本廿五丁左河海抄末摘花に杜詩注西宮記拾遺歌を引拾遺歌は中宮安子ふるきのかはぎぬを高光少將入道橫川にすみ侍けるにつかはしける「夏なれど山はさむしといふなれは此かはきぬは風をふせかん」と有されど此歌拾遺には見えず多武峰少將物

語に中宮よりくるみの色の御ひたゝれくちなしぞめのうちき一かさねふるきのかはのおほんぞあをにびの指貫のあはせの袴たてまつり給ふ御うた「夏なれと山はさむしといふなれは此皮きぬそ風はふせかん」とてなん奉るとある御かへし「山風もふせきとめつるかはきぬのうれしきたひに袖そぬれぬる」と見えたり花鳥餘情末摘花に江次第を引細流抄弄花抄岷江入楚湖月抄万水一露源注拾遺源氏新釋などはた異說なし三代實錄四十七延喜式彈正玉造小町壯衰書などにも貂裘見ゆ夫木抄雜十五衣部に知家「なれ〳〵しとこはふるきの皮衣君きますねはあたしさむけし」此下句はあたりさむけし歟はだしさむけしの誤なるべし

（六）攤打三猿庚申夜遊白麻紙簑　爲忠家後度百首庚申歌に爲忠「うちてあそふみつめたならてその外のみさるかうらはせぬとしらなん」一本に「みつめた」を「ころめこ」に作れり大鏡四の卷十五丁右右大臣師輔傳に元方の式部卿のむまごまうけの君にておはするころみかどの御庚申せさせ給ふに此式部卿まゐり給へるさらなり九條殿さぶらはせ給ひて人々あまたさぶらひてだうたせ給ふついでに冷泉院のはらまれおはしましたるほどにてさらぬだに世人いかゞと思ひ申たるに九條殿こよひのすぐろくつかうまつらんとおほせらるゝまゝに此はらまれ給へる御子をとことおはすべくは疊六いでことて打せたまひけるにたゞ一どにいでくるものかありとある人目を見かはしてかんじもてはやし給ひわが御みづからもいみじとおぼしたりけるに此式部卿のけしきいとあしうなりて色もいと青くこそなりたりけれ云々流布の印本には「ごうちて」に作りたれど古本及徒然草壽命院抄に「だうちて」に作れるを正しとす徒然草百五十七段にさいをとれば攤うたんことを思ふ云々壽命院抄に大鏡師輔公ノ傳ニダウタセタマフトアリテ重六ノ沙汰アレバ雙六ノ事也壒嚢抄ニモ攤ノ事有リ雙六博奕ノヤウニ載タリ攤ノ字恐ラクハ撒ノ字ナルベシ攤ノ字韻會ニ他干切手布也用也按也云々博奕ノ心ナシ撒ノ字音坍攤蒲賭レ錢壒嚢ニ攤ノ字書ハ誤歟「タン」ノ音ヲ「ダ」トイフハ大鏡ノ假名ヲ據トス云々野槌七の卷六十二丁右に韻會寒韻攤佗干切手布也……一曰射意一曰射數即攤錢也云々文段抄五の卷廿五丁左に季吟云野槌の

說を見れば攤の字も博奕の事に用て不レ苦にや云々壒嚢抄一の卷四十一段攤打事の條に冷然草ニ攤ウタン事ヲ思トアルハ如何ヨムベキ攤ト書ハ誤也撒ナルベシ撒打ト云ハ雙六體ノ博奕ノ事也撒トハ賭博ト釋セリ賭トハ「ノリモノ」也ノリ物ハカケモノ也博トハ博奕也簺ヲトリテ賭アル遊ハ博奕ナルベシ是ヲ攤打共言也但攤ハ他丹反「タン」ノ音ナルベシ「ダ」ト云ハ訓歟人ニ可レ問云々紫式部日記旁註本上卷十六丁右に殿上をはじめ奉りて攤うちたまふ紙のあらそひいとまさなし云々壺井義知が標注に源禮委記曰元永二年五月卅日三夜也云々立ニ切燈臺於座上一置ニ菅圓座一枚一大進清隆置ニ筒簺於圓座上一次殿上侍臣兩三人參進置レ紙自ニ下臈一上達部同置レ之次有ニ擲攤ダウチ之興事一六月二日五夜亦同云云西宮記三月部に御庚申出御御座前置ニ半疊一枚一其邊立ニ小燈臺一又以ニ大褰井筒一置ニ半疊一可レ依レ召王卿依レ召參候候孫廂置ニ御料錢一供御菓子一有レ仰有ニ集攤一打ニ高聲一者候ニ御前一最後打ニ高目一考取レ錢打破時又始打レ之云々侍中群要八の卷御庚申條に凡御庚申之儀裝ニ束孫廂一用ニ掃部寮御屏風疊等一内藏寮辨ニ備酒饌一賜ニ之侍臣一同寮進ニ碁手料錢十二貫一御料二貫共一遣ニ給侍女房一王卿依レ召候ニ御前一御厨子所供ニ菓子干物御酒一終夜間有ニ擲采戲一及ニ于曉一更有レ勅侍臣令レ奏ニ管絃一兼亦給レ祿云々三長記建久九年二月の條に廿日戊子今日從ニ閑院殿一遷ニ幸于內裏一踐祚以後初遷ニ幸內裏一雖レ非ニ新造一云々此間敷ニ圓座於東座一南第一二三間也二行對屋數レ之石次敷ニ圓座一枚於御座南方一可レ置ニ筒簺一經也件圓座予數レ之也經ニ孫庇一入ニ南第三間一數レ之何經ニ長押上一可ニ參進一設件役又必五位藏人不レ可レ勤天仁左兵衛佐能明勤レ之難レ示ニ其由一兼定高聲稱ニ遁避一之由近日作法守株無レ由仍役レ之件兼定以ニ疏氣一爲レ先次公卿著ニ庇圓座一殿下次立ニ切燈臺一次持ニ參御料紙一次賜ニ公卿一碁手紙一……次持ニ參筒簺一……次從ニ下臈一獻レ紙……次擲攤……次賜ニ祿於公卿一云々按に攤は簺をもむことにて雙六の簺を筒中にてふり動すを攤といへる也和名抄四の卷雜藝類部に意錢攤字附後漢書注云意錢今之攤錢也世間云世運ゼニウチ宇知桂苑珠叢抄云以レ手有レ所レ搓謂ニ之攤一唐韻曰挪音諾何反搓那也字亦作レ攤世間云駄搓音七何反手攤レ錢也訓ニ毛無一云々韻會小補五の卷手部に攤廣韻攤蒲ニ四數一也杜詩白晝攤レ錢高浪中集韻亦書作レ摩云々など見えて字躰手に从難也木に从るは用べからずみつめは三目にて簺の目の數なるべけれど未レ詳みざるは三猿也無住雜談四の卷十九丁右無常之言の條に先年目ノヤマヒニツヤ〳〵見エズ咳

病音拈テツヤツヤタ、ズ耳ハ久シク不レ聞侍候マ、ニ思ツヾケテ「目モ見エズ耳モキコエズ音タ、ズ三ノ猿コソタモチヤスケレ」「イハザルト見ザルキカザルヨリモナホ思ハザルコソタモチガタクケレ」不レ言不レ見不レ聞見惑易レ斷如レ彼レ石思惑難レ斷如ニ藕絲一云々「三ノ猿ハヨシヤヲドリモハ子モセヨ不」思ヲゾヨクツナグベキ」「三ノ猿ト思ハザルダニタモチナバ坐禪ノ時ノ心チナルベシ」云々一條禪閤ねざめの記五の卷用意あるべき事の條一丁左先づ人は見ざるきかざるいはざる三ツのさるをつゝしみたもつべし一切のさいなん此さるをつながぬによれりたゞよく見とゞむべき事をば見おけ聞とゞむべき事をばよく問てきけいふべき事をばよくいひとゞけよ心もとゞめず見すて聞すていひ捨つる事は必あやまちあり云々正親町亞相公通卿の雅莚醉狂集雜の卷猿歌に「傳へある事や夢にも見ずきかずいはほのかたにかゝるこけ猿」左注に樂天詩の岩ほの肩は◎此間原書全文略迷ふらんを歎きてあらまし記す者也云々井澤長秀が本朝俚諺七の卷美部に見ざるきかざるいはざる消心銓要云耳不レ聞ニ人之非一目不レ視ニ人之短一口不レ言ニ人之過一庶ヨ幾ヲ爲ニ君子一云々うらはせぬはトはせぬにて簑を投てトにや九條殿の冷泉院の御事トなはれし類なるべし歌意は打て遊ぶ三目攤にてトは九條殿の例なども有てめでたし其外のト事はせぬ事はせぬ事と知れとの義なるべし一本に二の句ころめてと有も嬬嚢抄一の卷五十二段小兒翫物字事の條に肚獨樂礫婆石拵子无木簑草薦鞆鞁輪子同類也とある肚を古本にコマと點たるはひが事にて塵添本三の卷十七丁右にコロと訓たるを正しとす此肚は簑をころばすよしの名にて雙六の類と見ゆ爲忠後度百首庚申親隆歌に「しろいあさのかみつみあくるこよひこそさいたはふれのねてあかしつれ」「さいたはぶれの」を一本に「さいたはふれに」に作れるを用べししろいあさのかみは白麻紙也寧石類書七十六の卷調度紙墨部に建内記永享二年二月十三日豐田退治之事來十六日可レ令ニ發向一就レ言進發次第一番大乘院二番一乘院三番寺門可レ爲レ如レ此之由被ニ仰下一之狀如レ件二月十三日〇〇判〇與福寺學侶衆徒中○表書案以ニ白麻二枚一書レ之以ニ一枚一爲ニ禮紙一封レ之以ニ一枚一爲ニ立紙一捻ニ上下一表書如レ例云々下學集器財門に白楮白麻魚網以上三者紙之異名也云々撮壤集中卷紙部に白麻ハクマ紙名云々延喜陰陽寮式二丁右に凡造レ曆用度者云々麻紙四張標紙料請ニ内藏寮一云々和名抄十三の卷文書具部に標紙唐式云染麻紙廿五張穀紙五十張云々藝文類聚五十八の卷紙部に董巴記云東京有ニ蔡侯紙一即倫也故麻名ニ麻紙一木皮名ニ穀紙一故網紙也云々また東宮舊事曰皇太子初拜給ニ赤紙標紙紅紙麻紙勅紙法紙各一百一云々初學記廿一の卷紙部に一云倫擣ニ故魚網一作レ紙名ニ網紙一後人以ニ生布一作レ紙絲緜如ニ故麻紙一以ニ樹木皮一作レ紙名ニ穀紙一見ニ童巴記博物志一云々などありて白麻は紙の一名なること知べし賭に紙を用るよしは上に引たる紫式部日記源禮委記三長記の文に見ゆまた綸命の書に白麻といふも白麻紙を用れば也唐書百官志一四十六の卷三丁左に凡拜ニ免將相一號ニ令征伐一皆用ニ白麻一云々此外所見おほかれどわづらはしければ省くさいたはぶれは簺戲（サイタハブレ）にて攤打事也左經記寛仁二年二月の條に十三日庚申依レ有ニ御庚申事一夜部有レ召參入及レ晩内藏寮飯酒著ニ殿上一次召ニ侍從一參ニ御前一先別ニ前後一小弓次御遊次内藏寮進ニ碁手錢一御料侍從料也集擲及レ曉更有ニ和歌一遲明也云々和名抄四の卷雜藝具部に雙六采楊氏漢語抄云頭子雙六乃佐以今案見ニ雜題雙六詩一云々類聚名義抄八の卷竹部に簺蘇代反薄サイ博サイ云々字鏡集七の卷植物部下竹部に簺サイ博類也云云以呂波字類抄八の卷左部雜物門に采サイ雙六也簺頭字已上同云々撮壤集中卷遊樂部遊樂具に簺雙六采和名サイ筒トウ云々下學集器財門に簺采二字義同博奕所レ投（モム）也夫毎ニ采目一過半用ニ重字一呼レ之云ニ重一重二朱三朱四重五重六一然至ニ三四目一云レ朱何哉其義云後一條院與レ臣打ニ雙六一採レ簺急呼ニ四三目一心中祈念若四三出來則使ニ其目爲ニ五位一時采之目轉躍而成ニ四三一院大悅與ニ簺五位一而賜ニ朱衣一由レ之呼ニ三四目一曰ニ朱三朱四一也朱色五位之衣也又唐玄宗皇帝與ニ楊貴妃一采戰之時將レ負心欲ニ重四一連呼叱骰子轉成ニ重四一帝大悅賜ニ四緋衣一云々和漢共有ニ此故事一可レ記馬骰亦采也緋衣則朱衣也云々和田酒盛草子……万葉集十六十七丁左詠ニ雙六頭一詞に一二之目耳不有五六三四佐倍有雙六乃佐叡催馬樂律歌大芹に前盤三太乃支乃由之乃支乃盤牟之加女乃止字佐伊加久乃左以乎左伊止左伊兩面加須女宇介太留支利止保之加名波女盤支五六加戸之伊知二乃左以也四三左伊也七十一番職人歌合十九番さいす

り歌に「一か二か目もきえはつるつぶれざいそれだに見ゆる秋の夜の月」「ねたやけにかたつきしたるえせ筆のかくかひもなきめをも見るかな」太閤六ヶ條に「合戰にまけ雙六のさい殿は七目くゝられはちをこそかけ」源氏物語若菜下（湖月本廿一丁右）にすぐろく打時のことばにもあかしの尼君〳〵とぞさいは乞ける云々新猿樂記に大君夫者高名博打也筒父擂（ドウノオヤヌクイテヒトニサイノメマカスレ）傍（シノナホリメレ）筆（サウノコギリメキリ）目任意（コロニ）語條盡（グレ）詞謀計究（トあシイチロタノナグレ）術五四尚利目四三小切目錐徹（すイコヒヤウサイカナサイエヤドウカナジヤウドウヤフワリトウス）一六難呉流叩子平筆鐵筆要筒金頭定（ニエイタレシナワヲサイロンシ）筒八破廉居樋垂品態筆論猶勝ニ宴丸道弘一即四三一六豐藤太五四衝四竹藤揉之子孫也云々倭漢三才圖會（十七の卷）嬉戲部に雙陸雙六握槊長行局（須久呂久以）投子采骰子（雙六乃續事始云）魏陳思王曹植制ニ雙六一置ニ投子二一唐末有ニ葉子戲一不レ知ニ誰人遂加至ニ六今按唐李賀州部雙六始因明皇與ニ楊貴妃一采戰將レ兆唯重四可ニ轉レ敗爲レ勝上擲而連呼叱レ之宛轉良久而成ニ重四一上大悅命ニ高力士一賜ニ四緋一以飾ニ四朱一也一五雜俎云……按類要云雙六乃出ニ天竺一涅槃經名ニ波羅塞戲一者是也然則始ニ於胡國一者佳也日本紀云持統天皇令レ禁ニ雙六一則可レ知本朝雙六始先ニ於圍碁一也然未レ知ニ誰人傳來一也其勝負雖レ在ニ骰子一至修練者隨レ所レ好出レ之謂ニ之目打一 重一重二朱三朱四重五重六俗謂ニ之重目一 拾遺（すくろくのいち場にたてる人妻のあはてやみなむ物にやはあらぬ」無名）云々など和漢の書に出たる擧るに遑なし景德傳燈錄（六の卷）南泉普願禪師傳に雙陸事林廣記曰……曹植始レ之也骰子事林廣記曰無ニ公六一ともみゆねであかしつれば寐ずして夜を明したるよし也右所レ答ニ於屋代弘賢之問一也

（七）五音の五義　五音を別て五義とするは天語既往語驅使語庶幾語情欲語の五なり天語とは上にありて物これに從をいふ既往語は過去也驅使語は活用也庶幾語はこひねがふ也情欲語は心に欲する也たとへば明アカシのアカは天語シは過去也往イニシは三言共に過去也乞イデのイは過去デは庶幾也書カクのカは天語クは驅使也敎ヲシフルのヲは情欲シは過去フルは驅使也

天語	既往	驅使	庶幾	情欲
ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	キ	ウ	ヱ	ヲ

右は最上德内が說也また古書おほく押韻にて論語に學而習レ之不ニ亦說一乎この習說（シフエツ）同韻にて習は從の義近習などの習におなじ學得て而從て行義（オコナフ）也また富與レ貴是人之所レ欲也不レ以ニ其道一得（ヨ）之不レ處也貧與レ賤是人之所レ惡也不レ以ニ其道一得（ヨ）之不レ去也此所欲の欲は惡の字とおなじく去聲にて入聲にあらず欲は貧也ムサボルト訓べしまた處と去と同韻也皆かゝる例也と同人いへり此人論語注釋若干卷皆韻を考て說をなせり

（八）算學珠盤　學令に凡算經孫子五曹九章海島六章綴術三開重差周髀九司各爲ニ一經一學生分レ經習レ業云々また其笇學生辨ニ明術理一然後爲レ通試ニ九章三條海島周髀五曹九司孫子三開重差各一條一云々集解に周髀釋云一卷古記云一卷今選二卷天地高計也云々日本國見在書目錄天文家部に周髀趙爽注云々晉書天文……志上に蔡邕所謂周髀者即蓋天之說也……皆得ニ於表股一者也故曰ニ周髀一云々隋書天文志上に古之言レ天者有ニ三家一……周公受ニ於殷商一周人志レ之故曰ニ周髀一髀股也股者表也云々清人孫星衍が孫氏祠堂書目（平津館叢書中收レ之）二の卷纂法部に周髀纂經二卷漢趙君卿注北周甄鸞述宋李籍音義一卷一聚珍板一明趙開美刋本一曲阜孔氏刋本云々乾隆四十一年二月陸錫熊紀昀戴震等が孫子算經提要（武英殿聚珍板收レ之）に臣等謹案云云蓋如ニ淳風之注一周髀算經一因ニ鸞所レ注更加ニ辨論一也云々知不足齋叢書にも收たるを得て寬政年間刋刻せら此周髀は漢土太古の書にて本朝に傳はれるはたふるし五曹海島吳子夏侯陽などが算經も漢魏の代の書にて隋唐の書に記したるを晩唐より五代宋時にいたりては學者算經をおとしめ遂に六藝の一缺たるがごとし元趙城元鎭が算學啓蒙序に魏唐間算學尤專（如ニ劉徽注ニ九章一續ニ損重差一淳風之解ニ十經一發ニ明補問一博綜精徽一時獨歩自ニ時厥後一科目既廢算法罕傳信如レ是也といへるにておもふべし）日本書紀は宣明曆に據られたれどはやく周髀傳はれるをおもへば曆日推歩の術なしともいふべからず吉備公傳來の天文曆數は三

善小楫賀茂安倍などその家業分れこしをやゝ衰微の後寛文延寶の比山城國嵯峨の吉田光由といふ者算法統宗に據て塵劫記を作れり廣益書籍目錄五の卷算書部に三塵劫記大本小本吉田七兵衞作とあれば三卷なりけんを群書一覽六の卷九十七丁左に一卷と記せるは未見闇推の說也古本塵劫記の跋に金のなる木の圖ありて右旁に鐘音百八人間福祿深抽二盤志一俄企□□左傍に社數三七雨中闇碁色赤似レ丹人集如レ市の句ありこはかけまくもかしこき神祖尊のあそばしゝ金のなる木によりて作り出たなるべし此跋の一葉最上德内相摸國にて得つゝとて珍藏せり 然て後には算書塵劫記をもて題目とせざるは少し曆學は上古簡疎なるも世々を歷て精密になりもてき宋世朱松庭郭守敬など天元招差の術を興し授時曆を作り出てより今にその流を汲ざる者なし西洋曆の本輪均輪の說清國の橢圓の說各別なれど本源は授時曆盈縮の說をまぬかれず本朝元祿の比關新助藤原孝和傑出して點竄術を作り又上は天文下は地球の術を研究大成纂經四十三卷を作成せるに其中三卷逸して傳らざるを德内武藏多摩郡八王子宿の鹽野光迪が許にて關氏の手澤本三卷を得たり光迪が跋に光迪嘗學二算術於染谷子一染谷子名春房武之八王子鄕横山庄小比企邑之人也一日染谷子以二此書一授二于余一曰是則關子豹先生自筆之秘書也我學二算於相之凹澤

邑石谷昌益子一昌益子學二算於關先生一是以所二傳來一之書也我老矣吾子秘藏哉於レ是光迪受レ之藏レ匱也多年矣享和壬戌之秋最上君督二官材一經レ年在二于此鄕一頃蓋如レ故時々往來情好日密癸亥之秋竣レ事歸二于江都一臨レ別不レ堪二戀々之意一光迪嘗聞富貴者送レ人以レ財仁者送レ人以レ言光迪不レ能二富貴一又不レ能レ竊二仁者之號一送レ君以レ言因聊取二此一冊一以爲レ贐享和癸亥秋七月武中八王子鄕鹽野光迪謹識と見ゆ光迪俗稱周藏八王子千人同心組頭也千葉玄之が唐詩選掌故に跋せる人也右の關孝和は關流算學の祖也其門に荒木村英建部賢弘三俟久長澤口一之青山利永など世に聞ゆ賢弘門人に中根上右衞門璋あり近江淺井郡の產にて醫を業として中根元圭と稱す曆算の學に秀て正德元年大坂銅座の大戸棚役に登用せらる享保六年幕府召見ありしに應對御旨に叶ひ家業をもて昵近し奉り毎年黃金三百兩を賜りて俸祿に宛たまへり同十七年五月奉レ敎伊豆國下田邑にくだり天地日月星辰を測量す其時の上書の文

日月去二地面一實數

壬子之歲八月既望

官命某等◎此間缺文

享保十七年歲次

敬謹布算云々頭書に本文 路程法 以二六尺一爲二一步一以二六十步一爲二一町一以二三十六町一爲二一里者一とありまた荒木村英茶談云古來之算師者 毛利勘 兵衞◎此間缺文 此卜信が弟子なり云々彼此の說を考合せて算家の流傳辨知べし近頃西洋の 算法傳はりて 對數表を用ひ（對數表は西洋の語に呂我利津牟といへり）乘除の術に易かしこの測量及淸の時憲曆曆象考成儀象考成すべて比例十餘條これと點算術變換術適盡術に據て押究れば比例七十餘條に至れるよし德内が測量算策に論じて本朝の算理卓越せること唐土西洋の及所にあらず因に云珠盤は漢土にては元代より起れるにや元末の陶宗儀が輟耕錄廿九の卷井珠の條に凡納二婢僕一初來時云二擂盤珠一言不レ撥自動稍久曰二算盤珠一言撥レ之則動既久曰二佛頂珠一言終日凝然雖レ撥亦不レ動此 雖二俗諺一實切二事情一と見ゆ淸人梅文鼎が古算器考（曝書亭珠塵子部天文曆算類收レ之）に古算法……其製矣と見ゆ……宋算用籌之 明證云々（丹鉛總錄八の卷算法條）とも云り本朝に傳はれるはいつばかりなりけん荒木村英茶談に吉田光由が門人横川玄悅

といふあり後に算盤級聚の術を作る此術の祖也と見えたれどはやく明曆三年刊行の柴村盛之が格致算書に八算見一などの珠盤圖を出し山岡元憐が寶藏三の卷にも十露盤あり此書は寬文十一年二月其子元恕跋をそへて刊行したれど著作は其已前也また惠空が節用集大全（延寶八年に門弟子等が校合して刊行せる也）三の卷曾部 門 に算盤ソロバンなどあれば玄悅より前に起れること疑なし寬延三年刊行の中村三近子が一代書用に近代にいたりて三善保憲といふ人十露盤をはじめたりといへるは他の證據もなく往古の賀茂保憲をおもひ誤れるにやとおぼつかなしされば珠盤漢土にては元末に起り本朝にては寬永の末正保の比などにや傳はりけん「ソロバン」と云は揃盤（ソロヒバン）にて珠の揃たる盤の義にやまたは珠の鳴音の「サラ〳〵」と聞ゆればいふにや「サラ〳〵」は「スラ〳〵」「スル〳〵」など同語ときこえ「ソロ」も「サラ」の通音なれば也雍州府志七の卷十五丁左土產門に算盤倭俗謂二十露盤（ソロバン）一凡算盤以二竹串一貫二十箇木顆一並二置盤上一數行凡算レ物時以二斯木顆一爲二遂一一之徵一而算レ之十露呈二露十箇顆一之義也造レ之人多在二京師京極北一又於二山科鄕大谷一製レ之と見えたれど呈二

露十箇顆ニ之義といふは字に据たる鑿説也珠盤もと算木盤によりたるものにて上下の珠數算盤の目十露は十字の訓と露字の音を假用たるものにて意義あるにあらず算盤もと算木を用るをりの算盤に据てつくり出けん上下の珠數算盤の目數におなじそは算法節用など古き算書の圖をみて知べし德内曰天明五年蝦夷にて西洋人の算盤を見しに其體皇國の製よりも左右短く天地廣し中隔の横木なく天上の五珠もなし但珠十を貫たるのみにて其珠もイラタカにはあらで常の念珠のさましたりこれを左の手にて縱ざまに持て右手にて横さまに撥くゆゑいと不便也異人皇國の算術の横に撥く捷徑を見てこよなく驚嘆せるよし語れり然ては珠盤西洋より傳はれる物にはあらじ

(九)火中に入井丙丁童子に傳ふ　愚問賢注奥書に一たび上覽の後被レ入ニ火中一候之樣可レ得ニ其意一候哉頓阿上云々後普光園院良基公の嵯峨野物語に畠水練とかやの風情ばかりおほく侍りやがて火中に入らるべしと也云々按に他見を憚書を火中に入よし今も常にせうそこの奥などに書事也又正徹の慰草に都よりうつりかはりし身のありさまの寢覺なぐさめとも成ぬるをおぼえずしるし侍るなるべし今は彼志にはあらず丙丁童子に傳へ侍るべし云々此丙丁童子に傳ふといふも火中に入るよし也丙丁童子は火の神也拈評三百則中卷十二丁右に峯云丙丁童子來求レ火眼云好語祇恐儞不レ會師云丙丁屬レ火將レ火求レ火似レ將ニ自己一求自己ニ云々師云丙丁求レ火是同火是異火不ニ是火火相合一又不ニ相背一云々九の卷知事部にも見ゆ又禪林類聚十四の卷水火部に上方益々撥ニ動寒灰一火便明曉來山外尚熒々堪レ嗟法眼堂前客猶向ニ南方一問ニ丙丁一云云などあるを見て知べし

(十)「みづはくむ」「みつわぐむ」「みづはさす」「みつわさす」後撰雜三につくしの白川といふ所にすみ侍けるに大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに水たべんとて打よりてこひ侍りければ水をもていでゝよみ侍ける檜垣の嫗「年ふれはわか黑髮もしら川のみつはくむまでおいにけるかな」正義に作者檜垣女は筑前の國の者也色好ける女成べし水者汲までと云て三輪組までとそえたり年の老たるかほをみつわぐむと申也或老人云みつわぐむと云事老人かゞまり居臥也左右の膝立てやどしたる臥也まさに三輪ありと見ゆ或云みつわぐむまでとも云みづはさすまでとも申て皆老體の心とおもへり組指はおなじ事也但此義いさゝか不審也老かゞまりたればとて三輪あるべしや此詞あしく心得て今案によめるにや滿態すと云詞あり是も老人の事也老子傳云昔何國哉一人の老翁に二人の男あり兄弟はたちにたらず父九十餘り老たることを天に祈て今一度わかくなすべしと功に申二人無レ貳以ニ至孝之志一祈ニ天經一數日一夢に一人童子來りて示て云汝家の西に大河ありかの川の南に万仞の淵ありかの淵をはやく埋て其上に搆レ墳燒レ香修レ心可ニ祈請一然ば汝等が父立所に還ニ壯年之昔一云々二人子一夜一同に此夢を見て大に悦て行向て見ニ彼淵一其體更非レ可レ及レ力雖レ然漸々埋レ之不レ經ニ幾年一此淵を埋む祈請之趣以ニ夢之所見一然而三七日經て其朝に父を見るに白髮乍に黑く容貌甘ばかりと見ゆ一父心二子悦いふにたらず于レ時父悦云汝等が運レ土埋レ淵滿レ態てのゆゑに今みつわ座するほどになれりといふ也とぞ傳をしへ侍りし云々按に老子傳と引たる説は取に足ざる僻事也○檜垣嫗家集においにきはめてすみかもなくなりて手づから水くむきはに成て桶を引さげて出るにしも國の守しばし出らるゝ道にさしあひて目かどなるもの見つけてなどかくはなどみとがむるに名高きひがきなりと人のいへばはたかくるゝによびいづはづかしけれどかくれ所もなくて桶を岸におきてゐたればいかでいとかくは有しぞあはれなどあればおもひわびて「おいはてゝかしらの髮は白川のみつはくむまでなりにけるかな」按に袋草紙三の卷廿五丁左に此家集を引たれどこよなくたがひありそは末に擧るを見て知べし○大和物語上卷四十丁右につくしにありける檜垣の子といひけるはいとらうたくをかしくて世を經けるものになんありける年月かくて在わたりけるを純友がさわぎにあひて家も燒ほろび〔物具もみな取れはてゝいといみじうなりにけりかゝりともしらで野大貳(好古)うてのつかひにくだり給て云云頭白き媼の水くめるなんまへよりあやしきやうなるいへに入けるある人ありてこれなんひがきのごといひけりいみじうあはれがり給てよばすれどはちてこでかくなんいへりける「むは玉の我黑髮は白川のみつわくむまで成にける哉」とよみたりければあはれがりてきたりける」祖ひとかさねぬぎてなんや

りける按に後撰及家集の詞とはおなじからず○袋草紙三の卷廿五丁左に肥後國ノ遊君檜垣老後ニ落魄者也……大貳輿範ニアヒテ詠レ之云々○和歌童蒙抄四の卷翁部に「オイタレハカシラノカミモシラカハノミツハクムマテナリニケルカナ」六帖ニアリミヅハクムトハ支離トゾカケル サレバエタモハナレ〳〵ニナリヌレバツギメモサヽヘズ老カヾマリテヒザノ左右ノ耳ノ上マデサシアガリタルヲ云也云々按ニ此歌古今六帖の今本には脫たり○色葉和難集九の卷美部にみつはくむ後撰「年ふれはわか黒髪も白川のみつはくむまて老にけるかな」初學抄云みつわぐむとは老かゞまるをいふ也云々按にみつはくむに三輪ぐむの說を引注したるは誤也○後拾遺雜五に冷泉院東宮と申ける時女の石井に水くみたるかたゑにかきたるをよめとおほせごと侍りければ源重之「としをへてすめる清水にかけ見れはみつはくむまて老そしにける」按に一本には清水を泉につくれり奥義抄上末卷四丁右に後撰の檜垣嫗が歌と此後拾遺の重之の歌を出せしに我黒髪をかしらのかみに作りすめる清水をすめるいづみに作りたり○濱松中納言物語一の卷の歌に「月かけのうかへるみつはくむまてにあはれいくよをなかめ來ぬらん」按にこれは檜垣嫗が歌によりて詠るなり○源重之集上卷に枇杷殿のいはゐに女の水くむさしのぞきつゝかげみれば「年をへてすめるいつみにかけ見れはみつはくむまておいにけるかな」按に後拾遺雜五にも載て詞書にも歌にも異同あり○新葉集雜下に老後述懷を從三位國量「うき事にさらてもゝろきわか涙みつはくむ身と袖ぬらしつゝ」○散木集三の卷秋に七月七日の心をよめる「おいぬれはたなはたつめにことよせてとりもわたらぬみつはをそくむ」又五の卷別離にとほき所に思ひたちける人の秋風ふかばといひたりければつかはしける「秋までもいかゝはまたんあすかゐのみつはくむまてなれる身なれは」○宗長手記下卷四十五丁左に晩涼に「すみうつる影はつかしなうつもれし蓬かもとのみつはくむまて」○藻鹽草十六の卷人事廿四老部にみづはくむみづはさす同事なり云々○東野州聞書七丁左寶德元年八月七日の條に爲世の歌に「君にわれみつわくむまてつかへきぬひとり二の道をきはめて」とあるは道の奥儀を極たるにあらず我せんどをとげたる義をよみたる也云

云○雲井御法にみつわぐむ迄なれる老のこしもかがまりて道行やらず云々○舊本今昔物語十二の卷多武峰增賀聖人第卅三に聖人モ自ラ和歌ヲ讀テ云ク美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志幾岐 法華驗記下卷多武峰增賀上人の條に或與ニ和歌一令レ讀ニ別歌一聖自唱ニ和歌一其詞曰美豆波佐須也曾知阿末利能於伊能奈美久良計能保禰耳阿布曾宇禮志幾續本朝往生傳沙門增賀傳に兼詠ニ和歌一曰水輪指矢曾千餘之老乃浪久良希之骨爾遺爾介留哉同流布印本に支離八十有餘之老乃浪海月之骨爾逢爾計留鉋按に舊本今昔物語法華驗記の二書は同語にて美豆波を美豆和と通はし書るのみ續往生傳は下の句いたくたがへり又ミヅワサスを支離と書たるは類聚名義抄に例あり○袋草紙四の卷廿五丁右に增賀上人「みつはさすやそちあまりのおいのなみくらけのほねにあひにけるかな」按に續往生傳と同歌なるを草假名に書たるのみ○長明發心集一の卷十五丁右にすでに聖衆のむかへを見てよろこびてうたをよむ「みつはさす八十あまりの老の浪くらけのほねにあひにけるかな」○續世繼の序一丁右にみづはさしたる女の杖にかかりたるがめのわらはの花がたみにわらびをりいれて云々○能因歌枕六十七丁左にみづはさすとは老かゞまるをいふ云々○和歌色葉集上の三卷七丁右人具にみづはさすおいかゞまる也一にみづはくむに作る云々○清輔初學抄二の卷由緒詞にみづはさす老てかゞまる也云々言塵集三の卷七丁右にみづはさすとは老かゞまるをいふ膝がしら二ッとおとがひの一所によるを云也○類聚名義抄僧中卷隹部に支離ミヅ禾サ爪云々按に續往生傳流布印本增賀上人歌に支離と書てミツワサスと讀せたり○爲尹千首に三輪「やまとちやその名もしるき神垣の杉も老木のみつわさすらん」○吳竹集九の卷廿七丁左美部にみつわさすくむも同三輪組は老かゞまりたる體也一說ひざとかしらとおとがひと三ッ一所によるをいへり又說こしのかゞむ事也云々長明無名抄下卷四丁左道因歌に志深事の條に講師の座のきはにわけよりてわきもとにつとそひゑてみつわさせるすがたに耳をかたぶけつゝ他事なく聞ける云々按に右に擧たるは美豆波左須とも美豆和左須ともみつわさせるともいへり○源氏夕顏湖月本卅三丁左にこれみつがちゝの朝臣のめのとに侍しものゝみつわぐみてす

み侍る也云々河海抄に日本紀曰水神罔象女罔象此云美都波伊弭諾尊所生神也髮白て老嫗體也といへり後撰「年ふれは我黒髮も白川のみつはくむまて成にけるかな」一説としよりぬればこしかゞまりせぐゝまりて二の膝とがり出たる中にかしらまちはりて三の輪をくみいれたるがごとく也云々按に此にはみつわくみてと書たり○夫木抄夏一廿二丁左早苗部に常盤井百首門田早苗源仲正「かまともるみつわのおみないほりよりはひ出の小田のさなへとるみよ」按に此歌はみつわとのみよみたり歌林拾葉三の卷十一丁右にかまど守竈守也〔云々みつわのをみなはとしよりたる女也みつわくむと云心也腰膝頸一所にかゝまりたる故三輪組と云云々〕と注せり○綺語抄中卷人形部にみづはなす美都波奈須「みつはなすわれかみそとはしれれともおほしねかひつちとせのいのちを」按に此歌にはみづはなすとよめり不審也○契沖の源注拾遺一の卷夕顔にみつわくみて孟日本紀云々今案罔象此云美都波みつわくむと假名異也又くむの詞そへりみつわくむを又はみつわさすともいへり日本紀を引說は誤也云々按に此契沖が說ひがことなり○賀茂眞淵の源氏物語新釋三の卷夕顔にみづはくみて今昔舊本十二かの檜垣の嫗がよめるも同じ云々按に齒のまばらに落て上の齒下の齒と三ッさし合くみ合やうなるをいへりといふは誤也○谷川士清の倭訓栞三十の卷美部廿三丁左にみづはくむ老人の體をいへり〔按するに詩の注に兒齒老人齒落更生と見えたり瑞齒別天皇の御名によれば兒齒は長壽の相なれば瑞齒といふべしくむはめぐむと云が如し或は三齒組にて僅かに殘れるをいふとし或はみづわくむにて三輪組の意とすよて莊子の支離をよめりされど後撰集の詞書に水たへんとて打よりてこひければと見えたれば」三輪にはあらじ村田春海翁の假字拾要にみづはくむみづはさす師說に……此詞見えたり○本居春庭が詞八衢下卷廿八丁左にみつわくむ源氏夕顔にみつわぐみてすみ侍る也後撰雜にしら川のみつわくむまて老にけるかななどあり云々按に後撰の歌を引てみつわくむと書たるは誤也みづはと書べし○與清曰「みつはぐむ」とも「みづはさす」とも「みづ わさす」とも「みつわぐみて」とも「みつわさせるすがた」とも「みつわのおみな」とも「みつはなす」ともさまざ〳〵にいへれど檜垣嫗が集後撰集などに「みづはくむ」と書き舊本今昔物語に美豆波左須と書たるを出處とすこは谷川士清が詩經の注の兒齒老人齒落更生といふを引き瑞齒別天皇の御名によれば兒齒は長壽の相なれば瑞齒といふべし「くむ」は「めぐむ」といふが如しといへる說千古の確論也假字拾要に稚齒にて老たる人の又小兒の如き齒の生るをいふならんかといはれしは士清が說に闇合せり「みづ齒さす」も兒齒の指出るにて指は枝の指氣色の指なごいふにおなじされば美豆波久牟美豆波左須同語也と知べし檜垣嫗がみづはくむまでとよめるは稚齒に水をよせたる也水を「ミヅハ」と云は罔象を「ミヅハノメ」といふを河海抄に引れたるがごとく語意は水秀也波秀も同く花の義也浪花を浪穗水花を水穗といへる也井華水などいふ名目をもおもふべしみづはくむみづはさすを老人の事として後にはその貌をいふ事ぞと心得三輪組といふ說おこりて中頃よりはおほくさる心に用たりそれは假名もみづわぐむと書べし字治拾遺十二の卷十四丁右にかいわぐみと云詞も見ゆみつわさすと書たるは走を波志流和志流などいふ類にて通音なれば事もなけれどなほ美豆波左須と書べし「みづわさせるすがた」又は「みづはなす」などいへるは共に誤也

松屋筆記卷之七十七

平小山田與清稿

(一)三十六詩仙三十六歌仙卅六禽卅六洞天卅六寺卅六僧卅六峯卅六水酒卅六失道家卅六部　平戸侯の藏物に三十六詩仙の像あり羅山詩集六十九の卷に六六詩人圖賛有て小序に別墅壁書正保二年閏五月爲二之賛一其餘十四人使二春齋画三作一之といへる是也されど六六詩人と有て詩仙とはなし筆者不レ詳蓋狩野家の筆意なり陶潛鮑昭陳子昂杜子美孟浩然岑參王昌齡劉長卿柳宗元白居易盧同李商隱靈徹邵雍蘇舜欽蘇軾陳師道曾幾陳與義黃庭堅歐陽修梅堯臣林逋寒山杜牧李賀劉禹錫韓愈韋應物儲光羲高適王維李白杜審言謝靈運蘇武已上卅六人也羅山詩集六十九の卷にまた三十六名臣三十六武將三十六將等の書圖の賛ありいづれも當時撰出たる物と見ゆ三十六の數及詩仙の名は漢土の書に出て埤雅一の卷の釋魚ノ龍の條に鯉三十六鱗具二六六之數一六陰也云々漢書天文志に春秋二百四十二年間日食三十六云々北史魏成帝紀に成皇帝諱毛立統二國三十六大姓九十九一威振二北方一云々五代史吳世家に徐溫所二與起一レ事劉威陶雅之徒號二三十六英雄一云々東都事略に宋江以二三十六人一橫二行河朔京東一官軍數萬無二敢抗者一云々文選班固西都賦に離宮別館三十六所云々續博物志一に中國有二洞天三十六所一皆謂二之天一云々皆仙人所レ居也云々駱賓王詩に朗詠二ノ九ォ八月十五夜ノ條漢家離宮三十六云々白居易詩に我昔三十六寫貌在二丹青一云々賈島詩に晴峯三十六侍立上二春臺一云々蘇軾詩に仇池九十九嵩山三十六云々范成大放魚行に昂藏赤鯶亦垂レ頭背負金鱗三十六云々王庭珪題二宣和御書一詩に玉鑰宮扉三十六誰識連昌滿宮竹云々范成大詩に珍重北窓山六六使君名與レ汝俱傳云云楊万里詩に行穿六六三徑來往紅々白々間云々黃庚詩に銅匜艾納翠氤氳六六屏山酒半醺云々花蕊夫人詩に三十六宮連二內苑一太平天子住二崑山一云々金章宗詩に三十六宮簾盡捲春風無二處不一レ楊花一云々邵子詩に三十六宮都是春云々などおほし三十六計の語もこれかれものに見ゆ大藏法數六十六の卷四丁同卅四の卷七丁の細字三藏法數四十八の卷十一丁摩訶止觀九ノ一の卷四十二丁などに三十六物の不淨の名目あり詩仙は釋皎然

が詩式に此爲二詩中之仙一云々韓愈酬二王舍人雪中見一レ寄詩に爲有二詩仙鳳詔來一云々白居易與二元九一書に知レ我者以爲二詩仙一不レ知レ我者以爲二詩魔一云々王建詩に上界詩仙獨自行云々姚合ガ別二賈島一詩に野客狂無レ過詩仙瘦始眞云々これらに據て六六詩仙の名を設しなるべしされど公任卿の三十六歌仙をまねびて後人のしいでたるにて漢土の人のしわざとは見えず公任卿の三十六歌仙もかしこの飲中八仙歌などより思ひより三十六洞天の仙宮に詩仙の字面をとりあつめて作り出されたりとおぼゆ歌仙の名は古今集序の六歌仙を本とす公任卿三十六歌仙を撰ばれし事は袋草紙後拾遺集序などに見ゆ後に範兼の後六六撰作者未詳の中古三十六人歌仙中三十六人歌仙新三十六人歌仙女房三十六人歌仙續女房三十六人歌仙弘長三十六人歌仙源氏三十六人歌仙榮海僧正の釋門三十六歌仙の類つぎ〳〵出たり因に云三十六人集は千載集雜中に大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつかはしけるなかに故大炊御門の右大臣の書て侍けるさうしにかきておしつけられて侍ける大皇大后宮「このもとにかきあつめたることのはをわかれし秋のかたみにそ見る」返し權大納言實家「木のもとにかくことのはを見る度にたのみしかけのなきそ悲しき」云々契沖河社に三十六人集の論あり拾芥抄上末卷に歌人三十六人の略傳を記したれば可レ閱頭書抱朴子一ノ十三丁ウに三十六石立化爲レ水(氷歟)消レ玉爲レ粉云々又廿七丁ォ火レ之三十六日成云々又卅一丁ォ合レ之三十六日成云々五代史六十一卷十三丁ォ徐溫傳に行密所二與起一レ事劉威陶雅之徒號二三十六英雄一南史五ノ三丁ォ李白集四卅三丁ォ同十三八丁ウ續高僧傳一ノ八丁ウ寶唱傳に旁置二三十六院一云々史記始皇本紀十一丁ウ秦分二天下一爲二三十六郡一漢武時始通二西域三十六國一統紀卅三ノ六丁ォ佛祖統紀卅六十六丁ォ釼鹿張角奉二事黃老一以二妖術一教授云々八州之人莫レ不二擧應一凡三十六方方猶二將軍一也大方万餘人小方六七千云々抱朴子一ノ十五丁ウ三十六石同卅四丁ォ三十六日淮南地形訓十丁ォに海外三十六國云々家語五儀解王肅注に此具博三十六道也云々鶴林玉露八ノ七丁ォ六六峰前只一家卅六園能改齋漫錄七三十六禽谷響集七三議一統上七十丁ウ新猿樂記八丁ォ以呂波字類抄左部動物門佛祖統記卅九ノ十六丁ウ道家三十六部同四十四九丁ウ三十六僧嘉泰普燈錄十九の卷福州清涼垣禪師の條に可憐龜逐天下人六六元來三十六云々佛祖統紀十三四丁ウ本誠法師傳に昔智者造二三十六寺一像八万軀云々大論に酒ノ三十六失あり類聚名物考飲食二傳燈錄廿七ノ十三丁ォ智者大師建二造寺三十六所一陸放翁詩選三の卷月夕詩に今年遊二青城一三十六峰巒云々同七の卷春晚詩に一百五日春郊行三十六溪春水生云々また寄二題朱元晦武彝精舍一詩に山如二畫少一三十六水似二邛郲一九折途云云佩文韻府麻百廿八丁ォ三十六牙

(二)さいの河原　富士人穴草子十五丁ォに大ぼさつ仰けるは日本のしゆじやうはぢごくぐらくをばおとにきけども目に見ることあらじいざや六道を見せんとておもむき給へりいかに仁田うけ給はれ地獄奉行は

六人あり第一番には宮根の權現第二番には伊豆の權現第三番にはしら山のごんげんだい四ばんにはみづから第五ばんに三島の權現第六ばんに越中の國のたて山のごんげんこれは無間地ごくのあるじにてましますされば奉行に放されたる者はたすかりがたきなりまづさいのかはらを見せんとて立出給ふこゝに河原あり此河原に二ッ三ッ七ッ八ッ十二十三のをさなきものどもが出千万とも數しらずなみゐたりかの河原にをさなきものがいし塔を組あげておけば惡風出て吹ちらすそれをあつめてつゝまん〳〵とする所にかたはらよりくわえん出て石も河原もほのほにもえければをさなきものどもほのほの苦患のかなしみ逃んとすれども逃もやられず父よ母よとさけべども其かひなかりけりさてほのほにもえて白骨となるやゝはるばる有て地藏菩薩は錫杖を持てかきよせ〳〵てもんに曰く現在未來しゆはつこつをんこんふそくによらいいちこんふてうたさい諸惡道と此文をとなへ給へばもとの形になりにけり仁田申けるはあれはいかなる罪の者にて候と申大ぼさつきこしめしあれこそ娑婆にて親の胎内にやどり九月がほどくるしみを母にさせておやとなり子となりてその報恩をも送らずしてむなしく成たるものが惡をうけて九千歳也母の泣涙たまりて血の池と成也云々鈴木忠侯が小窓間語七十二段（二の卷十一丁右）に山城國紀伊郡にさひの里あり三代實録貞觀十三年閏八月制に百姓葬送の地を定め給ひし中に下佐比里上佐比里あり勅曰件河原是百姓葬送地也また佐比寺延喜式ニ所レ謂九原葬送轜車更留ニ櫃於橋頭一などみえしむかしなき人おくる所ゆゑさひの河原の地藏と呼しより末々は幽冥の事としけるやと尾州天野氏の說也云々天野信景鹽尻（四ノ上卷）に俗間にさひの川原にて冥途の事を云石塔つみ水注ぎなどして靈魂に薦るは經說ありやと問人侍りし云山城國紀伊郡に佐比の里あり（津島河原）三代實錄貞觀十三年閏八月制して百姓葬送の地を定め給ひし中に下佐比の里上佐比の里あり勅して曰件河原是百姓葬送地也と又佐比寺（延喜式所レ謂七箇寺之一也）九原葬送之轜車更留ニ櫃橋頭一などみえし昔なき人をおくる所なるゆゑさひの河原地藏尊と呼しより幽冥の事とし侍るやらん云々又（二の中卷）さひの河原の地藏の事前に記す是もと城州の俗諺なれど久しく世に傳へ冥途のごとくあやまりいへり精靈祭して飲食

おほく強ひ進めて腹飽するわざもじゆづごめんといへる俗語も其所によりていひならはし侍るとなん云云（鹽尻百卷今殘缺本廿餘卷存ここに引る本は朽木兵庫助亂本を集めて假に卷の名を定め其上中下などおほせたゝなれば原本の順次にあらずされば前後錯置おほく古き躰裁にはたがへりと知るべし）東遊行嚢抄十三の卷宮根山の條に道祖河原湖邊ニ石像ノ地藏菩薩數十體幷石塔多アリ右ノ路ノ畔ニ道心者ノ庵五宇アリ常念佛ヲ修スルト云此石像ノ邊ニ小石ヲ塔ノ如ク重テ數モ不レ知多アリ是ニッキテ怪シキ俗說アリ略之云々西遊行嚢抄三の下卷に信州和田峠ヲ下レバ道祖河原路畔左右ニ小石ヲ積重テイクラトモナクアリ行客是ヲ崩セバ夜ノ間ニ又モトノ如ク積テ在ト云相州宮根ノ湖邊ニモサヒノ河原ト云處アリ異俗ノ說共ニ不レ異イカサマニモ不思議ノ一也云々淺井了意ガ東海道名所記二の卷三丁右にその次にさひのかはらあり右の方にて往來の輩石をつみ念佛申てとほる也左の方に彌陀地藏の堂あり不斷念佛の所也尉が島右に見ゆ箱根の入口は番所也女の往來を改る關所也云々說經曲の賽の河原の詞に歸命頂禮世の中の定がたきは無常也親にさきだつ ありさまに諸事のあはれをとゞめたり一ッや二ッや三ッや四ッ十より內のをさなごが母の乳房を離れては佐比の河原に集りて晝の三時（トキ）の間には大石はこびて塚につく夜の三時の間には小石を拾ひて塔をつむ一重積では父のため二重積では母のため三重つんでは西をむきしきみほどなる手をあはせきやうり兄弟わが爲とあらいたはしやをさなごはなくなく石を運ぶ也手足は石にてすれたゝれ指より出る血のしづく身うちを朱（アケ）に染なして父上戀し母こひしと唯父母の事ばかりいふては其儘打伏してさもくるしげになげく也あらおそろしや獄卒が鏡照日の眼にてをさなきものをにらみつけ汝等が積塔はゆがみがちにて見ぐるしゝかくては功德になりがたしとくとく是を積直し成佛ねがへと呵（シカ）りつゝ鐵のしもとを振あげて塔を殘らず打散すあらいたはしや幼子は又うち伏て泣さけび呵嘖（シカク）にひまぞなかりける罪は我人あるなれど殊に子供の罪科（ツミトガ）は母の胎内十月（トツキ）の內苦痛さま〴〵生れいで三年五とせ七とせをわづか一期に先立て父母に嘆をかくる事第一重き罪ぞかし母の乳房にとりつきて乳の出ざる其時はせはりて胸を打たたく母はこれをもしのべどもなどてむくいのなかるべき胸を叩くそのおとは捺落の底になり響き修羅の

皷ときこゆ也父の泪は火の雨となりて其身に降かゝり母の涙は氷となりて其身をとづる歎こそ子ゆゑの闇の呵責なれかゝる罪科のあるゆゑに佐比の河原に迷來てながき苦患をうくるとよ河原のうちにながれあり娑婆にてなげく父母の一念とゝきてかげうつればなうなつかしの父母や飢を救てたび給へと乳房したふてはひよれば影は忽消失て水はほのほともえあがり其身をこがしてたふれつゝたえ入ことは數しれず云々按に佐比原の河原の說は右に引出たるにて知べし小兒石塔を積因緣は法華經方便品に乃至童子戲聚レ沙爲ニ佛塔一如レ是諸人等皆已成ニ佛道一と見ゆこれらを本据にて作り出けるにや可レ考 頭書 法音抄二卷六十六丁左 奉都婆小町の注に今の世にさひのかはらとて童子のいさごを積て塔をつくるまなびをなす事 相摸國箱根山の上越中の立山の邊にある事也云云

(三)師子舞　師子舞の事庭訓往來に見ゆもと漢土より傳へしわざ也白氏文集四に西涼伎假ニ面胡人一假ニ獅子一刻レ木爲レ頭絲作レ尾金鍍ニ眼睛一銀帖レ齒奮ニ迅毛衣一擺ニ雙耳一如ニ從流沙一來〻万里上紫髯深目兩胡兒鼓舞跳梁前致レ辭云々 文献通考四夷樂考條三才圖會ナド考ベシ

(四)住持　義堂日用工夫集三の卷六十七丁左 永德二年五月七日の條に唐土宋朝每州置ニ天寧一有ニ一尊宿一名太息云住持之濫始ニ於此一矣云々 空華集十二廿七丁ウに住持五緣 頭書 法苑珠林四十二住持篇アリ

(五)福引　日工集四の卷十丁 至德二年八月十五日の條に會記君出ニ雜物一拈レ鬮余得ニ山水屏風六曲者一雙一蓋座中第一尤物也云々これ今の福引也

(六)帶引の興　今の世帶引枕引手拭引などいふ戲あり日工集四の卷十六丁ウ至德三ノ二ノ四の條に叙ニ帶引之興一君曰服ニ吾帶一來否余乃出ニ帶端一而示レ之君笑レ之而已云々 頭書 筆記百十二ノ廿五ニ素襖引袴引肩衣引小袖引などご有可ニ考合一八十ノ十九ニ帶引ノ下有可レ考

(七)花御堂　日工集四の卷廿一丁ウ至德三ノ三ノ十七の條に余新造花亭前面揭ニ華瑞二字一而爲レ額恰好逢ニ絕海之至一即借レ手而令レ書レ之華亭之記詳ニ于下一也云々また廿二丁ウ四月八日の條に新造花亭 蓋去年佛誕日諸行者爭取ニ華亭裝飾一有レ作ニ喧撓一其故者本寺例掌紀綱……向ニ新華亭內一識取云々浴佛會の事藝苑日涉六の卷廿一丁ウに見ゆ花御堂濟北集六ノ二丁 四月八日造ニ花堂一

(八)恁麼什麼作麼　傳燈錄佛祖統紀碧巖集五燈會元などの類に恁麼什麼作麼の詞あり恁麼は「インモ」と

よみ「カクノゴトン」ともよめり什麼は「ジフモ」とよみ「ナニ」ともいへり作麼は「ソモサン」とよみ義は「イカニ」といふにおなじ 頭書 谷響續集五ノ廿四丁ウ

(九)烏帽子櫻　地藏靈驗記十の卷十四丁ウ六段に常州ヨリ北ノ方ニ金山アリ其山ノ金ヲ堀男アリ家ハオノヅカラ豐ニメ一子モナカリケリ云々三界流浪ノ身トナリテ高野粉川ノ行者トゾナル兼テタクハヘ持タル金三百兩ヲシタヽメ持其外資財郎從牛馬ヲ打捨西國修行ニ出ケルガ尾張國宮地山ニテ山賊ニ値スデニ危キ所ニ元來武勇ノ荒者ナレバ道心モ忘レハテヽ此ヲ詮トゾ思ホドニ梓ト云木ヲ杖ニツキタリシガ取ノベテ散々ニ防ギ戰ヒケルニ太刀ニ一當アテラレテ物ノカズナラズ打折ケリ膚ニ刀ヲ帶シツルガスハ茲ゾ詮ナルハト拔持テ戰ケルガ七八人ノ敵二三人切伏ノコル奴原四方へ追散シケル所ニ宮地太郎俊綱唯一人殘リテ此手強キ男ニヨセ合テ疵ヲモ付ズ引トキハ人ノ頭トナルモノヽ後日ノ沙汰モイカヾトテ引返シ命モヲシマズ戰ケリ是モ危ク見エケルニイカヾシタリケン足場ノアシキ所ニ岸近ク草ノシゲリタル所ヲ平地ト心得テフミハヅシテ落入リタルヲ俊綱得タリヤオヽト追伏テ悉ク奪取入道ニ繩ヲカケ宿所ニ歸リ櫻ノ木ニイマシメ付ケ夜ニ入テ首ヲ切リ死人手負ノ心ヲナグサメント酒ヲノミテアソビケリ入道ハ本願空カランコヲ悲ミテ地藏ヲ念ジ奉ケリカヽリケル所ニ修行者一人來リテノゾキ目シテ立タリ俊綱ガ云ク何事ニノゾキ目スルタヾシ案內ヲ見ル同類カト云ケレバ是ハ都ノ者ナルガ御酒ノ御シタヾリヲノゾミテ推參シ侍ル由ヲ申ケレバ酒氣ノ輩ヤサシヽ面白シト末座ニ請ジタリ都ノ人ト聞バ心ニクシ歌ヨミタマヘトゾ所望シケル歌道ハ能モシラネドモ當座ノ題ヲ下シ玉ハレ仕ラント申ケレバ俊綱ユビサシテアノイマシメオキタル男ヲ讀玉ヘ庭モ櫻モ男モ皆ヨミ入レ玉ヘ引手物ハ望ニ任スベシト云ケレバ承ルト云テ「此庭ノ花ノ本ニテナハツキヌ烏帽子櫻ノヤサ男哉」トヨミ玉ヘリ面白シトテサヾメキテ所望ハ何ヤラント申ケレバ通世者ノ習ニテ財寶ハノゾミナシ歌ノ題ニテ侍レバアノ入道ヲ下シ玉ハリテ此御緣ニ引スエサセ玉ヘト申ケレバ罪科至極ノ奴ナレドモ約束ナレバ力ナシトテ索ヲ解免シケレバ行者請取廣緣ニスエタリ云々こは地藏菩薩の旅僧に現じて金堀男が難を救給ひし

也烏帽子櫻は一種の櫻名にや百脈根をエボシグサ本草啓蒙八の巻山草部石蠙をエボシガヒ同四十二の巻介部などいふ類なるべし今常陸國の俗元服するをゑぼしざくらといへり是も元服して烏帽子著初るを木の名によせて風流にいへりと見ゆそは伊勢物語に文の上書に武藏よりと書べきを國の名物の鎧を風流にとりなして武藏鎧と書たる類なるべし又エボシはエビスの轉語にて「エビス櫻」などの心にや「エビス子」「エビスグスリ」などいふ名も芍藥の花色に据(ヨリ)ていひたらんにはめでたき花にさる名をよべるとにや可レ考

(十)女冠　續博物志三の卷(ス)七丁に南唐女冠耿先生烏爪玉貌獲二寵於元宗一將レ誕之夕震雷繞レ室大雨河傾半夜雷止耿身不二復孕一云々女冠の事通鑑綱目におほく見ゆ女道士也

(十一)神社　博物志八の卷(ス)三丁史補の條に子路與二子貢一過二鄭神社一社樹有二烏(ヒ)神一牽二子路子貢說一レ之乃止云々

(十二)烏のそらね　函谷關の烏のそらねは歌にもよみて孟嘗君傳の故事也博物志八の卷(ス)三丁(カ)史補の條に燕太子丹が奏を逃し時も遁到レ關關門不レ開丹爲二鷄鳴一於レ是衆鷄悉鳴遂歸云々とあり

(十三)第宅　續博物志七の卷(カ)八丁に宅亦曰レ第言有二甲乙之次第一也漢書成帝王甲觀中畫堂魏有二茅堂一と見ゆ

(十四)五位鷺　五位鷺の事盛衰記平家物語にあり梅花無盡藏四の卷(ガ)四丁に本邦五位之碧鷺隨二延喜之叡命一也云々今の青鷺の事也

(十五)葉守の神　後撰雜二に枇杷左大臣よう侍りてならの葉をもとめ侍りければ千兼が相しりて侍りける家にとりにつかはしければ俊子「わかやどをいつならしてかならのはをならしかほにはをりにおこする」かへし枇杷左大臣「ならのはの葉守の神のましけるをしらでそをりしたゝりなさるな」○大和物語上卷廿丁右に枇杷殿よりとし子が家に柏木のありけるを折に給へりけりをらせて書つけて奉りける「わかやどをいつかは君かならしはのならし顔にはをりにおこする」御返し「かしは木に葉もりの神のましけるをしらでそをりしたゝりなさるな」按に後撰集大和物語同事ながらならの葉をかしは木に作れりそは檜は一種の名「かしは」は都て木葉の大名なれば也仁德紀に葉

此云二箇始波一と見ゆ○枕草子春曙抄本三の卷八丁右にかしは木いとをかしはもりの神のますらんもいとかしこし兵衛のすけざうなどをいふらんもをかし云々○源氏物語柏木湖月本四十二丁右にかしは木とかへでとのものよりけにわかやかなる色して枝さしかはしたるをいかなる契りにかするゑあへるたのもしさよなどのたまひてしのびやかにさしよりて「ことならはならしの枝にならさなん葉守の神に許しありきと」みすのとのへだてあるほどこそうらめしけれとてなげしによりゐたまへりなよびすがたはたいといたうたをやぎたるをやとこれかれつきじろふ此御あへしらへ聞ゆる少將の君といふ人して「かしは木に葉守の神はまさすとも人ならすへきやとのこするゑか」云々河海抄に後撰「柏木に葉守の神のましけるを」云々大和物語云枇杷殿左大臣仲平よりとしこが家にかしは木のありけるを折にたまへりけりをらせて書つけて奉りける「わがやどをいつならひてか」云々「かしは木に葉もりの神のましけるを」云々此贈答の心無葉守の神は樹神の名也但基俊云葉守神はなべての木をば非レ守唯柏をのみ守也弘仁式三綱柏の所に委見云々雖レ然古人皆餘

木に詠レ之如何云々新釋に葉守神といふ事いと古き物には見えねどさる神のおはする傳有しもの也云々○綺語抄中卷神仙部にはもりの神葉をもる神といふ也「ならのはのはもりの神もましけるをしらで折にしたゝりなすなよ」按に此歌後撰集大和物語に出たると異同あり○俊賴無名抄百五段に「わかやどをいつならしてかならのはのならし顔にもをりにおこする」返し「かしは木の葉守の神のましますをしらでそをりしたゝりなさるな」これは年來家にありけるかしはををりにつかはしたりければよみて枇杷の大臣に奉りける歌也葉守の神とは木の葉をまもる神のおはする也云々按に神のましけるの句神のましますに作れるは他に異なり○狹衣草子活字本三の上卷四十九丁左に六月十日よひのいとあつきひるつかた二條の宮にて若宮ぐし奉りてはしつかたに住給ふに俄にかきくもりて村雨のおどろ〳〵しきにかしは木のこの下風涼しくふきいれたればみすすこしまきあげて見出し給へるにならがしはゝげにいたくもりわづらふも目とゞまりて「かしは木の葉守の神になとてわか雨もらさしとちきらさりけん」按にならがしはと有一本になかにか

しはゝと書るもありながしはとは楢の葉といふ義也「かしは」は木葉の總名也○袖中抄廿の卷廿四丁左に葉もりの神「かしは木に葉もりの神のましけるをしらてそをりしたゝりなさるな」顯昭云はもりの神とは樹神也よろづの木をまもる神也さて葉をまもる神と云也然に家成卿歌合落葉の題に藤通憲「なにしおはは葉もりの神にいのりみんはゝその紅葉ちりや殘ると」基俊判云はもりの神は「はゝそ」「かへで」の木まもる神にはあらず弘仁式の三綱柏のところにくはしく見えて侍れど事ながくて申侍らず私云此事の證にかのかしは木の歌をひけり柏木をのみまもるといへるにや弘仁式をたしかに可レ考也此歌ばかりにてはいかゞと聞ゆ柏木をたづぬれば詠レ歟他の木をまもらんをきらふべからず通憲さだめて不レ暗ニ於三綱柏一歟無名抄云葉もりの神とは木の葉をまもる神の木にはおはする也云々○八雲御抄三の下卷六丁右木部柏の條にはもりの神在ニ此木一云々○言塵集三の卷十丁に「とふさたつ足柄山に舟木きり木にきりかけつあたら舟木を」此歌の心は枏木剪たるくひの上に其木の末を立る也葉守の神を其楢にいはふしるしといへり云々○吳竹集一卷波部に葉守神とは木葉を守る神也「玉柏しけりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで」新古今夏基俊「時しもあれ冬は葉守の神無月まはらに成ぬ杜の柏木」新古今冬慶算「もる神もなき月にちる木のはかな」よみ人不レ知「ここからしにとへは葉守の神もなし」同上「われもとてちるか葉守の神な月」同上○久保之取蛇尾下卷十一丁右にかしは木の葉守の神もすべて木の葉を守ル神をいふなるべし云々○與清曰葉守神は枇杷左大臣の俊子をさして然よみ給へるにて實に葉を守ル神のあるにはあらず河海抄に樹神也と釋せられたれば樹神の類といふべし俊子がならしがほとどがめたるをやがて葉を守る神にとりなし樹神をもおもひよせて戲によみ出られし也後には葉を守ル神ありげに歌にもおほくよみさる說もいひ出しなるべし柏は古事記傳卅二の卷六十丁左にもと一ノ樹の名にはあらずいづれの木にまれ飮食に用る葉をいへり故書紀仁德の卷に葉字を書て此云ニ箇始婆一とあり然るに又某賀志波と名負たる樹も古より彼此とあるはあるが中に常によく用ひたるどもを然は名づけたる也古書に加志波に柏の字を用ひたるはいかなるゆゑにかあらん和名抄には槲の字を出して和名加之波とあり此はいづれの木をいへるにかあら

んなほつかなし若は今の世に專ら加志波と云木あるそれにや　凡て上代には飮食の具に多く葉を用ひし事にて後にも万葉ノ二に家有者笥圍盛飯乎草枕旅留之有者椎之葉爾盛などもあり飯を炊ぐにも飯に葉を敷もし覆もして炊ぎつるから炊葉の意にて加志波とは云る也比羅傳と云器も書紀に葉盤と書れたる如く葉をもて造れる物也又膳夫と云も飮食の葉を執あつかふからの名也伊勢物語に海松を高坏に盛て柏をおほひて出しけるとある類も古のさまの遺れる也今世にも食物の器には木草の葉を數もおほひもするこゝなりごとく飮食の具に用る葉の總名也松をもゝかしは空穗物語とよみ檜の類の木を兒手柏といふは柏敷などにせしよりよべりと見ゆ檜をならがしは厚朴をほゝがしはなどいふも膳葉に用れば也

（十六）五の目の紋并畫破　〻かゝるかたを五の目の紋といへりそは簀の目の五に似たるゆゑなるべし傳燈錄十二の卷廿左丁に新羅五觀山順支ゝ本國ヨリ號ニ了悟大師一僧問如何是西來意師竪ニ拂子一僧曰莫ニ這箇便是師放ニ下拂子一問以字不成八字不是是什麼字師作ニ圓相一示レ之有レ僧於ニ師前一作ニ五花圓相一師畫破別作ニ一圓相一云々　按に五花圓相は五の目也畫破は掻消事也

（十七）地錦　草花を地錦といひて地錦抄など書名にもきこゆ傳燈錄十二の卷廿六丁ウ涿州紙衣和尙傳に臨濟曰春煦發生鋪レ地錦嬰兒垂髮白如レ絲云々これちゝご花をいへりと見ゆ

（十八）江戸　東鏡一に就中清重三郎於ニ源家一抽ニ貞節一者也而其居處在ニ江戸河越等中一間進退難ニ治定一歟云々○源平盛衰記十九に武藏國住人江戸太郎重長云々此外江戸氏の所見吾妻鏡盛衰記太平記東國戰記兵家茶話北條系圖などおほかれど武藏國住人といはざるは擧ず鎌倉志に引たる江亭記永享記北條五代記小田原記梅花無盡藏黃葉集烏丸光廣卿集羅山文集廿一廿五丙辰紀行武藏野紀行廻國雜記など考べし

（十九）叢林　禪寺を叢林といへることは宋高僧傳十二の卷唐長沙石霜山慶諸が傳に二十年間堂中老宿長座不レ臥屹若ニ橛杭一天下謂ニ之石霜枯木衆一是也南方謂ニ之叢林一者翻ニ禪那一爲ニ功德叢林一也云々音釋に橛杭橛側持切木立死也杭五忽切木無レ枝也と見ゆこれ叢林の名の出處也東書顧府叢林ノ字文選一ノ廿七丁ヲ顧庭事ノ十五丁ヲ無門關十七丁ヲ下學集下卅丁ウ死二ノ二丁ヲ砂石集六ノ卅四丁ヲ同十

（廿）案山子　五燈會元十三の卷雲居道膺禪師傳に師曰面前案山子也不レ會云々同十五の卷雙泉寬禪師法嗣

五祖師戒禪師條に門曰爭ニ奈主山高案山低一師曰須彌頂上擊ニ金鐘一云々同十五の卷雲門文偃禪師傳に良久曰與レ我拈ニ案山一來云々普燈錄廿六の卷廿丁左天童應奄華禪師の條に擧慈明示レ衆曰一切賢聖皆以ニ無爲法一而有ニ差別一前是案山後是主山云々傳燈錄十七の卷七丁右洪州雲居山道膺禪師傳に師曰面前案山子也不レ會云々頭書滑稽雜談八月下貞和集莉叟和尙頌

(廿一)心の駒　五燈會元十の卷福州保明院道誠通法禪師章に僧曰恁麼(ナレバ)則意馬已成ニ於寶馬一心牛頓作ニ於白牛一也云々

(廿二)以字不成八字不是　五燈會元十五の卷披雲智寂禪師章に問以字不成八字不是未レ審是甚麼字師曰聽ニ老僧一偈ニ以字不是八不成森羅萬象此中明云々

(廿三)大海不レ容レ塵　五燈會元十五の卷大容諲禪師章に師曰大海不レ容レ塵小溪多ニ揾撻一云々明高僧傳七の卷十七丁ウ有權傳に大海不レ宿ニ死屍一云々

(廿四)燈籠　本書五十二ノ廿六五燈會元十五の卷洞山曉聰禪師章に燈籠猶瞌睡露柱却惺々云々碧巖集二の卷四丁右十五則に設使一時無レ言無レ句露柱燈籠何曾有ニ言句一云云○鷹筑波集一三丁に「かゝやくやまはり燈籠の蘇芳紙」又十六丁ウ「かしこきちゑの廻り燈籠」同五四十一丁カ「あかくこそなれ四方八方」附句に「火をとぼすきりこの燈籠張立て」頭書究穗祭の使廿七丁ウ作りはて〳〵御まへに出て文奉る式部丞講師してよみあぐ諸誦す夜に入て灯籠間ごとにかけ灯臺間なく立つゐまつともし渡して云々

(廿五)寂蓮自筆の田植の歌

このおもはむずにやかねくだいたりや　此也ヤレナド云ニ同詞也　金思ハズニ也

このあはすいろのやふしはまろにてや　詞也　陸奥　國　從

このおもへばこそやみちのくによりや　思ヘバコソ也　鈴　付　有　駒　牟　來

このすゝつけたるやこまもゐてくれや　來　螺鈿　端　擂

この京よりくるやらてんつますりや　著　子

このあぬこそきめや五位のこなればや　鬢　切　眉　不抜　雖

このびんぎりしてやまゆぬかねどもや　來　男　還

このくるおとこのやかへるれいなしや　綾　蘭　笠　朱　緒　付

このあやゐがさにやあけのをつけてや　賜　雖　否　夜　妻

このたぶともいなや人のよづまはや　綾　蘭　笠

このあやゐがさのやまこいしたよりや　夜サリ也　コウ　女　令通

このようさりこそやめをばかよはすや

右の詞は寂蓮法師自筆にて傳はれり田歌の詞なるべし頭書橘窓自語に三月十日今宮の安須禮祭の歌をいろ〳〵にいへども唱歌は大嘗會の田歌のうちをとりてうたふ也寂蓮法師の眞跡にて田歌なりけるを今宮に所持せりされど小片にて全本にあらず同小片の市中にひさぎに出したるを見て予摹しおきたるあり田歌の全本をうつし傳へたるを見て知べし云々

(廿六)行李骨柳　日本紀欽明紀二十一年秋九月の條に新羅遣ニ彌至己知奈末一獻ニ調賦一饗賜遣レ常奈末喜歡而罷曰調賦使者國家之所ニ貴重一而私議之所ニ輕賤一行李者百姓之所レ懸レ命而選用之所ニ卑下一王政之弊未ニ必不一由レ之也請差ニ良家子一爲ニ使者一不レ可レ以ニ卑賤一爲レ使云々通證廿四の卷廿一葉右に行李出ニ左傳僖公一註使人也資暇集曰㝡字訛作レ李㝡古使字今俗稱ニ行旅簏子一曰行李(コヅ)取レ音道山清話視ニ其行李一磊磈然鏗々有レ聲書言故事曰行李人遠行必有ニ行囊一也云々集解十九の卷五十丁右に僖三十年傳曰行李之往來〔杜預註行李使人疏昭十三年傳曰行理之命杜云行理使人李理字異爲レ註則同都不レ解ニ理字一周語行理以レ節逆レ之賈逵云理吏也小行人也孔晁註ニ國語一其本亦作ニ李字一註云行李行人之官也然則兩字通用本多作レ理順レ之爲レ吏〕故爲ニ行人使人一也云々書言字考七の卷廿八丁右器財門己部に骨柳(コヅリ)本字箏篥字彙屈レ竹爲レ器北方多以ニ柳條一爲レ之云々倭訓栞九の卷廿九丁左古部にこり俗に行旅の籠子をいふは行李と書り書言故事二十七丁ウに行李は遠行必有ニ行囊一也と見えたり或は骨柳と書り「やなぎごり」も本草に取ニ其細條一火逼令ニ柔屈一作ニ箱篋一といへる物也云々宋人孫奕が示兒編四の卷の行李の條に襄公八年不レ使ニ一个行李一告ニ於寡君一杜預曰一个獨使也行李行人也陸音个古賀反一本作レ介按李正文資暇集云李字自ニ人姓一之外更無ニ別義一左傳行李之往來杜不レ究ニ義理一注云行李使人也今遠行結束〳〵次第謂ニ之行李一而不レ悟是行使耳按舊文使字作レ㝡傳寫誤作レ李㝡字山下人人下子則㝡與レ李相近乃知ニ杜之說是而讀非一僖公七年曰行李之役共其乏困昭公十三年又云行理之命無月不レ至既謂レ爲ニ行李之役一又謂レ爲ニ行理之命一則是行使無レ疑也但理李字異レ讀管子五行篇黃帝得ニ后土一而辯ニ于北方一故使爲レ李又曰冬李也注云李獄官也益知古者多以レ李爲レ理矣云々按に今世の柳ごりはげに骨柳にまねびしものなめれど「こり」といふ名義は行李にあらじ行李は「ニモッ」「カモッ」などいふべしコリは小折(コヲリ)にて小折櫃の略語なるべくおぼゆ頭書日知錄廿二

(廿七)てうちの渡り井しろかねの館　能因歌枕四十五丁右

にてうちのわたりあり下總のてうしは音通へばこゝにや又四十六丁右にしろかねのたち有江戸の白銀臺町邊をいふにや試におどろかし置て後の考をまつ頭書類聚名物考人事部六

(廿八)手習は坂に車を押ごとし　俗歌に「手習は坂に車を押ごとし油斷をすればあとへもどるぞ」こは永井直勝敎訓歌に「奉公は車を坂におすごとく油斷をすればあとへしりぞく」とあるをつくりかへたるなるべし直勝敎訓歌十五首あり直勝初は長田傳八郎といふ三河國大濱の里人也後に永井右近大夫と號す宋高僧傳六の卷十七丁左唐西明寺乘恩傳に常訓門人曰好學近乎智力行近乎仁仁智稍成是殊レ名同レ實趨二菩薩地一若二下レ坂之走丸一耳云々この若二下レ坂之走丸一といへるは義は表裏なれど譬喩は似たりといふべし頭書手習の字面論衡程材篇に文吏幼則筆墨手習と見ゆ

(廿九)沐レ雨櫛レ風　沐雨櫛風は唐の大宗の事にいへども莊子雜篇に禹沐二甚風一櫛二疾雨一と見え淮南子修務訓にも禹沐二浴霤雨一櫛二扶風一とあり頭書漢書四十四ノ二丁ウ淮南王傳に高帝蒙二霜露一沐二風雨一云々注に師古曰沐類字也蒙冒也沐洗レ面也音呼内反字從二午未之未一云々

(卅)一葉落知二天下秋一　華嚴經演義抄第七十五に約相類者如レ視二一葉落一知二天下秋一見二一華開一知レ天下春一矣云々歲時廣記三に淮南子曰一葉落而天下知レ秋云々淮南子說山訓に見ゆ

(卅一)白駒過隙　ひまのこまの出處は家語致思に二親之壽忽若レ過レ隙云々莊子知北遊に人生二天地之間一若二白駒之過一レ郤忽然而已云々史記魏豹が傳にも見ゆ頭書禮記三年問に若二駟之過一レ隙云々

(卅二)水戲の具　立世阿毗曇論二の卷天住處品に復有二八種水戲之具一一者跳入レ水樓二者以二七寶函一注レ水灌レ身三者激レ水之具以爲二音樂一四者水澆以爲二嬉戲一五者水輪車六者浮屋七者寶輪鷁艗八者繩縷自縱旋廻激蕩其中男女諸天乘レ船遊戲云々

(卅三)累代　管子參患篇に一期之師十年蓄積彈一戰之費累代之功盡云々

(卅四)風前の燈　坐禪三昧法門經卷上に誰知二死時所レ趨從二何道一譬如二風中燈一不レ知二滅時節一云々

(卅五)衆口鑠レ金并三人之言人信レ之　周語に諺曰衆心成レ城衆口鑠レ金云々戰國策七魏惠王ノ條ニ虎ノ談アリ又曾子ノ母ノ曾子殺レ人ト三人イタルヲキヽテワシリシコトモノニ見ユ同三下十九丁ウ頭書說苑五ノ十五丁オ野客叢書六ノ廿六丁漢書五十三ノ八丁オ中山靖王勝傳衆口鑠レ金積毀銷レ骨盛衰記五十四丁オ

(卅六)恙　爾雅釋詁下に恙憂悒肝鬲慘恤罹憂也注に今人云無レ恙謂二無憂一也云々說文眞本心部に恙憂也从レ心羊聲余亮切云々神異經中荒經に北方有レ獸焉其狀如二獅子一食レ人吹レ人則病名云レ獦音惹恒近二人村里一入二人屋室一百姓患苦天帝徙二之北方荒中一云々

(卅七)猫目　酉陽雜俎續集八の卷支動篇に猫目にて時を知事見ゆ物類相感志禽魚篇に猫兒眼知レ時有レ歌云子午線卯酉圓寅申巳亥銀杏樣辰戌丑未側如レ錢

(卅八)南鐐　源平盛衰記十の卷中宮御產事に砂金千兩南鐐百云々同十四の卷木下馬事に右大將此馬ヲバ惜テ其代リト覺シクテ南鐐ト云馬ヲ賜タリケリ極テ白馬ナリケレバ南鐐トハ呼ケリ云々本朝細馬集上卷に鐐南葦毛源平盛衰記平家物語異本是は木下鹿毛の代りとおぼしくて仲綱へ八島大臣より賜られし馬也云々爾雅釋器に白金謂二之銀一其美者謂二之鐐一云々毛詩註疏廿之魯頌泮水篇に南金の說あり可二考合一

(卅九)由緒　首楞嚴經十の卷に畢彈二其類一雖レ未レ通二其名一命由緒見同生基猶如二野馬慴一清擾一云々洛陽伽藍記卷二に時人未レ信遂問二寺之由緒一逸云龍驤將軍王濬平レ吳之後始立二此寺一云々

(四十)上人　增壹阿含經第卅九馬血天子品に夫人處レ世有レ過能自改者斯名二上人一云々智度論第七十三釋轉不退輪品に不散亂心行二無上道一事名爲二上人一云云頭書能改齋漫錄七親長細記文明十ノ三ノ十二條に下野國專修寺申二御祈願所井上人號事一奏聞勅許云々

(四十一)留守　史記呂后本紀に呂后年長常留守云々戒因緣經第十に有二一長者一請二佛及僧比丘一彼六群比丘十七群比丘次直留守自相便安

(四十二)家業　大寶積經第九密跡金剛力士會第三之二十八丁オ偈に其心以厭二患於俗之家業一云々高僧傳十一丁オ

(四十三)まかり　古今六帖三の釣に「風をいたみおきつしら浪高からし海士のつり船まかりかへりぬ」史記高祖本紀に五月兵皆罷二歸家一云々漢書蕭望之傳に或罷二歸田里一云々

(四十四)酒百藥之長　酒百藥之長の字漢書食貨志に見え大成論の序にも引たり頭書禮記射義に酒者所二以養レ老也所二以養レ病也

(四十五)四百四病　千金方八十二の卷調氣法に凡百病不レ離二五臟一共有二八十一種一疾冷熱風氣計二成四百四病一事須レ識二其相類一善以知レ之云々修行本起經遊觀

品に何等爲レ病答言人有二四大一地水火風一大有二百一病一展轉相鑽四百四病同時俱作此人必以二極寒極熱極饑極飽極飲極渴一時節失レ所臥起無レ常故致二斯病一頭書 續谷響集一ノ十丁ウ 筆記十三

(四十六)百万遍の念佛　榮花物語玉のかざりの巻に見ゆ頭書 續教訓抄廿二下四十五丁オ

(四十七)金像　金像の始は越語下に范蠡が像を金工につくらしめし事有

(四十八)火浣布　列子湯問篇に見ゆ魯西亞志

(四十九)釜鳴　居家必要丁集 井竈○世說故事苑三 妖怪○

延喜臨時祭式○拾芥抄○口遊○袋草子

(五十)かっかう鳥 かつほう鳥 クワコウ鳥　多武峯少將物語に「山路しる鳥にわか身をなしてしか君かくこふと鳴てつくへく」此歌にかくこふとよめり荊楚歲時記に四月也有レ鳥名二穫穀一其名自呼と有穫穀はクワクコク也爾雅釋鳥鳲鳩鶻鶻の註にも穫穀と見ゆ埤雅釋鳥に鳲鳩結鶻一名搏黍今之布穀也江東呼爲二郭公一云々クワッコウも鳴音也頭書 カッコウハウコウノ誤ハコ鳥ナルベシ

(五十一)七里ケッカイ　佛說安宅神咒經結界咒文

伽婆致　伽波呵　悉波呵　東方大神龍王　七里結界　金剛宅　南方大神龍王　七里結界　金剛宅　西方大神龍王　七里結界　金剛宅　北方大神龍王　七里結界　金剛宅　如是三說とあり此七里結界の文を出處とす

(五十二)桃栗三年　埤雅釋木桃の條

(五十三)先生　韓詩外傳六〇賈誼新書先醒篇

(五十四)洲濱　古今秋下詞書○秉燭談一頭書 空穂藤原君十三丁オ にしまのいそなかしきすはまに千鳥の行ちがひたるなどして云々

(五十五)閏六月祓　禮儀類典に小右記山槐記を引東鑑卅文曆二年六月の條

(五十六)指の名　儀禮大射儀左傳宣四年同定十四年孟子告子上儀禮特饋食禮

(五十七)自由　後漢五行志風俗通四增壹阿含經六重品に心欲自欲云々

(五十八)人面獸心　左傳襄卅一年十二月頭書 戰國策長門平家二八十二丁カ

(五十九)木中の文字　酉陽雜俎廣動植

(六十)竹酔日　岳陽風土記に五月十三日謂二之龍生日一可レ種レ竹齊民要術所謂竹酔日也

(六十一)古法不レ可二妄變一　商子更法に杜摯曰臣聞レ之利不レ百不レ變レ法功不レ十不レ易レ器臣聞法古無レ過循禮無レ邪君其圖レ之

(六十二)鐘を盜て耳をふさぐ　呂氏春秋不苟論

(六十三)江南橘移二江北一爲レ枳　周禮冬官考工記 井淮南子

(六十四)おとしだね 井落胤腹　蜻蛉日記上卷十丁左解環本上の三卷一丁右に孫王のひがみたりしみこのおとしだね也云云源平盛衰記卅二の卷十八丁右に落胤腹云々色葉字類抄五の卷良部疊字門に落胤ラクキン云々下學集態藝門下卷三丁右に落胤腹ラクキンバラ云々節用集良部言辭門に落胤ラクキン云々運歩色葉集羅部に落胤腹ラクキンバラ云々

(六十五)幕相 井前身　宋人何薳が春渚紀聞全十卷敬二津逮秘書中一明人毛晉訂一の卷坡谷前身の條に世傳山谷道人前身爲二女子一所レ說不レ一近見二陳安國省幹一云山谷自有二刻石一記二此事於涪陵江石間一石至二春夏一爲二江水一所レ浸故世未レ有二摸傳者一刻石其略言山谷初與二東坡先生一同見二清老者一清語二坡前身一爲二五祖戒和尚一而謂二山谷一云學士前身一女子我不レ能レ詳レ語後日學士至二涪陵一當自有二告者一山谷意謂涪陵非二遷謫一不レ至聞レ之亦似二憤々一既坐二黨人一再遷二涪陵一未レ幾夢二一女子一語レ之云某生誦二法華經一而志願復後歟身爲二男子一得二大智慧一爲二一時名人一今學士某前身也學士近年來所レ患二腋氣一者緣下其所レ葬棺朽爲二蟻穴一居中於兩腋之下上故有二此苦一今此居後山有二某墓一學士能啓レ之除二去蟻聚一則腋氣可レ除也既覺果訪二得之一已無レ主矣因如二其言一且爲再易レ棺修掩既畢而腋氣不レ藥而除云々

(六十六)食物喰殘すべからず　春渚紀聞一の卷元參政香飯の條に陳秀公丞相與二元參政厚之一同日得レ疾陳忽寄レ聲問二元安否一曰參政之疾當二即瘥一矣某雖二小愈一亦非二久レ世者一續請二其說一秀公曰某病中夢至二一所一金碧煥目室間羅二列甕器一甚多上皆以青帛羃レ之具題曰元參政香飯也某問二其故一有二守者一謂レ某曰元公自レ小至レ老每食度不レ能レ盡則分減別器未二嘗殘一食一也此甕所レ貯皆其餘也世人每二食不一レ盡則狼藉委棄皆爲二掠剩一所レ罰至二於滅レ籍奪レ祿無二有レ免者一今元公由レ此當更延二十年福算一也後數月而秀公薨元果安享二耆壽一（其孫中大公紹直云）云々

(六十七)幕相　春渚紀聞二の卷張鬼靈相墓術の條に張鬼靈三衢人其父使レ從二里人一學二相墓術一忽自有二悟

見レ因以二鬼靈一爲レ名建中靖國初至二錢塘一請者踵至錢
塘尉黃正一爲レ余言二縣令周君者一括蒼人亦留二心地
理一具飯延款謂二鬼靈一曰凡相墓或不二身至一而止視二圖
畫一可レ言二尅應否一鬼靈曰若方位山勢不レ差合二數年
月一亦可レ言二其粗一也因指二壁間一圖一問レ之鬼靈熟視
久之曰據二此圖一墓前午上一潭水甚佳然其家子弟若
有二乘馬墜一此潭一幾至不レ救者即是吉地而發祥自レ此
始矣令曰有レ之鬼靈曰此年此墜馬人必被二薦送一次年
登第也令不レ覺起握二其手一曰吾不レ知二青烏子郭景純
何如人一也今子殆其倫比耳是年春祀而某乘馬從レ之馬
至レ潭仄忽大驚躍啣勒不レ制則與レ某俱墜二淵底一逮
レ出二氣息一而已此秋登薦次年叨忝者某是也蔡靖安世ガ
先墓在二富春白昇嶺一其兄宏延二鬼靈一至二墓下一視レ之
謂レ宏此墓當レ出二貴人一然必待二君家一麥甕中飛二出鵪鶉一
爲レ可レ賀也宏曰前日某家臥房米甕中忽有二此異一方
有二野鳥入レ室之憂一鬼靈曰此爲二克應一也君家兄弟有レ
被二魁薦一者ト則是貴人也是秋安世果爲二國學魁選一鬼
靈常話レ人曰我亦患二數促一非二久居レ世者一但恨レ無二人
可レ授二吾術一矣後二年果歿時年二十五矣云々

（六十八）墨色相并離拆相字　春洛紀聞二の卷謝石拆字の條に謝石潤夫成都人宣和間至二京師一以二相字一言二人禍福一求レ相者但隨意書二一字一即就二其字一離拆而言無レ不レ奇中一者ト名聞二九重一上皇因書二一朝字一令レ中貴人持往試レ之石見レ字即端二視中貴人一曰此非二觀察所一書也然謝石賤術據レ字而言今日遭遇即因二此字一黜配遠行亦此字也但未二敢邊言一之耳中貴人愕然且謂レ之曰但有レ所レ據盡言無レ懼也石以レ手加レ額曰朝字離レ之爲二十月十日字一非二此月此日所生之天人一當誰書也一座盡驚中貴馳奏翌日召至二從苑一令二左右及宮嬪書レ字示レ之皆據レ字論二說禍福一俱有二精理一錫賚甚厚并與二補承信郎一緣レ此四方來求レ相者其門如レ市有二朝士一其室懷妊過レ月手書二一也字一令二其夫持問一石是日座客甚衆石詳二視字一謂二朝士一曰此閣中所レ書否曰何以言レ之石曰語助者焉哉乎也固知之公內助所レ書尊閣盛年三十一否曰是也以二也字上一爲二卅一下爲二一字一也然吾官寄レ此當二力謀遷動一而不レ可レ得否曰正以レ此爲レ撓耳蓋也字著レ水則爲レ池有レ馬則爲レ馳今池運則無レ水陸馳則無レ馬是安可レ動也又尊閣父母兄弟近身親人當皆無二一存者一以二也字一著レ人則是他字今獨見二也字一而不レ見レ人故也又尊閣其家物產亦當二蕩盡一否

以二也字一著レ土則爲二地字一今又不レ見レ土也二者俱是否
曰誠如レ所レ言也朝士則謂レ之曰是皆非二所レ問者一但賤
室以二懷妊過一月方切憂レ之所二以問一耳石曰是必十三
箇月也以二也字一中有二十字一并兩方二竪下一畫爲二十
三一也石熟二視朝士一有レ曰有二一事一似レ涉二奇怪一因欲
レ不レ言則吾官人所レ問正決二此事一可二盡言一否朝士因
請二其說一石曰也字著レ虫爲二蛅字一今尊閣所レ娠殆蛇妖
也然不レ見二蟲蠱一則不レ能レ爲レ害謝石亦有二薄術一可レ
爲二吾官人一以レ藥下レ驗レ之無レ苦也朝士大異二其說一因
請至レ家以レ藥投果百數小蛇而體平都人益共神レ之而
不レ知二其竟挾一何術一也云々按に離拆相字は字畫を離合して占也今世の墨色の占も此類也

（六十九）領巾　春洛紀聞六の卷題二領巾裙帶一二絕の條に嘉興李巨山錢安道尙書甥也先生嘗過二安道一小酌其女數歲以二領巾一乞レ詩公即書二絕句一云臨池妙墨出二元帝一弄玉嬌癡笑二柳娘一吟雪屢曾驚二太傅一斷弦何必試二中郎一又於二陶安世家一見爲劉唐年君佐小女裙帶上作二散隸一書二絕句一云任從酒滿翻二香縷一不願書來繫二綵牋一半接二西湖一橫二綠草一雙垂二南浦一拂二紅蓮一每句皆用二一事一尤可二珍寶一也

（七十）木中の字　春洛紀聞五の卷木中有字の條に三衢毛氏庭中一木忽中裂而紋成二衍字一如レ以二濃墨一書染者ト體作二顏平原書一會其子始生因以名レ之後衍登二進士第一官至二龍圖閣一而終又晉江尤氏其隣朱氏圃中有二柿木一高出二屋上一一夕雷震中裂木身亦若二濃墨一書二尤家二字一連屬而上不レ知二其數一至二於木枝細者一破視亦隨二枝之大小一成レ字尤氏乞得二其木一作二數百段一分遺二好事一字體帶レ草勁健如二王會稽書一朱氏後以二其圃一歸二尤氏一云云々（頭書 砂石集八の卷十九丁ウ執心堅固由二佛法一鷹事條に遠州ニ蓮養房トイフ山寺法師前栽ニ柿チウエテ年來愛シケルガ他界ノ後弟子ノ僧此木チ切テ湯木ニセントテワリテ見ルニ文字ノ勢二寸バカリ中ニワレドモ〳〵同体ニテ有ケリ云々）

（七十一）作文不レ憚二屢改一　春洛紀聞七の卷作文不レ憚二屢改一條に自レ昔詞人琢磨之苦至レ有下一字窮二歲月一十年成二一賦一者ト白樂天詩詞疑皆銜レ口而成及レ見二今人所藏遺藁一塗竄甚多歐陽文忠公作文既畢貼二之壁一坐臥觀レ之改正盡レ善方出以示レ人蘇嘗於二文忠公諸孫望之處一得二東坡先生數詩藁一其和二歐叔弼一詩云淵明爲二小邑一繼圀去爲字一改作二求字一又連塗二小邑二字一作二縣令字一凡二改乃成二今句一至二胡椒鉢兩多安用一八百斛一初云胡椒又安用乃貯八百斛若

如ニ初語一未レ免ニ後人疵議一又知雖ニ大手筆一不レ以ニ一時筆一快爲ニ定而憚ニ於屢改一也云々蘧は紀聞の作者何蘧也先生の德山高水長といへるを先生の風と改たる類おほく 一字の師と稱せる和漢例少からず 頭書明陳繼儒が珍珠船一卷十七丁ウに蕭楚材知ニ漂陽縣一時張垂崖作レ牧一日召食見ニ公几案一有ニ一絕一云獨恨太平無ニ一事一淮南間殺老尙書蘧改レ恨作ニ幸字一公出視レ蘧曰誰改ニ吾語一左右以レ實對蘧曰公功高位重姦人側レ目之秋且天下一統公獨恨ニ太平一何也公曰蘧一字之師也

松屋筆記卷之七十八

平小山田與清稿

（一）八掬脛（ヤツカハギ）井長髓明神　上野利根郡後閑村に八掬脛ノ社あり長髓明神ともいふ此處の山の平腹に窟ありて其中に骨あり脛骨八掬あり故に名づく上野國志に釋日本紀を引て越後風土記の八掬脛なるべし此地越後に隣しといへり可レ考 頭書大槪略の事新著聞集十八ノ五丁ウ

（二）鷺のみの毛　白氏文集十五の卷白鷺の詩に何故水邊雙白鷺無レ愁頭上亦垂レ絲云々續博物志六の卷に鷺有ニ長翰毛一江東人取以爲ニ睫擺一名レ之曰ニ白鷺纓一云々 頭書吾妻鏡十五の卷七丁ウに懷嶋平幡守入道紺地直垂鷺髮毛ニテトソ云々

（三）はちす葉の濁にしまぬ心もて　僧正遍昭の「はちすはのにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」といへる歌は白氏文集十五の卷放言五首の一に荷露雖レ團是珠とあるにおなじ

（四）二郎　北史六十六の卷十丁ウ泉企傳に仲遵一名恭云々高敖曹攻ニ洛洲一與ニ企力戰拒守矢盡以ニ捧杖一扞レ之爲ニ流矢中一目不レ堪ニ復戰一及ニ城陷一士卒歎曰若ニ二郎不レ傷豈

至ニ於此一云々

（五）いりと云地名　武藏相摸の方言に谷（ヤツ）の奥を「いり」と云り日蓮錄內書廿の卷十四丁ウに紺入ノ入道と書てアキザハノニフダウと訓たりさては澤（サハ）も入（イリ）も同義の語と見ゆ 頭書南浦文集上五十一丁オ

（六）きんだち　公達は三公に達し至る義をもて攝家の御息清華などにいふは勿論也枕草子などに君達とあるはたゞ君等と稱せし詞也日蓮錄外書十三の卷五丁ウに又オクレサセ給ケル御君達ノ御佛ニナラセ給テ云々 頭書唐書百五十三ノ十一丁オ顏眞卿傳ニ眞卿上疏曰諸司長官者達官也皆得專ニ達於天子一

（七）伊豆の海邊の鐵丸所　伊豆國熱海より伊東へ出る間に網代といへるわたりに海邊の汀に丸石の充滿せる上を行道あり一里あまりの間なり沙などはなくてたゞわたり一二尺の圓石ばかり也日蓮錄外書十九の卷廿丁オに鐵丸所トテ遠キコト八百里ノ河原ニ丸キ石充滿セル所ヲ死人六七日ニアタレル日越行よしを記したり似たる所といふべし

（八）拈華微笑の禪說は妄語　禪家の錄に釋迦涅槃の時登レ坐拈レ華示レ衆迦葉破顏微笑佛言吾有ニ正法眼一藏涅槃妙心實相無相微妙法門一不立文字敎外別傳付ニ囑摩訶迦葉一而已と傳灯錄佛祖統紀高僧傳普燈錄五灯會元など所見おほかり此文一切經中になし大梵天王問佛決疑經の文也といへどさる經三藏譯中に見えず中古以來の妄說なるよし日蓮書錄外廿五の卷廿丁オ蓮盛抄に見ゆ 頭書太平記廿四ノ十八オ 四域記九ノ十三丁オ可ニ考合一

（九）把を「ユヒ」と訓一把を「ヒトユヒ」と訓　日蓮錄外書十の卷十八丁オ上野尼御前御書に鴛目フタユヒ云々

（十）木を離れたる猿　赤染衞門家集に日ごろこもりたるに夜谷に猿の啼しに「たよりなき旅とはわれそおもひつる木をはなれたる猿もなくなり」源平盛衰記廿四の卷十一丁左南都合戰の條に恐クハ木ヲ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ木津川ニ廣一町計ノ浮橋渡シテ左右ニ高欄ヲ立タリケリ云々日蓮錄內書二の卷開目抄上卷廿八丁右に諸ノ聲聞法華ヲハナレサセ給ナバ魚ノ水ヲハナレ猿ノ木ヲハナレ小兒ノ乳ヲハナレ民ノ王ヲハナレタルガゴトシ云々戰國策四の卷下齊閔王篇に魯連謂ニ孟嘗君一曰猿獼猴錯レ木據レ水則不レ若ニ魚鼈一歷レ險乘レ危則騏驥不レ如ニ狐狸一云々注に言自置ニ木上一補曰錯木據水一句錯舍置也云々淮南子覽冥訓に猨狖顚蹶而失ニ木枝一云々說苑十六卷十四丁左說叢篇に猿猴失レ木禽ニ於狐貉一者非ニ

甚處ニ也文選一の卷廿六丁左斑孟堅西都賦に獑狿失レ木豺狼懾竄云々杜甫遠遊詩杜津集解四の卷に雁矯ニ銜レ蘆内ニ猿啼ニ失レ木間ニ注に猿失レ木而悲啼喻ニ己之天涯涕淚ニ云々與清曰獑狿失木の故事は戰國策出處なるに文選注釋の六臣淮南子を引き佩文韻府編修の七十六人前說を脫したるはいかにぞやこれのみならず六臣注佩文韻府に引脫し引おくれのおほかるは合せて百六十四眼余が二眼に劣れるがごとし呵々大笑

（十一）記夢　天保五年九月二日甲子の夜の夢にカケスと云鳥數十百屋外の樹木の邊に群飛せり木枝に絲のさがりたるが末はわなに成てあり一鳥これに首をさし入てふためくをおのれ竹垣の押打を傳へのぼりて糸のまゝ捕得てめづらしき事におもひ人にも見せなどしてさてはなちやらんとするほどに寤ぬ迺これを合せて云鳥を捕は物を取得の義也垣に登るは分外の處に登る義也鳥のおのれとわなにかゝれるは他より我に授るの義也鳥名のカケスは不欽の義也捕得て後放んとするは生を殺ざるの仁也然るに放得ずして夢寤たるは收得領納の義也これをもて嘉兆の吉夢とす又甲子福神を祭るの夜神前に臥してかゝる靈夢あるは奇瑞にあらずや「おもほえす福を得し鳥の名のかけすくつれぬやまの松かも」松の屋の心なるべし

（十二）孔子の婦老子の父商山四皓の冢阿彌陀如來の父母と子　『前涼錄張重華傳に五年重華讌ニ群寮于閑豫庭一論ニ講經義一顧問ニ索綏一曰孔子婦誰家女老聃父字爲レ何四皓既安ニ太子一住乎還レ山乎綏曰孔子婦姓幵官氏老聃父名乾字元杲胎刖無レ耳一目不レ明孤單七十二無レ妻與ニ隣人益壽氏老女一野合懷胎八十年乃生ニ老子一四皓還否臣尙未レ悉重華曰卿不レ知乎四皓死ニ于長安一有ニ四皓冢一爲レ不レ還レ山也云々皷音聲經に阿彌陀佛與ニ聲聞一俱其國號曰ニ清泰一聖王所レ住其城縱橫十千由旬於レ中充ニ滿刹利之種一阿彌陀如來應正遍知父名ニ月上轉輪聖王一其母名曰ニ殊勝妙顏一子名ニ月明一云々按にいづれも奇說なり阿彌陀如來婦なくして子月明を生たるは捧腹の說にあらずや」頭書此說孔子ノコトハ清書九ノ卷ニ出ス

（十三）龍燈　奥州話四倉龍燈の條に橋本正左衞門龍ケ崎の役人をつとめしところ少々上の用金を廻し旅行の事有しに東通りの道中にて四倉と云所に着き人歩をつぎかへして滯て出す此あたりものさわがしき事有と聞て一寸も早く此宿を行出ぬけんといらだちてさいそくせしに日もくれかゝりしをいそぎの用事といひたて夜通しに人歩を云付しかば駕籠人足ばかり出たりしを正左衞門かごにて先へ行養子八彌にめくばせして用金入たる荷物をさあらぬていにて殘し置少しもはやく追付來れと云付て立たりしに八彌其年十八歲也し大事の荷物あづかり心づかひいふばかりなし宿にては物さわがしきをりふし夜通しに荷廻しは至極あやふしひらに一宿有て明日早く出立あれかしとおそれて人夫も出がたしといはれていよ〳〵氣もまどへどよし途中にて事有ともおめ〳〵とおちおそれて一宿しては養父に云譯なしと心をはりて荷物にこしをかけて人歩をひたすらにせつきしに四頃に漸出し馬方は十二三の小女兩人なりしまさかの時は足手まとひぞと思ふには有かひもなし心はそけれどもせひに及ばず引立行しにその物さわがしきと云は今行かゝる海邊うしろは黑岩そびえたる大山前は大海にて人家たえたる中程のいは穴に盜賊兩三人かくれ居て晝さへも一人旅の者をとらへ衣類身の廻りをはぎとりてからを海になげ入しあとに人通りたえしをりにぞ有しとまご共のかたるを聞ていよ〳〵心ならぬにはるか遠き海中よりさしわたし一尺餘りなる火の玉の如き光りあらはれくらき夜なるに足本の小貝まであらはに見えたりハツとおどろきあれはなにぞと馬子にとへば龍燈のあがる所と申ますからおほかたそれでござりませうとこたへてはじめて見し體也ことわりや十二三の小女いかで深夜にかゝる荒磯を通るべき八彌もおそろしと思ひつれどさらぬだに一人の小女ふる〳〵馬引ゆくをおぢさせじと氣丈にかまへてひかせて行盜人の住と云いは穴ちかく成たらば聞せよといひ置しに小聲にて此あたりぞと告しかば何ものにてもあれ出來らば只一打に切さげんとつば本をくつろげて心をくばり行通るに小女云こよひはるすでござりませうあかりが見えませぬといひしかどもるすと見せてふと出くるやとゆだんせざりしが盜人のうんやつよかりけんかしらもきられざりき海中の光は三度まで見たりしとぞ云々又龍燈の事の條に海の獵をするものゝはなしに世に龍灯と云ふらすもの實は火にあらず至て細かなる羽蟲の身に螢の如く光有ものゝ多く集れば何となくほのほのしをりにぞ有しとまご共のかたるを聞ていよ〳〵心ならぬにはるか遠き海中よりさしわたし一尺餘りなる火の玉の如き光りあらはれくらき夜なるに足本の小貝まであらはに見えたりハツとおどろきあれはなにぞと馬子にとへば龍燈のあがる所と申ますからおほかたそれでござりませうとこたへてはじめて見し體也ことわりや十二三の小女いかで深夜にかゝる荒磯を通るべき八彌もおそろしと思ひつれどさらぬだに一人の小女ふる〳〵馬引ゆくをおぢさせじと氣丈にかまへてひかせて行盜人の住と云いは穴ちかく成たらば聞せよといひ置しに小聲にて此あたりぞと告しかば何ものにてもあれ出來らば只一打に切さげんとつば本をくつろげて心をくばり行通るに小女云こよひはるすでござりませうあかりが見えませぬといひしかどもるすと見せてふと出くるやとゆだんせざりしが盜人のうんやつよかりけんかしらもきられざりき海中の光は三度まで見たりしとぞ云々又龍燈の事の條に海の獵をするものゝはなしに世に龍灯と云ふらすもの實は火にあらず至て細かなる羽蟲の身に螢の如く光有ものゝ多く集れば何となくほのほの

如く見なさるゝもの也夏の末秋にかゝりてことにおほし時有ておほくまとまりて高き木のうら又は堂の軒ばなどにかゝるを火の如く見ゆる故人龍灯と名付しもの也筑紫のしらぬ火も是也水上に生ずる蟲にて螢の類也沖に舟をかけてしづまりをればまぢかくもつどひくれど息吹かくれば忽散て見えずなる也されば必龍灯あがるといふ夜も大風吹又は雨ふりなどすればあがらずと聞を此夜四倉にて見し光は是とは異也いづれにもふしぎの光にてぞ有し云々奥州はなし一巻寫本也仙臺藩醫工藤氏の孀姉の聞書也 頭書陰火ノ丁竹菴外集 五雜組九ノ二丁ヶ龍火同二ノ卅八丁ヶ陰火寒火 谷響集六ノ三丁ヶ 佐渡奇談上巻鈴木源吾射術事條に寛永の比川原田諏訪町に鈴木源吾といへる浪人あり云々一とせ夏の比源吾新穂の里に至りて逗留の折から里人ども語り罵る事あり今年初夏の比より大野根本寺祖師堂の側なる古木の欅の梢に折々龍灯飛來るとて法華經の信者は奇異の思ひなし靈場の驗空しからずとぞかんじける源吾曰世上にはかゝる奇特もある事にや吾も見物せんとて人々に打連て初夜過る比旅宿を出二丁餘の暖を過て根本寺の杜のこなたに席をなし今や時節と窺ふ所にいづくより來るともなく彼欅の梢に陰々として燈の影顯れたり源吾は常に供人に一張の弓一手の征矢を持せて酒宴遊興の場へも召具せずといふ事なし此時いかゞ思ひけん弓推張矢打つがへ忘るゝばかり引しぼり切て放し矢聲なかけたるほどこそあれ忽龍燈は消失たり源吾は笑ひながら歸りけるに翌日根本寺の欅の下に大なる鷲一羽矢に貫かれて落たるを見つけて僧徒打より是を讃するに其矢の筈に朱漆にて鈴木源吾といへる四字あり此地は殺生禁斷の所なるを此鳥を射落したるは猥藉の至也と心の内には龍灯の奇瑞なる

妨られし怨をも含みつゝ奉行所へ訴ぬ則源吾に召狀下りて逐一證議有けるに源吾答へけるは某龍灯なば射たり鼠を殺せるおぼえなしといふ數月を經て源吾更に辭屈せず奉行所にも彼が射術を感心ありて遂に扶持せられしと也云々

（十四）むづけと云詞　新撰六帖五ふせりと云題にて光俊朝臣「おのつから手枕はつし寐なほれは我おもはすと妹むつけたり」夫木抄雜十八言語部にも載ておもはすとの「と」もじを「も」に作れり無住雜談集十の卷九丁左 神明慈悲事條に示現に明神御氣色實ニスサマシゲニムヅケタル躰ニ御坐ケレバ夢ノ心ニモオソロシク覺エテ見ゆむづけはむづかる意なる事知べし 頭書大織冠草子になみと涙に打ぬれもの思ふ人のふぜいかやうちむづけたる御有樣よその見る目もいたはしや云々 續古事談一 拳群書類從本上卷十四丁左に人シレズムズケハラダチケルナゴリニヤ云々

（十五）隱岐法皇御陵參詣記注釋　隱岐記○隱岐國後鳥羽太上皇の御遺跡いかにいますらんと見奉るべき心を導として千里をも出たつ足もとにめぐらしかちより舟よりしてまゐりつきぬ打見るより浦山はるばると世ばなれて繪にもかゝまほしくいはんかたなしやがて近くさぶらふ人にあないして御陵を拜み奉るしばらく法施して年月のほいかなひぬとおつる涙なにゝつゝまんともなししかあれば今上より御祈りの

ため御太刀御馬進御あり院の御門の御製をはじめいづれも奉納し侍りし院の御製あまたゝび披講し奉る

延應元年の後としは百を四かへりに及び代ははたつぎあまりになんなりぬるいかなる因緣しか御たまのありかにまぼろしならでもたづねきたり侍る事も上久方のあめを極めしも黃なる泉までにしてかろうじて蓬が嶋をもとめけんもひとつ心にやとおぼえてよろこびにたへず猶おろかなる言の葉をさへ短き筆にとゞめなんもおそろしくこそ氏成

千ひろあるかけをめぐりの古跡に涼しき道はとめてこそしれ

岡のへの松のひゝきに引れてや夕の風のかほりきぬらん

いにしへを思ひやりても身をやくは冲の小しまの明くれの空

おろそかにつかへこし身も日の光りへたてすてらせ行末の空

なかめせし君にひかれて草も木も冲の小島はむつましきかな

朝夕にひゝく山風浦波にこゝそうき世の中のしまなる

越てこし舟路はあやし風ふけはおきつしら浪たつた山をも

古郷は波ちへたてゝこゆるきのこかめならてもおきに出にけり

わたつ海やさかひも見えぬ冲に出て空こそ船のたよりなりけれ

なくさめてゐにかゝまほしはるかなる都もおきも隔なきまて

よみおきしみとり洞の花に見ん名はおきなから和歌の浦波

世の中にたねは殘るも色はなし君かことはの花につくして

しつみしもなき跡の名のいや高き君こそ君か代をてらすらめ

いつまても空にはしるやのりにいる心の水のよとむかきりを

たちかへる身こそあたなれ人しれぬ心はかりは隱岐の島守

夏日陪二隱岐廟前一同二詠池蓮一和歌

世とともにすむ池水やはちすはの露の心を心なるらん

三保明神にて

心よりさき立てゆくおきのしまみほの湊の風にのりても

とりあへぬぬさと手向てめくみある神のめくみやみほの浦波

波風も舟出をいそに待たえて目に見えぬ神のしるしあらはせ

にしきの浦にて

わたつみやさらす錦の浦風に心もあらふ波のすゝしさ

奥書云○皇年代略記云承久三年七月十三日被レ移二仙駕於隱岐島一延應元年二月廿二日崩 六十三(後鳥羽院諱尊成高倉帝第三子也)○明正帝 寛永十五年四百年 御忌○水無瀨正二位權中納言藤原氏成卿實權中納言兼成卿男也○後水尾天皇御製集曰「戀ひつゝもなくや四かへりもゝち鳥かすみへたてゝとほきむかしを」已上

隱岐記 與清曰隱岐記は水無瀨前權中納言藤氏成卿仙洞(後水尾天皇)の御内勅をかうぶりて 寛永十五年 隱岐御

陵にまうでられしをりの記也氏成卿は元龜二十廿七誕生天正四六叙位(六歲)寛永三正五從二位 同四三廿六權中納言(五十七歲)同六月十日辭 同十九十廿二出家 法名是空(七十二歲)同廿一十七薨(七十四歲)實は水無瀨權中納言兼成卿の息にて水無瀨右兵衛督親具朝臣の養子になられし也公卿補任公卿家傳諸家傳補任などに委し○隱岐御陵は隱岐國海部郡葛田山源福寺に御廟あるよし前王廟陵記に見ゆ百練抄延應元年五月十六日の條に隱岐法皇御骨左衞門尉能茂法師奉レ懸今日奉レ渡二大原龍一龍禪院一云々龍禪院は山城名勝志十二の下卷(廿二丁左)に載たり增鏡(三の卷)の藤衣に法皇云々 延應元年といふ二月廿二日六そぢにてかくれさせ給ひぬ云々近き山にて例のさほふになし奉るも無げに人ずくなに心ぼそき御有樣いとあはれになん御骨をば能茂といひし北面の入道して御供にさぶらひしぞくびにかけ奉りて都に登りける大原の法華堂とて今も昔の御庄の所々三昧料によせられたるにてつとめたえず云々續古今哀傷順德御歌後鳥羽院かくれ給てのころ「のほりにし春の霞をしたふとてそむる衣の色もはかなし」大原にをさめ奉るよしきこえければ「入月のおほろの清水いか

にしてつひにすむへきかけをとむらん」「春のよの短き夢と聞しかと長き思ひのさむるともなし」御陵圖に後鳥羽院於二隱岐國一火葬海部郡苅田山今勝田山ト云源福寺ニアリ陵山城國葛野郡北大原寺勝林院塔頭實光院地內有レ之御骨ヲ法華堂ヨリウツス云々山陵志(下卷)に後鳥羽院在二隱岐國海部郡之苅田山一苅田今勝田山是也勝田山源福寺有二塔廟一即其火葬處云々倭漢三才圖會七十八の卷 隱岐國部に後鳥羽神社在二海部郡一云々○法施して 三藏法數廿六の卷六度の條に六度(出二六度集經一)云々 一檀那 梵語檀那 華言布施 施有二二種一一者財施 謂下以二飲食衣服田宅珍寶及一切資身之具一悉能施上之二者法施 謂下從二諸佛及善知識一聞レ說二世間出世間善法一以二清淨心一轉爲レ他說上也云々 大藏法數(廿四の卷)六度の條に 一梵語檀那華言布施 施有二二種一一者財施 謂下以二飲食衣服田宅珍寶及一切資身之具一悉能施上之二者法施 謂下從二諸佛及善知識一聞レ說二世間出世間善法一以二清淨心一轉爲レ他說上也云々 大藏法數(廿四の卷)六度の條に 一梵語檀那華言布施 施有二二種一一者財施 謂下以二飲食衣服田宅珍寶及一切資身之具一悉能施上之二者法施 謂下從二諸佛及善知識一聞レ說二世間出世善法一以二清淨心一轉爲レ他說上也云々 神道集一の卷神道由來の條に 法施ノ間(ダヘタキ)度事 金光明經云 財施不レ出二三界一法施法身利益 法施能斷二無明一云々 和光同塵利二益衆生一爲現言一切迷斷二無明煩惱一此法身託理皆同法施粧問法施利益可レ然財施可レ有二利益一耶答金光明經云財施只伏二貪心一云々 一切衆生煩惱多云貪瞋癡三毒相本其中尙貪欲上首垂迹者佛并衆生皆貪欲迷悶悲哀(給ヒテ)和光同塵形 現故財施得貪欲心伏云々續世繼(四の卷)伏見の雪のあしたに 此修理大夫のむかし尾張の國に俊綱といひけるひじりにておはしけるを熱田の社の司のないがしろなる事の有ければ生れかはりてその國の守になりてかの國にくだるまゝに熱田にまうでゝ其大宮司とかをかなしくせためられなどしければあやまちなきものをかくつかまつるよと神に申ける夢にむかしすんかうといひて有しひじりの法施をとしごろ得させたりしかばいかにもえとがむまじきとぞ見たりけるしかならんために國の司のしなに生れたまひけるにこそさすがむかしのおこなひの力に關白の御子にてもおはするなるべし云々參考平治物語(三の卷十七丁右)惡源太被レ誅條に關ノ明神ノ御前ニテ法施進ラセケル程ニ云々源平盛衰記(九の卷十九丁左)康頼熊野詣の條に今日ヲ限ノ參詣也トテ少將モ康頼モ御名殘ヲ奉レ惜テ 去夜ハ是ニ留テ 通夜法施ヲ奉二手向一曉方ニ康頼歌ヲウタヒ其終リニ足柄ヲ歌ヒテ禮奠ニソ

ナヘ奉ル云々又(廿三の卷七丁左)平家太宰府落の條に主上女院ヲ始進セテ内府以下ノ人々豐前國宇佐ノ宮へ有二參詣一云々七箇日ノ御參籠トテ大臣殿財施法施ヲ手向奉リ云々砂石集(一の上卷六丁左)笠置解脫房上人大神宮參詣條にサテ御社へ參テ法施奉ルトゾ見給ケル云々又(一の上卷十三丁左)神明慈悲貴給條に御殿ヨリハルカナル木ノ下ニテ念誦シ法施タテマツルニ折節カンナギ神ツキテヲドリケルガ云々高倉院嚴島御幸記(八丁左)に西の宮の前にてほつせ奉りてたひらかに都にかへるべきよしぞいのり申さるゝ云々尺素往來年始慶賀の條に北野參籠事法施次第並可レ隨二御意一候云々夫木抄(雜十六)神祇部西行上人歌の左注にたなせの社の許にてしづかに法施奉りけるほどに云々宗良親王李花集(上卷卅五丁左)詞書に諏方下宮寶前に通夜し侍りてよもすがら法施奉りしに云々吉野拾遺(二の卷)大神宮御託宣の條にあまてる御神にまうでゝ三七日がほど法施奉りて云々此外所見おほかるをおもひよれるひとつふたつを引出たりおほくは法施は經よみて手向る事にいひ財施は財物奉るにいへり○今上　明正院天皇にて後水尾院の皇女也紹運錄に第百十代明正院諱興子治十四年母中宮源氏同年十一月十九日降誕稱二女一宮一寬永六年十月廿九日爲二內親王一(七歲)同年十一月八日受禪同七年九月十二日即位(八歲)同廿年十月十三日讓位(廿六歲)同十二日太上天皇尊號元祿九年十一月十日崩(七十四)奉レ葬二于泉涌寺一云々○院の御門後水尾院天皇にて後陽成院の皇子也紹運錄に第百九代後水尾院諱政仁治十八年母中和門院藤前子近衞前關白前久公女慶長元年六月四日降誕稱二三宮一同五年十二月廿八日爲二親王一(五歲)同十五年十二月廿三日於二小御所一御元服加冠關白(九條幸家公)理髮頭中將實有朝臣同十六年三月廿七日受禪(十六)同年四月十六日即位寬永六年十一月八日讓位(三十四)同日太上天皇尊號慶安四年五月六日御落飾(五十六)法諱圓淨御戒師相國寺慈照院中悼和尙(後諡號二本源國師一)延寶三年十一月十四日八十御賀於二假殿皇居一被レ行同八年八月十九日崩(八十五)閏八月八日葬二于泉涌寺一依二遺詔一奉レ號二後水尾院一云々○まぼろしは幻術の道士をいふ源氏桐壺(潮月抄本十七丁左)に「たつねゆくまぼろしもかなつてにてもたまのありかをそことしるへく」河海抄にまぼろしは方士也幻術士の名也たまのありかは魂在也云

云白氏長慶集十二の卷(感傷四)長恨歌序に長恨者楊貴妃也既殪二於馬嵬一矣玄宗却二復宮闕一思悼之至令二方士求一レ致二其魂魄一昇レ天入レ地求レ之不レ得乃於二蓬萊山仙宮一忽見二素貌一云々詞に臨邛道士鴻都客能以二精誠一致二魂魄一爲レ感二君王展轉思一遂教二方士殷勤貢一排レ空馭レ氣奔如レ電升レ天入レ地求レ之徧上窮二碧落一下黃泉兩處茫々皆不レ見忽聞海上有二仙山一山有二虛無縹緲間一樓閣玲瓏五雲起其中綽約多二仙子一中有二一人一字玉眞雪膚花貌參差是云々注に玉眞乃貴妃也云々陳鴻長恨歌傳に適有二道士一自レ蜀來知レ皇心念二貴妃一(如上)是自言有二李少君之術一玄宗大喜命致二其神一方士乃竭二其術一以索レ之不レ至又能遊レ神馭レ氣出二天界一沒二地府一以求レ之不レ見又旁求二四虛上下一東極二大海一跨二蓬壺一見二最高仙山一上多二樓閣一西廂下有二洞戶一東向闢二其門一署曰二玉妃太眞院一方士抽レ簪叩レ扉云々まぼろしは此道士の事にて長恨歌臨邛道士鴻都客注に道士姓楊名道幽とあり○ちひろあるかげ　竹をいへる也伊勢物語歌に「わかやとに千ひろあるかけをうゑつれは夏冬たれかかくれさるへき」眞字本には千色(チイロ)在竹乎所殖(アルタケヲウエフレバ)者に作れり○おきつしら波たつた山　伊勢物語歌に「風ふけはおきつしら波たつた山夜半にや君かひとりこゆらん」此歌古今雜下大和物語などにも出たり○こゆるぎのこがめ　風俗歌小由流支(コヨロギノイソタチナラシイソナムノサシ)に古與呂木乃以曾太千奈良之以曾奈良之難津牟女佐之(スラスナヌラスナスキニフレナシヤスロスモ)奴良須那奴良須那於木爾遠禮乎禮奈美也奴呂々々毛(キミガメスベキナラシツシテハヤ)木美加女須陪幾女須陪幾奈乎之川美津美天波也玉垂(タマタレノヲガメフナカニスエテアルジハモヤサ)に太万多禮乃乎加女乎奈加爾須惠天阿流之者毛也佐(カナマキニサカトリニコユルギノイソノワカメカ)加奈末幾仁佐加難止利仁己由流木乃伊曾乃和加女加(リアグニ)利阿介仁古今大歌所御歌相摸歌に「こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなをきにをれ波」和名抄國郡部相摸郡名に餘綾與呂岐(ヨロギ)云々また餘綾郡鄕名に餘綾與呂木(ヨロギ)云々○みどりの洞　藻鹽草十四の卷院部にみどりのほら仙洞也云々新撰六一塵の歌に衣笠內大臣「谷深きみとりの洞は紅のちりの外なるすみか也けり」此歌夫木抄雜一にも出たり夫木抄雜三洞部に民部卿爲家「龜の尾のみとりの洞にかよふらんわか立柚の法の光りは」佩文韻府(六十の卷)に王渤九成宮頌序に丹溪碧洞吐二納虹霓一偃柏集靈騰二還雨霧一熊皎詩に長思碧洞雲窓下曾借二黃庭一雪夜抄なども見ゆ○はちすばの露の心を心　古今夏僧正遍昭歌に「は

ちすはのにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」此歌古今序古注にも引たり露の心を心とはにごりにしまぬきよき心のよし也白氏文集十五の卷放言五首の一に荷露雖レ圓豈是珠とも見ゆ○三保明神三保の浦　出雲風土記島根郡條に美保郷云々また美保郷郡家正東廿七里一百六十四歩所レ造二天下一大神命娶二高志國坐神意支都久辰爲命子奴奈宜波比賣命一而令レ產神御穗須々美命是神坐故云二美保一云々また美保濱廣一百六十歩西有二神社一北百姓家捕二志毘魚一美保埼　用壁峙窟定岳云々　古事記上卷に故大國主神坐二出雲之御大之御前一時云々また八重言代主神是可レ白然爲二鳥遊取魚一而住二御大之前一未二還來一云々神代紀下に事代主神遊行在二於出雲國三穗之碕一以二釣魚一爲レ樂或曰遊鳥爲レ樂云々など見ゆ神名帳下卷出雲國島根郡條に美保神社云々和名抄國郡部出雲國島根郡郷名に美保云々　承久物語六の卷にいづもの國大はまの湊みほがさきと申所につかせ給へば御ともの武士どもはみな〳〵御いとま給はり都へかへりのぼりけるほどに法皇御涙のひまよりしゆめいもんゐんへ御しよをおくり奉らせ給ふか「しるらめやうきめをみほのはまちとりなく〳〵しほる袖のけしきを」此御製歌枕名寄廿の卷出雲部にも載て云右御製自二遠所一七條院の御方へ奉り給云々また三穗崎日本紀師俊「御こゝのかしこみてこそもろた舟これよりみほの崎につくせな」懷橘談上卷島根郡美保の條に美保の郷は大己貴命高志國に坐す神意支都久辰爲命の子俾都久辰爲命の子奴奈岐波比賣命を娶て神御穗須々美命を產給ふ是神坐すゆゑに美保といふ又云高皇產靈命の子三穗津姬は大己貴命娶給ふ三保明神是也と云り大己貴命の御子事代主神遊行て出雲國三保の崎に在す釣魚を以て樂とし給ふ或は鳥遊するを樂とす八雲御抄に出雲三保の崎事代主の神釣しける所と有隱岐國鳴渡へ此湊より海路三十六里と云後鳥羽院配流の時の御歌に「弓の濱三保の關弦よりかけて心やすきにいたるこゝろかな」とよみ給ひぬと里人かたり侍る弓濱は伯耆國也濱の形弓のごとく也云々　○にしきの浦懷橘談上卷意宇郡の條に錦浦云々道命法師の歌を引たるは誤也こは神武紀に見えたる熊野の錦浦なるべし宗養が發句はた未レ審玄旨法印の歌は出雲錦浦也中國治亂記に近邊の野人村老新介殿ヲ一社ノ神ニ崇メ新宮ト號シテ錦ノ浦ト申所ニアリ常盤堅盤ノ祭禮今ニ不レ絕ト聞エシ云々玄旨法印九州道記に出雲國仁保の關にあがり見物し侍りてそれより磯傳ひを行ににしきの浦といへば暫船をとゞめて「船よするにしきの浦の夕波のたゝむやかへる名殘なるらん」○右水無瀨前亞相氏成卿隱岐山陵參詣記一讀之後率爾執レ筆考二注僻說一者也

（十六）浮囚　地名に浮囚といへるはエビスと訓べし色葉字類抄七の卷江部　人倫門に浮囚ユビス蝦夷俘夷夷狄などゝも同くエビスと訓たり日蓮書錄内にも浮囚にエビスと點ず頭書左傳三ノ五丁ウ莊公六年注に俘囚也云々俘ヲ「トリコ」ト訓じたり

（十七）みゝず書　榮花物語　木綿四手八丁右にひめみこやみゝずがきにせさせ給へるこれいかであての御もとに奉らんとのたまはするにつけてもほとゝぎすにやつげましとあはれに御らんせらる云々按に「あて」は貴（アテ）の字也崩じ給ひし父帝三條院の御事をのたまふ也長明發心集四の卷十三丁左或人臨終に物いはざる遺恨の事の條に紙と筆とをたまへあら〳〵書つけんといふすなはちとらせたれど手もわなゝきてえかゝずわづかにかきつけたるはたがはぬみゝず書也云々信明集に返事にみゝずがきをしておこせたれば「わひしきに戀にまどへる心にはその事としも見えすそありける」定頼集にみゝず書をかきて奉れたまひける返事に「朝夕に我なてしこの花の色をかれ〳〵になる袖そつゆけき」晉書列傳五十王羲之許邁等の傳の制に子雲近世擅二名江表一然僅得レ成レ書無二大夫之氣一行々若レ縈二春蚓一字々如レ綰二秋蛇一云々

（十八）墨本の始　細井知慎が觀彝百譚二の卷二丁左日本書法中華稱揚の條に知慎弱年の時古友篁洲榊原玄輔順齋今井元昌と同じくはかりて唐法正面打碑を拓む後朱晦菴の眞蹟を自刻自打て近衞攝政の御時奉りしかば原始墨本晦菴眞蹟の八隸字を下し賜りて其首に冠らしむまことに絕代の榮也されば和朝の打碑の原始なる事外にゆづる所なし知慎元來事を秘する事なし徒弟に廣く敎て作らしむ此ほどは能する人おほし云々

（十九）右筆　明衡往來群書類從本中之末卷十五丁右　大學頭大江狀に只今從二大內一有レ召可二參勤一侍仍右筆非レ暇追可二注申一侍云々袋草紙一の卷廿四丁右に行成幷伊房書置秘書有レ號二右筆抄一書寫之間口傳也云々　古今著聞集跋廿の卷四十二丁に建長六年十月十七日宴後朝右レ筆記レ之云々吾妻

鋺一の卷七丁右治承四六廿二條に康清歸洛武衡遺ニ委細御書ニ被レ感ニ仰康信之功一大和判官代邦道右筆被レ加ニ御筆幷御判一云々同二の卷廿九丁左治承六五十一條に伏見冠者藤原廣綱初參ニ武衡一是右筆也云々同十五の卷廿九丁右建久六十十三條に故木曾左馬頭義仲朝臣右筆有ニ大夫房覺明者一元是南都學侶也云々頭書東鑑廿六ノ卷廿二丁オに被レ召ニ聚右筆之源平盛衰記一の卷三丁左五節夜闇打條に忠盛此事風ニ聞テ我右筆ノ身ニ非ズ武勇ノ家ニ生レテ今此恥ニアハン事爲レ身爲レ家心ウカルベシ云々同四十三の卷十丁左源平侍遠矢條にア、親義ハ右筆バカリハ取モ習タルラン弓矢ノ道ハ不レ知者ヲト云タリケレバ敵モ御方モハツト笑フ云々明月記元久元十一十條に如レ形書ニ判詞一慥右筆注ニ付之一云々同寛喜三九廿三條に家中無ニ右筆一者雇レ人令レ書云々續古今眞字序に文永二年玄陰季大月綱之趣右レ筆而勤云レ爾云々庭訓往來八月狀に管領寄ニ人右筆奉行人等一云々難太平記に今年トナリテ以ノ外中風氣アル間時々右筆不レ叶思ノ外ノ方ニ筆曲ル間本ヨリノ鳥ノ跡愈比興也云々百寮訓要抄參議條に陣の座にて物をよみ右筆をする器也云々鎌倉年中行事群書類從本上卷一丁左に椀飯奉行直垂ニテ出仕是ハ右筆勤レ之云々又十六丁左此三ヶ條油ミガキノ坐中ニ右筆伺候令ニ披露一時閣役是モ右筆老若ノ閣ヲ持テ廻時管領評定奉行ヲ爲レ始閣ヲ取云々又廿四丁左矢數致ニ記錄一右筆ハ白洲伺候云々又廿六丁左評定御敎書拜領ノ方ヘハ右筆マカリ出日限ヲモ申云々同下卷十五丁左に御陣奉行之右筆罷立云々又廿丁右右筆壹岐彈正忠來御社參之御日限時刻申レ之畢云々職原抄下卷勘解由判官の條に聊堪ニ右筆一者所ニ望任一也云々壒嚢抄二の卷廿八段に右筆フムデヲトル云々塵添本には四の卷廿九丁左に見ゆ愚記二の卷文明十三四五條に自ニ兼俱卿一有レ使就ニ平野奉加帳右筆事一樽一荷兩種遣ニ一條亞相一云々同五の卷文龜二二十二條に侍從二位來扇一本杉原十狀隨身昨日右筆之報謝云々同九の卷永正十五五廿五條に秀房朝臣來小除目陣右筆事受ニ余商量一云々細川家書札抄に奉行之事右筆方飯尾美濃守布施下野守齋藤遠江入道云々慈恩傳六の卷八丁左に稱爲ニ大唐西域記一凡一十二卷繕寫如レ別望班ニ之右筆一飾以ニ左言一云々〇與清曰右筆の字面明衡往來に見えしを始にていとおほかり壒嚢抄にはフムデヲトルと訓古書都て執筆の意に用たるを武家書役の名目とし祐筆とさへ書移せるは本意にあらず漢書

公孫弘傳注に師古曰右亦上也などありて筆を上とし尙義より執筆の事を右筆とはいへる也漢籍の字面は慈恩傳を出處とやせん頭書二水記七の卷永正十八九廿八條に御願文淸書事世尊寺依ニ在國一被レ仰ニ中御門一品入道ニ之處老屈右筆難レ叶之由申入仍息大納言令ニ淸書一了云々

（廿）地藏頭に飯を盛ル　酒飯論に麥の御料もめづらしや地藏がしらの高飯は六道の値遇たのもしく云々飯を地藏頭にもる事無住雜談歟守武千句歟の由にも見ゆ追可レ考頭書砂石集一ノ廿七丁ウ地藏ノ頭ニテタベスリタクはゝや「たゝまゐれたてひやしるのからたせん」

（廿一）大樹不レ可ニ妄伐一　水經注廿の卷十五丁右丹水の條に城南門外舊有ニ郡社一柏樹大三十圍蕭欣爲レ郡伐レ之言有ニ大蛇一從ニ樹腹中一墜下大數圍長三丈群小蛇數十隨入ニ南山一聲如ニ風雨一伐レ樹之前見レ夢ニ於欣一欣不ニ以厝一意及レ伐レ之吏疑作更少日果死云々魏志武帝紀七十一丁ウ注に世語曰太祖自ニ漢中一至ニ洛陽一起ニ建始殿一伐ニ灌龍祠一而樹血出曹瞞傳曰王使下工蘇越徙ニ美梨一掘ニ之根傷盡出レ血越白レ狀王躬自視而惡レ之以爲不祥還遂寢レ疾云々

（廿二）いは橋　葛城の石橋の事は所見いとおほし水經注十四の卷十七丁左濡水の條に三齊略記曰始皇於ニ海中一作ニ石橋一海神爲レ之竪レ杜始皇求ニ與相見一神曰我形醜莫レ圖ニ我形一當與レ帝相見乃入レ海四十里見ニ海神一左右莫レ動レ手工人潛以レ脚畫ニ其狀一神怒曰帝負レ約速去始皇轉レ馬還前脚猶立後脚隨崩僅得レ登レ岸畫者溺ニ死於海一云々これ同日の談也

（廿三）養ニ鷄千餘頭一　平家物語源平盛衰記などに五條大納言邦綱卿鷄を千羽養て大福人なりしよし見ゆ水經注十六の卷廿二丁右穀水の條に尸鄉云々數十里無ニ村落一上有レ山陽王家墓云々此山即祝鷄翁之故居也搜神記曰鷄翁者洛陽人也居ニ尸鄉北山下一養レ鷄百年餘鷄至ニ千餘頭一皆有ニ名字一欲レ取呼ニ之名一則種別而至後之ニ吳山一莫レ知レ所レ去矣云々これも同日の談也

（廿四）名狗　太平記畑六郎左衞門時義鷹巢城に籠れる條に犬師子といへる狗あり水經注十九の卷廿四丁左渭水下の條に三秦記曰麗山西有ニ白鹿原上一有ニ狗枷堡一秦襄公時有ニ大狗一來下有レ賊則狗吠レ之故一堡無レ恙故川得ニ厥目一云々

（廿五）脇より生　釋尊右脇より生るといへるは所見おほし水經注廿二の卷十一丁右淸水の條に世本曰陸終娶ニ於鬼方氏之妹一謂ニ之女潰一今據ニ世本一云陸終娶ニ鬼方氏之妹一謂ニ之女嬇一生ニ子六人一大戴禮帝繫

篇作ニ女隱一宋本水經注作ニ女潰一是生ニ六子一孕三年啓ニ其左脇一三人出焉破ニ其右脇一三人出焉云々

（廿六）繭玉　武藏相摸の俗正月十五日繭玉となづけて米團子を梅枝にさし餠花などのさまに餠を方にきりてさしまぜ蠶神に供する事あり分類字錦三の卷節令部上元條に繭ト楊萬里詩心知繭ト未ニ必然一醉中得レト喜欲レ顚自註上元夜里俗粉米爲ニ繭絲一書ニ吉語一置ニ其中一以占ニ一歲之福禍一謂ニ之粉ト一云々とあるは似たる說といふべし

（廿七）衾宣旨　明月記建仁三十十一の條に午時參上人々云昨日被レ討法師非ニ堂衆一學生之中凶徒梶井法印被ニ籠置一惡徒等悉被レ討了去年於ニ山上一射ニ坐主御住房一被レ下ニ衾宣旨一之輩其後不レ成レ憚橫ニ行路中一云云源平盛衰記卅の卷廿丁左覺明語ニ山門一事條に衾ニ白井法橋幸明ト云僧アリ三塔第一ノ惡者衾ノ宣旨ヲ蒙テ山門ニハ安堵シ難クテ當山千僧供ノ料所愛智郡胡桃庄ニ忍居タリケルガ云々幸明思ケルハ我身當時衾ノ宣旨ヲ蒙レリ云々元德二年日吉社並叡山行幸記詳書類從卷卅八收レ之廿九葉左に神人の方人は賴存憲猷なりければはやく衾の宣旨を下さる云々また五十一葉左に閇籠の輩快席良俊等は衾の宣旨を下されけり云々安齋武藏鑑六十九葉左に衾宣旨云々此宣旨ノ事ヲ橘嘉樹ガ滋野井公麗卿ニ問申ケレバ綸旨抄ヲ手ヅカラ抄寫シ給タリ如レ左

一綸旨抄衾宣旨事

乾元元年十二月七日　宣旨

延曆寺住侶賴存猥莅ニ本社一祭禮一奉レ射ニ大宮神輿一科條不レ輕罪責有レ重觸ニ仰門主一雖レ召ニ其身一忽ニ緒朝威一剩搆ニ虛病一勘ニ之舊規一先儒未レ難レ搦後訪之事左史未レ記早仰ニ撿非違使井武略輩一宜レ搦ニ進其身一

乾元元年十二月七日　宣旨

延曆寺住侶弁豪猥莅ニ本社一祭禮一奉ニ大宮神輿一爲ニ其罪一雖レ召ニ其身一忽擲ニ止觀稽古之業一既有ニ叡山逐電之聞一早仰ニ五畿七道諸國邊土一宜レ搦ニ進其身一縱消ニ跡於台嶽之外一誰家全レ命縱隱ニ形率土之中一何處容レ身繹因綸紵敢莫ニ怠慢一

藏人右京權大夫平仲高奉

右橘嘉樹ガ藏本ヲ寫ス本書字體行草相交疑字如レ本寫レ之今按衾宣旨ト云名目國史令式等ニ未レ及レ見

蓋中世ノ俗稱歟僧ノミニ限ラズ俗人ニテモ稱スル歟衾ハ被リテ身ヲ覆フ物ナル故罪アル者ヲ刑センガ爲ニ上ヨリ罪人ヲ覆ヒ給フヲ以テ衾トハ云歟今俗ニ天ノ網ガカヽルト云如クノ意歟未レ詳

（廿八）地名に富と稱する事　東鏡に武藏國吉富とありその外古文書に某富と稱地名見ゆ元德二年日吉山行幸記五十七丁ウに開發秋富事によりて釋迦堂に閇籠す云々又五十九丁ウ西塔の閇籠は開發秋富地頭の爐妨をやめられければ退散す云々按に開發新田の名に祝て富の字をおほする事にやあらん建治三年日記詳書類從卷四百二十一收レ之六月十三日の條に被レ仰云肥前肥後國安富庄地頭職相大守可レ有ニ御拜領一之由有ニ御氣色一云々

（廿九）藥研堀　江戸兩國矢の倉に藥研堀といふ地名あり古藥研の貌したる堀ありしゆゑの名也とぞ秋夜長物語詳書類從本廿一丁ウにやげんぼりのそこせばなる中へがばととびおり云々と見えて底狹き堀をばみな藥研壕といひける也

（卅）江比須加介　二水記八の卷大永二年正月二日著坐事の條に右次第云相分著レ之謂二江比須加介一已上文奧端相分著也云々えびすがけの事已に注したれば補べし

頭書　酒飯論にそばさしひらさしちがへざしえびすがけとのおもひざし云々

（卅一）加判の列　二水記七の卷永正十八七五條に著ニ殿上一今度奧座覽ニ吉書一云々袖書遣ニ藏人一藏人取レ之遣ニ出納一出納覽レ之則授ニ返抄於藏人一藏人取レ之授レ次□披レ之加判次書了遣ニ藏人一云々太田康有が建治三年日記七月廿五日の條に評定衆誓狀申ニ加新衆署判一可ニ進入一之由以ニ平金吾一蒙レ仰了云々同十二月十九日の條に越後左近大夫將監時國奧州相共被ニ六波羅雜務一可レ加ニ署判一之由可レ被レ仰也云々按に今世加判の列といふは古の連署の事也連署の事は名目抄詳解二の卷十五丁ウ故實拾要六の卷十一丁ウなど古書の所見擧盡すべからず連判はたおなじ頭書東鑑五ノ二丁ウ加ニ署判一云々

（卅二）精進解斷酒解　二水記享祿五年二月十六日の條に今日御斷酒解也御中酒及ニ數盃一終日又大飮云々これは今の禁酒落也同書永正十八年七月廿一日の條に午後參內御精進解御盃於ニ御三間一之儀如レ例云々同九月廿九日の條に御樂了有ニ一獻一御精進解女中申沙汰如レ例云々此外二水記中所見おほかりこれは今の精進落也頭書酒飯論十丁ウに一向だん酒の聖云々砂石集八ノ十ノ十四丁ウ憍陳如品三に五事一者梵行二者斷肉三者酒斷四者斷辛五者樂在ニ寂靜一云々

（卅三）禁酔盟盃一杯上戸　台記久安二年五月十七日の條に次渡二南山房一（余歩行在二輿前一）先供二御膳一又余已下賜レ膳一如二水飲儀一（座主房預レ膳）座主申云山霧於レ人有レ毒飲レ酒消レ之云中堂禁酒者禁酔也願上飲レ之上則飲レ之（忠隆朝臣供レ之）忠隆了使二忠隆朝臣一賜二盃於余一余曰可レ用二他盃一（存レ禮也）上曰莫レ替予以二御盃一飲レ之一啐上強レ之余奏云臣性素不レ得レ飲レ酒上許レ之置二盃御膳一了云々按に禁酔は不レ及レ濫の義也又同年九月廿七日の條に歸路爲レ見二勢多橋一渡レ之歸路臨二渭水一適得二山邊淨水一而無二飲器一左馬權頭顯定忽以レ紙造二飲器一盛レ水献レ之因レ之禦レ渇顯定有レ情矣歸路公春酔狂因レ之自二粟田口一令レ歸レ家後日公春耻レ之請曰盟定二飲酒盃數一余許レ之十月四日公春詣二中堂一盟曰御共日一盃不レ然日五盃可レ用若過レ之者毎二毛孔一可レ蒙二中堂罰一其盟書先於二中堂一讀上後献レ余云々按に盟定飲酒盃數は今世の一杯上戸三杯上戸などいふ類也

（卅四）薦食薦葉薦簀薦菅薦蒲薦葦薦藁薦折薦韓薦編薦生薦　延喜式（一の巻十四時祭式上に神祇官祭神七百八十七座奠二幣案上一神三百四座云々社一百九十八所座別純五尺五色薄純各一尺倭文二尺木綿二兩麻五兩庸布一丈四尺畏葉薦三尺云々○前五十八座座別純三尺木綿二兩麻五兩四座置八座置各一束槀一枚槍鋒一口畏葉薦一枚槍鋒一口庸布一丈四尺畏葉薦三尺按に此外延喜式中畏葉薦と見えたる枚擧すべからず物を裹料の薦にて葉を編たるものと知べし○延喜掃部式（廿七丁右に葉薦四枚端料錦生純各五條（一條長九尺四條各長八尺五寸廣並三寸）云々按に此葉薦は簀薦にて菰の葉を編たるものにはあらずさて簀薦に通はしてこれもスゴモと訓べし○儀式二の卷踐作大嘗祭儀上に紀伊國薄鰒四連生鰒生螺各六籠都志毛古毛各六籠螺貝燒鹽十顆並令二賀多潜女十人量一程採備一其幣各五色薄純各一尺倭文一尺木綿麻各五兩葉薦一枚潜女所

レ須鑒十具刀子二枚淡路國瓮廿口（各受二斗五升一）比良加一百口（各受二一斗一）坩二百口（各受二一斗一）其幣各五色薄純各三尺倭文三尺木綿麻各一斤葉薦一枚作具鑵斧小斧各二具鎌二柄造訖使レ當國凡直氏一人著二木綿鬘一執二贄木一引導上阿波國麁布一端木綿六斤年魚十五缶蒜英根合漬十五缶乾羊蹄蹲鴟橘子各十五籠（已上忌部所レ作）鰒卅五編鰒鮨十五坩細螺棘甲蠃石華等幷廿坩（已上那賀漆部女十人所レ作）其幣各五色薄純各六尺倭文六尺木綿麻各二斤葉薦一枚作具鑵斧小斧各四具鎌四柄鑿十二具刀子四枚鉏二枚火鑽三枚並令レ忌部及潜女等量レ程造備上云々按に此文延喜踐祚大嘗祭式にも見ゆ儀式中葉薦の所見此外にもあれどさまではくだ〳〵しければ省て引出す○江家次第一の卷四方拜事條に鷄鳴掃部寮奉二仕御裝束於清涼殿東庭一先敷二葉薦一（南北二妻）其上敷二長莚一（南北二妻）其上立二御屏風八帖一云云○同卷又說四方拜事條に先敷二葉薦一其上敷二長莚一云々○江次第考一の卷に葉薦今云「コモ」ノ事也今ニ此ヲ「コモ」ト云也長莚ハ今云莚道也「コモ」ヲ長クオリタル物也「タヽミ」ノ表ノ類也云々按に江次第印本に葉薦に「スゴモ」と訓を付たりされど「ハゴモ」と訓べくおぼゆ此外次第中の所見は引出ず○政事要略廿八の卷十一月下酉賀茂臨時祭の條に藏人式云云々於レ是先下二東廂御簾一掃部寮孫廂南第三間鋪二小莚二枚一其上供二半疊（北面）一當二南階北端庭中一鋪二葉薦一爲二御幣机下敷一其南去一許丈鋪二菅圓坐二枚一爲二使及宮主座一云々○また清涼記下酉日賀茂臨時祭條に當二南階北端庭中一鋪二葉薦一爲二御幣机下敷一也云々按に延喜四時祭式上（廿丁左）に所司預敷二案下幣薦一と見えたる幣薦もこゝの文と對照して葉薦なること知べし○俊頼散木集（三の巻）の秋部にやどりたる家に「こも」をしつらひにしてかけたりけるを風の吹ならしけるを聞てよめる「柴の菴にはごものかこひそよめきてすどほるものは嵐也けり」按に此歌夫木抄（四秋）秋風條にも家集俊頼朝臣と載て四の句のすどほるものはを音するものはに作れり○與清曰葉薦は俊頼朝臣の歌によりて「はごも」とも訓べきはもと生蔣（マコモ）の葉を編たる物なれば薦（コモ）といふが總名なるを食單（スゴモ）にまがへじがために葉薦（ハゴモ）といへるなるべし延喜主計式上（一丁右）に長二丈廣四尺なども見えていと長き物も有ける也掃部式（卅一丁右）に薦長二丈四尺廣四尺長三丈廣三尺などあるも葉薦の事なるべし又スコモと訓て簀薦と同義なるも掃

部式に見ゆ○延喜式四時祭式上鳴雷神祭條に槲四俵席四枚食薦六枚韋籠一口云々また春日神四座祭條に槲一俵置簀四枚食薦十枚（已上大膳式所レ送）云々按に此外式中食薦の所見いと〳〵おほかれどみな槲韋籠置簀の類の炊蒸の具に用て竹を細に割て編たるもの也葉薦に似たれど竹簀なれば簀薦とは名づけしなるべし○倭名抄十四厨膳具部に食單唐式云鐵鍋食單各一（漢語抄云食○單須古毛スゴモ）万葉集十六の巻十七丁左詠二行騰蔓菁食薦屋樑一歌に食薦敷蔓菁煮將來樑爾行騰懸而息此公○江家次第五の巻上申日春日祭事條に神部四人以二食薦一枚（四）敷二神殿前一次氏上卿以下供二私幣一云々同十五日の巻大嘗會卯日條に八姫幷高橋氏等捧二神食薦一更北行向レ南列候猶在二戸外一最姫（謂二陪膳一）捧二神食薦一鋪二短帖之右上一次姫（謂二後取一）傳二御食薦於最姫一最姫取鋪二同疊之上一姫等以二御食一手傳置二御食薦上一先置二八葉盤於御食薦上之外方一次御飯逼二御前一而供レ之云々又居二御羹等於高坏一立二同薦上一薦不足者立二短帖上一置二菓子東邊一云々最姫先開二窪手盖御食薦左右一云々姫先取二葉盤一奉二天皇一天皇取二御箸御飯盛一給レ姫如レ此惣十度他物同レ之便以二其所レ加レ箸盛御一惣十度也姫給レ之置二御食薦上一云々江次第考五の巻に食薦ハ神事ニ敷物ニ用ル薦也荒薦ハ清キコモノ義也食薦モ亦アラコモノ義也云々按に江次第中此外の所見はわづらはしければ省て載ず○儀式十の巻十二月大儺儀に陰陽寮共入齋郎持二食薦一敷二庭中一陳二祭物一其料五色薄絁各一尺二寸飯一斗酒一斗脯醢堅魚鰒乾魚各一斤海藻五斤鹽五升柏廿把食薦五枚匏二柄缶一口陶鉢六口松明五把云々按に延喜陰陽寮式にも此説見えて大同小異也○正和宸記建久二十一十五吉田祭條に次諸司居レ饌先敷二食薦一次三献造酒官人唱平勘レ之云々また同十九日大原野祭條に次昇二御棚一一御燭（西第一ニ神主資房取二食薦一敷レ之宰相中將（鮮予宗方忠廣等昇レ之自余忠廣康久兩人役レ之次内侍加賀參上此間余宗方等奉幣云々○二水記大永七四廿大秡の條に宮主座（掃部寮敷レ之）簀薦一枚敷二座前一出二御晝御座一（吉御直衣御張疑吉御冠卷纓）次關白令レ候給（御座左）宮次主著二庭中座一諒闇御裝束櫟御衣一具置二宮主前簀薦上一次供二御贖物一陪膳頭左大辨資定朝臣役送尹豐次宮主供二大麻一（藏人頭供レ之）次撤二御贖物一次入御云々按にこれらは御裝束御衣などを置料の簀薦にて食膳にあづからず○雅亮裝束抄一の巻大嘗事條に机を立て饌をば居る

也其机の下に簀薦といひて翠簾のやうに編て白き生のきぬの裏付て廻りに白き端（へり）指たるが机の廣さなるを机ごとの下に鋪なり外記史の座には翠簾を掛ず緣に廣莚も鋪す長押の上に差莚鎮子はあり青端の疊を鋪く緣緣といふ机あり簀薦なしと云々○類聚雜要抄一の巻（九丁右）母屋大饗の條に机下ニハ簀薦二尺敷レ之簀薦ト云ハ竹ヲ御簾ノ樣ニ編テ白生平絹付レ裏也弘長机定也云々○大饗雜事（群書類從卷四百七十三收レ之）に簀薦事裏ハ白生絹其下敷ニ油單ニ候也鯖口折トハ繪樣献レ之裏ハ閇付候也簀薦如レ簾編レ竹裏著ニ白生絹ニ油單面生うす〳〵と青鈍裏ハ練候也雨皮躰也云々按に簀薦の圖を載たり徵古圖錄にも引たりき○藻鹽草八の巻（五十一條）薦の條にすごも云々○新千載集神祇部に人々に百首歌めされけるついでに神祇を後二條院御製「千はやふる神のすこもに霜さえし其曉はいまもわすれず」○西宮記鋪二簀薦肴物一云々○延喜掃部式（卅一丁右）に編二食薦一（長六尺廣三尺）料擇蔺一尺五寸生絲五銖長功一人中功一人半短功一人大半按に食薦を編料の物こゝの文にて知べし○又云穊將食薦一枚（長六尺廣三尺）料穊將二尺麻十三兩長功半人中功大半人短功一人按に印本に穊將をチノコモと訓るは誤也首書に玉篇音除致反爾雅稚也方言穊小也說文幼木也稚字也或云擇ニ取將中子一編二作食薦一云々と見えたれど穊將はマコモの稚く柔なるを取りて作れるなるべし歌にわか蔣おほくよめり○延喜主計式上（九丁右）に菅薦二枚（長一丈二尺廣四尺）云々○綺語抄中卷器物部にとふのすがごもとは蔣を十節までこめてあみたるなりひろくせんとしたるなり「みちのくのとふのすかこも七ふには君をねさせて三ふにわれねん」又云とふのこほりといふ所に生る蔣の十節ある也云々○和歌童蒙抄（六の巻）資用部薦の條に「ミチノクノトフノスカコモナヽフニハ君ヲシナシテミフニワレ寐ム」古今廿ニアリカノ國ニトフノ郡ト云處ノアレバソレニツキテトフノスガゴモトヨミテ讀テフノ十アルニトクナセルトゾ聞エタルタヾトフアル蔣トイハヾミチノ國ニカナラズアルベシトミエタルコトナシ云々按に陸奥のとふのすがごもの歌古今廿の巻にあるよし見えたれど古今の今本には見えずこは東歌の陸奥歌の中にありけんに寫脫せしなるべし此歌高名なるに出所さだかならざるは必古今集の歌にて轉寫の脫漏なると疑べからず夫木抄（雜十薦條にもよみ人しらず

て出せり○袖中抄（十四の卷）とふのすがごもの條に「みちのくのとふのすかこもなゝふには君をしなしてみふにわれねん」顯昭云とふのすがごもとはあみ緒を十してあみたる也すがごもとは菅にてあみたるこも也すがゝさすがみのすが枕すがわらだなど云が如し薦は大様菰（コモ）蒋にて編たれば本の名に從ひて古毛（コモ）とはいへど藁にて編たるをば藁薦（わらづも）といひ菅にて編たるをばすがごもといふ也十ふあらんことはひろからん料也されば綺語抄にはとふとは十ふあみたるをいふといへり又みちのくのとつゝくるは此ひろきこもの奥州にあるなめり之は人を思ふ心にて七ふには君をねさせ三ふにはわれねんとよめる也それを童蒙抄綺語抄などに陸奥（ちか）のくにゝとふの郡あり十ふあみたるこものいでくるよしいへる心得られず奥州の郡の中にまたくとふの郡なし又十ふあみたらばさて侍りなんとふの郡よりとふ編たる薦いでくといふ事げにと聞えず又とふの郡と云所に生る蒋の十ふしあるといへるもいはれず蒋の節いかゞ十ふしあるべき編たるこそいはれたれ又十ふしある菅とこそいふべけれ蒋といふはいはれず此とふの郡の十ふあめるこもの義きはめて手づゝなり又十ふあまん事は外にもありなんといふ難はいはれず何事もやすき事なれど國々に好む事かはりたれば陸奥のくにも十節の菅薦を好むにこそ又あながちにこのまねどさやうによみ出たる歌あればやがてそれを陸奥のとふの菅薦とよむ也俊頼山家嵐歌「あらしのみたえぬみ山にすむ民はいくへかしけるとふのつかなみ」つかなみとて藁をあみて敷也わら組荒敷猫掻ともいふ云々按に歌詞の君をしなしては童蒙抄にしか有て上のしは助字なるべし袖中抄の異本に君をやどしてとも君をねさせてとも作れる本あり俊頼のとふのつかなみの歌は散木集（四の卷）各部に出ていくへかしけるをいくへかゝけるに作れり袖中抄十八の卷けふのほそ布の條にとふのすがごもをとふの郡にあるこもといへりそれもさる郡なしとも見ゆ○堀川百首霜歌に河内「霜拂ふ鴨の上毛やいかならん十ふのすかこもさゆるよな〳〵」又霰歌に春宮大夫公實「玉さゝにあられたはしる冬の夜はいとしそさゆるとふの菅こも」○金葉集冬部に氷滿池上といへることをよめる大納言經信「水鳥のつらゝの枕ひまもなしむへさえけらしとふの菅こも」按に此外

十符（トフ）の菅薦をよめる歌いとおほかれど後なるはふよようなれば引出す○色葉和難集（二の卷）止の部にとふのすがごも「みちのくのとふのすかこも七ふには君をねさせて三ふにわれねん（トフ）」長明文字鎖云とふのすがごもと云は陸奥のくに十符の郡といふ所にあむこもなりそれをあみふの十あるによせて十ふのすがごも三ふにねてなどはよむ也云々○八雲御抄（三の上卷）草部薦の條にとふのすがごもといふは有二兩說一とふにあみたる也又陸奥のとふといふ所とい へり云々又（三の下卷）雜物部疊の條にとふのすがごも是はこもの事也十ふにあみたる也されどたゝみによむもくるしからず云々按に色葉集（上の三卷）資具部藻鹽草（八の卷）草部などにも出たれど異なる說なし○言塵集（三の卷）にとふのすがごもとは兩說也一說にはこもをば十ふにあむ物也と云々一說には奥州にとふと云里にこもをあむ所也云々又但馬なる十ふのすがごもともよめり「みちのくのとふのすかこも七ふには君をやとしてみふに我ねん」此歌は君をばひろくねさせて我はそのかたはらにねんと云心云々按にとふの菅薦の所見枚擧に遑なしとふは地名にてその邊より菅薦を作り出せる也奥羽觀迹聞老志（六の卷）宮城郡部上に十符池（符或作レ府）在二岩切邑一中一多賀國府館南農家後有二小池一池中有二垂柳一柳下菅草頗多云々また或曰如今稱二利符一者乃古之十符地也利與レ十訓通云々利符近村有二菅生邑一想夫往昔以二此地生一好菅一而得二地名一乎蓋鄉俗以レ此制二薦席一而爲二產業一自レ是人稱二之利符菅席一亦無レ妨二其事實一也據二十編之說一則採レ生二于此池中一者上而士人編レ席以備二庸貢一者乎故存二兩說一以待二識者一云々玉（たま）（ん）間十一（の卷）みちのくの名所の條に陸奥の事どもをしるせる物に宮城郡に利府（フ）村といふ有仙臺より原道三里廿八町餘ありその利府村のならびなる高野村にとふが菅とて名菅あり其村の田の中に二三間四方垣をゆひめぐらして里の百姓國主の命によりて預り居る也云々按に利府村は「リフムラ」なるを「トフムラ」とよめるはひがごと也和歌名所追考（百八の卷）十符浦の條に菅の在所岩切の邊は海邊にあらず鹽竈の浦までも一里半許あり其上十符は薦の上の名にて名所となすべきいはれなし但爲仲歌の詞書にみちの國に侍りける比京へおくりしよし也所の案内存知の人のよまれたれば定めて其浦の名こそ侍りつらめ云々右の說どもに據に今「リフムラ」ありて利府と書るは「トフ」なる事疑なし

新古今羇旅部にみちのくにゝ侍りける比八月十五日夜に京を思ひ出て大宮の女房のもとにつかはしける橘爲仲朝臣「見し人もとふの浦風おとせぬにつれなくすめる秋の夜の月」など其外陸奥十府の浦をよみたる歌おほかればかた〴〵利府は陸奥の地名にてそこより菅薦を出せる事と知べし今按名跡考一のにとふにあみたるこもをいへり名所をよめるには非ずといひたれどなほうけがたし○延喜主計式上九丁右に韓薦(コモ)一枚長四丈廣七尺云々又廿七丁左に韓薦云々按に韓薦は韓國の編やうを傳へたるにや○延喜主計式上一丁右に折薦三枚長二丈廣三尺六寸云々同掃部式一丁左に短帖折薦簀云々又七丁左御厠殿舖に折薦八重帖一枚云々又悠紀御膳所に須折薦帖八枚折薦八枚折薦短帖八枚葉薦八枚山城食薦八枚寮造食薦八枚付に内膳司に云々又廿六丁右折薦帖一枚長八尺廣四尺厚五寸料調折薦六枚云々按に折薦八重帖折薦帖折薦短帖などいふ名目あり蔣を折かへして作れる物なるべし○延喜主計式上廿七丁左に蒲薦韓薦云々按に蒲をもて編たる薦なるべし○延喜掃部式七丁右に懸に葦薦於悠紀主臺正殿南堂殿別六枚云々按に葦もて編たる薦也○延喜掃部式廿五丁左に織席一枚編薦二枚云々按に此條下編薦の名目おほく見ゆ編たる薦の義にて別義あるにあらず○延喜民部式下二丁左に凡神祇官卜竹及諸祭諸節等所に須菅竹柏生蔣山藍等類亦仰に畿内に令進云々按に生蔣はマコモを生にて進らする也七月精靈棚に生蔣を編て敷用るも古代よりの事にやその清淨なる義を取て生蔣を編用るにても有べし延喜大膳式下十六丁右五月五日節料に青蔣十一圍とも見ゆ○玉海文治三九十八の條に此日潔子內親王云々祓に葛野河に即參に大神宮に之日也於に官廳に被レ行此儀に云々南庇東面柱內敷に荒薦に立に屏風一帖に云々高御座北東方又舉に一燈に東二三間舖に滿荒薦に東第一間不レ敷レ之土壇也云々按に東方又の下三字未レ詳一本木一燒に作り又一本火燒一に作る蓋火燒屋の三字にや可レ考荒薦は藁薦なるべし袖中抄十四の卷とふのすがごもの條に藁にて編たるをばわらごもといふよし見ゆ○輿清曰古毛といふ名はもと水邊の眞蔣(マコモ)をとりて編用るゆゑにさいふ也食單は竹簀もて作れゝど其貌近く薦に似たれば簀薦(スゴモ)と名づくさて葉もて編たるも後に食單にまねびて竹簀に錦生綀など端にしたるも共に葉薦と書て「ハゴモ」とも「スゴモ(スガゴモ)」ともよめり菅にて作れるは菅薦蒲(ガマコモ)葦にて作れるは葦薦(アシゴモ)藁にて作れるは藁薦(ワラゴモ)折返して作れるは折薦(オリゴモ)韓樣に作れるは韓薦編(カラゴモ)たるは編薦生(アミゴモ)なるは生薦(ナマゴモ)などいへりと知べし

(卅五)影向　影向の字面出處未レ考百因緣集三の卷十九丁左影向寺事の條に玄奘三藏唐朝沙門河南洛陽人也大宗皇帝貞觀三年遊に西域に同十九年歸國過に大宗に初往に西京に後にハ在に慈恩寺に譯に經論聖教に之故天竺修行スルコト十七年也爾時摩訶陀國有レ寺號曰に影向寺に奉レ安に置丈六阿彌陀來迎立像一千體に于レ時三藏問に寺由來に答ヘケルハ往昔有に佛弟子名舍那多尊者に國土修行セシに此地爾時ハ深草野路也經廻登に紫雲に事日々如レ此尊者留七日見レ之日々紫雲中有に聖衆に散に花地に尊者問に事由來に聖衆告落涙而後答六趣輪轉悲語柳適受に人身に而生に貧賤家に爾時此地有レ寺坐に聖人に勸に通往生人に令レ結に口稱三昧に我即其一分也其外無に修善に依に修功に出に火宅に爲に神通自在身に本願上人閉眼之後年來經程安置人無シテ寺モ佛像モ破壞其形露塵ホドモナシ今ハ一向廣野也雖レ然大恩地ナルガ故昔ノ恩ヲ報ゼンガ爲に我日々如レ此スト云ヘリ三藏聞レ之悲喜不レ少奏に達平王に スルトキ隨喜渴仰甚シ三藏即請に宣旨に建に立大精舍に聖衆影向ノ地ナルガ故に此寺ヲ即號曰に影向寺に也聞レ之人誰不レ結に緣佛法に不レ作に念佛契に善知識者是大善提因緣也云能々此事ヲ思察シテ實ノ知識に可に親近に也云々按此說西域記慈恩傳續高僧傳などにはみえず出處可レ考頭書文句科解三之一卷九丁右に影響ノ丁委ク見エ如に響之應レ聲影之隨レ形トアリ三藏法數十五ノ廿三丁ニモ見ユサレド影響ノ義ニテ文句ニ影響と書たるは誤也題額聖觀贊十の卷廿丁ウに瑞應傳ヲ引テ大慧禪師碑文識に天寨證悟に曰天安羅々地平哩々鷲山一會儼然未レ散北斗七星如レ在影向ト見ユ

(卅六)久米仙墮落同日の談　久米仙人墮落の說は徒然草の類所見いとおほかり西域記九の卷ス二丁摩揭陀國下條に昔有に外道爵頭藍子者一既觸に女人一起に俗界染一退に失神通一飯訖言歸不レ得に虛遊一未期に出離云々

(卅七)住持　寺主を住持といふは寺院を住て持義にはあらず西域記九の卷ス三丁摩揭陀國下條に我今將欲レ入に大涅槃一以に諸法藏一囑に累於汝一住持宣布勿レ有に失墜一迦葉承レ旨住に持正法一結集既已と有て正法を住持する心よりいへる也筆記百廿ノ卅二に委無門關頭書七記四丁ス大光明藏一ノ一ウ西域ノ十六丁ウ吠舍釐國條に佛去世後擬大迦葉住に持正法一尊に進字人一云々阿難默然退而嘆曰我年雖レ邁爲に諸衆生一欲に久住レ世住に持正法一

(卅八)地獄といふ地名　宮根山に大地獄小地獄あり溫泉湧出て煙火常に絕ざる所也かゝる地名諸國にお

ほかるもみな煙火湧湯の處也西域記九の卷摩掲陀國下九丁左に山城北門西有二毘布羅山一聞二之土俗一曰山西南崖陰昔有二五百溫泉一今者數十而已然猶有レ冷有レ煖有レ熱有レ盡レ溫也其泉源發二雪山之南無熱惱池一潜流至レ此水其清美味同二本池一流經五百枝小熱地獄火勢上炎致レ斯溫熱泉流之口並皆彫二石或作一師子白象之首一或作二石筒懸流之道一下乃編レ石爲レ池諸方異域咸來此浴浴者宿疹多差云々皇國溫泉の地に地獄と名付るは佛書の説にもとづける也頭書奇異雜談集四ノ五丁ウ同一ノ六丁オ伊豆熱海に地獄湯あり義堂日工集に見ゆ東砂葛記にカムサスカ山國中第一ノ高山ナリ山脚に溫泉多シ二ツノ熱泉アリ一ハ六間許一ハ四間許直徑也其沸涌音轟々噌噌若人大ニ號レバ忽蒸氣高ク上リテ八九間相隔テ立者相見ルコトナシ其時水面ニ黒キ沸沫アリ若シ指ニ結著スレバ去ルニ甚難シ云々

（卅九）四十二物あらそひの名出處　四十二のものあらそひといへる草子は帝釋の四十二の疑事によりて名づけし也西域記九の卷摩掲陀國下廿二丁オの條に因陁羅勢羅窶訶山唐言二帝釋窟一也其山巖谷杳冥華林蓊鬱嶺有二兩峯一岌然特起西峯南巖間有二大石室一廣而不レ高昔如來常於レ中止時天帝釋以二四十二疑事一晝レ石請問佛爲演釋其迹猶在云々と見ゆ

（四十）芥子を水とし水銀を水とす　芥子を水とせし事は西域記十の卷二丁伊爛拏鉢伐多國の條に昔此城有二長者一豪貴巨富……至二王舍城一穿レ渠通レ漕流滿二芥子一御舟安止長組以引至二王舍城一云々これは芥子を水にして溝渠にみてその中を舟を引たる也また水銀を水にせし事は宋の韓侂胄が時に見ゆ史記秦始皇本紀廿七丁オにも◎以下頭書水銀を水をする事輯原書缺耕錄廿一ノ九丁オ

（四十一）吹レ毛求レ疵　後撰雜二にいたく事このむよしを時の人のいふときゝて高津内親王「なほき木にまかれる枝もあるものを毛をふききすをいふかわりなさ」新撰六帖五蓑歌に爲家「かち人の野分にあへる古蓑の毛をふく世こそくるしかりけれ」此歌夫木抄雜十蓑部にも載たり漢書五十三の卷中山靖王傳に諸侯王自以骨肉至親先帝所レ以廣封二連城一犬牙相錯者爲二盤石宗一也今或無レ罪爲二臣下一所二侵辱一有司吹レ毛求レ疵苛二服其臣一使レ證二其君一多自以レ侵レ寃注に師古曰疵病也昔才斯反云々後漢書列傳第十七杜林傳に漸以二滋章一吹レ毛索レ疵詆欺無レ限注に老子曰法令滋章盜賊多有前書曰有司吹レ毛求レ疵索求也詆欺謂下飾レ非成レ釁非也其本罪ヒ云々劉子傷讒篇に洗レ垢求レ痕吹レ毛覓レ瑕撫レ空成レ有轉レ白爲レ黒提レ輕當レ重引レ寸至レ尺云々庭訓往來卯月五日狀に吹レ毛不レ可レ求二過怠之疵一云々諸

抄大成二の卷三丁右に書言故事曰求多レ端曰二吹レ毛求一レ疵韻府曰漢武帝議擢二抑諸侯王一奏二其過惡一吹レ毛求レ疵云云此事俗語にもいひならはせり謂は毛の縫を吹たづねて疵を求るがごとくあまりこまかに人の過惡をさぐり求て還て災となるをいふ也云々源氏桐壺湖月抄本四丁左におとしめきづをもとめ給ふ人はおほくわが身はかよわく云々河海抄に所レ好則鑽レ皮出二其毛羽一所レ惡則洗レ垢求二其瘢痕一家好生二毛羽一惡生レ疵樂府大行路高津御子述懷歌「なほき木にまかれる枝もあるものを毛をふききすをいふかわりなさ」吹レ毛求レ疵漢書文也云云後漢書列傳第七十趙壹傳に所レ好則鑽レ皮出二其毛羽一所レ惡則洗レ垢求二其瘢痕一云々白氏文集三の卷大行路に好生二毛羽一惡生レ瘡とあるは今本誤れる也河海抄に生レ疵に作れるに從ふべし頭書義經記六十丁ウ判官南部へしのび御出ある條にされば云々長門本平家物語一卷に吹毛の科を求て滅し給ふ間怖て申も疎也云々吳書七の卷步騭傳に適二挾細微一吹レ毛求レ瘢云々晉書載記十七後秦姚興記上十四丁オ吹レ毛求レ疵忘レ勢記レ過云々晉書列傳十五劉毅傳に所レ欲レ下者吹レ毛以求レ疵云々

（四十二）佐比の河原にて小兒の幽靈石塔を積　箱根山サヒノ河原にて小兒の幽魂石塔を積よしいひ淨土和讃の佐比の河原に一重積では父の爲二重積では母のためなどいへり佐比の河原の事は已に七十七の卷にいひたれば可二考合一小兒の幽靈石塔を積よしは百因緣集四の卷廿二丁左花天寶蓋之事條に往昔二夫婦契一階老一者アリキ夫云珠敎婦云摩花女……信順決經意云云此二男が河原に出て石塔を立たるに附會せしものなるべし頭書西院川原齋院川原ノ說遠碧軒記上ノ上ニアリ新撰犬筑波集雜ノ部に「わらんべのよばゝる聲におどろきて」「はゝるやさひのかはらげの駒」佐比の川原の地藏の事筆記五十六ノ四十一段

（四十三）長屋王千袈裟を造て唐土の名德に施す　鑑眞東征傳二丁左に日本國長屋王崇二敬佛法一千袈裟便棄二施此國大德衆僧一其袈裟上繡二著四句一曰山川異域風月同天寄二諸佛子一共結二來緣一云々宋高僧傳十四の卷廿六丁左唐楊州大雲寺鑒眞傳に又聞彼國長屋曾造二千袈裟一來施二中華名德一復於二衣緣一繡レ偈云山川異域風月同天寄二諸佛子一共結二來緣一以レ此思レ之誠是佛法有緣之地也默許レ行焉所レ言長屋者則相國也云々頭書佛祖統紀四十一ノ十二丁オ元亨釋書一ノ十丁ウ

（四十四）鳥海飛魚海　出羽國に鳥海と云ふ地名あり鳥海山とて海中にさし出たる高山もあり茲は蛇海魚海鳥海などいふ類にてさる名おへるなるべし鑒眞東征傳九丁右に三日過二蛇海一其蛇長者一丈餘小者五尺餘皆斑々滿二泛海上一三日過二飛魚海一白色飛魚翳二滿空

中長一尺許一日經ニ飛鳥海ニ鳥大如レ人飛ニ集舟上ニ舟重
欲レ沒人以レ手推レ鳥銜レ手云々宋高僧傳十四の卷廿六丁左唐
楊州大雲寺鑒眞傳に尋レ時風定俄漂入ニ蛇海一其蛇長
三丈餘色若ニ錦文一後入ニ魚海一魚長尺餘飛滿ニ空中一次
一洋純見ニ飛鳥一集ニ於舟背一壓レ之幾沒泊レ出ニ鳥海一俄
泊ニ一島一云々此鳥海は鳥の栖海也伊豆の沖の無人島
にハカ鳥とてあるはこれなるべし又飛魚は所謂ト
ビノウヲにて松浦の海中にはいとおほかり其小きを
燒て干たるをアゴといふ平戸侯肥前守源熙朝臣より余もたま
はりて食し事あり養出しに用れば經飾にもまさりて
上品也宋高僧傳卅の卷十七丁ウ論に鰐飛似レ鳥橋移成レ枳
とあるは鰐の飛よし也頭書元亨釋書一ノ十二丁ウ

（四十五）蛇の付たるを治せる談　多門院日記一の卷天
文八年七月廿九日の條に拙寶院語云或所ニ少女ニ一
二尺ナル少蛇付テ殺其又生ジ〳〵シテ內ニアレ共ソ
トニ居レ共付行然處ニ古禪僧被レ來タルニ尋レ之此ハ
料簡可レ有事也トテ□案メカミソリヲ禪僧持テ座鋪
ヲ女ニナンベンモアルカスル時彼蛇行ク如ク付テ行
ク間數返アリテ禪僧彼蛇ノ尾ヲフム時カマクビヲ擧
テチジ返ル所ヲフットカミソリニテ切テヨリメ二
度不レ來云々按にこれは此少女執心かけたるものゝ
亡念なるべければかくはからひて執心を轉ぜしめし
なるべし

（四十六）蕎麥の葉大毒　多門院日記一の卷天文十二五
二の條に尊敎院語云青ソバハ一段毒ニテアルベキ也
其支證ハ我坊ニ□賢ト云法師酒ニ醉テヘドヲツキケ
ルガ暗夜光リ多ク火ヲトボシテ見レバヘド也不思議
ニ思ヒテ翌日能々見ルニアヲソバノヘド也如レ此光
ルホドノ物也思ニ可レ成ニ大毒一ト申オソロシヤ〳〵
爰ニ思出ス事アリ古長谷房律師雜談ニ我唐瘡ヲ煩シ
事ハ或時青ソバヲアヘテカサニ二三杯食テアクル日
ヨリハレモノ出來以外煩了云々按に青そばとは蕎麥
の葉の事也今も古蕎麥粉を新葉の汁もて練調して新
蕎麥にまがはする事あり愼て食べからず

（四十七）こじくと云詞　下賤の者の罵詞にそこへゆ
けかしこへゆけなどいふべきをこじけといへり乞食
と云を用にとりなしていへる也碎玉話九の卷右一丁に
稻垣掃部は本多美濃守忠政ノ士也濃州ニ恨アテ白晝
ニ姬路ヲ出奔シ舟ニ乘テ下ル狂歌ヲ書テ其座敷ノ床
ノ中正ニ張付タリ「破笠頸ニカケテハコジクトモ

天下ニテミノハ賴マジ」頭書醫心集二ノ廿八丁ウ江州堺曼つじきありくおきなあり云々の事條に申ごろ近江の國にこ

（四十八）じやくづれ井じやくごり川　甲陽軍鑑六の
卷八左丁強過たる大將之事條に世間に土は重寶なる物
にて田地家をも土の上に作り人を助る物なれど自然
岸ぎはなどに風を防とて家持たる者あるに霖にてじ
や崩して重寶なる土が必人を殺すは過てあしき事也
云々碎玉話三の卷十五丁右に遠州大井河ノ下伊呂ニ陣シ
テ居玉フ處ニ折シモ二三日雨フリツヾキ夜ニ入リテ
川岸俄ニ崩レテ水中ニオチイル音オビタヾシ是ヲ俗
語ニ蛇崩ト云云々按にジヤクヅレは沙崩の義也武藏
國荏原郡下馬澁澤村にジヤクドリ川といへる小流あ
り上目黑村につゞきたる所也此はジヤクヅレ川を訛
るものなるべし武藏相摸の鄙語にクヅルヽをクドレ
ルといへりまた土崩をビヤクガクムともヒヤクガウ
ツともいへり門人富岡利和が談に水戶にてはジヤク
ガクムといふといへり然てはビヤクガクムはジヤク
ガクムの訛にてジヤクヅレの省語クムは崩の訛語それを重言にジヤクガクムといへるなるべし
土石の崩るを久江といふは万葉集十四の卷相摸歌を
はじめこれかれ見ゆまたビヤクガウツといふはジヤ
クガ打出るよしにて崩出たるさまよりいへるなるべ
し

（四十九）珠盤　嘉泰普燈錄廿二の卷十二丁右文定公張方
平居士條の偈に一念存ニ生滅一千機縛ニ有無一神鋒輕舉
處透ニ出走盤珠一と見ゆ文定公は東坡より年長の人な
れば宋の世はやく珠盤ありし事を知べし頭書佛祖統紀四十六ノ
十二丁ウ景德傳灯錄廿九廿三丁ヲ山谷集三ノ十五丁ウ眞和集一ノ二丁ヲ廿一丁ウ

（五十）ヤツ付ルと云詞　俗語にヤツヽケルと云詞あ
りこは鑓付ると云事合戰書におほく見えて鑓にて突
付るをいふより轉じてヤツヽケルとはいへるべし

（五十一）紙隔扇　宋高僧傳五の卷六丁左唐中嶽嵩陽寺
一行傳に玄宗此夜夢瞰ニ禪居一見ニ繩牀紙隔開ニ扇曉而
驗問一如レ所レ覩云々按に紙隔は障子也扇はヒラキ也
門扇などいふは門の扉也

（五十二）禮語禮をする　主客初對面に寒暖をのべ安
否を問は禮語といふべし宋高僧傳五の卷七丁右唐中嶽
嵩陽寺一行傳に語訖又禮禮語者三寂唯言ニ是々一とあ
り禮儀を述る語也今俗は「オジギヲイフ」とも「オ
ジキヲスル」ともいへり「オジギ」は砂石集五の卷

十五丁右學匠之蟻螬之問答の條に飢渴ニセメラレヌレバ仁義ヲ忘レテ食ヲノミ思フとあるに据れば御仁義の義也【書】同國雜記群書類從本五十四丁オに白川入道甚におくれて禮義ないたし侍りき云々

(五十三)ヤッコ豆腐幷豆腐の調味　今の俗豆腐を六方に切水に漬し別に醬油をまうけ紫蘇茗荷茸蕃椒やうのものを香味として酒飯の添物に食ふ事夏中の常也これをヤッコドウフとよぶ按にヤッコは奴僕の奴の義にあらず冷をヒヤッコイといひさて轉訛してヤッコといへるにて實はヒヤヽカ豆腐といふべきをかくよこなまれる俗語也けりそを再訛てヒヤヤッコともいふめるはヤッコ豆腐が一種の名目になれるより本語をもたどらで冷奴とはいへる也又烹ヤッコ豆腐あり烹たらんには溫なるを賞すべきに烹冷豆腐の名あたらねどこれはたヤッコドウフを體の本語とせし上はさもいふべきなり烹奴豆腐は冷豆腐のさまに切て醬油もて烹あたゝめ大根おろしなどを香味にして用るをいふ又湯豆腐あり六方にもあれ長角にもあれ切樣は好にまかせ湯の中にて烹あたゝめそを湯ともに椀にもり醬油の溫汁に大根おろし柚橘皮蕃椒海苔の類を香味に加へて用ふ寒中の美食也醬油の溫汁は或は味噌にかへて用るもあり又引摺豆腐あり湯豆腐を胡麻味噌にて食ふをいふ祇園豆腐あり燒たる豆腐に葛粉のアンをかけたる也石燒豆腐あり燒豆腐を醬油にて煮たる也今出川豆腐あり燒豆腐を薄醬油汁にて煮てそれに胡麻味噌を傳て食ふをいふされど本制は板昆布と燒豆腐を薄醬油にて烹それに道明寺あられを炮て盛たる後にふりかけて出す也こは今出川大納言殿江戸下向の時歯のなき翁にておはしゝゆゑかゝる料理たまはりしをいたく賞翫せられければ度度調じてたまはりしより今出川豆腐とはいへる也とぞ河漏豆腐あり豆腐を細く切て湯の中にて煮あたゝめ醬油汁に香味を加へて食ふ也信濃豆腐あり河漏豆腐とおなじ製作にて大根を細く切て交たる也八杯豆腐あり豆腐を細く切て薄醬油の汁にて烹たる也但汁を多くし豆腐を少くすそぎ豆腐あり豆腐をそぎて薄醬油にて煮たる也是はた汁を多くし豆腐を少くす蛤豆腐はそぎ豆腐に蛤を入たる也松茸豆腐初茸豆腐などまたおなじ胡麻豆腐苞豆腐松露豆腐松皮豆腐ギセイ豆腐オボロ豆腐クヅシ豆腐ザク〳〵豆腐ツミイレ豆腐アンカケ豆腐アワ雪豆腐などその名目枚擧に遑なし余豆腐を好のあまり烹ざまし奴アッ奴の二種を製すそは夏日は豆腐を煮てさて水にひやしたるを烹ざまし奴と名づけ冬日は熱湯にてあたゝめ用るをアッ奴と稱す豆腐の變體に氷豆腐あり湯婆あり油揚あり油揚にも飛龍頭花揚などその製作かぞへつくすべからず當時江戸にて高名なるは細川豆腐山屋豆腐篠の雪など精製也又きじ燒豆腐あり

(五十四)飯の菜　飯の菜を古くはめぐりともまはりともいへり今はなべて「さい」といひ菜の字を書けりされど魚鳥にても菜といふべきいはれなければ菜といへるは誤也こはそへものを略したる詞にて「そへ」なるを誤て「さい」といへりと見ゆさては假名も「さへ」と點「さひ」と點書べし正しくいはん「そへ」といふべくや

(五十五)むごきといふ俗語　俗言にむごきめにあはせたむごき事をしたなどいふむごきは古言の無下と云を訛れる也武藏の田舍人はムゴク寒イムゴク暑イムゴクマヅイムゴク生長ヌムゴク出來ヌなどいへりいづれも無下にといふ詞として聞ゆ無極の字義にはあらず

(五十六)神力業力に勝ず　俗に神力勇者に勝ずといへるは誤也砂石集六の卷十丁右聖覺法印之施主分事條に又業力ニテ神力業力ニ勝ヲバ御法便モ及バヌニヤと有宿業因緣の爲所には神力も及ばぬよし也

(五十七)タテ〳〵シキと云詞　砂石集六の卷十一丁右菜朝上人之說戒事條に烏帽子ニモアラズ童ニモアラズ法師ニモ非ズ下風ニアラズ屍ニモアラズヘリグソノヤウナルモノ候ゾヤト山臥ノ有ケルヲ見テ宣ケレバ僧共ハカヽル心ヅキナキ事宣フモノカナ山臥ハタテタテシキ物ヲアサマシキ事也ト思ヒアヘリ云々又廿五丁右母之爲忠孝有人事條に鎌倉ノ故相州禪門ノ中ニ祇候ノ女房有ケリ腹アシクタテ〳〵シカリケルガ云々按にタテ〳〵シは腹立安きにいふ詞也

(五十八)タテヲックと云詞　今俗に人に敵對するをタテヲックといへり砂石集六の卷廿二丁右芳心有人事の條に末代ハ父子兄弟親類骨肉アタラムスビタテヲッキ問註對決シ境ヲ論ジ處分ヲ諍事年ニシタガヒテ世ニオホク聞ユと見ゆ

(五十九)鬼こゝめ　砂石集六の卷廿二丁右芳心有人事條

に輪田ノ左衛門世ヲミダリシ時葛西ノ兵衛トイヒテアラ手ニテ鬼コヾメノヤウナリシ輪田ガ一門ヲカケチラシタリシ武士也云々 明德記上卷十九丁左に山名ガ一家ノ其中ニ鬼コヾメトオジラレシ上總助ト小林トナレバ互ニ勇ミ進テ唯死ヲ限リニ戰者ハアリケレモ命ヲ惜テ一足モ退ク者ハ無リケリ云々按にこゝめはシコメの訛歟古事記神代紀等に醜女あり可レ考 十訓抄に鬼しこめと見えたるを古本に鬼コヽメとあれば相通はしてやいひけん 頭書 續世繼五ノ廿一丁ウ飾太刀にならに嘗圓僧都ときこえし僧の公請にさはり申ければ京の宿房こゞちけるに山に忠胤僧都ときこえしたはぶれかたきにてみめろむしてもろともにわれこそおになどいひつつうたよみかはしけるに忠胤これをきゝて實圓がりいひつかはしける「まことにや君かつかやなこほつなるよには まされるこゝろ有けり」云々 十訓抄四卷五丁右可レ成二人上一事條に鬼しこめをも物ならすおもへる武士は云々古本には鬼コヾメト書たり

（六十）好事不レ如レ無 碧巖集九の卷八十六則に好事不レ如レ無云々 砂石集五の卷十一丁左學匠之怨解事條に天台云眞ノ無生ノ人ハ福スラ猶ナサズ何ニ況ヤ罪ヲヤト古ノ大賢子ヲ誡テイハク愼テ善ヲ作コトナカレ子ノイハク寧ロ惡ヲ作スベキヲヤト父ノ云善スラ作スベカラズ況ヤ惡ヲヤ是諸經ノ大意賢聖ノ通儀ナリ云々 頭書 淮南子說山訓五丁オに人有レ嫁二其子一而教レ之曰 爾行矣愼無レ爲二善曰不レ爲レ善將爲二不善一邪壓レ之曰善且由レ弗レ爲況不善乎此全二其天一

者高誘注に器猶レ性也孟子曰人性善故曰レ全二天性一云々

（六十一）シテ、イは竪を云 源平盛衰記卅四の卷一丁右木曾可二追討一由の條に此知康ハ究竟ノシテ、イノ上手ニテ竪判官ト異名ニ呼ケル云々 砂石集五の卷十四丁左學匠之蟻蟠之問答事條に蟻蟠ニ問テ曰何故ゾ蟻ヲ名レ蟻邪 ナニノユエニアリテアリトナ 答前後有故名レ蟻中ハクビレテ前後ノカタチアル故ニアリト云答フ 難ノ云前後有名レ蟻者於二輪子等一不レ名レ蟻前後アルモノチアリトイフベクハリウゴ等チモアリト云ベシトナリ 答不レ爾前得二輪子名一故執轉提等准例亦爾 サキニステニリウゴノ名チ得タルユエニアリト云ハズシテ、イモ例セバ亦シカリト答フ 云々 此等を考にシテ、イは竪の事にいへり或說に竪を打音をシテ、イと云より竪の事にいひなせりといへり 頭書 醍源抄六ノ四十三丁ウに三竪打樣を云て一竪シテイシテイシテイシテイ次三竪シテイシテイシテイシテイ如レ此受取リツ、大竪ノ間拍子チ打也云々又四十五丁ウ教訓抄九十三丁ウ又十六丁オ又十七丁ウ

（六十二）蟻子 砂石集五の卷十四丁左學匠之蟻蟠之問答事條に蟻蟠ニ問テ云何故蟻名レ蟻耶 答曰背上谷有故名レ蟻 セナカノ上クボミテ谷ニ似タル故ニト答フ 難云背上谷名レ蟻者於二蟻子等一不レ名レ蟻 背クボキ故ニタニトイハヾダン 前得二蟻子名一故突拍子等准例亦爾 シカラズサキニダンゴノ名チ得ル故ニトヒヤウシ等モ是ニナズラフベシト答ル也

云々古本に團子を「だんし」と書たるも又「だんす」と書たるも有「だんご」は音訓雜呼の名なれば誤なるべくおぼゆれど新撰犬筑波集春部に「花よりもだんごとたれかいはつゝじ」運歩色葉集多部に團粉ダンゴなどあればもとより「だんご」と呼けるなるべし宗長手記群書類從本卅四丁左に宇津の山にて雨やどり此茶屋むかしよりの名物十だんごといふ一拍子に十づゝ必ずめらふなどにすくはせ與じて云々 紹巴富士見記十四丁左に宇津山にいたりぬ我いらんとする道といへるは右の谷に見おろして今は峯につきて登りぬ誠に蔦楓は茂りて木の下くらき五月雨の餘波に袖もすゞろにしほれ心細して里につきぬ關の戸近き鳥の子を十づゝ重ねあぐる術よりもあやしき名物也俗言に團子と云々忘れがたきまゝ口內に吟じつゝ行云々など見ゆ團子の漢名は蠻苑日涉に擧たれば考べし

（六十三）樣子 碧巖集二の卷卅丁右八則に此乃下レ句底樣子云々 同四の卷一丁右卅一則に曹溪樣子一摸脫出云云同六の卷十八丁左五十六則に看二取古人樣子一云々

（六十四）馬鹿の糟食 俗言に馬鹿の糟食といへり馬鹿はボケの義にてホレとおなじ糟食は碧巖集二の卷一丁右十一則に汝等諸人盡是噇二酒糟一漢云々とあり此外にも見ゆ

（六十五）天邊 俗にテツヘンといひ郭公テンヘンカケタカと鳴などもいへり 碧巖集二の卷十一丁右十三則に不レ知却問二天邊月一とあり

（六十六）接待茶 今世往來の人に茶を施し水を施すを接待茶接待水などいへり 碧巖集三の卷廿六丁左廿九則に歸レ川先於二堋口山路次一煎レ茶持二待往來一凡三年云云と見ゆ 頭書 類聚名物考飲食二太平記二十ノ廿七丁ウ明高僧傳八ノ十丁オ佛祖統紀十八ノ八丁オ同廿九ノ十一丁ウ同卅六ノ十五丁ウ義含アリ接待ニ同ジ同四十九ノ二丁ウ新撰狂歌集下四丁ウ哀傷部にせつたいのもとに行ていつけう和尙「たれもみなしよざやうむしやうぢや極上をたむくるちやの湯あはれよの中」

（六十七）七顚八倒 俗にシッテンバッタウといへるは七顚八倒の字也 碧巖集四の卷五丁左卅一則に到二這裏一七顚八倒於二一切時中一得二大自在一云々

（六十八）テキメン并タンテキ 俗語にテキメンといふは覿面の字也又タンテキは端的の字也碧巖集二の卷七丁左十二則に雪竇有二靜而善應頌一云覿面相呈不レ在二多端一云々同集二の卷十一丁右十三則に端的別云々端的別雪竇讃歎有レ分且通什麼處是別處一切語言皆是

佛法山僧如レ此說話成二什麼道理一去雪竇徹露二些子意一道只是端的別云々

(六十九)盜不レ過二五女之門一井賊不レ打二貧兒之家一　盜不レ過二五女之門一といへる語後漢書に見ゆ碧巖集五の卷右一丁四十一則に賊不レ打二貧兒家一とあるは同日の談といふべし

(七十)喧嘩すみてのちぎり木　俗にけんくわすんでのぼうちぎりといへり義經記にはいさかひ過てのちぎり木かなど有けんやうにおぼゆ碧巖集四の卷十五丁右卅五則に賊過張レ弓云々五の卷三丁四十二則に賊過後張レ弓也漏逗不レ少云々六の卷左二丁五十一則に賊過後張レ弓云々とあり似たる詞といふべし

(七十一)人を打をくらはせると云事　今俗人を打はるをくらはせるといへりそは棒をくらはしむるよし也碧巖集五の卷左三丁四十一則に龐心不レ改又是要レ喫レ棒とある喫棒の義よりおこれる詞なるべし頭書筆記二ノ卷ノ四十段鵜林玉露二ノ四丁ォ

(七十二)あき目暗　俗に眼あれども文字よむ事あたはざる者を明目盲といへり碧巖集五の卷左四丁四十二則に居士打了更與說二道理一云眼見如レ盲口說如レ啞云云此眼見如レ盲はアキメクラの義といふべし又八の卷廿三丁ウ八十則に眼見レ色與レ盲等耳聞レ聲與レ聾等とも有

(七十三)キテンガキクと云俗詞　俗にキガキク又はキテンガキクといふキテンは機轉の字也碧巖集五の卷左五丁四十二則に復轉レ機道只此瀟灑絶云々同七の卷十一丁ォ六十五則に機輪曾未レ轉轉必兩頭走機乃聖靈機輪是從本已來諸人命脈云々とある轉機の字義なる事疑なし

(七十四)カツカウヨキ　俗言にカツカウヨキ又はカツカウモノなどいふは恰好の字にてアタカモヨシと云義よく叶へり碧巖集五の卷右六丁四十三則に自好恰好云々

(七十五)シャラクの人ォシャラクモノ　俗言にシャラクの人といふは瀟落の字を書べし碧巖集五の卷左九丁四十四則に山云解打皷向上人即是透脫瀟落底人云云この瀟落底人は物に拘らざる通人をいふォシャラクモノといふはこれより一變せる詞也

(七十六)年頭　年始を年頭といふは新年頭の義也碧巖集五の卷左八丁四十四則に新年頭還有二佛法一也無清云有レ僧云如何是新年頭佛法清云元正啓祚萬物咸新云々年頭の字面こゝに見ゆ

(七十七)一人傳レ虛万人傳レ實　碧巖集五の卷十七丁左四十七則に一人傳レ虛万人傳レ實云々同十の卷十三丁ォ九十六則にも見ゆ

(七十八)百日の說法屁一ッ　俗に功を積たる事の一事に破るゝを百日の說法屁一ッといへり百日の間たゆとげに說法せし聖も一時の失屁一聲にて人の信を失ふたとへ也碧巖集五の卷十八丁左四十八則に仕官千日失在二一朝一と有は同意の語といふべし頭書家語四ノ十三丁ォ說苑十七ノ十六丁ォ雜言篇に孔子曰修身爲レ之一言敗レ之可レ不レ愼乎和田酒盛草子廿六丁ォに千日したる用心も目をつよくぬれば一夜に無に成云々晉書一ノ廿一丁ォ宣帝紀に古人有レ云積善三年知レ之者少爲レ惡一日聞二於天下一

(七十九)遍歷井托鉢　遍歷の字碧巖一の卷◎此間原書缺文宋高僧傳十九ノ十九丁ォ歷編無門關廿一丁ウ　などに見ゆ頭書

(八十)千差万別　俗にセンジャマンベツと云は千差万別の字也碧巖集六の卷四丁ォに万別千差と有八五丁ォにも

(八十一)一ッ橋二ッ橋二本橋三枚橋井響渡る　一ッ橋又は一本橋といふ木一本を渡せる橋也二ッ橋は橋二ッ並たるをいふ相摸國鎌倉郡瀨谷村に二ッ橋あり此里は日蓮注畫讀に見えて今も妙香寺といへる古跡あり二本橋は木二本わたせる橋也江戸日本橋ももとは二本の木をわたしたるにや三枚橋は板三枚をわたせるによれる名也江戸上野門前に三枚橋あり箱根湯下の里にも三枚橋あり碧巖集六の卷左五丁五十二則に趙州有二石橋一蓋李膺造也至レ今天下有レ名略約者獨木橋也其僧故意減二他威光一問レ他道久響二趙州石橋一到來只見二略約一且不レ見二石橋一云々又聲譽をひゞくなどいふも響二趙州石橋一とある響の字義也頭書梅花無盡藏に獨木橋あり本朝文粹十ノ四十四丁ォに獨木橋あり

(八十二)一事は万事　俗に一事は万事といへり一事にさとき者は万事にさときよし也碧巖集六の卷九丁右五十三則に一處透千處万處一時透と有は同義といふべし頭書甲陽軍鑑十四四十下品卅五丁ウに内藤が云一樣に上手なる人は萬事にわたりて物をよく聞しる也云々

(八十三)めくら打　俗に盲目の人を打にたとへてメクラ打といふ詞也碧巖集六の卷十一丁右五十四則に不レ可二盲枷瞎棒一とあり盲枷は盲目の枷を人に加るをいひ瞎棒は一目の人を打をいふ共に事違ふよし

のたとへ也めくら打はた當處正からざれば盲枷瞎棒の義に近し

(八十四)蛇の道はヘビガシル　俗言に蛇の道はへびがしるといへり碧巖集三の卷七丁ウ廿二則に是精識レ精是賊識レ賊云々同四の卷七丁ウ卅二則八の卷七丁右七十四則にも見ゆ易に同氣相求とも有

(八十五)水涕　俗に水鼻(シブハナ)といふは塞涕の字面を用べし碧巖集四の卷十二丁オに塞涕垂レ頤と有はミヅハナの事也

(八十六)踏碓　俗に踏碓の事を地ガラともいひ立置て舂を立碓といへり踏碓の字面碧巖集四の卷十二丁オ三十四則に毎レ踏レ碓忘レ移レ歩と有

(八十七)二王門　碧巖集四の卷十三丁ウ卅五則に又問此是何寺童子指二金剛後面一着曰レ首化寺童子悉隱不レ見只是空谷彼處後來謂二之金剛窟一云々二王は執金剛神也頭書(瀧尻十六百練抄十三ノ八丁オ神道集五ノ十七丁ウ十八丁オ)

(八十八)貝杓子粥杓子　俗に汁を盛器を貝杓子といへり必貝に限らず銅又は木もて製れるもさいへり按に粥杓子を誤れるにや碧巖集四の卷十五丁オ三十五則に文殊每於二粥鍋上一現被下無著拈二攪粥篦一便打上云々とあり攪粥篦は粥杓子といふべし

(八十九)厚面皮厚顏薄面皮　碧巖集七の卷廿二丁ウ七十則に不レ免二老婆心切一面皮厚三寸云々書經夏書篇五子之歌に欝陶乎予心顏厚有二忸怩一云々北山移文に豈可レ使二芳杜厚顏薜荔蒙一恥云々庾信詩に向人長曼臉由來薄面皮云々西域記四十四丁オに我曹厚顏云々

(九十)金玉聲　白樂天が元徽之が詩をほめて軸々金玉聲と作れるを歌にもこがねの玉のこゑなどよめり碧巖集八の卷五丁オ七十三則に金聲玉振の字あり

(九十一)月代をもむ　俗に頭を剃時水或は湯もて濕すをサカヤキヲモムといへり碧巖集八の卷十四丁オ七十六則に丹霞獨以レ盆盛レ水淨頭於二師前一跪レ膝石頭見而笑レ之便與剃レ髮云々此語傳燈錄鄧州丹霞天然禪師の傳にもありしやうにおぼゆ後日に考注すべし淨頭はサカヤキヲモム事也

(九十二)自屎不レ覺レ臭并おかめ八目　碧巖集八の卷十七丁オ七十七則に自屎不レ覺レ臭とあり自身はよろしとおもふ事他人は多く嘲弄せり圍碁の詞に岡目八目といへるもこれ也但外目八目を誤て岡目といへり岡見などいふ歌の心にはあらず同則に五祖云馬糞比二麝香一とあり自物をば貴て馬糞をも麝香のごとくおもひ他物をば卑じて麝香をも馬糞のごとくおもふ事人情の常也

(九十三)足をのばして臥す　碧巖集八の卷十九丁ウ七十八則に長連床上展レ脚臥とある語は俗に足をのばして寐ると云詞にあたれり

(九十四)ムザウサと云俗語　俗語にムザウサと云は無造作と書べし碧巖集八の卷廿三丁ウ八十則に山依レ舊是山水依レ舊是水無二造作一無二緣慮一と見ゆ

(九十五)殺人刀活人劒殺人箭活人箭　殺人刀活人劒の語は無門關碧巖集傳燈錄普燈錄など所見枚擧すべからず碧巖集九の卷一丁ウ八十一則には殺人箭活人箭とも有

(九十六)土花八裂并地がひわれる　碧巖集十の卷十丁オ九十五則に土花八裂とあるは照日に地上がわれて八裂の筋ゆるよし也

(九十七)吹毛劒　碧巖集十の卷廿九丁オ百則に劒及上吹レ毛試レ之其毛自斷乃利劒謂二之吹毛一也云々杜甫詩に鋒先衣染血騎突劒吹毛韓愈炭谷湫祠堂詩に吁無二吹毛及一血二此牛蹄一般

(九十八)箕田渡邊松浦の稱號

渡邊系圖に○嵯峨天皇
- 源融 — 昇
- 仕 — 武藏守從五位下
- 敦 — 左少將淨子號二箕田源次一武藏國足立郡內箕田鄕ト云所ニ被二流罪一其後一字名號二箕田一也又號二箕田源次一但箕ハ美田源氏ト云チカク云也
- 綱 — 內舍人五位源賴光郎等四天王其最也天下第一之弓上手也
- 久 — 鎭四松浦之祖 — 源次別當
- 正 — 松浦小源次依二宣旨一改二公賴一

按渡邊系圖は系圖纂一の卷に載たり今は要を取て抄出せり

尊卑分脉二の卷嵯峨源氏の條に○仁王五十二代嵯峨天皇
- 融 — 昇
- 仕 — 武藏守從五下
- 宛 — 號二箕田源二一 — 一說淨男云々無官
- 綱 — 源賴光四天王內舍人有二子孫一渡邊黨徒號渡邊源五一說源二敦男ト云々

按十四卷系圖第二の卷に載たり系圖纂に所レ載と異同あり

本朝武家評林系圖三卷 嵯峨源氏渡部之系圖に○

仕 箕田武藏守從五位下 武藏國ニテ卒ス五十二歳

充 箕田源次 天慶七年卒ス二十一歳

綱 渡部源次瀧口内舍人源賴光四天王隨一ノ臣也 母ノ胎内ニ有テ父ニ後レ叔母ニ養レテ攝州渡部ニ住ス

久 渡部別當 攝州住

直 渡部源太夫

正 渡部 此二人肥州松浦ニ住ス

按武家評林系圖は後の物にてうけがたきことおほし仕は武藏守に任じたれど箕田と稱號せし古き證(アカシ)なきをこは前々太平記などの妄說を信じて作れるものにや充は或は宛に作り或は敦に作るいづれも「アッ」と訓べくおぼゆ「アッシ」「アッル」「ミツル」など訓んには字通用しがたし

然阿上人傳に仁治元年庚子仲春入ニ于鎌倉ニ而初住ニ吉谷悟眞寺ニ弘ニ通淨土宗ニ時平副帥經時信レ之館内奉レ請開法受戒持ニ十念ニ傳ニ血脈ニ歸ニ宗門ニ三月中集ニ材木於佐介谷ニ建ニ立一淨刹ニ號ニ蓮華寺ニ安ニ置金色阿彌陀三尊像并善導大師眞影及大辨財天像等ニ以ニ然阿ニ爲ニ開山祖ニ寄ニ附武州安達郡内箕田鄉ニ以爲ニ寺領ニ充ニ行三寶衆僧供養ニ于レ時武州二十四郡爲ニ經時私領ニ故如レ斯云々按然阿上人傳一卷沙門道光が撰にて卷末に弘安第十天南呂下旬候謹疏とありて古書也然阿上人諱良忠光明寺の開山にて永仁元年七月記主禪師と諡號を賜ふ鎌倉志七の卷廿六丁右光明寺條に此傳文を引たれど出所を記さずまた片假名文にさへ引直したれば原本の眞面目にたがへり大橋長方が武藏演露足立郡部に東鑑云平經時武州安達郡内箕田鄉ヲ相州之光明寺ノ寺領ニ附スといへるは鎌倉志說を襲て吾妻鏡にも出たンめりと闇推に東鑑云と書たるなり吾妻鏡にはたえてなき說也○太田道灌慕京集下卷に箕田の別業に侍りしころ年のくれに清閑寺の二位殿へ文奉るとてまうしつかはしける「うきことは柴の扉のあけくれてすき行年のなにをしむらん」按山岡俟明が武藏志料古蹟部に今思ふに是は品川のこなたなる箕田八幡のあたりを三田といへる所にはあらず熊谷宿の此方なる箕田村なるべし此所忍城へも近く中山道の内なればかた〳〵その便よろしかるべし足立郡の内也江戸より十三四里の行程也此箕田に滿願寺六

孫王の遺跡といひ寶持寺とて渡邊綱が開基の寺といふ有といへりされど太田道灌江戸を居城とし十里餘隔れる所に別業をトべくもあらず不慮の事あらんをり入城の便あしければ足立郡の箕田といへるは字に據たるのみにて深く考へざる說とすべし川越城に住たらんにも六七里の行程なればかた〳〵おぼつかなしこは今の芝の三田邊に海上眺望の景地を撰て別業をまうけたるなるべくおぼゆ○倭名類聚抄六卷の國郡部武藏國荏原郡鄉名に御田云々按御田は磐井神社などの神田に據たる名なるべし北條分限帳に武藏の石井氏ありイハヰと訓べくは磐井によしありといふべし○平家物語劒卷二丁右に其比攝津守賴光ノ内ニ綱公時貞道 末武トテ四天王ヲ被レ仕ケリ中ニモ綱ハ四天王ノ隨一也武藏國ノ美田ト云所ニテ生レタリケレバ美田源次トゾ申ケル云々○按系圖に源敦箕田源次武藏國足立郡内箕田鄉ト云所ニ被ニ流罪一とあるは其地名劒卷と符合せり然阿上人傳堯惠の北國紀行などにも見えて今の足立郡彌陀宿その舊地也劒卷は古本平家物語に附たるを今は誤て太平記の始に添たり○堯惠北國紀行群書類從本六丁右に箕田といふ所にあかして武藏野をわけ侍るに野徑のほとり名に聞えし狹山有云々按これは西遊行囊抄に見えたる彌陀宿の事にて鴻巢熊谷の間にあり武藏國圖に箕田と記し武藏演露に箕田村上下といへり劒卷渡邊系圖などの綱が出生の地の美田はこゝなるべし然阿上人傳にも見えて古代より足立郡に箕田の里ありし事疑べからず○山岡俟明が武藏志料人物部に源渡邊綱渡邊系圖に源次充被レ配ニ武藏國足立郡箕田鄉一大力而有ニ武勇譽一於ニ其屋地一祝ニ納於箕田八幡宮一今按に是は中仙道のこなた鴻巢と熊谷の間に箕田と云所あり綱の舊跡とて寺社あり今江戸の芝三田を其所也と云て三田八幡と云社もありまた會津家の別業の内に其舊跡在よし林春齋が鵝峰文集の中に箕田園記あり是は土俗の傳にまかせて書たるのみにて徵とするにたらず又三田家譜に依れば三田參河守その子駿河守綱勝といふ人武藏國三田に住るよし有て代々綱の字を名乘に付しゆゑ後人思ひあやまりて箕田の綱と思ひし成べしと或人のいへるはさも有べし云々按箕田園記を信用せずして綱が出生の地は足立郡の箕田なるべきよしは大橋長方が武藏演露足立郡部瀨名貞雄が新編江戸志六の卷な

どにもろうじたりこゝに三田系圖を引ていへる說は劒卷渡邊系圖などに齟齬すればとらず足立郡箕田村今上下に分れたるよし武藏演露に記したれど國圖には箕田とのみ見ゆ西遊行囊抄二の上卷には彌陀宿長き村也三田と云は非也と有箕田三田彌陀御田美田はいづれにても字に抱らぬ事なればくるしからず然て綱出生の地は足立郡箕田にて後に本國攝津國渡邊には歸住けるなるべし渡邊は攝津志四の卷西成郡部に渡邊舊在『大坂平野町』再移居『于此』といへり平家物語十一の卷逆艫の條に攝津國渡邊福嶋兩所ニテ舟揃へシ云々同十二の卷土佐房被『斬』條に攝津國渡邊ニテ逆艫タテウ立ジノ論ヲシテ云々源平盛衰記十九の卷文覺發心の條に渡邊ノ橋供養アリ盛遠云々其日ノ奉行シケレバ云々同廿六の卷如無僧都母放『龜』條に天王寺詣の時渡邊ノ橋ノ邊ニテ鵜飼龜ヲ取ツヽ既ニ龜ヲ殺サントセシ時云々同四十一の卷梶原逆艫の條に日比渡邊神崎兩所ニテ舟ソロヘシケルガ云々同四十二の卷義經解纜四國渡の條に渡邊島ヨリ舟ヲ出ス云云劒卷四丁左に綱が養母渡部に在ケルガ上タリトゾ答ケル云々など此外古書の所見枚擧に遑なく歌にも堀川百首に隆源がわたのべの大江の岸とよめるを始にていとおほかり稱名院殿高野紀行西遊行囊抄十五の上十六の卷中卷などにも見えて攝津國西成郡の地名也渡邊嶋は今難波嶋といふ此處に住たれば渡邊黨といへり源左衞門尉渡も同族なるに遠藤武者盛遠渡邊橋供養奉行の條に並の里に住たるよし盛衰記に見え劒卷太平記廿二の卷鬼切鬼丸の條などに渡邊黨といひ劒卷に渡邊の伯母綱を母が生落しゝより請取て養そだてし事も見ゆ是かれおもひ合するに嵯峨源氏はやくより攝津國渡邊に住たれば渡邊黨といひ仕が武藏守になりて下れるより武藏國にゆかり出來其子の宛武藏に住て箕田と稱し綱も同處にて生れたれば箕田と稱せるなるべし尊卑分脈には綱渡邊源五一說源二渡邊黨と號とあり渡邊黨の中に紛れざる樣に出生の地名によりて箕田源二とも稱けるにやさて綱が子久源次別當鎭西松浦祖と系圖に見え吾妻鏡廿六の卷廿三丁右に松浦執行源授鶴田五郎源馴と肥前國松浦庄西鄕內佐里村壹岐泊牛牧等相論事あり鶴田も同族にて松浦黨にや又劒卷七丁左に鳥海三郎安部宗任は筑紫へ流されたりけるが子孫繁昌して今にあり松浦黨とはこれ也とあれば安部氏の松浦黨も

あれど一字名乘の族は源松浦にて安部松浦とは別なるべし○輿清曰武藏のみたの里荏原郡なるは御田三田など書き足立郡なるは美田彌陀など書き箕田は二所に通用せりいづれも古來の地名にて太田道灌の別業有しは荏原郡渡邊綱誕生の地は足立郡也これ北條武藏守平經時執權のをり鎌倉光明寺領に寄附せる所なりさて武藏守源仕は國府に住たりけんにその子源二宛足立郡箕田に流されそこにて綱を生たるを故鄕攝津國渡邊の里なる伯母とり養て成長の後渡邊源二と稱號せるをもと箕田出生の男なれば箕田源二とも呼けるなるべしかくて渡邊に住るほど源賴光攝津守にて下られしに隨從し四天王隨一の郎等といはれしにや綱が子の源次久鎭西松浦に下り松浦黨の祖となれりまた安部宗任も松浦に流されてその子孫を松浦黨と稱すされど一字名乘の族は嵯峨源氏なるべければ源松浦と安部松浦と同稱二黨ありと知べし○舊本今昔物語廿五卷源宛平良文合戰語に今昔東國ニ源宛平良文ト云二人ノ兵有ケリ宛ガ字ヲバ箕田ノ源二ト云良文ガ字ヲバ村岳ノ五郎トゾ云ケル……傳へ語リタルト也

箕田は足立郡村岡は大里郡にて其間四五里ばかりありといへり

松屋筆記卷之七十九

平與清稿

(一)疱瘡のさゝ湯　吾妻鏡卅五の卷十三丁オに寛元元年十月一日若君御疱瘡御平復之間今日午剋御沐浴之儀醫師賴行廣長等朝臣賜レ祿(各御劔一腰と見ゆ　赤斑瘡三の卷にさゝ湯の事をいへりそこに補べし

(二)似繪　吾妻鏡卅四の卷廿二丁カに當二將軍家御時一關東射手似繪可レ被レ圖之由有二其沙汰一云々長門本平家物語二の卷六十二丁カ明雲僧正被二流罪一條に一行もとより大唐一のにせ繪の上手にておはしければ云々承久記下卷廿三丁オに六波羅ヨリ御出家可レ有由申入ケレバ則御戒師ヲ被レ召テ御グシオロサセ御座ス忽ニ花ノ御姿ノ替ラセ給ヒタルヲ信賢ヲメシテ似セ繪ニ寫サセラレテ七條院へ奉ラセ給ケレバ云々太平記十八の卷春宮入洛の條に昔漢ノ李夫人甘泉殿ノ病ノ床ニ臥テハカナク成給ヒシヲ武帝悲ニ堪兼テ返魂香ヲ燒給ヒシニ李夫人ノ面影ノ煙ノ中ニ見エタリシヲ似繪ニ書セテ御覽ゼラレシカドモ言ハズ笑ハズ人ヲ愁殺スト武帝ノ歎給ヒケンモ實ニ理ト思知セ玉フ云々宮御日モアヤニ熟々ト御覽ズルニ此程坐ニ御心ヲ盡シテ夢モセメテ逢見バヤト戀悲ミ給ヒツル似繪ニ少モ違ハズ云々　古今著聞集十一の卷十六丁ウ畫圖部に後堀川院御時似繪を御好ありけるに北面下﨟御隨身などの影を左京權大夫信實朝臣をめしてかゝせられけるに云々增鏡六の卷廿五丁オ老の波に人の國より女の本を尋んには此宮の似繪をやらんなどぞ父の御門も仰られける云云

(三)辻々簀屋　吾妻鏡卅五の卷十丁カ寛元元年閏七月六日の條に洛中辻々簀屋雖レ被レ定二員數並立所一依レ無二其地一一兩所于レ今未レ作云々仍今日有二沙汰一彼地事以二承久沒收注文一尋二出便宜之地一可レ被二相傳一之由被レ仰二六波羅一云々　太平記二の卷南都北嶺行幸の條に四十八箇所ノ簀甲冑ヲ帶シ辻々ヲ固ム云々同四の卷笠置囚人死罪流刑の條に殿法印良忠ヲバ大炊御門油小路ノ簀小串五郎兵衛尉秀信召捕テ六波羅へ出シタリシカバ云々また法印ヲバ五條京極ノ簀加賀前司ニ預ラレテ禁籠シ云々按に簀屋は今の見付番辻番などの類にて洛中の便宜の辻々に番屋を立簀を燒て非違を改る役所也其番所を簀屋といひ其奉行をもやがて簀とはいへる也

(四)熊野山不二夏詣一　高山おほく盛暑の時を待て登るは其寒氣に堪ざれば也さるに熊野山のみは夏詣を禁ず榮西和尙喫茶養生記上卷茶功能條に南人者廣州等人也此州瘴熱地也瘴此方赤蟲病云唐都人補二受領一到二此地一十之九不レ歸食物美味而難レ消故多食二檳榔子一喫レ茶若不レ喫則侵レ身也日本國大寒之地故無二此難一尙南方熊野山夏不二參詣一爲二瘴熱之地一故也と見ゆ

(五)酒の異名　沙門蘭叔が酒茶論に晉陶醉酒漢常愛レ酒而無二一點俗一繼呼爲二第一達磨一抑又僧家號二般若湯一專用レ之云々また若論二酒之靈地一中略或有二上若下若二村一云々鰥寡孤獨者以レ酒作二掃愁箒一云々吾妻鏡に上林下若と見え日蓮書に大乘水といへり又杜康聖賢等の名から書に見ゆ谷響集二廿二丁カ飮中八仙歌註米汁謂レ酒云々(頭書菩提水般若湯谷響集五ノ十五丁オウ)

(六)茶のよみ法　酒茶論に諺曰至二宇治茶一有二清音一餘皆濁音云々たとへば宇治チャと茶もじを清てよび虎溪チャと茶もじを濁てよぶをいふ也

(七)德を以て怨に報ゆ　砂石集八の卷廿四丁オ先世房事條に經曰怨ヲ以テ怨ヲ報ズルハ怨ツヒニツキズ草ヲ以テ火ヲケスガゴトシ云々

(八)器のよきは寶にあらず　砂石集八の卷廿七丁ウ先世房事條にオモキ寶メヅラシキモテアソビ物ヨキハモトムルモ苦シクマホルモワヅラハシ失ヌルモナゲカシ常ニモ用ヒズシテ用ニモタヽズ若ハ人ノカルモイタハシク覺エ心ニカヽル事有ワロキ物ハヲシカラズシテ常ニ用レバ當時大切也ウセヌルモナゲキナシ人ニトラスルモ惜カラズ旁得ハ多ク失ハスクナシ云々楚國にたゝ善もて寶とすともいひて寶なきを耻るは小人の志也

(九)くかすと云詞　砂石集九の卷十三丁ウ強盜法師之道心有事條に或ハ人ヲニガシ物ヲクカサセ云々又十四丁オ人ノ命ヲモ助ケモノヲモスコシクカサセテ云々按に今俗に物をこかすと云は此クカスの轉語也

(十)欲に頂なし　井欲の鉤欲の熊鷹　砂石集九の卷十八丁ウ證月房上人通世事條に愚ニシテ過分ノ振舞オフケナキ果報ヲ望ミ名聞利養ノ心ヲ恣ニスルホドニ不足

ニノミオボエザルナルベシ慾ニ頂ナシト欲心ハソノキハマルコトヲシラズ頂生王ハ南州ノ王ナリ不足ニ思テ四州ヲ打取猶不足ニ思テ四天王ヲウチヌ忉利天ヲ打取ラントシテ果報盡テ墮テ死ニケリサレバ身ノ分ヲ知テ振舞ベシ云々 頭書 若氣勸進帳に欲の無窮股をさく鋸とも見ゆ

(十一)迎講の始　砂石集九の卷廿一丁ウ迎講事條に丹後國普甲寺ト云所ニ昔上人有ケリ……佛ノ來迎トテ引ヨセ〳〵シテ案ジ始メ給ヘリト云云

(十二)沐レ雨櫛レ風は周武王の故事　魏志二の卷廿九丁オ文帝紀注に武王親衣レ甲而冠レ胄沐レ雨而櫛レ風爲レ民請レ命則治ニ万國ニ云々唐の大宗の故事と思ふべからず

(十三)金剛號　天子灌頂を受給ひしに金剛號を奉る　眞言傳一の卷十七丁オ不空三藏傳に不空號登壇散華號也ト云ヘリ是金剛號ナルベシ云々

(十四)慈心降ニ一切魔一　宋高僧傳五の卷五丁ウ唐中嶽嵩陽寺一行傳に釋門以ニ慈心一降ニ一切魔一徹僧曲見莫レ若レ大ニ赦天下一云々

(十五)武衛　魏志十八の卷十三丁ウ許褚傳に褚身斬ニ首級一還ニ武衛中郎將一武衛之號自レ此始也云々

(十六)業鏡堪然最明寺殿の辭世　嘉泰普燈錄廿三の卷廿七丁ウ智府葛郯居士の條に業鏡忽然撲破云々同廿四の卷廿二丁オ溫州陳道婆條に本性堪然本無ニ去住一云々此字面最明寺入道の辭世に業鏡高懸三十年一槌打碎大道堪然とあるを注すべし 頭書 堪然續高僧傳三ノ十七丁ウ

(十七)一場笑具笑柄笑端　嘉泰普燈錄廿四の卷十九丁ウ處州法海立禪師條に我身尙且不レ有身外烏足レ道哉正眼覩來一場笑具云々實に世間のありさま大悟して觀る時は一場の笑具ならざるはなし 頭書 笑柄笑端五代史廿八丁ノ六

(十八)行燈燈籠　嘉泰普燈錄廿三の卷廿六丁オに燈籠露柱云々同廿四の卷廿丁ウに指ニ行燈一曰如ニ此燈一者離レ性絕レ非本自空叔理則具矣云々 頭書 今川大草子上ノ四十四丁ウ可レ考鎌倉年中行事上ノ六丁ウ五日夜御行始に續松二丁行燈一モタセベシ云々野客十二ノ廿一丁オ

(十九)禪者禪人　同廿四の卷十三丁オに禪者の字あり禪人の字は諸書所見おほし

(廿)日用　日用の字面普燈錄廿四の卷十七丁オに見ゆ義堂の日用工夫集あり

(廿一)作字新字　作字の事吳志孫林傳三の卷十注に吳錄載ニ休詔一曰人之有レ名以相紀別長爲ニ作字一憚ニ其名一耳……垂ニ嗤駭於後代一亦不レ異乎云々唐書に武后の名曌といふ字を作り天武紀に新字を作れるよしも見ゆ字鏡字鏡集などにめづらしき字多きは天武の御代の新字にや

(廿二)飛札飛筆　今の人飛脚にもたせやる急用の書を飛札といへり吳志三の卷廿六丁ウ孫皓傳注に公其勗勉奇謨飛レ筆以聞云々とあり飛筆は今の飛札の義也

(廿三)歸命　歸命頂禮の歸命の字面吳志孫皓傳廿八丁オに歸命侯また廿九丁ウ歸命之寵また注四十二丁ウに降及ニ歸命之初一など見ゆ

(廿四)髮に油を塗る　宋高僧傳十八の卷十八丁ウ唐齊州靈巖寺道鑒傳に寺中淨人每於ニ像前一占ニ燭燈一添レ油助レ燼意ニ盜レ油塗ニ髮耳一居無レ何其髮焦卷而墜傍人勸令ニ禮懺一別買ニ麻膏一增レ灶平復如レ初云々

(廿五)白土山　參遠の國中に白色の山所々に見ゆ下野日光近邊の小山にも有しやうにおぼゆこは諸國におほかるべし靈鷲山一名白墻山といへり宋高僧傳廿の卷廿四丁ウ音釋に墻常演切白土也とあり白土の山は墻山といふべし 頭書 王子年拾遺記一ノ七丁ウ

(廿六)かゞみるかうがへかんがふる「かゞみる」は照見(かゞいる)にて物をてらし見る義也「かゞ」は「かゞやく」の「かゞ」にてひかりてる事也撰集抄一の卷廿五丁ウ行賀僧都耳切因緣事條に三世の佛たち我二つなき心をかゞみ給ひていさゝかの慈悲の心をもおこす身となさせ給へ云々かんがふるはかゞみるを延たる語なればかんがうると書べし「み」を音便には「う」と書べく「ふ」とは書まじき也都て音便の字はほうじたまうてなどやうに書例也かうがへはかゞみを延たるなれば「かうかみ」と書べし

(廿七)月中の兎　月中の兎の諸書所見おほし西域記七の卷九丁オ婆羅痆斯國條に狐兎猴の三獸帝釋を供養して兎身を燒條に見ゆ 頭書 佛祖統記廿二ノ十七丁オ月中の蝦蟆は能改齋漫錄七舊本今音五ノ十三語

(廿八)風前の燭　西域記八の卷七丁ウ摩揭陀國上に世間富貴危甚ニ風雨一云々

(廿九)虛名不レ久　西域記八の卷十一丁オ摩揭陀國上に馬鳴退而言曰此子今晨聲聞失墜虛名非レ久斯之謂也

(卅)日本紀の注釋など法師沙汰すべからず　明月記承久元年五月廿日の條に顯昭付ニ家長一進ニ日本紀歌注一云々日本紀者我朝之國史尤可レ重若可レ有ニ其沙

法ニ大臣公卿官外記尤可ニ奉行一歟非ニ法師撰進之仁一歟云々按にこは定家卿の心狹き說也法師にもあれ山伏にもあれ學問優長の人何の書にても注釋を下さでやあるべき

(卅一)言靈　万葉五三十丁に言靈能佐吉播布國云々同十三丁に志貴嶋倭國者事靈之所佐國叙眞福佐與具云云此等の言靈は人の言語に自然奇妙の靈備りてたとへばかくあれかしと祝へばその祝言のしるし有よし也大鏡一の卷醍醐の段に「いはひつることたまならは百年の後もつきせぬ月日をこそ見め」此は中將の百年までの月を見よとよまれし御返しにそのことのはに靈ありて末たがはず皇子の御齡長く百年の月を見給はんよし也

(卅二)天守　遺老物語八の卷永祿以來出來初之事と云所に殿守の起りは永祿元年春尾州樂田の城主その城中に高二間餘に壇をつき其上に二階の矢倉をたて八幡宮愛宕權現を祭りて敵を防ぎたるより諸方にも聞及びて之をつくり信長にいたりて甚大に成りし事江州安土の殿守其濫觴のよし見ゆ風俗文選の李由が湖水賦に安土山總見寺は信長の城跡日本天守の始り七重の甍を聳やかす云々細川兩家記上卷十二丁ウに攝津國伊丹城の天守にて腹切たる事見ゆ之永正十七年正月の事にて永祿元年より卅八年前也安土築城は天正四年なれば永祿元年より十九年後大永元よりは五十六年の後なり遺老物語の說うけがたし勢州四家記廿一年後也丁天正十二年の條に瀧川下總守伊賀より來り松ヶ嶋ウ請取籠城せり日置大膳亮加勢して天守は瀧川守護し門矢倉は日置守護すると也と有頭書雜說問答二ノ九丁ウ天守は信長より始る老談記三十丁ウに天守の始りは井樓より起る材木を丈夫に組上塀なぬり狹間を切て次第に高くなし後に天守と成し也信長公の時安土にて初て五重の天守出來し秀吉公の時には七重と成し和留雅二ノ廿二丁ウ居處門に殿守儀俗城上高樓曰ニ殿守一

(卅三)國分寺天永寺安國寺大成寺天下に立　聖武の御世天下に國分二寺嶋分寺を建られし事は國史類聚三代格類聚國史元亨釋書政事要略延喜式など所見枚擧に遑なし曆應年中足利將軍の御願にて六十六州に安國寺を立られし事太平記義堂空華集十九の卷廿三丁ウなどに見ゆ鳥羽院天永寺を諸國に建給へる事鹽尻八の上卷にいへり永祿年中織田右府切支丹の永祿寺を安土城下をはじめ諸國に立後に大成寺といふよし武德大成長崎志吉利支丹由來記南蠻寺秘錄耶蘇征伐記などに見ゆ吉利支丹が來れる始は吉利支丹由來記には弘治三年丁巳の秋とし南蠻寺秘錄には永祿十一戊辰年とし耶蘇征伐記には天文廿年九月の事とす長崎夜話草長崎志などには元龜元年より長崎に來れるよしいへり天下に寺を建られし事前後四度に及べりまた國々の府に八幡宮を祭る事は鎌倉右幕下御崇敬に事起れりとおぼゆれど未その證を得ず頭書安國寺の事圓太曆三ノ九丁オウ六十六丁オ最明寺入道諸國ニ塔婆ヲ立ラレシ一室町日記二ノ卷ニ見ユ丹安國寺流水集四ノ五丁ウ伯ノ安國同集四ノ十三丁ウ紀ノ妙鷲山安國同卷十四丁ウ

(卅四)因果　成唯識論三の卷左八丁に如レ是法喩意顯下此識無始因果非ニ斷常一義ト謂此識性無始時來刹那刹那果生因滅果生故非レ斷因滅故非レ常非レ斷非レ常是緣起理故說ニ此識恒轉如下流云々尙委く閱て知べし

(卅五)隨緣眞如の波　唯識論三の卷廿丁に入楞伽經亦作ニ是說一如下海遇ニ風緣一起ニ種々波浪一現前作用轉無上有ニ間斷時一藏識海亦然境等風所レ擊恒起ニ諸識浪一現前作用轉眼等諸識無下如ニ大海一恒相續轉中起諸識浪上故知別有ニ第八識一云々

(卅六)天地の始雞子の如といふ說　神代紀上に古天地未レ剖陰陽不レ分渾沌如ニ雞子一溟涬而含レ牙云々禮記月令正義三五曆記など引て注したり利瑪竇が坤輿萬國全圖說に地與レ海本是圓形而合爲ニ一球一居ニ天球之中一誠如ニ雞子黃在ニ青內一云々

(卅七)吉利支丹の事　後奈良院天皇天文十年辛丑七月波爾杜瓦爾人二百八十人許大船に乘て豐後國神宮浦に來着す武備志に西番波羅多伽兒國佛來釋古者傳ニ鳥銃於豐州一といへるは是なるよし採覽異言に見ゆ西洋紀聞の說はたおなじ其後天文十二年八月の比彼國人再薩摩國多禰島に來着せる事南浦文集に見ゆ崎陽雜記には此度を西洋人渡來の始といひたれど天文十年七月を始とすべし天文廿年の比はもはら其教法を弘通し安藝廣島周防山口備前岡山播磨姬路などを經て和泉攝津に來り永祿の比は近江安土の右府信長公に招請せられ其法行はれて安土をはじめ諸國に永祿寺といふ耶蘇宗の寺を建らる後に南蠻寺といへり京師にも五條堀河一條油小路に大成寺を立て弘通せり武德大成長崎志吉利支丹由來記南蠻寺秘錄耶蘇征伐記其時大成寺に自鳴鐘をかけたる事耶蘇征伐記にいへりまた豐後の大友宗麟耶蘇に淫し家臣植田玄佐を天文十二年に西洋に遣して其法を受傳へ西洋紀聞これを諫るものあれどもうけひか

す古簡雜纂に其諫書十箇條を載たり京都にも西洋人を率てのぼり織田右府などにも說聞せたりし也此耶蘇の毒諸國になが れ吾國大に彼宗に傾かんとせしに和泉堺人西宗信といふもの神祖の內命を受て西洋に渡り三年習學して歸り來て始て邪宗のよしを言上し老談一言記慶長十六年肥後國の僧駿河にまねりて吉利支丹は軍陣を用すして日本を取んための計のよし白狀せしより其宗の者を刑し流し吉利支丹由來記南蠻寺秘錄實に古今の英斷也西湖志外紀に浙江通志を引て今日本於海口收港登陸之處鑄銅爲天主跪像抵其國者不踏天主像則罪至不赦一夫既爲天之主而受海外一國如此蹂踐毀蔑卒亦無如何其不能禍福人明矣と見ゆさて耶蘇吾國にいりし始は天文十年七月にて其師フランシスクスサベイリウス佛來釋古也豐後神宮浦に來着すイリウス西洋紀聞波爾杜瓦爾の條追拂はれしは慶長十六年以後の事也吉利支丹由來記明にいりしは万曆廿九年利瑪竇が來りしが始にて職方外紀序廿二史劄記明史三百廿六外國傳破邪集王豈應が犯案日本におくるゝ事六十年許也そも〳〵和蘭學は耶蘇の域を免るゝ事能はず此學世にひろごらんには末遂に耶蘇の犯到らんもはかりがたし四大洲中但大日本神國のみ彼宗邪を擯斥して快しとも快き政迹なればこれに穢れん事くちをしからずや同氣相求の理あれば耶蘇を禁じはてんにはまた和蘭學をも禁すべし頭書松の落葉二

（卅八）浮渚在平處宇岐士麻理蘇理多々斯　神代紀下五丁に既而皇孫遊行之狀也者則自槵日二上天浮橋立於浮渚在平處此云羽企而齎宍之空國自頓丘覓國行去頓丘此云吐陀烏覓國此云到於吾田長屋笠狹之碕矣云々また十七丁一書曰云々到日向襲之高千穗槵日二上峯天浮橋而立於浮渚在之平地齎宍空國自頓丘覓國行去云々與清曰浮は沼の類なにて人力もて作れるを池といひ自然の大なるを沼小るを浮といへりとおぼし「しまり」は卜り也浮の中にしまりたる所をいふ島といふも同義にて自凝しまりたるを自凝島といふがごとしたひらは浮のしまりたる中の平なる所をいふ浮渚ある所の平地の義なり古事記上卷には於天浮橋宇岐士摩理蘇理多々斯豆とありこれは傳への異なるにて於と蘇は寫誤なるべし於は從の誤蘇は能の誤にて從天浮橋宇岐士摩理能理多々斯豆なるべし能理は爾於里の約にて天の浮橋より浮渚に下立しての義と見れば明か也又按に通鑑綱目廿五七十二宋文帝元嘉十八年條の集覽に由於也と見えたれば於天浮橋をアメノウキハシヨリと訓べき事勿論也蘇理多々斯は余蘇理多々斯の約にや万葉に吾ニ依ソルなどもよめりこは天浮橋より沼島に寄副て出立すこゝろとすべくやまた天浮橋は天より通ふ道にてその道のほどの浮島に副出立す事とせばアメノウキハシノウキジマリニソリタヽシテと訓べしさては於を「ニ」と訓べし

（卅九）水牛本草綱目五十下卷の獸部牛の條集解に時珍曰牛有犎牛水牛二種犎牛小而水牛大也犎牛有黃黑赤白駁雜數色水牛色青蒼大腹銳頭其狀類豬角如攩矛云々文選八卷の司馬長卿上林賦に沉牛麈臐注に張揖曰沉牛水牛也能沈沒水中二云々史記司馬相如傳に沉牛麈臐注に漢書音義曰沉牛水牛也正義曰麈似鹿而大按臐似水牛二云々漢書司馬相如傳上に沉牛麈臐注に張揖曰沉牛水牛也能沉沒水中二云々玉篇廿三の牛部に牴古郎切水牛また牸直深切水牛云々五音集韻……正字通に牴牸字之譌舊註訓水牛改音剛非云々また牸稱人切音沈海牛相如上林賦沈牛註張揖曰水牛能沒入水中齊地志出登州海島中形似牛鬣腳皮可供百用寰宇志名潛牛廣志名沈牛又家畜水牛與牸牛別一種大腹銳頭蒼青色亦有白者性喜狎水角勁强能與虎鬥本作沈俗作牸舊註音審汎云牛名誤又牴音剛牸音冗訓水牛皆牸字之譌誤與篇海同云々抱朴子に水牛結陣而却虎云々格致鏡原八十六卷牛部詳類條に異物志周留水牛也毛青大腹銳頭青尾鬱林異物志州留者其寔水牛蒼毛豕身角若攩矛衝護其犢與虎爲讐廣志州留頂上肉大如斗似橐駝一日行三百里云々また群書考索牛有二種一曰沈牛牛之善水者也一曰沙牛俗亦謂之黃牛云々勝之助漂流記に巴旦國水牛は牛より大に相見毛色は牛より薄く御座候角扨も牛より太く大きに相見候車扨を曳せ申候用事濟候時は水中へ這入顏ばかり出し居申候食物は牛同樣にて候云々與清曰水牛二種あり家畜の水牛と牸牛と也牸牛一名は周留異物志林異字亦作州留廣志一名は海牛正字通一名は潛牛寰宇志といふ虎

と戰ふ猛獸にて水牛の皮の楯などに作れるこれ也勝之助が西洋巴旦國にて見しは家畜水牛なるべし勝之助天保元年寅三月備前國岡山を船出し漂流して西洋巴旦呂宋などにいたり同三年辰七月歸朝せるほどの記一卷あり

（四十）自鳴鐘　聖朝破邪集一卷万曆四十五年二月會審王豐肅等犯一案吳爾成云云々于二萬曆廿九年三月內一前到二南京西營街一居住先十年前有二利瑪竇龐迪峨郭居靜羅儒望等一已分二住南京等處一利瑪竇要二進レ京貢獻一寄二書澳中一到二王豐肅處一索二取方物一進獻於レ是豐肅携二自鳴鐘玻璃鏡等物一前來此時利瑪竇先已進レ京隨二將方物等件一寄二進京一貢獻訖云々按に自鳴鐘は明の万曆廿九年王豐肅が献せんとせしにはやく利瑪竇貢献せる方物の中にありと見ゆさては万曆廿九年の比利瑪竇が貢献を漢土自鳴鐘の始といふべし

圖書編刻文選五十二ノ廿七丁ウ聖朝破邪集一也

○同書同卷に吳爾成移二南京都察院一咨曰云々即所二私掇一渾天儀自鳴鐘之類俱怪誕不レ準二於繩一迂濶無レ當二於用一宜考二堯舜之世一有二璿璣玉衡一以齊二七政一之法歷代相傳有二銅壺滴漏一以測二晷刻一之法豈無二顚類一如二王豐肅龐迪峨等一其人絕不レ聞レ有二此規制一也云々○通雅十一天文曆測部の卷に近有レ以二鐵丸一圍轉代二流水一者と如二今自鳴鐘一亦一法也○五雜俎二の卷四十丁左に西僧剌瑪竇有二自鳴鐘一中設二機關一每レ遇二一時一輒鳴如レ是經レ歲無二傾刻差訛一也亦神矣云々同五の卷廿五丁右に元順帝自製二宮漏一藏二壺置中一運二水上下一置上設二三聖殿一腰立二玉女一按レ時捧レ籌二金甲神擊レ鼓撞レ鐘分毫無レ爽鐘鼓鳴時獅鳳在レ側飛舞應レ節置兩旁有二日月宮一宮前飛仙六八人子午交仙自耦進度レ橋進二三聖殿一已復退立如レ常神工巧思千古一人而已近代外國剌瑪竇有二自鳴鐘一亦其遺意也按に和爾雅五の卷雜器類部に自鳴鐘見二于五雜俎一今俗云二土圭一云々名物六帖器財箋三醫卜算候部に自鳴鐘トケイ五雜俎云々倭漢三才圖會十五の卷蟲財部にも五雜俎を引ていへりさて破邪集王豐肅が犯案に利瑪竇万曆廿九年の比貢献すといへるにて其時代知べし○采覽異言五の卷新伊斯把爾亞條に慶長十五年秋新伊西把爾亞商船過レ洋遇レ風漂至二我東地一舶艫盡碎官命繕治乃給二資糧一而還十七年夏其國遣レ使來聘以謝二其禮物有二自鳴鐘一口一我有二此制一實自レ是始云々按に吉利支丹安土の大成寺をはじめ諸國の大成寺に自鳴鐘

を懸置たるよし耶蘇征伐記に見えたれば永祿年中に此器ありし事知べし西洋紀聞波爾杜瓦爾の條にホルトガル人豐後に來れるは天文十年七月薩摩に來れるは天文十二年八月のよしいひたればかた〳〵慶長以前ありける事うつなく采覽異言の說取用がたくおぼゆ○書言字考七の卷器財門土部に土圭周禮大司徒以二土圭之法一測二土深一正二日景一以求二地中一鄭康成云圭長尺有五寸以二夏至日一立二八尺之表一其景適自與二土圭一等謂二之地中一今世諸家常用稱二土圭一知レ刻器者蠻僧利瑪竇所レ傳自鳴鐘也出二五雜俎一云々按に此說土圭と自鳴鐘を混稱せるよしをいへる也されど自鳴鐘を「トケイ」といふは「トキ」の延語にて土圭と殊也○倭漢三才圖會十五の卷藝財部に自鳴鐘俗云二時計一五雜俎云西僧剌瑪竇有二自鳴鐘一中設二機關一每レ遇二一時一輒鳴如レ是經レ歲無二頃刻差訛一也亦神矣今占候家時多不レ正至レ於選二擇吉時一作レ事臨レ期但以二臆斷一耳烈日中尙有レ圭表一可レ測陰夜之時所レ憑者漏也而漏已不レ正矣況於二山村中無一漏可一考哉故知與作乃推二祿命一者十九不レ得二其眞一也按土圭一名圭尺以二八尺板一爲レ表竪レ之以測レ晷知二時刻一定二夏至冬至之差一曆家者流必用之器也漏刻盛二水於桶一量二所レ漏水一知二時刻一其巧甚精矣天智帝十年始作二漏刻一撞二時辰之鐘一然近頃有二自鳴鐘一以來無二如レ之者一而俗名二時計一有二樓時計一形甚小可レ入二懷中一有二釣時計一掛二家柱一有二二錘一隨二自旋一一錘垂下皆中機如二車輪一者刻齒多接機轉運旋用レ鐵作レ之名二世牟末伊一是則旋機之根也按に五雜俎の說は二の卷に見ゆ天智帝十年の說は日本紀廿七の卷に出たり○日本紀通證卅一の卷十丁右天智十年の條に荒井氏謂慶長中日記作二斗雞一此明人所レ譯二番語一也蓋此器有レ如二北斗象一者と故曰レ斗自鳴而報レ時無レ差故曰レ雞按に斗雞の字說は鑿說にて用がたし登支を延て「トケイ」といへる義を考ざる也頭書池北偶談に大自鳴鐘一座云々○獪園四の卷の利瑪竇傳に其所レ進自鳴琴自鳴鐘皆按二刻漏一而鳴若二吾中華有一自鳴更鼓之屬一云々按に自鳴琴の名見えてまた刻漏の類なり○谷響集一の卷九丁左に自鳴鐘○雍州府志六廿七丁左耶蘇征伐記五卷二冊撰人名氏を著さず卷三一丁大友由來付佐伯事と標せし條に人王百六代後奈良院ノ御在位天文二十年秋九月ノ頃南蠻ヨリ耶蘇宗來リ平安ニ寺ヲ建立シ本尊ヲ

天帝丸（ゼンスマル）ト號シ念珠ヲ「コンタッツ」ト云ヒ時計ヲ仕懸自ラ時ヲ知ラセ種々邪術ヲ以テ蒙レ惑人民ヲ欺惑シ邪法ヲ說テ一盲衆盲ヲ引ク然ドモ邪法助難シ世ヲ經ズメ泯絶シス今ニ至テ彼ノ寺ノ跡ヲデイウスノ町ト云（自注所ハ一條ノ上）但右の外全書中を涉獵するに時計の事所見なし○和蘭產物考 三の卷（五丁カ）○名物六帖器財箋二（醫ト算候部）に自鳴鐘トケイ五雜俎元順帝自製ニ宮漏一藏ニ壺漏中一運ニ水上下一置上設ニ三聖殿一腰立ニ玉女一按レ時捧レ籌近代外國琍瑪竇有ニ自鳴鐘一亦其遺意也馮時可蓬窗續錄外國道人利馬竇贈ニ予倭扇四柄一又有ニ自鳴鐘一僅如ニ小香盒一精金爲レ之一日十二時凡十二次鳴又異物也云云○魯西亞志分界の條にインゲルマンランドの王城ペテルスベルグにシントペートルバウルスといふ寺あり寶塔を建起すこれ意太里亞國の良匠テレシニなるものゝ造りし也屋瓦は皆金貼也塔上に自鳴鐘を掛け每時に自ら鳴りて時を報じ又自ら音響を奏す是和蘭の都アムステルダムにて造れる所なり云々インゲルマンランドの王城は千七百二年（元祿十五年に當る）露西亞の伯多祿（ペトル）帝が建たる都也 頭註 崇禎曆書二卷題疏に自鳴鐘三架中樣者每架價銀十五兩大者及小而精工者價值甚多今不ニ必用一云々

（四十一）土圭　明史（廿五の卷）天文志一に周禮有ニ圭表壺漏一而無ニ璣衡一其制遂不レ可レ考 漢人創造ニ渾天儀一謂即璣衡遺制其或然歟厥後代々有ニ制作一大抵以ニ六合三辰四游重環一湊合者謂ニ之渾天儀一以ニ實體圓球一繪ニ黃赤經緯度一或綴以ニ星宿一者謂ニ之渾天象一其制雖レ有ニ詳略一要亦青藍之別也外レ之則圭表壺漏而已云々○又云圭表之法表短則分秒難レ明表長則影虛而淡郭守敬所レ以立ニ四丈之表一用ニ影符一以取ニ其日體甚大堅表所レ測者日體上邊之影橫表所レ測者日體下邊之影皆非ニ中心之數一郭守敬所レ以於ニ表端一架ニ橫梁一以測ニ之也其術可レ謂レ善矣但其影符之制用ニ銅片一鑽ニ鍼萃之孔一雖レ前低後仰以向ニ大陽一但太陽之高低每日不レ同銅片之欹側安能俱合不レ合則光不レ透臨レ時遷就而日已西移矣須易ニ銅片一以ニ圓木左右一用ニ兩板一架レ之如ニ車軸一然則轉動甚易更ニ易圓孔一以ニ直縫一而用始便也然影符止可レ去ニ虛淡之弊一而非ニ其本一必須レ正ニ其表一焉平ニ其圭一焉均ニ其度一焉三者缺レ一不レ可ニ以得一レ影三者得矣而人心有ニ粗細一目力有ニ利鈍一任レ事有ニ誠僞一不レ可レ不レ擇也知ニ乎此一庶ニ幾晷影可一レ得矣○周禮

十の卷 司徒敎官之職大司徒の條に以ニ土圭之法一測ニ土深一正ニ日景一以求ニ地中一日南則景短多レ暑日北則景長多レ寒日東則景夕多レ風日西則景朝多レ陰注に……○宋書十二（廿五の卷）曆志上（廿五丁オ）に史官受レ詔以ニ土圭一測レ景考ニ校二至二分三日有餘從來積レ歲及レ交州所レ上撿ニ其增減一亦相符驗ニ然則今之二至非ニ天之二至一也云々又（廿六丁オ）以ニ土圭一測レ影知ニ冬至已差三日一云々○雍州府志六卷（廿七丁左）土產門金玉部に土圭 自鳴鐘 倭俗謂ニ土圭一元自ニ阿蘭陀國一來今本朝人倣ニ彼所製一而處々造レ之其內御幸町二條北所レ造爲レ宜又砂土圭漏刻 亦今造レ之（四十二）望遠鏡 幷眼鏡　明史（廿五の卷）天文志一に崇禎二年禮部侍郎徐光啓兼ニ理曆法一請造ニ象限大儀六紀限大儀三平懸渾儀三交食儀一列宿經緯天球一万國經緯地球一平面日晷三轉盤星晷三 候時鐘三 望遠鏡三一云々また七年督修曆法右參政李天經言輔臣光啓言定レ時之法古有ニ壺漏一近有ニ輪鐘一二者皆由ニ人力一遷就不レ如ニ求ニ端於日星一以レ天合レ天乃爲ニ本法一特請製ニ日晷星晷望遠鏡三器一云々若ニ夫望遠鏡一亦名ニ窺筒一其制虛管層疊相套使可ニ伸縮一兩端俱用ニ玻璃一隨ニ所レ視物之遠近一以爲ニ長短一不ニ但可一レ以窺ニ天象一且能攝ニ數里外物一如レ在ニ目前一可ニ以望レ敵施レ砲有ニ大用一焉至ニ於日晷星晷一皆用措置得レ宜必須築レ臺以レ便安放帝命ニ太監盧維寧魏國徵一至レ局驗ニ試用法一云々○眼鏡の事は陔餘叢考卅三に見ゆ○三朝實錄採要 世祖一（四丁ウ）順治元年八月朔條に是日令レ大學士馮銓同ニ湯若望一携ニ窺遠鏡等儀器一率ニ局監官生一齊赴ニ觀象臺一測驗ニ云々○谷響集一の卷（廿七丁ウ）眼鏡○崇禎曆書二の卷題疏に望遠鏡架三副每レ架約工料銀一兩鏡不レ在レ數○聖朝破邪集三卷閩中周之夔章が破邪集序に西洋本猾黠小夷多ニ技巧一能製ニ玻璃一爲ニ千里鏡一登レ高遠望視ニ隣國所爲一而以ニ火砲一伏ニ擊之一故他夷率畏ニ其能一多被ニ兼併一以レ此稱ニ雄于海外一云々

（四十三）天妃　明錢希言が獪園十一の卷（靈祇部）に遂州項中丞應禪万歷二十年間以ニ戶科給事中一銜レ命冊ニ封琉球一事竣而還中途遇ニ颶風卒至一駭浪滔レ天樓船觸ニ碎于海岸一官吏沈溺珍寶散亡惟中丞與ニ醫士何日曉一兩人獨在乃附ニ一破船板一浮ニ于水上一順レ流而東是夜常有ニ一燈在レ前導引不レ離ニ二十步外一其板隨レ燈漂去疾如ニ風行一俄而著レ岸暗中若ニ有レ人引レ之登者依俙見ニ此火光一穿ニ古廟中一而滅兩人便入レ廟宿訖レ之乃是

福建海口天妃娘々香火始悟二其靈應一焉中丞具奏二其事于闕下一重加二封號鼎新廟宇一閩南人云若二燈所一レ不レ有二奇應一レ加二封天妃神號一積至二十字廟一曰二靈慈一祝文云年月日皇帝遣二某官一致二祭于護國庇民廣濟福惠明著天妃一元史祭祀志洪武初復有レ護二海運舟一之功一レ五年封二孝順純正孚濟感應聖妃一國書丘濬天妃廟碑京師舊有二天妃廟一在二都城之巽隅大通橋之西一景泰辛未道士丘然源援二南京例一請升爲レ宮然規制尙存二其舊一弗レ稱二宮之名一也成化庚子然源乃募レ材鳩レ工拓大而一二新之一祠神之宮茲其稱矣增臺稿○同十九卷郊坰一補遺三丁に天妃宋徽宗宣和間路允迪使二高麗一八舟溺其七見二妃朱衣坐一柁上一舟籍以安歸聞二于朝一賜二祠額名順濟一高宗朝封二崇福靈惠昭應夫人一孝宗朝以レ助二勦溫台寇一封二靈慈昭應崇善福利夫人一光宗朝以レ救レ旱封二靈惠妃一寧宗朝以レ救レ潦加封助順一又以二淮甸退レ敵屢加二顯衛護國助順嘉應英烈妃一理宗朝以レ濟二輿泉饑一加二封協正一又封二靈惠助順嘉應慈濟妃一尋以二錢塘隄成一加二封善慶一既又以二顯レ靈焚レ寇進二顯濟妃一元世祖封二護國明著天妃一進二顯佑一成宗加二封轉輔聖比民一仁宗加二封廣濟一文宗加二封靈感助順福惠徽烈一賜二額靈慈一皆以二漕運危險立見二顯應一故也明太祖封二昭孝純正孚濟感應聖妃一成祖封二護國庇民妙靈昭應弘仁普濟天妃一莊烈帝封二天仙聖母青靈普化碧霞元君一已又加二靜賢普化慈應碧霞元君一使琉球雜錄○船靈の事高僧傳一四丁ウ

（四十四）下馬下乘の榜（フダ）　吾妻鏡廿一の卷十四丁右建暦三年五二の條に即匠作揚レ旗率レ勢警二固中下馬橋一給云々同脫漏三十丁右嘉祿三年七條に去建暦三年和田左衞門尉義盛叛逆之比如レ此之有二大勳一中下馬橋之地割事有レ之古老談レ之云々同廿四の卷廿三丁右仁治二年一廿九の條に若宮大路下下馬橋邊騷動云々事起爲若狹前司泰村能登守光村四郎式部大夫家村以下兄弟親類於二下下馬橋西頬好色家一有二酒宴亂舞會一云々同廿七の卷七丁右寛元四年廿四の條に左親衞令レ警二固中下馬橋一云々頭書盛衰記九ノ七丁ウ下乘札平家物語二四十二丁同按に吾妻鏡に中下馬橋下下馬橋の名見えたれば上下馬橋ありけん事しるし○元德二年三月比叡行幸記三丁左に假屋のつめよりかみつかた早尾坂にいたるまで御道ばかりを殘して左右に居ながれたる大衆は幾千万ともみえわかず五位六位の下馬札より内の鳥居もまぢかくて肅々たる閑谷に堂々たる長橋あり云々按に下馬札に五位の下馬處六位の下馬處の差別ありと見ゆ○吉見政義書札抄四の卷に下馬ト書札ヲバ下馬トハ不レ申候二字札ト可レ申也○翰墨集要二の卷二字札事の條に二字札の事右乘物よりおるゝ所に立るを下乘と書レ之也馬よりおるゝ所を下馬と書レ之也云云○元德二年三月比叡山行幸記七丁右に退凡下乘の靈山會をうつし七重結界し給へる峰にてもとより牛馬を用る道ならねば公卿も歩行の儀にて侍けれども大坂になりぬれば御輿をすゝめ奉りて後おの〳〵たごしを用給ふ云々○徒然草二百一段に退凡下乘の率都婆外なるは下乘内なるは退凡也云々按に野槌八の卷四十四丁右に下乘は王の車馬よりおるゝ義也そこにある率都婆をいふ退凡は凡人をしりぞくる義也そこにある率都婆をいふ下乘は山下にあるゆゑに外也退凡は山中にあるゆゑに内なり云々また西域記の故事をも引たり○速水見聞私記五の卷に下馬札故實事の條に扶桑見聞私記卷十五書永二年癸卯私云書永二年ノ記東鑑ニハ不レ見三年ヨリノ記アリ三月仰二曾我祐信一令レ書二下馬札一給付下馬書樣故實之事條に三日己辰上巳ノ嘉儀トシテ在鎌倉ノ大小名悉出仕ス門前如レ市仍景時ガ舍人ト常胤ガ僕從ト欲レ及二鬪諍一結城朝光行掛リテ靜レ之七日壬申武衞曾我太郎祐信ヲ召テ仰ニ云出仕ノ大小名妄リニ馬上スルニヨッテ御

所ノ門前混亂スル由ナリ所々ニ下馬札ヲ立テ可レ禁ニ咀也又搦手ノ下馬ハ草文字ニテ書事候是モ下ノ連火ヲ一文字ニ引テハ禁忌也一ハ陽ニテ火也故ニ下ノ一文字ヲ三水ノ如クニウヰリテ書ヲ以テ故實ト仕ルヨシヲ申則於ニ御前一令レ書テ有ニ御覽一御前ニ伺候ノ面面皆其文字ヲ書寫シテ持參ス

下馬—此點ヨリ打初テ如レ斯書也

下馬　草字ハ下ノ連火ヲ三水ノ如ク書ク

下馬—尾師子云下ニ曲ル者ハ尾也ト云ハ是也

右四ツノ點ヲ下馬ノ時ハ續ケテ書也○小如レ斯讀ルヽ也馬ノ四ツノ足ヲ繫ゲ故ニ馬不レ能レ行○〃〃如レ斯書時馬ノ足自在ニシテ不レ止也

武衛尤ノ由有ニ御褒美一梶原源太景季ヲ奉行トシテ中下馬巨福呂口由井濱橋米町口材木座金澤口幷鶴岡ノ宮前等ニ被レ立云々

扶桑見聞私記卷十五　大江廣元家集也

右記者松中長門守殿有レ之希抄出之由云々于レ時享保癸丑年小春下九日書レ之本主望月昭溪所持借ニ用之一

誡下馬札書法詳事也可レ秘云々按に扶桑見聞私記または扶桑憲問式に作り又大江廣元日記ともいふ山岡俟明が類聚名物考書籍部四の卷七の卷に扶桑憲問式この書

鎌倉に名高き大江廣元の記也といふはをこの作り事也似もつかぬ僞書也といへるはさることと也下馬札書法の故實も筆道家妄作の口傳を聞知て實とおもひ曾我太郎が時有けん事のやうに書なせる也さるを速水房常が信用せるは眼なきに似たりといふべし○牛馬問四の卷十一丁左下馬札條に下馬札の事如何曰下馬札とはいふべからず二字札と云べし右二品とも本朝筆道家極秘傳の事なれば詳なる事をいふ事を不レ得たゞ是守護神也と心得べし予不肖なれども辱くも持明院中納言基時卿より御家傳九ヶ條の大秘事免許筆道家管沼先生統傳を受繼又武家方の傳は曾我又左衛門尉祐よりの傳來を得てこと〴〵く此秘密を聞りたとへ此書をみたりとも十餘りの口授を聞ずんば皆徒事のみ先師高峰華洞先生近代諸國の二字札を見るに多く素人の書也とかたりぬ按に牛馬問は新井白蛾が隨筆也ここに筆道家秘傳口授といへるは速水房常が引たる扶桑見聞私記の妄說に過ず呵々大笑○西域記九の卷八丁左摩揭陀國下靈鷲山の條に如來御レ世垂ニ五十年一多居ニ此山一廣說ニ妙法一頻毗娑羅王爲ニ聞法一故與ニ發人徒一自ニ山麓一至ニ峯岑一跨レ谷陵レ巖編レ石爲レ階廣十餘步長五六里中路有ニ二小窣堵波一一謂ニ下乘一即王立レ之徒行以進一謂ニ退凡一即簡ニ凡夫一不レ令ニ同往一云々按に下乘は外也退凡は內也○嘉泰普燈錄十九の卷四丁左潭州慧通清旦禪師條に上堂正眼豁開照ニ破多年山鬼窟一腕頭著力拈ニ却門前下馬臺一云々按にこれは下馬札にはあらず馬より下るをりの臺也其名目相近ければ引出せり○三朝實錄大宗天聰三年二月己亥の條に奉レ遷ニ太祖梓宮一八旗諸臣輪舁至ニ山陵一以ニ上生母太后梓宮一與ニ太祖梓宮一合葬葬畢焚ニ楮錢一以祭於レ是禁ニ陵前往來之人一不レ許レ乘ニ車馬一行走ニ過必下諸員勒大臣以下小民以上不ニ下馬一而過者治レ罪於ニ東西傍一立ニ下馬榜一示レ衆云々また崇德元年五月己巳の條に上命ニ內院大學士范文程等一至ニ和碩親王多羅郡王多羅貝勒府門前一立ニ下馬榜一云々按に下馬榜は本朝の下馬札也されど其製は知べからず○拾玉集五の卷四十九丁ウ慈鎭和尙歌「わしの山退凡下乘の卒都婆ゝまで跡ある跡を見るそうれしき」○義楚六帖廿一の卷寺部入寺之儀條に西域寺圖云行至ニ佛所一禮三拜繞三匝唄讚至ニ僧房外一禮一拜見ニ上坐一禮三禮以レ見レ敬故見ニ非法事一不レ得ニ譏呵一自失ニ善利一捨ニ刀仗一下レ馬去レ帽按に眞俗佛事編

六の卷下馬牌の條に此說を引たれど但下馬の事にて下馬札をいへるにあらず法苑珠林五十二の卷致敬部にも西國寺圖とて此說を引たれど下馬の事なし○儀式（二卷廿丁右）踐祚大嘗祭儀上に自二左衞門陣一標後相去十許丈立二大臣下馬標一去レ之廿許丈立二諸司下馬標一（左右各一丈高三許尺下同）自二左衞門陣一標右去四許丈立二右兵衞督標一右去四許丈立二右衞門督標一其後廿許丈立二諸司下馬標一云々○平野行幸次第（群書類從廿六卷十三丁ウ）に先レ是立二下馬標一

（四十五）印明　稱名院右府（公條公）三塔巡禮記（三丁右）に根本中堂にいたりて此山の由來をきゝ印明さづかりて感嘆のあまり山家大師の聖作もおもひ出て長老よみ給へり「今そしる無上正等正覺のわたかつ柮の法の道をは」云々此印明は印眞言の事也印眞言とは眞言印相にてそは谷響集二の卷（十九丁オ）に大日經疏を引て明二眞言一體無レ異といひ（◎以下原書欠乏）

（四十六）頗姪連由婁漫喜利志祖　天文末錄（上卷）對治邪宗論（一丁）に原夫天文末有二商客一從二西夷恚哆俚夜國浪魔京一來寄二船於豐後國一尋二其船路一從二西海一而向二南方一往自二南方一向レ北而來二于日本一故倭國人呼レ之爲二南蠻人一見二其船中一商客樟郎都二百餘人其中見下形服異二于衆人一之人兩箇ヶ名曰二三跋亂志須古娑嘔惠婁一一人名曰二我須頗婁一稱二此二人一曰二頗姪連一此翻二和尙一又有二一人伴者一名曰二路連曾一是爲二由婁漫一此翻二首座一此人日本和州之產本名曰二了西一從二薩州一渡二浪魔一學二天主教一而又來二于日本一其宗旨名曰二喜利志祖一於レ是路連曾代二頗姪連一說二天主教一令二人歸二宗門一者凡百餘人娑嘔惠婁爲レ弘二通宗旨一且留二日本一我須頗婁爲二重遣一頗姪連數人其明年還二浪魔一然後娑嘔惠婁終敎二國主一歸二宗門一建二立寺門一演二說邪法一當二于此時一歸二入宗門一者如二麻葉一其後歷二三年一而頗姪連十一人乘二商船一來二于肥前國平戶島一然後大村島原長崎天草筑前國博多豐前國小倉攝州大坂山城伏見西京其外於二在々所々一說二邪法一而誹二謗佛神一行二布施一以傾二動男女一因レ之歸二其宗旨一者不レ可二勝記一云云○評曰言二喜利志祖一者是寸喜利志徒所レ立宗旨也求二其來由一是寸須歸二依釋氏一而學二名相一自起二邪見一而作二外道一者必矣云々是寸須爲レ人也膽大麁心虛妄巧見雖レ歸二釋氏一只學二其名相一不レ到二其窮一玄僞竊二

釋氏法相一還作二外道邪見一或改二其名一而執二其實一或同二其事一而異二其理一故改二梵天王一名二泥烏須一改二諸梵衆一名二安耶一改二天堂一名二頗羅夷曾一改二人道一名二跋婁伽倒利夜一改二地獄一名二因邊婁濃一改二灌頂一名二婆宇低寸茂一改二懺悔一名二混毘三一改二十善戒一名二十麻駄免徒一改二地丘尼一名二毘婁善一改二錫仗一名二惠寸苦茂餓阿徒一改二地餅林藤一名二麻三菓一改二珠數一名二混多須一取二罪人死骨一名二苦利喜物一云々按に對治邪宗論一卷（卷七の）あり雪窓宗崔述と卷端にしるしたり此一卷天文末錄の天卷とす人卷は欠て見えず中卷は地の卷也地卷は筑後守伴天連へ不審ヲ掛ヶ申諾メコロバセ申候論議ヲ片假名にて記したり○屬文階梯附錄に排吉利支丹文あり

松屋筆記卷之八十

平與清稿

（一）堂童子　海人藻芥（中卷十一丁左）に堂童子者五位殿上人所役也布施一人以下大臣公卿殿上人等取レ之一人大臣等取給布施自取レ之可レ渡二從僧一也但如レ此事依レ時隨レ人事兼難レ定之間臨時可レ有二故實一事也○侍中群要（七の卷）の仁王會條に前一日差二定堂童子一五位四人云々但王卿及出居幷堂童子等座一間云々また臨時御讀經條に堂童子四人（或云五位六位者近代五位不足難レ召二四位一不レ用二六位一）南ニハ上蔀北ニハ下蔀即經二上曹司前一天昆明池乃障子（乃毛登乃簀子敷二天窺一南方一入レ從二殿上戶下瞻一通天一度出天居云云堂童子俄故障有天出居次將奉仕（スベキ）定有劒本座（留御佛名二地下參上セバ可二帶劒一也餘又効レ之）御讀經堂童子書了通二校書淸涼殿軒廊北一始柱南面歟其柱角也可レ尋二舊押處一云々また御讀經事條に堂童子（殿上五位四人許點可レ然之人可二籠申一有レ之時五位侍中勤レ之六位同レ之云々）同次第條に次堂童子著レ座（聞二聲音一之後座レ之）法用第一取レ之後隨催至二于散花机下一跪取二花筥一發願（不レ向二後於御前一也）渡二下蔀人一

次又取二我分一（兩三枚可レ隨二僧數一取重二賜レ之僧徒立二長押下一）各賦レ之左方置二僧綱前一（花筵餘末僧ニ）宮司復二本座一次法用了又隨催右方人合眼立レ座取二本筥一跪二机下一如レ本返置次取置二諸人筥一右廻退入云々○雅亮裝束抄（中卷）東帶裝束事の條に御堂供養千僧などの堂童子の染分とて左右わかちて柳躑躅とてある柳の常の薄柳也躑躅といふは常の下襲をいふなり云々○江家次第（三の卷）の御齋會始條に上卿召二外記一問二諸司具否一式部彈正治部玄蕃堂童子等也云々堂童子著（圖書官人爲レ先入レ自二殿東四戸一著二壁下座一）云々左右行香左方公卿右方辨少納言若有二不足者一堂童子大夫外記史（近代等立加云々同御齋會竟日條に堂童子著（入レ自二殿東四戸一著二壁下座一）云々唄師發レ音（定者沙彌退）堂童子進行二花筥一衆僧左右各十人就二分花座一散花師發レ音行道了堂童子收二花筥一退出云々○江次第考（三の卷）の御齋會始條に堂童子賦二花筥一者也云々按に江次第中此外所見おほかれどわづらはしければ引出ず○樋口秘記（四丁右）にダウドモトユヒハ堂童子元結ト云也尤女モスルヿ也本名繪元結ト云也云々又（五十六丁左）同ジ殿上人ニテモ堂童子（五位六位）ト云時ハ椽ノ板ノ上ニ座ス布施取（四位五位）ノ時ハ疊上ニ座ス然レドモ大臣ト殿上人トハ絕席トテ間ヲオキテ敷云々○壒嚢抄十の

巻卅三段（塵添本十五の卷廿三段廿五丁左）に顯密ノ勅會ニ藏人（并諸家ノ諸大夫ノ花筥取ヲ堂童子ト云ハ何ゾ凡ソ童子トハ十五以前ノ男子ノ稱也サレバ畵工ノ口傳ニハ筆勢ヲ顯スト雖モ於二童子一肉形ヲ微弱ニ書ト云々但シ今云所ノ堂童子ハ非二爾義一寄歸傳ニ天竺寺事ヲ云ルニハ凡ソ白衣ノ菰菊ノ所ニ指テ若シ專ラ誦二佛典一情希二落髮一畢願二緇衣一號ノ爲二童子一或ハ外典ヲ求テ心出離ニ非ルヲ名テ學生ト云就二菰菊一外典ヲ習ヘル也ト云々此二類ノ中ニ發心求道ノ俗ナドノ僧ノ所ニ至テ佛子ヲ願ヲ童子ト名クルハ花筥賦（クバリ）ナドスル役ヲ勤ムル事堂傍ニアリテ便宜相應スル故也仍テ堂童子ト云ニヤ今ハ發心求道ノ義ニ非ザレトモ是ヲ例トシ此號在歟南都ノ諸寺ニハ堂童子ト云下部侍也云々按ニ西琳寺緣起（七丁右）に堂童子料米見ゆこは下部の堂童子也○廣隆寺來由記（十九丁左）に上卿堂童子官人二人云々○增鏡老の波に講師法印憲實讀師僧正守助導師高座にのぼりぬれば堂童子花筥をわかつ云々○榮花物語（鶴の林十二丁右）にそうたち御だうどうじにいたるまでたゝものにあたりて水をあみ人しれぬゝかをつき佛をいりもみ奉る云々○枕草子（春曙抄本六の卷十八丁左）のにきよげなるたて文など

もたせたる男のすきやうの物うちおきて堂童子などよぶこえは山ひゞきあひてさら〳〵しうきこゆ云々○春曙抄に堂童子は法會の時花筥を行ひをさめなどするもの也江次第に佛事ごとに見えたり禁中の法會にその座以下雲圖抄に有云々○儀式五卷（一丁左）正月八日講二最勝之經一儀に殿堂東西廉堂童子五位座云々又（三丁左）次堂童子進二北面列一跪生各一人起取二花筥一相傳後授二官人一受レ之授二堂童子一堂童子以レ次傳授訖堂童子自レ下起進跪授二衆僧（初堂童子起筆圖書寮官人率二生等一各復座）訖各復レ座云云次堂童子進受二花筥一跪列亦如レ上云々

（二）窮寇勿レ追　窮寇勿レ追とも窮鼠却食レ猫ともいへば心すべき事也晉書劉聰載紀に長史魯徽曰困獸猶鬪況於レ國乎とも有

（三）小人有レ始無レ終　晉書劉聰載紀に靳準曰小人有レ始無レ終云々と見ゆ惡人善言を聞知ていへる也

（四）丈八蛇矛　丈八の蛇矛は張飛が手練の兵仗也晉書劉曜載紀に陳安左手奮二七尺大刀一右手執二丈八蛇矛一とあり

（五）宗源　高僧傳七の卷（卅丁左）道猷傳に宗源有レ本乘レ機挫レ銳往必摧レ鋒とあり宗源神道の字の出處に引

（六）すて捨てといふ詞　先人本孝の歌に「すて〳〵て捨はてゝこそやすからめ又と捨へきものゝなければ」宋高僧傳廿三の卷（廿三丁右）宋臨淮普照王寺懷德傳に僧崖菩薩安詳陟二於柴樓一大志道人慷慨焚二其腕骨一人皆難色彼有二易容一蓋累世之曾爲致二今生之又捨一捨而復捨估二七寶一以非レ珍空而又空以二三輪之絕軌一乘レ玆渡レ岸是曰二眞歸一云々

（七）犬の遠吠　宋高僧傳廿六の卷（十二丁右）玄朗傳に時有二盲狗一來二至山門一長嗥宛二轉于地一云々長嗥は今俗に遠吠なるべし

（八）酒を法師に供養す　宋高僧傳廿六の卷（廿丁右）代病師傳に有レ寘二毒於酒一者ヒ賄二貧女一往施レ之代病已知貧女紿レ之曰妾家醞覺レ美酌二施和尙一求レ福況以佛不レ逆二衆生願一代病曰汝亦是佛然貧女懼二反飮一具以レ情告代病執レ杯毀レ之俄爾酒氣及二兩脛足一地爲レ之憤裂聞者驚怪以レ酒供養自レ玆始也と見ゆ出家飮酒の證文と云べし

（九）魏曹操假譎可レ惡　『三國志魏志武帝紀一注に曹瞞傳云太祖少好二飛鷹走狗一游蕩無レ度其叔父數言二之

（頭書）宋高僧傳廿九ノ十三丁ヲ先問二宗源一次及二心印一云々

于嵩ニ太祖患レ之後逢ニ叔父于路ニ乃陽敗レ面喎(ユガム)レ口叔父怪而問ニ其故ニ太祖曰辛中ニ惡風ニ叔父以告レ嵩嵩驚愕呼ニ太祖ニ太祖口貌如レ故嵩問曰叔父言ニ汝中風ニ已差乎太祖曰初不ニ中風ニ但失ニ愛於叔父ニ故見レ罔耳嵩乃疑焉自後叔父有レ所レ告嵩終不ニ復信ニ太祖於レ是益得レ肆レ意云々 世說新語補十九の卷假譎篇に魏武の所行五箇條をのせ注に曹瞞傳の說をも引たり實ににくむべき奸智詐謀の小人也其子孫司馬氏が爲にうきめ見しも積不善の餘殃ならずや』

(十)神主　西域記十二(六丁左七丁右)の卷尸棄尼國の條に此國王愛子嬰レ疾徒究ニ醫術ニ有レ加無レ瘳王乃躬往ニ天祠ニ禮請ニ求救ニ時彼祠主爲レ神下レ語必當ニ痊復ニ良無ニ他慮ニ云々愛子已死匿不レ發レ喪更問ニ神主ニ猶曰不レ死疹疾當レ瘳王便發レ怒縛ニ神主ニ而數曰汝曹群居長レ惡妄行ニ威福ニ我子已死尙云レ當レ瘳此而謬惑孰不レ可レ忍宜レ戮ニ神主ニ殄(ゆ)滅靈廟ニ於レ是殺ニ神主ニ除ニ神像ニ投ニ縛芻河ニ云々 これ神主の字面の出處にて祠主とも相通はしいふ事知べし位牌を神主といふには殊也

(十一)鼠社　源平盛衰記十の卷(十二丁右)賴豪成レ鼠事條に賴豪ハカラキ骨ヲ碎テ「皇子ヲバ祈出シ進セタレドモ戒壇ハ御免ナシ大惡心ヲ起メ旱死シケルゾ無慙ナル去程ニ山門又皇子ヲ奉ニ祈出ニ御位ニ即セ給タリケレバ賴豪ガ死靈モイトヾ成ニ怨靈ニ山門ト云處ガアレバコソ我寺ニ戒壇ヲバ免サレヂサレバ山門ノ佛法ヲ亡サント思テ大鼠ト成谷々坊々ニ充滿テ聖敎ヲゾカブリ食ケル是ハ賴豪ガ靈怨也トテ上下是彼ニテ打殺蹈殺ケレ共彌鼠多出來テ夥(ラビタイシ)ナントハ云計ナシ此事只事ニ非ズ可レ宥ニ怨靈ニトテ鼠ノ寶倉ヲ造テ神ト奉レ祝サテコソ鼠モ鎭リケレ圓宗ノ敎ヲ學メ可ニ成佛ニ賴豪ガ由ナキ戒壇ダテユヘニ鼠トナルコソオカシケレ云云長門本平家物語六の卷にさてらいかうは山門のさきへにてこそ我宿願はとげざりしかども大なる鼠となりて山門の聖敎を食ける間此鼠を神といはふべしとせんぎありければ社を作りて後かの鼠しづまりにけり東坂本にねずみの祠とて當時あるは則是也いまも山には大なる鼠をばらいがうとぞ申ける賴豪故なき妄執にひかれて多年の行ごうを捨畜趣の報をぞ感じけるかなしかりける事也つゝしむべし〳〵云々太平記十五の卷園城寺戒壇事條に白河院の御宇ニ江帥匡房ノ兄ニ三井寺の賴豪僧都トテ……賴豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ其怨念ヲ鎭ム鼠ノ禿倉是ナリ云々

(十二)一杯元氣　一杯元氣の事已にいへり西域記十一の卷(十一丁右)摩訶(マカ)剌佗(ラダ)國條に國養ニ勇士ニ有ニ數百人ニ毎レ將レ決レ戰飮レ酒酣醉一人推レ鋒万夫挫レ銳云々と有を補べし

(十三)龍宮の太皷　太平記に近江湖水凅て太皷のあらはれし事見ゆ 西域記十二の卷(廿一丁右)に龍宮より太皷を出せし事あり

(十四)城の始　『西域記十の卷(四丁左)瞻波國の條に都城疊レ峩其高數丈基趾崇峻却敵高險在昔劫初人物伊始野居穴處未レ知ニ宮室ニ後有ニ天女ニ降ニ迹人中ニ遊ニ殑伽河ニ濯レ流自媚感レ靈有レ娠生ニ四子ニ焉分ニ瞻部洲ニ各擅ニ區宇ニ建ニ都築レ邑封レ壃畫レ界是則一子之國都瞻部洲諸城之始也云々路史後記一の卷大昊上に因水居方而置ニ城邑ニ云々自注に見ニ三墳書ニ或以世本諸書皆言ニ鯀置ニ城郭ニ非也國土既分城池斯立故史記言黃帝爲ニ五城ニ軒轅本紀言黃帝築ニ城邑ニ而汜勝書記ニ神農之敎ニ雖レ有ニ名城湯池帶甲百萬ニ然而無レ粟則不レ能レ守也是炎黃已城池矣石城之制既自ニ神農ニ則土城之作有レ不レ自ニ伏羲ニ乎云々 淮南子原道訓に昔者夏鯀作ニ三仞之城ニ云々 初學記廿四の卷城郭部に按ニ淮南子ニ鯀作レ城吳越春秋曰鯀築レ城以衛レ君造レ郭以守レ民此城郭之始也云々藝文類聚六十三の卷城部に博物志曰禹作レ城彊者攻弱者守敵者戰城郭自レ禹始也云々古今制作原始(九丁右)顓頊高陽氏條に造ニ伏龍城ニ(築レ城以衛レ民)此築レ城之始云々出雲風土記 大原郡部に菟原野郡家正東即屬ニ郡家ニ城(キナヒ)名樋山郡家正北一里一百步所レ造ニ天下ニ大神大穴持命爲レ伐ニ八十神ニ造レ城故云ニ城名樋山ニ也云々抄に斐伊鄕古城山也東北咸山以南小川以西大河也俗呼ニ飯埼ニ云々神武紀己未年條に皇師立詰之處是謂ニ猛田ニ(作レ城處號曰ニ城田(キタ)ニ云々按に城の始天竺にては瞻波國天女の子也漢土にては大昊伏羲也本朝にては大穴持命の出雲の城名樋山也古はみな山に據て地勢をはかり城をかまへしを近江安土城はじめて南蠻流の石垣を築き壕をめぐらして作り初たりとなん石垣は古代もありて筑紫などや博多の築石(フセイシ)におこれる名也こをいしだゝみともいへり石をたゝみあぐればなるべしされど今の大坂江戸などやうにしたゝかなる構は安土に濫觴せる製作也』

(十五)記主禪師良忠傳　然阿上人傳に然阿上人諱良

忠石州三隅庄人也俗姓藤氏酒是天津兒屋根尊之懸孫人王六十八代後一條院攝錄御堂關白道長公八代末葉也父宰相賴定卿息圓尊母伴氏也云々正治元年己未七月二十七日酉始不レ覺誕生矣云々十二歲二月之比登二雲州鰐淵寺一附二月珠房信遲師一初授レ書云々至二十六歲一出家同十一月登壇云々到二筑後國善導寺一時年三十八嘉禎二年丙申九月七日也然聖光上人住二同國上妻庄天福寺（去二善導寺一及二五里一也）翌日參レ彼初謁二上人一（同月八日）上人示曰昔無レ學二淨土法門一法然上人以來有二此宗學問一云云即暢二求法志一漸開二談義筵一云々仁治元年庚子仲春入二于鎌倉一而初住二吉谷悟眞寺一弘二通淨土宗一時平副帥經時信レ之館內奉レ請聞法受戒持二十念一傳二血脈一歸二宗門一三月中集二材木一於佐介谷一建二立一淨刹一號二蓮華寺一安二置金色阿彌陀三尊像幷善導大師眞影及大辨財天像等一以二然阿一爲二開山祖一寄二附武州安達郡內箕田鄉一以爲二寺領一充二行三寶衆僧一供養于レ時武州二十四郡爲二經時私領一故如レ斯平副帥每日詣念佛聞法施僧非二軍陣一不二懈怠一一日經時念佛中睡眠而夢於二彼寺一放二光明一遍照二日本六十餘州一覺後彌倍レ信敬重修行準二震旦西都本寺一任二日本西山栗生淨刹之例一改二此寺額一號二光明寺一殘二前名蓮華二字一以掛二額方丈一名二蓮華院一寬元々年癸卯五月三日吉日故良忠爲二導師一伸二供養一同四年丙午春經時辭二世務一副帥任讓二于舍弟時賴一佐介谷隱居專修二念佛三昧一四月朔日往生于レ時晴天而紫雲覆二館上一妙華散二庭前一殊勝奇瑞多レ之證號二蓮華寺殿安樂一故牌題二光明寺本願（前武州大守平朝臣經時蓮華寺殿安樂大禪定門）尊儀一寶治二年戊申淨意法尼於レ都入滅契約轉變人命不定世皆若レ之何始驚矣仍良忠上洛演二說淨土三部經幷布薩天眞空性本有實相一乘佛戒一受レ之持レ之歸二宗門一願二往生一者不レ可二勝計一後嵯峨帝於二仙洞一請レ師叡二聞淨土三部大乘經一受二一乘佛戒一賜二香衣一號二上人一昔後白河帝於二仙洞一請二法然上人一叡二聞往生要集一受二圓頓菩薩戒一賜二香衣一號二上人一準レ之當時如レ斯建長元年己酉六月歸二于鎌倉一住二居于光明寺一尊觀性眞良空道光禮阿寂慧等門人各伸二說法一弘二通淨土宗一擅越增レ數門僧是多平副帥時賴加二奧州由良鄉一寄附而爲二光明寺領一外門掛レ額名二佐介淨刹一于レ時有二擅那一於二武州藤田一建二淨國寺一於二野州大澤一造二善導寺一請レ師爲二開山祖一云々時春秋八十九夏蒲七十四弘安第十天夷則初六日亥刻如レ入二禪定一端坐而逝焉云々」遺弟等哽絕葬二送住吉瓶子（コツボ）山麓茶毗所一云々」仍向レ西建レ塔云々」弘安第十天南呂下旬候謹疏伏見帝永仁元年癸巳七月賜レ謚號一記二主禪師一云々」按に此僧弘安十月に記せるに後に永仁元年謚號を賜はれるを書加へし也卷端に然阿上人傳厥欣沙門道光述と有

（十六）谷（ヤツ）　義堂日用工夫集應安二ノ十一廿九の條に猶ヲ今鎌倉呼二山谷之間一村一爲二某谷（ヤツ）一云々按に谷ともかひやともいふよし相馬日記標注に見ゆ武藏にては「ヤト」といへり

（十七）地獄と云地名　義堂日用工夫集應安八二廿六の條に與二諸子一出遊二或村或僧舍一舍有二道人指一一地一曰昔平左衞門作レ虐不レ可二勝計一據二此地一造レ館臨レ誅屋陷入二地中一人皆云活陷二地獄一故至レ今俗呼爲二平左衞門地獄一有二松一株一蓋表一其墓一也云々按に先レ是十一日の條に伊豆熱海に湯醫せし事見ゆ今も平左衞門地獄とて溫泉の湧出處あり義堂空華集五の卷（廿一丁ウ）に地獄泉「誰將二地獄一扁二山泉一引二得癡人一照レ膽寒須レ信全波全是水往來莫レ作二鑊湯看一」龍湫錄下卷有馬湯山十詠の中地獄泉詩有（廿二ノ十二條ニ出）日蓮錄內卅九（廿二丁ウ）

（十八）闍にて物を定る事幷福引闍　日工集（三の卷七十八丁ウ）永德二八卅の條闍拈して住持を定し事見ゆ又（三の卷百廿二丁ウ）永德四十二八の條に赴二鹿苑倭漢之會一府君出二諸奇物一例拈二闍八一件物內余拈得レ七則所レ謂落闍者也二條准后羨レ之云々又（四の卷十丁ウ）至德二七十五の條に承二府君命一早赴二鹿苑倭漢聯句之會一云々會罷君出二雜物一拈レ闍余得二山水屛風六曲者一雙一蓋座中第一尤物也云々

（諸書圖佛祖統記卅四廿丁ウに圖拈法ノ「見ユ」稱名念佛奇特現證集上六丁ウ同十二丁ウ　運步色葉集保部に「福引ホウビキ正月案賃錢不レ見而引レ之云々）

（十九）帶引の興　義堂日用工夫集（四の卷十五丁左）至德三年二月三日條に奉レ迎二府君一官伴二一條攝政殿一日野兄弟坊城秀長御子左御劍管領玉堂僧伴性海太清空谷無求相山等倭漢聯句一百句罷余姑去レ座不レ知二何人所一白府君聞二余帶經一年段々結績一欲二互相交易一所レ謂帶引者也余辭焉君欲二必相換一蓋欲レ府君與二余帶一引換一也座中皆和會然余獨不レ知剪レ紙繫二各帶端一兩々曳出先性海與二日野一相當餘皆兩人相引末上探レ紙果君與レ余相合君先出二御帶一畢欲レ出二余帶一余固辭者再三大清在二余左偏一以レ手曳二出余帶一及レ是君賜二御帶於余一而後乞二余帶一余亦辭焉清後奪二余帶一直傳二君手一君擊二余

帶ニ普示ニ座人ニ大笑一場遂辱服ニ余帶ニ云々四日の條に參レ府謝ニ昨日臨賁ニ仍叙ニ帶引之與ニ君曰服ニ吾帶ニ來否余乃出ニ帶端ニ而示レ之君笑而已遂與レ君和會云々按に紙を剪て名を記し各々の帶端に繫付て方を分て引當る也後に帶引とて二人して帶を引き力を爭わざには殊也 頭書筆記七十七ノ六 百十二ノ卅 五葉櫁引袴引屑衣引小袖引

(廿)湯屋湯錢錢湯　今の錢湯は洗湯の字歟又錢湯歟池田の宿の湯屋なども浴室におこれる名にや成尋の參天台記一の卷十一丁オに申時向ニ浴堂ニ沐浴八人料錢八十文と見ゆ

(廿一)白榆「ニレ」　海道記に白榆のかけにあらはれて綠林の人をしきる所と有白榆は柳の類なるべし榆は和名ニレといへり參天台記三の卷四十丁オに河左右殖ニ生榆樹ニと有にておもふべし 頭書饗膳令義解廿二丁オに凡雜樹ニ充ニ堤堰ニ用ニ 堤内外井堤上多植ニ榆柳

(廿二)燒石井溫石　今の溫石ふるくは燒石といへり水鏡に見ゆ又參天台記五の卷廿一丁オにも燒石一顆と有守武千句廿三丁オ字鏡集

(廿三)かつぎ井覆面　かつぎの事已にいへり參天台記六十四丁オに女官騎レ馬上蘰戴ニ覆面衣ニ下蘰顯レ面とある覆面衣はかつぎ也覆面は東寶記に見ゆ 頭書筆記七十ノ八

(廿四)ささをとこ鵜烏龜　密夫をマヲトコといふ事字治拾遺に見ゆ五雜俎八の卷三十丁ウ人部四に方言云燕朝鮮之間謂ニ之鵜一關東謂ニ之鼠一詩一發五鵜是也故以ヲ男子之淫ニ於他室一者ニ名レ之秦始皇會稽碑作ニ寄鵜一今人以ニ妻之外淫者一目ニ其夫一爲ニ烏龜一蓋龜不レ能レ交而縱ニ牝者一與レ蛇交也一云汚聞之訛耳又謂ニ之忘八一以ニ其孝弟忠信禮義廉耻八者俱忘一也隷ニ於官一者爲ニ樂戸一又爲ニ水戸一云々鵜は人の妻に淫する者にてマヲトコ也烏龜は妻を許して人と淫さしむる夫也今江戸に妻を地獄に賣ものこれ也伊豆の下田越後の新潟わたりにはいとおほしといへり忘八も烏龜の一名也 頭書十訓抄五ノ八丁ウ可レ擇ニ朋友一事條に二ツには間夫したる妻云々 節用集末部人倫門に傍夫マチトコ密夫同云々

(廿五)水仙花　狂雲集下廿四丁ウに美人陰有ニ水仙花香一云々

(廿六)虎千里の藪を越すといふ俗語は誤　俗謠に虎は千里の藪さへこすが障子一重がまゝならぬ云々こは寛政八年の流行なり此虎は千里の藪を行こと古くよりいふ俗語なれど誤也　五雜俎九の卷十一丁オ物部一に熊行ニ數千里外一每レ宿必有レ窩山中人謂ニ之熊館一虎則百里之外輒迷不レ返とあるにて知べしさては熊は千里の山さへ越すがと引直さまほし 頭書虎竹林にすむ事は金光明最勝王經捨身品にも見ゆ

(廿七)さゆりばの花蓮ばの花　『夫木集夏二百合部に百首歌 般富門院大輔「夏かりのせこふみしたぎわくる野にしほれやすらんさゆりはの花」藻鹽草八の卷草部百合の條にさゆりばの花云々此詞いたく理かなはず夫木抄三夏蓮部に荷の花を俊頼朝臣「玉水をはすのわかはに卷こめてこほすや花の光成らん」同雜五池部に堀川院御時百首顯仲朝臣「はちすばは妙なる法の花なればまことの池の心にぞさく」堀川百首には「いけ」を「いろ」に作れりこれらには蓮葉の花とよめり』

(廿八)松の名木　陸奥桑折宿に判官の腰掛松あり身木の高さ一丈許にて枝十五本四方に出そのわたり四十五間あり諸人其間をわけ入て枝にこしかけ茶菓烟草を服用し松のさまを賞觀す枝間こゝかしこに茶屋ありて客を引こと實に奇絶の名木也一の城戸下紐の關などもこゝに並たりさるに天保二三年の比にや火に燒失たりといへるは口をしきわざ也かし○同國南部盛岡より八九里北に雪浦村ありそこにしだり松としてめぐり一丈五六尺高さ數十丈の松あり枝ことゝくしだれて行人の笠を拂ふ實に世の珍木也○志摩國鳥羽より一里ばかり東に波分松とて大樹あり其形無雙の奇觀也

(廿九)橋の奇巧　周防國の錦帶橋は天下無雙の奇巧也○遠江國大井川の川上に井川村あり鄕士井川左衛門尾藩に隷仕せりそこの橋は二本の木の本方に大石を置て先を河上に差出しその先に階子を下て往來すといへり(圖略)遠江國秋葉山の奥に藤橋あり藤を二筋わたしてその中に横木を結並たる橋也そを西の土の橋といへり尾張國知多郡に飛はね橋あり杭を打ならべてその上をわたる橋也(圖略)南部盛岡に舟橋あり舟廿四艘つなぎてつくりたる橋也舟橋天下第一とす○日向椎葉山に綱橋あり綱二條を引わたしそれに横木を結並たる也 頭書詹曝雜記四十四丁オ雲南鉄索橋ノ條に鉄索橋多ニ奔流急湍一不可ニ架レ石爲ニ柱則以ニ鉄索大如レ臂者一貫ニ於兩岸之崖石一或十餘條或二十條用レ木絞使レ直而建ニ屋其上一鋪レ板作ニ地平一翼以ニ欄楯一橋長者或數十丈望レ之如ニ飛樓虛閣一往來者不レ知レ行ニ於空中一也

(卅)古代より存せる居宅　伊豆國韮山の御代官江

川太郎左衛門が家は六百年餘の古宅にて今に古代の柱存し日蓮の棟札などを秘傳せり○同國赤澤村權兵衛が家は江川氏の家よりやゝ古し○同國入間村文平が家又古し○出羽國最上郡中野村に佐藤利兵衛とて佐藤次信忠信が家今に存せり○東海道舞坂宿より北方入江をわたりて宇部美村ありそこの名主が家は神祖度々武を殘し玉へる家にて越前の始封の君は此家にて誕生し給へりとなん今も紀伊の殿の通行し給へるをりは舞坂の宿にて酢を一升献じ麻上下を拜領すといへりそこに「よいた舟」とて入江を渡す舟あり酒井忠次の「ヨイタ舟」にて勤功ありしよし名主に報答の書狀有といへり

(卅一)富士の眺望　下野喜連川に初富士坂あり陸奥よりのぼるものはじめて富士を見る所也○志摩國神崎に見仕舞の富士といふ所ありこゝより西方にては富士の見えねばいへりとなん○駿河の清永湊の西五六町許に富士見橋あり探幽こゝより富士を見てその形を書出たりといへり○與津川の川上に富士見坂あり富士第一の奇觀也○信濃諏方の池にうつれる富士の形は逆さま也逆富士といふ○上總國藏波村にて富士を見る一奇觀也○相模國小磯の西に左富士坂あり上京の人富士を左に見るそこは粟牡丹餅の名物の所也原と吉原の間にも富士を左に見る所ありとおぼゆこれは吉原蒲原の間なりけん後によくとひ定て記すべし

(卅二)あがたのゐど田中のゐど井戸　『後撰春下にあがたのゐどゝいふ家より藤原治方につかはしける橘公平女「都人來てもおらなんかはづなくあがたのゐどの山吹の花」大和物語上卷卅五丁左に大膳のかみきんひらのむすめどもあがたのゐどといふ所に住けりおほいこはきさいの宮に少將の御といひてさぶらひけり三にあたりにけるは備前守信明またわか男なりける時になんはじめのをとここにしたりける云々枕草子春曙抄本一の卷十九丁右に家は云々あがたのゐど云々拾芥抄中末卷諸名所部に井戸殿又縣井戸一條北東洞院西角云々あがたのゐどをよめる歌續後撰春中などこれかれおほかれど後なるは引出ず新續古今神祇中原師光歌に「わが頼むあがたの宮のます鏡くもらぬかげをあふぎてぞまつ」とあるも同所にて山城愛宕郡一條北東洞院西也山城名勝志山州名跡志など考て知べしあがたは高田(アゲタ)に出たる地名にて高田(タカダ)は畠をいふさて縣と云所に井ありてその堤を井戸といふべし井とは池也筒井のみと思ふべからず其縣の池堤(イケヅツミ)にある家なれば井戸殿(ヰドドノ)とも縣井戸ともいへる也催馬樂呂歌淺緑に安左美止利己以波奈太曾女加介太利止也美留万天爾太万比加留之太比加留新京朱左加乃之太利也奈支万太波太爲止奈留前栽安支波支奈天之古加良保比之太利也奈支とある爲(ヰ)止も井堤(ヰヅツミ)なるべしまた田中の井戸といふも田中に池ありてその池の堤を田中の井戸といへり催馬樂呂歌田中井戸に太名加乃井止爾比加禮留太那支門女門女安己女己安己女太利良利太奈加乃己安己女續古今春下侍賢門院堀川歌に「吹にけり苗代水にかけ見えて田中のゐとの山吹の花」同秋下入道前太政大臣歌に「白露のおくてのをしね打なひき田中のゐとに秋風そ吹」續千載秋上圓光院入道殿歌に「夜寒なる田中のゐとの秋風に稻葉を分てしかそ鳴なる」此外おほき所見枚擧に遑なし都て井戸は井手(ヰデ)の通音にて池の堤をいふ事と知べし』

(卅三)杯を乾す井呑乾すと云詞　『俗に杯を乾す又は酒茶湯水の類を呑ほすといへるもふるき例ある語也晉書列傳十四盧志傳に時有二道士姓黃一號曰二聖人一太妃信レ之及レ使二呼入一道士求二兩杯酒一飲乾拋レ杯血去云云新儀式四卷奉レ賀二天皇御算一事條に欲レ献二御酒一之時親王進跪唱平即乾レ杯云々など倭漢の書に見ゆ』

(卅四)水土の性に依て物に善惡ある事　『京都の女は色白く肌よし賀茂川の水の美によれるなるべし大坂は女色黑く品いやし海邊濁水によれりと見ゆ江戸は京大坂の中を得たり玉川の水によるにや糸布などその水土に据ていたく好惡あり五雜俎三の卷廿九丁ウに易州湖州之鏡阿井之膠成都之錦青州之白丸子皆以レ水勝耳至二婦人女子一尤剛二於水一蓋天地之陰氣所二凝結一也燕趙江漢之女若耶洛浦之姝古稱二絕色一必配レ之以レ水豈其性固亦有二相宜一不レ聞二山中之產佳麗一也吾閩建安一派溪源自二武夷九曲一來一瀉千里清可二以鑒一而建陽士女莫レ不二白皙輕盈一即輿儓下賤無レ有二蠢濁肥黑者一豈非二山水之故一耶といへり東山の松茸壬生の榮近江蕪榮源五郎鮒古くは堅田鯽とかへり尾張大根信濃蕎麥越後の鴫五島鯨對馬の薯蕷備前のあみ佐久の島のこのわた阿波の煮取赤穗鹽薩摩烟草宇治茶東男京女郎播磨鍋松江のスゞキ』

（卅五）油斷大敵井坂に車を押如し○永井直勝敏訓狂歌に「奉公は車を坂におすごとく油斷をすればあとへしりそく」此歌今の人口に膾炙せるは「手習は坂に車を押ごとく油斷をすれば跡へもとるぞ」といへり油斷の字は涅槃經廿二に譬如世間有二諸大衆一滿二二十五里一王敕二一臣一持二一油鉢一經由過莫レ令二傾覆一若棄二一滴一當レ斷二汝命一云々とあるに出たるにや俗に油斷大敵といへり五雜俎四の卷三丁に禍毎生二於所一レ忽也と見えたるはその義よく叶へり 頭書甲陽軍鑑一卷卅五丁右品第二六十三則に無爲爲レ城油斷爲レ敵云々同九上ノ廿五丁ォ同十五ノ廿六丁ウ北條五代記八ノ廿三丁ォ常山紀談五上卷永井信濃守尚政に執政の職を被二仰出一候時の事ないへる條に直孝出逢ひて世の諺に油斷大敵と申事定めてしられたるべし万事の危きに及事皆是油斷より破るゝ事に候此言固く被レ忘なといはれけり云々後太平記十七ノ一丁ォ石清水託宣歌に弓斷ヨリ外ニハ敵ノナキモノヲ何イノルラン心ツクシニ」同卅六ノ十五丁ォ

（卅六）眞武湯　傷寒論に眞武湯あり五雜俎十五の卷十七丁左に眞武即玄武也與二朱雀白虎一爲二四方之神一云々按に大青龍湯小青龍湯あり白虎湯あり朱雀湯ある事を聞ず史記扁鵲倉公傳に火濟湯あり火は南方朱雀に緣あり可レ考

（卅七）瓜中の小蛇橘皮柑中の蛇　古今著聞集七の卷十丁ウ術道部に御堂關白殿御物忌に解脫寺僧正觀修陰陽師晴明醫師忠明武士義家朝臣參籠して侍けるに五月一日南都より早瓜を奉たりけるに御物忌の中に取入られんといかゞあるべきとて晴明にうらなはせられければ晴明占ひて一ッの瓜に毒氣候よしを申て一をとり出したり加持せられば毒氣顯はれ侍べしと申ければ僧正に仰て加持せらるゝにしばし念誦の間にその瓜はたらきうごきけり其時忠明に毒氣治すべきよし仰られければ瓜を取まはし〳〵見て二所に針を立てけり其後瓜はたらかず成にけり義家に仰せて瓜をわらせられければ腰刀を拔てわりたれば中に小蛇わだがまりて有けり針は蛇の左右の眼に立たりけり義家なにとなく中をわると見えつれども蛇の頭を切たりけり名を得たる人々のふるまひかくのごとしゆゆしかりける事也此事いづれの日記に見えたりといふ事をしらねども普く申傳へて侍り云々五雜俎十の卷廿六丁ウに大平廣記載李崇眞在レ蜀庭中有二一橘一大而晩熟有二小孔一如レ針賓僚驚異欲二表進一之久而乃罷及レ剖則有二赤斑蛇一蟠二其中一又韋皐鎭二成都一有レ柑大如レ斗欲二以進一醫者咨殷在レ座固持不レ可請以レ針刺二其蒂一

流血露レ席駭而剖レ之乃兩頭蛇也可レ不レ戒哉云々 頭書同契篡異一の卷六南瓜の條可二考合一

（卅八）女兒に敎るに客して嫁するに財を厭はず　五雜俎十三の卷十丁ウに人能捐二百万錢一嫁レ女而不レ肯捐二十万錢一敎レ子寧盡二一生之力一求レ利不レ肯輟二半生之功一讀レ書寧竭二貨財一以媚二權貴一不レ肯捨二些微一以濟貧乏と此天下之通惑也と見ゆ此語實に妙解也

（卅九）同居義居　『五雜俎十四の卷廿七丁ウに古今同居者又有二漢樊重晉郎方貴一俱三世博陵李幾七世河中姚氏十三世宋會稽喪承詢十九世而魏揚播百口共爨陸象山累世義居又不レ知二凡幾代一錄レ之媿レ惡婦劣子之欲レ折レ產者と云々』

（四十）片茶散茶茶煎法茶加二姜鹽一鬪茶茗戰瓜戰タヽ柿　五雜俎十一の卷三丁ウ四丁ォに右の名目見ゆ鬪茶茗戰は今の品茶也瓜戰は今のタヽ柿とて柿を相して種子の數を射然て割て當不當の勝負を決むる也 頭書茶用二鹽薑一事文類聚續集十二ノ廿九丁ウ

（四十一）鐵を燈とす虫を殺す瓜の兩蒂は人を殺す菓の雙仁のもの人を殺す樹上に人の髮あれば烏その菓を食ず栗の燒ざる法鍮鐵を呑たる治方稻芒を呑たる治方木屑を呑たる治方藥毒の解法砒霜石の毒解藥鉛錫の解藥蛇毒の解藥麵麥の解藥狗毒の解藥菌毒の解藥　烟薰死の活方　蟲入レ耳之治方　右の方五雜俎十一の卷四十一丁ォに見ゆ

（四十二）屋上盜　井飛賊　三バウ　今より十年ばかりのむかしにやありけん日本橋に家根盜とて人家の屋上を飛行て盜をなすものありき五雜俎五の卷廿一丁ォに萬曆間金陵有二飛賊一出二入王侯家一如レ履二平地一と見ゆ又をとゝし天保四年□といへる賊小畑侯の第にて捕へらる諸侯の第に入て盜せる事數十軒也これら飛賊といふべし因に云日本ばしの屋根盜の捕られし年世に三バウといへる諺ありそは小田原の觀正聖人大に流行して今弘法と稱す又關岡安浦が男安躬隅田川にて杯流しの與を催さんとせし事ありこれを大ベラバウとよぶ屋上ドロバウヲ加へて三バウ也一笑

（四十三）藤井紋太夫が記臆　井闇誦の人　『水戸の逆臣藤井紋太夫は博聞強記にて西山公の御意にも叶たりしが廢立の逆謀あらはれて遂に西山公能舞臺にて搏殺にしたまへりとなん或時紋太夫水戸街道の某宿に息しに家あるじ愁ていふやう此頃火災にかゝりて

家の調度悉く燒亡しそのうへに帳をさへ燒たれば假貸の員數ふつにしるべくもあらず人のいふに隨へば大に損失ありといへり紋太夫これを聞てしか〳〵のさましたる帳にやとふにさ也とこたふさては去年こゝに休て傳馬人足の來るをまつほど余一わたりくりかへし見し事ありおほかたは記臆したれば筆をとりて記せとて家主にせんじがきせさせつるにもとの如くの帳出來ぬとてあるじよろこぶ事かぎりなしといへり 五雜俎六の卷十三丁右に閩林誌避レ雨寓二染坊一得二其染帳一漫閱レ之匆々而去越二二日一其家回祿索レ帳者紛然莫レ知レ爲レ計林復過レ之曰我能記レ之取レ筆疾錄不レ爽二一字一此天生之資非二强記可一レ到者一嘉禾周鼎讀二百韻詩一一遍即誦又能從レ末倒誦亦絶世之資矣而功名不レ顯蓋似レ有二別才一也と見えたるは倭漢同日の談也我門人常陸下林村觀音寺の康哉は万葉集を闇誦せり古今著聞集四の卷九丁右に隆耀文選卅卷四聲切韻を闇誦せるよし見ゆこれらいづれも世にきこゆることなく紋太夫は臭名をさへ流したれば闇記も無益のものにこそされど高僧傳五の卷左一丁に釋道安姓衞氏常山扶柳人也〔云々年七歲讀レ書再覽能誦鄕鄰嗟異至二年十二出家神性聰敏而形貌甚陋云々數歲之後方啓レ師求レ經師與二辯意經一卷一可二五千言一安賚レ經入レ田因息就覽暮歸以レ經還レ師更求二餘者一師曰昨經未レ讀今復求耶答曰即已闇誦師雖レ異レ之而未レ信也復與二成具光明經一卷一減二一萬言一賚レ之如レ初暮復還レ師師執レ經覆レ之不レ差二一字一師大驚嗟而敬二異之一と見えたるは絶世の强記といふべし』

（四十四）世界第一の洪鐘　魯西亞志分界部謨斯可烏（モスクワ）魯西亞の中土にあり其首縣を即謨斯可烏といふムスクワ河邊にあり北極五十五度三十六分の地なり千二百年正治二年の頃より魯西亞王の居城にて歐羅巴第一の大城なり云々六の寺あり云々第四はセメラメイゴロドといふ云々大鐘あり第一の寺に高き塔を造りて掛たり千七百一年元祿十四年に燒失塔も倒れ鐘も落たり今は塔二ッの間にありといふ古より此鐘は鳴す事なし昔撞たるに國中の硝子磁器の類殘らず碎けたりといふ世界第一の洪鐘なる事諸書に見えたり云々本朝の洪鐘は三井寺高砂鎌倉圓覺寺などきこゆ江戸にては芝は第一とし上野淺草これにつぐ

（四十五）戒定慧　高僧傳十一の卷廿八丁ウ論に夫慧資二於

定一定資二於戒一故戒定慧品義次第故當レ知入レ道即以二戒律一爲レ本居レ俗則以二禮義一爲レ先禮記云道德仁義非レ禮不レ成敎訓正俗非レ禮不レ備經云戒爲二平地一衆善由生三世佛道籍レ戒方住故神解五法制使先知斬草三根不レ可レ不レ識然後定慧法門以レ次修學云々遺敎經十二丁ウ註に因レ戒生レ定因レ定生レ慧一代時敎唯此三法無レ不二該盡一云々頭書東寶記に見ゆ

（四十六）禪定山の頂を禪定といふ　續高僧傳二の卷廿五丁ウ釋彥琮傳に安禪本合掌之名例爲二禪定一云々高僧傳二の卷廿四丁ウ曇無懺傳に戮レ力三年且禪且定即於二定中一見レ釋迦文佛與二諸大士一授二己戒法一云々 ○義經記七卷十六丁ウあらち山の事の條に此山のせんちやうにて俄に御はらのけつき給ひけるを云々これは絶頂を誤てせんちやうといふ鄙俗に富士禪定立山禪定などもいへり

（四十七）釋氏の稱　高僧傳五の卷五丁ウ釋道安傳に初魏晉沙門依レ師爲レ姓故姓各不レ同安以爲大師之本莫レ尊二釋迦一乃以レ釋命レ氏後獲二增一阿含一果稱四河入レ海無二復河名一四姓爲二沙門一皆稱二釋種一既懸與レ經符遂爲二永式一云々

（四十八）涅槃　高僧傳六の卷廿六丁ウ釋僧肇傳に乃著二涅槃無名論一其辭曰經稱二有餘無餘涅槃一涅槃者秦言二無爲一亦名二滅度一無爲者取二乎虛無寂漠妙二絶於有爲一滅度者言二乎大患永滅超二度四流一云々尙くはし

（四十九）石城　墓　墓處を「イハキ」といふは石もて一搆にしたる城のよし也常陸風土記に「コチタケハヲハッセ山ノイハキニモ率テコモランヨナモヒソワギモ」此歌万葉にも大同小異にて載たり宋高僧傳廿二の卷十六丁ウ法圓傳に甃レ石爲レ城而葬レ之とも有

（五十）第一　續高僧傳三の卷十五丁ウ釋慧淨傳に第者爲レ居一者爲レ始序最居レ先故稱二第一一見曰第者弟也爲レ弟則不レ得レ稱レ一言レ一則不レ得レ稱レ第兩字矛盾何以會通淨曰向不レ云乎第者爲レ居一者爲レ始云々神代卷にアキノツイデヒトツ又マキノツイデヒトマキニアタルマキなど訓たり

（五十一）念佛十念　阿彌陀稱名念佛の事宋高僧傳廿一の卷六丁ウ法照傳に見ゆ 法華經にも出たり 選擇集を考合すべし頭書稱名念佛奇特現證集

（五十二）柏餅　世人五月五日柏餅を作りて節物とす宋高僧傳廿二の卷十五丁ウ法圓傳に柏葉餅一枚とあり栢は柏の誤にや可レ考

(五十三)法樂　續高僧三十六丁ウ慧淨傳に令曰不ㇾ可徒法樂以至ㇾ於斯ㇾ云々

(五十四)畫詞傳　圓光大師畫詞などいふ類の畫詞傳は圖傳と云べし續高僧傳四の卷五丁ス玄奘傳に人物優劣奉信淳疎具ㇾ諸圖傳ㇾとあり

(五十五)天竺の廣狹及國王　續高僧傳四の卷六丁ウ玄奘に言ㇾ印度ㇾ者即天竺之正名猶ㇾ身毒賢豆之訛號ㇾ耳論ㇾ其境ㇾ也北背ㇾ雪山ㇾ三垂大海地形南狹如ㇾ月上弦ㇾ川平廣衍周九万里七十餘國依ㇾ止其中ㇾ時或乖分略ㇾ地爲ㇾ國今則盡ㇾ三海際ㇾ同ㇾ一王命ㇾ云々又十一丁ス王號ㇾ戒日ㇾ正法治世將ㇾ五十載ㇾ言ㇾ戒日者證法之名此方薨後量ㇾ德以贈彼土初登即先薦ㇾ號以ㇾ滅後ㇾ美ㇾ之徒虛名耳今猶御ㇾ世統ㇾ五印度ㇾ初治ㇾ邊陲ㇾ爲ㇾ小國ㇾ也

(五十六)雪山葱嶺阿耨達池　大雪山と葱嶺とは別也續高僧傳三の卷三丁オウ四丁ス玄奘傳に見ゆ達池の事も見えたり同三丁ウ後漢書西域傳注考合すべし葱嶺は瞻部第一の高地也同四丁ウといへり

(五十七)四王王ㇾ四洲ㇾ之福　續高僧傳五の卷六丁ウ玄奘傳餘に瞻部一洲四王所ㇾ治東謂ㇾ脂那ㇾ主ㇾ人王也西謂ㇾ波斯ㇾ主ㇾ寶王也南謂ㇾ印土ㇾ主ㇾ象王也北謂ㇾ猋狘ㇾ主ㇾ馬王也皆謂四國藉ㇾ斯以治即因爲ㇾ言云々

(五十八)砂糖の始　續高僧傳五の卷七丁玄奘傳餘に唐太宗の時王玄策西域に使し石密匠を召て就ㇾ甘蔗ㇾ造ㇾ之よし見ゆこれ唐土砂糖の始也類聚雜要抄下十丁ス云に砂糖ト云ハ能甘蔗之徑堅ル下ニ砂之樣物之タマリタルヲ云ト云々

(五十九)身は應ㇾ捨罪惡の物　遺敎經卅一丁ウに此是應ㇾ捨罪惡之物假名爲ㇾ身沒ㇾ在老病生死大海ㇾ云々續高僧傳五の卷十八丁ス玄奘餘に至ㇾ正月九日ㇾ告ㇾ寺僧ㇾ曰奘必當ㇾ死經云此身可ㇾ惡猶如ㇾ死狗ㇾ奘既死已近ㇾ宮寺山靜處藏ㇾ之云々大智度論廿一の卷十丁ウ釋初品中八には臭屎囊といへり

(六十)靈鷲山と雞足山とは別處　續高僧傳四の卷七十丁オ十八丁オ玄奘傳に屈吒播陀山即經所ㇾ謂雞足山也直上三峰狀如ㇾ雞足ㇾ因取ㇾ號焉また姞栗陀羅矩吒山即經所ㇾ謂耆闍崛山者是也唐言ㇾ鷲峰之臺ㇾ云々とあり佛祖統紀に同山のよしいへるは誤也慈恩傳をも考べし○佛祖統紀卅五九丁ス法運通塞志一に雞足靈鷲山三峰如ㇾ仰ㇾ雞足ㇾ云々

平　與清　稿

(一)籠を加古と云事　『籠を「かご」といへる事古書には所見なし世諺問答九月の條に問この頃賀茂籠とて蟲いるゝ籠の侍るは何のゆゑに賀茂より出侍るに歟○是は殿上の道遙とて昔殿上人鳥部野嵯峨野などへ向ひ虫を籠に入て遊びて君に奉りしは堀川院の御時よりぞはじまりける虫撰とも申す也又昔は賀茂の社司などに仰られて鈴蟲松蟲などをめされけるよし故禪閤の仰られしとかや蟲こは賀茂より出侍ると思ひ合せられ侍る云々此書に賀茂籠といふ詞ありて賀茂より蟲籠をつくり出しよりさよべるを略てはカゴとも呼けんさて蟲籠ならぬ籠にも呼うつせるにや蟲撰の事は禁祕抄公事根元などにも見えて堀川院の嘉保二年八月十二日に始れる事諺書に出たりされど賀茂籠といへる名目は天文の比の世諺問答を出處とす』

(二)餅をかちんと云事　『餅を「カチン」といふは齒固などもいひて固きよしの名也勝栗なども固栗の義也齒をたゝく類にて固物を喰ば齒のしまるよしにて餅を齒固といひ齒の字は齡の字に通ずれば齡をかたむるよしの祝言にとりなせる也世諺問答十二月の條に問節分にしようのもちひとてくひ侍るは何のゆゑにや此事更に知がたし又五條天神に侍るよし申す彼天神いつよりあまくだりましますとも見えず定て緣起など侍るべし國史にも見えず儀式にものせぬ神なればさらに知がたし此もちひをくへば物にかつといふくのう侍るよし申傳たりしばかり也云々此勝の餅も堅き義を取て「かつのもちひ」といひさて音に「しよう」ともいひ移せる也梅村載筆にカチンの帽子をかぶりたる女房の持來れるゆゑに餅をカチンと云よし見え又倭訓栞に歌賃家鎭などの說を擧たるも取にたらざる說也』

(三)四壁しせき　關東の方に家の邊に立る竹木をシセキといへりこは四壁の訛也竹雪謠詞に雪ふらば四壁の竹の雪をはらはせよと仰候云々又某が四壁の內に當て人の泣聲のきこえ候あら心もとなや候や是は疑ふ所もなく某が四壁の竹の中にて候はいかに云々

と見ゆ家の四邊にあれば壁にたとへて四壁とはいへる也張書北本涅槃經四十卷七丁ウ憍陳如品三に大城其城四壁都無二孔竇一唯有二一門一云々史記司馬相如傳漢書同傳

（四）花火　『北條記四の卷佐竹對陣事の條に天正十三年四月下旬長沼ノ皆川山城守ガ城ヲ御調儀之爲小田原ヨリ御馬ヲ被レ出野州藤岡ニ御陣ヲ張リ給フ常陸ノ佐竹衆ハ大和田ニ陣ヲ取テ出勢ナリ然レドモ互ニ切所ヲカマヘ佐竹衆ハ大和田ニ陣ヲトリ對陣ス云云後ニハ長途ノ對陣ニツカレシカバ軍兵ドモ陣屋ノ前ニ馬場ヲ付テ馬ヲ乘リテ慰ミ夏ノ末秋ニモ成シカバ敵陣ニ花火ヲ燒立ケレバ味方ノ若侍共花火ヲクヽリテ是モ同ク燒立ケル云々按に北條記一名小田原記ともいふされど少しく異同あり北條記は眞片假名本五卷あり小田原記は草假名本六卷にて奥に太田三樂の事氏政自害の事北條五代の年代系圖などを附錄せり此佐竹對陣事は五の卷に載たりき○駿府事錄三の卷慶長十八年八月二日條に自二長崎一花火上手唐人參府三日花火唐人今日御禮則六日之夜花火可レ有二御覽一之由被二仰出一伊毛（イキリス）連須今日候二殿中一献二猩々皮十間弩一張象眼入鐵砲二挺長一間程之遠目鏡一六里見レ之云云また六日條に臨二昏黑一花火唐人於二二之丸一立二花火一大御所宰相殿御見物云々按に駿府事錄一名駿府政事錄ともいふ五卷あり○德公聖聞書に寛文五乙巳七月十六日二ノ丸御花火上覽云々同六丙午七月十八日於二二ノ丸一花火上覽云々同八戊申七月十八日二ノ丸ニテ花火上覽云々同九己酉七月十八日二ノ丸ニテ花火上覽云々廿五日二ノ丸ニテ花火上覽云々按に德公聖聞書一卷あり水戸の始封賴房卿より光圀卿までの事を記したる書也○倭漢三才圖會五十八の卷火類部に花火ハナビ按花火可レ以代二燧燧一者又夏月以爲二河邊遊興一用二焰硝硫黃麻楷灰（アサガラノハヒ）鐵粉一以上四味各隨二所レ好花形一分量有二多少一如加二樟腦一則火色帶レ青其花牡丹芍藥菊梅櫻柳芒等數品其製以爲二家秘一

花火線香用二稗心一和二焰硝一煮レ之晒乾是亦用二前四味藥末一和二飯糊一塗二稗心一但以二檳香一代二鐵粉一耳有二鼠花火一用二葦管（アシノツヽ）三寸許者一盛二藥末一作レ之傳二火於口藥一忽出二嘶々（ハリ〳〵ト云ヲトヲ）音一走小兒以爲レ戲按に今も線香花火鼠花火の二種兒童の戲觀の具とせり○名物六帖第三帖器財箋四燈燭炬烽の部に烟火ハナビ月令廣義宛署記燕城烟火諸製有レ聲者曰二響炮一高起曰二起火一起火中帶レ炮連レ聲者曰二三汲浪一不レ響不レ起旋二遠地上一者曰二地老鼠一築打有二虛實一分兩有二多寡一有二花艸人物等形一者花兒名百餘種別以二泥函一者曰二沙碉兒一以二紙函一者曰二花筒一以二筐函一曰二花盆一總レ之曰二烟火一動成家有レ集二百巧一爲二一架一分二四門一次第傳熬通霄ト起火ハナビ見二于上一紀効新書營陣篇擧二起火一枚一又放二起火一枚一好起火ヨキハナビ海防纂要好起火六枚花火ハナビ經國雄略梨花之製捲レ紙爲レ筒如レ元宵之戲玩花火之類ト地火鼠子ズミビ武經總要地火鼠一二十枚地老鼠子ズミビ見レ前老鼠藥子ズミビノクスリ市肆記地鼠藥子ズミビノクスリ經國雄略火磚用二地鼠藥一合成按に月令廣義の說は五の卷正月令部日次條に出て末に閩中有レ烟火名二秦皇辨一者ト以二火炮及各花地鼠水鼠等一筒聯成レ串凡數百相間之令二一人提而逐一放落迸散一其製甚奇とあり又御筵烟火齊東野語穆陵初年上元日燕二恭聖太后一既而燒二烟火一有二地老鼠一徑驚二太后一拂レ衣徑起罷レ宴意頗疑怒穆陵恐甚遂監二繫排辦巨璫黎明一謝レ罪太后原レ之云々宋史張貴傳に貴軍喜躍舉二流星火一示レ之及二勢近一欲レ合則來舟皆北兵也云々續通鑑目廿一の卷宋度宗咸淳八年紀に擧二流星火一示レ之軍船見レ火即前迎及二勢近一欲レ合則來舟皆元軍也云々などを見ゆ地火鼠地老鼠は今の鼠花火也流星火は今の流星星降（ホシクダリ）などいふによし有といふべし○類聚名物考調度部十九に花火ハナビ此事いにしへきかず文龜の比より鐵鉋我國に渡り焰硝の合方を傳へ後に世中もしづまりて此事は出來し成べし唐にも此事はいにしへかつてなかりし也後世のものに雪火といふよしを人のかたりしが何に有といふこと未レ考本草にいへる煙火家といへるものぞ此事成べき按に本草の所見は本草綱目八の卷金石部鐵落條釋名に時珍曰生鐵打鑄皆有レ花出如レ蘭如レ蛾故俗謂二之鐵蛾一今煙火家用レ之とあり煙火は花火なる事名物六帖引用の條に見えたるがごとし○節用集大全一の卷路集器財門に花火ハナビ有二地鼠花兒流星走線等之名一花砲ハナビ烟火ハナビ云々按に節用集大全七卷あり延寶八庚申歲霜月吉旦洛陽書林永田調兵衞刊行せり○鷹筑波集五の卷四十三丁右山本西武が發句にまつかいにさくは花火のつゝじかな云々按に鷹筑波集五卷刊本也寛永十五年五月廿五日長頭丸の奥書あり此句まつかいは眞赤（マッカイ）也花火の筒とかゝりてつゝじの花の事にいひなしたり與清曰花火は山岡俊明が文龜の比などよ

り出來けんといへるはさもあるにやものにその名目の著はれしは北條記の天正十三年の所見を古しとすべし江戸にては兩國橋邊の玉屋鍵屋が所製が名品なり

(五)すあひを取ル廷給(ワウキウ)仲人　俗言に賣買の取繼をして中間にて利を貪るをスアヒヲ取ルといへり七十一番職人歌合第四十一番にすあひと癈まはりと番ひてすあひは市女笠かうぶりむしたれたる女二人つれたる圖にて詞に御用やさぶらふと有歌に「月のきる雲のころもをうりものやさぶらふといふ人もかはめや」「思ふ事人に傳ふる道ならでおようやあるといふはよしなし」と有を按に人の賣物など取つぎ又は買物なども承りて買來てとらせなどし都て人の用を承りて活計するものと見ゆ今のスアヒヲ取ルといふも中立(ナカダチ)して利を得る事なれば同意なり酒屋の御用の名はた近しといふべし 頭書 廷訓往來卯月五日狀に廷給仲人等尤大切也云々抄(上五十丁右)に廷結とは皮屋の者也仲人はとり賣する者(ナカダチ)也是いやしき者也云々諸抄大成二卷十丁左に廷給未レ詳仲人は物の媒なして兩方より賺なとる者也云々扶翼上卷に廷給仲人貞丈曰廷本字ハ廷又廷ニ作ル短小也弱也ト注シテチヒサクヨワキ事也給ハ供也備也足也ト注シテ物ノ備リテ不足ナキチ云ナリ然レバ廷ハ貧者チ云給ハ富者チ云也仲人ハ兩家ノ中ニ往來スル者チ云貧廷ノ賣ル物チ受取テ富者ニ買シメ代錢チ受取テ貧者ニアタヘ其禮錢チ我モ受テ世ワタリトスル者チ廷給ノ仲人ト云ナルベシ牙婆(スアヒ)ノ事也婆ノミニカギラズ男ニモアルベシ廷給之仲人ト之字チ入テヨムベシ云々

(六)一兒二山王(イチヂゴニサンワウ)　叡山法師の詞に一兒二山王といへる事あり若氣勸進帳謠詞などに見ゆ七十一番職人歌合第六十八番山法師歌に「ひえあかるわかひとりねのとことはに一ちこならぬ人そこひしき」判詞に左一ちご二山王といふ事よく思ひよせたり云々 頭書 惟賢比丘筆記に當山稱二一兒二山王一事先一兒者十禪師御影向其子細不二聊爾一事也

(七)鮓答并赭丹　鮓答は蠻語にヘイサルバサルといへり輟耕錄本草綱目などに見ゆ其功能などくはしく大和本草十六の卷十七丁ウに載たれば考ベし 頭書 東里新談下ノ廿四丁オウ蓬窓日錄五の卷事記一に凡達二兵事一急能致二風雨一突レ圍而走蓋有二赭丹隨レ身赭丹者馬腹中所レ產之物用レ之念兒即致二風雨一如二狗寶牛黃之類一云々

(八)雞足山　雞足山を靈鷲山の一名とせるは佛祖統紀の說なれど誤也眞俗雜記三の卷に雞足靈山同異事の辨あり可レ考

(九)己が陽物(マラ)で穴(クツ)をする　俗言に自計自損の事を己が隱莖(マラ)で男色を行(スル)といへり谷響續集四卅四丁ウ長者子長根の條に以二己生支一內二大便道一而取二欲樂一とあり一笑

(十)表裏の用語　婦女子の戲言に可愛をニクイといひ雜劇の妙絕をほめて人ごろし親ころしなどいへりこれうらうへの倒語にてうらやむあなかくなどいへる古語同意也谷響續集四の卷廿四丁オ寃家惡因緣の條可レ考好因緣惡因緣といふには似て少異なる義也 頭書 カアイはカハユキのよしにて可愛ナラヌヨシ答問雜稿二に見ゆ

(十一)便面　便面は團扇の事にてから書に所見おほし三才圖器用十二に摺疊扇一名撒扇蓋收則摺疊用則撒用或寫作レ翼者非レ是翼即團扇也團扇可二以遮一面故謂二之便面一云々

(十二)念佛　宋高僧傳廿九の卷六丁ウ唐洛陽罔極寺慧日傳に徧問二天竺三藏一學者所レ說皆讃二淨土一復合二金口一〔其於二速疾一是一生路盡此報身必得レ往二生極樂世界一親得レ奉二事阿彌陀佛一聞已頂受漸至二北印度健馱羅國一王城東北有二一大山一山有二觀音像一有二志誠祈請一多得レ現レ身日遂二七日叩頭一又斷食畢命爲レ期至二七日夜一且未レ央觀音空中現二紫金色相一長一丈餘坐二寶蓮華一垂二右手一摩二日頂一曰汝欲レ傳レ法自利利他西方淨土極樂世界彌陀佛國勸令二念佛誦經一廻二願往生一到二彼國一已見レ佛及二我得一大利益一汝自當レ知淨土法門勝過諸行一〕說已忽滅云々 佛祖統紀廿七の卷十二丁ウ少康法師傳に乃乞レ錢誘二小兒一〔曰阿彌陀佛是汝導師念佛一聲與二汝一錢一兒務レ錢者隨レ聲念レ之月餘孩孺念佛竟レ錢者衆師乃曰能念佛十聲者與二一錢一如レ此一年無二少長貴賤一見レ師者皆稱二阿彌陀佛一念佛之聲盈二滿道路一十年乃於二烏龍山一建二淨土道場一築レ臺三級集レ衆行道師每二升レ座高聲唱一佛衆見二一佛從レ口而出一連唱十聲則見二十佛一師曰汝見レ佛者決得二往生一時衆數千有二不レ見者一嗚呼自責愈加二精進一二十一年十月三日囑二累道俗一當下於二淨土一起二忻樂心一於二閻浮提一起中厭離心上汝曹此時能見二光明一眞我弟子一〕遂放二異光數道一而逝云々

(十三)一闡提含生の類有二佛性一　一闡提含生の類佛生ある事佛祖統紀廿七の卷十八丁ウ道生法師傳に見ゆ同卅七十四丁ウ

(十四)傳敎大師并比叡山建寺　傳敎入唐法を道邃にうけ叡山建寺の事宋高僧傳廿九丁オ道邃傳に見ゆ

(十五)陽物を「しゞ」といふ　隱莖を「しゞ」といふはもと縮たるさまよりいへるにて關東にては小兒童の

陽物にかぎれる詞也新撰狂歌集下雜部に敎月坊ある時女院の御所御庭せばきとて此人の地をとりて御庭のまへをひろげ給へば「にようゐんの御まへのひろくなる事はけう月ばうがしゞのいるゆゑ」四至の入に陽物の入をよせたり

(十六)懷嶋 『吾妻鏡曾我物語などに懷嶋平權守あり相摸國鎌倉郡にやありけん吾妻鏡十の卷廿七丁ウ二品御上洛の事をいへる條に十月三日首途冬天無レ程臨ニ黃昏一之間令レ宿二于相摸國懷嶋一給後陣輩未レ出ニ鎌倉一云々 光行海道記四十二丁ウに相摸川を渡ぬれば懷嶋に入砥上が原を出南のうらを見やれば浪のあやおりはへて白き色を爭ひ北原をのぞめば草の綠染なし淺黃さらせり中に八松と云所あり八千歲のかげに立よりて十八公の榮をさかりにす「やつ松の八千代のかけに思ひなれてとかみか原に色もかはらし」固瀨川をわたりて江尻の海汀を過れば江の中に一峰の孤山ありと云々 曾我物語十の卷五郎 御前へ召出され聞召とはるゝ條に此四五ヶ年の間足柄箱根湯本國府津酒匂大磯小磯砥上が原もろこしが原相摸川ふところ嶋八的が原腰越稻村由井の濱深澤へんにはいくわいし云々參考太平記 十三の卷七十丁ウ時行滅亡の條に天正本云三浦若狹五郎判官ハ相摸國懷嶋へ落タリケル云々新撰狂歌集羇旅部にあづまにくだりける人こしごえのあたりにて「片瀨よりこしこえとほる旅しらみふところしまにやとをとるらん」已上の所見を考に海道記に相摸川を渡ぬれば懷嶋に入砥上が原をいで南の浦を見やればとあるを據とやせんされどそれも後になりて書たる紀行ならんには誤なしといふべからず』

(十七)水引にて懷紙を綴る 連歌俳諧の懷紙を水引にてとづる事やゝ古きものに見ゆ 守武千句廿七丁ウ京何の句に「こほらねと水ひきとつるくわいしかな「きりより細き冬の日のかけ」と有錐を用る事も知べし歌の懷紙を集めて綴るより連歌俳諧の懷紙にもうつれる也

(十八)鳥羽院男子の化粧—齒黑(ハグロ)—强裝束(コハ)烏帽子額などを始給ふ 鳥羽院御容儀めでたくおはしましてきらを好せ給ひ男子の化粧齒黑强裝束烏帽子額などその比よりはじまり花園右大臣はたかたち人にて仰合せられし事神皇正統記鳥羽院の條に見ゆ海人藻芥にもいへり類聚名物考雜一を考べし 頭書男子ノ化粧野客叢書五ノ廿丁ウ

(十九)按摩導引 按摩の事千金方に天竺按摩法老子按摩法など見ゆ導引は莊子六刻意篇後漢書七十二華陀傳に見ゆ 抱朴子內篇四ノ四十六丁ウ

(廿)芝手水塵手水雪手水鹽手水 芝手水は謠詞に見ゆ俗に塵手水といふは此流也 佛祖統紀十四の卷十丁 蓋慈法師傳に雖レ行二道遇一雪必手掬以爲レ淨とありこれは雪手水といふべし 南天の手水甲陽九下二十ウ 草淨顯密威儀便覽下十五丁ウ 頭書給草子にうしほをむすびてうづをつかひつゝ云々御曹子島渡草子にしほをむすびて手水とし日本の神々をながみ給ふ云々鎌足草子にうしほをむすびてうづとし諸天にふかくきせいする云々百合若草子九丁ウにうしほを結び手水とし南無天照皇太神宮その外六十餘州の大小の神祇此きりはらしてたび給へときせいを申させ給ひければ云々義經四國落草子七丁ウにさては疑ふ所もなくたつみの明神の義經をあはれみてなしへたまへるたつとさよとうしほで手水うがひしてそなたを禮し給ひけり云々

(廿一)會宗會學 余會學の名を稱するは佛祖統紀十五の卷十六丁ウ思梵法師傳に會宗の字面あるに據れる也

(廿二)精衛鳥 精靈鳥の事已にいへり法苑珠林四十三の卷變化篇に見えたるを引べし謠詞にも見ゆ

(廿三)口分田 明陳全之が蓬窓日錄四の卷世務二井牧の條に長山先生胡翰曰天地養二万物一聖人養二万民一故天下之利聖人不レ私二諸己一亦不二以私一於人一井田之制是也井田者仁政之首也井田不レ復仁政不レ行天下之民始敝々矣其後二百三十有二年而漢始有二名田之議一猶古之遺意也又其後六百有三年而元魏始有二均田之法一猶古之遺制也先王之遒制遺意由レ秦以來僅一二見又皆行レ之不レ遠天下之民益敝々矣爲レ政者南面以子二万姓一一夫之饑猶二己饑一之一夫之寒猶二己寒一之孰無二是心一也而訖莫二之拯一方二漢承二秦苛虐之後一民新脫去湯火未レ遑二蘇息一高帝因而撫二之逮一及文景之世一國家宴安無事宗戚大臣憑二藉貴高之勢一爭取二美田宅一以爲二子孫利益一郡邑富商大賈周二流天下一貲累鉅万治二生產畜牧一膏壤十倍上擬二封君一編戶之氓無二立レ錐之地一則卑二下之一爲レ役爲レ僕不レ暇レ顧二其身一貧富不レ均勢所二馴致一也故董仲舒言二於孝武一以二古井田法一雖レ難二卒行一宜少近レ古限二民名田一以抑二兼幷一名田者占田也占レ田有レ限是富者不レ得レ過レ制也其後師丹孔光之徒因レ之令レ民名田無レ過二三十頃一期盡三年而犯者沒二入之一議者以三十頃之田周三十夫之地也一夫占レ之過矣晉石苞令レ民男女二人占レ田百畝一丁男女有レ差有レ國食レ祿者有レ差或十頃或五十頃兼以二品蔭一其親屬自啓許端矣民無二恒產一不レ能レ制レ之專事要束之間不二勞レ民駭一衆坐獲二井田之利一此吾所レ未レ喻也殆

不レ過レ爲二兼幷之閑一耳非レ有下資二於畎畝一細民能無上不足之患ヒ也故名田雖レ有二古之遺意一不レ若二均田之善一李安世在二魏太和中一其得レ君非二華夏之主一也其得レ民非二歸馬放牛之時一也以二魏國之大一獨能均二其土地一審二其經術一差二露田一別二世業一魏人賴レ之力業相稱北齊後周因而不レ變隋又因レ之唐有二天下一遂定爲二口分永業之制一而取二其祖庸調之法一口分即露田也露田夫四十畝婦人二十畝而率倍レ之口分八十畝而不レ倍惟歲易二之田一倍レ之永業即世業也夫家受而不レ還皆二十畝所二以課一蒔桑麻一也民有二多寡一鄉有二寬狹一田有二盈縮一狹鄉之民受レ田半レ之爲二工商一者不レ給而有二寬鄉一者給レ之亦半也老疾寡妻妾給レ之三十畝四十畝雖レ不レ耕不レ可レ無レ養也當レ戶者益二之二十畝一雖二已有一田不レ可レ不レ優也以レ此均二天下之田一貧不レ得レ鬻富不レ得レ兼猶懼レ不レ能レ守二吾法一而乃聽下民鬻二永業一以葬鬻二口分一以遷上是以小不レ足而大亂レ法也何秖於敝賑二窮困貧民一獲レ保二息周典一也何惜而不レ爲レ之鬻而加レ罰永徽之禁抑末耳議者如二宋劉敞一又以魏齊周隋享レ國日淺兵革不レ息土曠人稀其田足二以給一其衆一民獲其實一唐承平日久丁口滋多官無二閑田一給受民不レ獲二其實一徒爲二具文一不レ知二隋唐之盛丁口相若一耳開皇十二年發レ使均二天下之田一狹鄉一夫僅二十畝隋之給受何加二於唐一也唐難二承平日久一貞觀開元之盛其人戶猶不レ及レ隋其至二其田一具文無レ實也敝言過矣但狹鄉之民多而田不レ盈永業之田鬻而民不レ固如陸贄所レ謂時弊者勢馴致也時敝則法亦敝故均田雖レ有二古之遺制一不レ若二井田之善一云々

（廿四）鹵簿　蓬窓日錄五の卷事紀一に鹵簿之制兆於秦一而其名則始二於漢一或曰鹵者大盾也以二大盾一領二一部之人一故曰二鹵部一或曰凡兵衛以二甲盾一居レ外爲二導從一捍二蔽其先後一皆著二之簿籍一故曰二鹵簿一按三輔黃圖天子出二車駕一次第謂二之鹵簿一而宋王欽若有二鹵簿記一云々 頭書 能改齋漫錄唐律釋文十五卷一丁右に鹵簿樂人爲二隊行一也今駕前有二流沙隊一有二鼓吹隊一皆執レ樂以從レ行也云々

（廿五）贔屭并金吾　又云贔屭其形似レ龜好負レ重故用レ之石碑一螭蚩其形似レ獸性好レ望故立二屋角上一徒牢其形似レ龍而小性好吼叫有二神力一故懸二於鐘之上一憲章其形似レ獸有レ威性好レ囚故立二於獄門上一饕餮性好レ水故立二橋所一蟋蜴形似レ獸鬼頭性好レ腥故用二於刀柄上一蠻蛭其形似レ龍性好レ風故用二於殿脊上一螭虎其形似レ龍性好二文采一故立二於碑文上一金猊其形似レ獅性好二火烟一故立二於香爐上一椒圖其形似二螺螄一性好二閉口一故立二於門上一蚣蝮其形似レ龍而小性好レ立レ險故立二於護杇上一鰲魚其形似レ龍好吞レ火故立二於屋脊上一獸蚼其形似二獅子一性好レ食二陰邪一故立二門環上一金吾其形似二美人一首魚尾有二兩翼一其性通レ靈不レ睡故用二巡警一

（廿六）日本國の車　蓬窓日錄五の卷事紀一に宋元豐三年高麗入貢進二日本國車一乘一正使柳洪副使朴寅亮先致レ意館伴官云諸侯不レ貢二車服一誠知二非禮一但本國欲二中朝略見一日本工拙一爾云々二の卷に日本考略の條一篇あり長文なれば省つ

（廿七）十二宗　羅山文集五十六の卷排二耶蘇一文に十宗之外加二一向日蓮一至二十二宗一云々

（廿八）國主城主　羅山文集五十八の卷武家諸法度に諸國主并領主等不レ可レ致二私之諍論一云々また國主城主壹萬石以上并國大名之息城主暨侍從以上嫡子或年五十以上或醫陰之兩道病人免レ之云々按に城主の字晉書より後のものに見え唐書にはいとおほかり國主の字は李陵が書五代史南唐世家などに見ゆ禮記雜記上註疏本註に館主國所レ致舍復招魂復魄也如レ於二其國一主國館賓予使有レ之得レ升レ屋招用二褒衣一也 頭書 金持重資記廿四丁ウ彼近江の國主は分限より軍士あまた扶持して勝手大にすりきりにて候が云々六韜龍韜兵徵廿九に城之氣出而復入城主逃北太閤記八ノ一ウ城主定事云々傳燈傳廿六ノ廿一丁ウ國主高僧傳五ノ一ウ三國志蜀志三五丁ウ後主傳裴松之註に涼州諸國主云々

（廿九）活套　羅山文集五十九の卷十丁與二汪德夏一筆語に先生曰活套之字如何汪曰套者乃規矩格式之謂也活者活潑不二拘滯一之義也言作レ文者依二此套一而活通レ變以用也云々按に香月斗山が牛山活套といへる醫書あり藥方配劑に通レ變而用よしの加減を記せる書也

（卅）釘抜念佛　寂光釘抜念佛の緣起文明板を所藏せり佛祖統紀廿九の卷十八丁ウ潭州黃打鐵傳に每用工時常念佛不レ絕といへるは釘打念佛にて表裏のたがひ也

（卅一）朱引の歌　和漢名數に朱引の事をいへり初學暗誦要文廿三丁ウに朱引歌あり

右幾處（ミギトコロナカハ）中和人乃名（ヒダリラバ）左（クワンノ）於波（シユビキト）官乃朱引（カナシユベシ）土兼天知遍之

二津引中乃二津和（フタツビキナカノフタツハモノ、ホンヒダリフタツハヰシガウゾカシ）物本左里二津和年號皆加志

(卅二)あひと云詞『相宇豆奈比相伴比相應天相仍天相悅比相戰相扶相結比相續相賀相敵比相穴奈比相見相隨相送相容あひいへりあひわかれあひそふあひおもふあひにあふあひおひあひかたらひあひやどりあひ聟あひ盜人相しれる相すみなどやうの「あひ」と云詞はみな合逢の義としてきこゆ別に「打」と云心に用たるあり甚奇久異留麗岐雲七色相交天立登天在繼紀廿八淳和院乃失火之穢留相交流人々大宮之內留參雜聞食天三代實錄廿六などの相は打交ともいへる例の詞也後拾遺一戀詞書に公資朝臣にあひ〴〵して侍けるとあるも源氏桐壺におや打〴〵しと同じ語勢なればこれはた「打」に通ふ「あひ」也また竹取物語抄上廿三丁ウに此御子に相つかうまつり給へといふに云々神代記下十一丁ウに故奉レ迎相待吾名是猿田彦大神云々竹崎五郎繪詞に御不審あひ殘り候はゝかげするゑ御げうそをもて御たづねをかうぶり候はん云々又かげするぞんめいすべしとはあひぞんじ候はす云々宇治拾遺十二の卷九丁にわざとしめ候つれば相搆て候つる堪がたくなりて候へば云々古今著聞集二の卷廿二丁ウにあひかまへてかのおほせのむね申ければ云々又九の卷十五丁ウあひはからひてつかうまつるべしと勅定ありければ云々圓光大師繪詞傳異賛一の卷十丁オに今上人出胎の瑞ことの儀あひおなじ定てふかき心あるべし云々など愼戒恐義に用たり祝詞に相麻自許利相口會といひ愚記二の卷三の卷に相觸などあるも打の義にも又愼戒恐義にも通ひてきこゆ』

(卅三)車軸の雨傾盆雨　佛祖統紀卅一の卷三世出興志一二丁ウ成二十小劫自二過去莊嚴劫壞空之後一至二今賢劫初成時一光音天空中布二金色雲一徧覆二梵天一注二大洪雨一猶如二車軸一云々また傾盆雨は無門關に見えたりき

(卅四)龍華　佛祖統紀卅一の卷三世出興志一十丁ウに第十小劫減至二八萬歲一時第五彌勒佛出世云々彌勒見二此寶臺須臾無常一知二有爲法皆悉磨滅一修二無常想一讃二過去佛無常之偈諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂一說二此偈一已出家學道詣二翅頭末城外金剛莊嚴道場龍華菩提樹下一即於二此日初夜一降魔成道云々自注に枝如二寶龍吐一百寶華一故名二龍華一云々ものに龍華の曉をまつなどあるは此事也頭書東寶記

(卅五)ゑばし櫻　ゑばし櫻の事外集九の卷二段にいへり又元服曾我謠詞にさらば元服祝はんとて別當に傳はる重代の太刀伊豆權現の力をそへ思ふ本望遂給へと箱王殿に奉るやがて祝ひの御酒ひとつ〳〵すゝめ申せや人々と同じく菩にまどゑし酒宴をこそはじめけれさく比の梢時めくをりに來てゑばし櫻の花を見ん如何に申候是はめでたき折なれば一指御舞候へかしこまつて候さらばそと舞ふづるにて候鳥帽子櫻の花を見ん菊の名の曾我のむかしを思ひ出てよろづ代いはふこゝろこそあれ云々

(卅六)念佛鳥念佛魚　佛祖統紀廿九丁オ往生禽魚傳に長沙鸚鵡元祐間長沙郡人養二一鸚鵡一俗呼二八八兒一者偶見二僧念二阿彌陀佛一即隨レ口稱念旦暮不レ絕因以與レ僧久之鳥亡僧具レ棺以葬之俄口中生二蓮華一枝一人爲レ頌曰有二一靈禽八八兒一解レ隨二僧口一念二阿彌陀一死埋二平地一蓮華發我輩爲レ人豈不レ知また劉成魚唐天寶中當塗漁人劉成李暉載レ魚往二丹陽一泊二船浦中一李他往劉遽見レ船上大魚振レ鬣搖レ首稱二阿彌陀佛一劉驚奔二于岸一俄聞萬魚俱跳躍念佛聲動二天地一劉大恐盡投二魚于江一李至不レ信劉卽用二己財一償レ之明日於二荻中一得二錢萬五千一貫也題云還レ汝魚直云々

(卅七)摩頂松　佛祖統紀卅一丁オ諸宗立敎志玄奘傳に初遊二天竺一手二摩門遜松一曰吾西求レ法可二枝向一西吾若言歸枝可二東指一既往技果西一日忽東指弟子曰敎主歸矣因號二摩頂松一云々按に松に依て誓を立しは岩代の結松の類ともいふべし

(卅八)經論還授　天台の書漢土に還傳せし事所見おほかり佛祖統紀卅一丁ウ玄奘傳に起信論難レ出二馬鳴一久而無レ傳師譯レ唐爲レ梵俾レ流二布五天一云々とあるも同日の談也

(卅九)欲鉤　佛祖統紀卅一丁オ窺基法師傳に先以二欲鉤一牽云々

(四十)鼠に弓絃を齧るゝ　佛祖統紀卅一丁オに金鼠齧二斷弓絃一云々西域記十二の卷にも見ゆ吾妻鏡一の卷〔治承四年八月廿五日の條に大庭景久幷郎從所レ帶百餘張弓絃爲レ鼠被二食切一畢〕云々とあり

(四十一)月の八日十四日十五日　佛祖統紀卅二丁ウ廿一世間名體志須彌山條に月八日四王大臣徧行二世間一十四日四王太子行十五日四王自行觀二察善惡一若無二多人受戒布施一帝釋聞レ奏憂惱說言云々

(四十二)迦吒羅衛　佛祖統紀卅三十一ウに東南至二迦吒羅衛一注に佛生處云々同卅六九丁ウに迦吒羅衛國者三千大千世界百億日月中三世諸佛皆於レ此出云々

(四十三)天狗の熱鐵を呑に似たる說　佛祖統紀卅三十八丁オ閻摩羅王宮殿條に獄卒取レ王撲二熱鐵地一以二銅汁一寫二置口中一云々この銅汁を口中に寫置といへるは天狗道の熱鐵の苦に似たりといふべし

(四十四)和上の和の字を省て書例　佛祖統紀卅七卅丁カ法運通塞志三梁武帝紀に帝致レ書慰二弟子法獻一曰承遠上無常弟子中夜已自冥知遠上此去甚嘉遲レ見二法師一方可レ叙二瑞夢一耳注に遠上者遠和上也云々これ鐘山僧遠が事をいへるにて遠和上を省て遠上といへり阿闍梨を闍梨尼御前をあませなどいへる類也

(四十五)御符符水護符　今俗法師修驗陰陽師などが加持の符を御符護符などいひ病者に水初穗(ツブホ)にて呑しむるわざあり　佛祖統紀卅六卷法運通塞志二十五丁左に後漢順帝熹平中漢中有二張脩一爲二大平道一張角爲二五斗米道一太平道師敎レ人叩頭過レ思因以二符水一飮レ之使下病家出二米五斗一云々同卅七卷法運通塞志十丁左に豫章西山眞君云々歲大疫標二竹江濱一置二符水中一令二病者飮一之無レ不レ愈云々同四十卷法運通塞志十八丁ウに唐大宗貞觀十一年沙門智實等復抗レ辭固爭以道士雖レ冒レ宗二老子一其實遵二三張符水醮籙之事一自注に後漢張陵父子敎二民悔過一今輸二米五斗一其後有二張脩張角一效二其法一用二符水一以治レ病故世稱二五斗米道一云々同四十九卷法運通塞志十五十丁左元世祖至元十八年特奉二聖旨一僧道二家云々僞造符咒妄言佩レ之令人商買倍利夫妻和合猶如二鴛鴦一——不レ能二傷害一等語云々

(四十六)祭に肉を禁ず　佛祖統紀卅八卷法運通塞志四四丁左に梁武帝十六年勅二太醫一不レ得下以二生類一爲中藥郊廟牲牷皆代以レ麪宗廟薦羞始用二蔬果一云々注に牷音全牛純色禮記祭祀牲牷云々述曰祭二天地一祀二宗社一必殺レ牲(以備レ物皇王以來用以爲レ法有二國家一者掌レ之爲レ故且不二敢有下所レ議也夫司二天地之化一所下以稱二上帝一稱中皇天后土一者至聖至神也烏有下神聖而好殺二牲牢之命一肯歆中腥臊之食上哉由夫上古之俗茹レ毛飮レ血以レ是養レ己必以レ是事レ神朴陋之見曾不レ知二牷牢腥臭之爲下濱也蒸民既粒俗不レ能レ變二聖賢敎一世師二古法一以著二之禮經一於レ是後王遵而行レ之莫下或敢議二其可不一者上以養レ己猶古不レ思二事レ神之不下當レ濱也夫

果於二殺命一不仁也薦以二腥臭一不義也以二不仁不義一爲二養レ己之舊習一尙當レ思レ有下以レ節以求二全好一之心上豈於レ事二天地祖宗之神靈一而欲下以二牲牢腥臭之物一以濱上之哉自二佛法東漸一勸二修齋戒一天帝尙知レ事レ佛豈人事レ天而不下知レ事レ佛乎知レ所二以事一乎佛則不レ當下以二牲牢一濱上天爲レ可レ信矣惟梁有二武皇一魏有二獻文一敎郊廟祭祀不レ用二牲牷一而易レ之以二蔬麪酒果一可レ謂二違レ古而道一奉二黍稷一薦二明水一是亦三代之祀法也烏在二乎牲牢腥臭之物一哉○慈雲法師於二天台一勸二民俗一祀レ神改レ祭爲レ齋其文有曰天子七廟下至二庶人一皆同祭二祀閭丘方澤上下神祇一國之常典勸令斷レ祭無二乃太傷二國風一乎釋曰祭祀出二俗典一改祭據二佛經一俗典則未レ逃二殺害一佛經則唯重二慈悲一殺害則報在二三途一慈悲則果成二萬德一以レ善改レ惡無二不可者一云々頭書牲を止て酒脯を用ふ祭事佛祖卅九ノ六丁オ南史六ノ廿丁オ

(四十七)一切　以呂波字類抄(卷)一の以部疊字門に一切イッサイ云々節用集以部言語門に一切イッサイ(キャウ)セッ云々運歩色葉集以部に一切(イッサイ)經五千四百十八卷也欽明天皇僧要元乙未自二太唐一渡至二天文十六年丁未一八百十三年也云々　翻譯名義集五の卷廿二ノ丁右四　十二字篇に娑娑秦言二一切一法苑云一以二普及一爲レ言切以二盡際一爲レ語大品娑字門入二諸法時不可得一故諸法時來轉故論云卽知二一切法一切種不下可レ得一切有二二種一一者名字一切如レ云下一切皆懼レ死無レ不レ畏二刀杖一無色無レ身不レ畏刀杖上此名字一切也二者實一切大品云一切者所レ謂內外法是二乘能知不レ能下用一切道一起一切種上華嚴唱二娑(蘇我)字一時名レ降二霆大雨一疏云卽平等性云々大藏法數二の卷六丁左に一切出二翻譯名義一是普及之言切是盡際之語又云究竟非二二名一一其性廣博名レ切故名二一切一云々慧琳音義廿一の卷四丁左新譯華嚴經世主妙嚴品一の條に一切說文云一切普也卽遍具之義故切字宜レ從レ十說文曰十謂二數之終一也有二從レ七者一俗字也云々龍龕手鑑二の卷刀部入聲に切妻結切治レ骨也斷也急也又七計切云々古今韻會廿七の卷入聲九に切千結切博雅治レ骨謂二之切一又苟且曰二一切一猶レ曰二一時權宜一也後王覇傳以徵二一切之勝一前平紀一切論秩如レ眞師古曰一切者權時之事如二以レ刀切レ物苟取二整齊一不レ願二長短縱橫一故言二一切一他皆放レ之又大概曰二一切一又議切也剴切也云々同小補廿七の卷屑韻に切千結切云々霽韻七計切衆也又一切大凡也又前平帝紀義註見レ上

云々字彙(子集)刀部に切千結切云々又七計切音砌衆也又一切大凡也云々佛祖統紀卅九の卷法運通塞志五(五丁右)に一切禁斷注に切音竊漢書如二刀一切一云々管子に與レ人交多二詐僞一無二情實一偷取一切謂二之烏集之交一云云史記李斯傳に請一切逐レ客云々索隱曰一切猶二一例一言盡逐レ之也言切者譬若二利刀之割一運レ斤無二不レ斷者一解二漢書一者以二一切一爲二權時義一未レ爲レ得也云云漢書平帝紀二(二丁右)に吏在レ位二百石以上一切滿レ秩如レ眞云々師古曰時諸官有二試守者一特加二非常之恩一令レ如レ眞耳非二凡除一吏皆當二試守一也一切者權二時事一非二經常一也猶如下以レ刀切レ物苟取二整齊一不レ顧中長短縱橫上故言二一切一他皆放レ此云々同路溫舒傳廿二(二丁左)に媮爲二一切一云々如淳曰媮苟且也一切權レ時也云々同趙廣漢傳(一丁左)に壹切治理云々同張敞傳十二(二丁右)に願得壹切比三輔尤異云々如淳曰壹切權レ時也云々後漢書王霸傳七(七丁右)に以徼二一切之勝一注に徼要也一切猶二權時一也云云晉書元帝紀八(八丁右)に一切斷レ之云々已上の說を考合するに一切禁斷などの時は入聲にイッセツといふべし一切經一切衆生などいふ時は去聲にイッサイといふべき也

(四十八)新唐書五代史の誤　佛祖統紀卅九卷(十一丁右)に歐陽氏之修二唐書一也凡釋氏之事有レ裨二國政一開二人心一者上悉刪二去之一適足二以存二舊史之該贍一其乏二通學一守二隘見一有レ若レ是謂二之信史一未レ信也云々同四十卷(十五丁ウ)に歐陽氏之修二唐書五代史一也於二佛老之事一則刪レ之夫唐書唐家之正史非二歐陽之私書一借使不レ足レ法論レ之可也豈當下以二己所一不レ好而悉刪中之邪是知無二通識一者不レ足二以當一修史之任一也云々

(四十九)內教外教　佛祖統紀卅九の卷法運通塞志五(十六丁右)に北周武帝天和四年詔二儒僧道一申二述三教一沙門道安作二二教論一以二儒道九流一爲二外教一釋氏爲二內教一云々同五十一卷四十二章經疏序に域內則詳二乎治身一而尙略二乎治心一故謂二之內教一域外則善二乎治身一而極二乎治心一故謂二之內教一昔阮孝緒正以二內外之名一爲レ不レ誣矣云々

(五十)達嚫施財　佛祖統紀四十の卷法運通塞志六(八丁オ)に梵語達嚫此云二施財一今人誤書二嚫字一者非云々翻譯名義集四の卷(五十三丁オ)衆善行法篇に尊婆須密論作二檀嚫一此云二施財一解言報レ施之法名曰二達嚫一導二引福地一亦名二達嚫一字或從レ手　西域記正云二達嚫拏一者右也或云二馱器尼一以下用二右手一受二人所一施爲レ其生二福故擧云夫以下方會レ人不レ可レ以二一息一期上以レ財濟レ物不レ可レ以二一時一周上是以會通無レ隅者彌綸而不レ漏法澤冥被者不易而普覆云々賢愚因緣經十二卷(十一丁ウ)波婆梨緣品に設レ會已訖大施二達嚫一云々音釋(廿八丁ウ)達嚫梵語也此謂二財施一嚫音襯云々

(五十一)遊手　佛祖統紀四十卷(十一丁オ)に遊手竊レ食易レ服以逃二租賦一云々今の歌讀詩人連歌師俳諧師狂歌師茶人生花師などの類皆遊手といふべし(續書目唐書九十五ノ八丁オ寶軌傳に有二游手來作者一云々)

(五十二)木の俣より生るゝ　嘗家木枝に下りの給へるよし荏柄天神記に見ゆ佛祖統紀四十卷(十二丁オ)に蕭瑀不レ生二於空桑一乃遵二無レ父之敎一非二孝者一云々

(五十三)開眼　佛祖統紀四十卷法運通塞志六(十七丁オ)唐大宗貞觀八年條に詔爲二穆太后一建二弘福寺一車駕親臨自開二佛眼一云々按に開眼供養の事塵添壒囊抄四卷十二丁オ開眼供養トモアリ

(五十四)病に祈禱して藥を服せざる事　巫を信じて醫を信せざるは不治の病者也近來金毘羅の神巫など稱て符水をあたへ加持などして醫藥を戒むるものこかしこに聞ゆ佛祖統紀四十卷(卅六丁ウ)に二宗者謂男女不二嫁娶一互持二不語一病不レ服レ藥死則裸葬等云々

(五十五)三敎　佛祖統紀卅九(十六丁ウ)法運通塞志五に北周武帝天和二年二月集二百僚僧道一論二三敎先後一以レ儒爲レ先道次レ之釋居レ後云々同四十卷(七丁ウ)法運通塞志六に隋文帝仁壽三年文中子讀二讖議一曰三敎於レ是乎可レ一矣云々又(十九丁オ)唐太宗貞觀十三年詔二國子祭酒孔穎達沙門慧淨道士蔡晃一入二弘文殿一談二論三敎一云云又(廿三丁ウ)志磐述曰云々隋李士謙論二三敎優劣一謂佛日道月儒五星魏收撰二北魏佛老志一皆先レ僧而後レ道其義已定云々同四十五卷法運通塞志十一(十六丁右)に宋眞宗大中祥符六年十一月上謂二宰臣王旦一曰三敎之設其旨一也大兵皆勸レ人爲レ善唯識達之士能一二貫之一滯情偏執於レ道益遠云々同卷(十七丁左)に志磐述曰道家者流其所レ學「則道德陰符是爲二治レ心修レ身之本一至レ言二內丹外丹火候一口訣一則不レ傳二於非人一其餘旁門如二胎息之法草木之方一皆上聖下敎用度二人世一非レ可レ謂二之虛無一也若夫置壇傳籙起レ自二天師一是又上天護國護人治鬼攝邪之法俱可下以助中敎二化於天下一者上是故此道列在二國家一與二儒釋一均爲二三敎一者以レ此至二於小大優劣

內外之義ニ則較然可レ知故關澤對ニ吳王一曰道事レ天天事レ佛李士謙論ニ三教一曰儒五星也道月也佛日也能達ニ此意一則三教之位定世言ニ儒道釋一蓋本ニ乎此一儒生道士不レ別ニ本末一欲レ輕ニ陵於釋氏一皆末學之過若道流有レ輔ニ成舊僞言一老子化胡以レ佛爲ニ侍者之言一謗ニ老子一瀆ニ世尊一」其咎當ニ如何一邪云々同五十五卷歷代會要志四に三教出與三教厄運三教妖僞三教談論の條あり景德傳燈錄廿八十四丁ウに又問儒道釋三教同異如何〔師曰大量者用レ之即同小機者執レ之即異摠從ニ一性上一起レ用機見差別成レ三迷悟由レ人不レ在ニ教之同異一」云々

頭書 佛祖統紀卅七ノ廿九丁オ

（五十六）小寺を大寺に合す　水戶の御政道に大寺の末寺に貧乏の小寺ありて住僧のたへがたきばかりなるを本寺に合叢して便利に從はせ給へり佛祖統紀四十一の卷法運通塞志七十一丁オに唐玄宗開元十五年勅ニ天下村坊佛堂小者一並坼ニ除之一功德移入ニ近寺堂大者一云々とあるは似たる事也

（五十七）度牒を賣ル　佛祖統紀四十一の卷法運通塞志七十九丁オに唐肅宗至德元載帝在ニ靈武一以ニ軍須不足一宰相裴冕請鬻ニ僧道度牒一謂ニ之香水錢一自注に賣レ牒始レ此云々同四十六卷法運通塞志十二廿丁左に宋英宗熙寧元年七月司諫錢公輔言祠部遇ニ歲饑河決一乞鬻ニ度牒一以佐ニ一時之急一自レ今聖節恩賜並與裁損鬻レ牒自レ此始云々志磐述曰古者〔出家之士自ニ漢明一以來並從ニ國恩一而爲ニ得度一如ニ隋文一一歲至ニ五十萬一唐太宗威柴三藏弘法須ニ人之言一即度レ僧至ニ萬七千人一睿宗度ニ三萬人一本朝太宗普度ニ十七萬人一至ニ二十四萬人一此特恩豪度之大略也唐中宗始詔ニ天下一試ニ經度僧一是猶下漢家以ニ科擧一取ニ士最可一尙也我太宗眞宗仁宗並擧ニ試經之科一於レ茲爲レ盛未レ聞レ貨ニ取於山林高尙之士一也自ニ唐肅宗一用ニ宰相裴冕之請一以ニ時方用下兵始鬻ニ度牒一猶下漢世納レ粟助レ邊以得ニ爵也從レ恩猶可レ擇レ人試經是爲レ得レ才至ニ於納レ貲爲下僧則富者可ニ以逞一下欲長汙雜處精進法門之不幸也公輔以ニ時艱一始勸上裁ニ恩賜一以就ニ買賣一利源一開逮レ今不レ可ニ復塞一律言餘方有ニ清淨一雖レ非ニ我制一不レ得〕レ不レ行蓋此義也云々同四十八卷法運通塞志十四六丁右に宋高宗紹興三年八月自ニ治平末一始鬻ニ度牒一舊以ニ黃紙印一造ニ僞爲一者多戶部朱異始奏令下僧道用ニ敕綾紙一上云々同五十二卷歷代會要志一十丁ウ進納度僧に唐肅宗〔至德初宰相裴冕請鬻ニ度牒一謂ニ之香水錢一〇聽ニ白衣誦經一賜ニ出身一或納ニ錢百緡一請レ牒剃度〇宋神宗司諫錢公輔言遇ニ歲饑河決一乞鬻ニ度牒一〇高宗勅賣ニ四字師號一〇自ニ治平末一始賣ニ度牒一舊以ニ黃紙一僞爲者多至レ是戶部朱異奏令下僧道用ニ勅綾牒一〇詹叔義上表乞住ニ賣度牒一〇敕ニ僧道一始令レ納ニ免丁錢一」謂ニ之清閑錢一云々

（五十八）雄山雌山　山に雄山あり雌山あり福山あり貧山あり盛山あり衰山あり佛祖統紀四十二の卷法運通塞志八二丁カ唐代宗大歷三年詔ニ慧忠國師一入內引ニ太白山人一見レ之師曰汝纔ニ何能一山人曰識レ山識レ地識レ字善レ算師曰山人所レ居是雄山雌山茫然不レ知レ對云云與清曰富士山は雄山也物を產せず伊豆の天城山は雌山也物を產する事おほし近江の三上山は貧山なり孤立して草木繁茂せず金石を出さず福山は形豐に張起して金銀珠玉を出すをいふ盛山は日光比叡山などをいふ草木榮えて山形富饒也衰山は煙火たえず草木生せず國に害ありて山形かじけたるをいふ　頭書 三藏法數十六ノ廿六丁オに四山ノ事あり老山病山死山衰耗山也大藏法數十九ノ十三丁祖庭事苑七ノ十丁にも見ゆ

（五十九）寒涕　佛祖統紀四十二卷七丁オに寒涕垂レ頤云云これはミヅハナ（ミヅバナ）なるべし可レ考碧巖にも見えたり

（六十）芥子を河水とし水銀を水とす　西域記十卷二丁オ伊爛拏鉢伐多國條に三佛經行西不レ遠有ニ窣堵波一是室縷多頻設底（シルタヒムセツテイ）拘胝（グテイ）唐言ニ聞二百億一舊譯曰ニ億耳一譌也　苾芻生處昔此城有ニ長者一云々自ニ其居家一至ニ王舍城一鑿レ渠通レ漕流ニ滿芥子一御レ舟安止長組以引至ニ王舍城一云々

（六十一）鼠齧ニ斷弓絃一　『吾妻鏡一の卷廿丁右治承四年八月廿五日條に俣野五郎景久相ニ具駿河國目代橘遠茂軍勢一爲レ襲ニ武田一條等源氏一赴ニ甲斐國一而昨日及ニ昏黑一之間宿ニ富士北麓一之處景久並郎從所レ帶百餘張弓絃爲レ鼠被ニ喰切一畢仍失ニ思慮一之刻安田三郎義定工藤庄司景光同子息小次郎行光市川別當行房聞下於ニ石橋一被レ遂ニ合戰一事上自ニ甲州一發向之間於ニ彼志太山一相ニ逢景久等一各廻レ轡飛レ矢攻ニ責景久一挑戰刻景久等依レ絕ニ弓絃一雖レ取ニ太刀一不レ能レ禦ニ矢石一多以中レ之安田已下之家人等又不レ免ニ劒及一然而景久令ニ雌伏一遂電云々西域記十二の卷十八丁右瞿薩旦那國條に王城西百五六十里大沙磧正路中有ニ堆阜一並鼠壤墳也聞ニ之土俗一曰此沙磧中鼠大如レ蠭其毛則金銀異レ色

爲二其群之首長一每出レ穴遊止則群鼠爲レ從昔者匈奴率二數十萬衆一寇二掠邊城一至二鼠墳側一屯レ軍時罽薩旦那王率二數萬兵一恐二力不一レ敵素知二磧中鼠奇而未一レ神也泊二乎寇至一無レ所レ求レ救君臣震恐莫レ知二國計一苟復設レ祭焚レ香請レ鼠禳其有レ靈少加二軍力一其夜罽薩旦那王夢見二大鼠一曰敬欲レ相助一願早治レ兵旦日合戰必當レ克勝一罽薩旦那王知レ有二靈祐一遂整二戎馬甲一令二將士一未明而行長驅掩襲匈奴之聞也莫レ不レ懼焉方欲二駕乘被一レ鎧而諸馬鞍人服弓絃甲絣凡厥帶絲鼠皆齧斷兵寇既臨面縛受レ戮於レ是殺二其壯一虜二其兵一匈奴震懾以爲神靈所レ祐也罽薩旦那王感二鼠厚恩一建レ祠設レ祭奕世尊敬云々佛祖統紀四十一の卷法運通塞志七十六丁左に唐玄宗天寶元年西域康居音大石五國入二寇安西一唐朝置二安東安西安南安北四府一帝召二選驗レ之即誦呪日也今城樓軍營至二天王堂一者因レ之不空三藏一入内持二誦仁王護國密語一上親秉二香爐一方二七徧上見レ神人可二五百餘立一於殿廷一師曰此北天毘沙門王第二子獨健副二陛下禱一往救二安西一請設レ食發遣四月安西奏曰二月十一日城東北黑雲中見二金甲人一身丈餘空中皷角聲振二天地一寇人張幕間有二金鼠一齧二斷弓絃一五國即時奔潰須臾見二城樓上一天王見レ形上令レ驗レ之即誦呪日也今城樓軍營至二天王堂一者因レ之云々 按鼠弓絃を噛斷る事此外にもおほかるべけれどおもよひよれるまゝに引出つ」

（六十二）芥子に納二須彌一 佛祖統紀四十二卷法運通塞志八十一丁右に唐憲宗元和四年歸宗智常禪師得二法於馬祖一江州刺史李渤問レ師曰須彌納二芥子一即不レ問如何是芥子納二須彌一師曰人傳使君讀二萬卷書一是否渤曰然師曰摩頂至レ踵如二椰子大一萬卷書何處著云々

（六十三）儒者無二通識一 『佛祖統紀四十四卷法運通塞志十廿三丁右に志磐述曰人無二通識一不レ足二以知一佛故韓愈夷二其佛一歐陽脩亦夷二其佛一太宗以二蘇易簡指レ佛爲一夷而惡レ之自レ古人君莫レ如二太宗一之有二通識一也佛聖人也五天中土也此方即五天之東境也今稱二中國一者此方自稱レ尊也稱二四夷一者且約二此方四境之外一論レ之也儒家乏二通識一即日睫以言レ之故多二失言一云々 與清曰本朝の儒生物茂卿太宰純服子遷が輩自夷人と稱し或は東夷大東などいへる事偏見無二通識一所爲といふべし東照宮夏御陣の時增上寺觀智國師の使僧了的廓山に仰ありしは今より天下一統の世なれば吾宗門なればとて淨土宗にのみ歸依し念佛三昧にも處しがたし神佛諸流ことゝ〳〵く天下の敎なればとり〳〵に用

捨すべき事王者の道也國師に此旨を傳へて天下一統の後吾念佛に怠れりと不審せらるまじきよしを申せとの御定なりとぞこれ實に大通識の聖意といふべし』

（六十四）人間僅五十年 佛祖統紀四十六卷法運通塞志十二四丁左に宋仁宗天聖八年劉中明曰人生五十已如二敗屋一能志二於道一僅可レ延レ年云々

（六十五）善罵レ人者亦善被レ罵二於人一 佛祖統紀四十六卷法運通塞志十一丁右に宋仁宗慶歷四年祖印禪師曰諺言善罵者人亦善罵レ之云々 頭書說苑十六ノ六丁ウ說叢篇に好憎人者亦爲二人所一レ憎云々 好稱二人惡一人亦道二其惡一好

（六十六）托鉢分衛 佛祖統紀四十六卷法運通塞志十二廿七丁右に宋神宗元豐三年張商英見二兜率悅公一云々商英曰香林獨脚頌德山托鉢話未レ能レ無レ疑〔悅曰祇如二末後句一是有邪是無邪商英曰豈不二是有一悅大笑歸二文室一閉レ門而寢商英展轉無レ寐五更下レ榻觸翻踏レ牀忽然有レ省爲二之頌一〕曰鼓寂鍾沈托鉢回云々運歩色葉集不部に分衛フンヱイ乞食事也云々

（六十七）室町殿の代の學問在二僧家一 室町殿の天下まうし給へるをり兵革打つゞき學問地に落たる中福光園殿一條禪閤などこそあれ他は五山僧徒の傑出せるに及ものなし 佛祖統紀四十六卷法運通塞志十二十六丁ウ宋仁宗皇祐五年司馬光欣然謂二左右一曰不レ謂三代禮樂在二緇衣中一云々 禮失而求二之野一の類といふべし

（六十八）功德院 功德院は開基寺の事也佛祖統紀四十九卷法運通塞志十五四丁左に宋寧宗淳祐十年三月臣寮上言〔國家優禮元勳大臣近貴戚里聽レ陳二乞守墳寺額一蓋謂自造二屋宇一自置二田產一欲レ以資二薦祖父一因與二之額一故大觀降レ旨不レ許下近臣指二射有額寺院一充二守墳功德一及紹興新書上不レ許レ指二射有額寺院一著在二令甲一凡勳臣戚里有二功德院一止是賜額蠲二免科敷之類一聽二從本家一〕請僧住持云々又五丁ウ

（六十九）驛券御朱印御證文 今の御朱印御證文は驛券の類也 佛祖統紀四十九卷十五丁ウ法運通塞志十五に元英宗至治三年佛海性澄法師云々已給二驛券一將二南還一云々と見ゆ

（七十）落城 佛祖統紀五十卷名文光敎志永嘉西湖法明寺疏に於レ是院落始成云々 落成は家屋城樓などの功了れるにいふ詩斯干序箋左傳注などに見ゆ

（七十一）端出之縄左縄左搓芒縄　神代紀に端出之縄シリクメナハと有左縄とも書り景徳傳燈錄廿五ノ一丁左天臺山徳韶國師傳に踈山曰左搓芒縄縛ニ鬼子一とある左搓は左よりの縄也芒は端出にて藁端のわらけさがれる貌なるべし鬼子を縛すといふは左縄を引て物を除るに似たり萩苑日渉にも説あり可ニ考合一　頭書續高僧傳七ノ十三丁ホ慧昭傳に策レ杖戴レ笠履ニ芒屨一而赴レ會トアリ芒屨ハ「ワラウヅ」ノ類ナルベシ麻苧ノ注連今昔十一ノ廿二同十四ノ四十四

（七十二）四鳥の別　文選六臣注本廿八卷六丁右陸士衡が豫章行に三荊歎レ同レ株四鳥悲レ異林云々注に孔子在レ衛聞ニ哭者甚哀一問ニ顔回一曰汝知ニ此何哭一回曰此者非ニ但爲レ死而已一又爲ニ生離者一也昔嘏山之鳥生ニ四子一焉羽翼既成將レ分ニ四海一其母悲鳴而送レ之爲ニ其往而不ヲ返篇以ニ音類一知レ之矣問レ之果然故云レ悲レ異レ林云々家語顔回篇に見ゆ

（七十三）インノコ〳〵と云詞　小兒を愛して慰むる詞にインノコ〳〵といへり史記百十七卷司馬相如傳に其親名レ之曰ニ犬子一索隱曰孟康云愛而字レ之也と見ゆ此犬子は愛するよしなればイヌノコ〳〵と云を音便にインノコ〳〵といへるにや

（七十四）吉田神主井神樂岡齋場所　皇和眞俗通十三の上卷一條天皇條に永延元年冬十一月以ニ卜部兼延一爲ニ吉田神主一云々委ク神道ノ一ヿ見ユ

（七十五）三徐　明人陳全之が蓬窓日錄六の卷事紀二三丁ホに董遇云冬者歲之餘夜者日之餘陰雨月之餘皆爲ニ間暇無事一時也有ヲ疑ニ陰雨一者ト蓋陰雨則無ニ出入一無ニ賓客一俗事少故可レ讀レ書東坡所レ謂此生有レ味在ニ三餘一是也云々

（七十六）雲髻巾幗　蓬窓日錄六の卷事紀二廿四丁ホに諸葛孔明以ニ巾幗一遺ニ司馬懿一巾幗乃女子未笄之冠燕京名ニ雲髻一蜀中名ニ墨龍一蓋笑ニ其堅レ壁不ヲ出如ニ閨女之藏匿一也幗音憒古對切今音國非也云々此雲髻の名は本朝の髻華によしあれば抄出せり

（七十七）民の三害　蓬窓日錄六の卷事紀二廿二丁ホに養レ木者去ニ其蛀一養レ苗者去ニ其螣一養ニ其民一者去ニ其害一民者一而已民之害三焉貪吏也土豪也盜賊也三害未レ去欲レ求レ治不レ可レ得也云々按に本朝の民に四害あり貪吏也惣代名主也金貸也博奕徒也盜賊者不レ與焉貪吏に六種あり代官手代味噌用人御普請役吟味與力留役廻同心也其人を得事難哉されど留役には其任に當れる人きこえざるにもあらず代官手代吟味與力は甚きの

限といふべし

（七十八）倭人の詩　蓬窓日錄八の卷詩談二廿七丁ウに倭人能レ詩多有ニ佳句一有ニ絕句一云棄レ子拋レ妻到ニ大唐一將軍何事苦相妨通津橋上團圓月天地無レ私一樣光倭人入貢則艤ニ舟定海之通津橋一而妨閑之法頗嚴故其詩云レ然云々

（七十九）今樣　義經記五の卷此前に一首有ありのすさびの云々　頭書枕草紙春曙抄五の卷十三四丁位の處ノ表にあり吉野法師判官を追かけ奉る條に辨慶はぬれたるよろひきて大きなる臥木にのぼりて大衆を呼て申けるは情ある太しゆあらば西塔に聞えたる辨慶がらん拍子見よとぞ申ける大衆是を聞いるゝ者もあり片岡はやせやと申ければまことや中ざしにて弓の本をたゝいて萬歲樂とぞはやしける辨慶折ふし舞たりければ大衆も行かねて是を見る舞はおもしろくありけれども笑事をぞうたひける「春は櫻のながるれば吉野川とも名付たり秋は紅葉のながるればたつた川ともいひつべし冬も末になりぬれば法師ももみぢでながれたり」とをりかへし〳〵まふたればれとはしらず衆徒の中よりをこのやつにて有ぞやとぞいひける云々同六の卷しづか若宮八幡へ參詣の條に人をすかさんとする事なれば消えんはじめていくほどもなかりけるに祐經が女房今やうをぞうたひける藤次が妻女も催馬樂をぞうたひける磯のせんじ珍しからぬ事なれどもきせんといふ白拍子をぞかぞへけるさいばら其駒も主におとらぬ上手どもなりければともにうたひてあそびけり春のよのおぼろの空に雨降てことさら世間しづかなり壁に立そふ人もきけ終日の狂言は千年の命をのぶるなり我もうたひてあそばんとて別の白拍子をぞかぞへけるおん聲も文字うつり心もことばもおよばれず云々同七の卷直江のつにて笈さがされし條にこれや此はかちうさのせうしやうしやうのさらしまといふ所になかされて「ほかげのみよするはだなかい河のみなかみいな舟のいつらしかはもかみ河のはやきせそともしらぬひばのこゑ霞のひまにまぎるゝ」とうたひしも今こそおもひしられけれ云々按に「はかちうさ」一本「はかうさ」に作り「いつらしかは」一本「わつらふかは」に作れり同書八の卷衣川合戰の條に辨慶その日の裝束には黑糸おどしのよろひの裾かな物ひしと打たるに黃なる蝶を三ッ二ッ打たりけるを着て大長刀の眞中にぎり

打板の上に立けるがはやせや殿原たち吾妻の方の奴原に物見せんわかゝりし時はえい山にてよしあるかたには詩歌管絃の方にもゆるされ武勇の道には惡僧の名をとりき一手まふて吾妻の方のいやしきやつ原に見せんとて鈴木兄弟にはやさせて「うれしやたきの水なるはたきの水日はてるともたえずとふたりあづまのやつばらがよろひかぶとをくびもろともに衣川にきりながしつるかな」とぞまふたりける云々按に一本に「三ッ二ッ」を「三ッつゝ」に作り「えい山」を「ひえい山」に作り「きりながしつる」を「きりさげながしつる」に作れり ○靜草子舞本に若宮殿のしやうめんにだいしやう殿の御座敷にはまんまくをひかれたり云々母のせんじ是を見ていかなる事ぞしづか御前かほどめでたき御棧じきにてまはぬものならば御とがめをばいかゞせんまづにははらひさふらふとて先に立てぞまふたりけるもとより舞は上手なりかたくれしほりはぎをうたひすましたりければしづか此よし見るよりもあらいたはしや母上の何に心のなぐさみてかやうにうたひ給ふべきぞ是もたゞみづからをたすけんためのまひぞかしそれにみづから只今物うき心のあるまゝに舞まはぬものならば母のとがめをいかゞせん舞ばやと思ひうちぎぬの袖引つくろい袴のおびさしはさみ立出たりし心の内さこそと思ひやられたり見わたせばれき〳〵とせられたる人々に和田ちゝぶ殿江戸葛西千葉小山宇都宮いづれか日比わがまゝにふるまはざりし人やあるぎけいの妻と有しほどは大名高家おそれをなし舞まはせて見るまでは思ひもよらでありつるが昨日は人をしたがへつゝ今日は人にしたがへり天人の五すいのきようさめぬると思へばよその見る目もはづかしゝはづかしながらしづか御前時の祝言なりければ「君をはじめてをがむには千代もへぬべしひめ小松」とうたひすましたりけりかたちは日本一也聲はたゞ迦陵頻が冥のひゞきなりけり打も吹もみな上手ひらりと上るかひなに天人も天くだりふみそろへたるひやうしに地神もうごくばかりなり入まひになりければ「しづやしづしづがをたまきくりかへしむかしを今になすよしもがな」とうたひすましたりければみすも几帳もさゞめきおめきさけぶ所に頼朝みすをおろさるゝゆゑをいかにと申にしづやしづしづがをだまきくりかへしむかしを今とうたふたはよし野山でわかれし義經をしたふ所それは頼朝見ぬ所ちゝぶ殿申さるゝ昔を今とうたふたは五ていのむかしいまにき世はをさまるといふ所めでたくおぼえ候にみすをあげられ候はでいかゞと申されたりければ御料げにもとおぼしめしみすをさらりと上げ給ふしづかは是を見て「極樂淨土の玉すだれかんしゆまんしゆの玉のはたあぐればいよ〳〵ひかります玉體つゝがなうして天が下こそのどかなれ」と三べんふんでまひければみすもきちやうもさんざめきはうしやもゆるぐばかりなりき云々

○伏見常盤草子舞本におうぢきいておゝさる事あり「牛をば桃林のやにはなしむまをくわさんのやうにかへす鴨さむうして水にいり庭鳥さむうして木にのぼる諸法實相ときく時はみねの嵐ものりの聲」それをなりともひとつづゝ申せ〳〵と仰けり云々按に此詞今樣詞とも治定しがたし此次に田歌六首あり今しばらくこゝに載て後の考をまつ ○和田酒盛草子舞本に和田大きにはらをたて異國を見ねばそはしらず本朝において武州に秩父相州に義盛なんどが打寄て酒盛せんずるに召さずとも出あひ酌をもとり今樣をもうたひ推參せんこそほんいにてあるべきにかほどめすに出あはぬとらはふしぎのものかな云々又朝夷心にあんじけるはおゝさいたるも道理又のうだるも道理そのうへ弓取はけふは人の上あすはわが身の上なるべしさすがに名ある人々にいかにとしてはぢを見すべきげにやらん此殿原兄弟は魚と水とのごとくにあにが酒をのむ時弟がのまず弟がのめばあにがのまでたがひに用心するときゝつる物を今もや五郎時宗が内にあるらんにあしうかゝつて座敷をばたて損じまつかふわられあしかりなんとおもひければ人もはやさぬ舞を立てぞ舞たりけるうすをしきのそばを取て其比海道にはやりし硯わりといふたのだいをはつたと上てはんしふんでぞまはりける「よしやあしとてきりずてられしくれたけもくれ竹ももとに一よはあるものをよしやあしとてつきすてられし庭草ももとしのぶとてあるものを」按に此硯わりの詞は小唄の類にて今樣とは別なるにや後に可考 ○高館草子舞本に龜井がのうだるさかづきをむさしどのに思ひざし立て舞をぞまひにける「蓬萊山には千とせふる松の枝には鶴すくふいはほがかたに龜あそぶ」し

ぼりみつがしらかものいれくびしぎの羽がへしをさつとさいて立さはる所にて云々又云ちたいむさしは山徒にてもらんぶ延年の上手舞をば一手ならふたりてうしをうかゞつて立たりしがかすみにかすんで大きなる聲をはつたとあげて一せいをこそ立たりけれ「うれしやとう〳〵」となるは瀧の水日はてるともいつもたえせじおもしろやいかだをくだすは大ゐ川花をながすはよしの川もみぢをくだすはたつた川都あたりにめいがはさま〴〵おほけれど遠國ながら名所かなきく山高根の殘りの雪きえ谷のつらゝもとけぬれば衣川の水かさまさつておく方の軍兵を辨慶が長刀にてみなとをさしてきりながす〳〵」ともみゐぼしといふ一きよくをいつひやうしばかりをふんでひらいた扇をやぐらより衣川へさつとなげいれ云々○春日曝記群書類從十六第十三卷下卷十丁左に此童もとより郢曲譜代をうけて藝能拔群するによりてなり母與のうちよりなく〳〵これをすゝむ此時小童「靈山の御山の五葉松」といふ今樣を兩三反うたふ云々按に永和大嘗記十二丁右に又今樣あり信俊朝臣靈山御山の句を出す代始和抄廿四丁左に朗詠今樣などうたふ寅の日は歡無極靈山

御山を出す云々又十三丁右天井の上に笛拍子をうつこゑまづ三度きこゆ次に又二度うつ其後やがて女のうつくしき聲にて聲をひきく頭書今樣アラズニ「やへ代てには初中後をはりぬさればよな」とうたひて後又さしこゑにて「曲不放逸捨復令心先除雜染寂靜而住」と誦すこれは唯識論の文也大明神の仰なるべし云々又廿六丁左第十六卷に天の中に御聲ありて云々同御聲にて今樣をうたひ給「鹿島の宮よりかせぎにて春日の里をたづねこし昔の心も今こそは人にはじめてしられぬれ」又廿七丁左御聲高く朗詠などのやうに詠て中宗の事を御讃嘆ありその御詞云頭書今樣アラズニ「妙也徹妙也妙にして更に妙なるかな甚也甚深也深にしていよ〳〵深し」○舊本今昔物語十二卷多武峰增賀聖人語に亦撥キ發セト云テ被レ撥發一ヌ泥障一懸求テ持來レト云ヘリ即チ求テ持來ヌ其レヲ結テ聖人ノ頸ニ懸ヨト云ヘバ云フニ隨テ頸ニ打懸ツ聖人糸苦シ氣ナルヲ念ジテ左右ノ肘ヲ指伸テ古泥障ヲ纏テゾ舞フト云テ二三度許シテ此レ取リ去ヨト云ヘバ取ノケツ龍門ノ聖人此レハ何ニシ給フゾト問ヘバ答テ云ク若カリシ時隣ノ房ノ小法師原ノ多ク有テ唉ヒ喧リシヲ臨見シカバ一人ノ小

法師泥障ヲ頸ニ懸テ「胡蝶々々トゾ人ハ云ヘドモ古泥障ヲ纏テゾ舞フ」ト歌テ舞シヲ好マシト思ヒシガ年來ハ忘レタリツルニ只今被レ思出タレバ其遂ント思テハテツル也云々同廿八ノ四語にビンタヽラ○日蓮錄外書九卷四丁右松野殿返事に「日月ハ地ニオチ須彌山ハクヅルトモ彼女人佛ニ成給事疑ナシアラタノモシヤ〳〵」○元服曾我舞本に其時北條おほせけるは云々盃たぶ〳〵とひかへ給ひいかに候十郎殿誠や承はれ父祖には六郎殿三浦に朝比奈曾我には十郎殿のひとつ師について舞をならはせ給ふが中にも十郎殿の御舞の勝れたるよし承る是は箱王殿の祝言のはじめなればたゞ一かなでとこはれたり祐成きこしめされてまはじものとはおもはれけるがかくては座敷のきようもなし舞ばやとおほしめし直して一せいをこそあげにけれ「しづやしづしづかをだまきくり返し昔を今になすよしもがな昔を今になさばやとやゝ暫謠しがあゝら何ともなや是はむじやうのだいぞかしまひ直さばやとおぼしめし和歌のだいをぞあげにける「君をはじめてをがむには千代もへぬべし姫小松〳〵」と三べんふんでまはれば北條をはじめれん座有し人々一度にあつとかんじけり云々○續世繼十卷十三丁左敷島の打聞にいづれのいつきの宮とかへ人のまゐりて今樣うたひなどせられけるにするつかたに四句の神歌うたふとて「うゑ木をせしやうは鶯すませんとにもあらず」とうたはれければ心とき人などきゝてはゞかりある事などやいでこんと思ひけるほどに「くつ〳〵かうなるなめするて 染紙よませんとなりけり」とぞうたはれたりけるが云々按に古本にくつ〳〵をかつ〳〵に作れり按に染紙は延喜式にあり又鶴岡放生會職人歌合三番持經先歌に「しのひかね心を人にそめ紙のくりかへすにも色は見ゆらん」○古事談三卷僧行部に惠心僧都金峯山に正シキ巫女有ト聞テ只一人令レ向給テ心中之所願ウラナヘトアリケレバ歌占に「十萬億ノ國々ハ海山隔テ遠ケレド心ノ道ダニナホケレバツトメテイタルトコソキケ」ト占タリケレバ滿泣シテ歸給云々又書寫上人可レ奉レ見二生身普賢一者可レ見二神崎遊女長者一云欲レ奉レ見二生身普賢一之由祈請給有二夢告一云々仍乍レ悅行二向神崎一相二尋長者之家一之處只今自レ京上日輩群來遊宴亂舞之間也長者居二橫座一執レ鼓彈二拍子之上句一其詞云「周防ムロツ

ミノ中ナルミタラキニ風ハフカネドモサヽラナミタヽツ」云々其時聖人成二奇異之思一眠而合掌之時件長者應現二普賢之貌一乘二六牙白象一出二眉間之光一照二道俗之人一以二微妙之音聲一說曰「實相無漏之之大海ニ五塵六欲之風ハ不吹ドモ隨緣眞如之波タヽヌトキナシ」ト云々其時聖人信仰恭敬シテ拭二感涙一開レ目之時ハ又如レ元爲二女人之貌一彈二周防室積一給開レ眼之時ハ又現二菩薩形一演二法文一如レ此數ヶ度敬禮之後聖人乍二涕泣一退歸于レ時件長者俄起レ座自二閑道一追二來聖人之許一示云不レ可レ及二口外一ト謂了即逝去于レ時異香滿レ空云々長者俄頓滅之間遊宴醒レ興云々同書五卷神社佛寺部ニ八幡臨時祭後云々式部大輔惟盛「イトヨリカケタルシタリ柳」ト云今樣ヲウクフト云々○讀古事談一卷王道后宮部に少將資賢「竹の葉におく露の色」といふ今樣をうたふ云々○撰集抄五卷十九丁左性空上人之事條に此聖人我法華讀誦の功によりて肉身にまのあたり六根清淨の功德を得たりといへども生身の普賢ばさつの尊像ををがみ奉らぬ事うらみの中のうらみに侍りとて七日祈念していまそがりけるに七日のあかつきのうつゝに天童託していはく室の遊女の長者ををがめそれこそ實の普賢なれと示して失せたまひぬふしぎと思ひおどろきて急ぎ室へいたりたまひなんとす黑衣にては遊女を見んといはん事あしかりなんとて白き小袖をき給て同じさましたる僧五人ぐして室の長者が庵にいたりつき給ひて宿をとり給ふに長者出あひてしやくとり上人に酒をすゝめ奉れりしひ奉らんとて舞をまひうたひけり「周防のみたらしの澤邊に風のおとづれて」とかぞふればならびたる遊めども同じ聲して「さゝら波たつヤレカトツト」とうけはやしけりされば是は生身の普賢にこそと思ひ給ひて目をふさぎ心をしづめて觀念をし給ふ時に巖嚴柔和の生身の普賢白象に乘給ひて「法性無漏の大海には普賢恒順の月の光りほがらになり」とうたはせ給へり又目をあきてこれを見給へば遊女の長者なりうたふこゑもさゝら波たつといふなり又目をふさぎ心をほつかいにすませば長者又正身の普賢にてまし〳〵けり上人たふとくたのもしくいましていとまを申て出給ふほどに一町ばかりさりて後此長者は俄に身まかりにけり云々○三國傳記十一卷四丁左江口室之長者事條に書寫山性空上人云々未レ拜二普

菩薩眞像一願拜二生身一祈念有ケルニ夢想ニ有レ人云江口長者行可レ拜示依レ之攝州難波里入江口行給彼人ヲ尋給家近二江河南北岸一心通二上下往來船一折節客來ノ仁雜居飮レ酒歌ヲ歌ヒケルニ吟曲奏二水閣之秋聲一盃酌數行設二花屋夜宴一其時長者ノ女歌竪ヲ取テ歌ヲ云「周防室津海ノミタラキニ風ハ吹テドモサヾラ浪立」ト聖人聞レ之正ク此人ヲバ生身ノ普賢ト云フ夢ノ靈瑞アリ奉レ見二眞實一爭カ變ラント思テ目ヲ塞ギ心ヲ攝メ座觀レ之此時長者妻生身の普賢ト顯テ手ニ持給ヘル竪ハ法花經ト變ジ口ニ吟ゼシ歌ハ此時「法性無漏の大海ニ五塵六欲ノ風不吹トモ隨緣眞如ノ浪ノ立ヌ無レ間」ト爰ヲ以テ四大現相皆是普賢也萬像差別無レ非二普賢一ト云々○辨慶物語上卷十四丁に辨慶はちやうだいまでずんとゆく雙六ばんに腰をかけ扇をひらきつかひけるが又はら〳〵とたゝみくさずり打てひやうしをとり今樣をこそうたひけれ「一度はかうと思へども此世は程もなきものをえいぐわは春の夢くさばの上に置露の風まつほどの命にてなにとて寶をゝしむらん」とかりようびんがのこゑにてうたひすましたりければ云々○布衣記永仁三年八月に殿上之小庭ニテ問籍ト申シテ瀧口祝言ニウタウタフコト有其時床木ニ腰カケナガラ瀧口ノ云クトノモヅカサ〳〵殿上之小板敷ニハ貫首之御座ナリヤト申ス主殿司答テ云イヤサモ候ハズト申ス其以後瀧口歌ウタフ也「ソヨヤ祝トナレバ松ノ枝ニハ鶴コソ巢ヲバクヘ岩ホガ上ニ龜アソブ也ヤレカトウ〳〵」如此ウタヒテ伺候スル也云々○夫木抄廿卷山部百一丁右に題不レ知梁塵秘抄よみ人しらず「甲斐にをかしき山の名は白根なみ崎鹽の山むろふしかしはま山すゝのしげれるねはま山」○增鏡六卷九丁左草枕にこたみはまづ齋宮の御まへに院みづから御てうしをとりて聞え給ふに宮いとくるしうおぼされてとみにもえうごき給はねば女院この御かはらけのいと心もとなく見え侍るめるにこゆるぎの磯ならぬ御さかなやあるべからんとのたまへば「ばいたんの翁はあはれなりおのがころもはうすけれど」といふ今樣をうたはせ給ふ御こゑいとおもしろし宮きこしめしてのち女院御盃をとり給ふとて天子には父母なしと申なれど十善の床をふみ給ふもいやしき身の宮づかひなりき一ことむくい給ふべうやとのたまへばさうなる御事なりやと人々目をくはせつゝしのびてつきじろふ

「御前の池なる龜岡に鶴こそむれゐてあそぶなれ」とうたひ給ふその後院きこしめす□せれうの里をいだす人々聲くはへなどしてらうがはしきほどになりぬ云々按に賣炭の翁の事は白氏文集四卷に見ゆ○唐糸草子下卷六丁右にその比鎌倉中にかくれなきあべのなかもちと申はかせを召されてとはせ給ひけるいかにやなかもちうけ給はれつねにきねんするしゝの間にざしきに今夜の中に小松が六本生出たり鎌倉中のわづらひか朝賴が身のうへか天下のみだれかうらなへとぞおほせけるはかせ承りそも〳〵荻萩の花の命をのぶることあまたとは申せども西王母が園の桃三千年に一ど花さき見る人も候はすちんやさいかい(諧謔ヤチ)八千世のとしをふることもちくさの八千年をふることも聞に一千年のじゆみやうもあひおひの松にしくことはなしそも〳〵君が千代をかさねて六千ざい鎌倉山にとしをよせさかえさせ給ふべきかほどめでたき御ことにあひおひの松が枝を鶴が岡の玉垣の御内に蓬萊をうつしかへ十二人のたをやめをうつして今樣をうたはせ給はゞ神とくを深く君もめでたうましまさんとうらなひたるこそめでたけれ賴朝なのめにおぼしめし六本の小松を鶴が岡の玉垣の内へうつし十二人のたをやめをそろへらるゝまづ一ばんには手越の長者が娘千壽の前二番には遠江の國湯屋が娘の侍從三番には黃瀨川の龜鶴四ばんは相摸の國山下の長者が娘虎御前五番は武藏の國入間川の牡丹といひし白拍子これをはじめて十一人也鎌倉中ひろしと申せどもひと一人にことをかき色々たづねらるゝその後万壽の姫のめのとはまんじゆを近づけて御身はみめよく今樣は上手にてましませば此たび出て今樣をうたはせ給へまんじゆさまとぞ申ける万壽きこしめし此たびの今樣はよのつねの今樣にかはりてめでたきことをばみづからなにとはからふべき思ひもよらずとおほせける更科大に腹をたてかやうなる時今樣をうたはせ給ひてこそ御よろこびもましまさんとて御つぼねさまへまゐり万壽こそ今樣の上手にて候と申上る御つぼねよりも御臺樣賴朝樣へ御披露あり賴朝大きによろこび給ひ万壽一目見んとて御まへめされ御らんじて大きによろこび御臺樣より十二ひとへの御裝束をぞ下されけるもとより姿すぐれたり肩を並ぶる女はなし比は正月十五日御まへに山をたて大宮の

弓手には賴朝の御ざしき八ヶ國の大名小名の御座敷八百八とぞきこえけるさて又めでには大御所樣と御臺樣の御ざしきをはじめとして八ヶ國の大名衆のうへがた女房衆の御ざしきかずをしらず鎌倉中のきせん上下がまゐりて見物申けるほどに鶴が岡に駒をたつべきかたもなし十二人の八少女七十五人のみや人神樂を奏して奉り手越の長者の娘千壽の前ときこえけるきせんぐんじゆのことのはに海道下りをつゞけたり「逢坂山のよるの月くもらぬかげをやながむらん勢多の辛橋野路の里霞にくもる鏡山不破の關屋の板びさしかり寐の夢はやがてさめが井のしゆくむしのいせいや尾張の國みかはなる三川にかけし八ッ橋のくもでに物やおもふらんしるもしらぬも遠江の濱名の橋のいる鹽にさゝねどのぼるあまを舟こがれて物やおもふらんまゆみつき弓ひくまのしゆくさよの中山せとをすぎうつの山べの蔦の道手越を過て行ほどに月をきよみが關の戸をおし明がたの空見れば富士の煙やなびくらん夢にもみやこ人こそめでたや御代にはいづの國浦嶋が玉手箱あけてくやしきはこね山かまくら山を來て見れば鶴が岡とや申すらん鶴は千年の名鳥松は千とせの名木めでたし」とうたふたり二番黃瀨川の龜鶴しぼり萩をうたふたり「伊勢の濱荻難波のあし鎌倉山や武藏野の草の名おはしと申せどもしぼりはぎにしくもの候はじ」とうたふたり三番は湯屋が娘の侍從太平らくをふむ四番は入間川のぼたん硯わりをうたふたり五ばんのくじはまんじゆ也御臺樣より御裝束は給はる年は十三の春なれば十二ひとへをちやくしつゝ花のまそでをかへし樂屋のうちより出けるを物によく〳〵たとふれば花木に鶯のはぶき出たる風情も是にはいかでまさるべきはたとあけてうたふたり「鎌倉はやつ七鄕とうけたまはる春はまづさく梅がやつ扇の谷にすむ人の心はすゞしかるらん秋は露おくさゝめがたにいつみふるかや雪の下万年かはらぬ龜が一の谷鶴のから聲打かはし由井の濱にたつ波はいひ嶋江のしまつゞいたり江のしまのふくでんは福聚海無量の寶珠をいだき參れたり君が代はさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで高砂やあひおひの松万歲樂に御いのちをのぶ東方朔の九千ざいうつゝらの八万ざいしやうみやうこじの一千歲西王母の苑の桃三千年に一度花さきみのなる

と申せどもあひおひの松にしくことさふらふまじそも〳〵君は千代をかさねて六千歳さかえさせ給ふべきかほどめでたき御事にあひおひの松がえふくじゆむりやうのよろこびを君にさゝげまうさん」と小松の枝をゆりかつぎみなじろの大まくへ二三度四五どまひかゝりたりければ頼朝御らんじてほうらいにたちゑぼししろ鞘巻をさしながらみなじろの大まくをなげあげて「かゝるめでたき御ことにあひおひの松が枝を給ふらん」とて出給ふもとより頼朝は今様は上手なりたつ波ゐる波よする波ひくしほの拍子足をたんとこふしきとふんで扇ながしをうたひすましまんじゆが花のたもとへ頼朝の狩衣の御袖まひかさね〳〵二三ど四五どまはせ給へば風も吹ぬに大宮の玉の戸もきり〳〵はつとひらき八幡も御納受ありときこえけり云々○一休噺二の巻女の死骸を河へ流す事の條に我等が一句をさづけてすくふべき也水葬にせんあひだ鴨川へつれゆけとてそのまゝ座をたち打ちつれて川のほとりに参りしかばその死人を出せよとて一休かの死人の首に繩をつけひつかたげて川岸に立てのたまはく「川舟をとめてあふ瀬の波枕うき世の夢を見ならはしのおどろかぬ身のはかなさよ」とて川舟へざぶとなげすてゝはやかへり給ひける夫ヤ子ども驚て御氣もそゞろなるか此一句は江口をうたひ給ふ也かゝる事にてはうたかひがたしと彼死がいを引づりあげねんごろにをさめて云々○甲陽軍鑑九上卷四丁右大門到下合戦條に又その比岩村田にお宿のクミと申女でしの女を四五人持て歌をうたふてをどる「さても花の村上や錦の直垂袴にて鎧を着してきたりとも甲斐をこのむはお大事(ダイジ)よ」とうたひ廻るは始村上殿甲州を望申され候事天文七年戊戌晴信公父信虎公を駿河へ追出しまゐらせられたりし時の事を後晴信公度々勝給ふにより如此うたふなり云々○土佐日記十日條に「春の野にてぞねをばなく若すゝきにてきる〳〵つんだるなをおやゝまぼるらんしうとめやくふらんかへらやよんべのうなゐもかなせにこはんそらごとをしてをぎのりわざをしてせにももてこすおのれだにこず」同廿一日の條に「猶こそくにのかたは見やらるれわがちゝはゝありとしおもへばかへらや」○枕草紙物のあはれしらせ顔なる物の段(春曙抄本四卷廿丁右)に職の御曹司におはしまします比西の庇に不斷の

御讀經あるに佛などかけ奉り法師どものゐたるこそさらなる事なれ二日ばかりありてえんのもとにあやしきものゝ聲にて猶その御佛供のおろし侍りなんといへばいかでまだきにはといらふるを何のいふにかあらんと立出て見れば老たる女の法師のいみじくすすけたるかり袴の筒とかやのやうに細くみじかきを帶より下五寸ばかりなる衣とかやいふべからんおなじやうにすゝけたるを着て猿のさまにていふなりけりあれは何事いふぞといへばこゑ引つくろひて佛の御弟子に候へばほとけのおろしたべと申すを此御坊たちのをしみ給ふといふはなやかにみやびかなりかかるものは打くんじたるこそあはれなれうたてもはなやかなるかなどてこと物はくはで佛の御おろしをのみくふかいとたふとき事かなといふけしきを見てなどかこと物もたべざらんそれが候はねばこそとり申侍れといへばくだもの廣きもちひなどをものに取いれてとらせたるにむげに中よくなりて萬の事をかたる若き人々いで來て男やあるいづこにかすむなどくちゝ〳〵にとふにをかしき事そへごとすれば歌はうたふや舞などするかととひもはてぬに「よるは誰とかねん常陸の介とねんねたるはだもよし」これが末いとおほかり又「男山の峰のもみぢはさぞ名はたつやさぞ名はたつや」とかしらをまろばしふるいみじくにくければわらひにくみていね〳〵といふもをかし云々同草紙ことに人にしられぬ物の段(春曙抄本十一卷十一丁左)に賀茂へまうづる道に女どものあたらしきをしきのやうなる物を笠に着ていとおほく立りて歌をうたひおきふすやうに見えてたゞなにすともなくうしろざまに行はいかなるにかあらんをかしと見るほどに郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心うき「郭公よおれよかやつよ己なきてぞ我は田にたつ」とうたふに聞もはてずいかなりし人かいたくなきてぞといひけん云々○千五百番歌合十四卷冬三初九百七十八番判詞に今樣に「おまへの池なる氷水心とけたるたえ間かな」とうたふをたゞいまかなとうたふ事も侍るとかや云々○舊本今昔物語廿八卷四語に有ト有ル殿上人此ノ五節所ヲ恐サムトテ皆紐ヲ解テ襴表衣ヲ脫下テ五節所ノ前ニ立並テ歌ヲ作テ歌ハムト爲ル也其ノ作タル樣ハ「鬢ダゝラハアユガセバコソユカセバコソ愛敬付タレ」按にびんだゝらの事永和大嘗會記十丁左十二丁左承安

元五節部舞妓圖詞書などに見ゆ　○寢覺記一卷十丁左正直を先とすべき事の條に惠心僧都金峰山にまさしきしやう女ありときゝて只一人尋おはして心のうちの所願うらなへと侍ければ聖女打きゝて先なかめける「十万億の國へは海山へだてとほけれど心の道だになほければつとめていたる所なり」と打いへるよりして心正直にて往生をとぐべきよしをさま〴〵いひければ云々

松屋筆記巻之八十二

平與清稿

（一）垢すりのさいで汗手拭　身のかたみ（群書類從本廿三丁オ）四十一段にもとよりあら布たふなどは御かほのすりとて高まつ女院の太布めされしより仙洞の女房衆の御かほ拭になり候へるほどにとりわきしん上候ひし也云々按近世太布を汗手拭に用る事古き代にならへりといふべし

（二）菅裁物忌　止由氣宮儀式帳（群書類從本七丁左）に次取二吉日一山口神祭用物幷行事如レ左云々庸布四段給二大内人一人菅裁物忌一人父一人御巫内人一人各一段云々按庸布一段づゝ大内人と菅裁物忌と菅裁物忌父と御巫内人とに給ふ也菅裁物忌は女なればその父が相添て事を助くるなるべし○又（八丁オ）即菅裁物忌以二忌鎌一氏草木苅始然以後諸役夫等草苅木切所々山野散遣云々按菅裁物忌は草木を苅切始に忌鎌取持て事始の作法を行ふもの也菅は清々之といへる詞に通へば音のおなじきをもて祓の具にし大祓詞にも天津菅曾乎本苅

斷末刈切氏八針掃取辟氏云々　神樂酒殿歌或説になかとみのあまのこすげをさきはらひいのりしことは今日のひのため云々などを見ゆさて菅裁は清斷にて清清しく草木を斷刈よしの名也○又（八丁オ）次取二吉日一爲二正殿心柱造一云々　庸布四段給二大内人一人菅裁物忌一人御巫内人一人父一人幷四人各一段云々又（八丁ウ）次取二吉日一宮處鎭謝之用物幷行事如レ左云々菅裁物忌一人父一人並二人明衣給云々其祭告刀波菅裁物忌以二淨鎌一氏宮地草苅始次以二淨鋤一氏宮地穿始奉云々按に此外菅裁物忌の名所々に出たり又（廿一丁ウ）菅裁物忌無位神主米刀自女とも有都て木を切始草を刈始宮地を穿始などする女也○延喜大神宮式十二に根倉菅裁土師器作物忌等三人幷大物忌御炊鹽燒根倉菅裁土師物忌等父六人云々按に此外式中所見おほかれどわづらはしさに擧ず○二十二社註式（群書類從本八丁オ）度會宮職掌人の條に菅裁物忌云々按に諸社根源記はた同說也與清曰菅裁物忌ふるくはスガタチノモノイミと訓ならはしたれどスゲタチとよまんもしかるべくやスゲはソゲと通ひ蕪穢を拂退（ハラヒツグ）穢土を穿退（ホリツグ）などするより名おへりと見ゆ菅といふも祓の具に用て物をはらひ退（ソゲ）て清々しくするゆゑなるべし清々（スガ〴〵シ）之といふ詞も蕪穢を拂退（ハラヒツグ）たる跡の清きより心の清にもいへりと見ゆ物忌は神宮雜例集一の供奉始事條に大同二年二月十日大神宮司二宮禰宜等本記十四箇條内朝夕御饌條云皇大神宮倭姫命戴奉天五十鈴宮爾令二入坐一坐二鎭理一給時爾大若子命乎大神主止定給天其女子兄比女手物忌定給天云々大神主爾仕奉氏人等以二女子乃未一夫婚一物忌止爲天令二供奉一云々など見えたるにて知べし

（三）吉田より神の位階を授　世鏡抄（卅丁カ）に伊勢と近江の境川につきけるに中將のたまひけるは道無が物語にて日のたち道の遠きも都の空のなつかしさも打わすれける也いよ〳〵物語し侍れとありしに道の左の山に新しく作りなせる宮あり所のものに尋ぬれば古はいかゝいひけん此宮は今は氏子の中に有德なるものあまたありて近きころ吉田殿に申し正一位大明神になり給ふといへば中將のたまひけるはそれはいかやうなる此神には子細の候て正一位とはさづけられけるとのたまひければ所の者申は何の子細も候はずたゞ氏子が金をいれて候ゆゑに正一位に成給ひぬ

といへば云々按に世鏡抄は長享元年の書也その比もはら吉田より神位を授し事知べし

(四)やぶ醫者の問藥　同書(卅一丁オ)に大醫のくすりのむ事なければ藪醫者の問ひ藥を漸く用ゐるほどに大かたは非業の死にて命のかぎりを見たる人一人もなし云々按に道三の問藥とて湯を試に與る事あり 頭書 やぶ醫者鷹筑波一ノ廿八丁ウ

(五)菖蒲の花流行　世鏡抄(卅四丁オ)に近年天下の人あやめの花を好めば紫と白ばかりならではむかしよりなかりしにうす紅くれなゐうすがきあさぎ色とり〴〵に三四色まで出ける又此比は人々さのみ好むていなければ色々の花すたり今はむかしのごとく紫と白とばかりに又なり候かやうの非情の物だにも人の好にしたがひて此方の好むごとくに應じ候へば云々按に近比朝顏流行せるをり黃花斑色黑色さま〴〵の花出たりき万兩花立花石菖など流行せるをり〴〵さまざまの異色異花葉の物出たりき

(六)法師伊勢參宮　法師の伊勢參宮の例は大神宮袈裟記なぞ所見あり俊乘坊重源東大寺建立の願も伊勢の御告ありしよし也 世鏡抄(卅九丁ウ)に僧尼參宮して祓所の內陣までいひし事見ゆ

(七)人相轉變　續高僧傳十五の卷(十四丁左)曇藏傳に年十五占者謂爲二壽短一二親哀レ之即爲二姻婿一既本非レ情慮レ有二推逼一遂逃二亡山澤一云々とありて出家の後春秋六十九にて順世すこれ出家の功德によりて天相を壽に轉じたる也史記漢書の李廣傳に廣が薄命なるを聞て相者必德を損せし事あらんとていへるに廣答て降卒八百人を坑にせるよしをいふ相者さては其不德によりて薄命なりといへり秦の白起自殺の時長平の降卒四十万を坑にせし事を悔たる事も史記白起傳に見ゆ相少納言が高倉宮を相せしなども相者の失にあらず相に轉變あれば一概に定むべからずまた相をたのみて愼まず却て善相を惡相になす事あり愼むべし恐るべし

(八)算盤　鷹筑波集三の卷(九丁オ)「あき人はあらやうがましこくそかひ」といふ句に「かたちにぬりておけるそろばん」云々 此書は寬永十五年長頭丸の集たるにて刊本也

(九)看病看慰　續高僧傳十一の卷(三丁カ)智方傳に及二疾甚一海恒來看慰云々

(十)雜學承學　續高僧傳十二の卷(廿五丁ウ)慧暢傳に偏學二雜心一志存二名實一云々漢書董仲舒傳十丁左に今陛下幸加レ惠留二聽於承學之臣一云々注に師古曰言轉二承師說一而學レ之蓋謙辭也云々

(十一)北政所　桃華蘂葉に大臣之後攝籙以前以二室家一稱二北政所一事治承三十二月十日玉葉云兵部卿入道信範來數剋談話御一家皆大臣之後雖二攝籙以前一以二室家一稱二北政所一延久元永例也補二家司一供二節供一云々此事未レ知尤有レ興云々

(十二)金輪　三議一統上(廿五丁オ)に金輪のあしは二足を賞翫の方へ向べし貴人の方へあしを向事は見ぐるしければ也云々 又五十二馬上の弓の事弭(ハズ)より五六寸上を持馬と弓との矢指を三ツ金輪に持べし云々長秋記保延元ノ四ノ十七ノ條に居二高火爐一令二中居一鉢其上立二金輪一居レ鉢(スヱ)云々 頭書 下學集下ノ十四丁オ器財門に鐶輪カナワ云々續卷二丁カ鐵輪ヲ載

(十三)時宜をする　同上五十丁オに本座へなほらば我下になほる人に時宜すべし云々 禮從レ宜といふより出て時宜に隨て禮を行ふよし也甲陽軍鑑十四卷(四十ノ下品廿丁右)に又其人と中能と惡くとかすみからおりて時宜をいたせ云々按に禮從レ宜といふにゝよれる名なるべし甲陽四ノ九丁オ同十九丁オ同十七四十七品廿四丁ウに順儀

(十四)馬手指(メテサシ)鎧通　高舘草子に龜井の六郎しげきよはひとときはすぐれていで立たり肌に取てはからくれなゐ引ちがへひせいがうのはづだかによせかけめゆひのひたゝれのくゝりをゆつてしめたりけり楊梅桃李のさうのこて白檀みがきのすねあて熊の皮のもみたびしろかねにてへりがねわたしあくちだかにふんごうたりしゝにぼたんのはいだてしからにしきおどしこがねざねの腹卷ざつくとゆりかけ糸火威の鎧二兩かさねばらりときをどりあがつて高ひぼかけゆつて上帶ちやうどしめ九寸五分の鎧どほしをめでのわきにさしたりけり一尺八寸の打がたな十文字にさすまゝに三尺八寸けいしあふひ作りのたちはいて四十二さいたるうすへうをはづだかにとつてつけおなじ毛の五枚かぶとに鍬形打てゐくびにき白あやのほろをさつとかけぬりごめの弓の四人張せめのせきづるかけさせまん中にぎりよこたへ云々○敦盛草子に平內左衞門承てぞんずる道候きいてまゐり候はんと屋形の內につつといつていでたつその日の裝束ははなやかにこそ見えにけれ肌には白き帷子みなしろをつ

て引ちがへかちんのよろひひたゝれの四ッのくゝりをゆる〳〵とよせさせ楊梅桃李のさうのこてびやくだんみがきのすねあてに獅子に牡丹のわいだてしいとひおどしのよろひの巳の時とかゝやくをくさずり長にさつくときゆつてうはおびちやうどしめ九寸五分のよろひどほしをめでのわきにさいたりけり一尺八寸の打刀を十文字にさすまゝに三尺八寸候ひける赤銅作りの太刀はいて梨子打ゐぼしにはちまきし白柄長刀を杖につき我におとらぬ郎等どもを七八人相ぐし云々按右の二書に九寸五分のよろひどほしをめでのわきに指ざあるは今いふ馬手指也鎧とぼし必馬手にさすものにはあらずこゝの出立は打刀を十文字に指太刀をはきさて右の方に鎧ざほしをさしたる也九寸五分の鎧ざほし和田酒盛草子にも見えて刀鞘巻の類也永正四年の細川澄元の肖像に馬上にて長刀を右手にもち鎧徹しを右の脇にさし左に太刀を佩たる圖あり打刀さしたるさまには見えず鎧徹しの柄は赤糸にてまき小き鐔あり鞘に帯留ありて鞘ながらぬけざる用意したりさて下緒にて帯に結付たるさまに見ゆ甲州流歩騎必要二の巻兵具部野太刀妻手指心得の事條に妻手指はヨロヒドホシノ┐馬手ニ指故名トス妻手指ハ折金ヲコジリノキハニ仕付テ折金ノ頭ヲコジリノ方ヘムケタルモヨシ子細ハ下緒ニテ折金ヘ引カケ止レバサヤ落ヌ故也云々 頭書 信田草子廿四丁ウに九寸五分のよろひどほし和田酒盛草子十三丁オ九寸五分の鎧どほし

（十五）厠籌　修善要法集下卷四十七丁オ出家日用行篇上厠法條に敎誡儀云覺レ欲ニ出入一須ニ早去一不レ得レ臨レ時失ニ儀則一至ニ厠前一知レ有ニ尊宿一當須レ避レ之至ニ厠前一彈指三下或聲欬聲知レ無レ人方入隨ニ高下一褰レ衣漸蹲漸揎不レ得ニ預高揎一レ衣令ニ身赤露一夜暗黑當用ニ厠籌一於ニ厠孔中一向ニ前後一劃令レ知ニ闊狹長短正及不正一不レ得レ咳ニ唾厠四邊板上及屎闥中一不レ得レ用ニ文字故紙一多レ人之處若厠有ニ人待急一縱未レ了且須レ出レ厠若脫ニ觸履一不レ得レ安ニ淨鞋履常所一レ蹋處一手淨摩洗先用ニ黃土一二三度次用ニ細灰皁莢一見ニ厠狼藉一常掃令レ淨見ニ內外狼藉一當ニ掃除去令レ淨拭巾不淨當ニ洗令レ淨見ニ觸履不淨一當ニ洗令レ淨用ニ灰土一處不レ得ニ狼藉一云云按に厠籌は闇夜の時厠孔などかきまはして糞をひりかけざるやうにあらかじめ試るもの也尻拭紙は別也故不レ得レ用ニ文字故紙一といへり 頭書 輟耕錄十二ノ五丁オ

（十六）一眼の龜浮木にあふ　盲龜の浮木にあふたとへは莊子に出て碧巖集類の禪語の書におほく見ゆ馬揃草子に君の御判をがみ申す事一眼のかめのたゞさかに浮木にあへるがごとしとう〳〵領掌申さんとて三浦三百九十三騎と長帳に判をする君に頼まれ奉る云々ト傳百首の序にも見ゆ信田草子廿一丁ウにも不慮にまゐりあふたるは一がんの龜のたまさかにふぼくにあへるがごとし云々 頭書 法華經莊嚴王本事品繪世繼十ノ六丁ウ數島の打聞に行方もしらぬうきふしの身なれどもしらしめぐらばながれあへ君

（十七）大問大對　尊貴の間をば大問といひ尊貴に對るを大對といふ漢書董仲舒傳十五丁ウに江都易王問ニ仲舒一曰云々 仲舒對曰臣愚不レ足ニ以奉ニ大對一注に師古曰大對謂レ對ニ大問一也云々

（十八）だこ駄肴駄餉　橘窓自語に南都方の樂人例年霜月若宮祭禮の竟宴の心にや年々頭屋（カシラヤ）といふてつかさどる家ありそこにあつまりてだこと酒肴をまうけてあそぶ事あり宣胤卿記永正三年五月十五日陰自ニ石山一還向ニ於上大路邊一或人設ニ駄肴一と見えたる駄肴の類なるべしふるく駄餉と書て駄（ダ）がうともよめれど南都の方は駄肴なるべし 頭書 守武千句廿六丁オ「風呂に入いりては塢をかきつばた」

（廿）香合の始并蘭園といへる香ノ書　香道蘭の園 駄餉 頭書 下學集下卷三丁左隱藝門に駄向（ダカウ）盤中ノ食物向或作レ肴云々類聚名物考飲食（ヰ）三吾妻鏡一ノ十九丁オ同六ノ五十六丁オ厨事類記十一丁オに八幡行幸之時於ニ桂河一駄餉供レ之春日行幸美豆頓宮狛河原駄餉供レ之云々馬ニツケテオクル餉ナレバ駄餉ト云也

（十九）振鉾えんぶ　同書に舞樂のはじめに鉾をふるを振鉾といへり振鉾と書てえんぶとよむべし吉野記に延舞參語抄に鹽夫と書き又樂書には厭舞ともかけり皆假借にてえんぶといふべき證據也

（廿）大極殿オアテ大安殿　同書に大極殿は大安殿にておあてといふべきを嵯峨天皇の御名にふるゝより大極殿とのみいふことになれるにや 頭書 大極殿は三國の魏に始れり

（廿一）封隱　橘窓自語年中行事畫の事をいへる條に三河行遍參語抄二云東寺相承道具等封之事中略件ノ封ヲ付テ後ハ封隱（フウカクシ）トテ別ノ紙ニテ封ノ上結ニ付之一云云

（廿二）風爐　陸放翁詩選七の卷廿八丁ウ同ニ何元立蔡眉吾一至ニ東丁院一汲レ泉煮ニ茶詩に雪芽近自ニ峨嵋一得不レ減ニ紅囊顧渚春一旋置ニ風爐一清樾下它年奇事記ニ三人一 頭書 守武千句廿六丁オ「風呂に入いりては塢をかきつばた」

（廿三）香合の始并蘭園といへる香ノ書　香道蘭の園

一の卷香の傳來條に慈昭院贈相國東山殿此道ふかく好み給ひて花の朝月の夕雨夜雪中薫炷あらずといふ事なし時の名卿大夫縉紳素兒女或これを以て雪雨の情を起し或以詩歌の媒に作る相國の麾下沙彌眞相此道の深者也文龜の比此道にふかき十士香を合す牡丹花肖柏歸牧菴玄清唉山軒大碣二階堂行二松田長秀肥田兼直內藤元種波々伯部(我歟)盛鄕志野宗信志野祐憲等同類同應同氣相求て名香二十種を左右十番にわかちて優劣を爭ふ牡丹花夢庵批判ありて勝劣を定む猶和歌所の判の詞におなじ逍遙院內府(三條西殿)奥書を加へられたりこれ名香合の權輿也云々蘭の蘭十卷附錄一卷合せて十一卷寫本也奥書に延寶五丁巳春自二鈴鹿周齋一授レ之山下弘永○寶永七庚寅八月自二弘永一授レ之栗本穩置○斯書原本一時之草稿而前後錯雜穩置患レ之精訂二舊稿一始斯書大成名曰二蘭園一享保十八壬丑八月上旬自二穩置一授レ之菊岡宜行○時元文二丁巳首夏向二東窓一崔下菴沽凉房行書斯草稿雖二穩置傳來一爲二雜書一不レ成レ全房行加レ力今大成號二蘭園一とあり

(廿四)香の十德 同書一の卷に香十德 一休和尙作「感二格鬼神一 淸二淨心身一 能除二汚穢一 能覺二睡眠一 靜中成レ友 鹿裡偷レ閑 多而不レ厭 寡而爲レ是 久藏不レ朽 常用無レ障」

(廿五)香の祖神 同書一の卷に香の祖は上宮太子也香の會席には必太子の像を掛べし和歌に三神連歌に天滿宮を尊ぶにおなじ云々

(廿六)富士香爐 同書一の卷に或書に曰花山院寬和年中異國より石公といふもの來朝して香を炷てたのしむ帝彼を召れ相共に翫給ふに香爐より立烟を富士の高根をおぼしめしいでゝ香爐を富士にかたどり八葉の嶺八ッの谷七ッの位を定られ灰は五色の雲に准へ五ッの色をなす靑き灰は春の山邊の若草のかうばしきにたとへ赤きは夏の明方のあかねさす風情薫風南より來れりとや白きは秋の千草のいろ〳〵にその花におけば其色を見する白露の白菊におけるありさま黑きはたがまことよりしぐるゝ空の雲のけしき黃なるは中央を表すさるが中にも白き灰は時しらぬ富士の雪あるはまたしら雲のかゝる姿なるによりて第一白きをいつくしむ敷はみやしろ燐(すゝき)は木花開耶姫の神體とし香と煙は神威の光りあらはし芳盆は田子の浦浪たゝう紙は三保の松原を移せり香爐は口に一空

を備へ三ッの足は日月星の三光天地人の三ッとして本朝の神秘とし給ふさるによりて香を炷家は天神地祇の守り給ひ惡魔の障碍をはなれ其日のさちを設く移宅婚姻もろ〳〵のことぶきの日は必香を炷べし又衣にとめて着すれば惡疫を避べしとの綸言貴ぶべし云々

(廿七)香道傳來并十炷香組香 同書一の卷に夫十炷香は組香の本元也文龜の比室町家贈大相國の時三々九葉に一花を加へて是を十炷香とす諸々の組香は此十種香を根とせりさるによつて組合にしたがひ別の香札を用ふる事ありといへども多は十炷香の札を以爲所よろしきとす其頃沙彌眞相志野宗信牡丹肖柏等一流を發し組香二十餘品あり又宗信息志野入道不寒齋宗温父の跡を繼其後元和寬永の頃後水尾の皇女院の御所相ともに此道をふかくふませ給ひ此御宇に至て万國より佳種を奉りて奇品滿てり其御代にこそあまたの組合香をなさしめ給ふとなり凡一百餘品といへども日々夜々の御遊なりしかばその際限あらざる歟その中に勅作あり院作あり或は博陸大尉の組まれ玉ひし香あり月卿雲客こゝろ〳〵に作せられ折にふれ節にしたがひ叡覽に備へられしより多くの組香世にひろまれりとぞ玆に正保慶安の頃鈴鹿周齋王城の地に住んでやんごとなきかたに立入て諸家の組香をつたへ承りて此道に耽て香道深秘をきわめ世にしられたる深者也延寶のはじめごろ江都に來りぬ又衣山靭負丞宗秀は堂上方につかへて香道にふかく周齋と交りを厚うしけり後に仕を辭してこれも江都にくだり周齋に便りして住む所をほとりにす此兩師より受傳る所は山下氏弘永老人なり弘永より傳ふは栗本穩置と弘永息一學に鈴鹿の奥儀は殘れり然るに中世香道しばらく盛んならざるにや其道を失ひ組香の名のみありて其法あきらかならざる品おほし近代また香道流布あるにおゐて古銘をかりて新作せしめ印本の異說ありこれらは信ずるにたらず先の兩師はあらたになせる組香をかたく制す寬永の頃の組香二百餘品あり是に事のたらずといふ事なし何ぞあらたになす事あらんやまた近代の香道者いにしへの志野流相阿彌流といふに准じて自流をたつる人多し香道におゐてはあるべからず先の兩師香の奥儀は極めたれども自分の流儀を立るにあらず古法を師とするもの也た

だ古實を守るを以香道の本意たるべしとの教なり香の極秘は十百炷に滿たるにて門葉に傳ふべしと先師の掟也紫甘翁門人菊岡宣行誌同門人崔下菴書レ之云云崔下菴は沾涼といへる俳諧師にて江戸砂子世事談綺などの作者也俳諧の書の著作はた多し

(廿八)甲子紀元　甲子紀元全九卷清人吳晉德字則明が著作也道光十四年甲午小春二十八日平湖胡惠孚が序あり黃帝八年甲子より明思宗の崇禎十七年甲子までの間を繫年錄にせし年代記也卷一は凡例綱領也卷二卷三上同下卷四同下まで五卷は繫年錄也卷六より卷九まで四卷は紀元依韻編とて唐土日本朝鮮諸夷國僭僞等の年號を韻字にて部類せる也錢文の年號も擧たり日本の事おほく見ゆ必讀すべき簡便の書也日本天明寬政等の年號もあり

(廿九)私黨　橘泰が筆のすさび(一名芝屋隨筆)上卷十四丁ウに熊谷次郎直實は桓武天皇の裔平直方の後直貞の子也昔下毛野國に大なる熊出て人を害す直方壯年の時射術に達したるままその熊を射殺たり一族感賞して吾輩の頭なりといふ意にて私の黨の長也と尊賞す依て直實も士の黨の族頭と稱せりと此事藝州迎接院の緣起に詳に記せり云々按に此說傳會妄談笑べし私黨は崎西黨といふ義也崎西はもと武藏國崎玉郡なるを吾妻鏡には崎西郡とありてその比崎西崎東と分れたる也熊谷は崎西郡にて其黨の長なれば私ノ黨の旗頭の稱あるにやさて崎西は私部(キサイベ)と相通ひ私ノ字をキサイと訓より北條五代記などに私市とも書り私市は私の里(キサイ)に市あれば也私部の姓は新撰姓氏錄に見ゆ

(卅)おたふくの面　筆のすさび上廿三丁ウに黃山谷の詩集に曰大醫孫君肪字景初自號二四休居士一山谷問二其說一四休笑曰麤茶淡飯飽即休補レ破遮レ寒暖即休三平二滿過即休不レ貪不レ妬老即休とあり三平二滿とは手偏(テヘン)字面の事也

(卅一)手跡擇レ日毋二面目一成人　女婿墮弱狐疑若輩吉日　手跡は史記循吏傳に手迹と有擇日と毋二面目一は晉世家成人と女婿は左傳共公廿八年墮弱は晉書狐疑は離騷若輩は輟耕錄に見えたるよし筆のすさび下卷七丁にいひたり吉日は毛詩

(卅二)緯書　緯書いづれの世になれるものとも知べからねど三國志晉書などに圖纖の事おほく見ゆ後漢書歷志の和帝永元十四年の詔に考靈曜命歷序皆有二甲寅元一と見えしや物に出たるはじめなりけん鄭玄譙周など引用し魏の宋均は注を加へたり晉張華皇甫謐梁の蕭吉等も著書に引用ていとくだれる世のしわざにあらねば古傳の說なしともいふべからずその殘編古徵書に收たれどなほもれたるもおほかるべし

(漢書藝文志ニ)書二ノ廿三丁ウ先主傳に譙周等上言臣聞河圖洛書五經讖緯孝經援神契ナドヲ引タリ孔子所レ甄驗應自遠諮案二洛書甄曜度一曰云々トテ孝經鉤命決讖制度通十一ノ廿六丁オ

(卅三)文字の始　本朝文字の始は神功征韓以後にて上古は口傳の外さる記號のわざなきよし古事記序古語拾遺序などの說也されど釋紀に肥人薩人の書名見え崇神紀新撰姓氏錄などに崇神の御世任那附屬し奉れる事あればいとふるくより漢土の字傳はりけん爾雅に倭人貢二鬯草一といひ日本紀に一書云と引たまへるなども古く書ありけんとおもふよし也漢土の始も孔安國が書の序に伏羲造二書契一といひたれど路史の餘論に書之敘曰伏羲氏王二天下一造二書契一以代二結繩之政一由レ是文籍生焉是則書契之興出於羲氏一有二不レ疑者一無懷氏固已封二泰山一昭レ姓紀レ號播二之山石一其書略已見二於尉律一則是伏羲之有二書契一爲レ不レ迮也曷得レ謂レ至二黃帝一始有二書契一乎と見え孝經援神契に封二于泰山一考レ績燔々禪二于梁父一刻レ石紀レ號示二典功一などあり史記封禪書家語などにも孔子泰山にのぼりて封禪せるあとを見し事あれば文字の始大古にありといふべし

(卅四)蔀首一蔀一紀一元　易乾鑿度に孔子曰五德之數先立二木金火水土德一一蔀七十六歲因而四レ之爲二三百四歲一甲子木德主二春生一二三百四歲庚子金德主二秋收一二三百四歲丙子火德主二夏長一二三百四歲壬子水德主二冬藏一二三百四歲戊子土德主二季夏致養一二三百四歲凡一千五百二十歲終二一紀一五德者所レ以立二尊號一論二天常一志二長久一也略引とあるにて一蔀七十六歲なる事知べしこれを四ツ合せて三百四歲の間は一德也たとへば仲冬建子月十一月也の朔甲子に當り冬至も又その日に當るこれを朔旦冬至といふこの日の子時夜の九ツ時也を始としこれより七十六年の間を甲子蔀といふさて七十六年目の仲冬朔癸卯に當り冬至もこれにあたれる癸卯の朔旦冬至より七十六年の間を癸卯蔀といふ其次壬午蔀其次辛酉蔀を合せて四蔀三百四年の間を木德といへりそは最初甲子蔀にて木なれば蔀首によりて木德とす次に庚子己卯戊午丁酉の四蔀三百四年の間

を金德といふそは蔀首庚子にて金なれば也次に丙子乙卯甲午癸酉の四蔀三百四年の間を火德といふそは丙子が蔀首なれば也次は壬子辛卯庚午己酉の四蔀は水德也戊子丁卯丙午乙酉の四蔀は土德也總て二十蔀一千五百二十歲を一紀といふ三紀合せて四千五百六十年を一元といへりさて甲は木の兄乙は木の弟にて甲則木也子は十二支の始なれば甲子を木德とせる也庚は金の兄辛は金の弟也丙は火の兄丁は火の弟也壬は水の兄也癸は水の弟也戊は土の兄也己は土の弟也これにて五德の相配する子細推はかるべしこれ五運也漢土にては十干を陰陽に分て甲丙戊庚壬を陽とし乙丁己癸を陰とす本朝にては兄弟に分てり 與書度制通ノ二ノ四十二丁ウ詩經ノ疏に三統曆云七十二歲爲二一蔀一二十蔀爲二一紀一 章蔀紀元の四法あり太昊甲曆の大要也淮南子天文訓後漢書律歷志史愚管抄三ノ廿二丁ウに世間は一蔀と申て一蔀がはどなれば六十年と申支干おなじ年に廻りかへるほど也云々

（卅五）握先　易乾鑿度に歷元名二握先紀一日甲子歲甲寅求二卦主歲一術曰常以二太歲一紀レ歲七十六爲二一蔀一二十蔀爲二一紀首一即置二積紀首歲數一加二所入蔀歲數一以二三十二除レ之餘不レ足者以二乾坤一始數二一卦一而得二一歲一末算即主歲之卦也云々 鄭玄注に握先爲二歷始名一言無レ前也云々乾鑿度二卷全存す

（卅六）丹書赤雀　周の興る瑞に赤雀丹書といへるはもとつくり事にて陳涉吳廣が狐鳴魚腹の書の類也そは王充論衡に周取レ殷之時大公陰謀食二小兒丹一敎云〻殷亡兵到二牧野一と見え孫穀評に周室丹書灼々七十八字使レ在二後世一則以爲二魚腹書狐鳴書一甚則爲二天書之誚一而已矣古之世帝王何其神而民何其愚易レ惑也然以二雁帛書燕足書一推レ之則此丹書亦當時有二幻術畸人一繫二書赤雀一偶炫二其奇一而此雀偶集二于昌之戶一遂以爲二神聖之符一未レ可レ知也又不レ然便佞臣皆能爲レ之耳

（卅七）王者五行の德　王子年拾遺記に黃帝以二戊巳之日一生故以二土德一稱レ王也云々按に戊巳の巳は誤也戊巳といふ干支はなければ也戊は土の兄にて土なれば土德といふ也家語に昔聞二諸老聃一曰天有二五行一木火土金水分レ時化育以成二萬物一其神謂二五帝一古之王者易レ代改レ號取二法五行一更王相生亦象二其義一是以太皞配レ木炎帝配レ火黃帝配レ土少皞配レ金顓頊配レ水太皞氏其始二之木一五行用レ事先起二於木一木東方万物之初皆出レ焉是故王者則レ之而首以二木德一王二天下一其次則

以二所生之行一轉相承也云々太皞氏先起二於木一といへるは五行大義初學記史記三皇本紀などに太昊庖犧氏首二德於木一爲二百王先一帝出二於震一位在二東方一東方主レ春象二日之明一故曰二太昊一といふよしあるこれ也以二所生行一轉相承とは生日の干によりて五性を定る也草創の君戊己の干に生るれば土德也丙丁の干に生るれば火德也と知べし

（卅八）御所號　源平盛衰記十三高倉宮籠二三井寺一事條に高倉宮ハ三井寺ニ逆籠ラセ給フヨシ云々大衆ハ哀ニ忝ク思進セテ蜂起僉議シテ法輪院ニ御所シツラヒ懷キ入進セテ云々按に高倉宮の御住所を御所といへるなり宮は後白河院の皇子にていまだ親王宣下もおはしまさゞりしほど也○太平記十八一宮御息所事條に御所侍ノ御格子進ラスル音シテ早人定リヌレバ云々按に今出川右大臣公顯公の侍を指て御所侍といへる也○玉勝間十二御所樣大御所の條に中原康富記に伏見殿をも大將軍をも御所樣といへる所ありまた嘉吉二年十一月廿六日參二伏見殿一候二宮御方御讀一大御所有二御出座一とも見ゆ大御所とは貞成親王後謚二後崇光院一を申せる也云々按に親王家を御所とも大御所ともいへる例也將軍家に御所大御所の稱ある事は秋草人品稱呼の條に難太平記を引て足利將軍初代よりのよしいへり花御所とも稱し將軍家禁中の御裝束所を小御所ともいへり鎌倉年中行事には御所奉行御方御所樣御所造などの名目あり鎌倉御所小弓御所古河御所堀越御所阿波御所などいふも將軍家の御稱號に准據せるなり○三內口訣御所本所御方等事條に御所是ハ大臣家以上之家々執二其主人一之故家僕等稱レ之候公界ヘ不レ出事候惣別依レ人賞翫之詞有レ之事候連歌一道之法師等ハ御所之字ヲ付テ申來候然處官位剩呼二唐名一候以外之曲事候大臣之孫以後者於二內儀一モ御所之號不レ可レ有事候雖レ然先祖冢僕所二申來一候故不レ改儀モ可レ有レ之候歟於二關東一諸家中久我御所小弓御所等有レ之上ハ不レ及二異論一候歟云々按に故實拾要七の卷にも此說を引ていへり○御所と稱する事天子仙洞に申奉るは擧るにいとまなし右に引る所親王皇子將軍家よりして公方の御家にいへり又大臣家に御所といへるはあるまじきよし三內口訣に見えたれど太平記には今出川右府の侍を御所侍といへり親王將軍家には大御所の稱も有と知べし

(卅九)掩レ耳偷レ鈴　明高僧傳五の卷廿一丁ヵ法忠傳に假使淨名杜二口毘耶一釋迦掩二室摩竭一大似二掩レ耳偷レ鈴未レ免二天機漏泄一云々俗諺に猿が耳を掩て笋を盜といふにおなじ

(四十)人を打擲するをくらはせるといふ詞　俗言に人を打擲(ウチハル)をくらはせるといへりそは棒を喫はしむるといふ禪語より出たり明高僧傳六の卷十九丁ウ寶印傳に秖恁麼令レ喫二多少痛棒一云々此語碧巖集などにも出たりけん後日に引證すべし　頭書筆記七十八ノ七十一段大光明藏二ノ四十五丁ウ同五十七丁ウ

(四十一)鐵笛　明高僧傳七の卷二丁ウ南宋華亭青龍菴妙普傳に唯吹二鐵笛一以自娛好二吟咏一云々又四丁オ口吹二鐵笛一順レ潮下衆皆隨至二海濱一普去二蹇犀一其水洄漩衆擁觀レ水涓滴不レ入乃乘レ流而住歌曰六十餘年返二故鄉一沒二踪跡一處妙難レ量眞風徧寄知音者鐵笛橫吹作二散場一人望目斷尙聞二笛聲一嗚咽於蒼茫之間一遙見以レ笛擲レ空而沒云々按に鐵笛を吹は尺八を吹類也

(四十二)藪を敲て蛇を出す　明高僧傳八の卷四丁オ彥充傳に打レ草秖要二蛇驚一耳云々書言故事十一廿二オ禽獸丁オ比喩類部に打レ草驚レ蛇徹レ此警レ彼打レ草驚レ蛇王魯爲二當塗令一讀レ貨爲レ務會稽民連狀訴二簿貪一賄魯判曰汝雖レ打レ草吾已驚レ蛇注に言汝訴二主簿貪一賄如レ打レ草則我爲二蛇之披一驚已知レ戒矣云々披は被の誤成べし

(四十三)枯木の花　明高僧傳八の卷七丁ウ咸傑傳に偏向二枯木上一糝レ花寒巖中發レ餘云々　頭書碧巖に枯木裏の龍吟輟耕錄十五ノ十四丁オ

(四十四)雲水僧接待　明高僧傳八の卷十丁オ師範傳に去レ寺四十里築二室百楹一接二待雲水一額曰二万年正續一云々　頭書接待寺癸辛雜識讀集ノ上諸詞に接待あり空華集七ノ廿丁オ雲津接待云々同九ノ廿五丁ウ錦繡段十八丁ウ水雲僧峭峨集下十三丁オ

(四十五)ひぢをりひぢゃか　枕草子春曙抄九の人の家につき〳〵しき物の條にひぢをりたるらう云々春曙抄に臂折廊也廊のをれまがりゆく也云々豐臣勝俊が叙山にまうでし辭扶桑拾葉集廿の中卷十五丁ウ畢白集にこのくまをふとひぢをりたればあるじまちきこえて云々與清曰ひぢをりは臂のさまのなだらかにをれまがりたるをいふ又空穗藏開上廿二丁オに六ノ宮くれなゐのかいねりのいときひとかさね櫻色のおなじなほし指貫えび染の下がさね奉りてかはらけとりて左のおとゞにまゐり給ふを見ればいとちひさくひぢゃかにふくらかにあいぎやうづきたまへり云々源氏浴標潮月本廿丁左に御ぐしのかゝりたるほどかしらつきけはひあてにけだかきものからひぢゃかにあいぎやうづきたまへるけはひしるく見えたまへば云々同常夏潮月本廿丁右にかたちはひぢちかにさすがにあいぎやうづきたるかたにて云々などある「ひぢゃか」は臂を張ずして臂の體に近く附てじんじやうなるさまをいへるなれば似たる詞ながら意殊也　頭書逢幸故實抄一ノ卷壽永元ノ三ノ六除目執筆作法事條に覽二閑官帳一推レ筥無レ所仍三筥四ヘ臂折テ引二遣之一云々類聚名物考宮室部一之下卷二說アリひぢくり小世繼四十三丁ウ

松屋筆記卷之八十三

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

(一)道の長手　繩手　高繩　万葉四廿一丁左門部王戀歌に飫宇能海之鹽干乃滷之片念爾思哉將レ去道之永手呼又五ノ十八丁右大伴宿禰家持更贈二紀女郎一歌に野于玉能昨夜者令還今夜左倍吾乎還莫路之長手呼同五廿六丁左大伴君熊凝歌に國遠伎路乃長手遠意保々々斯久許布夜須疑南己等勝比母奈久又廿八山上憶良歌に都禰斯良農道乃長手袁久禮々々等伊可爾可由迦牟可利豆波奈斯爾同十二廿三丁左歌に莫去跡變毛來哉常願爾雖レ往不歸道之長手矣同十五廿丁左中臣朝臣宅守歌に君我由久道乃奈我氏乎久里多々禰也伎保呂煩散牟安米能火毛我母これらの道之永手は道之長道の義也そは同廿丁左丈部足麿歌に多知波奈能美衰利乃佐刀爾父乎於伎豆道乃長道波由伎加豆努加毛とあれば也神代記上十四丁右に長道磐神ありこは長道邊歟長道方歟名義考べし中古繩手と

いふも長道を訛れる稱也

(二)井堤井戸土手せがゐ南京手琉球手中手奥手行手江戸山戸ゐでの中道 井堤の川屋 万葉七左七丁歌に泊瀬川流水尾之湍乎早井堤越浪之音之清久同十六丁右朝井代爾來鳴果鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴同十一廿四丁左に朝東風爾井堤越浪之世蝶似裳不相鬼故瀧毛響動二又廿五丁右玉藻刈 井堤乃四賀良美 薄可毛戀乃余杼女留吾情可聞 同十四十三丁左上野歌に 伊香保呂能夜左可能爲提爾多都努自能安良波路萬代母佐禰乎佐禰兒婆万葉仙覺抄 十三十八丁右に井でとはつゝみなり云々 和歌童蒙抄一卷風部に「アサゴトニキデコスナミノタヤスニモアハヌモノユヱタキモトゾロニ」万十一ニアリ井堤ハヒキヽナレバ風ノ吹ンニ浪ノコエンコヤスキ也云々奥義抄中下卷廿六丁右四十三段に 井手とは万葉には 井堤とかきたり川などをせきたるをいふ也云々八雲御抄三上卷十九丁左堤條に井でと云は井堤とかけりひきなるつつみ也云々 色葉和難集六の卷井手ノ條に 奥義抄云井手とは万葉に井堤とかけり河浪をせきたるをいふ也云々 色葉集中三卷廿七丁右九十八段に 井手とは井堤とかけり云々 藻鹽草五の卷廿一段 堤部にゐでこす波井堤とかけり井てはひきなるつゝみ也云々與清按に井堤は池邊河邊などによみて堤なることは論なけれど手といへる語は邊の義なるべしそは川邊池邊などに築設て水を堰留るゆゑの名にやありけん又通はして井戸ともいへり 催馬樂ノ淺鎌に 萬太波太爲止奈留前栽安支波支奈天之古加良保比之太利也奈支とあるも井堤の義也 又田中ノ井戸に 太奈加乃井止爾比加禮留太那支川女とよめるも田中の井堤にて田中にある池の堤也又土手といふも土もて築たる堤やうの所にいへり都々美もこれを築て水をつゝみたもつゆゑの名也今俗筒井を井戸とよぶはもと井ノ邊を井止とも井手ともいふより 井ノ中の事にもいひうつせる也 井は都て水を溜て用水に汲用ひ或は水田にも引用ひなどするをいふせがゐは堰之井にて清水をせきとめて汲用るにいへり 堀井はた同義にて井は水の集 堪たる義の詞也 然て倭訓栞十七卷天部に 手をつけていふ詞多し稻に與手中手といひ道に長手行手縄手の類也傳の略にて相接たるをいふ辭也凡て物の品題をいふに何てと稱するは樣の意也云々今按に南京手薩摩手琉球手などと器用につけていふ手ハ方といふ義也稻の中手奥手はたおなじ長手も長方也行手も行方と行便との二義也縄手は長道の訛語也士清が說は一概にて委からず池邊を井止江邊を江戸山邊を山戸などいふ止も手に通ひ邊はた通音也また言塵集四廿丁右道ノ條にゐでの中道名所云々藻鹽草六の卷 屋部にゐでのかは屋云々など見えたるは井堤の中道井堤の厠なるべし河屋は万葉十六卷十八丁右に「香塗れる塔になよりそ川隈の屎鮒はめるいたき女やつこ」とあるに据れば河邊に厠立たるをいへりと見ゆ又ゐでのしがらみは井堤にしがらみしたる事にて論なし ○赤染衛門集群書類從本上廿九丁左に「あた人のゆくてにならす扇かな風たつへくもあらぬ所に」散木集群書類從本中廿三丁右便に俊頼「あくかるゝこゝろに身をはしたかへて行手によもの國を見るかな」千載集冬部便藤原成家朝臣歌に「冬來れは行手に人はくまねどもこほりそむすふ山の井の水」新勅撰春上便に權大納言家良「玉ほこの道のゆくての春風にたか里しらぬ梅のかそする」同夏部正三位家隆「夏衣ゆくてもすゝし梓弓いそへの山の松の下風」同戀四采女明日香「みかさ山きてもとはれぬ道のへにつらきゆくてのかけそつれなき」壬二集中卷に家隆「春たつといふはかりみしいつくとてゆく手にかすむ野へのあけほの」又「ゆく手にもまたむすはれぬ若草の枕いそかす春雨そふる」拾遺愚草中卷定家「道のへのあたなる露をおきそめてゆくてにけたぬ戀そかなしき」新續古今春下便に定家「此ころは田子の藤浪波かけてゆくてにかさす袖やぬれなん」同夏部定家「けふこそはみわのひ原の郭公ゆくての聲をたれかきかまし」此歌夫木抄雜四にも出たり新續古今雜上源基之「秋萩の花すり衣打しほれゆくてにかゝる野へへの夕露」續後拾遺羇旅に藤原重眞「旅ねするさよの中山明たてはゆくてにかゝる峰のよこ雲」風雅夏部後伏見院「小山田やさなへの末に風見えてゆくて涼しき松の下道」新撰六帖二狩條「狩人の行手のをしかあひわかれ又はたのみもなき身也けり」爲尹千首路雲雀歌に「すきいれし野田の芝生や殘るらんゆくてのつゝみひはり鳴らん」同徑月に「玉ほこの

道の行てにむら立て人おとすまぬ月の夜すから」同寄楸戀に「いもかりとゆくての楸うちしきて川風さむみ夜はふけにけり」同羈中浦に「心こそ猶ひかれぬれ朝ほらけゆくてに見ゆる鹽つすか浦」夫木抄春二霞部に經家「春霞松浦の山はよきてたてゆくてにもみん妹か袖ふり」同春三梅部に信實「ふまはをし花はゆくてに古郷のみかきか原の梅の下風」同春三早蕨部に定家「山人のゆくてのわらひ手にためてしはしそやすむいはのほとりに」同春四花部に經通「花のかを行手にとめよ旅人の衣の關の春の山風」同春六鶯部に爲相「わけのほるゆく手のきしの高瀬山手をらで見つる岩つゝしかな」同冬一霜部に信實「冬枯のをのゝあさちふ風をいたみゆくての袖も霜そくたくる」同雜五島部に後九條内大臣「松たてる波のゆくても霞むよの月の都にあはちしま山」同雜八家隆「たのめこし契はさてや大和ちのゆくてにくみしゐての玉水」同雜十綱部に定家「人心あたなる名のみたつしきのあみのゆくてになとかゝるらん」同雜十六寺部に爲相「つゝらをる道の行手の峰高み蟬にましれるとりの聲かな」此等の外ゆく手とよめる歌枚擧に遑なし行方と行便との二義を出ずさて手によせたるも有 倭訓栞廿四由部 にゆくて行手也道のゆくてなどよめり云々 同書十七天部には傳の略也といへり

(三)河門 下津 登戸 渡津 河内　万葉四十八丁左に千鳥鳴佐保乃河門之清瀬乎馬打和多思何時將レ通同 九十丁右に河瀬激乎見者玉藻鴨散亂而在此河常鴨同十丁左に窓牛與 織女 今夜 相 天漢門爾浪立勿謹又廿九丁右 天漢川門 立吾戀之君來奈里紐解待 又同丁右 天漢 川門座而年月戀來 君 今夜會可母同廿一丁左 天漢 河門 八十有何爾可君之三船乎吾待將レ居同十四廿一丁左に 安乎楊木能波良路可波刀爾奈乎麻都等西美度波久末受多知度奈良須母與清曰河門は河津にて河端の船津または渡津也下津登戸などいふ地名もこれによれる也折戸といへるも折は下を誤れるものなるべしこは殘月抄の下津の條にも注したりきまた河内瀧津河内清河内などいふも河津にて河内河外の義にはあるまじくや

(四)川瀬の道 川副と云詞　万葉二四十一丁右に樂浪之志我津子等何罷道之川瀬道見者不怜毛一ニ云志我津之子我云々 夫木抄雜八津ノ部に此歌を載て「さゝなみのしかつのこらかまかりちのかはせちみれはあはれなるかも」と有本居宣長が考に罷道之の道は邇の誤にて罷邇之なるべしといひたれどさらでも聞ゆれば私に改むべからず志我津采女が死て葬送せし道を罷道とよめる也泉下へまかる道の義としらる川瀬道は川副の道にて川の湍を渡り行ク道にはあらじ曾比の反志を世に通はしたる語也 万葉十八丁左に山際之雪不消有乎水激合川之副者目生來鴨とよめる川之副は川邊にて川副柳川副うつ木川そひ小田川そひの關などみなおなじ心也

(五)連歌の題に賦何といふ事　連歌の題に賦何山または賦山何などいふ事ありそは發句にある景物の字をとり出てそれに山といふ字を添る也たとへば發句に花あらば賦ニ花山一といふべきを賦ニ何山一と書き賦ニ山ノ花一といふべきをば賦ニ山何一と書ク事也連歌師はかゝる細少の事をも口授秘傳とてみだりにつたへざれば世人容易には知がたし文明十五年三月二日百韻に賦ニ何路一連歌といへる題にて發句宗伊「山風は花の音する匂ひかな」と見ゆ此句の花を取て賦ニ花路一といふ題を設たる也いづれも此例也これを賦物ともいへり一條禪閤の連歌初學抄に往古以ニ賦物一爲レ題或百韻或五十韻毎句用ニ其賦物一近代發句計有ニ賦物ノ沙汰一脇句以下一向不レ取レ之仍雖レ似レ無ニ所詮一聊不レ忘ニ舊儀一而已也云々 また連歌賦物篇に山何何路何木何人船已上五箇也 朝何夕何花何花之何唐何最可レ用也 青何白何手何下何初何御何片何薄何何風何水何屋何所何田何草何馬何手何心何衣何文何物何鳥何色 此外舊賦物雖レ有ニ數多一於レ不レ宜略也何袋千何何垣玉何以上新添也一字露顯二字返音三字中略四字上下略云々此外連歌の事をたどらんには筑波問答若草山連歌至要抄無言抄連歌辨義などたよりとすべき書也近比坂昌功が著刻せる菟玖波廼山口といへる折本初心の者をみちびく心諄々なり

(六)柳腰　埤雅十四卷柳條に今言ニ宮腰細瘦一謂ニ之柳腰一云々

(七)掛竿　ヤハズ　御傚記三丁に繪の掛樣之事第一に中尊をかけ第二左第三右をとき掛竿にて風袋分程

かけおろし其後は手にかけ候也云々掛竿は今のヤハズの事也頭書名物六帖器財箋三ノ廿七丁ヲカケモノカケ云々

(八)風袋　御彷記三丁に繪の事掛様の事第一に中尊をかけ第二左第三に右をとき掛竿にて風袋分程かけおろし其後は手にてかけ候也云々頭書名物六帖器財箋三ノ廿六丁オ

(九)ヒズミ　同書三丁にひずみをよく〳〵見て軸をなほし退候云々非墨繩の義歟

(十)文鎭しをり卦算　文鎭とも文沈とも御彷記に見ゆ今俗ケイサンといへるは夾算を訛れる也けうさんは枕草子春曙抄一などその外物におほく見えて今のしをりの事也しをりの事は筆記六十七ノ十段にいへり頭書名物六帖器財錄一ノ廿九丁ウ廿丁オウ御彷記圖に卦算一對ナドアルハ今ノ文鎭ノ類也

(十一)書院　御彷記五丁に次に御座敷あり西むきに床あり床のうへに書院あり北のまなか違棚あり云云又六丁西のおち間四帖二間の床あり上に書院あり南向御かざり同前云々又十丁東の方床の下違棚にそひて書院あり御かざり如レ是

圖に釣香爐拂子鏡などをかけ
下に石鉢を三つ置たり

又十二四疊敷の御間有東向に一間の御書院あり常のいびつなりの花瓶古銅の物に花立られて只一つおかるゝ云々又十三北の方東一間は御書院硯筆架筆墨中に文臺上は歌書一帖おかるゝ西の脇に漢書あまた積るゝ卷物二三卷おかるゝ云々又十五書院筆一對可レ置事尤なり一對なくば一もよく候云々又書院の彷は七彷ともいふ也云々又書院のかざり樣一番に硯屏二番に硯置て間の寸をとりて筆架をおく次水入次に軸物次に印籠次に卦算次に水瓶いづれも堅横ともに押板の中におく硯ばかりは硯屏を置間前へよるべし云々又十六書院に喚鐘なきは略義也云々又云喚鐘を書院に釣て其外に如レ是つりたるあらば同間にも可レ置云云又十七硯屏の大なるをば書院にある外に又床などにも可レ置候云々又云置押板などにも書院のごとくにも彷るべし云々右の所見を考るに書院はひとつの厨子やうのものに物をつりもしかざりもする也此書院を置間を書院の間といふより今はたゞ一間の名とのみおもへる也漢土に書院といふは書を置所をいふ頭書本朝俚諺

(十二)印籠　印籠の圖御彷記六丁オ七丁オに見え今の製作

にかはる事なし印入印肉入にちがひなし頭書桂川地蔵記上八丁ウ印籠食籠云々

(十三)火鉢の時節并火かき火のし　火鉢は十月より翌年三月盡までのよし御彷記に見ゆ又丁十八ウ火かきといふものは今の火のしの事也

(十四)柱彷　御彷記にはしらかざりと所々見えたり訶利勒などをかざりものとす

(十五)いびつ形　いびつ形といふ御彷記十二丁ウに見ゆ飯櫃形の義歟楕圓のものにいへるなり

(十六)うそぶく　神代紀下廿六丁右に又兄入レ海釣時天孫宜在二海濱一以作二風招招一風招即嘯也如レ此則吾起二瀛風邊風一以二奔波一溺惱火折尊歸來具遵二神敎一至二及兄釣之日一弟居レ濱而嘯之時迅風忽起云々通證七卷廿六丁右に嘯則風生伊弉諾尊之氣化二爲級長戸邊命一亦一意兼良曰意嘯則來レ風故名二風招一東坡詩云永嘯來二天風一是也今按嘯虛吹也詩召南其嘯也歌箋曰嘯蹙レ口而出レ聲拾遺記曰西方有二因宵之國一人皆善レ嘯丈夫嘯聞二百里一婦人嘯聞二五十里一淮南子曰虎嘯而谷風至云々拾遺記五ノ七丁オに見ユ按文選十八卷成公綏が嘯ノ賦注に善曰鄭玄毛詩箋曰嘯蹙レ口而出レ聲也と見ゆ又乃慷慨而長嘯云々注に善曰楚辭曰臨二深水一而長嘯云々齊曰言激二揚其氣一而長嘯也ともあり頭書藝文類聚十九ノ十四丁オ經籍纂詁七十七ノ一丁オ○万葉集九卷廿二丁右大伴卿登二筑波山一長歌に熱爾汗可伎奈氣伎木根取嘯登岑上手君爾令見者云々仙覺抄十一卷十左丁にかの峰を見んとてのぼればあつけくしてあせかきてうそぶかるれば根とりすがりうそぶきのぼりといふ云々按神代紀下卷万葉九卷に嘯とあるは共に口を蹙て息を吹にいへる也「うそ」は空の義にて笛なくてたゞ口のみにて吹ゆゑの名也口笛など吹さまに口を蹙て息を長く吹出して風招し又山に登るがくるしさに息を吹々登るをいへる也○堤中納言物語ノ標女御に夜いたくふけぬればみなねいりぬるけはひをきゝて「秋の野の千くさの花によそへつゝなと色ことに見るよしもかな」とうちうそぶきたればあやしたれがいふぞおばえなくこそといへば人はたゞいまはいかゞあらんぬえの鳴つるにやあらんいむなるものをといへばはやりかなる聲にてをかしくもいふかなぬえはいかでかうそぶかんいかにぞ

やきゝ給つやところ〴〵きゝしりて打わらふめり云云按歌をうそぶくとは口を蹙て小聲に打吟するをいへりと見ゆ ○西行撰集抄五の卷(十三段)宇佐宮ノ事ノ條に津の國こや野といふ所を過侍りしにはひむそちにたけたる僧の髮はくびのほどまでおひさがりきるものはかたのごとくもかたにかけずむしろきれをきやせおとろへてかほよりはじめて足手までどろかたげなるがさゝらをすりて心をすまし打うそぶいて人に目もかけぬ僧一人侍り云々明くれさゝらをすりてひとり歌打うたひてなんあちこちめぐりありくに侍りとこたへ侍り云々按にこれはさゝらをすりて小歌を小聲にうたふをうそぶくといへり ○同書六の卷(二段)人々夭亡ノ事ノ條に春になると云日より吉野の山にうそぶけはいつしか霞たなびき云々按にこれは吉野山に歌など小聲に吟じながら分いるさま也 ○僧鏡(三卷二丁右)内野の雪におとゝうそぶきたまひける「山櫻峰にもをにもうるおかん見ぬ世の春を人やしのふと」按に小聲に歌をよみ出たまへる也 ○徒然草(文段抄三卷十四丁左)六拾段に目さめぬればいく夜もいねず心をすましてうそぶきありきなどよのつねならぬさまなれど云々按に歌などにもあれ經文などにもあれ笛はなくて小聲のみに打吟じありくさま也 ○桐火桶(群書類從本十三丁右)にふすまの下に桐火桶をいだきてひぢをかのをけにかけてただ獨閑疎として床のうへにうそぶきてよみ給ひける也云々按に小聲に歌を吟ずる也 ○愚秘抄(群書類從三百一下卷五丁右)に西行は毎度歌をよまんとては緣行道してうそぶきよみけるが故に云々按に小聲に打吟ずる也 ○井蛙抄六卷(廿七丁左)に心源上人語云文學上人は西行をにくまれけりその故は遁世の身とならば一すぢに佛道修行の外不レ可レ有二他事一に數奇を立てこゝかしこにうそぶきありく條にくき法師也いづくにても見あひたらばかしらを打わるべきよしつねのあらましにて有けり云々按にこれも小聲に歌を打吟するにいふ ○將門記承德本(十五丁右)に仰レ天觀二世間不一レ安伏レ地吟二一身之難一レ保一哀二傷厭レ身難レ廢厭聞二鳥喧一則疑二例敵之嘯一見二草動一則驚二注人之來一云々按に嘯字を宇曾布久(ウソフク)と訓たり敵軍のしのびに聲を發(アグ)るをいへる也玉篇に嘯鳥鳴也と注して鳥などの鳴やうに小聲になかめよぶ貌也 ○更科日記(群書類從本五十四丁左)に宇治の渡りにいきつきぬそこにもなほしもこなたざまにわたりするもの立こみたれば船のかぢとりたるをのこども舟をまつ人のかずもしらぬに心おごりしたるけしきにて袖をかいまくりてかほにあてゝさをにおしかゝりてとみに舟もよせずうそぶいて見まはしいとゞいみじうすみたるさま也云々按に口を蹙て小聲に唄などうたひをるさまをいへる也 ○源平盛衰記(三の卷十四丁右)大將事ノ條に晋ノ七賢ハ竹林寺ニ嘯キ云々 同書(十二の卷四丁左)大臣以下流罪事ノ條に常ハ朗月ヲ望ミ浦吹風にウソブキツツ琵琶ヲ彈ジ和歌ヲ詠シテ云々 同書十三卷(十四丁左)熊野新宮軍事ノ條に宮ハ五月ノ空ノ五月雨ノ雲間ノ月ヲ詠ツヽ、御心ヲ澄シウソブイテ何ノ行末モ思召知ラヌ折節ニ云々 同書十七卷(十一丁左)人々見ル名所々々ノ事ノ條に或は住江住吉難波潟葦屋ノ里ニウソブキ行人モアリ云云 同書卅六卷(六丁左)維盛住吉詣事ノ條に住江殿ノ釣殿ニ御座テツク〴〵ト嘯テ(ウソブキ)云々 同書卅七卷(十三丁右)景時秀句事ノ條に京上リノ御伴ニ相摸國圓子川ヲ渡リ給ヘリケルニ梶原少用アリテ片方ニ下リ居タリケルガ御伴ニサガリヌト一鞭アテ、打程ニ此河ノ河中ニテ馳付奉タリケルニ沛艾ノ馬ニテ鎌倉殿ニ水ヲサヽト蹴懸奉リ御氣色惡クテキト睨返リ給々リケルニ梶原「圓子川ケレバゾ波ハアガリケル」ト仕リテ手綱ヲユリスエケレバ御氣色ナホリテ打ウソブキ蹴レバゾ波ハアガリケルト二三返詠ジ給テ向ノ岸ニ打上リ馬ノ頭ヲ梶原ニ引向テ「カヽリアシクモ人ヤ見ルラン」ト付給ヒイカニ發句脇句イヅレ增レルトゾ仰ケリ云々按に梶原が發句を賴朝卿小聲に打誦して然て脇句を付給へる也小聲に打誦し給へるを打うそぶきといへり ○平家物語二卷(廿六丁右)德大寺巖島詣條に或月ノ夜德大寺殿只一人南面ノ御格子擧サセ月ニ嘯テ(ウソブイ)御座ケル處へ藤藏人參リタリ云々按に月になかめて小聲に物など打吟じ給へる風情也 ○長門本平家物語(七卷太政大臣師長趣ニ配所一給事條に鳴見潟しほぢはるかに遠見して常は浪月をのぞみ浦ふく風にうそぶき琵琶をたんじ詩を詠じなほざりにあかしくらし給ひけり云々按に此事盛衰記十二の卷大臣以下流罪事條に見ゆ ○曾我物語二卷(十九丁右)牽牛織女事條にあかつきはせい天の雲にうそぶきくもりなき夜をよろこび云々按に小聲に物など打吟ずる貌也 ○源氏物語藤裏葉(湖月抄本二丁左)におとどむかしおぼし出てなまめかしううそぶきながめた

まふ云々按に奥ゆかしきさまに歌など小聲に打詠じ給へるよし也○同書幻(湖本八丁右)にかの御かたみのこうばいに鶯のはなやかに鳴出たれば立出て御らんず「うゑて見し花のあるしもなき宿にしらすかほにて來ゐる鶯」とうそぶきありかせ給ふ云々　按に歌を小聲に打吟じありくよし也○同書竹川(湖本十一丁左)に紅梅の木のもとに梅がえをうそぶきてたちよるけはひの花よりもしるくさと打にほへれば云々按に催馬樂呂歌の梅が枝を小聲に打吟じたる也○同書總角(湖本六十丁右)に時につけたる題いだしてうそぶきすしあへり云々按に詩を小聲に誦したる也○同書東屋(湖本四十七丁右)に宮もあひてもあはぬやうなる心ばへにこそ打うそぶきくちすさびたまひしか云々按に引歌に「ふすほどもなくて明ぬる夏の夜はあひてもあはぬ心ちこそすれ」と有り小聲に打誦し口すさみしたまへるよし也○今取かへばや物語(上卷)に夜深き月のいとあかくすめるにれいけい殿の細殿をとかくたゝずみて「あふ事はまたとほ山のすりめにてしつ心なく見ゆるたれなる」とぞうそぶくに人こゑもせず云々又(同卷)まやのあまりを打うそぶきてそりはしのかたに立出たれば云々又(同卷)殿上人などしづまりたるにれいけいでんのわたりをいとしのびやかに立よりて「ふゆかみし月のゆくへをしらぬかなあなおほつかな春のよのやみ」とするをつかたおもしろううそぶきたるに云々按にいづれも歌を小聲に誦するよし也○太平記卅卷(參考本十二丁左)直義京都退去事條に褒貶ノ短冊取出シ心閑ニ詠吟ジ打嘯テゾオハシケル云々○同書卅五卷(參考本十九丁左)北野通夜物語事條に折ニ觸レタル古歌ナド詠ジツヽ嘯居タル處ニ云々按にいづれも古歌を小聲に吟詠せるよし也○新撰字鏡(十六丁右)口部に嘯蘇弔反歗也宇曾牟久云々按に神代記下卷などに宇曾布久と訓たれど古くは宇曾牟久にてそは左毛良布を左夫良布左牟支を左夫支などいふ類也○類聚名義抄(佛中卷)口部に啾々「ワラハノナクコヱナリ」「ウソフク」云々又嘯「ウソブク」云々又嘯蕭蘇弔反「ウソム」「ウソフク」云々同書(法上卷)言部に計ウソブク云々同書(法下卷)、部に主ウソフク云々同虍部に虎聲ウソブク云々同書(僧中卷)矢部に覗ウソブク云々同斤部に斷ウソブク云々同欠部に歔歐歗「ウソム」「ウソフク」云々○蜻蛉日記(解環本下之十一卷二丁左)にまたの日もまだしきに昨日はうそぶかせたまふことしげからん

めりしかば云々按に古本には「うそ」を「こそ」に作れり山岡俊明校本にはきのふはさうぶふかせ給ふ事云云又きのふのさうぞかせ給ふ事云々などあり○倭訓栞(四卷八丁右)宇部にうそぶく神代紀に嘯をよめり新撰字鏡にうそむくとよめりうそ吹の義うそ鳥の鳴が如くするをいふ物にうそ打ふきてもうそを吹とも見えたり鳩ふくといふ詞に同じ假面にうそぶきといふも嘯く體をなせる面相也云々按に谷川士清が說混雜して分明ならず假面のうそふきは口のさし出たるがうそぶく體なればいへる也一名ヒヨツトコ面ともいへり鳩を吹といふ事あれどうそ鳥を吹事なしこれ闇推の說なりうそをふくとは笛はなくて口のみにて吹ゆゑに空吹(ウツブキ)といへる也「ウッ」と「うそ」は横通の音也

(十七)うそなげき　類聚名義抄(佛中卷)口部に嚊披媚反喘息聲ハク音劇咳嚊エナキ東人云ウソナゲキ云々按にウソナゲキハ嘯歎(ウソブキナゲキ)の義にて小聲に歎をいへりと見ゆ

(十八)うそむ　類聚名義抄(佛中卷)口部に嘯蕭蘇弔反「ウソム」「ウソフク」云々同書(僧中卷)欠部に歗歐歗蘇弔反「ウソム」「ウソブク」云々按に「ウソム」は「ウソブク」を約ていふ詞ときこゆ

(十九)うそくれたり　類聚名義抄(佛下末卷)黑部に黯ウソクレタリ云々按に表にあらはして明白にものをもいはず下におしくゝみて小聲にものさとくかたましき貌をいへる成べし又はうそは乎曾の通音の字曾にて僞言をいひくれは狂ひの約言にて僞り狂ふよしの詞にても有るべし

(廿)うそをふく井皮笛　竹取物語(抄本上卷十二丁右)に日くるゝほどれいのあつまりぬ人々あるひは笛をふき或は歌をうたひ或はしやうかをしあるひはうそをふき扇をならしなどするに云々小山儀か抄にしやうか唱歌歗嘯(ウソブクヲテ)口ぶえの事也云々田中大秀が解一卷卅九丁左にうそをふきは口笛(クチブエ)を吹なり神代記(海神宮の條一書に)天孫宜ヲ在ニ海濱一以作ニ風招(カザヲキ)一とあるを或註に風招ハ即嘯也毛詩注曰嘯蠁レ口而出レ聲とあり紅梅卷に按察大納言折ニ梅花一處にかはぶえふつゝかに馴たる聲してとあるもおなじく口笛也源中最秘抄に天慶五年正月七日引ニ青馬一酒盃十一巡王卿有ニ酒氣一吹ニ皮笛一今日李部王記吹嘯(ウソブキ)之由有レ之また源氏論義に天曆の比の記に宴會の時諸卿入興の餘皮笛を吹といへり同日の小一條左大臣の記に諸卿嘯(ウソ)を

吹と云り又文範卿節會の時皮笛を吹諸人嘲哢すと云るも同じ事にやとあり此文範卿の事續古事談下卷には嘯(ウソ)を吹ければと有にて宇曾(ウソ)をも皮笛も同事なるを知べし云々按に口笛を皮笛といふハ唇の皮して吹ゆゑの名也手鋭をカハツルミといふはた同義也カハツルミの名目は古今著聞集太秦牛祭畫詞などものにおほく見ゆ 頭書皮笛ノ事槐鳴曉筆十五 太田隨筆卅四丁ウ 新猿樂記一丁右に早職事之皮笛目舞之翁鉢云々 休源抄 思ひのまゝの日記廿七丁ウ ○中務内侍日記 群書類從本 に三月廿日夜雨ふる中宮大夫殿かぐらをうそぶき給ひてせう〳〵たるくらき雨のまどをうつこゑとくちずさみ給ふゑものがたりにかきたらんことをきくやうにておもしろし云々按に神樂歌を猿笛にふきてさて詩句をくちずさみし給へるよし也○辨内侍日記下卷 群書類從本三百廿三下卷十二丁左 に辨は行幸のとしにうそをふくやくをつとめ侍りし又これも人長にはおとらずおぼえ侍りき冷泉大納言殿夜番にまゐりて此御遊にまじりてうそふくやくつとめさせ給たりしこそいと〳〵うれしかりしか云々按に猿笛吹役をつとめられしよし也○古今著聞集廿卷十三丁右 魚蟲禽獸部に承安二年五月二日東山仙洞にて鷄合の事ありけり云々一番左右門衛督の鳥字無名丸左少將盛賴朝臣持參す右五條大納言の鳥字千與丸右少將雅賢朝臣持參す左右ともにうそをふくその興なきにあらず云々按に猿笛を吹て鷄の蹴合に勢を添たる也○續古事談五の卷諸道部に一條院の御時清涼殿にて臨時樂きこしめしけるに云々此日文範民部卿八十(ヤソヂ)にあまりてさせるめしなきに參て座にさぶらひて舞のほどにうそふきければ主上よりはじめて見る人おとがひをとかずといふ事なし老くるひとなんいひあへりける云々按に舞見物の席上にて猿笛を吹たるなるべし躰源抄八本 卷 に猿笛者通憲云猿笛は嘯なり云々 同書八末 卷 に嘯者選曰良自然之至音又云乃知長嘯之奇妙蓋音聲之至極也云々 ○言塵集二の卷十三丁左 衣手常陸事條に汗をかきてのぼるくるしさにいきつく間うそを吹樣なれば樂の調子取に似たりとよめりと云々 同三の卷十六丁右 にくち笛とはうその事也云々 同四の卷廿五丁右 にかは笛とは一說にはうその事と云々定家卿は笛と云々按にうそとは猿笛の事にてそれを皮笛ともいふはもと唇をつぼめて吹を皮笛といふより小く作り出て吹笛の名にもよべる也 頭書皮笛一種の製也 槐鳴曉筆十五 西宮記正月中ノ條にも見えたる歟 源氏紅梅ノ卷ノ細流抄 ○山崎宗鑑が新撰犬筑波集 部

に「うそをふき〳〵花をこそをれ「軒はなる鉢のすわいの花咲て」又雜部「藥師ほとけやうそを吹らん「よね山へ八てうとのゝまゐられて」○守武千句 唐何に六 「辨慶やはちのありともしらざらん「うそをもふかすけなける比」「うしろにはなるもはる〳〵たちはきて」按に新撰犬筑波守武千句ともに猿笛をいへる也

(廿一)うそやぐ　源平盛衰記十九卷十五丁左 文覺入定京上(リノ)事條に院宣ヲ急ギ給ラント思給ハヾ高雄ヘ庄園ヲ寄進有ベシト云ケレバ佐殿ハ我身ダニモ安堵セズシテイカニトシテ奉ルベシト宣フ文覺ガ計ヒニ隨テハヤ寄給ヘト云佐殿ハ我軍ニ勝テ日本國ヲ手ニ把(トラ)バ一國二國ヲモ乞ニヨルベシト宣ヘバ文覺ハ手ニトリ得ツレバ必惜キ事也ナキ物ハ惜カラズ國モ廣博也唯所知ヲ十餘所寄進シ給ヘトテ紙硯取向ケ丹波國ニハ新庄本庄雀部宇津繩野播磨國ニハ五箇庄土佐國ニハ高賀茂鄕ヲ始トシテ十三箇所ヲ撰出シソレ〳〵ト云ケレバ佐殿鼻ウソヤギテ被レ思ケレドモ寄進狀ヲ書判形ヲ加テ文覺ホクソエミテアヽ御邊ハ以外ニ心廣キ人哉我物顏ニイミジク寄給ヘリ云々按に鼻うそやぎてとはものゝをかしさに口をば塞ぎて鼻の奥にてウフ、〳〵と笑をいふ也ヤグは花ヤグ若ヤグなどもいひて「めく」といふにおなじ詞也○同卅四卷六丁兩 左 院主上還御事條に山門ノ童部(ワラハベ)小法師マデモ哀レ天狗ノ詞(シリウワゴト)笑ト聞エケレバ太政入道鼻ウソヤギテゾ思ハレケル云々○砂石集四上卷治字本廿一丁右 無言上人事條に或念佛者云觀音地藏ナドイヘバ鼻ガウソヤイデヲカシキゾト地藏ハセメテヨソニモ思フベシ觀音ヲヲカシクアナヅラバ來迎ノ臺ニハノリハヅレナンカシ云云

(廿二)をそこと乎曾呂於保乎曾杼里　奥義抄中下卷 萬葉集歌釋四段 に或人云ひんがしの國のものはそらごとをばをそこといふなり云々按に萬葉集靈異記などの大乎曾鳥(オホヲソドリ)の乎曾におなじく後世「うそをつく」といへる「うそ」と同義也　○萬葉集四四十丁右 大伴駿河麿歌に相見者(アトミシハ)月毛不經(ツキモヘナクニ)爾戀云者(コフトイハンヲ)乎曾呂(ソロ)登吾乎於毛保寒(オモホサム)毛(カモ)按に乎曾呂の呂は助字也乎曾は虛言をいふ相見て後いまだ月日もたゝぬに戀しといはゞ虛言をいふ吾ぞとおぼさんかと也○同書十四卷廿八丁左 未レ勘レ國相聞

歌に可良須等布於保乎曾杼里能麻左低爾毛伎麻左奴伎美乎許呂久等曾奈久按に此は烏といふ大虚言鳥が正しくも來まさぬ君を來ると鳴と也許呂久の許は久の通音呂久の反留なれば來るといふよしに聞なしてよめる也○日本靈異記中見二烏邪淫一厭レ世修レ善緣行基大德歌に加良酒等伊布於保乎蘇等利能去等乎美天等母遲等伊比天佐岐陀智伊奴留按に此歌群書類從本には等を止酒を須遲を爾に作れりされど等を止に作れるは延喜天暦のころこそあれ靈異記の時代に叶はねば後のしわざ也又美天の二字を能米に作りたるも誤也泉州志三卷十六丁右に引たる本に美天に作り假名本一卷七丁左に「ミテ」に作り袖中抄八卷十五丁右に引たるにも「みて」に作れるなどてらし合せて證とすべし類從本に能米とあるは彌天を寫ひがめしものと見ゆ彼本彌をも天をも假名に用たるがうへに能米彌天字躰も相近ければ也

（廿三）うそ　甲陽軍鑑十二卷十六丁右に惣別武士の取合によわき方より必うそを申候趣後輝虎と御取合に敵味方共にうそを申たる沙汰終に無レ之云々同十四卷廿丁左に親兄弟の敵かちにてとほるにねらはるゝ人馬上においては馬に乘たる者そこにてよくうそをいへ其うそは君の御使に參る御免候へと懇懃にいひてのりとはせ云々按に虚言をうそといふは古言の乎曾の通音也○春曙記下卷四丁右共袋拾葉集廿八卷四十三丁右に悪詩などいぐちのうそとやらんのやうにつゞりて云々按に兎缺の虚言をいふ如く不調のよし也和名抄三卷病類部に兎缺續晉陽秋云魏泳之生而兎缺俗云二以久知一辨色立成云缺脣也云々塵添壒嚢抄二卷六十五段兎缺事條にクチビルノキレタルヲイグチト云心如何本體ハ「ウグチ」ト云ヲ「イグチ」ト云ナセリ「イックシ」ト云詞ヲ俗語ニハ「ウツクシ」ト云歟兎缺ト書テ「ウグチ」トヨムベキナリ兎ノクチビルハ鼻ノシタツヾカズシテ切レハナレタレバ兎缺ニ似タル義也「イ」ト「ウ」ハ通音也云々同書五卷四十一段詞字次第色葉條に兎缺イグチ缺脣同云々伊呂波字類抄一卷以部人躰門に兎缺イグチ缺脣同云々節用集伊部人倫門に缺脣イグチ云々運歩色葉集以部に缺脣イグチ兎脣同云々太平記參考本廿二卷四丁右畑六郎左衛門事條に中間ニ惡八郎トテ兎脣ナル大力アリ云々晉書列傳五十五魏詠之傳に魏詠之字長道任城人也家世貧素而躬耕爲レ事好レ學不レ倦生而兎缺有二善相者一謂レ之曰卿當二富貴一年十八聞下荊州刺史殷仲堪帳下有二名醫一能療レ之貧無二行裝一謂二家人一曰殘醜如レ此用活何爲遂齎二數斛米一西上以投二仲堪一既至造レ門自通仲堪與語嘉二其盛意一召レ醫視レ之醫曰可二割而補一之但須下百日進レ粥不レ得二笑語一詠之曰半生不レ語而有二半生一亦當レ療レ之況百日邪仲堪於レ是處二之別屋一令二醫善療一之詠之遂閇レ口不レ語唯食二薄粥一其屬レ志如レ此及レ差仲堪厚レ資遣レ之云云萬姓統譜四十九卷二丁右方韻に唐方干字雄飛桐廬人咸通中舉二進士一不第隱二鏡湖上一時徐凝有二詩名一一見レ干器レ之授以二詩律一干貌頗陋又兎缺而喜二凌侮一嘗謁二廉師一誤三拜人號一方三拜一晩遇レ醫補二其唇一又號爲二補唇先生一其詩多二警句一門人私謚曰二玄英先生一云々ナド所見コレカレアリ崔豹古今注中卷鳥獸部陸佃埤雅三卷釋獸部兎條などに兎口有レ缺尻有二九孔一といふ事見ゆ○倭訓栞四卷八丁右宇部にうそ虚僞をいふ浮虚の義なるべし或は「をそ」の轉「をそ」は古語也云々○玉勝間第一卷廿五丁左に「をそ」はすなはち今の世に「うそ」といふ言これ也「を」と「う」とは殊にしたしく通ふ音也云々

（廿四）うそをつく　チクヲイフこく　○甲陽軍鑑十三卷廿丁左に南部下野殿うは氣にて常に無穿鑿なる事ばかりいひ遠慮もなく明暮過言を申され「うそをつき」給ふ無分別人にて云々○鷹筑波集一の卷一丁左に「木の葉さへうそをつき夜の時雨かな」按に虚言をいふをウソヲックといへりックは嘔吐をつく狂言をつくなどいふック也又ウソヲコクともいへり桃青が奥細道に「蚤蝨馬の小便こく枕もと」俳諧新式に「にがゝしくもをかしかりけり「わがおやの死ぬる時にも屁をこきて」などの「コク」にて「ック」も同義の俗語也又下野人の語に「ウソチクヲイフ」とも「チクヲイフ」ともいへるハ此「ウソヲック」の「ック」を轉じて「チク」といへる也

（廿五）うそ鳥　倭訓栞四卷八丁右字部に鳥にうそあり嘯と義通へり鳴時は聲に隨て兩脚を互に擧て琴を彈じ手を搖すが如しよて俗にうそごとをひくといふ雄を「てりうそ」といふ歌にもよめりましこ鳥といふに同じ雌を「あまうそ」といへり喈鶯也といへり新撰字鏡に囀をいそぐりとよむもこれにや或は鷽をよめるは心得がたし鶯もまたあたらず云々按に「うそ鳥」は其

鳴聲によりて名づけたる也「うそをふく」貞(サマ)に似たるゆゑの名といへるは鑿說也「川うそ」はた同義にて鳥の「うそ」ハウソ〳〵と鳴よりいひ「川うそ」は大聲を發せず聲にうそぶくよりいへる名なるべし

(廿六)をそくつのゑ鳴呼繪(テコエ)　古今著聞集十一(巻)十一丁(左)畫圖部にふるき上手どもの書て候をそくつの繪などを御らんも候へその物の寸法は分に過て大に書て候事いかでか實にはさは候べきありのまゝの寸法にかきて候はゝ見所なきものに候ゆゑに繪そらごとゝは申事にて候君のあそばされて候物の中にもかゝる事ハおほくこそ候らめとへりおかずいひければ僧正こゝわりにをれていふ事なかりけり云々按本居宣長が玉勝間十一の巻(廿三丁右)に今の俗に枕繪といふ物の事ときこえたりもろこしには春畫といへりと見ゆ舊本今昔物語(廿六)に鳴呼繪とあるも似たる名なるべしをそは虛言「くつ」は「くち」の通音にて口の義歟可ㇾ考假名も「おそくつ」と書たるはいかにぞや

(廿七)細川澄元肖像　狩野元信筆の細川澄元像あり余撰本一鋪を藏す其圖甲冑をよろひて手に薙刀をもち腰に右手指の短刀を指たり上方に宜竹の讃あり其讃翰林葫蘆集にも載たりき尊卑分脉に清和天皇貞純親王經基王源滿仲賴信賴義八幡太郎義家式部大夫義國治部少輔義康足利太郎義清細川次郎義季同八郎俊氏同八郎大郎公賴同刑部大輔賴春同左近將監詮春同兵部少輔義之同滿久同持常同成之同讃岐守義春同六郎澄元爲ニ政元養子一と見えて清和天皇より廿一代の孫也養父政元は同祖賴春より右京大夫賴基同滿元同持之同勝元同政元と相續せり六郎右京大夫號ニ眞乘院一爲ニ政元養子一實讃州道空入道ゝ御孫也永正十七ゝ六ゝ十卒卅二とあり諸家系圖纂(三ノ巻清和源氏第三)細川系圖に政元子澄元實讃岐守義春之子爲ニ政元繼嗣一六郎右京大夫法名宗泰號ニ安英眞乘院一永正十七年六月十日卒三十二歲云々古今人物志(一の巻)細川澄元傳に細川澄元者政元之嗣也永正四年之夏政元天亡傳ニ訃於阿州一澄元引ㇾ兵而抵ㇾ京當ニ高國之軍一而一戰得ニ勝利一也於ㇾ是澄元命ニ畫匠元信一而寫ニ戎衣之像一使下萬年之宜竹翁加ニ讃詞於上一而置ニ諸城西之院一未ㇾ幾澄元退而歸ニ于阿州一以ニ庚辰年一而終男晴元續ニ父之業一矣云々宜竹の讃　源公澄元甲冑壽容　日照ニ金鞍一倚ニ馬上一定ニ天下一光揚ニ寶劍一射ニ斗間一出ニ匣中一其提來也驅ニ

王子年拾遺記十ノ八丁オ

使豐城令一其騎出也喚ニ起隆準公一亂臣賊子雖ㇾ在ニ蕭墻內一覇氣雄心輒掃(ハラフ)ニ敵陣一空處ニ宴安一未ㇾ忘ニ死生一解ニ道貴介一如ニ優曇跋(ウドンバチ)一臨ニ戰場一不ㇾ變ニ神色一唉ニ他大夫求山鞠窮一所ㇾ聞尊氏甲冑留ㇾ像復覩郎君畫圖命ㇾ工昔源氏收ニ洛右一與ニ諸將一起ニ關東一自ニ賴春一至ニ賴之一始稱ニ管領一宋濂文章近傳ニ明國一從ニ寶勝及寶光一繼ニ封讃洲一蕭何父子共輔ニ漢宮一一門桃李相耀四海車書混同故京兆墀ニ彼支子孫賢者一厥家督爲ニ之大氏族英宗一匪ニ啻射御離ㇾ倫絕ㇾ類亦能ニ和歌一評ㇾ月品ㇾ風養ㇾ實如ㇾ養ㇾ花眇觀齊人三千客在ㇾ德不ㇾ在ㇾ險下視秦關百二重所ㇾ祈茂ニ騰于五百冥靈之域一秀ニ出於十九少年之叢一坐令ニ郡國一盡作ニ魯恭卓茂一出使下朝家再致ニ宋璟姚崇一民間移ㇾ風易ㇾ俗塞外簸(エビラニレ)ㇾ矢(フクロニス)ㇾ害ㇾ弓于ㇾ禪于ㇾ敎護ニ佛法於內外一爲ㇾ君爲ㇾ臣誓ニ山河一者始終以規以祝達ニ于聖聰一　永正丁卯十月吉日宜竹老衲景徐周麟奉ㇾ命謹贊　右の贊翰林葫蘆集に載たるには年月と名を缺たり細川兩家記に澄元の事蹟見ゆ細川兩家記二卷群書類從三百八十卷に收む一名二川分流記一名正祿間記といへり此像は澄元十九歲の時の軍容也

(廿八)五運の德　古の王者或木德或火德或土德或金德或水德を以て王たりといふ事さだかなる證もなく或は龍があらはれたれば某德或は何が出たれば某德などゝいふ事おぼつかなき說といふべし王子年拾遺記一卷(三丁)軒轅皇帝の條に軒轅出ㇾ自ニ有熊之國一母曰ニ昊樞一以ニ戊巳之日一生故以ニ土德一稱ㇾ王也時有ニ黃星之祥一と見ゆさては生日に據て其德を定る事にや

(廿九)點心　點心の事輟耕錄十七の巻(八丁オ)に見ゆ

頭書(三議一統上卅八丁オ今川大双紙下四十五丁ウ眞丈雜記六)

(卅)蝦夷の犬　蝦夷の犬を馬の代に使ふ事東遊雜記に見ゆ輟耕錄八の巻(五丁オ)狗玷亦同說也

(卅一)乞食　佛者の乞食はもとより也輟耕錄六の巻(十四丁ウ)鬼臟の條に道流乞食あり本朝に神道乞食ありこれにて三道乞食也近來儒者乞食歌讀乞食俳諧乞食狂歌乞食武者乞食などかぞへつくすべからず

(卅二)ブッチャウ面　俗に人相わろきものをブッチャウヅラといへりこはブッチャウジュにて人に指つかはるゝものゝブシャウにして動かず心よからぬ顏つきするにいへる也輟耕錄廿九巻(九丁ウ)に婢僕の久を

曰二佛頂珠一とあり指揮すれども動かぬにいへり

(卅三)張本　吾妻鏡卷二三丁など諸の合戰の書に張本の字見ゆ往生要集下末卷十七丁ウに出處あり

(卅四)寶山に入て手を空して歸　往生要集上本卷四十九丁ウに見ゆ大論を出處とす

(卅五)蛇の道はへびがしる　法苑珠林五十四卷六丁ウに如二蛇知一レ蛇足一と見ゆさては蛇の足をへびがしるの誤にや

(卅六)政所　政所ハ今の代官の事也書札作法抄六丁ウに處ヲ代官スル人ヲバ政所殿ナド書ベシ云々

(卅七)禪語を書狀にも常の詞にも多く用るよし　書札作法抄十一丁ウに禪家ナドニモ消息ハ皆當世ノ風勢ノ日本ヤウヲ書ルヽ也誠ニ偏執ナキ事也又文章ハ公家武家モ皆禪家ノ體ヲ請テ學バルヽ事ノミアリ云々

(卅八)一對ヒトムカヘ　天保六年に余が家に竹助といへる奴僕あり越後國古志郡和泉村の產なり神酒の瓶子一對をヒトムカヘ二對をフタムカヘ三對をミムカへといへり余きゝとがめてこは瓶子にのみいふ辭にや又はなにゝもあれもの二つあるをヒトムカへといふにやとこたへるに彼國にてハ燈臺花瓶佛器などにかぎりてかくいふといへり一對をヒトムカヒ二對をフタムカヒ三對をミムカヒといふべきことヒトムカへフタムカへミムカへなど訛ていへるなりけり物の具備せしにはヨロヒといひ對せしにはムカヒといふべしたとへば甲にも厨子にも一具をヒトヨロヒといへりヨロヒは足備りたる詞にて厨子一の中に物の具備せるを厨子ヒトヨロヒといひ甲の胴丸草摺胸當など具備せるをもヨロヒといへる也その外もこれになずらへて知べし

(卅九)坊主が憎けりや袈裟までにくい　俗言に坊主がにくけりや袈裟までにくいといへりこれに似たる語あり漁隱叢話前集十一の卷杜少陵六に贈二射洪李四丈一云丈人屋上烏人好烏亦好六韜武王登二夏臺一以臨二殷民一周公曰愛レ人者愛二其屋上烏一憎レ人者憎二其餘胥一云々此憎二餘胥一といへるは近き說といふべし

(四十)城主　今世の城主城主格國主順國主抔云稱は慶長武家諸法度に其定あり天正記にはしろぬしとあり唐書に城主の名いとおほく見ゆ六韜龍韜兵徽第廿九に城之氣出而復入城主逃北云々嘉定屠城紀略九丁ウ閏六月十八日條に城主性慳不二肯發一糧云々隋書六十

列傳廿五于仲文傳に陳郢州刺史荀法尙魯山城主誕法澄鄧沙彌等請降云々

(四十一)琵琶湖　近江湖を琵琶湖といふよし竹生嶋緣起に湖海者琵琶之形也竹生嶋覆手也小嶋者撥也島內之宮殿陰月也白石與二竹島一半月也沖島遠山也勢田鹿頭也自二宇治一至二海老一尾也四方之流者是四絃也と見ゆ

(四十二)茅輪菅貫　茅輪は菅貫といへり六月秋の時內藏寮より上る公事根源に見え夫木に歌あり遠碧軒記上之上卷時令部に見ゆ頭書(林藪抄十一ノ本卷八十八丁オ)

(四十三)禁中の御佛壇　禁中の御佛壇は黑戶の間に有よし遠碧軒記上之上卷居所部に見ゆ

(四十四)中雀門　武家に中雀門といふは城に有し中櫓門の事也こは要害の門なれば御城ならでは附給はぬ事なれど御三家の御居所はやがて御城に形どり中櫓門を立られし也今は本據をとり失ひたゝ高貴の御門とのみおもひ中雀門と書て雀の止處などゝ附會の說をおこせる也城中の櫓門を古代の中門にとりなして作り出たるより名は中櫓門にて實は中門也中門廊などもいひて平家物語盛衰記などその外古書所見おほし要筐辨志二の卷に日光御社參之節諸御門番御番代大名格別之筋目之衆勤番仰二付之一云々中雀御門御書院番頭與力同心云々又云御成之節御門建有レ之節御三家方御通行之節中雀御門者片扉明御兩所樣之節ハ兩扉開候事其外ハ增上寺方丈之外御門開不レ申候云々

(四十五)牛頭天王の紋木瓜と云事　遠碧軒記上之上卷神祇部に祇園の木瓜は「キウリ」の事なり今は「モククワ」と心得て「ボケ」の事と思ひ「クワ」の紋と云あやまり也扨應司殿の家に木瓜を忌殊に輪切にする事をなほ忌可レ考云々

(四十六)伊勢比丘尼上人慶光院　神風行囊抄三の卷に岡田町慶光院比丘尼寺眞言宗通町ヨリ右ニアリ世ニ伊勢上人ト稱セル比丘尼住當寺開基不レ知レ之可レ尋境內ハ竪三町橫一町半之地ナリ寺領ノ御朱印アリ云々倭漢三才圖會七十一卷伊勢國部ニ慶光院在二宇治一禪寺領五百石比丘尼寺云々遠碧軒記上之上卷神祇部に伊勢へ淺井家の比丘尼來りて內外の間に住す禪淨土を執行此時後奈良院の時也亂後故に廿一年目の遷宮のならぬを見て近江一國を勸進して淺井家の光にて廿

一年目の造營をとぐ因て遷宮上人と云淺井家故に淀殿も念比也此よし由緒にて秀吉公へも出頭して內外宮のとりつぎをして知行七百石被レ下台德院殿の御臺所も淺井にて淀殿妹故に又時にあへり此弟子代々社司の山本氏よりつく近頃秩を出すを社司より公事をして負て社內出入もひしとならず勿論秩をはる事もならずあまり負ゆゑに一ッ理をつけられて相續は山本氏よりつげとの御條目也伊勢は神領二萬石ひけるこの分を郡代支配す其外に三千石役料あり伊勢上人比丘尼事見二惟房士記一云々諸國圭齋錄伊勢國部に高四十九石內宮禪宗慶光院云々伊勢參宮名所圖會四の卷四十三丁右に伊勢上人うら田町にあり禪家の尼寺也慶光院と號す世々上人の位にすゝみて伊勢上人と稱し寺號を稱せず元は山田西川原町に有て天正年中こゝに移す他の寺院と違ひ佛堂鐘鉦の類なく禪家なれども本寺河派と云事もなく直に傳奏を經て紫衣を着して官家の息女代代住職し給ふ開山の大功等擧に不レ遑略レ之庫裏客殿廣大にして上段は狩野永德廿四孝の圖あり云々

（四十七）唯一神道　神道の傳授道統の事遠碧軒記上之卷上神祇部に見ゆ　切紙の奧書に万壽元年七月七日唯一

長卜部兼延と有頭書世說抄十丁オ

（四十八）禹步　禹步の事抱朴子內篇二卷仙藥卷に見ゆ

（四十九）山開　世語に山開（ヤマビラキ）といふ事あり富士大峯三嶽大山などの高山にはじめて登る日をいへり江戶にて深川永代寺の山開などあり抱朴子內篇二卷廿九丁オ仙藥卷に欲レ求二芝草一入二名山一必以二三月九月一此山開二出神藥一之月也云々吳越春秋のも赤厪之山開而出レ銅などあり義は別なれど字面の出處には引用すべし

（五十）棟梁之任　職原抄三公の條に棟二梁（トノ）于諸官一鹽梅于（タル）帝道一者也云々魏志管寧傳に荷二棟梁之任一云云晉書卷四十列傳十楊駿傳論讚に遂荷二棟梁之任一云々また遂居二棟梁一云々同書卷四十五列傳十五和嶠傳に大傅從事中郎庾顗見而歎曰嶠森々如二千丈松一雖レ曲（イヘドモ）磥砢多二節目一施二之大厦一有二棟梁之用一云々同書卷六十七列傳廿七溫嶠傳に嶠有二棟梁之任一云々慈恩傳十の卷十四丁右に不朽之神功棟梁之大業云々品字箋共聲五十四蒙語棟字注に棟梁屋極曰レ棟負レ棟者曰レ梁云々五代史廿八卷九丁左趙鳳傳に鳳指二殿屋一曰此殿所二以尊嚴宏壯一者棟梁柱石之所二扶持一也若折二其一棟一去二其一柱一則傾危矣大臣國之棟梁柱石也云々など所見おほかり今世大工棟梁或は諸職人の棟梁などいへるより棟梁の名目いといやしきがごとしから書に梁棟の字面もおほく見ゆ

（五十一）衒（テラフ）　衒は和名抄に比登涅羅賦字鏡に天良波須（テラハス）とよめり漢書六十五卷列傳卅五東方朔傳に自衒鬻者以レ千數注に師古曰衒行賣也鬻亦賣也衒音縣と見えて衒は行賣也俗に賣付（ウリツケ）るなどいふ義也啄木鳥をテラツヽキといふも虫を求て啄（ツヽイ）ばんにいふめれば求て賣意ともすべし衒をたゝ賣事とのみおもふべからず

（五十二）擊劒（ケンヲ）ドバス　擊劒を今の劒術の事と思ふべからず漢書東方朔傳注に師古曰擊劒遙擊而中レ之非二斬刺一也と見ゆ劒を飛すをいへり

（五十三）射覆アテモノヲスル入札　『漢書東方朔傳に上嘗使二諸數家射一覆置二守宮盂下一（シムルニ）射レ（アテシ）之皆不レ能レ中朔自贊曰臣嘗受レ易請射レ之云々注に師古曰置二諸物一令（アテ）闇二射之一故云二射覆一云々射は弓を射て中るにたとへ覆は物をふせおほふ事也何にもあれ盂などの下に物をかくし覆置（フセ）て中（アテ）さする事を覆射（ドンジヤ）といふ也今世入札（イレフダ）などいへるも數人あつまりて價の高卑をいひ中て請負（ウケオフ）ゆゑ射といふべし』

（五十四）ハウと溜息をつく　今俗苦痛を忍て溜息（タメイキ）をするを「ホットイキヲスル」或は「ホウトイキヲツク」などいへり漢書東方朔傳に舍人不レ勝レ痛呼レ譽注に服虔曰譽音暴也鄧展曰呼音驍箭之驍也譽音瓜齁之師古曰鄧音是也痛切而叫呼也與二田蚡傳呼一報音義皆同一曰鄧音近レ之譽自寃レ痛之聲也舍人榜痛乃呼曰レ譽今人痛甚則稱レ阿譽音步高反云々と見えたる譽（ホウ）これ也田蚡傳に報と呼とあるもおなじ又痛甚時アアといふも稱レ阿とおなじ倭漢古代の音は相通がおほかり烏のアヽと鳴ときゝて啞々啼二枝上一（ガ）とも又鵝（ア）ともいへり又「ガア〳〵」と鳴ときゝて鴉ともいへり今打きくに「アヽ〳〵」とも「ガア〳〵」ともきこゆるをもて倭漢人の耳はおなじ事なるを知べし鳩を安南にて「ハッ」といふ「ハッウ〳〵」と鳴ときゝてさいへるなるべし皇國にては「ハトウ〳〵」と鳴ときゝて「ハト」といふ唐土にては「カフ〳〵」と鳴ときゝて鴿（カフ）といへるなるべし

（五十五）咄（トツ）と笑ふ　俗にドット笑ふといふも漢書東方朔傳に朔笑レ之曰レ咄注に師古曰咄叱咄之聲とあ

り
（五十六）旗頭　俗に旗頭といふは旄頭と書べし漢書東方朔傳に見ゆ此說非也○敦盛草子三丁オに武藏國の住人しのたうのはたがしら熊谷の次郎直實にて候云云頭書太平記廿六ノ四丁オ又五丁オ同卅五ノ卅一丁ウ
（五十七）虎とのみ用られし　詠歌大概引歌に「虎とのみ用られしはむかしにて今は鼠の穴うよの中」漢書東方朔傳に尊之則爲將軍卑之則爲虜抗之則在青雲之上抑之則在深泉之下用之則爲虎不用則爲鼠とあるによれる也
（五十八）水至清則無魚人至察則無徒　漢書東方朔傳に水至清則無魚人至察則無徒冕而前旒所以蔽明黈纊充耳所以塞聰明有所不見聽有所不聞云々
（五十九）唯々　古書に唯々の字を「オ、トマウス」とよめり唯の一字を然よめり漢書東方朔傳注に師古曰唯々恭應也音弋癸反云々魏志十五十五丁ウ張既傳注に魏略曰云々帝令侍中贊引呼隴西太守前楚當言唯而大應稱諾帝顧之而笑云々楚は游楚也
（六十）祭祀禁肉并放生　祭に肉を禁する事は梁武帝にはじまるよし佛祖統紀に見ゆ鶴林玉露五の巻四丁オ放魚詩の條に王荊公新法煩苛毒流寰宇晚歲歸鐘山作放魚詩云物我皆畏苦捨之寧啖茹其與梁武帝窮兵嗜殺而以麵代犧牲者何殊隋書五十五卷乞伏慧傳
（六十一）歌人の名を耻　余歌を好て雪月花時これに心をやるをたのしみとすれどいたく好るにあらず折にふれて心のうごくのみ鶴林玉露六の巻十八丁オ朱文公論詩の條に胡澹菴上章薦詩人十人朱文公與焉文公不樂誓不復作詩と見ゆ
（六十二）非常の人非常の事　鶴林玉露六の巻十七丁オ經界の條に司馬相如曰世必有非常之人然後有非常之事有非常之事然後有非常之功夫非常者固常人之所異也故曰非常之元黎民懼焉及臻厥成天下晏如也云々今茲天保七年の春水戸相公臣下の江戸にあるものを水戸に下し給ひまた水戸より良能の士を召て事を任し給へり定在府のものいたくわびさわぎておだやかならざりしがほど經て平ぎぬかくて御封國御守護の爲にもなり（以下缺文）
（六十三）讀書十遍不如一寫　鶴林玉露一の巻二丁オ手寫九經條に唐高宗の語を擧て朕思讀十遍不如

寫一遍云々
（六十四）世短意多　古詩云人生不滿百常懷千歲憂而淵明以五字盡之曰世短意常多是也東坡云意長日月促則倒轉陶句爾云々　與清この句に感ありてよめる歌「いかなれはいとも短き人のよに愁は長くたえせさるらん」「ねき事ははまのまさこの數おほしたゝひとつなる心なれとも」「世の路を心やすくも經かたしやひま行駒にのれる此身は」

松屋筆記卷之八十四

華頂殿侍倭學士　平與清稿

（一）同居義居　『世に親族一家に同住するを同居といへりこは義居ともいふべし鶴林玉露卷十七十二丁ウ陸氏義門の條に陸象山家于撫州金谿累世義居一人最長者爲家長一家之事聽命焉云々また陳氏義居專一門於江左云々』頭書能改齋漫錄四卷に五世九世同居の條あり
（二）文章は博恰による詩歌のごとく別才によるものにあらず　鶴林玉露十八卷三丁ウ文章性理の條に凡作文章須要有萬卷書爲之根抵自然雄渾有筋骨精明有氣魄深醇有意味可以追古作者といへるを文帝典論に文章者經國之大業不朽之盛事とあるに對照して文章の作安からぬを知べし頭書癸辛雜識續集下卷李性學條に李性學之爲吾教也有詩云天下今無讀書者世間惟有作詩人
（三）糞錢掃除代肥代　江戸の町々の家主といふもの店子の糞を賣を常貲とす其名を掃除代とも肥代ともいへりこは糞錢といふべし糞錢の字面鶴林玉露十七の巻十丁ウに見ゆ

(四)小兒の夫役錢　小兒より夫役錢を取事鶴林玉露十七十六丁廣右丁錢の條に見えたり

(五)父母のもとにありては叱咤之聲を出さず　夫子居二親庭一叱咤之聲未レ嘗至二於犬馬一云々　鶴林玉露十七二丁に見ゆ

(六)禍福の大星算　鶴林玉露二の卷十六丁ウ大算數の條に有二日者一謁二黃直卿一云善算二星數一知二人禍福一直卿曰吾亦有二箇大算數一書曰惠レ迪吉從レ逆凶作レ善降二之百祥一作二不善一降二之百殃一大學曰言悖而出者亦悖而入貨悖而入者亦悖而出此箇數亘二古今一不レ差豈不レ優二於子之算數一乎と見ゆ與清曰禍福無レ門可下謹愼以守二其身體一積善以謏二其家族一此亦大算數也

(七)貧乏かくし愚昧かくし　鶴林玉露二の卷十七丁ウ晩學の條に東坡詩云貧家淨掃レ地貧女巧梳頭下士晚聞レ道聊以拙自修朱文公每借二此句一作二話頭一接二引窮鄉晚學之士一云々貧家もよく掃除すればさまで見ぐるしからず貧女もよく髮を結ひ身ぎれいにすれば見にくからず愚昧の者も先生に從て學問にもあれ詩歌にもあれこれをまなべば拙劣を掩ひかくすべし

(八)天子无二失德一則天下不レ亡家主无二失德一則家不レ傾　鶴林玉露二の卷十八丁ウ盜脫レ身條に賴文政曰天子無二失德一天下無二他聲一云々與清曰家主无二失德一則家不レ傾也

(九)鬻レ法　鶴林玉露十一の卷十一丁ウ鬻二祠廟一條に王安石坊場を鬻ぎ河渡司農祠廟をひさぐ事をいへり古より官位を賣買するわざたえず後漢桓靈の世には宰相の官をさへ賣事と成て何進姉弟皇后と丞相とを買たりき又國を賣者おほし中に宋の秦檜大賈人也本朝古代位を賣事あり官を賣れる例はをさ〳〵きこえず近代は公賣公買は重禁なれど隱賣隱買は禁制及がたしされば當路の權貴隱賣をしそこねて災を招きたるも聞ゆまた法を賣ものあり長官多くは欺れて判官大賣をし大利益をするがおほかり昨日までは正實の訟利あるも一夜の中に買得れば邪曲忽に利に變じ正實一日の中に非斷におとしいれらる長官これをしらざるは判官よく長官の臣にへつらひ賄貨をもて免るゝ也待居介佐惠文得乎賀永左右など此術に長じてよく長官を欺き法賣の大問屋なりしが永左右は事顯れて左遷せられき又金まうけを買者あり又金工權貴の家に買て大利を得五年許間に積黃金二三十萬兩に及べりとぞ其從僕等職工の身として士大夫にまがふ兩刀を挾み美服を著し美食に飽き美女に擁せられ驕奢王侯にもこえつべし衣商の徒また官奴や下官坊奴に買て利大を得驕を極むそれらが從僕も美服美食美女に飽き日夜花街劇場に遊淫し聲妓幇間俳優の輩に財を施衣服弄器を施すを榮耀とし金銀をもて土塊の如く投散せりされど正き事には一錢をもをしみ賄賂驕奢名聞には大金銀を擲散す實は大宅の官奴官人を欺計りて利を買奴原なれば國家の大賊なれどよく賄しよく逃れて下位賤官のために救はれ長官此惡計をしらざれば大宅の金銀費すのみかの金工衣商が從僕の妻玳瑁の櫛笄一具にて價百兩にあまれるを二具もたるを余ましく見聞せりこれをおもふに些少の錢や衣類などをぬすみて罪科に處せられ身を亡す賤民はあはれむべき事ならずやこの賣法の官人買利の商工等をとらへて元をもはね家をも沒修せしかば天府金銀みち貧民橫法を免ていと〳〵心よからまし

(十)災異は天にあらず人にあり　魏書崔洪傳に浩曰古人有レ言夫災異之生由レ人而起人無レ釁焉妖不二自作一故人失二於下一則變見二於上一天事恒レ象百代不易と見ゆ陰陽錯謬し飢饉疫疾の難も天の所爲にはあらず人これをなして天これに應ずる也可レ畏可レ愼

(十一)天道或は應じ或は應せず　同傳に浩曰天道懸遠或消或應昔宋景見レ災修レ德熒惑退舍云々されば天變地妖災異妖言も應不應あり一概にいひさだむべからず

(十二)蟲拳　鶴林玉露八の卷八丁ウ物畏二其天一條に蛇蛙を制し蜈蚣蛇を制し蜘蛛蜈蚣を制するよし見ゆ舊本今昔物語廿六の卷第九語に加賀國の沖の島にて蛇と蜈と戰けるに蜈常にうは手なりけるを釣人七人して蛇を助たる談見え俵藤太秀鄕江州三上山にて蛇に加勢して蜈を射殺せし事俵藤太草子謠詞東國紀行などに載たり

(十三)どちぐち　『俗言に物のわからぬ事をドヂグヂといひドヂグヂの挨拶などもいへりこは彼方此方の訛にて彼方とも此方とも決せず不分別の義也薩摩國にては蛙の子のいまだがへらざるほど心太または葛煉などやうにヌラ〳〵として丈一二尺にめぐり二寸位にて黑き星所々にある物いくらともなく溜水の

中に生するありこれをドヂグヂといへりこれがかへりていとちひさき間(ホド)を江戸にてオタマジヤクシといふ古歌とて「どぢぐぢは苗代時に目もなくて五月の比にかはづとぞなる」此歌出所尋ぬべし』

(十四)チヤッカスデモナイと云方言チヨッカチヨットチラトチヨックリチヤクジニハユカヌチヤットト『水戸の方言に何とも思ハヌ又は小々(サヽイ)の事などといふべきを茶粕(チヤツカス)デモ無イといへりこは江戸にてチヨッカニハ出來ヌチヨッカニハ成ラヌなどいふチヨッカと通て聞ゆチヨッカは容易(タヤス)き事にいひてチヨット又チット又チト〳〵又チラト又チョックリチヨットなど同語也又チヤクジニハユカヌなどゝいふもチヨット事ニハユカヌと云義也京都人はチヤットといへり武藏足立郡鳩谷邊の人はニヤクといへりニヤクトハ成ラヌニヤクトハ行カヌなどいふみな江戸のチヨットといふにおなじ些の字をチトと訓もいと後の俗言にて古言にはあらずもとは小(チヒサ)キのチと同語にや尚可レ考』

(十五)經王　金光明經(卷第一)序品(四丁ガ)に是金光明諸經之王云々

(十六)生死無レ限并智慧刀煩惱網　金光明經(卷第一)空品(廿六丁ガ)に生死無レ限輪轉不レ息本無レ有レ生亦無二和合一云云また以二智慧刀一裂二煩惱網一五陰舍宅觀悉空寂云云

(十七)法味法食　同經(卷第二)四天王品十一(丁ウ)に我等四王及無量鬼神以二是法食善根因緣一得レ服二甘露無上法味一增二長身力一心進勇銳增二益諸天一云々

(十八)金光明經抄出　頓證於菩提(序品三丁ウ)經王(序品四丁ガ)堅牢地神(同五丁ガ)壽命得長(壽量品六丁ガ)不殺同施食同尊顏(懺悔品八丁ウ)勸請四天王(品二丁ガ)知淵無邊法水具足(同十三丁ガ)妙經典(同十四丁ガ)吼沙門天王城(功德天品十七丁ガ)堅牢地神品(二ノ十八丁ウ)阿闍佛(善集品十二丁ガ)流レ水與レ水流水長者子(品一丁ウ)蒙塵(捨身品十五丁ガ)

(十九)蒙塵　金光明經四の卷(十四丁ウ)捨身品に最後遙見二一信來一(リノシカヒノ)頭蒙二塵土一血汗二其衣一灰糞塗(カク)レ身悲號而至云々天子蒙塵などいふは敗走して蒙二塵土一よし也

(廿)勸請　同經二の卷(二丁ガ)四天品に我等四王當共勸請云々賢愚因緣經一卷(五丁ガ)雜譬喩品に爾時梵天知二佛所念一卽從レ天下前詣二佛所一頭面禮レ足長跪合掌勸二請世尊一云々同(六丁ウ八丁ガ)同十三(十七丁ガ十五丁ガ)

(廿一)虎にあたへし身　金光明經四卷(十五丁ウ)捨身品に爾時世尊欲レ爲二大衆一斷レ疑網一故說二是舍利往昔因緣一阿難過去之世有レ王名曰二摩訶羅陀一修二行善法一善治二國王一無レ有二怨敵一時有二三子一端正微妙形色殊特威德第一第一太子名曰二摩訶波那羅一次子名曰二摩訶提婆一小子名曰二摩訶薩埵一是三王子於二諸園林一遊戲觀看次第漸到二一大竹林一憩レ駕止息第一王子作二如レ是言一我於二今日一心甚怖懼於二是林中一將無二衰損一第二王子復作二是言一我於二今日一不二自惜一身但離二所愛一心憂愁耳第三王子復作二是言一我於二今日一獨無二怖懼一亦無二愁惱一山中空寂神仙所レ讃是處閑靜能令二行人安隱受一レ樂時諸王子說二是語一已轉復前行見レ有二一虎一適產七日而有二七子一圍繞周匝飢餓窮悴身體羸瘦命將レ欲レ絕第一王子見二此虎一已作二如レ是言一怪哉此虎產來七日七子圍繞不レ得レ求レ食若爲レ飢逼必還噉レ子第三王子言此虎縛常所(コノツチノ)レ食何物第一王子言此虎唯食二新熱肉血一第三王子言君等誰能與二此虎食一第二王子言此虎飢餓身體羸瘦窮困頓乏餘命無レ幾不レ容レ餘處爲レ其求レ食設(モシ)餘求者命必不レ濟誰能爲レ此不レ惜二身命一第一王子言一切難レ捨不レ過二己身一第二王子言我等今者以二貧惜一故於二此身命一不レ能二放捨一智慧薄少故於二是事一而生二驚怖一若諸大士欲レ利二益他一生二大悲心一爲二衆生者一捨二此身命一不レ足レ爲レ難時諸王子心大愁憂久住視レ之目未二曾捨一作二是觀一已尋レ便離去爾時第三王子作二此念一言我今捨レ身時已到矣何以故我從レ昔來(コノカタ)多棄二此身一都無二所爲一亦常愛護處二之屋宅一又復供二給衣服飲食臥具醫藥象馬車乘一隨レ時將養令レ無レ所レ乏而不レ知レ恩反生二怨害一然復不レ免二無常敗壞一復次是身不堅無レ所二利益一可レ惡如レ賊猶若レ行レ厠我於二今日一當レ使レ此身作二無上業一於二生死海中一作二大橋梁一復次若捨二此身一則捨二無量癰疽瘡疾百千怖畏一是身唯有二大小便利一是身不レ堅如二水上沫一是身不淨多二諸蟲尸一是身可レ惡筋纏血塗皮骨髓腦共相連持如レ是觀察甚可二患厭一是故我今應當レ捨離以求二寂滅無上涅槃一永離二憂患無常變異一生死休息無二諸塵累一無量禪定智慧功德具足成就微妙法身百福莊嚴諸佛所レ讃證一成如レ是無上法身一與二諸衆生一無量法樂是時王子勇猛堪任作二是大願一以二上大悲一熏二修其心一慮二其二兄心懷一怖懅一或恐二固遮爲一作留難一卽便語言兄等今者可レ與二眷屬一還二其所止一爾時王子摩訶薩埵還至二

虎所ニ脫ニ身衣裳一置ニ竹枝上一作ニ是誓言一我今爲レ利ニ諸衆生一故證ニ於最勝無上道一故大悲不レ動捨レ難レ捨故爲レ求ニ菩提一智所ゟ讀故欲レ度ニ三有諸衆生一故滅ニ生死怖衆惱熱一故是時王子作ニ是誓一已卽自放レ身臥ニ餓虎前一是時王子以ニ大悲力一故虎無ニ能爲一王子復作ニ如是念一言虎今羸瘦身無ニ勢力一不レ能レ得ニ我身血肉一食ゟ卽起求レ刀周徧求レ之了不レ能レ得卽以ニ乾竹一刺レ頸出レ血於ニ高山上一投ニ身虎前一是時大地六種震動日無ニ精光一如ニ羅睺羅阿修羅王捉持障蔽一又雨ニ雜華種種妙香一時虛空中有ニ諸餘天一見ニ此事一已心生ニ歡喜一歎未曾有讃言善哉善哉大士汝今眞是行ニ大悲一者爲ニ衆生一故能捨レ難レ捨於ニ諸學人一第一勇健汝已爲レ得ニ諸佛所讃常樂住處一不レ久當レ證ニ無惱無熱清淨涅槃一是虎爾時見ニ血流出汗ニ王子身一卽便舐レ血噉ニ食其肉一唯留ニ餘骨一爾時第一王子見ニ地大動一爲ニ第二王子一而說レ偈言「震ニ動大地及以大海一日無ニ精光一如レ有ニ覆蔽一於ニ上虛空一雨ニ諸華香一必是我弟捨ニ所レ愛身一」第二王子復說レ偈言「彼虎產來已經ニ七日一七子圍繞窮無ニ飮食一氣力羸損命不ニ云遠一小弟大悲知ニ其窮悴一懼ゟ不ニ堪忍一還食ゃ其子ょ恐定捨レ身以救ニ彼命一」時二王子心大愁怖涕泣悲歎容貌憔悴復共相將還至ニ虎所一見ニ弟所レ著被服衣裳一皆悉在ニ一竹枝之上一骸骨髮爪布散狼藉流ニ血處々一徧汗ニ其地一見已悶絕不ニ自勝ゟ持投ニ身骨上一良久乃蘇卽起舉レ首號レ天而哭我弟幼稚才能過レ人特爲ニ父母一所ニ愛念一奄忽捨レ身以飼ニ餓虎一我今還レ宮父母設レ問當云何答我寧在レ此併ニ命一處一不レ忍レ見ニ是骸骨髮爪一何心捨離還見ニ父母妻子眷屬朋友知識一時二王子悲號懊惱漸捨而去時小王子所レ將侍從各散ニ諸方一互相謂言今者我天爲ニ何所在一爾時王妃於ニ睡眠中一夢ゟ乳被レ割牙齒墮落得ニ三鴿雛一一爲レ鷹食ょ爾時王妃大地動時卽便驚寤心大愁怖而說レ偈言「今日何故大地大水一切皆動物不ニ安所一日無ニ精光一如レ有ニ覆蔽一我心憂苦目瞤瞤動如ニ我今者所レ見瑞相一必有ニ災異一不祥苦惱二」於レ是王妃說ニ是偈一已時有ニ靑衣一在レ外已聞ニ王子消息一心驚惶怖尋卽入レ內啓ニ白王妃一作ニ如レ是言一向者在レ外聞諸侍從推ニ覓王子一不レ知ニ所在一王妃聞已生ニ大憂惱一涕泣滿レ目至ニ大王所一我於ニ向者一傳ニ聞外人失ニ我最小所愛之子一大王聞已而復悶絕悲噢苦惱拭レ淚而言如何今日失ゟ我心中所ニ愛重一者ょ爾時世尊欲ニ重宣ニ此義一而說レ偈言「我於ニ往昔無量劫中一捨ニ所レ重

身一以求ニ菩提一若爲ニ國王一及作ニ王子一常捨レ難レ捨以求ニ菩提一我念ニ宿命一有ニ大國王一其王名曰ニ摩訶羅陀一是王有レ子能大布施其子名曰ニ摩訶薩埵一復有ニ二兄一長者名曰ニ大波那羅一次名ニ大天一三人同遊至ニ一空山一見ニ新產虎飢窮無ゎ食時勝大士生ニ大悲心一我今當レ捨ニ所レ重之身一此虎或ゃ爲ニ飢餓所ゎ逼儻能還食ゃ自所レ生子ょ卽上ニ高山一自投ニ虎前一爲レ令ニ虎子得ゎ全ニ性命一是時大地及諸大山皆悉震動驚ニ諸蟲獸一虎狼師子四散馳走世間皆闇無レ有ニ光明一是時二兄故在ニ竹林一心懷ニ憂惱一愁苦涕泣漸漸推求遂至ニ虎所一見ニ虎虎子血汗ニ其口一又見ニ骸骨髮毛爪齒處々迸レ血狼藉在ゎ地時二王子見ニ此事一已心更悶絕自蹙ニ於地一以ニ灰塵土一自塗ニ總身一忘ニ失正念一生ニ狂癡心一所レ將侍從覩ニ見是事一亦生ニ悲慟一失レ聲號哭互以ニ冷水一共相噴灑然後蘇息而復得レ起是時王子當レ捨レ身時一正値ニ後宮妃后婇女眷屬五百共相娛樂一王妃此時兩乳汁出一切肢節痛如ニ針刺一心生ニ愁惱一似レ喪ニ愛子一於レ是王妃疾至ニ王所一其聲徹細悲泣而言大王今當ニ諦聽諦聽一憂愁盛火今來燒レ我我今二乳俱時汁出身體苦切如レ被ニ針刺一我見ニ如レ是不祥瑞相一恐ゐ更不ニ復見ニ所愛子一今以ニ身命一奉ニ上大王一願速遣ニ人求ニ覓我子一夢ニ三鴿雛在ニ我懷抱一其最小者可ニ適我心一有レ鷹飛來奪レ我而去夢ニ此事一已卽生ニ憂惱一我今愁怖恐命不レ濟願速遣ニ人推ニ求我子一是時王妃說ニ此語一已卽時悶絕而復蹶レ地王聞ニ是語一復生ニ憂惱一以レ不レ得レ見ニ所愛子一故其王大臣及諸眷屬悉皆聚集在ニ王左右一哀哭悲號聲動ニ天地一爾時城內所レ有人民聞ニ是聲一已驚愕而出各相謂言今是王子爲ニ活來一耶爲ニ已死亡一如レ是大士常出ニ輭語一爲レ衆所レ愛今難レ可レ見已有ニ諸人一入レ林推求不レ久自當レ得ニ定消息一諸人爾時憧惶如レ是而復悲號哀ニ動神祇一爾時大王卽從レ座起以ニ水灑レ妃良久乃蘇還得ニ正念一徵聲問レ王我子今者爲レ死活耶爾時王妃念ニ其子一故倍復懊惱心無ニ暫捨一可レ惜我子形色端正如何一旦捨レ我終亡云何我身不ニ先薨沒一而見ニ如レ是諸苦惱事一善子妙色猶ニ淨蓮華一誰壞汝身一使ニ令分離一將非ゎ是我昔日怨讐挾ニ本業緣一而殺ゎ汝耶我子面目淨如ニ滿月一不レ圖一旦遇ニ斯禍對一寧使ニ我身破碎如ゎ塵不レ令ニ我子喪ニ失身命一我所レ見夢已爲レ得レ報直我無レ情能堪ニ是苦一如ニ我所ゎ夢牙齒墮落二乳一時汁自流出必定是我失ニ所愛子一夢レ三鴿雛一鷹奪レ一去三子之中必定失レ一爾時大王卽告ニ

其妃ニ我今當レ遣ル大臣使者周徧東西推求覓ク子汝今且可レ莫ニ大憂愁一大王如レ是慰ニ喩妃一已卽便嚴レ駕出ニ其宮殿一心生ニ愁惱一憂苦所レ切雖レ在ニ大衆一顏貌憔悴卽出ニ其城一覓ニ所愛子一爾時亦有ニ無量諸人一哀號動レ地尋從ニ王後一是時大王旣出レ城已四向顧望求ニ覓其子一煩惋心亂靡レ知ニ所在一最後遙見下有ニ一信一來ト頭蒙ニ塵土一血汗ニ其衣一灰糞塗レ身悲號而至爾時大王摩訶羅陀見ニ此使一已倍生ニ懊惱一舉レ首號叫仰レ天而哭先所レ遣臣尋復來至旣至ニ王所一作ニ如レ是言一願王莫レ愁諸子猶在不レ久當レ至今王得レ見須臾之頃復有レ臣來見ニ王愁苦顏貌憔悴身所レ著衣垢膩塵汗一大王當レ知一子已終二子雖レ存哀悴無レ賴第三王子見下虎新產飢窮七日恐還食ト子見ニ是虎一已生ニ大悲心一發ニ大誓願一當レ度ニ衆生一於ニ未來世一證ニ成菩提一卽上ニ高處一投ニ身虎前一虎飢所レ逼便起噉食一切血肉已爲都盡唯有ニ骸骨狼藉在ヒ地」

歸命頂禮　——現在十方一切諸佛ニ云々見ニ于滅業障品一

諸法從ニ因緣一生　一切——云々同上

（廿二）公案　禪宗無門關（鼇頭本三丁右に）遂將ニ古人公案一作ニ敲レ門瓦子一隨レ機引ニ導學者一云々中峰廣錄山房夜話上卷に或問佛祖機緣世稱ニ公案一者何耶幻曰公案乃喩ニ乎公府之案牘一也法之所レ在而王道治亂實係レ焉公者乃聖賢一ニ其轍一天下同ニ其途一之至理也案者乃記ニ聖賢爲ヒ理之正文也凡有ニ天下一者未ニ嘗無ニ公府一有ニ公府一者未ニ嘗無ニ案牘一蓋欲下取以爲レ法而斷中天下之不正ト者也公案行則理法用理法用則天下正天下正則王道治矣夫佛祖機緣目レ之曰ニ公案一亦爾蓋非ニ一人之臆見一乃會ニ靈源一契ニ妙旨一破ニ生死一越ニ情量一與ニ三世十方百千開士一同稟之至理也云々碧巖集種電抄（一卷廿六丁右）にも山房夜話を引てときたりき　公案ハ古人ノ法門ノ義理ヲ述タル書付ナリ是ヲ朝廷ノギンミ書付ニタトヘテ公案ト云也○公案トハ吟味書ト云ニ同ク法問ノ吟味ノ行屆ク趣ノ書付也（頭書）吸耕錄廿ノ夢中問答中八丁オに古人ノ言句公案云々

（廿三）江湖の僧會（ゾウエ）　禪宗に江湖といふ事あり江西と湖南の地名によれる稱也馬祖江西にあり石頭湖南にあり禪僧この二禪師に見（マミエ）ざるは無知なりとし爭競して二處におもむく江湖の名これに權輿せり景德傳灯錄二の卷二丁江西道一禪師傳に劉軻云江西主ニ大寂一湖南主ニ石頭一往來憧々不レ見ニ二大士一爲ニ無知一矣云々十四の卷四丁石頭希遷大師傳にも見ゆ道一禪師姓馬氏故に馬祖と稱し大寂とも號す無門關序に一擲莫レ敎ニ一滴落ニ江湖一千里烏騅追不レ得云々

（廿四）改元の始　改元の始は秦惠王よりのよし事物紀原に見ゆ

（廿五）引導　法華經方便品に引ニ導衆生一云々今世出家の引導を渡すといふはこれによれる也

（廿六）千差萬別　無門關（第十六則）頌に會則事同一家不レ會萬別千差不レ會事同一家會則萬別千差云々俗に千者萬別と心得たるは誤也

（廿七）心頭（シンヽウ）に掛る　無門關（第十九則）頌に若無ニ閑事挂一心頭一便是人間好時節云々俗に心頭に掛るといふはこれを出處とす

（廿八）點心　無門關（廿八則）に及レ到ニ澧州路上一問ニ婆子一買ニ點心一云々前燈新話の注に與ニ點茶之點一同義即少食鎭レ心也云々能改齋漫錄（一卷）點心の條に世俗例以ニ早晨小食一爲ニ點心一自ニ唐時一已有ニ此語一按唐鄭傪爲ニ江淮留後一家人備ニ夫人晨饌一夫人顧ニ其弟一曰治粧未レ畢我未レ及レ整爾且可ニ點心一其弟舉レ甌已罄俄而女僕請ニ飯庫鑰匙一備ニ夫人點心一傪話曰適已給了何得ニ又請一云々（頭書）野客叢書十二ノ十八丁ウ小貪ノ條花營三代記下九丁ウ

（廿九）飯裏（ノシノナカ）の砂泥中（ドロノナカ）の刺（トゲ）　無門關（第廿則）頌に飯裏有レ砂泥中有レ刺云々

（卅）老て羞を知らず　無門關（廿三則）に無門曰南泉可レ謂老不レ識レ羞縱開ニ臭口一家醜外揚云々余がよめる歌あり「されはとてやるかたなきに世のはちをしのひなれつゝ身はおいにけり」

（卅一）扇子　無門關（四十八則）に僧請ニ益雲門一門拈ニ起扇子一云扇子跨跳上ニ三十三天一築ニ著帝釋鼻孔一云々

（卅二）雨傾レ盆　無門關（四十八則）に東海鯉魚打一棒雨似ニ盆傾一云々

（卅三）不具（カタハ）の身狐貧　金光明最勝王經（一卷第一序品頌に衆生身不具壽命將ニ損滅一諸惡相現レ前天神皆捨離親友懷ニ瞋恨一眷屬悉分離彼此共乖違珍財皆散失云々

（卅四）芥子許　同如來壽量品に婆羅門言童子我欲下供ニ養無上世尊一今從ニ如來一求（丙）請舍利如ニ芥子許（バカリノ）一云云

（卅五）難解難入　又云應ニ當至心聽ニ是金光明最勝王經一於ニ諸經中一最爲ニ殊勝一難解難入聲聞獨覺所レ不ニ能知一云々

(卅六)蠅飲レ酒　又云若蠅飲ノ如レ酒醉周二行村邑中一云々

(卅七)法身法界　又云法身正覺法界即如來此是佛眞身云々

(卅八)涅槃　又云諸佛如來究竟斷二盡諸煩惱障所知障一故名爲二涅槃一云々是以下十大涅槃の因緣を說たれば閱て知べし

(卅九)眞如虛妄　又云眞如是實餘皆虛妄云々

(四十)盡未來際　又云盡未來際無レ有二窮盡一云々

(四十一)希有轉變　又云恒河駄(ヤキ)流水可レ生二白蓮華一黃鳥作二白形一黑烏變爲レ赤假使贍部樹可レ生二多羅果一竭樹羅枝中能出二庵羅葉一斯等希有物或容二可轉變一世之舍利畢竟不レ可レ得云々

(四十二)圓光應身法身　同分別三身品に具二三十二相八十種好項背圓光一云々應身法身の事も見ゆ

(四十三)如々如々智　また如如如々智また法如々などの事も見ゆ

(四十四)水鏡　また譬如レ無量無邊水鏡依二於光一故空影得レ現二種々異相一空者即是無相也

(四十五)智慧劒　金光明最勝王經二卷夢見懺悔品に一切衆生於二有海一生死縛網堅牢縛願以二智劒一爲二斷除一離レ苦速證二菩提處一云々維摩經註本九卷十七丁右菩薩行品に以二智慧劒一破二煩惱賊一云々注に肇曰煩惱之寇密固難レ遣自レ非二惠劒一無二以斷除一云々遺敎經廿七丁右に實智慧者則是度二老病死海一堅牢船也亦是無明黑暗大明燈也一切病者之良藥也伐二煩惱樹一之利斧也云々注に煩惱根株智及能伐云々慈恩傳七の卷六丁左に智慧之刀云々

(四十六)金光明最勝王經抄出　卷第一〇序品第一調伏　大象王　解脫　大自在　善巧方便　八解脫到彼岸　學地　頂禮　大龍王　忍行精勤　慧門　微妙神通　總持　辨才無盡　一切種智　魔軍　法鼓轉妙法輪　成就大智　具足大忍　大慈悲心　堅固弘誓心　盡未來際　化導　敷演　甚深空性　上首安住　頂禮佛足　擁護　書寫流布　雲集　觀察　經王　四方四佛　威神　不具身　彼此　惡星變　眷屬隨喜　持經者　無垢　遠離　懺悔法　○如來壽量品二

(四十七)天保七年霖雨及飢饉　天保七丙申年三月十九日壬寅より雨降出て廿九日までの間快晴僅に四日なり其外は降ざれば曇り或は朝降て晴れ日中降て夕に止などして四月に成ぬ四月朔日より八月十五日まで

での間おなじさまにて快晴十日にみたず去年乙未の冬より今年の春三月にいたるまで小地震幾十度ふりけん一日夜に三四度又は五度もふりし事ありき七月十八日朝より雨降出東南の風おこれるが巳の時よりいたくはげしく成て面をむくべきやうもなし江戸御本丸の御玄關前なる大縱木折れその外西丸御城内の櫓塀武家屋敷町家などの風損詞にものべつくすべからず芝田町鈴が森の海邊に大船を吹あげその外破船おほかりとぞ深川靈巖寺の新立の本堂の屋上の瓦を吹飛したるが修理料金三百兩許なりといひ宗對州の第三箇處の風損修理料金千兩に近しといへりこれらにて大概推量べし八月朔日また北風雨はげしく十八日の風につづり同月十三日夜も烈風雨也十六日又南風雨いとあらましくて朔日の風につづり七月十八日第一八月朔日第二十六日第三十三日第四と順次せる大風雨なりかくて葛西領金町の堤きれて江戸川あふれ流れ二萬石の地水底になれる事卅日に過ぎ水戸通路たえたること十餘日なり武藏の見沼邊は七月十八日以後八月廿三日までも水たゝへて舟筏かよはず江戸町賣の白米錢百文に五合なりしが八月初より四合五勺同十八日より四合廿一日より三合五勺なり此時搗大麥百文に四合割麥六合也小豆一升の價錢百六拾四文水油一合調五十文鹽一升六拾八文大根いとちひさきを拾本つかねたるが百三拾貳文大なるは百七拾貳文にも及べり茄子はたえてなし熟瓜冬瓜白瓜などすべて瓜類ふつにになし西瓜の大さ梨子の大なるほどなるがまゝ見ゆめり味噌金壹兩に十八貫目さつま芋百文に六百目里芋壹升六拾四文その外高價ならざるものはなし魚類たえてなし實に古今未曾有の凶歲也おほやけより命ありて裏店(ウラダナ)住の町人男子に白米貳升五合錢四百貳拾四文老幼婦女の類は白米壹升五合錢貳百四拾八文たまはりき江戸中すべて三拾貳萬二千人餘にて米五千石餘錢拾三萬貳千貫許といへり裏店住にても下女下男弟子などあるものにはたまはらず表住(オモテヅキ)の者は下女下男弟子などのなき工商にても賜事なし

(四十八)とゞくとづく　『俗に屆の字を「とゞく」と訓は「とづく」の轉語也源重之集下卷にたちはきのをさ源のしげゆきつもごりの日を給て歌よみて奉らん時はたゝんと仰られければ春廿夏廿秋廿冬廿戀十雜

十といへる中戀十の第七首に「その原やふせやにとつくかけ橋のたかためにかはわれはわたしゝ」此歌夫木抄雜三橋部にも載てかけ橋「の」ゝ「の」もじを「も」に作れり新撰六帖第六鶴ノ歌に前左京權太夫信實「さしもこそ齡はなかきすな鶴のなと毛衣のあしにとつかぬ」持統紀十五丁左四年十月乙丑條に達字を「トヅク」と訓たり字鏡集五卷尸部に屆(カイハ)「ヨル」「イタル」「キハマル」「トヅク」云々同書七卷走部に通(トウ)「トホル」「カヨフ」云々類聚名義抄佛上卷走部に通勅東反「トホル」「カヨフ」「トヅク」云々同書法下卷尸部に屆音介「イタル」「ヨル」「キハマル」「トヅク」云々以呂波字類抄卷二止部辭字門に屆歸著詮達極已上「トヅク」云々新撰集上卷登部他聲に屆(カイ)「トヅク」「イタル」至也云々悉曇難字記二卷尸部に屆(カイ)「ヨル」「イタル」「キハム」「トヅク」「ツク」云々源平盛衰記十五卷十丁左宇治合戰段に馬ノ足ノトヅカン程ハ千綱ヲスクフテ歩セヨ云々倭訓栞十八卷止部に常に屆を「とゞく」とも「とづく」ともよめり屆と書べし留著の義成べし口語にとどけて置といけに逢不といきなどいふは達の意也云

（四十九）木芽漬（キノメヅケ）『雍州府志六の卷十七丁オ造釀部に木目（キノメ）漬（ヅケ）洛北鞍馬土人春末夏初採二通草（アケビノ）葉一與二忍冬葉木天蓼（マタビノ）葉一合レ細二剉之一以二鹽水一漬レ之然後陰乾用レ之倭俗草木蔕芽謂レ目云々古今顯昭注一卷卷上「カスミタチコノメモ春ノ雪フレハ花ナキ里モ花ソチリケル」ト云歌ノ注ニコノメハ木ノ目也但人ノ食スル物ニキノメト云ハアケビト云モノ、葉ヲ云也云々庭訓往來四月十一日狀に鞍馬木芽漬云々扶桑下卷に貞丈云出羽國人ノ談ニ云其國ノ土俗毎年四月老若男女山野ニ出テ木ノ芽ヲ取テ菜トス或ハ煮テ食シ或ハ鹽ニ漬テ畜フ其木ノ目ト云ハアケビト云草ノ芽也アケビハ木通ト云物也ツルアリテ木ニカラミ付モノ也木ノ如クナル物也鞍馬ノ木芽漬モ是也ト云細ニキザミテ鹽氣アル物也ト云今モワゲ物ニ入テ送ルト云也云々節用集幾部に食服門に木目漬キノメヅケ云々食療正要二の卷十七丁オ赤烏隨筆下卷廿一丁オなどにも見ゆ』

（五十）かくやの香物『香物にさまざまの漬物をあつめて細かにきざみ酒醬油を加減してかけたるを世にカクヤといへりこは神祖の御時岩下覺彌（カクヤ）といへる料理人が調じて奉れるを御感ありてやがてその名を覺彌（カクヤ）といふべきよしのたうびしにおこれりとなんそは岩下氏の家傳說のよし屋代弘賢ものがたれりき』

（五十一）混本歌　古今集眞名序に爰及二人代一此風大興長歌短歌旋頭混本之類雜躰非レ一云々顯昭注に今案眞名序の心にては長歌短歌混本等ノスガタサマザマニナルヨシニタトフト見エタリ公任卿注云云々混本（旋頭歌異名也）云々又私考云四句混本歌無レ載二諸式一件喜撰僞式在レ之仍俊賴範兼清輔等引二用之一無二其謂一歟喜撰式云「イハノウヘニネサスマツカエトオモヒシヲアサカホノ　ユフカケマタスウツロヘルカナ」（孫姫式同載レ之）以二此歌一首一爲二件四句二首一也所謂イハノウヘニ子ザスマツガエトノミコソタノムコヽロナルモノヲアサガホノユフカゲマタズチリヤスキハナノヨゾカシ云々○喜撰和歌作式に混本歌失レ心人爲顯レ詠耳「いはのうへにねさす松かえとおもひしものをあさかほの夕かけまたすうつろへるかな」○孫姫和歌式に後悔者混本之詠音韻不レ諧（カナハ）披二讀章句一循環耽味後見者唯悔恨云々古歌曰「以八乃宇倍爾根左須（イハノウヘニネサス）松栢止於毛比（トスモヒ）之物乎（シモノヲ）樓乃夕景萬他須宇津呂倍留加奈（アサガホノユフカゲマタズウツロヘルカナ）」音韻不レ諧是也云々○和歌童蒙抄十の卷雜躰部に混本歌「アサガホノ　ユフカゲマタズ　チリヤスキハナノヨゾカシ」又「イハノウヘニ子ザスマツガエトノミコソオモフココロアルモノヲ」コレハ一句ヲステヽヨマヌナリハジメノハスヱノ七字ヲステタリツギノハスヱ（歟）ノ七文字ヲ五文字ニヨメルナリヨクモヨムナルベシ但四條大納言抄に後悔病ニゾ入タルイソギテヨミイヅル故ニ文字ノカズサダマラヌヲノチニクヤシクオモフナルベシ○俊賴口傳第四條に混本歌といへはある例の卅一字の中に今一句よまぬなり「あさがほの夕かげまたすぢちりやすき花の名ぞかし」これはするの七文字よまぬなり「いはのうへにねさす松かえとのみこそたのむる心のあるものを」これは中の七文字の十文字ありて終七文字のなき也これも一のすがたなり云々○悅目抄に歌にあまたの躰あり長歌短歌旋頭混本廻文隱題折句疊句俳諧等也云々又云混本歌といふ物あり例の三十一字の歌の中に今一句を

よまざる也證歌云「朝顔の夕かせきたすちりやすき花の名ぞかし」是はするの七もじをよまざるなり「岩のうへにねざす松が枝とのみ思ふ心は有物を」これは中の七もじあまり一もじありてはての七文字の句のなきなり是もひとつのすがたなりかやうにもよむべきなり云々 ○奥義抄一の巻の和歌六躰條に混本歌つねの歌の一句なき也七字五字心にまかす安部清行朝臣歌云「あさかほのゆふかけまたすちりやすきはなのよぞかし」又五句の躰あり三國ノ町歌云「いはのうへにねさすまつかえとのみこそおもふこころはあるものを」○和歌色葉集上之一巻に旋頭のかみにかへると双本のもとにならぶと混本のもとにひたゝくと云義にはたがへる歟不審云々混本歌といへるは本にひたゝくとよむ也もとはひたゝくといへるもむかしにかへる心なり五句の末一句をのぞきて四句に心をつくすなり句もさだめぬ昔に似たりと云なりさればふるき式には意趣相同とて旋頭歌をば混本歌とも名付たり七字五字これも又心にまかせてのぞくべし一句をのぞきてよめる歌「朝がほの夕かげまたすちりやすき花のよぞかし」○八雲御抄一の巻の正義部に混本歌三十一字ノ内一句なき也又有二五句字不一レ足是一躰にてはあれど普通の事にあらずよみたる事もすくなし「朝かほの夕かけまたすちりやすき花のよそかし」是はするの七文よまざる也「岩の上にねざす松が枝とのみこそ思ふ心有物を」是は中の七字十二字ありて末の七文字のなき也句はあまりて又たらずともいひてん小町かやうていの物也善惡などあるべきほどのものとも見えず唯古今序に一ッのすがたといへるばかりなり云々○和歌肝要に歌にあまたのしなあり長歌短歌旋歌混本廻文隱題是也云々混本證歌云「あさかほの夕かけまたすちりやすき花のかそかし」○俊頼散木奇歌集十の巻混本歌部にこひの心をよせてよめる「いかでかとおもふ心はありす川うちながれてもふるかな」菊花によせてよめる「をみなへし心にかけておもへどもをりふしもなし」○慈鎮拾玉集四の巻の混本歌に「うきものとわか心をはおもひしりぬしるかひはなし君を久しくまもれ」與清曰混本の名古今眞名序を出處にて後の僞喜撰式をはじめものにおほく見えたり顯昭が序注の說いはれたるに似たれど本文に旋頭混本之類とあれば必二體の事ときこゆ混は混

雜未分の義にて本の五句の短歌に從はず一句不足なるがそれもいづれの句とも定らで混雜（ダブリ）たるよしの名にや然（サ）てふるき二首の歌は詞も作者も諸本異同ありて一定せず拾玉集のは旋頭歌とひとつものといへる說によりてよまれたりと見ゆ』

（五十二）白樫　しらかしは眞樫也眞と白とかよふよしは眞髮部は白髮部眞上村は白髮村眞壁郡は白壁郡なりしを白壁天皇の御諱を憚て改たるにてもしるく白銅鏡を「マスミカヾミ」とよみ万葉に「白妙にほふ眞土」などよめるにても相通こと知べし枕草紙春曙抄三卷七丁右にしらかしなどいふものまして深山木の中にもいとけどほくて三位二位のうへのきぬそむるをりばかりぞ葉をだに人の見るめるめでたきことをかしき事にとりいづべくもあらねどいつとなく雪のふりたるに見まがへられてそさのをのみことのいづもの國におはしける御事を思ひて人丸がよみたる歌などを見るいみじうあはれ也云々抄に拾遺に人丸「足引の山路もしらず白かしの枝にも葉にも雪のふれゝは」と有此歌の事にや云々

（五十三）今良（イマヨシ）ゴンリャウ　『延喜齋宮寮式七丁右初齋院

別當以下員條に宮女孀十四人戸座（ヘヤ）一人火炬（タキワラハ）小子二人今良（イマヨシ）四人仕丁十二人女丁八人云々又七丁左食法條に戸座（ヘヤト）火炬（タキワラハ）小子米一升二合餘今良（イマヨシ）女丁米食二本顆醬滓一合海藻一兩鹽一勺云云又十五丁左遷二野宮一裝束條に調布二十五段一丈二尺以下卜部上裝束准レ此云々又廿九丁左監送使條に飼丁今良各布一段云々又五十一丁右月料及節料條に今良八人別米二升鹽二勺云々又五十三丁右寮官人祿條に今良女丁各絹三丈庸布二段云々今良女各絹一疋布一段綿二屯云々

○同中務省式十九丁左時服條に主殿寮三百九十六人自注頭一人助一人允一人大屬一人小屬一人史生四人殿部廿人今良男一百四十一人今良女二百廿六人云々また服色條廿二丁右に春云々今良男女各絁三丈調布一端自注に秋絁一疋布一端綿三屯但女綿二屯云々○同縫殿寮式廿八丁右に凡寮直（トノヰ）今良廿四人男二人女廿二人其衣服幷粮米不レ經二主殿一寮家直受充云々按寮直とは縫殿寮に直する今良の男女也今良はもと主殿寮所屬なればすべて主殿寮にて施行（トリオコナフ）べきをこゝは縫殿寮にて衣服粮米とも受取て今良に充行（アテフル）よしなり寮家とは縫殿寮をいへり ○同大膳職式上十二丁左平野夏祭雜給條に膳部官

人今良雇夫合三十二人襌襌料商布人別九尺（冬加二八人料一）云云○江家次第第十七卷廿八丁右立太子條に小舍人主殿今良不レ與二內裏一相兼一云々旁注に殿上所二召仕一也按二今良は內裏と坊と相兼ては召仕ざるよし也○台記久安六年正月十九日條に多子女御露顯女房送物縫殿女孃十六人油守十人（各匹絹一疋）今良十人（各匹絹一疋）云々○婚記六卷久安六年正月十九日祿法女官內侍所條に今良二人各布一段云々また縫殿條に今良十人各匹絹一匹云々○禁秘抄（下雪山條に內侍傳レ仰藏人進二見參一給レ祿內藏寮絹大藏省布也云々此外御厠人長女內豎主殿官人史生案主下部今良諸陣府生番長舍人依レ差給レ之云々按荷田在滿が本に今良を今食と改て「イマヽキリ」と訓たるは今食をしらずしてさかしらにせしわざ也○傳宣草下卷廿四丁左臨時事部に今良衣服事云々○類聚雜要抄三卷五節雜事辰日祿條に綿云々今良三人九屯（各三屯也）信濃布六端今良三人（各二端）云々また祿法條に今良三人（各疋絹）云々與清按に今良の事禁秘抄階梯下卷九十八丁右に縫殿式の押紙を引て謂放レ賤從レ良也官奴司隸二此寮一了仍如レ此と見えて奴婢卑賤の身を離て新に良に從へる者をいふめれば「イマヨシ」と訓べし古は賤も今は良といふ義也又「ゴンリヤウ」ともよめりいづれにても通ゆ有職小說下卷廿三丁左に今良主殿寮官人禁庭掃除ノ下部ヲ男今良ト云又後宮掃除ノ婢ヲ女今良ト云とあり』

（五十四）兄部『庭訓往來十月三日狀に調菜人工者兄部出納山守木守門守火鈴振等也云々抄下卷廿丁右にこのかうべといふは入にしたがひて一ツ、あがり一ツツのやくあり云々諸抄大成四卷三丁左に兄部下部也人工のかしらと云々扶翼に兄部貞丈云下學集二云力者ノ頭也云々鎌倉年中行事（群書類從本下卷十六丁左）公方樣御發向事條に御力者或十人或八人又ハ六人何モ出長頭巾トテ黑布ニテクヽリテ後ノ方ヲバヒロクシテ中一所バカリトヂタルヲ冠リ白キスハウニ染タル小袴引敷ニテ大刀ヲハク兄部ハ御長刀ヲ持二番目ノ御力者柄長拘ヲ持其跡ニ小舍人其跡ニ朝夕其跡ニ御雜色云々以呂波字類抄七卷古部人倫門に兄部コノカウベ力者之頭也云々節用集古部人倫門に兄部コノカウベ力者之頭也云々運步色葉集古部に御分（ブン）禪家力者之名兄部同云々與清按に兄部は庭訓往來運步色葉集などによればげに禪家の力者をいへりと見ゆ然るに鎌倉公方御供奉の衆に兄部あるは何事も禪家の風を學ばれし世なればやがてそれを取用られたゝなるべし兄部とは小舍人に對して小舍人を弟とし力者を兄とせしゆゑの名にや可レ考』

（五十五）健兒（コンデイ）チカラビト　日本紀皇極紀左三丁元年七月乙亥條に饗二百濟使人（アヘテ王フダダノツカヒ）大佐平智積等於朝一乃命（ミカドニコトオホセ）二健兒（チカラビト）一相二撲於翹岐前一云々通證廿九卷三丁右に健兒平家談云古牟豆伊和良波（モノガタリニコムデイワラハ）謂二健兒童一也雞肋編健兒之語見二于晉段灼傳梁陳伯之傳一至レ唐尤多聖武紀天平十年停二諸國健兒一杜詩淇上健兒歸莫レ懶註健兒軍之總稱字典天寶十四載京師召募十萬一號二天寶健兒一韻瑞唐舊制戍レ邊者三年而代以二其勞一於途路一募二能更住三年者一謂二之健兒一云々集解廿四卷四丁左に吳志管寧傳曰寧選二健兒百餘人一云々按集解に吳志管寧傳といへるは甘寧傳の誤なり○同書天智紀五丁右二年八月甲午條に於レ是百濟知二賊所一レ計謂二諸將一曰今聞大日本國之救將盧原君率二健兒萬餘一正當越レ海而至云々○續日本紀十一卷廿丁左天平六年四月甲寅條に免二諸道健兒儲士選士田租幷雜徭之半一云々同書十三卷三丁右天平十年五月庚午條に停二東海東山山陰山陽西海等道諸國健兒一云々同書廿四卷四丁右天平寶字六年二月辛酉條に簡レ點伊勢近江美濃越前等四國郡司子弟及百姓年四十已下二十已上練二習弓馬一者一以爲二健兒一其有二死闕及老病者一即以與レ替仍准二天平六年四月二十一日勅一除二其身田租及雜徭之半一其歷名等第每年附二朝集使一送二武部省一云々○儀式二卷十五丁右踐祚大嘗祭儀上に抜穗使在レ國云々上道向レ都其行列健兒四人各執二白木一左右列立（後陣健兒亦同）云々○文德實錄九卷十五丁左天安元年四月庚寅宣に始置二近江國相坂大石龍花等三處之關剗一分二配國司健兒等一鎭二守之一云々按此時事日本紀略文德天皇天安元年の條に見えて龍花を龍華に作れり○三代實錄卅九卷九丁右元慶五年三月廿六日條に出羽國司言云々承前國吏以二健兒一爲レ戎兵士鎭兵无レ置二一人一仍令下諸郡進二勇敢者一上云々同書四十二卷十二丁左元慶六年十月廿九日條に勅二山城國司一令レ祇下承奉二伊勢大神宮幣帛一使上先レ是神祇官言撿二格條一奉二伊勢大神宮九月十一日神嘗二月四日祈年六月十二月月次等祭及臨時幣帛一使出二宮城一之日左右京職主典以上率二坊

令兵士ニ相ニ迎外門ニ送ニ出京城ニ近江伊賀等國毎レ至レ堺首目以上一人率ニ郡司健兒等ニ相迎祇承云々○延喜民部式上十四丁左に凡諸國健兒皆免ニ傜役ニ唯志摩駿河武藏飛彈上野下野佐渡播磨長門阿波讃岐等國免レ傜畿內免ニ課役ニ其食畿內用ニ桑田地子ニ餘以ニ國營健兒田ニ充レ之出羽國出擧給レ之隱岐國以ニ造田三町地子ニ充レ之同主稅式上一丁左に健兒田云々等未授之間並爲ニ輸地子田ニ云々また九丁左出羽國云々健兒粮料五萬八千四百十二束云々同兵部式十五丁右に諸國健兒山城國三十人大和國七十人河內國三十人和泉國二十人同雜式四丁右に凡遣ニ鑄錢司舊錢ニ路次國差ニ加勇幹健兒ニ遞送若致ニ亡失ニ者令ニ當國司塡納ニ○江家次第六卷五十四丁右賀茂祭使路頭次第に健兒各十人云々考四卷に健兒トハ力ノツヨキ人ノ事武士ノカルキ職名也今時武家ノアシガルト云類也云々按に江家次第流布印本には右の文欠たり古寫本に郡司八人の下一人の上に健兒各十人撿非違使一人史生目椽各一人守の十九字あり○以呂波字類抄七卷古部人倫門に健兒コンテイ諸國健兒云々○下學集上卷十家屋門に健兒所中間所レ居也云々○政事要略五十三卷○庭訓往來三月七日狀に侍御厩會所圍爐裏之間學問所公文所政所膳所臺所贄殿局部屋四阿屋棧敷健兒所者芦萱葺可ニ支度ニ也云々抄上卷十七丁左に健兒所はひそかに公事をさばく所也又秘なる客人などあひしらふ所也云々諸抄大成一卷廿五丁右に健兒下學集云中間之所レ居也云々健兒をちから人とよむ下部の事也云々扶翼に貞丈云日本紀皇極紀ニ健兒チカラビトヽ訓ズ續日本紀聖武紀天平十年停ニ諸國健兒ニ平家物語ニコンデイワラハト見エタリ力ワザヲスル者ヲ健兒ト云健兒所中間之所レ居也ト下學集ニ見エタルモ中間ハ力ワザスルモノナレバナリ平家物語ニ師光成景ト云者出根イヤシキ下郎也コンデイワラハ若ハカクゴシヤナドニテモヤ有ケント見エタリ貞丈又云健兒ノ字西土ノ書ニモ見エタリ杜詩ニモ見エタリ云々按庭訓往來抄の說は取にたらざるひが事也貞丈が西土の書にも見え杜詩にも出たるよしいへるは日本紀通證の說を襲たる也貞丈は漢土の書はさらによまぬ人なれど轉引してさかしらをいへる事おほし○平家物語一卷廿一丁左鵜川合戰條に故少納言入道信西ノ許ニ召仕レケル師光成景ト云者アリ師光ハ阿波國ノ在廳成景ハ京ノ者熟根賤キ下臈ナリコンデイ童モシ

ハ格勤者ナドニテモヤ有ケン云々按新野問答一卷健兒條に健兒こんでいと訓申候延喜兵部省式に充ニ諸國ニ被レ召由所見候下輩の兵卒ニ候歟平家物語に故少納言信西のもとにめしつかはれける師光成章と云ものしゆつこんいやしきげらうなりこんでいわらはもしはかくごしやなどにてもやありけんと候ざいちやうは諸國の吏務を行ふ政所に仕候下賤の者に候しゆつこんいやしきげらうとは出根賤しき下郎に候これにて健兒童よく被ニ心得一候かくごしやは侍の中にも恪勤者と申名目候これは幹の士ニ候此平家物語にかき候恪勤者は諸寺の僧房召仕下郎に候云々庭訓往來扶翼に引たるにも出根賤き下郎とあり熟根は出根の誤にや今俗ゾツコンといへるもこれ也○同書八卷十七丁左猫間の條に木曾牛飼トハエ云デヤレ小牛健兒ヨヤレ小牛健兒ヨト云ケレバ車ヲヤレト云ゾト心得テ五六町コソアガヽセケレ云々木曾手形ニ無手ト閥付テ哀レ支度ヤ牛健兒ガ計ヒカ殿ノ樣カトゾ問タリケル云云按ニ伊勢貞丈ガ日蔭纏百二丁右に牛ゴテイハ牛健兒也健兒コンデイトハ中間ヲ云也健兒所トハ中間ノ居所也ト下學集ニ見エタリ牛コデイヲ俗本ニ「コ」ノ字ニ濁ヲサシタルハ非也「テ」ノ字濁ルベシ云々といへり今武藏相摸の方言に人を罵てゴタイヤラウと云は健兒丁の訛なるべし○源平盛衰記卅三卷十七丁左木曾院參頑事條に木曾我官ヲ成タリサノミ非レ可レ有ニ引籠一出仕セントテ直垂ヲ脫置テ狩衣ニ立烏帽子〔著テ初テ車ニ乘リ院ノ御所ヘ參ル云々牛童車ヲ門外ニ遣出テ後テ一楜アテタレバ飼立タル强牛ノ逸物也何ノ滯カ有ベキナレバ如レ飛走ル木曾車ノ內ニ却樣ニマロブ牛ヲ留ン爲ニヤヲレ童々ト叫ケレバ留ヨト云トハ心得タリケレ共イトヾ鞭ヲ當ッ云々郎等共ガ馳付テ如何ニ暫シ留ヨト仰ノ有ルニ角ハ仕ルゾト云ケレバ牛童陳ジ申ケルハヤレ小テイ〳〵ト候ヘバ初テ御車ニ召テ面白シト思召テ車ヲ遣々ト仰アルト心得テ仕テ侍リ云々牛飼今ハ中直リセント思テソレニ候御手形ニ取付セ給ヘト數ケレバ云々初テ取付テアハレ支度ヤ是ハ和牛小テイガ支度カ又主ノ殿ノ構カトゾ問タリケル」云々按平家物語八卷同說なれど盛衰記の方くはし長門本平家物語十五卷木曾乘車院參條はた同けれど牛健兒牛小舍と書たり○太平記參考本十三卷龍馬進奏藤房卿諫言條に非職凡卑ノ目代等貞應以後ノ新立ノ莊

園ヲ沒倒シテ在廳官人撿非違使健兒所等過分ノ勢ヲ高セリ云々音義上卷廿三丁左に健兒所コンデイドコロ云云○能改齋漫錄一卷軍卒爲二健兒一條に今所在以二軍卒一爲二健兒一往々以二杜詩健兒勝一爲レ證非也按世說祖逖過レ江時公私儉薄無二好服玩一王戾諸公共就レ祖忽見二裘袍重疊珍飾盈列一諸公怪問レ之祖曰昨夜復南塘一出祖于レ時恒自使二健兒一鼓行却鈔在事之人亦容而不レ問東晉時軍卒已有二健兒之稱一○新猿樂記十三丁四郎君受領郎等の段に是以凡廳目代若濟所案主健兒所檢非違所田所出納所調所細工所修理等若御厩小舍人所膳所政所或目代或別當兄於二田使收納交易佃臨時雜役等之使一不レ望自所二懸預一但民不レ弊濟二公事一君無レ損自有レ利上々也云々按こゝは國の役所を並いひたれば每國に廳目代とて國府廳に目の代ありし也濟所は勘濟にて公文を取扱ふ役所と見ゆ案主は台記に大從小從或號二案主一云々右辨官史生從七位上紀朝臣俊光可レ爲二知家司一正六位上紀朝臣良成可レ爲二案主一被レ仰倩件人等宜レ令レ從二大臣方政所一者久安五年十月十五日宣旨云々などありこゝも國の政所の役人なるべし健兒所は國府の中間を置所と見ゆ檢非違所は國

檢非違の役所也看督長一人ありてその隨身の役人あるべし田所は田畠を取扱ふ役所歟出納所は出入の改役所今の勘定所なるべし調所は御調物役所也御厩は國の御厩にて別當も有し也小舍人所は侍の役所なるべし膳所は臺所也政所は元〆役所なるべし田使等は掛り役なるべし

(五十六)猿の劍術 陰流 新陰流の目錄 『武備志八十六卷陣練教藝三に影流劍術の目錄幷其圖を出せるに猿の劍術の圖あり 松下見林異稱日本傳中六卷九丁右今按に及二乎足利氏之季一有二日向守愛洲移香一磨二霜刀一年久詣二鵜戶權現一祈二業精一夢神顯二猿形一示二奧秘一名著二于世一名レ家曰二陰流一其徒上泉武藏守藤原信綱用レ心損二益之一號二新陰流一有二猿飛猿回山影月影浮船浦波覽行松風花車長短徹底礒波等手法一云々與清按に吳曾が能改齋漫錄一卷授レ圖黃石老學レ劍白猿翁の條に潘子眞詩話云杜牧之題二李西平宅一云授レ圖黃石老學レ劍白猿翁瘦信作二宇文盛墓誌一所謂授レ圖黃石不レ無二師表一學レ劍白猿遂傳二風旨一然予讀レ李太白贈二宋中丞一詩ょ云白猿慙二劍術一黃石借二兵符一則太白亦嘗用レ之矣云々李白詩集補註四卷廿八丁右結客少年場行に少

年學二劍術一凌轢白猿公注に齊賢曰越有二處女一能二劍術一越王聘レ之處女將二北見一王道逢二老翁一自稱二袁公一曰吾聞子善二劍術一願一觀レ之處女云惟公試レ之袁公即跳二於竹林一槁折墮レ地處女接レ末袁公操レ本刺二處女一女應レ節入三入因擧レ枝擊レ之袁公飛上レ木化二白猿一而去云々能改齋漫錄に引たる白猿慙二劍術一の句は李白詩補注十一の卷七丁左に見ゆ此白猿公の故事によりて愛洲移香が其術の名目を設出しにや愛洲移香本朝武藝小傳六卷一丁左には愛洲惟孝に作れり上泉武藏守藤原信綱も同書六卷一丁右に伊勢守に作りて諱を欠たり劍術系圖はたおなじまた愛洲陰流新陰流神陰流心陰流陰流などに作りて其術の名目の書法も一樣ならず』

(五十七)秋田家の歌 『能改齋漫錄二の卷牛帶寒鴉過二別村一條に張芸叟詩夕陽牛背無二人臥一帶得寒鴉兩兩歸云々余が少年の時の秋田家歌に「夕がらすみつよつふたつとひ過ぬものおとたえし秋の田居中」といへるは閑寂の情自相似たりみつよつふたつは枕草子の語田居中ハ舊本今昔物語の詞也』

(五十八)馬部 職員令左右馬寮條に頭一人云々助一人大允一人小允一人大屬一人少屬一人馬醫一人

馬部六十人使部二十人直丁二人飼丁云々○東宮職員令主馬署條に首一人云々令史一人馬部十人使部十人直丁一人按馬醫は馬の醫師也馬部は繫人也使部は寮中駈使の丁也直丁は宿直の丁也飼丁は馬に物飼丁也○儀式十卷十七丁右飛驛儀條に左右馬寮官人將二馬部一人幷被レ鞍馬一候二於閤外一馬部聞二鈴聲一即上レ馬而待二主鈴先問二馬部姓名一訖云遣二某國一飛驛函給閇馬部稱唯受レ之云々按飛驛ハ馬部馬に乘て帶行也主鈴が驛路鈴を持來聲を聞ば馬に乘て待居これを受てやがて乘出す事と見ゆ○延喜齋宮式廿九丁右に凡齋內親王臨行預定二監送使一云々即使及齋宮官人以下皆賜二裝束一云々馬部長及二司判官等絹三疋綿五屯布四段云々又五十丁左緋帛紫帛油絁各二丈七尺六寸麻三十斤已上寮充レ之右馬部司所レ請云々又五十八丁右凡馬部司御馬八疋年料秣稻干芻者不レ待二寮移一勘二納本司一隨レ日充用但其細用者每レ季勘造請二寮勘署一云々○同中務式廿丁左時服條に左馬寮廿八人頭一人助一人允一人少允一人大屬一人少屬一人馬醫二人史生四人騎士一人馬部十五人右馬寮准レ此云々同兵部式十四丁左馬料條に齋宮寮門部司二人從六位官一人初位官一人馬部司一人七位官云々同大藏式九丁左春

日祭裝物條に馬寮五位官一人絹六疋綿六屯細布五端布五端馬部一人貲布四丈紅花大一斤（染レ衣料云々同左右人同レ之或給二吉上一同官外記方ナドハ或給二吉上一也又下二左右衛門府一或渡二北陣一依二事淺深一也云々○物具裝束抄に馬部（察御馬副者也）一人送レ之云々又云凡平野夏冬祭櫃伺馬四疋園韓神祭二疋纏人疋別馬部二人云々又四丁左凡春日神春冬祭神馬四疋云々其使五位以上官一人牽二馬醫一人馬部八人一供奉但馬部各青摺袴一領申レ官請受事訖返上云々又凡大原野春冬祭云々其使允一人牽二馬醫一人馬部八人一供奉云々又五丁右凡當宗杜本山科等社夏冬祭云々其使屬一人牽二馬醫騎士馬部等一供奉云々又五丁左凡行幸御馬一疋馬子八人（右兵衛二人馬部六人）其裝束人別緋袍（夏單衣）襖子（夏不レ須）帛汗袴各一領調布袴一腰細布帶一條（長一丈）竝隨二穢損一申レ官請受（狩野行幸之日著二云々緋細布袍袴一）又十三丁左凡馬部三十人取二負レ名入色者一充レ之云々按新野問答四卷馬部條に馬部ハメブといふ左右馬寮の下司ニ候卅人由見二馬寮式一候とあり式に馬子八人の内右兵衛二人馬部六人と見えたるにて馬子なることしられ廣瀨龍田園韓祭條に引別纏人馬部二人と有にても推量べし○禁秘抄下卷十九丁右給二馬部一吉上一條に所衆瀧口等有レ咎下レ寮於二殿上口一給レ之馬部相具罷出深重時忽

於二殿上口一切レ紐引二入帽子一如二面縛一引張出有レ例餘人同レ之或給二吉上一同官外記方ナドハ或給二吉上一也又下二左右衛門府一或渡二北陣一依二事淺深一也云々○物具裝束抄に馬部（察御馬副者也）冠（纓褐衣襖袴袖單云々○平家物語六卷十丁右小督條に仲國云々攝テ此女房出シ參スナトテ供二召具シタルメブキ仕丁（ジ）ナド留置テ其屋ヲ守護セサセ我身ハ寮ノ御馬ニ打騎テ內裏へ歸リ參リツレバ云々按にメブキ仕丁ハ馬部吉上也源平盛衰記廿五卷十八丁左には馬部吉祥と書リ○源平盛衰記廿五卷七丁右此君賢聖條に如何樣ニモ廷尉ニ被レ下馬部吉祥ニ仰テ禁獄流罪ニモヤト恐レオノヽキ居給タリケリ云云同卷十八丁左小督局事條に仲國云々彼家ノ主ノ女房ニ申置召具シタル馬部吉祥ヲ二三人留置彼家ヲ守護セサセ我身ハ內裏へ馳參リ云々古事談一卷廿八丁左に保延五年四月廿五日齋王令レ入二本院一給之後次第使左馬助藤敦頼與二肥前權守俊保一同乘退出之間於二一條大路一馬部數十人搦レ之先引二落自レ車俊保同被一引張一云云然而於二俊保一者放レ之了敦頼更返乘馬部等圍二繞之一時向二中御門西洞院邊一停レ車申二子細於右兵衛督家成卿一武衛酒宴之間也馬部付レ侍申達云去年不レ辨二

手振裝束一馬助日來雖二相尋一逃隱不二相逢一今日適搦取候欲レ剝二其裝束一如何所レ仰云可レ取者可レ取不レ可レ取者不レ可レ取云々是依二中間一不二委沙汰一之意也馬部走還又引二落敦頼一冠纓不レ殘二一物一剝二取其裝束一又牛車等同取レ之追二放敦頼一敦頼拘二其摩良一走二入小屋一了尋二其由緒一之處去年敦頼奉二仕寮使一依二先跡一手振裝束即可レ給二馬部等一也而敦頼云今度裝束依二事不レ諧借一用他人一也仍可二返納一後日以二代物一可レ辨二馬部一也馬部等承二諾之一畢其後馬部頻雖二責乞一不レ致二其辨一或隱不レ逢レ之已似レ所レ證馬部訴二右兵衛督一是依二寮頭父一也武衛云汝等不覺也何不二責取一哉仍馬部入二敦頼宅一取二立レ厩之馬一敦頼馳訴二主君按察大納言一是依レ爲二近隣一也自二大納言家幷左兵衛督家一下部等數十人出來欲レ奪二留件馬一之間依二人數少一馬部二人被二歐凌一其殘一兩逃脫已了馬部臥二左兵衛督門前一（如二同宿一）按察差レ使搦二件馬部二人一遣二前河內守俊資宅一（俊資右兵衛督俊資答云何故可二給預一哉可レ被レ獻二右兵衛督殿一云々仍又遣二右武衛許一了武衛殘二人馬部搦給二檢非違使季範一了其後無音而今有二此事一廿七日敦頼裝束等入二其車一被レ送二按察許一答云何可レ給

哉可レ遣二主許一云々敦頼依二此事一號ニハダカノ馬助一云云○興清曰馬部古代は「ウマベ」といへり左右馬寮の下官（シモブカサ）にて寮馬の轡をもし飛驛函鈴を帶て早打もせし也後には「メブ」となへて吉上と同じく罪人を捕などもする事となれるなり（キチジヤウ）

（五十九）吉上　本朝文粹三卷廿七丁右に散樂得業生正六位上行兼腋陣吉上秦宿禰氏安對云々按腋陣二所あり一は殿上口をいふ一は宜陽殿次將座東二間也古今著聞集十七卷六丁右によればこゝは近衛の腋陣をいふ成べし腋陣の事大內裏圖考證十一の中に委し（頭書婚記下卅八丁ウ）○台記康治元年三月十三日條に攝政於二東面北門外一下レ車少將爲通朝臣奉レ啓余伺二候御車邊一外記史等列二居陣屋頭一見參吉上一人持二白楚一居二門下一攝政入二同門一云々按吉上白楚を持て攝政の參內を守護せし也○百練抄十卷廿三丁右後烏羽院建久四年二月廿九日條に藏人忠綱與二外記清光兼業一於二陣口一有二喧嘩事一依二互無禮一也而藏人以二吉上一令レ擊二外記一仍兩局五位以下參二關白家一訴二申之一忠綱除籍清光兼業被二召籠一畢○明月記建曆三年七月十一日條に明後日奉幣五位人數極少沙二汰喧嘩一被レ付二吉祥一云々○後愚昧記應安

四年三月廿三日條に後日傳聞於會坂關固關使（内舍人吉上等向之云々）○管見記御禊行幸裝飾行粧部に仁安三記云左大臣（節下）手振等不レ具半臂是有所見云以吉上爲手振其時著市比是左府談給也按手振は取物に對て物取らぬを手振といふされど手振にも物を取持たする事もまれ〳〵あれど名義は右におこれる也同卷に仁治三年十月廿一日庚午公光卿記云手振八人依家例用家中雜人（侍臣歟）とあり裝束の事も見ゆ市比は伊知比脛巾（ハヾキ）なり市比脛巾とも書たり○又（同部）寛元四年十月廿四日師弘記云手振十人召本府吉上仍冠細纓云云按今度御前長官行粧儀とあり又（同部）寛元四年十月廿四日陽龍記云次第司御前長官權中納言兼左衞門督言藤卿云々手振十人依レ爲本府吉上細纓褐衣青末濃袴青朽葉半比下重無レ裏袖云々按本府とは左衞門府をさしていへりさては吉上は衞門府の下官にや又（同條）云御後長官參木右衞門督兼中宮權大夫通成云々手振八人雖レ爲吉上著卷纓堀川大納言諷諫云麴塵褐衣青末濃袴不レ著袖取レ物如レ常歟可レ尋レ之云々○洞院家記（外記政條）に著左衞門陣上卿仰出居吉上曰（吉上座門化間壇下柱内也依爲眼前）不レ召レ之直仰也召使召吉上仰官人官人入外記門召レ之云々按仰出居吉上一曰の曰字は云々の誤歟門化間の化字寫誤也善本を得て按正すべし○速水見聞私記（七卷）吉上之事條に古文書を引て云本府吉上催十八人饗科腰差酒肴右任先例取請取如レ件本府催否幸印右天文十三年比文書寫也云々按に寫誤ありて讀がたし本府催否幸の五字は職名なるべし否の字は諱字なるべけれど未考○西宮記（正月部上）節會條に外記史候階下左右近吉上居南階左右記當日事他節會准之按左右近吉上とあるにて吉上は左右近衞の下司なる事知べし○江家次第十八卷（十七丁右）外記政條に若可レ召外記者先可レ召召使由仰吉上吉上傳仰官人令レ召之以召使召外記云々按にこゝは左衞門陣の事をいひたれば衞門府にも吉上ありしにや○侍中群要八の卷親王以下出入仰輦車宣旨事條に藏人奏事由之後著麴塵袍向其人參入之陣（退之時不レ向レ陣直召吉上脇仰レ之）若有官抱笏令小舍人二人著表衣取脂燭左右前行至玄輝門內立留仰近衞陣出間門外又立留仰兵衞陣次出朔平門外仰靱負陣（小舍人留門內柱下藏人於砌下引至輦車前南面立定召吉上二聲左右同音稱唯吉上召入之誡候若不レ候小舍人代稱唯云云）○舊本今昔物語（廿九卷）九條堀河住女殺夫哭語に今昔延喜ノ御代天皇夜ル清涼殿ノ大臣ニ御マシケルニ俄ニ藏人ヲ召ケレバ云々吉祥返リ來テ其ノ女ヲ憚ニ搦可レ將參シ其女ハ心ノ內ニ謀ノ心ヲ以テ泣也ト宣旨有ト云ヘバ云々○古今著聞集（十七卷六丁右）變化部に天慶八年八月五日の夜宣陽建秋兩門の間に馬二萬ばかりのおとしけり內裏引いるゝほど數刻を經けり左近のわきの陣に候ひける近衞左兵衞の陣の吉上みな是を聞けりはじめは馬のおとなひなりけるが後には又人數百人がおとなひにてきこえけり云々按近衞府兵衞府などの吉上が左近の脇陣に參居よし此文にて知べし○續古事談（二卷七丁右）臣節部に此大臣奉公人にすぐれたりけり大雨大風の日左衞門の陣の吉上いひける在衞なりとも今日はまゐりがたき日なりと云ほどにかさをさし深沓をはきてまゐれりければ見る人大に感じけり云々按に左衞門陣に吉上ある事此文にても知らる○平家物語六卷（十丁右）小督條に仲國云々仕ニ召具シタルメブキ仕丁ナド留置其屋ヲ守護セサセ我身ハ寮ノ御馬ニ打騎テ內裏へ歸リ參タレバ云々按キ仕丁は吉上をかく書損じたる也又メブと書るにて馬部を

云また輦車宣旨事條に奉宣旨之藏人召小舍人一合レ差脂燭一立玄輝門間內仰左右近（先立定召吉上二聲吉上稱唯其詞云其人若其女御參令レ入輦車但東宮其官參給令レ入御輦車與必加御字今上宮官同加之）梱外亦仰左右兵衞於朔平門梱外亦左衞門一藏人奉レ仰之後先合小舍人警吉上舍人云々○禁秘抄下卷（廿七條）給馬部吉上一條に所衆瀧口等有レ咎下レ寮於殿上口給レ之馬部相具罷出深重時忽於殿上口一切レ紐引入帽子一如面縛一引張出有レ例餘人同レ之或給吉上一同官外記方ナドハ或給吉上一也又下左右衞門府一或渡北陣一依事淺深一也云々按下レ寮は左右馬寮をいへるなるべし荷田在滿が首書に吉上左兵衞府歟西宮記見閤門吉上云々○榮花物語かゝやく藤壺（四丁左）によき日してくりものをたまはすれば云々同書ひかげのかづら十丁に御前に火たきやする陣屋つくり吉上のことゝ〳〵しげにいひおもひたるかほけしきよりことおこりてさぶらひの長（ヲサ）どもなさせたまひさま〴〵ことごとしげに見えたり云々○大鏡七卷（十八丁左）道長公傳にわたくしの從者（メサ）をばぐし候はじこの陣の吉上にまれたきぐちにまれ一人昭慶門までおくれとおほせられ云

その比は呉音に呼けん事知べし○源平盛衰記廿五卷七丁右十八丁左 小督局事條に仲國云々召具シタル馬部吉祥ヲ二三人留置彼家ヲ守護セサセ云々○夕拜備急至要抄下卷群書類從本五十七丁左に 女御入内云々吉上二人云々○類聚名物考稱號部八卷に給丁きつてう或作二吉祥一きちでう云々給丁はきつてうなるを假字に吉祥と書るは字意のよきに從へるなるべし「キウ」「キッ」を「吉キチ」に轉訛(ウツシアヤマレ)る也云々按給丁(キフチャウ キチジャウ)を吉祥に訛れりといふ說いかゞあらん可レ考○雅言集覽幾部に吉祥云々或云衞士ノ中ニテ上日上夜ヲヨク勤シ者ヲ頭トシテ云也云々○與清曰 吉上の名義未レ考字(モジ)は吉祥とも書たればキチジャウと書べし 左右近吉上四宮記侍中群要 近衞陣の吉上古今著聞集 閤門吉上四宮記 腋陣吉上本朝文粹古今著聞集 などあるにて左右近衞府の下官にある事知られまた左衞門陣吉上江家次第 纏古事談古今著聞集洞院家記 左兵衞陣吉上古今著聞集 馬部吉上平家物語源平盛衰記禁秘抄 など左右衞門府左右兵衞府左右馬寮の下官に吉上ある證文也また陣の吉上榮花物語舊本 今昔物語大鏡 本府吉祥管見記遠水見聞私記所引古文書 とも見ゆ榮花物語に陣の吉上衞士仕丁とならべ記し後愚昧記に內舍人吉上等平家物語源平盛衰記禁秘抄に馬部吉上などもしるしたれば衞士仕丁よりも重く內舍人よりも輕くして馬部と同等の者なるべし

(六十)平寄 洞院家部類記五卷 政治次第條に次參議平一人之時 无二此儀一 寄二云々

(六十一)大政官印及內印鑄改 同書五卷 不知名次第條に承久三年八月七日云々大政官印新被レ鑄改云々召二繪樣於能書行能朝臣一印付二裝束使辨左中資經朝臣一件繪樣內覽奏聞返下官帥二內匠寮一令レ鑄レ之云々仍以二新印一可レ被レ行也此印開闕以來未二紛失一請印也今度失了於二內印一者延久被レ鑄二改之一有二所見一爲レ之如何云々 按左中資經朝臣の中家下脫文あり追考補べし

(六十二)衞府の太刀を陽の太刀といふ事 衞府の太刀を陽の太刀と唱て陰の太刀もありと思ふはひが事なるよし伊勢貞丈論破せり衞府を陽と唱るはエフを半濁に陽の字音のごとく唱(ヨブ)故實なれば後にあやまりも出來し也洞院家部類記五の卷北面始假名記に康成音ゑうのたちにひらをゝさすむもんのこん地也云々又ゑうのたち以下はう〳〵にてかり候也云々又たちはゑうのたちあしをあわがはこんちのひらをさす云云これにゑうのたちとあるは呼まゝに書たるにて陽の字音にかよへば也

(六十三)權守武家には無二勅許一 二判問答に諸國權守事於二武家之所望一者不レ可レ有二勅許一之由有二其沙汰一云々是又至二勝定院殿御代一有二其例一爲二其以後被二停止一哉云々

(六十四)將軍家 三內口決 副將軍事條に凡將軍は有二朝敵一之時爲二追罰一一旦被レ補レ之尊氏依二別忠一永代可レ爲二將軍家一之由被二仰出一候後他人之競望無レ之候云々足利尊氏朝臣より將軍家の號出來て攝家羽林家などのごとく家號を稱せる也

(六十五)本所領家門 同書御所本所御方等之條に家門と稱候ハ五攝家之儀ヲ於二公界一稱レ之候清華以下之諸大臣家ヲハ於二其家一稱二家門一候但家僕等ハ依レ執二其家一互稱二家門一候本所トハ諸家堂上之衆皆一同ニ本所ト稱候云々按に本所領といふは堂上方の領所の義なるべし 頭書 本所ノ侍(公家侍也)太平記廿六ノ廿一丁 百練抄十六ノ卅七丁オ 文明一統記五丁ウ に近年寺社の本所領を無理に押へ知行せるかたん〳〵のごと猛惡の事を先として後代の名をも恥辱をもかへりみざるにや云々

(六十六)被障子 今世からかみといふは被障子の事也三內口決殿幷家作等事條に本主殿ノ間ニ有二張臺一南面與二公卿座一之間被障子二間云々此被障子からかみの事也

(六十七)鎗長刀 甲州直傳步騎必用口傳二卷 兵具部 鑓長刀各流義に可レ依也彼に長是に短可レ有事條に鎗ノ「大双紙ニ野太刀小鎗ト云「見タレ共コレハ「ホコ」ノ類ニテアラン今ノ代用ル鎗ハ建武二年正月三井寺合戰ニ土居矢間ヨリ鎗長刀出シテ散々ニツキケルヲ義貞朝臣ノ兵旦理新左衞門十六マデ奪テ捨タリト其後貞和四年十二月楠正行繩手合戰ノ時阿間了願ト云者始テ柄ノ長一丈バカリノ鑓ヲ以テハタラキシヨリ其理ヨキコヲ知テ專ラコレヲ似セテ用シガ終ニ後世武家第一ノ具トナレリ鑓ハ一本ニテモ刃ハ替ヲ持ガヨシソコヲルモノ也替リニハ袋穗可レ然ナド、云リ

薙刀ハ陸奥後三年合戰ノ比ヨリ用來レリ太政入道ノ銀ノ蛭卷シタル長刀ト云ㄱ見エタレバ我朝フルキ武器也云々

（六十八）鐵砲　同部弓鐵砲に不レ限武器の儀は可レ任ニ得手一事條に鐵砲ト云モノハ大永ノ比ヨリ日本ニ渡リタリト云ドモ此器ノ見エシハ種子島ニテマサシク用始タリ種子島ト云ハ大隅國ノ内也天文十二年八月廿五日カノ島ニ異國ノ人百人計乘タル舟一艘來同廿七日彼舟同國赤尾木ノ津ニキツテ舟ノ頭卒良叔舍喜利志多佗孟多二人ノ者共舟ヨリ陸ニ上テ遊ブトテ方ナル小キ的ヲタテ、鐵ニテ作レル火器ノ二三尺ナルモノニテ玉ヲ飛スニ百發百中ス此事其處ノ地頭兵部丞時堯ノ耳ニ入テケリ時堯アヤシミテ其藝ヲマナビ打テ見ルニ中ラヌモ遠カラズ依レ之其器二ツ買得テケリ火藥ノ方ヲバ家人篠川小四郎ニナラハセ折々打テ試タリ其後紀伊國根來ノ法師杉坊ト云者此器聞及デ求タク思ヒ彼島ニ來ル時堯其志ヲ感ジテ二ノ内一ヲアタヘタリ時堯鍛冶ヲ集テ作ラセ見ルニ筒ノ底ノ仕方知レザルニ依テ作リ得ズ然ルニ翌年又彼島ニ彼舟來ル此度ハ右器作ル工一人アルニヨリ時堯金兵衛清定ト云鍛冶ニ命ジテ傳ヲウケサセ夫ヨリ多ク此器ヲ作ラセ家人ニ打習ハセタリ夫ヨリ泉州堺ノ町人橘屋又三郎ト云者彼島ニ來テ傳ヲ受シヨリ諸國ニハビコレリ關東ヘハ天文十三年異國舟漂著ス其中ニ彼時堯ガ子時久ガ家人松下五郎三郎ト云者乘居テケルガ此器ヲ持タルニヨリ傳シト云々與清按鐵砲の事南浦文集北條五代記甲陽軍鑑などに見ゆ太平記八幡愚童訓の鐵丸もさる類にや倭寇鳥銃を放事武備志に見えたり 頭書 百合若草子三丁オ十丁オ 甲陽軍鑑十五 北條五代記三ノ十三丁ウ 卷廿四丁オ

（六十九）鎧具足著背長物具加和良（アヒ）（キセナガ）（カワラ）　同部甲冑は鍛釣（キタヒフリ）合を吟味シ云々の條に甲冑ノ始ハ神武天皇ノ紀二兵甲介冑ノ字見エタレドモ舍人親王ノ時ニアルモノナレバ文字ヲ入ラレタルマデニテ實ハナク名バカリト見ユ甲冑ノ出來シハ十代ノ帝崇神天皇ノ時ニ武埴安彦ト云者謀反シテ征伐アリシニ射殺サレケル時其討モラサレシ者共カワラヲ脫テ逃去トアルカツラハカフラトテ龜ノ甲ヲカブリテ物ヲヨケル心ニテ甲冑ニテ矢刀ヲフセギシモノ也此比マデノモノハ綿甲ノ類ト見エタリ鐵ニテ作ルㄱ世上流布ノ說ニハ神功皇后三韓ヲ討玉フ時武內製シ出スト云ドモ徵トナシガタシ鐵ニテ作ルㄱハ桓武天皇延曆九年三月陸奥ノ賊ヲ征伐ノ時鐵冑二千餘ヲ作ラレシㄱコレ始也其後ニハ鎧腹卷腹當胴丸鐵胴ナド云ㄱ出來テ家々ニ傳リシ也今ノ具足ト云モノハ其比ノ製ニ少シ變リテ名モ又變リ今ニ用ヌ小道具モアリ又新作モ出タリ今ノ具足ハ應仁ノ後亂ツバキテ古ノ制法スタリテ胴丸ノ法ニ依リ改作リテ具足ト名付コレハ何ニテモアレ其具ノ悉備リタルモノ故具足ト云也コレニモ色々說アレドモ附會ノ說也近來俗說ニ昔ノ制ヲ鎧ト云今ノ制ヲ具足ト云コレハ尤也又大將ニ限リテ鎧ト云平人ハ具足ト云トコレハ宜カラヌ說也タトヘ其說ハカハリタリトモ五尺ノ身ヲ掩防器ニ遠ヒナケレバ何モ鎧ト云テ苦カラズ和字ヲ以テ分ケバ具足ト云モ鎧ト云ㄱ也今將軍家正月十一日御鏡餠開ヲ御具足ノ御鏡ト云ニテモ合點スベシ鎧ヲ著背長ト云ハ腹卷腹當ナドハ皆背ノ合ザルニ鎧ハソレトハ違タル故也物具ト云ハ戎（ツハモノ）ノ具ト云ㄱ也威（オドシ）ヤウモ昔ハ革又ハアヤヲタヽミナドシテ絲ハ少カリシ也云々

（七十）肌帶 フンドシ 越中（ブンドシ） 肌袴　甲州眞傳步騎必用口傳二（卷）兵具部に肌帶當時越中と云有是も可レ用事の條に布縮緬ノ內モ心ニ任スベシ先一幅ノサラシ三尺二三寸一方ハ袋乳ニヌヒクケ紐ヲ通シ腰ヲ廻スタレノ兩ハシニヒボヲ付テ襟ニカケ大小便ノ用トス又常ノ褌モシメヤウニテヨシ云々與清按ニ越中ふんどし天明寬政の比松平越中守執政して專儉約を示されしよりおこれるよし人口に膾炙せりされど此書に其名目あれば古くよりありし物也さてフンドシと云は踏通（フミトホ）しの義にて褌（ハカマ）の短き樣なるを特鼻褌（タフサギ）とて兩足に踏通して著すれば然いふ也今の奴ふんどしとてしむる物は古の下帶の轉（ウツ）れる也越中フンドシは下帶を切て短くしそれに紐を付て製出たりと見ゆ下帶の事は步騎必用口傳二（卷）兵具部に下帶は木綿布類是は下着の上に可レ廻なり上帶はゆるぎの絲の上を可レ結事の條に帶ノシンハ木綿ヲ三重廻リ九尺五寸位幅ハ曲尺ニテ二寸五分位コレモ眞中ニ印ヲツクルユルギノ絲ノ上ニマハシシカトトメテ大小ヲサシ打緒五尺位アルモノヲ以テ太刀ドメスベシサテ處々ニ九字叶友絲ニテ縫モ心ニ任スベシ上帶ハホツテノヒチリカヘシノ上ニテ結ビ後ハチズヲヽユヒカラムモ有リ打緒ノカハリニ太刀履モ用フ然ドモ當流大小ノ差樣三通

ニスル故其仕方ニヨリ用不用アレドモ先打緒ヲ吉トスと見えたり踏通し一名は肌袴（ハダバカマ）といへり

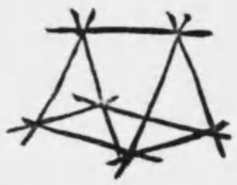
（七十一）指物四半シナヒ小旗パレン　同部指物家々の制有之しなびたるがよしと云條に昔ハ指物ハナシ天文ノ比ハ一騎ニ幟一本宛モタセタルコト也ソレガ變ジテ指物ト云物ニナル其品ハ家々ニ依テカハル事也四半シナヒ小旗パレンエツル井何レニモアレシナヒタル物ヨシ絹ノ類ハタコヌヒ仕タルガヨキ也四隅ニ革ツクルハ如何アラン一說ニ指物カタメヤウハ小旗ノ下ヲ棹ニクヽルサテ杠ノ中ホドニ細キ紐ヲツケ胴ノ左右指物カタメノ鎭ニムスブ也又クリジメノ緒ヲ受筒ノ上へカケテシムレバ指物動カズシテ吉云云

（七十二）笠印袖印　同部袖印笠印事の條に笠印ハ盛旗ト云コレ也笠印ト云モノハ大將ヨリ兵卒ニ至ルマデ各甲冑ニ付ルコトニテ有シ也近代ハ甲ニ付ルヲ笠印トシテ袖ニ付ルヲ袖印ト云コトニナリカブトハ後ニツクルコト也近代ハ夜討伏勢舟戰大風ナドノ時カ又ハ下知ニ依テ用フ指物ノカハリニ用フ輕卒ハ常ノ印トスル也云々

（七十三）竹束　同書三卷軍器部竹束事の條に竹束ハ天文年中信州苅屋原ノ城ヲ武田ヨリ攻ル時甘利攻大將タリ此時米倉丹後守工夫ニテ始テ作リ出シケルニヨリ死傷少ク心易ク城ヲ攻落シタリ夫ヨリ專ラ武田家ニテ用ルコヲ諸國ニテ聞及用來レリ然ルニ今ハ楠時分ヨリモ有モノヽヤウニ覺テ楠流ニモ足利流ニモ仕方ヲ傳受スルコトニナリタリ然テ當流ニテハ時至リ其所ニテ竹束ハツクルコト也近邊ノ民家ヲ毀チ木嘗ヲ束子テ幅一間程長サハ人丈ニ二尺高クスル尤狹間二ツ切ル也木嘗ヲ束子テ橫ブチ五通計ニシテ垣ヲ結フ如ク結タル物也又山ヘ人夫ヲヤリテモ藪ヲ切テモ何レニナニヽテナリトモ其入用ノ場ニテスルコト也他流ニテハ其製法ヲ定メ自國ヨリ持運ブト云ハヨク〳〵人夫小荷駄モ澤山ナルツモリト見エタリ當流ハ數度ノ合戰領內ノ百姓モ困究セヌヤウニ夫役モ繁ク掛ヌヤウニ万事ヲ致ス積リノ敎故ケヤウノモノハ其所ニテ作出サセル定也其上五疋七疋ノ馬ニ付タル位ノ竹束ニテハ中々小城ノ虎口モ防ガルマジ夥ク入ル積リ故也自由ナル所ニテハ竹ヲタバヌ中ヘスキ竹ヲ通シ竹ノ內ヘ繩ヲ引込所々ヲ詰ベシ大竹ナラバ破テ簀ニアミ

ソレヲ卷テ上下ニ橫木ヲ入レタミツクルケ樣ノ仕方便利ナル制作氣轉次第ナリ兎角不自由ノ仕方ニ非レバ戰國ノ間ニハ合ズト合點スベシサテ窓ノ切ヤウハ竹ヲ上下ヘトルカ又ハ馬ノヤキガヌノ如キ物デヤキテ明ルカ工夫シテ手早ヲ第一トスモトハ窓ハセザリシガ後ニサマヲ切タル也依テ所ニヨリサマナシトモスムベシ尤竹束間ヨリ弓鐵スルユヽナリ竹束付ルニハ城ノ角櫓ナドノ向ヨリ付始メ段々ニツケル一疊ツケレバ其陰ニテ働ユヽ跡々ハモハヤ付ヨキモノ也株ヲウツテ味方ナビキニ付ル又牛ト云モノヲ土俵又ハ石ナドニテ押ヘソレニ竹束ヲモタセ竹束ヲモ土俵カ石ニテ押ヘ又ハ牛ニチヨト結付モヨシ

牛ノ圖



牛ハ橫竹三本左右ノ短キ竹三本ヅヽニテ結ドチラヘコケテモ味方ナビキニスワルモノ也コレモ竹ニカギラズ何ニテモ有合モノニテ作竹束ヲ地車ナドニ載テ押往カ竹束ノ陰ヨリ綱ニテ引付ルコモ時ニヨリテハナルヽト云又竹束ヲガツシヤウニシテ內ニテヲ橫木サシテ夫ヲ二人ニテ荷テ持行テモ付ル也」一ヱノ竹束ト云薄竹束ト云モ丸竹ヲアンデ幅一間長七尺程ニメマイテ持也竪ニ用ル又ハ城中ヘ入テハ橋ニモスル落穴アレバワタシテ通ル」手輕ク竹束ヲ作リサイトリト云テ兩方ニ竹ヲ付テコレニテ跡ヘツヽバリニシテクツレヌヤウニスル之ハ持アルク爲也」竹束ニテ塀根ヘ付テ登ルハ竹束ヲ塀根ヘ押カケ下ノ橫臺ヘ棒ヲ入テコヂ上テ其下ニテ塀根ヲ堀又ハ引切也其外竹束ノ働キ品々多キコトナリ 頭書 和漢三才圖會廿ノ五丁ウ

（七十四）鎗持大小ヲ指す　同書四卷行軍部平士何騎なりとも持筒鎗甲持セ馬並よく可レ乘也と云條に戰場ヘツルレバ皆士也故ニ口取鎗持刀ヲサスコト也今モ其風俗少殘リテ鎗持バカリ刀ヲサスニテモ知ベシ云云

（七十五）生肌（スハダ）武者つんぼう武者雜人原白齒（白膚共）者青葉者　同部生肌（スハダ）武者つんぼう武者雜人原白齒（白齒共）者といへる條にコノ三ケ條ハ古ヘナキコトバナリ近代云ナラハスト見エタリ生肌（スハダ）武者トハ薄手ヲ負其疵未愈ザルニ大合戰アレバ出ズシテ叶ヌユヘソレヽヽノ支配頭ヘ

コトハリ具足ヲキテ出ルモノヲ云又一說ニ手負武者頭ニコトハリ具足ヲキズ羽織バカリニテ出ルヲ云トノ二說ナリツンボウ武者ハ具足ヲ著テ指物ヲサヽヌヲ云雜人原トハ中間荒子ノ類一度モ具足キヌモノヲ云コレヲ靑葉者トモ云ナリ○武德編年集成十二元龜二年四月の條に神武雄備集ニ曰此時孕石三科ハ白齒者ヲ討取云々 頭書 靑葉者甲陽九上四十三丁ウ

松屋筆記卷之八十五

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

(一)コラウヲヘルといふ俗詞『獸虫などの古老になりたるを俗言に「コラウヲヘタ」又は「カウラヲハヘタ」などいへり其意義未レ詳癸辛雜識續集上卷大野猪の條に北方野猪大者數百斤最獰悍難レ獵每以レ身撞ニ松樹一取レ脂自潤然後臥ニ沙中一傅ニ沙於膏一久之其膚革堅厚如レ重レ甲名ニ帶甲野猪一雖ニ勁弩一不レ能レ入也其牙尤堅利如レ戟馬至則以レ牙捎レ之馬足立傷雖ニ虎豹一所レ不レ及也云々此帶甲野猪は甲を帶たる猪の義にてカウラは甲の古名カワラの通音也「ヘタ」とも「ハヘタ」ともいふは負たの訛にて帶とおなじ乃帶甲野猪は「カウラヲハダヘタキノシヽ」といふ義なるを知べし「コラウヲヘル」といふはた「カウラヲハヘタ」と同語にて古老を經たるよしにはあらじ』

(二)狐鼬鼠が最後の一屁『癸辛雜識續集上卷大野猪條に胡德齋又云獵犬之良者最畏レ狐蓋狐善以ニ穢氣一薰犬目即瞽收獵者凡見レ狐必收レ犬蓋恐ニ爲損一也云々按に本朝の俗これを最後のひとつ屁といへり狐のみにあらず鼬鼠また最後屁を放て犬猫をなやましむる事あり余が故郷にて鼬鼠誤て造酒家の六尺桶の中に陷り出るに便なく最後屁を放たるに其臭氣數十日に及べども消ずしてこれに酒を醸る事あたはざりき』

(三)圍碁　圍碁は圍て取よしの名也能改齋漫錄七卷奕碁の條に以レ子圍而相殺故楊雄杜預曰ニ圍碁一と見ゆ 頭書 辨內侍日記下廿一丁ウ圍碁ノ諸云々

(四)蝶入レ宅則嘉瑞　能改齋漫錄七の卷蜘蛛蝴蝶占喜の條に歐陽文忠公詩云拂レ面蜘蛛占ニ喜事一入レ簾蝴蝶報ニ佳人一自注云李賀詩東家蝴蝶西家飛白騎少年今日歸賀蓋用ニ李淳風占怪書一云蛺蝶忽入ニ人宅舍及帳幙內一者主ニ行人即返一又云生ニ貴子一吉

(五)鳥自呼レ名　能改齋漫錄七に鳥自呼レ名條あり神樂歌に「ニハトリハカケロト鳴ヌナリ」とあれば「カケロ」は自呼レ名也古今に「ウグヒストノミ鳥ノナクラン」万葉靈異記に「烏トフオホヌソ鳥ノマサデニモキマサヌ君ヲコロクトゾナク」云々烏コロク通音也江談抄に「ホトヽギスト鳴テ飛タツ」云々後撰に「カリカリトノミ鳥ノ鳴ラン」又「來ル秋ゴトニカリ〳〵トナク」云々伊勢物語に「ヨルトナク」といふも鴈の音を武藏人はさきゝける成べし出雲風土記注に鶯をホヽキ鳥といへるも北國にてはウグヒスとはきかずしてホヽキと鳴よしに聞なせる也今も出羽國にては鶯をホッキ鳥といへりとなん鹿も「カヒヨトナク」より「カ」といふ也此類いとおほし他日考注すべし

(六)醉て泥の如し　『俗言に泥の如く醉といへりこはデイノゴトク醉フといふより轉れる詞也能改齋漫錄七卷醉如レ泥といへる條に後漢周澤時人爲レ之語曰生世不レ諧作ニ太常妻一一歲三百六十日三百五十九日齋一日不レ齋醉如レ泥按稗官小說南海有レ虫無レ骨名曰レ泥在ニ水中一則活失レ水則醉如ニ一堆泥一然云々杜詩十三卷十一丁ウ寄嚴鄭公五首中に先判ニ一飮一醉如レ泥』

(七)道中双六井釣針を作ル　能改齋漫錄七の卷畫レ紙爲ニ棊局一敲レ針作ニ釣鈎一條に杜子美詩云老妻畫レ紙爲ニ棊局一出ニ東晉李秀四維賦一曰四維戲者衙尉墊侯所レ造也畫レ紙爲レ局截レ木爲レ棊又云稚子敲レ針作ニ釣鈎一出ニ楚辭一曰以ニ直針一而爲レ鈎維何魚之能得云々畫紙局は今の道中双六または十六むさしの類也直針を鈎

に作るは今もする事也

(八)龍尾道　龍尾道は能改齋漫錄七卷龍尾道の條に清獻趙公嘉祐六年言陳旭與御醫王世寧通家姻戚用レ是遷二副樞一未レ行遂丐出知二虔州一有レ詩云乍辭龍尾道來剩虎跑城蓋唐含元殿前龍尾道自二平階地一凡詰曲七轉由二丹龍門一北望宛如二龍尾下一垂於地一焉根欄悉以二青石一爲レ之故謂二之龍尾道一見二賈公談錄一とあり

(九)「ドサクサマギレ」「ドッサクサスル」　俗言に「ドサクサマギレ」又は「ドッサクサスル」などいふは咄嗟の字にて能改齋漫錄七卷咄嗟咄嗟の條に見ゆ

(十)土地有二盛衰一人心有二去就一　能改齋漫錄七卷八字仙條に土地盛衰有レ數人心去就有レ期云々

(十一)罰酒三杯　同書七卷蘭亭序條に十六人賦詩不レ成罰酒三觥云々

(十二)秀才茂才　職原抄大學寮條に秀才の事見ゆ能改齋漫錄七卷茂才英俊英雄の條に茂才はもと秀才なりしを光武の諱を避て茂才といふよし見ゆ

(十三)封事　能改齋漫錄七の卷に見ゆ

(十四)愛水愛河　万葉集五の卷山上憶良詩に愛河波浪已先滅苦海煩惱亦無レ結從來厭二離此穢土一本願託二生彼淨刹一云々　○癸辛雜識續集下卷愛水條に楞嚴經云因二諸愛一受レ染發二起妄思一情積不レ能レ休生二愛水一心憶二珍羞一口中水出心憶二前人一或憐或恨目中淚盆貪二求財寶一心發二愛涎一舉體光潤心著二行淫一男女二根自然流レ液又曰婬習交接發二於相磨一云々　○檜垣謠詞に今も執心の水をくみ輪廻の姿見え給ふぞや云々法音抄一卷(四十四丁オ)に經にも大かた順恚をば火とし愛欲執心をば水とする也普門品の釋に愛欲水增二長邪見一とあり楞嚴八卷にも情積不レ休能生二愛水一ととかれたり吳興注云憐由二憎愛一生レ水可レ然といへり又東坡が詩にも愛河水と作れり又善導の二河白道にも愛執を水の河にたとふげにも人怒時は其身いかにもあつくなるときは火也又物に愛著する時は目にも涙などの出る時はこれ水の性なる事あきらけし云々

(十五)鏡を墓に納　古墓中より古鏡出る事あり癸辛雜識續集下卷棺蓋懸レ鏡條に今世有二大殮一而用レ鏡懸二之棺蓋一以照レ尸者往々謂取二光明破暗之義一按漢書雀光傳光之喪賜二東園溫明一服虔曰東園處此器以レ鏡置二其中一以懸二尸上一然則其來尚矣と見ゆ

(十六)一樹の陰一河の流　千手謠詞に一樹の陰や一河の水みなこれ他生の緣云々聖德太子の說法明眼論(鴻書也)に或處二一樹下一汲二一河流一乃至輕重有レ異親疎有レ別皆是先世結緣云々山姥謠詞に一樹の陰一河の流れ皆是他生の緣ぞかし云々橫笛草子に人間のならひは一樹のかげ一河のながれをくむ事もたしやうのえんと申也一村雨のあまやどりいづれも此世ならぬえんとこそ聞傳へ候へ云々珍書考に古文類談を引て隋張卽之詩に汲二流一河一接彌深屛一雨一樹一思殊親云々(頭書源平盛衰記　太平記　養經記　保曆間記　夏山雜談　閑田次筆)

(十七)喝食(カツシキ)　『太平記廿六卷足利直冬下向西國一條に抑此直冬ト申ハ古ヘ將軍ノ忍テ一夜通ヒ給ヒタリシ越前局ト申女房ノ腹ニ出來タリシ人トテ始ハ相摸國東勝寺ノ喝食ナリシヲ男ニ成シテ京へ上セ奉リシ人ナリ云々按に直冬東勝寺の喝食にて垂髮なりけんを元服させ冠者になして京都へのぼせたるよし也○同書廿九卷松岡城周章條に直賴ツク〳〵ト父ノ遺訓ヲ聞テ扇取直シテ申ケルハ云々又禪僧ニ成タラバ沙彌喝食ニ指ザシ聖道ニ成タラバ兒共ニ笑ハレズト云事有ベカラズ云々按に兒の事を禪家に喝食といへる事と見ゆ　○稱名念佛奇特現證集(上卷卅四丁右)大進房光蓮の母靈百万遍の念佛に依て得脫の事條に身が弟に喝食の候をも是へ呼べと申程にそれは四五里隔りたる師匠の許に候をば何として今は呼候べきと申に云々卽はち喝食を側へよび寄て髮押撫て健氣にて坊主に能仕はれまゐらせよなど懇(チンゴロ)に物語ども候ひし云々標注に古(イニシヘ)僧ニアラズ俗ニ非ル人寺院ニ來テ衆僧ニ仕ヘ齋時ナドニハ食物ヲヨビツギケルヨリ此名起レリ喝食(カツシキ)ト書テ食ヲ喝(カツ)ルトヨム也今ハ大方小童(チゴ)ノ名トナレリ云々按に喝食の髮を押撫てとあるにて髮ありし事おもふべし稱名念佛奇特現證集刊本二卷あり天台沙門隆堯ガ撰也隆堯ハ寶德元年十二月十二日齡八十一にて遷化せり標注は正德の比京都報恩寺の湛澄がしわざ也○奇異雜談集一卷作善の齋會に僧衆中酒をのめる時位牌の靈魂の喝食形を現じて火炎に燒し事條に或人の雜談にいはく田舍の事なるに一人の修行者人家の邊を行に喝食一人ふで來りていはく客僧きたりて齋(トキ)を喫せよとあり客僧うけがひよろこびてしたがひゆけばすなはち寺の門に入ぬ喝食ざうりをぬいで緣にあがりて見かへりて客僧這裏(コヂ)へといひて奥へ行

て見えたまはす客僧縁にあがりて茶堂のきはに居す客殿には僧衆れき〳〵として齋(トキ)の最中なり客僧にもおなじく膳を供て喫せしむ客僧遙に佛壇を見れば喝食壇の上に霊供に向て居す是は喝食の御影なりよくさきの喝食に似たり座敷中酒の時分になりて給仕人銚子を持來りて座敷にいれば喝食の御影青き火に全體もゆるなり怪てつく〳〵見れば僧衆みな酒をうけて呑とき火炎あかくなりて甚もゆるなり茶堂の僧に佛壇のうちを見たまへといへば見ておどろき立て行て消さんとおもへば火すなはち消て跡なしその目には喝食見えす客僧の目にも火消て喝食の御影なしといへば茶堂の僧のいはくなんぞ喝食の御影あるべきや喝食は年十三なるが此ほどやみたまひて死去有て今日初七日の作善なりいまに御影のようういなしといふ客僧すなはち心得たりさきに道にて我をよびしは喝食の魂魄なり今の御影と見えしもこんはく也作善に飲酒破戒のとが忽に火えんとなりてもえたり奇異の事なりこれを院主に告かたらんとおもひて齋(トキ)をはるをまちてゐたり僧衆かへり散じて後院主茶堂にきたりて客僧はいづかたよりぞととへば客僧のいはく諸國一見の修行者にて候が奇異なる事有てまゐり曜齋(ヨウサイ)を申候といへば院主何事ぞととふ客僧今朝道にて喝食の我をよびしより此かたの事をつぶさに語れば院主は不審のけしきあり客僧又いはく喝食ざうりをぬいで縁にあがり給ひしそのざうりありやいなやといへば院主立て見るにまことにそのざうりあり見れば喝食のざうり焼繪紋紛れざる也此城履(ゾウリ)は病中よりくつだなにありつるに今朝誰が取出すぞととへば誰もとり出すものさらになしこれにて院主すこし信ず茶堂の僧も又いはく佛壇のうちやくるを見て立て消さんと思ひつれば火消て跡なしといへば院主さては疑ひなしといへり客僧は下戸か上戸かと問給へば客僧のいはく一盃は呑候といへども今の儀に盃もとらざるなりといふ院主のいはく所詮中陰の間酒を禁斷すべしといへり客僧はしん〳〵の道人大修行底の僧なりとて囉金を施しあたふ客僧拜受してさると云云按に文中喝食は年十三とあり○鎌倉年中行事(群書類從本上卷四丁左) 正月二日條に練貫之廣小袖公方樣御女房樣可レ被レ召童體又兒喝食之外ハ依レ爲二御法一不レ著云々按に廣小袖一本には黄小袖に作れり同書(上卷廿三丁左) 正月十六日條に此外四首白菊が倭歌二首あり其歌は「白菊トシノブノ里ノ人トハヾ思ヒイリ江ノ島トコタヘヨ」「ウキコトヲ思ヒイリ江ノ島ナラバスツル吾身ハ浪ノ下草」新編鎌倉志六卷(廿三丁左)兒淵條に此事を載て建長寺の僧自休藏主雪下相承院の兒白菊といへり詩も七律一首にて下に衣襟只濕千行淚扇子空留二首歌相對無レ言愁思切暮鐘爲レ孰促二歸家一の四句あり又自休が歌に「白菊ノ花ノナサケノ深キ海ニ共ニ入江ノ島ゾ嬉シキ」ト詠テ其マヽ海ニ沈ムト云々又喝食永賛に了角(アカク)群兒不レ解レ愁海堂庭院事ニ嬉遊一從レ師只合レ攅二書卷一花過緑陰人白頭按に了角(アカク)群兒とは了は字書に物之岐頭と注して髪を分て結たる貌也或は垂髪にし或は了頭にも結が兒の髪の形也此外滑稽詩文中喝食の詩いとおほく見えたれど今は考證に便あるのみを引出たり○若氣勸進狀に文明壬寅之冬抄平朝臣井尻又九郎忠勳謹白ニ小僧喝食若衆一言云々按に平朝臣に平座(タヒラニスワル)よしをよせ井尻にオキドといふよしをよせ又九郎に股谷(マタグラ)をよせ忠勳に只好をよせたり若氣(ニヤケ)は今世ニヤケ者などいふ出處にて艶色の少を指ていへるなり○自然居士謡詞に爰に自然居士と申喝食の御座

六日條に十刹ニハ御坐ノ内ニテ御禮アリ諸山ヨリ單寮同後堂首坐書記藏主侍者喝食東班ハ提點都寺以下無二御禮一云々按に鎌倉公方樣ニテ諸山ノ住持及單寮以下喝食まで御禮なく東班は提點以下御禮なきよし也こゝに禪家僧職の名目をならべ擧たる中に喝食あり○庭訓往來十月三日狀に此外者舊之諸僧塔頭坊主(タツチウバウズ)成丁左(四卷三)に喝食舊抄云佛在世の七家の一也七家トハ刹利(サツリ)波羅門毘沙須陀斷見外道常見喝食也云々此說いかにぞや可レ考 ○異制庭訓往來十一月三日條に沙彌喝食行者人工等隨二其階級一可レ致二供養一候也云々按に京鎌倉の五山の事をいへる條也○尺素往來(詳書類從本廿二丁右)近日於二私宅一云々條に在京諸庄主及至二沙彌喝食一可レ有二來臨一也云々 ○滑稽詩文寄二喝食一詩に昨日應レ情年少叢裘裝相忘待二紅顔一淡粧只以二掛レ肩髪一引傳二雨中衰老翁一按に掛レ肩髪といへるにて垂髪の兒の貌想像(サマヲモヒヤル)べし又喝食之投レ身(名白菊)詩に嶮涯嶮處弃二生涯一十有餘霜在二刹那一花質紅顔碎二岩石一娥眉翠黛雜二塵沙一按に此外四首白菊が倭歌二首あり其歌は「白菊トシノブノ里ノ人トハヾ思ヒイリ江ノ島トコタヘヨ」「ウキコトヲ思ヒイリ江ノ島ナラバスツル吾身ハ浪ノ下草」新編鎌倉志六卷(廿三丁左)兒淵條に此事を載て建長寺の僧自休藏主雪下相承院の兒白菊といへり詩も七律一首にて下に衣襟只濕千行淚扇子空留二首歌相對無レ言愁思切暮鐘爲レ孰促二歸家一の四句あり又自休が歌に「白菊ノ花ノナサケノ深キ海ニ共ニ入江ノ島ゾ嬉シキ」ト詠テ其マヽ海ニ沈ムト云々又喝食永賛に了角(アカク)群兒不レ解レ愁海堂庭院事ニ嬉遊一從レ師只合レ攅二書卷一花過緑陰人白頭按に了角(アカク)群兒とは了は字書に物之岐頭と注して髪を分て結たる貌也或は垂髪にし或は了頭にも結が兒の髪の形也此外滑稽詩文中喝食の詩いとおほく見えたれど今は考證に便あるのみを引出たり○若氣勸進狀に文明壬寅之冬抄平朝臣井尻又九郎忠勳謹白ニ小僧喝食若衆一言云々按に平朝臣に平座(タヒラニスワル)よしをよせ井尻にオキドといふよしをよせ又九郎に股谷(マタグラ)をよせ忠勳に只好をよせたり若氣(ニヤケ)は今世ニヤケ者などいふ出處にて艶色の少を指ていへるなり○自然居士謡詞に爰に自然居士と申喝食の御座

候が一七日說法を御官候云々按法音抄三卷二丁右 にむかし僧にもあらぬ人が寺院に立入りて佛道を修行し齋非時に食物をよびつぎけるより此名おこれり喝食は食を喝と讀也今は兒などをも云也云々諸曲拾葉抄二丁 に喝食とは食を喝とよめり僧にはあらず本如ニ寒山拾得形ニ寺院に入て齋非時に食物等をよびつく役也今其形及衣をかざるは五山より始る也云々○下學集上卷九丁左 人倫門に喝食カッシキ云々○節用集上卷 加部人倫門に喝食カッシキ云々○連歩色葉集加部に喝食カッシキ云々○節用集大全二卷四十四丁左 加集人倫門に喝食かつしき昔僧ニモアラズ俗ニモアラヌ人ガ寺院ニ立入テ佛道ヲ修行シ齋非時ニ食物ヲヨビツギケルヨリ此名オコレリ喝食ハ食ヲ喝ルト讀也今ハ兒ノ名也云々按に節用集大全ハ法音抄とおなじく洛東正立寺の天台宗沙門惠空が作也○和語連珠集二卷十三丁左 喝食爲ニ山門之佛事一條に二人玄水を引て云松花山人ハ東福寺ノ信仲ナリ諱ハ明篤小喝食ノ時入院山門ノ佛事ヲ勤ラレタリ同列ノ小喝食ニ會テ吾ハ山門ノ佛事ヲナシタリ其方ハイカニト問玉ヘバ答テ云其方ハ山門ノ佛事ハセラレタリトモ鹿苑ニナル事ハ成マイガ我ハ鹿苑ニナラントイヘリシガ果シテカノ喝食鹿苑院ニ居レリ上古ハ鹿苑院ハ五山ヨリ持タリ信仲モ言葉ノゴトク東福へ入寺セラレタリ入門一句天下定ト云語ハ此事ナリトゾ云々○類聚名物考稱號部十卷に喝食かつしき是は五山などに有寺内にて給仕する有髮の兒也云々○與清曰喝食は禪家の兒の事にてそは住寺の僧に給仕し飮食の配膳手長などの役にあづかれば喝食の名ありすなはち食をよぶといふ義也いと少きほどは小喝食といへり禪僧おほくは美麗の小童をめしおきて密道をもはらとせる事は滑稽詩文若氣勸進狀などを見て知べし髮の貌は垂髮にもし又は兒まげとて丁頭にもせし也丁頭はまげを二ツにわけてからこに結事也然て喝食後には入道して僧にもなり元服して冠者にもなれる事常也惠空が節用集大全法音抄の說はいまだいひつくさず山岡俊明が類聚名物考の說中々いうにきこゆ自然居士は喝食のまゝ僧にもならず還俗もせずして然ながら居士のありさまにて寺內などに住ける者なるべし』

(十八)名紙剌手札 吳曾能改齋漫錄一卷名紙條に名紙之始高承事物紀原云釋名曰書名字于奏上曰レ剌後

漢稱衡初遊ニ許下一懷ニ一剌一既無レ所レ之適至ニ于剌字漫滅一蓋今名紙之制也則名紙起ニ于漢剌一也以上皆高說予以爲不レ然蓋稱衡傳只言レ剌不レ言ニ名紙一雖ニ名紙剌之變一然高說無レ據予按梁何思澄終日造レ謁每宿昔作ニ名紙一束一曉來便命レ駕朝賢無レ不ニ悉狎一蓋名紙始見ニ於此一云々魏志九十丁 夏侯和傳注に人一奏レ剌悉書ニ其鄕邑名氏一世所謂爵里剌也云々按爵里剌は今の所書役名書をしたる手札也

(十九)起復之禮忌服御免 今の世忌服御免といふは起復の事也能改齋漫錄一卷 起復之禮條に高承事物紀原云起復本ニ禮記一曾子問云子夏問曰三年之喪金革之事無レ避也者非ニ與孔子曰吾聞ニ諸老聃一曰昔者魯公伯禽有レ爲爲レ之也注云魯徐戎作レ難有レ喪卒レ哭而征レ之急ニ王事一也故春秋亦紀ニ普襄公墨縗之事一漢唐以來遂有ニ起復之禮一蓋自ニ白禽一始也以上皆高說予按前漢翟方進在レ喪既葬二十六日除レ服起視レ事後漢桓焉爲ニ太子太傅一以ニ母憂一自乞レ聽以ニ大夫行レ喪蹤一年詔使者賜ニ牛酒一奪レ服夫謂ニ之起復一者就レ喪起レ之復令レ視レ事耳高承無レ所レ據但泛言ニ漢唐一而已故予疏ニ一條一以見ニ其始一云々制度通六一丁 に復ト云ハ其身ノ役ヲユルスコト也云々

(廿)大番役 『二判問答群書類從四百七十二卷廿二丁左 に大番役右何御代被レ始レ之又何比中絕候哉」武家番役大略自ニ鎌倉右大將一如レ此事始歟云々○洞院家部類記二卷日吉行幸供奉雜事部に大番一人事云々○侍所沙汰篇群書類從本 文曆二年正月廿七日沙汰に大番衆令レ逃ニ失召人一事右召人出來之時令レ預ニ大番衆一又在京輩一處令ニ逃失一畢然而其科怠輕重依下難ニ定申一候上于レ今不レ致ニ沙汰一候之間或强盜或殺害人大略十之七八令ニ逃失一候也爲ニ自今以後一尤可レ被ニ定下一候歟押紙云可レ令レ修ニ造清水寺橋一也同仁治二年六月十日沙汰に所レ召ニ置京都一犯人事付ニ大番衆幷下向人之使一宜可レ被レ下ニ進關東一也また大番衆令レ逃ニ失召人一罪科事右隨ニ召人輕重一可レ行ニ罪科一之由式目先日被ニ定置一畢然以ニ其趣一令レ加ニ下知一事關東御家人爭不ニ叙用一哉可レ計ニ行其科一也若又不ニ承引一之輩可レ被レ注ニ進交名一也同弘安九年三月二日沙汰に侍所京都大番役事雖ニ未役國未役人一有ニ其沙汰一可レ被レ結ニ廷年限一○吾妻鏡七卷廿四丁右 文治三年八月十九日賴朝卿消息に洛中群盜蜂起幷散在武士狼藉事度々被ニ仰下一候之趣殊驚歎思給候時政下

向之時東國武士少々差置候訖其外も或爲ニ兵粮米沙汰一或爲ニ大番勤仕一武士等在京事多候歟彼輩不レ鎭ニ狼藉一還疲ニ計略一若如レ此事をもや企候覽(ラント)人口難レ塞候然者偏可レ爲ニ賴朝恥辱一候云々○同十二卷九丁左建久三年六月廿日前右大將家政所下ニ美濃國家人等一狀に近日洛中强賊之犯有ニ其聞一爲レ禁ニ遏彼黨類一各企ニ上洛一可レ勤ニ仕大番役一云々○同脫漏十五丁左嘉祿元年十二月廿一日條に東西侍御簡レ衆事有ニ其沙汰一若君御幼稚之間就ニ御所近々東小侍一可ニ著到一之由御下向之始被レ定上者不レ及ニ子細一但西侍無人之條似レ背ニ古例一乎仍相州以下可レ然人々者著ニ進名代一門々如ニ警固之事一連日夙夜可レ令レ致ニ其勤一也遠江已下十五ヶ國御家人等十二ヶ月依ニ彼分限多少一而可ニ著宛一雖レ爲ニ自身出仕之日一可レ進ニ名代於西侍一號ニ大番一之由議定畢是右大將軍之御時稱ニ當番一或亘ニ兩月一限ニ一月一長日每夜令レ伺ニ候之一也次同所始被レ置ニ定番人一也云々按にこゝに大番といへるは京都の大番にはあらで鎌倉に始て大番役を置れたる也○平家物語四卷十四丁右信連合戰條に先年所ニ在シ時大番衆ノ者共ノ留衆タリシ强盜六人ニ只一人追懸り二條堀川ナル所ニテ四人切伏セ二人生捕テ其時被レ成タリシ左兵衛尉ゾカシ云々按に所ニ在シ時とは武者所に在し時といへる事也同五卷十一丁右朝敵揃の條に畠山庄司重能小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱是等ハ大番役ニテ折節在京シタリケルガ云々同七卷十二丁右篠原合戰條に平家ノ方ニハ畠山庄司重能小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱是等ハ大番役ニテ折節在京シタリケルヲ大臣殿汝等ハ故者(フルモノ)也軍ノ樣ヲモ掟(オキ)テヨトテ今度北國へ被レ向タリ云々同十二卷十一丁右土佐房被レ斬條に大番衆ノ者共催シ聚メテ其夜驀テ寄ントス云々按に關東よりのぼせ置れたる大番役の武士を土佐房がかたらひ集たるなるべし○源平盛衰記十三卷廿一丁右高倉宮信連戰事條に大炊御門京極ナル常葉殿ノ御所ヘ大和强盜ガ打入テ家内ノ資財ヲヌスミトリ多ノ人ヲ切殺シテ出ケルヲ家主聲ヲ立テ盜ヨ(ヌスビト)〳〵ト叫ケレドモ音(コエ)ヲ合スル者ナシ大番衆モ追ザリケルニ信連左右ノ小手(コテ)ニ腹卷著テ太刀ヲ拔京極大路ニ出合ッヽ散々ニ戰ケルガ强盜四人切留一人ニハ寄合テ組テ搦メントセシ程ニ頰ヲツキ貫レナガラ搦留タリケリ云々同十八卷十一丁左文覺賴朝勸ニ進謀叛一事條に伊豆國住人伊東入道祐親法師云々第三ノ女未ダ男モ無リケレバ兵衛佐忍テ通ケル程ニ男子一人出來ニケリ兵衛佐殊ニ悅テ寵愛ス字ヲバ千鶴トゾ申ケル三歲ト申ケル年ノ春少(ワカ)キ者共アマタ引具シテ乳母ニ被レ懷テ前栽ノ花ヲ折テ遊ケルヲ祐親法師大番ハテヽ國ニ下リタリケル折節見付テ云々同十九卷廿丁右兵衛佐催ニ家人一事條に武藏國住人畠山庄司重能小山田別當有重平家ノ大番勤テ侍ナレバ重能ガ男重忠有重ガ男重成同可レ奉レ背云々同四十六卷十丁右賴朝義經中違事條に昌俊ヲ召捕テ大番衆土肥次郎實平ニ被レ預ケリ○長門本平家物語一卷に抑彼昌春南都をうかれける事は與福寺領針庄と云所あり去仁安の比衆徒代官を入たりけるを西金堂の御袖衆の代官として小河四郎遠忠と云者せひなく庄務を打とゞむる間衆徒の中より侍淸五郎快尊を遣して遠忠が亂妨を押させ其時西金堂衆土佐房昌春數輩の惡徒を結て遠忠を夜打にして則彼庄を橫領せんと結構する間衆徒昌春を追入て子細を奏聞のために御榊を先にたて奉りて上洛するよし聞えければ昌春多勢を卒して彼御榊をさん〳〵に切捨奉てけり之によりて衆徒いよ〳〵憤りをなして昌春を召捕て禁獄せらるべきよし訴申間長者より時の別當けんちゆう僧正に仰て召れければ昌春あへて事ともせず然間是をこしらへて昌春が申所其いはれあるかくはしくきこしめして御成敗有べきよし重て仰下さるゝ間昌春おめ〳〵と上洛したりけるを寺家に仰付て昌春を召取て大番衆土肥次郎實平にあづけられぬ云々同廿卷越中次郎兵衛盛次事條に男悅て女によく〳〵尋とひて鎌倉殿に此由を申すやがて氣比の權頭入道道廣に仰てからめてまゐらすべきよし建久五年の比被レ仰けり道廣□良大番にて在京したりけり云々○曾我物語一卷四十一丁右おくのの相摸の事の條に股野はすまふの大ばんつとめに都へのぼり三年の間都にてすまふになれ一度もふかくをとらぬもの也云々○同二卷七丁左若君の御事の條に佐殿わか君いできたまひし事なのめならずよろこびおぼしめして御名をば千鶴ごせんとぞつけたまひける云々かくて年月をふるほどにわか君三さいになり給ふ春のころ伊東京より大番つとめてくだりしがしばしはしらざりけりある夕ぐれに花ぞの山を見いりければをりふしわか君めのとにいだかれせんざいにあそび給ふ祐親これを見てかれはたぞととひけれど

も返事にもおよばずにげにけり云々○保暦間記（群書類從 本下卷廿五丁左）に仁治三年正月九日主上ニハカニ崩御成賜フ僅御年十二歳ニゾ成給ケル皇胤既ニ絶サセ給ヒケレバ土御門院（阿波院ト申）宮承久ノ亂ノ時二歳ニ成セ賜ケリ三條坊門大納言ニ御譲也ケレバ奉レ養奉レ置淺猿キ御有樣ニテ御座ケルヲ尋出シ奉テ御位ニ付奉ルベキ由泰時計申テ關東ノ使者秋田城介義景（安達藤九郎盛長孫 秋田城介景盛子 隱岐守行村子）彼等兩使トシテ上洛ス京中ヲ尋奉ルニ人不レ知或古御所ニ宮渡セ給フト憚ニ閉テ義景參テ阿波院ノ宮ノ御所ニ爲レ渡給フト申セバ實カト問ケレバ老尼一人出テ是ニ御座候ト申ケレバ亦可ニ申上一人モナカリケル程ニ義景草深キ庭中ニ畏テ破タル御簾ノ内ヲ守テ御位ヲ譲セ給候御使參テ候トニ三度直奏ス是ヲ聞食ケル宮ノ御心地イカ計也ケン頓テ義景大番ナリケレバ扉倒タル門ノ脇ニ唐笠張立テ陣屋ニシテ奉ニ守護ニ云々○承久記上卷（七丁左）に平九郎判官胤義大番ノ次デ在京シテ候ケレバ云々又（十九丁左）二位殿妻戸ノ間ヘ出給ヒ御簾半計上サセ御覽ジ出シテ宣ヒケルハ云々日本國ノ侍共昔ハ三年ノ大番トテ一期ノ大事ト出立チ郎徒眷屬ニ至迄是ヲ晴トテ上リシカ共力盡テ下シ時手ヅカラミヅカラ裹笠ヲ首ニ掛カチハダシニテ下リシヲ故殿ノアハレマセ給テ三年ヲ六月ニツベメ分々ニ隨テ支配セラレ諸人タスカル樣ニ御計ヒ有テ云々○伯耆卷（群書類從 本二丁右）に四月廿一日出雲國自ニ三尾關一被レ召ニ御船一隱岐國ヘ成ニ遷幸一國分寺ヘ入進らする隱岐出雲兩國之以ニ軍勢一警固稠しかりけり其年も既に暮ぬ翌年二月始比にや自ニ京都一供奉仕ける成田入道を召て被ニ仰下一けるは思召立るゝ事あり此番衆の中に誰をか可レ有ニ御頼一と勅定有ければ土屋又四郎と申者を召て參る以ニ六條少將殿一汝を頼被ニ思召一由被ニ仰下一ければ小分限者にて難レ叶候但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高と申者こそ弓箭を取ては樊噲張良にも劣らじと思ふ仁にて候其上家富一族も多く手柄の者共にて候是を可レ有ニ御頼一候近國には自レ是外には候はずと申て御前を罷立ぬ大番勤て候ける地頭御家人等の中に御志有者多かりければ彼等に如レ前有ニ御尋一ければ廿四人まで如ニ土屋一ぞ申ける云々○菊地武朝申狀（群書類從三百九十九卷十九丁左）に御鳥羽院御代承久合戰之時先祖能隆爲ニ大番役一依レ進ニ置叔父兩人一隨ニ院宣一進戰畢云々○關東評定傳（群書類從 本下

卷廿三丁左）建治元年條に四月十五日蒙古改ニ大元一使杜世忠副使何文若都魯丁等著ニ長門國室津一八月仲旬使五人被レ召ニ關東一九月七日斬レ首是則永爲ニ絶ニ和親一不ニ通問一之策今度所ニ貢來一牒狀如レ前可ニ順伏一之趣也其後警固事有ニ沙汰一鎭西撰補被人器用之輩發ニ遣海邊國々一止ニ京都大番役一被レ差ニ置在京人一公家將軍家減ニ省公事一行ニ儉約一被レ休ニ民庶一皆是爲ニ軍旅用意一也云々○明月記嘉祿元年十月十七日條に實清朝臣來以レ人問今日東方有ニ音信事一云々無ニ殊事一歟武士多入洛云々或云例大番替料云々○有識小說下卷（十七丁右）に大番往古諸國ノ武士交代ニ在京シテ王城ノ警衛ヲ勤シヲ云太平記ニ在京ノ籌ナドアルモ此武士ノ警固ノ義也トゾ云々○樋口秘記（五十二丁右）に殿上ハ昔雲客ノツメ所也是ヲ大番ト云臺盤所ヘツムルヲ小番ト云今ノ外樣ノツメ所小番乎云々按此大番小番といへるは武家の番役とは別也○與清曰大番の名は武家の番役を勤仕するにいふもと諸國の侍京都に上りて三年ヅヽ警固の役をつとめしに鎌倉の右幕下頼朝卿の時より六月ヅヽ（ムツキ）に定められし也そは禁中の瀧口院の武者所東宮の帶刀などにも候したりけんは工藤一蔕木曾先生などいふ名あるにて知べしこれ古代の衞士舍人の遺風也然て禁裏仙洞にも限らず宮の御所にもあれさらぬ所にもあれ武士の番替（バンガハリ）して警固するをみな大番といへりと見ゆ鎌倉營中に大番勤仕のはじまれるは嘉祿元年のよし吾妻鏡脫漏にいへり大番とはむねとある番役なれば常の細々の小番役に對てさいへるなるべし樋口祕記に見えたる殿上の大番臺番所の小番といふは武家番役とは別事（コトく）也』

（廿一）湯餅　能改齋漫錄十五の卷に湯餅の事をいへる條二所あり今のツミイレの類也藝苑日涉十の卷にいへる說考合すべし名物六帖にも見ゆ

（廿二）トントと云詞　『俗言にトントと忘れたトントしらぬなどいふは一休のめなし草に「トット」とあると同語也とつとは「イト」を訛れる詞イト昔などいふべきを「トットマヘカタ」などいへる也此「トット」を亦訛て「トント」といひそのつかひ所さへも誤れるものと見ゆ又ヅット先の方などいふ「ヅット」も「ット」といへる詞の轉也ット來りなど古くいへり』

（廿三）丸　宗固隨筆に丸と云事人丸猿丸仲丸田村丸虫丸の類皆其身を卑下して付たる事也能物を知たる

人をば角（カド）といひ物をしらぬ人を丸といふ心にて丸と付はひげの詞也昔は皆かやうに卑下して「ソク」とも付たり夫ゆゑ不淨をとる物をおまるといふは今の「カハ」の事也但万葉集には麻呂と假名書也此假名を一ッにして古今集以來麿と書事也昔は麻呂と假名書にしたる事也夫故麿とも丸とも書昔田村丸は此比の將軍の如き人也云々 頭書 砂石集七ノ卅三丁ウ裏丸云々 三國志呉此張益德也 南史廿ノ九丁ウ謝綸傳に綸謂曰身家太傳裁得二六人一云々 同十三ノ十一丁ヲ彭城王劉義康傳に義康素無二學術一待二文義者一甚薄哀淑嘗謂二義康一義康問二其年一答曰鄧仲華拜爽之歲義康曰身不識也淑又曰陸機入洛之年義康曰身不レ讀レ書君無レ爲レ作二才語一見向レ其試陋如レ此云々

（廿四）小町が歌といへどたしかならぬ歌小大君集の事小町が事　同書に小野小町が事徒然草にも傳記つまびらかならずとあり七小町といふ事は僞也然ども雨乞の事小町が家集に見えたり歌は世中にていふ歌にあらず「ことわりや日の本ならばてりもせめさりとては又あめか下とは」草紙洗に「まかなくになにをたねとてうき草の波のうね〳〵生しけるらん」此二首の歌曾て無事也但小町が家集に小大井（コオホノキ）君の歌を多く入たり小大井君の集にも小町の歌を入られたり合點ゆかぬと百花申されたり新古今集に「あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつれの日こそまつらめ」此歌榮花物語にも入りて小大井君の歌なるにいかなる撰者の誤にや新古今には小町が歌とあり不思議の事也但小町は上古の人也其上神慮に多くあづかりし人也小町死五百年程過順德院歌合を撰み給ふにいかなる間違にや小町を右にして伊勢を左にせんと宣ふ（此時は伊勢も古人なり）或夜の御夢に小町ま見え給ひて右に置たるを恨み申たり夫より心づき給ひて左にせんとて撰み給ふ歌合の本を御覽あるに小町が歌殘らず左に成て居たり是不思議也とて天子ながらも此奇妙に恐れ給ひて此歌合燒捨給ふ夫ゆゑ世に傳はらず小町は六義六人の內の一人にして難なき歌よみ也といへり云々

（廿五）ありのすさびの歌二道かけし人はの歌「ある時はありのすさひにくかりしなくてそ人は戀しかりけり」「蜘のいに荒たる駒はつなくとも二道かけし人はたのまし」此二首は古くより世にいひ傳へたる歌なれども出處もしれず集には入ぬ歌也ある時は蟻のすさみの歌源氏物語にもいりその外の本にあまた入たり云々宗固隨筆に見えたり

（廿六）なに事のおはしますかはしらねともの歌　宗固隨筆に伊勢國二見浦は伊勢大神宮のコリ場也西行法師の歌「何事のおはしますかはしらねともありかたさにそ涙こぼるゝ」此心をとりて芭蕉翁發句「うたかふなうしほの花も浦の春」此句意しれず西行の古歌取りといへり二見潟の文臺に此發句を書也云々按右の西行の歌は謠曲に下句かたしけなさに涙こぼるるとして□□が歌とせり可レ考

（廿七）和歌三神井聖廟の稱　又云住吉大明神は和歌を守り給ふ御神也御詠歌は少けれども和歌を守給ふ御神とする事也「夜やさむき衣や薄きかたそきの行あひのまより霜そおくらん」此御歌を本にする事也海上を守り給ふ御神にて上古の御神也一旦隱れ給ひて神功皇后三韓退治の時海上あれ船くつかへらんとせし時に又出現し給ひしと也高砂の諷にも此事あり憶が原の波間より顯れ出し住吉の神とは此御事也但憶が原の波間より顯れ出し住吉の神とよみしは後に神主のよみたる歌也此住吉大明神の末社に上筒男中筒男底筒男といふあり此皆船を守りの御神也此三社の內に玉津島明神もおはします事也此玉津島明神より取ちがへて和歌を守りの神といひたる事成べし又田安の岡部衞士が注には五百年以來住吉大明神を和歌の守り神とすること也とかけり此說いかゞ也北野天神の社地に末社多く有て中に孔子を祭りし御社あり此御社を天神と心得しより人誤て天神の御事を聖廟とは申ならはしたり初に誤たるが後には實になりて今の世にては天神を聖廟と申事也住吉玉津島もかやうの事にや云々

（廿八）樣（サマ）　又云樣といふ事東山義滿公大上皇帝になり給ふ故仙洞公方の樣（ヤウ）といふ事より始りたり樣といふ文字を色々書わけたるは世の末になりての事也宗祇時分には殿樣と書て人のもとへ遣したり貴樣と書始たる事は京都の遊女の書始しこと也貴殿とは此比もかきたれども貴樣とは遊女ばかり書たり云々與清曰さまは方の義也東ざまへ行西ざまへゆく或は何處ざまなど舊本今昔物語字治拾遺など物におほく見ゆ公方といへばオホヤケザマ也樣の字はアリサマの義なるをやがて方の事にも用て相通はせし也

（廿九）らう　又云らうは小野お通が書始たり小野お通は信長卿の右筆にて有しが信長の病氣

保養の爲に御曹子の十二段を作り出したりとぞ又かしくといふ事は穴賢といふ詞にて後にはめで度かしくと女中の文に書事に成たり云々

(卅)わごのわぬしわごせわごれよなどの吾の字義　又云和殿といふ事吾殿吾主吾御前の類也「そなた」と云に同じ唐にて人の事をいふ時はこの吾といふ字を書く手前の事を云時は我といふ字をかく事也是にてよくわかる吾子未レ知哉など書く吾といふ事也歌にわれからねをやといひしも人の事にて吾といふ吾の字也云々按に謠詞にわごりよと有も御料也假名もわごれよと書べし

(卅一)夕がほだなの下すゞみ　又云万葉集に「たのしみは夕がほだなの下すゞみ夫はてゝれ妻は二布して」てゝれとは下帶の事也此歌古よりいひ傳へたれども万葉集に見えず又「誠とは汁かけめしを喰さして萩ばしそへて出すをぞいふ」此歌も万葉には無レ之御水尾院御歌「立さらて心のうちを住かへよ里のいほりも山のかくれ家」小隱は山にかくれ大隱は市に隱るといふ心也云々

(卅二)道のぬかりの馬ざくり　又云東路はむかしも道のあしき事と見えたり古歌に「東路の道のぬかりの馬さくりうたての月のやとり所や」西行歌「うとくなる人を何とてうらむらんしられすしらぬをりも有しに」云々與清曰道のぬかりと云詞爲尹千首路苗代歌に「あせをこす苗代水のほと見えて道のぬかりのかはく間もなし」契沖雜記十丁に文集に塗の字をぬかりとよめり雨などふりて道のあしきをいへば云々陸奥白河郡と常陸久慈郡の境に大坱關あり大坱の宿も常陸の方にあり坱の字をヌカリとよめり馬ざくりと云詞別所長治記廿四丁に見え太平記參考本廿九卷六十丁には馬ザクリノ水ヲ蹴カケラレテと有又西行のうとくなる人を云々の歌山家集にも夫木抄その外撰集などにも見えず

(卅三)ちよのをがいたゝく桶　又云鎌倉圓藏寺名所底貫ノ井歌「ちよのをかいたゝく桶の底ぬけてくまなき月のかけもやとらし」又「とにかくにたくみし桶のそこぬけてもよかるべし是は悟り也たくみしは木をけづりたがをかける事人間の身にたとへ水のこぼれたるは死してもとの土くれになりし心也鎌倉第一の名

所也此所に十六の井と云あり鎌倉志に見えず云々按にちよのをは「しづのを」歟しづのめの書損なるべし』

(卅四)歌合禁止の事　又云今は歌合といふ事是なし論合ゆゑ法度に成たり堂上にも是なし俗人も此格にて判はことわる事也自計の歌合も判は斷る事也云々

(卅五)しら萩　又云万葉集にしら萩とあるは白き萩の事也もとあらの小萩といふは木の本に葉のなきあら〳〵しき萩の事也云々與清曰しら萩とも眞萩ともいひて白と眞は常に通ふ詞也しら萩も萩をほめていへる也

(卅六)ヤタラと云詞メッタと云詞　俗に「ヤタラ」と云詞あり「メッタヤタラ」などいへり「メッタ」は「ベタ」ともいひ「ベタ〳〵スル」「ベトック」なども通語也物の定りもなくヂバリヌル、良などにいへり「ヤタラ」は八タラ拍子トテ樂家ノ只拍子ヲ早クスルヲ云これも定りなきよしの名にてもとヤタラ拍子より俗語ういひ出たるなるべし躰源抄十一末卷同書一丁七十七ヤ八多羅拍子

(卅七)當官の大臣の諱を呼ばず　宗固隨筆に當官の衆をば左大臣右大臣とばかりいふ事也二人となき御人達故尤の事也夫故撰集にも當官の衆をば左大臣右大臣とばかり書て歌有り夫故チョット見てはしれぬ事也尤官を辭退して死後の人達をばたとへば後德大寺左大臣殿などゝ稱號を書載る事也但當官の衆を左大臣右大臣とばかり書入たるを見わくるには作者部類といふ書有是にて見わくるによくしるゝ事也某集の左大臣とあるは誰殿の事某集の右大臣とあるは誰殿の事と銘々にわかる事也云々

(卅八)都ぞ春の錦　又云洛陽三月春如レ錦と唐人の詠置し此詩の詞也唐の都の事を作りたる詩の心をとりて「見わたせは柳櫻をこきまぜて都そ春のにしき也ける」

(卅九)朱の玉垣　又云慈鎭和尙歌「君か代をいのる心を人とはゝさしてこたへん朱の玉垣」惣て神社を赤くぬるは丹は人の心の正直の事也心のまことを移すといふ心にて赤くする事也朱の玉籬鳥居も赤く丹誠丹心皆正直の詞也

(四十)又六が門　又云一休和尙の歌「極樂はいづくのはてと思ひしに杉の葉たてる又六が門」此又六と

いふは一休時分の酒屋也一杯呑たる所が極樂也といふ事也今の世に又六が門といへは酒屋の事になるなり近き發句「又六が門でまたやむ寒念佛」此心は寒念佛の酒を呑たる心なるべしおもしろき句也云々

(四十一)名簿の書法　比叡山延暦寺護國緣起略錄下卷弘法大師順ニ傳敎大師一習學傳法事條に弘法大師献ニ傳敎大師一二字一文一通ありその書法

奉上

僧空海

大同四年己丑二月三日

右爲ニ天台傳燈一奉レ向ニ比叡大禪師一謹捧ニ名書一敬白

と見ゆ又寫本奥書云此文御自筆正文北谷有ニ八部尾御經藏一云々とあり 頭書 名紙事物紀原二ノ八丁ヲ 盛衰記四十ノ廿一丁ウ 字治拾遺九ノ十七丁ヲ同三ノ十六丁ヲ

(四十二)字の反切古にあらず　寄園寄所寄四の卷に古者字未レ有ニ反切一故訓レ釋者但曰ニ讀如一ニ其字一而已至ニ魏孫炎一始作ニ反切一其實出ニ於西域梵學一也自ニ從聲韻日盛一宋周顒始作ニ四聲切韻一行ニ於時一梁沈約又撰ニ四聲譜一以爲在昔詞人累ニ千載一而不レ悟而獨得ニ胸襟一窮ニ其妙旨一自謂ニ入神之作一繼レ是若ニ夏侯該四聲韻略之類一紛然各自名家矣至ニ唐孫愐一始集爲ニ唐韻一諸書遂爲レ之廢本朝眞宗時陳彭年奥晁迥戚綸條貢擧事取ニ字林韻集韻略字統及三蒼爾雅一爲ニ禮部韻一凡科場儀範悉著爲レ格又景祐四年詔ニ國子監一以ニ翰林學士丁度之禮部韻略一頒行初崇政殿說書賈昌朝言舊韻略多無ニ訓釋一又疑ニ單聲與ニ重疊字一不レ諳ニ義理一致ニ擧人詩賦或誤ニ用之一遂詔ニ度等一以ニ唐諸家韻本一刊ニ定其韻窄者凡三十處一許令附近通用疑ニ單聲及疊出字一皆於ニ字下一注ニ解之一此蓋今所レ行禮部韻也吳曾漫錄嘗論ニ景祐修韻略事一既不レ得ニ其始一徒拘ニ於張希文鄭天伾修書先後之辨一爾予因嘆ニ近時小學幾至ニ於廢絕一遂摭ニ聲韻之本末一講ニ論於此一庶覽者得ニ以故一云東齋記事云云按寄園寄所寄十二卷清人漸岸趙吉士恒夫が輯也

(四十三)山市海市　寄園寄所寄五卷山市條に泰山之市因レ霧而成或月一見嘗於ニ霧中一見ニ城闕旌旗一聞レ絃吹レ聲最奇張瑤星曰登州鎭城署後太平樓其下卽海也樓前對ニ數島一海市之起必由ニ於此一每ニ春秋之際一天色微陰則見頃刻變幻島下先湧ニ白氣一狀如ニ奔潮一河亭水榭應レ目而具可ニ百餘間一文牕雕闌無ニ相類者一文中島化爲ニ蓮座一左島立レ竿懸レ幡右島化爲ニ平臺一稍焉三島

連爲ニ城堞一而幡爲ニ赤幟一睢陽衰可立爲ニ撫軍一時飲ニ樓上一忽艨艟數十揚レ幡來各立ニ介士一甲光曜レ目朱旗蔽レ天相顧錯愕急罷ニ酒料一理城守一而船將抵レ岸忽然不レ見乃知是海市遯齋閒覽曰湘潭方廣寺四月朔日在ニ東壁一則照ニ見維揚官府樓堞一民物影著ニ壁上一林景熙蜃說曰漢志載ニ海傍蜃氣象樓臺一初未レ信也避ニ寇海濱一僮報海中忽湧ニ數山一登ニ聚遠樓一見ニ奇峰疊巘城郭臺榭一中有ニ浮圖老子宮一詭異千狀近レ哺而滅筆談所レ記往々類レ此物理小識 頭書 海市ノ讀流水稿五ノ卅六丁ウ

(四十四)佛狼機　寄園寄所寄八卷佛狼機條に今之砲名曰ニ佛狼機一人多不レ解ニ其義一近閱ニ籌海圖編一始知ニ佛狼機國名一非ニ器名一也明正德間顧兪憲應祥署ニ海道一有ニ大舶二一直至ニ廣城懷邑一稱ニ佛狼機國入貢一使者名ニ加必丹一時武宗南巡倭使羈會同館一年後遣去因遺ニ此製一遂以レ地名レ器如ニ驢稱レ衛龜名ニ僂句一也 雲谷臥餘

(四十五)天主敎　『聖朝破邪集一卷に南宮署牘 南京禮部侍郎 沈潅 著 云不謂近年以來突有ニ狡夷一自レ遠而至在ニ京師一則有ニ龐廸峨熊三拔等一在ニ南京一則有ニ王豐肅陽瑪諾等一其他省會各郡在々有レ之自稱ニ其國一曰ニ大西洋一自名ニ其敎一曰ニ天主敎一夫普天之下薄ニ海內外一惟皇上爲ニ覆載炤臨之主一是以國號曰ニ大明一何彼夷亦曰ニ大西一且既稱ニ歸化一豈可下爲ニ兩大之辭一以相抗上乎三代之隆也臨ニ諸侯一曰ニ天王一君ニ天下一曰ニ天子一本朝稽ニ古定レ制每ニ詔誥之下一皆曰ニ奉天一而彼夷詭稱ニ天主一若下將レ駕ニ軼其上一者上然使ニ愚民一眩惑何所ニ適從一臣初至ニ南京一聞下其聚有ニ徒衆一營有中室廬上卽欲ニ修明本部職掌擒治驅逐一而說者或謂其類實繁其說浸ニ淫人心一卽士君子亦有ニ信向之者一況于閭左民驟難ニ家諭戶曉一臣不レ覺喟然長嘆云々臣又聞其誑ニ惑小民一輒曰祖宗不ニ必祭祀一但尊ニ奉天主一可下以昇ニ天堂一免中地獄上夫天堂地獄之說釋道二氏皆有レ之然以レ之勸ニ人孝弟一而示下懲夫不孝不弟造ニ惡業一者上故亦有レ助ニ于儒術一爾今彼直勸レ人不レ祭ニ祀祖先一是敎二之不孝一也繇レ前言レ之是率ニ天下一而無ニ父子一何物醜類造ニ此矯誣一蓋儒術之大賊而聖世所ニ必誅一尙可ニ蚩々然驅レ天而從ニ其說一乎然閭左小民每々愛ニ其貲鼓樂一其敎者聞下其廣有ニ貲財一量レ人而與上且曰天主之敎如レ此濟レ人是以貪愚之徒有レ所レ利而信レ之此其胸懷叵レ測尤可レ惡云々伏乞勅下ニ禮兵二部一會同覆議如ニ果臣言一不レ謬合下將ニ爲レ首者一依レ律究遣其餘立レ限驅逐上仍復申ニ明律令一云々萬

曆四十四年五月日按聖朝破邪集八卷ありて鹽官居士徐昌治が當時の諸子が破邪文章を編纂せし書也徐昌治が崇禎十二年季冬の自序あり同書三卷の破邪集の將德璟が序に向與二西士一遊第知下其曆法與二天地球日圭星圭諸器一以爲上工不レ知二其有一天主之敎一也比讀二其書一第知下其竊二吾儒事一レ天之旨一以爲二天主一卽吾中國所レ奉上帝上不レ知下其以二漢哀帝時耶蘇一爲中天主上也其書可二百餘種一顚與レ佛抗云々按破邪集は黃貞が撰にて崇禎戊寅歲晉江八公將德璟が序ありそれを聖朝破邪集三卷に載たる也黃貞字天香閩霞漳人也同書四卷許大受が聖朝佐闢の三闢裂性篇に余曰儒言聖人有レ所レ不レ能天地有レ憾故可レ屬二之氣化一若爾敎言天主無レ所レ不レ能天地皆繇二彼造一而氣化復爲レ隔是天主無二全能一矣艾乃嘆曰子問甚深不レ得レ不レ言二其實一天主始生二一男一曰二亞當一一女曰二厄襪一爲二一切人類之始祖一舉二天地間之物一悉二其受用一而獨留二一菓樹一勅二二人一不レ得二垂涎一厄襪聽二一魔鬼一與二亞當一私嘗レ之天主怒甚乃著令曰自レ今以後凡從二二人一所レ生人類皆有二原罪一以レ有二原罪一故勅二後世子孫一男必曝レ日裂レ背粒食乃成女必拆レ腹剖レ腸生育乃就余曰易稱二一陰一陽一之謂レ道故乾成レ男而坤成レ女卽竺典小敎中稱二劫初光音天一爲二造世主一猶下吾儒稱二盤古一爲中三才首君之意上並言二肇レ人之形一不レ言二造レ人之性一也云々又問艾曰所謂魔鬼安昉耶艾曰天主初成二世界一隨造二三十六神一第一鉅神曰二輅齊弗兒一是爲二佛氏之祖一自謂其智與二天主一等天主怒而貶二入地獄一亦卽是今之閻羅王也云々余とは許大受也艾とは艾儒略也同書八卷羅川釋如純が天敎云天主者乃全能全智造二成天地萬物一爲二之主宰一者也厥初生二亞當陁襪一此爲二人類之祖一其靈性其形體本極備美備福後一犯違二聖命一恩澤悉墜病患隨至情欲錯出天路隔焉此祖宗之罪汚又遞傳二於人類一故人從二受孕一來卽皆體是汚染而凡後來罪惡無レ不レ繇二此根芽一云々○五雜組四卷に國朝西蕃天方默德那最遠蓋玄奘取レ經之地相傳佛國也其經有二三十六藏三千六百餘卷一其書有二篆草楷三法一今西洋諸國多用レ之又有二天主國一更在二佛國之西一其人通二文理儒雅一與二中國一無レ別有二利瑪竇者一自二其國一來經二佛國一而東四年方至二廣東界一其敎崇二奉天主一又猶二儒之孔子釋之釋迦一也其書有二天主實義一往々與二儒敎一互相發而於二佛老一切虛無苦空之說一皆深詆レ之是亦逃レ揚之類

耳琍瑪竇常言彼佛敎者竊二吾天主之敎一而加以二輪廻報應之說一以惑レ世者也吾敎一無レ所レ事只是欲二人爲一レ善而已善即登二天堂一惡則墮二地獄一永無二懺度一永無二輪廻一亦不レ須二面壁苦行離レ人出レ家日月所レ行莫レ非レ修レ善也余甚喜二其說一爲レ近二於儒一而勸レ世較爲二親切一不レ似下釋氏動以二恍惚支離之語一愚駭庸俗上也其天主像乃一女身形狀甚異若二古所レ稱人首龍身者一與レ人言恂々有レ禮詞辯扣レ之不レ竭異域中亦可レ謂有レ人也已後竟卒二於京師一其徒曰二龐廸峨一○神仙通鑑（四帙廿二册清江夏明陽宣史徐薇述）に後漢光武丙申云々是多羌人入寇馬援大破レ之遠西國人云去二中國一九萬七千里經二三載一始抵二西羌界一彼國初有二童貞瑪利亞（サンタマリヤ）一於二辛酉歲一（實漢元始元年）天神嘉偉阨爾恭奉二天主一特選レ爾爲レ母已而果孕降生母極喜敬褻以二常衣一置二於馬槽一群天神奏二樂於空一得後四十日母抱獻二於聖師罷德助一取名二耶蘇一方十二齡隨レ母往謁二聖殿一歸時相失母心痛苦三日夜後覓至二殿中一見二耶蘇上座一與二耆年博學之士一講二論天主事理一見レ母忻喜同歸孝敬事奉至二三十歲一辭二母師一遊二行如德亞一傳二敎淑人一所レ行聖蹟甚多其國中巨家及二在位一者極傲惡嫉二其衆歸附一謀欲レ殺レ之耶蘇十二徒中名二茄答斯一者素有二貪行一揣二知本國衆意一因以擺レ利夜深引レ衆捕縛送二於惡納斯一在二比剌多衙內一褫衣繫二石柱一便五千四百有奇全體剝傷默不レ置レ辨如二羔羊一惡黨以レ棘剌レ冠蘸二於其額一以二絳敝袍一披二其身一僞拜如レ王造一重大十字架一逼令二負荷一一路壓レ跌難レ堪被レ釘二手足於架上一渴以醋膽終レ命時天昏地震石相觸碎時年三十三死後三日復活身極光美先見レ母以解レ憂四十日後將欲レ升レ天面二諭宗徒百二十人一分二行天下訓誨一與領聖水洗罪入敎諭畢右聖群從隨踦二天國一後十日天神降臨迎レ母升擧立二於九品之上一爲二天地之母皇一世人之主保徒衆分巡化敎由二西洋古里一北至二默德那（ナナバト）國（即回回祖國）國王謨罕驀德生而神靈有二藏經一凡三十藏共三千六百卷悉言二天象一宗徒訪レ之其風土與レ所レ敎小異俗重殺非二同類一殺者不レ飮不レ食二犬豕一徒衆復往二叩馬援一乞挈入二中土一援曰爾敎惟言二天道一乃可餘不レ足レ法且留二於此一衆遂至二天方國（古筠中地一名西域）四時皆春居民樂レ業馬乳拌飯（用二回回曆一與二中國曆一節後差二三日一）』

（四十六）風流　剪燈新話の丹牡燈記に世上民間作二千万人風流話本一注風流風聲品流能檀二一世一謂二之風流一話本猶二話柄一也言說話之本也云々剪燈新話は山

陽翟佑宗吉が著也永樂年間刊行せり

（四十七）線香并孔雀羽立机上　同書の渭塘奇遇記に籠内畜一綠鸚鵡一見人能言軒下垂小木鶴二隻一嘲線香一焚之（線香如絲線之香）案上立一古銅瓶一插孔雀尾數莖一其傍設筆硯之類一皆極濟楚架上橫一碧玉簫一女所吹也壁上貼金花牋四幅一題詩于上云々これ文房陳布の形容也

（四十八）申上　同書に富貴發跡司志云々蒙活者甚衆昨縣神申上於本司（申下司行上司之文）呈於府君云々俗書に申上といふによく似たる字面也

（四十九）白榆　同書に鑑湖夜泛記云烏鵲群鳴白榆亂植注古樂府天上何所有歷々種白榆一注白榆星也

（五十）日本人三眼并自鳴鐘遠鏡　『聖朝破邪集三卷霞漳蘇及寓（魏浣夫）が邪毒實據に艾儒略等夷人也自萬曆間入我中國有識者窺其立心詭異行事變詐已跡其不軌而驅之矣今也胡爲乎復來哉其故可思矣復來而天下不惟莫能詳察其好併且前驅諸跡亦幾不得見夷輩喜而相告曰我西士有四眼日本人有三眼（兩到日本開教被逐中國人有兩眼呂宋人無一眼於是多籍技藝希投我聖天子之器使胡公卿士大夫相率詩詠之文讃之跡薦之至於禮樂兵刑錢穀營建諸大權皆讓能於夷欲夷司其事繇是夷毒日釀於其中而不可言夫復來而若此之久也天下竟無一人憂而維其變將奈何夫中邦而若此又安得謂有兩眼耶所賴端志士端人聞之心傷見之痛哭設破關之計起豪傑之章賢士大夫有與之闢焉嗟々中邦人士今也亦可以有兩眼矣云々今姑舉邪毒異慘一二親見聞者實而據之一此夷詐言九萬里夫詐遠者令人信其無異志而不虞彼之我吞耳不知此番機深謀巧到一國必壞一國皆即其國以攻其國歷吞已有三十餘（有鵝號云彼西洋隣近三十餘國奉行此教是也）遠者難稽其踪最近呂宋而米索果而三寶顏而鷄籠淡水俱皆殺其主奪其民只須數人便壓一國此其實實可據者歟一此夷藏奸爲市忠助銃令人喜其有徽功祈雨令人疑其有神術自鳴鐘自鳴琴遠鏡等物令人眩其奇巧且也金多善結禮深善誘惑一人轉得數人惑數人轉々數萬云々此又其實實可據者歟云々教中默置淫藥以婦女入教爲取信以點乳按秘爲飯依以互相換淫爲了姻緣示之邪術以信其心使死而不悔要之發誓以繩其口使密而不露至於擦孩童之口藥能制其必從令其見怪云々聞夷輩蓋甞喜謂中邦之大器可窺矣其安擬官民之毒法也數十里爲一保保外不計相通人授里票爲準票誌姓名形貌有越保而行者有行無里票者皆斬無赦里中設邪寺妻女騙入婬又嘗抽子以別母抽夫以離妻或抽本鄉倏居別國或抽此土倏往他邦東西變換南北移易蓋皆所以熟者生強者弱勇者不得相通智者不得相謀是奸夷所以御呂宋三寶顏米索果等之毒法也此又其實實可據者歟夫既有實實三可據吾不知幾時後如何塡毒如何愚弄嘗聞之友人曰彼夷凡所呑之國所統之人皆欲斷滅其智慧不許其學習必使人々爲木偶然後快於心彼種則學習機巧無所不至此奸夷不易世而王之毒計也故嘗嘆胡元無智術不百年而亡今入中華實欲滅儒道釋而焚盡文字典籍以木偶萬世特其謀未遂耳何時而無是念乎聞此令人心寒云々堂々中國大權交相口揚筆舉欲委狡番乘令是中邦人士不惟無兩眼而深愧日本也實且喪寸心而漸同呂宋歟念及此能不傷心痛哭嗚呼鼓合攻倘且高枕而臥是耶非耶哀哉云々按邪毒實據は著作の年月を記さず』

（五十一）曆法論　聖朝破邪集六卷に曆法論（岡芝城謝宮花介臣甫著）云今西夷所聳動中國驕語公卿者惟是曆法然中國之曆法自有一定之論不待西夷言之也我太祖詔劉國師上觀天文下察地理鑄量天尺制定天球星宿分野銅壺滴漏晝夜時刻消息度數分毫若天現在京都衆目可觀至于曆法考諸前代國史如漢武帝太初元年鄧平所造太初曆後劉歆衍之爲三統曆東漢章帝元和二年造四分曆獻帝建安十一年劉洪造乾象曆魏明帝景初元年楊偉造景初曆東晉孝武帝太元九年姜岌造太元曆劉宋文帝元嘉二十年何承天造元嘉曆孝武帝大明七年祖冲之造大明曆魏孝明正光二年李業興造正光曆東魏孝靜帝興和二年李業興造興和曆北齊文宣帝天保元年宋景業造天保曆後周武帝天和元年甄鸞造天和曆靜帝大象元年馮顯造大象曆隋高祖開皇四年張賓造開皇曆仁壽四年劉焯造皇極曆煬帝大業四年張冑元造大業曆唐高祖武德九年道士傅仁均以元起戊寅造戊寅曆高宗麟德元年李淳風以元起甲子造麟德曆中宗神龍元年南宮說造乙巳曆元宗開元十二年僧一行

造二大衍曆一肅宗寶應元年郭獻之造二五紀曆一德宗建中五年徐承嗣造二正元曆一穆宗長慶二年徐昂造二宣明曆一昭宗景福元年邊岡造二崇玄曆一五代周世宗顯德三年王朴造二欽天曆一宋太祖建隆三年王處訥造二應天曆一太宗太平興國六年吳昭素造二乾元曆一眞宗咸平四年史序造二儀天曆一仁宗天聖二年宋行古造二崇天曆一英宗治平元年周琮造二明天曆一神宗熙寧七年衛朴造二奉天曆一哲宗元祐七年皇居卿造二觀天曆一元符三年姚舜甫造二統元曆一徽宗崇寧二年姚舜輔又造二占天曆一金太宗天會五年楊級造二太明曆一南宋高宗紹興五年陳德一造二統元曆一孝宗乾道三年劉孝榮造二乾道曆一淳熙三年劉孝榮造二淳熙曆一金世宗大定二十年趙知微修二大明曆一宋光宗紹熙二年劉孝榮造二會元曆一五年楊忠輔又造二統元曆一元太祖十五年耶律楚材造二庚午曆一宋寧宗開禧三年鮑澣之造二開禧曆一理宗淳祐十年李德卿造二淳祐曆一寶祐元年譚玉造二會天曆一度宗咸熙七年陳鼎造二成天曆一元始祖至元十八年郭守敬等定二授時曆一我朝大統曆法莫レ不二參證一斟酌無レ移再考二授時一測二定閏應一頒二大統曆一行二于天下一萬世遵法復徵二回回曆官鄭阿里等十一人一至二京議曆一給廩有レ差後因二夷言天文一皆宗二耶律一荒唐悠謬洪武三十一年夏四月罷二回回欽天監一削二夷官之號一卽大明一統志有レ載上遣二使往二西域一經二天竺一至二天方國一其國人止知レ崇二奉一天一凡有二災福一望レ天祈禱依然如二中國之敬レ天也亦未レ聞レ有二天主釘二死十字架上一設レ教行レ世令二其從レ之者先拜一右手之傷一求二勇德一拜二左手之傷一求二忍德一右足之傷求二勤德一左足之傷求二畏德一又拜二脇旁之傷一求二愛德一夫既以爲二天主之德一且不レ能レ保二全一體之傷一又烏有德以及レ人乎夫既以爲二天主之尊一天神爲二之擁護一尙被二蓋法氏釘死一是天主天神皆不靈無用用物也焉能主二宰萬物一乎況曰服二咒水一畫二咒油一食レ酒爲レ食二天主之血一食レ麵爲レ食二天主之肉一有二一石一置二于案頭一謂是天主之骨人能服二聖水聖油一者雖二平生爲一レ惡天主恤二其一念歸依一前惡全赦夫天主耶蘇因二妖言一惑レ衆且被二法氏釘死一不レ能二自赦一焉能爲レ人赦乎此皆誕妄之極而謂レ可レ信乎然天方國亦有二回回曆一其地近邊中國氣數差二三度一固知回回曆中國存而不レ用也卽中國之曆法自二太初一以至二授時一莫レ不レ遵二古置閏一如二西夷之邪說一謂閏可レ棄是唐之欽天易之繫辭中國千古之帝王卿相神聖賢哲大識大見皆在二醜類下一也是耶非耶夫我明大統曆兼參二諸曆

之長一行二之萬世一無レ弊我太祖立二欽天監內臺一分レ科各習二一藝一專精二象占一無レ得二差移一至レ今而曰二推算有レ失不レ能レ如二劉國師之準一則當レ治二欽天監內臺糜祿之罪一也云々與清按に謝宮花が曆論いと疎漏にて誤おほし信用すべからず

(五十二)物老則爲レ怪名二之五酉一　古徵書廿五卷五丁

論語比考讖孫瑴注に搜神記云云々孔子曰吾聞物老則群精依レ之云々夫六畜之物及龜蛇魚鼈草木之屬久者神皆憑依能爲二妖怪一故謂二之五酉一五酉者五行之方皆有二其物一酉者老也物老則爲レ怪殺レ之則已云々

(五十三)五性并五禮　古徵書卅卷四丁　孝經鉤命訣に性者生之質若二木性一則仁金性則義火性則禮土性則信水性則智也云々また同書十八卷七丁　禮稽命徵注に五禮の始の事をいへり可レ考

(五十四)上元中元下元　古徵書廿一卷六丁左　樂動聲儀に作レ樂制レ禮時五音始二于上元一云々中元者人氣也氣以定二萬物一通二于四時一者也下元者地氣也爲レ始二萬物生育長養一蓋藏之主也云々孫瑴注に按前漢志云々又史記歷書云々上元中元之說不レ可二得聞一故索二二志一以參レ之或得二其概一云々按和漢名數に三元日の事くはし

(五十五)傷寒を疾ざる法　古徵書卅四八丁左　龍魚河圖に歲暮夕四更中取二二七豆子一二七麻子一家人頭髮少許合二麻豆一著二井中一咒二敕井一使下其家竟年不レ遭二傷寒一辟中五方疫鬼上

(五十六)無病の法　古徵書卅四九丁右　龍魚河圖に七月七日取二赤小豆一男呑二一七一女呑二二七一令二人畢歲無一レ病

(五十七)喜怒を著さず　『寬平御遺戒に能愼二喜怒一莫レ形二于色一云々澁柿の賴朝佐々木被レ下狀に一旦心はやりのまゝにしたる事の後悔ならぬ事はなし土佐房常陸房は僧の身ながらもうるさき剛の者なるによりてさて土佐も命をまぬらする上は左右なき事なれども今少はやり過てあぶなきかたの見えしにあはせて九郎判官に討たれにき常陸は心しづまりたるにて十郎藏人をもいみじくたばかりすましてからめ取て思のごとく首をも切て奉りき云々』

(五十八)禍は欲より起る　澁柿の明惠上人傳に世のみだるゝ根源は何よりおこるぞといへば只欲を本と

せり此欲心一切に變じて萬般の禍と成る也是天下の大病にあらずや是を療せんと思ひ給はゞ先此欲心を失ひ給へ天下おのづから勞せずして治るべしと云々

（五十九）願望成不成は德不德による　澁柿の文覺上人消息に德を行ひ善を好む人にとりて祈はかなふ事にて候不義に振舞家にはいかなる祈も不レ叶也不義とは無道に物の命を斷酒にめで財にふけり歡樂して明しくらすほどに人のなげきもしらず國の安からぬをかへりみざるを申事にて候德とも善とも申候は佛法をあがめ王法を重じ世をすくひたすけはぐゝむ心也あやしの賤男賤女百姓萬民にいたるまで萬のものに父母のごとくに賴まるゝ心ばへをもちたるを申候也かやうの心づかひはなくて放逸不思議なるがさすが我身をたもたばやとおもふ人僧侶にあつらへ諸道に仰て祈禱するを僧侶も可レ然仰蒙たりとて祈申すまして外法の諸道は云に不レ及たのもしげに申て祈たれども其旦那よからざればあへて感應なくかへて惡く候也さ候へば僧もおんやうしもしつらひたる心なくて色代せずありのまゝにさば〳〵と候はん者に御祈を仰付て御身のとがをも聞召ておしなほし〳〵てぞよく候べき云々

（六十）弓取筆取　澁柿の賴朝佐々木被レ下狀にすべて筆とりもまして弓取もむかひたる目計かゝりて故實なからん事は世にもはかなかるべき事也云々

（六十一）一人當千　澁柿の賴朝佐々木被レ下狀に一人當千と云事は一人して千人にはいかでか向べきなれどもはかりごとをよくし居ながら多勢をほろぼす事を名付たる也云々按一人當千の字面皇極紀二年に見ゆ北齊書唐邕傳李陵答二蘇武一書涅槃經抔に出たり

頭書　源平盛衰記廿ノ廿五丁ウ

（六十二）やりくはんばう　澁柿の賴朝佐々木被レ下狀にやり觀法にてむねと大事にすべき道をばさし置て無益に多の御領をふさげてはなにかせん云々按にやりくわんばうは今俗にやりばなしといふにおなじ遣觀放などの字義にや

（六十三）他人のよきまねより親のわろきまね　竹馬抄に他人のよきまねをせんよりはわろきおやのまねをすべき也さてこそ家の風をもつたへその人の跡ともいはるべけれ云々

（六十四）正直のかうべに神やどる　竹馬抄に伊勢大神宮八幡大井北野天神も心すなほにいさぎよき人のかうべにやどらせ給ふなるべし云々八幡託宣にも見ゆ

（六十五）じんじやうなる人　今俗やさしくさゝやかなる人をじんじやうものといへりこれは大ならず常躰の人といふより訛りたる詞也竹馬抄に尋常しくなりて人なみに立まじはるまでを詮とすべしと見ゆ

（六十六）人はその得手を知てつかふべし　竹馬抄に智惠も侍り心も賢き人は人をつかふに見え侍る也人ごとのならひにてわが心によしとおもふ人を萬の事に用て文道に矢取をつかひ言葉たらぬ人を使節にし侍り心とるべき所に鈍（ドン）なる人を用などするほどに其ちがひぬる時なか〳〵人の一期をうしなふことの侍る也その道にしたしからんを見て用べき也曲れるは輪につくり直なるは轅（ナガエ）にせんに徒（イタヅラ）なる人は侍まじき也たとひわが心にちがふ人なりとも物によりて必用べきか人をにくしとて我身の爲に用をかき侍りては何のとくかあらん云々按に垂拱して天下治るも人をしりてつかふによれり楠が哭男の頬古きためしいとおほかり

（六十七）無能人の年寄　竹馬抄に無能ならん人のとしのよるやうを思ひやるにたゞ狐狸の年經ぬるにてこそあらんずれ云々

（六十八）結構人物の用に立ず　今世心のよきはたらきなき人を結構人（ケッカウジン）といへり結構とは「よき」といふ心也これは自身の爲に結構なるにはあらず他人の爲に結構なるよしにて他よりいひ出し詞也古物語にうるはしき人といへるこれ也竹馬抄によきといはるゝはたゞおだしくて三歳の子のやうなるをいふとてはらのたつをもたてずうらむべき事なげくべき事又人にも必おもひしらするふしなどを過しなどして此人はともかくも人のまゝなるよと人にしられたるは中々人の爲もわろくわが爲も失の侍べき也心をば閑にもちてしかもとがむべきふし云べき事をばいひて無明無心の人と思はれぬはよき也たかき世には人ごとによかりければさ樣の人をよしともあしとも申べし此比は或はめたれを見或はわゝく心のみ侍る程に一すぢにやはらかにうるはしき人をば人の賤むる也無心の道人などゝて佛法者抔の目も心もなきやうに見えて三歲の孫の如くなど云は別の事也又愚癡の人はも

のゝ惡もわきまへず只默々としたるはよき人と云べきにあらず是程の事はよく〳〵思ひわくべき也云々

(六十九)目たれを見幷わゝく心　竹馬抄に或は目たれを見或はわゝく心のみ侍る程に一すぢにやはらかにうるはしき人をば人のいやしむる也云々按に目たれを見とは人の目つきを見て心を用るよし也わゝく心は今俗にいふワウチャク心也またワヤク者などもいへり狂惑(ワワク)の義なるべし頭書明曼傳記下打向フマヽニ賞罰行ヒ給ハヾ彌人ノ心紆(ワ)ヲヽク(ニナリテ云々)

(七十)ふせてと云詞　竹馬抄に初一念をば心をしづめて理非をわきまへふせて我道理ならん事ははらもたつべき也云々按にわきまへふせてはわきまへつめてといふにおなじいひふせる攻ふせるなど同言にて伏(フク)さしむる心より轉じたる詞也

(七十一)ぬけ足　安元御賀記詳書類從五百廿九卷十一丁左に我もとへ鞠くればぬけあしをふみてにげられき云々今俗ぬき足といへり加賀見山といへる淨瑠璃本にぬきあしさし足とありおとせぬやうに脫(ヌキアシ)足する也

(七十二)瓜蔓に茄子はならず　『佐渡奇談中卷總源寺の住僧道明が事の條に總源寺の道明和尚は道德堅固の沙門也其行狀實に禪家の眞面目を得たりともいふべし或士來りて物語の序に因果報應の事を尋しに必其事ありといふ彼士問けるは往日安岡成政に語られしは因果報應なしとのたまへりときく今我に向てありとの給ふはいかにぞや道明笑て曰成政にはなし和殿にはあり彼士訝りて其故を再問に和殿は血氣の勇を賴て罪人の首を斬事を好むいかでか因果報應なからん彼士いよ〳〵疑惑して問らく罪科を決斷するは其職あり我は好て首を斬るのみなれば其報應の事にあづからんや道明一拂して曰和殿大悟の時いたれり試にあの庭上の竹を振動し見よ彼士板緣より飛下りて兩三竿の竹をふりうごかすに折ふし雨後にて末葉の露ばら〳〵と惣身にかゝりぬ道明再拂して曰呵々彼士復座して事由を問に道明曰竹を動せといひしは貧道也其露貧道にかゝらずして和殿が衣にかかれるはいかに彼士頓悟してそれより首斬(ル)わざをふつにやめたりとぞ又其比留守居職辻八郎左衞門守(モリ)遊(ユキ)といふもの數百言の書をよせて交を結ばん事をこへるに道明いかゞ思ひけんかへりごとに「瓜づるになすびはならず人は人牛は牛づれ馬は馬づれ」とよみてとり合ざりしとなん云々　佐渡奇談三卷天保中の撰也　按に伊達日記詳書類從本上卷二丁左に大內長門ト申者備前好(ヨシミ)身候節ニ米澤へ使ニ參御父子共ニ御存知之者ニ候後加齋申候此者休雪意休ニ會申瓜ノツルニハ瓜ガナリ夕顏ノツルニハ夕顏ガナリ申候間深事ハ有間敷候政宗大內ヲ御退治ハ成間敷候由申候云々とも見ゆ

(七十三)おくに歌舞伎　出雲みこ國といへる婬婦が都にて舞はじめておくにかぶきといふよしは羅山文集近世世事談綺などをはじめ所見おほかり佐渡奇談上卷國女ガ事條に慶長の初京伏見の間にお國といふ歌舞妓あり佐渡の生れにて父は本間山城守の一族十郎といふもの也母遠藤氏は繼母にて十郎が死後お國八九歲の時上方の人買に此子をぞ賣たりける此子の父十郎牢浪の後に生れ貧しき中にそだちけれど眉目容貌清らかに才智秀ければ人買が手より立去て伏見の里に住居し右の白拍子の流を汲て或はうたひ或はまひ弟子數多引つれて後には高貴の後家にも召れけるとなん越前黃門秀康卿伏見の御舘にて御見物あり彼舞の中に水晶の念珠を襟にかけ舞たるを御覽じていかゞおぼしけん御具足の箱より珊瑚の念珠を取出給ひ仰ありけるは天下に幾千万の女かあらん中に一人の女と呼るゝは汝一人也感稱の餘りに是をとらする也我は天下に一人となる事叶はず彼女にさへ劣りたるは無念也とて御落涙有しとぞ云々

(七十四)えりさす幷ふしづけ　曾丹集に「さゝきつにすかきさほせり年ことにえりさす民かしわさなるらん」○言塵集○倭漢三才圖會廿三卷漁獵具部に罾音森摻同滲同和名抄之都介簍音戶俗云惠利云々ふしづけは古歌におほくよみたり曾我物語にも見ゆ尙閱て知べし

(七十五)魚毒の解藥河豚(フグ)毒の解藥　魚毒にあたり又は河豚の毒にあたれるなど黑砂糖を多く服すれば愈(イユ)白砂糖にては功なし黑砂糖を白湯にて多く服すればいかなる魚毒にても解さゃるはなし薩摩國にては此方ありて更に河豚を恐るゝ事なしといへり○簷曝雜記六卷廿(カ)丁に食二河豚一中レ毒者陶九成錄方或龍腦浸水或至寶丹或橄欖皆可レ解又槐花炒微黃與二乾胭脂一各等分搗レ粉水調灌卽效云々

(七十六)霧に醉るを治方毒虫の螫たるを治方　丹波わたりにては霧にあたりて死するものおほしそれに

は藥燕脂（クスリベニ）とてべにの下品なるを多くのめば解すといへり平常のべににてもおなじ事なり又古生姜（ヒネシヤウガ）の汁を白木綿にいく度もしめし乾付（カワカシツケ）て貯持毒虫の螫たるをそれにて拭へば忽に毒解して憂なし

松屋筆記卷之八十六

華頂殿侍倭學士平與清稿

（一）廷寄　清人趙翼が簷曝雜記一卷左三丁　廷寄條に軍機處有二廷寄一諭旨凡機事慮二漏泄一不レ便發抄者則軍機大臣面承後撰擬進呈發出即封入二紙函一用辯理軍機處銀印鈐レ之交二兵部加封一發二驛馳遞一其遲速皆由二軍機司員判明一於二函外一曰二馬上飛遞一者不レ過二日行三百里一有二緊急一則另判二日行里數一或四五百里或六百里并有二六百里加快者一即此一事已爲二前代所一未レ有機事必須發而後由部行文則已傳二擺人口一且驛遞遲緩探レ事者可レ窺二捷足先驛一遞而到レ自レ有二廷寄之例一始密且速矣此例自二雍正年間一始其格式乃張文和所二奏定一也云々按此法實に機密を告るに便也簷曝雜記六卷陽湖趙翼字雲崧が作也歐北全集中に收む

（二）曲馬　燈火を數百人にもたしめて字形の觀をなす　同書一卷烟火條に上元夕西廠舞燈放烟火最盛清晨先二於圓明一園宮門列二烟火數十架一藥線徐引燃成界畫欄杆五色每レ架將完中復燒二出寶塔樓閣之類一并有レ

籠鴿及喜鵲數十在二盒中一乘レ火飛出者ヒ未申之交駕至二西廠一先有二八旗騙馬諸戲一或一足立二鞍韉一而馳者或兩足立二馬背一而馳者或板二馬鞍一步行而並レ馬馳者或兩人對レ面馳來各有二馬上一騰レ身互換者或甲騰出乙有二馬上一戴二甲於首一而馳者曲盡二馬上之奇一日既夕則樓前舞燈者三千人列レ隊焉口唱二太平歌一各執二綵燈一循環進止各依二其綴兆一一轉旋則三千人排成二一太字一再轉成二平字一以レ次作二萬歲字一又以次合二成太平萬歲字一所謂太平萬歲字當中也舞罷則烟火發其聲如二雷霆一火光燭二半空一但見二千萬紅魚一奮迅跳二躍於雲海內一極二天下之奇觀一矣按に馬戲は今の曲馬也舞燈者成二字形一はおのれひとゝせ箱根宮の下に湯あみせしをり江戸深川の鼈甲屋金六といふもの土人五百人を雇ひおの〳〵松明を持たしめて向の山にのぼり大字の形をなして此方の湯客にほこらんとせし事ありされど山嶮岨にて心のまゝにのぼること能はず金六も計たがひ觀者もほいなくてやみにし事有頭書曲馬三國志魏明帝紀廿丁ウ注に魏略を引テ弄馬例騎トアリ

（三）蝦夷錦　同書一卷十四丁オ　蒙古詐馬戲條に秋八月萬壽節行宮大戲十日蒙古王公皆入レ宴兼賜二蟒緞諸物一云々この蟒緞は蝦夷錦なるべし

（四）落葉松アカ松　同書一卷十五丁ウ　木蘭物產條に木蘭有二熱河東北三百餘里蒙古地一云々有二落葉松一蓋氣益寒則松葉亦落矣云々按松洛松は日光の赤松といへるものなり一名都賀（ツガ）といふ万葉に襧木（ツガノキ）とよめるものにや

（五）喇嘛大和尚　同書一の卷十六丁ウ　蒙古尊二奉喇嘛一條に蒙古俗最重二喇嘛一卽僧也非二特近邊諸部落一也凡喀爾喀準噶爾及土魯番青海西番西藏等處無レ不二虔奉恐一後喇嘛之首號二胡土克圖一猶下內地所ヒ稱二大和尚一也尤以二西藏之達賴喇嘛一爲二大宗一謂二之活佛一相傳即如來後身世々輪廻者將レ死則自言二托生處一其弟子如レ期往奉以歸謂二之瑚畢勒罕一至二十六歲一始放參則又爲二達賴喇嘛一其實僞也喇嘛死弟子號二諦巴一者訪二某家生子一輒托二言喇嘛後身一而迎以歸幼卽教以二經典一至二放參後一有二來謁一者諦巴先爲述二其家世一令下喇嘛見ヒ之一二語道レ著輒共驚爲二前喇嘛轉世一也故崇信尤甚然西藏路遠西北各部不レ能二往參一則各有二胡土克圖一掌二佛教一於二國中大一者其王亦執レ禮惟謹小亦各嚴重於二一方一每二胡土克圖出行一無レ不レ膜二拜道旁一以二金

寶ニ戴ニ於首一獻レ之但得ニ其一摩頂一便以爲レ有レ福歡喜無量並不ニ必胡土克圖一也即凡爲ニ喇嘛一者諸番亦無下不レ尊ニ奉之一所レ至讓ニ宮廬一與居宰ニ羊馬一奉ニ酬酪一夜則妻妾子女惟所レ欲謂ニ之供養一惟恐不レ得レ當其俗然也雖レ愚而可レ憫然千百年來習尙如レ是按大和尙を蒙古にては喇嘛といへる也同書六卷十七丁ウ 大和尙條に石勒稱ニ天王一奉ニ佛圖澄一號ニ大和尙一今沙門出世領衆者例稱ニ大和尙一自レ澄始云

（六）茶 同書一の卷廿一丁オ 茶葉大黃條に中國隨レ地產レ茶無レ足レ異也而西北游牧諸部則恃以爲レ命其所レ食羶酪甚肥膩非レ此無ニ以清ニ滌衞一也自ニ前明一已設ニ茶馬御史一以レ茶易レ馬外番多款塞我朝尤以レ是爲ニ撫馭之資一喀爾喀及蒙古回部無レ不ニ仰給一焉太西洋距ニ中國一十萬里其蕃舶來所レ需中國之物亦惟茶是急滿船載歸則其用且極ニ於西海以外一矣

（七）縄伎（ワナワタリ） 同書一の卷廿一丁ウ 回人縄伎條に回人有ニ能縄伎一者與ニ內地一不レ同內地走索之法椓ニ兩竿於地一以レ索平繫ニ於竿一而人往ニ來其上一耳回人則立ニ一木高數丈者一其顚斜繫ニ長綆一屬ニ於地一回人手橫ニ一木一取ニ其兩頭一輕重相等不レ致レ欹レ側則步レ綆而上直至ニ木之顚一並蹲ニ一足一而僅以ニ一足一踏ニ於綆口一唱レ歌良久始下眞絕技也上每出ニ行武備院一嘗以ニ其人一奏伎後偶有ニ一人一墜而下者上憫レ之自レ此不レ得レ設云々これつなわたりのかるわざ也秇苑日涉に見えたれば補べし

（八）自鳴鐘時辰表 同書二の卷十五丁オ 鐘表條に自鳴鐘時辰表皆來レ自ニ西洋一鐘能按レ時自鳴表則有レ針隨ニ晷刻一指ニ十二時一皆絕技也今欽天監中占星及定憲書多用ニ西洋人一蓋其推算比ニ中國舊法一較密云洪荒以來在ニ嬀璣齊七政一幾經神聖始洩ニ天地之秘一西洋遠在ニ十萬里外一乃其法更勝可レ知天地之大到處有ニ開創之聖人一固不ニ僅義軒巢燧已一也鐘表亦須ニ常修理一否則其中金線或有ニ緩急一輒少差故朝臣之有ニ鐘表一者轉惧期會而不レ惧者皆無ニ鐘表一者也傅文忠公家所在有ニ鐘表一甚至ニ傔從一無レ不ニ各懸ニ一表於身一可ニ互相印證一宜其不レ爽矣一日御門之期公表尙未レ及ニ時刻一方從容入レ直而上已久坐乃惶悚無レ地叩ニ首階下一驚懼不レ安者累日 頭書 桂川甫周が魯西亞志分界の條に「ペテルスベルグベートロホリヌ」インゲルマンランドの大縣云々「シントベートルバウルス」といふ寺あり實塔を建立すこれ意太里亞（イタリヤ）國の眞匠「テレシニ」なるものゝ造りし也屋瓦は皆金貼なり塔上に自鳴鐘（オルガン）をかけ每時に自ら鳴て時を報じ又自ら音響を奏す是和蘭の都アムステルダムにて造れる品也云々 耀耕錄廿一ノ三丁オ

（九）千里鏡（トホノガネ） 同書二の卷十五丁ウ 西洋千里鏡及樂器の條に天主堂在ニ宣武門內一欽天監正西洋人劉松齡高愼思毬一牀地平日晷遠鏡各一具一云々

（十）黎園色藝 同書二卷十六丁ウ 黎園（シハヰ）色藝條に京師黎京師黎園中有ニ色藝者一士大夫往々與相狎庚午辛未間慶成班有ニ方俊官一顚韶靚爲ニ吾鄉莊本淳舍人一所レ昵本淳旋得ニ大魁一後寶和班有ニ李桂官者一亦波峭可レ喜畢秋帆舍人狎レ之亦得ニ修撰一故方李皆有ニ狀元夫人之目一余皆識レ之二人故不レ俗亦不レ徒以ニ色藝一稱ニ也本淳歿後方爲レ之服ニ期年之喪一而秋帆未レ第時顚窘李且時周ニ其乏一以レ是二人皆有レ聲ニ縉紳間一後李來謁ニ余廣州一已半老矣余嘗作ニ李郎曲一贈レ之近年聞下有ニ蜀人魏三兒者一尤擅ニ名所レ至無レ不ニ爲レ之靡一王公大人俱物色恐後余已出レ京不レ及レ見歲戊申余至ニ楊州一魏三者忽有ニ江鶴亭家一酒間呼レ之登レ塲年已將ニ四十一不ニ甚都麗一惟演戲能隨レ事自出ニ新意一不ニ專用ニ舊本一蓋其靈慧較レ勝云云々按色藝は今の役者かげまの類にて大鼓持をもするもの男藝者といふべきもの也

（十一）偷兒（アラカセギスリ）小李 同書二の卷十七丁オ 京師偷拐之技條に都門繁會之地偷兒拐子有下非ニ意計所一及者上吾鄉董某偶人戲館占レ席以待レ客橫ニ二千錢於案一忽衣冠者三人

華錄一則湯若望當ニ我朝定レ鼎之初一即進ニ所レ製渾天星

自レ外來中一人若二與レ董素相識者一遽向揖逢答揖揖甫下而錢爲二其人之同伴者一撮去掛二於肩一揖畢問二姓氏一其人故驚愕作二誤認狀一深抱不レ安董回坐而案上之錢已失撮レ錢者尙立二於旁一反咎レ之曰戲館中有レ錢豈可レ橫二於案一如二我之掛一於肩一斯可耳實則掛レ肩之錢即其錢也董熟視竟不二敢言一又一少年以レ銀易二錢於市一方諸レ價忽一老者從レ後擊而仆レ之且罵曰父窮至此兒有レ銀乃私易レ錢不孝孰甚遂奪レ銀去旁觀者謂是父責レ子也少年悶絕良久甦云吾安得レ有レ父也而銀已去不レ可レ追矣又有レ藏二利刀一雜二稠人中一剪二取腰間雜佩一或至レ割二衣襟一幅一去ゐ混號謂二之小李一被レ剪者覺而獲レ之雖レ加二毆辱一弗レ怨或旁人指破則必報矣有二女郎一坐二香車一一書生行二其旁一兩美相顧頗有レ情小李者伺二書生後一將レ下レ手書生不レ知也方回顧女郎不二便語一但以二口頰一隱示若レ有レ人伺二於後一者ゟ書生覺而斥レ之小李遂去未レ幾車轉二曲巷一女郎口忽爲二小刀一劃破

（十二）孤祟　同書二卷十八丁ゟ孤祟條に京都多孤祟每估二高樓空屋一然不レ爲レ害故皆稱爲二狐仙一余嘗客二尹文端第一其廳事後即大樓樓下眷屬所レ居樓之上久爲二狐宅一人不レ處也嘗與二公子慶玉一同立二院中一日尙未レ暮忽有二泥丸如レ彈者一拋レ屋而下十數丸余拾二其一一仰投レ之建瓴之屋宜二即拋下一矣乃若有レ接二於空中一者ゟ不二復下一亦一奇也余僦二屋醋張衙衚一其屋已數月無二人居一初入之夕睡既熟忽夢魘若二有レ物壓二於胸腹者一力爭良久始得レ脫時月明如レ晝見有レ物如二黑犬者一從二牕櫺中一出明日視二牕紙一絕無二穿破處一先母命レ余夕以二雞卵一杯酒一設二於案一默祝焉詰朝卵酒俱如レ故而其物不二復至一

（十三）權歌之會　万葉集に筑波の權歌會の歌あり簷噯雜記三の卷七丁左　邊郡風俗條に粵西土民及滇黔苗猓風俗大概皆淳樸惟男女之事不二甚有ゟ別每二春月一趁レ墟唱歌男女各坐二一邊一其歌皆男女相悅之詞其不レ合者亦有二歌拒一之如二倘愛我我不愛儞之類一若兩相悅則歌畢輒携レ手就二酒棚一並坐而飮彼是各贈物以定レ情訂レ期相會甚有ゟ酒後即潛入二山洞中一相呢者ゟ其視二野田草露之事一不レ過レ如ゟ內地人看二戲賭錢一之類ゟ非二異事一也當二墟場一唱歌時諸婦女雜坐凡遊客素不二相識一者皆可二與レ之嘲弄一甚而相偎抱亦所レ不レ禁幷有二夫妻一同在二墟場一夫見二其妻爲レ人所ゟ調笑不レ嗔而反喜者謂妻美能使二人悅一也否則或歸而相詬焉凡男女私相結

謂二之拜一同年一又謂二之倣一後生一多在ゟ未二嫁娶一以前ゟ謂ゟ嫁娶生レ子則須レ作レ苦レ成レ家不ゟ復可ゐ爲二此游戲一是以其俗成婚雖レ早然初婚時夫妻例不二同宿一婚夕其女即拜二一鄰嫗一爲二乾娘一與レ之同寢三日內爲二翁姑一挑水數擔即歸二母家一其後雖二亦時至一夫家一仍不二同寢一恐生レ子則不レ能レ倣二後生一也大抵念四五歲以前皆係ゟ倣二後世一之時ゟ女既出拜レ男同年男亦出拜レ女同年至二念四五以後一則嬉游之性已退願成二家室一於レ是夫妻始同處以レ故恩意多不レ篤偶因二反目一輒至二離異一皆由二於年少一不二即成ゟ婚之故也余在二鎭安一欲レ革二此俗一下レ令凡婚者不レ許二異寢一鎭民聞レ之皆笑以爲此事非二太守所一當與聞一也近城之民頗有二遵者一遠鄉仍復如レ故去

（十四）黑坊（カロンバウ）黑鬼子白鬼子崑崙奴紅毛　簷曝雜記四の卷五丁　諸番條に廣東爲海外諸番所ゟ聚有二白番黑番一粵人呼爲二白鬼子黑鬼子一白者面徵紅而眉髮皆白雖二少年一亦皓如二霜雪一黑者眉髮既黑而亦點但比二眉髮一稍淺如二淡墨色一耳白爲レ主黑爲レ奴生而貴淺自判黑奴性最慤且有レ力能入レ水取レ物其主使二之下ゟ海雖二鮫蛇一弗レ避也古所謂摩訶及黑崑崙蓋即此種某家買二一黑奴一配以二粵婢一生レ子矣或戲レ之曰爾黑鬼生レ兒當レ黑今兒白非二爾生一也黑奴果疑以レ刀斫二兒脛一死而脛骨反純黑於レ是大慟始知二骨屬ゟ父而肌肉則母體也」又有二紅夷一種一面白而眉髮皆赤故謂二之紅毛夷一其國乃荷蘭云香山縣之澳門久爲二番夷所一僦居一我朝設二一同知一鎭レ之諸番家於二澳而以レ船販レ海爲レ業女工最精然不二肯出嫁一人惟許レ作二贅婿（イリムコ）一香山人類二能番語一有ゟ貪二其利一者往々入贅焉

（十五）揣骨聽聲（コツチヤウセイ）の法　同書二の卷十二丁ウ　揣骨史瞎子條に術家又有二揣骨聽聲之法一多瞽者爲レ之北史高歡未レ遇時與二司馬子如等一逐二赤兎一遇二盲嫗一自言善暗レ相因徧捫二諸人一言皆貴而俱由歡齊文宣帝試二皇甫玉相術一以二帛巾一抹二其目一使レ歷二摸諸貴人一無レ不レ驗齊文襄時有二吳士雙盲一妙二於聽聲一文襄令二劉桃枝趙道德等一列試レ之言皆中五代史李守貞爲二河中節度使一有二術者一善聽二人聲一以知二吉凶一守貞出二其家人一使レ聽レ之術者聞二其子婦符氏聲一驚曰此天下母也守貞益自負曰吾婦猶爲二天下母一吾取二天下一復何疑哉遂反後守貞敗符氏爲二周世宗繼室一果爲二皇后一此揣骨聽聲之見二於史傳一者也近時亦尙有ゟ精二其術一者ゟ雍正年間浙東有二史

瞎子者ニ遇ニ男子一則揣骨女子則聽聲言休咎奇中徐文定公元夢撫浙時其孫舒文襄赫德相國方卯角而休寧汪文端公由敎以ニ諸生一爲ニ之師一文定令ニ史相師弟二人一史曰皆大位也時舒以ニ世家貴公子一其顯達固意中事文端則寒諸生念レ不レ到レ此謂史特因レ弟以レ及レ師聊作ニ周旋語一耳是夕史獨偃偃到ニ書塾一謂ニ文端一曰君勉レ之將來官職聲名在ニ主人之上一文端益惶恐不ニ敢當一史曰非ニ譸語一也君寒士談レ君何所レ利正以ニ我之命一某年當レ有レ厄某年當レ得レ脫計レ君是時已登ニ顯仕一我之厄或由レ君而解故鄭重相托レ君是時幸勿レ忘今日言當力爲レ極レ之已而或進ニ史於世宗一憲皇帝奏對後忽奉レ旨發ニ遼左一爲レ民至ニ今上御極之十年一詔軍流以下皆減等發落時文端公果爲ニ刑部尚書一乃撿ニ史舊案則一係ニ特旨一發往不レ載ニ犯罪之由一同列多難レ之文端以レ其罪不ニ過ニ軍流一正與ニ恩詔一相符乃奏釋焉既入レ京仍客ニ於文端第一則益韜晦不ニ肯言ニ禍福一矣歲庚午文端長子承沆方應レ舉文端夫人望レ之甚切請レ史決レ之史曰即當レ得ニ六品官一六品者惟翰林修撰及部事主時文端方直禁近弟子若登ニ科第一必不レ至ニ分部一其爲ニ狀元官修撰一無レ疑也母夫人方竊喜無レ何文端爲ニ是科主考官一承沆廻避不レ得レ試共以ニ史言一爲レ安矣其冬特旨賜ニ文端蔭一子一承沆果得ニ主事官正六品一其奇中如レ此余以ニ是歲一客ニ文端第一故知レ之甚悉其他奇驗尙多不レ勝ニ縷述一也

頭書 夢溪筆談十七ノ一丁ウ

（十六）小憩 ヲヤスミ 簷曝雜記四卷九丁カ 溷黔民俗條に余自レ溷歸一日小ニ憩道旁一云々この小憩の字面はコヤスミと訓べし

（十七）薪土すくも キヾイツチ 同書四卷十九丁ウ 河底古木灰條に歲丙午江南大旱余鄉河港皆赤裂百餘日居民多赴ニ烟城濠中一掘ニ黑泥一和レ麩作レ餅相傳此城本沈法興聚糧處年久化爲レ泥也鄉人以各河底皆有ニ黑泥一亦掘レ之至ニ五六尺許一輒得レ泥如ニ石炭一者然不レ可レ食以作ニ薪火一乃終日不レ熄其質非レ土非レ石有ニ大至ニ數圍一須用ニ斧劈一者有レ碎疊成レ塊縫層層可レ揭者細驗レ之則大者本巨木層疊者則木葉所レ積年久爛成レ塊也江南人惟沿レ村有レ樹河港之在レ野者罕レ所レ植間有レ之亦必取作レ器小則伐爲レ薪其就肯砍而棄ニ諸河一意必洪荒以來兩岸本多樹隨レ山刊レ木時始伐而投レ之歷ニ千萬年一成レ此耳是歲數百里內河港俱掘得滓湖大數十里湖底亦有レ之余弟汝霖買ニ數百斤一猶存云々按に越後に薪土あり富

士山に神代炭あり吉田邊の人とりて炭にかへ大に其利を得といへり 頭書 木曾路記下卷七ノ十八丁左に愛智川より武者の宿の間に有觀音寺山のふもと云々 木曾の森は愛智川と武

（十八）假山 カンクウ 簷曝雜記五卷二丁カ に古來搆ニ園林一者多壘レ石爲ニ嵌空 カンクウ 險峭之勢一自ニ崇禎時一有ニ張南垣一創レ意爲ニ假山一以營ニ邱北宛 ハイノカタヘノアナ 一大癡黃鶴畫法爲ニ之峯壑湍瀨曲折平遠一巧奪ニ化工一南垣死其子然號陶菴者繼レ之今京師瀛臺玉泉暢春苑皆其所ニ布置一也揚惠之變レ畫而爲レ塑此更爲ニ平遠山水一尤奇矣云々按に假山の名全唐詩衞嶽沙門齊巳僧正集六に假山の詩及序あり夢溪筆談にも見えて唐宋よりきこえたりこゝに明張南垣が創意のよしいへるは其つくりざまに新意を搆出せしなるべし 頭書 齊集四ノ五丁ウ木假山の詩あり梅花無盡藏六ノ十二丁ウ同別本一ノ六十四丁ウ

（十九）物各有レ主 同書五卷二丁カ に寶誌公擴本在ニ鐘山一而今雞鳴山有ニ誌公肉遺像者一明太祖將下以ニ鍾山一爲中陵幷欲上取ニ靈谷寺一以擴ニ兆域一禦ニ於誌公一得ニ籤詩一曰「世間萬物各有レ主一釐一毫莫ニ亂取一英雄豪傑本天生也須ニ步步尋一規矩一後終以ニ鍾山一爲レ陵啓誌ニ公塞一用ニ兩大缸一合成誌公端ニ坐其中一指甲已長繞レ腰三匝遂遷ニ之於靈谷寺一而八功德水竟帶去至レ今尙在ニ靈谷寺一也後太祖常召ニ太常一不レ至內侍曰遣レ往ニ靈谷祭一誌公去矣乃命即ニ雞鳴山塑像一祭レ之 揚懿明 畏記 云々按に本朝靈山嶽靈池沼靈淵河の類奴志と稱するものありてこれを犯せば必ず祟あり君子謹て犯すことなかれ

（二十）豆腐詩 同五卷四丁ヌ に豆腐詩「傳得淮南術最佳皮膚脫晝見ニ精華一一輪磨上流ニ瓊液一百沸湯中滾ニ雪花一瓦缶浸來蟾有レ影金刀割處玉無レ瑕个中滋味誰得レ知只合僧家與ニ道家一豆腐詩 云々按豆腐の事秘苑日涉擁書漫筆などに見ゆ

（廿一）木より火出る 檜相摩而燃ルよしは淮南子に見ゆ銀杏樹また火を出す事あり簷曝雜記六卷十五丁ウ 銀杏樹條に嘉慶十四年三月初九日常州府學大銀杏樹一株腹中忽發レ火從ニ隙處一迸出青綠色有ニ四五蛇一冒レ火出初十日辰刻方熄樹仍無レ傷葱鬱如レ故按李戒菴漫筆明嘉靖元年正月二十一日常州府學銀杏樹西南一枝忽火發竅中燄燄水不レ能レ灌至ニ二十二日一方止樹亦無レ害未レ知ニ今被レ火之樹一即嘉靖中被レ火之樹耶或謂此乃文明之兆嘉靖元年府學有ニ華鎗中解元一今歲非ニ會試之年一俟レ日後驗レ之

（廿二）瘧の治方　簷曝雜記六の卷廿丁に用二何首烏一貧壽天洗眼日期開明於左正月初八四月初八七月初八十月初十二月初十五月初五八月初五十一月初十三月初五六月初七九月初三十二月初八若閏月望日洗亦可若有二善信君子一抄二寫此方一傳二出世一者功德無量浙東句章童廣凌刋送また廿三丁桑葉洗眼方條に立冬日採二桑葉一百二十斤一懸二風處一令二自乾一每用二十片一水一碗於二沙罐一內煎至二八分一去レ渣溫洗日齋戒忌二葷酒一

（廿三）求子の方　同六卷廿丁に魏象樞初無レ子或教以二空心日服一建蓮子一遂生レ子李奉倩有二子十一人一云亦服二此方一有レ驗云々又廿三丁云求レ子之法婦人服二四子湯一男子服二四物湯一候二月經一淨後入レ房左手足用レ力精過後令下女人亦側二左身一而睡上蓋男血女氣常各不レ足故各補二其所一虧也云々按に女子隱門中子宮あり子宮大きく堅くして能莖頭を受るものは男淫潛入して必懷妊す若子宮弱く柔かにして莖頭を受る事能はず萎横たはるものは男淫潛入せずして懷妊の期なし子を求んとするものは必妻妾の子宮を撿して其思慮をなすべし妙藥妙炙或は湯治など實は其かひなしと知べし子宮堅剛廣大にして子なき女は湯藥針炙共に施して其功有べし

（廿四）眼療方　簷曝雜記六卷廿二丁神效洗眼方條に昔楊州有二一趙知府一年九十有餘患二眼疾一双目不明二十年矣後遇二陳八相一普長方用桑白皮不レ拘二多少一煅過存レ性將二水一碗一煎至二九分一澄清洗レ眼不レ至二一年一內如二童兒一一般長方不レ可二隱藏一在家若不レ傳二出家一貧壽天洗眼日期開明於左正月初八四月初八七月初八十月初十二月初十五月初五八月初五十一月初十三月初五六月初七九月初三十二月初八若閏月望日洗亦可若有二善信君子一抄二寫此方一傳二出世一者功德無量浙東句章童廣凌刋送また廿三丁桑葉洗眼方條に立冬日採二桑葉一百二十斤一懸二風處一令二自乾一每用二十片一水一碗於二沙罐一內煎至二八分一去レ渣溫洗日齋戒忌二葷酒一正月初五日二月初一日三月初五日四月初八日五月初五日六月初七日七月初七日八月初八日九月三十日月小則廿九日十月初十日十一月初十日十二月初一日

（廿五）焦爛治方　同六卷廿三丁に人被二火燒一皮肉焦爛出レ蟲如レ蛆者用二杏仁一爲レ末敷レ之卽愈

（廿六）醴泉酒泉　『養老の瀧は醴泉によれる名にて唐土にも九成宮醴泉または酒泉郡などおほくきこゆ最上德內が蝦夷草紙に奥蝦夷にて櫻に似たる木の根より白酒やうの甘く酒臭ある泉二所ありといへり越後國澁谷永保がものがたりにそのくにの蒲原郡の山中に古杉木ありその根下より出る清水酒臭ありといへり甘露なども木の枯んとする折葉におく露甘き事

密のごとしといへば共に木の病によりて酒臭の液を出すなめり簷曝雜記三卷五丁左麵木酒樹の條に洛陽伽藍記有二所謂酒樹麵木一初不レ解二所謂一余至二廣西一乃知二麵木卽桄榔樹一也大者五六圍長數丈直上無レ枝至レ顚則生二葉數十似二栟櫚一其樹中空滿腹皆粉可レ得二十數斛一沸湯淬レ之味似二藉粉一粵人嘗以レ此餽遺又廣東椰子樹每一椰子內必有二酒半杯一小者一勺許甘香清洌味勝二於米釀一數倍此卽酒樹也』

（廿七）カンがよいカンがわるい耳鑒　『俗に盲のさとりはやきをカンガヨイといひわろきをカンガワロイといふこは考を略ていふなめり漢土に揣骨聽聲などいふも似たる義也夢溪筆談十七卷一丁書畫部に藏二書畫一者多取二空名一偶傳爲二鍾王顧陸之筆一見者爭售此所謂耳鑒又有二親畫一而以レ手摸レ之相傳以謂色不二隱指一者爲二佳畫一此又在二耳鑒之下一謂二之揣レ骨聽聲云々と見ゆ耳鑒は耳に聞て善惡を察しいふ也揣骨聽聲は骨を探り試て聲を聞察するよし也』

（廿八）石油クサウヅ　越後國より臭水を出せりこれ石油也夢溪筆談廿四卷一丁雜誌一に石油の事くはしく見ゆ本草綱目の石腦油これ也

（廿九）櫻川石の硯　宗固隨筆に櫻川の歌貫之「常よりも春へになれは櫻川花の波こそまなく立らめ」櫻川は常陸の名所也あながち櫻のあるにもあらねども櫻を歌にもよむ事也さくら川の諷は僞り也此邊より硯石出る名物也狩野榮川此さくら川の硯石を先年冷泉爲村卿へ献じたる時御歌被レ下たり「月をさへ花にうつして見る石の名もさくら川なみにこえぬる」見る石は硯の字也なみにこえぬるはなみ〳〵にこえてよろしきよし也云々按に櫻川は筑波のふもと小田北條などの邊より下舘へ出る間にあり源は筑波山より出て下流は土浦の城西をながれ湖水におつ大河にあらず舟など通ふべくもなし

（卅）世中をわたりくらべて　宗固隨筆に兼好法師歌訓の歌「世中にしたかふ人のことのはゝ思ふもいはす思はぬもいふ」「世中をわたりくらへて今そしる阿波の鳴門は波風もなし」

（卅一）野分　同書に野分といへば秋風の強く吹事と覺たるは俗也歌に野分山分と二色に遣ひたり野分山分は草花を吹散らす事也木の葉をおとす事に非ず野分は八月也石をも吹上つべしと源氏野分の卷にあり

野分は秋の草のおとろふる事也此心を考て歌もよみ發句もすべし

(卅二)蚊柱　又云蚊柱といふは蚊のむれて立事也歌にはこれなく連歌俳諧に遣ふ詞也其角發句「蚊柱にゆめのうきはしかゝりけり」此句名句也定家卿の歌に此句の心によくかなへりと云々「春のよの夢の浮はしとたえして峰にわかるゝよこ雲の空」

(卅三)みの虫ちゝよ〳〵となく　又云枕草紙にみの虫の秋風ふく時ちゝよ〳〵と鳴と書けり古句に「母よとは虫もなかぬとぐちをいひ」面白したる句也繼母の事なるべし

(卅四)一生を空しく過したる人　又云一生をむなしく過たる人に對してよみける歌「あすありと思ふ心にひかされてけふもむなしくくらしけるかな」云々與清曰此歌の心に通ふ語も歌も古今いとおほかり諺にみゝづくが夜が明たら巢をつくらう〳〵とて空しく過すよしいへり「あすまてと思ふ心のあた櫻よ半に嵐のふかぬものかは」此歌出所尋ぬべし古き發句に「來年は〳〵とてくれにけり」慈鎭和尚歌に「みな人のしりかほにしてしらぬかな必死ぬるならひあり

とは」業平「生るれは死ぬるものとはしりながら昨日今日とは思はさりけり」人五十にして死計をなすべしといへる漢土の人の語忘るべからず

(卅五)産養碁手錢擲打　宗固隨筆に產養といふは今の世に產所へ夜食を遣す事也昔は三日め五日め七日めに產の伽をするものへ食事を拵へ遣したる事也產所にて夜伽のもの碁双六を打事也此時碁手とて錢を下されて官女たち碁双六を打事也擲を打といふは双六の事也掛にして打事古き事也徒然草にもだうたん事を思ふと有

(卅六)うはなりはんにや　又云うはなりこなみといふは前の妻の事をうはなりといふ後添の事をこなみといふ夫故前妻の後の妻を恨たる事をうはなり打といへり打は鐵杖の事也人の怨靈をうはなりとは中古よりいふ詞也盤若といふも女の顔の事にあらず祈禱に大盤若經をよむゆゑに盤若面といひて鬼女を畫がく事也云々與清曰前妻後妻の事神武天皇の御歌に見えて厚顏抄古事記傳などに解ありうはなり打は寶物集に見え骨董集に考あり

(卅七)一休の狂歌はこ　宗固隨筆に一休和尚はいとやんごとなき御人なり後小松院の御種也御位を譲らんとの給ひしをきらひて逃かくれ給ふとなり關地藏開眼の事などをかしき事あり達摩大師の贊に「天竺のムシャクシャ達摩此坊主さしたることはあらしとそ思ふ」惣て禪宗にては佛に乘り祖に乘るとて佛をも祖師をもそしるを貴ぶとたてたる宗旨也又善導大師の贊に「黑からん衣のすその黃になるは善導大士はこやたるらん」又さとりの歌「人はさてくふてはこして寢ておきてさてその後は死ぬる也けり」はこといふは不淨の事也云々按に糞をハコといふ事著聞十訓の類古書所見おほし 頭書 今昔卅ノ一語に筥ニ爲入ラム物ハ我等ト同樣ニコソ有ラメ其レチ擔涼ナドシテ見テハ思ヒ疎レ疎ナムト思ヒ得テ女童ノ筥洗ヒニ行カムチ伺筥チ奪取テ見テシガナト思テ然ル氣无シニテ局ノ邊ニ伺フ程ニ年十七八許ノ姿樣体可咲クテ髮ハ拍長二三寸許不足ヌ體參重ノ薄物ノ衣濃キ袴四度解无氣ニ引上テ香染ノ狩物ニ筥チ奪テ云々これ屎を爲入る筥にてこれを洗す女を桶洗といふ也　小夜寢覺八丁ウに蝿といふ虫の穢物などには白くはこなしかけ白きものにはくろくはこなしかけ侍るにたとへたるにや

(卅八)黃村濃紺村濃紫裾濃　宗固隨筆に紋盡の內に黃むらごうといふ事人のしらぬ事也幕を黃に染て所所の黃色の濃を黃むらごうといふ紺むらごうといふも濃こんのむら染ある也一說に幕の筋に黃と紫と紅とを付るゆゑに黃紫紅といふ說あれども此說はいかが三浦黨の三ツ引は是也といふ說はいかゝ又紫すそ濃といふ時は草摺の裾へゆくほどこくなるゆゑ也裾紅といひて紅といふ事にあらずすそごとは裾濃といふ事也是を以て見れば黃むらごうといふも紅の事にあらず黃村濃なるべしと云々

(卅九)うけ振舞有卦無卦　尤双紙下卷四十段目出度物のしか〳〵の段にうけ振舞に鶴龜や云々有卦無卦の事閑田耕筆一三丁に見えたり循環曆二の卷卅七丁ウ四の卷卅六丁ウ四十二丁ウ にも見ゆ 頭書 類聚名物考雜部五　雅遊餘任嚢雜部　故實拾要六三世相　槐記二享保十乙巳九月廿八日ノ條に此夜江戸ヨリ來ル烟草盆ヲ御見セナサル名人ノ細工ト見エテ杉ニテ糸ヨリ細キ彫物ナリイト危キ物也併有氣ノ視ヨリ外ニハ何ノ益ナキ物也ト仰ラルソレニ付キ有氣ノ視ホド爲ベキヤウナキモノハナシ御前ノ五旬ノ御有氣一位樣ヨリ進セラレシヤウナルハナシト也タトヘバ挾箱ホドノ箱二ツニ卷物チ廿五五卷ヅヽ都合九十卷ミナ白地ニシテ繪子紗綾チリメン純子ヲ始トシ十八講サラシニ至ルマデ一色モ同物ナク五十色チ揃ヘラレタル不思議ノ思召付ナリト仰ラル云々

(四十)蓮社號　蓮社稽古編四十三丁ウ 蓮社名義の條に通慧錄曰晉宋間有廬山慧遠法師化行潯陽高士逸人輻湊于東林皆願結香火時雷次宗宋昙張詮劉遺民周續之等共結白蓮華社立彌陀像求願往生安養國謂之蓮社社之名始于此也釋氏要覽曰又彌

陀佛國以ニ蓮華一分ニ九品一次第接レ人故稱ニ蓮社一云々
また五十四丁カ　扶桑廬山の條に按泉州志本朝廬山旭蓮社
大阿彌陀經寺依ニ後醍醐天皇勅願一澄圓上人之所レ創
也圓不レ知ニ何處人一初學ニ台教一中習ニ諸宗一又參レ禪
請ニ益虎關一終入ニ元傳廬山之宗脈一歸朝而創ニ寺于此一
鑿レ池種レ蓮以擬ニ慧遠之蓮社一帝詔賜ニ庄園若干戸一吾
邦淨宗以ニ蓮社一名レ寺蓋始ニ於焉一云々

（四十一）竹矢來行馬　今驛宿の人口などに土手を搆へ上に竹の矢來を作る事あり三才圖會宮室一の卷廿四丁オ に行馬の圖あり門前の左右に作れる矢來なりそれは木もて作りたれど本朝の竹製のものに形相似たり行馬始ニ于三代一周禮謂ニ之陛桓一一木横レ中兩木互穿以成ニ四角一施ニ之於門一以爲ニ禁約一也晉魏以後官至ニ貴品一其門得レ施ニ行馬一又名ニ欄檻一と見ゆ

（四十二）田廬　『万葉集八卷四十五丁右 大伴坂上郎女竹田庄作歌に然不有五百代小田乎苅亂田廬爾居者京都所念然字は默字の誤寫なるべし同十六卷十五丁右 河村王誦歌に可流羽須波田廬乃毛等爾吾兄子者二布夫爾唉而立麻爲所見注に田廬者多夫世也云々毛詩小雅信南山

章註疏本十三之二卷廿七丁左 に中田有レ廬云々箋云田中田中也農人作レ廬焉以便ニ其田事一云々疏云正義曰古者宅在ニ都邑一田於ニ外野一農時則出而就レ田須レ有ニ廬舍一故言ニ中田一謂農人於ニ田中一作レ廬以便ニ其田事一云々集註三卷七十丁右 田中田中也一井之田其中百畝爲ニ公田一內以ニ二十畝一分ニ八家一爲レ廬以便ニ田事一云々三才圖會宮室二卷十五丁右 に圖を載て云田廬農書云古者制ニ五畝之宅一以ニ二畝半一在レ鄘詩云入ニ此室一處是也以ニ二畝半一在レ田詩云中田有レ廬是也陸龜蒙田廬賦略曰江上有レ田田中有レ廬屋以ニ蒲蔣一扉以ニ遠篠一笆雞棲徼方竇橘踈簷卑欹而立傴僂戶傴側而行趙趄蝸涎隆レ頂龜ニ坼旁塗一夕吹入レ面朝陽曝レ膚左有ニ牛栖一右有ニ鷄居一將レ行瞪遮未レ起啼驅宜從ニ野逸一反若ニ囚拘一云々などあるを考わたして田廬のさまおもふべし倭名抄十卷 居宅類部に廬毛詩注云農人作レ廬以便ニ田事一力魚反和名伊保とありて多夫世とはいはざれと全く同物也夫世は廬屋布勢伊保など同じくて卑きよし也そは別にいふべしまた秋田刈借廬はた田廬の類なり万葉集八卷廿九丁右 忌部首黑麻呂歌に秋田苅借廬毛未壞者雁鳴寒霜毛置奴

我ニ同十案廿四丁左 に秋田苅借廬之宿爾穗經及唉有秋芽子雖見不飽香聞また四十三丁右 秋田苅借廬乎作 吾居者衣手寒露置爾家留また四十九丁左 秋田苅客乃廬入爾四具禮事之叙云至其禾迨ニ垂穎而堅一栗ニ懼人畜之傷殘一縛ニ零我袖沾干人無二また五十一丁右 秋田苅借廬作五百入爲而有藍君叫將見依毛欲得また同上 鶴鳴之所聞田井爾五百入爲而吾客有跡於妹告社などよめるにて知らるまた十卷四十三丁右 秋田苅苫手搖奈利白露者置穗田無跡告爾來良思といへる苫手も借廬の苫手也後撰秋中 天智天皇御製に「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつゝ」と有にても思ふべし』

（四十三）守舍いほり 『万葉集十卷五十一丁右 に春霞多奈引田居爾廬付而秋田苅左右分思良久また五十一丁左 橘乎守部乃五十戸之門田早稻苅時過去不來跡爲等霜伊勢物語に「名のみたつしてのたをさはけさそなくいほりあまたにうとまれぬれは」又「いほりおほきしてのたをさは猶たのむわか住里に聲したえすは」これらのいほりも守戸も常に田を守る舍のよしにて三才圖會宮室二卷十六丁オ に載たる守舍これ也そは守舍看平聲禾廬也架レ木苫レ草略成ニ搆結一兩人可レ擕禾稼將レ熟寢ニ處其中一備ニ防人畜一或就ニ塍坎一縛レ草爲レ之若於ニ山鄉及曠野之地一宜下高架ニ牀木一免中有ニ虎狼之患一眞西山言ニ農事之叙云至其禾迨ニ垂穎而堅一栗ニ懼人畜之傷殘一縛ニ草田中一以爲ニ守舍一數尺容レ膝僅足レ蔽レ雨寒夜無レ眠風霜砭レ骨此守レ禾之苦也と見えて看禾廬ともいふべし倭漢三才圖會八十一卷十八丁左 家宅部に守舍は田中之番屋といへり今も山田山畠に限らず借廬つくりいほりし居て鳥獸を守るいとおほかりこれ守舍にて和訓には母利屋といふべしそは守屋大連といふ名もこれによりてつきためれば也』

（四十四）窟井洞　陸奥にては居所を石屋とも洞ともいふよし吾妻鏡伊達日記の類彼處の事記せし書どもに見ゆ和名類聚抄十卷七丁オ 居宅部に窟說文云窟骨反和名伊波夜土屋也一云堀レ地爲レ之云々天文本居宅類廿七 には骨反を音骨に作り爲之二字を爲レ窟也三字に作れり今も諸國に絕壁などに橫穴を掘て人の住たりけん跡と見ゆるが多しこれ上代穴居の遺趾なりと知るべし

（四十五）窰麴窖塗師の止古　天文本和名類聚抄居處部六居宅類二十七 に窰辨色立成云窰於禁切和名伊波夜字流之无路 地室也 一云漆屋云

云說文（眞本七下卷七十丁左）穴部に窖地室也从レ穴音聲於禁切云々正字通（午集下卷穴部）に窖以證切音陰說文地室也今俗謂ニ地窖藏一酒爲レ窖云々按以證切は於禁切の誤なるべし今麹室といふものこれ也漆屋也といへるよしは古漆ぬれる物此中に收置て乾（カワ）したるゆゑと見ゆ今は塗師（ヌリヤノシトコ）上古といへる箱を作りて其中にて乾す事也

（四十六）穴倉　穴倉に二種あり平地を掘て地底に搆るを窖といふがけなどに横穴に掘て搆るを竇といふ其製作殊なれど共に土穴なる事は違なし今關東にては地下に掘搆たるを穴倉とよびがけに横穴をほりて搆たるをば洞ともイハヤともいへり又アナグラとよぶものもありて一樣ならず窖竇の圖三才圖會宮室二卷（廿四丁廿五丁）に見ゆ和漢三才圖會（八十一卷）家宅類部にも出たり

（四十七）社（ヤシロ）　神社を屋代（ヤシロ）といふよしは倭訓栞（廿四卷八丁ウ廿二丁）社部にいひたり社の字の義は三才圖會宮室三卷（廿二丁）にくはしく其圖をも載たれば考べし

（四十八）管内管郡　『困學紀聞廿卷（二丁左）雜識に親王初除有ニ布政牓一首云應ニ某軍管内一尾云某君仍散下管内所レ領節鎭也云々史記李斯傳に趙高以ニ刀筆吏一入ニ秦宮一管レ事二十餘年云々荀子儒效篇に聖人也者道之管也注に管樞要也云々字書に總ニ理其事一曰レ管又主當也など注して管内は俗にいふ支配内の義也和名抄に管若干郡とあるは國司の支配下の郡司が若干といへるよし也』

（四十九）老中といふ職名　老中といふ職名は他より指て御老中樣などいへるより起れり伊達日記などその外やゝふるき書どもに老衆と書たるが自稱の職名にはさるべき事也自他相違の稱といふべし

（五十）物具　『物具といへるは軍器武器の事とのみ思ふべからず雲井御法（群書類從本卅丁ウ）にものゝぐきたる女房だいばん所のみすもてあげていれ奉るとありこは女の裝束にいへる也物具裝束（カリギヌ）抄に劍事平緒事帶事直衣事平胡籙事束帶事禮服事布衣事唐鞍具事移具事和鞍具事車事車具事小忌青摺揷頭花事隨身舍人等が服の事など記したるにても思ふべし』

（五十一）散華（サンゲ）に金銀鐷（ハナビラ）を用ひし始　雲井御法（十三丁オ）に五日けふは結願なり云々大將殿花びらを奉らせ給ふ金銀の葩（ハナビラ）その外繪のはなびら二三百枚心もことばも及ばぬ事にこそ薄樣を敷て打みだれ筥に盛らる昔よりいまだかねの葩といふものはさらになきにや應安にはしろがねのふくりんなどは見及び侍りし建武にはかざり葩とて花ひらにて馬くるまを作りいろ〳〵のものゝ形し侍りし中宮女御などの方よりまゐらせ給ひたりし也さしも一統の時々にて侍りしかどもしろがねこがねの花びらはつひに見及び侍らずいと目おどろかしたる事也云々

（五十二）除目（ヂモク）の除の字義　夢溪筆談四の卷（四丁カウ）辨證條に除拜ニ官職一謂レ除ニ其舊籍一不レ然也除猶レ易也以レ新易レ舊曰レ除如ニ新舊歲之交一謂ニ之歲除一易ニ除戎器一戒ニ不虞一以レ新易レ弊所ニ以備一不虞一也堦謂レ之除者自レ下而上亦更易之義云々

（五十三）錢百の事省百（セニビヤク）　錢を省百にせしは漢隱帝の時に始るよし夢溪筆談四の卷（五丁カウ）辨證部に見ゆ制度通を可レ考（頭書斉暨三筆四卷七丁オ同四筆一卷ノ六丁ウ）

（五十四）大小腰物刀脇指　今世太刀刀を具して大小といへり伊達日記中卷（廿七丁オ）に御腰物大小とあり當時よりの稱にや又刀脇差とも見ゆ（頭書守武千句八丁ウ東寺文書抄三ノ四十九丁オ太平記廿五ノ廿丁ウ佳吉合戰ノ條ニ和田新發意湊秀ト名乘テ洗皮ノ鞘ニ太刀小太刀ニ振帶テ六尺餘ノ長刀ヲ小脇ニ挾ミ云々同廿九ノ六丁オウ同廿四ノ四丁オ畠山道誓上落ノ條に或は四尺五尺ノ白太刀ニ虎皮ノ尻鞘引籠メ一樣ニ二振帶副テ百騎二百騎打モアリ云々）

（五十五）出馬入馬在馬納馬　出馬入馬在馬納馬などいふ名目伊達日記にあまた所見ゆ御出馬御入馬御在馬御納馬などいへり（頭書登馬後太平記廿二ノ十三丁ウ）

（五十六）御北樣　同書に北方の事を御北樣とあまた所書たり大方御方などの類也

（五十七）矢來内の矢來一の矢來遠矢來　同書に矢來内の矢來一の矢來遠矢來などあり外の矢來二三の矢來近矢來などいふ名もありけるにや

（五十八）足輕　足輕といふは歩卒の稱にて馬上に對たる名也伊達日記上（廿六丁オ）を考へて知べし

（五十九）草をいるゝ　草とはしのびの事也伊達日記に草を入るゝなどおほく見ゆ北條五代記のッハの類なり

（六十）いのご　俗に股のつけねの邊をいのごといひそこに腫物の根のはれ出たるをイノゴカ根張（ネバリ）タなどいへり伊達日記上（四十九丁ウ）に上矢ニ打候間鞍ノ後輪ヲ打欠犬子所へ打出候と見ゆ犬子所は「イノゴドコロ」と訓べし

（六十一）供奉調進　雲井の御法（群書類從四百廿九卷十七丁左）に大か

た主上は内膳大炊寮の御はんならではまゐらぬ事にて待りしにちか比諸門跡などのまゐらせられ待りしにやそれにならひて今は御はんなどまゐるは別の事也わりごはむかしよりまゐることにて侍る也云々按樋口秘記に主上の供御の事見ゆ可レ考

（六十二）なくといふ詞　夫木抄春四花部に花歌中に西行上人「ときはなる花もやあるとよしの山奥なくいりてなほたつね見ん」按に此おくなくといふ詞限もなくの義也万の御法（群書類従四百廿九巻廿二丁右）に最勝講などいふ事よりはじめてさまざまの妙なる事ども其數なく侍るなれども云々とある類なくのなくはた同つかひざま也

（六十三）まゐり下向まゐりまかで　中比の書に神社佛閣にまゐり下向とおほく見ゆ下向は還向とも書たり万の御法（群書類従四百廿九巻廿二丁左）に僧俗のまゐりまかでもなにとなく心あはたゞしくやとて云々と有

（六十四）禁中例時作法の始　万の御法（類従本廿丁ウ）に禁中にて例時の作法おこなはるゝ事は敬信の他にことなりしによりて故院のおほん代別勅にて始て行はれ侍りけるとかや云々按故院は後花園院也

（六十五）清涼殿懺法の始　同書（同廿二丁ウ）に十二月の五日より内にて御懺法をはじめおこなはる道場は清涼殿なりおほくは議定所などにてありしを應永十三年のたびより此御殿にて行はるゝ事に成て侍るにや云云

（六十六）桑門くはの門桑の戸桑の戸ざし桑の樞（トボソ）

『新撰六帖（帖）二門歌に知家「からくくして入しは何そ桑の門道の心よそのしるしあれ」又光俊「おなしくはとちこもれかし桑の門名にのみ立て年のへぬらん」已上二首共に夫木抄雜十三門部にも載たり風雅集雜下に出家の後述懷歌の中に前中納言有忠「子を思ふやみにそまよふ桑の門うき世にかへる道はとちても」藻鹽草六の卷（居所部門十四）にくはの門桑門也とちこもれるといへり云々文選（六臣注本二卷四十三丁左）西京賦に展季桑門誰能不レ營注に善曰國語曰臧文仲聞二柳下惠之言一韋昭曰柳下展禽之邑季字也家語曰昔有レ婦人一召二魯男子一不レ往曰子何不レ若二柳下惠一嫗（アタノタルニ）不レ逮レ門之女一也國人不レ稱二其亂一焉桑門沙門也東觀漢記制楚王曰以助二伊蒲塞桑門之盛饌一說文曰營惑也良曰展季柳下惠桑門西國沙門此二人至貞絜見二此美一亦經營也云々釋氏要覽

（上卷六丁右）稱謂部　沙門條に沙門肇師云出家之都名也梵云二沙迦懣門（懣門字上聲呼レ之）曩一唐言二勤息一謂此人勤二修善品一息二諸惡一故又秦譯云二勤行一謂勤二修善法一行二趣涅槃一也或云二沙門那一或云二桑門一皆譯人楚夏爾云々後漢書（列傳廿二光武十王傳）楚王英傳に詔報曰楚王誦二黃老之微言一尙二浮屠之仁祠一潔齋三月與レ神爲レ誓何嫌何疑當レ有二悔吝（リンソク）一其還贖以助二伊蒲塞（イフソク）桑門之盛饌一注に伊蒲塞（イフソク）即優婆塞也中華翻爲二近住一言受戒行堪近二僧住一也桑門即沙門也云々これらの桑門の字面によりて歌に「くはのかど」ともよみたるなれど柳營を「やなぎのいとなみ」龍蹄を「たつのひづめ」などいへる類にて其義はいたくたがへり色葉字類抄（四卷輿部人倫門）に桑門ヨステビト云々節用集（輿部人倫門）に桑門ヨステビト云々運歩色葉集（輿部四卷十四僧十六）にも世をすて人桑門也をの字なくてもと見ゆ又くはの戸ともいへり八雲御抄（三上卷廿六丁右）居敷部戸條にくはの戸桑門也云々言塵集（四卷廿二丁右）戸條に桑の戸云々など見ゆ又桑のとぼそともいへり万の御法（群書類從四百廿九卷廿七丁左）に桑のとぼそ苔の袂にあまるばかりの御めぐみ云々藻鹽草（十四卷僧十六）に桑のとぼそに身をのがれ云々なごあり又桑のとざしともいへり夫木抄（雜十三門部）に述懷歌中くはの門民部卿爲家「かきこもるくはのとざしのおいらくよこはいかなれやねのみなかるゝ」然て桑門をくはのかどゝもよすて人ともくはのとゝも桑のとぼそとも桑のとざしともいふ事と知べし』

（六十七）表紙のふところ　万の御法（群書類從四百廿九卷廿八丁左）に内をはじめまゐらせて宮々男女おの〳〵歌ども表紙のふところにかきて一品經まゐらす云々按に表紙のふところとは經の卷物の表紙の内をいへる也

（六十八）舞樂の終に千秋樂といふ　『今俗能狂言雜劇（サイ）の終を千秋樂といへりこは法會の樂などの終に千秋樂を奏するより轉れりと見ゆ魚山御法（群書類從四百廿九卷四十四丁右）に樂ハ惣禮宗明樂昇（ノボリ）樂採桑老樂拍子供養文後萬秋樂破敬禮段後蘇合三帖眼耳後同急鼻舌後白柱向悔後輪臺青海波下（オリガタ）樂竹林樂廻（エカウ）向了千秋樂とあり廻向了後千秋樂を奏し事果れば也』

（六十九）宿德平絹宿德裝束　宿德平絹とは宿德氣に見ゆるよしの名にや後土御門院十三回聖忌記（群書類從四百廿九卷五十二丁左）に前内大臣實隆公直衣宿德白平絹指貫下紮（クヽリハカマ）著レ靴云々又（同五十三丁右）伶倫公卿前左大臣政長公直衣指貫許

宿德平絹下絓云々又親長卿記文明十五ノ十一ノ十九條宿德裝束の事見えて五十歳以上の宿德の人の著用する服の義にや遠水見聞私記十五の卷安齋後集十二卷卅七丁ウなどにも見ゆ

(七十)目路　和泉式部家集四卷に秋の夜の月いといたうくもりたるに「なかむれとめちにも霧の立ぬれは心やりなる月をたに見す」夫木抄雜三路部にも載て眼路の歌とす俊頼散木奇歌集九卷に伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとにつかはしける「さへかしな玉くしのはにみかくれてもすの草くきめちならすとも」此歌續古今雜下顯季集夫木抄雜三路部にも見ゆ覺性法親王出觀集秋部に月前眺望「山の端をいつとも月の見えぬかなめちにかゝれるくましなければ」後土御門院十三回聖忌記群書類從四百廿九卷五十四丁右に於二御眼路一蹲居云々與淸曰めぢとは目に見とほしたるほどをいふ也

(七十一)御禮を申す　後土御門院十三回聖忌記群書類從四百廿九卷五十九丁右に戌刻事訖共行公卿僧衆等各申二入御禮一云云今俗御禮を申すと云におなじ

(七十二)なじみ　陽祿門院三十三回忌記群書類從四百廿九卷六十八丁左にむかしの御なじみ淺からず云々按に今もいふ詞にて馴染の義也

(七十三)人別帳　今世の人別帳は版とも黃籍とも黃冊ともいふよし制度通八戶口ノ事に見ゆ

(七十四)提封田　不可墾可墾不可墾定墾田墾田　提封田とは天下の土地をすべていふ名目也不可墾とは山林川澤などの田地にならざる所をいふ可墾不可墾とは田畠にもならず山林にもならぬ閑地をいふ墾田とも定墾田ともいふは田畠の事也制度通八七丁オ墾田井に役權總數ノ事に見ゆ

(七十五)課役　課役といふは課と役との二ツにて一事にあらず課は丁男とて一人前の男の名也十八歲より六十五歲までの間也委は制度通八の卷に見ゆ

(七十六)鵜の鳥　木曾路名所圖會三の卷四十三丁オ　三浦山條に見ゆまた朝夷義秀此所にのがれ母の巴も共に住たるよしいへり頭書梅花無盡藏別本一ノ十一丁ウ

(七十七)俗別當　類聚符宣抄一の卷四十七丁オ　長保五年三月四日の宣に應レ以二正六位上紀朝臣兼任石淸水八幡宮神主一事右左大臣宣奉レ勅神主紀兼輔轉二任俗別當之替一云々又四十八丁オ永觀元年六月五日宣に俗別當從五位上紀朝臣良常以二今年八月二日一卒去也云々百練抄五卅七丁ウ　天仁元年十二月廿五日條に石淸水權俗別當賴遠配二佐渡國一云々此外所見おほし頭書宇治殿高野詣記三丁オ

(七十八)錢龜　遊仙窟鈔木四卷廿丁右に舊魚成二大劍一新龜似二小錢一云々注に陳云萍初生圓狀如二小錢之形一也夫蒙云改二萍字一可レ爲二龜字一龜生時大如レ錢遊二於蓮葉之上一云々

(七十九)鳥口ヤハズ　今世物などかくる杖をヤハズといへりかゝる躰に作れる也古くは鳥口といへり宣命見參などを挿む文杖に片鳥口杖または鳥口伎あり三節次第江家次第などのにおほく見ゆ

(八十)鳩を鷹の如に使ふ并鵙を使ふ　諏方緣起五の卷に禰津神平東國無双の鷹匠にて今打おろしたる荒鷹はとをも多年使入たるごとくにぞ用けるとあり吾妻鏡十八の卷卅三丁ウ　元久三年三月十二日同十三日の條に信濃國住人櫻井五郎以レ鵙如レ鷹使ふよしくはしく見ゆ

(八十一)下手人　『台記久安三年六月卅日條に感神院下手人同可レ被レ禁賦云々〇玉海承安二年八月十三日條に或云依二此事一自二公家一山僧等被レ召二下手云々同書文治二年五月廿三日條に仰云如レ聞者理非難レ分別一事歟然而委尋二事之濫觴一以二下手之重者一可レ處二科歟且又可レ奏二事由一難二自由一之故也〇吾妻鏡十一卷十二丁右建久二年四月卅日條に延曆寺所司辨勝義範等參著先徘二徊横大路一鬱南門前申二事由一仍點二基淸之家一被レ招二入彼二人一先賜二酒肴一次遣二俊兼盛時等一令二問答一給獻二上衆徒狀一可レ給二定綱父子身一之由所レ載レ之也亦彼父子之外稱二下手人一注二進交名一是去三月於二佐々木庄一凌二礫山門使一其張本之所岸本十郎遠綱源七眞延源太三郎遠定等也云々同書十一卷十六丁右建久二年五月八日條に院宣云於二定綱一者處二遠流一至二下手輩一者可レ禁獄一之由欲レ被二宣下一之間云々〇明月記元久二年六月廿七日條に昨日書信久向二彼宅一召二下手人一章玄迷惑後見法師一人伊輔卿專一侍一人出レ手了信久相具退出見者如レ堵云々同書建曆三年二月五日條に辨語云造宮所鬪諍事召二仲章朝臣一於二河陽一被二勘責一被レ召二下手人一云云同書貞永二年三月廿日條に下人等説云長淸卿次男依二假子之鬪諍一捕二近邊地藏堂法師之子一面縛其小童依レ爲二山僧弟子一山僧成レ怒亂二入家内一欲レ取二下手

人ニ依ニ其事ニ三位逐電隱居家中無レ人云々○帝王編年記（廿二卷高倉院）治承元年四月十三日條に後日射ニ神輿ニ下手人禁獄云々○百練抄（四卷十七丁右一條院）長德元年八月三日條に右大臣隨身爲ニ權中納言隆家所從ニ被ニ殺損ニ後日隆家卿出ニ下手人ニ云々（十九丁右）又同三年四月十七日條に撿非違使等依レ勅圍ニ華山院ニ責ニ申去夕濫行下手人ニ是右衛門督公任宰相中將齊信同車自ニ左府ニ出之間於ニ路次ニ花山院人數十人致ニ濫行ニ之故也同書（五卷廿三丁右堀川院）寬治五年四月十八日條に停ニ任撿非違使別當俊實ニ是依ニ去三日陵ニ礫撿非違使中原範政ニ也後日付ニ使廳ニ於ニ俊實宅ニ被レ召ニ下手人ニ○諏方緣起（四卷）に義家力及ばす數輩の下手人を誅し彼地を神領に付らる云々○太平記（廿七卷）師直圍ニ尊氏居所ニ事條に故ナク三條殿ヨリ師直ガ一類ヲ亡（スエ）サントノ御結構ニテ候間其身ノ誤ザル處ヲ申開キ讒者ノ張本ヲ賜テ後人ノ惡習ヲ懲サン爲ニ候トテ旗ノ手ヲ一同ニ颯（サツ）ト下（おろ）サセ楯ヲ一面ニ進テ兩殿ヲ圍ミ奉リ御左右遲シトゾ責タリケル將軍彌腹ヲ居（スエ）兼テ累代ノ家人ニ圍マレテ下手人コハレ出ス例ヤアルヨシ〳〵天下ノ嘲ニ身ヲ替（ズサトコ）テ討死セントテ云々○大神宮諸雜事記（下卷四十八丁右）に從者男矢庭（ヤニハニ）死去了常重父子僅存命（セリ）件下手人等三重郡宇衣比原御厨住人等也云々○類聚名物考（稱號部十六）に下手人げしゆにん案に人を殺せばその相手を官より召て死を給ふ是を下手人といふはその人の手をくだして對手を殺せばいふ也今世俗にその殺されし人のかはりに殺さるるゆゑ解死人と書は心得たがひなり云々○與清曰下手人とはもと下手人を請また下手人を取といふを省ていへる也鬪諍にまづ手を下せる人の事也解死人など書は後世の闇推にて捧腹にたへぬわざ也また左經記長元四年正月廿八日條に住僧道覺之下手といひ砂石集に下手男（二上卷藥師利益事）下手法師（二上卷地藏菩薩種々利益事四上卷無言上人事）などの書るは下輩の事にて手を下せる人とは義殊なれば思ひまがふべからず』

（八十二）孛星慧星　孛星慧星の事諸道勘文（群書類從四百六十二卷廿八丁ず廿五丁ず廿六丁ず廿八丁ず）などに載てその圖も見ゆ

（八十三）押領使　信濃國埴科郡櫛原庄中條宮辨才天由來記に寬正文明の比より國郡鄉村に大中小の押領使有て政事を失ひ無道にして邪欲盜戰をもて是也とす云々陸奥話記（十丁ウ）に諸陣押領使云々又（十六丁ウ）三人押領使攻レ之云々此押領使は一陣の大將にいへる也後

世に奉行といふがごとし

（八十四）大佛錢　寬文年中京都所司代松平豆州東山の大佛を無用の物とて鑄崩し大佛錢を鑄る幕に文の字を鑄付たるは寬文の年號の一字を取れる也按に梁武帝取ニ襄陽寺銅佛ニ毀爲レ錢よし南史に見え唐武宗以ニ廢寺銅鐘佛像僧尼瓶碗等ニ所在本道鑄レ錢よし唐書に見え後周世宗詔毀ニ天下銅佛ニ以鑄レ錢よし五代史に見えて和漢一轍の談也

（八十五）水帳　今世水帳といふは古の圖帳の流にてその體裁はやゝかはりたれど名義は御圖帳（ミヅ）なるべし明の魚鱗圖冊すなはち本朝の水帳也其說經濟纂要前集六の卷に見ゆ

（八十六）倉廩の積替（ツミカヘ）　經濟纂要前集四の卷藏穀の條に行厨集云倉厥五間存ニ空一間ニ俟ニ久陰氣濕ニ將レ穀逐レ間翻轉自無ニ紅腐之患ニ敦書按今之轉積（ツミカヘ）即是也

（八十七）國師任限（百九十三卷寺務執行十七）　國師任限并改ニ國師ニ爲ニ講師ニ　法曹類林に私記云問延曆十四年八月十二日符僧諸國國師任限六年兼ニ預他事ニ煩以ニ解由ニ自今以後宜改ニ國師ニ曰ニ講師ニ每レ國置ニ一人ニ擧ニ才堪ニ講說ニ爲レ衆推讓者上申レ官奏聞然後聽補一任之後不レ得ニ輒替ニ者云々按此文類聚三代格三の卷政事要略五十九の卷などにも出たり

（八十八）置レ質　同書同條伊福部眞實問に假令甲置レ質乙許レ甲請ニ借之ニ後加ニ一倍利ニ辨備已畢爰乙留ニ置本文書ニ未ニ返行ニ云々

（八十九）非執政前參議非參議非執事　同書（二百卷公務八座次二）天承元五廿五勘文に式部式云云々又條云非執政二位者列ニ中納言之下ニ三位參議之上三位者四位參議之上ニ云々また非執政三位上薨與ニ三位參議下薨ニ署所事條に問云々式部式云非執政二位者列ニ中納言之下ニ三位參議之上三位者四位參議上ニ者非參議雖レ爲ニ叙日之上薨ニ可レ被レ列ニ參議下ニ之由既見ニ此式ニ云々また答云云又云非執政二位者列ニ中納言之下ニ三位參議之上三位者四位參議之上ニ又云前參議以上被ニ召見ニ及預ニ朝參ニ者致仕者在ニ本位見任上ニ以レ理解者在ニ同位下ニ云云また問云々猶文書之署所須下以ニ參議之下薨ニ書ニ非參議上ニ者歟云々また問云々又參議非職事者重案ニ式文ニ以ニ參議ニ稱ニ以レ理解ニ若無ニ官職ニ者可レ解ニ何物ニ哉云々また答云々以ニ大納言納言ニ何准ニ參議非參議之論ニ哉云々式云非執政二位者列ニ中納言下ニ又天長

宣旨非參議二位列二中納言下一云々此外にもおほく見ゆ可レ考

（九十）一院別當井番頭史生　法曹類林二百の卷公務（群書類從四百六 八十四卷廿四丁右）に式部錄正六位上年五十織部佑從七位下年卅爲二一院別當一誰上座云々（ソノ）（ナルト）また廿五丁左 散位伴保正問に宣旨儞如レ舊爲二番頭史生一聽二其本座一者云々也

（九十一）令義解の朱書　令義解朱書の事法曹類林（群書類從四百六 十四卷十一丁右）に見ゆ

（九十二）例文　達幸故實抄三卷（群書類從四百五十二卷十三丁左）に長寛二六廿九日上卿大納言殿召二外記廿二社奉幣例文一（レイブミト）被レ仰云々これにて例文をレイブミと訓事知べし

（九十三）鉤を懸事　同書同卷廿一丁ウに懸レ鉤樣事永萬元正廿一日功過定（ステ）予懸二鉤於表紙上文一（如此懸也）

「勘解由大勘文

「……資仲抄懸樣如レ此也然而鉤體以レ無二刻目一爲レ善云々

按に俗に云かぎてんをかくる事也ふるへたるはあしきよしは以レ無二刻目一爲レ善とあるにて知べし

（九十四）迎歲迎時　迎歲迎春のみにも限らず迎夏迎秋迎冬などもいへり淮南子時則訓六丁ウ に立夏之日天子親率二三公九卿大夫一以迎二歲於南郊一注迎歲迎夏也

（九十五）士卒　士卒は二種也淮南子覽冥訓注に在レ車曰レ士步曰レ卒云々また本經訓注に在レ車曰レ士步曰レ卒云々また脩務訓注に在レ車曰レ士步曰レ卒云々

（九十六）蠻繪　蠻繪は蟠繪にや淮南子本經訓十二丁ウ 褒兕伏虎蟠龍連組注に蟠龍詰屈相連文錯如レ織二組文一也

（九十七）龍舟鷁首　淮南子本經訓十一丁ウ に龍舟鷁首云云注に龍舟大舟也刻爲二龍文一以爲レ飾也鷁大鳥也畫二其象一着二船頭一故曰二鷁首一

（九十八）木をはなれたる猿　源平盛衰記廿四卷十一丁左 南都合戰條に恐ラクハ木ヲ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ木津川ニ廣サ一町計ノ浮橋渡シテ左右ニ高欄ヲ立タリケリ云々戰國策（四下卷二丁右）齊閔王篇に魯連謂二孟嘗君一曰猿獼猴錯（ステ）レ木據レ水則不レ若二魚鼈一云々補注に錯舍置也云々淮南子（六卷六丁左）覽冥訓に猨狖（エンイウ）顚蹶而失二木枝一云々注に狖猨屬也長尾而昂鼻云々同書（九卷廿丁右）主術訓に猨狖失レ木而擒二於狐狸一非二其處一也云々文選（六臣注本一卷廿六丁左）班孟堅西都賦に猨狖失レ木云々注善曰郭璞山海經注云猨似二獼猴一而大臂長便捷色黑蒼顏篇曰狖似レ狸云々淮南子曰猿狖顚蹙而失レ木云々向曰失レ木

云々驚懼也云々杜律五言集解（四卷四丁右）遠遊詩に猿啼失レ木間云々注に猿失レ木而悲啼喩二己之天涯涕淚一云々

（九十九）粟降　淮南子（八卷五丁ウ）本經訓に昔蒼頡作レ書而天雨レ粟鬼夜哭云々注に天知二其將レ餓故爲雨レ粟按に後世も五穀の降れる例いとおほかりいづれも飢饉の瑞也竹結レ實野草生レ子類はた天飢民を憐ての事と見ゆ

（百）道は貴人に因て行はる　淮南子主術訓廿二丁ウ に孔丘墨翟修二先聖之術一通二六藝之論一口道二其言一身行二其志一慕レ義從レ風而爲レ之服役者不レ過二數十人一使レ居二天子之位一則天下偏爲二儒黑一矣云々按に本朝代代の天子佛道を尊信し給へるより佛法天下に盛也

（百一）本陣井侯館　今世諸侯の旅館を本陣といへりこは漢土にいふ侯館也國語（四卷八丁ウ）魯語上に僖公使レ臧文仲往レ宿二於重館一云々注に重魯地名館侯館也周禮五十里有レ市市有二侯館一云々按周禮地官の條に見えたり

（百二）怨の府　國語（四卷十七丁ウ）魯語上に子叔聲伯曰苦成氏有二三亡一少レ德多レ寵位レ下而欲二上政一無二大功一而欲二大祿一皆怨府也云々注に怨之所レ聚故曰レ府云々

（百三）棟梁之任　また子叔聲伯曰吾聞之不レ厚二其棟一不レ能レ任レ重重莫レ如レ國棟莫レ如レ德云々注に厚大也任勝也言國至重非レ德不レ任二國棟一云々按に職原抄棟梁の注に引べし

（百四）民は勞するを善とし逸するを淫とす　同魯語下（五卷十二丁ウ）に公父文伯母曰昔聖王之處レ民也擇二瘠土一而處レ之勞二其民一而用レ之故長王二天下一夫民勞則思思則善心生逸則淫淫則忘レ善忘レ善則惡心生沃土之民不材淫也瘠土之民莫レ不レ嚮レ義勞也云々注に瘠土利薄又勞而用レ之使レ不二淫逸一不二淫逸一則向レ義故長王二天下一也云々また民勞二於事一則思二儉約一故善心生云々また沃肥美也不材器能少也云々また善心生故嚮レ義也云々

（百五）四民雜處しむべからず　齊語（國語六の卷四丁ウ）に管子曰四民者勿レ使二雜處一雜處則其言咙（マジハリテラ）其事易（カハル）云々按に孫子にも此說あり士農工商各その業に安處せさせて他を知らざらしむる計也しからざれば民好智に走りて治がたし

（百六）蛙の子は蛙に爲る　又（四丁カ）管子曰是故士之子恒爲レ士云々按に俗に蛙の子は蛙になるといふにそ

のこゝろ相おなじ

(百七)罷士罷女罷馬　罷士は病士也罷女罷馬皆病ある也齊語十丁に罷士無レ伍罷女無レ家また十七丁罷以爲レ幣と見ゆ

(百八)出爪を剪を忌　『今俗他行せんとするをり爪を剪を出爪とて忌嫌へりそは金銀にもあれ別の資財雜具にもあれ家より出しつめるといふ事の明詮也つめるはつゝくるなどの心の俗語にてもとは「スキマナキ」よしにいへり淮南子兵略訓廿二丁左に君若不レ許臣不二敢將一君若許レ之臣辭而行乃爪レ髮設二明衣一也鑿二凶門一而出云々注に髮レ爪送終之禮去二手足爪一云々と見えたるはよしあるわざといふべし』

(百九)尋常　淮南子氾論訓に舒二之天下一而不レ窕內二之尋常一而不レ塞注に八尺曰レ尋倍レ尋曰レ常云々

(百十)陰德あれば陽報あり　俗に陰德あれば陽報ありといふは淮南子人間訓六丁左に夫有二陰德一者必有二陽報一有二陰行一者必有二昭名一と見えたるが出處なり

(百十一)心如二直木一行如二柳條一　余常に人に敎て云心は直木の如くせよ行は柳條の如くせよ又云心に正直棒を貯て曲る事なかれ行に柔和繩を用て強き事なかれと云々俗にも男は爪を圓く剪て心を角にもて女は爪を方に剪て心を圓くもてといへり頃淮南子を讀て相似たる說を得たり人間訓廿四丁左に內有二一定之操一而外能詘伸贏縮卷舒與レ物推移とあるは同日の談といふべし禮從レ宜とも不レ凝二滯於物一而能與レ世推移ともいひ搏尾明惠上人の人はあるべきやうといへるなど共に脩身の長策也頭書忍之爲レ德慈戒者行不レ可レ及

(百十二)繁文無益　『俗に下手の長口上といへるごとく繁文にして拙劣なるもおほかり淮南子人間訓廿八丁右に繁稱文辭無レ益二於說一審二其所由一而已矣と見ゆ余平常所レ著の書また此僻ありて劉安がそしりをまぬがるゝことあたはず』

(百十三)無用の器を貯有用の器を缺　創術をしらずして政宗の太刀を秘藏たる文盲にして倭漢の珍書を積置たる共に無用の器を貯たりといべし創術者刀劍を帶ざる學者書籍を持ざる共に有用の器を缺たりといふべし郝隆晒書が腹を日に曝したるは愚人を欺く譏行也おのれそのをりに生合ずして二老に詰問せざるを恨む淮南子說山訓十七丁右好レ弋者先具二繳與一レ矰好レ魚者先具二罟與一レ罾未レ有下無二其具一而得中其利上

(百十四)家中に先祖の靈を祭　宅中に先祖の靈を祭るは禮記王制に庶人祭二於寢一注に適寢とありて正堂の事也今いふ座敷の類也本朝にては上下おしなべて宅中に佛壇を置先祖の靈を祭る事常也禁中御佛壇の事は遠碧軒記上卷居所部に見ゆ

(百十五)慕相并百皇一姓臣下連綿　慕相は漢土三代の說にて聖人も口には宅兆を卜して安措すといへど實は昭穆の廟を毀ち祭を止る事中々にものぞこなひといふべしされば天子永世につゞかず臣數代を重ねず先祖の祭をたち先祖の家を亡すは聖人の言行違へるによりてなり本朝は天皇代々の御陵歷々として存せるに遠陵は多く祭を廢せらるゝなほ伊勢八幡などの類祭祀の盛なるも少からず況や近陵は泉涌寺にて祭らせ給へば微なりといへども百皇一姓の御神統絕ゆることなきをや公家武家庶人の家に及まで又かくのごとしされば萬國にまさりて家々連綿と相續し異寇も犯す事あたはざるは慕祭孝敬の禮備はりて異國の毀廟の禮などいふ不孝不敬の風俗に似ざればなり

(百十六)唐土四百州　岡書編八十三卷に臣博考二前古一若二光武中興一鑒二前世宦冗之弊一裁二省天下四百州縣官一止二七千五百餘員一額數極多者也云々頭書茅窓漫錄下

(百十七)關內侯并遙授　制度通四卷官品正從之事條に關內侯トハ侯號アリテ居二京畿一國邑ナシ漢書ニ具ナリ云々按に遙授の國司の類也

(百十八)功臣號惠美押勝　功臣號の事制度通四の卷にいへり惠美押勝などこれ功臣號也

(百十九)宣底　宣底は文書の草案俗にいふひかへ書なり詔勅の口宣案これ也宣底の事沈存中が夢溪筆談に見ゆ五代史廿四ノ十二丁カ唐臣傳十二論贊に予讀二梁宣底一云々

(百廿)花米　花米の歌西行山家集夫木集などに見ゆ熊野權現金剛藏王寶殿造功日記に白河院御出家永長年中也熊野寶殿未二供養一自レ院奉幣御使僧增譽御幣御花米結二付證誠殿烏倉一御使長圓於二菴室一七日病惱云々また二條關白承德二年熊野奉幣御使東禪房聖寶御幣置二證誠殿烏倉一御花米置二南所寶殿烏倉一云々

(百廿一)楚　『新野問答一卷に君美問楚歟云々同四卷定基卿答歟連著二楚歟一云々無二覺悟一候云々吾妻鏡十卷四十八丁右建久元十一ノ七條に黑馬楚歟云々世俗淺深秘抄

上卷廿八丁右 に大嘗會御禊日非參議猶付ニ楚鞦於杏葉一云々 また廿六丁左 に楚鞦尋常依ニ官々一用レ之然而又主人用レ之上皇之高野詣之時有ニ騎馬一留用レ之又有レ總常代々關白之獻馬車後留被レ引有レ總鞦用也然而於ニ路頭一間々楚鞦被レ用レ之關白長谷寺詣又用レ之也云々餝抄下卷廿五丁左 初齋宮入ニ諸司一鞦條に仁安二九廿一殿記曰初齋宮入ニ野宮一五位已上和鞍黒地楚鞦付ニ杏葉一結ニ唐尾一云云物具裝束抄鞦事條に連著歟鞦楚鞦小總連子總云々無名裝束抄に楚鞦ハ杏葉ヲ付ル時用ルト見エタリ又康治元年十月三日知足院關白イハレシハ楚鞦ハ拈タル事也六位用レ之又戎等ガ拈ナリ云々武器考證十七卷無名裝束抄條に本文に赤滑ノ朱塗トアルハ即楚鞦ノ躰也餝抄世俗淺深秘抄等ヲ見テ知ベシ滑革ニテ造テ總ヲ付ズ樹木ノ楚ノ枝ナキニタトヘテスワエ鞦トイフナルベシ云々

（百廿二）遙授　類聚三代格七卷 承知七年五月二日大政官府應レ停ニ止諸使便ニ附遙授人一事に右檢ニ案内一去延曆廿一年八月廿七日格�右大臣宣奉レ勅諸國調庸專當歷名附ニ大帳使一依レ例申送而使人豫知ニ物麁惡一規求ニ遁去一遂稱レ病故便附ニ在京國司等一調物濫惡從レ此而生即此法令雖レ有ニ科條一所司罕ニ能遵奉一今須ヲ如レ是之類及ニ在京司幷他使等一輒相代奉レ使者同奪ニ公廨一務令ニ懲革一者今被ニ右大臣宣一偁奉レ勅內官之吏無祿之人夙夜服事身乏ニ衣食一因レ茲或兼ニ牧宰一猶空ニ本位一或拜ニ外吏一富ニ身京華一皆將ニ潤以ニ俸料一令レ得ニ代耕一而諸國皆忘ニ舊貫一便ニ附使政公文一或於ニ失錯貢物一煩ニ於麁惡一諸使擁塞職此之由宜下ニ符諸道一勿レ令ニ更然一〇居家必用十五卷 辛集吏學指南除授條に遙授不レ聳ニ公務一之官也俗云ニ虛職一云々〇延喜民部式上廿四丁右 に凡遙授國司不レ給ニ公廨田幷事力一按に虛職なれば受領の如く公廨田などを置て直に取事能はず受領の處分を受て公廨稻を収のみ也同主稅式上二丁右 に遙授國司公廨田云々幷爲ニ輸地子田一云々又廿一丁右云凡諸國一分已上遙授兼任之輩遷ニ任他國幷京官一者不レ得レ受ニ用公廨一若停任官符未レ到之前處分已畢有レ妨ニ改帳一者便加ニ國儲一又廿七丁右 云凡按察使及記事季祿衣服厮丁衣服以ニ陸奥國正稅一交易充レ之自注に遙授之人不レ在ニ給限一〇有識問答二の卷一丁右 に權守事云々遒遙院實隆公答に正守ハ任國ニ赴キテ吏務ヲ沙汰シ候權守ハ多ク在京ノ人任レ之云々壺井義知書入に任國ノ國司ハ其國ニ赴ク也是ハ正ノ守也遙授ノ國司ハ在京也是權守也身ハ京ニ居テ名ヲ遠ク授ル也云々按に遙授の事職原抄下卷廿五丁右 國司條に見ゆ類聚名物考稱號部十九に遙領遙任遙授の事あり可レ考

松屋筆記卷之八十七

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

（一）眠藏クツロ　眠藏は塗籠也下學集など古書に所見おほかり朝鮮にては今も「クツロ」とて每家にこれを營造し主人の住所とせり四方及天上をかべにぬりこめ前後に口をあけ出入にかゝみて中にいれば立てもかしらつかへざるやうにかまへたるよし對州の門人國分氏が物語也頭書太平記廿七ノ四ニ眠藏ニハ波ノ枕ニ銚子ノ宿直物ヲ取ソヘテ置ク云々

（二）み山みよし野みくま野などいふみの字の義　みよし野み熊野みやまみねみそらみたにみさきみたけみさかなどいふみの字は奥深くもあれ高もあれ底深くもあれすべていたり極れる所にいふ詞也こゝりかへはや物語にょしのゝ奥のみよし野といふ所とあるをも思ふべし

（三）一生五分　與清曰人間一生五分にて保つべしそは智二德二勤二信二運二なり歌に「一生を十ぶんにして智德勤信運二ぶんづゝが安樂」智は智惠也德は仁德也勤は格勤也信は信心敬恭なり運は生得の運命也

(四)銘　國語七の卷五丁ウ　晋語一注に刻レ器曰レ銘謂鐘鼎之戒也云々

(五)寵賈レ怨　晋語一國語七卷六丁左に以レ寵賈レ怨不レ可レ謂レ德云々君寵を蒙るものこれに心すべし

(六)族少して敵多きは天助なし　又云少レ族而多レ敵不レ可レ謂レ天云々注に少族族類少也多敵多レ怨也不レ可レ謂レ有二天助一也云々朝鮮人豊大閤を指て親戚なき一夫なるよしいへり

(七)姊妹(イモウトイモウト)の字義　女子の長を姊といひ次を姊といふ男子の長を兄といひ其次女を妹といふ姊妹ともに「イモウト」とよめど字はおなじからず晋語一國語七卷七丁右に献公伐二驪戎一克レ之滅二驪子一獲二驪姬一以歸立以爲二夫人一生二奚齊一其姊生二卓子一云々注に姊大計切女子同生謂二後生一爲レ姊於レ男則言レ妹也云々と見えたるにて知べしまた爾雅註疏本三卷廿丁左釋親に男子謂二女子先生一爲レ姊後生爲レ妹云々とありて妹は男子の妹にいふなるを倭名抄二卷十四丁ず兄弟類部に爾雅云女子先生爲レ姊音止女兄和名阿禰(アヤ)日本紀讀與レ兄同云々また爾雅云女子後生爲レ妹音昧和名伊毛字止(イモウト)日本紀私記云以呂(イロ)止云々と記されしは上の男子の二字に心づかずして誤られたる也喪葬令集解にも姊妹俗云二阿禰於伊毛(アヤオイモト)一と見ゆ

(八)其父を滅して其女を畜ふ(ムスメヤシナ)　晋語一國語七卷八丁ず)に献公驪戎を滅して其女の驪姬を納て夫人とし其姊をも妾とせるをり史蘇告二大夫一曰今君滅二其父一而畜二其子一禍之基也云々按に武田信玄木曾を滅して其女を妻とし勝頼を生て遂にこれがために國を亡せり倭漢の證例いちじるしといふべし

(九)給料内舉外舉自解欵狀　桂林遺芳抄儒門繼塵給二學問料一事條に號二給料一給料後號二學生一也位署等書二學生一也此事儒繼塵之初道也學嬰之燈燭料申賜宣旨自二穀倉院一配分也故云二給料一也今則雖レ爲二告朔餼羊一必先申請也此后當氏幷江家學生等者在二文章院一稽古積レ功也藤氏人者給料之后在二勸學院一成二稽古一也兩院各有二二人宣旨一必献二上宣旨一毎度之儀也所望之欵狀云云之内舉一或父或祖父舉申也無二父祖一時自身申賜云云之自解一云々儒卿又舉奏古來之義也欵狀文章四六也書調時又別副二消息一付二職事一也上古者年齡闌申レ之近代者幼年二三歳之時即申レ之二歳之時號二歳一也雖レ然七六歳許之時申給宜也堅固幼少者無二冥加一歟可レ得レ意事也若又年齡馳過之人者三年以上付レ上申給也假令十五歳之人者十二歳計書二上年紀一也此事非二曾自由之義一古來如レ此故二歳之時號二三歳一一歳付レ上也省試献二詩計一之人二三歳之時又如レ此之例也云々○口傳抄云内舉ニハ不レ隱レ子外舉ニハ不レ隱レ仇(如歟)起自二晋祁侯之舉一子(見二晋世家一)○無二父祖之時稱一自解一自身申云々此事予難二信用一予申二學問料一之時依レ無二父祖一故大藏卿顯長入道令二商量一欵狀等令二計會一然處自解例舊草不二見及一又大藏卿入道家傳未練也於レ時了見之義歟不審也無二舊例一者予一代之誤不レ可レ爲二後例一也(草在レ下)○瑞雲院贈左府記云所望ノ狀是ヲ内舉ト云フ或父或祖父舉申卿位ニ昇輩兩三人ヲ舉申四品一巡一人ヲ舉五位ハ舉セズ藤家ハ四位以後數輩舉奏ス傍若無人事也云々以レ之思レ之父五位時不レ舉儒卿舉之例者應永七年四月散位正五位下菅原爲興息男爲嗣給料父舉申之處欵狀不レ被レ用レ之同十一年十二月迎陽御舉也(舊草在レ下)如レ此之時自解之申狀尚以不二審次第一也舊例可二尋決一矣○申二學問料一事被レ尋二儒卿一例曩祖長綱卿請文云

長勝學問料所望事桃宮(桃宮者後號二櫻田口一公頁之流也)　三位欵狀加二一見一返一上之一儒卿第二之舉者皇澤無變之恩也所二内舉一無二子細一宜レ在二時儀一以二此趣一可下令レ洩二披露一給上

長綱誠恐謹言

十二月十八日　　刑部卿長綱

奉行頭左中辨忠光朝臣也

右一紙以二迎陽御筆蹟一注二記之一畢

長勝者淳嗣朝臣之弟也仍云二第二之舉一歟

欵狀舊章(卿位之時者端不レ書二位署一也雲客之時端先書二位署一也大略欵狀之法樣也已下同)

(十)蔭子蔭孫　同書蔭子蔭孫事條に父之位高時者云二蔭子一祖父之位高時云二蔭孫一以二父祖之位一定二學生之位一故也此事朝廷者無レ如レ爵是同事也儒門者以二蔭子蔭孫一爲二初位一也但於レ令者諸人皆以二蔭子蔭孫一定也當時者諸家皆以二五位一爲二初位一間不レ及二此義一也儒門初位者爲二六位一條專用二此義一也儒者不レ越二次第一之法也云々また蔭子蔭孫或記云現在之父在于レ時書二蔭子一現在之祖父在于レ時書二蔭孫一云々細注に慶長十三九十一蔭子蔭孫之理如何之由勅問之間此説之旨勅答申處重而仰蔭ノ字ハ若シ廕字ノ心ニテ有レ之哉廕ハ庇廕トツヾキタル字也オホフ也廕字ノ心ハ先祖ノ位ヲ繼グ子孫ト云義也然者蔭子蔭孫其心通ズル歟之由被レ出二宸筆一已下云々

(十一)虚題實題　同書題事條に口傳抄云試詩之時

有ニ虛題實題一虛題トハ風月題也實題トハ史書之題也試詩實題之時猶本書置之也

(十二)奏狀內擧狀　同書補ニ文章得業生一者必申ニ課試宣旨一例條に瑞雲院贈左府記云此事儒擧也子細秀才ノ奏狀如レ件奏狀ヲ書テ文章博士署ヲ取テ職事ニ付ク職事奏聞ノ後先年限幷ニ例ヲ勘ベキ由宣下覆奏ノ後式部省ノ續文ニ任テ請ニ依由宣下セラルヽ也近年下勘ニ及バズ事限至レバ宣下例アリ是モ奏狀ノ奥ニ外記宣旨ノ詞ヲ書載ス秀才ノ宣下カマハズ職事ニ付ラルヽ狀是ヲモ內擧狀ト號ス此宣下ノ後獻策ヲ遂ルナリ云々

(十三)輔宣　同書郡事屋申文事條に家記云郡事申文者試衆申ニ大卿之狀一也號ニ輔宣一云々瑞雲贈左府記云申文ノ袖ニ式部大輔署ヲ加フ是ヲ輔宣下ト號ス高檀紙二枚ニ書テ內々狀ヲ副テ遣レ之云々又云輔宣ヲバ當日省家ニ下云々

(十四)貫首黃丹生練雪下長絹　貫首トハ頭中將頭辨ノ兩頭ヲ云兩貫首トモイヘリ染色ノ黃丹ハ「ワウニ」ト訓ベシ生ハ生絹也練ハ綾ノ一也雪ノ下ト云ハ紫ノ緯白ノ一也長絹ハ古クハ長絹短龕絹ナド云テ長キ絹ノ一ナレド後ニハ服ノ名トナレリ

(十五)布袴　布袴ハ鹿苑院參內ニ常ニ召レシトイヘリ差貫束帶ヲ布袴ト云源氏裝束抄ノ頭書ニ布袴トハ指貫ノ事也昔ハ布ニテ調ジタルユエノ名也云々ホウコト訓ズ

(十六)本府の隨身　本府ノ隨身トハオホヤケヨリ大臣ニタマハリテ召具ス將監將曹ヲイヘリ當時ハサルコナクテ大臣大將カケシ家ニテ關東參向ナドノ時ハ自分ノ家司ヲ隨身トスルユエ本府ト云ハ空名也

(十七)雜頭　雜頭ト云一ハ高倉家ノ四箇ノ秘傳也雜頭矢ガラミ闕腋縫平緒ノ四箇也太刀ノ上ヲ左へ越テ前ニハサムヲ雜頭ト云又引折ノ仕樣ハ右ノ脇ニハサミ若長クバ前ニモハサム也是ヲ賀茂ノ引折ナドヽモ云秘事ニシテ家傳トス

(十八)前張　神樂歌ニサイバリニ衣ハフカク染テキントイヘルハ古親王ノ前張ノ著衣前ハ大精好後ハ小精好也上ハ半尻下ハ前張ヲメサルヽ也今ノ能ノ大口ヲマヘウシロニシタルヤウナル物也

(十九)軍團の兵士衛士防人　兵士ハ國ニアルヲ云衛士ハ在京スルヲ云防人ハ鎭東鎭西ニ向ヲ云

(廿)襖狩衣　襖狩衣ト云名目愚案訓ニ見ユ襖ノ製今ハ絕タリ昔ハ表中倍裏ナド具シテ製シ防人ナドニ賜ハリシモノ也今ハ素襖ノ名アレド舊製ニハアラザルベシ

(廿一)大衣は波江とよむ　延喜式ニ大衣ノ隼人白丁ノ隼人アリ大衣ハ白丁ノ頭分ノモノト見エテ其名ハ衣ノ製ニ據タルナルベシコレヲ「ハエ」とよむ百寮訓要別注三廿三丁ウ　頭書儀式六ノ八丁ウ元正受朝賀儀に隼人司官人二人率ニ大衣二人一番上隼人卅人今來隼人廿人白丁隼人二百卅二人二分陣ニ應天門外之左右一

(廿二)褐衣蠻繪　隨身ノ裝束ニ褐衣アリ左右ニ依テ替リ目アリ鷲鷲獅子ハ隨身ノ紋也蠻繪ハ鶴ノ舞タルヤウナルカタ也宮形ハダキミヤウガ杏葉牡丹ナドノ類ヲ云褐ハ紺色也裁縫ハ狩衣ニ身ハ二幅ナルモノ也外ハ狩衣ニカハルコ无當時公家隨從ノモノヽ著用ハ布ニテ製ス關東隨身ハ寬永行幸ノ一日晴ノ例ニテ金入ニテ製スル也

(廿三)狩袴　狩袴ハ奴袴ニ少シ違ヒタル由イヒ雜形ナドヲモ示サズシテ公家ニテ秘スル物也頭書扶桑略記桓武紀卅九丁ウ

(廿四)十德掛素襖　關東ニテハ掛素襖ト云也御轅ノ者御貸袋目ヲ著用也袴ヲ著當腰有リ宗五大草子上七十二丁ウ同下十九丁ウ　頭書東寺文書抄二ノ卅六丁ウ葛の十とく云々〇退耕抄に十德といひしものな法體の人ばかり著用する樣におもへども俗人も著用せし事奇異雜談にありし云々〇徽入記類從四百十四卷卅一丁ウに御こしかきのいで立やう同御物もち候人夫いづれも十德をうへに著候て其上に白きぬの帶にする也御こしかき御物もちいかほども候へ此分に出立候べし云々

(廿五)中啓　中啓當時ノ流例ハ妻紅四品以上持レ之云々金地銀地共二五位年始大紋ニ持レ之事也人ニヨリ年始大紋ノ時墨繪ノ蓬萊ナド白地ヲ持モアリ金銀隨分用テヨシ尤衣冠ノ時金地ヲ持也

(廿六)小諸眉烏帽子　御童直衣ノ內召サル、也御十六歲ヨリ內ノ一也大モロマユノ烏帽子ト云ハナシ

(廿七)色紙疊紙　疊紙ニ鳥子ノ五色ヲ用ルヲ色紙ト云ソメ紙トハイハズ染紙ハ齋宮ノ忌詞ニ佛經ヲイヘバ也疊紙ハ松重朽葉ソノ外四季通用ノ色宜シ衣文ノ色ニテ調進スベシ紙ハ鳥子也又檀紙ニ箔ナドチラシテ用フルモアリ

(廿八)內侍宣　內侍宣下ハ法中ニナイシセンゲトイヘリ此ハ女官ノ內侍ノ宣ニハアラズ藏人ノ宣也藏人ノ唐名內侍也大政官ヲ經ズシテ直ニ藏人方ノ奉行ス

ルユエノ名也タイシセンハ「タ」ヲ濁リ「シ」ヲ清テ唱ベシナイジセントハ云ベカラズ

(廿九)上卿日下蔀　職事　上卿ハ事ヲ執行フ日ノ上席ノ者ヲイヘリ日下蔀ハ其日ノ一ノ下ノ者ヲ云六位藏人ニ云フ也職事ハ事ヲ執リ行ヒ役ヲツトムル者也其日ノ役ヲトリ行フ義也藏人頭ノ事トノミ思フベカラズ

(卅)砌下　砌下トモ「ミギリ」トモ云ハ大庇ノ下雨ダレ落ノ所切石アル階下ノ前是ヲ砌下ト云大外記ナド地下ノ者圓産ニツキ地下ノ者ハ皆コヽニ居ル也

(卅一)角赤　大角赤ハ馴小袖ヲ納レ里ヘ遣ス古實ナドアリ小角赤ハ初紅葉ノ事合セ納ル藤原基俊ナドノ古實アリ后宮名目抄ニ見ユ大角赤ハ棚飾リノ具ニアラズ小角赤ハ黒棚ニオク也厨子棚黒棚トモニ婚禮三ツ目ノ飾也

(卅二)紅裏ノ事　單紅染ノ事古ノ遺風ニヤ今婦人紅ノ裏ヲ著ルフ長崎ノ外科栗崎道宇が門人河野道靜ガ物語ニ異國人ギヤマンノ如キ眼鏡アリテ人ヲ見ルニ衣服ヲ上ヨリ能ク肌ヲ見ルフ也コレニ日本ノ紅ヲ著レバ見透スフ能ハズ故ニ長崎丸山ノ遊女必紅裏ヲ著

(卅三)細長　細長ハ半尻ノヤウナル物也三巾バリノ物也袖括リ半尻ノ如キ毛抜形ヲ結ブウシロニ背縫ニ毛抜形結ヒテアリ小兒ノ脊縫ノ如シ地白ク若松ニ舞鶴松ハ横ニハヘタリ臺ハ高サ三尺八九寸ト見エタリ雲足角八折入クリタリ白磨キ胡粉繪扇ノ摸様アリ平包ハ是モ白ク紋小葵ノ綾也ト風記ニ見ユ

(卅四)鬼瓦　『風記云河泊面水神ノ名也世人軒ノ鬼瓦ト云ハ此事也守武千句二丁ウ第一に「せちぶんや寺にも物な祝ふらん「瓦の鬼はそこへとびやうちう「豆男打なが(ママ)めつゝ」頭書快元僧都記天文三ノ五月條に自二當月初一瓦誘鬼瓦以聲々に」下東四之下地諸人驚ノ目了奈良大工與次郎作ノ之鬼瓦口(ママ)者戴ノ日四者戴ノ月古之猿樂日吉鬼面併不レ可レ過ノ之云々又天文五ノ三ノ十六條に鬼瓦自欠落畢云々

(卅五)家作ニ「ウシ」ト云物　土倉ヲ作ルニ棟木ヲ「ウシ」ト云ハ雨師ニテ雨神名火災ヲ鎭護スルヨシノワザ也

(卅六)女官裝束　女官裝束ハ裳唐衣ハ束帶ニ准ズ小褂袿ハ衣冠ニ准ズ大褂ハ今イフ時服ニ准ズ小褂ハ今ノ小袖ノ類ニテ古ヘ女官ノ常服也纐頭ノ時ハ必小褂ヲ用ラルヽフ也

(卅七)鈍色　鈍色ハ淺黄ニ鼠色ノマジリタル也心喪

ノ服也八雲御抄に見ゆ

(卅八)引直衣　風記云御引直衣長サノ事内々御厨子所ノ預高橋若狹守ニ尋シニ是ハ御内ノフユエアカラサマニ申難シシカシ常袍ハ襴マデ壹寸長ナレド御引直衣ハ五六寸モ長クイウニ有ベシト申サレキ云々

(卅九)亂聲振舞　亂聲ト云ハ壹越調ニアリ物ノ始ニ用フ笛バカリニアル曲也太鼓ヲアヒシラフ事アリ樂ヲ始ムルニモ用ル也榮花物語ノ音樂ノ卷ニモ治安三年十月十四日御堂供養ノ時亂聲ヲ吹フヨノス然レバ此曲ヲ用ルフ久シキフ也行道ノ出タチニコレヲ吹也云々　樂說紀聞上卷亂聲幷振舞事ノ條ニ見ユ樂說紀聞上下二卷アリ小濱藩士浩瀾子が撰ニテ寫本也享保癸卯三月祭酒林士儁ノ序リア又振鉾ハ俗ニホコフリ樂トモ云三節ト云フフアリ左方ト右方ト一節ヅヽ三節舞フ事也亂聲ノ調ニテコレヲ舞フ笛ト太鼓バカリヲ用フ鉾ヲ持テ舞フ也舞樂ノ始ニ必ズコレヲ舞フ事也云々　已上同條ニ見ユ

(四十)左方右方の事　樂ニ左方右方あり樂說紀聞下卷地下樂人家業事條に左方トハ南都ノ樂人右方トハ天王寺ノ樂人ヲ云ナリ云々

(四十一)樂器當時用不レ用の差別　樂說紀聞下卷に和琴ノ事琵琶ノ事三之鼓ノ事　鞨鼓ニ似タル形也左方ハ鞨鼓右方ハ三之鼓ヲ用ル也

太鼓ノ事笙ノ事篳篥ノ事横笛ノ事篇ノ事　高麗ニ用ル笛也拍子ノ事笏拍子ト敷ト　琴ノ事枌故ノ事ニ種ナリ　の條を載すまた舞樂器並服ノ事條に一鼓二鼓奚婁鼗鼓鈸鉦面雞冠白杖蛇　還城樂ニ此ヲ持テ舞フ也挿頭カサシノ花ト云櫻或ハ歡冬ノ作リ花也臨時ノ祭ニコレヲ禁中ヨリ賜ハル小忌ヲチミゴロモト云竹鷄桐ノ文アリ夏ミガヽズ冬ハミガク也摺袴濃袴下襲半臂打衣仁安三年四月三日伊輔濃打シカイ舞童コレハ樂人平生著ス冬ハ衣ヲ著ス絲鞋ヲハク也狩衣裏アリ夏ハ單ニテ裏ナシ云々また本朝用ザル樂器事ノ條に瑟箜篌阮咸新羅琴已上絃ノ方磬筑是ハウチ物ナリ塤篪簫長笛鐵笛已上管ノ此等ノ類ハ名ノミニテ本朝イマダコレヲ用ヒズ云々

(四十二)樂器ノ袋事　樂說紀聞下卷樂器ヲ入ル袋ノ事ノ條ニ總ジテ樂器ノ袋ハ表ハ錦ノ赤地ニ浮線綾ヲ用ヒ裏ハ唐綾ヲ用フ色ハ定ラズ箏ノ袋ハ錦二幅ナリ和琴袋モ同ジ但唐錦ハ琵琶袋モ同事也琴ノ袋ハ紺地金襴ヲ用ルフ本式也云々

(四十三)清少納言　○清原系圖群書類從卷六十三收之に

天武帝——舍人親王——貞代王——有雄

通雄　賜二清原姓一——海雄　筑前守——房則　豊前守

深養父　内藏允藏人從五下雜色——顯忠　下野守——元輔　肥後守

―女子 清少納言 按ニ十四卷系圖の本には清少納言を漏したり○作者部類庶女上 に清少納言清原元輔女一條院皇后宮女房後ニ詞二千二續一今一玉三載一云云○枕草子春曙抄本五卷廿五丁左 にいさゝかなる御文をかきてたまはせたりあけて見れば「もとすけか後といはるゝ君にもやこよひの歌にはつれてはをる」とあるを見るにおかしき事ぞたぐひなきや云々按后宮定子の御歌也今宵庚申にて女房たちに歌よませられたるに清少納言一人よまざりければかく御戯の歌を書てとらせたまへる也此歌に元輔が後といはるゝ君と有此外枕草子中に元輔の女のよし書たる所見ゆ又皇后宮定子につかへ奉り上臈の次にてまじらひたるを内侍になすべき沙汰などの事も此草子に見えたり榮花物語には定子の御妹淑景舍女御は三條院の女御なり○新古今雜上 に元輔がむかしすみける家のかたはらに清少納言すみける比雪いみじうなりてへだての垣もたふれ侍ければ申つかはしける赤染衛門「あともなく雪ふる里はあれにけりいつれ昔の垣ねなるらん」按赤染家集にも出て「荒にけり」を「荒たるを」につくり「なるらん」を「とか見る」に作れり續千載雜中 に老の後こもりゐて侍りけるを人の尋てまうできたりければ清少納言「とふ人に有とはえこそいひ出ね我やはわれとおとろかれつゝ」按契沖が百人一首改觀抄清少納言歌注 安藤爲章が年山紀聞二卷 などに此詞書によれば都のかたほとりにこもりゐける成べしといへり○古事談二卷臣節 に清少納言零落之後若殿上人アマタ同車渡ニ彼宅宅前ニ之間體破壞シタルヲ見テ少納言無下ニコソ成ニケレト車ノ中ニ云ヲ聞テ本自棧敷ニ立タリケルガ簾ヲ掻揚如ニ鬼形ニ之女法師顏ヲ指出シテ駿馬之骨ヲ買ヤアリシト云々房注に燕王好レ馬買レ骨事也云々○また賴光朝臣遣ニ四天王等一令レ打ニ清盛一之時清少納言同宿ニテアリケルガ依レ似ニ法師一欲レ殺レ之間爲レ尼之由ミエントテ忽出レ開云々清盛旁注清原元輔男云々按清少納言老の後零落して尼になり都下の廢屋に住たるよし也かく古書に明證あれば四國へさすらへけん事いかにぞや鬼形のごとく老さらぼへる女法師はるかに海原をしのぎてわたりゆくべくもおもほえず○新拾遺釋教 に法華經序品清少納言女「白妙の光

にまがふ花見てや紐とく花をかねてしるらん」按續作者部類庶女 に清少納言女新拾一首云々改觀抄に此むすめの父は行成卿にや云々○倭漢三才圖會七十二の水卷山城國部 に清少納言古跡萬里小路通中御門與ニ春日通ニ之交今爲ニ民家ニ清少納言一條〔院皇后宮女房也舍人親王之曾孫通雄始賜ニ清原姓ニ通雄五世之孫元輔之女故以ニ清字ニ長德長保年中著述號ニ枕草紙ニ與ニ紫氏之源氏物語ニ相並行ニ于世皇后薨後移ニ四國ニ尋於ニ洛誓願寺ニ出家往生即彼寺有ニ古墳ニ或〕曰老後死ニ于阿波撫養郡蟹村ニ有ニ墓云々○速水見聞私記三卷 に清少納言墳の事讃岐國金毘羅の前に塚あり所の人是を清塚キヨヅカ一說イヅカ と云よし實に清少納言塚也二十年以前此墳をあばかんとせしに所の人夢想に「うつゝなき跡のかたちをたれにかもとはれし事のありてしもかな」と此事領主へも申入其儘おかれしよしと云々此說明音寺了因讃州へ下向見ニ聞之ニ云々○白虎隨筆下卷 に清少納言墳墓讃岐國金毘羅山ノ麓ニアリ正德初年中此處ニ時の太鼓ヲ建ベシトテ件ノ古墳ヲ掘崩シケルニ其夜奉行シ侍ル者ノ夢ニ何方トモナク女來リテ「現なき後のしるしを淚にかとはれて跡のありてしもかな」ト云歌ヲヨミテ悲歎シ侍リシ夢覺テ後領主へ訴ヘモトノ如ク石塔ヲ建テ太鼓堂ヲトリ外ノ地へ移シケルトゾ丸龜ノ玄安寺長老大年ノ物語也云々○結氷錄上卷 に清墓ノ事讃岐金毘羅山ニ〔清墓アリ相傳フ清少納言ノ墓也ト寺僧祐覺曾テ清少納言ノ歌ヲ夢ムト云「ウツヽナキアトノシルシヲタレニカハトハレシナレトアカテシモカナ」或人云是金毘羅山ニハ非ズ安藝一士人ノ家ノ事也ト〕○小窓雜事五卷傳部 に近頃讃岐國加茂ト云所ノ土民ノ夢ニ美女一人來リテ自ハ清少納言ト云者也昔都ヨリ此地ニ下リテ終ニ空シクナリケレドモ人其所を知ル「ナシ汝シルシヲ立テ我終レル地ヲ世ニ知ラセヨトテヨメル歌「ウツヽナキ跡ノシルシヲ誰ニカハトハレテ後ノアリテシモカナ」墓ナド築侍リケルニヤ云々○閑田耕筆一卷 に讃岐象頭山の鐘樓の傍に石の誌有て〔清少納言の古墳と傳ふいつの比とかや此墳を他へ移さんとせしに金光院と云坊の住侶の夢に一婦人來りて云々とみてさめぬさてはまことに清女の墓なるべしとおもひてもとのまゝにさし置たりとぞ又同國白鳥といふ所の鏡が峯云々といふにも京の女郎といふ墓有て清女也といへどもたしかならず又

阿波の里の海士にも清女入水せるを埋めたると云墓あれどもます〳〵信じがたしとなん云々おのれおもふに讃岐には清女の所縁ある歟象頭山より一里餘の所にて道隆寺と云寺に古墓ありて道隆親王と札を建たり親王は必誤にて中關白道隆公なるべし此寺の造立の主故に即寺の號に呼ならん此關白の莊園この國にありて其女定子皇后に仕へまつりし清女なれば皇后かくれさせ給ひ關白の御系も」衰給ひて後清女も此ゆかりにつきて此國にさすらへけんはことわり成べし云々○春曙抄一卷に玄旨法印御說に清少納言は一條院の皇后宮の女房と云々此皇后宮と申侍るは「中關白道隆公の御むすめ定子と申侍し此草紙の所々に宮のおまへと侍る是也云々しかるに中關白殿道隆かくれさせ給ひて云々伊周公隆家卿など遠流の事ありき云々清少納言もさるあれたる所にすみ四國にもさまよひ給ひしにこそ云々或說に清少納言誓願寺にて出家して帝の御かへりみをかうふりいみじき往生を遂て彼寺に墓も有と緣起に見ゆ時代にあはで一旦はおちぶれしかども終焉の」さまはいみじかりけん事才有し人のしるしめでたく侍るにや○與清按清少納言阿波の撫養にて死たるよしは倭漢三才圖會の說にて阿波名所圖會にそこに今も五輪の石塔ありといへりされど古書の趣によれば京都にてうせたるにや誓願寺に墓ありといふも古書にたしかなる證なければいかゞあらん○右所レ答二阿波少將君之問一也

（四十四）里の海士　阿波國名所に里之海人あり夫木抄夏二水鷄歌に家集海邊水鷄源仲正「里のあまはなるとの浪に耳なれてたゝくくひなにおとろかすとか」此歌歌枕名寄廿四卷南海部阿波國條にも載て果の句「おどろかぬかな」と有後拾遺戀二にかたらひ侍ける女のと人に物いふと聞てつかはしける藤原實方朝臣「うら風になひきにけりな里の蜑のたくものけふり心よわさは」狹衣活字本三下卷四十八丁左に「藻かり舟なほにこり江にこきかへりうら見まほしの里のあまかな」此外里のあまとよめる歌擧盡すべからずされど必阿波の地名なるべくおもはるゝは源仲正の歌一首のみその外はいづれの里の蜑ならんもはかりがたしことに狹衣の歌は鳴門わたりの地名とも聞えず後世題詠の歌も仲正が歌によりて鳴門水鷄などよみ合せたるは阿波の名所とすべしされて里の海人といふ地名もいかゝあらんもとは「さと」てふ所の海人なればさはよみ出けん和名抄六卷常陸久慈郡の鄕名に佐都あり今本には佐の字を脫したり神名式續日本後紀三代實錄などには薩都神社と見え今も里宮とて社も村名も存れりまた和名抄九卷に豐前仲津郡の鄕名に狹度ともありかく佐都といふ地名の例これかれ見え佐渡の國も狹門の義にて海門の狹きによれるを思ふに鳴門近邊の狹門なりければ佐都とは地名におへるにやそこにすむ海人をば里の蜑ともいふべきなりされて里の海人は阿波國板野郡撫養の浦にて鳴門の邊なりこゝに柿本社清少納言の石塔などあるは後人のしわざなるべし○右所レ答二於阿波少將君之問一也

（四十五）廳宣　古簡雜纂七の卷に廳宣あり其寫

廳宣　　**留守所**

可レ早以二金倉鄕內下村一爲二東大寺便補保一事

右於二當寺御封一者令レ便二補原鄕所當先一而彼鄕之所當令不足彼寺御封□□然間依二且領主宿願一以二當鄕下村一所レ令二加補一也以二尼淨覺一爲二領主一以二所當一者令レ便二補彼寺之御封內一可レ停二止勅事院事國役一狀所レ宣如レ件留守所宣承知不レ可二違失一以宣

仁安三年八月　日

左兵衛佐兼大介藤原朝臣花押

與清按此奮文にて古代の廳宣の體裁を推量べし

（四十六）公方吉書初の案　古簡雜纂六の卷に公方吉書初の案を載たりそは

公方吉書初案

下二武藏國一　仰二三箇條一

神事

一右神之爲レ神以二人之祭祀一人之爲レ人以二神之加被一因レ玆守二式日一專如在之禮尊限二永代一爲二不朽之勤行一焉

農桑事

一國者以レ民爲レ基民者以レ農爲レ天各勵二池溝堰堤勉一宜レ致二稻穀細絹之□一矣

乃貢

一右諸國之濟物任二土之貢一早守二每年之所當一可レ致二合期之進納一焉

以前三箇條所レ仰如レ件　以下

文安三年正月二日

與清曰此古文にて公方吉書初の案文の躰裁を知べし

(四十七)制札書法并甲乙人　菊亭家書禮上卷に制札之書樣

禁制　國所ヲ書

一軍勢甲乙人濫妨狼藉之事

一伐ニ採山林竹木一之事

一非分之課役申懸事

右條々堅令ニ停止一訖若於ニ違犯之輩在レ之者速可レ處ニ嚴科一者也如レ件

年號月日　官受領在判

官ハ位名字ハ署名有レ之故不レ書也

幾人ニテモ有レ之

右制札に禁制ト書ハ士將の御詞也然ルニ禁ノ字ヨリ一文字ヲ上テ書ハ主上御言ヲ爲レ可レ闕也闕トハ無ニ比類一儀也故禁裏ニテ大臣ヲ卽闕ノ臣ト云モ無ニ比類一臣ト云儀也

軍勢トハ拾万ノ餘ヲ云也將軍御動座ノ陣ヲ四軍ト云也軍勢ノ事也甲乙人トハ甲ハ軍兵也乙ハ雜人也強弩弱ヲ先懸スル也濫妨トハ防護ヲ亂リ破ルヲ云也狼藉トハ國衙在所ノ垣壁破却スルヲ云伐ニ採竹木一トハ非ニ軍用一良材ヲ切取ルヲ云也切ニ伐ノ字ヲ書ハ制伐ノ義ヲ以テ書也伐トハ破ル義也取ニ採ヲ書ハ蓄ト云也爲レ下掠レ上科ト云義也非分ノ課役トハ非ニ上意一事ヲ號ニ公義一私曲ヲ云也課ハ仰セ也惡名ヲ課レ君重罪ト云義也右ノ字ヲ禁ノ字ノ通リニ書ハ制ノ御言ヲ號令ニ仕ルト云儀也停止トハ奇廢ノ言也違犯トハ事ヲ寄ニ左右一背レ掟儀也可レ處ニ嚴科一トハ死罪ニ可レ准矢庭ニハ非レ殺搦捕テ爲ニ見懲一置也當平軍勢トハ將帥陣也一軍トハ二万五千ヲ云也四軍ハ十万起レバ軍神モ不レ覃ニ守護一也謂當平トハ一軍ノ將ヨリ其組ニテ自分ノ法度也云々

○古簡雜纂五の卷に羽柴筑前守の制札あり

禁制

一當手軍勢甲乙人亂入狼藉事

一剪ニ採竹木一事

一喧嘩口論事

右條々堅令ニ停止一訖若於ニ違犯之族一者速可レ處ニ嚴科一者也仍下知如レ件

永祿二年七月日　筑前守(花押)

與清曰菊亭書札一の卷　古簡雜纂五の卷に載たる制札にて當時の體裁想像すべしまた甲乙人の甲は兵士にいひ乙は雜人にいへる事知べし頭書尺素往來十五丁ウ

(四十八)優名　今世相撲取歌舞妓役者淨瑠理太夫など實名の外に大野松稻妻松本幸四郎市川團十郎染太夫春太夫などいふ名ありこは優名と稱(イッ)べし五代史卷卅七一丁左　伶官傳に莊宗既好ニ俳優一又知レ音能度レ曲云云其小字亞子當時人或謂ニ之亞次一又別爲ニ優名一以自目曰ニ李天下一自レ爲レ王至ニ於爲ニ天子一常身與ニ俳優一雜ニ戲于庭一云々又五丁右　郭門高名從ニ謙門一高其優名也云々など見えたるをおもふべし

(四十九)同行一行　今俗同行幾許人など云一行ともいふべし五代史卅八卷三丁左　宦者傳張居翰が條に魏王破レ蜀王衍朝ニ京都一行至ニ秦川一而明宗軍變ニ于魏一莊宗東征慮ニ衍有レ變遣レ人馳詔ニ魏王一殺レ之詔書已印畫而居翰發ニ視之一詔書曰誅ニ衍一行一居翰以謂殺レ降不詳乃以レ詔傳レ柱摺ニ去行字一改爲ニ一家一時蜀降人與レ衍俱東者千餘人皆獲レ免云々この衍一行とあるは王衍が同行の者をいへる也

(五十)　脊負板木薦　武相の賤民田草を採時しよいたと云物もて雨をも照日のかげをも拒ぐ事ありそは莚やうの物に繩紐をつけて左右の手に徹し脊に負也セオヒ板(イタ)といふべきを約(ツヅ)て「シヨイタ」といへりと見ゆもとは板もて作りけん軍用の物の名の殘れるなるべし漢書晁錯が傳八丁右　に匈奴之革笥木薦弗レ能レ支也といへる注に孟康曰革笥以レ皮作ニ如レ鎧者一被レ之木薦以ニ木板一作如レ楯一曰革笥若ニ楯木一薦レ之以當ニ人心一也師古曰一說非也とある木薦は脊負板の類也

(五十一)塹遊地(セン)　漢書晁錯傳十七丁ウ　に内史府居ニ太上廟壖中一云々注に師古曰壖者内垣之外游地也音人緣反云々

(五十二)儒生は簑人(マニシノヒト)の子　漢書霍光傳十三丁オ　に諸儒生多簑人子云々注に師古曰簑貧而無レ禮音其羽反云々按万葉五の卷六丁カ　に山上憶良が令レ反ニ感情一歌序に或有レ人知レ敬ニ父母一忘ニ於侍養一不レ顧ニ妻子一輕ニ於脫履一自稱ニ畏俗先生一意氣雖レ揚ニ青雲之上一身體猶有ニ塵俗之中一未レ驗ニ修行得道之聖一盍ニ是亡命山澤之民一所以指ニ示三綱一更開ニ五敎一遣レ之以レ歌令レ反ニ其惑一云々歌に「比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾伊(ヒサカタノアマヂハトホシナホナホニイ)幣爾可弊利提奈利乎斯麻佐禰(ヘニカヘリテナリヲシマサネ)」空穗物語藤原の君廿一丁オにせまりしれたる大學のすのいふやう云々源氏物語少女湖月抄本七丁オにせまりたる大かくのすゆうとてわらひ

あなづる人もよも侍らじと思ふ給ふるなどきこえしらせたまへば云々

(五十三)椒房　漢書六十六卷五丁左　車千秋傳に江充先治二甘泉宮人一轉至二未央椒房一云々注に師古曰椒房殿名皇后所居也以レ椒和レ泥塗レ壁取二其溫而芳一也頭書下學集下卷廿四丁右草木門に胡椒此木能生二多子一故皇后之宮殿植レ之謂二之椒房椒室一也或說云皇后宮以レ椒塗レ壁溫暖遍二馨氣一也

(五十四)君侯　漢書六十六卷四十右　劉屈氂傳に丞相爲二祖道一送至二渭橋一與二廣利一辭決廣利曰願君侯早請二昌邑王一爲二太子一云々注に如淳曰漢儀注列侯爲二丞相一稱二君侯一師古曰楊惲傳丘常謂レ惲爲二君侯一是則通二呼列侯一之尊稱耳非二必在一於丞相一也如淳之說不レ爲レ通矣

(五十五)祖道　祖道はむまのはなむけ也漢書劉屈氂傳に丞相爲二祖道一送至二渭橋一云々注に師古曰祖者送レ行之祭因設二宴飲一焉云々こは道祖神を祭り且飲宴をも催すを祖道といへる也

(五十六)毛擧　庭訓往來二月廿三日狀に公私忩忙之間不レ遑二毛擧一云々雜筆往來詳書類從百四十卷三十七丁右に蹤跡惟多不レ遑二毛擧一云々安齋赤鳥下卷七十七丁左に庭訓往來ナドニ不レ遑二毛擧一ト云或不レ遑二毫擧一ト云事アリ毛モ毫モ筆ノ事ヲ云フ也筆ニテ書盡スニ暇アラズト云ヿ也毛擧毫擧トモニ漢文ニハナキ詞ナリ漢文ニハ枚擧ト云ナリ云々同葵作八十丁左に先年予友山岡俊明問庭訓往來ニ不レ遑二毛擧一ト云文アリ此毛擧西土ノ書ニ不ニ見及一如何予答曰蓋我國ノ俗語歟ト而ノ廿餘年心忘ルルヿナカリシガ今日史記評林ノ讀史總評ヲ讀テ不慮ニ毛擧ノ字ヲ見得タリ總評ニ王維楨曰遷史之文或由レ本以之レ末或操レ末以續レ顚或繁レ條而約レ言或一傳而數事或從レ中變或自レ傍入意到筆隨思餘語止若レ此類不レ可二毛擧一竟不レ得二其要領一ト見エタリ然レバ我國ノ俗語ニハアラズ尙是ヨリモ古キ書ニ有ルベケレ共管見ナレバ知ラズ王維楨ハ明朝人也毛擧トハ毛ハ筆ノ毛也筆ニカキツクサレヌト云ヿ也不レ能二腐毫一ナドヽ云モ毫ハ筆ノ毛ノヿニテクサレタル筆ニテハカキツクサレヌト云ヿ也不レ可二毛擧一ト云語餘リ多クハ聞ナレヌヤウニ思フハ予ガ管見ナルベシ云々漢書廿三卷十三丁右刑法志に徒鉤二撓微細一毛二擧數事一以塞レ詔而已注に師古曰毛擧言擧二毫毛之事一輕小之甚云々佩文韻府廿六卷百廿八丁右語韻擧字條に漢書刑法志を初として子華子謝觀王言如絲賦司馬光議二貢擧一狀蘇軾司馬光行狀などの出處を擧たり

(五十七)臣は君によりて忠あり不忠あり　豫讓范中行氏に忠あらずして智伯に忠あり百里奚虞に愚にして秦に賢也みなこれ遇不遇によるといへども君の意にあり君臣を見ると土木の如きときは臣君を見る事寇讐の如くすともいへり君たるとかたく臣たるとも亦やすからず五代史廿一卷五丁左　周臣傳の贊に作レ器者無二良材一而有二良匠一治レ國者無二能臣一而有二能君一蓋材待レ匠而成臣待レ君而用故曰治レ國譬二之於奕一知二其用一而置得二其處一者勝不レ知二其用一而置非二其處一者敗敗者臨レ棊注レ目終日而勞レ心使レ善レ奕者視レ焉爲レ之易二置其處一則勝矣勝者所レ用敗者之棊也與國所レ用亡國之臣也

(五十八)罰杯罰爵酒家倡藝子　金谷園の罰杯は世人みなしれり五代史三十卷五丁ウ　史弘肇傳に罰爵の字面ありまた酒字倡の字あり今の女藝者京都大阪にて藝子といふこれ也頭書列子下四十六丁ウ力命篇に景公虧焉擧レ觴自罰罰二臣一者各二觴焉

(五十九)虎は死して皮をとゞめ人は死して名を殘す　俗諺に虎は死して皮をとゞめ人は死して名を殘すといへり五代史廿二卷三丁ウ　死節傳王彥章條に彥章武人不レ知レ書常爲二俚語一謂レ人曰豹死留レ皮人死留レ名云々

(六十)あなぐり大あなぐり索大索畫姿たづね　あなぐり大あなぐりといふ事棠花物語などに見ゆ三代實錄に索とも大索ともあり漢書に出處あり五代史廿三卷八丁ウ　孫晟傳に畫二其像一購レ之とあるは畫姿の御たづねなり

(六十一)普賢象といへる櫻　櫻に普賢象といへる一種あり新續犬筑波集一の卷春部に「佛道も歌道ももとはひとつにて」といふ附句に大坂人如貞「西行ざくらつくふげんざう」又「ほとけののりしはなぞあぶなき」といふ附句に京都人喜多村樂只「吹かよふ風のみぎりのふげんざう」怡顏齋櫻品七十五丁オ　に普賢象千瓣にて五六輪一所に密(コン)りて貼花(ツク)甚張ず蕊長く垂(タル)色赤し花中蘂纔(ワヅカニシベ)一筋二筋にして茶の芽のごとくなる卷葉五六分の長さの青芽二三箇花瓣の間に雜(マジ)りて出花形しぼみたるがごとし奥州仙臺にてこれを奈天(ナデン)の櫻といふ京都にて奈天といふは犬櫻の事也治所翁櫻譜曰鹽竈に同じ但花中に二葉出是其異とす花鼻葉齒同音也象鼻出齒の意にして普賢象といふ鈍永曰藝花園にいふも大白千瓣淡色を帶び花中二つの細葉出て象鼻の如し或人云此花蕊長して下へ垂る故普賢象といふと也

云々天野信景が鹽尻一の巻にふげんざうと呼櫻花實は普賢堂といふべき歟宣胤卿文龜二年記詣千本念佛幷普賢堂櫻盛也云々（普賢堂むかし千本閻魔堂に在し時そこにありし櫻ゆゑかくいへり）但般若經百首（橫川）の詩叙に此櫻の事を云て或曰普賢象和訓鼻與レ花音同花之白且大者如二菩薩所レ乘白象之鼻一也云々然ればふげんざうといふもいにしへよりの名也（白して花の長きゆゑかくいふにや）山城名勝志二の卷（五十九丁右）に普賢堂櫻（在二圓寬堂一世謂二普賢象一）宣胤卿記云文龜二年三月九日詣二千本念佛一幷普賢堂櫻盛也親長卿記曰明應四年二月十三日參二詣千本釋迦堂一遺敎經聽聞次千本櫻一覽了般若經百首（謝人憙櫻花詩幷序）櫻之於二我國一也云々謝レ之云「七年不レ見二普賢堂一蝶亦東西難レ過レ墻亂後逢レ花春似レ夢一枝晴雪滿レ衣香」小補絕句（暮春看レ花普賢堂花橫川）杜宇聲中春欲レ闌城西櫻雪一株殘人生易レ逐落花變暗 想明年子細看云々與清按橫川が櫻花詩幷序翰林五鳳集七の卷春部にも載たり橫川は足利義政將軍などの比の人也此序に丁亥之亂といへるは應仁元年丁亥也甲午は文明六年甲午なり

（六十二）水向（ムケ）鹽尻一の卷に或人云凡そ亡者の靈に水を手向るは佛法に效へるなりと予按に是我國上古の習俗歟日本紀十六に舘臣が死せし時影媛哀傷の倭歌を詠じて「玉笥（タマク）に飯盛（イヒモリタマモヒ）玉椀に水盛（ミヅモリ）」などいひ其葬の時「水喰（ミヅクヘ）ごもりみな酒（ソヽギ）」の詞ありこれ我國佛法來らざる以前の事也佛氏といへども餓鬼の外佛菩薩等に水手向る事なし今の俗は我祖先の靈を以ていやしき餓鬼として祭るもの多し思はざるの甚しきにあらずや釋子云凡そ餓鬼ハ佛座に近づくべからず幽林の野處を掃ひ昏時に水食を薦（スヽム）る事なり今佛殿の裏殊（ウチ）に朝晝の間施鬼の祭をなす事其理なし鳩槃陀（クハンダ）等の鬼類すら祭らざる也（桃樹柳樹なき清淨の地に祭る也）況や餓鬼をや法なき僧は人の祖先修行めでたくして終り且知識火下（アゴ）せし神靈をもみなはかなく罪深き者と同じ樣に施食すあさましされば追善の法事に施食をなすは寒林の餓鬼迷鬼を祭り拔苦（バツク）與樂（ヨラク）の大慈悲心に住しその福力を以て今日聖靈の增追佛果を祈ることなりいやしく其靈を直に鬼類にして侍するにあらずといへり施食の法は密家殊に深き傳あり禪者の施食も亦理に近しとかや云々空華談叢一の卷に亡靈薦水條六則あり可二考合一

（六十三）烏帽子 鹽尻一の卷に烏帽子は唐の烏紗帽の變染紙にて制するもともとよりもろこしの風あり

頭書 烏帽子ノ故事元服曾我草子十丁 貞永式目追加廿四丁ウ

（六十四）馬に將軍の號 五代史七十卷四丁ウ 東漢世家に東漢主劉旻周の世宗と戰て敗し旻獨乘二契丹黃驃一自二鴨窠嶺一間道馳去夜失二道山谷間一得二村民一爲二鄕導一誤趨二平陽一得二佗道一以歸云々旻歸爲二黃驃一治レ厩飾以二金銀一食以二三品料一號二自在將軍一云々與清按松を大夫に任じ鷺を五位に叙し鶴を軒（クルマ）に乘せ馬を重葬せまくせし類いとおほかり

（六十五）漢土の治術不レ及二北狄一 五代史七十三卷四夷附錄二ノ八丁ウ 東丹傳に契丹謂二胡嶠一曰夷狄之人豈能勝二中國一然晉所二以敗一者主暗而臣不忠云々按に漢土の人情不忠不孝の者多しそは詐譎を本として聖賢の敎も人情をため前後打合ざる事少からねば也

（六十六）總髮 五代史七十四卷夷附錄三ノ八丁左 回鶻傳に婦人總髮爲レ髻高五六寸以二紅絹一囊レ之既嫁則加二氈帽一云々文選六臣注本七卷廿四丁左 潘安仁藉田賦に垂レ髫總レ髻注に善作レ髮云云此外唐書南蠻傳瘦信蕩子賦などにも總髮の字面見ゆ 頭書 南史廿一ノ七丁ウ王融傳に爰自二總髮一迄二將立年一州閭鄕黨見レ許二愚脊一云々

（六十七）著名 五代史四十卷雜傳廿八丁左 李仁福傳に自レ非レ有二大善惡暴一著於世一者一不レ能レ紀二其始終一云々晉書九十卷列傳六十八ノ廿六丁右 桓溫傳に桓溫既而撫レ枕起曰既不レ能レ流二芳後世一不レ足二復遺一臭萬載一邪云々

（六十八）厚葬の弊幷墓相 五代史四十卷雜傳廿八ノ十一丁ウ 雜傳論贊に厚葬之弊自二秦漢一以來率多聰明英偉之主雖レ有二高談善說之士極陳一其禍福一有レ不レ能レ開二其惑一者と矣豈非レ富貴之欲レ溺二其所一自私一者と篤（而未然之禍禍難レ逃二于無形一不レ足二以動一其心一歟然而聞二溫嶠之事一者可二以少戒一也云々）莫二能原一其旨一也云々與清曰荀子に墨子が薄葬を誹りたれど遂に秦皇燕昭の厚葬の基を開りといふべし其宅兆を卜してこれを安措するにしかずと知べし

（六十九）易レ土賽報 江戸谷中に笠森稻荷の祠あり笠森はもとその森のさま笠に似たるよりいひそめけんは笠松三笠山などいふ類なるべしさて笠森の音瘡守（モリ）と通へば瘡を治する事を守る神として世俗あゆみをはこぶものおほかり又はじめ土の團子を奉りて平愈を祈り賽報（レイマヘリ）の時は米の團子を供ずるならはし也五代史四十二卷雜傳廿三丁左 朱瑾傳に瑾名重二江淮一人畏レ之其死也尸（サラス）二之廣陵北門一路人私共瘞（ウヅム）レ之是時民多病レ瘡皆取二其墳上土一以レ水服レ人云病輒愈更易二新土一漸成二高墳一とあるは同日の談といふべし

(七十)櫻繩(シユロナハ) 五代史四十四卷雜傳廿二ノ二丁左 劉知俊傳に乃於二里巷一搆二爲謠言一曰黑牛出レ圈櫻繩斷云々櫻繩は今のシユロナハ也

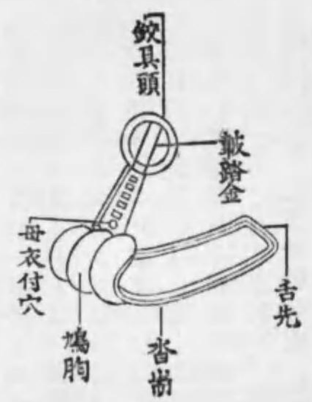
(七十一)釜鳴怪并金錢鳴(カナル) 釜鳴怪の事は口遊袋草子拾芥抄などに誦歌あり吉備津宮の釜鳴は吉凶を定むる兆といへり燈籠佛などの類にこそ五代史四十五卷雜傳廿三七丁右 袁象先傳に象先子正辭積レ錢盈レ室室中嘗有レ聲如レ牛人以爲レ妖禱二其散一レ積以禳レ之正辭曰吾聞物之有レ聲求二其同類一爾宜二益以一レ錢聲必止聞者傳以爲レ笑云々

(七十二)五六鐙 本朝軍器考十二卷十八丁右 に武藏鐙トス云シ物ハ木鐙ニテ今ノ世ニ五六ナド云ヲ物其遺制也トハ云ナリ佐々木三郎盛綱が藤戸渡セシ時ノ物也トイフ物其片方今モ世ニアリソレモ今ノ世ニ用フル所ノ如クナル木鐙ノ黑ク塗タル也西南諸蕃ノ鐙ハ木ヲ刻メル狀小龍(ちやうがん)ノ如クニテ足指ヲ其中ニカクス榛棘(シンキヨク)ニ入テモ足ヲ傷ラザランタメ也トイフ事異朝ノ書ニモ見エタリ范成大桂海虞衡志 足利殿ノ比ニ伊勢ノ家ニテ鞍ト同ジク作レル木鐙世ニ猶多シ世ニコレラノ制ヲ五六ナドイフハ五寸六寸ニ作ルベキ定レル法量アレバナルベシ云々按有職備考十三卷鞍具足部鐙の條にも此說を引たり○武馬必用三卷十五丁左 禮馬部に鐙は五六のあぶみもよくかなあぶみもよしされども當流のあぶみは掞(コシラ)へやうに傳授あり云々按金鐙に對へて五六鐙といひたれば五六鐙は木鐙にいふよし也當流とは大坪流を指せる也こは大坪流の馭術家齋藤定易が撰なれば也○觚賸訓二百三段 に五六鐙鐵ニテ骨ヲ作テ木ヲ入タルヲ五六ト云何故五六ト云ㇾ詳ナラズ或說ニ五六(三十貫ノ重リヲ柳葉(ヤナイバ)ニ掛テ伸サル故五六ト云トイヘリ伊勢淨齋ガ談ニ鐙ヲタメスニハ三十貫ノ重リヲ掛ルトイヘリ右ノ說ハ二貫目タラズ用ガタシ又或說ニ五六三石ノ米ヲ重リニ掛テ伸サル鐙ヲ五六ト云トイヘリ此說モ如何又或說ニ昔甲州ノ五六ト云里ニテ作リ出シタル鐙ナル故五六ト云トイヘリ甲州ノ御代官ニ尋シニ五六ト云地名ナシ右ノ說モ用ガタシ或說ニ五六ノカチト云ㇾアルユエノ名也ト云伊勢淨齋ニ五六ノカチノ事ヲ問シニ答テ云鐙ノ蛸頭ノ付根ヨリ舌先ノ外カドマデ五寸六分ニ作ル是定法也トイヘリ此五六ノカチハ木ヲ入ル鐙ノミニモ限ラズ鐵鐙眞鍮鐙モ皆五六ノカチ也或ハ一分或五厘許僅ノ伸縮ハアレ共大度五六ノカチ也サレバ木ヲ入タル鐙ノミヲ五六ト云

ベカラズ貞丈按上古ノ鐙樣々ノ形アリ唐鐙アリ唐鞍ニ用レ之其形輪也又壺鐙アリ其形沓ノ如シ又舌長鐙アリ鎗抄ニ圖アリ又舌短鐙アリ今ノ鐙ハ木ヲ入タル鐙モ鐵鐙モ大抵相同ジ皆五六ノカチヲ用ルユエ今ノ鐙ノ惣名ヲ五六ト云ナルベシ然ルニ後代木ヲ入タルノミヲ五六ト云鐵鐙モ五六ノカチヲバ用レズ五六トイハズシテ鐵鐙ト云ナラハセルニ依テ別ノ物ノヤウニ思ナルベシ古書ニハ五六鐙ト云名ハ見エズ然レ今ノ鐙モ近世ノ物ニハ非ズ後三年合戰繪前九年合戰繪一谷合戰繪保元合戰繪年中行事繪西行物語繪法然上人御傳記繪其外古畫ニ專ラ多ク五六鐙ヲ畫ケリ延喜式左馬寮式ニ木鐙見エタリ諸鞍日記ニ前駈ノ鞍ノ事形ハ移(ウツシ)ノ如シ鐙ハカナ鐙モアリ木鐙モアリ云々古畫ノ前駈ノ體ヲ見ルニ鐙ノ形今ノ鐙也然レバカナ鐙トアルハ今ノ鐵鐙ニテ木鐙トアルハ今ノ木ヲ入タル鐙也古ハ如レ此カナ鐙木鐙ト稱シタルヲ兩品共ニ五六ノ矩(カヂ)ヲ以テ作ル故惣名ヲ五六掛ト云然ルニ鐵鐙ヲバカナ鐙ト稱シテ五六掛トイハザル故ニ五六掛ト云名ハ木ヲ入タル鐙ノ名ニ片付タル也按五六鐙の說幷圖赤鳥卷下 小車錦などにも見ゆ五六矩(ガヂ)によりて五六鐙といひ鐵鐙木鐙の總名といへる說いかにぞや後には必木鐙にいふ事なれば古もさぞいひけん武藏鐙は木鐙にてこれを五六ともいふは武藏の五六の里といふ所より作り出けんも知べからず五六の里今はしられねど小六神社といふは胡祿神社にや今の赤坂の氷川社ふるくは小六の社といひけるよしものに見ゆ又六鄕の里といへるも胡祿の鄕の省にや美濃國にろくの渡りもあればかた〴〵ろくは胡祿(コロク)の省語それより六鄕とはあやまれるにても有るべし神名帳に武藏國荏原郡磐井神社あり今の鈴森の八幡宮といへるは正しき證もなければむべなひがたしつら〳〵思ふに今の赤坂の溜池は古代よりの池と見ゆるにその近邊の氷川の神社なれば磐井神社といふべくやとおぼゆ此里より胡祿(ヤグヒ)に鐙に武器を製り出しけんより胡祿の里ともいひ後には磐井の社を胡祿の社とよぶことゝはなれる成べし赤坂氷川社を小六の社といふよしは總國風土記を出所にて江戶の地誌どもに記したり胡祿は神名帳に對馬上縣郡に胡祿神社胡祿御子神社あり續日本後記には胡籙と書たりこは和名抄十三卷 征戰具部に箙周禮注云箙音服和名夜奈久比盛レ矢器也唐令用二胡祿一字一唐韻

云箭籠胡鬼二音箭室（ヤノイヘ）也と見えてやなぐひを祭れる神社を胡祿（コロク）といひそれを作り出す里をも胡祿（コロク）といふべし小六は借字にて音通す小六といへる人名におこれるよしいへるはさとらざる説也○赤鳥下卷に五六鐙ノ名明解ナシ諸説多ケレ共推量ノ説取ルニ足ラズ貞丈モ亦推量ノ説ナリ鐙ノ骨ヲ作リ其骨ニ木ヲ挟ミ入レテ作リタル者ナレバ鐵ト木トチカラヲ合スル意ニテ合力（ガフリヨク）ノアブミナルベシソレヲ五六ト書タルユヱ知レヌ事ニナリシナルベシチカラト云字漢音ニテハリヨク呉音ニテハロクトヨムナリ云々按此説いとうけがたし合力を五六とあやまるべくもなく又力の字漢音ハリキ呉音ハリヨクにてロクといふ音ある事なし○又云五六鐙骨ノ圖

此骨ノ内ソ方二三分アリ其ウチニ木ヲ入ル、ナリ鳩胸モヤナイバモ皆木ナリ五六ハ合力ナルベシト云フ前ニ記ス按和漢三才圖會卅三卷車駕之用部に



按鐙頭環以承逆靼（チカラガハ）一處俗曰鉸具頭（コガシラ）一名鮹頭（タコガシラ）其環中有搖旋（マハル）者一曰鞁踏金（ビタウガネ）一凡以二兩鐙一稱二一足一武州作出者爲レ上故謂二武藏鐙一云々と見ゆ○小車錦に五六鐙のほね

此間へ板をはさみいるゝ也

按赤鳥下卷に出せる圖に大同小異なり○武藏鐙に天明元年辛丑十二月四日予古キ鐵鐙ヲ求メ得タリ甚古クシテ地肌荒タリ鐵色紫ニテ鍛甚堅シ全體ハ作ノ木鐙ニ似テ小形ナリカマクビアフムカズ大ニ反（ソラ）ズ鳩胸中少シ高シ大ニ突出ズ肩ヨリ柳葉（ヤナギバ）ノ通リノ外ノ端ニキテウメンアリサスガハ佐々木掛ノ如シ無左右（ムサウ）也サスガノ出入ノ穴ハヘウタン形ニスカシタリカコ頭ノ下ヨリ舌先ノ外稜（ソトカド）マデ五六ノ矩（カネ）ニ分タリ惣體無文ノ鐵地ニテ内ハ朱ニテヌリカコクビノ正面ニ金澤ノ住ト銘アリ今片方ノ鐙ニモ銘同ジク金澤ノ住トアリ金澤ハ武藏國ノ地名也是古所謂武藏鐙也加州金澤掛ノ鐙アリカコクビノ正面ニ加州金澤ノ住ト銘アリテ象眼ヲ入タリ惣體サマ〴〵ノ文ヲ象眼ニシタリ全體大形ニシテカコクビアフムキ反リテ鳩胸ノ中大ニ突出テ見惡シサスガ無左右（ムサウ）ニアラズ武藏ノ金澤掛トハ大ニ違タリ云々按に武藏鐙赤鳥小車錦いづれも伊勢貞丈が隨筆也こゝに古色の鐙に金澤住とあるのみを證にて武藏の金澤にて作りたらんといへるは信（ウク）がたし加州金澤作の古鐙に象眼なきも形の異なるもなしといふべからず○與清曰五六鐙はもと武藏國より作り出せる木鐙にて今の江戸の赤坂氷川明神の社邊の里ふかく胡祿（アナグヒ）または鐙などの武器を作り出けんより胡祿（コロク）の里といひ社の名も小六（コロク）神社などよべりし也これ神名帳の荏原郡の磐井神社なるべし磐井といふよしは石井（イハヰ）の義にて井池などありしゆゑの名也さて胡祿の郷といふは和名抄に洩たれど和名抄の郷名の部は郷司ある里のみを擧られたりと見ゆれば古書に和名抄に載られざる郷里の名おほく散見せり郷も里も通はし稱て郷司はた里長（リチヤウ）ともいへり六郷といふ地名もこの小六の里を省て六郷といひこゝの住人の稱號を六郷といひその六郷氏が領せし村々を六郷領といひけんは下總の印東（インドウ）庄を省て東庄（トウ）といひそこの領主を東氏と稱せるがごとし又美濃國に呂久（ロク）の渡ありこれも胡祿の里を省てさいふにても有べしさて武藏の赤坂邊古の胡祿の里にてそこより作り出せる鐙を五六鐙といへりと見ゆ胡祿とも小六とも五六とも通用して書ると古の例なれば文字に泥（ナヅ）ておもふべからずかゝれば武藏鐙は木鐙の事にて五六鐙ともいへる也五六の寸法によれる名といふもその寸法正しく五寸六寸に當れるにもあらねば從ひがたし

(七十三)『壺碑　顯昭法橋が袖中抄十九の卷(廿七丁右)いしぶみの條に「いしふみやけふのせはぬのはつ〳〵にあひ見てもなほあかぬけさかな」顯昭云いしぶみとは陸奥のおくにつものいしぶみあり日本の東のはてといへり但田村將軍征夷之時弓のはずにて石の面に日本の中央のよしをかきつけたれば石文(イシブミ)といふといへり信家侍從の申しは石の面ながさ四五丈ばかりなるに文字をゑりつけたりその所をばつぼといふ云々それをつもとはいふ也私云みちのくには東のはてと思へどえぞの島はおほくて千島ともいへば陸地をいはんに日本の中央にても侍るにこそ云々按「いしふみやけふのせは布」云々は堀川百首後朝戀の條に出て藤原仲實が歌也夫木抄(雜十五 布部)には初句「いしふみの」と有新撰歌枕(四卷陸奥部)には果句「あはぬ君かな」に作りたれど誤也さて此袖中抄の文和語連珠集(四卷)にも引たりき○西行山家集下卷(廿七丁右)題しらず歌に「むつのくのおくゆかしくそおもほゆるつほのいしふみそとの濱風」按古寫本には初句「むつのくにの」に作れり夫木抄(廿五卷 雜部七)濱部に此歌を載て初句「みちのくの」と有これを正とすべしさて外の濱によみ合せたれば多賀城とは所殊にて南部の北部坪村に有し成べし○慈鎭拾玉集五の卷(廿丁左)に建久六年に前右大將賴朝卿東大寺供養にあはんとて三月四日入洛の後地頭なにかのさだして五月迄在京の間內裏にて對面したりき又六波羅の家にてもあひつゝちぎりなど淺からず其後又つかはしたりしかば殊にものゝたとへに人の心の我身ならねばと歌にも又かゝるてにて御返事こそなにはの事もとおぼゆれなど申たりしかば返事に消息の中に何とはなき樣にかきませて申遣したりし云々副遣歌「おもふ事いなみちのくのえそいはぬつほのいしふみかきつくさねは」たちかへり又返事に「みちのくのいはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ」按新古今(雜下)に前大僧正慈圓文にては思ふ程の事も申つくし難きよし申つかはして侍ける返事に前右大將賴朝「みちのくのいはてしのふはえそしらぬ」云々と有また和歌名所追考(百八の卷)陸奥宮城郡に拾玉集を引て「陸奥の壺の碑行て見んそれにもかくしたゝまとへとは」といふ歌を載たり契沖法師が新古今の書入にも此歌を引たれど拾玉集の印本には見えず○六百番歌合(六の卷十六番左)遠戀に顯昭

「思ひこそ千しまの奥をへたてねとえそかよはさぬつほのいしふみ」按此歌夫木抄(廿三卷 雜部五)島部にも出せり○夫木抄(廿二卷)雜十四文部に百首歌寂蓮法師「みちのおくつほのいしふみありときくいつれかみひのさかひなるらん」按みひのさかひ寫本にはこひのさかひと有和歌名所追考(百八卷)に引たるには字にて戀のさかひと書たり寂蓮家集には見えず○同書同部に家集述懷百首歌清輔朝臣「いしふみやつかろのをちにありときくえそ世中を思ひはなれぬ」按清輔家集に述懷百首のうちとて此歌を載たり津輕のをちとよめるにても多賀城の所ならぬを知べし○背梧春夢草(下卷 雜下)に壺の石文の人愚が草菴に數年ありし俄にわづらひてうせにしかばかなしびにたへず「おきふしになれし人故みちのくや名さへうらめしつほのいしふみ」○歌枕名寄(廿八卷 東山部下)陸奥下に壺石文(或碑)新古十八前右大將賴朝「みちのくのいはてしのふは云々」良玉懷圓法師「日數へてかくふりつもる雪なれはつほのいしふみ跡やなからん」法橋顯昭「おもひこそちしまのおくをへたつともなとかよはさぬつほのいしふみ」按賴朝卿の歌は拾玉新古今に異なる事なし懷圓法師が歌は和歌名所追考(百八卷)に引てこれはた違なし歌枕名寄印本に懷田異本に懷圓に作るよし記したれど懷田は誤なるべし顯昭の歌六百番歌合夫木抄などに三四の句「へだてねどえぞかよはさぬ」とありてこゝと異也新撰歌枕(四卷陸奥部)にも三四の句「へだつともなどかよはさぬ」に作れり○阿佛轉寐記(詳書類從三百廿一卷廿六丁左)におなじ世ともおぼえぬまでにへだゝりはてにければちかの鹽がまもいとかひなき心ちして「みちのくのつほのいしふみかきたえてはるけき中と成にけるかな」○長明發心集七の卷(廿二丁右)心戒上人跡をとどめざる事の條にみやこあたりはすみにくしとてえびすがあくろつがるつぼのいしぶみなどいふかたにすまれけるとかや云々按此文にても陸奥のはてにて津輕わたりにありときこゆえびすがあくろとあるあくろの三もじ寫誤あるべし○西行物語(中卷廿丁右)にかくてつぼの石ぶみぬまたちなどいふ所々を過てある野中を過るにことありがほの墓の見えけるを草かりけるをのこにあれはいかなるはかぞととひければこれなん實方の中將と聞えし人の御はかといふをきゝて云々按此說によれば壺碑のあり所實方中將の墓より

もこなたときこゆれどここは後に筆記して西行物語と名づけたる畫卷の詞なればたしかなる證にはしがたし○速水房常が見聞私記前編六の卷は坪碑何ノ比ヨリカ土中ニ埋レテ知人ナシ中比ノ詠歌夫木集ニ「陸奥のつほのいしぶみありときくいつれか戀のさかひなるらん」寂蓮○寛延三年七月上旬南部遠江守殿ノ家臣舟越上藏入魂ナリ其後物語云南部森岡領七戸ニ壺村ト云所アリ石文ト云ハ是歟千引ノ石文ト云此石ハ年久ク見エザル由也古歌モ有レ之由也千引明神ト云社有レ之云々歌ニ詠ズルハ右ノ石文ナルベシ云々ツボ村ニハ美女ノ出ル所ノ由也云々○高野直重が和歌名所追考百八卷陸奥宮城郡部に雲葉抄に壺の碑を千引の石と同事に其故事をかゝれたり當時南部領七戸の內に坪村とてありそこに千引の石とてあり云々同書百十一卷陸奥津輕部千引石の條に雲葉和歌抄に忍誓と申連歌師くだりて坪の石文苔むしたるをあらはして文字書うつし給ふその後見しほどに我等もうつして所持す役碑の在所宮城郡岡邊にあり高森殿守護にて石に魂ありて人にたゝりしとて他所へ引捨んとて人夫をあつめ家々男女老若をふれしに小家もちたる若き女の明日の千引に出よといひしにやもめ女の事いかで人夫にならんと申さらばあすより此家にはかなうまじとあれば此女のこのほどゆくへもしらぬ男の時々かよひけるにあはれこよひいざま乞ていづ方へもゆかんと思ひてまちけるに風は昨夜より聲いよ〳〵うらむと詠じてきたりぬ女盃をとりてすゝめ涙をながししか〳〵の事かたりて此屋にて見え奉らん事こよひばかりといひしに男云やうたとへ千引の石なりとも精魂入なば一万人が力も及ばじたゞ出て見よ人夫にはまじらでひけざらん後われ一人してひけ其時ふしぎの者と思ひて財をあたへば富貴の身と成べしゆめ〳〵ことばあだならじとてかくよめる「千引ともまひきともいへ引れしよ君し獨のなさけならすは」とてなく〳〵立わかれぬさて役所に出けるに人々數万人あつまりて此石をさま〴〵と引どもうごかず二千人三千人までひけどもひかれず時に此女一人してひかんと申守護きゝて狂人か我をあざむくかとありしにたゞ今目に見えん事成べしひかれずばつみに沈めたまへとて人夫を拂ひ一人綱に手をかけしに車輪のめぐるがごとくさら〳〵と走りければ神か佛かとて守護あがめて財をあたへ所知するほど

に富貴の身と成し也ちぎりし男の精なるべし已上猿樂諸に千引甲斐守何某知行とあり如ニ本文一北郡少西に有ニ千引村一追考此所盛岡領の內七戸に坪村といふに其名あり其石當時は土中に埋れて不レ見其上に社あり號ニ千引明神一石ぶみの御山ともいふ其下に壺川とて流あり但壺碑と千引の石と同事のやうの雲葉抄の說又此所にもいひ傳ふる俗說也云々津輕領の內野邊路と橫濱と云七里の間に千引明神の社あり云々按雲葉抄に彼碑の在所宮城郡岡邊にありとも文字を書うつしたりともいへるは多賀城の碑の事と聞ゆされど千引石の物語は北郡千引明神の地の事なれば彼此混雜せるものなるべし○古川辰が東遊雜記九の卷に南部北郡千引明神此所坪石文の眞跡也土人千引の森とも云別當を敎岩坊と稱して妻帶の僧也津輕龍飛鼻より三十里の入海にて幅は僅二里三里廣所四里云々千引明神の社二間に三間檜皮の屋根にて其上に草葺の上屋をしてあり其地びやう〳〵として云々鎭守府を置と云々これらの事を見る人考知べし云々按古川辰が說具眼といふべしされど取捨すべき事なきにあらず○伴蒿蹊が閑田耕筆一の卷廿八丁右に重厚なる人東奥行脚の話に「壺碑は南部地に入て七戸より野邊地の間にあり壺川といふ大河に壺村といふ小村も有其傍に千曳の社といふもの是壺碑を納めし所也といへるは謬にて是は千曳の石といふものを埋めて祭れるなり碑は百年あまりのさき大水に流れたり砂石に埋れしならんと傳ふるとぞ云々今仙臺城下市川多賀城の古跡に壺碑とよぶは鎭守府の碑とかや或人はいふ上に西字あるは是西の壺碑にて南部なるは東碑也と此は西の字に付て說をなす者なれども壺の名義壺川によるべければとりがたし「いしふみやけふのせは布はつ〳〵に逢見ても猶あかぬけさかな」是は袖中抄に出たる歌也また「みちのくは奥ゆかしくそおもほゆるつほの石ふみ外の濱風」といふもともに」南部にてよくあへり云々○舊跡遺聞四の卷十七丁右壺碑千引明神宮條につぼの碑は「北郡七戸と野邊地との間に壺村石ぶみ村といふところありこの所にむかし碑ありしゆゑに壺碑と名づけしといひ傳ふ今はその碑なし云々さてこの碑を土中に埋めたるはいかなるよし有けるか今しるべきよしなし千引明神と申せしもいつの頃よりとたしかにはしらねど古くよりしかいひ

けるならん云々げにもつぶらの大臣といふ人名つぶら江などいふ地名も圓の字をよめりつぼつぶ通べればば石碑の形丸かりしより圓碑なるを古へ借字にて壺と書しより女の名なりといひて傳へたるにやこはいと〳〵しひたる說」なめれどいさゝかいひおくになむ○與清按壺碑の在所說々おほかれど盛岡領北部七戸と野邊地との間なる壺村石文村其古跡なると疑なしそは古歌に津輕の遠にありときくとよみ歌のいしぶみそとの濱風とよみ合せたるなどにても宮城郡多賀城ならぬ事明也又日本中央としるしたりといふも多賀城碑に叶はず壺石たえけんはやゝふるき世にてそは缺崩たりとも土中に埋たりとも戰國の比打碎てものに用たりとも今は知べきやうなし雲葉抄などの物語は碑の失たる後に作り出たるものなるべければとり用べくもあらず壺村石文村の名存れるは正しき證にて千引明神はた石の緣あればかた〴〵疑なし千引は神代紀上卷に千人所引磐石とありて千人して引ばかりの大石の名なり碑石長四五丈ばかりといへば千引石ともいふべき也坪といふよしは石の形楕圓なるまゝを碑にしためれば圓の碑の義にて坪も壺も借字なるべしさて此碑を建けんはいづれの代とも知べからず田村將軍書つけたりとも神代よりありともいへるなどは正しき說ともきこえず○右所レ答二於阿波少將君之問一也』

（七十四）『多賀城碑　日本總國風土記第百六卷陸奧國宮城郡部に坪浦在二松山之右一出二溫湯一坪碑有二鴻之池一今廢爲二故鎭守府門碑一惠美朝獦立レ之見雲眞人淸書也記二異域本邦之行程一令二旅人不一レ爲レ迷レ塗按一本朝獦を押勝に作り眞人を道人に作れり總國風土記は寬永以後の僞書にて信用すべきにあらず坪浦といふ地名末松山邊にあるとなく見雲眞人といへるも姓氏錄に所見なし多賀城碑と坪碑ととりちかひて書たるなどいづれも笑ふにたえぬひがと也○安藤爲章が年山紀聞一の卷十四丁左に壺碑奧州宮城郡市川村にあり佐々介三郎宗淳先年西山公の命をかうふりて一覽のためにかの所にいたりてこれをうつし侍りぬ今加レ點高六尺三寸橫三尺一寸厚一尺

多賀城

去レ京一千五百里

去二蝦夷國界一一百廿里

去二常陸國界一四百十二里

去二下野國界一二百七十四里

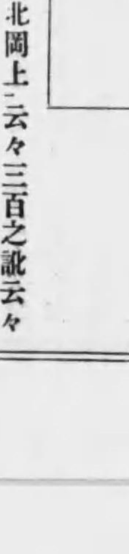
去二靺鞨國界一三千里

此城神龜〔元年歲次二甲子一按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所レ置也天平寶字六年歲次二壬寅一參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦〕修造也

天平寶字六年十二月一日

按するに大野東人は〔紀職大夫果安の子なり云々〕碑もその類とみえたり○按此も壺碑と多賀城碑とを辨別せざる說なりまた碑額に西の字あるとをいはず○源義和が奧羽觀迹聞老志六の卷宮城郡部上に多賀城或曰末篇高森多賀國府相同且高多賀訓同國府謂其總名森指其地實同處也在二市川村南一云々仍稱二國府一者不レ可レ疑按右に引たる續日本紀吾妻鏡などの文要をとれるにて本文のまゝにはあらず又云壺碑在二市川村中多賀城址一云々

〔壺碑圖〕



碑面圖略之

按神龜元年甲子〔廼丁二聖武帝元年一天平寶字六年壬寅丁二廢帝四年一云々藤原惠美朝臣朝獦云々爲二陸奧按察使兼鎭守將軍一云々同六年十一月丁酉爲二東海東山節度使一十二月己巳爲二參議一云々○按義和が觀迹聞老志の說はた壺多賀混誤をまぬかれず○高野直重が和歌名所追考百八の卷陸奧宮城郡部に此所は仙臺より二里計東市川村といふ少東の岡の上に石碑立あり西向なり此邊上古城の跡にて大石ども所々に殘りたり國の府中也國府の池とて今は田地の名になりたり和名抄鄕名の內に多賀あり則是也寬文九酉年——壺の類也いしぶみは石碑そこにあればなり多賀國府云々〔今は畑と成し〕按これも壺と多賀をわいだめざる說なり○伊藤長胤が盡簪錄四の卷雜載篇に壺碑高六尺五寸濶三尺一寸界方內縱三尺八寸五分橫二尺六寸碑背類二長麗一

此碑在二奧州宮城縣市川村北岡上一云々三百之說云々

○與清曰多賀碑の事を記せし書こゝに引出し外にも倭漢三才圖會（六十五卷陸奥部）千賀屋草（十卷）東國旅行談（四卷）東海談坪碑考などいと〳〵おほくて枚擧に遑あらずされどいづれも坪多賀を混合せし伯仲の說也そも〳〵多賀城碑の在所は仙臺の東北方市川村高森にて多賀城の舊蹟なり碑額には西の字を題せるに就てこれを西碑とし南部領の坪村なるを東碑ぞなどいへるは碑文の趣を辨ざるひがごと也こは多賀城のありしむかし都の方西なればそなたを面にして立たるよし也外に意義ありとおもふべからず○右所ㇾ答ニ於阿波少將君之問一也○伊藤長胤が輶軒小錄（第一則）に壺碑之事中華ニテ〔金石ノ究メテ古キハ周ノ鼎河ニ沈ミ秦ノ璽夷ニ沒シ云々本朝ニテ碑碣ノキハメテ古キハ奥州壺ノ碑ニシクハナシ昔賴朝公ノ和歌ニ詠ゼラレシニ因リテ人々記臆スルコトナリ其時ヨリモ世ニ故事ト成リテ古今ノ間ニ名高キコトナリ其碑自然石ニテ其背馬鬣ノ如シ高六尺五寸濶三尺一寸其中ニ界アリソノ竪三尺八寸五分横二尺六寸奥州宮城郡市川村ノ北岡ニアリ上代ニ多賀城ト云フ城地ノ舊跡ナリ其時ノシルシナリ筆者何人タルヲシラズ云々藤原朝獦ト云フハ孝謙ノ寵臣大師惠美朝臣押勝ノ子也云々其歷官ノ次第續日本紀〕ニ詳也碑ニ記ス處ト相違ナシ賴朝公ノ和歌新古今雜下ニアリ云々○桃青が奥細道（十九丁左）に壺碑市川村多賀城に有つぼの石ぶみは〔高さ六尺餘横三尺計歟苔を穿ちて文字幽なり云々〕洞も落るばかり也云々○本朝奇跡談三の卷（八丁左）に陸奥國市川村多賀城の跡也〔本丸の邊には礎（イシズヘ）の跡今に所々に有往古此城の大手に壺の石碑を立るとぞ云天平寶字六年惠美朝獦の作り置ける也享保六辛丑年迄星霜九百八拾八年に及べり多賀城より京師及四方の行程異國までの道法を記す此碑顯然として今尙存せる誠に皇和無雙の舊跡也諸國よりの旅客何れも此所に尋來る由元祿の頃國主より雨露霜雪を凌んために覆（スポ）をつくる（壹間四面瓦葺四方格）〕此所古歌多し云々○多田義俊が秋齋閑語四の卷（百七十三段）につぼの石踏は奥州鎭守府の門に有たる立石（タテイシ）也諸方への道法をかきし物也大野東人と云人神護景雲年中に立ㇾ之續日本紀に見えたり其後蝦夷朝獦（エミシノアサカリ）と云人再興すと也云々伊勢貞丈が評に踏の字を用ひしは誤也いしぶみは石文にて碑銘の〔事也壺碑はじめには多賀城と題して其下に諸方の行程里數を記して

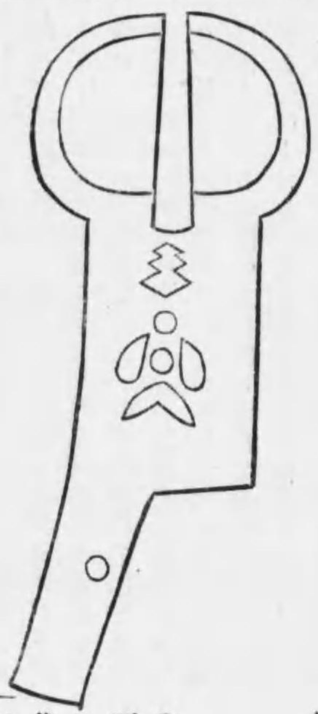
次に此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也天平寶字六年十二月一日と見えたり右の文首に多賀城と題し次に此城神龜云々とあれば多賀城は大野東人の置し城也其後朝獦此城を修造したる也かの惠美朝獦此城修造の時壺碑を立し也多賀城の事續日本紀聖武天皇九年夏四月の紀に始て見えたり神護景雲といへるは違へり又蝦夷の字誤り也〕蝦夷は「エミシ」とよむ惠美にあらず云々○伊勢貞丈が麻久奈岐（廿段）に壺ノ石文奥州ニ遊覽セシ人ノ云市川村ニ壺ノ石文アリ土ノカタマリタル如クナル脆キ石ニテ後ノ方處ニ新ニカケタルアトアリ文字ノ彫ヤウ甚淺シトゾ此碑文打タルヲ家藏セリ云々○橘南谿が東遊記後篇一の卷（一丁右）に名におふ壺の石ぶみは〔奥州仙臺の東北多賀城の古跡にあり云々〕是等も東の壺碑にやとおもはる云々按多賀城碑に西と題せるは西の方に向けてたてし碑にて京都の方を面にしたるゆゑなり東西の二碑あるよしにはあらず○藤井貞幹が好古小錄上卷（十七則）に陸奥國多賀城

碑（碑石高六尺餘濶二尺四寸許）

碑面圖略之

此碑往年宮城郡〔市川邑〕ノ土中ヨリ掘出ス多賀城ノ廢址ナラン云々〕按こゝに濶三尺四寸許とあるを集古十種（碑銘部一）には三尺餘とあり年山紀聞に高六尺三寸横三尺一寸厚一尺云々奥羽觀迹聞老志に自ニ碑首一至ニ石根一六尺五分圍九尺六寸八分石基九尺三寸七分碑後石形三稜界中上下四尺五分濶二尺六寸四分云々盡誉錄に高六尺五寸濶三尺一寸界方內縱三尺八寸五分横二尺六寸碑背類ニ長鬣一云々など見ゆ』

（七十五）鐙の紋の板の上方（カミ）に三階菱を付る事『鐙の紋の板の上方に三階菱をすかしにしたるは鎌倉放實騎射に用といふしるしあるを近世はたゞ作のしるしに付ることゝなれりといへどこは小笠原家の騎射の時用たるゆゑ小笠原の家の紋を附ることをのちには他にて小笠原流の騎射する家にも此紋を用ひしな



松屋筆記卷之八十八

平小山田與清稿

（一）不窮曲事　唐書七十六卷后妃傳上高宗廢后王氏傳七丁に陛下不レ窮二其誅一云々又高宗則天順聖皇后武氏傳八丁す に詭變不レ窮云々また向性簡重不レ曲二事上下一云々五代史四十二卷雜傳廿丁す 趙巖傳十四丁す に許州溫縮尤曲二事巖一云々按に不窮の字面佩文韻府に脫せり曲事の字面は本朝俗文常に所レ用也

（二）同居義居　『五代史六十二卷三丁左 南唐世家に州縣言民孝悌五代同居者七家皆表二門閭一復二其繇役一其尤盛者江州陳氏宗族七百口每レ食設二廣席一長幼以レ次坐而共食有二畜犬百餘一共一牢食一犬不レ至諸犬爲レ之不レ食云々吳曾が能改齋漫錄四卷辨誤 五世九世同居の條に王彥輔塵史載張全翁朝議爲レ子言潞州有二一農夫五世同居一太宗討二幷州一過二其舍一召二其長一詢レ之曰若何道而至レ此其長對曰臣無レ他惟能忍耳此與二唐張公藝事一同按唐書張公藝九世同居高宗有レ事二太山一臨二幸其居一問二其本末一書二忍字百餘一以對天子爲流涕云々羅大經鳴之道一索盡也喩二婦人知一外事一雌代レ雄鳴則家盡婦奪二夫政一則國亡云々など古書の所見おほく毛詩にも婦之長舌維厲之階また哲婦傾レ國などもあり』

（三）人名に神佛の名をつく　續日本紀に孔子釋迦などいふ人あり八幡太郎賀茂次郎新羅三郎八幡六郎舍那王觀音遊女の名の類いとおほし唐書七十九卷一丁左 隱太子建成字毗沙門とあり

（四）忌日菜食　忌日の事唐にも說あり唐書七十九卷十四丁右 霍王元軌傳に高祖崩去レ官毀瘠甚服除遂菜食布衣終身至二忌日一輒累晝不レ食云々菜食は精進也物語にさうじものと見ゆ釋氏要覽下五十六丁ウ に忌日の事有 頭書 南史廿六ノ四丁ウ 袁粲傳に孝建元年文帝（宋也）諱日群臣竝二於中興寺一八關齋中食竟聚孫別與二黃門郎張淹一更進二魚肉一食云々

（五）段物　今俗絹布を段物といへり唐書八十一卷六丁右 韋懷太子傳に帝優二賜段物數萬一と見ゆ

（六）酒令　唐書九十四卷十二丁左 李君羨傳に會二內宴一爲二酒令一各言二小字一云々張山來が酒令一卷あり五代史三十卷五丁左 史弘肇傳に酒酣爲二手勢令一といへるも負人罰爵を呑事にておなじく酒戲也

（七）烏を射て婚を定む　葦屋の處女墓　唐書七十六卷后妃列傳上二丁左 寶皇后傳に父毅在レ周爲二上柱國一尚二武帝姉襄陽長

公主ニ入レ隋云々毅常謂レ主曰此女有ニ奇相一且識不レ凡何可ニ妄與一人因晝ニ二孔雀屏間一請レ婚者使レ射ニ二矢一陰約中レ目則許レ之射者閧ニ數十一皆不レ合高祖最後射中ニ各一目一遂歸ニ於帝一云々謂レ主曰とは父資毅が妻の長公主に女の事を謂るよし也高祖は唐の高祖李淵也此事大和物語にむばら男どちぬ男が生田の川の水鳥を射たるとおなじ日のものがたりといふべしこれ津國葦屋の處女墓の故事にて万葉集九の卷十九の卷などに歌あれど水鳥を射たるよしは大和物語を出處とす

(八)木生類などに人の官位號など授く　古事記に桃を意富加牟豆美命と稱し史記に秦始皇松を五大夫に封じ談錄に唐武后柏を大夫に封す唐書七十六卷后妃傳上十八丁右則天傳に遂封ニ嵩山一禪ニ少室一冊ニ山之神一爲レ帝配爲レ后封壇南有ニ大槲樹一赦日置ニ雞其杪一賜ニ號金雞樹一云々頭書鹽尻八上五位鷺事俗說辨卅八

(九)歌舞伎　歌舞伎の字面類聚國史に見ゆ唐書七十八卷十丁右宗室列傳河間元王孝恭傳に性奢豪後房歌舞伎百餘云々

(十)寒林葬尸陀林野葬黃阮　野葬の事は舊本今昔物語の類本朝の古書所見おほし所謂林葬也慈恩傳三卷十七丁左數遺ニ火災一乃立ニ嚴制一有レ不ニ謹愼一先失火者上徒ニ之寒林一寒林卽彼國棄レ屍惡處也云々翻譯名義集三卷廿七丁左林木篇に尸陀正云ニ尸多婆那一此翻ニ寒林一其林幽邃而寒也僧祇云此林多ニ死屍一人入寒畏也法顯傳名ニ尸摩賒那一漢言ニ棄死人墓田一四分名ニ恐畏林一多論名ニ安陀林一亦名ニ晝暗林一云々釋氏要覽下卷五十二丁左送終篇に葬法天竺有レ四焉一水葬謂投ニ之江河一以飼ニ魚鼈一二火葬謂積レ薪焚レ之三土葬謂埋ニ岸傍一取ニ速朽一四林葬謂露ニ置寒林一飼ニ諸禽獸一自注に寒林卽西域棄尸處僧祇律云謂多ニ死尸一凡入者可ニ畏毛寒一故名ニ寒林一今云ニ尸陀林一訛也唐書七十八卷宗室列傳十六丁左李暠傳に大原俗爲ニ浮屠法一者死不レ葬以レ尸棄レ郊飼ニ鳥獸一號ニ其地一曰ニ黃阮一有ニ狗數百頭一習レ食レ胾頗爲ニ人患一吏不ニ敢禁一暠至遣捕ニ群狗一殺レ之申ニ厲禁條一約不ニ再犯一遂革ニ其風一云々法苑珠林百十六卷六丁右遣送部に依レ如ニ西域一葬法上有レ四一水漂二火焚三土埋四施林云々諸經要集十九卷十七丁右遣送緣篇三藏法數十九卷十四丁左四葬の條大藏法數廿二卷四丁右四葬の條などにも出てそは釋氏要覽の說に異なる事なし

(十一)山新突出　唐書七十六卷后妃傳上十三丁ウ則天傳に新豐有レ山因レ震突出大后以爲ニ美祥一赦ニ其縣一更名ニ慶山一荊人俞文俊上言人不レ和疣贅生地不レ和堆阜出今陛下以ニ女主一處ニ陽位一山變爲レ災非レ慶也云々按伊豆國新島出來し事三代實錄に見ゆ八丈の富士も近代突出せり實永山は富士の疣贅なり伊豆の田代にても近比山突出せり晋書惠帝紀永熙四年夏五月蜀郡山移云々梁寄武帝紀上廿八丁ウ是以谷滿川枯山飛鬼哭七刷已頭書檜古事談一卷(群書類從本上卷廿一丁左)に一條院御時危云々頭書大和國添上ノ郡に檜山ノ峰二三町バカリ未申ニアタリテ小山ノ高サ八九尺バカリナルニ生タルウエ木モハタラカズシテ移シオキタリケリ其峰ノ上ニ藏アリケリ藏ノ中ニ佛像アリケリ五ケ日ヂキ經テ風吹タフシテケリ何ノ故トシラズ不思議ノ事也云々此事百練抄四ノ十一丁オ

(十二)晝分夜分　五代史五十八卷九十丁左司天考一に晝夜刻置ニ日入分一以ニ日出分一減レ之爲ニ晝分一用減ニ統法一爲ニ夜分一云々五夜辰刻置ニ昏分一以ニ辰則一除爲ニ辰數一云云倍ニ晨分一五ニ約之一爲ニ更用分一又五ニ約之一爲ニ籌用分一云々

(十三)天變地妖本朝にては其應なし　余五十六年來或彗星或大白貫レ月或異光飛行或地震大風さま〴〵の天變地妖を見聞すれどもおほかたその應あることなし漢土の書にこちたく其證を擧本朝の古書にもこれかれ見えたれど今のありさまをもて考ればいかにぞや五代史司天考二一丁右に春秋雖レ書ニ日食星變之類一孔子未ニ嘗道一其所ニ以然一者〔故其弟子之徒莫レ得有レ所レ述ニ於後世一也然則天果與ニ於人一乎果不レ與ニ於人一乎云々〕考者可ニ以知一焉とあるをおもへばかしこにても秦漢以來の學者災異に惑て天文五行の繁說をおこせし也

(十四)漢土の州名を某軍といへる始　五代史六十卷廿二丁左職方考に自ニ唐有ニ方鎭一而史官不レ錄ニ於地理之書一以謂方鎭兵戎之事非ニ職方所レ掌故也然而後世因習以レ軍目レ地而沒ニ其州名一今又置レ軍者徒以ニ虛名一升建爲ニ州府之重一此不レ可ニ以不レ書也自注に若ニ今永興一本節度軍名而今命ニ守臣一遂曰ニ知永興軍府事一而不レ言ニ雍州京兆一是也とあるをおもふに州名を軍に換たるは唐の藩鎭に起れる也○本朝にも河內職攝津職は京職に據り和泉監芳野監は匠作監に據れる國名也き後にはことごとく州國に改られたり

(十五)背を捎て悅　五代史六十九卷二丁左南平世家に莊宗大悅以レ手捎ニ其背一季興因命レ工繡ニ其手跡於衣一歸以爲ニ榮耀一云々季興は高季興也

(十六)天永寺國分寺安國寺大成寺　嚢尻八上巻に鳥羽院ノ天永年中ニ六十餘州被定ニ天永寺尾張ノ天永寺ハ春日井郡味鏡村ノ護國院也美濃ノ天永寺ハ加茂郡細目村ノ東光寺也東光寺今在ニ大梁村云々波佐末垂仁紀以ニ鏡字訓之云々按國分寺安國寺大成寺などの類にて天下に建られし也

(十七)書物を本といふ事　書籍を本といふは仁王經の二諦品に修多を翻して法本といふこれ佛の言教諸法の本なるが故とあるよし嚢尻八中巻にいへり

(十八)主上御疱瘡の時坂本山王の猿も疱瘡す　嚢尻九上巻に主上御疱瘡の御事ある時は坂本山王の社に養へる猿必疱瘡すと云又云帝王のもがさ輕ければ猿の病重く皇家重らせましませば猿やがて快くなると云傳たり實に一奇事といふべし云々

(十九)衝重三方四方　嚢尻九上巻に衝重(築重とも書せり)道長公の記に賜ニ公卿衝重雨三献云々ついがさねを折敷の事と云は盡さゞるにや永記除目の條に衝重高さ七寸計り也と有且其圖今俗に云三方也但是に公卿と殿上人との異あり大三方をば公卿ともいふ(公卿の食盤なる故なり)殿上人は今堂上家に用小四方なり(田舎には櫓代肴代など居る臺とのみいふ)然ればば三方も足打ももとは皆衝重也云々伊勢貞丈雪隱之說(廿七丁左)に衝重ハ上三方四方ト同下丸ク仕タル物ト云說アリ如何衝重ハ三方四方ノ惣名ニテ候上ノ盤ト下ノ足ト衝キ重ネタル故也下ヲ丸クスルト云ハ非也三方四方ノ外ニ別ニツイガサネト云モノ無之云々按衝重は三方四方の總名也上の盤と下の足と衝重ねたるゆゑの名也三方一名公卿ともいふは公卿の供膳に用ればなり衝重三方四方公卿殿上人などいふ事所見おほし他日引出て定むべし賀茂眞淵古器考にいへる說はいかにぞや

(廿)蠻繪　蠻繪の事物具裝束抄に見ゆ梅窓筆記後附に其圖あり大成錄廿五上巻嚢尻九中巻など考べし

(廿一)改元次第條事定　改元の事元秘抄江家次第十八などに見ゆ條事定といへるも改元の時也嚢尻九下巻にくはし同十二上にも頭書(蜀志三後主傳十三丁ウ)

(廿二)居士　居士の事嚢尻十中巻(實廿七巻)に禮玉藻能改齋漫錄韓非子輟耕錄などを引ていへり

(廿三)名古屋三左衞門(山三郎とも)出雲みこ國　嚢尻十中巻(實廿七巻)名古屋三左衞門が事見ゆまた尾州愛智郡古渡村の人にて氏は名古とのみいへり同十七(實四十七)巻にも頭書(名越山三)

(耶事武邊咄聞書七)

(廿四)だて者關東小六　同巻に按雍州府志以ニ名古屋氏爲ニ京師戲場男風之始不知孰是因云關東小六者本伊達某僕在ニ東都而游俠於曠當時呼ニ之伊達小六今以ニ治容游俠者曰ニ太天似ニ彼風也頭書(甲陽軍鑑六ノ十四品十九丁ウに隨分だてをする侍云々同十三巻四十上品廿七丁ウに二番にだてものと云は武道の役にたつ人にて候云々)

(廿五)日本三無　嚢尻十中巻(實廿七巻)に日本三不足とて鞍馬に無福人八幡に無武勇多賀無長壽といふ事を記せり

(廿六)前鬼後鬼　吉野前鬼後鬼の事嚢尻十下巻に見ゆ頭書(武隱叢話四巻に廣島濵人所持覺書に云淺野但馬守長晟大坂表在陣の跡にて熊野北山一揆おこり大將は大峰の前鬼津具と中者山賓と申者大將にて候云々)

(廿七)津島午頭天王　祇園午頭天王の事嚢尻十一の上巻同(二處アリ)十三巻十五巻に見ゆ

(廿八)居士號を賜　千利休に居士號を賜はれるよし嚢尻十二上巻に見ゆ

(廿九)茶の名所栂尾宇治などの始　嚢尻十二上巻に鹿園院義滿公はじめて宇治の里にうゑさせられし事七品の事栂尾の事など見ゆ肥前平戸うれし野山城栂尾宇治尾張の內津駿河の安部肥前の相良うれし野など(同所にや)きこゆ

(三十)戒名に院號つく事　戒名に院號を付る事(禪宗ニ始ル)嚢尻十二中巻にいへり頭書(戒名ハ漢土ノ私諡ノ類也制度通七ノ廿六ウ)

(卅一)饗膳に七五三五本立七本立など云事　五本立七本立九本立七五三などいふ饗膳の事嚢尻十二ノ下に見ゆ

(卅二)大黑といふかくし女　寺內にかくしおく淫婦を大黑といふよし狂歌もあり嚢尻十二ノ下に見ゆ

(卅三)茶蘭　茶蘭實名は眞珠蘭とも魚子蘭ともいふよし嚢尻十四の上にいへり

(卅四)淨土宗四國師一禪師　嚢尻十四上巻(實卅八)に淨土宗國師號四人禪師號一人　通明國師(法然)　善惠國師(證空)　佛立惠照國師(黑谷等照)　普光觀智國師(增上寺源譽)　記主禪師(鎌倉光明寺良忠)　按通明國師後に圓光大師と贈號あり本朝高僧傳の類にくはし

(卅五)菩薩號七人　同書同巻に日本僧家菩薩七人　菅原寺行基菩薩　大谷寺光照菩薩(法然)　招提寺大悲菩薩(覺盛)　西大寺興聖菩薩(叡尊)　光泉寺忍性菩薩　大經寺大乘菩薩(日澄)　立政寺興正菩薩(知通)　此外久遠寺

日蓮モ菩薩ト稱ス但不レ詳ニ勅授之時ニ云々

(卅六)尊者號　又云眞言密嚴尊者興教大師　天台天海尊者慈眼大師　云々モ

(卅七)旁若無人　鹽尻十四中に文字の置處異なれども其意同き事あり旁若無人史記荊軻傳晉書列傳　若旁無人左太冲詠史詩　これは旁を傍に作字同傍若無人とは俗には事の狼藉なるをいへど本意は肩をならぶる者なきといふ也云云

(卅八)大師粥　鹽尻十五卷實ハ四十一卷　に或曰我俗十一月天台大師講の紅粥を喫し今日も一歳を添す是何の謂ぞ予曰これ冬至の粥を誤傳へ大師忌の修齋に混じ賀す按に陸放翁が冬至一聯に家貧輕レ過レ節身老怯レ增レ年注云鄉俗喫ニ冬至飯一即添ニ一歳一是を以知べし云々與清按武相の俗十一月四日に大師粥とて小豆粥に河漏(カワモリ)をかてゝ喫事あり十四日廿四日同樣にして三大師粥(ガイ)といへり

(卅九)秋葉山光明山　鹽尻十五卷實ハ四十一卷　に遠州秋葉山大登山秋葉寺本尊觀音三尺坊鎭守なり又同國光明山は大鏡山光明寺と號す本尊は虛空藏也此兩寺曹洞派の古禪刹なり秋葉寺は往昔天野家世々造進せり云々倭漢三才圖會六十九卷地部　遠江國部に秋葉寺在ニ秋葉山一禪宗寺領二十石餘本尊觀音鎭守三尺坊大天狗麓有ニ人家一名ニ乾村(イヌヰ)一有ニ末寺一號ニ瑞雲院一自レ此登五十町山風景最佳每群集特八九月書夜數千人不レ絕就レ中鎭守靈驗異レ他云々

(四十)二階から落ての後はひまに成けり　鹽尻十五卷實ハ四十一卷　に近比俳林去來が狂歌「なとてかくいそがしいとて二階から落ての後はひまに成けり」とよみし質にも浮世のすがた大梗かくのごとしいそがずばぬれまじ物をといふ古歌の心にもかよひ侍らんにや云々頭書二階撮壤集中家屋部屋具類部

(四十一)善光寺大勸進の系圖　信濃國善光寺の大勸進は若麻績東人善光が孫也世に本田善光といふ三國傳記にも見ゆ其系圖鹽尻十五卷實四十一　に見えたり

(四十二)不忍池　下谷不忍池の事江戸の地志どもに見ゆ總國風土記には篠輪津と書たり鹽尻十五卷にも見ゆ

(四十三)瀨戸物　磁器を瀨戸物といふは尾州瀨戸にて製(ツク)れるが專らなれば也鹽尻十五に見ゆ頭書尾張名所圖會六ノ五十二丁ウ(トコナベヤキ)常滑燒の條

(四十四)道路の廣狹幷並樹(ナミキ)　道路の廣狹大中小路等の事令式など所見おほし平信長諸國の驛路をひろくし横五六間に造り左右に柳櫻をうゑさせけるよし鹽尻十五に見ゆ路傍に菓樹を植し事續紀三代極などにあり櫻を植しは義家朝臣の歌によめり松の並木松平の義にや

(四十五)六地藏疱瘡神　六地藏の事鹽尻十五に見ゆ疱瘡神津島にあるよしもいへり頭書疱瘡神及疱瘡之始見ニ于奇說雜篇一八ノ卅一丁ウ

(四十六)マチン　マチンは番木鼈也異名馬伐子といへり馬伐子唐音マチユン也と鹽尻十五に說あり

(四十七)褐(カチ)の色かちん　褐色今かちんといふ鹽尻十六實四十四　にくはし

(四十八)大酒　大酒の事亭子院賜宴記に見ゆ鹽尻十六實ハ四十四卷也　に清の左辨が大酒の事あり淳于髡一石を呑てんといひ廉頗肉一斤酒一斗を飮食すかゝる上戶かぞふるにいとまなし

(四十九)城の多聞(タモン)　鹽尻四十四卷に松永久秀多聞城を築て始て殿守を作り又長屋を作りて士卒を居らしむ後世城を築き此多聞の城を摸して呼て多聞と云事これに始れり云々頭書落穗五(四十七丁ウ)大和軍記云松永彈正少弼久秀大和河内境信貴ト云所ニ山城ヲ築キ居住シ計策ヲ以テ大和國侍ヲ取入往々筒井順慶ヲ倒シ大和一圓取ンノ覺悟ニテ南都東大寺ノ寺僧ヲカタラヒ東大寺少乾方多門山ニ城ヲ取立ツ城ノ長屋多門ト云ハ松永始テ此城ニ長屋ヲ建タル故世以テ名トス大和柿串ヲ二三尺ニスルヿモ松永城普請堅シタジノ爲ニテ付シト云云々老談記卅一丁ウに多聞とは長屋の事のよしくはし　小窓雜筆一ノ廿五丁ウ

(五十)紅毛船の來る由來　紅毛船の貢來るは濱田新三が力也鹽尻十六の卷に委し武家感狀記にも有しやうにおぼゆ(オシイタツクエイタトコ)

(五十一)押板机(オシイタツクエイタトコ)板床の間　鹽尻四十七卷に中比より書院の粧におしいたのかざりといふあり前に人に傳聞侍りしも不レ詳事あり天正本の太平記義詮京落に六間の會所といへるは今所謂廣間なり懸物に本尊脇繪等の名目あり　書院云々机板には王義之が草書云々といへるは書院床の事と見え侍る眠藏といへるは今の納戸がまへの内と見ゆ十二間の遠侍といふは後世燒火間(タキビノマ)ほどの事にや武家の家居古今同じからず云々按參考太平記卅七六丁　に見えたる說也但おし板とはなし机板とあり後の違棚床間などの事ときこゆ頭書甲陽軍鑑十八卷四十八品十九丁ウにたとへば槍木にて木履を一足造りて人にやれば足にはきていかやうなる所をもありくぞ又其木のきれにて佛を作りて人にあたふれば押板の上へあげ香花をもりて拜するぞ云々同十九卷五十一品廿四丁オに武田の御重代左文字の御腰物をおし板の上に立おき給ふ云々

（五十二）圓光大師の號　源空上人に圓光大師の號をたまはり又その名義の事など鹽尻十七卷に見ゆ

（五十三）大神宮に私幣を奉らす東照宮を私宅に祭らす幷紙幣　鹽尻十七卷（實四十七卷）に社毎に紙幣を献ずる事大概定法歟（紙を疊て切り垂木に挿て立る也）只伊勢二所のみ此事なし天子より献せさせましく〳〵て勅幣といふは布帛の筐（ハコ）物等也されば大神宮には庶人の私幣まゐらせざる事是にて知べし諸社の幣も根本木綿疊の遺風也然るに是を參詣の諸人に出させ侍る事いつ比よりの誤にやと荒木田某いへり云々與清曰幣帛はもと玉串の遺愛也金銀幣帛などいふ事百練抄などに見ゆ大神宮に私幣を奉らずといへるも今世東照宮を私宅に祭事禁止せらるゝがごとし但日光より出す御札に東照宮と日光大權現と並書たるのみは庶人の家に祭りても苦しからずとなん

（五十四）假字日本紀　今の假名日本紀は後人日本紀の古訓をとりて平假名本にしたる也釋日本紀十八卷（二丁左）秘訓三に任那日本府（ミマナノヤマトノコトモチ）私記曰案ニ假字日本紀一作ニ任那之倭寧一と見えて日本紀の異本ともいひつべき物なりけんに今傳はらざるは嗟嘆すべし倭寧は倭宰の誤なるべし

（五十五）了然尼　了然禪尼は東福門院の女房なりしが女院かくれさせ給ひて後出家せりくはしくは鹽尻十八に見ゆ

（五十六）小野照崎明神　坂本に小野照明神ありもと忍岡に有しを寛永年間今の坂本（二丁目）には移されし也こは横山黨の氏神なるべし横山黨は小野性にてその先祖小野篁を祭れるにやと鹽尻十八卷にいへり小野照は小野篁の訛にや

（五十七）位牌幷居士號　位牌の事法名の居士號の事鹽尻十八卷に見ゆ

（五十八）始祖先祖高祖曾祖大父などの稱　鹽尻十八に始祖先祖高祖曾祖大父父己子孫曾玄孫來孫昆孫仍孫雲孫耳孫後胤の圖を著して差別を記したり和名抄の父母類子孫類の部に引注すべし始祖始立ニ根基一搬レ業之祖先祖非ニ代々一自ニ始祖之子一至ニ高祖之父一高祖最高在レ上曾祖祖父之父大父祖父和名抄を考合すべし

（五十九）道成寺鐘銘　紀州道成寺鐘は今京都妙滿寺（日蓮宗）にありその銘

紀州日高郡矢田庄
文武天皇勅願所道成寺洪鐘勸進比丘別當法眼定秀
檀那源滿壽丸幷吉田源賴秀合山諸檀越男女大工山
願道願小工大夫守長延曆十四年乙亥三月十一日
與清此鐘銘甚不審也源滿壽丸吉田源賴秀などいへる名延曆の年號に不都合なりまた矢田庄といへるもその比にはいかにぞやこは後人の僞作にや鹽尻十八卷にも載たり

（六十）建盞胡盞　鹽尻十八卷（實五十の卷也）に建盞は建州より製し出せる茶盞也高麗茶碗を胡盞といふ盞は大きに鐘は小き物也我國皿の蓋よりもとづき作れるさかづきを盞と呼ゆる倭俗盞といへば今の繼部さかづきの事とのみ心得たり云々（實書建盞天目の事筆記百五ノ卅七）

（六十一）大木ニ槃游餘錄三編上卷十二丁ウ　に牧の鄉村に祭れるうがのみたまの神の社にたてる楠は七むだき半（ナカバ）ありてこと木はなくこのもとにてめぐり三町あまりがほど月日をさへいとしげりて森なせり云々槃游餘錄三編上下二卷あり吉田雨岡（ウカ）が伊豆に遊べるをりの道の記也牧鄉村は田方郡にあり與清一見せる大木は伊豆國にては伊東の稻荷社に楠五六本あり二丈餘めぐれる木ども也同國宇佐美の八幡に阿竹丸の舟木を切とりし跡の楠あり切杭のまはりより四方にさし出たる枝太きは七八尺もめぐるべし十二本も出たる枝にて一町四方許の森と見ゆ切口の所土際より五六尺餘も上りて其中に疊十二疊許敷べきほどの廣さ也又熱海の來宮の楠はた大樹也これも枯て枝のみ繁茂せり常陸木原の大杉二丈五尺許もめぐるべし松の大樹の事は已にいひたれば省く（實書路記百余車一鳳來寺峠藥師段に御油宿へ出る二三町右の畑中に森一あり八面の宮といふ鎭守あり其神木として根通りさし渡五六間の大木の楠木あり云々○益澤勾菖信州飯田眞言宗普門院にシダレ櫻六抱半の木あり飯田近邊山本村近藤登之助陣屋に七かゝへシダレ櫻有高遠城に五かゝへの櫻あり是はカバ櫻歟シダレ櫻歟不レ詳云々余が舊里上小山田村の養樹院にイト櫻の五尺めぐり許なるが有）

（六十二）舍利瓶幷鎌倉極樂寺　同書同卷十三丁オ　大仁（オホヒト）村の事をいへる條におなじむらに極樂寺はた地中とともなへ來りし所ありて地中の畑ぬし源左衛門といへるもの天明五のとし乙巳にはたをうがちける時ねりがねの筒をほり出し人にも見せけるその比より打つゞき家によき事どもありていさゝかすぎはひのたづきをしも得たりければいと〳〵めでたき寶もちをさづかりぬとてあがまへつゝほこらにいたくひめおきい

まは人にも見せずとなん政直は此里にてかずまへらるゝものにしありければこをさいだてゝかの家にゆきほうもちををがみまつらましとねもごろにこふあるじ手あらひくちすゝぎつゝほこらよりとうでつ筒のめぐりに百三十六字ゑりたりかたちおほきさこゝにゑがけるごとく文字のさまいとよし

極樂寺第三代長老善願上人令利瓶記

先師大德法諱順忍俗姓藤原建久幕府士卒加藤判官景廉孫也父加藤五郎其母又藤氏文永二十一廿七誕生弘安三十六歲隨忍性大德出家受具値興正菩薩別受公家專崇敬將府大守仰戒師万人歸顯密之行化一朝貴濟生之悲願嘗嘉曆元年八月十日辰剋端坐入寂俗年六十二夏蒭四十二

すみもてすりたれど淺くゑりたればうつりがたしよりて文字のならびざま畫などたがはざるやうにうつしとりぬ極樂寺忍性うぢは伴やまとの國磯嶋(シキシマ)の人にして伽藍八十三所塔婆二十基大藏經一十四藏諸州河橋一百八十九所つくり西大寺叡尊は龜山の帝伏見の帝ふかくたふとばせ玉ひ與正ぼさちと諡を下させましゝよしともに元亨釋書にくはし極樂寺は平重時今の所にうつすとかの書に見ゆればもと此所にありしを後に相摸國の鎌倉にうつせしと思はる云々按極樂寺の事は元亨釋書鎌倉志など所見おほかれどもと伊豆國大仁村に極樂寺畑地中といふ字あればその舊跡なること推量すべしねりかねの筒といへるは鍊金の瓶をいへるにて銅鐵を合方し作りたる金也

(六十三)伊豆國大仁(オホヒト)村の古文書幷甲乙人一錢切　又云この村の大仁村也石井五郎左衞門がとほつおやは村長にて豐臣秀次のあそ秀吉のきみとともに小田原北條氏直をほろぼされし時木村常陸介なにがしに筆とらせてたまはせし下文をもてりさいつとしおほやけのはかせ青木敦書字文藏號艮陽おほせをうけて國々にあなるふるき文書どもたづねし時この村よりかの書をさゝげたれば江戸へたづさへかへりほどへてかの下し文にいさゝかたがはざるやうにうつさせたまひもとつ文にそへてかへしたまはりおろそかになせそとのたまはせしといふかしこの家にもいたりて二くさともに見つもとつ文は竪一さかいつきよこふた尺ひと寸(キ)あまりあつぶえしねある紙にていまより見ればいとおろそげなるもの也御(ミ)うつしはその大きさる大高檀紙にてもじのかたちかきざま露たがふ事なし

條々

伊豆國田中鄉內大ひと村

一地下人百姓等急度可レ令二還住一事

一軍勢甲乙人還住之百姓家不レ可二陣取一事

一對二土民百姓一自然非分之儀申懸族有レ之者可レ爲二一錢切一幷麥毛不レ可二苅取一事

右若於二違犯之輩一者速可レ被レ加二御成敗一者也

天正十八年卯月日

木のおしでと見えいと〳〵おろそげにて文字分りがたし此村のみならで外の村にもおなじさまの下しぶみもち傳へしもありといへり云々與清按右の文書は制札の文におなじ甲乙人ハ甲ハ武士乙ハ雜人也一錢切は過料錢にて其所持の物一切限にありたけ取るをいふ安齋二上峰(六十二丁ウ)考合すべし頭書一錢切ハ一錢チ盜メルモ死刑ニ行ハルヽ「讀史餘論ノ豐太閤ノ條ニ見ユ　世事百談四ノ十丁ウ

(六十四)政子尼の經文の跋幷血書の經　槃遊餘錄三編上卷廿二丁オ伊豆修禪寺の事をいへる條に心のとまりしは宋板一切經のうち放光般若波羅密經第三十三芥の卷のおくに爲二征夷大將軍左金吾督源賴家菩提一云云尼置レ之とあるは文字のさまめでたく女の手と見え政子の筆に疑なかるべし竪六寸五分許橫四寸高さ五寸許の箱は松板にていと〳〵おろそげにつゞり鐵の釘もて打つけし蓋に奉納血書法華八軸不レ可レ開伊勢新九郎早雲とかいつけ花押をするゑしはその世のありさま思ひやらる云々頭書賢愚因緣經一ノ十三丁ウ

(六十五)馬蹄螺(タマツキ)龍蹄(セイ)子　したゝみは神武紀の御歌万葉集の能登國歌などによめり槃遊餘錄三編上卷にこの貝を今しうとめともいふそのよしはしうとめの物をしみするごとく殼(カヒ)をしむに似てとかくしてもはなれざれば石もて打くだき身をいだす云々又云龍蹄子は和名抄にかたち犬のひづめに似て石の間になりいづると見ゆ味蟹に似てあまし云々

(六十六)願成就院　槃遊餘錄三編上卷五十二丁ウに北條村は四郎時政のすまひし跡或は庭の石なりとて田畑の內こゝかしこに立るはさもありぬべく政子のうぶ

湯の水はいときよき古井也此村の山にいます八幡の御やしろは延喜七のとし丁卯に筑紫宇佐の宮をこゝにうつしまつり中は田心姫命湍津姫命市杵島姫命左は氣長足姫尊右は足仲彦天皇譽田天皇にましますと頼朝の卿ふかくたふとび給へりとぞふもとの願成就院は文治五のとしつちのとの酉の夏陸奥押領使藤原泰衡をほろぼさんいのりのため北條時政はじめて此寺を作り天津神の君をまもらせ給ひねぎどのかなひぬとて天守君山願成就院と名づけ棟札は時政の筆也とぞおなじ年此寺の傍に頼朝卿の館をつくらんとしける時古き額をほり出せしにその文字願成就院とありければあやしき事とてすなはちすりをくはへ此寺にかゝげしとなん棟札は近き比北條美濃守のぬしより乞はれてつかはしたるにしるしのふみなどそへてかへしおこされ額は六七十年さき此寺に住けるほうしぬすみとり三島の宿に持行あらたに寺を作り願成就院と名づけかの額を寶物にしてひめおき今この寺にはなしとあるじのほうしかたる三島は賀茂郡こゝは田方郡にて東鑑にいちじるきをぬすみとりし法師はさらにもいはずぬすみとられしもあり所たづねぬもともになほざりとやいふべき東鑑九曰文治五年六月六日爲二北條殿御願一爲レ祈二奥州征伐事一伊豆國北條内被レ企二伽藍營作一「今日擇二吉曜一有二事始一立柱上棟則同被レ遂二供養一」名號二願成就院一云々當所者田方郡内也所謂南條北條上條中條各置レ院云々十二月九日伊豆國願成就院北畔爲レ被レ搆二二品御宿館一犯土忽掘二出古額一其文願成就院云々即加二修飾一可レ被レ用二當寺之額一云々北條氏直ほろびし時このあたりやきうちせられて願成就院をはじめ家々やきはらはれ此あたりに持傳へしふるき書ども皆失ぬといへり云々

（六十七）六十六部回國聖（ヒジリ）　同書同卷六十五丁ウ　に藏春院にいたるかねて國人に聞しはむかし頼朝坊といへるほうし六十まり六のくに〳〵をめぐりたふとき寺々を殘りなくをがみはてゝ此國にかへり木もてあみだほとけの御かたこゝらかずしれずつくりて田中村久昌寺といふ大寺にをさめおきつその功德によりて又の世にいくさのきみとなり平氏をほろぼし天の下の政をしらしゝ頼朝卿はかの法師の後の身也といへり年月しれず久昌寺はすたれてあとのみのこり彼佛の御かたは此寺にをさまりこふものにはさづくといふよりて文禽とともにおのれも一はしらづゝうけてさりつ夫より田中村頼朝坊のつかにいたる畑のうち古きつかのうへにしるしの石もたてりて年の號などもありげなれどいとゞふるくさらにわかりがたしやゝゆけば久昌寺のあとゝて六角の堂あり今六十六部とて國々の寺々めぐるものらは必こゝと藏春院にいたりかの御かたをこひうく年々に百まり或は二百はしらほどづゝいくとせしれずほどこし來りぬれどいまにつきずほどこすにしたがひて數まし給ふとぞとこゝろどころくちて年經しものに疑なくまたく近き年にきざめるものにはあらじかしさはいへど此事はわけていと〳〵あやしくうけがたきものからおのれが心もてすつべきにしもあらねば聞けるまゝにしるしとどめつ云々按頼朝坊の事は北條九代記を考べし頭書太平記五ノ六丁ウ

（六十八）豚魚（イルカ）　同卷六十九丁ウ　に入鹿魚をかづきあぐるに鼻ぐきかけたるやうにて血おびたゞしくいではらわたなど人にたがふ事なしとぞ肉は脯（ホジ）にしあまりはいと大なる鼎（カナヘ）にいれて煮て油をとるにくさき事たとへなし唐土にては海豚江豬などいひ味水牛の肉にひとしく雌雄ありて人に頻（カヾヒ）しほじゝにしてくらへばよく虫をころし瘧瘡をいやすとあるどくほじゝはけものゝ香ありてくらふべからず魚とはふつにおもはれずして全くけものゝ肉にひとしこゝにてもよく雲霧をはらふとて箱根足柄のおくをはじめ山深くすむものらにひさぎぬといふこゝの古き書にも毀レ鼻之入鹿魚之血皐とあるにむかへてとまれかくまれふりぬる代の書は實にさりけりと思ふ事のみぞおほかる

（六十九）大場景親が住所　槃遊餘錄三編下卷二丁ウ　に三津坂をこえ長岡儘の上江間間宮の村々を經大場村にいづこゝは大場三郎景親十郎近郷等かいでし所也と聞ゆ云々與清曰此說誤也大場景親は相摸國の住人にて今の藤澤宿の北なる大場村その出所也和名抄にも見えたる鄉名也

（七十）昔圍子（ムカシガコヒ）　同書同卷六丁ウ　に平根尾といふ丹土（ニツチ）の山ぎはをうがてばむかしだんごてふものいづちひさきは枇杷梅の實大なるは芋がしらばかりまろくましろにてくだけば火打石のどくま中に黃或は黑く砂のやうなるものこもれり長さ七八間巾二間ばかりのうちにのみありて外にふつになし土の上に白くあら

はれたるをとめてうがてば芋の子のつるになりたるといくらもならびてありそのすぢへほりあてねばいでがたし土よりなりいづるとおもはれわかきはちひさくいとかたく色白しねびたるは大きく黒くなりて木竹などのくちたるとくくだけやすし禹餘糧などのたぐひなるべくや云々

（七十一）阿之我利能湯　万葉十四に阿之我利能刀比能可布知爾伊豆流湯能云々槃遊餘錄三編下卷十六丁左にこの國と相摸の境に土肥の郷ありていま東土肥といひあしがりにやゝ近くかしこの湯河原てふいでゆの事なりといふはさもありぬべしをちつとし熱海にゆあみせまくかのあたりをとほりしに石橋山をこえ根府川江浦川堀を過て門川といふありこゝは伊豆相摸の境なり川より東は相摸國あしがら郡川より西は伊豆國加茂郡土肥の郷にてぞあなる湯河原は土肥のうちなるや云々按阿之我利は足柄郡也及比能可布知は土肥の河内也古代は伊豆の土肥も相摸の内なりしものと見ゆ今の湯河原其地に疑なし

（七十二）基氏回文井城主　槃遊餘錄三編下卷四月十日條に八つはたのみやしろにあなる文書はかくなんある

國書　城主隋書一ノ十八丁ウ　城主日蓮錄内一ノ六丁ウ又廿四丁ウ　蜀志十二ノ十五丁オ　譚周傳に部郡城民不ㇾ肯捐ㇾ父母ㇾ背ㇾ城主ㇾ而千里送ㇾ公云々　梁書一ノ十一丁ウ十二丁オ十三丁オ　同二ノ十五丁オ

回文文事

一去秋新田武藏少將義宗脇屋右兵衛佐義治左兵衛佐義興越前之金澤ニ而義顯被ㇾ討晝夜含ニ意趣一武藏野搆出張幸之合戰豆州船手之面々不ㇾ移ㇾ時日一潛ニ忍爲ニ裏切一欺ニ右三軍大將一尊氏公見參可ㇾ給ㇾ入ニ恩賞一者依ㇾ請捧行者也

延元丁丑八月

鎌倉管領左馬頭基氏（花押）

畠山道政印

仁木頼重印

土肥高谷城主富永備前守

田子小松城主山本飛驒守

中立石坂城主小澤隼人正

松崎澤谷城主渡部伊與守

雲見上山城主高橋丹後守

青野原城主鈴木大和守

見佐堤坂城主進士美濃守

三根金原城主笹本豐後守

本郷氏島城主志水長門守

月崎池原城主御簾日向守

長津呂泉城主伺名參河守

按義頭と書たるは顯字の草體なりさるを雨岡が考に義貞の貞の字を忌て頭か頭に書かへたるか草體ゆゑかくあらんといへりこはひがことにて顯の字を頭とは書たる也此回文に城主の字面見ゆ

（七十三）手石の彌陀　槃遊餘錄三編下卷四月十四日條に手石の浦につく此浦の沖にある大石に手のかたおしたる文ありよりて所の名によびその手がたを見しものはほどなく身うせぬといへりなみのそこにかくれていづこにありとしもしれず世にいひさわぐあみだはとけををがみまつらましとてこの浦の舟をかりのりいづ海にのぞみしいは山に高さ二丈ひろさ三つゑばかりの洞ありうちいるゝ波にゆられて廿丈あまりのりいれば洞のうちくらし四丈あまりさきにほとけの御かたちにやさだかにはわかれず金いろにひかるもの見ゆしばらく舟をとゞめつばらに見ればはじめに高さ尺あまり一ッ次に八九寸ばかり三ッ都て四ッ並たてり山の腹にあなあるにや彼ひかるものゝかたはらへいさゝか日かげさしぬればそれにてらされて三ッ立るものゝ四ッに見なさるゝやおぼつかなし三尊にしおはしまさば中のみほとけは高く左右の脇士はひくかるべきをこはじめのひとつは高く次の三ッはひくし甲斐の國道入といふ法師正德のとしはじめて見いでつといへりなほいはまほしかる事おほけれどおもふ事あれば書さしてやみぬ云々

（七十四）都女と云物　同書同卷十五日の條に石中よりつめといふ物まれ〳〵いづ石よりもかねよりもかたく水晶などゑるにはいとよしといふ大きなるは一寸許さき尖りて紺瑠璃の色つやゝか也石につきしまゝおきぬればいつまでもおなじさまなれど石をはなち年月ふれば色かはりて光もうせぬとぞ云々

（七十五）をふしまじりに生しげる　『永久次郎百首柞歌に皇后宮少進源朝臣兼昌「片岡のをふしまじりに生しける柞の小枝初もみちせり」按此歌夫木抄十五丁秋部五柞の條にも載たりをふしは小柴にて小は細小の「義也小枝に對してよめり小枝のさはた細小の義にてしがみさえだ」などいふもしげみ小枝也片岡の小柴に雜りて生繁りたる柞が初紅葉せるよしによ

めり』

（七十六）霜をれ　『新撰六帖第一帖』冬雨の歌に信實「けふは又山の朝けの霜をれに空かきくもり雨はふりつつ」按言塵集四卷廿三丁左霜の條に霜くづれとは霜柱の折る也霜をれともいふと見ゆ藻鹽草一卷霜部にも霜くづれ霜をれ霜ばしら霜のたいち已上四新六と出したれど注釋をくはへず霜をれ霜くづれとも今の日かげどけのさまにて雨のふらんとするしるし也』

（七十七）草のかき葉　『拾遺集十卷神樂歌にひえの社にてよみ侍ける僧都實因「ねぎかくる比叡のやしろのゆふたすき草のかき葉もことやめてきけ」按ねぎかくるは願を掛る也木綿手繦といはんとてかくると緣語もていひ出せり草のかき葉は草の片葉也延喜祝詞式龍田風神祭祝詞に天下乃公民乃作物乎草乃片葉爾至氏云々また天下乃公民乃作作物者五穀乎始氏草乃片葉爾至氏云々大殿祭詞に事問之磐根木根乃立知草能可岐葉乎言止氏云々六月晦大祓詞に語問志磐根樹立草之垣葉乎語止氏云々遷二却祟神一祭詞に語問志磐根樹立卿之片葉毛語止氏云々祝詞考上卷廿四丁左に草之垣葉と書は訓を知らせ片葉と有は義を以て也さて片葉に至るまでといふにて云々大祓後釋上卷廿五丁右に垣字朝野群載には破と書り此破字と又片とも書るとを合せて思ふにかき葉とはまづ凡て草は大かた三葉五葉づゝなど並びて生る物なるにそれを闕取てたゞ一葉など殘りてあるさまを以ていふ詞にて意はたゞいさゝかの草の一葉までといふなるべし書紀にはたゞ草葉とあれどもそは例の漢文ざまに約めてかゝれたる也云々などあるにて知べし歌の意は今日吉の御社に祈申事を草の片葉までも物いはでよくきゝ神も納受し給へかしと也』

（七十八）鹿の夏毛　夫木抄廿四卷十丁左雜十六神祇に春日社法樂御歌慈鎭和尙「神かきやてかひのしかのなつけよりしりぬひしりのあまの羽衣」按てがひのしかは手飼の鹿にて春日の鹿をいふなつげは夏毛にて鹿の毛を換るをりをいふ此歌故事ありげなれどいまだかうがへず春日驗記などはじめ社記の類にもをさをさ見及ねば後に考定むべし

（七十九）おほ扇　夫木抄九卷十二丁左夏部扇條に六帖題扇

檜僧正公朝「おほ扇さしかくしてそおこなひのふかき事をはならひ傳へし」按藻鹽草十七卷扇部おほ扇の條に此歌を出して二の句さしかざしてぞ四の句あふきことをばに作れり二の句は藻に据り四の句は夫木に据べし歌林拾葉集三卷十二丁左に此歌を釋して御即位の時の高御座の翳の事とし又唐明皇の時蕭嵩奏して羽扇を備たる事などいひたれどいづれも叶はずこの歌の大扇は別に佛道の故事あるべし義楚六帖廿二卷廿五丁左扇部に隋文所レ賜ニ敬脫一竹扇面長三尺とあるも大扇也加葉執扇も大扇といふまじきにもあらずされど此歌の大扇はさしかざして法を傳受せしよしに聞ゆ

（八十）鹿のとごろ　俊賴散木奇歌集三卷に田上にて鹿のころのはるかに聞えければ「妻こふる鹿のところにおとろけはかすかにも身のなりにけるかな」頭書曾丹集九月上に「よそにのみ鹿のところを聞しより秋はかなしき物としりにき」此歌万葉集秋下にも載す　按夫木抄十二卷五丁左秋部三にも載たり「とごろ」は詞書に遙に聞えといひ歌にもかすかにもなどよみたれば遠聲の略かと聞ゆれど「とがた」「とかげ」などいふ詞を照し合せておもふに外聲の義にや万葉八の卷廿三丁右刀理宣令歌に「物部乃石瀨之杜乃雀公鳥今毛鳴奴山之常影爾」物部は石瀨の枕詞にて武士の屯聚とかゝれり神武紀に大軍集而滿ニ於其地一云々また屯聚居此云ニ怡波瀰莽一など見ゆ石瀨杜は大和の名所也鳴奴の下蓋香もじを脫せり鳴奴香はなけかしと願ふ意の詞也常影は賀茂眞淵說には木陰の義とし本居宣長は多乎陰の約にて多乎は多和ともいひて山の多和美たる所也といへり今熟按に常影は借字にて外蔭にや外山などいへる類にて山の麓などを指て山の外蔭といふべし和歌童蒙抄三卷杜部にも跡陰ト書テフモト𠮟又トカゲ𠮟ヨメレバ麓ノ心ニヤといへり綺語抄上卷坤儀部に「あし引の山のとかけになく鹿のこゑきこゆやは山田もるすこ」此歌の「とかげ」も麓などの心として聞ゆれば外陰なべし和歌童蒙抄二卷冬部冬夜歌に「ヤマ里ハ夜トコサエッヽ明ニケリトカタソ鐘ノオトノスナルハ」山家冬夜ト云心ヲ經信卿ノ讀ル也イヅカタゾト云ベキヲ「トガタゾ」トヨメルイカヾ云々玉勝間三の卷十九丁右に今の世の言に「いづく」を「どこ」といひ「いづれ」を「どれ」「いづち」又「いづかた」を「どち」といふは此「とがた」のとにやあらん云々按この「とがた」ももとは外方といふよりうつりて「いづ方」といふ義になれる成べしさて

外方外陰(トガタトカゲ)などもいへば外聲(トゴエ)といひておのづから遠きはるかなる聲の心にも聞ゆべし

(八十一)さら〳〵に 『古今集廿卷大歌所御歌』に「みまさかや久米のさら山さら〳〵にわか名はたてし萬代までに」左注に是は水の尾のおほんべの美作國うた云々按此左注おほんべとは大嘗(オホニヘ)の「に」を音便に「ん」といひべを濁るは上を「ん」といへば也されど此歌大嘗會の主基方の歌にはあらでたゞ戀の歌なり左注は後人の附會なるべきよし續万葉論にもいひたり催馬樂呂歌 美作歌に「美萬左加也久女乃左良也末左良左良爾奈與也左良々々爾和加名波太衣之與呂川代末天爾」とありて和加名波太衣之なるを古今集古今六帖 二帖山の條 などにはわが名はたてじとしていれられたりさら〳〵はもと更といふ詞を重ていへるにて佐良は新にの義復の義別にの義決しての義の四種ありさら〳〵も同意にて頻なる心と殊更の心に用たるもあり又物の音にさら〳〵となるなどいへる歌にも物語書にもいとおほし万葉集十卷十七丁右問答歌に「石上振之神杉神佐備而吾八更更戀爾相爾家留」同十二卷四丁左 正述心緒歌に「我背子之將來跡語之夜者過去思咲八更更思許理來目八面」同十四卷七丁左 武藏國相聞往來歌に「多麻河泊爾左良須弖豆久利左良左良爾奈仁曾許乃兒能己許太可奈之伎」これらの歌古今六帖拾遺集伊勢家集綺語抄などには引直して入たり詞花集戀下に和泉式部「竹のはにあられふる夜はさら〳〵にひとりはぬへき心ちこそせね」次郎百首稼田部に仲實「そしろ田のわさ田かりての穂いねほのさら〳〵に秋と見ゆらん」源賢法眼集に「さされ石のうへゆく水のあさましくさら〳〵さらにとけぬ君かな」此外歌にも書にも所見おほかれどさまではふようなれば引出すさて古今集の歌意は性靈集に美作國左良庄ありて佐良山もそこの山也佐良々々といはん序に美作や久米の佐良山と地名もてつゞけさら〳〵に決して萬代までもわが名は立じとよめる戀の歌也催馬樂にては吾名はたえじとあれば祝の歌ときこゆ』

(八十二)さねき 『藻鹽草九卷七十六段』にさね木の花の條を擧て云「あほ山のさねきの花はけふもかもちりまかふらん見る人なしに」万「山のさねきのさねしよな」谷深き山のさなき(さねきさなき同事也)「青山と名にこそたてれおのつから嶺のさなきのいさゆきてわれ見はやさんひかけのさなき」云々按万葉集の歌を擧たるは誤也万葉十卷十丁右に「阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂 見人無二」此佐宿木は同書十三卷に作樂花と書たるを思ひ合すれば作を佐に誤り樂を宿木の二字に誤れるものにて櫻花也また同書十二卷十七丁右に「白香付木綿者花物事社者何時之眞枝毛常不所忘」此眞枝は眞坂の誤也されば万葉に「さねき」とあるは共に後の讀誤なるを藻鹽草などにそのまゝを傳へて一種さる木のあるやうに注せし也』

(八十三)いつゝの宮 拾遺集九卷雜下 東三條太政大臣長歌に「あはれわれいつゝの宮の宮人と其かつならぬ身をなして」云々 今日立坊 云々皇代略記に圓融天皇諱守平村上第五子康保四年九月一日爲二皇太弟一云々とあるを對考るに圓融院は村上の第五なれば五の宮といへる也宮人と身をなしては春宮權亮を兼任せしゆゑ也此事は國史帝紀補任類の書に所見おほかれど今は座右の手さぐりにさぐり出たる二書を引て證しいふのみ

(八十四)ゆもとりあへず 『拾遺集九卷雜下』源順が長歌に「春はいつともしら波の波路にいたく行かよひゆもとりあへすなりにける舟のわれをし君しらはあはれいまたにしつめしとあまのつりなは打はへて引としきかはものはおもはし」云々此歌順集にも見ゆゆゝしは舟のあかの事にてわれめなどより船中にいりたる水也されば歌に波路に行かよひとも舟のわれをしとも沈めじとも緣語もてつゞけたり賴政集詩書類從二百四十六下卷十二丁左 寄レ船戀に「こひしさは泊りもしらてゆく舟のゆにかくものは涙なりけり」ゆにかくとは涙を舟のゆにして掻取よしにや藻鹽草十七卷六十三段 船具其外部にゆもとりあへす船に入たる水也云々倭訓栞一卅五卷丁右 由部に船に入し水をゆといふも湯の義忌たる詞也船湯なといふ也云々和名抄十一卷 舟具部に屎(ユトリフナユ)洽(附故紺反漢語抄云布奈由一云客水) 蔣魴切韻云屎(コ)音故和名土利 洩ニ舟中水一之斗也唐韻云洽レ物也云々字鏡集二卷 戸部に屎ユトリ云々類聚名義抄法下卷 戸並戸部に屎ユトリ戸歟云々屎音故ユトリ云々また斗部に屎音虎音故ユトリ云々以呂波字類抄九卷 由部雜物門に屎ユトリ洩ニ舟中水一之斗也云々節用集下卷

由部器財門に厚ユトリ舟の水汲器也云々これらにても舟中の水を由といひそを汲取斗を由止利といふ事知べしまた安加といふも奇異雜談集三卷十三丁左伊良虞のわたりにて獨女房船に乘て鰐にとられし事の條に波なは高く打入ほどに船のあかをかゆる事たゞ手もおかすなど見えて古き詞也賴政歌にゆにかくとよめるもあかにかゆるといふ心なるよし雜談集の語をあぢはへてもおもふべし』

(八十五)なすの湯　『拾遺集九卷雜下大中臣能宣長歌に「しほかまのうらさひしけになそもかく世をしもおもひなすの湯のたきるゆゑをもかまへつゝわか身を人の身になして思ひくらへよ」云々能宣家集には「たぎるゆゑをもかまへつゝ」を「たきる胸をもさましつつに作れり世をわびしきものに思ひなすに那須の湯」をよせたり那須は下野國那須郡にて今も高名の溫泉あり平治物語三卷賴朝舉義兵二條に九郎御曹司云々信夫ニ越給ヘバ佐藤三郎ハ公私取認テ參ラントテ留リ弟四郎ハ即御供ス早白河關固テケレバ那須湯詣ノ料トテ通リ給フ云々參考京師本に白河關固テケレバ那須湯ト云山路ニカヽリテ通リ給フ云々など見ゆさるを夫木抄廿六卷雜八溫泉部に題不レ知なすの湯信濃よみ人しらず「しなのなるなすのみゆをもあむさはや人をはくゝみやまひやむへく」とあるより物に信濃の名所とせるおほかり和歌名所追考百四卷下野部に此歌を擧て初何下野やに作り異本信濃なるとありげに信濃なるは寫誤にて下野やの方を正しとすべしたぎるゆゑをもかまへつゝはたぎり湧湯坐を擔るよしにゆゑといふ詞をよせたる也湯坐は古事記中卷垂仁の段に亦天皇命ニ詔其后ニ言凡子名必母名ヲ何ニ稱ヒ是子之御名ニ爾答白今當レ火燒ニ稻城ニ之時而火中所レ生故其御名宜レ稱ニ本牟智和氣御子ニ又命ニ詔何爲日足奉ニ答白取ニ御母ニ定ニ大湯坐若湯坐ニ宣ニ日足奉ニ云々また天皇因ニ其御子ニ定ニ鳥取部鳥甘部品遲部大湯坐若湯坐ニ云々古事記傳廿四卷五十六丁左に大湯坐若湯坐湯坐は由惠と訓ゆざと訓は書紀雄略卷に湯人此云ニ臾衛ニとある是也神代卷亦云彦火々出見尊取ニ婦人ニ爲ニ乳母ニ湯母及飯噛湯坐ニ凡諸部備行以奉レ養ニ焉于レ時權用ニ他姬婦ニ以乳ニ養皇子ニ焉此世取ニ乳母ニ養レ兒之緣也と見ゆ湯坐は兒に湯を浴する婦と聞えたり右の神代卷に湯母とある湯母は兒に湯を飲しむる婦なるべし飯噛は飯を噛て兒に食しむる者なるべければ湯を飲しむる者あるべきなり其にとりて惠と云義も坐の字を書るよしもいかならん未だ思得ず若くは由須惠なるを由須を切て由なれば由惠といふか若然らば兒を湯中に坐るよしにて然いふにやなほさだかならず大若は大小といはんが如し云々同廿五卷廿九丁左に大湯坐若湯坐是も上に既に出づ傳廿四の五十六葉但上なるは此御子を治養奉れる時の役人をいひ此なるは其に因て又別に其名を負せて部を定られたりと見ゆ又書紀雄略卷に湯人廬城部連武人湯人此云ニ臾衛ニとあるは當時に此役を仕奉し人ときこゆ又孝德卷に湯部とある丁十五も由惠と訓べく此は此部をいへりと聞えたり又姓にも負り天武紀に十三年十二月大湯人連若湯人連云々賜ニ姓宿禰一續紀八に若湯坐連歌主姓氏錄に若湯坐宿禰石上同祖若湯坐連膽杵磯丹杵穗命之後也膽杵磯丹杵穗ハ舊事記に饒速日命の亦名なり　とありて大湯坐宿禰は無し續記卅一に遠江國人若湯坐部龍麻呂と云人見ゆ上總國周淮郡湯坐郷あり云々按古事記傳の說いまだいひつくさず湯坐は湯居にて居は後世居風呂などいふごとく湯槽を擔居たるをいふいはゆる湯殿風呂場也こゝに奉仕する役人をやがて湯人といひその徒を湯部とも湯坐部ともいふ大湯坐少湯坐はそれに大小の品を別てるなり上總の地名に湯坐郷あるは湯坐部にゆかりありて名におへるにや今きさら津の里より二里ばかりの所にとばかり溫泉のいとぬるきがありときけど土人ならでは知ものなしといへばさるいさゝかなる溫泉によりて郷名によぶべくもおぼえず』

(八十六)大鷹狩小鷹狩　持明院基春卿鷹書に鷹を使ふ時節は冬を本とす田野無爲の隙を用るなりそのよし昌泰の記にも見えたり小鷹狩は秋のもの也されば歌の題にも鷹狩は冬のもの也小鷹狩は秋のもの也されど現在大鷹も小鷹も夏の外は三季にわたりてみな使ふ也云々按歌には小鷹狩は秋鷹狩野行幸などは冬の季によみて夫木抄の類すべて歌題の書にさやうに載たりされば小鷹狩は必秋と心得べく冬は小鷹も大鷹も使ふ事と心得て歌にもよむべきなりされば古今六帖第二にも大鷹狩には冬の歌秋の歌をまじへてのせ小鷹狩には秋の歌のみをも載たり

(八十七)里見某にこたふ　現存六帖の題は假名に書て候へども假名題と申にては候はず常の題詠のやうによみてくるしからず候さうびきちかうぼうたんなどの類物名ならでもよみ候事常にて候尋レ梅不レ知レ花と申題は梅を尋れども花を見あたらずあるはかを

ほりにおぼめきあるは人のいふに迷ひなどする心いづれにてもあるべし論レ戀はなにゆゑに人はつれなきぞさはなきはづなるものをなど一首の中に人の心を論じてうらみもしこひしたひもする也

(八十八)仕舞　物を爲はてたるを仕舞といふ俗語は舞樂の後舞を略して志麻比といへるなるべし

(八十九)あざなへる繩　太平記に吉凶はあざなへる繩のごとしと見ゆあざなへるは合せ綯るにて阿波世の波を省たる語也

(九十)こめ〳〵　『夫木抄廿九卷十一』に貞應二年百首木こめ〳〵民部卿爲家「秋深き山の夕霧しめ〳〵におのれも色やまつかはるらん」按藻鹽草九卷六十九條こめ〳〵の條に此歌を出して下句まづかくるらんに作れり此方よろしかはるらんにてはきこえず契沖法師が夫木抄首書に童の葉を手にこき入て金になれ米になれとやらんいふ木ありそれ歟云々○本草啓蒙廿二卷木部三に柞木○イヌツゲ○ヤドメ加州越州○ヨメガサラ○ケズラ江州○カシラケヅリ○カシラケヅラ共同上○ガニノス播州○コメゴメ紀州同名多し○ハアツゲ筑前○ビンカヾリ同上○ビンカヽ佐州○ビンカヽズ信州○ビンカラズ三才圖會○メハリギ土州○カシラツカミ同上○子ヂノキ○一名直脚黃楊江陰縣志○柘木本草新篇○鑿木子本草述○山中ニ自生多シ小葉細長厚シテ細鋸齒アリ深緣色互生ス此木枝條繁茂シテ冬枯ズ故ニ人家庭院ニ多ク栽旅家殊ニ多ク植夏月葉間ニ小白花ヲ開キ圓子ヲ結ブ熟シテ色黑シ又實ヲ結バザル者アリ江戸ニテ「オホツゲ」ト云又一種枝ニ刺アルモノアリ凡ソ柞木ハ山中ニ小木多シ大ナル者ハ稀ナシ材堅シテ色白シ大ナルモノハ板木ニ用フ「ツゲバン」ト云櫛ニ造ルツゲノ櫛ト云或ハ印材トス一種小葉ノ者アリ「コツゲ」ト云葉長一二分江戸ニテ「ヤドメ」ト呼ブ庭ニ栽ルニハコレヲ上品トス一種尾張ツゲアリ一名「カラツゲ」大和本草「アサマツゲ」勢州コノ木勢州朝熊山ニ自生多シ人家ニモ多ク栽木ノ高サ五七尺播州深山ニハ丈餘ナル者アリ枝條繁茂スルヿ柞木ニ同ジ然レドモ柔軟ニシテ對生ス葉モ亦對生ス鋸齒ナクシテ柔厚末尖ラズコレヲ錦塾黃楊ト云江陰縣志ニ出云々按阿波國にては黑つげとよべり今紀伊國にてこめ〳〵といふ古名の存せる也歌にかしらけづらずこれにや○與清曰爲家卿歌にこめ〳〵とよまれしはつげの類にて木草啓蒙に柞木に當たるものなり大和本草十二上卷木部下

に笑靨花を「コヾメノハナ」と訓じたれど其名は近くして別物也笑靨花は遼生八牋十六卷　花鏡首卷圖五卷　廣群芳譜五十三卷花譜卅二　などに見えて草花なれば木のこめ〳〵にはあらじまた米櫻小米櫻大和本草附錄一卷木類部　あれど夫木抄藻鹽草などの體裁山木の中に並出したれば黃楊の屬のこめ〳〵なる事疑べくもなし

松屋筆記卷之八十九

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

(一)太刀契　日本紀略村上天皇紀下**天德四年九月條**に廿三日庚申今夜亥三刻內裡燒亡云々廿四日辛酉廢務三箇日又昨夜鏡三和名加之古止古呂並太刀契不レ能レ取出ニ今日依レ勅令レ捜ニ求餘燼之上ニ已得ニ其實ヿ但調度燒損其眞猶存形質不レ變甚爲ニ神異ヿ即大藏省韓櫃令レ奉ニ納之ヿ云々同十月條に三日己巳縫殿大允藤文紀參申云去月廿四日依ニ宣旨ヿ御ニ坐內裡ヿ賢所三所遷ニ御縫殿寮ニ之間內侍本レ納威所三所一所鏡件鏡雖レ在ニ猛火上ニ而不ニ破損ヿ即云伊勢御神一所眞形無ニ破損ヿ長六寸許一所鏡已涌亂破損紀伊國御神云々太刀卅八柄之中四柄自ニ清涼殿ヿ求ニ出之ヿ卅四柄自ニ溫明殿ヿ求ニ出之ヿ有ニ其中節刀契七十四枚ヿ皆眞◎眞異本作魚形也自ニ背中ヿ別兩各有レ銘併全不レ損長各二寸餘許八枚金十四枚銀五十枚銀塗物又有ニ金銀涌亂一斗餘許ヿ也左近少將源伊陟將監藤原佐理右近少將藤原助信將監源時中藏人主殿助藤原爲光出納雀部有方女官等同以祇候云々

○帝王編年記十六卷 村上天皇天德三年條に九月廿三日庚申夜內裏燒亡云々宜陽殿累代寶物溫明殿神鏡太刀節刀契即春興殿安福殿戒具內記所文書仁壽殿太一式盤皆爲灰燼一人代以後內裏燒亡三度難波宮攝津國東生郡藤原宮大和國高市郡今平安宮也遷都以後百七十年始有此災遺左右中少將一鑒求神鏡太刀契等重光奏云溫明殿所破瓦上有鏡一面徑八寸許頭雖有小瑕專無損圓規幷帶等以分明又求得太刀契又鈴印鎰幸櫃所取出也云々○中右記寬治八年十月條に廿四日云々亥剋大風頻吹忽聞西陣方雜人走叫之聲而大風盛吹程存成讀譁之由不驚之處彌以大叫三人出直廬見之西陣方小屋等燒亡火炎高盛飛燼滿天云云內侍所幷大刀契又置陣廊鈴印幸櫃七合殿上御倚子時管絃具等皆相尋處各以取出了云々同條裏書に天德四年九月廿三日庚申夜內裏初燒亡內侍所幷大刀契鈴印累代寶物燒了但靈鏡不損從灰中求出也見御記云々○年中行事秘抄賢所雜事條に天慶元年七月十三日今日戌剋內侍所自溫明殿遷御清涼殿齋辛櫃二合自往古號之神明在內侍所相傳云伊世大神令分身也每事靈驗也細櫃五合大刀契櫃在此中云々また神鏡幷大刀契事條に天德四年九月廿三日庚申今夜亥三剋內裏燒亡廿四日大臣以下參職御曹司等又昨夜鏡三幷大刀契不能取出今日依勅令搜求餘燼上已得其實但調度燒損其眞猶存形質不變甚爲神異召大藏省韓櫃令納又御鎰韓櫃三口令納外記局十月三日己巳縫殿大允藤文紀參向申云去月廿四日辛酉依宣旨御坐內裏賢所三所奉遷縫殿寮賢所三所一所鏡件御鏡雖在猛火上而不一所眞形無損長一所鏡已涌亂紀伊國御神契七十四枚皆魚形也自背中別各有六寸許也一所鏡伊國御神契七十四枚皆魚形也自背中別各有餘許八枚金十四枚銀五十枚塗物云々また內侍所數日御他所例條に小野宮記云寬弘二年十一月十五日己未月食皆既子時內裏燒亡主上中宮御神嘉殿火起自溫明殿神鏡所謂恐所大刀契鈴不能被出云々少遷御式御曹司而破損殊甚又幸官朝所同月廿七日辛未黃昏參內左府云御在所舍板敷下謂御在所朝所舍也忽有犬產穢仍吉田祭幷臨時祭停止內侍所穢間不可奉濟撰吉日後日可奉渡考天德燒亡時暫奉安置縫殿左右近衞幷寮官奉護移御冷泉院之後撰吉日更奉渡仍彼例後日可奉渡又左右近衞幷史一人可護候由被下宣旨戌二點自朝所幸東三條院大刀契鈴印等持候如例大刀契燒損納新韓櫃一所持候也十二月九日癸未今日酉刻神

鏡自大政官奉移東三條云々○小右記寬弘二年十一月十五日條に子剋許隨身番長若倭部高範自□第一來云內裏燒亡者乍驚馳參左大臣師相逢郁芳門內相共參入此間大勢太猛下人云主上御神嘉殿者仍參著中宮同御座云々人々云火起自溫明殿神鏡所謂恐所大刀幷契不能取出云々同十七日條に神鏡大刀幷契盡燒亡鏡僅有韛自餘燒損無圓規失鏡形又有大刀刃但魚符等少々在云々村上御記云天德四季九月廿四日燒亡云々廿四日重光朝臣申云罷到溫明殿所未見瓦上在鏡一面其鏡徑八許寸頭有一□專無損圓規幷帶等甚以分明露出緣破瓦之無不驚惑者又求得大刀刃等云々又以所求得令納魚形二隻女官等或儛是亦神也然而未知其儛□□大刀四柄室(ヒツ)等並燒失只金銀銅魚符契合卅九隻或銘貴兵解兵府其國或銘其官契皆作魚形相合如木契之趣又有片々不合者又有繩占合不者此燒損之所致云々廿五日清遠伊陟等令申又求得燒鏡一面銅魚契卅餘枚合前惣七十四枚雜劔卅柄此中可有諸刀又加金銀餝等小調度云々故殿御日記云恐所雖在火灰燼之中曾不燒損云々鏡三面申伊勢大神紀如件說似三面云々同廿七日條に戌二點自朝所幸東三條院警蹕侍衞如恒左大將於東門內仰御綱可張由大刀契鈴印等持候如例但大刀契無殊損魚符損或不損云々○禁秘抄上卷第二段大刀契事條に匡房記顯實云鋒劔三尺或二尺惣十其中一劔脊有銘北斗左青龍右白虎其外不見是自百濟所被渡之二劍之一歟日月護身之劔三公鬪戰之劍歟但節刀可在此外注青龍之條似六典所稱之傳符若遣大將軍之時可用歟通俊曰長德連署之說以之爲大刀匡房曰長德連署不見歟已上鈴印同記俊實通俊曰件鈴太有與物也或六角或八角云々已上上古少納言伺見歟又節刀錦天曆帝付寶劔帶取不離御身云々誠我國至極重寶物也云々○桃華藁葉可覺悟一條々群書類從四百七十一卷四十六丁右に大刀契事大刀四柄者累代之靈劔也國家殊被重之如天德記者雖燒損形質猶存仍或琢磨刀或造加飾其時更不被出宮城是貴重之至也契者親王大臣及諸衞契符也天德同以修補之魚符七十四候分入三囊被加納太刀韓櫃中行幸時左右近衞將監持候是也以納內侍司印稱契櫃以納兩種稱大刀契櫃古典所載已以分明然則有二合也云々○參考太平記二卷六丁左南都北嶺行幸條に毛利家天正本云元德二年三月二十七日比叡山行幸或テ大講堂供養アリ云々內記ニテ菅原長綱外記ニハ佐伯爲忠此

次ニ負鎰鈴ノ御馬ヲ引セラル其迹ニハ少納言藤原國
持朝臣此次ニ大刀契ヲ持セラル此後ハ公卿ナリ云々
傳宣草下卷（群書類從本廿七丁左）臨時事部に内侍所申ニ請大刀契
覆一事云々○後圓融院永和元年大嘗會記に鈴の奏と
いふ事は天子累代の靈物たるゆゑに鈴大刀契などを
行幸にはかならず供せらるゝ也鈴はすなはち騎使に
たぶ太刀はいにしへの寶劔也節刀太刀は皆百濟より
奉れるつるぎどもなり日月護身の劔破敵將軍の劔な
どいふ物なりき是もみな或は度々の炎上にやけ或は
紛失し侍るにや返す〳〵無念の事也契は魚のかたち
に似て諸司の契符也これも今は其名ばかり也但その
器物をとゞめて如在の禮を用らるゝなるべし云々○
愚管抄（五の卷）平治元年條に尹明はしづかに長櫃をまう
けて玄象鈴鹿御笛のはこだいとけいのから櫃畫の御
座の御太刀殿上の御倚子などさだし入て追さまに六
波羅へ參れりければ云々内裏には信賴義朝師仲は南
殿にて虫の目のぬけたる如くにて在けり後に師仲中
納言申けるは義朝はその時信賴を日本第一の不覺人
なりける人をたのみてかゝる事を仕出づると申ける
をばすこしも物もえいはざりけり紫宸殿の大床に立
て鎧とり著ける時だいとけいの唐櫃の小鎰を守刀に
付たりけるを師仲は内侍所の御體を懷に入て持たり
けるたべその鈎これにぐしまゐらせてもたんその刀
につけて無益也といひければ誠にとて投おこせたり
ければ取て云々○百練抄（四卷廿四丁左）寛弘二年十一月十七
日條に神鏡燒損事令ニ諸卿定申之一大刀契同燒損令ニ諸
道勘申一云々同十三卷十二丁左安貞二年條に正月九日大刀契紛
失之由有ニ沙汰一十四日藏人頭治部卿親長朝臣參ニ向内
侍所一求ニ大刀一有ニ鐵室握之物一求ニ出之一如ニ天曆御
記一者已爲ニ大刀一歟云々二月八日奉レ納ニ大刀契一左中
辨有親朝臣左中將資季朝臣參ニ内侍所一云々西宮記
（正月部上朝拜條に辰刻天皇御ニ南殿一（轉部司昇ニ出大刀契等一置ニ殿南簀子西四間一）云
云○北山抄（拾遺雜抄上）朝賀事條に時刻御ニ腰輿一幸ニ建禮
門一（不レ候ニ契鈴等一）大刀云々同五卷大嘗會御禊事條に戌刻鸞輿出
レ自ニ建禮門一入レ自ニ昭訓門一於ニ東廊壇上一加ニ腰輿一云
云大刀契同候レ之（清涼抄云候否未詳而天長以來例皆持候云々）云々同八卷射禮條
に式幸ニ建禮門一行ニ此儀一御ニ腰輿一不レ候ニ大刀契及鈴一
云々大嘗會條に行幸之間无ニ警蹕等儀一但候ニ大刀契一
云々○江家次第（十五卷六十右）大嘗會條に御ニ廻立殿一不レ奏
レ鈴持候大刀契同候云々又（同卷十三丁左）同條に少納言並左

右將監自ニ殿南庇一進ニ大刀契鈴等一云々○輿清曰大刀
契は二物也大刀は百濟より奉れる靈劔四柄をいふそ
れに雜劔四十柄を加てものに四十四柄とも記せる也
契は魚の形に作りたる割符にて七十四候ありこれ諸
司に用る證據の割符也大刀契辛櫃とはこの二種を納
たる辛櫃をいへり後に一物と思ひひがめて「ダイト
ケイ」とよみもと文字なるを假名に引直して「だい
とけい」と寫しひがめたるも少からずさて大刀契は
必「タチ」「ケイ」と讀て大刀と契との二物と心得べし
（一一）兩段再拜八開手（ヤヒラテ）儀式一卷祈年祭儀（二丁左）に神祇
官拍レ手兩段云々また春日祭儀（八丁右）に神主著ニ木綿鬘一
就ニ祝詞座一兩段再拜拍手四段訖各就ニ直會殿座一云々
また大原野祭儀（十一丁右）に神主著ニ木綿鬘一就ニ祝詞座一兩
段再拜大臣以下共拜讀ニ祝詞一了亦兩段再拜拍手四段
云々また園幷韓神祭儀（十三丁左）に御巫先進再拜兩段神祇
官共拜御巫微聲宣ニ祝詞一再拜如レ初御巫拍手兩段云
云また平野祭儀（十七丁右）に神主讀ニ祝詞一了皇太子以下亦
兩段再拜拍手四段云々また賀茂祭儀（廿二丁左）に即使等兩
段再拜各就レ座云々同書三卷踐祚大嘗祭儀中（廿一丁左）に
宮主執ニ祭文一入ニ南門内一再拜兩段訖讀ニ祝詞一云々
延喜式伊勢大神宮式（九丁右）に即使及宮司以下向ニ多賀
宮一再拜兩段拍ニ短手一兩段云々按此外式中にも古書
にも所見おはかれどさまではえうなければ引出ず
頭書（拍手ノ下上五丁ニ見ユ兩段再拜モ見ユ又五ノ廿七丁七ノ廿五丁松ノ落葉十ヲ考ベシ）○北山抄（一卷正月部）
四方拜條に毎陵兩段再拜云々自注に或曰天地四方之
神皆用ニ再拜一爰知向ニ二陵一兩段再拜於レ是毎陵再拜
惣謂兩段再拜也云々然而荷前或兩段再拜者非ニ是
拜ニ二陵一總拜ニ十陵一也又諸祭式多有ニ此文一本朝之風
四度拜レ神謂ニ之兩段再拜一本是再拜也而爲レ異ニ三寶
及庶人一四度拜レ之仍稱ニ兩段一也天地四方可レ依ニ唐土
風一只用ニ再拜一陰陽家諸祭如レ之二陵任ニ本朝例一各兩
段再拜也云々○江家次第（一卷十丁左）四方拜條に或云天地
四方之神皆用ニ再拜一（中略）二陵任ニ本朝例一各兩段再拜也按
頭書（又六卷廿四丁左平野祭條に以八度拜一爲ニ兩段再拜一云々）こゝは北山抄の文を引たるにて異同なければ省略す
○中右記嘉承二年十月四日條に今朝予出ニ河原一相ニ具卜部兼俊一向ニ大神宮方一
聊以解除心中御神樂拍子執レ之間可レ無ニ失禮一之由祈
申有レ拜（八度先四度次打レ手次四度又打レ手是各兩段再拜源俊說也）次參ニ詣吉田一同祈ニ申此
事一也○代始和抄（群書類從本十丁）に主上御拜の座にうつりつ
かせ給て右兩段再拜し給ふ之は神宮へ奉らるゝ御幣

を拜し給ふよしなり云々○桃花蘂葉（群書類從本四十一丁右）可ニ覺悟一條々に女房神拜兩段再拜乍レ居四度禮レ之也云々兩段再拜兩段之間乍レ居可ニ小揖一（出家後モ兩段再拜也）云々○樋口秘記（四十八丁左）に兩段再拜ハ天子ニカギル今關白ノ名代ヲ勤ラルヽニハナキヿ也云々伊勢貞丈書入に兩段再拜天子ニカギルトハ非ナラン是ハ神拜ノ禮也云々按樋口秘記一卷樋口宗氏が筆記にて享保十四年季秋十三日於ニ粟田口白河亭一書レ之定敦といへる奥書あり安永二年三月十四日伊勢平藏貞丈これを寫得て頭書を加へたり○神道名目類聚抄五卷（二丁右）祭祀部に兩段再拜神ヲ拜ル時先再拜シ祈念畢テ又再拜シテ退ク是ヲ兩段再拜ト云云々○梅窓筆記上卷（廿二丁右）に皇朝ノ古禮ハ四拜拍手スルヿナリシカ「日本紀略延曆十八年正月朔皇帝御ニ大極殿一受レ朝（中略）減ニ四拜一爲ニ再拜一不レ拍レ手トアリ云々拍子ニモ八開手長拍レ手短拍レ手ナド云ヿアリ今時ノ神ヲ拜スルニ二ツ手ヲ拍ハ短手ニテ延喜式ノ假名ニシノビテトアルモノニテ拍聲ノ音ナキヤウニ拍ヲ云ナリ云々一條禪閤兼良公江次第抄（祈年祭條）今案上卿拍手作法不レ令レ有レ聲手のさきをあはせてやをら〳〵と打合也トシルサセ玉フニテモ」

不有レ聲ヿ知ベシ○古事記傳四十二卷（十二丁右）雄略下に手打（テウチ）は物を「得賜ふを歡喜（コロコビ）賜ふ態（シワザ）なり云々大嘗會儀式に拍レ手四度度別八遍神語所謂八開手是也と見え大神宮式に再拜兩段短（ミジカヂ）拍手兩段膝退再拜兩段云々まづ八開（ヤヒラデ）手とは四度度別八遍とあるは八つヽ四度にて合せて三十二拍を云如く聞ゆれども所謂八開手是也と云るは一度に八づヽ拍ことを云るにて四度合せたるを云には非す然れば八拍を八開手と云なり云々」○與清曰兩段再拜は古の八開手の遺愛なりこれ神拜の禮式にて天子に限れる事にはあらずその作法は北山抄に見えたるがごとし八開手（ヤヒラデ）は儀式（三卷廿六丁右）踐祚大嘗祭儀中に跪拍レ手四度度別八遍神語所謂八開手（ヤヒラデ）是也云々同（四卷三丁右）踐祚大嘗祭儀下に拍手四段段別八度所謂八開手者也云々延喜大嘗會式（七卷廿五丁右）に跪拍レ手四度度別八遍（神語所謂八開手是也）云々などあるにて明なるうへに本居宣長が古事記傳に委くいひたれば今は筆を費さでやみぬ

（三）ちよのうが戴く桶如大尼無著尼無外尼鎌倉底脫（ソコヌケノ）井京都景愛寺　東見記下卷（廿二丁右）に如大尼ヲ千代女トイフ「チヨノウカ（イタヽ）戴ク桶ノ底ヌケテ水タマラヂハ月モヤトラス」千代女ガ歌也云々○本朝語園九卷（廿三丁右）無著尼俗姓條に如大禪師無著尼ハモト金澤越後守顯時ノ女ニテ足利讃岐守貞氏ノ後妻ナリ弘安八年十一月平貞時長崎頼綱ガ讒言シテ三浦泰盛其子宗景ソノ族類ミナ難ニカヽル顯時外家ノ睦アリトイヘドモ北條ノ親ミヲ以テノ故ニ咎ナシ然レドモ快々トシテ光陰ヲ送リ給ヘリ鬱ゼラレテ後如大出家ノ志アリ、一日潛行シテ美濃國ニ至リ松見寺ノ老尼ニ附諸尼ノタメニ賤婢トナリテ薪ヲ採水ヲ汲勞スルコトヲカヘリミズ暇アル時ハ禪床ニ坐スソノヿチ八月十五夜月アキラカニシテ雲ナシ如大谷ニ下リ水ヲ汲ケルニ桶ノ底脫テ水ミナ盡ケレバ忽然トシテ大悟シ和歌ヲ詠ジテ云ク「トニカクニ巧（タクミ）シ桶ノ底ヌケテ水タマラヂハ月モヤトラス」世々ツタヘテ口號（クチズサミ）トス後ニ洛北松木島ノ邊リニ一宇ヲ建景愛寺ト名付テ此ニ住ス俗ニ千代能姫（ノウヒメ）トイフ云々○鎌倉海鏡猿田彦四卷（廿三丁左）海藏寺條に底脫井總門の外右の方にあり相傳昔上杉家の尼參禪して此井の水を汲て投機す歌あり「しつの女かいたゝく桶の底ぬけてひた身にかゝる有明の月」此因緣にて號すと無相相還ニ眞相一看應レ物現レ形禪源水指頭明月影團々按に城陸奥守平泰盛が女金澤越後守平顯時が室と成後に尼と成り無著と號し法名を如大といふ佛光禪師に參じて悟徹す投機の歌あり「千代能か戴く桶の底ぬけて水たまらねは月もやとらす」ちよのうは無著が雅名也此事を謬傳へたる歟上杉家の尼誰共難レ知云々按鎌倉海鏡猿田彦九卷あり印本也寬保元年辛酉林鍾松月堂自叙ありこゝに擧たる鎌倉志の說也○山州名勝志二卷（五十三丁右）洛陽部一に景愛寺（應仁記云五辻景愛寺）景愛尼寺開基如大禪師小傳云師號ニ如大一別稱無外後又呼ニ無著一乳名千代野（ウナヽ、ハヨノ）城奥州禪門女也幼而仕ニ掖庭一既笄配ニ金澤越州守一而誕ニ一女一（後號ニ禪迦堂殿一）長而爲ニ足利讃岐守淨妙寺貞氏之夫人一云々按山州名勝志に引たる如大禪師小傳は本寺に傳へしものにやいと古書のさまにぞおもはるゝ○和漢三才圖會（七十二之末卷五十丁左）山城國部に景愛寺在ニ洛北一開基如大禪師一名無外又名ニ無著一城奥州禪門之女也幼仕ニ掖庭一既笄配ニ金澤越州守一而生ニ一女一長而爲ニ足利讃岐守淨妙寺貞氏之夫人一建ニ一宇於洛北一是也云々また（五十一丁左）寶鏡尼寺在ニ等持院東一（相國寺末寺）如大尼禪師爲ニ先師佛光國師一所レ建寺號ニ巫脉庵一後夢窓國師勸ニ高師直一爲ニ伽藍一改號ニ万年山眞如寺一後水尾帝再興以ニ第六皇女尼一住

持號ニ仙壽院寶鏡尼寺ニ云々○新編鎌倉志四卷（廿四丁右）に海藏寺云々底脫井總門ノ外右手ノ方ニアリ相傳フ昔シ上杉家ノ尼參禪シテ此井水ヲ汲テ投機ス歌アリ「賤ノ女カ戴ク桶ノ底ヌケテヒタ身ニカヽル有明ノ月」此因緣ニ依テ底脫井ト云傳フトナリ按ズルニ城陸奥守平泰盛ガ女金澤越後守平顯時ガ室トナル後ニ比丘尼トナリ無著ト號ス法名如大ト云佛光禪師ニ參ジテ悟徹ス投機ノ和歌アリ「チヨノウカイタヽクヌケノソコヌケテ水タマラヌ子ハ月モヤトラス」ト云々チヨノウハ無著ガヌサナ名也此底脫井ノ事無著ガ事ヲアヤマリ傳ヘタルカ上杉家ノ尼何人ト云事ヲシラズ云々○類聚名物考人物部九卷に一書に千世能は結城左七郎景氏が女鎌倉の北方に奉公す「とにかくにたの見し桶の底ぬけて水たまらねは月もやとらす」此歌をよみて悟道を得しとぞ云々○小窓雜筆三卷如大傳に大朝語園無著ヲ金澤越後守平顯時女トスル說不審顯時室也美濃國松見寺老尼何人ゾヤ可レ考走陽行記（京極高門紀行）に底脫井城陸奥守平泰盛女金澤越後守顯時室後禪尼トナル無著ト號ス佛光ニ傳法スチヨノウハ無著ガ幼名也佛光ハ常照國師也云々按小窓雜筆五卷萩原貞雄が著作也貞雄後に落飾して宗固といふ塙保己一が師也○萩原宗固隨筆に鎌倉開藏寺名所底貫（ソコヌケ）の井歌「ちよのうかいたゝく桶の底ぬけてくまなき月のかけもやとらし」又「とにかくにだくみし桶の底ぬけて水たゝへねは月もやとらし」此二首いづれにてもよかるべし是は悟り也たくみしは木をけづりたがをかくる事人間の身にたとへ水のこぼれたるは死してもとの塊（ツカノレ）になりし心也鎌倉第一の名所也此所に十六の井といふあり鎌倉志に見えず云々按宗固隨筆はいと拙劣の書也萩原宗固が說を門人などが聞書せるにや可レ尋こゝに底脫井の事鎌倉志に見えずといへるも踈漏の說也○與清曰ちよのうはちよのめを音便にいへる歟千代野は城陸奥守平泰盛が女にて金澤越後守平顯時に嫁し一女をうむ此女足利讃岐守源貞氏の妻と成て後に釋迦堂殿といふ千代野顯時におくれて後佛光禪師に附屬し禪尼となりて如大と稱す又無外と號し無著とも號せり京都景愛寺の開基となり又國師のために正脉庵をも草創せり今の寶鏡尼寺これ也歌にちよのうがいたゝく桶といへるは一說にしづのめがいたゝく桶とある方やしかるべからん○右所レ答ニ於平戸侯隱居靜山殿之問一也

（四）「とも」「とて」などいふべき詞を「と」とのみいひし例「されども」を「されど」「しかはあれども」を「しかはあれど」などいふ類は「ども」を省て「ど」とのみいへる也蜻蛉日記上卷（解環本二卷廿四丁右）歌に「あらしのみ吹める宿は花薄ほに出たりとかひやなからん」次郎百首不レ見戀に兼昌「わきもこにあふみなりせはさりとわれふみも見てまし轟の橋」また妓女に仲實「繪にかくと筆も及はし少女子か花のすかたをたれに見せまし」金葉集七卷戀上に重服になりたる人の立ながらまうでこんと申たりければつかはしける橘俊宗女「立なからきたりとあはし藤衣ぬき捨られん身そとおもへは」新古今集十三卷戀三に戀の歌とて太上天皇「たのめすは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月」枕草子（春曙抄二卷十二丁右）にあいぎやうなくとことばしなめきなどいへばいはるゝ人もきく人もわらふ云云これらは「とも」を省て「と」といへる也又古今集一卷春上に貫之「くるとあくとめかれぬものを梅の花いつの人間にうつろひぬらん」曾丹集十一月上に「やふかくれきゝすのありかうかゝふとあやなく冬の野にや立らん」蜻蛉日記下卷（解環本下五卷二丁左）に「わか袖はひくとぬらしつあやめ草人の袂にかけてかわかせ」これらの「と」は「とて」を省る也此外證おほかれどわづらしさに引出ず○右所レ答ニ於畠山梅軒之問一也

（五）留守所　下總國香取社古文書に

○廳宣留守所幷香取社神官等

可レ令下早以ニ大中臣實政一爲中國行事職上事

右以ニ件實政一云々勿ニ違失一以宣

文永八年二月日

大介源朝臣

○廳宣　留守所幷大須賀保直民等所

可レ令下早以ニ中臣重茂一大須賀保御與作殿沙汰上事

當社再拜申中臣重茂申云々勿ニ違失一故下

文永八年二月日

大介源朝臣

○常陸國茨城郡吉田社古文書に

○留守所下

可（三）早令ニ如レ元領ニ知長常訴申田畠一事

合

田壹町

垣内壹所（古國府西殿本畠）

右件田畠者爲ニ稻久名田畠一經ニ年序一畢而長常帶ニ證

文ニ可ニ知行ニ之由前々雖ニ訴申ニ如ニ所帶證文ニ者無ニ道理ニ之上猶東御式條之狀廿年以後者不レ可レ有ニ沙汰ニ之由爲ニ明白ニ云レ彼云レ此爲ニ長常旁無ニ道理ニ之間無ニ向後違亂ニ如レ元可レ令ニ領知ニ之狀如レ件

延應元年三月日　　目代前筑後守平朝臣(花押)

○留守所下

奉ニ上正月八日吉祥御願請僧御布施料稻伍仟玖佰貳拾肆束ニ事

三寶御布施三百束

講讀師幷請僧御布施伍仟六百二十四束

右依ニ大政官天平神護二年五月十七日延曆廿四年三月廿五日任ニ兩度符之旨ニ奉上所如レ件

嘉吉二年正月十五日　　稅所平(花押)

大掾平

○同國府中總社古文書に

○廳宣　留守所

可レ早任ニ宣旨狀ニ除ニ三社領ニ外不レ論ニ神社佛寺以下免給等ニ平均宛催云□□建久以後新立庄園令レ進ニ濟大嘗會用途料段別參升米ニ事

副下

宣旨　院宣

右大嘗會者天下之重事諸國之課役□是以所レ被ニ宛召ニ段別三升米也早任ニ宣旨ニ平均令ニ宛催ニ早速可ニ進濟ニ兼又新立庄園幷公田員數等委可レ令ニ注進言上ニ之狀所レ宣如レ件國宜承知不レ可ニ遲怠ニ以宣

文永十一年六月

介惟宗朝臣

○留守所下

可レ令レ早任ニ先度國宣旨ニ稻富名椙大夫高家孫□□成光進ニ退領知田肆段ニ事

右件田者依レ爲ニ稻富名內ニ先國司花山院大納言家之時可レ被レ返ニ付本名ニ之由有ニ御下知ニ被レ付畢但件田四段者爲ニ彼名內ニ者也而洩ニ先度御下知ニ之間類地之上者同可レ蒙ニ御下知ニ之由依レ申如レ元所ニ宛給ニ也仍可レ令ニ進退領知ニ之狀如レ件

弘安八年正月廿九日　　稅所(花押)

國司代左近大夫將監橘朝臣(花押)

按椙大夫は總社の神主職也當社の貞和四季三月大掾高幹か狀に以ニ師家ニ所レ被レ補ニ椙大夫ニとあり

○留守所下

可レ令レ早總社神主師幸進ニ退領掌致ニ御近忠ニ當社御敷地內田畠ニ事

合

田參段屋敷壹所　買主とき

田參段　買主石崎彌二郎

屋敷壹所　買主山本

右買主等雖レ申ニ子細ニ質券賣買之地事關東御德政嚴密之上御祈禱之地爭可レ及ニ非器之知行ニ哉就レ中□□府中田畠等者國衙一圓進止之條關東度々御成敗之□留守所裁許何可レ有ニ豫議ニ哉早師幸如レ元令ニ進退領掌ニ可レ令レ勤ニ仕御祈禱ニ之狀如レ件

永仁五年四月一日　　稅所右衛門尉

大掾平

目代藤原(花押)

大介藤原(花押)

按此文中留守所裁許といふ事有

○廳宣　留守所

可早以留守所御館跡南半分幷久松名云田內宮部高根青屋□□作□□及同池袋一巫本給田一段爲總社二御子職令被募引給田畠事◎惡有誤說件給田畠者宛ニ給常陸國總社二巫一處也二巫子々孫孫無ニ相違ニ令レ進ニ退領掌彼給田畠ニ可レ令レ勤ニ仕神事國役ニ之狀所レ宣如レ件

正安二年五月二日

按此文中留守所御館跡とあり留守所は國司代目代などの事執行ふ役所なる事知るべし

○留守所下

可レ早以ニ總社神主師幸ニ令レ知ニ行領掌森南北屋敷ニ抽ニ御祈禱忠勤ニ事

右屋敷者國衙重止之地也而依ニ敬神之儀ニ以ニ神主師幸ニ可レ令ニ知行領掌ニ抽ニ天長地久國吏安穩留守所泰平御祈禱忠勤ニ之狀如レ件國宜承知敢勿ニ違失ニ故以下

正安三年九月廿七日　　目代前能登守平朝臣(花押)

按國吏安穩留守所泰平とあるにても留守所は國衙なること疑なし○與清曰留守所の名目ものに見えたるは枚舉に遑なし今これかれを考わたすに國司の廳(ヤクシヨ)なるに國守は在國せずして國司代目代などを置て國政

を執行はしむるゆゑ留守所とはいへる也

（六）和與　右記（群書類從四百四十四卷卅三丁左）房官與二修學者一列座也云々また（七十一丁右）一兄弟姉妹和與物悔返否事右如二法意一者〔彼和與物難二悔返一歟但或依レ成二父母之禮一讓二與所領一或偏以二恩顧之儀一讓二得所帶一之輩等忽忘二敎命一及二敵對一者猶レ可レ任二本主意一將又就二證文一可レ有二子細一歟追加　一他人和與領事（文永九十二十一評）以二御恩之地一和二與他人一之條兩方同心之趣非レ無二不審一所詮被レ尋二究其由緒一之時或報二累年之芳心一或爲二當時之懇志一兼日契約之條無二其隱一者不レ及二子細一若親昵之儀無レ所レ據者可レ被レ召二和與地一也且存二此趣一可レ申二沙汰一之由可レ相二觸五方引付頭人一之旨可レ被レ仰二城介一歟一他人和與領事（文永十一六一評）右閣二子孫一讓二他人一之條結搆之趣非レ無二奸略一不レ謂二御恩私領一向後可レ被レ召二彼和與狀一也但兄弟叔姪之近親者令二取養一者不レ及二子細一矣一和二與他人物一可二悔返一否事於下相二憑人一之輩上者不レ可レ對二論本主子孫一之由被レ載二式目一畢此外和二與他人之物一任二法意一不レ可二悔返一歟是又就二證文一可レ有二斟酌一歟一讓二與兄弟叔姪所領一事（正應三十一九）稱二和與之地一本主不二悔返一之由雖レ有二其〔沙汰一自今以後宜レ任二本主之意一歟云々○常陸吉田社古文書に

○運歩色葉集和部に和與ワヨ云々○與清曰和與は環翠軒宗尤はあまなひあたふる也ともやはらぎあたふる也とも注し（式目抄七十丁右）伊勢貞丈は相共に和談する事をいふ也といへり（赤鳥舘筆下）今按に和して與る義なるも和談する義なるもありて古書のつかひざま一樣ならず所により分別すべし和與物とは和して與へたる物也和與狀は和談狀也

（七）稅所　常陸國府中總社古文書に

○留守所下

可レ令下早總（衍）神主師幸進退領掌致二御近忠一當社御敷地內田畠上事

合

田參段屋敷壹所買主とき

田參段買主石崎彌二郎

屋敷壹所買主山本

右買主等雖レ申二子細一質券賣買之地事關東御德政嚴密之上御祈禱之地爭可レ及二非器之知行一哉就中府中田畠等者國衙一圓進止之條關東度々御成敗之□留守所裁許何可レ有二豫議一哉早師幸如レ元令二進退領掌一可レ令レ勤二仕御祈禱一之狀如レ件

和與

近衞北殿御領常陸國吉田社領雜掌祐眞與二同社神宮寺別當權少僧都成珍一相二論當寺別當職一再成珍知行分山本鄕御年貢及撿注事

右當時者本所一圓爲二御進止一之處假二御家人之號一不レ隨二領家所勘一之間就訴二申之一依レ爲二公家武家兼帶所職一帶二關東御敎書等一之上者非二本所一圓進止一之由成珍捧二陳狀一之間雖レ番二一問答一以二和與之儀一任二先例一向後奉レ轉二讀每年四季大般若經一可レ捧二卷數一之由依二出狀一止二訴訟一者也次山本鄕內成珍知行分御年貢正和五年以來對捍雖レ訴二申之一致レ辨レ之之由令レ出二帶年々請取一畢及二撿注事一可レ依二總鄕側之旨一令レ申レ之上者同止二訴訟一畢若背二和與狀一御祈禱不法懈怠候時者立二還本所一可レ申二子細一者也仍和與狀如レ件

元德三年八月廿四日　雜掌阿闍梨祐眞

按これは吉田社領の雜掌祐眞と神宮寺別當成珍が相論の和與狀也和與は今俗の中直り又は內濟などいへる類也○尺素往來（群書類從百四十一卷十六丁左）本領事狀に神明寄進佛陀施入他人和與庶子割分之地者不レ可レ有二悔還改動之儀一云々○節用集（上卷）和部言語門に和與（ワヨレ）云々

永仁五年四月一日　税所右衛門尉
大掾平
目代藤原(花押)
大介藤原(花押)

○留守所下
早可レ令レ勤二仕五位職一事
小三郎大夫清原師親
右以レ人五位職令二補人一之處也仍在廳官人等宜承知
不レ可二違失一以宣狀如レ件
正和四年六月廿一日　税所平(花押)
大掾平(花押)
目代――

○留守所下
清原師貞
右以レ人所レ被レ補二任五位職一也仍任二先例一可レ令レ勤二
仕其役一之狀如レ件
貞和三年十一月日　税所平(花押)
大掾平
目代――

○同國吉田社古文書に
可レ令二早税所新左衛門尉平廣幹領一知上野國大
寶庄東神澤後閑内田貳町參段在家貳宇武藏國賀
美郡長濱鄉内赤洲村内田陸段在家壹宇一事
右任二亡母丹治氏寶治二年十二月三日讓狀(神澤内田在家載レ之)由
良六郎經氏弘長三年七日和與狀(赤洲田地幷在家事載レ之)可レ令二領
掌一之狀依仰二下知一如レ件
文永三年十二月十一日　相摸守平朝臣(花押)
左京權大夫平朝臣(花押)
按相摸守は北條時宗左京權大夫は北條政村也此文
中税所の領地の事幷和與狀の名目等見ゆ和與狀は
和談中直(ナカナラ)りの狀也

○また
常陸國吉田社田所職半分(税所式部二郎跡)事
右任二由緒一知行不レ可レ有二相違一次於二社役一者守二先
例一不レ可レ有二退轉一之狀如レ件
應永廿八年十一月六日　平滿幹(花押)
税所殿
按平滿幹は常陸大掾也此文書を考れば税所式部二
郎が吉田社の田所職を兼帶したる也

○また
切手御得分雖二田數陸拾漆町壹段候一此内貳拾町
切手分として進レ之候相殘四十七町壹段之所者
室田筑後方下向之時可二申談一候也恐々謹言
正長二年八月十日　大使文世(花押)
税所殿
御宿所
按大使文世文安五五廿一の文書には一志文世とあり
室田筑後方の方字は樣といふに同義也これは伊勢神
宮より下れる使にやとおぼゆ

○また
税所殿へ渡申候切手鄉事
右常陸國北郡内上曾鄉吉生鄉柿岡鄉治田鄉高倉鄉河
俣鄉彼六箇鄉ヲ田數陸拾漆町壹段之分入野彈正殿御
口承レ之間此在所ヲ任二先例一御所務として可レ被レ召候
仍爲二後日一如レ件
永享六年八月七日　文世
税所殿
按税所の所領の事此文にて推量べし

○また
就二其方事一委細承候歟悦至候仍京都へ致二注進一候者
定可レ有二御感一候哉彌被レ致二忠節一候者於二恩賞一者遠
可二申沙汰一候恐々謹言
嘉吉元年三月八日　清方(花押)
鹿島税所殿
按清方は上杉兵庫頭が事にて結城を攻る時の書狀也

○また
留守所下
奉二上正月八日吉祥御願請僧御布施料稻伍仟玖佰
貳拾肆束一事
三寶御布施三百束
講讀師幷請僧御布施伍仟六百二十四束
右依二大政官天平神護二年五月十七日延曆廿四年三
月廿五日任二兩度符之旨一奉上所如レ件
嘉吉二年正月十五日　税所平(花押)
大掾平
按此文書に税所より大掾の方を揭(アゲ)て書たれば税所は
大掾よりも下職なる事知べし

○また
税所殿へ進候切手可二田數内一雖レ所二治田高倉十八町

二段ニ右此内ヘ八町二段右依ニ税所殿申談候一眞壁郡内竹來郷田數八町二段六十歩ヘ相換申候於ニ伊勢役一者可レ有ニ御所務一仍爲ニ後日一相換申候狀如レ件

文安五年五月廿一日　大使一志文世（花押）

税所殿

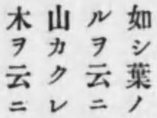
按一志文世は伊勢大神宮より諸國へ下さるゝ使の内なるべし一志は伊勢の地名なればよし有○與清曰税所は吉田社古文書に草假名にて「さいしよ」と書たれば「さいしよ」と訓べし「せいしよ」とは訓べからずこれいにしへの郡司の遺風にて賦税の事を司る役人と見ゆそが中神社の田所職などを兼帶せるもありし也税所の上席に大掾ありこは介の差次の官人なれど後には平國香の子孫常陸に住て代々大掾の官を相承せるよし府中總社古文書中安貞元年十二月廿六日北條武藏守同相摸守が常陸前司に下せる鎌倉殿仰執達の狀に見えたりさて介上にあり大掾其次にあり税所其下に若干人ありし成べし

（八）雩「アマゴヒ」「アマビキ」　雩は請雨祭也日本紀天武紀下卷十二丁左六年五月條に雩アマゴヒスと訓その外ものに然よみたるおほかり○日本紀廿九卷十二丁左天武紀六年五月條に是月旱之於ニ京及畿内一雩之云々また同十七年六月條に壬申雩云々また廿一丁右六月戊寅條に是日雩之云々また廿五丁右十年六月條に乙卯雩之云々また廿四丁右十二年七月條に庚子雩之云々また是月始至ニ八月一旱之百濟僧道藏雩之得レ雨云々○持統紀六丁右二年條に秋七月丁巳朔丁卯大雩旱也丙子命ニ百濟沙門道藏一請雨不ニ崇　朝一遍雨ニ天下一云々按此以下諸書の所見枚擧に遑なければ省きつ請雨をアマビキと訓たるは類聚名義抄字鏡集などにも見えて雨引の義也○拾芥抄下本諸社部に祈雨十一社應和三年七月五日火雷　水主　木島　乙訓已上山城　平岡　恩智已上河内　廣田　生田　長田　坐摩　垂水已上攝津云々按二十二社註式群書類從廿二卷二丁左にも祈雨十一社を載せてこゝとおなじ自注に人皇六十二代村上天皇治十七年應和三年癸亥七月十五日之例とあり○年中行事秘抄下卷祈雨事條に月令云仲夏命ニ樂帥一脩ニ鞉鞞鼓一均ニ琴瑟管簫一命ニ有司一爲レ民祈ニ祀山川百源一大雩陽氣盛而恒旱山者水源也　また請雨經法事條に天長元年天下〔大以ニ旱魃一空海和尚可レ修ニ請雨經法一之由被レ下ニ勅宣一云々雖レ經ニ七日一專無ニ雨氣一和尚入定思惟云々於レ是延修二个日夜和尚告曰池中有レ龍號曰ニ善如一是無

熱達池之龍王之類可ニ勸請一也云々結願之日重雲覆レ天雷鳴四方急降ニ膏雨一池水涌滿至ニ于大堤之上一自レ是後三个日之間普雨ニ天下一爲賀ニ其功一云々至ニ此時一不レ令レ知ニ公家一末代弟子宜レ加ニ祈請一云々按性靈集抄本六上卷時齋部一　天長皇帝於ニ大極殿一崛ニ百僧一雩願文あり西宮記　江家次第十二卷　禁秘抄下卷などその外祈雨止雨の式作法を記せる書おほかれどさまではふようなれば引出ず○字鏡集一卷雨部に雩雩同「アマゴヒ」「アマビキ」「アマゴヒ」云々○類聚名義抄法下卷雨部に雩雨于又云句反「アマゴヒス」「アマビキ」云々雩正云々○和玉篇下卷雨部に雩「ヒデリマツリ」「アマビキ」云々按「アマゴヒ」は雨乞の義「アマビキ」は雨引の義にて此訓持統紀にも見ゆもじは雩とも祈雨とも請雨とも通用せり○爾雅釋訓注疏本三卷十四丁右　に舞號雩也註に雩之祭舞者吁嗟而請レ雨雩音于疏に孫炎云雩之祭〔有舞有號云々〕是同鄭說也云云○春秋桓公五年注疏本六卷十丁右雩音于祭名に大雩註に傳例曰書ニ不時一也失ニ龍見之時一也註に十二公傳唯此年及ニ襄二十六年一有レ雨秋此發ニ雩祭一之例ト欲レ顯ニ天時一以指ニ事故重言一秋異ニ於凡事一云々疏に正義曰下三句謂ニ雩嘗烝一也雩是祭レ天嘗烝祭ニ宗廟一云々○禮記月令注疏本十六卷四丁右　に仲夏之月云々是月也命ニ樂師一脩ニ鞉鞞鼓一均ニ琴瑟管簫一命ニ有司一爲レ民祈ニ祀山川百源一大雩帝用ニ盛樂一乃命ニ百縣一雩ア祀ニ百辟卿士有レ益ニ於民一者ト以祈ニ穀實一云々註に陽氣盛而常旱山川百源能興ニ雲雨一者也衆水始所レ出爲ニ百源一必先祭ニ其本一乃雩雩吁嗟求雨之祭也雩帝謂爲ニ壇南郊之旁一雩五精之帝配ニ以先帝一也云々天子雩ニ上帝一諸侯以下雩ニ上公一周冬及春夏雖レ旱禮有レ禱無レ雩云々疏に命有レ至ニ穀實一正義曰云々非ニ雩月一故不レ雩云々○說文眞本十一下卷七丁右　雨部に雩夏祭ニ樂于赤帝一以祈ニ甘雨一也从レ雨于聲羽俱切云々○清人秦蕙田が五禮通考廿二卷吉禮廿二　大雩條に蕙田案月令曰大雩ア帝左傳云啓蟄而郊龍見而雩云々○與清曰雩は天武紀にはじめて見えて雨請のアマゴヒために神を祭る事也請雨祈雨などいふはたおなじ和訓には「アマゴヒ」とも「アマビキ」ともいへりもと漢土の名目に據たなれど其祭の作法はと也西宮記江家次第禁秘抄の類ものにおほく見えたるを考合せて知べし

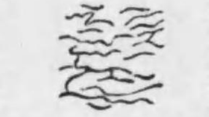
（九）朽木形几帳　住吉物語群書類從本四十六丁左　に紙びやうぶ

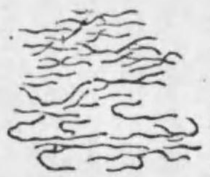
に大和繪かきたる一よろひ立て母屋のみすに朽木形の几丁かたびらかけていとあるべかしくしつらひたり云々○濱松中納言物語三卷十五丁左に宮の御方にわたり給へれば夜目はさるかたにてよづかはしかりけり柴垣のはつかにあばれ殘れるが露もたまるまじくあれわたれるなどいかでかかくて人のすごし給ふらんあはれに見ゆるがいまする所がらにだにあらずふりにたるけしきなるに朽木形の几帳のかたびらとしへにけるをしそへつゝたきかよふみすのうちなにとなくかほり出て佛の御まへの名香のにほひもひとへにあひてさすがにあてはかなるうちのけしきも思ひやりあはれなり云々○紫式部日記傍註本上卷十八丁左にこよひはおもて朽木形の木丁れいのさまにて人々はこきうちものをうへに著たり云々○榮花物語わか枝一丁右に御几帳みなくち木形のいみじうあをやかにめでたきもこの春にはうもれぎとなきにやと見ゆ云々同若水五丁右にしんでんを見ればみすいと青やかなるに朽木形の青紫ににほべるより女房のきぬのつま袖口かさなりなほ外よりはにほひまさりて見ゆる云々按わか枝の卷若水の卷共に正月の事也○枕草子春曙抄五卷四丁左なまめかしき物の段に青やかなる御簾のしたより木帳の朽木形いとつやゝかにてかゝりたるひもの風に吹なびかされたるいとをかし云々○舊本今昔物語廿四卷第卅一語延喜御屏風伊勢御息所讀和歌一語に三月許事云々簾ヲ掻上テ見レバ母屋簾ハ下シタリ朽木形ノ几帳ノ清氣ナル三間許ニ副テ立タリ云々同卅一卷第五語大藏史生宗岡高助傳レ姫語に五間四面ノ寢殿ヲ造テ其レニ高助ガ娘二人ヲ令住ム其寢殿ヲ□タル事帳ヲ立テ多ハ朽木形ノ几帳の帷ヲ懸テ夏ハ薄物ノ帷ヲ掛ク云々○長秋記長承三年十二月四日條に御出家御几帳帷用二青鈍一然而今度被レ用二朽木形一是下官之所二申行一也自餘所々鋪二改裝束一准レ例云々○左經紀萬壽五年四月一日條に御几帳帷六帖云々並御帖等青鈍令レ調献レ宮日來朽木形帷也云々○禁秘抄上卷七丁左清涼殿條に帳四面有二几帳帷一夏生以二胡粉一畫二花鳥一多朽木形疊三帖繧繝御座敷二東上一云々階梯二卷十八丁右に帷夏多事雜要抄帷多面練平絹纐纈文裏同白古者張已上螢レ之夏生平絹以二白泥一畫二野筋秋艸等一冬同レ前螢レ之按以二纐纈一畫二朽木形文一也其體見二雜要抄一云々○伊勢貞丈麻久奈岐隨筆廿二丁右に朽木形ノ几帳古書ニ見タリ其文樣左圖ノ如シ



東寺ニテ灌頂ノ時ニ當時用ル帳如レ此也是也地白文濃蘇芳今云トビ一云地黃ニスハウトモ云又春日緣起十二卷アリ筆者不レ知ニモ見エタリ滋野井家禁秘抄聞書ノ內如レ此アリト橘嘉樹ガ說也古ノ朽木形然ルヤ否ヤ貞丈云禁秘抄清涼殿之篇帳下ノ御注ニ四面有二几帳一帷夏生以二胡粉一畫二華鳥一冬朽木形印本ニ華鳥ヲ蒹雀ニ作ルハ誤也今古本ニ從テ改レ之トアリ夏ハ華鳥ニ冬ハ朽木形ト相對スレバ枯木ヲ云ガ如シ葉ノ朽テ落タル木ヲ朽木ト云フニヤ身木ノ死タルヲ云ニアラズ古今集雜部ケンゲイ法師「形コソ深山カクレノ朽木ナレ心ハ花ニナサハナリナン」是死木ヲ云ニアラズ猶考ベシアラヌ物モ當時ハ公家衆ノ說トイヘバソレニ定マル事アリ歟ニ草木ノ枯ルト云ハ生チ云テ死ニアラズ朽木トモ其准ナラント云疑アリ凡物ノ名ニ感テ實ニ違フコトアルモノ也可レ熟考ニ云々○大塚嘉樹蒼梧隨筆二卷に朽木形文事云々滋野井權帥公麗卿ノ仰ニ東寺ニテ長者灌頂ノ度ニ懸ラル、所ノ帳ノ文朽木形ノ文ニテ古ノ物ナリ地ハ白綾ナル歟平絹ナル歟文ハ濃色ニテ其形狀大凡左ノ如ナル由又仰春日緣起畫物二十卷アリ其中ニモ朽木形ノ帳アリ其文ノ圖モ亦共ニ同キ物ナルヨシ○權帥殿ノ仰趣ヲ圖ス

于時明和八年辛卯四月十四日於二都督御亭五松樓一禁秘抄ノ御會アリ其度奉二于書一之云々天明六丙午年三月ヨリ至二五月一江府牛込護國寺ニテ本尊觀世音開帳アリ此節當寺什物數多令レ拜其中ニ白平絹ノ幔二條アリ其文濃色ト見ユ今見ル處ハ黑キナリ形狀左ノ如シ五月十一日田村氏靈寶場ノ芯蓙ニ便リテ矢立ノ墨ヲ以テ摸寫シテ退ク嘉樹又其圖ヲ欲シテ同生ニ請テ爰ニ臨寫ス然シテ赫蹄本圖ヲ臨寫爲シガタシ仍テ小ニ切約ス





實ニ臨寫スルモノハ別ニアリテ聚頭假字函ヘ收ム云云○與清曰くち木形の名義伊勢貞丈が死木にはあら

で落葉したる木なめりといへるも一わたりさもとおもはるれどなほいかにぞやこは朽木の枝の形なればシカ然いへりと見ゆ棠花若枝に此春にはうもれ木となきにやとあるをも思ふべし冬春の間は几帳の帷の文様朽木なれば朽木形の几帳といへりされど朽木形のみに限れるにあらず夏秋の間は生に胡粉もて華鳥をゑがきたる帷を用ふ几帳の圖類聚雜要抄四卷几帳制度考など考て知べし

(十)海部の文 源氏物語 湖月抄本四十四丁右 玉鬘にあさ花田のかいぶのおり物おりざまなまめきたれど匂ひやかならぬにいとこきかいねりぐして夏の御方に云々河海抄に海浦文大浪のかたをおれる也云々花鳥餘情に海賦は大なみにみるや貝やなどおりたる文なり云々岷江入楚に河かいぶは海浦また大浪のかたをおれるなり秘大海にみる貝也夏の御方は花散里也花海賦は大浪にみるやみなそこの貝をおりたる也云々○紫式部日記十一丁右傍注本上卷 にからぎぬは松の實のもん裳はかいぶをおりて大海のすり目にかたどれり腰はうす物から草をぬひたり云々又十八丁左 白がねの御衣ばこかいぶをうちいでゝ蓬萊など例の事なれどいまめかしうこまかにをかしきを云々按こゝの文榮花物語初花十四丁右 にも出たり初花の卷はすべて紫日記を取て書たる也○續世繼二卷廿六丁右 白河花宴に裳はえび染を地にてかいぶをむすびて月のやどりたるやうに鏡をしたにすかして花のかゞみとなる水はとせられたり云々按古本には「かいふ」を「かへし」に作りたれど據用がたし○禁秘抄上卷八丁右 清涼殿置物御厨子の條下に笛筥蒔ニ海部ニ云々注に海部藻類ヲ蒔也また海邊之體或貝類ヲ蒔トイヘリ云々○藻鹽草十七卷色部九十七段 に淺花田のかいぶの文はなだに大波を織たる也源氏云々○與清曰かいぶの文は海浦の字音にて海賦とも海部とも書は借字也大波の打よせたるさまにもあれ藻に貝にもあれ海の浦邊の形なりと心得べし

(十一)三亡 戰國策三下卷廿三丁右 秦昭襄王條に張儀說ニ秦王ニ曰云々世有ニ三亡ニ而天下得レ之其此之謂乎臣聞レ之以レ亂攻レ治者亡以レ邪攻レ正者亡以レ逆攻レ順者亡云々

(十二)夂一錢一文目 青木敦書が經濟纂要後集四卷 に文人奇士多用古字官府文移通用今字市井下流則用省記俗書ニ如ニ錢作レ糸聖作レ圣盡作レ尽是也續文獻通考鈔 云々

○新白蛾が牛馬問三卷四丁左 に糸は泉の古字いにしへの錢の字也故に今に至て金銀兩目の事に通用す初學此義をしらず俗字僞字といふ事誤なり云々○大塚嘉樹が蒼梧隨筆一卷 に或云俗中金銀の分量をいふは何夂と稱するに至て糸の字を以てするものは其字の義如何哉假令一夂といふ時は其秤の重は錢一文の重也爰を以て一錢を以て一夂といふより一文目と云事を合書して一文と云を一夂と稱するに似たり請ふそのより所ありやと答其考の如く一夂は其目の分量如何にも一文目也されども件の文字に夂と書事は文目の二字を合畫艸書して夂と稱するにあらずたま〳〵夂の字體文目を合畫せるに似たれども篇海類篇を考るに卷の廿冊中に糸字ありて注して曰糸は音錢與レ錢義同俗用也とありされば一文目は一錢目なる故に此字義ありと見えたり今倭俗草書して一夂と書き又二夂など書ては全く一錢目二錢目の事にて糸を草書したる也夂夂糸共に草書の異體と見えたり然して事の序に新舊錢を秤目にて試るに寛永錢初鑄といへる錢と文の字ある錢と又大佛の像を廢して鑄たる錢等は其掛目各一夂あり近世鑄らるゝ所の錢層錢は夂目の量するの限にあらず 又事の序に開元通寶永樂錢等を懸合するに大抵各一夂ほど也開元錢は一夂の所は希にして大凡九分ほど也是は年序を經たる故磨滅せるものと見えたり其餘の古錢は其徑りの廣き狹き又厚薄もさま〴〵あり況又度量の多寡もあれば尤不合勿論の事なるべし殊更漢の代の五銖半兩等は素より銘文にてもわかり又其世の度量も考あるべし今是を省く漢家通用の寶貨の記等にても辨へ知べし今爰に答る所は糸の字の證にして眼前通用する所の錢を以て申もの也但異邦の錢にても眼前の品たりといへども清朝康熙の錢は其大小又金銀銅等の甲乙ありて一概に比量し難し故に開元永樂等を以て眼前の理を申答るもの也云々○篇海類編廿卷 廿五丁右 部第五十三に糸音錢與レ錢義同俗用 ○示兒編廿一卷に中州金石記卷四淮源廟鐵鐘識曰慶歷三年二月立正書在桐柏云々捨糸人名云々曰舉阮也 錢字作レ糸已見ニ于此ニ或云泉字草書云々○本草綱目一之上卷五十五丁右 序例上に時珍曰蠶初吐レ絲曰レ忽十忽曰レ絲十絲曰レ氂四氂曰レ絫音カサト十氂曰レ分四絫曰レ宇二分半也十絫曰レ銖四分也四宇曰レ錢十分也六銖曰ニ一分去聲ニ錢半也四分曰レ兩二十四銖也八兩曰レ錙二錙曰レ斤二十四兩曰レ鎰一斤半也

准二官秤一十二兩三十斤曰レ鈞四鈞曰レ石一百二十斤也方中有レ曰二少許一者と些子也今古異レ制古之一兩今用二一錢一可也○與清曰糸は錢の俗字とも泉の草體とも兩說あり錢泉相通へばたゞ錢字と心得てあるべしこれを文目と訓は錢一文の目方によれる也明の洪武錢永樂錢など皆目方十分あり一文の錢の重さ十分なれば十分を一錢といふ所謂一文目也匁を「モンメ」と訓めど實は「モン」と而已訓べきにて目はいひそへたる詞也目は秤の數目にて秤にもり付たる目の事と知べし

(十三)法隆寺中院護摩堂觀音像座緣銘　歲次丙寅正月生十八日記高屋大夫爲レ分二韓夫人名阿麻古願一南无頂禮作奏也以上三十二字一行書に書たり　歲次丙寅は推古天皇十四年也高屋大夫は新撰姓氏錄中卷九十六丁左に高屋連饒速日命十世孫伊己止足尼大連之後也とあれば此族なるべし高屋は神名帳に河內國古市郡に高屋神社あり今譽田八幡宮の西方に高屋古城蹟もあればこゝに出たる氏なるべし伊己止足尼大連は舊事紀五卷廿三丁左　天孫本紀に天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊九世孫物部五十琴宿禰連公膽咋宿禰之子と見ゆ韓夫人名阿麻古は韓人氏か加羅氏なるべし姓氏錄下卷百四廿一丁左

七卷攝津國諸蕃任那條に韓人任那國人左李金亦名佐利己牟之後云々また十四丁左卅卷未定雜姓部に加羅氏百濟國人德率吳伎州之後也云々など見ゆまた韓矢田部造上卷四十一丁左　韓國連下卷百二丁左　韓海部首下卷百五十八丁右加良姓下卷百六十三丁右　などいへる姓もあり○與清曰法隆寺觀音の臺坐銘は推古十四年の古文也頭寫本を得て一讀せるに寫誤ありけん通解しがたし生十八の三字爲分の分字作奏字共に心得がたし他日善本を得て訂正すべくなん

(十四)法隆寺黃金佛四十八躰中釋迦佛背銘　戊子年十二月十五日朝風文將二其零一濟師慧燈一爲嗽加二大臣誓願一敬造二釋迦佛像一以二此願力一七世四恩六道四生俱成二正覺一以上四十八字一行十二字つゝ四行に書たり　戊子年推古天皇卅六年也風文文は欠の誤寫歟吹字の編を省て風欠と書るなるべし濟師慧燈濟師は藥師如來をいふ藥師の燈明を濟師慧燈と書たるにや爲嗽釋迦像を造る法師が嗽て頂禮せるよし也大臣誓願大臣は蘇我馬子大臣也馬子が誓願を發願法師が志に加へて造佛の功を遂たるよし也

(十五)東大寺枚幡銘　東大寺枚幡鎭鐸天平勝寶九歲

五月二日按東大云々七字と天平云々十字と二行に書たり

(十六)東大寺銀壺銘　東大寺銀壺重大五十五斤甲盖實幷臺惣重大七十四斤十二兩天平神護三年二月四日

(十七)東大寺銅鉢銘　重大五斤五兩延喜十四年十二月十一日別當大法師智愷住時作入按以上三銘は東大寺三倉中に納たる古物の銘也

(十八)行義　俗言に行義がよい行義がわるいなどいへり戰國策六上卷廿五丁ウ趙武靈王篇に御二道之一以二行義一勿レ令レ溺二苦於學一と見ゆ

(十九)事レ君之道　事君の事孝經に事君章あり戰國策六上卷廿五丁ウ趙武靈王篇に事レ君者順二其意一不レ逆二其志一云々また廿六丁ウ趙燕後胡服王令レ讓レ之曰事レ主之行竭レ意盡レ力徵諫而不レ譖カヒスクセ應對不レ怒不二逆一レ上以自伐カヲラ一不二立一レ私以爲レ名子道順而不レ拂臣行讓而不レ爭子用二私道一者家必亂臣用二私義一者國必危反レ親以爲レ行慈父不レ子逆レ主以自成惠主不レ臣也

(廿)改革不レ可二妄行一　戰國策六上卷廿七丁ウ趙武靈王篇に利不レ百者不レ變レ俗功不レ什者不レ易レ器云々史記卷六十八三丁オ　商君傳に杜摯曰利不レ百不レ變レ法功不レ十不レ易レ器法レ古無レ過循レ禮無レ邪云々

(廿一)封城　戰國策六上卷廿七丁ウ趙武靈王篇に城レ境封レ之注に築二城境上一爲二之封城一云々封は境目の土手也土手を築き守屋を建たるを封城とはいへる也

(廿二)乘馬石　漢土のいにしへ馬に乘には石を臺にして乘たり戰國策六上卷廿四丁ウ趙武靈王篇に踐レ石以上者注に踐レ石謂二能騎乘者一禮洗乘石注乘馬石云々

(廿三)帛衣白無垢　倭名類聚抄十二卷絹布類部に帛說文云帛浦角反俗云波久乃岐奴薄縑也○喪葬令義解本九卷に凡天皇爲二本服二等以上親喪一服二錫紵一爲二三等以下及諸臣之喪一除二帛衣一外通二用雜色一云々義解に謂白練衣也云云集解に釋云帛衣白練衣也除二帛衣一故者我朝以二白色一爲レ貴也天皇服也各以二所レ好色一爲レ貴故書云有レ客有レ客亦白二其馬一般禮以レ白爲レ貴故云レ然也古記云問除二帛衣一其意如何答當朝以二帛色一爲二貴色一天皇服聞二上品儻二用之一各以二己所レ好色一爲レ貴故書云有レ客有レ客亦白二其馬一般禮以レ白爲レ貴故然也穴云帛衣舊古之代屬レ意稱二白衣一一卷私記云也但今可レ求二帛字說一○延喜式伊勢大神宮式廿七丁左　大神宮裝束條に帛被三條二丈廣四幅長三尺五寸裏同納二綿各二十屯一一條長一丈廣四幅長九尺廣四幅無レ綿一屯一　云々帛衣四領長三尺五寸裏同上各納二綿一屯一　帛裳四腰

長五尺著纈色裹云々帛意須比八條長二丈五尺廣二幅云々帛巾四條長五尺云云帛袜八條長二尺廣一尺五分云々盛轆轤筥以錦黏表以緋帛黏裏云々加美阿氏帛八條長三尺云々又荒祭宮裝束廿九丁右に絹被一條帛被一條各長七尺廣三幅納綿八屯云々帛裳一腰高二尺長四尺齊云々又伊弉諸宮二座裝束廿九丁左に帛被二條云々帛綿袴二腰長各一尺六寸云々帛裳一腰高一尺六寸齊長四尺云々又廿二丁右度會宮裝束に小綾帛衣一領云々帛襪四條各長二尺云々按太神宮式中帛の所見おほかれど今は異なる名目の物を擧て同物をばことごとくは引出ず○同書縫殿式二丁右六月神今食御服に帛單衣二領別三丈七尺五寸云々帛帷一條別三丈七尺云云帛袜二兩別三尺五寸云々牀帊帛二條別四丈六尺云々又三丁左新嘗會御服に帛袍二領別一疋一丈五尺云々帛帷二條帛坂枕一枚一折四尺云々牀帊帛二條云々又四丁右鎭魂齋服に榛摺帛袍十三領別一疋一丈二尺云々綠袍四領綠表帛裏別三丈云々綠裙四腰綠表帛裏別三丈裙腰料纁帛四條別一丈五尺云々又六丁左正月齋會衆僧法服に講師讀師七條袈裟二條講師淺紫綾讀師深緋綾竝深滅紫帛裏別四丈云々袍二領講師深支子綾表帛裏讀師白橡綾表淺綠帛裏別三丈云々襖子二領衞蔔表帛裏別三丈四尺云云裳腰料纁帛八尺別四尺袴二腰黃櫨表帛裏別一丈五尺云々赤練帛袜布袜各二兩帛別三尺五寸布別三尺云々右法服依前件若應縫

九條者用帛一疋一丈二尺二寸袈裟三丈九尺六寸甲料三丈二尺六寸絲五兩五條用帛四丈二尺四寸袈裟二丈二尺甲料二丈四寸絲四兩其縫備所充云々又十五丁右裁縫功程に二目纐帛一疋一日纐減半長功日十四人中功日十七人短功日廿人榛摺帛一疋長功日大半中功日一人小半短功日二人云々又十九丁左雜染用度に退紅帛一疋紅花小八兩酢一合藁半圍薪卅斤云々纐帛一疋藍半圍黃蘗大二斤云々青綠帛一疋藍四圍黃蘗二斤薪四十斤云々次縹帛一疋藍四圍薪六十斤云々淺藍色帛一疋藍半圍黃蘗八兩云々又廿四丁右手料雜物に纁帛八尺盛褥案四脚卄紐四條料別二尺云々黃覆一條長八尺三幅料黃絁二丈四尺裏料帛長同表云々同書左右衞門式三丁左小儀條に執纛一人著末額緋行縢纐袍帛博帶騎馬云々同書兵庫式二丁左大儀條に大儀擊鉦鼓人著平巾冠漆羅開項緋大袖袍綠襖子帛博帶長五尺廣四寸以布爲心以帛爲表裏其二端各著細帶長各五尺大口帛袷袴白布襪烏舃云々又三丁右大射條に凡大射建羅幡者烏羅十二旒旒別張竹二株著鈴二口帛巾二條六旒纁六旒緋各長八尺廣八寸云々按帛被帛衣帛裳帛意須比帛巾帛袜緋帛加美阿氏帛袴帛襪帛單衣帛帷牀帊帛袍帛坂枕榛摺帛袍帛裏纁帛深滅紫帛淺綠帛赤練帛袜帛

一疋二目纐帛一目纐帛退紅帛青綠帛次縹帛淺藍色帛帛博帶大口帛袷袴などの名目延喜式に見えて喪葬令義解に帛衣白練衣といへるを考合すればもと帛といへる白練の一種の絹ありし也それを緋にも榛摺にも縹にも深紫にも淺綠にも赤練にも退紅にも纐にも青綠にも次縹にも淺藍にも滅紫にもさまざまに染成して用る也必白色に限れる物とおもふべからずされど大祀大禮の服に白を貴て用らるゝには白練衣にて染色の物ならず夏は生にせられたるもやゝくだりての定にやあらん○日本紀略嵯峨天皇弘仁十一年記に二月甲戌詔曰云々其服大小諸神事及季冬奉幣諸陵則用帛衣元正受朝則用袞冕十二章朔日受朝日聽政受蕃國使奉幣及大小諸會則用黃櫨染衣皇后以帛衣爲助祭之服以襢衣爲元正受朝之服以鈿釵禮服爲大小諸會之服皇太子從祀及元正朝賀可服袞冕九章朔望入朝元正受群臣若宮臣賀及大小諸會可服黃丹衣並常所服者不拘此例云々按其服大小諸神事云々の服字一本には朕字に作れりこゝの文にて帛は天子皇后の神事に著御の服なる事知べし○西宮記臨時四所々座體類條に新嘗會天皇服帛御衣云々同臨時五人々裝束大嘗會卯日條に天皇服帛御衣著木綿幘件幘就給大嘗宮之間御裝束也云々異本に天皇行幸之間帛衣齋服衣著幘就大嘗宮之時御裝束也に作れり○江家次第二卷卅丁左敍位入眼篇に裝束位記式云々五位以上白紙白縹帛帶厚朴軸云云按五位以上とは四位までをいふ也四位五位の位記は白紙に書き白き縹紙に帛をもて帶にし厚朴を軸にするよし也○同十卷十四丁左新嘗祭篇に戌一點天皇御南殿著帛御衣無文純方玉帶云々同十二卷十一丁左齋王群行篇に御裝束前例御大內時者著給帛御衣云々御輿至宮城經待賢昭慶等門御小安殿次改著帛御裝束次齋王西川禊畢入自藻壁門御於嘉喜門外云々又十五丁左次自內裏被案內齋王出野宮由之後有行幸行幸儀如恒自里內有行幸時途中著御位袍於小安殿被改帛御裝束巡方無文玉帶云々同十五卷五丁左大嘗會卯日條に戌刻御鸞輿帛御衣云々○枕草子春曙抄十卷十丁右身をかへたらん人などはかくやと見ゆるものゝ條にたゞの女房にてさふらふ人の御めのとになりたるからぎぬもきず裳をだに用意なくはくぎぬにて御まへにそひぶして御帳のうち

をゐ所にして女房どもをよびつかひ云々按春曙抄に白衣なるべし云々旁註本九卷廿九丁右に「はゞぎぬ」に作りて旁注にうちかけの躰也云々活字本に「はくぎぬ」に作り一本には「はゞきぬ」に作れり「はくぎぬ」と有は疑はし○禁秘抄中卷一丁左 御裝束事條に奉幣發遣時帛御裝束也御冠御帶無文也或冠被レ通用只時又自二他所一行幸之時赤大口不レ改他皆帛御裝束タル 一說也云々按自二他所一行幸之時とは江家次第十二卷十五丁左齋王群行の條を考合するに內裏ならぬ里內よりの行幸をいへる也赤大口不レ改他皆帛御裝束一說也とは 一說に他所より行幸の時は赤大口を改めずしてその外は悉く帛の御裝束を用給ふよし也建武年中行事略解本四卷十一丁右に六月十一日御神事一日よりはじまる行幸有戒のはじめに出御はくの御裝束を奉る內藏寮てうず夏はすゞし冬はねる云々又十二丁右 神嘉殿のひさしよりいらせ給ふ大床子の御座につかせ給ふ此所にしようぢんはりて白木の大床子たつ御座白べりなり四の角にしら木のとうろをしら木の机におく關白の座をまうく所々に絹のとばりかけたり劍璽大床子の上におくとのもんれう御ゆまゐらす御舟にとるなりめすほどにうめたりそののち樋のくちより七たびまゐらす山蔭中納言の子孫なるくらうど御ゆの事をつかうまつるなりその人なければ外戚にも末なる又えたり頭もしは五位藏人の中これも山かげの末御湯殿にまゐるうへのきぬ脫てうへに明衣をきたり下がさねおなじく著せず神殿の方に向ひて七たびこれをそゝぐさて御舟に御ゆかたびらめしていらせ給ふ三ひさごめしてあまの羽衣御ゆかたびらなり 舟の中にぬぎ捨て更に又內藏寮の御ゆかたひらをめしてあがらせ給ふ其後帛の御裝束をめす內藏寮の奉れるをぬがせ給ひつればまたぬひごのれうの奉れるをうるはしきさいふくには奉る也これは冬もすゞしなり內藏寮の奉れる御幘を御かうぶりの巾子のねにむすぶ片かぎ也御纓の下より前に引まはす也御かうぶり無文御帶むもんのずんはううち〳〵御用意あるなり云々○名目抄衣服篇群書類從本上卷二丁右に帛衣ハクノキヌ天子神事之時用レ之云々○飾抄上卷二丁右 袍部帛條に 天子令レ從二神事一御之時著御天養元九八齋宮群行宸儀召二改白御裝束一白御裝束著御事御二大內一之時一度召二御裝束一行二幸里第一之時先令レ著二御尋常御裝束一於二小安殿一召二改白御裝束一仁安二十一廿一自二廻立殿一移二御

神殿一主上著二帛御裝束無文玉巡方御帶其躰甚少自レ院被レ獻之按齋宮は妍子內親王也白御裝束は帛の字を省て書たる也○胡曾抄天皇袍條に帛御服神事時著レ之夏生冬練張云々單白袙平絹表袴紅中倍 紅大口御挿鞋張二白絹一無文巡方帶云云○法曹至要抄下卷十三丁左 喪服條天皇御服事に喪葬令云天皇爲二本服一等以上親喪一服二錫紵一爲二三等以下及諸臣之喪除二帛衣一外通用雜色一義解云凡人君即位服絕二傍親一唯有二心喪一故云本服錫紵者細布即用二淺墨染一也帛衣謂二白練衣一也案レ之天皇爲二二等已上親喪一服二錫紵一爲二三等以下及諸臣之喪除二帛衣一外用二雜色之法一具見二于此令一矣また十三丁左太上天皇御服事に喪葬令云天皇爲二本服二等已上親喪一服二錫紵一爲二三等以下諸臣之喪一除二帛衣一外見レ通二用雜色一說者云太上天皇者同二正帝一也云々壺井義知が法曹至要抄下卷十三丁左書入に帛衣天皇正服定二令條之時未レ有二黃櫨染一也嵯峨天皇御宇黃櫨御袍始之後以二帛衣一爲二神事之服御一者云々○故實拾要十四卷に天子御神事御裝束帛ノ御服ト云 御冠御袍冬裏表白平絹夏無レ裏 御丁冬裏表白絹 御表袴裏絹夏無レ裏但御袍ハ此裏也 御袙夏無レ裏白平絹夏冬通用 御大口裏表白平絹夏冬通用 御石帶有文巡方 御笏 御檜扇色紙形 御襪白平絹 御草鞋金襴赤地 右御神事ノ時著御シ給フ也云々○裝束拾要抄上卷三丁右 天子御袍條に帛天子令二從神事一御之時著御ト云々帛トハ白ノ平絹也夏ハ生冬ハ練ナリ云云○裝束圖式上卷九丁左 天子御袍條に帛御袍御神事ノ御袍也夏ハ白キ生冬ハ裏表白練ノ平絹也圖ニ及ザル故略レ之云々○江次第考二卷に帛帶今按言二白絹一也云云同一卷に布障子宗直云此ハ唐紙ノ如ク兩面ヨリ布ヲモテ張タル障子也今帛障子ト云モ絹ヲ以テハリタル故也云々○源氏男女裝束抄上卷十六丁左 に帛御衣著御の時は無文の御冠に御幘を用ひ無文の御帶を著御し給ふ也御幘は御冠の巾子のねにかたかぎにむすぶ也御えいの下よりまへに引廻し給ふよし也云々○寶石類書八十七卷衣服部に帛御服宗直按廻立殿迄帛御服縫腋也自二廻立殿一御祭服也云々○服色管見別錄六卷帛御禮服辨に令を見るに帛衣を天皇の御衣とすそのむね即異國の大裘に同じかりけりいかにぞなれば帛衣はたゞに白き練衣なるをは白練衣也と有令の義解に帛衣とコンベン もろ〳〵の色絹の上とするは彼周の世に大裘を衰冕十二章の上とするが如し是は質を示すよしにてひとの國も吾みかどもおなじ心也けりさて周には天地を祭る時に大裘を用ひ其外の祭と大禮には衰冕よりして下を服し給

ひ後漢より天子の御衣に大裘また鷩冕より下はなくて衮冕十二章服もて通はし用られし也吾朝のいにしへは其六冕などはなくて帛衣をのみ通はし奉らしめ給へり是をたがへばかの大裘を衮冕より下に通はし用らるゝがごとし後漢衮冕十二章服のみを通はし用られたるにこゝろ相似たり抑十二章服は飾をもて皇(スメラギ)の貴きを示すなれば是を用給ふ世には常の著御の服玩もまた飾をもてす帛衣を大祭大禮などに通はして奉れる世には常の著御も又帛衣也その中祀中儀より下の帛の御著のさだめはやがて朝服のさま成べし大祭大祀などの帛の御衣はいかで是に同じからんしかるに後の世の人今見るさまをしていにしへ大祭大禮に奉りし帛の御衣も朝服のさだめならんとおもへるはいと誤れり考るに令の後大祭大祀などに奉りし帛の御衣は冕服のごとくなるべきなり（かの西宮抄に行幸の間は帛の御衣にて大嘗宮の間は布の御衣也と有もいにしへは廻立殿に行幸までは朝服の定めなる帛の御衣なるべし御湯奉りて後禮服の製なる帛の御衣に奉りかへけるに後の世にはその御衣絶にたれば御湯の後も朝服のさまなる帛の御衣を用給ふ御湯のまへと別ちなきにつきて朝服のさまながら布の御衣を帛の御禮服にかへて奉りし也けりいにしへは喪の御時ならでは布の御衣奉る事なかりし也又同抄に御禮服を記せし中に女帝の御さうぞく皆白といひ後の條には女帝白御衣とあるは天平四年より衮冕十二章服をならさせ給へど女帝の御禮服のいまだ改らぬに分てかくは載られしなるべしこれら古の帛の御衣といへる中に御禮服の有し證也）そのよしは令によるに大祭大禮などに皇太子また親王王臣の五位已上(スヘラキ)は禮服を著六位より下は朝服をきるめり然るに皇六位とひとしく朝服のさまなるを著御あらんやいにしへ大祭大禮などに奉りし帛の御衣は禮服よりおとれるさまならざる事は明か也然るに弘仁十一年の詔の末文皇太子は祀にしたがひまたむつきの朝賀に衮冕九章を著給ふべしと見えたり（日本紀略に弘仁十一年二月甲戌朔詔曰云々其服大小諸神事及季冬奉二幣諸陵一則用二帛衣一正受レ朝則用二衮冕十二章一朔日受レ朝日禮レ政受二蕃國使一奉幣及大小諸會則用二黄櫨染衣一皇后以二帛衣一爲二助祭之服一以二擣衣一爲二元正受朝之服一以二細叙禮服一爲二大小諸會之服一皇太子從二祀及正朝賀一可レ服二衮冕九章一朔望入朝元正受二群臣若宮臣賀一及大小諸會可レ服二黄丹衣一並常所レ服不拘二此例一とあり皇太子從祀とは中祀以下にあれどこゝは大祀の事なりまた皇后の擣衣は褶衣(チハヤ)のことなり）かく大祭に天皇の御冠よりして服飾皆親王王臣の祀服に同じ樣ならんには皇太子いかで衮冕九章を服せさせ給ふべきやしかれば天皇の彼帛の御衣は必冕服の定めにて有ける也さて後の世の朝服の製なる帛の御衣は古の中祀中儀をはじめて常に奉らざるは樣の殘れるものなるに下の御具まで皆白くして文なし唯しろからぬは皂の御頭巾御帶の革と御履のしたぬられたるのみ也是をもておもへば帛の御禮服

も御裳よりして下の御具白くて文なかるべし御帶は皇太子の如く紳を用ひさせ給ひ牙の笏白玉雙珮白き御禪(ミソ)（禪の事は令已前服玩の辨に有赤皮也是かの帛の御禮服の白きを赤きにかへて繡等の飾を加へられしなるべければなり）にてぞ有べきさて御冠はかの質を示し給ふよしなれば大裘によらせ給ひて無旒の冕にやと覺ゆれど大裘は天地をまつらるゝ時のみにて大祀には衮冕十二章服なればさても有なん此朝にては大祀大禮かねて奉るなれば飾なきにはあらじ飾あらば又皇太子の御冠にもなさるべき事しるきに（こは皇太子の御冠といふは九旒の冕をいへり天皇の御冠九旒の冕にまさる時は十二旒の冕なる事知べし）古事談に大嘗會之時代々令レ著給玉冠は應神天皇之御冠也（相二具御禮服一在二内藏寮一）と有此玉冠は十二旒の冕にて御禮服とは帛の御禮服なる也（冕の事は令已前服玩の辨にいへり又帛の御禮服とは大嘗祭に十二章服用ひしめ給ひし事なければ也）さて冕服の定めなる帛の御禮服の絶たるは天平四年よりして大禮に冕服をもて帛の御禮服にかへ用られしより唯踐祚の大嘗にのみ奉らしめ給ひしを其後天長に踐祚の大嘗祭の飾をことぐ〳〵く省かれ五位より上の禮服著事をもとゝめられしかば皇の冕服の定めなる帛の御禮服も此御時より全くとゞめ給ひし也けり○或人問弘仁十一年の詔に帛の御衣を著御のよしのせられたれども其定めの二品ある事をいはずさらば又おなじさま歟答帛の御衣といふは親王より諸王諸臣にいたりて一位の深紫の衣諸王の二位より五位まで諸臣の二位三位の淺紫の衣などいふがごとく彼深紫の衣淺紫の衣など名は同じくてそのさまには禮服有朝服有用らるゝ式によりておもひはかるべき也帛の御衣も又名はおなじくして冕服のさまあり朝服のさまありその式によりて別ちある事おもひはかるべきなりその上もろ〳〵の神事に帛の御衣を用ひさせ給ふはやがて古へのまゝ也しかれば更にその著御の式は記すまじきにやいかで是疑はんや又問天平四年天皇はじめて冕服して朝を受給ふ事史に見ゆ（續日本紀天平四年春正月乙巳朔御二大極殿一受レ朝天皇始服二冕服一左京職獻二白雀一）是より前に大祭大禮などに著御の帛の御衣冕服の製ならば此時始て冕服を服させ給ふと載べからずと答しからず帛の御禮服は唯衮冕をかうぶらせ給ふのみにて御衣御裳無文なれば全く冕服とはさしいふべからず天平四年にいたりては衮冕十二章服をうつされしかばこゝに始て冕服を服給ふとは記されしなるべしかく見る時は何の疑ひかあらん○皇后の御衣は天皇の御衣に准(ナズラ)

ふべししかれば大祀大禮などに奉る帛の御衣も則思ひはかるべし唐の制を考るに皇后の御衣の內に褌衣より上たるはなければ吾朝の皇后の帛の御禮服の御衣御褌御裳御袴御帶御舄皆白きを奉るのみにて女の禮服に同じかるべし（御帶は則天皇のに同じき事令の秩考皇太子の妃の御帶もておしはかるべし）御首飾もやがて寶髻なるべし尤其式は異ならんのみ凡寶髻は內親王一品はこの飾二品以下にまされりされば皇太子の服は一品にまさり皇后は皇太子禮服にまさる事あきらかなり 此帛の御禮服も聖武天皇の御宇より大禮には用ひられずなりて聖武天皇の御宇より皇后の帛の御禮服を大禮には用られしなりしといふ事古き書に打出書たるは見れど天平四年の朝賀ずり天皇冕服を著御有し事は續日本紀にあり天皇の冕服を著御といふ時は皇后の褌衣を著御あらん事いはずしてしらるればそれしならん 天長の大嘗祭より大祀に用ひらるゝ事もとどまりつればたえけるにぞ云々○與清曰帛は蠶の所吐（ハケ）糸もて織れる薄絹（ウスギヌ）也凡絹の地太きを縑といひ薄きを帛といひ甚輕く薄きを紗といひ麁惡にして布に似たるを紕（アシギヌ）といへり喪葬令義解に帛衣は白練衣也とあれど中比よりは練と生と二種に分れて冬は練衣夏は生衣を用られし也延喜式に様々の染色なるも見え又天皇皇后の著御に限れるにもあらねど後は皇の大祀大禮にのみ著給へる服とはなれる也近來の禮服に多は白無垢夏は白帷を尚び用るも帛衣の遺風也白無垢は白色にてむくむくと柔かなる衣なればさいへるにて無垢の字に泥（ナヅミ）て垢の無き由の名ぞと思へるは誤也

（廿四）秩、任秩、秩限、秩滿 類聚三代格一卷貞觀十年六月廿八日太政官符に應レ任二用神主一事（四箇條內）右太政官弘仁十二年正月四日下二大和國一符�something彼國解�something部內名神其社有レ數或爲レ農禱レ歲或爲レ旱祈レ雨至レ排二災害一荐有二徵應一假令大和大神廣瀨龍田賀茂穴師等大神是也云々今神主等一任終レ身侮黷不敬祟咎屢臻宜レ自今以後簡下擇彼氏之中潔淸廉貞堪二神主一者上補任限以二六年一相替秩滿之代點定言上者云々○同書三卷貞觀十三年九月七日太政官符に應レ令（四）諸寺三綱檀起禁二止秩滿別當恣犯一用寺家財物一事云々莫レ不下因レ斯尋二其意況一定由（內）任秩不レ立二定限一遷替無レ責レ解由也因レ茲秩以二四年一爲レ限任終可レ責二解由之事已存二式文一云々同卷延曆廿四年十二月廿五日太政官符に應下簡二任諸國講讀師一及相替六年爲上限事云々伏望簡二大智一而任二講師一擧二小識一而補二讀師一限以二六年一爲二秩滿期一云々同卷仁和二年六月廿三日太政官符に應レ補二安房國講師傳燈法師位增允（年五十三 薦廿九）眞言宗東大寺一□云々望請始以二件僧一任二彼國講師一令下勤二修御

願一其秩滿後準二諸國例一簡定補任上云々同書五卷元慶七年十二月廿五日太政官符に應レ停二非受業人任一當國博士醫師一事云々件非受業博士醫師依二度々格一責二解由一沒二公廨用一四年秩限停二受業師料等一事一同二史生一云々同卷定二秩限一事部承和十五年三月廿二日太政官符に應下自二外官一還二任京官一未レ預二參入一通中計前歷上事云々撿レ式云諸國司及史生博士醫師秩限未レ滿或秩滿之後未レ滿二四年一更任二他國一及遭レ喪之徒服闋（アハリテ）復任者並通二計前歷一云々如レ此則秩限自分勞逸將レ均云々按此卷に鑄錢司秩限定六年云々秩滿解任云々秩歷之期云々權官秩滿云々などあまた所見えて不レ遑二枚舉一其外八卷十二卷などにも所々見ゆおほかたは歷史に出たれど中に日本後紀時代または寬平以後の官符などは此書を出處とすべし○三善淸行意見十二箇條に請レ停下止依二諸國少吏幷百姓告言訴訟一差中遣朝使上事云々縱雖レ免二賦吏之名一而猶成二任中之怠一秩滿之日遂拘二解由一云々○三代實錄二卷（廿五丁右）貞觀元年四月廿三日條に大納言正三位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁薨云々安仁爲レ政强濟名聞二朝廷一秩限未レ滿授二從五位下一除二信濃介一云々同卷八丁左 元慶五年三月十三日條に秩滿解任之人王臣子孫之輩結レ黨群居同レ惡相濟云々按此外實錄中秩限秩滿の所見いとおほかれど省て引出ず○小野宮年中行事（群書類從本上卷三丁左）正月元日條に式部省進二國司秩滿帳一事弘仁太政官式云國司秩滿者式部造レ簿正月一日進二太政官一外記覆勘訖進二大臣一奏聞拜除自餘解闕臨時奏補云云また（下卷廿四丁左）十二月條に廿日以前式部省諸國主典已上幷史生博士醫師秩滿帳進二藏人所一事（年來廿日進）云々○北山抄（一卷年中要抄上）正月元日條に同日式部省進二諸國司秩滿帳一事云々また九日始議二外官除目一事に大臣依レ召著二御前圓座一仰云依レ例行レ之大臣稱唯指笏取二闕官帳一入レ宮奏レ之（九條大臣加二奏秩滿帳一者淸冷抄年々私記無二其事一）云々○江家次第四卷（十五丁右）除目條に次任二國替一云々大隅國掾正六位上藤原朝臣篤孝自注に前太皇太后永祚二年御給伊豫掾越智隆盛不レ給二任符一秩滿代云々○政事要略廿八卷（年中行事部廿八）十二月條に廿日以前式部省諸國司主典上幷史生博士醫師秩滿帳進二藏人所一（年來廿日進レ之）云々○古今著聞集一卷（九丁右）神祇部に北野宰相殿は天神四世の苗裔也云々秩滿の後都へ歸り給ひて長德二年に參議に任じ云々○蟬冕翼抄（群書類從本上卷十三丁左）任符返上條に任符ヲ給テ不レ赴二

任國ニシテ空ク四ケ年ヲ過テ秩滿シタル第五年（五ケ年ヲ爲ニ）（一任ニル國猶本國ニ任ゼント申ヲバ是ヲ任符返上ノ更ハ第六年春）任ト謂云々（また廿一丁右）文章生散位條に文章生散位ト謂ハ文章生ノ勢ニテ諸國ノ掾ニ任ジタル者ノ件國ノ秩滿ノ後ヲ文章生散位ト謂也云々○唐律釋文二卷（四丁右）に秩直質反秩滿即任滿也謂任官簿秩年限當滿也云々○容齋隨筆一卷十年爲一秩一條に白公詩云已開第七秩飽食仍安眠又云年開第七秩屈指幾多人是時年六十二元日詩也又一篇云行開第八秩可謂盡天年注曰時俗謂七十以上爲開第八秩蓋以十年爲一秩云云司馬溫公作慶文潞公八十會致語云歲歷行開九帙新亦用此也云々按此說は十年をもて一秩とせる也司馬溫公が九帙新と作れるは秩を帙に寫し誤れるなるべし秩とは任官の年をいへば致仕せずして年を積にいへりと見ゆ年數は十年にもあれ四年五年六年にもあれ一任のほどを秩限とすれば時世に隨てその定かはりあるべし一秩は一旬と歟一任と歟いふ心の字面と知べきなり○性靈集（鈔本一之下卷十丁左）贈野陸州歌に莫愁久住風塵聖主必封萬戶秩云々○周禮（註疏本三卷廿丁左）冢宰治官之職宮伯條に掌其政令行其秩叙作ニ其徒役之事ニ云々月終則均レ秩歲終則均レ叙云々註に秩祿禀也叙才等也作ニ徒役之事ニ大子所用云々疏に行ニ其秩叙ニ者秩謂依ニ班秩ニ受ニ祿叙者才藝高下ニ爲ニ次第ニ以作ニ其徒役ニ者士庶子屬ニ大子ニ隨ニ其所ニ用使レ役レ之也云々また（廿一丁左）疏に釋曰月終則均ニ其秩ニ秩祿禀則與ニ宮正ニ均ニ稍食ニ亦一也歲終則均レ叙與ニ宮正ニ則異彼宮中官府故會ニ其行事ニ此其子弟故均ニ其叙ニ叙即上註才等也云々○左傳（三卷廿三丁左）莊十九年に收ニ膳夫之秩ニ云々註に秩祿也云々又（八卷十七丁左）文六年に委ニ之常秩ニ云々註に秩官司之常職云々疏（註疏十九上卷十一丁左）に正義曰謂職掌位次故爲ニ官司之常職ニ云々按秩は在職の年内をいふ在職の者に給ふ祿なればやがて祿をも秩といへる也○荀子王霸篇（七卷廿四丁左）に百官則將レ齊ニ其制度ニ重ニ其官秩ニ云々註に秩祿也云々同彊國篇（十一卷四丁左）に士大夫益レ爵官人益レ秩庶人益レ祿云々注に爵謂若ニ秦庶長不更之屬ニ官人群吏也庶人士卒也秩祿皆謂ニ禀食ニ也云々○國語周語中（二卷十二丁左）に修ニ執秩ニ以爲ニ晉法ニ云々注に秩常也可ニ奉執以爲ニ常法ニ者晉文公蒐ニ於被廬ニ作ニ執秩之法ニ云々又（十五丁右）周之秩官有レ之云々注に秩官周常官篇名云々按字書に職也次也序也常也積也など注したれば職は

補職也次は在職中の位次也序は年序也常は平常也積は年月の積也と心得れば秩を職の事に取用たる義明也○與清曰秩は職也在職の間を任秩といひ其年限を秩限といひ任限滿てるを秩滿といふ秩祿は禀食の事にて在職中に所レ禀の食俗にいふ扶持切米の類と知べし

（廿五）風聲　上令義解（義解本一卷六丁右）注に漢書曰歷ニ選列辟一以迄ニ乎秦一率ニ遵者踵武一聽ニ遯者風聲一云々注文穎曰言循ニ履近者之遺迹一聽ニ遠者之風聲一云々按此語漢書司馬相如傳下に出たり○尚書十二（卷）畢命に旌ニ別淑慝一表ニ厥宅里一彰レ善癉レ惡樹ニ之風聲一云々注に言當下識ニ別頑民之善惡一表ニ異其居里一明ニ其爲レ善病ニ其爲レ惡立ニ其善風一揚ニ其善聲一云々疏（註疏本十九卷十一丁左）に正義曰旌旗所下以表ニ識貴賤一故傳以レ旌爲レ識淑善也慝惡也言當識ニ別頑民之善惡一知ニ其善者一表ニ異其所居之里一若下今孝子順孫義夫節婦表ニ其門閭一者上也表ニ其善者見一惡者自見明ニ其爲下善當レ褒ニ賞之一病ニ其爲下惡當レ罰ニ罰之一其有ニ善人一立ニ其善風一令ニ邑里一使レ放傚之一揚ニ其善聲一告ニ之疎遠一使レ聞ニ知之一云々○左傳（八卷十七丁左）文六年に樹ニ之風聲一分ニ之采物一云々注に因ニ土地風俗一爲立ニ聲教之法一云々疏（註疏本十九上卷九丁左）に正義曰漢書地理志云凡民性有ニ剛柔緩急聲音不同一繫ニ水土之風氣一故謂ニ之風一好惡取舍動靜無レ常隨ニ君上之情欲一故謂ニ之俗一王制云廣谷大川異レ制民生ニ其間一者異レ俗器械異レ制衣服異レ宜修ニ其教一不レ易ニ其俗一齊ニ其政一不レ易ニ其宜一故聖王爲レ政因ニ其土地風俗一爲立ニ善聲教一也聲教人之所レ立故言レ樹レ之今杜云因ニ土地風俗一爲立ニ聲教之法一杜此言惟樹以レ聲而傳云レ樹ニ之風聲一而風亦樹者其實風俗亦是人君教化故孝經云移レ風易レ俗孔註ニ尚書一云立ニ其善風一揚ニ其善聲一是也云云○史記（百十七卷廿七丁右）司馬相如傳に率レ通ニ者踵レ武遝レ迹聽者風聲云々注に徐廣曰遝遠也聽ニ察遠古之風聲一索隱曰風聲風雅之聲以言レ聽ニ遠古之事一則著ニ在風雅之聲一也○漢書（漢書五十七卷十一丁左）司馬相如傳に歷ニ選列辟一以迄ニ乎秦一云々注に文穎曰言循ニ履近者之遺迹一聽ニ遠者之風聲一耳無レ繫ニ於雅頌一者上也師古曰風聲總謂ニ遺風嘉聲一風謂下著ニ於雅頌一者上也云々○文選（六臣注本五十八卷廿九丁左）王儉が褚淵碑文に樹ニ之風聲一著ニ之話言一云々注に善曰左氏傳君子曰古之王者並建ニ聖哲一樹ニ之風聲一著ニ之話言一翰曰話言善言也○與清曰風聲の字面「ノコセルテブ

リ」と訓べし殘れる風の義なり「てぶり」は風俗の事にて都のてぶりなど古歌によめり顯昭が袖中抄の說は捧腹にたへぬ僻說といふべし

(廿六)やまと歌　「やまとうた」は必「から歌」といふに對たる語のよし契沖いへり伊勢物語(旁注本下卷)十八丁左に狩はねもごろにもせで酒をのみつゝやまとうたにかゝれりけり云々

(廿七)祈といふ訓義　「いのる」といふ詞は佛神に祈るにいひて忌告(イノル)の心なるべし不淨を忌憚りて身を潔齋し心願のむねを佛神に告(ノル)よしの詞也

(廿八)魚符魚袋　唐律釋文卷十六(右)一丁に魚符符信也謂鑄二銅魚一於符之上一然後分爲二兩魚一左者收二於內一右者付二所レ守之地一如以二敕旨一發レ兵則使者執二內之左邊一以來勘二所レ守之地右邊一其文同其形合其驗是眞敕旨也其文不レ同形不レ合則執二其來使一以聞レ上至レ如二長短麟虎之類一具在二下式一云々三才圖會器用二卷に銅虎符の圖あり魚符の類なり金銀銅魚符の事外集十六卷大刀契の條に引たれば可二考合一頭書制度通五

(廿九)不當　俗に不當者といへるは唐律の字面によりたる也唐律釋文廿六卷(左)一丁に不當丁當反不當者猶レ不レ中也と見ゆ道理に當らざる我意を立るよし也

(卅)白衣の體(テイ)六月無禮　俗に略服を白衣の體といへり長門本平家物語二卷(六十八丁左)に入道のたまひけるは六月無禮とて紐とかせ給へ入道も白衣に候ぞとて白かたびらに白大口ふみくゝみてすゞしの小袖打かけて左の手にうち刀ひさげて右の手にて蒲扇(カマアフギ)つかはる云々これに據れば古代よりの詞也頭書敍心集一ノ九丁ウ平等供奉山を離れて異州に趣く條に白衣にてありしだにはきかりけるまゝに衣(カラ)なども着す　盛衰記十三ノ十九丁ウ是ハ大將白衣ニテ長押ニ尻係タル事ヲ皆メ申ナルベシ　和田酒盛草子に時宗きいてかしこまつて候へども御らんじせられ候ごとくびやくえに候云々又時宗きいてかしこまり入ては候へどもびやくえにさふらふとておともせず云々

(卅一)おゝそれながら　俗言におゝそれながらといふ御恐(オソ)れながらの義也此詞諺本にはおほく見えたるやうにおぼゆ長門本平家物語二卷(六十九丁ウ)におゝそれながら君もくやしくこそわたらせ給はんずめら云々同三(廿六丁ウ)におゝそれながらしばらく申狀を云々頭書新撰犬筑波秋部に「おゝそれながらいれてこそ見れ「足洗ふたらひの水に月さして」

(卅二)無レ故して利を得るは禍　戰國策六之下卷(十三丁ウ)趙孝成王篇に趙豹對曰聖人甚禍二無レ故之利一云々注無レ故得レ利聖人以爲レ禍

(卅三)言者異則人心變　同卷(十六丁右)同篇に言者異則人心變矣按俗言に柄をすげるといふ事ありたとへば丸盆にても柄のさし樣にて團扇の形にも笠のさまにも見ゆめり

(卅四)紹介　戰國策六下卷(廿丁)趙孝成王篇に平原君遂見二辛垣衍一曰東國有二魯連先生一其人在レ此勝請爲二紹介一而見二之於將軍一云々注に郭璞曰紹介相佑助也補曰索隱曰禮賓至必因レ介以傳レ辭紹者繼也故禮曰介紹而傳レ命云々史記魯仲連傳にも見ゆ

(卅五)甲乙人　類聚三代格(三卷)元慶五年九月十六日太政官符に應二天台眞言兩宗定一レ次擬二補諸國講讀師一事云々縱雖レ國有二甲乙一人有二優劣一然猶初之講讀以二天台一共補後之講讀以二眞言一同任云々按甲乙人の字見えたれど國有二甲乙一と句を切て人有二優劣一と訓べければ甲乙人の例には引がたし頭書參考保元物語下九十九丁ウ二爲朝云々或浴室ニ下リ療治ヲ加ヘケルニオリ合タル甲乙人穴怖シ人間トハ見エズト怖オノヽキ怪チナセリ云々○源平盛衰記廿二卷十八丁右　俵藤太將門中違事條に平家重恩ノ者モシハ緣者境界サスガ東國ニモ多カリケレバ飛脚櫛ノ齒ヲ繼テ六波羅へ申ケルハ兵衞佐賴朝石橋ニシテ被レ討之由雖レ有二披露一其條無實也通二出杉山一渡二安房國一相具北條佐々木三浦黨類一越二于上總下總一召二從弘經胤經已下之大名小名一既及二三万八千餘騎一其外伊豆駿河甲斐信濃同心之間其勢如二雲霞一適有二背輩一忽依レ加二誅罰一上下甲乙皆以歸伏云々頭書盛衰記四ノ廿四丁オ按上下甲乙といへるは所謂甲乙人の事にて武士といふがごとし○吾妻鏡卅四卷(十二丁右)仁治二五廿九條に所レ處甲乙人號二神人一多令レ致レ煩之由依レ有二其聞一可レ被レ置二本數一之趣自二當座一被レ相二觸宮寺一云々又十三丁右同年ノ六十八條に近年西國諸社神人權門寄人好寄二沙汰一致二狼藉一令レ煩二甲乙人一之由依レ有二其聞一云々同書卅六卷(十五丁左)寬元三正九條に所レ仰二遣六波羅一其狀云西國神人押使等或平氏或以二甲乙人之所從一令レ補二神人一動好寄二沙汰一大略令レ管二領家地頭之所務一致二嗷々沙汰一之由有二其聞一云々按吾妻鏡の中此外に甲乙人の所見あれど皆上下の武士といへる心なり○建武以來式目追加(群書類從四百一卷八丁右)曆應三四十五御沙汰に近年武家被官人甲乙之輩令レ違二背下知御敎書一剩對二于守護使幷使節等一及二合戰狼藉一之由有二其聞一云々又(卅二丁左)應永廿九七廿六御成敗條々に諸國寺莊安堵事或稱二甲乙人等之寄進一或號二買得券契之由緒一雖レ望二申御判一不

レ可レ有御許容但地頭御家人等於レ副ニ渡御下文以下證文ニ者不レ及ニ子細ニ焉云々按甲乙人は御家人ならぬ上下の武家をさしていふ名也貴賤雜々の武士といふがごとし○庭訓往來卯月十一日狀に凡御領豐饒而甲乙人令ニ富有ニ屋作家風尋常而上下已神妙也云々鈔(中卷六丁左)に甲乙人とは高きといやしきとの輩也云々諸抄大成(二卷十五丁右)に甲乙は一二と云心也貴賦の民人を指す云々太平記(參考本十四卷八十八丁右)長年歸洛條に長年遂ニ討レザレバ內裏ノ居石ノ邊ニテ馬ヨリ下兜ヲ脚南庭ニ跪ク主上東坂本ヘ臨幸成テ數刻ノ事ナレバ四門悉閉(トヂ)テ宮殿正ニ寂寞タリ然レバ早甲乙人共亂入ケリト覺エテ百官禮儀ヲ調ヘシ紫宸殿ノ上ニハ賢聖ノ障子引破ラレテ雲臺ノ畫圖此彼ニ亂レタリ云々又(廿九卷廿丁左)諸大名讒ニ高經入道朝ノ條に毛利家本云道朝長坂峠ニ馬ヲ控テ跡ヲ顧ケレバ早屋形ニ火懸リテ財寶ハ甲乙人亂入テ是ヲ取云々按太平記に甲乙人とあるもみな武家上下の雜人といへるよし也○尺素往來(群書類從本十五丁左)に洛中人々之宿所武士幷甲乙人等濫妨狼藉事云々○下學集(下卷二丁左)態蟲門に甲乙人カフオッニン云々○長祿寬正記(群書類從本十九丁左)に高野山之衆徒共大塔ノ庭ニ集リ許定シケルハ抑此右衞門佐殿ハ上意ヲ背キ天下ニ責ラレ已ニ討手トシテ白ノ御旗ヲ向ラル、上ハ朝敵タル事疑ナシ然ルニ當山開闢ヨリ以來甲乙人亂入スル事ナシ公私共許容不レ可レ然云々○應仁略記(群書類從三百七十七上卷二丁左序に就レ中折に隨ふ雜記のならひ甲乙人等競ひ後れ或は進み或は退く弓箭の道事において定量なき歟云々○親長卿記文明三年八月四日條に鷲輿丁課役事雖レ仰ニ師茂朝臣ニ不レ可ニ催促ニ之由申レ之也仍奏ニ鷲輿丁等可レ止レ番說ニ云々一日申入候鷲輿丁訴訟の事武家へ申され候て御沙汰仕まつられ候はんずるほどまづ使をひかせ候へと申付候へども叶候まじきよし師著朝臣申候ほどにいかにも候やうにと鷲輿丁に申付候へば此上はがよちやうのよしをとゞめて一向甲乙人に成候べきと申切候此ほども廣橋の大納言いろ〳〵だんかふにて入魂し候へども外記も承引候はぬにて候此うへはいかんとせられ候べきやらん一たん御さだに及候はではこと行候はず甲乙人に成候てはしかるべからず被レ申狀之よし御心にて御ひろう候へかしかしく云云按寶石類書九卷人品附錄部にも此文を引ていへらく宗直按に當時之浪人といふ者むかしの甲乙人なり

云々與清曰高橋宗直が甲乙人を今の浪人ぞといへるはひがと也甲乙人は御家人ならぬ貴賤の雜武家の事にてこゝの文は公家方の鷲輿丁を止て武家の雜人に成べきよし也○多門院日記文明十五三十條に近日依ニ當國牢人出張一惡黨一等再兩陣足輕於ニ路次一奪ニ取甲乙人之衣裳一之間云々又永正三七廿四條制札に軍勢甲乙人等亂入狼藉事云々按こゝに牢人と甲乙人とは別ていひたれば甲乙人を浪人の事といへる說はひがと也○吉見政義書札抄四卷制札高札定法之事條に禁制軍勢甲乙人等亂入狼藉事云々自注に軍勢甲乙人ト云ハ高下ノ人ト云心也云々○大內家壁書(群書類從四百二卷廿九丁左)寬正二年十月廿五日麻布寸尺之事に豐前國中之甲乙人にふれしむべきよし所レ被ニ仰出一也云々又(同上)應仁元年四月二日禁制周防國都濃郡鷲頭庄妙見山右甲乙人等於ニ當山一狩の事竝苗田狩等に至て永令ニ禁制一畢云々○二水記大永六五三條に甲乙人頗狼藉無レ所ニ于列立一云々○公武之沙汰禁制之事條に禁制軍勢甲乙人濫妨狼藉事云々○節用集加部人倫門に甲乙人カフオッニン云々○蓮北色葉集加部に甲乙人カフオッニン云々○菊亭家書禮上卷制札書樣條に禁制軍勢甲乙人濫妨狼藉事云々注に軍勢トハ拾萬ノ餘ノ兵ヲ云也將軍御動座ノ陣ヲ四軍ト云也軍勢ノ事也甲乙人トハ甲ハ軍兵也乙ハ雜人也云々按漢書刑法志(二丁左)に甲士あり卒あり士の甲を著たるがやがて甲士也士卒といふ時も士ハ甲にて卒ハ雜人也また東寺文書(抄二卷十五丁左)寬正二年十一月十五日文書に三職地下人等の一ぞく打よらば甲四五百もあるべしと見えたるも士分の者を指て甲といへりと見ゆさては菊亭家書禮の說の甲は軍兵也乙は雜人也といへるが允當かとおもはれど他の古書を考合すれば甲乙人はたゞ上下の人といふより轉りて士と卒とに分ていふやうにもなれるなるべし○類聚名物考稱號部十五卷に甲乙人中古の禁札に甲乙人濫妨事など有此甲乙人近き事なれどもしらざるものおほし甲は尊貴の上簡を云乙は凡鄙の下人を云貴賤上下といふが如し甲乙丙丁をかりてその上下の位を分てる也西土の書には未レ見只上下と云て貴賤の事とする事唐の顏師古が匡謬正俗に見えたりよく似たる事なれば次に記す西土の書に某甲としるせしは今此方の俗に何某といふがごとし法華經五百弟子受記品見寶塔品にも見ゆ匡謬正俗八卷荀爽與ニ李膺一書云舍

館上下福祚日新 此蓋古來人士致レ書相問之常辭耳凡言二上下一者猶レ稱二尊卑一懇論也此類非レ一是以王逸少父子與レ人書每云二上下數動靜上下咸宜一上者屬二於尊親一下者明謂二子弟一爲論二及彼之尊上一所レ以上字皆爲二縣闕一而江南士俗近相承與レ人言儀及二書翰往復一皆指二父母一爲二上下一深不レ達二其意一耳云々又云是はかりに甲乙をもて稱す上下貴賤といふがごとし甲人乙人といふを省て甲乙人といへる也此類西土の書にも見ゆ魏略云太祖與二王修一書曰孤之精誠足二以達一君之察一孤足二以不一疑但恐傍人淺見以レ蠡測レ海爲レ蛇畫レ足將言前後百選輒不レ用レ之而使二此君沈一滯冶官一張甲李乙尚猶先レ之此主人意待レ之不レ優之效也と魏志の王脩傳の注に見えたり張甲李乙とは何の誰某といふが如くにて張氏李氏は古より名高き盛姓ゆゑに假にかくいふ也俗語に張三李四といへるもこれらより出たるべし此方にて甲乙の座といひ甲姓乙氏といふもこの意なり云々○與清曰甲乙人とは御家人ならぬ上下の雜武士なりそれを甲は士乙は卒の事としたる說もあれど菊亭家書體 實石類書 もと然にはあらずまた高橋宗直が浪人の事と 山岡明阿が貴賤上下ぞといへるも共に受がたき說なり 東寺文書抄二ノ十五丁ウ○漢書刑法志二丁ウ甲士あり卒あり甲卒ハ甲乙人の類也

松屋筆記卷之九十

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

(一)雞口牛後の喩 戰國策 八卷八丁右 韓昭侯篇に蘇秦爲レ趙合從說二韓王一曰云々臣聞鄙語曰寧爲二雞尸一無爲二牛後一云々史記 六十九卷八丁左 蘇秦傳に臣聞鄙諺曰寧爲二雞口一無レ爲二牛後一云々註に索隱曰戰國策云寧爲二雞尸一不レ爲二牛從一廷篤註云尸雞中主也從謂牛子也言寧爲二雞中之主一不レ爲二牛子之後一也正義曰雞口雖レ小猶進レ食牛後雖レ大乃出レ糞也云々顏氏家訓下卷廿一丁ウ書證篇に大史公記曰寧爲二雞口一無レ爲二牛後一此是删二戰國策一耳按延篤戰國策音義曰尸雞中之主從牛子然則口當レ爲レ尸後當レ爲レ從俗寫誤也云々

(二)陰德あれば陽報あり 俗に陰德あれば陽報ありといへるは淮南子人間訓を出處とす白氏長慶集二卷十丁ウ讀史詩五首其四に「陰德既必報陰禍豈虛施人事雖レ可レ罔天道終難レ欺」頭書 說苑五ノ二丁ウ貴德篇に夫有二陰德一者必有二陽報一有二隱行一者必有二昭名一云々同六ノ五丁ウ復恩篇に夏侯勝曰臣聞レ之有二陰德一者必饗二其樂一以及二其子孫一云々又七丁ウ楚莊王賜二群臣酒一云々此有二陰德一者必有二陽報一也云々曝書錄十二ノ十五丁ウ同十六丁ウ

(三)松皮疱瘡 俗に物の膚を松皮にたとへていふ事あり松皮疱瘡などの類是也白氏長慶集二廿一丁ウある木蘭詩八首の其六に彩翠色如レ柏鱗皴皮似レ松とある鱗皴の字をマツカハと訓べし

(四)寺門金字の勅額 白氏文集四卷二丁ウ兩朱閣詩に寺門勅榜二金字書一云々

(五)雲泥の違 俗言に雲泥の違といふは白氏文集七卷九丁ウ答二崔侍郎錢舍人書問一因繼以レ詩に泥泉樂者魚雲路遊者鷙勿レ言雲泥異同在二道遙間一と見えたるに出たり

(六)君子の交は淡して水の如く小人の交は甘して醴(アマザケ)の如し 壬生忠見集に「底にして深しといふはたのまれす淺くてかけのたえせすもかな」與清曰此歌友まじはりの龜鑑とすべし万葉集十七卷廿五丁右大伴池主が報二家持一書に淡交促レ席得意忘レ言と見えたる淡交はた同義也莊子山木篇に君子之交淡若レ水小人之交甘若レ醴君子淡以親小人甘以絕云々禮記表記に君子之接如レ水小人之接如レ醴君子淡以成小人甘以壞小雅曰盜言孔甘亂是用餤(スヽム)云々などあるを出處とす

(七)白屋の士 說苑八卷七丁ウ尊賢篇に周公旦白屋之士所レ下者七十人而天下之士皆至云々また九丁ウ周公攝二天子位一七年布衣之士執レ贄所二師見一者十二人窮巷白屋所二先見一者四十九人時進レ善者百人教レ士者千人官レ朝者万人云々同十三一丁權謀篇に白屋之士皆闕二其謀一猥蒭之役咸盡二其心一云々○家語三十八丁ウ賢君篇に周公居二冢宰之尊一制二天下之政一而猶下二白屋之士一日見二百七十人一云々注に草屋也云々頭書 源平盛衰記八ノ十丁ウ廿四ノ十二丁ウ 魏志九ノ廿丁ウ

(八)禁裏御念佛 親長卿記文明十ノ十六條に元長依レ召參內有二御念佛一云々

(九)公文所 同書文明十三ノ六ノ三條に今日公文所公春來閑談十一月會可二開白一之由講師申レ之然者可二逗留一云々得二其意一之由返答講師來無二案內一之間同二道公文所一云々差(スヽム)一盞持來一予同可二出座一之由公文所申レ之曲注雖レ令二酌酌一頻命之間出座云々○吾妻鏡三廿五丁ウ元曆元八ノ廿四條に被レ新二造公文所一今日立柱上棟大夫屬入道主計允等奉行也云々又廿七丁ウ十月六日條に新造公文所吉書始也安藝介中原廣元爲二別當一著座齋院次官中原親能主計允藤原行政足立右馬允藤內遠元甲斐四郎大中臣秋家藤判官代邦通等爲二寄人一參上

云々又丁(四十四) 公文所雜仕女頭書吾妻鏡索目集成久部人部ニ委シ

(十)土一揆德政　親長卿記文明十六ノ十一四條同五條同六條同延德二ノ三ノ十七同十八條○東寺文書抄二ノ七丁ず同四廿丁(ウ)同五廿八丁(ウ)同七一丁(ウ)又九丁(ウ)

(十一)上奏(ウヘスガタ)下奏(シタスガタ)　裏頭奏(ウワトウスガタ)かいどりすがた　親長卿愚記文明四年七月十日條に上奏可レ參之由有レ仰(ナホシスガタ)即令ニ退出一改ニ衣裳一(直衣)參內有ニ一獻一云々按上奏は直衣奏なる事知べし○同年八月三日條に參內(直衣)人々申詞(關白日野前內府右大將中院新大納言又予)隨身就ニ先度申次一以ニ民部卿一可ニ申乞(ナホシ)一之由談レ廣予已爲ニ上奏一云々按此文にて上奏は直衣なる事明白也廣は廣橋大納言予は親長自身の事也○同月九日條に下奏參內奏ニ多田贈位事一今日爲ニ御取亂一明日御衰日也明後日予上奏可ニ參內一云々同書文明五年正月廿二日條に入レ夜參內(下奏)內侍所御神樂諸司注進付ニ新大納言一了云々同書文明十年正月九日條に以ニ勾當內侍一被ニ仰下一云上奏可レ參之由被ニ思召一之處爲ニ下奏一每年佳例御扇被レ下レ之云々同書文明十一年七月一日條に曉天寅刻有ニ火災之事一云々(中略)餘煙及ニ皇居之間被レ召ニ用輿一御引直表(中略)令レ出ニ御所一入ニ御安禪寺殿一主上出御上奏(予民部卿實隆宮原長胤當番也)下奏人々群參相交供奉路次之義言語道斷也末代義可レ愁レ之云々同書文明十四年三月廿三日條に雨下依レ召參內(下奏可レ參之由有レ仰)勸修寺大納言(教秀)同依レ召祇候云々申ニ參仕之由一可レ參ニ黑戶之前一云々仍兩人參仕源大納言(雅行)民部卿(忠富)上奏候ニ簀子一出ニ御御學問所一東西勸大予在ニ庭上一仰云一昨日事自ニ民部卿許一可レ遣ニ下手人一之由種々雖ニ申遣一無ニ承引一云々同書長享二年七月十二日條に午刻許自ニ大覺寺一被レ送ニ御經一云々次於ニ番衆所一下奏番衆等頂戴次可レ申ニ勅封一云々同書長享三年正月六日條に自ニ內裏一有ニ女房奉書(勾當內侍)一あきしげしようでんの事御めん候べきよしせんしようも候つると候きうへすがたにてつれてまゐり候はゞ御たいめんも候はんずるものをとおぼせられ候へどもはやき事に候はんいかゞ候べきとの御事に候かしく云々按此女房奉書に假名にて宇倍(ウヘ)須我多(スガタ)と書たれば宇波(ウハ)須我多(スガタ)とは稱まじき也同書明應三年正月十三日條に下奏可レ參之由有ニ勾當奉書一中御門大納言宣胤山科中納言言國同有ニ此仰一各午刻參內申ニ入祇候一之處可レ參ニ黑戶南面御庭一云々仍參入端間被レ敷ニ御茵一出御予中大山中(ト)各在ニ庭上一伯二位候ニ簀子一云々依レ仰懸ニ膝於簀子一次

被レ下ニ天盃一於ニ簀子上一拜ニ領天盃(勾當成ニ侍酌一)中御門大納言山科中納言自ニ地上一及手飮レ之云々同月十四日條に有レ召參內(下奏)參ニ黑戶南面庭上一云々○元長記永正十一年正月十八日條に入レ夜三毬打見物下奏云々○後奈良院宸記天文四年正月廿二日條に今夜右大將年始御禮被ニ參上一(上奏)不ニ對面一申次頭弁也珍重之由返答也云々○寶石類書九十二卷衣服部に御したすがた實豐卿口傳一に御ゆどのゝうへの日記中に御したすがたとあり御冠も御袍もめさぬ事なり云々○興清曰上奏は親長卿記長享三年正月六日女房奉書に據て宇倍須(ウヘスガタ)我多(スガタ)と訓べし宇波(ウハ)須我多(スガタ)とは訓べからずこれ直衣體なる事も同記を考て知らる下奏は志多須(シタス)我多(スガタ)と御湯殿上記に書たるに從ふべし御冠も御袍(ウヘキ)もめさぬ御體(ウワトウスガタ)のよし實豐卿口傳の說は主上の御上裏頭奏(和長記明應三正十六の條康富記寶德二八六條かいどりすがた徒然草百七十五段なども似たる詞つきの名目なり

(十二)鐘の龍首(リウヅ)　洪鐘の龍首は和訓には「タツガシラ」といふべきもの也これは印章の紐におなじ周禮に鐘縣旋蟲同疏に鐘旋孟子註に鐘紐など見えたる字面を名物六帖器財箋三絲竹鐘鼓門に「リウヅ」と訓を施したり

(十三)天蓋竹格(テンガイ)　僧家の飾に天蓋(テンガイ)あり其貌鮹に似たれば法師鮹を天蓋と異名して密に食ふよし義大夫院本に見ゆ名物六帖器財箋三喪葬祭祀門に竹格テンガイ家禮儀節若仕官之家有ニ餘力一者于ニ竹格上一稍加ニ華飾一似ニ亦不ニ爲レ過云々

(十四)六道錢　喪葬の時に六道錢とて棺にいるゝは紙錢の遺風也名物六帖器財箋三喪葬祭祀門に塵錢ロクドウセン云々椿錠ロクドウセン云々と擧て其出所を出せり倭名抄に紙錢の事見えたれば考合すべし(頭書俗說辨遺編)

(十五)めのこ算(カンジヤウ)　慕歸畫詞一卷(四丁)にメノコタキトカヤノ風情ニコゝロエヤスキ加樣ノ明文ヲ少々思ヒ出スニ隨テ書載侍リ云々又十卷(五丁)に四十八願簡要ノ願々ヲ選テメノコタキニ註釋セリ云々按に今俗メノコ勘定などゝいふはこのメノコタキに起れる詞なるべし雅亮裝束抄三卷御髻(モトヅリ)を取事條にふさのゆひやうかはる也ふさを三ツに分て小元結二ツして別々に二ツにゆふ也其ゆひやうはうらうへながら片鎰(カタカギ)にゆふ也其鎰の手を左右にむすべば左のは雌(メ)の子結(コ)ひに

せよそれがよきなりと見えたる「めのこむすび」も同義にや可レ考「メノコタキ」は目子彈棊歟女の子抱歟

（十八）みこと　尊命の字を美許等とよむは御事の義也後にも人をさしておとなどいへり母の御こと妻のみこと汝夫乃美許等万十七廿一丁ナなどもいひて必尊稱に限るにあらず頭書今昔十六ノ十八語同廿ノ九語同廿七ノ卅七語に和尊同廿八ノ六ノ語　御事太平記十二ノ十二丁ナ

（十九）すべなし　「すべ」といふ詞は爲方の義也センカタと云もおなじせんすべなみなどいふは將レ爲方無さにの義也

（廿）宇良夫禮くづほれくたびれ　うらぶれと云詞は心恍惚にて心の恍惚として正體なくよわりたるにいふ「くたびれ」といふも「クツボレ」の通音にて朽恍惚の義也又腐恍惚の義として聞ゆくたかけも腐雞の義なるを思ふべし頭書節用集久部言語門ニ勞倦クタビル疲同云云太平記五ノ十七丁オ・キタビレ云々同卅四ノ廿六丁オ氣クタビレ走衆故實八丁ウ

（廿一）安利加與比安利多々志　万葉集に安利加與不といふ詞おほかり古事記にも阿理加婆勢など見ゆこは在々而通義なれど馴通よしに心得ればいづれ所にても違なし在立之万一卷廿などもマタ馴立しと心得て聞ゆ

（廿二）とこなつ　万葉十七四十丁ウに「曾能多知夜麻爾等

蹈事もおほえざる也頭書万十五ノ廿五丁ウに美知能蘇良治ト アリ道ノ間道ニテ中途ナイヘル也

（十八）みこと　尊命の字を美許等とよむは御事の義也後にも人をさしておとなどいへり母の御こと妻のみこと汝夫乃美許等万十七廿一丁ナなどもいひて必尊稱に限るにあらず頭書今昔十六ノ十八語同廿ノ九語同廿七ノ卅七語に和尊同廿八ノ六ノ語　御事太平記十二ノ十二丁ナ

（十九）すべなし　「すべ」といふ詞は爲方の義也センカタと云もおなじせんすべなみなどいふは將レ爲方無さにの義也

（廿）宇良夫禮くづほれくたびれ　うらぶれと云詞は心恍惚にて心の恍惚として正體なくよわりたるにいふ「くたびれ」といふも「クツボレ」の通音にて朽恍惚の義也又腐恍惚の義として聞ゆくたかけも腐雞の義なるを思ふべし頭書節用集久部言語門ニ勞倦クタビル疲同云云太平記五ノ十七丁オ・キタビレ云々同卅四ノ廿六丁オ氣クタビレ走衆故實八丁ウ

（廿一）安利加與比安利多々志　万葉集に安利加與不といふ詞おほかり古事記にも阿理加婆勢など見ゆこは在々而通義なれど馴通よしに心得ればいづれ所にても違なし在立之万一卷廿などもマタ馴立しと心得て聞ゆ

（廿二）とこなつ　万葉十七四十丁ウに「曾能多知夜麻爾等

許奈都爾雪布理之伎底云々また丁ウ四十一「多知夜麻爾布里於家流由伎能等許奈都爾氣受底和多流波」云々此等の等許奈都は常如の義にて常住の如く雪の降たるさまをいへる也瞿麥をトコナツノ花といふも常住咲てあるごとき花の義それを省てトコナツとのみもいへる也豆と須は常に通音にて例おほし

（廿三）神祇齋場所　吉田の齋場所はもと大嘗會の齋場所によりたる名也十訓抄一卷第二段に今大嘗會の時黒木の屋とて北野の齋場所につくる云々源平盛衰記廿四卷一丁右大嘗會儀式條に大嘗會ハ十月ノ末ニ東河ニ御幸シテ御禊アリ大内ノ北野ニ齋場所ヲ造テ神服神供ヲ調ヘ云々など見え儀式延喜式などやうの古書にはト定齋場一事おほかりこれ由爾波と訓也太平記には齋廳所廿一卷後村上帝受禪條とも齋廳場所廿五卷崇光院受禪條とも書たりこれらに限らず齋場所の所見枚擧に遑なけれどこゝにえうなければ引出ず然て吉田齋場所のゆゑよし左にいふべし○親長卿記文明五年五月一日條に吉田三位兼倶卿來齋場所事申入被レ成二下勅裁一自然可レ得二其意一云々以二幽玄之例一申入歟自二今日一依二中山番代一祇候下云々同書文明六年正月十六日條に早旦行水參二詣齋場所一直云々同書文明十六年四月二日條に早旦詣二吉田一直社頭于レ今無二造營一可レ參二齋場所一云々件齋場所自二御幸一近日再興造營仍依レ雨於二門下一奉幣社司敷神樂岡上一人々群參レ薦持二來幣一兩段再拜之後返歸二□幣於社司一參二神前一六角神殿也勤請諸神此外神宮內外宮別御座又諸國神社在列申二祝□一次宮廻了次吉田二位出合行二向齋屋一閑談歸了云々按御臺は慈照義政公の室にて從一位富子也○宣秀御敎書案に文明十一年兼倶卿當時齋場所再興神道□□吉田社未二造立一云々○宣胤卿記文明十二年正月四日條に浴レ湯著二衣冠一乘レ輿先詣二下五靈社一次參二吉田社一當社未レ被レ造奉レ安二齋場所一兩段再拜齋場所分又兩段再拜云々同書文明十三年十二月二日條に早旦行水直衣參二詣吉田社一社頭亂後未二營作一詣二齋場所一兼倶卿宿所咫尺之間立寄云々同書文明十三年正月四日條に早朝行水著二衣冠一乘輿先參二下御靈社一次參二吉田社一當社未レ被レ造奉レ安二齋場所內一兩段再拜了又齋場所分拜レ之次立二寄侍從二位一兼倶云々同書永正三年正月四日條に於二齋場所傍一著二齋服一借二用兼永朝臣一參二詣齋場所一神事也昨夕二先奉レ拜二吉田大明神一□□神鉢齋場所內奉□置大元宮兩段再拜咒文等有レ之先讀次八神殿次南宮次六十餘州巡禮次改二齋服一行二神靈寺一所也一宿之携二杉原一束扇樽等一至二去年一三箇年居住之所也次

向ニ兼倶卿宿所一（女房衆相伴）三献後入ニ風呂一（門内新作）亦於ニ兼滿方一有ニ盃酌一次歸レ寺住持（兼倶卿子）出逢有ニ一献一云々○吉田兼致記文明十六年十月五日條に今日勅額事以ニ民部卿一申入給額數六分也

日本國中三千餘座　天神地祇八百萬神　外宮宗

内宮源　大元宮　宗源殿

此分書レ之進上額紙形用ニ唐紙一（打）レ裏只今齋場根元大概如ニ注進一

齋場根元大概御注進

神祇齋場の事

このさいじやうしよは人王の第一神武天皇この國土にてはじめて神を御まつりありしこんげんなり父の御神までは神代なればべちに神でんをたてゝまつり申さるゝ事もなしこの御代より神明と人王とのしやべち出きにけるにや天下のあく神おそひ申せしによりてやまとの國いこま山にてさいじやう所をたてゝ天神地神を御まつりありしぞはじめなるこれよりやうやくあしき神々もしづまりたまへば又同國にふの河上にこのさいじやうをたてゝみづから神道を行おはしますしかあるに天下のあら神ことごくしづまりければはじめて王城を橿原といふ所にさだめられてすなはち烏見の山にさいじやうをたてゝ天照大神をはじめ奉り日本國中大小のしよ神そうじて八百萬神をいはひ申されしより今に皇城ちかき所にたておかるゝはこのゆらいとかやおよそ天地の諸神くわんじやうのこんげんたるによりて日本最上神祇のさいじやうといふがくを下されけりこの後伊勢内宮は六百五十七年をへて人王十代垂仁天皇のひめ御子やまと姫の御くわんじやうたり外宮は廿二代め雄略天皇の御宇にするじやくありこれは千百卅よ年の後なり兩宮共に姫宮の御くわんじやうのおこりたるによりて代々の御門のひめ御子をもて齋宮とがうし申されかの兩宮につかへ申さるゝとこのらんじやうにや大神宮するじやくの事は伊勢内侍所齋場所この三ケ所のほかは上古よりちやうじのせいだんをなされたるものなり

家君被レ遣ニ御狀於民部卿一

神祇齋場額内六分申ニ請宸翰一度々此額事被レ染ニ神武天皇勅筆一以降嵯峨天皇被レ改レ漢ニ字之一代々勅

額之段勿論候就レ中當場由來事自ニ御臺御方一被ニ尋仰一候間此一卷令ニ注進一申候以ニ手次一内々被レ備ニ叡覽一候者可ニ畏存一候恐惶謹言

十月五日　　兼倶

民部卿殿

追啓

天萬宮遷座雖レ爲ニ當月中一不レ可レ苦候伊勢内宮垂跡當月候間神道殊用レ之候可レ得ニ御意一候哉

按兼致は兼倶の子にて從二位神祇權大副也神祇齋場所注進狀のむね孟浪（モウロウ）ごとにて笑にたへざれど中に考證にすべき事なきにしもあらずこれに民部卿とあるは忠富卿也○諸神記（上卷）に天神地祇惣三千一百卅二座大神四百九十二座小神二千六百四十座定ニ日本國中大小神社鎮座一延喜五年十二月二十六日宣ニ下於山城國愛宕郡如意峰神祇齋場所一奉レ安ニ鎮三千一百三十二座之神躰一（大神四百九十二神小神二千六百四十神）同月廿八日奉レ渡ニ神躰於六十餘州一矣天下諸神奉レ授ニ神號一之時於ニ齋場所一以ニ神代正印一被レ定ニ神宣一事延喜以來之聖斷也云々按神社鎮座歳代考全くこの文を引たるにて一字の異もなければ再贅引せず○神社考二卷（四丁右）吉田條に卜部家説云吉田地主者本是雷神也及ニ一條院時一卜部兼延始爲ニ社務職一勸ニ請春日明神一以ニ藤氏崇敬一也日神之居ニ天岩戸一時諸神奏ニ神樂一其處降爲（オヽタ）レ山故號曰ニ神樂岡一又此地有ニ齋場所大元宮日降坂龍澤等之名一皆卜部之所ニ秘崇一也云々○倭漢三才圖會（七十二本卷）山城國神社部に吉田社在ニ愛宕郡神樂岡一社領五百九十石其殿名ニ宗源殿一神祇首領唯一政所神道受業明堂天下祭場也吉田藏人頭卜部（神祇頒七百六十七石）社家（大隅氏鈴鹿氏田口氏山田氏）以上八人齋場所（軒垂ニ八葺ニ大元殿一内宮（天照皇大神宮）宗外宮（豐受皇大神宮）源小社（日本國中大小神祇諸國員各記ニ額數一）第一高皇產靈尊二神皇產靈尊三魂留產靈尊四生產魂尊五足產靈尊六大宮賣神七御食津神八事代主神以上號ニ元本八神殿一日本國天神地祇三千百三十二座（大神四百九十二座小神二千六百四十座）延喜五年十二月廿六日宣下同二十八日奉レ渡ニ神體於六十餘州一矣（各神號於ニ齋場所一以ニ神代正印一被レ定）

云々○山州名勝志十三下卷五丁左に齋場所在『吉田社南』樓門額日本最上兩大神宮中門額日本最上神祇齋場本宮額日本最上日高宮大元宮日本國中三千餘座天神地祇八百万神云々○内外宮坐『齋場所後八神殿東西』鳥居額外宮宗堅額○内宮在『同東』南向鳥居同木額内宮源堅額已上義政公御臺也社家說云兼倶依『靈夢』勸請云々○八神殿在『齋場所後』鳥居額元本八神殿按八神殿中御門宣胤卿記載『延德元年十月從二位兼倶卿奏狀』云々○雍州府志二卷八丁左神社門上愛宕郡部に齋場所在『吉田山』始在『神祇館』樓門額有『日本最上〔日高日宮之字』云々又日本最上南大神宮額幷日本最上神祇齋場額及日本國中三千餘座云々清〕丸四世曰『平丸』又改『姓卜部』依レ之吉田家爲『神道長』○山州名跡志四卷六十丁右愛宕郡部に齋場所云レ俗吉田宮也在『神樂岡』樓門南日本最上向額兩大神宮中門同額日本最上神祇齋場已上清水谷實秋卿筆○本殿南向造『八角』萱葺棟行東西南面破風内大額日本最上日高宮嵯峨帝宸筆小額大元宮○後土御門院宸筆軒内中央額日本國中三千餘座天神地祇八百万神已上竪額清水谷實秋卿筆○八神殿在『本殿後』南向鳥居南向木柱額元本八神殿○後土御門院宸筆所レ祭御食津神神皇産靈尊魂留産靈尊生産靈尊足産靈尊道反魂神大宮賣事代主尊已上右八柱神八洲守護驗神八齋靈神八心府神坐故式爲『皇帝之鎭魂神』矣神系圖傳此神殿古在『神祇官』舊地今二條所司館北也秀吉公聚樂城郭造營時依レ命所レ移也○外宮在『八神殿西』南向鳥居同木額外宮宗堅額○内宮在『同東』南向鳥居同木額内宮源堅額已上義政公室藤富子筆○日本國中總攝社在『本殿東西』東方北始『山城』西方北至『對馬』額山城國中百二十二神每社如レ此云々○與清曰神祇齋場所は後土御門院文明五年五月吉田兼倶三位勅許を蒙りて神祇官八神殿の跡を建立せる也其比東山慈照院殿義政公の北方藤富子の一位信力を出して助成されたりと見ゆ嵯峨天皇の樓門の額字は後世の鳩集なるべければ古代の證にはしがたし又社家の傳說その外後の書の說どもは荒唐無稽の言にて取用べくもあらず

（廿四）國姓爺　鄭成功を國姓爺といへるよしは臺灣鄭氏紀事上卷四十丁ウに隆武偉而撫『其背』曰惜無『一女配』レ卿卿當レ盡『忠吾家』無『相忘』賜『姓朱』改『今名』拜『御營中軍都督』賜『尙方劍』儀同『鮚馬』自レ是中外稱『國姓』不レ名云々これ明史鄭成功傳を引ていひたる也

（廿五）反故を唉ふ　同書中卷二丁ウに成功圍『漳州城』凡六閱月城中食盡人相食枕レ藉死者七十餘万人間存者

氣息僅屬雖『悲泣』無レ淚有『一人饑死』鄰舍兒竊食『其肉』腸中皆故紙字畫隱々可レ辨周亮工作『詩紀實』酸楚凄痛云々

（廿六）白牌　喜定屠城紀略八丁閏六月十八日條に景耀復大『書一白牌』立馬橋南』論『成棟』降云々按景耀は明の唐秀才景耀也成棟は清將李成棟也

（廿七）徒手空手「むなで」『すで』　西行集に空手をむなでとよめり空手の字面韻府などにも擧たり嘉定屠城紀略十八丁オに至レ是徒手應レ敵而已云々徒手はスデと訓べし白氏文集十二三丁空手無レ金行路難

（廿八）水竇　今俗に城または第宅等の下水口を水門（スヰモン）といふこは水竇と書べし嘉定屠城紀略十八丁ウに欲レ從『水竇』入ㇾと見ゆ

（廿九）ねなし言　ねなし言（ゴト）は不根語と書べし嘉定屠城紀略廿三丁ウに爾時人心惶々聽『不根語』莫『敢寧居』と見ゆ

（卅）濤山浪屋　同書廿五丁ウに濺レ水如『濤山浪屋』云々

（卅一）承明門　承明門の名は說苑十九卷六十丁右脩文篇に承明繼躰守文之君之寢曰左右之路寢謂『之承明』何曰承『乎門堂之後』者也と見ゆ

（卅二）門守犬　詩經召南篇に無レ使『尨也吠』と見え說苑十五六丁オ指武篇に如『尨之守』戶云々

（卅三）影の形に從ふ　說苑十五六丁オ指武篇に如『影與』響如『厖之守』戶如『輪之逐』レ馬響之應レ聲影之像』レ形也

（卅四）蘆葉の雁　說苑十六五丁オ說叢篇に銜レ蔑而翔以備『繒弋』云々杜甫遠遊詩杜律集解四の卷に雁矯『銜』蘆內』云々

（卅五）媒口　俗に媒口（ナカウドグチ）といふは彼此に譽飾りの詞を盡して其事を遂んとするをいふ戰國策九上卷廿四丁左燕昭王篇に蘇代對曰周地賤レ媒爲『其兩譽』也之『男家』曰女美之『女家』曰男美然而周之俗不『自爲』取レ妻且夫處女無レ媒老且不レ嫁舍レ媒而自衒（テラハ）敵而不レ售順而無レ敗售而不レ敵者唯レ媒而已矣と見ゆ

（卅六）尸祿素飧　說苑十四七丁ウ至公篇に楚令尹虞丘子復『於莊王』曰云々久踐『高位』妨『群賢路』尸祿素飧貪欲無レ厭〔云々久固『祿位』者貪也不『進賢達』能者諂也不『讓以』位者不廉也不レ能『三者』不忠也云々〕莊王曰夫子之賜也已頭書十訓抄五ノ十二丁ウ嬰喙積碘ノ事尸位素飧ニ似ヌリ

（卅七）仁をもて國を亡す　徐の偃王仁德をもて國を

失へる事韓非子及說苑十五一丁指武篇などに見ゆ秦に弗レ爲而自至天下未レ有猛獸狐疑不レ若二蜂蠆之致一レ毒也高議而不レ可レ及不レ若二卑論之有レ功也

符堅もまた仁德に過て國を失る事晉書載記に見ゆ

(卅八)不附の民使べからず　說苑十五三丁指武篇に故語曰父王不レ能レ使二不附之民一先軫不レ能レ戰二不敎之卒一云々

(卅九)貴人不レ知して驕り驕者不レ知して亡ぶ　同書十六六丁說叢篇に貴不二與レ驕期一驕自來驕不二與レ亡期一亡自至云々

(四十)父無益の子を愛せず君不軌の臣を愛せず　說苑十五八九丁說叢篇に父不レ能レ愛二無益之子一君不レ能二愛不軌之民一

(四十一)知レ命者天を怨ず知レ己者人を怨ず　同十六九丁說叢篇に知レ命者不レ怨レ天知レ己者不レ怨レ人

(四十二)利器不レ可レ假レ人　說苑十六九丁說叢篇に有二鄙心一者不レ可レ授二便勢一有二愚質一者不レ可レ予二利器一頭書家語正論解に孔子曰唯器與レ名不レ可二以假一人君之所レ司也信信以守レ器器以藏レ禮禮以行レ義義以生レ利利以平レ民政之大節也若以假レ人與二人政一也政亡則國家從不レ可レ止也云々左傳にも見ゆ

(四十三)小田原評定　北條氏直愚將にして物に決斷なく群臣をして評議せしむれど空く座談のみにて其實に用る事能はず遂に廢滅せり世にこれをとりて不成の評議を小田原評定といへり說苑十六十三丁說叢篇に弗レ爲而自至天下未レ有猛獸狐疑不レ若二蜂蠆之致一レ毒也高議而不レ可レ及不レ若二卑論之有レ功也

(四十四)重箱掃除用二揚枝與一杓子一論　俗言に重箱の角を揚枝で掃除するといひ又これにうらうへにて重箱の隅を杓子ではらへといふ諺もあり說苑說叢卷四十六ノ十に寸而度レ之至レ丈必差銖而稱レ之至レ石必過石四丁ウ稱丈量徑而寡レ失簡レ絲數レ米煩而不レ察故大較易レ爲レ智曲辨難レ爲レ慧

(四十五)「いぶせし」「いぶかし」　万葉集四卷丁五十六ウ大伴家持報二贈紀女郎一歌に「久堅之雨之落日乎直獨山邊爾居者鬱有來」同八卷丁四十大伴家持秋歌に「雨隱情鬱悒出見者春日山者色付二家利一」同九卷丁廿五見苑原處女墓一長歌に「虛木綿乃牟而産在者見而師香跡悒憤時之垣廬成人之逃時」云々同十卷丁四十詠二鹿鳴一歌に「秋芽子之散去見鬱三妻戀爲良思掉鹿鳴母」また五十三丁秋相聞寄レ雨歌に「九月四具禮乃雨之山霧煙寸吾胸誰乎見者將息」同十一卷丁廿三正述二心緒一歌に「眉根搔下言借見思有爾去家人乎相見鶴鴨」一書歌曰丁廿四「眉根搔下伊布可之美念有之妹之容儀乎今日見都流香

嘗」また丁廿四ウ寄レ物陳レ思歌に「水鳥乃鴨之住池之下樋無鬱悒君今日見鶴鴨」同十二卷丁十二正述二心緒一歌に「得田價累心鬱悒事許吉爲吾兄子相有時谷」また丁十六ウ寄レ物陳レ思歌に「垂乳根之母我養蠶乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母二不相而」又丁廿問答歌に「相見欲爲者從君毛吾曾益而伊布可思美爲也」又丁廿六ウ羈旅發レ思歌に「在千方在名草目而行目友家有妹伊將鬱悒」同十八卷丁廿九大伴家持詠二庭中花一長歌に「移夫勢美等情奈具左爾奈泥之故乎屋戸爾未枳於保之」云々與清曰萬葉集にいぶせみいぶかしいぶせきいぶせしいぶせくいぶかしみいふせがりなどよめる其意一例ならず俗言にウツタウシキ又は氣ガフサグなどいふ義なるがあり四卷五十六丁ウ八卷四十丁ウ九卷卅五オボツカナ丁ウ十卷五十三丁オ十八卷廿九丁オクアンジワヅラヘル義なるがあり十一卷廿三丁ウ同廿四丁ウ十二卷十六丁ウ同不審の義なるがあり十二卷十ユカシキ心なるがあり十卷四十丁オ二丁ウ十二卷卅六丁オ日本紀に未審訓明紀二年七月同十五年正月未詳訓紀四年二月この字をイブカシと訓類聚名義抄には鬱三卷呀二卷訝五卷言部不審七卷口部未審同などをイブカシ訝五卷同言部諶同上讀同上をイブカルとよめり雅言集覽一卷以部にいぶかしはシノバシク又ユカシク思ふ心也遊仙窟に未審をイブカシと點じたるは俗に不審なる事をいへるにおなじけれど物語書にその意なるは管見には未見及ばず云々いぶせしは契沖云万葉に鬱悒と書ていぶせくともおぼつかなしともゆかしともよめりいづれも同意なりといへり今按におぼつかなくゆかしく又なげかしき意もありて俗語のフサグといへる意におなじかるべし又ゆかしき意にのみ聞ゆるもあり又たゞウツタウシキ意なるもあり前後をよみみて心に味て知べしといへり古今集序注に王仁といふ人のいぶかりおもひてといへるはおぼつかなくあんじわづらへるよし也酒轉童子草子にいぶせうさぶらふといへるは疑はしき義也此詞物語書歌集合戰書等に出たるは枚擧に遑なし

(四十六)猿樂　同文明四三五條に見二物猿樂一云々同文明十八正十九條に有二猿樂一手猿樂也於二軒廊前小庭一在レ之主上御座朝餉間也近臣候二簀子一秉レ燭之程事了退出云々〇同年二ノ一條に可レ有二猿樂一可二見物一之由有レ仰可二祇候一之由申レ之云々〇同月四日條に有二猿樂一守山手猿樂也參二御前一人々如レ常十一番之後退出其後猶有二歌舞一云々〇同月廿四日條に依レ召參內有二一獻一守山小猿樂依レ召祇候云々同文明十九年三ノ十八條に有二

手猿樂（龜大夫十四番）圭上朝餉間（出御歟）西方人々臺盤所祇候云々同延德二ノ三十二條に有松囃次有猿樂（六郎大夫また同月八日條に有猿樂六郎大夫云々また同月卅條に有手猿樂鼠大夫也十一番）云々同延德三ノ三ノ二條に有內裏手猿樂外樣人々一獻申沙汰云々四日朝雨午後晴近臣一獻申沙汰也（予即三十疋御銚子提土器一種但所在之間捶一桶折一合進上畢）有手猿樂云々同九日條に有猿樂（龜千代大夫無名鼠大夫）同延德四ノ二十七條有猿樂（遠屋大夫云々）有十一番云々親長卿記長享二ノ二ノ廿三條に御前箕子有猿樂（手猿樂龜大夫）十三番（一番養老瀧二番經正三番江口四番自然居士五番かんたん枕六番楊貴妃七番元服曾我八番通小町九番角太河十番金輪十一番伏見十二番七騎落十三番）云々○同長享三ノ十六條に見物猿樂（六郎大夫手猿樂也）手猿樂東寺文書抄一（卅七丁オ）同八（卅五丁ウ）猿樂學頭東寺文書抄五丁ウ○宣胤卿記（一名愚記）文明十四年三月廿一日條に云今日於內裏有手猿樂（內藤七郎云々）子刻許俄有召參內有喧嘩事民部卿被官殺害手猿樂衆一人被引出於門外死去云々合手逐電其儀可被如何哉之由有仰云々廿三日條云仰云昨日事自民部卿許可遣下手人之由種々雖申遣無承引一段可有御成敗之由昨夜已被仰下之云々若下手人事不領狀者傍輩等可生涯令出事歟就此等之儀可爲何樣哉云々勸大納言不申是非暫思案歟何樣之由重有仰之間予申云本人逐電之上者方々雖尋求未尋出之間可遣下手人之由申之處不承引之條以外之次第也傍輩等可及生涯事無覺悟事也犯法令申之處（以下ナシ）

（四十七）菓子　寒具を菓子といへるも古き事にや源平盛衰記十一の卷三丁有王俊寬問答事條に京ヨリ菓子少々用意シテ持タリケルヲ取出シテ奉勸とあるは菓實ともおもはれずそは京よりはるばると薩摩潟硫黃が島にわたりての事なれば月日もあまたかさねたらんに柑子柿などの類にもあらじ猶他の證を得て考定むべし三議一統上（四十丁ウ）にくわしの事飯の後のくわしにやうじあるべしまづ楊枝を取下におくべきなりやうじばかり取てくはずなどとも申也これはちご若衆の事也と見えたる菓子も「コノミ」の事とはきこえず（頭書長門本平家六卅八丁ウ）

（四十八）衣のおくみさき　衣服に「オクミ」といふは大領先をいふ三議一統上（廿丁ウ）に大くびさきを後のぼんのくぼにあつるやうにあてゝ腰を引まはしと有これ也

（四十九）「あをみ」「こ」とは役味を云　食物に青味を加るなどいふは三議一統上（廿九丁オ）に海苔の類あをみ等を「こ」におくなりと見ゆることは今俗にナマスノコなどいふにおなじく役味をいへり同書（廿八丁ウ）にさんば入は再を上べしかみに先こせうあんにんさんせうなり云々

（五十）猿樂相撲抔の纏頭を後日に代料に引替る事　今世猿樂大夫能役者がかづけものをたまはれるを後日に金錢に引替てたまふ事あり又相撲取に衣類など投與たるも後に鳥目と引替る也こは足利將軍の世の風にて三議一統上（四十五丁オ）に遊者請物事とて記したり

（五十一）夏毛の筆　筆の毛に夏毛あり三議一統上（五十五丁オ）に見ゆ反閇もおなじ（頭書園太曆二ノ上廿八丁オ）

（五十二）反閇五字の閇配　五字のへんはいの事三議一統上（七十五丁ウ）に夏毛秋毛春毛などの名目あり但馬の鞍おほひ皮の事にいへる也（頭書貞丈雜記十六ノ一丁オ）

（五十三）ゾッコンと云詞種根　俗言に人の上を委く知たるにゾッコン知テ居ル又はゾッコンキラヒダゾッコンスキダなどいふは種根の訛也源平盛衰記四卷二丁（シヽガタニノウ）鹿谷酒宴條に師光は阿波國者稗根田（ジュコン）舍人也けりとある種根これ也

（五十四）大臣重祿不諫小臣畏罪不言　源平盛衰記四卷（十一丁オ）說苑十一（十四丁オ）

（五十五）白衣姿　俗に略服を白衣といふ○源平盛衰記十三（十九丁オ）高倉宮信連戰條に前右大將ハ御簾を半卷上テ大口計ニ白衣ニテ長押ニ尻懸大床ニ足差出シテ云々また（十九丁ウ）是ハ大將白衣ニテ長押ニ尻係タル事ヲ咎メ申ナルベシ云々同廿二（十七丁ウ）俵藤太將門中違條に將門折節髮ヲ亂シテケヅリケルガ餘リニ悅テ取モ不敢大童ニテ而モ白衣ニテ周章出合テ云々○長本門平家十一（二丁ウ）に將門あまりに喜てけづりける髮を取上ずして白衣にて大童なるが出迎ひ云々（頭書堀川夜討草子にさてもしやうぞんは大びやくえにちやくたいしわたぢうしにてひたひなつゝみ云々）

（五十六）明題部類　親長卿記文明九正七條に參內番也明題題部類於御前書之依仰也

（五十七）入道の女の名可書事　同記文明九（ノ）十一（ノ）廿六條に見ゆ

（五十八）青侍　親長卿記文明十四（ノ）二條に於三十三

間堂ニ蓮花有ル一献ト及ヒ大飲ト及レ晩還御宮御方御輿御共
（六十三）厚顔鐵面皮つらの皮千枚張　俗に恥を知らざるをツラノ皮ガアツイ又は千枚張の顔又は厚顔鐵面皮などもいへり源平盛衰記十八卷四丁文覺頼朝勸ニ進謀反ト條に面張牛皮ノ童ニテ心シブトク聲高ニシテ云々
（六十四）定使　俗に定使といふものあり常使とかけり盛衰記十八廿三丁に定使と書たり
（六十五）親代　源平盛衰記廿卷十六丁石橋合戰條に家安親代ト成テ夜ハ胸ニカヽヘ奉テ通夜勞ハリ晝ハ肩ニノセ終日ニ奉レ育云々按に母代といふも似たる事なるべしこは佐奈田與一を郎等文三家安がはごくみそだてしよしをいへる所也
（六十六）藝は身を助る　同書四卷廿八丁師高流罪宣事條に陳思王ハ七歩ノ詩ヲ作テ一生ノ命ヲ助ケ時忠卿ハ兩句ノ筆ニ依テ三千ノ恥ヲ遁レタリ誠ニ時ノ災ヲマヌカルヽ事藝能ニ過タルハナカリケリ
（六十七）一字を賜ふ片名を賜ふ　名乘の一字を賜ふ事今も御一字拜領などいへり源平盛衰記卅八廿三丁重衡京入の條に此重國ト云ハ重衡卿ノ少クヨリ不便ノ者ニ思ハレテ白烏帽子著セ給テ片名ヲタビテ重國ト呼レケリと見ゆ　頭書源平盛衰記卅六ノ廿一丁ウ鷲尾一谷案内者條に名乘ハ我片名ニ父ガ片名テ取テ經春ト付ベシ云々甲陽軍鑑二ノ六丁オ鎌倉年中行事上廿二丁オ同下十丁ウ
（六十八）人の疵をいふまじき事　一柳盧物は無雙の勇士なり生得兎口なりしが人傍にて兎口の物語をすれば殊外立腹せりとなんげに人の失人の疵は知れたる事ながらいふまじき也源平盛衰記五廿七丁小松殿教訓條に新大納言成親卿が坊門中納言親信に戲言いひて恥しめられたる事をいひて人ハ聊戲言ニモ人ノ疵ヲバ云マジキ事也ケリと見ゆ
（六十九）文明三年四月十二日一禪御說筆記中陰の御佛諡號追號諒闇の服
一御中陰御佛凡人相違事初七日藥師如來二七日彌勒三七日千手四七日地藏五七日普賢六七日不動壺七日釋迦百ヶ日阿彌陀文明三四五九後花園院御百ヶ日之時被ノ用二普賢一云々後小松院百ヶ日聖忌又如レ此被レ注レ之一依ニ或人間一大閤所レ答條々文明三ノ四ノ十二書寫了
一諡號追號のかはりめは　諡をばおくりなとよみて生時の行跡によりて沒後の號として仁德まし〳〵候へば仁德天皇と申武德おはしまし候へば桓武天皇と申候くはしくあひたる事は候はねども本說此ぶんにて候是は德により可レ申候所名にはよらず候追號と申はたぶん御在所の號又山陵の號などを用ひられ候嵯峨淳和陽成などは御在所の名を御追號にもちひられ宇多醍醐村上などはみさゝきの號にて候光嚴光明崇光などは御庵室の額にて候遺勅によりて被用候これも御在所にじゆんじすべておぼしめし候崇德顯德後鳥羽初御號順德等三代は遠島の御事にて候ほどに院號を撰られて送り申され候近ごろ稱光院などは此例たるべく候かにて候しかとしたる御在所は候はねども院號にもちひられ候安德天皇などは諡號の准たるべく候諡號は其人の德によりたる號にて候ほどに後の字をくはへて用られたる事はいまに其例なく候又出家の後は諡號なきにて候是によりて寬平法皇の後は天子の諡號たえたる事にて候
一諒闇の服は心喪と表したる事にて候それに若年人ころもがへけしやうなどはかざりにて候ほどに事心と相違したるとおぼして候さりながら神事などにしたがひて吉服を著し候へばそれ一日などの事はくるしからじとおぼしめし候いのはじめより卷纓にて候本ノマヽ其後つるばみの宣下候はゞ何とも候へふさきにとも

垂纓にあらしたるべき事はおぼつかなく候はじめより垂纓にて其後つるばみを著事も卷纓にさきし候べきにて候

一大中納言以下卷纓の鈍色の諒闇の直衣束帶を著し候關白三公いし〳〵もみな卷纓たるべく候公事にてしたがひ候はすは內々ぶさたのぶんにて候素服にて候はゞ垂纓も子細候まじなどおぼしめし候さりながら家々の所存さだめてかはり候べきぶさたは近例本ノマヽたて候右兼良公言談云々○與清曰右の古書筆記せし人未レ詳一條禪閤の御說にて御中陰の佛名讀號追號諒闇の服卷纓垂纓の事などあれば珍重すべし

(七十)酒令觴政酒勢令搏拳　說苑善說篇十一卷八丁右に魏文侯與二大夫一飮レ酒使二公乘不仁一爲二觴政一曰飮不レ嚼者浮以二大白一文候飮而不二盡嚼一公乘不仁舉レ白浮レ君君視而不レ應侍者曰不仁退君已醉矣公乘不仁曰周書曰前車覆後車戒蓋言二其危一爲二人臣一者不レ易爲レ君亦不レ易今君已設レ令令不レ行可乎君曰善舉レ白飮飮畢曰以二公乘不仁一爲二上客一云々この觴政すなはち酒令也唐書九十四卷十二丁左李君羨傳に會二內宴一爲二酒令一各言二小字一云々近來張山來が酒令世に行はる五代史廿卷五丁左史弘肇傳に酒酣爲二手勢令一とあるも負人罰杯を呑事也また酒席にて拳を打て勝負を論ずるはいつばかりにはじまりけん虫拳狐拳虎拳などの類おほかり事文類聚續集十五卷宴飮部罰飮條に東皐雜錄を引て孔常甫言唐人詩有レ云城頭推レ鼓傳二花板一席上搏レ拳握二松子一乃知酒席藏レ鬮爲レ戲其來久といへるは拳を搏て松子を握り其員數に据て勝敗を分てるにや橘泰が筆のすさび上卷四丁に拳を打事を漢土にては捲陣と云又にぎりこぶしにてする「けんねち」「なん〳〵こ」といふ戲を猜拳と云猜はうたがふ事也故にはんじものを書し燈籠を猜燈といふ明皇雜記に見ゆと云々

(七十一)瑠璃　瑠璃は佛敎におほく見えて畎瑠璃などもいへり扶桑畧記三卷十四丁敏達十四年條に蘇我大臣佛舍利を瑠璃壺に納たる事見ゆ

(七十二)修身の金言幷柔能制レ剛　說苑十卷三丁敬愼篇に孔子曰高而能下滿而能虛富而能儉貴而能卑智而能愚勇而能怯辨而能訥博而能淺明而能闇是謂二損而不一極云々又四丁同篇に老聃有レ言曰天下之至柔馳二騁乎天下之至堅一又曰人之生也柔弱其死也剛強万物草木之生也柔脆其死也枯槁因レ此觀レ之柔弱者生之後也剛強者死之徒也○列子黃帝篇上五十九丁ウに天下有二常勝之道一有二不常勝之道一常勝之道曰レ柔常不レ勝之道曰レ強云々

(七十三)衆口回二人意一衆口銷レ金　說苑十卷十五丁ウ敬愼篇に讒諛亂二正心一衆口使二意回一云々戰國策七廿六丁ウ魏哀王條に張儀爲レ秦連橫說二魏王一曰云々臣聞積レ羽沈レ舟群レ輕折レ軸衆レ口鑠レ金云々注に補曰周語衆口銷レ金註衆口所レ毀雖二金石一猶可レ銷云々史記八十三卷雎陽傳に衆口鑠レ金積毀銷レ骨云々注に索隱曰國語云衆心成レ城衆口銷レ金云々頭書野客叢書六ノ廿六丁ウ隋書二ノ十八丁ウ高祖紀下仁壽三年の條に衆口鑠レ金云々

(七十四)怨生二於不報一禍生二於多福一　說苑十卷十五丁ウ敬愼篇に「去二徼幸一務二忠信一節二嗜欲一無レ取二虐於人一則稱爲二君子一名聲常存怨生二於不レ報禍生二於多福一安危存二於自處一」

(七十五)氣にいらぬ　國語七卷十三丁ウ晉語一に與二其勤而不レ入不レ如逃レ之云々注に不入不レ入二君意一也云々

(七十六)同出　同十卷八丁ウ晉語四に同出九人唯重耳在注に同出同レ父也

(七十七)無德にして人に用らるるは罪也　國語十卷十三丁ウ晉語四に無レ德二於人一而求二用於人一罪也注に言不二先施一德於人一而求レ人爲二己用一者是罪也

(七十八)田樂侏儒　又廿丁ウ侏儒扶レ盧云々注に扶緣也盧矛戟之柲緣レ之以爲レ戲云々按に侏儒は田樂法師またはカルワザの類也圖太曆一之下頭書田樂ノコト榮花御裳著ノ十二丁ウ舊本今昔廿八ノ七語百練抄五ノ廿八丁ウ

(七十九)使レ酒　唐書八十一卷三宗諸子列傳景儉傳に性矜誕使レ酒縱レ氣云々南史卷四十一丁ウ魯爽傳に爽少有二武藝一魏太武知レ之常置二左右一及二軋死一爽代爲二荊州刺史襄陽公一鎭二麾中使レ酒數有二過失一云々

(八十)幕肖　唐書八十一卷十六丁ウ三宗諸子列傳惠文太子範傳に長安初張易之奏二天下善工一潢治乃密使二摹肖一殆不レ可レ辨竊二其眞一藏二于家一云々

(八十一)蜘のいに荒たる駒をつなぐ幷二道かくる『跡云草虫部蜘條によみ人しらず「蜘のいにあれたる駒はつなくとも二道かくる人はたのまし」藻鹽草十二獸部馬條にあれたる駒くものいにあれたるこまはつなぐともといへりあれたるとはあらきなり云々二道かくるは狹衣四上卷四十五丁ウ狹衣大將歌に「一かたになりなはさてもやむへきをなと二道に思ひなやます」增基法師が庵主群書類從三百三卷五十一丁左に「君はおもふ都は

こひし人しれすふた道かけてなけくころかな」源氏物語若菜下巻(湖月抄本五十丁左)にいとよくふたすぢに心づかひはしたまひけれとも見ゆ』

(八十二)妻の貞不貞の優劣　吾妻は貞(カタイ)がよし人の妻は不貞(スルイ)がよしこれおほかたの人情也吾妻貞(カタ)ければ夫心安し人の妻不貞(マヲトコ)ればたとへ奸淫はせずとも酒宴の席(アヒテ)などにしてきようありされどその夫のためには大事(ゴン)ならずや戰國策三上卷十一丁ウ秦惠文君條に楚人有二兩妻者一人誂二其長者一長者詈之誂二其少者一少者許(シタガヘリ)之居(サテ)無二幾何一有二両妻一者死客謂二誂者一曰汝取二長者一乎少者乎取二長者一客曰長者詈レ汝少者和レ汝汝何爲取二長者一曰居二彼人之所一則欲二其許一我也今爲二我妻一則欲二其爲一詈レ人也とあるは古今人情かはらずと云べし

(八十三)寇族(カタキノタチタヤスベシ)可レ盡　戰國策三上卷廿七丁ウ秦昭襄王篇に詩云樹レ德莫レ如レ滋除レ害莫レ如レ盡吳不レ亡レ越越故亡レ吳齊不レ亡レ燕燕故亡レ齊齊亡二於燕一吳亡二於越一此除レ疾不レ盡也云々按平相國賴朝を亡さずして子孫賴朝に亡さる

(八十四)百里にゆく者は九十里を半とし事を成すに十にして九半とす　人の行末路を難とするの十にして九をなせども末の一にして破るゝが多し戰國策三上卷廿八丁ウ秦武王篇に詩云行二百里一者半二於九十一此言二末路之難一云々注に言行二九十里一適足レ爲二五十里一耳標注に許應亭曰行二百里一者半二九十里一言二其一之難一云々

(八十五)力を出す　出すと云ふ詞入と云詞　俗言に力を出す精を出すなどいへり戰國策四上卷廿二丁ウ齊閔王篇に秦曾不レ出レ力とあり秦は秦國也○十訓抄三ノ十八丁ウについまつのいさゝかいりまさるにぞおぼえ侍る云々舊本今昔廿六の十四語に金何許可二罷入一カト問云々

(八十六)繪折敷(井)樣器　長秋記保延元四ノ十七條に中央立二二階棚一脚一上階置二繪折敷十枚南樣器盃十一北中階置二白瓶子四口青子瓶子二口一中央南北妻居二高火爐一令二中居一鉢其上立二金輪一居レ鉾云々

(八十七)賀茂の御蔭山　親長卿記文明四ノ四ノ十三條に自二禰宜三位祐香卿許一有レ使來十六日御蔭山之時渡二和琴一之處去々年燒失之時紛失了(累代神物云々)云々同十六日の條に今日御蔭山無爲云々

(八十八)酒三遲　酒三遲の時埃嚢抄大東世語などに見ゆ親長卿記文明五正六條に及二三遲之興一亥刻許歸宅云々同文明七正十三條に若衆等相殘有二三遲之興一云々同文明十七ノ二ノ二條に披講之後有二三遲之興一云云

(八十九)蛙合戰　親長卿記文明八正廿六條に春日社有二怪異一云々又有二蛙合戰一在所忘却云々頭書(百練抄八ノ廿九丁ウ蝦蛇合戰)

(九十)舞太夫(井)松囃　同記文明八ノ三ノ六條に小大彌太郎與四郎來去一日爲二御禮一參二內裏一之處被二召出一及二歌舞一祝著今日又有レ召云々細注に舊院御時年如二春三月一連々有二松囃一其外被二其沙汰一之處搆二綏怠一之由被二召籠一了武命也其後一亂之時自二獄舍一自然出了其後無二御免一之儀歟宿老大夫者四ヶ年已前死去了與四郎者件大夫子云々被レ申二武家一去一日有二歌舞一御免分歟云々年中定例記十二(丁ウ)正月十四日の條にいにしへは松はやしあり觀世はやし過て能あり云々御臺樣よりはやし物前に觀世太夫を召れてから織物已下御ふく十被レ下候云々正月御事始記五丁(ウ)正月十四日の條に於二公方一まつはやし御座候從二御臺一御小袖を十觀世太夫に被レ下云々宗五大艸紙上八丁(ウ)色々の事の條に每年正月松はやしの時御臺樣より觀世太夫にごふく唐織物已下十被レ下候云々宗五大草紙上廿六丁(オ)又廿八丁(オ)

(九十一)いきみたま　親長卿記文明八ノ七ノ十一條に參內依レ召也若宮御方已下有二御祝之儀一(いきみたま)云々筆記百五卷十八段に殿中申次記(廿丁ウ)を引ていへり年山紀聞六丁(廿四オ)閑窓倭筆上卷年中故事要言五昔々物語などにも見ゆ(コシ)

(九十二)小四方(ハウフイガサチクギヤウコウギヤウ)衝重公卿小公卿　親長卿記長享二ノ廿三條に丞相小四方衝重勸二亞相一已下小公卿也云々聞書秘傳(ウ)二丁にたちばなやきは公卿也とも足打也ともたゞよこにおくもの也云々又六丁(ウ)又七丁(ウ)

(九十三)上人號國師號禪師號和尚號等の宣下　同明應四ノ九ノ廿一條長享二ノ八ノ十九條頭書(禪師號釋書六ノ十七ノ十三丁ウ康富記寶德二八ノ廿七條　武家盛衰記廿一三丁オ國師號釋書)

(九十四)煤拂新宅三年の間忌レ之　親長卿記延德三ノ十二ノ十四條に拂煤端新造幷江南居住方等依レ爲二三ヶ年內一不レ拂レ煤云々好古小錄上廿七丁(オ)付喪神記に煤拂の因緣を記したり

(九十五)懷紙ハ兼日短尺ハ當座　同明應七ノ八ノ十三條に兩座(兼日懷紙當日短册)有二披講一云々

(九十六)久世舞　親長卿記長享三ノ十ノ九條に參內有二

久世舞ニ細注に於ニ禁中一春三月有ニ如レ此之儀一是又近例也今如レ此事出來如ニ何之一莫レ言了宮外樣人々一献申沙汰云々

松屋筆記卷之九十一

(一)やくかい厄會ヤッカヒ者　俗語にやくかいになるといひ字を厄介と書り書言字考九卷言辭門也部に厄介今按宜レ用ニ厄會字一乎文選王命論遭レ罹ニ厄會一窮ニ其權柄一云々和爾雅(八卷言語門)諺草(五卷也部)などにも王命論を引たり文選(六臣注本五十二卷四丁右)班彪が王命論に故雖レ遭レ罹ニ厄會一窮ニ其權柄一勇如ニ信布一彊如ニ梁籍一成如ニ王莽一云々と見えて罹ニ厄會一とは厄難の會集せる時に罹よし也されば今俗にヤッカイニ預ルヤッカイニ成ルヤッカイ者などいふには義別也按にヤッカイは家抱(カヽヒ)にてヤカヽへと云を訛れる辭ときこゆさてはヤッカヒと書べし其家(ヤ)にかゝづらひて介抱せらるゝよし也

(二)智識大德の歌めでたし　慈鎭和尙西行上人正徹書記佛國禪師無窓國師他阿上人澤庵和尙などの類智識大德の歌は俗人の企及ばざる趣向あり無窓國師の「ちる花を梢のよそに吹立て嵐そしはし枝と成ぬる」澤庵和尙の「はれくもり吹ちるは世のならひかなさらしなの月みよしのゝ花」かゝるたぐひいくらもあり井蛙抄(六卷廿七丁右)雜談部に戶部云高尾文學上人歌五首詠て京極黃門許に持來皆其心珍重也佛法練行心通ニ和歌一歟之由記錄被ニ書載一都賀尾(トガノヲ)明惠上人は此道數奇異レ他也仍新勅撰にも歌あまた被ニ撰入一又自遣心集といふ集を書て歌をあつめられたり文學上人數奇被ニ相續一歟云々

(三)手ぐすね引(ヒク)天鼠矢(スヽ)　保元物語參考二卷(四十四丁ガ)白河殿攻落事條に件ノサキ細打番ヒ手グスヽ引テゾ控ヘタル云々同書(三卷百十二丁右)爲朝鬼島渡の條に爲朝折節大事ノ所勞ヲシテ八十餘日臥ケルガ宜シク成テ廿日許ノ事也弓勢事ノ外弱テ覺ケレドモ大鏑ヲ打クハセテ手グスヽ引テタメラヒ見ル程ニ云々井蛙抄(六卷廿八丁右)雜談條に西行と申ものにて候法華會結緣のために參て候今は日くれ候一夜此御庵室に候はんとて參て候といひければ上人內にて手ぐすねを引ておもひつる事かなひたる體にてあかり障子をあけて被レ出けり云云此文水蛙眼目(詳書類從本廿六丁右にも見ゆ)物草太郎草子に物ぐさ太郎是を見て爰にこそわが北の方は出きぬれあつはれとくちかづけがしいだきつかん口をもすはゞやとおもひて手ぐすねをひき大手をひろげて待居たり云々これ今俗力をいれんずる時手につばきばきして物を執を手油をかふとも又手ぐすねを引ともいへりくすね糊(モチ)などの類にて物を付るに離れざれば手に執物の落ざるやうに掌に唾を加ふを手ぐすねとはいへる也類聚名義抄(法下卷)尸部に天鼠矢クスヽ云々以呂波字類抄(七卷)久部雜物門に天鼠矢クスヽ云々節用集(上卷)久部器財門に天鼠クスヽ大鼠同云々運步色葉集久部に天鼠子クスヽ云々塵添壒囊抄(三卷廿九丁左)鍵(ウツボ)事條に弓ノ具ノ難字ニハ韔(ユガケ)天鼠矢(スヽ)鳴箭(カブラヤ)鏑同流鏑又順ガ和名ニハ弽(ユガケ)トヨメリ云々狂言記拾遺(二卷)松の精にあの松やにをくすねにねりましよ云々いでくすねをねらんとてくすねがはを大きにこしらへ此松やにをとりいれていかにもねばくあやかれとて練つれてこそかへりけれ云々(雍書古事談四に出羽守源齊頼云々白髮ニ帽子カブキテタフノ直垂小袴ニ九寸許ナル腰刀ノツカニクスヽ糸卷タル脇ツボニサシテ櫃ヲ居移スノ後ハ氣色(モ)事ノ外ニスクヨカゲニ成テ云々　新撰類聚往來孟秋十八日狀に勝(ツルブクロツルマキクスヽ)鞬　天鼠白木弓塗籠云云字鏡集結(ユヒ)クスヽ　舊本今昔廿九ノ六語ニ或ハ調度ヲ負ヒ或ハ打物ヲ取テ皆甲冑ヲ著テ手ヲ舐(ネブリ)テ侍ケリ云々桂川地藏記上卷箭段に天鼠(クスヽ)云々

(四上)歌數おほくよみたる人　井蛙抄(六卷卅丁右)雜談部に事條に二條より南京極よりは東は菅三位の亭也三位國助神主云々稽古も名譽も無雙なりきしかるに家隆うせて後年比へて月のあかき夜さるべき人々古き跡の詠歌六萬首ありける事をうらやみて己達の後歌ををしのびてかしこにあつまりて月をもてあそぶ事有おほくよみけり云々正徹書記草根集詞書に永享四年けりをはり方に或人月はのぼる百尺樓と誦しけるに卯月二日夜中務大輔の家にとゞまり侍るに夜半ばかり人々聲をくはへてたび〳〵に成にあばれたる中門のりに今熊野の草庵本坊の類火にやけ侍るよし曉告來かくれなる蓬の中に老たる尼のよにあやしげなるがりしかどもかひなき事にてぞ侍りし愚老廿歳のとし露にそぼちつゝ終夜聞をりけるが今夜の御遊いとよりよみおきし歌二萬六七千首三十餘帖に書おきしといとめでたくて涙もとまり侍らぬに此詩こそ及ばぬ耳もひとつものこらずすべて和歌抄物自筆秘口傳等數にも僻事を詠じおはしますかなどきゝ侍れといふ人を盡して空しき烟となし侍れば云々

(四下)如法如法者(ニョホフニョホフノモノ)　古書に如法くらき夜如法正(クヮンシ)きなどいふ類の如法といへる字面いとおほかり井蛙抄六人わらひて興ある尼かないづくのわろきぞといへばの卷雜談部異本後宇多院龜山殿千首時といへる條にさらなりさぞおぼすらんされど思給ふは月はなじかは樓にはのぼるべき月にはのぼるとぞ故三位殿は詠吉田儀正參會の時あはれ霞のたち所かなを被二稱美一じ給ひしおのれは御物はりにておのづから承りし也由侍從中納言被レ語とて中御門如法自愛のよし被レ語といひければ耻てみな立にけり是はすゝみて人をあきと有如法ハコトノホカ又はコヨナク又はイミジクなづるにはあらねども思はぬ外の事なりこれらまでなどよむべきなり俗に如法者といふも殊の外よき者に心すべにきや藪にかうの物といへる兒女子がたとの義なるべし

(五)はづすと云假名　紱をはづす物をきゝはづすなへむねをたがへざりけり云々按おもひかけぬ數の中どいふははづすははなつとかよひて聞ゆ

(六)藪にかうのもの　十訓抄(三卷十丁左)第三不レ侮二人倫一に馥二香ノ物一〔愚曰藪竹林也香物醃ニ諸菜一也皆俗語非二正訓一也尾陽城外一二里許西有二阿波提杜一(アハラノモリ)建保百首作二相傳此杜中有二菅君祠一古人經二過此地一則無レ不レ以二菜菜漿鹽之類其他一切之雜物等一薦二之神一而投二於祠前竹林之小池一而后池中菜菜等自然爲二香物一也爾來物可レ無而反有レ之謂二藪香物一也嗚呼神靈之所レ爲乎是亦一大惟事也何計較論量知二得之一耶近世僅存二其遺意一而已蓋考二之歷代和歌諸書一此森中無二菅廟等之事一唯其所レ咏二吟之一森下之幽景及海濱之豪興也而今杜外皆田圃也何時海潮退二縮於六七里許南一如レ是爲二平地一而已雖レ未レ知二事實之詳一姑書レ之以俟二知者一也云々千加屋草五卷に藪に香物といふ事藪醫にも功者ありと云諺とのみ思ひしに予尾張に在し時名古屋より海東郡を通り津島へ往に阿波手ノ森と云所に藪の中に壺をふせて往來の瓜茄鹽の賈人その我がうる物を納置香の物自然となる瓜茄子に麥穗を少し加へて每年極月廿五日熱田の社の煤拂と二月初午の神供に献ず兩所より献じて其數も委く記し置たれども無用の事なれば略しぬ此香の物よりいひ弘めたる事にかゝる事もあれば私の考のみにて

(七)堅固の田舍人　十訓抄(三卷十七丁右)第三不レ侮二人倫一事條に敎經云爰に老翁や一人あひ奉りて候つらんあれは愚父平五大夫にて候堅固の田舍人にて子細をしらずさだめて無禮をあらはし候つらんといひけり云云

(八)異名　見あれの宣旨(小世繼五丁ウ十訓ノ二ノ八丁ウ)　在中(十訓ノ二ノ平中同ノ二ノ九丁ウ)　安樂鹽(同ノ二ノ十五丁ウ)　天變の少將(同ノ二ノ廿五丁オ)　山送りの弁(同ノ二ノ廿六丁オ)　長面進士(同ノ二ノ廿一丁ウ)　勅撰の異名(井蛙抄三卷廿二丁オ)　飯を供御海人藻芥下十八丁オ)　酒を九献(同上)　餅をカチン(同上)　味噌をムシ(同上)　鹽をシロモノ(同上)　豆腐をカベ(同上)　索麪をホソモノ(同上)　松茸

をマツ同上鯉をコモジ同上鮒をフモジ同上鷁をツモジ同上土筆をツク同上蒜をワラ同上葱をウツホ同上菜をオメグリ常にオマハリと云はわろし同上椙原紙をばスイハ同上引合紙をヒキ同上篡目をしねくる三議一統上七十〇藥の異名曖耕一丁ウ歩射門諺十六ノ十四丁オ頭書婦人養草五ノ下五十二段四十五丁ウまつよひの小侍従下もえの少將ことし柴の加賀〇車を流水建暦宣旨馬を浮雲同上

（九）かきたて杖　燈のかき立杖十訓抄二六丁オ　にかきあげの木と見ゆ

（十）こびたるもの　俗にこびたるものといふは媚（ワメ）の義にはあらずかどびたる者といふを約ていへる也そは才あるものをかどあるものといへり十訓抄二卷廿二丁ウ　に才こびたるもの也けりと有〇武邊咄聞書七卷關原御陣前に福島正則池田輝政其外大名十二頭にて岐阜の城を攻ると云段に高虎又兵衛はこびたる者にて候とて扇にて被レ招候へば云々

（十一）雜訴決斷所　鎭西古文書一卷阿蘇宮文書に雜訴決斷所牒　肥後國守護所

當國阿蘇社大宮司惟直申社領阿蘇社四至堺事

右任二承暦國宣一可レ打二渡彼界一者以牒

元弘三年十一月四日　右衛門大尉大宿禰判

左中辨藤原朝臣判

雜訴決斷所牒　肥後國衙

當國阿蘇大宮司惟直申社領阿蘇四至堺事

右任二承暦國宣一可レ打二渡彼界一者以牒

元弘三年十一月四日　右衛門大尉大宿禰判

左中辨藤原朝臣判

按建武年間記にも雜訴決斷所見ゆ松屋外集二編二の卷を考合すべし頭書雜訴太平記一ノ五丁ウ同十二ノ五丁オ

（十二）權守武家不レ任　二判問答群書類從四百七十二卷十六丁左　に權守事於二武家之所望一者不レ可レ有二勅許一之由有二其沙汰一云々是又勝定院殿御代有二其例一爲二其以後被一停止一哉云々以上二階堂判官政行問也　此條未レ觸レ耳凡儀可レ有二何事一哉以上源頁公御答也

（十三）簡衆　二判問答群書類從四百七十二卷廿丁右　に諸大夫幷醫陰兩道侍等中號二將軍家御簡衆一者可レ奉二行何樣事一哉普光園院御簡衆有レ之然者至二大臣及幕下等一可レ有二件衆一哉按已上は二階堂判官政行が問也〇攝關大臣家宿中簡書家司名二簡衆一者若其事歟冬頁勘建久二ノ十宮御佛名也以二内藏人範高一補二簡衆一令レ勤二雜役一之云々

（十四）記錄所　二判問答群書類從四百七十二卷廿丁右　記錄所文殿條に記錄所被レ置二禁中一有二上卿弁開闔寄人等一被レ行二天下政務一所也自二後三條院御代一被レ始レ之至二後光嚴院時分一有二其沙汰一歟文殿被レ置二仙洞一歟　冬頁勘文殿執柄家謂レ之補二別當三道儒一以下等爲二所衆一書下知也見二于文治二年玉葉一記錄所後白河院保元元年十月廿一日始被レ置レ之依二延久例一也云々按大内裡考證廿九の卷に委し

（十五）若君姫君　二判問答後附に大臣子孫稱レ君事中右記曰元永元十　内大臣殿渡二給民部卿姫君許一民部卿宗通者右大臣俊家公男也薩戒記曰應永廿五若君被レ著二圓座一若君者花山院持忠公也持忠公父忠定右大將也祖父通定者右大臣也云々按二判問答は二階堂判官政行が問に後成恩寺禪閤の答たまひし也それに一條冬良公密勘を添られたり此後附も冬良公の勘考なるべし

（十六）内侍宣　西宮記正月部下補二藏人一事條に所ノ別當ノ公卿依レ召候二御前一數二宣圓座一藏人置二紙筆一入二柳一宮依レ仰書レ之某々爲二藏人一不レ顯二本官一書二宣旨一某々人々聽二昇殿一之時注二官位薩等一月一日書了奏覽上卿退出下二頭若藏人一藏人下二出納一令レ書二宣旨一給二宣旨左近陣一頭藏人別奉二宣旨一以二内侍宣一書下云々應和二正七可レ補二藏人某々等一大臣仰レ頭以二内侍宣一下延長六正十九例云々同書臨時部一諸宣旨條に下二撿非違使一宣旨、禁色雜袍帶劔上卿下二著二摺衣緋鞦一事赦免事上卿召二官人一仰闘亂殺害事或内侍宣或所宣臨時雜宣旨辨官仰下又上卿召二官人一仰或藏人所仰レ之依二追捕一賜二宣旨一者右辨官宣云々藏人頭以下事所、別當於二御前一定レ之下二藏人一藏人仰二出納一讀二宣旨書一舊例下二宣旨左近陣一或内侍宣殿上人同レ之云々また内敎坊頭預中臣靜子　應和四二廿九別當奏補二五節師一以二内侍宣一被レ仰二本人及内侍所一以二舊舞姫一爲レ師云々また節折中臣女氏繁　應和元六廿内侍宣仰二神祇官一云々また宣旨官人代藏人以二内侍宣一仰或有二官宣一云々〇侍中群要二卷下二宣旨一事條に有下必奉レ下二一上一之書等上不レ可レ奉二以レ次之上一下二宣旨一之時若事理重者藏人必稱二内侍宣一傳宣典侍某子侍云々　是依二六位藏人直地一不レ可レ承也云々また凡下二宣旨一之時事理頗重者藏人必稱二内侍宣一云々同七卷雷鳴解陣事條に上卿若申障者以二内侍宣一行者云々同卷解陣事條に若上卿不レ候之時以二内侍宣一中將解レ之云々同書十卷諸司官人代事條に依二神祇官解一以二内侍宣一令レ仰二下神祇官一云々また交野撿挍事條に以二本司奏一下給藏人召二本所官人一下レ之稱二内侍宣一云々〇古事談一卷に入道殿賀茂祭見物棧敷間俄花山院闘亂事アリ以二職事一被レ仰下可レ遣二撿非使一之由上奏者申云上卿誰人哉仰云如レ此急速大事只稱二内侍宣一也云々

○禁秘抄（下卷六丁右）采女事條に節折藏人依ニ神祇官申一內侍宣也云々按內侍は藏人の唐名にて女官の內侍とは別也ダイシと漢音に訓べし○有職問答二卷（六丁右）出納事條に內侍宣として使宣旨を申觸事此役の沙汰也云々按壺井義知が書入に本朝使宣旨ト內宣旨ト別也云々此書入いぶかし寫誤あるべし內侍宣は藏人の宣旨使宣旨は撿非違使の宣旨なれば使宣旨ト內侍宣トハ別也といふべき事也○同書三卷（十八丁左）藏人非レ司たゞ宣旨にて參者也といへる條の答に內侍宣ニテ口ヅカラ殿上ノ出納ニ仰候テ其人ニ告知ス也云々○官職難義（群書類從本廿五丁右）に內侍宣とは官位職を宣下するは外記史內記必それぞれにつきて知る也是は職事承りて上卿に下知して次第の宣下あり內侍宣と申は職事上卿へ申さずして直に藏人方にて出納小舍人などへ申者まで次第に下知し侍ると申候藏人頭五位藏人六位藏人以下藏人のぎ又昇殿をゆるゝ時は皆內侍宣也彼物語に源氏元服の時御前への召を內侍宣旨つたへて侍るやらん昇殿は內侍宣にてあればかやうにかき侍る也云々○按源氏物語桐壺（湖月抄廿八丁左）におまへより內侍宣旨承り傳へておとゞまゐり給ふべきめしあればとあるは西宮記（臨時部十）

申候以ニ此准據一諸事被ニ書出一候ヲ女房ノ奉書ト申候云々按內侍は藏人の唐名にて女官の內侍とは別也ダイシと漢音に訓べし○有職問答二卷（六丁右）出納事條に內侍宣として使宣旨を申觸事此役の沙汰也云々按壺井義知が書入に本朝使宣旨ト內宣旨ト別也云々此書入いぶかし寫誤あるべし內侍宣は藏人の宣旨使宣旨は撿非違使の宣旨なれば使宣旨ト內侍宣トハ別也といふべき事也○同書三卷（十八丁左）藏人非レ司たゞ宣旨にて參者也といへる條の答に內侍宣ニテ口ヅカラ殿上ノ出納ニ仰候テ其人ニ告知ス也云々○官職難義（群書類從本廿五丁右）に內侍宣とは官位職を宣下するは外記史內記必それぞれにつきて知る也是は職事承りて上卿に下知して次第の宣下あり內侍宣と申は職事上卿へ申さずして直に藏人方にて出納小舍人など申者まで次第に下知し侍ると申候藏人頭五位藏人六位藏人以下藏人のぎ又昇殿をゆるゝ時は皆內侍宣也彼物語に源氏元服の時御前への召を內侍宣旨つたへて侍るやらん昇殿は內侍宣にてあればかやうにかき侍る也云々○按源氏物語桐壺（湖月抄廿八丁左）におまへより內侍宣旨承り傳へておとゞまゐり給ふべきめしあればとあるは西宮記（臨時部十

親王元服條に加冠依レ召著ニ御前座一（內侍於ニ妻戸一召ニ引入一女藏人授ニ給祿一下ニ長橋一不レ著レ沓於ニ庭前一拜舞云々）と見えたる事にて掌侍が尙侍より承り傳へて大臣を召なるよし職員令に見ゆこれを藏人の宣下の內侍宣（ダイシセン）とおもへるは誤也○與清曰內侍宣は藏人を補せらるゝ時管領職事（ウケタマハ）とて藏人頭の上首が勅を奉（オホ）りて藏人所出納におほせ出納また下役の小舍人に命（シノス）せて其本人に告知らするをいへる也又ふるくは典侍（ダイシ）の傳宣にて六位藏人が直に奉行せし事もありと見ゆ內侍は藏人の唐名にて實は藏人宣なるを內侍宣といへば漢音に「ダイシセン」と訓べし女官の內侍を吳音に「ナイシ」といふにおもひまがふべからず然て藏人所の官人を補せらるゝにも限らず雷鳴陣（カムナリノ）の事交野（カタノ）檢按の事檢非違使が近所追捕（ツホフ）の事五節舞妓（ブキ）の事法中の事急速の事なども內侍宣にて命せられし例ありその外にも便宜によりて內侍宣を用らるゝ事ありしにや

（十七）庚申夜所レ妊之子爲レ盜　下學集時節門に庚申此夜盜賊行レ事有レ利故諸人不レ眠而守レ夜也或說云此夜夫婦行レ婬則其所レ妊之子必作レ盜故夫婦所レ愼夜也思ヘレ之

（十八）健兒は中間男小者　下學集家屋門に健兒所中間之所レ居也源平盛衰記に牛ゴテイなどもあり古くは健兒チカラヒトとよめり中間は三內口決（四十七丁ウ）

頭書　中間法師著聞集五ノ六十三丁ウ　古事談四ノ八丁ウ　中間小者資石十九　花營三代記上廿九丁オ　參天台記四ノ廿二丁オ　中間僧二人下法師二人云々　中間雜色ノ老別宗五大艸子廿五丁オ

（十九）みそさゞい　俗に鷦鷯の事をミソサゞイといへりサゞイはサゞキの通音にて此鳥溝中などに栖ゆる溝鷦鷯（ミソサゞイ）といへりと見ゆ下學集氣形門に鷦鷯小鳥也莊子鷦鷯巢レ林不レ過ニ一枝一云々此鳥栖レ溝三歲故日本呼ニ溝三歲一者是鷦鷯也○諸國獨吟集上（四丁ウ）元隣句に「羽づかひは自由自在なみぞさゞい」

（二十）鰄（カイラギ）　鮫にカイラギ又花カイラギなどいふあり下學集上十八丁オ氣形門に鰄（カイラギ）刀鞘用レ之日本俗所レ作也又云ニ海華皮一也云々節用集にも見ゆ

（廿一）勘當　下學集下卷（二丁オ）態藝門に勘當爲ニ君父一所レ擯之義云々また不孝の注に日本俗以ニ不孝二字一爲ニ勘當之義一似レ無ニ其理一歟云々

（廿二）不孝（フカウ）　又不孝者其子不レ隨ニ順父母之命一也然日本俗以ニ不孝二字一爲ニ勘當之義一似レ無ニ其理一歟

（廿三）折檻（セッカン）　下學集下卷（二丁オ）態藝門に折檻セッカン

折檻諫レ人義也前漢朱雲請ニ上方斬馬劍一ニ斷ニ佞臣一人頭一上問爲レ誰曰張禹上怒將レ雲下斬レ之雲攀レ檻折云云

(廿四)連署　下學集下卷三丁左　態藝門に連署レンジョ即連書之義也

(廿五)放埒　下學集下卷四丁　態藝門に放埒人不レ順ニ法度一如ニ生馬放レ埒也

(廿六)狼藉　下學集下卷四丁　態藝門に狼藉人之狂亂如ニ狼所レ藉草散亂一也云々野客叢書十八丁ウ　物性喩レ人條に狼之喩尤多云々言ニ其不檢一則曰ニ狼藉一云々

(廿七)左禮　新猿樂記に〔京童の虛左禮とみえ〕下學集下卷四丁ナ　態藝門に左禮戲義云々

(廿八)相伴　下學集下卷六丁　態藝門に相伴對座也云云室町の代に相伴衆あり

(廿九)豫參　下學集下卷六丁ナ　態藝門に豫參ヨサン列參之義云々

(卅)不當　同六丁ナ　態藝門に不當フタウ云々

(卅一)周章　同六丁ナ　同門に周章ー一驚怖意也日本書狀愁傷者不レ知ニ本說一一說作レ憧云々

(卅二)白狀　白狀ハ申狀也下學集下卷七丁右　態藝門に白狀ハクジャウ云々吾妻鏡六四十九丁ウ五十丁ナ　貞永式目二丁

(卅三)支度　下學集下卷七丁ナ　態藝門に支度用意義也

(卅四)箕裘之業　下學集下卷七丁ウ　態藝門に箕裘之業不レ墜ニ父祖之舊業一謂ニ箕裘之業一禮記良治之子必學レ爲レ裘良弓之子必學レ爲レ箕注補レ器者其金柔弱有レ似ニ於爲レ裘撓ニ角輸一者其材宜ニ調有レ似レ爲ニ楊柳之箕一也頭書列子下廿四丁ウ又廿五丁ナ

(卅五)下火　下學集下卷八丁ナ　態藝門に下火アコ二字共唐音也禪家葬禮之法事也火字或作ニ炬字一

(卅六)屈請　下學集下卷八丁左　態藝門に屈請クッシャウ強招レ人也日本俗屈字作ニ窟崛一皆大誤也

(卅七)士は己を知者の爲に死す　枕草紙春曙抄二卷十七丁ナ　に女はおのれをよろこぶものゝためにかほつくり士はおのれをしれる人のためにしぬといひたる云云史記刺客豫讓傳蒙求の豫讓呑炭の條などに見ゆ說苑六卷十丁　復恩篇に管仲曰云々生レ我者鮑子也士爲ニ知レ己者一死而況爲ニ之哀一乎云々晏子春秋三上卷十三丁ナ　雜上に越石父對レ之曰臣聞士者詘ニ乎不レ知レ己而申ニ乎知レ己云々魏志廿一卷五丁ウ　王粲傳注琳瑀歌に士爲ニ知己一死女爲ニ悅者一玩云々

(卅八)習成レ性　晏子春秋三上卷十二丁ウ　雜上に嬰聞汨常移レ質習俗移レ性云々晉書五十二三丁グフ　虞溥傳の虞溥が移告に中人之性隨レ敎而移善積則習與レ性成云々

(卅九)納袈裟　下學集下卷九丁ウ　絹布門に納袈裟納綴集義納衣亦同意納通作レ衲也

(四十)練歩　遲練早遲練アラ練　五條大納言爲學抄拾芥記明應五正十六條に踏歌節會有レ之內弁二條內府練アラ子リ也奉行職事頭左中弁宣秀朝臣少納言和長朝臣云々練歩の事遲練事早遲練の事作法故實に見ゆ頭書江次第一ノ四十九丁ウ最濟草子上五丁ウ

(四十一)頭巾　下學集下十丁ナ　絹布門に頭巾トキン或山臥頭服謂ニ之頭巾一也云々惠慈大師傳には杜欽と書たり

(四十二)篠懸　同書十丁ナ　同門に篠懸スヾカケ云々諸本に旅の衣はすゞかけやといへる詞安達原をはじめ多く見ゆ頭書最濟草子上五丁ウ

(四十三)南鐐　下學集下卷十二丁ナ　器財門に南鐐爾雅云銀美者謂ニ之鐐一說文曰白金也鐐刀彫反也云々源平盛衰記十四卷ニ丁ナ　木下馬條に南鐐ト云馬ヲ賜タリケリ極テ白馬也ケレバ南鐐トハ呼ケリ云々

(四十四)屏風　下學集下卷十三丁ナ　器財門に屏風屏退也即退レ風之義也

(四十五)鶴燈臺燭臺　同十三丁ナ　同門に龜鶴臺燈臺也云云

(四十六)行器　同十三丁ウ　同門に外居ホカ井或作ニ行器一也頭書人車記久安五ノ十二ノ十二條に布施七口僧侶各云々餅一外居(白布結レ之)柳一外居(山吹唐綾結レ之)云々同仁平三正二條に舞始參入饗卅前云々綸外居突菓子二合大瓶酒等調送云々江次第六ノ卅六丁ナ

(四十七)御器引入合子　饒器饒州椀　同十三丁ウ　庭訓往來五月九日狀抄中ハ引入合子云々扶翼上卅二丁ナ　職人歌合にもあり合子は椀也ひきれ合子は組椀也

(四十八)鷹秤　竹尺　今世の竹のものさしを鯨尺といへりされど竹にて製れば實は竹尺也下學集下卷十四丁左　器財門に鷹秤鷹猛惡之鳥也生レ子在レ巢其子生長則有ニ食レ親之義一父畏レ之居去ニ自レ巢一尺枝一而養レ子故呼ニ一尺量一鷹秤云傳也云々按竹秤なるべきを借字に鷹秤と書るよりかゝる說は設しにや以呂波字類抄四卷太部に尺タカバカリ竹量也云々員數門

(四十九)泥鎁　下學集下卷十四丁ウ　器財門に泥鎁ヨテ壁塗之具也

(五十)引板鳴子　下學集下十八丁ウ
(五十一)蘆に雁の畫　同下十八丁ウ
(五十二)宿紙薄墨の紙紙屋紙　同下十八丁ウ
(五十三)乳木護摩木白膠木　同下十九丁オ又廿三丁オ
(五十四)竹篦　今俗にシッペイヲクラハセルなどいふシッペイハ竹篦の通音也下學集下卷十九丁オ器財門に竹篦シッヘイ打レ人杖也と見ゆ
(五十五)物相　今下人の食に物相をもて別與る事あり下學集下卷十九丁オ器財門に物相モッサウ香飯分量之器也と見ゆ頭書多門院日記一天文十三ノ九ノ九條
(五十六)欵冬山吹の說仙翁花　下學集下卷廿丁オ同ウ
(五十七)鼈甲に莧の葉を覆へば爲レ龜　下學集下卷廿一丁ウ草木門に胡麻莧ゴマビユ候澗反莧與レ鼈不レ可ニ合食一莧葉裏ニ鼈甲一以レ上覆レ之一夜變爲レ鼈也云々蛙を殺して車前子の葉に裹めば忽に蘇生する類也
(五十八)濃　同下廿四丁オ彩色門に濃繪ダミヱ云々
(五十九)穴賢　同下廿九丁ウ
(六十)勿體なし　同下卅丁ウ
(六十一)如在ない　同下卅丁ウ
(六十二)傍若無人　同下卅丁ウ

(六十三)會下　同下卅丁ウ
(六十四)折角　同下卅一丁オ
(六十五)屓弱　下學集下卷卅一丁ウ　○以呂波字類抄三和部疊字門に屓弱ワウジヤク運歩色葉和部屓弱ワウジヤク又誑著法華經又枉著ワウヂヤク云々節用和部言語門枉弱ワウジヤク徒然慰草七卅二丁ウ古今著聞五五十五丁ウ同十六十七丁オ
(六十六)分野　下學集下卷卅一丁オ言辭門に分野アリサマ有樣義也日本天台宗之讀習也
(六十七)難澁　同下卅三丁ウ
(六十八)反閇禹歩　同下一丁オ
(六十九)竪議　同下五丁オ
(七十)公卿臺器　同下十三丁ウ
(七十一)笏手板　同下十四丁ウ
(七十二)穀類を降らす　同下廿二丁オ　○百練抄四廿丁筆記九十三ノ百八十
(七十三)椹の木　同下廿三丁オ
(七十四)馬酔木　同下廿四丁オ　○志田草子十四丁オ
(七十五)一夜松　同下廿四丁ウ釋書十八廿九丁オ
(七十六)二王　同下廿五丁ウ　○俗說辨四

(七十七)五山ノ寺院　同下廿七丁ウ
(七十八)篠蟹　同下十九丁オ　○釋日本記
(七十九)大音の人　佛に大音響流十方とあり吾妻鏡に足利又太郎が聲一里にきこゆ靜安法師が比良の山にて念佛の聲京都に聞え源平盛衰記十五八丁ウ寺法師法輪院荒土佐鏡鍬が聲卅六丁の外に聞ゆ
(八十)公界　公界とは表向といへる義也三内口決群書類從四百七十二卷廿九丁左に御所是は大臣家以上之家執ニ某主人一之故家僕等稱レ之候公界へ不レ出事候云々と見ゆ
(八十一)白板の天子　趙の劉聰晉の懷帝を執へ傳國璽を奪し後北方の人東晉を指て司馬家白板天子といへり本朝南山より神器歸らざる間は白板の天子といふべし制度通五卷を考へし
(八十二)扶持役料　制度通五卷廿四丁オ俸祿條
(八十三)二千石　石高　制度通五廿七丁ウ
(八十四)笏　同五六丁ウ
(八十五)事力　同五卅一丁オ俸祿條に事力ト云者ハカロキ者也太宰帥ニ二十人諸國ノ守ヨリ以外コレヲ給コシナアリ軍防令ニ見ユ頭書政事要略五十九ニ事力ノ條アリ
(八十六)劉符　制度通九十七丁オ意見十二事十五丁オ十六丁オ

(八十七)勝て冑の緒をしめる　俗言に勝て兜の緒を締ろといへり說苑廿卷十丁左反質篇に傳曰周公位尊愈卑勝レ敵愈懼家富愈儉云々頭書甲陽九上卅一丁オ
(八十八)仁山智水　仁山智水は論語を出處にて其委きゆゑよしは說苑十七卷十七丁ウ雜言篇に見ゆ
(八十九)散官品位流内流外　品ト云コト曹魏ニ始リ散官ノ唐ニオコル制度通四卷四丁オウ五丁オ
(九十)ありかず記數　歌にありかずとよめるは今いふカズトリの事也名物六帖器財三醫ト算候部に記數カズトリ僧祇律少年比丘不レ解ニ時事一日月黑白應レ用ニ算子記數等一云々江次第などに算指ありカズサシ頭書算豆カズトリノアヅキ元亨釋書十ノ廿九丁オ
(九十一)拍子木　柝時の大皷　名物六帖器財三十九丁オ十八丁ウ唐書百五十三三丁擊柝衛レ之同四丁ウ時皷○易廿三五丁重門擊柝以待ニ暴客一
(九十二)京童　新猿樂記の類すべて世の評判する者を京童がしかく〳〵いへりなどいへり今世にては若い者といふほどの事也盛衰記十六卷廿一丁オ遷都の條に此御所ヲバ童部ハ樓御所トゾ申ケルとあるは京童にも

かぎらずたゝ童部とのみもいへり

（九十三）屋形　源平盛衰記廿二卷十七丁ウ　大場早馬立事條に上總介弘經云々屋形ニ歸テ云ヒケルハ此佐殿ハ一定日本ノ大將ニ成リ給フベシ云々曾我物語に井手の屋形有

（九十四）定木粘板（ジヤウギノリイタモノクヒイタ）　裁板　名物六帖器財箋三卅丁　界枋（ケヤウギ）同卅一丁ウ　粘板ノリイタ裁板（モノタチイタ）同卅三丁ウ　木尺（キノケヤウギ）

（九十五）花瓶（ハナイケ）　同三卅二丁ウ卅一丁ウ

（九十六）錢幕（ゼニノナメ）　史記百廿三の卷　大宛列傳安息國の條に以レ銀爲レ錢錢如二其王面一王死輒更レ錢效（ナラフ）二王面一焉云々注に索隱曰漢書云文獨爲二王面一幕爲二夫人面一荷悅云幕音漫無レ文面也張晏云錢之文面作二人乘レ馬錢之幕作二人面形一韋昭云幕錢背也包愷音慢云々漢書九十六の卷西域傳上罽賓國條に以二金銀一爲レ錢文爲二騎馬一幕爲二人面一云々注に張晏曰錢文面作二騎馬形一漫面作二人面目一也如淳曰幕音漫師古曰幕即漫耳無レ勞レ借レ音今所レ呼幕皮者亦謂二其平而無一レ文也云々また烏弋山離國條に其錢獨文爲二人頭一幕爲二騎馬一云々また安息國條に亦以レ銀爲レ錢文獨爲二王面一幕爲二夫人面一王死輒更鑄レ錢云々大月氏國條にも民俗錢貨與二安息一同とあり　品字箋　佐語第四十一に懦語幕字の注に幕又音漫錢背也今俗擲（ナゲテ）レ錢爲二博戲（バクチ）一以二其陰（ナメ）一爲レ幕（マン）安息國以レ銀爲レ錢錢如二其王面一錢之幕爲二夫人面一漢西域傳劉賓國錢文爲二騎馬一幕爲二人面一師古曰幕即幔（マンハ）也云々字彙に幕又莫半切音漫錢背也安息國以レ銀爲レ錢錢如二其王面一錢之幕爲二夫人面一云々五音集韻に幕又莫半切音縵平而無一レ文曰レ幕前漢西域傳劉賓國錢爲二騎馬一幕爲二人面一註韋昭曰幕錢背也云々古今韻會舉要廿一の卷十五輪の部に幔說文幕也从レ巾曼聲廣韻帷幔或作レ幕又背也前漢劉賓國錢文幕爲二人面一云々　小補廿一の卷去聲輪部獨音にも見ゆ與清按に幕幔通じて錢背をいふ共に輸去聲音漫也今俗これを奈女（ナメ）とよび擲（カタ）錢博戲を奈女加多（ナメカタ）といへり奈女はなめらかにて文のなきよしの名乎而無レ文曰レ幕說にかなへり加多（カタチ）は形也文字などの形あればなるべしまた今の寛永四文錢の背に波文（ナミノカタ）あれば奈美（ナミ）を訛て奈女（ナメ）といふともすべけれどさにはあらず四文錢背の波（ウラ）は泉志十三の卷に太平百錢の圖を舉て云右水波紋錢願烜曰太平四文錢背有二水波紋一者三種並徑一寸重六銖文曰二太平百錢一大體類二前條太平四文一但製作徽爲二瓌壯一而背有二波紋一耳今世往々有レ之莫レ知二其始一舊

譜曰水波紋錢大篆小篆書三種云々三才圖會　珍寶部二の卷に天下太平錢二品の圖を擧て云李孝美曰此二錢大小不レ等面文皆曰天下太平背文並隱起大者徑寸重六銖爲レ持レ挺人傍有二躍龍一之狀一而平地作二水文一小者徑八分重五銖爲二五男二女戲弄之象一而平地作二毬路文一疑亦厭勝之流也云々などの說に據て作れる物なるべし錢面に水波（ナミ）あるは萬國錢也泉志十三の卷に萬國錢余按此錢徑寸六分重十三銖面文平地作二水文一一字類二梵書一不レ可レ識或云日字背文爲二星官月兎雲鶴龜形一慶善郎中守二儀眞一得二之郡圖士中一云々三才圖會　珍寶部二の卷に萬國錢此錢徑寸六分重十三銖面文平地作二水文一一字類二梵書一不レ可レ識或云日字背文爲二星官月兎雲鶴龜形一と見えたるこれ也頗聚名物考　調度部十五　錢の幔幕面文（ナメカタ）の條に常陸國郡名行方を引たれど同語別意也行方のナメは行列の義を取てよめるにて駒（コマ）なめてなどのなめにおなじ郡の名義は常陸風土記に見ゆ

（九十七）西洋人利瑪竇（リマア）が　明史　三百廿六の卷列傳二百十四外國傳六　意大里亞國の條に意大里亞居二大西洋中一自レ古不レ通二中國一萬曆時其國人利瑪竇至二京師一爲二萬國全圖一言天下有二五大洲一第一曰二亞細亞洲一中凡百餘國而中國居二其一一第二曰二歐羅巴洲一中凡七十餘國而意大里亞居二其一一第三曰二利未亞洲一亦百餘國第四曰二亞墨利加洲一地更大以二境土相連一分爲二南北二洲一最後得二墨瓦臘泥加洲一爲二第五一而域中大地盡矣其說荒渺莫レ考然其國人充二斥中土一則其地固有レ之不レ可レ誣也大都歐羅巴諸國悉奉二天主耶蘇教一而耶蘇生二於如德亞一其始生在二漢哀帝元壽二年庚申一閱二一千五百八十一年一至二萬曆九年一利瑪竇始汎レ海九萬里抵二廣州之香山澳一其教遂沾二染中土一至二二十九年一入二京師一中官馬堂以二其方物一進獻自稱二大西洋人一禮部言會典止有二西洋瑣里國一無二大西洋一其眞僞不レ可レ知又寄居二十年方行二進貢一則與二遠方慕レ義特來獻琛者一不レ同且其所レ貢天主及天主母圖既屬二不經一而所レ攜又有二神仙骨諸物一夫既稱二神仙一自能飛昇安得レ有レ骨則唐（カラ）憲所謂凶穢之餘不レ宜レ入二宮禁一者也況此等方物未レ經二臣部譯驗一徑行二進獻一則內臣混進之非與二臣等溺職之罪一俱有二不レ容レ辭者一及二奉レ旨送レ部部乃不レ赴レ部審譯而私寓二僧舍一臣等不レ知二其何意一但諸番朝貢例有二回賜一其使臣必有二宴賞一乞給二賜冠帶一還レ國勿レ潛二居兩京一與二中

人一交往々別生二事端一不レ報八月又言臣等議令下利瑪竇還二國候一命五月未レ賜二倫音一毋レ怪乎遠人之罹病而思レ歸也察二其情詞懇切一眞有レ不レ願尚方錫予惟欲二山棲野宿之意一譬之禽鹿久羈愈思二長林豐草一人情固然乞速爲頒賜遣二赴江西諸處一聽二其深山遂谷寄レ跡怡下老亦不レ報已而帝嘉二其遠來一假レ館授レ粲給賜優厚公卿以下重二其人一咸與晉接瑪竇安レ之遂留居不レ去以二三十八年四月一卒二於京一賜二葬西郭外一其年十一月朔日食曆官推レ算多謬朝議將二修改一明年五官正周子愚言大西洋歸化人龐迪峨熊三拔等深明二曆法一其所レ攜曆書有下中國載籍所レ未レ及者上當令二譯生一以資二採擇一禮部侍郎翁正春等因請倣下洪武初設二回々曆科一之例上令二迪我等一同測驗從レ之自瑪竇入二中國一後其徒來益衆有二王豐肅者一居二南京一專以二天主教一惑レ衆士大夫暨里巷小民間爲所レ誘禮部郎中徐如珂惡レ之其徒又自誇二風土人物遠勝一中華一如珂乃召二兩人一授以二筆劄一令下各書二所一記憶一悉舛謬不二相合一乃倡議謫斥四十四年與二侍郎沈潅給事中晏文輝等一合疏斥二其邪說惑レ衆且疑下其爲二佛郎機一假託乞二急行一驅逐一禮科給事中余懋孳亦言自二利瑪竇東來一而中國復有二天主之教一乃

留レ都王豐肅陽瑪諾等煽二惑群衆一不レ下二萬人一朔望朝拜動以レ千計夫通番左道並有レ禁今公然夜聚曉散一如二白蓮無爲諸教一且往二來壕鏡一與二澳中諸番一通レ謀而所司不二爲遣斥一國家禁令安在帝納二其言一至二十二月一令二豐肅及迪我等一俱遣二赴廣東一聽レ還二本國一命下久之遷延不レ行所司亦不二爲督發一四十六年四月迪我等奏臣與二先臣利瑪竇等十餘人一涉レ海九萬里觀二光上國一叨食二大官一十有七年近南北參二劾議一行二屏仆一竊念臣等焚修學道尊二奉天主一豈有二邪謀一敢墮二惡業一惟聖明垂レ憐候二風便一還二國若寄二居海嶼一愈滋猜疑一乞并二南都諸處陪臣一一體寬假不レ報乃快々而去豐肅等尋變二姓名一復入二南京一行レ教如レ故朝士莫二能察一也其國善製二磁視一西洋一更巨既傳入二內地一華人多效レ之而不レ能レ用天啓崇禎間東北用レ兵數召二澳中人一入レ都令二將士學習一其人亦爲盡レ力崇禎時曆法益疏舛禮部尚書徐光啓請下令二其徒羅雅谷湯若望等一以二其國新法一相參較開レ局纂修上報可久之書成即以二崇禎元年戊辰一爲二曆元一名レ之曰二崇禎曆一書雖レ未二頒行一其法視二大統曆一爲レ密識者有レ取焉其國人東來者大都聰明特達之士意專行レ教不レ求二祿利一其所レ著書多二華人所一

レ未レ道故一時好レ異者咸尚レ之而士大夫如二徐光啓李之藻輩一首好二其說一且爲潤二色其文詞一故其教驟興時著二聲中土一者更有二龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人一華民方濟如略及熊三拔皆意大里亞國人玉函熱而瑪尼國人龐迪峨依西把尼亞國人陽瑪諾波而都瓦爾國人皆歐羅巴洲之國也其所レ言風俗物產多レ夸且有二曆方外紀諸書在一不二具述一（以上全文）按同書（廿五の卷）天文志一に萬曆中西洋人利瑪竇制二渾儀天球地球等器一仁和李之藻撰二渾天儀說一發明製造施用之法文多不レ載云々（また廿一の卷）曆志一に萬曆三十八年監推十一月壬寅朔日食分秒及應圓之候曆方郎范守已疏駁二其誤一禮官因請博求下知二曆學一者上令與二監官一晝夜推測庶二幾曆法靡下差於レ是五官正周子愚言大西洋歸化遠臣龐迪峨熊三拔等攜二有彼國曆法一多二中國典籍所レ未レ備者一乞視下洪武中譯二西域曆法一例上取二知レ曆儒臣一率同二監官一將二諸書一盡譯以補二典籍之缺一先レ是大西洋人利瑪竇進二貢土物一而迪峨三拔及龍華民鄧玉函湯若望等先後至俱精二究天文曆法一礼部因奏精二通曆法一如二雲路守已一爲レ時所レ推請改授二京卿一共理二曆事一翰林院撿討徐光啓南京工部員外郎李之藻亦皆精二心曆理一可下與二迪峨三拔等一同

譯（甲）西洋法上俾二雲路等參訂修改一然曆法踈密莫レ顯二於交食一欲レ議二修曆一必重二測驗一乞敕二所司一修二治儀器一以レ便從レ事疏入留レ中未レ幾雲路之藻皆召至レ京參二預曆事一雲路據二其所下學之藻則以二西法一爲レ宗云々又（二百五十一の卷列傳一百三十九）徐光啓傳に徐光啓字子先上海人萬曆二十五年舉二鄉試第一一又七年成進士由庶吉士曆贊善從二西洋人利瑪竇一學二天文曆算火器一盡二其術一云々崇禎元年云々光啓言臺官測候本二郭守敬一元時嘗當レ食不レ食守敬且爾無レ怪二臺官之失占一臣聞曆久必差宜二及レ時修正一帝從二其言一詔二西洋人龍華民鄧玉函羅雅谷等一推二算曆法一光啓爲二監督一云々なども見ゆ○廿二史箚記（廿四の卷）天主教の條に意大理（イタリヤ）亞國在二大西洋中一萬歷中其國人利瑪竇至二京師一爲二萬國全圖一言天下有二大洲五一第一曰二亞細亞洲一凡百餘國而中國居二其一一第二曰二歐羅巴洲一凡七十餘國而意大理亞居二其一一第三曰二利未亞洲一亦百餘國第四曰二亞墨利加洲一第五曰二墨瓦蠟泥洲一而域中大地盡矣大抵歐羅巴（オロシヤ）諸國悉奉二天主教一天主耶穌生二於如德亞一即古大秦國也其國在二亞細亞洲之中一西行教二于歐羅巴一其始生在二漢哀帝元壽二年庚申一閱二一千五百八十一年一至二萬曆九

年利瑪竇始泛レ海九萬里抵二廣州之香山澳一其敎漸行二二十九年入二京師一以二方物一獻幷貢二天主及天主母圖一禮部以下會典不レ載二大西洋名目一駁レ之帝嘉二其遠來一假レ館授レ餐公卿以下重二其人咸與交接利瑪竇安レ之遂留居不レ去三十八年辛其年以二曆官推算日食多謬一五官正周子愚言大西洋人龐迪峨熊三拔等深明二曆法一其書有二中國所レ不レ及者一當レ令二採擇一遂令二迪峨等一同測驗自二利瑪竇來一後其徒來者益衆有二王豐肅陽瑪諾等一居二南京一以二其敎一倡行官民多從レ之禮部郎中徐如珂惡レ之奏議逐回四十六年迪我等奏臣與二利瑪竇等一泛レ海九萬里覲二光上國一臣等焚修行道尊二奉天主一豈有二邪謀一敢墮二惡業一乞賜二寬假一帝亦不レ報而居二中國一如レ故崇禎時曆法益舛禮部尚書徐光啓請令二其徒羅雅谷湯若望等一以二其國新法一相參較書成即以二崇禎元年戊辰一爲二曆元一其法視二大統曆一爲レ審焉其國人東來者大都聰明特達之士意專二行敎一不レ求二祿利一所レ著書多二華人所一未レ道故一時好レ異者咸尚レ之其徒又有二龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人一皆歐羅巴國之人也統而論レ之天下大敎四孔敎佛敎回々敎天主敎也皆生二于亞細亞洲一而佛敎最廣亞細亞洲內如二前後藏準噶爾喀爾喀蒙古等部一悉奉二佛敎一中國亦佛敎盛行亞細亞洲外如二西洋之古里國錫蘭國榜葛剌國沼納朴兒國南洋之白葛達國占城國賓童龍國暹羅國眞臘國東洋之日本國琉球國皆奉二佛敎一（倶見二明史外國傳一）又僧迦剌國馬八兒國俱有二佛鉢舍利一（見二元史亦黑迷失傳一）其餘海外諸番則皆奉二天主敎一矣回回敎亞細亞洲內惟烏什葉爾羌喀什噶爾和闐郭酣巴達克山控噶爾克食米爾退木爾沙等國奉レ之（見二椎圖氏異域瑣談一）外洋則祖法兒國阿丹國忽魯謨斯諸國奉レ之（亦見二明史外國傳一）孔敎僅中國之地南至二交趾一東至二琉球日本朝鮮一而已是佛敎所レ及最廣天主敎次レ之孔敎回回敎又次レ之孔子集大成立二人極一凡三綱五常之道無レ不二該備一乃其敎反不レ如二佛敎天主敎所一及之廣一蓋精者惟中州清淑之區始能行習粗者則殊俗異性皆得而範二圍之一故敎之所レ被允遠也試觀二古帝王所一制禮樂刑政一亦只就二倫常大端一導レ之之至二于儒者一所レ言身心性命之學原不レ以二概責之庸衆一然則天道之包舉無レ遺固在二人々共見之粗迹一而不二必深求一也哉按趙翼劄記の說大概明史におなじくそれに四大敎の事をそへたる也淸人張潮が昭代叢書廿七に泰西の利類思安文思南懷仁が西方要記を收てその卷首の張潮が小引に夫泰西之說誠

勝二于諸敎一惜乎以二天主一爲レ言則其辭不二雅訓一流二于荒誕一搢紳先生難レ言レ之苟能置而不レ談則去二吾儒一不レ遠矣ともいへり（猶園四の卷）仙幻部利瑪竇傳に利瑪竇大西國人遊二於中華一十五年矣衣服語言飮食禮樂無レ不二中華一但不レ娶耳彼國無レ佛亦不レ通二儒敎一第奉二天主一爲レ尊其像是一婦人手中所レ抱者即天主也婦人像若二西王母一而繪彩之色絢爛非二常望一若二七寶莊嚴者一然既以二其像一進聖母張璧凜々便敕收二藏於庫一其所レ進自鳴琴自鳴鐘皆按（オシヲ）刻漏一而鳴若二吾中華有二自鳴更鼓之屬一天子甚異レ之賜賚無レ數日給二殽錢一因養二之京師一瑪竇他所レ製自鳴鼓吹未二進上一者尤奇一撥二關捩一衆樂皆鳴今京師市中有二製成出賣者一所レ携經籍皆梵字其印裝之巧紙筆之精中華所レ不レ及也瑪竇慧性絕倫雖二數萬億言一一覽而得人謂其胸有二成案一故能然據云學二識字一如レ造レ屋然疑即吾儒以レ一貫レ萬之義矣往嘗刻二廣輿地圖於金陵一用二五色一以別二五方一中華幅員大如二彈丸黑子一庚戌年夏中レ疫臥レ病服レ參而死始知其無二他道術一是外夷中一異人也按猶園十六卷明吳會士人錢希言が撰にて萬曆四十一年癸丑冬の自序あり○谷響續集六の卷廿七丁右に客問前集有二西僧剌瑪竇名一携二

自鳴鐘一來者爲二釋氏一不答不レ然耶蘇會者也謝氏雜組云西南海外諸蕃有二天主國一更在二佛國之西一其人通二文理一儒雅與二中國一無レ別有二剌瑪竇者一自二其國一來經二佛國一而東四年方至二廣東界一其敎宗二奉天主一亦猶二儒之孔子釋之釋迦一也其書有二天主實義一往々與二儒敎一互相發而於二佛老一切虛無若空之說一皆深詆レ之是亦逃レ楊之類耳剌瑪竇常言彼佛敎者竊二吾天主之敎一而加以二輪廻報應之說一以惑レ世者也吾敎一無レ所レ事只是欲二人爲一善而已善則登二天堂一惡則墮二地獄一永無二懺度一永無二輪廻一亦不レ須二面壁苦行離レ人出レ家日用所レ行莫レ非レ修レ善也余甚喜二其說一爲レ近二於儒一而勸レ世較爲二親切一不レ似二釋氏動以一恍惚支離之語一愚俗也其天主像乃一女身形狀甚異若二古所レ稱人首龍身者一與レ人言恂々有レ禮詞辨扣レ之不レ竭異域中亦可レ謂レ有レ人也已後竟卒二於京師一其徒曰二龐迪峨一○謝翁記二剌瑪竇之爲一人詳則詳矣然亦足レ見二此翁識見之短一於佛敎一也按に前集有二西僧剌瑪竇名一とは谷響集一の卷九丁左自鳴鐘の條を指す谷響集は沙門運敞の隨筆にて前編續編二集ありこゝに五雜俎の文を引たれど今流布の印本には耶蘇の事を憚て除たり五雜俎二

の卷四十丁左 五の卷廿五丁右 などに瑠璃寶自鳴鐘の事ある而已○羅山文集五十六の卷排耶蘇文に慶長丙午六月十有五日道春及信澄依ニ頗遊(ガナカルチニ)価一不レ意到ニ耶蘇會者不于氏許一不于令レ守長(不于侍者)招ニ三人一入ニ其室一彼徒滿レ席坐定寒温已而後春問云々春問曰利瑪竇(耶蘇會者)天地鬼神及人靈魂有レ始無レ終吾不レ信焉有レ始則有レ終無レ始無レ終可也有レ始無レ終不可也然又殊有ニ可レ證者一乎于不レ能レ答云々

(九十八)鼠祠　源平盛衰記十の卷七丁左 賴豪祈ニ出王子一事條に白川院御位ノ時〔后腹ノ皇子渡セ給ハザリケレバ主上御心ナク思召貴僧ト聞召ケレバ三井寺ノ實相房ノ賴豪阿闍梨ヲ召シテ汝皇子ヲ祈出シテンヤ効驗アラバ勸賞ハ乞ニヨルベシト被ニ仰含一云々月滿御坐シテ承保元年十二月十六日最安ラカニ皇子御誕生アリ主上斜ナラズ御感有テ賴豪ヲ召テ効驗神妙々々勸賞何事ヲカ可ニ申請一ト御氣色アリ賴豪ハ園城寺ニ戒壇ヲ立寺門年來ノ遂ニ本意一トゾ奏シケル云々種種申上ケレ共遂ニ御許ナカリケレバ賴豪大惡心ヲ起シ眼ノ色替リ今ハ思死ントテ雙眼ヨリ涙ヲハラ〳〵トコボシ御前ヲ立樣ニ賴豪思死ニ死失ナバ皇子ハ我進タル物ナレバ即可レ奉ニ取返一トテ三井寺ヘ罷歸ル云々主上ユヽシク歎思召レケレバ當時ノ關白太政大臣師實卿御痛敷思ヒ進テ暫ク賴豪ガ怨ヲ被レ宥程戒壇ヲ可レ被レ許歟ト被レ申ケレバ〔叡慮モ思食煩セ給ケルニ御夢想アリ云々又十一丁左 良眞祈ニ出王子一事條に西京座主大僧正良眞其時ハ圓融坊ノ大僧都ニテ〔山門ニハ無ニ止事一貴人ニテ御坐ケル〕ヲ被レ召山門ノ叡信不レ淺衆徒ノ憤黨テ依ニ思召一而寺門ノ戒壇ヲ免サレヌ故賴豪成レ怨奉レ失ニ皇子一早ク山門ニ繼體ノ君ヲ祈出シ奉ナンヤト被ニ仰下一ケリ僧都被レ申ケレハ云々本山ニ還上テ山王三聖王子眷屬滿山三寶護法聖衆ニ被ニ祈申一シカバ中宮賢子承曆二年ノ冬ノ比ヨリタベナラヌ御事也ケルガ同三年七月九日皇子御誕生アリ〕云々堀河院ト申ハ是也云々又十二丁右 賴豪成レ鼠事條に賴豪ハカラキ骨ヲ碎テ〔皇子ヲバ祈出シ進セタレドモ戒壇ハ御免ナシ大惡心ヲ起ノ旱死シケルゾ無慙ナル去程ニ山門又皇子ヲ奉ニ祈出一御位ニ即セ給タリケレバ賴豪ガ死靈モイトヾ成ニ怨靈一山門ト云處ガアレバコソ我ガ寺ニ戒壇ヲバ免サレヲサレバ山門ノ佛法ヲ亡サント思テ大鼠ト成谷々坊々充滿テ聖敎ヲゾ

カブリ食ケル是ハ賴豪ガ怨靈也トテ上下是彼ニテ打殺蹈殺ケレ共彌鼠多出來テ夥ナンドハ云計ナシ此事只事ニ非ズ可レ宥ニ怨靈一トテ鼠ノ寶倉ヲ造テ神ト奉レ祝サテコソ鼠モ鎭ケレ圓宗ノ敎ヲ學ノ可ニ成佛一賴豪ガ由ナキ戒壇ダテユヘニ〕鼠トナルコソヲカシケレ云々長門本平家物語六の卷に后腹の皇子はもともあらまほし事なり白河院御在位の時云々〔さて賴豪は山門のさゝへにてこそ我宿願は遂ざりしかとて大なる鼠となりて山の聖敎をくひける間この鼠を神といはふべしとせんぎありければ社を作りて祝ひて後かの鼠靜りにけり〕東坂本にねずみのほこらとて當時あるは則是也今も山には大なる鼠をばらいがうとぞ申ける賴豪ゆゑなきまうしふに引れて多年の行ごふをすて畜趣の報をぞかんじけるかなしかりける事なりつゝしむべし〳〵云々太平記十五の卷園城寺戒壇事條に白河院ノ御宇ニ江師匡房ノ兄ニ三井寺ノ賴豪僧都トテ〔貴キ人有ケルヲ云々其後賴豪ガ亡靈忽ニ鐵ノ牙石ノ身ナル八萬四千ノ鼠ト成テ比叡山ニ登リ佛像經卷ヲ嚙破ケル間是ヲ防ニ無レ術シテ賴豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ其怨念ヲ鎭ム〕鼠ノ禿倉是ナリ云云西域記十二の卷十八丁右 瞿薩旦那(クサタナ)國の條に王城西百五六十里大沙磧正路中有ニ堆阜一並鼠壤墳(ノヅチクシブンカ)也〔聞ニ之土俗一曰此沙磧中鼠大如レ蝟其毛則金銀異レ色爲ニ其群之首長一每出レ穴遊止則群鼠爲從昔者匈奴率ニ數十萬衆一寇ニ掠邊城一至ニ鼠墳側一屯レ軍時瞿薩旦那王率ニ數萬兵一恐ニ力不一レ敵素知ニ磧中鼠一奇而未レ神也洎ニ乎寇至一無レ所レ求レ救君臣震恐莫レ知ニ國計一苟復設レ祭焚レ香請レ鼠冀其有レ靈少加ニ軍力一其夜瞿薩旦那王夢見大鼠曰敬欲ニ相助一願早治兵旦日合戰必當ニ克勝一瞿薩旦那王知レ有ニ靈祐一遂整ニ戎馬甲(ヨロヒ)一令ニ將士一未明而行長驅掩襲匈奴聞之而莫レ不レ懼焉方欲ニ駕乘被一鎧而諸馬鞍人服弓弦甲縫凡厥帶糸鼠皆嚙斷兵寇既臨面縛受レ戮於是殺ニ其壯一虜ニ其兵一匈奴震懾以爲神靈所祐也瞿薩旦那王感ニ鼠厚恩一建レ祠設レ祭奕世尊敬特深ニ珍異一故上自ニ君王一下至ニ黎庶一咸修ニ禮祭一以求ニ福祐一行ニ次其穴一下レ乘而趍拜以致レ敬祭以祈レ福或衣服弓矢或香華肴膳亦既輸レ誠多蒙ニ福利一〕若無ニ享祭一則逢ニ災變一云云按に鼠のために祠を建たるは本朝西域同日の談なれどその事實を論ずれば天地懸隔せりまた鼠の弓弦を齧斷(クヒタチ)たるは吾妻鏡一の卷廿丁右に俟野五郎景久相ニ具

駿河國目代橘遠茂軍勢ニ爲レ襲ニ武田一條等源氏一赴ニ甲斐國一而昨日及ニ昏黑一之間宿ニ富士北麓一之處景久幷郎從所レ帶百餘張弓弦爲レ鼠被ニ食切一畢とあるにおなじ○舊本今昔物語六の卷不空三藏誦ニ仁王咒一現レ驗語第九

(九十九)木石　撰集抄七の卷　伊勢のあまの條に人は木石にあらざればこのめは發心するに侍り云々舊本今昔物語廿六の卷陸奥國府官大夫介子語第五に木石心ヲ發シテ馬ニ鞍置テ曳將來ッ云々源平盛衰記卅四の卷木曾内裏守護の條に木曾モ流石(サスガ)木石ナラヂバ理(コトワリ)ト思テ云々長門本平家物語八の卷山門心變條實語教の翻案に師にあふといへどもおそれず弟子に逢といへどもはぢず師君には孝なし木石にことならず云々漢書六十二の卷　司馬遷傳報ニ任安一書に身非ニ木石一獨與ニ法吏一爲レ伍云々文選六臣注本四十一の卷にも此文を載たり晉書夏統傳に此呉兒是木人石心也云々遊仙窟抄本五の卷廿四丁右に心非ニ木石一豈忘ニ深恩一云々白氏長慶集○漢書傳十二六丁右贊に周昌木强人也注に顏師古曰言其强質如ニ木石一然云々○文選鮑昭行路難に心非ニ木石一豈無レ感○長門本平家物語四卷卅七丁ウ　康頼二首歌條にいはんや大政入道も木石にあらざればいかでか此歌をあはれと思はざるべき云々頭書源氏蜻蛉十八丁オ同東屋にいは木ならねは(ヒグレニ)おもほしし(心くるしゝや思ひけん)る　伊物にいは木にしあらねは

(百)武藏鐙　源平盛衰記廿一卷十七丁ウ　小坪合戰條に畠山重忠云々泥葦毛ノ馬ニ中ハ金覆輪耳ハ白覆輪ノ鞍ヲ置燃立ッバカリノ厚總ノ鞦カケ武藏鐙ニ重籐ノ眞中取テ歩セ出ヅ云々○庭訓往來○伊勢物語

松屋筆記卷之九十二

(一)押領使　源平盛衰記廿三卷七丁ウ　貞盛將門合戰條に藤原秀鄕ハ從四位下ニ叙シテ武藏下野兩國ノ押領使ヲ給リ云々同卅六卷二丁ウ　一谷城搆條に出雲國ニハ福田押領使云々同卅九卷八丁ウ　重衡請ニ法然房一條に此法然上人ト申ハ本美作國久米南條稻岡庄ノ人也父ハ押領使漁氏母ハ秦氏云々頭書三代實錄元慶二七十條　資石通書十三　扶桑略記廿二卅丁ウ　朝野群載廿三雜言集覽ニ引　四宮記臨時一廿九丁ウ　北山抄十一卅一丁ウ　貞丈雜記四　吾妻鏡六四十九丁オ　又五十三丁オ　東寺文書抄三廿三丁ウ

(二)立板に水を流す　俗語に立板に水を流すがごとき辨舌といへり源平盛衰記廿三卷十三丁ウ平氏清見關ニ下ル條に富士川ノ西ノハタ迄責寄タリ此河ノ有樣水上ハ信濃ヨリ流ルトカヤ此ヨリ南ヘ落タリ渚ハ大海ヘ二里バカリ有ト云河ノ廣サ或ハ一町バカリ或ハ二町バカリ水濁テ浪高シ流ノ早事立板ニ水ヲ懸ルニ似タリマシテ雨降水出タラン時ハ向ベキニ非ズ云々

(三)鎭守　源平盛衰記廿四卷五丁ウ　都返僉議條に王城鎭守ノ社々ハ四方ニ光ヲ和ゲ云々鎭守ハ其地ニ鎭座シテ守護スル義也頭書續志五ノ八丁オ鎭守府　吾妻鏡六ノ六丁ウ　湘山星移集廿五丁ウ鄕ノ惣鎭守云々

(四)厩別當　將門が伴類に御厩別當多治經明あり古は國々に厩別當ありし也齋藤別當もさなるべし源平盛衰記廿四卷南都合戰條に平正盛が事をいひて修理大夫顯季卿ノ播磨守ニテ國務ノ時ハ厩ノ別當ニ被召仕一キとあり小山田別當などもこの類なるべし頭書吾妻鏡二ノ十七丁ウ　下總國御厩別當所可ニ早免ニ除貢馬一事云々同六ノ一丁ウ市河別當行房　今川大双紙下十六丁ウ　類聚名物考稱號部二

(五)蜘のいに荒たる駒をつなぐとも幷二道かけたる人　萩原宗固隨筆に「ある時はありのすさびにゝくかりしなくてそ人は戀しかりける」「蜘のいに荒たる駒はつなくとも二道かけし人はたのまし」此二首は古くより世にいひ傳へたる歌なれど出處もしれず集にはいらぬ歌也あるときはありのすさびの歌源氏物語にもいりその外にもあまた入たり云々與清曰ありのすさびの歌は源氏物語桐壺(湖月抄九丁左)になくてそとはかゝるをりにやと見えたり云々といへる引歌に伊行朝臣勘とて奥入(群書類從本一丁右)に載たり古今六帖(第五帖)物がたりの歌に「あるときはありのすさびにかたらはて戀しき物と別れてそしる」といへるに下句はかはりた

れど歌意は全く同じされご桐壺になくてぞといふが肝要の所に引たれば此歌とは別にてぞあるらん又蜘のいに荒たる駒は云々の歌は跡云草虫部蜘條によみ人しらず「くものいにあれたる駒はつなくとも二道かくる人はたのまし」藻鹽草十二獸部馬條にあれたる駒「くものいに荒たるこまはつなくとも」といへりあれたるとは荒き也云々築嶋草子に「春の野にぬしも見えさるはなれ駒くものいにてもつなきとめはや」蜘のいは蜘の糸にて万葉集五貧窮問答歌には許之伎爾波久毛能須可伎弖とよめり源順集天地の歌冬に「いつこともいさやしら波立ぬれはしたなる草にかけるくものい」これは初終に「い」もじを置てよみたるなれば蜘乃伊と書べき證也また賀茂保憲女集群書類従二百七十四巻廿一丁右冬に「なみならはよも山ことにふきかへす蜘のいほりそいかゝしつらん」和泉式部集二群書類従本二百七十五上巻廿七丁右歌に「軒はたに見えすすかけるわかやとは蜘のいたくそあれはてにける」などあるもあかしとすべし又「さゝかにのいかに」後拾遺雑二「さゝかにのいつく」後拾遺戀四清原元輔「さゝかにのいかさまに」金葉戀上大江公資などよみかけたるも見ゆ此外蜘のい蜘のいとすぢなどよめる歌は曾根好忠集齋宮女御集小大君集赤染衛門集後撰集拾遺集後拾遺集金葉集次郎百首夫木抄秋一同四雜九の類をはじめ所見枚擧すべくもなし二道かくるは狹衣四上巻四十五丁左狹衣大將歌に「ひとかたになりなはさてもやむへきをなと二道に思ひなやます」增基法師が庵主群書類従三百三巻五十一丁左に「君は思ふ都はこひし人しれすふた道かけてなけくころかな」源氏物語若菜下巻湖月抄本五十丁左にいとよくふたすぢに心づかひはしたまひけれどもとも見ゆ同夕貌五十二丁左源氏歌に「過にしもけふわかるゝも二道に行かたしらぬ秋のくれかな」孟津抄に齋宮女御集に「過にしも今行するゑも二道になへて別れのなき世なりせは」此歌同心也物語歌古歌に相似たる例多レ之或又古歌をとりていまよみたるやうにかける事も有伊勢物語などにも見えたり云云

（六）いくぢなし　承久物語上巻廿一丁右に知康といふいくぢなしが云々今俗にもいふ詞也「イキヂガナイ」「イヂガナイ」「イヂガアル」などいふも同詞にや

（七）ふくら　同書上巻廿一丁左にふくらといふ詞あり眞中

の義にいへり今俗も「ドウブクラ」などいふめり

（八）きら　きらをみがくと云詞盛衰記に見ゆ承久物語上十八丁オに時のきら後のおぼえゆゝしかりけるありさま也頭書甲陽四ノ八丁ウ

（九）大物射追物射　承久物語中四十六丁ウに大物射とあり大なる物を射るにはおほかたにねらひて射ればそれになすらへてねらはずして放つを大物射といふ也盛衰記には追物射と書たり

（十）御事尊　尊は御事の義也承久物語下十五丁ウに御事を誄し奉るべきよし云々太平記廿九廿丁同卅三廿七丁オ今昔十六巻十八語に尊二處十九巻三語に尊同巻九語に尊同巻卅五語に尊達廿巻八語に此尊は同巻卅六語に尊ハ物故コソ知タリケル云々また抑尊可レ成キ官物其員有リ云々廿五巻三語に三處廿八巻卅語烏帽子折六丁ウ元服曾我七丁ウ空穂菊宴上五丁ウに昔おほん事を思ひそめ云々おほん事は御事也御主（ヌシ）などいふ同じ義也御僧（ソウ）の御も同じ

（十一）似セ繪　承久物語下廿二丁ウ園大暦十二下九丁オ小世繼十丁ウ

（十二）番匠　同下廿六丁ウ

（十三）手具足（テグソク）　同下廿七丁オ

（十四）小間物見世　清水物語上十五丁ウにこま物見せとてたな一ッに色々さま〴〵の物を取あつめておき人の用次第にうるものゝ候云々

（十五）牛は牛づれ　清水物語上十八丁ウ甲陽軍鑑三三丁

（十六）叙山の不實柿下總相馬郡辛嶋（ガウシウバラ）野の花不咲（ハナサカヌ）桔梗　元亨釋書五卷六丁オ釋皇慶傳に登二叙山一近二山下一有二柿樹一絕不レ結レ子俗名二其地一曰二不實柿一云々下總相馬郡將門の舊跡にがうしう原といふ野あり辛島（カラシマ）を訛てカウシウとはよぶ也そこの道をガウシウ街道といふそこは將門の妾桔梗といへる女の怨によりて桔梗生れども花さかずといへり頭書今昔廿八ノ四十語五條ノ天神ニモ有字治拾遺二ノ卅四丁オ（ミナラズ柿今昔十九ノ三語字治ニモ不成ヌ柿アリ）

（十七）雉子燒豆腐　雉燒豆腐は豆腐を廣二寸四方許厚五六分許に切て燒きそれを薄醬油にて味をつけ茶漬茶碗やうのものに盛てその上より煖酒をつぎいれて呑をいふこは禁中又は宮の御所などにて正月の佳例也一献に一ッもりて酒をつぎ二献には二ッ三献には三ッだん〴〵に豆腐をもり上て酒をもる也豆腐は食事なし宗鑑が新撰犬筑波集卅六丁オ女房私記四丁ウ御齒

固の御祝の條に二献きじやき云々又十二物の呼名を記せる條にきじやきとは豆腐に鹽付やく也云々

(十八)火柱　火柱法華驗記下卷四十二立山地獄原奥有二火柱一云々

(十九)地獄と云地名　法華驗記下卷四十二に越中立山有二地獄原一有二百千出湯一云々また帝釋地獄云々又四十三立山地獄云々義堂空華集五卷廿一

(廿)六十万人と云遊行の札　運歩色葉集路部に六十万人決定往生六字名號一返法十界依止一返休万行離念一返證人中上々妙□花取二此四句之頭一也

(廿一)初卯初子中子弟子　同集葉部に八幡御歌云衣更著也初卯ノ神樂面白也今人モキ子モアケンマデセヨ云々今世正月の初卯に江戸人妙見詣せり初子の事は散木集に見ゆ中の子後拾遺雜四弟子空穂菊宴初子中子弟子ノ下闕出次筆二卅九丁ウ

(廿二)今木　以呂波字類抄一卷伊部雜物門に今木イマキ御湯殿時著衣名也

(廿三)稻城稻機　以呂波字類抄伊部雜物門に稻機イナキ懸レ稻木也云々類聚三代格ニモ見ユ稻城も稻をめぐりにかけて城のさまにかこへるにや

(廿四)隱相を造て神前に懸　源平盛衰記七卷十丁左笠島道祖神事條に奥州名取郡笠嶋ノ道祖神ニ被二蹴殺一ニケリ實方馬ニ乘ナガラ彼道祖神ノ前ヲ通ラントシケルニ人諫テ云ケルハ此神ハ効驗無雙ノ靈神賞罰分明也下馬ノ再拜ノ過給ヘト云實方問テ云何ナル神ゾト答ヘケルハコレハ都ノ賀茂ノ河原ノ西一條ノ北ノ邊ニオハスル出雲路ノ道祖神ノ女也ケルヲイツキカシヅキテヨキ夫ニ合セントシケルヲ商人ニ嫁テ勘當セラレテ此國ヘ被二追下一給ヘリケルヲ國人是ヲ崇敬テ神事再拜ス上下男女所願アル時ハ隱相ヲ造テ神前ニ懸莊リテ奉テ是ヲ祈申ニ叶ハズト云コトナシ云々觀迹聞老志五三才圖會七十二本卷廿七和歌名所追考山城三卅四曾我物語二十九今川貞世道行振四丁和歌名所追考陸奥百六卷

(廿五)八草　春七草秋七草は人の知所也蓮歩色葉集波部に八草あり菖蒲蓬胡麻蕨蔓羊負木結柄芥子荷葉又者荷葉拘杞菖蒲白木芍藥石菖車前草云々

(廿六)坂の人宿り峠の人宿　源平盛衰記卅六卷廿六丁ウ熊谷向二大手一條に小峠坂ノ人宿リニ人アマタ音シケリ忍聞ケレバ平山ト成田ト也云々今の峠坂に休處ヒトヤスミドとて搆たる所あり相摸筑井縣の三增峠にては「ヤスン

ド」とよべり

(廿七)名簿　源平盛衰記卅三卷十四丁左康定關東下向條に色代仕リテ康定事更ニ名簿ヲシテ可レ進ナレドモ今度ハ宣旨ノ御使トシテ私ナラズ候ヘバ追テ申ベシ舍弟ニテ侍ル史ノ大夫重良モ同心ニ申シカバ定テ左樣ニコソ侍ランズラメト色代仕リシカバ當時賴朝ガ身トシテ爭名簿ヲバ給ルベキサナシトテモ努々疎ノ儀アルベカラズトユヽシグニコソ被二返答一候シカ云々比叡山護國緣起下卷其書法見ゆ體源抄三末卷十オ同四卅五同十末廿七舊本今昔廿四ノ十六語に偏ニ御弟子ニテ候ハント云テ忽ニ名符ヲ書テナン取セタリケル云々

(廿八)すどほり　俊惠が林下集にすとほる風などよめる歌有源平盛衰記卅三卷十九丁ウ木曾院參頑事條にイカガ車ナランカラニ忌々敷スドホリハスベキ云々

頭書筆記百十二ノ五十八丁可二考合一

(廿九)大頒オクミ耳袖　衣にオクミと云所あり大頒の事也盛衰記卅三卷廿丁源平水鳴軍條に褐ノ直垂ニ大紐耳袖ヲ赤地ノ錦ヲタチ入云々催馬樂夏引ニ小くびやすらにトアル小くびは大くびに對ト梁塵愚案抄ニイヘリ體源抄十二上卅八丁オ大頸四尺三寸袖三尺四寸云々女房私記一丁ウ御とのゐものゝふさの付所の條に兩の袖口下かた兩のえりさき兩の御おくびつまさき以上六所云々

(卅)成功の人年給　成功の人といふは除目の時の給にたまはる者をいふ年給也盛衰記廿五卷十二丁ウ

(卅一)笛をエウヂヤウと云事　笛をエウヂヤウといふ事義經記七八丁オ廿四丁ウ廿北國落の條に見ゆ盛衰記廿五十七丁オ五丁ウ廿六丁ウ體源抄五三丁オ笛の條續教訓抄十一一丁オ三丁オ四丁オ

(卅二)俵藤太秀鄕　俵藤太秀鄕は龍宮より米俵を得たる故の名のよしものにいひたれど源平盛衰記廿七卷九丁ウ秀衡系圖條に下野國住人俵藤太秀鄕とあり下野に田原といふ地名ありてそこに住たるゆゑの稱號なるべし田原ハタハラ俵ハタワラにて假名違たれど通音なるべし

(卅三)すべし髮すべらかし髮　女の髮をすべし髮ともすべらかしともいふは背後に垂るゝをいふ髮はよほろばかりなど物にいへるこれも海東諸國記國俗部に婦人拔二其眉一而黛二其額一背垂二其髮一而結レ之以レ髢其長曳レ地とあるは女の眉毛を剃て額にホウ〳〵眉

をつくりすべらしの髪にせし體也 結レ之の結は續の誤寫にやあらん按に異稱日本傳下四卷(ヲ)八丁に引たるには續之に作れり女の容飾の事庭の訓乳母草子など考合すべし

(卅四)傾城　遊女を傾城といふ事庭訓往來に見ゆ海東諸國記國俗部に富人取二女子之無レ歸者一給二衣食一容二飾之一號爲二傾城一引二過客一留宿饋二酒食一而收二其錢一故行者不レ齎(モタラ)レ粮と見ゆ百練抄十四(十一)丁(カ)に舊傾城(フルケイセイ)云云

(卅五)かぶる　俗語に笠をかぶる頭巾をかぶるなどいふはかゝぶるの略也源平盛衰記四十四卷(ヲ)十二(ウ)瓶人法師口說言の條に辱ノ名カクニ爪ツビズ勘當カブルニ齒カケズとあり此かぶるは物をくらふ事にいへり中國邊の人物を食をカブルと今もいへり○盛衰記四十五卷(ヲ)廿丁重衡向二南都一被レ切條に沓ノ鼻ヲカカヘテカブリ居タル犬アリ立廻リ後戸ヲ見レバ首モナキ死人ウツブシニ臥タリ犬二三疋ソバニヲ諍(アラソヒ)レ之居タリ云々俗にカジルト云ニ同

(卅六)荒ミサキ　源平盛衰記四十三卷(ヲ)五丁住吉鏑の條に仲哀天皇の后神功皇后御宇新羅ノ西戎我國ヲ背ク由聞エケレバ皇后可レ責二異賊一旨天照大神ニ被レ申謹無レ懈トテ二人ノ荒ミサキヲ差副給ヘリ云々二人荒ミサキ艫舳ニ立テ守リ奉シカバ云云々五丁(カ)二人ノ荒ミサキ一人ハ攝津國住吉郡ニ留給フ今ノ住吉大明神是也巨海ノ浪ニ交(マジリ)テハ水畜ヲ利益シ禁闕ノ窓ニ臨テハ玉體ヲ守護セリ云々一人ハ信濃國諏訪郡ニ跡ヲ垂ル即諏訪明神是也云々按に荒御魂和御魂の荒にて武といはんがごとしミサキは御先(ミサキ)鋒の義なるべし荒御魂和御魂は武魂文魂の義にて其神の武き時は武魂和げる時は文魂なるをいふ

(卅七)杉形(スギナリ)　俗に杉形といへる詞あり俵を杉形に積などの類也源平盛衰記三十五卷(十八)丁左東使戰二木曾一段に木曾十餘騎馬ノ鼻ヲ引返シ杉ノサキ(ルヽ)ニサト立テ宣ケルハ云々此杉の先(サキ)といへるは兵士を杉形に立て其眞先に義仲が颯(サツ)と立出たる貌也

(卅八)影迹(イヤウジヤク)　源平盛衰記卅六卷(廿三)丁右鷲尾一谷案內者條にサテ其下ニハ落堀(オトシボリ)ヒシナド植タリヤト問バ去事承ラズ御影迹候ヘカシ馬モ人モ通ルベキ所ナラヂバ爭(イカデ)其用意侍ルベキト答云々こゝにては推量といふ義に影迹の字を用たり南齋書(廿三卷)七(ヒ)丁左王儉傳に夫移二心

疾於股肱一非二良醫之美一畏二影迹一而馳驅豈靜處(ナラン)之方と見えて影と迹とを見て畏るゝ義の字面也色葉字類抄(八卷)幾部疊字門に遺迹キヤウジヤク云々節用集(下卷)幾部言辭門に遺迹キヤウジヤク云々

(卅九)遊藝の席にて實藝を施すこと　南齊書(廿三卷列傳第四八丁左)王儉傳に上曲宴群臣數人各々使レ効二伎藝一褚淵彈二琵琶一王僧虔彈レ琴沈文季歌二子夜一張敬兒舞王敬則拍二張儉一曰臣無レ所レ解唯知レ誦レ書因跪二上前一誦二相如封禪書一上笑曰此盛德之事吾何以堪レ之云々

(四十)ぬくめ鳥　運歩色葉集奴部に溫鳥ヌクメトリ鷹取二生鳥一寒夜握レ之暖レ足翌日放レ之其方不レ取レ鳥報レ恩也云々陸佃埤雅八卷(釋鳥部)鷺條に冬撮二鳥之盈一握者一夜以燠二其爪一左右易レ之旦即縱レ之令レ去其往レ東矣則是日也不二東嚮搏一物南北亦然蓋其義性有レ擒有レ縱如レ此李邕鷺賦所謂營二全鳩一以自暖乃詰朝而見レ釋是也云々抑文に有二鷙曰レ鷺者一穴二於長安鴈福浮圖一冬日之夕必取二鳥之盈レ握者一完而致レ之以燠二其爪一掌一左右而易レ之旦則執而上二浮圖之跋一焉縱レ之延二其首一以望極其所二行往一必背而去焉苟東則是日不二東逐一云々三才圖會鳥獸部一卷鷺條に舊言鷺有二義性一冬撮二鳥之盈一握者一夜以燠二其爪一左右易レ之旦即縱レ之令レ去其往レ東矣則是日不二東嚮搏一南北亦然蓋其義性有レ擒有レ縱如レ此夜以燠二其爪掌一左右易レ之旦即縱レ之令レ去其往レ東矣則是日也不二東嚮搏一物南北亦然蓋其義性有レ擒有レ縱如レ此李邕鷺賦所謂營二全鳩一以自暖乃詰朝而見レ釋是也云々抑文に有二鷙曰レ鷺者一穴二於長安鴈福浮圖一冬日之夕必取二鳥之盈レ握者一完而致レ之以燠二其爪一掌一左右而易レ之旦則執而上二浮圖之跋一焉縱レ之延二其首一以望極其所二行往一必背而去焉苟東則是日不二東逐一云々三才圖會鳥獸部一卷鷺條に舊言鷺有二義性一

(四十一)親には一日に三度笑て見せよ　日蓮錄外書九卷(十九)丁右本門取要抄に三世ノ諸佛ノ世ニ出サセ給モ皆々四恩ヲ報ゼヨト說キ三皇五帝孔子老子顏回等ノ古ノ賢人ハ四得ヲ修セヨト也四得者一ニハ父母ニ孝アルベシ二ニハ主ニ忠アルベシ三ニハ友ニ合テ禮アルベシ四ニハ劣レルニ逢テ慈悲アレト也一ニ父母ニ孝アルトハタトヒ親ハモノニ覺エズトモ惡サマナル事ヲ云トモイサヽカモ腹モ立ズ誤ル顏ヲ見セズ親ノ云事ニ一分モ違ヘズ親ニヨキ物ヲ與ヘント思テセメテヤルナクバ一日ニ三度エミテ向ヘト也二ニ主ニ合テ忠アルベシトハイサヽカモ主ニウシロメタナキ心アルベカラズタトヒ我身ハ失ハルトモ主ニハカマヘテヨカレト思ベシカクレテノ信アレバアラハレテノ

得也ト云々以下略

（四十二）鳩に三枝の禮　日蓮錄外書四卷十九丁ウ新池書に傳敎大師ノ御釋ニ云川獺祭魚ノコトロザシ林鳥父祖ノ食ヲ通ズ鳩鴿三枝ノ禮アリ行歷連ヲ亂ラズ羔羊跪テ飮ル乳賤キ畜生スラ禮ヲ知ルコト如レ是何ゾ人倫ニ於テ其禮ナカランヤトアソバサレタリ取意云々と見ゆ

（四十三）伸針絹張　絹布の類に皺襞なからしむる具に「しんし」「きぬばり」といふ物あり「しんし」は竹を細く削りそれにつめを付て絹布の横幅を伸すために張串をいふ絹張は木にて丸き棒を絹布の幅に合せて作りそれを段匹の兩端に附て縱樣に引張る具也日蓮錄外書三卷廿四丁右八大地獄書に大熱鐵ノ山ニノボラシメ其口ノ中ヨリ其舌を拔出シテ百千ノ鐵針ヲ以テコレヲ張皺襞ナカラシムルコト牛ノ皮ヲ張ガ如シ云々とある鐵針は「しんし」の事也「しんし」は伸針と書べししん〳〵と云べきを省て「しんし」とはいへる也

（四十四）細男ほそをとこ　細男はセイノヲと呼べり齋男の義歟又は細はクハシと訓て細馬などにおなじくよろしき男といふ義歟春日祭の時の細男は「セイノヲ」と呼よし也その圖ものに見えたれば考べし頭書後院下四十九丁ウ實石十四

（四十五）丸木船　丸木を二ッに割り中をほりくぼめて造りたる船今も木曾川の棧の邊より上手に川向の一ッ屋へ通ふ渡舟ありまた蝦夷人が船の圖東遊雜記に見ゆ天保九戊年閏四月ばかり尾張國海東郡諸桑村の田ノ中よりほり出し舟長拾三間貳尺餘ありて割木をほりくぼめたる船也といへり

（四十六）春日猿祭の醢の土器　春日社猿祭の時直相殿にて上卿辨二人に神醢を給ふ事あり其一夜酒の土器は亘曲尺六寸五分許にて少も窪なく圓き土器也厚さは二三分許に見ゆ

（四十七）奈良田樂幷四座の猿樂　南都の田樂は本座新座とてあり本座は法師也新座は總髮也因に云猿樂四座の內觀世は公儀の御用にて奈良をば離れたり今春は奈良が本家にて江戶は出張也金剛保昌は江戶にありても奈良の薪の能には必出勤する事也猿樂の長といふ者一人ありて能の事を指揮すといへりこは神樂の人長などの類なるべし頭書國太曆十六ノ卅二丁ウに馬長田樂トナラベ出セリ可閱

（四十八）北條義時が供人數　日蓮錄內書卅九卷卅一丁ウ四條金吾書に圓敎房ノ來テ候シガ申セシハ江馬殿御出仕ニ御供ノ侍ニ二十四五人也云々按に鎌倉比の質素なる風おもひやるべし

（四十九）京童鎌倉童部　新猿樂記に京童の空左禮とあり盛衰記平家物語やうの書どもに物の評判するに京童がしか〳〵いふとことおほく見ゆ日蓮錄內書卅九卷卅一丁ウ四條金吾書にアハレ男ヤ男ト鎌倉童部ノ辻ニテ申アヒテ候ナリとも見ゆ頭書京童部今昔十九ノ四十遺七ノ九丁ウ語景清草子下　宇治拾

（五十）喉もと過れば熱さ忘る丶　俗に喉もと過ればといひあひければ誠にかなしげなる貌をもちあげて申けるはまさる犬まなこにあひぬればかなはぬぞかしと申けるぞをかしかりける云々宇治拾遺物語十卷十一丁右吾嬬人止ニ生贄ニ語にかゝるほどにとしごろ山につかひならはしたる犬のいみじきなかにかしこきをふたつえりてそれにいきたる猿丸をとられて明くれやく〳〵とくひころさせてならはすにさらぬだに猿丸と犬とはかたきなるにいとかうのみならはせば猿を見てはをどりかゝりてくひころす事かぎりなし云云舊本今昔物語廿六卷美作國神依猨師謀止ニ生贄ニ語に年來飼付タル犬山ノ犬ヲ二ッ撰リ勝リテ汝ヨ我ニ代レト云ヒ聞セテ懃ニ飼ケルニ山ヨリ密ニ猿ヲ乍レ生捕ヘ持來テ人モ無所ニテ役ト犬ニ敎ヘテ噉セ習ハス本ヨリ犬ト猿トハ中不レ吉者ヲ然カ敎ヘ習ハスレバ猿ダニ見レバ數懸テハ噉敎ス云々

（五十二）額窓　長門本平家十卷四十五丁ウ伊豆國目代兼隆被レ討條に內へせめ入て見れば額窓の前に火おこし燈火しろくかきたてたり云々

（五十三）一昔　同十卷四十九丁ウ石橋合戰事條に三浦介義明云々申けるは昔は三十三年をもて一昔としき今は廿一年をもて一昔とす廿一年過ぬれば淵は瀨になり云々頭書元服曾我草子八丁ウ

（五十四）てんどくじ紙衾　今世紙のふとんを「テントクジ」といへり江戶西窪天德寺前にてひさぎたるゆゑ

ゆゑの名也節用集加部食服門に紙衾カミフスマとある物これ也

（五十五）六指十六六指指我利擲石（サスガリイシナゴ）　今世六指また十六六指などいふは運歩色葉集牟部に六指ムサシと見ゆ六方（ムチ）かけて指ゆゑの名なるべしさすがりは和名抄四卷五（ヤ）雜藝類部に八道行成内典云拍毬擲石投壺牽道（サスガリ）丁（オ）八道行成一切戲笑悉不ニ覩作一（八道行成讀ニ夜佐須賀利一ト）と見えて八指騙（サスガリ）の義なるべし六指も六指騙にて其方を騙駒の心にや擲石（イシナゴ）は石なごりともいふ歌物語の書に所見おほし〇新撰犬筑波集雜に「むさしを指てとんでこそゆけ」「辨慶がつぶりも蜂やおぢさらん」守武千句（廿七丁オ）「むさしをさすと見ゆる也けり」守武千句（廿丁ガ）何力第七に「波すさまじく何を取けん」川原とはいへどいしなごなきものを」節用集伊部言語門投石イシナドリ云々擲石イシナゴ云々〇和漢三才圖會十七ノ五丁ウ九丁オ

（五十六）上總雪の浦九十九里　長門本平家物語十一卷一丁（オ）に常胤三千餘騎の軍兵を率して雪の浦に參會し則兵衞佐殿を相具して下總の府に入奉てもてなしまいらせけり云々曾我物語三（卷廿）丁ウ人々君へ參りて兄弟を乞申さるゝ事條に石橋山のかつせんに打まけて只七騎になりて椙山を出てゆきのうらにつきすでにじがいに及し時云々按雪の浦四國の阿波にも有よし盛衰記（廿九卷）長門本平家（十七卷廿）などに見ゆ太平記（參考本卅六卷）には阿波の雪湊と云浦と有賴朝卿の落付給ひし雪浦は今の九十九里にて「シラサト」といふよし九十九は百の字の一を省ば白なれば九十九を「シラ」とよむとなんさて雪浦とは濱の沙の白きゆゑの名白里といふはた同義也とぞ

（五十七）板橋といふ地名　今の板橋宿はもと瀧野川の板橋ありけるより所の名となれる也長門本平家物語十一卷三丁（ウ）に武藏國豊豊の上瀧の川の板橋といふ所に陣を取と有盛衰記亦同板橋の宿中を流るゝが王子の瀧野川の川上也

（五十八）中坊小者　奇異雜談集一卷四五丁（ウ）に御坊（オ）ただ中方小者一人ばかりにて御出あり云々中方は中間法師の事を中坊といへる也貴賤の中間の義也（頭書小者眞丈雜記四）

（五十九）地獄の沙汰も錢次第　俗に地獄の沙汰も金次第といへり新撰犬筑波集雜部に「きけばたゝ地獄のさたも錢なれや」「立山りやうをしゆごぞをさむ

る」〇後太平記四十一（廿五丁ウ）難波船軍條に地獄ノ沙汰モ極樂モ皆是錢ノ態カ云々

（六十）鮒の子鱠（ナマス）　今京近江邊に鮒鱠に子をあゆる事有舊本今昔十五卷（四十二語）に鮒ノ子鱠と見ゆこれ也節用集古部食服門に子交コアへとあるは鯉鮒などの子付鱠（ナマス）の事也（頭書續古事談二卷群書類從本上卷四十八丁左に銀ノ遲ノ腹ノ中ニコナマスフエコミテリヒツニイレテ納ラレタリ云々子鱠（コナマス）ヲ義込（ヒエコメ）たるよし也フエとヒエハ通音也）

（六十一）よしばみは俗に見えばうと云に同じ　砂石集三丁（オ）十二にヨシバミテ物モクハズとあり俗言に見えばうとも又はいろけを作るなどいふに同じ

（六十二）平文（ヒヤウモン）　江家次第一卷（九丁左）四方拜事條に或書云書司立ニ平文高机二脚一云々一條禪閤抄（一卷四方拜一條六丁左）に平文高机謂平文者以ニ白蔺一彫ニ唐花一也云々江次第考（一卷にも亦此說を引注せり）按永仁御即位記（十八丁オ）に平文師あり紀河原猿樂記五丁（オ）にヒヤウ紋二重織物の上下あり花御所行幸記五丁（オ）にひやうもんの直垂ありまた平文鞍平文車平文野劒（ノダチ）平文鉾黒漆（コクシツ）平文厨子（ヅシ）などの類木器にも布帛にも平文の名ありてそは箔文の事也金銀箔を文樣（モヤウ）にしたるはみな平文（ヒヤウモン）也「ハク」を「ヒヤウ」と云は拍子を「ヒヤウシ」といふにおなじこれを金具の類を平に文樣にしたる也とも又狂文にて文樣を狂ハセ塗こめたるにてとぎ出し塗也ともいへる說いづれも叶はず〇江家次第二卷（四十二丁オ）　七日節會裝束條に立ニ左近衞次將胡床一注に以ニ黃布豹文一覆レ之云々〇扶桑略記廿四（十八丁ウ）延長七年三月條に「平文經櫃及平文華机あり」〇公方樣正月御事始記（十一丁オ）に平文の事色をつくして染たるを平文と申候御禁制にて候只二色を以ていろえ候事可レ然候也〇御供古實（十七丁オ）にひやうもんの事素襖袴何にても候へ三色にて候へばひやうもんにて候云々尙委しく見ゆ（頭書奇說雜編六卅ノ六丁オ豹文長門本平家五ノ卅九丁ウ）

（六十三）師子身中の虫　砂石集三卷（廿二丁ウ）に師子死テ他獸オソルレド身中ノ虫ニ喰ハル云々下學集下（八丁ウ）

（六十四）入麵（ニフメン）　今世にふめんといふは索麵（サウメン）を醬油（シヤウユ）の鹽梅汁（アンバイヅユ）にて烹それに加天（カテ）を加へたる也此名目節用集仁部食服門に入麵ニフメンと見ゆ

（六十五）手傀儡（クグツ）デクノバウ　傀儡子記をはじめ古書に見えたる傀儡が今のごとく人形を舞す事をさ〳〵きこえず節用集天部人倫門に傀儡（クワイライ）テクヾツとあるは手してわざすめれば人形仕の事とおぼゆ手猿樂などの類なるべし〇デクノ坊ト云モ手クヾツ坊ニヤ恩地

左近太郎聞書には出狂房と有

（六十六）急々如律令　急々如律令の事拾芥抄に見ゆ節用集幾部言辭門にくはし

（六十七）小兒の前髮すゝしろ　節用集寸部支體門に髻スゝシロ小兒之前殘髮也云々和名抄三毛髮類部に文字集略云髻須々之呂　小兒剪髮所レ餘也

（六十八）庚申日鐵漿を著事を忌　俗に庚申の日鐵漿を染事を忌といふは誤也庚辛の干に當れる日に忌也箭籌內傳二卷に庚辛條に庚辛金神本地彌陀大威德夜叉西方妙觀察智精魂肺臟大腸腑魂魄迹成二金銀銅鐵輪一故此日不レ求二六畜一不レ買二眷屬一不レ賣レ刀不レ求二兵具一不レ作二經緯一不レ裁二衣裳一不レ造レ酒不レ合レ藥不レ致二針灸一不レ出レ漬不レ出行不二出陣一不レ求二養子一不レ成二折檻一とあり不レ出レ漬を冠注本二卷六丁左には不レ出レ金に作れり其說云群忌云庚日出二金錢一則家不祥又云辛日上棟則大凶又云庚辛日作レ車同乘始則主人不吉或作レ漬職韻呼得切水名也私云女中所レ用可二齒黑水一歟と見ゆ

（六十九）師子舞　義堂空華集一十九庭訓往來年中行事畫職人歌合文獻通考砂石集五廿一丁ウ烏帽折草子下六丁ウ宇治拾遺古事談五八丁オ に師子頭同六三丁オ に祇園師子頭體源抄一四十丁オ 太平記卅四丁オ に山伏は十人にあつまつて候こんや一夜のほいたうたへやつとよはゝつて內のけごをしづかに見てとほる云々按ホイタウは陪堂と書く禪家僧職の名にて飯米を司る僧の事也されば米の事をホイタウといへる也 頭書 鷹筑波集二ノ七丁ウ「ひだるきゆるにやせわたる納所と云句に「ほいたうの僧はよ川へ行戻り」

（七十）ほいたう　烏帽折草子下卷十六丁カ に山伏は十人にあつまつて候こんや一夜のほいたうたへやつとよはゝつて內のけごをしづかに見てとほる云々按ホイタウは陪堂と書く禪家僧職の名にて飯米を司る僧の事也されば米の事をホイタウといへる也 頭書 鷹筑波集二ノ七丁ウ「ひだるきゆるにやせわたる納所と云句に「ほいたうの僧はよ川へ行戻り」

（七十一）針の耳　俗に針めどゝいふは和田酒盛草子に人の子の種をおろすはかりごとは上梵天よりも糸をおろし下大海の底なる針の耳をとほすよりもうけがたくて云々那須與一扇の的草子五丁オ に針をさげてはみずを射かうがい立てはまちを射る云々

（七十二）車座　和田酒盛草子に義盛をはじめとらも長者一門九十三騎車座にはらりと居ながれ云々

（七十三）懸命の地一所懸命の地一生懸命　十番切草子にたとへばおほち伊藤こそ謀逆人にて候とも名にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてんと二人が中に一人をもめし出され申けんめいのかたはしをも安堵をなし給はらばたとへ祐經うちたくともおもひこ

らへて本領になぐさみても過ぬべし云々又二の宮のむこはよになきこじうとにくみし一所懸命失はじとよも申さじと存じしらすることも候はず云々 頭書 室則日記七ノ十丁ウ 太平記十一ノ三丁オ 又十四丁オ 又廿丁ウ 同卅三ノ廿五丁ウ 同卅六ノ廿四丁ウ 大閤記八ノ十二丁ウ 北條五代記三ノ廿二丁ウ 同四ノ十八丁ウ 同八ノ十三丁ウ 古事談一卷六條修理大夫顯季卿與二利部丞義光一相二論所領一條に彼は只一所懸命之由聞二貪之一云云

（七十四）せんの網かねの緒　十番切草子に神の前にてみしめなは佛の前にてせんのつな經のひもいひつべし云々秘密眞言觀行要覽十一丁左に線索の事見ゆ可二考合一〇築島草子にかん崎にきこえたる釋迦堂のかねの緒にむすびてたべと書とめておくに一首の歌を云云〇古事談三二丁 に良辨僧正童行者ニテ草庵ヲ結テ土ニテ造タル執金剛神ノ像ヲ安置シテ其本尊ノ足ニ付レ綱テ毎ニ禮拜ニ引動テ云々 頭書 扶桑略記聖武紀下八丁オ 今昔十五ノ十二語同卷四十語

（七十五）「ヲシャウ」「マイス」「バウズ」「ボンサマ」　出家をいやしめてヲシャウといふは御僧とも心得べけれどさにあちず和僧の義也和は和法師和御前和御料和先生など古書に所見おほくて吾の義也人を指て「オレ」とも「オノレ」とも「ワ」とも「ワレ」ともいふ詞

古くいへり賣僧は賣師の義也不德の身にて德ありがほに佛法を賣法師をいふ「バウズ」坊主也算て平僧をも坊主といふより移りてすべて頭に毛なき者をバウズといへる也ボンサマといふも坊主樣といふを略して坊樣といひさて轉じて「ぼんさま」とはいへる也

（七十六）もじといふをそふる詞　女房詞に某もじといふ事おほかり莖をくもじ御推察を御するもじそなたをそもじ御氣の毒を御きもじなどいふ類枚擧すべからず鉢かづき草子に今日の御客もじにてましませばとあり

（七十七）私と云詞　俗に自身の事を「わたくし」とも略て「わたし」とも「わし」とも訛て「ワッチ」ともいへも猿源氏草子にわたくし不慮にこひといふやまひにおかされてと有

（七十八）和泉式部鰯をくひし歌　和泉式部が「ひのもとにいはゝれ給ふいはし水まゐらぬ人はあらしとそ思ふ」といふ歌のゆるよし猿源氏草子に見ゆ

（七十九）木葉猿　次郎百首維部猿歌に皇后宮女房常陸「あし引の山へにあそふ木のは猿思ふ心そありてなくなる」眞德肝要抄 下卷十六丁左 第八十七段 に祇注云本の葉猿さ

わがしきをいふ也むかし或神惡日に旅だちて山にてあしをくじきて足を引給ひしより申といへり足引とも書又惡日忌(アシビキ)とも書と云々以上祇公の御注なれば見る人信すべけれども是等は歌道の秘するゆゑにつかひ太刀とてあらぬ說を書おかれける也云々按宗祇の說捧腹にたへぬ愚說なり貞德その道の祖なれば補助していひまぎらはせる也○丹後守爲忠家百首(雜部)梢猿歌に爲忠「この山に木のみもりはむ木のは猿梢こつたふ聲きこゆなり」加賀守藤原顯廣「あきはてゝ嵐にたへぬ木の葉猿梢を傳ふこゑのみそする」○拾玉集(一卷卅二丁左)雜廿首中慈鎭和尙「しはくりの色つく秋の山風に梢をちらぬ木のは猿かな」新撰六帖(第二帖)猿歌に爲家「時雨行秋の木末のこのはさる我色かほにをしみてそなく」○藻鹽草十一卷(猿六)に木のは猿云々○能勢猿草子に御むかひに馬のりもの木葉猿どもおびたゞしくつかはし給ふ云々○與清曰木葉猿は小猿などいふほどの事にてその輕き躰をいへる也木葉天狗(諸國里人談ニ木葉沓(クツ)大木抄雜十四沓歌 木葉七(大安寺私財帳群書類從本九丁右)などの類或はその輕小なるにより或は其形に据て木葉とはおほせしなり

(八十)「世にあるもの」「世にあり顏」「世になしもの」「世ざまもわびしからず」 築島草子にかく淺ましき修行の身にて世にありがほに古里を申べきには候はねど云々○横笛草子に世になし者にあひなれ身をいたづらになす事こそ口をしけれ云々○さかき草子は此女房は世にある人にて禁中さまへもだい〳〵さんらうかんを參らせ給ひけるほどに云々○十番切草子に二の宮のむこは世になきこじうとにくみし一所懸命失はじとよも申さじと存じしらする事も候はず云云○堀川夜打草子(九丁)には よになきものゝうつ太刀がよにある人の御身にたつやたゝぬや云々○古今著聞集十六卷(卅四丁)世ざまもわびしからずぞ侍ける云々○和田酒盛草子に世になしものゝ十郎どちぎりをこめ云々○烏帽子折草子上(一丁)きち次世にありがほになるふぜいにてすゆんの杯くだしぎやくの杯とらせければ云々又(十二丁)吉次世にあり顏なるふぜいにて云々○元服曾我草子(九丁)に我々兄弟が世になしものにてあるあひだ北條が いやしめてゐぼしをきせじそのために扮は扮はおそく見ゆるか云々○高館草子(卅七丁)に世になき主のかたうどしてうたれぬるこそむざんな

れ云々○切かね曾我草子(十五丁)に助近が世になしものをむこにとり孫をまうくる物ならば老のくげんに繩かゝりうき目を見んこそ悲しけれ

(八十一)人の上に吹風わが身にあたる 築島草子に淨海つく〳〵と御らんじて不便とやおぼしめされけん祇王をめして仰けるはやあ人のうへに吹風のわが身にあたらぬ事やあるいかに心づよくともなどあの女があはれをとふて得させぬぞと仰出されたりければ云々

(八十二)大願むなしからず 築島草子に傳へきくいにしへの大せ太子はかたじけなくも如意の玉をとらんとてゐたいしのかひをもつてきよつかいをはかりつくし終にほうしゆ得たまへり大願としては又終に空しき事あらじ云々按に目足の行とて目に見て行るべき所は足もて行到(ユキイタル)べし願望も道理にあたれる願は必空からず邪なる願はいかに心をくだくともかひはあらじ

(八十三)たくらた 武相の方言に愚人を大ばかのたくらたといへりばかはばけ也ばけ〳〵しき義也たくらたは語意未詳物草太郎草子にこれほどのたくらたはなしと思ひて云々○西明寺百首「たくらたと人を思ひてあなつれは猶たくらたと我そ成ぬる」中明寺百首「道すからばかたくらたを見ぬのみそ佛詣(ブツケイ)をせぬ利生なりける」(此卷百卅一段にも有)

(八十四)紙一帖をひとかさねといふ 物草太郎草子に紙一かさねを竹にはさみ云々又かみを十かさねばかり出されたり云々

(八十五)ちくらが沖 鎌足草子に日本と唐土のしほざかひちくらが沖にちんをとりまんこが舟をぞまちゐたり云々百合若草子(八丁)に唐と日本のしほざかひちくらがおきにちんをとる云々

(八十六)そろり 大職冠草子にるすの間をうかゞつてそろりと入てぬすみとつてやあたへかしとぞおほせける云々

(八十七)福酒 靜草子に酒をあいする人をばふくしゆと是を名づけのむ事をゆるしうりかふ事をいましめり云々

(八十八)かほに紅葉をちらす 景清草子上卷(十八丁カ)にあこわうあまりのふしぎさにいやさもないものと申てかほにもみぢをひきちらす云々伏見常盤草子に和

泉の國の女房としを申せば十八歳にまかりなるかほにもみぢをちらしてうたひかねつゝ打うつぶいてゐたりけり云々

（八十九）黛と高家の差別　景清草子上卷廿二丁ウにたうかかうけか名字を承て打死を仕らん云々太平記十一廿一丁カ長崎次郎高重最後合戰の條に武藏國ノ住人横山太郎重眞云々同國ノ住人庄三郎爲久是ヲ見テヨキ敵也ト思ケレバ續テ是ニ組ントス大手ヲハダケテ馳懸ル長崎遙ニ見テカラ〳〵ト打笑テ黛ノ者共ニ可レ組ハ横山ヲモ何カハ可レ嫌云々頭書黛ノ字ノ義論語君子亦黛乎トイヘル注ニ見ユ

（九十）大がしら　田村草子下十八丁オにおほたけ丸が首をば末代のつたへにとて宇治の寶藏にをさめ千もとのおほがしらと申て今の世までもみこしのさきに渡るは此大たけ丸がくびなり云々

（九十一）小しやくと云詞　俗にえうなきさし出どするを「コシャク」といへり「コシャク」は小ザカにてこざかしきといふを略したる詞也古語にこざかしともさかしらするともいへる皆今の「コシャク」にあたれり

（九十二）ヒエテふえて　神武紀の御歌にコキダヒエテ子とある注に古事記傳に禮記の聒而といへるなどこれ彼引ていへり續古事談二卷群書類從本上卷四十八丁左に閑院ノ大將ハ銀ノ鯉ノ腹ノ中ニコナマスフエコミヲリヒツニ入テ納ラレタリ云々此は鯉の子あえ鱠を作り籠たるをいへるにて子鱠聒籠の義也フエとヒエは通音也肉を作りてさし身鱠やうにするをヒエともフエともいへる也

（九十三）くつめきの病　小兒の咳病を俗に「クツメキ」といへり宇治拾遺物語十卷十六丁左藏人頓死語に臺盤に額をあてゝのどをくつ〳〵とくつめくやうにならせば云々とあり痰咳にて喉のクツ〳〵鳴病なれば「クツメキ」とはよべる也けり砂石集三上卷右一丁癲狂人之利口事條に或里ニ癲狂ノ病有ル男アリケリ此病ハ火ノ邊水ノ邊人ノ多カル中ニシテ發ル心ウキ病也俗ハ「クツチ」ト云ヘリ云々とある「クツチ」も近くかよひてきこゆ蜻蜓くつ〳〵ぼうし蜻蛉日記などいふも其鳴始るをりくつ〳〵とくつめかして聲を立ればなるべし

（九十四）直如レ矢　余がはやくよめる歌に「そりま弓おしてはるかに放つ矢の矢すち正しきものゝふの道」蜀書八卷十五丁右秦宓傳の宓報ニ李權一書に天地眞觀日月貞明其直如レ矢といへる語引注すべし

（九十五）「來經」「氣長く」「長きけ」「こよみ」「日」　古事記中卷に美夜受比賣歌に新玉の年が來ふればあら玉の月は來經ゆく云々万葉十五にあら玉の月日も來經ぬ云々こは年月の來つゝ經行よし也万葉にけながくおもほゆるなどよめるも年月日の長きよしにて來經を約て氣といへる也長きけといふも年月日の長きといふ心也曆を古余美といひ又日數をよみて幾加といふ古も加も氣の通音也眞曆考を閲て知べし

（九十六）朔　望　晦　朔を「ツイタチ」といふは月の立昇よりいへり天智紀十年十一月癸卯條に月立二日沙門道文從レ唐來曰云々万葉六に月立而直三日月之云々また同六に正月立云々ついたちごろなど月の立初る日より十日までの間をばついたちといへり十五日を望といふは月の滿たるよしにて持の義にあらず伊勢物語に其比みな月のもちばかりなりければとあるは六月中旬といへるほどの心也万葉三に六月十五日に消ぬればとよめるは十五日に限れる詞也つごもりは月隱にて下旬の月のやう〳〵隱ゆく比をいふつごもりがたなどもいへりさてついたちのひつごもりのひといへば朔日晦日の事なれどたゞついたちもちつごもりとのみいへば上旬中旬下旬の事と知べし古今春下業平歌詞書にやよひのつごもりと有て歌には「春はいくかもあらじと思へば」とよみ蜻蛉日記につごもりになりぬれど人はうの花のかげにも見えず廿八日にぞ云々榮花物語若水の卷についたちもすぎゆけば云々十日のひるつかた云々鳥部野の卷に十二月廿二日の事をつごもりに成ぬれば云々狹衣につごもりに成ぬれば云々霧ふたがりて月もさやかならず云云これらもつごもりは卅日にかぎらぬ證也眞曆考に見ゆ

（九十七）三正　殷の正月は今の十二月也周の正月は今の十一月也伏義の太昊甲子曆より夏の末までは今の正月におなじこれを三正といふ秦の代改て今の十月を正月とし漢の武帝の代までこれを改めず

（九十八）制の詞　制の詞の事は何くれの所見おほし戸田茂睡が梨下集に論破せりこは井蛙抄三の卷一丁に代々宗匠不ニ應幾一之由被レ申たる詞ども有或は優美ならざるにより或は義理のたがひたるにより或は

詞のあしきにはあらねども時俗のきほひよむによりてとゞめられたるありしかるを今の後學末生きんせいの詞と名づけて書もちて侍れどもつや〳〵そのいはれをわきまへずとあるにて其はじめの時代も推量るべし

（九十九）代苗代田代并町段歩の和訓　政事要略五十三卷雜田事條に勘田租束積事右被右弁官宣偁慶雲三年九月廿日格曰取令前束擬令内把令條段租其實猶益宜田一町十五束令輸者未知令前束令内把格爭各其積幾損益之數何而可會又令與熟後熟前者撿舊說令前租法熟田五十代租稻一束五把以大方六尺爲步步内得米一升此大升也二百五十步爲五十代慶雲三年格曰准令以大方五尺爲步步内得米一升此升稱小升三百六十步爲段者今案五十代與令段步積同即所得米數亦同然則段内得米三百六十升實此大二百五十升也因步多小積增減是以准量令前束與令内把非无增減計窄其積令内十四把三分之二當令前一束稱量一同其令有新古推格新之前古之後也弘仁十三年十一月五日明法博士額田國造今足云々按以大方六尺爲步といへるは十寸の尺にて六尺四方の地をいふ大二百五十升といへるは十二合をもて一升とせる也熟田五十代租稻一束五把也五十代は令前二百五十歩にて二百五十歩は令の三百六十歩これ一段也然て一代は七歩二分にて一歩は今の一坪也○拾芥抄中末卷七十一丁左　田籍部に凡田以方六尺爲一歩四面各六尺也卅六歩爲一段頭一三百六十歩爲一段積二百卅代二百四十四歩爲廿代二百六十六歩云代頃也云々按拾芥抄流布刊本錯亂多し今古寫本及活板本に據て按正すこれはた政事要略に所引の額田今足が說と同じく一代は一坪二分にあたれり或云代頃也といへるは崇峻紀八丁右に田一万頃を「タヒトヨロヅシロ」とよみ孝徳紀八丁右に數万頃田を「アマタヨロヅシロノタ」とよめるに合へり流布本に式云代頭也とある式も頭も共に轉寫の誤也○田令集解凡田長卅歩云々條注新令釋云令稱一町租廿二束是小斤者何答古問答云百代之租稻三束者此則二段租也依此一段宛一束五把也此則今釋稱令前束者古記云慶雲三年九月十日格云准令田租一段租稻二束二把以二方五尺爲一歩歩之内得米一升一町租稻廿二束令前租法熟田百代租三束以二方六尺爲一歩歩之内得米一升一町租稻一十五束右件二種租法束數雖多小輸實猶

不異而令前方六尺升漸差地實遂其差一升亦差束實是以取令前束擬令内把令條段租實猶益今斗升既平望請輸租之式折衷聽勅者朕念百姓有食萬條即成氏之豐饒猶同宛倉宜段租一束五把町租一十五束主者施行令依筥法以廿二束准計十二束者所得一束者一十四把三分之二云々按一段は五十代にて其租稻令前の法にては一束五把令内の法にては廿二束也○田令抄段條のに俗謂二段曰百代謂一段曰五十代三百六十歩也一段租五十束故也廿五代爲段半一十代爲七十二歩一五百代謂一町也一町租五百束一町租五百束所謂上田也或曰公田獲稻上田五百束中田四百束下田三百束下々田一百五十束云々按五十代の租稻五十束にてそは上田の租法なれば中田にては四十束下田は卅束下々田は十五束なる事知べし田令義解一丁に束稻舂得米五升といへば五十代にて上田は米二石五斗中田は二石下田は一石五斗下々田は七斗五升を得る也五十代は即一段也○聖德太子傳曆用明二年條に三小將軍直入大連家子孫資財田宅皆爲寺分唯以大連私田万頃賜跡見赤檮等云々自注に本願緣起云子孫從類二百七十三人爲寺永奴婢一沒官所領田園十八万六千八百九十代定寺永財一畢河内國弓削鞍作祖父間衣摺蛇艸足代御立葦原等八箇所地都集十二万八千六百四十代攝津國於勢摸江鵰田熊凝等散地都集五万八千二百五十代居地三箇所幷資財等悉計納寺分云々按三小將軍は大伴咋子連阿部臣平群神手臣の三人也大連は物部守屋大連也○好古小錄上卷六丁右河内國石河郡形浦山碑に飛鳥淨原大朝廷大弁官直大貳采女竹良卿所請造墓所一形浦山地四十代他人莫上敢木犯穢傍地一也己丑年十二月廿五日云々按藤井貞幹が考に己丑年は持統五年也竹良は采女朝臣にて日本紀に竹羅とも筑良とも筑羅とも書たりといへり○万葉集八卷四十丁右五大伴坂上郎女竹田庄作歌に「然不有五百代小田乎苅亂田廬爾居者京師所念」按然不有はさもあらぬにてさほどにもあらぬといふよし也本居宣長は然は默の寫誤にてモタモアラヌなるべしといへりさてはたゝにもあられぬ又は捨もおかれぬなどいふ心也田廬は田中田邊などに作りたるふせ庵也假庵の庵など似たるもの也三才圖會の漢土の田廬の圖見ゆ五百代は必田數の五百代あるにもあらず大概にいへるなるべし代は一搆の内をいふ古言に支といふはたおなじこゝは田一

枚を一代とおほよそに積りていへる也小田の小は小き事にもまた發語やうに小(ヲ)といへるもおほしいづれにても有べし歌意は捨もおかれぬゆゑおほくの小田を苅亂して田鷹(タブセ)にとゞまりをるほど京のおもひしのばるゝよし也○堀川百首苗代歌に仲實「谷水をせくみ口(クチ)にいくしたて五百代小田にたねまきてけり」又早苗歌に隆源「殘り田はそしろにすきし明日はたゝゆひもやとはて早苗とりてん」按此歌夫木抄夏部一早苗にも載て初句「のこる田」は三句「あすよりは」に作れり又田家歌に公實「にひはりのそしろのかど田植しより秋は聞(キヽ)こそさためさりけれ」按此歌夫木抄雜部四田に載て果句「さためかたけれ」に作れり其基俊「こきたれて雨はふりきぬわかやどのいほしろ小田をかりみたるころ」次郎百首穉田(ヒツヂダ)歌に顯仲「谷深みそしろの狹(サ)井にいほりしてまれにそたつるひつち田の稻」按此歌夫木抄秋部三秋田に載て二の句以下「そしろの田井にゐもりしてまれそたてるひつちほのいね」に作れりまた仲實「そしろ田のわさたかりての穉(ヒツヂ)いねほのさら〳〵に秋と見ゆらん」按此歌夫木抄秋部三秋田に載て「うしろ田のわさ田かはてのひつちほのほさら〳〵に秋と見ゆらん」に作れり○爲忠家初度百首山田苗代歌に爲業「苗草を山田のをたにかりしきてそしろのむろのたねはまきける」入道二品覺性親王出觀山田早苗歌に「かみしもの谷のこゝろのせはければはそしろのたこの數もならはす」又題不レ知「山里はそしろのかど田かりほして垣根のあけひひとりゐみけり」續後拾遺夏部に隆房「ほに出ん秋をけふよりかそへつゝいほしろを田にさなへとるなり」按此歌正治百首前中納言隆房が夏十五首の中也百首類流布印本には「いほしろ」を「いほくろ」に誤れり○爲尹千首夏百首の中田家早苗歌に「そしろにもたらぬ庭田の早苗草ゆひのてまいるほどたにもなし」夫木抄春部五春田に「水たむる春の山田になかれきていほしろたへにちる櫻かな」按庵白妙に五百代をよせてよめる也又夏部一卯花田家卯花といふ事を皇太后宮大夫俊成卿「小山田のいほしろたへにかけてけり五月まつ間の花のしからみ」○日本書紀廿一卷八十右崇峻天皇前紀に平レ亂之後於二攝津國一造二四天王寺一分二大連奴半與一レ宅爲二大寺奴田庄一以二田一万頃一賜二迹見首赤檮一云々又廿五卷八丁右孝德天皇大化元年八月甲申詔に或者衆二幷數萬頃田一云

云按頃を志呂と訓て代に通し用たり拾芥抄中末卷七田籍部に或云代ハ頃也とあるこれ也○倭名類聚抄一卷田園類部に畝陸詞曰畝音牡和名字誤田數也唐令云諸田廣一歩長二百卌歩爲レ畝畝百爲レ頃去聲反今案畝今之法六町六段二百四十歩也云々按今は尾張國大須寶生院本によりて按正せり田百畝爲レ頃とは漢土の書にこれかれ見えたれど本朝の定は叶はずこゝに畝今之法六町六段二百四十歩也とあるはいぶかしきと也一頃は一代にて七坪二分なるをや○與清曰代はもと一攩の內をいふ語にて城といふはたおなじ田も一枚々々に畔(クロ)もて限れるゆゑ一枚を一代(ヒトシロ)といひ十代五百代(ソシロイホシロ)などもいひ及ばせり垣田(カキダ)といふも限田(カギリタ)にて一枚づゝ畔にて限りたるよしなれば異名同事也城代頃などの字みな之呂(シロ)と訓てもと必七坪二分の地(トコロ)をいへるにはあらねどやゝ後に二百五十歩を五十代としその五十代が合より後の定にては一段に當りて三百六十歩なれば一代は七歩二分即今の七坪二分也さて「なはしろ」とは苗を蔣生(マセオヒ)する料の一攩の田の義「やしろ」とは神の屋を立る一攩の地の義也田代檜代松代などいふも田の一枚一枚なる貌檜木松木の一攩立る林の貌などによりてよべる地名なるべし町は萬知(マチ)段は之呂(シロ)歩は都保(ツボ)と訓べきを今は知ものなし坪といふ名も古書の所見いとおほかり

(百)段一段許二段許三段許　宇治拾遺二の卷廿二丁右なりむら強力の學士にあふ事の條に二三段ばかり(バカリ)なげられてたふれふしにけり云々那須與市扇の的草子六丁丁に沖を急(キ)と見てあれば扇の立たるその間七八たんきり(ばか歟)と見ゆる云々

(百一)ちぎる雲ちぎれ　宇治拾遺三の卷六丁ウ山伏舟祈返(ス)事條にその時にけいたう房齒をくひあはせて念珠をもみちぎる此わたし守見かへりてをこの事と思たるけしきにて三四町ばかりゆくをけいたう房見やりて足をすなごにはぎのなからばかりふみ入て目もあかくにらみなしてずゝをくだけぬともみちぎりてめしかへせ〳〵とさけぶ云々蜻蛉日記解環本上之八卷六丁左にみるのひきぼしのみじかくちぎりたるをゆひあつめて云々他阿上人集廿一丁左雜歌五首の中に「此雨は今や見ぬべし空ははや雲ちぎれして日かけさす也」安藤隨筆二上峰四十七丁右にチギレルト云詞物ノ切レ離ルヽヲチギレルト云ハタチキレルノ上略語也タチハ斷ノ字ニテ中タユルヿ也云々○年中定例記四丁赤きもちひ

白きひしの餅をやがてかさねてちぎりて角の折敷にするゑて云々那須與市扇の的草子一丁（カ）にかなめぎはより射ちぎつて海上の花ちらさん事いと安き程の事なりとて云々空穗藤原君四十丁（オ）にたゝけ打はきてひきさすばかり昨日なんちぎり集て侍なにの粉も靈尻にいれてまうできぬうまからずとも一口まゐらん云々

（百二）ま弓　宇治拾遺四卷十八丁（オ）にまゆみのくろぬりなるを一張まゐらせたりけるを云々按にまゆみは白弓にて塗（スラ）ざるをいふめれど後には一種の名となりて黒塗の弓にもかくいへりと見ゆ○古事談四九丁（カ）にマユミノ黒ヌリナルヲ一張進セタリケルヲ云々

（百三）隱莖を松茸に比せし事　宇治拾遺九卷三丁（オ）瀧口道則術をならふ事條に松茸をつゝみあつめたるやうにてある物九あり云々頭書舊本今昔廿ノ十語

（百四）うなふと云詞田畑をうなふ　田畑をうなふといふ詞は畝堀（ウチホル）の義なるべし宇治拾遺十三一丁（カ）に倉のあとをはたけにつくるとてうねほる間に土のしたよりほり出されて侍る也と見ゆさくるといふ詞は大藏卿行宗集に見えたり

（百五）手なしと云布著物（ヌノキモノ）并袖無　古今著聞集廿卷廿丁（オ）布に此猿他の郡へ行てけり或人のもとに白栗毛なる馬をかけるが馬屋に至てくだんの馬をぬすみてけりいづくにてか取たりけん下簡の著るてなしといふ布著物を著てかまを腰にさして編笠をなんきたりける云々按に手なしといふ布著物といへるは今の袖なしといふものゝ事也

（百六）物の「うむ」といふ詞并「水ぐむ」　今俗瓜梨柿などやうの菓物の柔に成て水ふくみたるをうむといへりうみ柿など俳諧連歌の詞にもいふめりこはみづぐむといふが雅言也古今著聞集十八卷十丁（オ）に曉行法印人の許へまかりたりけるに瓜を取出たりけるがわろく成て水ぐみたりければよめる「山しろのほそちと人やおもふらん水くみたるはひさこ也けり」と見ゆほそちは熟瓜にて今の眞桑瓜の事也ひさごは瓢にて水を酌物なればそれによせてうみたることをみづくみとよめる也

（百七）縄一房　古今著聞集十八卷十三丁（カ）に七月七日むぎなはの房中にたるまじきよし申けるを聞てよめる法眼長眞「いかなれは世にはおほかる麥なはの一房にたにたらぬなるらん」云々今世も縄一房二房など

いへり頭書東寺文書抄九ノ九丁（オ）

（百八）鳥居の額　鳥居の額の事天王寺石鳥居の額箱崎八幡宮の敵國降伏の額平家物語源平盛衰記などの額打論などおほくきこゆ古今著聞集十二卷八丁（カ）に天竺冠者自我は親王也と稱し鳥居を立て額を親王宮と書て打たりけり云々頭書圖太暦三ノ廿二丁（オカ）天王寺鳥居額圖四山上人縁起四ノ九丁（カ）

（百九）ねぼけ　ぼけといふ詞はぼけ〳〵しなどもいひ古今著聞集十六卷二丁（カ）にねぼけてかくいふ云々などゝ見ゆばかものといふもぼけものゝ義也

（百十）上分上矢早穗　合戰書に神に上矢を奉る事おほく見ゆ古今著聞集十六卅六丁（カ）に上分ほとけにまゐらせんととてかね打ならしに參たりつるぞとこたへける云々今はつほといふこれ也早穗錢の事は三代實錄に見ゆ頭書東寺文書抄二ノ五丁（カ）其外多し初穗松のおちば四ノ六丁（オ）

（百十一）えびら刀くびかき刀　信田草子卅丁（オ）にえびら刀くびかき刀三こしまでこそさいたりけれ云々

（百十二）わつそくにかけ　烏帽子折草子上十一丁（カ）にひげきりの御はかせをわつそくにかけ吉次が太刀をかつぃて奥へくだらせ給ひけり云々此外にも見えしやうにおぼゆ和田酒盛草子廿八丁（オ）に箱王にとらせよとて形見にくだしたまはつたる四尺八寸ありけるがぬけば玉ちるばかりなるを白きたづなにて眞中をむずとゆふてわつそくにかくる云々○走衆故實五丁（カ）に後藤加賀入道宗幅の物語候し太刀をわつそくにかけたると申は守りかけたる如くに右の肩より左の脇の下へかけたるを申太刀に帶取をからめたるをいふ事ひがと也○甲陽軍鑑十一下廿五丁（オ）に白き練をもつてわつこの梯（ノボリバシ）を差物にして云々わつこはわつそくに近き詞也又かゝる形をいへりとおぼゆ

（百十三）力瘤力筋力毛　和田酒盛草子卅六丁（カ）に朝比奈の三郎が力の出來るしるしに左右のうでとかひなに力筋といふ物が十四五二三十ふつ〳〵と出にけり胸におふる力毛碁盤の面に銅の針をすりならべたるごとく也筒の筋がひたひへあがり額の筋がどうへさがり云々按に今世ちからこぶといふはこの力筋におなじ

（百十四）辻酒盛　和田酒盛草子四十三丁（オ）に此屋形と申は和田殿も立られず十郎殿も立られずまた時宗が立たるにも候はず坂東は八箇國海道は十五箇國の人々の辻酒盛のそのために立おかれた屋形也

(百十五)三幅白の幕皆白の幕　俗に白幕をみのじろととなへそは三幅の製より移りて幾幅にもあれ白幕にいふ事とおもへるはいみじきひが事也こはから絲草子四十一に鶴岡にて今様ありし事をいへる條にみなしろの大幕へ二三度四五どまひかゝり云々又みなじろの大まくをなげあげて云々など見えて皆白の義也

(百十六)茶木を植　東大寺要錄四卷諸院章天地院條に天地院(號二法蓮寺一)緣起文云是文殊化身行基苾建立也和泉國大鳥郡生行基法師(本藥師)未年出家十五歲年來之間學滅後受二一尊法一爲二行者一年四十一爲二十方施主一建二立諸國堂舍四十九箇所一幷植二茶木一爲二末世衆生一也云々頭書(日吉神道秘密記十七丁ウ)

(百十七)正月十五日の望粥　正月十五日の粥をもちがゆといひて餅粥の義とおもふはひが事也望粥にて十五日の粥といふよし也東大寺要錄四卷諸會章正月條に十五日望粥とあり十五日の粥の事は太神宮儀式帳(四十九止由氣宮儀式帳廿七丁オ)延喜式(四十卷主水式廿九丁オ)公事根元(正月條)拾芥抄(年中行事條)建武年中行事(世諺問答)などに見えたれば考べし長明四季物語の說はうけがたし

(百十八)鹽山　古今集賀部に「しほの山さし出の磯になく千鳥君が御代をは八千代とそなく」諸注に甲斐の國とも能登とも上野ともさまゞ〳〵にいひたれどあまなひがたし東大寺要錄六卷封戶水田章に鹽山五百六十町三百六十町在二播磨國明石郡築水鄉一二百町在二紀伊國海部郡加太村一雜格中卷云

太政官符播磨國守正五位下多治比眞人國人等明石郡築水鄉鹽山地三百六十町(東寒河南海邊路西築水河北大山堺)

右奉二十一月廿日勅旨一檢件地入二東大寺一者國宜承知准レ勅施行以レ狀下符到奉行

從五位下守右少弁縣犬養古万侶

左少史正六位上□□文忌寸土萬侶

天平廿年十一月廿三日

と見えて播磨紀伊ともに鹽山あり

(百十九)ひねと云詞　今俗物のふるきをひねといふひね米ひね麥などの類也敦盛草子にあらいたはしや敦盛心はたけくいさませ給へどもひね武者の熊谷にて事の數ともせずやすゝと取ておさへ云々こは古兵(フルツハモノ)をひねむしやといひたれば古きをひねといへる也また曾我物語一卷おく野の相摸事條にかやうのひねものをばわづらひなくのしよりてこくびせめにせめて云々とあるも同義にや

(百廿)骨を高野に納　敦盛草子(廿七丁オ)に蓮生法師が敦盛の御こつを高野の奥院にこめ蓮華谷の傍のちしき院に庵室を結て住るよし見ゆ頭書(室町殿日記四ノ十二丁ウ空華集五ノ五丁ウニ委シ　濟北集十ノ四丁ウ)

(百廿一)似繪　新曲草子(四丁)に李夫人のおもかげのかすかに見えしを似繪にうつして御らんぜしに云々同(八丁オ)似繪の事增鏡承久物語等に見ゆ

(百廿二)手鞠歌の類に一ッとや二ッとやなどかぞへてうたふ唄　和泉式部草子(四丁オ)に道命が柑子賣になりて柑子を數る唄に一ッとや「ひとりまろねの草枕たもとしぼらぬあかつきもなし」といふより廿一までありり

(百廿三)守刀　和泉式部草子(十二丁オ)に道命が持けるまもりかたなをなどやらん心にかけ給ふけしきにてほせけるやうは女房の身こそあれ男のまもり刀をかけたるためしはいかにとおほせければ云々按にかくては女にかぎるやうなれど吾妻鏡二卷(廿六丁オ)同十二卷(十四丁オ)などに若君御誕生の時御家人等御護刀を奉る事見ゆ

(百廿四)歌の柱　書寫山にて和泉式部が柱に書付しより歌柱といふ事はじまれるよし和泉式部草子(十二丁オ)に見ゆ

(百廿五)愚人夏の蟲　酒顚童子草紙(十八丁カ)にぐにん夏の蟲飛で火に入とは今こそ思ひしられたれ云々

(百廿六)生酔本性たがはず　酒顚童子草紙(廿一丁オ)にゑひてもほんちわすれずとて御ちさんの酒にゑひたゝくりとおほしめせ云々

(百廿七)座禪豆　猫草紙(御伽草紙本六丁左)に人ににくまるゝ事を語て聞すべしわらはごときのひとりほうしたまた唐笠を張たてゝおけばやがてしまゝとを喰破りまた檀那をもてなさんとていり豆座禪豆をたしなみおけば一夜のうちにみなになし云々節用集大全(六卷廿九丁右)左集飮食門に座禪豆ザゼンマメ云々按に猫草紙は寬永比の作なるべし節用集大全は延寶年中の作也○中明寺百首に「惡僧のそら道心の座禪豆たゞ納豆のねたにおとれる」(リクジョウ)

(百廿八)鹿茸六條　猫草紙(御伽草紙本六丁左)に柿餅ろくでうなどをたまらせず云々雍州府志(六卷十六丁左)土產門上造釀部

に鹿茸豆腐薄截之板面盛灰隔紙並置豆腐取水氣傳鹽少許而陰乾或對之或斷之浸酒而食之其始形色似鹿茸故名之一説六條邊人始製之六條鹿茸倭語相同故彼此互稱之云々節用集大全一巻廿一丁右路集飲食門に六條ロクデウ以豆腐作之自洛陽六條寺始而出之故云爾云々秇苑日渉八巻卅三丁左豆腐條に建陽縣志有豆腐乾注曰文公有詩注云本乃淮南王術而腐乾本色者佳異于他處腐乾此云鳴窟香鳥云々

(百廿九)田つくり吾万女比之古五味　猫草紙御伽草紙本十一丁左に其方のしよくぶつには「ぐご」に「かつを」をませてあたへ又をり〳〵は「たつくり」に「にしん」干鮭などを朝夕の餌食にはいかゞと問給へば云々倭漢三才圖會四十九巻十八丁左江海有鱗魚部鰯條に五万米鰛正字未詳一名田作又云古止乃波良云々大倭本草十三巻廿七丁左魚部下鰛條に其苗最小ナルヲ「メタヅクリ」ト云又「シラス」ト云腥氣ナク味佳ヤ、大ナルヲ「タツクリ」ト云田ノ肥トスル故田作ト云或曰五月農夫ノ苗ヲ挾ム時最多ク是ヲ美饌トス故ニ田作ト名クト云夫ヨリ小ナルニ鹽ヲ不淹ホシタル淡鯗ヲ「ゴマメ」ト云又「ヒシコ」ト云最大ナルヲ苞ニ入レ遠ニヨス賤民朝夕ノ饌ニ用フ又醢トシ糟藏飯藏トス味ヨシ又乾シタルヲ「ホシカ」ト云田圃ノ肥トス木綿ノ肥トメ尤佳シ凡此魚甚民用ニ利アリ又カタクロイワシアリロヒロクメ鱗ノ口ノ如シ「ウルメイワシ」アリ鯔魚ニ似テ小ナリ皆可食又イワシニ似テウロコ大ナル魚アリ不可食云々食療正要四巻十六丁右魚部に我秣迷達曰海鰮小者名大灘脊黒海人乾作臘名曰我秣迷或云我秣迷即吾爾迷子作臘者云々東雅十九巻鱗介部鰯條に鯷魚は倭名抄に引用ひし本草注には鱭魚一ッに鯷魚といひ四聲字苑にも鯷は小鮎魚と見えたれば即是食經に見えし鯰ナマヅと注せしもの也「ヒシコイワシ」といふなる此物にあらず「ヒシコイワシ」といふ義未詳「ヒシコ」とは「イワシ」といひし語の轉せしにや「イワ」といふ語を引結びて呼ぬれば「コ」といふべきが故也また大隅國風土記に必志里といふ事を解して隼人の俗海中の洲を「ヒシ」といふといひし事もあればはじめこれらの地方より出しを呼て必志の小鰯などいひし事「ウミエビ」「島アヂ」などいふがごとくなりけんもしるべからず又此物は魚醬となしぬる物なれば「ヒシホイワシ」といひし詞の轉せしにや「コホ」の二音同じくい

ふは方俗よの常の事也云々與清按に延喜式に比佐魚といふもの所々に見ゆこれ乾小魚にて腊よりもいと細小き雜小魚を干たる也比之古も倭名抄に鯷魚漢語抄云比師古以和之とありて干小鰯の義保と比は通音也此物干たるを賞ればその名を生魚にもいひ及ぼせる也さて干小鰯を省て比之古とのみもいひ後には生魚に比之古干たるに吾万女とも田作ともいふ事とはなれる也吾万女は細小群の義牟禮の反女也塵芥を吾美といふも小群にて同意也吾美を木積とおもひ混べからず田作は鰯を干たるを保之加とて田の肥にするより轉りて吾万女の事にいへる也民家田植のをり必吾万女汁を節物とするも肥に用るゆゑの祝事にや○聞書秘傳四丁オにさひの事左にあさづけ右にたつくり云々○室町殿日記二巻御臺所入用事條に鰯ひしこ貳桶武斗入と見ゆひしこは干魚にや雜魚を「ザコ」ともいへり

(百卅)煎餅　猫草紙十五丁ウに正月にかゞみ花びらせんべいあられ柿餅おこし米など春雨のうちとせんなくさみにかぶりくひて云々雍州府志六巻十五丁左土産門上造釀部に煎餅六條製之故謂六條煎餅或稱仙袂又斯邊醒井之人家所製片餅亦此類而傚近江國醒井之製者也然煎餅經火故其外麁面膨脹而似鬼形面故或謂鬼煎餅片餅不歷火故燒而食之輕燒氷雪燒雪燒等雜品近世所々製之云々宗長手記上巻群書類従本十六丁右に正月にせんべいもちひかゞみをおくりしに「我よはひとりも見まうきあさな〳〵このかゝみには打そゑまるゝ」又卅三丁右人の許より篠粽せんべい二色送られしに「心さしみやまのしげきさゝちまき數は千秋せんへいにして」頭書秇苑日渉九ノ十六丁オ六典十五ノ九丁ウ

(百卅一)たくらた　俗語に大ばかのたくらたといふ事武相の邊土にて常にいへり物ぐさ太郎草紙御伽草紙本十三丁右に扨も〳〵是ほどのたくらたはなしとおもひて云云節用集大全三巻廿丁左太集氣形門に田藏田タクラタ似麝香者也人獵麝香時此田藏出出人殺之故日本人於非我事之事而好死者曰田藏田也云々室町殿日記六巻十三丁オ藤岡平次郎女を方便とる事條に某は右に度々申入つる藤岡平次郎と云者也聊のふしをいひたてゝ舅の方に己をたくらたに世間へ流布せるがにくさに方便て此方へいれつる也云々節用集大全の説は運歩色葉集太部に見えて越前天澤寺中院僧正の説

といへりされど異同あり頭書前ノ八十三段ニ有

(百卅二)おほへいと云詞　甲陽軍鑑九下卷廿三丁ウにおほへいに慮外なる奉公人云々同廿卷四十二丁ウにいかにもおほへいに云々舊本今昔廿八廿三語に思量リ有リ肝太クシテ押柄(アラヒ)ニナム有ケル云々頭書太平樂を云といふも同義にや

(百卅三)うは氣　甲陽軍鑑九下卷四十二丁ウに板垣信形弓矢功者の侍大將なれども當未の正月よりうは氣にならられ云々按にうはのそらと云に同じうはの空と云詞は續世繼十ノ十丁オなど古書におほく見えたり

(百卅四)だまると云詞　甲陽軍鑑九下卷五十丁オに村上ひいきもせず引こみ己が館にたまりゐて根子を見あはする云々按に信長が明智光秀を打擲のをりにもダマレキンカンアタマといへる事有出處可レ考

(百卅五)花の制札　辨慶が此花江南所レ無一枝を伐らば一指を切らんといへる須磨寺の制札は僞書の弘安禮節に見えてうけがたし甲陽軍鑑十四卷五丁ウに管領上杉が花の制札甲斐信玄の花の制札の事あり可レ考

(百卅六)醫師の僧形　續世繼九の卷八丁ウいのるしるし異本に慈慧僧正時の關白殿に申てまなのあはせをめしたる事をいへるにこの比の人ならば關白殿に申さすとも隱して行事僧醫師などいふものに心あはせてとゝのへさせらるべけれどもと云々印本にはかくして給と僧いしなどいふものと有異本に據れば行事僧と醫師との事と聞ゆ○半陶稿二五十八丁ウ醫師高橋法眼英全禀ニ醫流於東山八坂大進法眼崇譽三世之後一同四八丁ウ寄ニ竹田法師一詩序に本朝盧扁竹田養浩公云々

(百卅七)四神相應　制度通一の卷廿丁オにもと星象よりおこれるよし諺書を引ていへり

(百卅八)位記　位ヲ賜フ古クハ冠ヲ賜ヒシニ文武ノ大寶元年始テ位記ヲ賜フ續紀二三丁ウニ見エ制度通四七丁オ廿九丁オニ說アリ

(百卅九)帳内資人事力　帳内は「オホドチリ」とよむ親王に給ふ舍人也今の御小人などの類也資人は「ツカヒビト」とよむ大臣以下從五位までたまふ事力は太宰帥より以下國守に給ふいづれも公儀人也同心などの類と知べし制度通五廿二丁オに說あり頭書民部式に遙授國司醫師已上不レ給ニ公廨田并事力一意見十二事十四丁ウ十五丁オ

(百四十)尋花に落花をよめる證歌　續拾遺春下に花山院花御覽せられける御共にまゐりて尋花といへる心を人々よみ侍りける時前大納言公任「見るまゝにかつちる花をたつぬれは殘れる春そすくなかりける」家集には詞書花山院觀音院におはして殘の花をたづね山寺にあそぶといふ題よませ給うけるに云々歌四の句「殘の春を」云々と有續後撰春下隨風尋花といへる心をよみ侍ける權中納言定賴「吹風をいとひもはてし散殘る花のしるへと今日は成けり」家集には詞書三月十日隨風尋花と云題を云々と有

(百四十一)過所　制度通五卷四十六丁ウ過所ハ關所ヲ通ル手形證文ナリソノ式令ニ詳也云々公式令廿丁オを考べし

(百四十二)力田　同書六一丁ウ孝弟力田ノモノヲ擧テ其身ヲ復ス復ト云ハ其身ノ役ヲユルスコト也力田ハ耕作ニ精出スモノナリ云々

(百四十三)露索ハダカニシテ改ル　制度通六六丁オに衣服ヲサガス是ヲ露索ト云云々人を裸にして衣服をさがしなどして改め吟味するを露索といふ也

(百四十四)由緒書本經籍貫親類書　制度通六十九丁オに籍貫トイフハ在所付ノコト本經トイフハ先祖ノ由緒書ノコト籍貫本經ヲ又鄕貫脚色トモ云脚色狀トハ親類書ノコト也云々

(百四十五)口米耗米　今世口米口永などいふは漢土にて耗米といふ類也制度通九卅丁オ圭稅式上廿三丁オに除耗之分云々

(百四十六)國學倭學漢學唐學　倭學を國學といふはいみじきひがこと也國學は禮記學記に古之敎者家有レ塾黨有レ庠術有レ序國有レ學比年入レ學中年考校云々孟子滕文公上に設爲ニ庠序學校一以敎レ之庠者養也校者敎也序者射也夏曰レ校殷曰レ序周曰レ庠學則三代共レ之皆所ニ以明ニ人倫一也趙註に以學ニ習禮敎一化ニ於國一また學則三代同レ名皆謂ニ之學一云々定解に庠序校是鄕學學是國學云々漢書循吏傳に文翁景帝末爲ニ蜀郡守一修ニ起學官於成都市中一招ニ下縣子弟一以爲ニ學官弟子一云々至ニ武帝時一乃令ニ天下郡國一皆立ニ學校官一自ニ文翁爲一レ之始云云々など見え隋書舊唐書新唐書唐六典杜祐通典文獻通考の類に國學の所見いとおほかれど皆州國の學校の名也州學といふもまたおなじ御國のいにしへも國々に國學を置れしと學令延喜大學寮式などに見ゆ金澤學校足利學校今の水戸會津の學校の類皆國學といふべしされば今の倭學をさして國學

とはいふまじき也倭學の字いとこゝろよからねど朝野群載九の卷藤原明子が狀に親父忠行心尋二古今學一兼二倭唐一とあれば好古の學の道のならひ必これに從べし保己一撿按が學校の名に倭學の字を用たるもさる心にやまたから學の名を漢學といふはさることながらこれも舊に從て唐學といはんことしかるべし

續書 倭魂菅家遺誡 源氏物語

（百四十七）鐵砲　鐵砲の名ははじめて太平記卅九の卷蒙古寇二本朝一事の條に鐵炮ト云テ鞠ノ勢ナル鐵丸ノ迸ル事坂ヲ下ル車輪ノ如ク霹靂タル事閃々タル雷光ノ如ナルヲ一度ニ二三千抛出シタルニ日本ノ兵多ク燒殺サレ云々八幡愚童訓上に蒙古迯ル時ニハ飛鐵炮暗クナシ鳴高ケレバ迷心失肝云々など見えたれど伊勢氏の武器考證十の卷にこは今世の鐵砲とは異にてハウロク火矢の類なるべしといへるはさることゝ聞ゆハウロク火矢は名物六帖器財箋一に天工開物を引て萬人敵といふものゝよしをるしたりさて鐵砲の由來は釋玄昌が南浦文集上卷代二種子島久時公一鐵炮記に隅州之南有二一島一去レ州一十八里名曰二種子一我祖世世居焉古來相傳島名二種子一者此島雖レ小其居民庶而且富譬如下播種之下二一種子一而生々無レ窮是故名焉先レ是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有二一大船一不レ知下自二何國一來上船客百餘人其形不レ類其語不レ通見者以爲二奇怪一矣其中有下大明儒生一人名二五峯一者上今不レ詳二其姓字一時西村主宰有二織部丞者一頗解二文字一偶遇二五峯一以レ杖書二於沙上一云船中之客不レ知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖レ知二君臣之義一未レ知二禮貌之在一其中一是故其飮也抔飮而不レ抔其食也手食而不レ箸徒知二嗜欲之慝一不レ知二文字之通一其理一也所謂賈胡到二一處一輒止此其種也以二其所下無而已非一可レ怪者一矣於レ是織部丞又書云此去十又三里有二一津一津名二赤尾木一我所二由賴一之宗子世々所レ居之地也津口有二數千戶一戶富家昌而南商北賈往還如レ織今雖レ繫二船於此一此不レ若二要津之深而且不一漣之愈一也告二之於我祖父惠時與一老父時堯一時堯即使二扁艇數十擧下之至二於二十七日己亥一入二船於赤尾木津一丁二期之時一津有二忠首座者一日州龍源之徒也欲レ聞二法花一乘之妙一寓二止津口一終改レ禪爲二法華之徒一號曰二住乘院一殆通二經書一揮レ筆敏捷偶遇二五峯一以二文字一通二言語一五峯亦

以爲二知己之在一異邦一也所謂同聲相應同氣相求者也賈胡之長有二二人一一曰二牟良叔舍一一曰二喜利志多佗孟太一手携二一物一長二三尺其爲レ體也中通外直而以レ重爲レ質其中雖二常通一其底要二密塞一其傍有二一穴一通レ火之路也形象無二物之可一比倫一也其爲レ用也入二妙藥於其中一添以二小團鉛一先置二一小白於岸畔一親手二一物一修二其身一眇二其目一而自二其一穴一放レ火則莫レ不二立中一矣其發也如二掣電之光一其鳴也如二驚雷之轟一聞者莫レ不レ掩二其耳一矣置二一小白一者如下射者之棲二鵠於侯中一之比上也此物一發而銀山可レ摧鐵壁可レ穿姦究之爲二仇於人之國一者觸レ之則立喪二其軀一況於下麋鹿之禍二於苗稼一者上乎其用二於世一者不レ可二勝數一矣時堯見レ之以爲二希世之珍一矣始不レ知二其何名一亦不レ詳二其重九之節日在二辛亥一涓二取良辰一試入下妙藥與二小團鉛於其中上置二一小白於百步之外一放二之火一則其殆庶幾乎時人始而驚中而恐而畏レ之終而翕然亦曰願學時堯不レ言二其價之高而難一及而求二蠻種之二鐵炮一以爲二家珍一矣其妙藥之擣節和合之法令二小臣篠川小四郎學一レ之時堯朝磨夕淬勤而不レ已鬻之殆庶者於レ是百發百中無二一失者一矣於二此之時一紀州根來寺有二杉坊某公者一不レ遠二千里一欲レ求二我鐵炮一時堯感二人之求レ之之深一也其心解レ之曰昔者徐君好二季札劒一徐君雖二口弗一敢言一季札心已知レ之終解二寶劒一吾島雖二褊小一何敢愛二一物一且復我不レ求自得喜而不レ寐十襲秘レ之而況求而不レ得豈復快二於心一歟我之所レ好亦人之所レ好也我豈敢獨私二於己一而韜レ匱而藏諸即遣二津田監物丞一持以贈二其一於杉坊一矣且使下之知二妙藥之法與一放レ火之道一也時堯把玩之餘使二鐵匠數人熟二視其形象一月鍛季鍊新欲レ製レ之其形制頗雖レ似レ之不レ知二其底之所一以

寨ヿ之其翌年蠻種賈胡復來ニ於我島熊野一浦一浦名ニ熊野一者亦小廬山小天竺之比也賈胡之中幸有ニ一人鐵匠一時堯以爲ニ天之所ヿ授即使ニ佥兵衛尉清定者學ニ其底之所ヿ寨漸經ニ時月一知ニ其卷而藏ヿ之於レ是歲餘而新製ニ數十之鐵炮一然後製ヿ造其臺之形製與ニ其飾一在ヿ乎可ヒ用ニ之於行軍之時一也於レ是乎家臣之在ニ退邇一者視而效之百發百中者亦不レ知ニ其幾多一矣其後和泉界有ニ橘屋又三郎者一商客之徒也寓ニ止我島一者一二年而學ニ鐵炮一者殆熟矣歸旋之後人皆不レ名而呼曰ニ鐵炮又一矣然後幾內之近邦皆傳而習レ之非ニ翅幾內關西之得而學レ之而已一關東亦然我嘗聞ニ之於故老一曰天文壬寅癸卯之交新貢之三大船將ニ南遊ニ大明國一於レ是幾內以西富家子弟進爲ニ商客一者殆乎千人擇師篙師之操レ舟如レ神者數百人艤ニ船於我小島一既而待ニ天之時一解レ纜齊レ橈望レ洋向レ若不幸而狂風猘レ海怒濤捲レ雪坤軸亦欲レ折吁時耶命耶一貢船檣傾擇摧化ニ烏有一去二貢船漸而達ニ於大明國寧波府一三貢船不レ得レ乘而回ニ我小島一翌年再解ニ其纜一遂ニ南遊之志一飽載ニ海貨蠻珍一將レ歸ニ我朝一大洋之中黑風忽起不レ知ニ西東一船遂飄蕩達ニ於東海道伊豆州一州人掠ニ取其貨一商客亦失ニ其所一船中有ニ我僕臣松下五郎三郎者一手携ニ鐵炮一既發而莫レ不レ中ニ其鵠一矣州人見而奇レ之窺伺倣慕有ニ多レ學之者一矣自レ茲以降關東八州暨率土之濱莫レ不ニ傳而習ヿ之今夫此物行ニ乎我朝一也蓋六十有餘年矣鶴髮之翁猶有ニ明記レ之者一矣是知嚮之蠻種二鐵炮我時堯求レ之學レ之一發而聲ニ動於扶桑六十州一且復使ヿ鐵匠知ニ製レ之道一而徧於五畿七道一然則鐵炮之權ニ輿於我種子島一也明矣昔者採ニ一種子之生々無レ窮之義一名ニ我島一者今以爲レ符ニ其識一矣右曰先德有レ善不レ能レ昭ニ々於世一者後世之過也因而書レ之

按に此記屬文階梯附錄また摶桑名賢文集一の卷などにも載す屬文階梯には記の跋に慶長十一年丙午重陽節天文十二癸卯從ニ種子島一大明五峰持來其船中有ニ傘夏叔舍喜利志侫孟太者一贄レ之津田監物時堯求レ之傳レ之已降邇ニ日本一者也至レ今九十甲陽軍鑑小幡勘兵衛尉景憲高坂彈正が十の下卷餘年乎とあり

に鐵炮は大永五年信玄公五歳の御年信虎公三十二歳の御時但二丁はじめて甲府にきたる云々同十五の卷に鐵炮は大永六年に井上新左衛門といふ西國牢人信虎公に奉公申此侍鐵炮持來り敎たりと申傳ふさりながらまれなりときく其後信玄公御わかき時かち路大膳同又作と申牢人親子あり此侍各ニをしへ候近年は佐藤一甫齋と申牢人來りてをしふるなり今は侍衆み

な鐵炮よく上手にうたるゝ中に橫田十郎兵衛日向藤九郎兩人は鐵炮を用に立候なり云々北條五代記三浦五郎左衛門尉茂正入道淨雲作也三の卷關八州に鐵炮はじまる事の條に見しは昔相州小田原に玉瀧坊と云て年よりたる山伏あり愚老若き比その山伏物語せられしは我關東より毎年大峯へのぼる亭祿はじまる年和泉の堺へ下りしにあらけなく鳴物のこゑする是は何事ぞやととへば鐵炮と云物唐國より永正七年に初て渡りたると云て目當とてうつ我是を見扱も不思議きどくなる物かなと思ひ此鐵炮を一挺買て關東へ持て下り屋形氏綱公に進上す此鐵炮を放させ御覽有て關東にたぐひなき寶なりとて秘藏したまへば近國他國弓矢にたづさはる侍此よしを聞是は武士の家のたからなり昔鎭西八郎は大矢束を引日本無雙の精兵なり云々鐵炮は八郎が弓にも勝りなるべし所帶にかへても一挺はしき物かなとねがはれしが氏康時代堺より國康といふ鐵炮はりの名人をよび下したまひぬ扨又根來法師に杉房二王坊岸和田などゝ云ふ者下りて關東をかけまはりて鐵炮をゝしへしが今見れば人ごとに持しと申されしぐ然ば一年北條氏直公小田原籠城の時節敵は堀ぎはまで取より海上は波間もなく舟をかけおき秀吉公西にあたつて山城を興し小田原の城を目の下に見て仰けるは秀吉數度の合戰城責せしといへどもかほど軍勢をそろへ鐵炮用意せし事さいはひなるかな時刻を定め一同にはなさせ敵味方の鐵炮のつもりを御覽せんと仰有て敵がたよりよばゝりけるは來五月十八日の夜數萬挺の鐵炮にて總攻して楯も矢倉も殘りなく打くづすべしといふ氏直も關八州の鐵炮を兼て用意し籠おきたるとなれば敵にも劣るまじ鐵炮くらべせんと矢狹間一つに鐵炮三挺づゝ其間々に大鐵炮をかけおき濱手の衆は舟に向て海ぎはに出暮るをおそしと相待處に十八日の暮がたより放しはじめ敵も味方も一夜があひだ放しければ天地震動し月の光も烟にうづもれひとへにくらやみとなるされども火の光はあらはれ限りなく見ゆると萬天の星のごとし氏直高矢倉にあがり是を遠見有て狂歌に「地にくだる星か堀邊のほたるかと見るやわがうつ鐵炮の火を」と口すさび有しかば御前に候する人々申ていはく御詠吟のごとく敵は堀邊の草むらに螢火の見えがくれなるが如し城中の鐵炮の光はさながら星月夜にことならず

と申ければ氏直ゑみをふくませ給ふとなゝめならず誠にその夜の鐵炮に敵味方耳目をおどろかす事前代未聞なり愚老相州の住人小田原に籠城し其節今のやうに思ひ出られたり然れば鐵炮は唐國より永正七年に渡りそれより繁昌し慶長十九年までは百五年なりさて又關八州にて放し始し事は亨祿元年より今年まで八十七年以來と聞えたり羅山文集四十九の卷井上正繼鐵炮書序に夫鐵炮者軍用之大器也近代自多襖嶋輸貢其後蠻船載來者亦有之其製有小大有長短有輕重防敵於數百步之外其功居多一旦我國民持之到浙東遂流傳於中華改名曰火炮曰鳥銃其重千斤餘者曰無敵神飛砲或載之巨船或置之大車其長二尺重六十斤者形如虎蹲謂之虎蹲砲一砲每發百鉉子故又謂之百子銃可以列于城樓其長九尺餘七尺餘乃至一丈餘者皆謂之佛狼機如此之類猶多雖然其技未如我朝多妙手也云々倭漢三才圖會廿一の卷に按佐々木家譜云弘治元年五月二十日有唐人名曰長子口嘗自南蠻渡海到琉球尋來日本多禰嶋敎鐵炮術先月入洛見將軍家而傳其術使長子口預佐々木今日來著江州同二十八日居江北國友村賜百貫領地云々などありて永正より天文の間傳はれるもの也そが中に南浦文集の說正しく聞ゆれば天文十五年八月廿五日南蠻の商船大隅國の種が島にもて來しを皇國鐵炮の始とすべし鐵炮の名は相州兵亂記細川兩家記萬松院宂太記室町殿日記甲陽軍鑑信長記管規武鑑北條五代記總見院殿追善記大河內物語高麗陣日記東國戰記太閤記難波戰記家忠記小田原記節用集の類其外の書にもおほく見えて擧るに遑あらず明會典海搓餘錄經國雄略などに鐵炮の字見ゆ何氏兵錄三才圖會西洋火攻神器說大攻神器譜に鳥銃訓蒙字會に火銃字彙に銃など書たるみな鐵炮の名也さて鐵炮は明の嘉靖年中皇國より始て渡せしを登墳必究に見え朝鮮も天正十四年に宗義習の渡せるに起りしよし懲毖錄にいへり

（百四十八）石火矢　石火矢は唐國にて佛狠機將軍銃佛狠機銃發槓銃神機銃發煩大發煩大佛狠機大煩銃などいへるものゝよし名物六帖器財箋一に見ゆ其製作の法三才圖會西洋火攻神器說火攻神器譜などにくはし屬文階梯附錄全公が石火矢之記に夫原石火矢之所從來蓋始于西乾傳于南天南天相承傳于南蠻凡三傳而後到于本朝實當元龜年中也元龜之間未知專用天文之初盛行于世其來尙矣厥爲物也勢崩雷電聲動乾坤觸之則鐵石粉碎聞之者頭腦裂破千重甲無由妨三軍衆不能敵鎭鄣滅其威弓弩失其勢立決勝負坐見成敗誅無道討亂賊是則太平洪基天下大寶也何兵器如之哉爰有植木貞則者盡心於此術凡幾年用力彌久積功益多云々とありさて火箭の名は欽明紀十五年十二月の條に百濟遣下部扞率汶斯干奴上レ表曰云々臣先遣東方領物部莫哥武連領其方軍士攻函山城有至臣所將來民筑紫物部莫哥委沙奇能射火箭蒙天皇威靈以月九日酉時焚レ城拔レ之云々魏略に諸葛亮進兵攻郝昭起雲梯衝車以臨レ城昭以火箭逆射其雲梯梯燃梯上人皆燒死云々北史王思政傳に東魏高岳等率步騎十萬來攻潁州思政射以火箭燒其攻具云々三才圖會器用六卷に又有火箭施火藥於箭首弓弩通用之云々などみえて箭先に火藥を施たるものなれば石火矢とは名鄰くして別物也周禮に枉矢絜矢利火射註に二者皆可レ結レ火云々とあるが火箭の權輿なりまた棒火矢あり倭漢三才圖會廿一の卷に寬永年中防州赤石內藏助始作棒火箭而後播州三木茂太夫紀州寺嶋甚助氏田紋兵衛吉川源五兵衞和州大野佐五右衞門其外諸家得名者多在以工夫改作故有異同以爲家傳凡可容百目玉大銃筩火箭打出則可致廿三四町所中無不燒不能消攻城重器也但玉代入送木込藥打如常といへるこれ也

明治四十一年十月五日印刷
明治四十一年十月十日發行

非賣品

編輯發行兼者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　國書刊行會代表者　市島謙吉

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　太田雪松

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

終